

ソードアート・オンライン マザーズ・ロザリオ ボクの生きる意味

むこ（連載継続頑張ります）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クラウド・ブレイン計画阻止から一ヶ月、キリトとアスナは今まで通り平穏な毎日をご過ごせるはずであった。

しかしそれはある日突然に、呆気なく壊れることとなってしまった。

生きる希望を失い心を塞ぎ込んだキリトのもとに、ある一人の少女が駆け寄ってきた。キリトは最初こそ拒絶するが、次第に打ち解けた少女に心を開いていった。

こういう毎日も悪くない、キリトはそう感じ始めた。だがその先に待ち構えていたのは、余りにも残酷すぎる「現実」であった。

この物語はその少年と少女が残酷な現実に向かい、最後の最後まで抗うことを諦めなかった「奇跡」の物語である。

主な更新状況：

2018/10/21

小さな春編第7話（81話）まで連載中。

2017/10/21

闘病編30話まで加筆修正、反映。

今作はマザーズ・ロザリオ編のifストーリーとなっております。

主人公キリト、ヒロインユウキで物語は進行していきます。時間軸は

ロスト・ソングのクラウド・ブレイン計画を阻止してから約一ヶ月後となります。従ってユウキの病気は治っていません。

ユウキメインの物語ゆえ、今作品ではHIVやAIDSの話が出てきます。これについては筆者が調べられる範囲で調べて、得た知識として物語に組み込んでいきます。あくまで素人目線なので矛盾や間違いがあるかもしれません。

SAOのユウキを知る全ての人に読んでもらいたい、それが私の夢です。

目次

第一章 闘病編

第1話 別れ	1
第2話 激昂、そして激励	10
第3話 ぶつかるとの想い	23
第4話 感謝	33
第5話 木綿季	57
第6話 相棒	74
第7話 二人きりの大冒険	84
第8話 失踪	93
第9話 誓い	108
第10話 戦いの始まり	124
第11話 光明	137
第12話 道筋	150
第13話 木綿季の闘い	160
第14話 駆けろ	167
第15話 仲間	182
第16話 再開、絶剣と閃光	194
第17話 姉ちゃん	207
第18話 親子のけじめ	217
第19話 覚悟と決意	231
第20話 和人の覚悟	246
第21話 休息	267
第22話 約束	293
第23話 レッスン	311

第24話〜前へ前へ〜 | 336

第25話〜対面〜 | 354

第26話〜木綿季頑張る〜 | 370

第27話〜家族〜 | 384

第28話〜目覚め〜 | 400

第29話〜絶歌〜 | 419

第30話〜燃え尽きろ!! 絶剣! 閃光! 超激戦!〜 | 438

第31話〜今、万感の想いを込めて 前編〜 | 465

第32話〜今、万感の想いを込めて 中編〜 | 484

第33話〜今、万感の想いを込めて 後編〜 | 502

第34話〜凱旋〜 | 541

第35話〜休息、そして渴望〜 | 575

第36話〜闘い、そして〜 | 598

第37話〜日常へ向けて〜 | 648

第38話〜誕生日〜 | 686

第39話〜小さくて大きな一歩〜 | 709

第40話〜門出〜 | 736

第二章〜日常編〜

第41話〜木綿季の過去〜 | 799

第42話〜日溜り〜 | 841

第43話〜これからの日々を〜 | 865

第44話〜悪戯しちゃうぞ?〜 | 887

第45話〜木綿季と詩乃〜 | 911

第46話〜落ち葉の季節〜 | 933

第47話〜木枯らしの吹く頃に〜 | 961

第48話く想いよ届けく

第49話く詩乃の気持ちく

第50話くTrick or Treat 前編く

第51話くTrick or Treat 中編く

第52話くTrick or Treat 後編く

第53話く小さな出会いく

第54話く和人と木綿季く

第55話く初めてのおつかいく

第56話く桐ヶ谷親子く

第57話く寒空の下でく

第58話く桐ヶ谷家 前編く

第59話く桐ヶ谷家 後編く

第60話く本当の家族 前編く

第61話く本当の家族 中編く

第62話く本当の家族 後編く

外伝く幻の銃弾編く

第63話く男の子く

第64話く女の子く

第65話く新川恭二く

第66話くどったんばったん大騒ぎく

第67話く依頼く

第68話く死銃く

第69話く新川兄弟く

第70話く捜査開始く

第71話く名探偵セブンく

155515381518149814761456143914181398

13651338130512771257124312271194116511091079105610371015 987

第72話〜死闘、死銃対死銃〜

第73話〜本当の気持ち〜

第74話〜リアル・バレット〜

短編〜小さな春編〜

第75話〜春のはじまり〜

第76話〜小さい大冒険〜

第77話〜男の意地〜

第78話〜気になる彼〜

第79話〜彼の力に〜

第80話〜恋愛相談?〜

第81話〜いざ、名古屋へ〜

第82話〜小さな二人の出会い〜

第83話〜小さな想い〜

第84話〜葛藤〜

第85話〜けじめ〜

第86話〜リトル・スプリングス〜

第三章〜復学編〜

第87話〜大掃除!〜

第88話〜庭先でえんやこら〜

第89話〜焚き火に照らされて〜

先行公開 オーディナル・スケール編

OS第1話〜次世代ガジェット〜

OS第2話〜オーディナル・スケール〜

番外編〜二人のグルメ〜

第1話〜埼玉県行田市下忍の自販機フード〜

1934

19171898

188118661843

182318051786177317571739172617121697168316611645

162416061574

第一章く闘病編く

第1話く別れく

「いい気候設定だ……」

ここはVRMMO『アルヴヘイムオンライン』に存在する架空の街、アルンである。中世欧州風の外観の街並みが軒を連ね、のどかな街だ。街の中心にはこのゲームのシンボルとも言える「世界樹」が空高くそびえ立っている。

「……………」

この街の丘に全身真っ黒な服に身を包んで体を横にしてる少年の名はキリト、本名桐ヶ谷和人。かつてデスゲームと呼ばれたVRMMO『ソードアート・オンライン』をクリアした人物である。

ゲームをクリアし、SAOサーバーが消滅した後、ここアルヴヘイムオンラインに腰を下ろし、ゲームを楽しんでいたのだが……。

「暇だな……」

今、彼にはやる事がなかった。いや、正確にはある。スキルの熟練度上げ、レアアイテム掘り、素材集め、新生アインクラッド迷宮区攻略、スヴァルトアールヴヘイム踏破……等々。

しかし全く以って身が入らない、ゲームにログインこそするがやる気が起きないのだ。ただひたすらゲーム内でも惰眠を貪り時間を無駄に浪費していた。

「アスナ、どうしてるかな……」

アスナ、本名結城明日奈。キリトは恋人の名前を呟いた、いや……”元恋人” と言うのが正しいだろう。

SAOプレイヤー時代から2年以上の付き合いだったが、今現在は交際をしていない。いや、することを許されなくなったのだ。その理由はアスナの母親にある。

明日奈の母親こと、結城京子は都内有名大学の経済学部教授である。SAO事件で2年以上も学業が遅れた娘の将来を心配し、自らが

進学していた学校に編入させようとしてるのだ。

しかし明日奈は今通っている学校で学び、卒業して自分の道は自分で決めたいと思っている。明日奈には明日奈なりの覚悟と考えがあるのだ。

だが京子はそれを許さなかった。何度も何度も説得を試みたが京子は意見を曲げず、結局明日奈は今の学校を転校し、京子が通っていた学校に編入することになってしまった。

当然、このままではキリトとは離ればなれになる。学校以外にも家庭教師、予備校と勉強三昧である。息抜き程度に遊ぶ事は許されていたが、しつかり門限があるためほとんどないに等しかった。

限りなく明日奈の自由時間と呼べるものは極めて少なくなっていた。その現実には2人の間に深い溝を作るのに十分すぎるほどであった。そして転校前の最後の日、明日奈は和人に切り出した。

西暦2025年12月19日金曜日 午後16:05 SAO被害者支援学園施設 校門前

「キリト君、ちよつといいかな……？」

明日奈は和人と一緒に下校をしていた。昇降口から二人で足並みをそろえ校門へ向かい歩いていった。少し残って課題を片付けて遅くなっていたため、二人以外に生徒の姿はほとんど見られない。

真冬の16時頃ということもあり、すっかり辺りは夕焼けに包まれていた。横から照らす夕陽が、歩いている二人の影を長く伸ばしていた。

「どうした？ 明日奈」

和人が聞き返すと、明日奈は非常にバツが悪い表情になる。自分から話を切り出したのにもかかわらず口にしづらそうにしていた。和人はその様子を真顔で見守り続けている。決して急かさず、明日奈の

方から口を開くのを待っていた。

「あ、あのね？ あのねキリト君……」

「ああ、なんだい？ 明日奈」

「みんなにもキリト君にも黙ってたんだけど、私ね……今日でこの学校最後の……」

「……え？」

その言葉を聞いた瞬間、和人の中の時計が止まった。一体明日奈が何を言っているのかが理解できなかった。今、明日奈はなんて言ったんだ？ 今日でこの学校が終わり？ 何をつまらない冗談を言ってるんだと、半分受け流しながら明日奈の話を聞いていた。

「おいおい最後って……冗談だろ？ どうしてまたそんな……」

「冗談なんかじゃないの……。ゴメン、ゴメンねキリト君……私、ダメだった……」

そう言うとき明日奈は俯き、泣き出してしまった。和人は焦りの表情を見せ、何で明日奈が泣いているか分からなかったが、ここ最近聞いていたことを思い出すと、何となく悟ったようにゆつくりと口を開いた。

「……まさか、お母さん……か？」

和人からの問いに、明日奈は顔を手で押さえたまま頷いた。そして和人は察してしまった。明日奈はお母さんの説得に失敗してしまっただんだ。ここではない別の学校に通って一緒にいれる時間が少なくなる。

もしかしてこのまま関係がなくなってしまうのではないか、そんな恐ろしい想像さえてしまう。そんな最悪な事態が頭をよぎっている和人にトドメを刺すかのように、明日奈は続いて口を開き続けた。「キリト君、私達ね……別れた方がいいのかもしれない……」

口元を押さえながら明日奈が和人に別れ話を切り出した。明日奈だってこんなこと言いたくはない。だが、自分の家庭の所為で和人に窮屈な毎日を、寂しい毎日を過ごさせてしまうぐらいなら、いつそ今別れて踏ん切りをつけた方がいい。そう考えての別れ話だった。

「何を……言ってるんだ、明日奈……」

「もうダメなの、母さん私に一切の自由時間を与えないつもりなの。勉強、勉強、ずっと勉強……、朝から晩まで……土日も予備校に習い事に……」

「そんな……、そんなのあんまりじゃないか……」

和人は信じられないような表情を浮かべた。いくら厳しい家庭とは言え、自分の子供に一切の自由時間がないなんてあんまりすぎる。いくらなんでも横暴すぎる。

しかし和人は口出しできないでいた。恋人とはいえ……他人の家庭内の問題であつたからだ。結城家の人間ではない和人には、この件に関して口を挟むことは許されない行為だつた。

「アミユスフィアも取り上げられちゃって、もうALOも出来ないの……」

「なっ……何だつて……?」

明日奈の唯一の心の癒しであるアミユスフィアは、京子が学業の妨げになるからと言って取り上げてしまつていた。アミユスフィアを取り上げられたということは、二度とVRMMOで遊べないということである。

つまり、二人を繋いでいた架け橋がなくなつてしまった。離れていてもこれさえあれば仮想空間で一緒になれていたのに、それさえも出来なくなつてしまつていた。

二人が肩を落としていると、遠くから高級車が走行してきた。高級車は二人のいる位置まで近づくとそのスピードを少しずつ緩め、やがて二人のいる脇で停車した。二人の視線は、自然とその目の前に停まつた車へと向けられていた。

停止した高級車の後部座席のドアが開くと、中から和人と明日奈のよく知る人物が姿を現した。そう……結城京子、明日奈の実の母親である。

仕事帰りかこれから仕事なのか、キャリアウーマンを彷彿とさせる真っ赤な女性物のスーツに身を包み、全身から刺々しい空気を放つていた。

「まだこんなところで油を売つていたのね、16時きつかりに駅前

来るように言っただけははずよ？どうして約束事が守れないのかしら」

「……………ごめんなさい……………」

降りる早々厳しい言葉を明日奈に言い放つ、典型的なスパルタママだ。明日奈が約束の時間になっても来なかったこともあり、非常に不機嫌な表情を浮かべていた。しかし言ってることは正しかったので、明日奈も素直に謝罪をするしかなかった。

「あなたには時間がないって何度言えばわかるのかしら、今まで散々時間を無駄にしてきて焦りというモノがないの？」

「……………京子さん、その言い方はあんまりんじゃないですか？」

突如、和人が親子の間に口を割って入った。本来なら他人の親子の間に水を差すなど許されないが、和人は一方的にまくしたてる京子の態度に怒りを覚え、見ていたたまれなくなり、思わず口を挟んでしまった。

そんな和人に、京子は冷めたため息を吐き出しながら、対応の姿勢を見せた。

「貴方、桐ヶ谷君……………だったわね、桐ヶ谷和人君。SAOでは随分明日奈がお世話になったと聞くわ」

京子の和人を見る眼はあまりにも冷え切った視線であった。下等生物を見るかのように和人のことを見下していた。更に付け加えるなら、その眼はまるで貴方と私たちは住む世界が違うとも言いたげな眼差しだった。

「おそらく貴方がいなかったら、SAOの中で明日奈は死んでいた。だからその点に関してだけはあなたにとっても感謝しているわ……………」

でもね、桐ヶ谷君」

京子は一歩だけ前へ出ると厳しい態度で、眼光鋭く上から見下ろしその牙を和人にまで向けた。下等民族が私達の土俵に上がるんじゃない、身分を弁えろ。京子の瞳がそう訴えていた。

「明日奈にはあなたと違って輝かしい未来が待っているの、私と一緒にそれ以上のキャリアを積んでもらい、将来立派な職に就いてもらわないと困るのよ。あなたにわかるかしら？」

「……………わかりませんね、わかりたくもないです。子の将来は親が決め

つけていいもんじゃない。京子さん、アナタの人生はアナタのご両親がお決めになったんですか？」

和人の口から出た反論を聞いた瞬間に、京子の表情が引きつった。和人の言っていることもあながち間違いはなかったことと、自分の家庭の教育にずかずかと土足で上がられたことに偉くご立腹といった様子だった。

冷静そうではあるが、表情の奥から静かな怒りが見て感じ取れた。しかし相手は子供。ここは大人らしく、人に教えを受けさせる身として、あくまでも冷静に対応する。

「アナタ、何が言いたいのかしら……」

「わかりやすく言ったつもりですが、わからなかったようですね……。明日奈の道は明日奈が決めるって言ってるんですよ。親のエゴで勝手に子供の将来を決めていいなんて許されるはずがない！」

和人が諭したその瞬間、先ほどまで冷静な大人の対応をしていた京子の表情が変わり、鬼の形相へと変わった。無礼な態度を働いた和人の言動に堪忍袋の緒が切れ、激昂した。

「この……黙って聞いていればッ!!」

和人の言葉に我慢が出来なくなった京子が、和人に掴みかかりそうになるところで、明日奈がたまらず仲裁に入った。自分の大切な人同士がいがみ合っている姿を見て、いてもたってもいられなくなってしまうていた。

「母さんやめて!!」

和人と京子の間に強引に入り込んだ明日奈は、無理やり両手で二人を引き離した。和人と京子の体重は軽い方だったので、腕力がさほどない明日奈でも割と簡単に引き離すことが出来た。

「あ、明日奈……」

「もういいの……キリト君、ありがとう……」

無表情とも真顔とも言える顔で、明日奈は和人のことを見つめていた。和人はそんな明日奈の顔から生気を感じられなかった。心が宿ってない、瞳から光が失われている。そんな風に見えてしまった。

「母さん、行きましよう」

「なっ、ちよ……明日奈！ 待ってくれ!!」

和人は距離を詰め去ろうとする明日奈の肩を掴み制止させた。このままじゃ納得いかない、いくわけがない。急に学校が終わりだと言われ、そしてこのまま別れてしまうなど。

今まで積み重ねてきた2年間でこんな簡単に壊れてしまっていないわけがない。和人は必死に明日奈の説得を試みた。

「俺は納得いかない!! 明日奈はこれで満足なのか!? 自分の納得のいかないこんな状態になっちまって、満足なのかよ!」

「……キリト君……」

「明日奈……!!」

明日奈は京子に先に車に乗るように言うと、改めて和人の方向を向いた。そしてそのまま何も言わずに和人に駆け寄り抱き着いた。目に涙を浮かべながら。和人の恋人として最後の言葉を伝えようとした。

「お、おい……明日奈?」

「ゴメンね、ゴメンねキリト君。ホントに……ゴメンね。大好きです、さようなら……」

それだけ言い残すと明日奈は名残惜しそうに和人から離れ、車へ歩を進めた。後部座席の扉が開くとすぐさま乗り込み、そそくさとドアを閉めてしまった。

これ以上ここに居るわけにはいかない、明日奈の行動からはそのような印象が感じられた。

「あ……明日奈ツ!!」

明日奈たちを乗せた車はすぐにアクセルを吹かし、あっという間に和人から離れていってしまった。遠目から車のガラス越しに見える明日奈の姿は、項垂れているように見えた。

「嘘だろ……、明日奈……?」

和人は右手を前に掲げたまま、そこに立ち尽くしていた。しばらくその姿勢で茫然と車の走り去った方向を眺めていると、和人の後方に

ある校門から別の人物の声が聞こえてきた。

「はあく……今日も疲れたわねって……ん？ キリトじゃない。どうしたのよ？ こんなトコで何してんのよ？」

和人に駆け寄ったのはS A O時代のフレンド、クラスメイトのリズベットこと篠崎里香であった。和人とはゲーム内で使う武器製造が切っ掛けで知り合い、お互い愚痴を言い合ったり、からかいあったりするぐらいの関係の間柄だ。

茶髪のシヨートヘアにヘアピン、顔のそばかすがチャームポイントの面倒見がいい女の子だ。そんな里香が、校門で立ち尽くしている和人が何をやっているのかと不思議に思い、声を掛けた。

「……………」

和人はその声が聞こえたかと思うと、膝から崩れ地面に手をつき項垂れてしまった。もう何もかもを失ってしまったことを思わせるような、絶望的な表情を浮かべながら。

「ちよつと……キリト！ どうしたのよ！ 大丈夫!? しっかりしなさいって！ どこか具合悪いの？ なら保健室につれてってあげるわよ！」

里香が心配そうに和人の顔を覗き込むと、そこには瞳に涙を浮かべる和人の顔が視界に入った。一体和人はどうしたのだろう、何で急に項垂れて涙目になってしまっているのだろう。何か悲しい出来事でも起きてしまったのだろうか。

「キリト……？」

やがて和人は大粒の涙を流し続けた。何も出来なかつた自分への悔しさ、明日奈が遠くへ離れてしまったことへの悲しさ、心に残つたやり場のない怒り等、様々な感情が混ざり合つた涙を流し続けた。

流れ落ちる涙が和人の顔を伝い、やがて落ちて地面を濡らした。里香はその姿を見てただ事ではないと思ひ、スマホを取り出し友達に連絡を入れて、助けを求めようとした。

「畜生ッ……畜生……!!」

里香が電話を掛けようとしたところで和人が言葉を発した。その

様子に気付いた里香はスマホの操作を中断して、再び和人の様子を窺っていた。体調が悪いわけではなさそうだが、和人が一体何を悔しがっているのかわからなかった。

「畜生オオオオオオオオッ!!!」

校内全域に響き渡るような声を上げながら、和人は叫び地面に突っ伏し泣いた。長年にわたって築き上げてきた明日奈との絆が、あまりにも呆気なく崩れ去ってしまった。

桐ヶ谷和人と結城明日奈の、恋人という関係がたった今終わってしまった。その認めたくない悔しい事実には、ただひたすらに泣き続けた。

「キリト……」

何となく状況を察した里香は、そんな和人を遠目に茫然と眺めていることしかできなかった。和人が現実で悲しみ、悔しがるほどの事と言ったら、もう明日奈に関係したことしか思い当たらなかったからだ。

里香自身も和人に何をしてあげたらいいかわからず、同じようにただ茫然と立ち尽くしているしか出来なかった。

第2話く激昂、そして激励く

西暦2026年1月30日金曜日 ALO 世界樹の街アルン
緑の丘

あれからキリトがアスナと別れて一ヶ月近くが経過していた。キリトは相変わらずALOにログインこそするものの、何もせずに惚ける毎日を過ごしていた。

特にクエストにもいくわけでもなく、あれだけ胸を躍らせていた新生アインクラッドにも眉一つ動かさない始末である。

「……今日もいい気候設定、だな」

キリトは快晴のアルンの街の空を眺めながら体を大地に預けていた。実にほぼ1ヶ月間ずっとこの調子である。飽きもせずにひたすらこの緑の大地に佇んでいた。

アスナが傍を離れてしまったことがやはり大きく、キリトの心はすっかり蛻の殻になってしまった。今はただひたすらに、この仮想世界の最高の景色に酔いしれていた。

そんなやる気のないキリトを、物陰から見る影が二つ覗かせていた。キリトのよく知る人物であった。

一人は桃色の髪をし、勇ましい赤色の衣装に身を包んだレプラコーン、もう一人は青色の可愛らしい衣装に身を纏い、頭から猫耳を生やしたビーストテイマーのケットシー族の女の子だった。

猫耳の下からは可愛らしいツインテールが風に吹かれてふわふわと揺れていた。

「……キリトさん、ここ1ヶ月ずっとあの調子ですね……」

「まあ、シヨックなのはわかるわよ。二年間……いやそれ以上ね。心を共にしたパートナーが居なくなっちゃったんですもの……」

レプラコーンの女の子はリズムベットこと篠崎里香だ。先日現実世界の学校でキリトの泣き崩れる現場を目撃したクラスメイトである。

ケットシーの女の子はそんなキリトとリズムベットの後輩でもある、シリカこと綾野珪子。シリカの頭の上にはSAO時代からの相棒の、水色の毛並みがキレイな可愛らしい見た目をした、小さいフェアリー

リドラのピナが居心地よさそうに乗っかっていた。

二人ともキリトのことが心配でこっそり様子を見に来ていたのである。二人はキリトから30メートルほど離れたNPCの家の陰から、隠れるようにこっそりと覗き見をしていた。

一ヶ月前、キリトとアスナが別れた噂は、瞬く間にSAO関係者に広まっていった。もちろんシリカとリズベットの耳にもしつかり入ってきている。

その後のキリトの落ち込みっぷりは凄まじく、別れたと聞いてキリトを狙うチャンスと感じてる連中も躊躇してしまう程であった。あまりにもシヨックすぎて、最初は不登校になっていたぐらいだ。

それをSAO時代の友人が声を掛け続け、今はなんとか登校だけはするようにまでなった。しかし、肝心の授業にはからつきしで、学校側から出された課題も溜まっていた。

リズベットは心配そうに、遠目から寝ているキリトの様子を見つめていた。このリズもSAO時代にキリトに命を助けられてから、すっかりキリトに一目惚れしてしまい、恋人がいると知つていても、今も尚キリトへの恋心を捨てられないでいた乙女であった。

「ああもう……ダメよ！…こんなの！」

突然リズベットが声を荒げて立ち上がった。元気をなくしたキリトの様子にいてもたってもいられなくなってしまったのだ。

一ヶ月もすれば少しは元気が出てくるかと思っただが、キリトが何かを始めようという様子は全く見受けられなかった。時間で解決出来るような問題でもないだろうが、なんとか元気を出してもらいたく、リズベットは立ち上がった。

「リズさん……？」

突然のリズベットの行動にシリカが首をかしげていた。肩に乗ってるフェアリーリドラのピナも同じように首をかしげる。その頭から生えている耳がピコンピコンと揺れた。

ケットシー族独特の何かを感じ取っているときの仕草だった。シリカは気合を入れた様子で息を吐き出すと、シリカの顔を見て、思いの丈を伝えた。

「アイツはあんな風になつてちゃあダメなのよ！ あんなのキリトじゃない！ シリカ行くわよ、アイツんここに！ ついてらっしゃい！」

「え……ちよつとリズさん!？」

リズベツトは建物から覗くのをやめ、ズカズカとキリトに向かつて歩き出していった。力を込めて大股で一歩ずつ、腕を左右前後にぶんぶんと振りながら。

いつまでもウジウジと過去の出来事にいつまでも心を引きずつて男らしくない、私が目を覚まさせてあげる。ちよつと荒療治になるかもしれないけどあんたのためなんだからね、と半分イライラを募らせていた。

「リズさん、何をやる気なんですか？」

「決まってるでしょ、アイツにビンタの一発でもくれてやって目を覚まさせてやるのよ！ ウジウジしてるなんてアイツらしくないわ！」

リズベツトは今のキリトが許せなかった。HPがゼロになったら本当に死んでしまうSAOの世界で、リズベツトに人の温もりを教えにくれたのは他でもないキリトだったからだ。

その温もりを教えてくれたキリトが、あんな冷え切つて空っぽになつてしまつているなんて絶対に許せなかった。元気づけるのもそうだったが、怒りの一発でもお見舞いさせてやる。自然とリズの右拳には力が入つていた。

「そ、そうですね！ 私も元気がないキリトさんなんて見たくありません！ 私たちで無理やりクエストにでも連れ出して、元気を出してもらいましょうよ！」

リズベツトとシリカは初めて意気投合した。共にキリトを元気づけるために一致団結した。二人でハイタッチを交わし、足並みを揃え、キリトが横たわる方向へ歩き出していった。

アイツにどんな文句をぶつけてやろうか、どうやって気合を注入してやろうか。いずれにせよどんな反応が返ってきてても、無理やりどこかへ引きずつても連れ出してやる。

力強く大地に足を踏み込みながら、歩を進めていた二人とキリトとの距離は10メートルを切ろうとしていた。徐々に徐々に近づいていき、大声を出さなくても声が聞こえるであろう距離にまで近づいていた。

そしてリズの方からキリトに向かって声を掛けた。

「おーい！ キリ——」

「キリト——ッ！」

リズベットが声を掛けようとした瞬間、物凄い速さで上空から妖精、即ちプレイヤーがキリトの名前を呼ぶ声と共に降りてきた。

プレイヤーはキリトの名前を叫んだあと、キリトの2メートルほど手前でホバリングをし、鮮やかに着地した。着地した際、キレイな黒紫色をしたロングの髪の毛が美しくなびいた。

「久しぶりだねー！ 一ヶ月ぶりくらいかな？」

この元氣一杯の挨拶をしたインプ族の少女の名はユウキ。ギルド”スリーピング・ナイツ”の2代目リーダーにて、ALO内では知らぬ者はいないという程の凄腕の剣士だ。

辻決闘デュエルでは全戦無敗。決闘デュエルトーナメントでは二刀流を使わなかったとはいえ、キリトを二度も負かした実力者である。

”絶対無敵の剣” ”空前絶後の剣” という意味を込めて周りからは”絶剣” という二つ名で呼ばれている。しかしそんなユウキも剣を手から離せば年頃の元氣いっぱいの子。キリトの様子が気になり、アルンの街までやってきて声を掛けたのだ。

ユウキはキリトの顔を覗き込むように声を掛けた。キリトは元氣いっぱいユウキとは対照的な様子を見せていた。その顔は、少しだけ面倒くさそうな表情を浮かべていた。このまま声を掛けないで、通り過ぎてくれればよかったのにと。しかしそんなキリトにユウキはお構いなしにと声を掛け続けた。

「キリトどうしたの？ 最近全然活動してないみたいだし。アスナも全然ログインしてないんだよ。スリーピング・ナイツのみんなも中々

ログインしてなくて…。ボク退屈で退屈でさく……」

「……ユウキか、何の用だ？」

ユウキが顔を覗き込んで、数秒経ってからようやくキリトが口を開いた。しかしユウキが何のために自分に声を掛けたのか疑問に思う様子はなく、あくまでもやってきた友人に対して最低限の反応を返すといった社交辞令にも似た返事だった。

キリトからすれば、早く話を終えてこのままどこかへ飛び去ってくれ、俺のことなど放っておいてくれといった心境だった。しかし話を続ける切っ掛けを得たユウキは、しめしめといった気持ちでキリトと話を続けていった。

「んと、別にこれといった用はないんだけどね。久しぶりにキリトを見かけたから声をかけたんだよ！ 何してるのかなー？ ってね！」

満面の笑みでユウキは返事を返した。しかしキリトはそんな彼女にも素っ気ない態度を取り続けた。あくまでも俺はお前に興味はない。

いいからこのまま会わなかったことにしてこのまま飛び去ってくれ、俺の事を思ってるならもう構わないでくれ。そう目で訴えながら今の思うがままの言葉をユウキに聞かせた。

「用がないなら話しかけないでくれないか？ 俺はただ、こうやって空を眺めていただけなんだ。……なにもやる気が起きない。何もやりたくない、誰とも関わりたくない」

キリトは無表情で早くどこか行ってくれと言わんばかりに言葉を投げかけつづけた。しかしユウキがそのぐらいで態度を変えるわけがなく、先ほどとは打って変わって今度は心配そうな表情を浮かべて、何かあったのかとキリトに尋ねてみた。

「何かあったの？ キリト」

「別に……」

「アスナと……何かあったの……？」

「……ッ」

ユウキが言い放った『アスナ』というワードに自然と体がピクリと反応してしまった。その僅かな反応をユウキは見逃さなかった。戦

闘中の激しい攻防の中でさえ、相手の動きが見えているユウキだ。日常会話中の、それもあからさまな反応を見落とすはずがない。

「何か……あつたんだね……」

ユウキにはバレバレであった。それもそのはず、アスナとキリトが別れて一ヶ月、その間アスナは全くログインせず、キリトにいたっては魂が抜け出たようにアルンからほとんど動いていないのだ。リアル把事情を知らなくとも二人の関係に何かあつたことぐらい察しがついていた。

「うーん……やっぱりかあ……」

ユウキはキリトのすぐ隣に腰を落ち着け、同じようにアルンの空を見上げていた。両足は目いっぱい伸ばし、足の先端を左右に振り、両手は背中後ろに回して地面に手を突いてリラックスした体勢になっていた。

そして淡々と、ここ最近起きたことを一方的にキリトに話して聞かせていた。

「実はね、アスナと一ヶ月前に一回だけ話したんだよ。これからたくさん勉強しないとイケない事。お母さんの期待に応えないとイケない事。そして……二度とALLOにログイン出来なくなるかもしれない事も……ね」

「……………」

「その少し前……だったかな。アスナね、自分のお母さんに自分のホントの想いをぶつけてみるって、そう言ってたんだよ」

ユウキも体を横たわらせ、仰向けになって話し続けた。両手は左右に広げ、足を思いつきり伸ばして、大の字になって横たわっていた。ユウキの視界にはアルンの大空が広がっており、キリトと完全に一緒の視界となっていた。

「アスナね、ボクに言ってくれたんだ。『ユウキから大切なことを教わったよ、ぶつからなきゃ伝わらない事だ』ってあるって。そう教えてくれた』……てね」

「……………」

「あの後すぐに、お母さんに想いをぶつけたみたいなんだけど、伝わら

なかったんだってさ。ボク……無責任なこと言っちゃったかもね……」

キリトはチラツとユウキの方を向いた。ほとんど無反応だったキリトが、少しだけ首を回してユウキの顔を見たのだ。

ユウキの言葉の影響で、アスナと別れる羽目になってしまったのかとも一瞬考え付いたが、あのままアスナが何も決心しなくても、同じ結果になってただろうと結論付けると、再びユウキから視線を逸らした。

「その後もアスナを元気付けてあげる事が出来なくてさ。どうしようって、ずっと考えてた」

「……………」

「……アスナ言ってたよ。『私は大丈夫！　たくさん勉強して母さんを見返して、また会えるようにするからっ！』って」

「……………」

「強いよね、アスナは……ボクなんかよりさ……」

その言葉を聞いたキリトがようやく起き上がり、重たい口を開いた。これ以上ユウキを無視しても無駄だと悟ったのか、それともユウキやアスナの、今の心境を知って少しだけ心が動いたのかは定かではないが、何やら思うことがあつて起き上がったようだった。

「そうだな、アスナは強い。現実から目を背けて生きてきた俺と違ってな。俺なんか……何の力も持つちゃあいないんだよ……」

キリトは自分の右手を見つめながら静かな声で語り出した。自分が強くいられるのはこの仮想空間での話だ。現実世界では何の力も持たないただの普通の子供。どこぞのお偉いさんの息子でもない、自分自身が権力や影響力を持っているわけでもない。

それに比べたら、家柄も学力も将来性も持っているアスナの方が、こんな自分なんかより全然強いと、そう考えていた。しかし、自虐を続けるキリトの答えを否定するかのようユウキは優しく声を掛けた。

「そんな事ないと思うな……、キリトだって強いよ！　ボクよりも！　アスナよりも！」

「……何を根拠に、所詮俺は子供の頃から何も変わっていないよ。強くもないし、意気地もない、力もない。もう……何もかもがどうでもいいんだ。俺のことはほっといてくれ……それに第一……」

——もう生きていても、意味なんかないからさ——

その言葉をキリトが発した瞬間、やさぐれていた彼の顔に衝撃が走った。キリトは3メートル程の距離を転がりながら派手に吹っ飛び、うつ伏せの体勢で地面に突っ伏していた。

そして顔を上げ、何が起こったんだと辺りを見渡した。すると先ほどまで自分が居た地点を見るとすぐに原因は分かった。

ユウキが鬼の形相でキリトを睨みつけていた。ユウキがキリトを張り飛ばしたのだ。STR全開でなりふり構わず、キリトの頬を思いつきりビンタしたのだ。

PK保護圏内なのでHPこそ減らないが、激しいエフェクトと共に吹っ飛んだキリトを、ユウキは無言で睨み続けていた。

「いきなり……何するんだよ……!」

「ふざけないでよ……生きてても意味なんかはないなんて、もう二度と口にしないでツ!」

「なっ……」

「そんな事してアスナが喜ぶと思ってるの!? アスナがどんな想いであの決断をしたか分かってるの!」

鬼の形相でユウキは激昂していた。普段はまぶしい笑顔が可愛い彼女が、心の底から本気で怒っていた。ただ単にキリトが情けなくなってるからではない。自分の命を軽率に思ったことも許せなかった。そして何より一番許せなかったのには別の理由があった。

「さっきまたまキリトを見かけたって言ったけど……ごめん、あれ嘘なんだ。今日キリトに会いに来たのは偶然なんかじゃない。アスナに頼まれて来たんだよ」

「あ、アスナだって……!?!」

「アスナに言われたことをそのまま言うね 『キリト君、きつと落ち込んでいるだろうからユウキが傍にいて元気つけてあげてほしいの、こんなことユウキにしか頼めない』 ってね……」

「……アスナがそんなことを……」

ユウキは先ほどまで怒っていたかと思うと、自分の胸に手を当て、悲しそうな表情をしながらキリトに胸の中の想いを全てぶちまけた。心の底からすべてをぶつけるかのように、キリトに今の自分が何を想っているかと伝えるために、キリトの冷え切った心を溶かすために。

しかし蓋を開けてみたらどうだ、アスナからお願いされて来てみると、落ち込んでいるどころか不貞腐れて墮落しきっているではないか。

こんなだらけた男の為にアスナは泣いてお願いをしていたのかと思うと、はらわたが煮えくり返る想いがした。

「……アスナとキリトは僕の恩人で大切な親友なんだよ！ だから……ボクの残り少ない命を、二人を助けるために使うってそう決めたの！」

「……………」

「いつまでウジウジしてるの……キリト。そんな何もない毎日をただただ生きて……、ボクより長く生きられるのに……、何で毎日そんな風にして……いられるのさ……」

「ユ、ユウキ……」

キリトは思い出した。今キリトを元気づけようとしてくれている、この目の前の少女の命が、決して長くはないことを。

このインプの少女、ユウキこと紺野木綿季は、現実世界では不治の病に侵されている。病名は “後天性免疫不全症候群” 通称 “AIDS” である。

ユウキは生まれたときからHIVウイルスに侵されており、3年前にAIDSを発症し、今も病院で闘病生活を続けている。

現実の世界では、もうほとんど体を動かせなくなってしまうという状態であった。

しかし、脳からの信号だけで遊ぶことが出来る仮想世界ならば、自分のアバターを動かせるため、こうしてALOに姿を現していたというわけだ。

それに比べたら、現実世界のキリトは健康体だ。ユウキにとってはその健康な体と、誰もが毎日行っているごく普通の生活がすっかり憧れになっていた。

そんな憧れの毎日をごっそり持っているというのに、キリトは無駄な毎日をただただ生きているだけであつた。何をすることも無く、ただ食べて寝て、生きているだけだつた。

そんなキリトの現状を知ったユウキは、悲しくなつてしまつていた。自分が毎日在必死に生きているのに、何でキリトはこんなにもだられていられるんだと。生きていられるだけで、ボクは羨ましいのに。

暫くの間気まずい空気が流れ、無言の状態が続いた。周りにはアルンに吹く風の音しか聞こえてこない。仮想世界の風だが木々をしっかりと揺らし、葉っぱ同士が擦れていた。ユウキの黒紫色の髪の毛その風に揺られて、美しくなびいていた。

そしてまたしばらく時間が経過して、ユウキが口を開いた。このままキリトと話をしても進展はない。なら、どうすればキリトの気持ち確かめることが出来るだろうか？ そう考えたユウキが出した答えは、至極シンプルなものだつた。

「ねえキリト。ボクと決闘しよっか」

いきなりの提案に一瞬キリトは素つ頓狂な顔になる。何故この状況で決闘^{デュエル}? そもそも俺は何もやる気が起きないし、ユウキもそんな気分じゃないだろう。それに先ほどまで気まずい空気が漂つていたというのに、何をいきなり言い出すんだ。

「何をまた突然に……」

若干皮肉めいた表情をしながらキリトは話を流した。今のこの俺と決闘^{デュエル}をして、何かユウキに得でもあるとでも言うのか？

というより、俺は既にユウキに決闘^{デュエル}で二回敗北している。そして今、メンタルが弱り切っている俺を相手に決闘^{デュエル}なんかしても結果は見

え見えだろう。本当に何を考えているんだコイツは。

「ボクの信念ね？」　ぶつからなきゃ伝わらない事だつてある”つての、曲げるつもりはないんだ。口で色々語っててもさ、全力で決闘デュエルでぶつかり合えば……きつと言葉では伝えられないことが全部理解できると思うんだ」

キリトはしばらく考え込んだ後、昔の出来事を思い出していた。現実世界での妹、直葉とまだ幼少時代、一緒に剣道に勤しんだ時。些細な悩み事を体を動かす事で、竹刀を振るうことでふっ飛ばしていたあの頃を思い出していた。

(……ぶつからなきゃ伝わらない、か……)

キリトは何やら考え込んでいた。ユウキはいつも全力で生きている。自分の命が短いことを知って尚、毎日在必死に生き続けている。明日の朝にも、もしかしたら死んでしまっているかもしれない自分の体を必死に動かして、毎日を過ごしている。

(俺はどうだ？　今何のために生きてる？　今まで何のために生きてきた？　妹の直葉の為？　SAOの仲間たちの為？　アスナの為？　それとも……俺自身の為？)

キリトは一つの答えに辿り着こうとしていた。今まで俺は自分のことを後回しにして、周りの人が傷つかないように、そして自分自身も傷つかないようにして生きてきた。

結果を顧みずに真つすぐ突き進んでいくということをしていなかったのだ。それを選ぶことが出来る機会はいくらでもあったというのに。

しかし、目の前のこのユウキはどうだ？　自分が傷ついても、周りの人間が傷ついても、ひたすら真つすぐ正直に、ぶち当たる壁を全てぶち壊すかのように全力で生きている。

今のこの腐り切った俺に対してもそうだ。どうしてこんな俺に声を掛けてくれたかようやくわかった。

アスナから頼まれたからというだけじゃない。ユウキ自身が全力だったからだ、全力で俺にぶつかろうとしてくれていたからだ。

そう考えたキリトは、いかに最近の自分が実にバカなことをしてい

たかを痛感していた。ここ最近の自分は腐って何もしないでただ毎日
を無駄に生きていただけ。

目の前の少女に、ユウキにとって最大の侮辱とも言える行為だった。でもそんな俺にもユウキは全力でぶつかってくれた。なら、俺に出来ることはたった一つしかないじゃないか。

「……ハハッ、そうか……そうかもな。確かに……ユウキの言う通りだ」

「……キリト？」

キリトは重い腰をようやく上げ、軽く伸びをした。爽やかな表情でユウキに体を向けた。自分の考えを改めさせてくれたユウキに対して、感謝の気持ちを表していた。

ユウキもガラリと雰囲気が変わったキリトをみて、少しだけ笑顔が零れていた。ボクの気持ちが届いたのかな？ ちゃんと伝わったのかな？ もしそうなら嬉しいなと、そう思いながらキリトを見つめていた。

「サンキュなユウキ。まだちよつともやもやしているけど、お前のお陰で少しだけ踏ん切りがついたような気がするよ」

礼を言うときリトは、ユウキの頭にポンと手を乗せ、クシヤクシヤと音を立てて撫でじゃくった。妹の直葉や元恋人のアスナによくやっていた癖が出てしまっていた。いきなり撫でられたユウキは突然の出来事に驚き、顔を赤くして驚いた。

「ひゃあっ!?! キ、キリト……!?!」

「……え？ ってああっ！ ス、スマン！ つ、つい昔の癖が……！」「……べ、別にボクは構わないよ！ そ、そんなことより決闘デュエルしようよ！ 決闘デュエル！」

顔が少しだけ赤くなっているのを誤魔化すように体全体でオーバーなアクションをしながら、ユウキは必死に話題を変えようとした。

あながち撫でられたことに満更でもなさそうな様子だった。突然のことではびつくりしたが、不思議と嫌な気分はしなかった。

むしろ、出来ることならもつと撫でてもらいたいとも思っていた。

しかし何故自分がそう思ったのかまでは、わからなかった。

「ねえキリト、最近まともに体動かしてる？」

「んー、ALOでも現実でも正直まともに動かしてないな……。たまに何も考えずに飛び続けてたり、リアルでは学校と買い出しに行く程度の運動ぐらい……。かな」

最近の運動事情を耳にしたユウキは半分呆れ顔でキリトを見ていた。そんなものは運動のうちには入らないし、いくら現実の体を動かさない仮想世界といっても、一か月間も自分のアバターを動かさなかつたら、腕もなまってしまうだろう。

プレイヤースキルが重要視されるALOでは、余計に影響が出るだろうと考えていた。溜め息を吐きながらユウキはキリトに対して悪態を吐いていた。

「あのさあ、寝たきりのボクが言えた事じゃあないけどさ、もう少し体動かそうよ……。？ 現実世界でも剣道やってたんでしょ？」

「ハハハ、ごもつともだ。でも仮想空間での感覚は忘れてたりしてないぞ？ SAO時代から繰り返し返してきた動作だしな。体にしみこんでるからそう簡単に忘れてりしないさ」

先ほどの気まずさなど微塵も感じさせない他愛もない会話が続いていた。このあたりは流石のユウキのコミュニケーション力である。

キリトが吹っ切れたこともあつてすっかり二人は明るい会話を交わせていた。そしてユウキはある提案をキリトに持ち出した。

「あのねキリト、一つだけお願いがあるんだけど……。いいかな？」

「ん、お願い……。？ 何だ？」

「二刀流でボクと戦って。それも……。本気の二刀流で」

第3話くぶつかる想い

「二刀流、だって……？」

不意打ちを食らったような反応でキリトが言葉を返した。そう、キリトはALOでの対人戦では二刀流を使った事が一度もなかったのだ。狩りやボス戦の時ぐらいしか、周りに披露していないのだ。

そして対人戦の時は片手直剣オンリーである。ユウキとの最初の決闘デュエルの時も、トーナメントの時もキリトは片手直剣だった。ユウキにはそれが解せなかった。

「キリト、ボク知ってるよ？ キリトが本気の二刀流を使わない理由」
「……アスナから聞いたのか？」

「うん、ゲームがゲームでなくなった時なんだよね？ SAOみたいにHPがゼロになると、本当に現実でも死んじゃう時のような……」
ユウキの言う通り、キリトが二刀流を發揮したのは、仲間の命がかかってる時だけであった。当時のSAO、旧インクラッド74層のグリーンアイズ戦。75層のスカルリーパー戦。茅場晶彦ことヒースクリフとの決戦。

そして昨今のクラウド・ブレイン計画の阻止等、絶対に負けられない戦いの時のみ、キリトは二刀流を使用していた。

普段ALOで本気の二刀流を使わないのは、SAOでのキリトの役目が終わった事と、もう本当に命を賭ける戦いをしなくてよくなったからである。心の底からゲームを楽しみたいという気持ちがあるからだ。

「本気の二刀流を使ったのって、ボクが見た中じゃスメラギ戦と、セブンの決着の時だけだったよね。でもあの時はALO全体の危機だったから、ボクは納得してただけだね」

それでもユウキは若干臍に落ちない様子だった。スメラギやセブンには本気を出しておいて、ボクには何で二刀流で戦ってくれなかったのかという不満を抱いていた。

ボクだって二刀流のキリトと戦いたかった。片手直剣のキリトに

勝ったって本当の勝利じゃない。片手直剣装備としては本気でやっていたかもしれないけど、それは本当のキリトじゃない。

二刀流のキリトに勝ってこそ、本当の勝利なんだ。

「あー！ でもボク一回だけ戦ったことあったよ！ 二刀流のキリトと！」

楽しみに語るユウキの言う事に耳を傾けたキリトは思い出した。確かに一度キリトはユウキと二刀流で剣を交えていたのである。それもA L Oではなく、S A Oの世界で。

デスゲームが行われていたS A O時代、キリト達攻略組はアインクラッドの全100層を踏破して、ゲームを無事クリアした。しかしそんなキリト達の前に現れたのは、75層で倒したはずのヒースクリフこと、S A O事件の黒幕である、茅場昌彦だった。

姿を現したヒースクリフは「ゲームをクリアする為には、この私を倒してからだ」と言い残し、キリト達に向かって剣を取ったのだ。

キリトはヒースクリフに、自分一人で決着を着ける代わりに、自分以外の全員をログアウトさせるよう要請し、彼を除く全プレイヤーをS A Oから強制ログアウトさせた。

一切の邪魔が入らない状態でヒースクリフと一騎打ちをし、死闘の末ヒースクリフを打ち負かし、自身も無事にS A Oからのログアウトに成功したのだ。

ヒースクリフこと茅場を倒したキリトは、アインクラッド全域を見渡せる謎の空間へと強制転移させられた。特にすることも無く、ゲームクリアと同時に崩壊するアインクラッドを眺めていると、ふと見知らぬ少女がキリトに声を掛けてきたのだ。その少女こそが、何を隠そうユウキだったのだ。

「そうだったな、確かに俺はあの時二刀流でユウキと戦った」

「覚えててくれたんだ！ 嬉しいなー！ でもさ、あの時のキリトは全然本気なんて出してなかったよね？」

ユウキの問いかけにキリトは肯定も否定もしなかった。S A Oをクリアしたとは言え、まだアインクラッドにダイブしてる最中だったのだ。

その為何かの間違いでもあったら、目の前の少女を殺してしまいかねない。ヒースクリフとの死闘の直後ともあって、あの当時は実力の半分程度しか出していなかった。

「倒したら本当に死んじまうから、初撃決着モードで決闘デュエルはしたけど、まあ……本気を出してなかったのは本当だ」

「やっぱりそうだったんだね……」

「ごめんな、別にユウキを舐めてたとか、そういうワケじゃなかったんだ」

「ううん、わかってるよ。ボクを死なせないために手を抜いてたんでしょ？ キリトは優しいからね……」

「うう、ま、まあそうなんだけど……」

「でも、今回は本気の二刀流で闘ってほしいな。そうすれば……ボクもキリトの今の気持ち、ううん、もっと以前からのキリトの想いが、わかるような気がするから……」

そう言うと、ユウキは腰の愛剣、マクアフィテルに手を伸ばして切っ先をキリトに向けた。黒紫に光るその片手直剣は黒と紫で色調をそろえたユウキの装備によく合っていた。

「さあキリト、剣を取って」

「……ユウキ、本気なんだな……？」

「……うん、ボクは一日一時間、一分一秒、ずっと本気で全力だよ！

一瞬たりとも、全然無駄にしてなんかいないよ……！」

ユウキの顔が勇ましくなる。真剣な眼差しでキリトを見つめる。

その言葉と仕草に嘘偽りは全くない。

「だから、キリトも全力で応えてほしいんだ……！」

ユウキは改めてマクアフィテルの剣先を、キリトに向け直した。そんなユウキの姿を見て、キリトは漸く覚悟を決めた。

俺の目を覚まさせてくれたユウキの気持ちに応えるためには、今の俺が出せる全力でぶつかるしかない。

そう思いながらキリトはALOでいつも愛用しているユナイティウォークスと黄金に輝くALO最強の片手直剣 ” 聖剣エクスキャリバー ” をストレージから取り出した。

「そ、それが……エクスキャリバー……」

ユウキは目を点にして驚いていた。このゲーム内に一本しか存在しないとされる、AL0最強の片手直剣が目の前に出てきた。

しかしその黄金色に光り輝くエクスキャリバーをみても、ユウキは臆するところか闘志を燃やしていた。相手が強ければ強いほど燃えるのである。

「へへ、やっぱりそうでなくちゃ……!」

ユウキは冷や汗をかきつつも嬉しそうにしていた。本気のキリトとぶつかり合うことが、どのような結果を招くかはわからない。

しかし絶対に後悔しない決闘デュエルになることは間違いないだろうと確信していた。勿論負けるつもりはさらさらでない。二刀流のキリトも倒して、ボクはもつと強くなる。

そして、キリトの本当の心に触れる。

ユウキは左手を上から下にスライドさせ、メニューを表示させるとその中から決闘デュエルを選択し、キリトに決闘デュエルを申請した。

—Y u k i が決闘を申し込んできました—

決闘デュエルを申請されたキリトは全損決着モードを選択し、決闘デュエルを承諾した。決闘開始まで60秒のシークエンスが流れる。この時間で最終準備をする。装備のチェック、スキル欄の確認等。

ユウキも装備とスキルの確認をしながら、頭の中でキリト対策を練っていた。ボクが見た中でのキリトの最速は恐らく、クラウド・ブレイン計画のスメラギ戦の時だ。今回は……多分あれ以上に速くて重い斬撃が来る筈。

しかし速さに関してはユウキにも自信がある。まずは確実にキリトの攻撃をかわし続けて動きを見極めていく。手数が多い二刀流でもどこかに付け入るチャンスはあるはずだ。作戦を考えながら心の準備を済ませている間、ふとユウキはキリトの顔を見ていた。そしてその様子のおかしさに気付いた。

(え、なんか違う……あれは……キ、キリトなの……?)

ユウキは今まで見たことのないキリトの出で立ちに若干怖気づいていた。眼光は鋭いが何処となく覇気がなく、脱力感が漂っている。

しかしそれでいて隙が全くないのだ。

そして何よりユウキが息を飲んだのは、心優しいあのキリトがユウキに向かつて ” 殺気めいたもの ” を放っていたからである。

一方でキリトは考えていた。SAOにいたあの時、ボス以外に、茅場以外に全力を出さなくてはいけない時が来てしまったのだ。自分の本気の二刀流を振るう時が来てしまった。そう、相手を命を奪うために振るってきた二刀流を。

その二刀流でたとえこの目の前の少女を殺すことになるうとも俺は全力を出す。そう考えると自然と体から無駄な力が抜けていったように感じた。鋭い感覚が体中から研ぎ澄まされて飛び出ているように思えた。

ユウキはキリトの発するその異様な空気に飲まれ、無意識に半歩後退した。しかしその瞬間カウントがゼロになり、決闘デュエルがスタートした。決闘デュエルがスタートした刹那、瞬きをする一瞬の時間で、キリトの剣先がユウキの目の前まで迫っていた。

(え!? な……は、速いなんてもんじや……!?)

ユウキは驚異の反応速度で手早く腕かひなを返して軌道をそらし攻撃をいなした。しかしかわした次の瞬間に、もう片方の剣先が迫っていた。片方の攻撃をやり過ぎしても次の攻撃がすぐに迫ってくる。やはり剣が一本と二本とでは分が悪かったようだ。

(で、出鱈目過ぎるよ! この速さ……キリト、君は……!)

しかしユウキも曲がりなりにALO最強プレイヤー”絶剣”と呼ばれた存在だ。簡単に負けるわけにはいかない。キリトの斬撃を最速で確実にいなし、防げない攻撃は確実にかわしていく。

その中でキリトに切り込むための機会を窺う、焦る必要はない、反応速度と動きの速さならボクの方がまだ少しだけ上だ。

「はあああああッ!!」

この時のキリトの表情は、75層で茅場晶彦と対峙した時と全く同じ表情をしていた。相手を殺すための剣技を、必死に生き残る為の剣技を振るっている姿がそこにはあった。

ユウキはキリトにとって、それほどの本気を出さなければ勝てない

相手だった。……だがもしも出来ることなら、二刀流ではなく片手直剣で相手をしたかった。

何故なら、もしユウキがSAOの世界にいたら、ユニークスキルはキリトではなく、ユウキに与えられたはずだからである。SAOのユニークスキル”二刀流”は全プレイヤー中最速の反応速度を持つプレイヤーに与えられるスキルだった。

ならばキリトより速い反応速度を持つユウキは、もしあの場にいたら確実に二刀流を手にしてははずなのである。

だからキリトはユウキとの決着に片手直剣にこだわり続けたのだ。二刀流を使用して勝ってもそれは本当の勝利ではない。でもユウキにとつてそれは関係なかった。

今出せる全力でぶつかるからこそ意味がある。実際にユウキがあのSAOにいたとして、二刀流を使いこなせていたかもわからないし、だからといってそれを言い訳にしたいくなかった。

今、二刀流を振るうキリトに勝利してこそ意味がある。だから、ボクはそれにも全力でぶつかる。今あるボクの全てをぶつけて、二刀流に……キリトに、勝利してみせる！

「せやああああ!!」

二人の剣は何度もぶつかり合い、火花を散らしていた。何度か剣を撃ち合った後、鎧迫り合いになり、力比べになった。お互いHPが減少しているが、直接の攻撃はまだもらっていない。全て剣の撃ち合いによる削りダメージだ。

ソードスキルも全く使っていない、通常攻撃だけで渡り合っていた。そこでこの状況がキリト側に有利に働いている。

ユウキのもつ剣『マクアフィテル』はAGI重視の片手直剣である。驚異の反応速度を持つユウキとの相性は抜群で、実際今までも速さだけで勝てた場面もあった。

しかし、今回はそうはいかない。相手は二刀流で手数も圧倒的だ。更に片方はALO最強の片手直剣である聖剣エクスカリバーが握られている。

キリトの片手剣熟練度はMAX故にエクスカリバーを装備出来

る。ここまではいい、熟練度を上げれば誰でも装備だけは出来る。

しかし問題なのはそこではなく、この重たい片手剣を最速で振るってやることにあった。

要求熟練度が達してもまともに振るう事の出来るALOPプレイヤーはそうはいない。全身フルアーマーで固めた重装備の鈍足戦士が、その重さからは有り得ない驚異のスピードで重い一撃を放つてくると想像すれば、いかにユウキがキリトの攻撃をいなしているかのすごさがわかってくる。

しかしそのユウキの技量をもつてしてもAGI型の片手剣マクアファイテルでは分が悪かった。エクスキャリバーと撃ち合えば当然こちら側の方が削りダメージが多い。何度も撃ち合いをしているうちに、いつの間にかユウキのHPはイエローゾーン手前まで削られていた。

休むことなく重く、速い連撃が絶え間なく繰り返されてくる。事実戦いが長引くにつれてユウキは防戦一方であった。しかし、勝機が全くないわけではない。攻撃は重たいがキリトの方に僅かに隙がある。(このまま打ち合ったらいずれ負けちゃう……、ちよつと半分賭けだけどやるしかない……！)

再び鏢迫り合いが続く中、キリトが次の攻撃に転じようと一瞬ではあるが、自分の後ろに重心をズラした。その一瞬の重心の移動をユウキは見逃さなかった。

キリトならこのタイミングで重心をズラすと見切っていたのだ。キリトが後方に重心をズラした瞬間、絶妙なタイミングで腕^{かひな}を返し、キリトの重心の移動を利用して右からの斬撃をブレイクしたのだ。

(今だ——！)

「せえやああああ——ッ!!」

ユウキは最初で最後のチャンスとばかりに即座にソードスキルの構えを見せ、自らが編み出したオリジナルソードスキル ”マザーズ・ロザリオ” を発動させていた。前代未聞の十一連撃オリジナルソードスキルだ。

ユウキはそれに全てを込めてキリトに向けて放った。斬撃をブレ

イクしている今なら確実に決めることが出来る。

しかし、それはもしも相手がキリト以外ならばの話であった。

キリトはブレイクされた方とは反対の左手の剣でマザーズ・ロザリオの初撃目をガードすると三連撃ソードスキル”シャープネイル”を発動させ、マザーズ・ロザリオの四撃目までをブロック、さらにブレイクされた右の体勢も整え四連撃ソードスキル””ホリゾンタル・スクウェア”をナナメの軌道で発動し、さらに八撃目までを防いだ。

(こ、これは……スメラギ戦の時に見せた……)

キリトの攻撃はまだ止まらない、更に追加で左手でシャープネイルを発動させ、十一撃目までを防いだ。完全にユウキはマザーズ・ロザリオの全ての連撃を防がれてしまっていた。

キリトが行ったのは、システム外スキル「スキル・コネクト」と呼ばれているものであった。

片手で発動させるソードスキルを左右交互に発動させることによりスキル使用後の硬直をほぼ無くし最大3〜4回までソードスキルを繋げられる、言わば反則じみたテクニクだ。

(そ……んな……ッ)

オリジナルソードスキルと言えどもマザーズ・ロザリオはソードスキルだ。当然技の動作終了後にソードスキル独特の硬直時間が生まれる。手練れ同士の決闘デュエルともなるとその隙が致命的になる。キリトが全ての斬撃を防ぐとユウキにソードスキルの硬直時間が発生した。

そのチャンスをむぎむぎと見逃すはずがなく、キリトは四度目のスキル・コネクトでソードスキル”レディアント・アーク”を発動させてマクアフィテルを下から上へかち上げ、弾き飛ばした。

(しまった……剣が……！)

ユウキは愛剣を手から飛ばされ自衛手段がなくなってしまった。丸腰になったユウキにソードスキルの硬直が解けたキリトは、左手でシャープネイルを発動させユウキの体に容赦なく斬撃を入れた。

「あぐっ！ うっ……」

シャープネイルの直撃を受け、ユウキのHPはレッドゾーンまで落ちた。あと一回でもソードスキルを喰らえば、HPは全損してしまうだろう。

キリトはトドメとばかりに右手のエクスキャリバーで突進技ソードスキル ” レイジスパイク ” を発動させて、真つすぐユウキ目掛けて前進していった。

(これが本気のキリトなんだね……、あはは、ボクなんかじゃ……かなわないや……)

キリトの攻撃はユウキの目の前にまで迫っていた。ユウキはゆつくりと目を瞑り、攻撃を受け入れようとしていたが、いつまでたっても体に衝撃を感じなかった。

様子がおかしいと思ったユウキは恐る恐る目を開けてみる。するとユウキへ放たれたソードスキルはユウキの首の真横で静止していた。

「キリ……ト……?」

エクスキャリバーを握るキリトの眼には涙が浮かんでいた。キリトはユウキにトドメを刺すことが出来なかったのだ。

トドメを刺してしまったらこの目の前の少女を、本当に殺してしまうことになるのではないか、取り返しのつかないことになってしまうのではないかと、恐ろしい想像をしまっていた。

しかしここはSAOの世界ではない、プレイヤーを倒しても現実の肉体は死ぬことはない。だがキリトはユウキを斬ることが出来なかった。

「違うんだ……こんなのは本当の強さじゃない……。こんなのは……うくっ……」

「キ、キリト……」

そう言うとキリトは全身の力を失い、両手から剣を離してそのままのめりに、ユウキに覆いかぶさるような形で崩れ落ちてしまった。

ユウキは咄嗟にキリトが地面に倒れないように両腕で支え、そのまま自分の胸で受け止めると一緒に地面に膝をついていた。

「だ、大丈夫? キリト……」

「アスナ……アスナ……、お……俺は……ッ!!」

「キリト、ボクはアスナじゃないよ……」

ユウキは涙を流し続けるキリトを優しく抱き締めていた。今抱き留めてあげないと、キリトが壊れてしまう、そのような気がしたからだ。かつてSAOの英雄、VRMMO最強のプレイヤーと言われた黒の剣士が、絶剣であるユウキにだけ見せた意外な一面だった。

「キリトはさ、その腕でみんなを助けてきたんだよね？ 誰かを悲しませないように。ずっとずっと、一人で頑張ってきたんだよね？ ならさ、ちよつとぐらい……泣いてもいいと思うよ？」

キリトは黙って涙を流し続けた。体は触れば壊れてしまいそうなぐらいに小さく見え、腕は小刻みに震えてしまっていた。アスナを失った悲しみだけではない、今まで積み重なり、その体に背負ってきた悲しみ全てを、ユウキが受け止めてくれていた。

「大丈夫だよ、キリトは弱くないよ？ キリトは強い、その優しさがキリトの強さなんだよ？ だからさ、もう……自分が弱いなんて……言っちゃあダメ……だか……らね？」

ユウキはキリトと直接剣を交えたことで、キリトが今までどうやって毎日を過ごしてきたかを感じ取っていた。キリトはこうやって生きてきたんだ。そのキリトの心にちよつとだけ触れることが出来たユウキも、言葉の途中から涙を流していた。

ALO内での時間は夕刻に差し掛かっていた。偶然か必然か、ユウキとキリトが初めて出会った光景とよく似ていた。キリトは時間の許す限り、ユウキの胸の中で気がすむまで泣いた。

(アスナ、ボク頑張ってキリトを支えるね。もしかしたら二度と会うことが出来ないかもしれない君の代わりに、ボクがキリトを支えるから……)

第4話〈感謝〉

西暦2026年1月30日 金曜日 午後18:30 世界樹の街ア
ルン 緑の丘

決闘デュエルをしてからどれだけの時間が経過しただろうか。ALO内の時刻は現実同様夜に差し掛かり、夕日もほとんど沈んでいた。沈みかけた夕陽が段々と夜になりつつある、闇の空と溶け合うようにしてキレイな空模様を描いていた。

それからキリトはというと子供のよう泣きじゃくり、ユウキの胸を借りて爆発した感情を精一杯吐き出すと、暫くして漸く落ち着きを取り戻していた。その様子を見てユウキが優しく声を掛ける。

「……もう落ち着いた？ キリト」

ユウキは胸を貸してるキリトに優しい口調で尋ねた。目の前でこんなキリトを今まで見たことがなかったのも、内心驚きを隠せなかった。

しかし、支えてあげないと今にでも壊れてしまいそうなキリトの姿を見て、ユウキは抱きしめる以外に選択肢がないと思っていた。

声をかけられたキリトは前のめりになっていた上半身をスツと起こし、ユウキと向かい合う体勢になった。ユウキに自分の恥ずかしいところを見られた羞恥心があったが、それ以上にこんな自分を支えてくれたユウキに感謝の気持ちがあった。

「ああ、もう大丈夫だ。ごめん、色々……」

キリトは少しバツが悪そうにもじもじしながら言葉を返した。涙が辿った頬はほんのりまだ赤みがかっていた。SAO時代に自分の責任で死なせてしまったサチから、慰めのメッセージを受け取った時以来の涙であった。

あれ以来だろうか、ここまで大泣きしたのは。俺はどれだけ感情を表にさらけ出してなかったんだろうか。

「んーん、気にしてないよ。泣きたい時は泣けばいいんだよ。キリト

はぎ、きつと我慢し過ぎだったんだよ。もつと自分に正直に生きていいんだと……ボクはそう思うな」

ユウキは微笑みながらキリトに優しく声をかけ続けた。何でだろう、今のキリトが非常に気掛かりになってしょうがない。

目の前の黒ずくめの男の子のことがもつと知りたくなってきた。キリトの強さの秘密はわかった。でも、もつとキリトのことが知りたいな、そう思い始めていた。

「ユウキ……その、怖い思いをさせちゃったならごめんな。俺、昔からマジになると……半分見境がなくなるんだ。それでHPがレッドになってるのに気が付かないこともしよつちゆうあつてさ……」

「そんなんでよく生き残ってこれたね、キリト……」

キリトの無茶っぷりに呆れた表情になりながら、ユウキが言葉を返していた。でもその表情はほんの少しだけにこやかだった。

本気のキリトと戦えたこと、そしてその戦いからキリトの深い所まで知れたことに満足していた。そして何より、キリトの人に見られたくない恥ずかしい一面が見れたことにニヤついていた。

「まあでも、ボクはいつもと違うキリトが見れて得した気分……かな？ 泣いてるキリト、結構可愛かったよ？」

「なっ……」

キリトには昔からの悩みがあった。男なのにも拘らず中性的な顔だちの為、女の子と間違われることがあったのだ。周りから見れば羨ましいと思うところだが、本人はいたってよくは思っていない様子だ。実際に男から告白された黒歴史もあった。

キリトは顔をムスつとし、そっぽを向いて拗ねてしまった。やはりどこか子供っぽいとか子供だ。不覚にもユウキはその顔も可愛いと感じてしまった。キリトはこんな顔も見せるんだなど。

「あ、もしかして触れちゃいけないことだった……?」

「どうせ俺は女顔ですよ……」

「ハイハイ、機嫌悪くしないの」

ユウキが機嫌を損ねたキリトをなだめていた。年齢はユウキの方が二つほど下なのだが、その様子はまるで扱いきい年ごろの弟の面

倒を見ているような、微笑ましいやり取りに見えた。

ユウキには双子の姉がいた。幼少の頃から一番ユウキの近くでユウキを支え続けた最愛の姉だった。その姉に、よく面倒を見てもらっていた時のことを思い出していた。

姉ちゃんも、機嫌が悪くなったボクをなだめていたときは、こんな感じだったのかな……と、昔を懐かしんでいた。

思い出していると、段々ユウキの表情に切なさが見れてきた。姉ちゃん、どうしてボクを置いて先に死んじゃったんだろう。ボク一人だけ残して……どうして先にいなくなっちゃったのさ……。

そう、ユウキの両親は三年前にHIVで他界している。ユウキにとっては藍子が最後に残された家族だったのだが、その藍子も同じくHIVに感染しており、昨年に最愛の妹であるユウキを残して他界していた。

ユウキは15歳にして、遠縁の親戚を除いて家族を全て失い、天涯孤独の身となってしまっていた。ユウキに最も近いところで支えてくれる存在と言えば、何年も近くでユウキの現実の体の面倒を見てくれている、主治医の倉橋と親友であるアスナだった。

しかし、そんなアスナも家庭の事情で仮想世界はおろか、外出もほぼ出来なくなり、実質ユウキと会えなくなってしまうていたのだ。

ユウキがリーダーを務めているスリーピング・ナイツのメンバーも、全員病人であるため、四六時中ALOにログインしているというわけではない。それどころか、各々最近治療に専念しているらしく、中々顔を出せないでいた。

なので今現在ユウキが一番近いところにいるのは、主治医の倉橋を除くと、今この目の前で顔を赤くしているキリトだけなのであった。

キリトはアスナと一緒に、ユウキが現実世界で入院している横浜港北総合病院まで面会に来てくれたのだ。ユウキ本人はキリト達に入院場所を教えていなかったのだが、キリトが自力で調べ、居場所を突き止めて面会に訪れたと言うだけだった。

しかし、そのことをやったのも当時恋人だったアスナの為であり、キリト自身がユウキを会いたいがためにやったことではなかった。

しかしユウキはそれでも嬉しかった。今までお見舞いに来てくれた人など一人もいなかった。

いたと言えば横浜に残してある実家の権利を譲れと言って迫ってきた、胸糞悪い遠縁の親類の連中ぐらいだった。

権利書にサインか押印を求められたが、ユウキが「ボク……現実の世界じゃサインもハンコも押せないけど、どうやって権利を譲るんですか？」と口を聞くと、顔を真っ赤にしていたそうだ。

主治医の倉橋はその親戚の態度に激昂し、二度と病院に来るなど追いついたほどだった。

なのでユウキにとって、キリトとアスナのお見舞いは心の底から嬉しかった。ユウキにとって生まれて初めて得ることのできた、本当の意味での「友達」だったのだ。

しかし今、アスナは離れ、キリトも塞ぎこんでしまっていた。ユウキは親友が一気に危機に陥っているのを、黙って見過ごすほど軽薄な人間ではなかった。

だからアスナの願いを聞き受け、キリトを激励しようと目の前に現れたのだ。アミュスフィアを取り上げられる前に託された、アスナと交わした約束を守るために。

「ユウキ、おい……ユウキ？」

「……え？ あ、う……ごめん。ちよつと考え事してた……」

ユウキは過去にあった悲しい出来事を思い出し、うつすらと涙を浮かべていた。もう過去を振り返ることはしないと決めたのに。

今生きているこの瞬間を一生懸命生きようと決めていたのに。何でまた思い返しちやっただらうなと思っていた。そんな様子を見たキリトが、思わず心配そうに声を掛けてくれたことにより、ハツと正気に返った。

「大丈夫か……？ 体、やっぱりどこが悪いんじゃないか？」

「ううん、大丈夫だよ。前にも言ったけど、ウィルスの活動が控えめになってきているからね。むしろ以前より体調は良好だよ！……まあそう言っても現実の体は動かせられないし、無菌室からも出られないけどね……」

「……そう……か」

そう、現実世界のユウキ、紺野木綿季の体は無菌室と呼ばれる細菌の侵入を防ぐ病室で、様々な感染症から身を守るための終末期医療に身を投じている。

HIVに感染し、免疫力が低下した木綿季の体は、もう普通の環境では生きていられないのだ。日に日に体は弱っていき、今は指先や顔の筋肉、足先をわずかに動かすことしか出来なかった。

そんなユウキの事情を知っているキリトは、何かユウキにお礼が出来ないかと、思い切つてユウキに誘いの声を掛けた。今のキリトに来る、精一杯の感謝の気持ちを伝えようとしていた。

どこかに冒険に出掛けるでもいい、街を一緒にぶらぶら徘徊するでもいい、とにかく自分にしてあげられることを探していた。

「なあユウキ、今日この後……暇か？」

急に誘いを受けたユウキは顔をキョトンとさせた。何の脈絡もなかったからだ。勿論ユウキに断る理由はない、むしろ親友からの誘いに胸を躍らせていた。

ユウキは基本的にスリーピング・ナイトのメンバーとそこにアスナを加えて遊んでいた。普段ソロやペアでALOを過ごしたことがないユウキは、まさかのキリトからの誘いが嬉しかった。

何でか理由はよくわからないけど、とにかく嬉しかった。

「えっと、ボクは大丈夫だよ！ 病院の消灯時間にまでにログアウトしないと、先生に怒られるからそれまででよければ！」

ユウキは満面の笑顔でキリトからの誘いを承諾した。キリトはそんな様子を見てほっとして、次にどこに行こうかと考えていた。狩り…はさつき決闘デュエルをしたばかりだから、剣を振るうのはまた今度いいだろう。

そうすると自然と観光だとか食事だとかそういう選択肢が頭に浮かんだ。おそらく決闘デュエルだとか冒険だとかは普段たくさんやってきているだろう。

ならば今日はどこかお気に入りのお店で自分が払いを持って、満足いくまで楽しんでもらおうとしよう、そう考えた。

「よし、ならこれからどこかで飯でも食わないか？ 俺は料理スキルとってないから、どこか食べれるところで一緒にとでも思ったんだけど。払いは俺が持つ」

「え……いいの？」

「ああ、俺は構わないぞ。今回元気づけてくれたお礼だと思ってくれ」
ユウキは首をかしげて少しだけ思うところがあつた。この手口はアスナから聞いたことがある。切っ掛けはなんでもいいから、とにかく男がこうやって女の子をどこかに誘う行為。

そうだ、あれだ！ とあることが思い浮かんだユウキは急に顔をにんまりとさせて、満更でもなさそうな様子で、キリトに顔を寄せて口を開いた。

「ねえキリト、もしかしてボクをナンパしてる？」

「ばっ、ナ……ナンパア!？」

キリトは声を裏返させて、顔を赤くして慌てふためいていた。もちろんキリトにそんな下心などない。普段何もしなくても女の子の方から声がかかっているタラシだ。

本人に自覚はないが天然のタラシだ。普段からでもリズやシリカ、妹のリーファこと直葉にも自分から声を掛けて冒険や買い物に行くことも珍しくない。

なので今回の件もキリトにとっては何のこともない普通のお誘いのはずだったのだが、ユウキにはそういった経験はなかったため、ナンパだと思ったのだろう。いや、ナンパだということにしておきたかった。

「まあ、キリトにその気があるのなら、ボクはそんなお誘いに乗るのはやぶさかじゃないつもりだよ？」

「……な、なんかキャラ変わってないか……？ 前よりませてきてるような……」

「褒めても何も出ないよ？」

「褒めてないっての!!」

のらりくらりとしたユウキの態度にキリトは疲れ切っていた。今までに付き合ったことのないタイプだった。ユウキの持ち前の元気

と抜群のコミュニケーション力もあって、お互いに会話が尽きない。結局この後はユウキのお気に入りのお店で食事を取るという話に落ち着いた。

目的地が決まると二人は移動を始めたのだが、空を飛べるこのゲームで、敢えて自らの脚で歩いて行こうとユウキが提案しだした。キリトは頭に？マークを浮かべながらも、ユウキの提案を飲んだ。飛ぶ方が早くて楽なものになと思いながら。

「なあユウキ、飛んでいかないのか？ その方が早いんじゃない？」

「んー、確かにそうなんだけどさ。でも急いでるわけでもないし……、ゆっくり歩いていくのも楽しいかなって。折角キリトとお出掛けなんだしさ！」

キリトの合理的な考えからの疑問は、ユウキの何事も楽しもうとする姿勢という形で答えられた。人生急ぎ過ぎる必要はない、時にはのんびり歩いたり振り返ったりするのも大事だ。

ユウキは既にそんな人生の楽しみ方を知っていた。キリトもユウキがそう言うのなら別にいいかと思っていた。

キリトに要求を飲んでもらったユウキは上機嫌になっていた。小悪魔のような笑顔を見せ、手と足をめいっばい伸ばして歩いたり、けんけんぱつと元気よくステップを踏んだりして、楽しそうにこの時間を満喫していた。

今日のユウキは怒ったり、悲しそうになったり、笑顔で喜んだり、実に感情豊かで見ていて飽きない様子を見せていた。

キリトもそんな楽しそうなユウキを見ていて、こういうのも悪くないなと思い始めていた。アスナみたいなおしとやかなところとかはないが、ユウキはユウキで元気いっぱいであんな俺にも楽しく接してくれている。

少しだけかましいが……決して悪くはないと、そう感じていた。

「嬉しそうだな、ユウキ」

「うん？ そう見える？」

「ああ、怒ったり、悲しんだり、そして喜んだり、こっちは見ていて飽きないぞ」

「なあにそれ？ ……キリトもしかしてボクを口説いてる？ そんならちよつと難しいよー？ ボクはガード硬いからねー！」

「なっ……だから何でお前はそういうませた答えに辿り着くんだよ！」

俺は思ったことを言ったままでだな……！」

「あははは！ キリト顔あかーい！ 可愛いー！」

ユウキにからかわれたキリトは再び顔を赤く染めていた。直葉ともストレアとも違ういじられ方に内心困り果てていた。しかしお礼の約束をふいにするわけにもいかず、この場から逃げ出すことはせず、ただひたすらユウキにからかわれ続けた。

ユウキはそんなキリトの反応が心底面白いらしく、次から次へとアスナから聞かされていたネタを引っ張り出しては、キリトを玩具にして楽しんでいた。

「はあー！ キリトって面白いねー！ 話してて飽きないや！」

「……俺はもう疲労困憊で今すぐ帰りたい気分なんだが……」

キリトはからかわれ過ぎてグロッキー状態になってしまっていた。今すぐ現実世界のベッドで横になって眠ってしまいたい気分だった。

しかし、ユウキがいる限りそれは許されないだろう。ちゃんとご飯をご馳走してくれるまで帰さない。ユウキの目がそう訴えていた。じつと瞳を見つめられていたキリトは根競べ負けしてしまい、諦めの気持ちを見せて、しぶしぶユウキに従った。

元々そういう約束だったのでそうせざるを得なかったのだが。

「わかったよ、付き合いますって……ユウキ先生……」

「えへへー♪ やったねー♪」

分け隔てのない会話を続けていくうちに、二人はユウキのお気に入りのお店へと辿り着いていた。

世界樹がよく見える平坦な土地の、やや中央に店を構えているユウキのお気に入りの店は、ファンタジーな世界観を売りにしているALOのイメージとは程遠く、どちらかという現実世界のどこにでもあつる、まるでファミリーレストランのような外観をしていた。

普通は中世的な建物風の店が多い中、どこことなく日常的な外観をしたこの店は、アルンの街全体を見渡すように視界を広げても、どこと

なく浮いてしまっていた。

何故この建物だけが近代的な見た目をしているのだろうか。

「えっと……ここ、もしかしてファミレス……なのか？」

「んーファミレス風の喫茶店……だね、システム上は」

「もしかして、カレーとかハンバーグとかスパゲティが出てきたりするの？」

「うん！ よく知ってるね！ キリトも来たことあるの？」

「あ、いや……、来たことはないけど……」

キリトは思っていた。この仮想世界独特の味覚エンジンと様々な味がある素材が存在するALOで、何で現実世界でも食べられる洋食的なものを食べようとするのか。

どうせならこのアルン独特の素材を使った食事処で食べた方がいいのではないかと、そんな視線を建物とユウキに交互に送っていた。

ユウキはユウキで嬉しそうな視線を建物に送っていた。この建物が放つ雰囲気、これから出されるであろうメニュー、そしてその味まで一つ一つを楽しみにしているとといった表情だった。

その様子が気になってキリトはある質問を投げつけてみた。

「なあユウキ、折角ALOで食事するんだから、もつとこう……その土地の独特のものを食べた方がいいんじゃないか？ シルフ領とかでは変わったつまみとかあったし、アルンならアルン独特の料理とか食べられると思うんだけど……」

ユウキはキリトから聞かれると、少しだけ切ない顔を浮かべた。何気ない普通のことを聞いただけのはずが、ユウキは肩を落としてしまっていた。

キリトは何か悪いことでも聞いてしまったかと少しだけ焦りの表情を浮かべていた。そしてユウキがゆっくりと口を開いてわけを話し始めた。

「あのさキリト、ボク……現実世界じゃもう三年以上も食事してないんだ。ずっと点滴だけで……この命を長らえてるの。その間ずっとALOで食事を済ませて満腹感を得てただけ。やっぱり現実世界の味が恋しくなっちゃってさ……」

ユウキはあからさまに表情を落としてしまい、淡々と話し始めた。ユウキは現実世界ではもう長いことを食事を取っていない。体を動かすことが出来ないユウキにはそれは難しいことだった。

生命を維持するには点滴だけでも十分なのだが、やはり本人は食事が何よりの楽しみだったようだ。

ALLOの食事システムは、満腹感を得ることが出来る。実際に栄養が体にいきわたるわけではないが、仮想空間からの信号をキャッチして、脳にある満腹中枢をしっかりと刺激するのだ。このシステムを活かしたダイエツト法もあるという噂だ。

ユウキもこの仮想の食事に最初こそ満足していたが、慣れてくると人は贅沢をしたくなるもので、ユウキは現実の食べ物か、もしくはそれに近いものを食べたいと考えていた。

そこで発見したのがこのファミレス風の喫茶店だった。現実のファミレスと同じく、ハンバーグ、ステーキ、パスタ、定食など、どこでもよく見るメニューが食べられるのだ。まさにユウキにとって最高の食事処であった。

「ここならさ、現実世界の味が……楽しめるから、ずっと通ってたんだ。味も美味しいし、何より……懐かしいから」

「……そう……だったのか、何かごめん……」

「んーん、キリトが謝ることないよ。ボクはこの食べ物に満足してるし、結構いけるよ？ キリトも喜んでくれると思うなー！」

言葉の後半から無理やり笑顔を作っているユウキの様子を見て、キリトはいたたまれない気持ちになった。ユウキにとって少しタブーなことを聞いてしまったようだ。一緒に食事して喜んでもらうつもりが、うっかり悲しくさせてしまっていた。

実際、ユウキは胸に手を当ててキリトから視線を逸らして、何とも言えない微妙な表情で佇んでいた。それを見てこのままではいけないと思ったキリトは、男を見せるため、意を決してとある提案をユウキに持ち出した。

「……ユウキ、今夜は好きだけ注文していいぞ。いくらでも食べてくれ。俺の財布のことは気にしなくていい。ユウキの心の満足のい

くところまで食べつくしてくれ」

その言葉を聞いたユウキは、目を丸くしてキョトンとした表情を浮かべていた。何故ならA.L.O.の食事の料金は決して安くはないからだ。

自分で素材を手に入れ、一から料理を作って食べるのならそこまでお金はかからないが、コックNPCが作る出来合いの料理を、お金を支払って食べるとなると、かなりの値段が張る。それでもユウキはこのレストランがお気に入りだった。

そんな安くない料理を、キリトはユウキの心ゆくまで、財布を気にせず堪能していいと言う。まさに太っ腹だ。ユウキはアバターの外見では細身でもたくさん食べるようには見えないが、じつはかなりの大食漢であり、人よりかなり食べる。

現実世界でも今でこそやせ細ってしまっているが、入院する前は活発でよく動き、よく食べる子だった。仮想世界でよく食べるのは恐らくその名残なのだろう。

「えと、それは嬉しいんだけど……ホントにいいの？　……この料理、安くない値段設定だけど……」

「ああ、俺がいいって言うんだからいいんだよ。別に金には困ってないし、こういう時に使わないとな」

「えーつと……それじゃあそうだね……。キリトがそう言ってくれるなら、折角だしお言葉に甘えちやおう……かな？」

「ああ、是非そうしてくれ。俺も……ここのメニュー気になってたしな」

「やったー！　それなら早く入ろうよ！　キリト！」

ユウキはそう言いながらキリトの手を引っ張って強引にレストランに入店した。レストランの内装はやはり近代的で、どこにでもあるようなレストランの内装を再現していた。

しかし、やはり現実でいつでも食べられるメニューを、高いユルドを払ってまで食べる人はあまりおらず、客足と言えるものはNPCの客が何人かいるだけであった。

キリトとユウキは窓側の外の風景がよく見渡せる席を選んだ。窓際はソファ型の椅子、通路側はごく普通の木材の椅子が並び、キリト

とユウキは窓際のソファに、横一列に並ぶように隣り合って腰を落
着けていた。

はたから見たら兄妹が仲良く食事に来ているような光景だった。
キリトは席に着き、気分を落ち着かせるときよろきよると自分の周
りへと視線を移していた。自分たち以外に誰か一人ぐらいプレイ
ヤーの客はいないものか？とNPC以外の人影を探していた。

「他にプレイヤー……全然いないな」

「うん、だからいつきてもすぐに食べられるんだ！ キリトは何食べ
るの？」

基本的に店員NPCに直接声を掛けて注文を取るシステムを採用
しているALOだが、こうやって仮想タブレットを使った注文システ
ムも採用していた。この方が気軽にメニューを頼める人が増えてい
るからだそうだ。

ユウキはキリトの注文が少しだけ気になりながらも、これから食べ
るであろうメニューのアイコンを片っ端からタップしまくっていた。

それもサイドメニューやデザートだけでなく、メインディッシュに
あたるであろうページのアイコンを。一体どれだけ食べるというの
だろうか。

「俺は……このカツカレーの辛口と、サイドメニューはどうしようか
な。……ユウキは？」

「んとボクはねー、デミグラスハンバーグに、ミートソーススパゲティ
に、ポークカレーの甘口！ あとね……」

「お、おいおい……それ全部食べ切れるのか……？ 俺も食べる方だけ
ど、ユウキもすごいな……」

「ボクは昔から結構食べるよー！ たくさん運動してたから太らな
かったけどね！」

「ははは、それじゃあもしもユウキが結婚したら、エンゲル係数は大変
なことになるな」

「あははー！ そうだねー！ ボクをお嫁さんにするなら……たくさん
稼いできてもらわないと！」

ユウキはそう言いながら笑顔を浮かべていたが、話の途中から声の

トーンが少しずつ落ちていき、やがて再び表情が切なくなっていく。キリトはメニュー欄に視線をやっていたため、その様子に気付くことはなかった。

キリトがメニューに集中している事を確認したユウキはついつい、心の中に思ったことを、首をうなだれて視線を落とし、胸に手を当てながら小さい声で呟いていた。

「でも大丈夫だよ、ボク……ガードが硬いからさ……」

「……ん？ 何か言ったか？ ユウキ」

「んーん、何でもないよ。ほら、早く注文しちやおうよ！ もうボクお腹ぺっこぺこだよ！」

そう言いながらユウキはキリトの意思などお構いなしに食べたいものを片っ端からタップして、注文を送信した。送信した注文が厨房に届けられたのか、コックNPCが奥の調理室で、料理スキルを使っているであろうサウンドエフェクトが聞こえてきた。

包丁を使う音、鍋で煮込む音、フライパンで炒める音など、様々なリアルなサウンドエンジンを使った心地よい音が耳に響いてきた。

V R M M Oは視覚や味覚の再現もすごいが、こうした聴覚に対するリアルな再現も凄まじいのだ。もちろん嗅覚もシステマ的にちゃんと再現されている。

キリトはユウキの様子が気になりつつも、自分が食べたいものをタップして、送信した。

キリトが注文したのはカツカレー辛口、オニオングラタンスープ、三種のチーズのクリーミーグラタン、飲み物にコーラ、デザートはプリンを注文した。

ユウキはそれをはるかに凌駕する注文量だった。デミグラスハンバーグ、ミートソーススパゲティ、ポークカレー甘口、ビーフシチュー、ミックスグリル、ラザニア。

サイドメニューにフライドポテト、から揚げ、コンソメスープ、パン入りポタージュ。飲み物にクリームソーダとコーラフロート。

デザートにチョコパフェとイチゴシヨートとチーズケーキと大盤振る舞いだった。金を支払うのがキリトなのをいいことに、これでも

かとばかりの注文の嵐だった。

その容赦ない鬼の注文っぷりにキリトは驚愕の表情を浮かべていた。ユウキの注文した料理だけで一体何ユルドが消し飛ぶのだろうか……。そういえばキリトこのメニューの値段を確認していなかった。

普通の喫茶店や酒場の相場と同じぐらいの値段なら、まだ自分の財布にそこまで打撃は来ない。まあ言うほど高い値段じゃないだろうと思ひ、何も考えずに注文した履歴を見て、支払われたユルドを確認した。

「な、なんだ……これは!？」

「えへへー、ゴチになるねー！ キリト!」

キリトはこの世のものとは思えない、恐ろしいものを見たような驚愕の表情を浮かべていた。

通常高くてもメインディッシュが平均1500ユルドぐらいの値段設定に対して、このレストランは平均5000ユルドを超えていたからだ。しかもサイドメニューとデザートもやたら高く設定されている。

キリトはこのレストランにプレイヤーが来ない理由がわかった気がした。確かにこの値段じゃ高いユルドを払ってまで食べにくるプレイヤーはいないだろう。

それこそ、現実世界の料理の再現に特別な想いを持っているユウキを除いて、決して他のプレイヤーは来ないだろうと確信した。

そして合計金額を確認すると、キリトは更に肩を落として大きいため息をついた。総額74000ユルド。正直言って一回の食事に使っている金額ではなかった。キリトがいかに稼いでいるプレイヤーだとしてもかなり痛い金額だった。

「……稼ぎに行かなきゃ、だな。はあ……」

「あははは! まあでもそう肩を落とさないでよ、稼ぐならボクも付き合うからさ!」

「はあ……」

キリトはあからさまなため息を吐くと大きく落ち込んでいた。キ

リトほどのプレイヤースキルがあれば、数万ユルドぐらいはすぐに稼げるが、決して楽に稼げるというわけではない。

強いモンスターを地道に倒してレアドロップや、換金専用アイテムを狙わなければ大金は入り込んでこない。VRMMOでも、お金は楽に稼げないということだ。

当分しばらくはダンジョンにこもりつきりだなどと思ったキリトは意を決して表情を変え、これから出されてくるであろう料理を最大限楽しむしかないと覚悟を決めた。

一旦頼んでしまったものはしようがない、今更キャンセルなんて出れないし、ここまでできたら文字通り腹をくくって食べつくしてやろう。そういう風に意気込んでいた。

「ここまできちまったもんは仕方ない、俺も胃が裂けるまで食べ尽くしてやる!!」

「その意気だよキリト！　ここでいっぱい食べて、それからいっぱい稼ごうよ！」

「ああ、その代わりに絶対に最後まで付き合ってもらうからな？」
「分かっているってばー!!」

明るく楽しそうに返事を返すユウキを見て、本当にわかっているのか？と疑問の表情を浮かべていたキリトであったが、ユウキの実力を知っているため、俺たち二人でペアを組めば、稼ぐのはそこまで難しいことではないだろうと思っていた。

それからほどなくして注文した料理が運ばれてきた。広めのテーブルの隅々まで並べられた料理の数々は、正直圧倒されるものがあった。普通の人なら、キリト達が座っている席の人数分人を揃えても食べきれないであろう。

ユウキが注文した量はそれぐらいすごいものであった。この小柄な体のどこにこれだけの食べ物収まるというのだ。まあ、システム上食べた料理は消えてしまうのだろうか。

すべての料理が並べ終わると、ユウキとキリトはお行儀よく両手を合わせて、小学校の給食の時のようにいただきますの姿勢を取っていた。

目の前に並べられた料理に、そしてそれを作ったNPCに、そして料理が食べられる事自体に感謝の気持ちを込めて、言葉を口にした。

「いただきます」

「いただきますーすー」

テーブルの上に色とりどりに並べられた料理はそれぞれ、食欲をそそる香りが混じった湯気を登らせていた。

仮想世界はどんどんリアルになる、この湯気もそうだが、食感やのど越しなど、どこまで拘れば気が済むのだ？と言いたくなるぐらい、リアリティを追求している。その進化は留まることを知らない。

だが、そのお陰もあってユウキは仮想世界の生活を満喫できているわけだし、自分の居場所を見つけることも出来た。

仮想世界ではあるが、ここはユウキにとって一つの現実の世界でもあったのだ。四方八方から様々ないい香りが立ち上る中、ユウキはどれから手を着けたらいいか目を輝かせていた。

全部の皿を少しずつ味わうようにいただくか、それとも一品一品を確実に楽しもうかという贅沢な悩みを抱えていた。

「食べないのか？ ユウキ」

既にカツカレーを口に頬張っているキリトが、一向に料理に手を着けないユウキに対して質問を投げた。ユウキはいまだにたくさん料理のラインナップに目をキラキラさせていた。

小学校の頃なら誰もが憧れたであろう、レストランの食べたいメニューを踏破するという野望。それをユウキは目の前に実現していた。他人のお金で。

「えつとね、どれから食べようか悩んじゃってさ……えへへ」

いつまで経っても食べようとしないうウキの料理に「食わないのなら俺がもらおう」と言いながらキリトが手を出すと「だめー！ ボクのだもん！」と頑なに拒否し、漸く料理を食べ始めた。その様子を見たキリトは半分笑顔、半分呆れた表情で料理を口に運びながらユウキを見つめていた。

それぞれ料理にあった食器を、利き腕の右手で持ち替えながら、

次々へと口に運んでは、ユウキは幸せそうな顔を浮かべていた。こんなに食べられるなんて、美味しいものに囲まれるなんて、ボクは幸せだと、キリトに聞こえる声量で心の声が外へ零れてしまっていた。

「美味しいか？ ユウキ」

「うん！ とつても美味しいよ！ いつも一人で来てる時よりも何倍も美味しい気がする！」

「一人で」という言葉が気にかかったキリトであった。スリーピング・ナイトやアスナとは来ないのだろうか？ いくら高いといっても、声を掛ければみんななら来てくれると思うが。キリトは口の中のカツを飲み込むと、そのことについてユウキに尋ねてみた。

「なあユウキ、ここにはいつも一人で来てるのか？ ギルドのみんなやアスナと来てたりはしてないのか？」

「え？ あ……うん、そうだねえ……。一回は声を掛けたんだよ。ハンバーグとか現実世界のご飯が食べられるところがあるってさ。でもアスナは自分で作れるし、ジュンとかタルケンもそんなにお金持ってるわけじゃないから、あまり来たがらなかったんだよね」

「そ、そうなのか……」

「うん。結構スリーピング・ナイトの皆って、ボクを含めてすっごい食べるんだよ！ 一番食べるのはジュンとテツチだね！ ノリは食べると思うよりもお酒ばかり飲んでるよ」

「あはは、みんなとつても個性的なんだな」

「それはキリトもでしょ？」

ユウキの返しに「何のことだ？」とすつとぼけたキリトを見て、ユウキは呆れるようにため息を吐いた。こんな天然たらしに、アスナは2年以上も付き合っていたんだと、アスナの長年の苦労を労っていた。

そして複雑な表情を浮かべながらもユウキは料理を口に運び続けた。

程なくしてキリトは先に自分の注文した分を完食していた。残されたのはコーラだけで、少しずつちびちび飲みながら、ユウキの食べっぷりを観察していた。肝心のユウキの食欲は衰えるどころか、ま

すます加速していった。

既にハンバーグとパスタを完食し、サイドメニューも全てユウキのお腹の中へと消えていった。

それでも尚ユウキの勢いは衰えない。フォークやスプーンで自分の好物を口に運ぶたびに、幸せを感じていた。時折あまりの美味しさに落っこちそうなほっぺに手を当てて、顔をとりりとさせていた。

そんな幸せそうなユウキの顔を見て、キリトにも自然と笑顔が浮かんでいた。そのキリトからの視線に気付いたのか、ユウキは目をキョトンとさせて思わずキリトを見つめ返していた。

「えっと、何？ キリト……」

「ん？ ああ、幸せそうに食べるな……って思ってたさ」

ほっこりした顔を浮かべながらキリトが口を開くと、それにこたえるかのように満面の笑顔を作りながら、ユウキが答えた。

「うん！ すっごく美味しいしすっごく楽しいよ！ ありがとうね！ キリト！」

「お……おう、そう言ってくれと……俺も嬉しい……ぞ？」

ユウキの純粹無垢で輝くような笑顔に、キリトは柄にもなく顔を赤くしていた。自分より二つ年下の女の子に一瞬心を奪われて、ドキツとしていた。

キリトはその恥ずかしさを隠すように、ユウキから視線を逸らして、ストローに口をつけてコーラを飲み続けた。そんなキリトを見てユウキは「変なキリト」と一言漏らして、残りの食事に再び手をつけていた。

キリトは無言でコーラを飲みながら、ユウキから視線を逸らして、遠くの風景を見つめていた。何で俺はこんなにもドキドキしているんだ。いつものユウキの笑顔じゃないか、アスナにもスリーピング・ナイツのみんなにも見せている顔じゃないか。

キリトは自分にそう言い聞かせながらひたすらストローからコーラを吸い込んでいた。ほとんど飲みつくしていたため、コップは空っぽになり、氷だけの状態となった。

やがて耐久度をなくしたコップは光と共に砕け散った。そのエ

フエクトでハツとなったキリトはユウキからの視線に気付いていた。

「どうしたのキリト？ さつきから様子が変だよ？」

「べ、別に……いつも通りだよ……」

ユウキは頭に？マークを浮かべながらも残りの料理を食べ続けた。既にユウキの料理はデザートだけを残すのみとなり、食事もようやく終わりの時間を迎えようとしていた。

一方キリトは左手の指を縦にスライドさせ、メニューを表示すると自分のストレージから水を取り出して、ごくごくと飲み始めていた。

気分を落ち着かせるために、ただひたすら無心で水を胃に流し込んだ。キリトの心の中には、キリト自身にもよくわからないモヤモヤしたものが引つかかっていた。

そのモヤモヤが気になってしょうがないが考えてもわからないため、キリトは何も考えずに、ただひたすら水を飲み続けた。

キリトが水を飲み続けている間、最後のデザートをお腹に納めたユウキが満足そうな顔を浮かべながら、運ばれてきた全ての料理を完食した。

最後の最後まで、その勢いは落ちることはなかった。全ての料理を平らげたユウキが思いつきり伸びをすると完全にリラックスマードに入り、だらしなくソファに背中を預けていた。

「ふいっ……お腹いっぱいだよ、ご馳走様……キリト……」

「ああ……満足したか？」

「うん、ボク……こんなにたくさん食べたの久しぶりだよ……」

「……そうか、よかったな」

「うん、ありがと……キリト……ト」

心行くまで食事を堪能したユウキは満腹感の所為か、うとうとし始めた。瞼があがったりさがったりし、首から上もカクンカクンと、今にでも眠ってしまいそうな様子だった。

決闘^{デュエル}で思いつきり体を動かしてから、お腹いっぱい食べ物に詰め込んだら、それはそれは眠くなってくる。たとえそれがこの現実世界ではない仮想世界の出来事であってもだ。

脳からアミューシアを経由して発せられる電気信号は、仮想世界

の自分のアバターを動かすか、現実の自分の体そのものを動かすかの違いでしかない。なので自然と疲れもするし眠気も出てくる。

そんな眠そうにしているユウキの様子にキリトが気付いた。こんなところで寝てしまわれたら俺はどうしたらいいのか、流石に滅多に客が来ないとはいえ、こんなところに女の子一人置いてログアウトするわけにもいかない。

そう思ったキリトはユウキの顔をぺちぺちと叩き、ユウキの眠気を覚まさそうとした。

「おいユウキ、こんなところで眠られたら困るぞ、寝るな」

「ん……うん、わかってるよお……」

キリトから声を掛けられたユウキは眠らないようにと、自分の右手で目をゴシゴシと擦り、ゆつくりと席から立ち上がった。キリトもユウキに続くように席を立ち、入口へと足を運び、二人でレストランを後にした。

ユウキは歩きながらも足元をフラフラとさせていた。レストランを出てからキリト達は、近くにある平原のベンチに腰を下ろしていた。

キリトに導かれるがままにユウキは先にベンチに腰かけたキリトの隣に、同じように腰を落ち着けた。未だに眠そうに首から上がカックンカックンと重力に負けそうになっていた。

「なあユウキ、大丈夫か？」

「うん……大丈夫だよ。でも、ちょっと眠いかな……」

「なら安全な屋内まで送るよ、それからログアウトしよう。お前のホーム……どこだ？」

「ん、ボク……お家持ってない……」

「え……？」

ギルドリーダーだということにも関わらず、個人の家を持っていないという事実キリトは困っていた。ユウキは今にでも眠りこけてしまいうそだ。

しかしこんなところに置いてはいけない。絶剣と呼ばれているユウキだが、剣を握らなければ普通の女の子。だとしたら屋外に放置な

どもつてのほかだ。

ログインしたまま眠ってしまったら。通りかかった悪質なプレイヤーに勝手にアバターをいじくられて、一方的にアイテムを奪われたり、装備を剥がされて辱めを受けたりなんてこともあり得るからだ。

近くの宿屋につれていってからログアウトという方法もあるが、アレンは世界樹の街ということもあって宿賃が非常に高い。途方もない金額の食事代を払ってしまったキリトはこれ以上の出費は避けたかった。

だからといって、ユウキの種族の街のインプ領やキリトの種族のスプリガン領まではかなりの距離がある。転移結晶も切らしているため、手詰まりになっていた。

となるとすぐに安全な屋内に、尚且つお金を掛けないという条件を満たす場所が一つだけ、キリトには心当たりがあった。しかし、状況的にも倫理的にも、そして一般常識的にもキリトはそれだけは避けたかった。

「参ったな……ユウキどうするよ？　すぐにログアウト出来ないなら、どこか安全な屋内の建物に行かないと……」

「ん、宿屋は……？」

「もうお金がすつからかんです……」

「そうなんだ、んじやあねえ……」

必死に眠気を抑えながら、どこかい場所はないのかなど、ユウキは思い当たる場所を頭の中で探っていた。安全で安心出来て、尚且つお金がかからない暖かい場所。

しばらく考え込むと、ふと思い当たる場所があったのか、ユウキは少しだけ顔を起こしてキリトの方をみると、ゆっくりとした口調で話し始めた。もうあと一歩で眠ってしまいそうな自分の体を一生懸命動かしながら。

「えつとね、ボク……キリトのお家にいきたい……」

「は……？」

ユウキの考え付いたこととキリトの考えていたことが一致してしまった。キリトのホームは新生アインクラッドの第22層の湖畔の

すぐ傍にある。

元々アスナと一緒に住んでいたホームが同じエリアの森の中にあっただけだが、元々所有権をアスナが持っていたために入れなくなってしまうていた。所有権を譲渡してもらえればよかったのだがそんな余裕もなかった。

キリト自身ものどかな雰囲気は漂う22層の湖畔エリアが大変気に入っていた。なのでアスナのホームほどとまではいかないが、近くの湖畔のすぐそばにある同じぐらいの大きさのホームを購入したのであった。

確かにここでならアルンの転移門からすぐに向かうことが出来るし、扉の鍵はキリトが所有しているので第三者の一方的な侵入もない。安全と言えば安全なのだが、キリトが心配しているのはそこではなかった。

年頃の女の子を、仮想空間の中とはいえ自分の家の敷居を跨がせるという行為に抵抗を感じていた。恋人でも彼女でもないユウキをホイホイと招き入れるわけにもいかなかった。

更にそんなところをシノンやリズに目撃されてみる、いらぬ疑いを掛けられるに違いない。いや待てよ、目撃されると都合が悪いと言うのなら、今この人通りが多いアルンの街で佇んでいるのもまずいんじゃないか……？

「うう、困ったぞ……」

「ボク、キリトのお家いきたーい……」

右も左もすつかり八方塞がりになってしまったキリトは、頭を抱えて悩んでいたが、一旦落ち着いて頭をクリアにして、冷静に今後の動向について一体どうすればと考えていた。

よくよく落ち着いて考えてみれば、ただ単にユウキを安全圏である俺のホームでログアウトさせるだけじゃないか。別にやましいことなど何も無いじゃないか。むしろユウキの安全を第一に考えた紳士的な考え以外辿り着く答えがない。

勿論現場を目撃されたらいらぬ疑いは掛けられてしまうだろうが、ユウキならちゃんと弁解をしてくれるだろうし、俺が状況をしっかり

説明すれば理解してくれると思う。

決してやましいことなど考えてない、決してだ。

結局自分のホームに招き入れる所に辿りついたキリトは、既にベンチでうたた寝しそうになっているユウキに声を掛けた。早く何とかしないとこのままでは本当にこの場で寝入ってしまう、急がなくては。

「わかった、俺のホームに行こう。それでいいか？」

「うん、いく……キリトのお家……」

「あいよ、立てるか？」

「うん……」

キリトからの声掛けに肯定の返事を返したユウキであったが、足取りは先ほどよりもおぼつかなくなっていた。既にユウキの眠気が限界まで来てしまっていた。よく聞くと寝息的な息遣いが聞こえていた。

そんなユウキの様子を見たキリトはだめだこりやと思いつつも、致し方ないとユウキを自分の背中にもたれかからせた。体に違和感を覚えたユウキは目を少しだけ開けると、何が起きたのかと寝ぼけ眼で状況を確認していた。

細目を開けたユウキの視界にはキリトの背中が見えていた。一体キリトは何をしているんだろう？と思いつつも、寝ぼけ眼をこしこししつつ、その状況を見つめていた。

「ほら、おぶってやるからこっちにこい」

「……え？ あ、う……うん。わかった……」

キリトに返事を返しながらユウキはキリトの背中に自分の体重を預けた。何も考えずにキリトの背中に覆いかぶさったので、キリトはバランスを崩してしまったが、STRが無駄に高いキリトはすぐに体勢を立て直して、なんとかユウキを落つことすことなくおぶることが出来た。

ちよつとだけ不格好だがしつかりとユウキをその背中で支えていた。

キリトは「ふう……」と安堵の息を漏らすと、ゆっくりと転移門目

掛けて歩を進めていた。間違ってもユウキを地面に落とさないようにしっかりと両手で抱えていた。

キリトの歩きに合わせて、ユウキの体が上下に揺らされて、夜のアールの空に浮かぶ月が照らされて黒紫色に光るユウキのキレイな口ングの髪がふわふわとなびいていた。

ユウキは首から上をキリトの顔の真横に、両手はキリトの肩から体の前へ回すようにして体重を預けていた。上下に揺られてるユウキがそれが心地よかったのか、スウスウと可愛い寝息を立てていた。

そんな様子を見たキリトの顔には、やれやれといった表情が浮かんでいた。しかし、不思議とユウキとのやりとりは嫌いではなかった。今日はいろんなことがあったが、自分がここまで元氣を取り戻せたのは、紛れもないこの少女のお陰だ。

出費は大きかったが、なんだかんだでユウキとの食事は楽しかったし、いい気分転換にもなった。お金稼ぎに付き合ってもらおうなどと言ってしまったが、もう少し彼女の我儘に付き合ってもいいかなと思いはじめた。

何でかはよくわからないけど、ユウキの笑うところをもっと近くで見たい。キリトはそう感じ始めていた。それがユウキに対する「親友」としての感情以上のものを持ってしまっていることに気が付かないまま、キリトは自分のホームへと足を運んでいた。

第5話く木綿季く

西暦2026年1月30日金曜日 午後19:30 新生アインク

ラッド第22層 湖畔エリア キリトのホーム前

キリトはすっかり寝入ってしまったユウキを背中におぶりながら、木材で出来た歩道を歩いていた。歩道の周りは神秘的な雰囲気をつつまれた綺麗な森に囲まれていた。この近くにアスナのホームがある。

更にそこから徒歩で10分ほど歩くと、2年前にデスゲームが行われた旧アインクラッドの22層とほぼ同じ作りの湖のすぐ傍に、キリトのホームは建っている。SAO時代に知り合ったサラリーマンプレイヤー ”ニシダ” が行った有志による釣りイベントを決行した、あの湖だった。

ユウキは気持ちよさそうにキリトの背中を借りて、夢の世界へと旅立っていた。キリトの耳の傍で可愛い寝息を立てながら、まるで安心しきったかのように眠りこけていた。

その無防備な姿はとても普段、決闘で無敗を誇っている”絶剣”と呼ばれているとは思えなかった。キリトはそんなユウキの姿を見て苦笑いを浮かべていた。アスナとも、妹の直葉とも全く違うタイプの女の子、活発で元気いっぱい、曲がったことは嫌いで真つすぐにぶつかりに来る。

現実ではとても重たい事情を抱えている彼女であったが、だからこそユウキはこの前向きな性格になったのかも知れない。そう考えているうちに、キリトはユウキのこの先について考えていた。

今でこそそうして仮想世界ではあるが元気で暮らせている。しかし、それは永遠ではない。人間いつかは死ぬが、ユウキの場合は常人よりも遥かに早くその終わりが来てしまう。そう考えてしまったキリトは背中に寒気を覚えた。

ユウキの体のことは以前から知っていた。ただならぬ事情を抱えていることを感じていながらも、HIVに感染しているという事実を

聞かされていた時、それほど驚かなかった。とても気の毒だ程度にし
か思っていないかった。

しかし今のキリトは違っていた。この少女が遠くない未来に永遠
の別れを迎えてしまうということを意識してしまうと、心の中を抉ら
れたような感覚に襲われてしまっていた。

(何でだ……、なんか……胸のあたりがズキズキする)

キリトは何故自分の胸が痛む思いがするのかわからなかった。ユ
ウキの病気のこととは以前から覚悟していたことじゃないか。実際、H
IVを治す手立てに心当たりはない。

ユウキ自身も残り少ない自分の人生を精一杯生きている。なら俺
はそれを手伝えればいいじゃないか。医者でもない俺に何が出来る
というのだ。第一俺に何とか出来るぐらいなら、主治医の倉橋先生が
とつくにユウキを治している。

そんなネガティブな思考を巡らせているうちに、気が付くとキリト
は自分のホームまでたどり着いていた。

ホームの扉の鍵を開けるにはストレージから、カギのアイテムを取
り出して使用しなければならぬのだが、ユウキを両手でおんぶして
いるため出来ないでいた。

どうしようかと困ったキリトであったが、やはりユウキに一旦降り
てもらおうしもなく、可哀そうだとは思いつつもユウキを起こすため
に声を掛けた。

「ユウキ着いたぞ。扉の鍵を開けたいから一旦降りてくれないか？」

キリトは背中で寝ているユウキに降りてくれと声を掛けたが、ユウ
キは相変わらず気持ちよさそうに夢の世界の旅を続けていた。まる
で起きる気配が感じられないので、キリトはもう一度、今度は軽く揺
さぶりながら声を掛けてみる。

「ユウキ起きてくれ。俺の家に着いたぞ、鍵を開けたいから起きて降
りてくれ」

「……ん、着いた……の??」

「ああ着いたぞ。でもこのままじゃ扉を開けれないから、申し訳ない
けど一回降りてくれないか？」

「ん、わかった……」

キリトはユウキを降ろすために、身をかがめた。夢の世界から戻ったユウキは、半分まだ眠っていないながらも、ゆっくりとキリトの体から、木材で出来たキリトの家の玄関前へと足を降ろしていった。

キリトの家は山奥の景観を損ねないような木材で出来たログハウスのような外観をしていた。決してそこまで大きくないが、人が三人ほど暮らすなら十分ほどの広さの間取りだった。屋根からは蔦が伸び、窓の傍には少しだけ苔が生えている。

別に手入れをしていないからこうなったというわけではなく、元々こういうデザインの家だ。

「ごめんな、折角気持ちよく寝てたのに」

「……ん、だいじょぶ……」

起こしてしまつて申し訳ないと思いつながら、キリトはメニューを開き、自分のストレージから家のカギを選択してオブジェクト化した。

それを右手に握ると、家のドアのカギ穴に差し込み、反時計回りにひねる。ガチャツと音と共に鍵が開錠されると、ドアノブを捻り家中へと歩を進めた。ユウキも目をゴシゴシと擦りながらキリトの後に続き、家の中へと入っていった。

「あまり広くないけどな、とりあえず適当にかけてくれよ。今飲み物でも出す」

「ふあ〜い……」

キリトはリビングの灯りを点けると、飲み物を取りにそのまま奥にあるキッチンへと姿を消していった。ユウキは半分寝ている状態で、首を上下左右に動かしてリビングの中を見渡していた。

右手側には寝室に繋がる扉、左手側には窓とタンス型のチェスト、奥にはキッチンへと繋がっている通路がある。天井からはそれなりに豪華な形をした灯りがぶらさがっており、モダンでいい雰囲気の内装となっていた。

ユウキがふと部屋の中央に目をやると、赤色の布地を使用した木製のソファが視界に入ってきた。ソファを視認するや否やユウキはそこに吸い込まれるように飛び込んでいき、顔を埋めていた。

やがて飲み物を両手に持ったキリトがリビングに戻ってくると、その異様な光景に苦笑いを浮かべていた。

「な、何やってるんだ……？」

「……ふかふか……」

「そ、そうか……。でもソファの使い方間違ってるからな。ほら、ちゃんと腰かけるんだ」

「ふぁーい……」

キリトに怒られたユウキはむくりと体を起こして、向きを180度変えると、今度はちゃんとソファに腰を落ち着けた。先ほどよりは目が覚めているように見えるがまだ頭はボケーツとしていている模様だ。キリトはそんな眠そうにしているユウキの横に腰かけて、先ほど持ってきた飲み物を差し出した。

「ほら、温かいうちに飲みな」

「ん、ありがとう。いただきまます……」

ユウキはキリトから差し出された飲み物を両手で受け取った。手渡されたのは寒いこの時期には嬉しい熱々のココアだった。

白いカップに入っているブラウンの液体からは、白いほかほかとした湯気が立ち上っていた。ほのかにミルクと甘い香りが感じられた。ユウキは少しだけフーフーフーと息を吹きかけるとゆっくりとカップに口をつけた。

「……わあ、美味しい……あつたかい……」

「……そうか、よかったな」

「うん、ありがとう……キリト」

温かいココアを飲みながら、ユウキは心まで温かくなるのを感じていた。何だろいな、この気持ち。スリーピング・ナイツの皆とも、アスナとも違う。

初めて感じる温かさだ。キリトの優しさ……なのかな。安心できる、心地いい温かさだ。出来るなら、もうちよつとだけ……ここにいたいな……。

キリトは右手でココアを飲みながら、左手でメニューを操作し、ストレージの整理を始めていた。

キリトのアイテムストレージはここ一ヶ月の間何もしていなかった所為で、使わない武器や防具、自分には不必要な素材アイテム、使い道に困るレアアイテム等で、酷くごっちゃごちゃになっていた。左手で頭をかきながら、いらぬアイテム、いるアイテムとを分けて、一個ずつ整理整頓を続けていく。

キリトの真横ではユウキが再び眠たそうにこっくりこっくりと、頭を前後に揺らしていた。

ココアはカフェインが入っているので眠気は覚めそうなものだが、仮想世界のココアにそんなものは入っていないので眠気が覚めるということはない。むしろココアを飲んだことでアバターの体感温度が上がり、先ほどよりも眠気が増していた。

「ユウキ、ログアウトしなくていいのか？」

キリトは左手でストレージの整理をしながら、ユウキに聞いてみた。消灯時間まではまだ2時間ほど時間があるが、安全確保をして、ログアウトするためにここまでできた事を考えると、さっさとログアウトした方がいいと思う。

別に居座られるのに断る理由もないが、先に家主がログアウトするわけにもいかないため、キリトはユウキにログアウトを促した。

「んと、もうちよつと……ここにてもいい？」

「……別に構わないけど、俺がログアウトするまでにはちゃんと落ちるんだぞ？ 病院の消灯時間も守ること。いいな？」

「やったあ……♪」

ユウキはそう返事を返すと、ソファの背もたれに背中を預けて、リラックスモードになっていった。

よほど居心地がいいのか腰かけているソファが気持ちいいのか、三度ユウキは自分の胸に両手を重ねて、気持ちよさそうに寝息をかいていた。キリトはそんなユウキを真横で見ると、寝室から毛布を持ち出し、ユウキにそつと被せてあげた。

別にゲームの中なので風邪をひいたりすることは無いのだが、ここは何も言わずにかけてあげるといのが、気遣いというものだ。体が冷えないように肩から膝元までガードするように、優しく毛布を整え

ていく。

ユウキは相変わらず気持ちよさそうにスヤスヤと寝入っている。そんな寝顔を間近で見たキリトは、心がほっこりとしていた。

「可愛い……寝顔だな……」

キリトが思ったことを正直に呟くと、ユウキが首をこちら側に傾けてきた。その影響でキリトとユウキの顔の位置が非常に近くなっていた。

急に目の前にユウキの顔が迫ってくると思わなかったキリトは驚き、顔を赤くしてたじろいてしまった。人一人分ほどの距離をユウキから離すと、慌てた様子で心臓をバクバクに鳴らしていた。

「び、びっくりした……」

駄目だ、今日の俺はなんかおかしいと考えながら、キリトは気持ちを切り替えるようにストレージの整理を再開した。完全にユウキの事を異性として意識してしまっている。

以前まではただの友人としてしか見ていなかったのに。しかしキリトはこれ以上踏み込むことはせずに、一歩手前で踏みとどまっていた。

ユウキと親友以上の関係になるということが、どういう未来に辿り着くかということを理解していたからだ。そうなってしまうと、キリトにとっても、ユウキ自身にとってもつらい未来になる。

その悲しい現実を意識していることが、キリトを冷静でいさせていた。

（何を考え込んでいるんだ俺は。ユウキは大切な ” 友達 ” なんだ……）

自分の心の奥底に芽生えた感情を押し殺すように、理性で上書きして、もくもくと指を動かしてストレージの整理を続けるキリトであった。

それから20分ほど無心無言で指を動かし続け、自宅のチェストに不要なアイテムを放り込むと、ほとんどアイテムの整理も終わり、ようやく一息つけるといった具合になっていた。

「ふう、大体こんなところ……かな」

大きい息を吐いたキリトはやれやれといった様子で、ふとユウキが眠っているソファの方向へと視線をやった。

相変わらず可愛い寝顔を見せながら寝ていると思われたが、ユウキの少し様子が変なことに気がついた。寝てはいるのだが、目から涙が零れ落ちていた。

その涙に気付いたキリトは早歩きでユウキの傍に近寄り、かがみこんでユウキの顔を下から覗き込むようにして様子を見守った。

「ユ、ユウキ……？」

キリトが話しかけても返事はない、やはり寝ているようだ。しかしその悲しそうな表情は、とても寝ているとは思えないほどの切なさを感じさせていた。

もしかして、悲しい夢でも見てしまっているのだろうか。そう思ったキリトは自然とユウキの手を握りしめていた。ユウキを元気づけるかのように。

「ユウキ……」

「……っじやったの……」

「……え……？」

キリトが手を握り、ユウキの名を呼ぶと、突然ユウキが寝言を言い始めた。声が小さかったのでよく聞き取れなかったが、何を言っているのか知るために、キリトは少しユウキの顔に耳を近づけた。

盗み聞きするようであつと嫌だったが、ユウキが何を呟いているのか気になって仕方がなかった。

「どうして……死んじやったの……」

「……！」

「パパ……ママ、姉ちゃん……どうして死んじやったの……」

「ユウキ……」

ユウキが漏らした寝言は、自分を置いて先に他界してしまった家族の名だった。血のつながった家族を失い、天涯孤独の身となつてしまっていたユウキのその姿に、キリトは同じく両親を失っている自身自身の姿を重ねていた。

そう、今いるキリトの両親と妹の直葉は血の繋がった家族ではな

い。キリトの實の母親の妹の家族なのだ。キリトはそこに引き取られ養子として育てられている。キリトはユウキが自分の運命と似た道を歩いてきたのだなと感じた。

しかし、キリトにはどうすることも出来ない。死んでしまった者は生き返らないし、その悲しみを消すことも出来ない。キリトは涙を流して悲しそうにしているユウキの顔を見て、目の前の少女をどうしたら支えてあげられるかということを考えていた。

今の俺に出来ること、ユウキに元気づけてもらった恩返しも含めて、何かユウキにしてあげられないか…、そう考えていた。

「……ないで……」

「……………」

「ボクを……独りに……しないで……」

「……ユウキ」

ユウキの言葉を聞いたキリトは、居ても立っても居られず、両手で力強く、ユウキの左手を握りしめた。強く握ったことによってユウキが目を覚まし、うつすらとその瞼を開けていった。

意識を半分夢の世界に置き去りにしながら、目の前に映っている映像を確認する。すぐ目の前にキリトがいた。キリトは起きたばかりのユウキの手を握りながら、励ましの言葉を掛けた。

「ユウキ、お前は独りじゃない！俺が……俺が傍にいる」

「……独りじゃない……っ？」

「ああ、安心しろ。俺はお前を置いて行ったりしない」

「……ホント？」

「約束する、お前に寂しい思いはさせない」

「……嬉しいなあ……ありがと……キリト……」

どうせこれは夢だ、夢の中でぐらい誰かに甘えてもいいだろう。ただここは夢の中だと思っっているユウキは、すがるようにキリトに抱き着いた。キリトの胸板に自分の頭を押し付け、顔をこすりあててキリトに甘えていた。

手はキリトの背中に回し、精一杯キリトの温かさを感じていた。しばらくすると自然とユウキの涙は止まり、心から安心しきったのかユ

ウキは再び眠ってしまった。しかし、今度の寝顔は悲しそうではなく、嬉しそうな笑顔を浮かべながら眠っていた。

「……………」

キリトはとあることを心に決めていた。今の俺に出来ること、それはウウキの傍でウウキを元気づけてあげることだ。多分ウウキは俺以上に心に闇を抱えている。なら、俺に出来る範囲でその闇を照らしてやる。

ウウキの命は長くないかもしれないが、その間だけでも……ウウキが安心して生きていかれるように、全力で俺が傍で支えていく。

俺がウウキの光になる。キリトは強く、心にそう誓った。

(俺が……守ってやるからな、ウウキ……)

キリトはウウキの頭を撫でまわしながら、寝ているウウキを見守り続けた。

ウウキが寝入ってからしばらく経過し、2時間ほど経過した。時刻はウウキの病院の消灯時間である22時を回ろうとしていた。

これ以上ログインさせたままにすると、ウウキが先生に怒られてしまう。それ以前に消灯時間を自分の所為で破らせるわけにはいかないので、可哀そうだとは思いつつも、キリトはウウキの体を揺さぶって起こそうと試みた。

「おいウウキ、起きるんだ。もうすぐ病院の消灯時間だぞ。ログアウトして部屋に戻らないと……………」

「……………ん、ん……………」

眠たい体をむずむずとさせながら、ウウキはゆっくりと体を起こした。寝ぼけ眼をこしこしと右手でこすりながら今現在の状況を確認する。

口元からは涎らしきものが垂れていた。こんな細かいところまで再現しているALOは本当にすごいと思う。無駄にリアルにしすぎであろうに。

「もう、朝……？」

「朝じゃない、もうすぐ夜の22時だ」

「んじゃあ……まだ寝るう」

「ダメだ、ログアウトして病院に戻ってから寝なさい」

「……やだ、ここがいい……」

「ダメだつての、先生に怒られるぞ？」

病院ではなく、キリトの家で寝たいと我儘を言い続けるユウキに、断固として首を縦に振らないキリトであった。

ユウキの支えになると心に決めたキリトであったが、それとこれとは話が違ってくる。一般常識は守らせなくてはいけない。そんなダメと言いつ張るキリトにユウキは頬を膨らませてぶーたれていた。

「キリトの意地悪……」

「意地悪で結構だ。でも約束したろ？ 消灯時間までにログアウトするって」

「そうだけど……」

キリトと離れ離れになってしまうことを感じていたユウキは寂しそうな顔を浮かべていた。そんなユウキの表情を見たキリトは頭にポンと手のひらを当てて、撫でまわした。

ユウキは抵抗することなく、キリトの手を受け入れていた。気持ちよさそうに、心地よさそうにキリトに撫でられていた。

「また明日も来てやるから、そうだな……昼飯食べた後に、また二人でどこかに遊びに行くか？」

「え……ホント？」

「ああ、約束する。どこにでも付き合うぞ」

「やったー！ じゃあどこいくか考えておくね！」

「ああ……まかせるよ」

明日また遊ぶ約束を取り付けたユウキは先ほどまで見せていた寂し気な表情とは打って変わって、ぱあつと明るく、嬉しそうな表情へと変わっていった。その嬉しそうな様子をみて、キリトにも自然と笑顔が零れていた。

「えへへ、あのね、ボク……夢を見たんだ」

「……夢？」

ユウキが両手を自分の背中に回しながら語り始めた。少しだけ嬉しそうで、そして少しだけ切なそうな表情をしながら。ゆっくり、そしてハキハキとした声で夢の中での出来事をキリトに聞かせていった。

「パパとママ、そして姉ちゃんが死んじゃって……ボクの目の前から消えていってしまったの。ボクはどうして死んじゃったの、ボクを独りにしないで、って言ったんだけど……みんなボクから離れていっちゃった」

「………」

「でもそしたらね、寂しくて死んじゃいそうなボクの目の前にキリトが現れたんだ。そしてボクに言ってくれたの。 ” お前は独りじゃない、俺が傍にいる。お前を置いていたりしない ” ってさ……」

「……そうか」

「えへへ、夢の中だけど嬉しかったな。……キリトは現実あっちでもボクの傍にいてくれる？」

「……さあな。ほら、もう22時回ったぞ、先生に怒られる前にログアウトしろ」

「あ、そ……そうだった……」

時間を確認することで話をそらしたキリトであったが、先生に怒られるのはまずいと思ったユウキが慌てて現在の時間を確認する。時刻は病院の消灯時間をとうに過ぎていた。

するとユウキは慌てて左手のメニューを操作して、ログアウトの準備にかかる。

「言わんこっちゃない……」

「あわわ、すっかり忘れてたよ。ありがとねキリト！」

「気にするな」

ユウキが慌ててメニュー欄の項目にある「Log Out」の文字をタップすると、視界の真ん中に” ログアウトしますか?”と表示されてきた。ここでYESをタップすることでゲームからのログアウトが完了となる。

しかしユウキはあと数センチ指を動かすだけでログアウト完了となる所で、手の動きを止めた。キリトはその様子を見て少しだけ首を傾げた。どうして直前でやめたんだ?と思いつながら。

「えと、今日は……ありがとね、キリト」

「……お礼を言うのは俺の方だよ、サンキュな……ユウキ」

互いにお礼を言い合うと、二人は笑顔になった。ユウキは眩しい笑顔を、キリトは爽やかな笑顔を見せていた。部屋の照明の赤色の灯りと、暖炉からの炎の赤い色が、よりその笑顔に温かみを増させていた。「また明日ね! バイバイ、キリト……」

「ああ、また……明日な」

キリトに笑顔を送りながら、ユウキはYESのアイコンをタップし、ALOからログアウトしていった。青白く光り輝くユウキのアバターがログアウトを完了したのを見送ると、キリトも大きく伸びをして、自分もログアウトしようとメニューを操作した。

「……寝る前に課題、片付けないとだな」

キリトはこれからまた別に片付けなきゃいけないことがあることを思い出すと、頭をポリポリかきながらログアウトをした。

たまっていた課題を片付け、ユウキとの約束に差支えがないようにすぐに睡眠をとり、ご飯も食べて約束の時間に遅れないようにしなくてはと考えていた。

具体的な時間は伝えてなかったが、まあこのホームで待ち合わせればすれ違ふことはないだろう。そう考えていると、キリトの意識は仮想空間から、現実の世界へと戻されていった。キリトから、桐ヶ谷和人へと、意識が引き継がれていった……。

翌日 西暦2026年1月31日土曜日 午前11:00 神奈川

県横浜市金沢区 横浜港北総合病院

“ここは横浜港北総合病院の一室、世界で唯一” 終末医療機器メ
“デイキュボイド” の臨床試験をしている病院だ。そのメデイキュ

ボイドが設置されている無菌室に現実のユウキ、紺野木綿季はそこにいる。ケーブル類が伸び、他の様々な医療機器に接続されている。大掛かり過ぎる設備だ。

メデイキュボイドの機能の中に、ナーヴギアやアミスファイアと同じように、フルダイブ機能がある。そのメデイキュボイドの仮想空間で、木綿季は24時間フルダイブを3年間も続けている。それがユウキの圧倒的な強さの秘密だったのだ。

(完全に、君はこの世界の住人なんだな……)

過去にキリトと決闘^{デュエル}を行った時、キリトにユウキの秘密はほぼバレてしまった。そして、アスナと一定の線を越えた仲になってしまった。アスナをこれ以上悲しませない為に、ユウキは自らアスナを拒絶した。

しかし、それでもアスナは会いに来てくれた。明日にも死んでしまいかもしれないこんな自分に。アスナはユウキの心の支えになっていた。

スリーピング・ナイトの皆とは違う距離感でユウキと接してくれていた。しかし、アスナにはもう会えないかもしれない。ユウキの余命云々ではなく、違う理由で。

(明日奈に……会いたいなあ)

木綿季は仮想空間の自分の部屋で物思いにふけていた。去年までは実の姉の藍子が、ここ最近までは明日奈がいつも木綿季の側にいて、木綿季を支えていた。

しかし二人とも木綿季の側からいなくなってしまった。ボクはまた独りになっちゃったのかなと、そんな思いが巡っていた。ボクに寄ってきてくれる人はみんないなくなってしまう。

そして、ボクもそこまでもう長くはない……。いろいろな事を考えふけているそんな中、ふと一人の男の子の姿が木綿季の頭に浮かんだ。

(キリト……)

昨夜、ユウキはキリトと剣を交えた。キリトの気持ちを確かめるため、どんな想いで剣を振り続けてきたのか知るため、二刀流の本気の

キリトと、最初で最後の本気の大一番。

結果はユウキの完敗であった。しかし、勝負の結果よりもユウキは大切なものを手にした気がした。勝者であるキリトは勝ったのにも拘らずその場に泣き崩れた。

ユウキはキリトの強さと、優しさと、弱さをいつぺんに知ったのである。その事を意識すると、なんだか少し心の中がモヤモヤした。少しだけ息苦しい気がした。でもそれはこの病気の所為だと思った。(何だろ、この……よく分かんない引つかかったような気持ち……)

木綿季がそんな考え事に頭を悩ませていると、どこからともなく木綿季に話しかけてくる一人の男性の声が聞こえてきた。

『おはようございます、木綿季君』

木綿季に話しかけてきたこの白衣に眼鏡をかけた男性の名は倉橋。木綿季の主治医であり、木綿季にメデイキュボイドの使用を提案した人物でもある。

メデイキュボイドのフルダイブ機能と室内カメラを経由して仮想空間でのユウキ、現実世界での面会室と、相互で会話が出来るという優れものであった。

「フアッ!？」

考え事をしていた木綿季は急に話しかけられ驚いたのか、スピーカー越しに素っ頓狂な声を上げた。倉橋もそんな木綿季の声を聞いたのは初めてだったので驚いた様子だった。倉橋に声を掛けられたことに気付いた木綿季は慌てて挨拶を返した。

「あ……くっ倉橋先生、おはようございますッ」

倉橋との毎日の挨拶は日課になっているが、こんなに慌てた挨拶は木綿季も初めてだ。倉橋は目を丸くして驚きつつも、すぐにいつもの笑顔に戻った。まるで娘を持つ父親のようだ。微笑ましい様子で優しく木綿季に声を掛け続ける。

『今日も元気ですね、何かいい事でもありましたか?』

倉橋が木綿季に質問を投げ掛けた。木綿季の家族は全てHIVで他界している。紺野家のことを古くから面倒をみている倉橋は、木綿季にとってもはやもう一人の父親のような存在だと言っても良いだ

ろう。それぐらいお互いに付き合いが長いのだ。

「い、いえ何も！ 今日ボクは元気です!!」

言えない、男の子のコトを考えていたなどと。木綿季はこれでも15歳、年頃の女の子なのだ。普通なら受験をし恋愛や青春に溺れる年齢だ。入院生活が長いからといって、色恋沙汰に興味がないわけじゃない。自然と意識はしてしまうものだ。

しかし木綿季は無意識にその類のものは、自分はしては許されないと悟ってしまっている。

お互いに親密な関係になってもどうせ自分の方が先に死ぬ。それで相手を悲しませるぐらいなら最初からしない。自然とそうしてきってしまった。そしてそれはこれからも変わらないであろう。ずっとそう考えて生きてきた。

「そうですか、心なしか声のトーンが大きかったのは……気のせいでしたか」

倉橋はおや？ という表情で首をかしげていた。少しだけわざとらしい気もしたが気のせいだろう。実は知っているのではないかと思ってしまうような反応だった。そして倉橋は毎日欠かさず聞いている質問も、木綿季に向かって投げ掛けた。

『木綿季君、体の調子はどうですか？』

倉橋が木綿季の体調を伺う。木綿季はメデイキュボイドに常時フルダイブしている。ナーヴギアやアミューズファイアよりも強力な電磁パルスを使用しているメデイキュボイドは、人間の感じる五感を全て信号で遮断している。

したがって痛みはまずないし、体の調子が悪いかどうかは機械でしかわからないのだが倉橋は毎回伺う。それが医者というものだ。

「全然大丈夫ですよ！ って言っても現実の体は動かないですけどね」
木綿季がちよつとだけ皮肉めいた言葉を返すと、倉橋はそうですかと、軽い言葉を返した。これも2人の間にはよくある会話だった。そして倉橋は表情を一変させて、何やら感慨深そうにして思っていることを語り始めた。

『一人の医師としてずっと木綿季君を見てきました。辛い事を押し付

けてしまったのではないかと、たまに私は思うんです」

「先生……」

『もつと医療技術があれば、知識があれば木綿季君だけじゃない。藍子君や君の両親を助けられたのかもしれない……』

「……………」

木綿季は倉橋の話聞きながら考え込んでいた。過去に木綿季は自分の運命を何度も呪った。何でボクたちだけがこんな目にあわなきゃならないのか。

神様は何故このような残酷な現実をお与えになったのか。何でパパ、ママ、姉ちゃんは死んでしまったのか。

しかしいくら考えても答えは出なかった。そしていつからか、木綿季は死というものを受け入れた。決して生き続けるのを諦めた訳ではない。

長く生きられない運命なら、今この瞬間を精一杯生きよう。そして、精一杯生きたら、大人しく死を受け入れようと。15歳の女の子には、あまりにも過酷すぎる決断だった。

「先生、大丈夫です。ボクは全然平気です。こんなボクなんかのためにみんな気をかけてくれます。倉橋先生だって……毎日面倒を見てくれますし、普通は出来ない体験もさせてくれました」

『木綿季君……』

「ボクは今の環境にすごく満足してるんです。いろんな事を経験出来たし、友達もたくさん出来た……。ボクは本当に、すっごく満足してるんですよ」

木綿季はこの先いつ死んでも悔いはないと言わんばかりに、淡々と語り出した。体は動かないが、自分はすごい恵まれているのだと。心の片隅に、ほんの少しだけのモヤモヤを残したまま。

『……………ですか、ありがとうございます……』

倉橋はうつすらと涙を浮かべていた。木綿季にバレないように力メラから少しだけ顔をそらして言葉を並べた。

そして、木綿季を助けてあげられない自分たちの、そして今の医療の限界を呪った。しかし木綿季にそんなネガティブな気配を感じさ

せないために、無理やり表情を変えて、明るく話しかけた。

『今日もALOに?』

「ハイ! 今日友達と約束してるんですよ!」

木綿季は明るく元気な返事をした。スピーカー越しでも眩しい笑顔をしているのが分かる。余程今日の約束が楽しみなんだろう。楽しそうにしている木綿季の様子を見て、倉橋の顔も自然とほころんでいた。

『分かりました。楽しんできてください。ですが夜にもう一度検診しますので、19時頃までにはログアウトするようお願いしますね?』
「はあ~い! 了解!」

木綿季は元気一杯な返事を返して、木綿季はALOランチャーを起動した。木綿季の生活はこのメデイキュボイドの中にある仮想空間で送っている。

情報収集、外との対話、アプリケーションの起動などなど、ALOもそのうちのひとつだった。メデイキュボイドのSSDの中に、インストールされているのだ。

「リンク・スタート!」

既に仮想空間にいる木綿季であったが、いつもダイブする時のセリフを言い、意識をALOの世界に再び飛ばしていった。今日はキリトと遊ぶ約束がある、何をして遊ぶのかな、昨日は一緒に食事にいったから……今日は思いっきり体を動かしたいな。

第6話く相棒く

西暦2026年1月31日土曜日 午前11:30 新生アインク
ラッド第22層湖畔エリア キリトのホーム

ユウキは以前ログアウトした、キリトのホームに足をついていた。一瞬ここはどこだと思っただが、昨夜のことを思い出すと、ここがどこだか理解した。

モダンで古ぼけた内装がいい雰囲気醸し出しているキリトのホームは、非常に落ち着ける快適な空間だった。

ユウキは昨晚寝た赤いソファに腰を落ち着け、現在の時刻を確認した。左手でメニューを開き、ウインドウに表示されている時間に視線を移す。11:31と表示されていた。

ユウキは少し早く来すぎてしまったかなと頭をポリポリかいていた。キリトと具体的な時間の約束こそ交わしていないが、お昼ご飯を食べてからのことだったので、まだ時間はかかるだろう。

「うくん、ちよつと早く来すぎちゃったか……」

キリトがログインするまでまだ時間がかかるだろうと判断したユウキは、どうやってそれまでの時間を潰そうか考えていた。とは言っても、キリトの家の中の物を勝手にいじくるわけにもいかない。

いくら友達でもやっていいことと悪いことがある。そこでユウキはキリトの家の中を見学してまわることにした。

全体的にビンテージっぽさを感じられる内装をユウキはまじまじと見渡していた。今時の若者が住むにはちよつとおやじ臭い感じがしたが、不思議とユウキはこの空間が気に入っていた。

懐かしい感じが、居心地よさを感じられた。部屋の中の装飾物の一つ一つを見て楽しんでいたユウキは、ふと、リビングの奥にある暖炉へと視線を移した。

赤い古ぼけたレンガブロックが積み重ねられた暖炉だ。レンガの一つ一つにヒビや欠けが目立っていた。これも劣化しているという

わけではなく、ビンテージっぽさを演出するためのデザインだ。その暖炉の上に置かれている写真立てにユウキは目をやった。

「キリトとアスナ……、それにこの子は……ユイちゃん、だっけ」

ユウキは暖炉に立てかけられている写真立てを両手に持つと、それに写っているSAO時代に撮影したと思われる、キリト、アスナ、ユイの家族写真を見つめていた。旧アインクラッドで残した家族の思い出写真だった。

写真の中の三人は左からキリト、ユイ、アスナと並び、楽しそうな笑顔を振りまいていた。ユウキはその写真をまじまじと見つめると、切ない気持ちになってしまっていた。

「……家族、家族か……」

胸に手を当てながら、ユウキは過去に現実の世界で家族と過ごしていた時のことを思い出していた。AIDSを発症する前、神奈川県横浜市保土ヶ谷区の、月見台にある一軒家で楽しく毎日を過ごしていた時のことを……。

「……何でまた思い出しちやっただろうな……、もう前しか見ないって決めてたのに……」

ユウキには心に決めていたことがあった。残り少ない自分の人生、過去を振り返って後悔するぐらいなら、これからの毎日を精一杯踏みしめて生きる。

悲しいことも楽しいことも、そう心に固く決めていたはずだった。しかし、ここ最近になりまた不思議と過去のことを振り返るようになってしまっていた。

どうしてそんなことを想うようになってしまったんだろう。死を受け入れるはずだったのに、過去は過去で大切な思い出として、心の奥底にしまっておいたはずだったのに。

どうしてまたボクの心を抉るようなことをするのか？ お願いだから……ボクに ” 今 ” を生きさせてよ……。

「……ッ……なんで……どうしてまた……ッ！」

ユウキの瞳には涙が浮かんでいた。やがてそれは眼からあふれ出し、頬を伝って床に吸い込まれるように流れ落ちていった。

寂しくて死んでしまいたいそう、誰か助けて。ボクの心を温かさで満たして、空っぽになってしまったボクの心を……。

そう思っていると、ユウキの背後に人の気配が感じられた。誰?と思いながらゆっくり恐る恐る振り向いてみると、そこにはユウキが今、一番会いたかったであろう、真っ黒な服装で全身を包んだ、スプリガンの少年の姿があった。

「こんにちはユウキ、どうした? ……大丈夫か?」

「……き、きりと……」

手に持っていた写真立てを暖炉の上に戻すと、ユウキはキリトに向かって駆け出し、キリトの胸に顔を埋めていた。

キリトはログインしていきなりユウキが抱き寄ってきたので何事かと思ったが、先ほどまでユウキが手に持っていたものを確認すると、ある程度察したようで、ユウキの背中と頭に手を当てて、やさしくユウキを受け入れた。

ユウキは声を殺して泣いていた。心の奥底から溢れ出てくるどうしようもない高ぶった感情を抑えられず、ひたすらに泣きじやくつた。

キリトの服がしわくちやになってしまいうぐらい、手に力を込めて握りしめた。キリトは無言でユウキの背中を左手でぽんぽんと優しく叩き、右手でユウキの頭を撫でていた。

しばらく時間が経つと、ユウキは落ち着きを取り戻していた。キリトが「大丈夫か?」と優しく声を掛けるとユウキは無言で頷き、キリトから半歩距離を置いた。

両目をゴシゴシとこすると、真顔で「大丈夫」とだけ答えた。キリトは本当に大丈夫か?と思いつつも小さくなって消えてしまいうなユウキを見つめていた。

「ごめんねキリト、いきなり……こんな風になっちゃって……」

「いや……俺は気にしてないよ。それより本当に大丈夫か……?」

「……うん、もう平気だよ……」

「……今日はやめとくか? ダメなら出直すけど」

「……やだ」

キリトが次の機会にしようかと切り出すと、ユウキはいやだと拒否した。折角キリトと二人きりで遊べる機会を逃したくなかった。少し落ち着けば大丈夫、体を動かせば悲しいことなんて忘れてしまおう、そう考えていた。

「キリトと一緒にいる。今日一緒に遊ぶって決めただもん」

「……そりゃ約束はしたけどさ、本当に大丈夫か？」

「うん、大丈夫。ねね、お外……出よ？」

ユウキはキリトの手を引っ張り、玄関のドアに向かって歩を進めていった。まるでこの空間から逃げ出すように足を動かしていた。

キリトは釈然としないまま、ユウキに手を引っ張られて家の外に出た。ドアをくぐったキリトはストレージからカギを取り出して、ホームのドアを施錠し、再びストレージに戻すとユウキの方を心配そうに見つめていた。

お昼前に差し掛かるキリトのホームがある湖畔は、やや濃いめの霧がかかっていた。家を出たユウキはすぐ傍にある湖の風景を見つめていた。

木製のデッキに建てられている柵の上に自分の顔を乗せ、じーっと湖を見つめていた。感慨深そうに物思いにふけたかのような表情を浮かべていた。しばらく無言の時間が続いたが、ユウキが先にその沈黙を破った。

「ねえキリト……、ボクがいると迷惑かな……」

「え？ 何でだよ……」

「だってボク、キリトに迷惑ばかりかけてる。アスナの頼みでボクがキリトを元気づけに来てるのに、実際は逆で……ボクがキリトに助けられてる……」

「……俺は昨日のお礼をただけだよ」

「でも……」

「いいから気にすんな、俺がやりたくてやってんだから……」

キリトの優しい声掛けに、再びユウキは黙りこくってしまった。その優しい言葉一つ一つがユウキの心に突き刺さっていた。

本来ならばボクがキリトを支えないといけないのに、逆に支えられ

ているボクに、こんなにキリトに優しくしてもらう資格なんてあるんだろうかと思っていた。

その気持ちの表れは、やはり友達以上の目でキリトを見てしまっていることに違いなかつたからだ。

内心無意識に否定をしていたが、自覚がないだけで、ユウキはキリトに自分が想っている以上の感情を持つてしまっていることに気付いていた。だが、それが確信にまで至らないために、心のもやもやが取れないでいたのだ。

キリトを好きになるということ、それがどんな悲しい結末を迎えてしまうか、嫌でも理解しているから。無意識に自分でその一線を引いてしまっていたのだ。

ここから先は間違つても越えないようにしなくてはと。その葛藤が、ユウキ自身を自己嫌悪に浸らせてしまっていた。心の奥底では、キリトに甘えたいと思っていながらも……。

「なあユウキ、無理してないか？」

「え……？」

キリトからの凶星を突いた発言に、ユウキは言葉を失っていた。目を丸くして驚いていたユウキだったが、キリトにはバレていた。どうしてバレたのか分からないユウキは参ったなあといった表情を浮かべ、苦笑いを浮かべていた。

「あはは……参ったね、キリトに隠し事は出来ないや……」

「……話して……くれるか？」

ユウキは黙つてうなずいた、胸に手を当て、深呼吸をして、意を決したように淡々と語り出した。

自分が今までどう想って生きてきたか、どのような胸の想いを抱いていたか、今の自分の気持ちを全部話した。キリトへのよくわからないもやもやしたものを除いて……。

「……そうか」

「……なんかね、どうやって生きていけばいいか、もう……わからなくなっちゃって……」

ユウキからの答えに、キリトは家の柵に背中を預けながら腕を組ん

で考え込んでいた。

ユウキが何故今になって過去を振り返ってしまったかはキリトにもわからない。恐らくアスナにも、スリーピング・ナイツの皆にもわからないことだろう。

だが、キリトには一っだけわかつていることがあった。表情を変え、そのことをユウキに伝えるべく、真剣なまなざしでキリトはユウキへ視線を送って語り出した。

「なあユウキ……俺な、ユウキはもっと自分の気持ちに正直になっていいんだと思うんだ」

「正直に……？」

「ユウキは……自分で頑張り過ぎだ。まるでSAO時代の俺自身を見ているようで、見ていて胸が苦しくなる」

「……………」

キリトは今のユウキの頑張る姿に、ソロプレイのスタイルを貫いていた昔の自分の姿を重ねて見ていた。

何もかも一人で抱えて解決しようとして、自分の事は後回しにしてまで、仲間や友人は最優先で力を貸す。そんな頑張りがお互い似てるなど感じていた。

「偉そうなことを言うつもりはないけど、俺はあの時もっと周りを頼ればよかったと後悔している。もっと仲間と、友人を頼っていけば、あんなに苦しむ必要なんかなかったんだと、今はそう思えるんだ」
「……………」

ユウキは視線を落として、キリトの言葉に耳を傾けていた。

「だからユウキも、もっと周りを頼れ。いくらでも迷惑かけろ、そりや出来ないことだってあるかもしれないけどさ。それでも、俺たちは……仲間だろう？」

「なか……ま」

キリトの説得が届いたのか、ようやくユウキが口を開いた。もう本当に苦しむ必要はないの？ 一人で抱えることはないの？ 皆にもっと我儘言っつていいの？

そんな気持ちが一気に心からあふれ出そうとしていた。もしそれ

が許されるのなら、もっと甘えていいのなら、ボクは……ボクは……！

「キリト……ボク、我儘言ってるの？」

「ああ……」

「皆を頼っていいのかな……」

「当たり前だろ……」

「キリトにも甘えていい？」

「そ、それは……」

ここは当然YESと答えるべき場面だったが、最後の問いに対してキリトは答えを濁らせた。

苦笑いを浮かべながら汗を垂らし、人差し指で頬をぽりぽりとかき、視線を逸らしていた。その様子を見たユウキは表情を一変させ、不機嫌気味になっていた。

「もう……キリトのバカ。そこは甘えていいって言ってくれる場面じゃないか……」

「えつと……あははは、す……すまん」

ここ一番で空気が読めないキリトに機嫌を悪くしたユウキだったが、不思議と先ほどまで抱え込んでいた悲しい気持ちは薄れていった。

キリトが諭してくれたことと、自分の周りへの気持ちの改め方を知ったことにより、少しだけ肩の荷が降りていた様子だ。

キリトも表情が軽くなったユウキの顔を見ると、安堵の表情を浮かべ、暗い話題をも切り替えるべく、これからどうしようという話し合いに移ろうとしていた。

そもそも今日はどこかへ遊びに行くという約束で集まったのだ。折角の機会、楽しまなくては損だ。

「ありがとね、キリト」

ユウキはキリトの方に体ごと向きを変えると、両手を後ろに組んで前かがみになり、上目遣いで感謝の言葉をキリトに送った。

先ほどまで暗い表情を浮かべていたユウキの顔を見ていたキリトは、そのギャップに一瞬心を奪われた。照れている様子をユウキに観

られたくなかったのか、咄嗟にユウキから視線を逸らして、ユウキから見えない角度に顔を隠すようにして、少しだけぎこちない口調でキリトもユウキに返事を返した。

「べ、別に……気にするな」

「?? ……変なキリト」

キリトは顔をふるふると横に精一杯振るうと、照れている顔を見られたくないがために先に家から歩きだしていた。

ユウキはそれに気付くと「おいてかないでよー！」と言い、すぐさまキリトの後を追いかけていった。ユウキはキリトに追いつくと、歩く速さを揃えてどこにいかうかとキリトに話題を持ち掛けた。

「昨日はぐ飯食べたから、今日はどこか冒険に出掛けたいねー!」

「そうだなあ……、スヴァルトアールヴヘイムの未探索エリア……とかどうだ?」

「うーんそうだねー、悪くないと思うんだけどさ、ボクは新生アインクラッドの迷宮区を探索したいなーって……」

新生アインクラッド迷宮区という言葉を目にした瞬間、キリトの足が止まった。そこはたった二人で攻略できるほど生易しいところではなかったからだ。

旧SAOをプレイしたことがあるキリトは、今回の新生アインクラッドの難易度が以前よりも跳ね上がっていることを知っている。当然、次の攻略場所にあたる29層での戦いがどれだけ大変になるかも想像がつく。

構造はおろか、モンスターのラインナップ、強さも修正がかけられているエリアもたくさん見受けられた。

普通はパーティを何組かに分けて徒党を組んでレイドを作って、対策を講じて攻略に挑むというのが普通なのだが、今の新生アインクラッドはその様子見ですらかなりの準備をしなければ厳しい環境となっていた。

ユウキはそんな迷宮区をキリトと二人だけで挑んでみたいと言いつ出したのだ。

「あのですねユウキさん……。仮に二人で挑める難易度だとしても

だ、奥までたどり着くのには何時間かかると思いますが……？」

キリトからの問いに目を丸くしていたユウキは目を瞑り、首を傾げ、頬に人差し指を当てて、じっくり考えていた。ユウキの頭の中には「ポクポクポク」と木魚の叩かれる音が鳴り響き、答えに辿り着くと「チーン」という音と共に、キリトに回答を示した、

「……1時間ぐらい？」

「そんなに早くいけるかっ!!」

無謀とも言えるユウキの回答に、キリトは最速でツツコミを入れた。確かに二人で迷宮区突破というとんでもない挑戦が1時間で終わるはずがなく、キリトは呆れた表情を浮かべていた。

しかし時間がかかるかもしれないが、敵の構成やダンジョンの構造と立ち回り次第では、被害を最小限にとどめたまま、突破も出来るかもしれない。

事実、旧アインクラッドではキリトはアスナとペアを組んで74層の迷宮区を突破した実績があった。その時と同じ感覚でなら、もしかしたらいけなくもない。キリトはそう考えていた。

「……立ち回り次第では、いけるかもしれないな」

キリトが自身の顎に親指と人差し指をあて、探偵のようなポーズを取りながら答えを導き出すと、ユウキは表情を明るくして笑顔になり、気分をウキウキさせてぴよんぴよんと飛び跳ねていた。

飛び跳ねた拍子に装備しているナイトリークロークのスカートの裾の部分と、黒紫をしたロングの髪、そして頭から生えているチャームポイントのアホ毛が揺れていた。

「ホント!? いやあ行こうよ! ボクたちなら絶対突破できるよ!」

「しかしそうなると準備とか大変だぞ、転移結晶とポーシヨンも持てるだけ補充しないといけないし。食料とかも買い込まないと……」

「それなら大丈夫! 昨日のお返しにボクがお金出すよ!」

ユウキはそう言いながら、地面を蹴ってステップをしてキリトの胸元へ飛びついた。キリトは突然のことで驚いたがユウキに押し倒されることなくユウキを受け止めていた。

飛びついたユウキはキリトの胸板に顔を押し当て、徐々に顔の向き

を上に向けて、上目遣いをして、キリトと視線を合わせていた。ユウキが人に頼みごとをするときの十八番であった。

「キリトお願い……、さつき我儘言っついていいって言ったじゃん……」
瞳をウルウルとさせながら上目遣いをするユウキの顔を目の前でまともに見てしまったキリトは、顔を赤面させて引きつかせていた。

この顔はやばい、何でかわからないが俺の本能がやばいと言っている。そう直感したキリトは目を逸らし、渋々ユウキからの頼みを承諾した。

「わ、わかったよ全く……とりあえずボス部屋直前までな、それでいいか？」

「うん！　ありがとキリト！」

キリトにお願いを聞いてもらったユウキはご機嫌になっていた。自分が抱えてしまっていることを外に吐き出していいと言われたことで、他人に遠慮することなく接するようになっていった。

今後はただ単に全力でぶつかっていくだけでなく、自分の事も理解してもらえるようにぶつかることが出来るであろう。それがユウキのいいところなのだから。

「よろしくな……相棒」

キリトはユウキに向かつて”相棒”と声を掛けた。その言葉を聞いた瞬間ユウキは嬉しくなり、より満面の笑顔になった。嬉しさのあまりにキリトに背中から飛びつく体重を預けて、キリトへと返事を返した。

「うん！　よろしくね！　キリト！」

第7話〜二人きりの大冒険〜

西暦2026年1月31日土曜日 午後13:10 新生アインクラッド第29層 迷宮区エリア

ここは新生アインクラッドの第29層のダンジョンの迷宮区。各層には必ず一つダンジョンが存在し、その中に迷宮区と呼ばれているエリアがある。

迷宮区の一番禺にはボスルームがあり、そのボスを倒せばその層はクリアとなり次の層に進めるといふものだ。フィールドと違うのは強力なモンスターがPOPする事と、プレイヤーにやや不利な地形をしていることが特徴だ。

通路が狭く動きづらいエリアでブレスを吐くモンスターが湧くなんてのはしよつちゆうである。

運営側としても簡単にクリアされてはつまらないしコンテンツの終焉が早くなるので出来るだけ難易度を高くしているのだ。やや、やりすぎてる場合もあるが。キリトとユウキのコンビは既に迷宮区の半分ほどを踏破していた。

進むにつれてモンスターも強くなるが二人は大した被害もなく、順調に進んでいった。キリトとユウキが足を踏み入れた迷宮区は、どことなく旧アインクラッドの74層の雰囲気似ていた。

「ユウキ！ スイッチだ！」
「ラジャー！」

キリトとユウキは素早く攻防役を切り替え、絶妙なコンビネーションで敵を圧倒していく。彼らに壁役のタンクなどいらぬぐらいのゴールデンコンビだった。

敵の攻撃はほぼ全てかわし、限界を感じたらすぐスイッチ。敵も中型〜大型のモンスターが一匹、若しくは二匹湧いたり、比較的少ない事も幸いしていた。それ以前にこの二人の立ち回り精度が異常なだけではあるが。

「せいやああああ——ッ！」

ユウキは片手剣ソードスキル ” ヴォーパル・ストライク ” を放った。単発技だが威力が桁外れに高く、長距離を突進するため技の伸びもいい。外すと隙だらけだが、決めると気持ちの良いソードスキルである。

ユウキの愛剣マクアファイテルの剣先は敵のミノタウロス風のモンスター腹部に吸い込まれていった。モンスターのHPはイエローゾーンから一気にゼロになり、青白い光を放ちながら爆散した。

この辺りのモンスターはあらかた片付けたようである。一息つけるといったところだ。何しろ迷宮区の半分ほどをたった2人で1時間で攻略してきたのである。

安全エリアは勿論あったが……ユウキの時間がもつたないよ！の一言でほとんど休憩なしでここまで来ていた。

「ユウキ、流石にそろそろ休まないか？ HPもMPもアイテムに余力はあるが……ちよつと疲れてきたぞ」

大して疲れてるようには見えないが精神的に疲れてるのだろう。キリトはユウキに休憩を提案してきた。ユウキの顔にはまだまだ余裕の表情が現れていた。

「ん？ ボクはまだまだ行けるけど、キリトが疲れてるなら少し休もうか！」

相方の許可が無事得られたところで、すぐ近くにある安全エリアにて二人は腰を落ち着けた。青紫色の結晶のような壁が並んだ中に、窪みのような場所がある、そこが安全エリアであった。

「結構進んできたな……もう半分くらい来てるんじゃないか？」

キリトが軽く伸びをしながら話を振る。肩をぐりんぐりん回したり上半身を左右に回してほぐしたり、実にオヤジ臭い。

「そうだね。マッピングしてないからわからないけど……多分それくらい来てると思うよ……」

ユウキが何か口でもごもごしながら喋っている。お行儀が悪い事この上ない。キリトはユウキが何を食べているのか気になり、上半身を前のめりにして、ユウキの口元を見ていた。

「何だ、いつの間にそんなもの買ってたんだけ？ 初めて見るな……それ」

ユウキが手に持つてるのはインプ領名産月見団子。普通の団子よりも一回り大きいサイズの黄色い団子が、串に三つついている。

インプ領は常に夜ということもあり、こういつたお月見アイテムが売っている。気軽にいつでもお月見が楽しめるというわけだ。

「これね、ボクのお気に入りなんだー！ ほんのり甘くて素朴な味なんだけどそれがまたいいんだよー！」

何とも年寄りみたいなことを言う十五歳である。素材の味がうんたらかんたらとかいうやつだ。次は緑茶や焙じ茶がほしいとでも言うつもりだろうか。

「ズズズツ、プハーッ」

既に用意されていた。準備が良すぎにもほどがある。その姿はまるでお昼の午後に炬燵でくつろぎながらお茶を一杯いただいているお婆ちゃんのようなのだ。そんなユウキをキリトは呆れた表情で見えた。

「準備がいいな……」

ユウキは大きな口で再び団子を頬張り、もぐもぐしながら満面の笑みでキリトの方を見た。何とも幸せそうな顔をしながら食べている。頬を膨らませながら食べている姿を見て、可愛いなと感じていた。

「キリトも食べる？」

そう言いながらユウキはキリトに手持ちの月見団子を差し出してきた。新しい方ではなく、つい今しがたまで食べていた方を。ちなみに三つあるうちの一つを食べ、二つ目の団子は途中までかじられていた。

ユウキをこれをどうぞとばかりにキリトに差し出していた。キリトは苦笑いを浮かべながら対応に困っていた。素直にありがとうと受け取って、そのまま食べてしまえばいいのか。それとも正直に別の団子をくれと言った方がいいのか。

「えつとあの……ユウキさん？」

「ん？ なあに？」

キリトは苦笑いをしながら話を続ける。ユウキはどうやら気付いていない様子だった。キリトに負けず劣らずの天然ぷりに、キリトは頭を抱えていた。言わないと気付かないようなので、渋々キリトはその問題点を指摘した。

「ソレを食べるのかな……？ あの、新しいやつとかは……」

そう言うとうとうやくユウキは事の重大さに気が付いたのか顔を真っ赤にして慌てふためいた。さりげなく自分ほとんどでもなく恥ずかしいことをしてしまっていた。ああもう穴があったら入りたい、そんな心境だった。

「えっあつ、あの……！ これは、あの、別にそういうわけじゃ……！ はわわわ……」

ユウキは恥ずかしすぎて言葉にならない言葉を並べる。顔を真っ赤にして視線が泳いで非常に落ち着きがない。

キリトはアスナとのやり取りでこういったことは何回もあったので、比較的落ち着いた対応が出来ていたが、ユウキにはその手に全く免疫がなかったために、恥ずかしすぎて混乱状態になってしまった。

（何なんだ、この可愛い生き物は……）

このままでは埒があかなかったので、キリトはユウキの手から団子を半ば強引に受け取ると、一気にパクツと食いついた。

月見団子は普通の三色団子と比べて、一つ当たりが大きいので一口でいくには大変なのだが、キリトは気にする事なく食らいついた。口の中で大きい団子を頬張ると、むしろむしろと味を噛みしめていた。

何かの卵の風味が口の中一杯に広がって、薄めの甘い味がほのかにいい味を出していた。

「んお、中々行けるなこれは。でも俺はタレがかかっている方が好みかな……」

一つの串に三個ついてる二つ目の食べかけを飲み込むと、キリトは左手でユウキに串を返した。その様子をユウキは顔を真っ赤にして見つめていた。

ボクの食べかけをキリトが食べたってことは、ボクは……キリトと

……。

そう考えてしまったユウキは、更に頭の中が真っ白になっていた。

「ありがとう、美味かったよ」

「あ、うん……。どう、いたし……。まして」

ユウキはキリトから団子を返してもらうと、キリトから見えない角度でだんごを頬張り続けた。恥ずかしくて頭が真っ白になっても食欲は昨日のままのようだ。

(ボボボ……。ボク、キリトと……。かかかか、間接……)

自分が何故あんな行動に出たのか理解出来なかった。ユウキに至っては悪気も裏もなく、ただ単に美味しいから君もどうぞという、あくまでもちよつとした気遣いだった。

気が付かなければよかったかもしれないが、気付いてしまった。一旦気付いてしまうと、これまでのやり取りもとんでもなく恥ずかしいことをし続けてきたと思いついてしまった。

昨晚キリトを慰めるためとは言え、自分の胸を貸し抱擁までした。さりげなく物凄い行動だ。あの時はキリトを助けたい一心で無我夢中で行なったが、側から見たらとんでもなく勇気がある行動である。

そして今日は思いつきキリトに抱き着き、精一杯甘えた。何故ボクはあんな恥ずかしいことをしてしまったんだろう。

「は……。う……。あ……。う……」

ユウキは既に食べ尽くしてしまって何もついていない団子の串をかじり続けていた。やがて串は耐久度をなくし青白い光を放ち砕け散った。そのエフェクトで少しだけ我に返ったユウキはスツと立ち上がり、しばらく黙り込むとキリトの方に首を廻し、すぐ先に行こうと促した。

「き、休憩はおしまいっ！ 早く進もつ、キリト！」

半ばヤケクソ気味に言葉を放つユウキを尻目にキリトはアツケラカンと見上げる。その顔は向こうを向いてよく見えなかったが真っ赤になっているに違いない。キリトは「よいしょ」と声を出しながら立ち上がり、足元をぱぱと手で払い、様子が気になるユウキに

声を掛けた。

(な、なんでボク……こんなにドキドキしてるの……?)

「ユウキ大丈夫か? 体調が悪いならまだ少しここで休んだ方が……」

「ボクなら大丈夫!! さあキリト! 早く行こう! すぐ行こう! とつとと行こう!」

そう言うユウキはイギリス軍隊の集団行進ばりに手足を伸ばしながら姿勢良く奥へと突き進んでいった。その様子をキリトは心配そうに頭をかきながら後ろで見守っていた。

(本当に大丈夫か、ユウキのヤツ……)

それからのユウキとは言うのと、鬼に金棒、コブラにサイコガン、五右衛門に斬鉄剣と言つていい程の無双状態であつた。スイツチの必要性を感じさせない立ち回りっぷりで、中型モンスターから大型のザコモンスターまでノーダメージで斬り倒していった。

(すごいすぎる、ソロでも突破出来たんじゃないかな……コイツは)

キリトは呆れ顔と苦笑いが混ざつたような微妙な表情をしながら頭をポリポリかき、ユウキの後ろに続き、後を追っていた。こうなつた原因の一つに、自分も関係してることを気にせず歩いて進んでいく。

「はあ……はあ……はあ……」

ユウキは珍しく息が上がっていた。決して敵との戦いに疲労を見せているわけではない。先日からの出来事を意識しすぎて心臓がバクバクしてしまつていた。

心臓の鼓動が激しくなりすぎて、現実の肉体にも影響が出てしまわないかどうか心配だ。しかし無我夢中で体を動かしてる間に次第に落ち着きを取り戻していた。

そして30分ほど奥へ進み、気が付くと二人はとうとう一番奥の、ボス部屋の手前まで辿り着いていた。本当にたつた二人で迷宮区の全てを踏破してしまつた。新生アインクラッドでは前人未到の偉業である。

ユウキとキリトはボス部屋の巨大な扉を見上げていた。全体的に

さび付いており、長年ここから先の空間を守ってきたというような重苦しさを感じさせている。キリトにとってはS A O時代に何度も見た光景だ。

ゲームの中から抜け出すためにこの中にいるボスを倒し、かつての仲間が現実からも仮想空間からも死んでいった。そんな過去を少しだけ思い出していた。

「本当に、辿りついちゃったね……」

「ほぼユウキだけの活躍だな。見てる分にはすごく楽しかったぞ？」

「むう、その言い方ちよつとムカつく……」

機嫌を損ねながらも、ユウキはひたすらにボス部屋の扉をまじまじと見上げていた。既に目標は達成している、二人だけで迷宮区を踏破し、ボス部屋の手前まで辿り着く。普通に考えたらとんでもない快挙だ。

たった二人で突き進むこと自体が異常すぎるのだ。しかしユウキはさらに驚愕の一言を言い放った。流石にキリトも開いた口が塞がらないほどの衝撃だった。

「ねえキリト、ボクたちだけで……二人だけでボスって倒せるかな」
まさかとは思っていたがそのまさかである。キリトも言い出すかもしれないと薄々感じ取ってはいたが、いざ耳にするとやはりびっくりする。

旧アインクラッド74層でも、アスナと二人でボス部屋に入ったことはあったが、あの時は偵察と様子見だけだったので、そのまま戦ったりはしていなかった。

「……おいおい、本気なのか？」

キリトは静かに聞き返す、当然だ。通常フロアボスは七人のパーティを七つのグループにわけた四十九人のレイドを組んで挑むのが鉄則だ。壁役、攻撃、支援に分かれて立ち回るのが基本となっている。しかしユウキとキリト、そしてアスナ達はほぼワンパーティでイベントボスを撃破した実績があった。スリーピング・ナイツのメンバーとキリトとアスナで。

パーティの上限は七人までなのでキリトだけパーティメンバー

じやなかったのだが、キリトも最前線で一緒に戦ってくれたのだ。あの時キリトがいなかったら倒せてなかったかもしれない。

ユウキはそんな過去の実績を思い出しながら、今回のことをキリトに提案していた。ボクとキリトのペアなら、もしかしてもしかするとボスを倒せるかもしれない。

これまでだって大型のモンスターを相手に絶妙なコンビネーションで撃破出来ていた。今回だって行ける可能性だってある。

「ボクさ、キリトと一緒にボスを倒したいな……」

胸に手を当てながらユウキはキリトを見つめていた。ダンジョンの煌びやかな光に照らされているユウキの姿は、なんだか少し神秘的な雰囲気醸し出していた。キリトはその姿に少しだけ見惚れていた。

「ホラ、ボスを倒したらさ黒鉄宮の碑に名前が載るじゃない？ この前のイベントの時のも載ってるはずなんだ。でもキリトはトドメの瞬間に転移結晶で離脱したでしょ？ ボクたちとアスナの名前は刻まれたけど、キリトだけ溢れちゃったから……」

基本的にイベントも含み、ボスを倒したら記念に黒鉄宮の戦士の碑と呼ばれる、大型の石碑にプレイヤーネームが刻まれる。

レイドを組むとそれぞれのパーティーリーダーの名前が刻まれるのだが、ワンパーティー以下でボス討伐をすると、そのパーティー全員の名前が刻まれる。ユウキはキリトの協力のおかげで、過去にそれを成し遂げられたのだ。

「もしさ、二人だけでボスを倒したらさ、きつと凄いことになるよ！ 忘れたくても絶対に忘れられない思い出になるよ！」

ユウキは目をキラキラ輝かせながら楽しそうにキリトに訴えた。確かにワンパーティーでボスを討伐すること自体も十分異常である。それを今度はペアで討伐をしようと言いつけているのだから、端から見たら狂気の沙汰としか言いようがない。

しかしキリトはこうなったユウキは止められないことを十分承知していた。断ったら断つたで涙目になるだろうし、気まずい空気になるのもいやだし、何よりユウキは楽しそうだ。確かに成し遂げれば最

高の思い出にもなる。

二人だけで討伐出来るのかもというチャレンジ精神もあって、キリトはこれを承諾した。

「よし、いいぜ。いっちよやってみるか、ユウキ！」

それを返事を聞いたユウキは顔がほころび、ぱあつと笑顔になった。先頭に関しては経験豊富で冷静な考えを持っているキリトの事だから、てつきり断られるかとも思ったが、快く承諾してくれたことに気持ちを高ぶらせていた。

「ホント!? やったーっ！」

「ただし、挑むからには……絶対に倒すからな！」

「うん！ 勿論だよ！ 絶対に勝とうね！」

二人は互いに視線を交わし、拳をぶつけ合うと一緒に扉に手を触れた。その扉が鉄の重みを感じさせる独特の音を立てながら、ゆっくりと開いていった。

開いた先から真っ暗な空間が視界に入ってきて、二人の緊張感をおおっていた。いよいよだ、いよいよ29層のボスとの戦闘が始まるうとしていいる。

「忘れられない思い出になりそうだね、キリト！」

「ああ、忘れようがない事になると思うぞ……俺は」

二人はワクワクしていた。倒せないかもしれない確率の方が高い。でも倒せば全VRMMOで伝説級の逸話を残す偉業となることは間違いない。二人の心の中に一生忘れることのない思い出になることも間違いないだろう。

しかしキリトとユウキは、これが違った意味で二人の間に忘れられない事件を巻き起こす事になる事を、知る由もなかった。そして今回のことが、二人の運命を分けることになる一戦になることも、微塵も思っていないかった。

「ようし、いっちよ……勝負だよッ!!」

第8話く失踪く

西暦2026年1月31日土曜日 午後14:30 新生アインク

ラッド第29層 ボスルーム

「ようし、いっちょよ……勝負だよッ！」

ユウキとキリトは勢いよくボス部屋に突入した。中は暗いが部屋にある松明型オブジェクトに明かりが灯り、部屋の中を明るく照らした。キリトの暗視魔法のおかげで、暗闇でも視界はある程度クリアなのだが、演出というやつである。

「……………」

キリトとユウキは警戒を怠らない。360度上下左右とあらゆる方向に神経を研ぎ澄ませていた。天井から降ってくる敵もいれば堂々と待ち構えているパターンもある。いつ襲われても分からないので二人は互いの背中を預ける形になって索敵を続けた。

「……………何にもこないね……………」

「油断するなよ……………」

ただただ静かな時間が流れ続けた。一向にボスが現れる気配はない。まさかとは思いが既に討伐されてしまったのか……？

いや、それならそれで扉は開きつ放しのはずだし明かりが灯る演出があるのはおかしい。間違いないなくボスは倒されてない。しかし現れないというのはどういうことだろうか。

(おかしい、何かがおかしい、何かが……………)

キリトが違和感を覚えていると突如として全身をとつともない寒気が襲った。身体中をゾワゾワという感覚が走る。そして気配がする方に目をやると、そこには禍々しい形をした鎌が暗闇の中から現れていた。

半透明で尚且つ黒い煙で暗闇に紛れていたため、暗視魔法をかけていてもすぐに気付けなかったのである。先に気付いたキリトはユウキを素早く抱きかかえ、AGIとSTRを全開にして地面を蹴り、鎌の斬撃から逃れるように全力でステップをした。

鎌は間一髪で当たらなかつた。空振りした鎌はそのまま地面に突き刺さり、その場所からは赤黒い煙のようなものと、ドス黒いヘドロのようなものが溢れ出していた。

『KUKAKAKAKA……!!』

ボスが不気味な笑い声とともに姿を現した。ボスの名前は「
The arbiter who eats death」 死を食らう審判者という意味である。

その見た目は旧アインクラッド第1層の隠しダンジョンにいたあの死神によく似ていた。キリトは死神にあまりいい思い出はなかつた。75層到達時に第1層の隠しダンジョンで、90層クラスの強さの敵が出てきたことがあつた。

その時の敵がまさに死神の姿をしていた。あの時、ユイがいなかつたらアスナと一緒に確実に死んでしまっていただろう。

キリトはその過去もあつてか、剣を持つ両手に自然と力が入る。そして、ふと先程鎌が振り下ろされた地点を見た。おどろおどろしい黒い煙とヘドロがまだ残っている。そこに奇妙な違和感を感じていた。
「キリト、ありがとう……」

ユウキは体を起こすと助けてくれたキリトに礼を言った。ボスモンスターの不意打ちともあつて、ワンターンキルされていてもおかしくはなかつたのである。

「ああ……平気だ、気にするな」

キリトはユウキにそう言い放ち、再び死神を睨みつけていた。鎌の周辺には禍々しいエフェクトが舞っている。奇妙な違和感、その正体にキリトとユウキは気付きつつあつた。

「キリト、もしかしてあの鎌……」

「ああ、多分特殊効果付きだろう。状態異常付加か、或は即死効果か……」

もしもそうだとしたら最初の不意打ちを避けられたのは本当にラッキーである。あれをそのまま食らっていたら2人仲良くデスペナを喰らい、セーブポイントまで戻されていたかもしれない。

アイテムを買い溜めし、数時間かけて迷宮区と突破し、ここまでのた

どりに着いた苦勞が一瞬で水の泡になるところだった。

「一撃でも貰ったらアウトかもしれない、ユウキ！ 気合いれていくぞ！」

「うん！ わかった！ キリト！」

死神のHPバーはフロアボスにしては意外に少なく3本しかなかった。見たところ、高火力、紙装甲といった特徴なのだろうか。

いずれにしろどんな行動をとるか分からないので、まずはボスの観察から始まる。出来るだけ単調なうちに動きを観察し、敵の行動パターンを見極めなくてはならない。

キリトとユウキはそれぞれの武器を手に構えた。キリトは右手に聖剣エクスキャリバー、左手に愛用しているユナイティウオクスを。ユウキは紫色の愛剣マクアファイテルを。すると死神も本格的な戦闘態勢に入り、地面に溶け込むように姿を消した。

そのあたりには黒い煙のようなエフェクトだけが残っていた。そしてその煙が移動したと思うと、死神は一瞬でキリトの背後に現れた。

「キリト！ 後ろ!!」

死神の不意打ちに気付いたんユウキが叫んだ。死神はキリトの左肩目掛けて鎌を振り下ろした。しかしキリトは流石の反応速度でエクスキャリバーで鎌をガードしていた。エクスキャリバーと鎌の間に禍々しいエフェクトと激しい火花が舞っていた。

「ぎ、ギリギリが過ぎるぜ……！ この骸骨野郎……！」

キリトの推察通り死神のSTRはかなり高く、エクスキャリバーを装備しているキリトであってもなんとか踏ん張れる程であった。鏢迫り合いのような形となりお互いの背中が無防備になっていた。

ユウキはすかさずその無防備になっている死神の背中目掛けて斬撃を放った。

「せやああああ!!!」

ボスのパターンがわかるまでは迂闊にソードスキルは使えない。下手に発動して硬直が発生してる合間に一撃でも貰おうものなら目も当てられない。

しばらくは通常攻撃のみで凌ぐ。ユウキの斬撃は死神の背中にヒットし、1段目のHPバーを1割ほど減らした。フロアボスにしてはかなり柔らかい部類に入る防御力だ。

「やっぱり火力が高い分装甲は紙だ！ ユウキ！ このまま慎重に行くぞ！ パターンの変化に気を付けろよ！」

「わかった！ キリト！」

死神はまた地面に溶け込み、また黒い煙とともに移動をし近くに現れて斬撃をするという、単調なパターンを繰り返していた。この攻撃の他に一向に目立った行動をしてはこなかった。

「行けそうだよ！ キリト！」

ユウキが声をかけるとキリトは神妙な顔をしていた。そう、いくらなんでもボスのパターンが単調過ぎる。ボスのHPバーは既に2段目に突入していた。しかし一向にパターンが変わる様子はない。キリトはそこに違和感を覚えていた。

（な、何だ……何でパターンが変わらない？ 3本しかないHPバーが1つ減ったんだぞ……？ 何でなんだ？）

頭のギアをフル回転させ、キリトは考え続けた。そしてキリトはその違和感の正体に気付いた。死神が鎌を振り下ろした場所、煙に紛れて姿をくらました場所に、エフェクトが消えずに残り続けているのだ。

「こ、これは……!？」

キリトが冷静に辺りを見渡すと、至る所に禍々しい煙とおどろおどろしい煙とヘドロでいっぱいになっていた。キリトにはこの配置に見覚えがある、今までこいつが攻撃と回避を繰り返した地点だ。キリトは直感で、こいつに触れると状態異常になるということに感じていた。

「こいつは……まずいッ！」

キリトは死神の攻撃を剣で防いでいた。相手の武器の効果を無効化するというエクスキャリバーの特殊効果によって、キリトは状態異常にならずに済んでいた。

一方ユウキはと言うと、死神の攻撃を避けて反撃、というパターン

で戦っていた。攻撃を躲している為、状態異常にはなっていないのだが、キリトの危機感とは別のところにあった。

死神がユウキに鎌を振り下ろすと、当然ユウキはステップで躲して反撃を入れようとする。最初のうちはこれでも良かったのだが、例の煙とヘドロの罨が増えてくると、素早く回避出来るというプレイヤースキルが、逆にあだとなってしまうていた。

「ユウキッ！ そっちに飛ぶなッ!!」

キリトが叫んでいた。ユウキは死神の黒い煙の残ってる地点に気付かぬままステップをしてしまったのだ。煙に触れたユウキは力が抜けたように、ふらつとその場に崩れ落ちてしまった。

全身から力が抜け落ちたユウキの細い体にまともに鎌が入ってしまった。ユウキのHPはMAXから、一撃で一気にイエローゾーンにまで落ちてしまっていた。

「ユウキッ!!」

キリトは咄嗟に闇属性魔法で煙幕を張り、ユウキを救出に向かった。死神相手にこの魔法による時間稼ぎがどのぐらい通用するかはわからないが、今はとにかくユウキの安否の確認と安全確保が最優先である。

煙の中を突き進み、キリトはユウキのもとに辿り着き、ユウキを抱き起こした。

「ユウキ！ 大丈夫か!? しっかりしろ!」

「えへへ……ごめんねキリト、油断……しちやった……」

キリトは左手でメニューを開き、ストレージからポーションを取り出してユウキに飲ませた。ALLOのポーションは一定量即回復+時間経過による持続回復といった効果を持っている。

しかし確実にポーションを使用した筈のユウキのHPバーが回復する様子は全くなかった。

「な、何で回復しないんだ……?」

そこでキリトは自分の視界の左上にある、ユウキのHPバーの上に見慣れないアイコンがあることに気が付いた。状態異常：終焉エンド・カーズの呪いである。全能力の一時的低下、麻痺、回復無効というバランスが崩壊

しかねない、新種の状態異常であった。

「何だこれは……こんな状態異常、見たことないぞ……」

キリトはポーチから状態異常の呪いが回復できる解呪結晶を取り出し、ユウキに使用した。しかしユウキの状態異常は解除されなかった。

アイテムでの回復が出来ないとすると、ウンディーネの高位の回復魔法か、若しくは時間経過か、それとも或は……。

「あいつを倒さないといけないってことか、それもノーダメで……」
キリトは死神のいる方向を睨みつけながら、今の自分たちの置かれている状況を整理した。まず死神の武器には状態異常付加効果がついている。当たれば大ダメージと先程の状態異常にかかり絶体絶命になってしまう。

したがって一撃も貰うわけにはいかない。擦り傷でも状態異常を貰った時点で体が動かさなくなってしまい、アウトだ。

確実にエクスキャリバーでガードをするか、完全回避をするしかない。回避の際にも地面の状態異常の罠に注意しながらやらなければならぬ。そして尚且つ、ユウキにヤツのヘイトが向かないようになっては。

キリトは絶望的なまでに難しく設定されたこの難易度に、呆れと苛立ち、そして同時に好奇心を抱いていた。

「正直高難易度が過ぎるな、二人で攻略しようとした時点でわかってはいたが……」

こんなヤバい状況だということにも拘らず、キリトは笑みを浮かべていた。ボス戦独特の緊張感、やるかやられるか。そのピリピリした空気にキリトは剣士の血が騒ぐのか、奇妙な心地よさを覚えていた。

段々と先ほど唱えた煙幕魔法の効果が切れてきた。煙の隙間から見えた死神は憎らしい顔をしながらケケケと笑い、キリトを見下すような仕草をし、挑発まがいの行動までして、耳をつんぎくような金切り声にも近い、不愉快な叫び声をあげていた。

『KA——KAKAKAKA!!』

「この野郎、絶対に泣かしてやる……!」

キリトは笑っている死神に対し、一気に距離を詰め二刀流で先制攻撃を仕掛けた。防戦になったら勝機がかなり薄くなってしまう。ならば攻めて攻めて攻めまくるしかない。長引けば長引くほど状況は不利になる。短期決戦で終わらせてしまわなくては。

「せええああつ!!」

キリトは死神の斬撃をエクスキャリバーでいなし、もう片手のユナイティウォークスで反撃という戦法で戦っていた。

一見パターン化しているようにも思えるが死神の斬撃をエクスキャリバーでいなすのは相当な技術、力、集中力。精神力がいる。全神経を研ぎ澄ませて、目の前の鎌、周囲への罠に最大の注意を払いながら、確実に死神に攻撃を入れていく。

唯一の救いは死神が紙装甲だったことだ。これで耐久が高かつたらまず勝てないだろう。

「ぬぐつ……!?!」

必死で攻撃をかわし続けていたキリトの頬を、死神の鎌が擦り抜けていった。直撃ではない為、ほんの少しキリトのHPが減少した。しかしキリトの心配はそこではなかった。

キリトは自分のHPバーの上をすぐに確認した。その場所には状態異常アイコンが表示されていた。

状態異常：熱毒^{ポイズン}

エンドケースではなかったものの、厄介なことに変わりはない。相手の耐久が低いとはいえ、攻撃をいなしながら反撃をいれていくこの戦法は、いわば時間に余裕があればこそその戦法だ。

しかし熱毒^{ポイズン}にかかってしまったことにより、実質的に制限時間が設けられてしまった。解毒結晶を使っている余裕はない。ならばこのHPが尽きる前に死神を倒すしかない。

「運営は……性格悪すぎだろ……!」

性格の悪い運営に対して悪態を吐きながらも、キリトは死神に立ち向かい続けた。地道な攻撃が重なって、死神のHPバーは3段目に突入していたが、キリトのHPもイエローにまで落ちていた。

どっちが先に倒れるかは正直どっこいどっこいといった具合だ。

そんな一人でボスに挑み続けるキリトの姿を見て、ユウキはいたたまれなくなり、必死で戦っているキリトに対して声を掛けた。

「キリト、もういいよ！　ボスのパターンもわかったし、一回全滅してまたこようよ！　ボクたちなら……またすぐに……」

「ダメだツ!!」

ユウキの説得をキリトは一蹴した。ユウキにも信念があるならば、キリトにも曲げられない信念がある。かつてSAOで心に誓った、誰にも譲ることのできない信念が。

「俺が生きている間は……パーティメンバーを、仲間を……殺させやしない!!」

キリトは死神の攻撃を防ぎながら、鋭い眼光でユウキに視線をあわせて言い放った。たかがゲーム、されどゲーム。しかしキリトはこのゲームの戦闘一つにしても仲間の命を軽く見てはいない。

かつてのSAOじゃないから大丈夫といった感性を持ち合わせてはいなかった。いかなる状況でも仲間は見捨てない、それがキリトの信念であった。

「キリト……」

ユウキは動かない体でキリトを見上げた、キリトは身を挺して自分を守ってくれている。現実世界では大人たちに、倉橋先生に守られて、仮想世界でもスリーピング・ナイトのみんなに、アスナに、そしてキリトに守られていた。ここにきてユウキは自分の無力さを痛感してしまっていた。

ユウキは自分が情けなくなつた。絶剣と呼ばれていても、大事な場面では周りから助けてもらわないと何も出来ない事を改めて痛感した。あまりの悔しさと情けなさから涙がこぼれ落ちていた。

「あはは……ボクは仮想世界でも……弱虫なんだな……」

「そんなことないツ！　ユウキは弱くなんかない！　何にでも全力でぶつかっていく強さを持つてるだろう！　不貞腐れてる俺に全力でぶつかってきてくれたのはお前だ！　ユウキ！」

「キリト……」

「俺を立ち直らせてくれたユウキが弱いなんて、俺がそんなの認めな

「い！俺が許さない！」

キリトはユウキに活を入れ続けた。もう、何年も一緒にいるパートナーを励ますかのように。

その時、一瞬でも死神の攻撃から意識を逸らしてしまったことで、これまでほぼノーミスで鎌をいなし続けていたキリトの手元が狂ってしまった。鎌のいなしに失敗して死神の攻撃の直撃をもらってしまった。

「キリトッ!!」

キリトのHPバーの上には終焉の呪いのアイコンが表示されていた。熱毒のダメージも重なり、レッドゾーンまでHPが減ってしまった。絶体絶命である。

「しく……じった……!」

キリトはユウキの数メートル手前まで吹っ飛ばされていた。エンドカースの状態異常の所為で体を動かすことができない。熱毒の影響でHPもじわじわと減り続けている。

このままでは遅かれ早かれ、HPが全損し、リメインライト化してしまうだろう。そうになると、動くことが出来ないユウキも死神の餌食になる。

「ごめんなユウキ……負けちゃったよ……」

キリトは床に突っ伏しながらユウキに視線をあわせて、申し訳なさそうな表情を浮かべて口を開いた。その倒れているキリトの背後には、死神が今まさに鎌を振り下ろそうと迫っていた。その様子を、ユウキは無抵抗で見ていることしかできなかった。

「一緒に……思い出作れなくて、ごめんな……」

「あ……ああ……そんな……キリト……」

キリトがやられる。目の前で死ぬ。消えて無くなる。また大切な人が目の前からいなくなってしまう。嫌だ、嫌だ。そんなの嫌だ。パパもママも、姉ちゃんもアスナも、クロービスやメリダまで。みんな大切な人がボクの側からいなくなっていく。

キリトまで……いなくなるなんて、そんなの……そんな……なの……。

「そんなの……、嫌だああああ——ッ!!」

ユウキが叫び声を上げ、死神がキリトにトドメを刺そうと鎌を振り下ろす直前、ユウキの終焉エンド・カースの呪いが解除された。

瞬間、ユウキは本能の導くまま、考えるよりも早く体を動かし、A GI全力でダツシユをしてその慣性を活かしたまま、死神が鎌を振り下ろすよりも早く、片手剣ソードスキル、ヴォーパル・ストライクを放っていた。

「キリトオオ——ッ!!」

声にならない叫び声をあげながら、ユウキは死神に向かい剣先をのばしていた。

お願い届いて、アイツの鎌がキリトを絶命させるよりも早く、ボクの剣よあいつに届いて、お願い……キリトを助けて!

ユウキの願いが聞き届けられたのか、死神の鎌がキリトの首をはねるよりも早く、ユウキの剣が死神を貫き、死神の動きを止めることに成功した。

『GUGGAAAAA!!』

ユウキのソードスキルが直撃した死神は、おぞましい断末魔の咆哮をあげたのち、青白い光を放ちながら爆散した。ボスを倒したことによってキリトの状態異常が解除され、キリトのHPは減少を止めた。

キリトがHPを全損させるまで、あと残り数ドットというところだった。正に九死に一生の出来事だった。

《Congratulations!!》

システムメッセージが表示され、新生アインクラッド第29層ボス討伐成功が知らされる。もしもフルレイドで討伐にいったら、終焉エンド・カースの呪いの餌食になったパーティが続出し、今回より阿鼻叫喚の地獄絵図になっていただろう。

キリトはポーションを飲み自分のHPを回復させると、体をふらつかせながらユウキに近寄って行った。死神にトドメを刺したユウキは、捨て身のヴォーパル・ストライクの勢いでバランスを崩し、転倒してしまっていた。

「ユウキ、やったな……ボス討伐成功だ」

先ほどの興奮が覚めていなかったユウキは、キリトに話しかけられてハッと正気に戻った。その目には涙が溜まっており、ユウキの頬を滴り、地面を濡らした。

ユウキは恐る恐る声をした方を向き、自分のパートナーの無事を確認した。

「キリト……生きてる……?」

「ああ、お陰様でな……」

「ホントに……?」

「ああ、ホントだ。お前のお陰でな……」

それを聞くとユウキは剣を投げ捨て、一目散にキリトに向かって抱きついた。キリトは一瞬後ろに倒れかけるがユウキをしつかり受け止めた。

大粒の涙を流しながら、ユウキは声を殺しながら泣き、キリトの胸板に顔を当てこすった。あまりにも強く当てすぎて、キリトのHPが減ってしまいかねない強さだった。

「キリト……! キリト! 死んじゃうかと思った……!」

「おいおい、SAOじゃないんだから……実際に死ぬわけじゃないだろう……?」

キリトは自分の心配をしてくれているユウキの頭を、優しく右手で撫でまわしていた。まるでその姿はお兄ちゃんに甘えてくる年頃の妹みたいに見えた。

思えば直葉もこんな風に甘えてきたことがあったなど、キリトは昔を懐かしんでいた。

「死なせないって言ったのは……キリトじゃん……か」

ユウキはひたすらに涙を流し続けた。キリトを助けられたことに安堵した。独りぼっちにならなくてすんだことに安堵した。かけがえのないものを守れたことに安堵した。キリトと一緒にならどこまでだっていける気がした。

大好きなキリトと一緒になら。

”大好きな” キリトと、一緒なら……？

ユウキは先日から感じていた心のモヤモヤに、とうとう気付いてしまった。無意識に否定していたが、今日のことですのモヤモヤは確信に変わっていった。自分には決して許されるはずがない、その抱いてはいけない感情に。

そう、キリトへの ”恋心” に……。

「あ……ああ……」

そのことに気付いてしまったユウキは、キリトから離れると目を丸くしてキリトを見つめ、キリトから遠ざかるように、逃げるように後ずさりをした。

ボクはキリトの傍にいてはいけない、キリトの隣に立ってはいけない。そんな気持ちを胸に抱きながら。

「キリト……あの、ボク……、ボクは……キリトが……！」

キリトはユウキの様子がおかしい事に気付いた。普通ではない空気が漂っていた。今まで一回も見せたことのない表情だった。恐ろしいものを見たような、取り返しのつかないことをやってしまったような、そんな戦慄に襲われたような表情をしていた。

キリトはユウキに駆け寄り、ユウキの体の心そうに声を掛けていた。あまりにも壮絶なボス戦でユウキの精神に負担をかけてしまい、現実の体にも影響が出てしまったのではないかと心配していた。

「だ、大丈夫かユウキ？ どこか痛むのか!？」

「あ……違う、違うんだ……キリト。ゴメン……ボクは……ボ、ボクは……！」

そう言うとユウキは涙をこらえながらメニューを開き、ログアウトをしようとしていた。キリトはすぐさまその行動を見抜き、ユウキの手首を鷲掴みにしログアウトを阻止した。

「な、何してんだ！ どこに行く気だよ！」

キリトはつい怒鳴ってしまった。ユウキの訳のわからない行動に理解が追いついていなかった。何故ユウキが自分の前から姿を消そうとしているのか解せなかった。興奮しているキリトを尻目に、ユウキ

は項垂れ、涙を流し続けながら口を開き続けた。

「あ、あのね……キリト、ゴメン。ホントにゴメン、ボク……キリトの側にいる資格が……ないんだ……」

「な、何を……言ってるんだ？」

何でユウキは急にこんなことを言うのかと、疑問を抱いているキリトの不意をつき、ユウキはキリトに驚掴みにされている手を払い退けると、すぐさまログアウトしてしまった。

通常、ボス部屋はログアウト出来ないのだが、ボスを撃破したことによってこのボス部屋がセーフティエリアになったため、ログアウト出来たのだ。

（ごめんねアスナ、ボク……アスナとの約束……守れそうにない……！）

「ユウキッ!!」

先ほど投げ捨てたマクアフィテルのすぐ傍に、ユウキの先ほど倒した死神のドロップのネットワークスがユウキのいた場所に、金属音を立てて落下した。

ユウキがリザルト処理をしていなかったため、ストレージ外に弾き出され、その場に落下したというわけだ。

キリトはネットワークスが落ちている地点に歩み寄り、それを拾うと気持ちの整理がつかないまま一人でボス部屋に佇んでいた。

ユウキが何故、あんな行動を取ったのかを考えながら。そしてそれと同時に、心にぽっかりと穴が空いた思いがした。これに似た感覚を、キリトは経験したことがあった。

二年前旧アインクラッドで、自分の責任で月夜の黒猫団のギルドメンバーの一人、サチを目の前でむぎむぎと死なせてしまった時、そして一ヶ月前、抵抗むなく自分の目の前から姿を消したアスナを黙って見送るしかなかったとき。その時の感覚と同じものを、キリトは感じていた。

その感覚を覚えて、初めてキリトはユウキにどんな感情を持っているかを理解した。絶対に失いたくない存在、片時も傍から離れてほしくない存在、かけがえのない存在。いなくなつて初めて気付かされ

た。ユウキはキリトにとって、もう既に特別な存在となっていたのだ。

「そう……やつとわかった。俺は……ユウキを独りにさせたくないから、傍にいたんじゃない……」

そう、今まで自分の気持ち自身も誤魔化していた。自分でもきつとそうじゃないと思っていたからだ。いや違う、そう思おうとしていたんだ。俺の……ユウキに対するこの想い……

「俺は……ユウキのことが……好きなんだ」

ユウキが姿を消した理由にも察しがついていた。ユウキもキリトのことを好きになってしまっていた。だからキリトの前から居なくなつたのだ。かつてアスナの前から姿を消した時と同じように。

ユウキへの感情に気付いたキリトは嫌な予感がした。もう二度とユウキに会えないかもしれないという、嫌な胸騒ぎがしたのだ。

キリトは右手でマクアフィテルとボスドロップのネットワークスを拾い、左手でメニューを表示させ、ストレージに仕舞うとすぐさまログアウトの準備に取り掛かった。

「病院だ……、ユウキに……直接会いに行くんだ！」

キリトは左手でログアウトのアイコンをタップし、ALOからログアウトをした。キリトの意識が仮想世界から引き離され、数秒ほどの時間が経過し、やがて現実の自分の体へと戻っていった。

現実世界のキリト、桐ヶ谷和人は自分の部屋で目を覚ましていた。目の前には見慣れた天井が見えていた。

ベッドから体を起こし、顔を左右に振ると、すぐさまクローゼットにしまつてある上着を取り出し、財布と携帯、オートバイのキーを持って急いで部屋を出た。階段を下り、玄関に足を運ぶと、急いで自分の靴を履く。

「お兄ちゃん？ どこかいくのー？」

玄関から慌ただしい音がすることに気付いた和人の妹の直葉が、リビングのドアから顔を出していた。今はのんびりと説明している暇

はない、簡潔に目的地だけ伝えて和人は家を出ようとした。

「すまんスグ、俺ちよつと病院に行つてくる！」

「え、でも定期検査はまだじゃなかった？」

「いつもの病院じゃない、ちよつと急用で横浜まで行つてくる！ 母さんには遅くなるつて言つといてくれ！」

そう言うのと和人は家を飛び出し、自宅敷地内に置いてあるバイクのシートを開け、中からヘルメットを取り出し、装着した。バイクのシートに跨り、キーを差し込みエンジンを起動して、サイドスタンドを乱暴に蹴つ飛ばすと、猛スピードで桐ヶ谷邸を後にして走り去つていった。

「よ、横浜つて……何時間かかると思つてるのよ!!」

いきなり家を出ていった兄に対して憤慨する直葉だったが根は怒っていなかった。いつもちやんと帰ってくるし、その時にはまた何かご馳走してもらおう、そんな考えを巡らせていた。

和人は横浜港北総合病院に向かって、ただひたすらにバイクを走らせた。ユウキに……いや、木綿季に想いを伝えるために、木綿季が自分の前から姿を消した理由を、本人の口から直接聞きだすために。

そして大切な人を二度と失いたくない、失わないために決心したことを伝えるために、バイクのアクセルを握る右手に力を込め続けた。

「もう二度と失いたくない……! 待つてろよ……木綿季ツ!!」

第9話く誓い

(ボク、キリトの側にいる資格……ない……)

和人はユウキが最後に言い放った言葉を思い出しながら、無我夢中でオートバイを走らせた。埼玉県川越市から神奈川県横浜市、車で約2時間の距離を、我先にと法定速度ギリギリで駆け抜けた。

ユウキが何故自分の前から姿を消したか聞かなくてはいけない。そして、ユウキに伝えないといけないことがある。もう自分の気持ちに嘘はつかない。『ぶつからなきゃ伝わらないことだってある』

ユウキの言葉だ。ユウキは俺にぶつかってくれた、今度は俺の番だ。結果ユウキを傷つけることになるうとも、俺は……ユウキにこの気持ちをぶつける。何もしないまま後悔するのだけは絶対に嫌だ。

和人は長距離移動を経て、横浜港北総合病院の駐輪場へやってきた。はやる気持ちを抑えられず急いで駐輪場にオートバイを止め、白いキレイな外観をした病棟の自動ドアをくぐり、病院内へと駆け込んだ。病院のエントランスは白と水色を基調とした人間を落ち着かせる。

リラックスさせる為の色合いが壁や天井に施されていた。畳二十畳分程の広さのあちこちに観葉植物や案内板、グリーンカラーのベンチが置かれている。和人は足の速度を落とさないうまま、そのエントランス内を走り、フロントに飛び込んだ。

「あのー…面会をお願いしたいのですが……!」

和人は慌ててフロントの看護師に話しかけた。二時間休憩なしぶつ通しでオートバイを走らせ、バイクを降りてからもノンストップでここまでできた。

息が上がってちゃんと喋れてないが、受付のお姉さんに目的をしっかりと伝える。お姉さんはフロントに突っ込んできた和人に対して、あくまで丁寧に対応した。和人のように駆けこんでくる面会希望者は珍しくなかったのだ。

「はい、ではお名前と面会希望の患者さんのお名前をお願いします」
和人はお姉さんから声を掛けられると、一呼吸整えてから落ち着いてあくまでも冷静に、ここまできた目的を伝えた。

「俺の名前は……桐ヶ谷和人です。患者さんの名前は紺野……、紺野木綿季です！」

和人がその名前を告げた瞬間、受付の表情が強張った。一瞬の緊張感とざわつきがフロント全域に流れてから、少し急いだ様子でお姉さんが対応した。

「……あちらにお掛けになって、しばらくお待ちください」

受付のお姉さんは、和人をベンチに案内をすると慌ただしく奥に消えていった。木綿季はこの病院でも特別な患者の為、話を通したりと裏で色々準備することがあるのだろう。

和人はお姉さんに言われるがまま、ベンチに腰を落ち着けていた。しかし気分の方は一向に落ち着かないそわそわする。こんなに気持ちが悪く落ち着かないのはいつ以来だろうか？

SAOに初めてログインした時？
βテストに当選した時？
いっ以来だかわからないが、和人が落ち着かない、自分を冷静でいさせることが出来なかった。

木綿季に会いたい。ただひたすら、この気持ちだけを胸に抱いていた。ただそれ一心であった。会って気持ちを伝えたい。

もしかしたら嫌われるかもしれないがその時はその時だ。ただ木綿季に会いたいという気持ちだけを想ってベンチに座っていると、やがてそこに和人に話しかけようと近寄る、とある男の姿があった。

「桐ヶ谷……和人君ですね？」

聞き覚えのある声が聞こえた。振り返ると和人のよく知る人物、木綿季の主治医である倉橋が佇んでいた。和人と打って変わって全身ほぼ真っ白の服装で如何にも医師といった格好だ。

短めのヘアカットに度の強い眼鏡、白衣の下にはグレー気味の白いワイシャツにベスト、下はあまり高くない素材で出来てそうな黒いズボンを履いていた。和人は倉橋とは、以前明日奈と一緒に木綿季の初めての面会の時に訪れた時に顔を合わせており、互いに面識があっ

たのだ。

「先生……い！ 倉橋先生！ 木綿季に木綿季に会わせてください！」

俺は……彼女に伝えなきゃいけないことがあるんです！ 木綿季に

……木綿季に会わせてください!!」

鼻と鼻がくつつくぐらいの位置にまで接近し、和人は興奮気味に倉橋に食ってかかった。あまりに興奮していた和人は倉橋の胸倉を両手で掴んでしまっていた。自分の気持ちを抑えるのに限界が来ていた。倉橋はそんな和人を冷静になだめるように声を掛けて落ち着かせた。

「か、和人君……少し落ち着きましょう。ここは病院です、木綿季君以外にも患者さんはたくさんいます。まずは落ち着いてください」

和人は倉橋に言われるとハツとなり、周りの様子を見渡していた。気が付いてみれば周りの人たちの視線を集めてしまっている、先生に掴みかかっている光景を見れば何事かと注目が集まるのも無理はない。

和人は自分のした事に気付くと少々バツが悪そうにして「すみませんでした……」と頭を下げた。

「いえ、大丈夫ですよ。それでは歩きながら話しましょうか、和人君こちらへ」

和人は案内されるまま、倉橋の後を追うように歩きだした。自分を落ち着かせながら一步一步、木綿季の病室へと足を運ぶ。二人が歩いている廊下は病院らしく、白を基調とした内装になっており、途中で患者さんや、医療スタッフ、看護師さんの姿が見受けられた。

しばらく一緒に病室に向かって歩いてみると、倉橋は重苦しうに木綿季に関するであろうことを話し出した。

「しかしまた木綿季君に面会に来たと聞かされた時は驚きました。まさか君だったとは……、私はてっきりまた明日奈さんだと……」

「明日奈は、家の事情でちよつとこれなくて……」

「……そうですか、来てもらえれば木綿季君も喜んだでしょうに……それは残念です」

……多分それは叶わない。明日奈は……下手すればもう自由に家

から出してもらえないだろう。本当は一緒に来て木綿季を元気付けてほしかったところだ。

……いや違うか、明日奈が来てくれる状況なら、多分俺は明日奈と別れていないし、俺が木綿季のことを好きになることもなかっただろう。何だか複雑だな……。

その後数分間無言の時間が続き、二人の間に少し気まずい空気が流れてしまった。和人は首を項垂れて表情を暗くしてしまい、倉橋はそれを何とも言えないやるせない表情で見守っていた。

和人君と木綿季君の間に何かあったんだなど、その暗い様子を見てある程度悟ったようだった。ならばと思い、倉橋は和人に木綿季の今の体の状況を話し出した。

「和人君、よく聞いてくださいね。実は二時間ほど前、一瞬ではありませんが……一度木綿季君の心臓が止まりかけました」

和人はその言葉を聞いた瞬間固まってしまい、目を見開いて信じられないような顔をした。二時間前と言えばユウキがログアウトした時間だ。

あの後……心臓が止まりかけたっていうのか？ だとしたら俺の……俺の所為で木綿季は……。

「先生……木綿季はどうなったんですか……、木綿季の容態はどうなったんですか！」

いやだいやだ！ 俺は聞きたくない！ 木綿季が長くないなんて聞きたくない！ 俺はまだ木綿季に恩返しが出来ていない、話さなきゃいけないことだってある！ それに何より……木綿季が遠くにいつちまうなんて……俺は嫌だ!!

和人は倉橋の口から木綿季の容態を聞かされるのが恐ろしかった、しかし聞かないわけにはいかない。二時間前に体調を崩したとなれば、恐らくはボス討伐後のやり取りが一番の原因かもしれない。

あの時、ログアウトさせずに無理やりにも話を聞いて、安心させてやればよかったと和人は後悔していた。そんな不安そうな顔を浮かべている和人に対して、倉橋は安心させるように笑顔で対応した。「和人君心配せずとも大丈夫です、今は心肺ともに安定しています。

精神面の不安からくる影響だと考えてます。しかし今は以前の明日奈さんの時のように閉じこもってしまったんですよ。今日は楽しみにしている約束があると聞いていたのですが……」

和人は首を垂れ、音を立てずに握り拳に力を入れた。罪悪感と後悔に押し潰されてどうにかなりそうだった。俺の所為だ……俺の所為で木綿季は……。その和人の様子のおかしさに気付いた倉橋は、心配そうに声を掛けた。

「和人君、どうかしましたか?」

「先生……今日、木綿季と遊ぶ約束していたのは、俺なんです……」

体を震わせながら姿勢を戻し、和人は重々しく口を開いた。倉橋は驚いた様子だった。木綿季からは何も知らされていなかったからである。どういうことですかと倉橋は尋ねると、和人は体を震わせながら口を開いた。

「昨夜一緒に遊ぶ約束をしていて……今日ダンジョンの一番奥まで行ったんです。二人でボスと戦って……それから……」

和人は重い口調で話し続けた。全滅寸前まで追い詰められたこと、諦めかけた木綿季を励ましたこと、なんとか辛勝したこと、そしてその後……。

「ユウキはその後、俺が無事だった理解したあと……泣きながら抱きついてきたんです。そしたら彼女の方から急にログアウトしてしまっ……」

「……………」

「何で木綿季が俺の前から姿を消したかその時はわかりませんでした。でも俺は気付いたんです、俺の本当の気持ち……、俺は……木綿季のことが……!」

和人がその話の続きを言おうとしたところで、前を歩いていた倉橋の足が止まった。和人もそれに気付き、一步遅れて歩みを止めてふと前方を確認すると、木綿季の病室に辿り着いていたことに気付いた。

倉橋は無菌室へと続くゲートのセキュリティ端末に自分のカードキーをタッチし、扉のロックを解除すると、奥まで和人を案内した。

「和人君、あとは本人と話すのが一番だと思います。必要とあらば隣の部屋のアミューズフィアを使ってもらってもかまいません。……頑張ってくださいね……」

倉橋はそう言うと手前のパネルを操作して無菌室のブラインドを解除した。窓ガラス越しにやせ細った現実のユウキ、紺野木綿季がメデイキュボイドを装着し、ベッドに横になっている姿があらわになった。

和人がこの姿を目にするのは二度目だ。倉橋は木綿季と会話できるマイクのスイッチをONにすると「私は別室にいますので何かあつたら呼んでください」という言葉を残して退室していった。

「……………」

和人はメデイキュボイドに身を包んでいる木綿季を無菌室のガラス越しに見ていた。再び木綿季に会うためにここまで来た。しかしあの時とは目的がちがう。俺は木綿季から話を聞かなくてはいけない。そして、伝えなくちゃいけない。

「聞こえるか……木綿季……」

「……………」

和人は優しい口調でガラス越しの木綿季に向かって声をかけるが、木綿季の反応はない。無視されてるのか返事が出来ないのかどちらかはわからないが、しかし和人は構わず木綿季に声を掛け続けた。

「ごめんな……返事をしたくないなら、してくれなくて構わない。聞きたくないなら、聞き流してくれて構わない。……今から言うのは俺の独り言だと思ってくれ」

和人は一呼吸置いてから続きを話した。ほぼ一方的に、もしかしたら木綿季の方からマイクのスイッチを切られてしまっているかもしれないというのに。それでも和人は想っていることを伝えるために話し続けた。

「俺は木綿季と話がしたくてここに来た。木綿季から聞きたいことがあつてここに来た。そして……木綿季に聞いてもらいたいこともあつてここまで来た……」

「……………」

メデイキュボイドの仮想空間の中に生成された部屋にいる木綿季は、体育座りをしながら顔を俯かせ、和人の姿が映されているスクリーンから目を背けていた。

肩まで伸びたショートヘアに、オレンジ色のパジャマ、そこに黄色い上着を羽織った服装に身を包んでいた。この小学生高学年ほどの背丈の小さい少女こそが、メデイキュボイドの仮想空間での彼女の姿、アバターである。

(……キリト……)

木綿季も和人のことを嫌っているわけではない。むしろ特別な感情を持っている。しかしだからこそ、拒絶してしまっているのだ。この先の未来がどうなるか、わかってしまったているから……。

「勿論お前が嫌だと言うのなら、俺は大人しく帰るよ。俺と付き合うことで、お前を苦しめたり悲しませることになるのなら、もう俺はお前と……二度と会わない」

『……………ッー』

ここに来てひたすら無言の態度を貫いていた木綿季が、初めて和人に対して反応を見せていた。

「二度と会わない」このワードを聞いた瞬間、胸が締め付けられる想いがした。大切なものを手放してしまう想いがした。このままでもいいのだろうか？

「俺もお前には出来るだけ長く生きてほしい、無理に俺に付き合っただけに負担を掛けさせるわけにはいかないからな……」

(……キリト……)

それからしばらく長い沈黙が続いた。和人が本当に木綿季に伝えなかったことはこんなことではない、もつと……和人と木綿季の運命を、大きく変えてしまうほどの重要なことを伝えるためにここまで来た。しかし木綿季はこれ以上話を聞くそぶりを見せなかった。

和人は木綿季が何らかの反応を見せてくれると思っていたが、一向に待っても物音ひとつ立てなかったため「もう……無理なんだな」と小さい声で呟くと、諦めたかのように窓ガラスから距離を置いた。

「急に押しかけてきて……ごめんな。それじゃ俺は帰るよ……。体、

大事にしてくれよ……」

両手をジャケットのポケットに突っ込み、名残惜しそうにしながらも、踵を返して和人は面会室から立ち去ろうとした、……その時である。

『キリト！ 待って!!』

スピーカーから、聞き慣れた声が聞こえてきた。数時間前まで聞いていたのにもう何年も聞いてないような感覚を覚えた。和人は目を見開き体の向きを180度変え、無菌室のガラスに両手を当て、会いたかった人の名前を呼んだ。

「ゆ、木綿季……？ 木綿季か……？ 木綿季！ いるんだなそこに……！」

『ウン……いるよ、キリト……』

和人は木綿季の声を聞くと途端に安堵し、ほっと胸を撫で下ろした。もう二度と聞けないかもしれないと思っていたからだ。

その安堵感からか、少し瞳に涙を浮かべていた。和人は泣いているのがばれないように、視線をずらし冗談交じりに皮肉を言った。

「まったく……ここまで来るのに片道2時間もかかっちゃったぞ？ ガソリン代立て替えてくれるんだろうな……」

『アハハッゴメンね……それについては多分倉橋先生が立て替えてくれるよ！ 領収書があれば、だけどね』

和人の冗談に対して、木綿季も冗談で返していた。和人の扱い方が少しだけわかってきたみたいである。そして少し空気が和んだところで木綿季が本題を切り出した。

『キリト、さっきはゴメンね……。ボク、取り乱しちやつて……』

「——和人だ」

『……へ？』

「桐ヶ谷和人、俺の名前だ。倉橋先生から聞いてなかったのか？ リアルではこっちで呼んでくれよな」

『かず……と、……かずとー！ 桐ヶ谷……和人……！』

スピーカー越しに嬉しい声が聞こえてきた。木綿季は何度も何度も嬉しそうにキリトの現実での名前を口ずさんだ。

特別な想いを込めて、何度も何度も和人の名前を口にした。普通の名前なのに、何故かすごく安心出来た気がした。

『んでね……キリツ……じゃない。かずと、ボク……和人に話さなきゃいけない事があるんだ……』

「ああ、俺も木綿季と話がしたい」

『うん……そしたらさ、ALOで話し合おう？ 昨日和人と決闘したあの丘に来てくれるかな……？』

「……わかった。隣の部屋のアミユスファイアですぐに行くな」

そう言うのと和人は早歩きで隣部屋に向かい、アミユスファイアを被り姿勢をリラックスさせた。

木綿季に逢いたいという気持ちを少しだけ落ち着かせ、一呼吸置いてからゆつくりと目を閉じて、仮想世界に自分の意識をゆだねていった。

「……リンク・スタート！」

西暦2026年1月31日（土）午後17:30 アルヴ Heim
オンライン アルンの街 緑の丘

以前ログアウトしたボス部屋から転移結晶を使い、アルンの街へとやってきたキリトは翅をはばたかせ、上空から必死にユウキの姿を探していた。

ALO内の時刻は夕刻にさしかかり、アルンの街を世界樹の陰から真っ赤な夕陽が照らしていた。昨日キリトとユウキが話をした時間と同じであった。

「ユウキ……どこだ！」

絶対に話を聞く、全部受け止める。そして俺の想いも全部ぶつける。

そう心に誓いながらしばらく空から地上を眺めっていると、キリトの探している少女はキリトが昼寝をしていた緑の丘に佇んでいた。

キリトはユウキの姿を確認すると急降下をして、少女の3メートルほど手前でホバリングし、トットンという音を立ててそのまま着地した。

再びユウキと会えたことに安心したキリトは、笑顔でユウキに歩み寄りながら挨拶を交わした。

「こんばんは、ユウキ」

「こ、こんばんは、キリト……」

ユウキはあんなことがあった後なのか、ちよつとだけぎこちなかった。気持ちの整理がついていないのだろう、視線が泳ぎまわっている。彼女が落ち着くまで待っていたキリトであったが、このままでは一向に話が前に進みそうにないので、自分から話を切り出した。

「えつとユウキ、俺から話させてもらっていいか？」

「え……？ あ……う、うん。いいよ？」

「俺は回りくどい事が嫌いだ、だから……思っていることを単刀直入に言う」

両手を後ろに回し、ぼつが悪そうにしているユウキに少し緊張が走った。それと同時に覚悟を決めていた。

何を言われても、責められても、罵られても構わないと想っていた。しかし、キリトの口から放たれた言葉は、ユウキにとって耳を疑いたくなるような衝撃の一言だった。

「ユウキ、俺はお前が好きだ」

「……え……？」

キリトからの告白に、思わずユウキは口元を両手で押さえてしまった。目を見開き、息を飲み込み、体は小刻みに震えてしまっている。自分の耳に聞こえてきた言葉が、キリトの告白が信じられなかった。

ユウキの目からは大粒の涙が滴り落ちていた。それが嬉しさなのか悲しさなのかはわからなかった。キリトはどうしてボクにそんなことを言うんだろうと、そう思っていた。

「どうしてそんな事、言うのさ……」

「わからないか……？」

「……………」

「わからないのなら……もう一度言うぞ……」

キリトは深く息を吸い込むと、今度はユウキが思い違いをしないように、すべての想いと力を喉に込めて、ユウキに届けるべく声を放った。

「ユウキ、俺は……お前が、お前のことが好きだ!!」

キリトからの精一杯の言葉の重さに耐え切れず、ユウキは膝から崩れてしまった。声にならない泣き声をあげ、涙を流し続けた。

そして長い長い沈黙の後、流れ続ける涙を我慢しながら、ゆっくりと口を開いた。

「……ボクの体のコト、知ってるよね……？ 長くなんか生きられないんだよ？ 絶対にキリトより先に死んじゃうんだよ？ 先にいなくなっちゃって、キリトを独りぼっちにさせちゃって、寂しい思いを……させちゃうんだよ……？」

「……………」

「あのね……さつきボス討伐に成功したとき、ボク、自分の本当の気持ちに……気付いちやっただ……」

「……………」

「でもね、ボクにね……恋なんて許されないんだ……。先が短いボクには、誰かを好きになる資格なんて……ないんだよ……」

キリトは黙って彼女の話に耳を傾け続けた。

ユウキの気持ちはわかっている。でもわかっているからこそ、どこか納得できない部分もあった。

「だからさ、ボクに会うのは……もうやめにしたほうがいいよ。最初はアスナに頼まれて一緒にいたけど……、それももう無理みたいだしね……」

ユウキはキリトからの想いを一蹴するように、ほぼ一方的に自分の都合を話し続けた。

「ボクたち……もうお終いにしよ……？ ALOももうやらない……。お願いだから、これでボクのごとは……忘れて……」

もう会わない、ボクらの関係はもうこれでお終い。

一方的に言葉を並べるユウキに、キリトは我慢出来ずに口を割って入った。眼光鋭くユウキを睨みつけて。しかしどこことなく悲しげな表情で、でもどこか優しくして……。

「俺の気持ちは……どうなるんだ？」

そう言うときリトはユウキに駆け寄り、一気に自分の方向にユウキの体を抱き寄せた。そして力一杯、ユウキの細い体を抱き締めた。ユウキの体が、壊れてしまうのではないかというぐらいの力を込めて。

「きり……と……？」

ユウキは何故彼が自分を抱きしめてきたのかわからなかった。

単に好きだから？ いや違う。それ以上のことを思っているからだ。

ユウキは最初こそ戸惑っていたが彼からの温もりを肌で感じると、そのまま彼を受け入れた。

「勝手なこと言うな!! 先に死ぬだなんて……絶対に俺が許さない!!」

「……ッ」

「言っただろ、俺が生きてるうちは仲間を殺させやしないって……だから……諦めるな!!」

諦めるな

その言葉に、ユウキは大きく動揺した。

それは重病患者にとつて、あまりにも重すぎる言葉だったからだ。ユウキのようにAIDSを抱え、末期症状を迎えている患者にとつては特に言葉の重みが違いすぎる。

普通の患者ならこっちの体の事情も知らないでとも思うだろう。しかしユウキは違った。

根拠も何もないけどキリトなら、もしかしてキリトならボクを助けてくれるのではないかと。

キリトは医者でも医者のお卵でもないごく普通の一般人だ。それでも、それでもキリトなら……ボクを救ってくれるのではないかと、そう思い始めていた。

だから——勇気を振り絞って聞いてみる——。

「ボクを……助けてくれるの……？ キリト……」

「ああ……助けてやる!! 絶対にお前を助けてやる! だから言ってくれ! ユウキがやりたいことを!! 俺が……全部叶えてやる!」

キリトからのその暖かく、力強い言葉を聞いた瞬間に、さらにユウキの目から大粒の涙が滝のように溢れ出た。

ああ、ボクはなんて幸せなんだろう。こんなボクのことをこれだけ大事に想ってくれる人が……こんなにもすぐ近くにいたなんて。

バカだなあボクは……もつと早く気付けばよかったのになあ……。ユウキは生まれて初めて感じる、好きな人からの温かさを体全体で感じ取っていた。

そしてユウキは、気の遠くなるほどの長い間、ずっと諦めていた言葉を、ゆつくりと口にしようとした。

「キリト……ボク……、ボク……ッ!」

高ぶる感情を抑えられず、ユウキの瞳からは更に涙が溢れ出ていた。

長い間ずっとずっと、この気持ちを口にしかかった。でも出来なかった。

することを許されなかった。でも……でも、今なら……今なら言える気がする。

「なんだ……？ 言ってみてくれ、ユウキ!」

「……ボ、ボク……ボクは……!」

言ってくれ、ユウキが望むことを。

言ってくれ、ユウキがしたいことを。

言ってくれ……。ユウキの想いを！

「キリト……。ボク……。生きたい……」

「……。ユウキ……！」

生きたい

AIDSを発症してからユウキが初めて発した言葉だった。たった四文字の簡単な言葉を長年口にしていなかったが、ユウキはその言葉を口にすることが出来たのだ。

言うのは簡単な筈なのに、実行するのにはあまりにも絶望的な現実が立ちはだかっている。

だがしかし、その過酷で残酷な運命に、少女は初めて抗おうとしていた。

治るかどうかはわからない、でも、目の前の少年を信じて、足掻いてみよう。そう思った。

「ボク……。生きたいよう……。死にたくないよう……。普通に生きて……。もう一回現実世界で暮らしたいよう……！」

震えるような声で、ユウキは喋り続けた。

今まで我慢してきたことを……。心の底からやりたかったことを、ずっと心の奥底に蓋をして、無理やり仕舞い込んでしまっていたことを、全てキリトにぶちまけた。

「ああ……。大丈夫だ！俺が絶対に助けてやるから！」

「……。ホント……？」

「本当だ！……。ほら、まだやりたいこと……。たくさんあるだろ！」

全部言え！俺が叶えてやる……！」

やりたいこと、たくさんある。

ありすぎて、何をしたいかわからないぐらいある。でも、それも許されなかった。ずっとずっと我慢してた。

でも……。もし、許されるのなら、キリトと一緒にいてくれるのなら、ボクは……。ボクは……！」

「それじゃあね……。キリトと一緒に現実世界で歩きたいな……。それと一緒に面白い物も行つて、お食事してね？ 映画も見に行きたい。

あ……水族館行ってイルカさんも見たいなあ……」

その言葉を聞き届けると、キリトのユウキを抱く手に一層力が入った。

今聞き届けたユウキの現実世界でやりたいと言う夢、絶対に叶えてやる。

その為にこの目の前の少女を必ず助ける、絶対に見捨てない、そう心に強く誓い、より強くユウキを抱き締めた。

「なんとかしてやる！俺が絶対に……絶対にお前を助けてやる！だから……俺を信じてくれ……！」

正直、ボクの病気が治るとは思えない。自分の身体は自分が一番よくわかっていいる。むしろ今こうして生きていられることですら奇跡に近い。

でも、こんなボクをキリトは助けるって言うてくれた。なら、その言葉を……信じてみようと思うんだ。

ボクのことを好きって言うてくれたキリトを、ボクが大好きなキリトを、ボクは……信じてみる。

「嬉しい……ボク、すっごく嬉しいよ……キリト。信じるよ……キリトのこと……、ホントに……ありがと……」

キリトとユウキは互いを、力の限り精一杯抱きしめた。

しかしキリトが決断したことはあまりにも過酷すぎる茨の道だ。自分とユウキの運命を大きく変えてしまうことだ。辛いことばかりだろう苦しくて逃げたくなるだろう。

だがキリトはどんな困難な壁が立ちかはだかろうとも、絶対に助けると決めた。この愛おしい少女を、自分がどんな目にあおうとも。そしてどんな手を使ってでも、周りを犠牲にしても、絶対に見捨てない。

そう、誓いを立てた。

互いが抱き合ってからどれだけの時間が経過しただろうか。

夕焼けに染まったアルンに吹き渡る風だけが、互いの愛に気付いた

二人を優しく祝福していた。

しばらくしてキリトとユウキは少しだけ体を離すと、改めて胸の内
にしまっておいた想いを伝えようとした。

「ユウキ……好きだ」

「ボクも……キリトのことが……好き……！」

互いの胸のうちの本当の気持ちを伝えた二人の妖精は、次第に互い
の距離をゆつくりと目を瞑りながら、近めていった。

アルンに差し込む夕焼けに映し出された二人の妖精の影は、その二
人の動きに合わせて、完全にその形を重ねていった。

第10話く戦いの始まりく

先ほどの告白からそれとなく時間が経過していた。アスナが導いた出会いから、キリトとユウキは親友から恋人へとその関係を深めたのだ。

爽やかで温かく、優しい夕風がアルンに流れていた。木々がその風でゆれ心地よい自然音を奏で、空は真つ赤な夕焼け空となっていて、沈みかけの夕陽がアルンの街並みを優しく照らし、二人はそれをずっと瞳に映し続けていた。

「キレイだね……」

「ああ……」

キリトのお気に入りの丘に二人は腰をおろしていた。ユウキはキリトに肩を預け、キリトはそれを支えながら右手をユウキの背中にまわし、優しく抱きとめていた。

ユウキはその体勢がすっかり気に入ったようで心から安心していうような微笑みをこぼしていた。

「ボクね、夕焼け……好きなんだ」

キリトが「そうなのか」と返すと、ユウキはキリトにさらに密着し、ゆつくりとした口調で語り始めた。

「HIVに感染してAIDSを発症して、病院暮らしになって。無菌室に移るまでの間……窓から見える風景だけがボクの癒しだった。一年間通していろんな風景になるけどさ、ボクはやっぱ毎日見れる夕焼けが好きだな……」

「そうか……俺も夕焼けは好きだけど、夕焼けから夜に変わりつつある時も好きだな。夕焼けと夜空のいいところりしてるみたいでさ」

「そうなんだ……。んー、ボクはやっぱこの真つ赤な夕焼けかな

……」

「……………」

「キリトとの思い出があるし、前住んでた家でも、よく見てたんだ……」

ユウキはそう言うのとキリトに視線を映し満面の笑顔を見せた。夕焼け色に染まった彼女の笑顔は優しく、美しく、愛おしかった。キリトはそう思うと自分の額をユウキの額に当てた。小さく「あいたっ」と言う声が聞こえた気がした。

「いつか現実の夕焼けをまた見せてやるからな、絶対に」

「……嬉しいな……、ありがとう……キリト」

それを聞いたユウキは嬉しくなり、キリトの手を力強く握った。キリトもそれに応えるかのように握り返した。ユウキが瞳に涙をうつすらと浮かべながらキリトに礼の気持ち传达了。そしてユウキはあることが気になり、キリトに尋ねてみた。

「ねえキリト、一つ聞いてもいい？」

「……なんだ？」

自分から聞いておきながら、ユウキは急に顔を赤く染めてしまっていた。恥ずかしくなってしまうぐらい聞きづらいことなのだろうか？ 中々口に出せないユウキをすぐ横で見ているキリトは待ちきれずに、答えを急かした。

「なんだよ、言いづらいことなのか？」

「いや、そうじゃ……ないんだけど……」

ユウキは自分の左頬を左手の人差し指でぽりぽりかきながら、言い出そうかやめようかためらっていた。やがて少しだけ勇気をだして、顔を赤らめながらキリトに聞きたいことを言葉にした。

「あ、あのね。どうしてボクなんかを……好きになってくれたのかな、って……そう思ってた……」

その言葉を表に出すと、ユウキは下を俯いて、恥ずかしながらも、少しでも寂しそうな表情を浮かべていた。今まで人から、ましてや男の子から好きと言われたことがないユウキにとって、キリトからの好意は大変に心から嬉しいことだった。

しかし、病気を治してやると決心していたとしても、すぐ死んでしまう可能性がある人を好きになるということは、並大抵の覚悟で出来ることではない。そこが気になり、ユウキはキリトにこの質問をぶつけたのだ。

「なんだ、そんなことが……」

キリトは半分呆れ顔で、もう半分ほつとしたような安堵の表情を浮かべた。深く息を吐くと、柔らかい表情を浮かべながらユウキの体をこちら側に向かせて、優しく、そして温かくユウキを抱き締めた。

「キリト……？」

ユウキは頭に？マークを浮かべながら、キリトの抱擁を受け入れていた。ボクを抱き締めしてくれるのがその答えなの？ ボクには難しくてもよくわからないなと思いつつも、キリトの優しさと温かさに酔いしれていた。

しばらく抱き合っていると、やがてキリトはユウキを抱き締めたまま、先ほどの質問に対する答えを、ユウキの耳元でささやきだした。

「大切な人を……誰一人失いたくなかったからだ」

「え……？」

そう言うときキリトは抱擁を解き、ユウキと向かい合う形になるぐらゐまで、半歩分の距離を置くとその話の続きを語り始めた。ユウキはきよとんとした表情で、キリトの話聞き入れ続けた。

「……うじうじしてた俺に俺にぶつかってきたくれて、元気づけてくれて、触れ合ってくれて。本当に俺のぽっかり空いた穴に、ユウキはいろいろなもので埋めてくれた」

「……」

「その時には、多分もうユウキの事を好きになってた。そしてユウキが自分の弱い部分を見せたときに、守ってやりたい、一生傍にいてやりたい、助けてやりたいって、そう思ってたんだ……」

「……そう、だったんだ……」

ユウキはキリトからの答えを聞くと、嬉しそうに、そして安心したようにキリトの胸に頭を埋めていた。仮想世界のアバターでもその心臓の鼓動、体の温かさが芯まで伝わってきている気がした。

「俺はユウキを……お前を失いたくない、絶対に助ける。お前に俺の……一生を捧げる」

「い、一生を……」

事実上のプロポーズともとれるその恥ずかしいセリフを聞いた瞬

間に、ユウキはさらに顔を真っ赤にしてしまっていた。

嬉しい、確かに嬉しいが、真正面から真顔でそんなことを言われてしまっただろうか？ かわからず、ユウキは困り果てていた。そして十数秒の間の後、ユウキはキリトからの気持ちに応えるように、自分の心からの想いを改めて口にした。

「ボクもね、多分……キリトと一緒に遊んでるうちに、キリトのこと好きになっちゃってたんだ。病気のこともあるから、無意識にその気持ちを抑え込んでいたんだけど……」

「……そうか」

「あのね、ボク……男の子から好きって言ってもらうの、初めてなんだ……。男の子のことを好きになるのも、初めてなの……」

キリトの胸に体を預けながら、ユウキはキリトへの想いを語り続けた。自分の初恋、そしてやがて命の恩人になるであろう、一番大好きな男の子の胸を借りながら、キリトへの想いを語った。

キリトはそんなユウキを優しく抱き留めて、その想いを心に受け止めていた。

「んじやあ俺はユウキにとって……初恋の相手、なんだな……」

「……うん」

「嬉しいな……」

「……ボクも初めて好きになった人が、キリトで良かった……」

ユウキは自分の初恋がキリトであることに心から嬉しさを感じると同時に、安堵していた。叶わぬ恋でなくてよかった、ボクの一方通行じゃなくて良かったと、心から安心していた。

ユウキの気持ちを受け取ったキリトは再びユウキを抱く手に力を込め、ユウキを体いっぱい感じていた。ユウキも大好きな人からの愛情を、温かさを、同じように体全体で感じ取っていた。

「あとさ、あの時ボクを元気付けてくれたのは……やっぱりキリトだったんだね……」

「ん？ あの時……？」

「うん、ボクが悲しい夢を見たって言ったとき、キリトがボクに独りじゃないって言ってくれたコト……あれ、やっぱり夢じゃなかったん

だ……」

「どうしてそう思うんだ？」

「……だって温かかったから……」

温かかったからというユウキの答えにキリトは無言で返事を返した。ユウキは何も言ってくれないキリトに少しだけムスツとしたがすぐに機嫌を直していた。

今抱きしめてもらっている温かさ、あの時感じた温かさは、紛れもなく同じだったからだ。

温かい、恋つて……こんなに温かいものなんだ。全然知らなかったな。自分には決して許されることじゃないって今までずっと思ってた。

でもそうじゃないんだね、ボクも……誰かを好きになっただけなんだね、恋に堕ちていいんだね、一緒に傍にいて……いいんだね……。

「あ、そうだ。すっかり忘れてた」

キリトが突如、何かを思い出したかのようにユウキを抱き締め、左手の抱擁を解き、やにわにメニューを表示しアイテムストレージを開きだした。

メニューを開くため急に姿勢を変えたお陰でユウキがキリトの体からずり落ちてしまった。「せつかくいい雰囲気だったのに……」と若干不機嫌気味に小さい声で愚痴をこぼしたユウキの前に、キリトがあるものをストレージから出しオブジェクト化した。

ユウキが投げ捨てた愛剣のマクアファイテルであった。

「あー、ボクの剣だー！」

ログアウト前に投げ捨てた剣のことを、ユウキはすっかり忘れていた。キリトに「ありがとう！」と礼を言うと剣を受け取り鞘に納め、「ごめんよごめんよ」と剣を撫でた。その様子はまるで小動物を可愛がる光景みたいで、何だか少しだけ微笑ましかった。

「あと、ほらこれ」

キリトはストレージからもう一つアイテムを取り出すとユウキの手に直接握らせた。ユウキが「ほえ？」と口走る。握らせたユウキの手からキリトが自分の手をどけると、そこには真っ黒でありながらも

紫色に輝く宝石のついたネックレスが夕日に照らされ輝いていた。

ユウキの手には29層のフロアボスを倒した時に出たラストアタックボーナスのドロップアイテムが握られていた。

”ブラックアメジストネックレス”

STR+15、AGI+30とユウキの戦闘スタイルにぴったりの装飾品だ。効果も、そして見た目も。ユウキは手のひらのネックレスを見つめた後、キリトに視線を移し「どうしてこれを？」といった表情でキリトの顔を見た。

「え、キリトこれって……」

「元々お前のモンだぞ、知らなかっただろうが今日倒したボスのドロップアイテムだ。ユウキ、リザルトしないまま落ちたる？ だからストレージに入らないまま外に弾き出されてたんだよ」

「そうだったんだ、拾っておいてくれてたんだ……！ ありがとう！ キリトー！」

そう言い放つとユウキはネックレスを握りしめたまま、キリトに飛びついた。キリトも飛びつかれるとは思わなかったのでそのまま押し倒されるように仰向けの体勢になった。

先ほどの切ない様子とは打って変わって、今度は元気いっぱい活発なユウキがそこにはいた。

「わーいキリトがベッドだー！」

ユウキは無邪気な子供みたいにキリトにのしかかった体勢のままはしゃいでいた。しかしいくら女の子が軽いといえど、体に乗っかられた上に暴れられると苦しくなってくる。

「ちよ……、ユウキさん苦し……痛いですって！ あと重た——」

——シユンツ

言葉の途中で何かが空を切る音が聞こえたかと思うと、キリトの喉元にマクアフィテルの剣先が向けられていた。PK保護圏内なのでHPが減る心配はないのだがそれとは別の意味でキリトは命の危機を感じていた。

馬乗りに乗られて体の自由を奪われ、エモノを喉元に突きつけられたらもう殺される自信しかない。

「ボクが……何？ よく聞こえなかつただけど……？ キリト……？」

キリトは冷や汗をかき、息を飲んだ。もしかしたらユウキより先に俺が死んでしまうのではないかと戦慄が走った。ユウキの周りには気のせいじゃなければドス黒いオーラが漂ってる…気がした。

「なっ何でもございません……何も申しておりません！」

「ならよし♪」

過去に見たことがないある意味最高の笑顔を作りながらユウキはマクアフィテルを腰の鞆に戻し、キリトの体から降りた。それと同時にユウキの笑顔は「二度目はないからね？」とでも言いたげな意味も込められているようにも見えた。

（俺、もし結婚したら尻に敷かれるのかな……）

将来はユウキと結婚、そんな考えが頭の中を巡っていた。しかしそんな未来もいささか悪くないかなと思った。それを現実にするために、これから戦っていかなくてはと改めて決心したのだった。

「あ——っ!!」

急にユウキが大声をあげた。顔が近い位置で叫んだのでキリトはついつい片目をつぶり、耳を押さえた。少しばかり鼓膜にダメージを貰ったようだ。ユウキは慌てた様子でキリトに現在の時刻を尋ねていた。

「キリト！ 今何時!？」

「え、何時って……今は19時前だな、何か予定でもあるのか？」

ユウキはキリトから時間を聞くと、「やつちまったなあ……」といった顔をしながら右手で頭をポリポリかいた。

「しまったなあ、19時から検診が始まるんだよ。今日ボク一回心臓止まりかけたみたいでさ、ちよっといつもより長い検診かも……」

「二度心臓が止まりかけた」さりげなくとんでもなく恐ろしいことをサラリとさもいつもの出来事かのように言う奴である。事実なのだから致し方ないが。

「そ、そうか……じゃあ、今日はここまでだな」

「……そうだね、もうちよっと一緒にいたかったな」

「また会いに来るさ、何なら毎日見舞いに来てやるぞ」

「ホント!? じゃあお言葉に甘えちやおつかなく?」

二人がそんな微笑ましいやりとりをしているうちに、お別れの時間がやってきてしまった。もっともっと一緒にいたいのが、そういうわけにもいかなかった。

キリトは自宅へ帰らなければいけないし、ユウキはログアウトして、倉橋の検診を受けなければいけなかった。

ユウキは寂しそうな表情を浮かべながらキリトの顔を見つめていた。そんなユウキを元気づけるかのようにキリトは優しい表情でユウキを見つめ返していた。ユウキを安心させるように、心配させないように。

「キリト……」

「何だ?」

「あの、ぎゅってしてほしいな……」

少しの笑みを見せた後、キリトはユウキの体をこちら側に向かせ自分の胸元にユウキを抱き寄せた。今度はほどほどの力を込め、優しく包み込むように。ユウキに自分の気持ち、想い、温かさ全て伝えるように……。

「大丈夫だ、絶対助けてやる。だから…待っててくれ」

「うん。ボク、キリトを……ううん、和人を信じてるよ……待ってるね……」

互いの体温を精一杯感じた二人はゆっくり抱擁を解くと、左手でメニューを開きログアウト欄を表示した。そして手を握り合い、視線を合わせると、笑顔を見せながら同時にログアウトした。

同日同時刻 神奈川県横浜市金沢区 横浜港北総合病院

「ん……んは……」

和人は現実世界に戻ると見慣れぬ天井を見上げていた。いつもの

自分の部屋ではない、白くてきれいな壁、見慣れないデスク、そして慣れない硬さのベッド。今いる部屋の周りを見渡すところでアミュスフィアをかぶっていたことを思い出した。

「そうだ、木綿季の病院に来てたんだ……」

和人は寝ている自分の体の上体を起こし、アミュスフィアをデスクに仕舞うと、後始末を終わらせ部屋を出て家路に着いた。その途中、木綿季の部屋を横切ることになり、その途中で和人は立ち止まった。

無菌室のガラス越しに、メデイキュボイドに体を包まれた現実の木綿季がベッドに横たわる光景が見えた。木綿季をずっと見ていると、突然どこからか和人の好きな声が聞こえてきた。

『かーずとツ!!』

その声はスピーカーから聞こえてきた。メデイキュボイドの仮想空間から木綿季が和人に向かって名前を呼んだのだ。その声を聞いた和人に自然と笑顔がこぼれていた。

『またね和人！ バイバイ！』

「ああ！ またな！ 木綿季！」

部屋を出る最後まで、カメラのレンズに視線を合わせながら和人は退出していった。これから忙しくなる、和人と木綿季の、文字通り本当に命を賭けた戦いの幕が切つて落とされた。

「……ん、あの人は……」

和人が帰路につくためにいそいそと病棟の廊下を早歩きで進んでいると、向こう側から見知った顔がこちら側に向かって歩いてくるのが確認出来た。

向こうも和人が歩いてきていることに気付き、読んでいた書類から視線を和人に映し、アイコンタクトを交わしていた。

「おや……和人君、木綿季君との面会の方は……もういいのですか？」

「はい、木綿季に俺の気持ちは……伝えました」

「……そうですか、それで……木綿季君は？」

「その事なんですけど……」

和人が改まった態度を取ると、倉橋は腑に落ちないような表情を見せていた。互いに自分の気持ちを無事に伝えられたのではないかと、そう思っていた。

確かにそれは成就された。木綿季と和人は互いに想いを伝え、恋人の関係になった。しかし、和人が倉橋に伝えたかったのはそのことではない。

それよりももっと、大事なこと、木綿季の身体のことについてだ。

「先生、単刀直入に聞きます。木綿季の病気の治る可能性は……あるんですか？」

和人から直球の質問を投げかけられた倉橋は、咄嗟に顔をこわばらせていた。この質問に答えるのはそう難しいことではない、しかし、その現実を受け入れるかどうかは、また別の問題だ。

倉橋は自分の顔にかかっている眼鏡の位置を直すと、医師の顔になり、今の木綿季の身体の現実を和人に説明した。

「では……正直に申し上げます。現在の木綿季君の容態ですが、ウイルスの活動が弱まっているとはいえ、AIDSの末期症状を迎えているという事実は変わりません」

「……………」

「HIVが弱まったも、体の免疫力が急激に戻るというわけではないのです。病気の根源を、HIVを……完全に駆逐しなくてはなりません」

倉橋の口からは、医師として淡々とした口調で木綿季の現状が語られた。和人も覚悟はしていたが、聞こえてくる残酷な現実には打ちひしがれそうになっていた。

倉橋も、木綿季の病気は無事に治ると告げることが出来れば、どんなに楽だろうか。しかし、HIVは……AIDSは、そんな簡単に片付けられる病気ではない。

免疫力というものは、それだけ人間がこの表社会で生きていくために必要なものなのだ。

「HIVウイルスを退治することは出来ないんですか……？」

「……………」

倉橋は黙りこくってしまった。当然だ、そんなことが出来ていたら、とつくに木綿季は治っている。木綿季の他にもAIDSで苦しんでいる患者が出ることも無い。

「私は医師です、藁をも掴む思いで現実的ではない手段を選ぼうとは思いません」

「……………」

「もしも……アレが手に入れば……」

倉橋は和人に聞こえるか聞こえないかぐらいの小さい声量で何かを呟いていた。彼の中にまだ木綿季を治すための算段があるとでもいうのだろうか。

「……いや、やめておきましょう。医師は軽率に話をするものではない……」

「……そう、ですか……」

「……他に、聞きたいことはありますか？」

「いえ、特には……」

「……わかりました」

和人は直接の主治医である倉橋から現実を聞かされると、両手で握りこぶしを作り、ふるふるすると震わせていた。

この世界は残酷だ、たった一人の少女を救えないぐらいに残酷に満ち溢れている。

普通に毎日を暮らせていることが、どれだけの幸運の上に成り立っているかというのが、身にしみてわかる。

しかし今はそんなことはどうでもいい、俺は約束したんだ。病気を治してやるって約束したんだ。病気を治して、一緒に外を歩くって、約束したんだ！

出来るかどうかなんて知ったことか、やるしかないんだ……！

「先生、俺は木綿季の病気のこと……、諦めたわけじゃないですから

……………」

「……………はい」

「……………また来ます」

「わかりました、お気をつけてお帰りください……」

「……失礼します」

和人はそう言うのと、厳しい雰囲気を出したまま、木綿季の入院している病棟を後にした。その背中を、倉橋は複雑そうな表情で見送っていた。

倉橋自身もわかっている、木綿季の病気は現実的に見て治るはずがない。自分だって治せるものなら治してやりたい。

しかし、出来ない。いくら医学が発達したとしても、治せないものは治せない。それは痛いほど今まで経験してきた。

今まで何人もの患者が自分の無力さゆえに目の前で死んでいった。悔しさに涙を流したこともあった。

そうならないよう、日々勉強した。医療に限界などない、そう思っ
て毎日過ごしてきた。

現実を見る。

医学が万能？ 笑わせるな、この世の全ての病気や怪我を治せるようになつてから言え。

日々進歩してる？ ならばこの目の前の少女を治してみせろ。出来るか？ 出来るわけがない。

「木綿季君……、私は……」

和人は病院のフロントで来院のパスを返却すると、そのまま自動ドアを出て駐輪場に向かい、自分のオートバイに跨った。

いつものようにメットを被ってエンジンを起動、サイドスタンドを蹴つてそのまま自宅に向かってバイクを走らせていた。そして和人は帰路につきながら、これからどうすればいいか考えていた。

倉橋はああ言つたが、木綿季の病気は本当に治るのか？ 一度整理

してみよう……。

木綿季の病状は末期だ。体の調子がいいと言っても、いつ死んでしまってもおかしくない。さらに厄介なのが木綿季の感染したHIVが「薬剤耐性型」だということにある。

現存する抗HIV薬では木綿季の体に感染しているHIVの活動を抑えられない。これが非常に難儀である。

HIVの活動を抑えられればAIDSの発症を長期的に渡って抑えられ、人並みに生きられる。薬と付き合う一生が続くが普通に暮らせるのだ。

しかし木綿季はそれすらも叶わない。刻々とHIVウイルスは木綿季の身体を蝕んでいった。ああ、神はなんて残酷過ぎる運命を紺野家にもたらしたのだろうか。

木綿季の母親が無事に出産を終えられていれば、帝王切開時の輸血用血液が違うところから用意されたものであれば、最悪、感染したHIVウイルスが薬剤耐性型でなければ……。

運命の歯車があまりにも狂いすぎてしまい、一気に少女にのし掛かっていった。何か一つでも違うことがおこれば、木綿季はここまで苦しい思いをしなくてすんだのに……。

違う！ 弱気になってどうする！ 感染してしまったものは仕方がない！ 木綿季に罪はない！ もう後には引けない、引いちやいけない！ 何が何でも絶対に……助けないといけないんだ……！

和人はオートバイのアクセルを握り、スピードを上げ夜のハイウェイを突っ切っていった。何から始めていいのか全くわからない、しやしやらねばならない。やらなければ最愛の少女が死ぬ。ならばやるしかない、俺が木綿季を助けるんだ、この命に代えても。

第11話く光明く

西暦2026年1月31日土曜日 午後21:05埼玉県川越市

和人は神奈川県横浜市と埼玉県川越市、往復4時間の距離をオートバイで走り抜き、満身創痍で自宅へと戻っていた。昨日から色んなことが起きすぎた。たった二日で恋人が出来て、今度はその恋人である少女の命を、医者でもない自分が救おうというのだから。

普通に考えたらまず不可能だ。自分は普通の学生だ。患者の命を救うのなら今からでも医学を勉強して医科大学に専攻し、医者のお卵になってさらに先生のもとで働きながら勉強をする。何年も何年も、一人前の医者になるにはそれぐらいの年月を必要とする。それが極めて一般的だ。

(それじゃあ遅すぎる！ 一体何年かかるんだ！ そんな悠長にしてる間に木綿季は死んでしまう！ 俺に時間なぞ残されていない、今すぐだ……今すぐに木綿季の病気を治してやる必要がある！ 何か、何か手はないのか？ 何か……！)

様々なことを考え、改めて木綿季の病状の重さを痛感した和人は、肩を落とし、重苦しい空気を漂わせたまま、玄関の扉に手を掛けて漸く帰宅した。

横スライド式の扉をガラガラという音とともに開けると、なんだか随分久しぶりのような気がする我が家の玄関が目に飛び込んできた。

和人が帰宅すると玄関がセンサーライトで明るく照らされ、その光とドアの開閉音、そして人の気配で和人が帰ってきたことを知った家族が、和人を迎えにきてくれた。

「ただいま……」

「お兄ちゃんおかえりなさい、遅かったね……」

まず和人を迎えたのは妹の直葉だった。和人と同じ黒髪を、首元まで伸ばしたおかつぱ頭に二本のヘアピンを差したヘアスタイル。子供とは思えない抜群のプロポーション。その健康的な体に赤色のセーター、下は紺色のジーパンを捲いていた。

直葉には出掛けることは伝えていたが理由などを全く知らせてなかったため、直葉は心配そうな表情で和人を見つめていた。和人が暗い表情を浮かべていたものだから尚更であった。

「ただいま……スグ。遅くなっちゃまって悪いな……」

「えつと別にいいよ、遅くなるって言ってたし。それよりご飯出来るよ？ もう冷めちゃったけど……」

直葉は和人の袖を引っ張るとリビングまで連れていこうとした。そこにもう一人の和人の家族が姿を現した。義母の桐ヶ谷翠である。

前髪を二つにかき分け、それ以外の髪を後ろでまとめたショートヘア。生地が薄めの黒のジャケットにクリーム色のセーターに下半身はすらっとした細い脚が強調された黒のジーンズというコーディネートだ。直葉と和人のファッションセンスはこの翠譲りなのかもしれない。

和人は幼いころに両親を交通事故で亡くしており、母親の妹の翠に養子として引き取られた。直葉はこの翠の一人娘であり、和人との本当の血縁関係は従姉妹ということになる。

既に当人たちはその事実を知っており、知っていても隔たりなく今も良好な家族関係を築いている。翠は和人の事を本当の息子のよう、直葉は本当の兄のように慕っている。

和人も自分が養子だと知った当初は混乱し、現実から目を背けていたが今は翠を、直葉を掛け替えのない大切な家族として接している。

翠は直葉に腕を引かれ、暗い表情を浮かべている和人を玄関まで出迎えに来た。最愛の息子がこんなにも元気が無く、疲れ切っている様子を見て翠も心配そうな表情を浮かべながら声を掛けた。

「おかえりなさい和人。随分遅くなったのね……一体どうしたの？」

「ただいま母さん……、ちよつと……いろいろあつてさ……」

「とりあえずご飯食べちゃいなさい、あなた今日はお昼前にしか食べてないでしょ？」

「あ……うん、いただくよ……」

さすが母親だ、義母とはいえ和人のことは熟知している。血のつながりなど関係なく、本当の息子のように可愛がっている。母親の鏡の

ようなお母さんだ。

翠に晩ご飯を食べるように言われた和人は、ダイニングに疲れた足取りで向かい、そのまま食卓につくと用意されていた晩御飯に箸をつけた。

いつもみみたいな食欲はないが折角母さんが作ってくれた食事だ。残さず食べなくては。しかしそう思いつつも今日は食欲が全然ない、食欲よりも上回っている気持ちがあったからだだった。

「和人……食べないの？」

翠は心配そうに声をかける、いつもは出されたものは全部平らげていた息子が今日は全く夕飯に箸をつけようとしていない。今夜のおかずは和人の好きな豚の生姜焼きに温かい豚汁だ。

だということにもかかわらず、和人は箸を手を持ったまま俯いてしまっていた。考え事か悩み事があるのだろうと、翠は表情を一変させ、真剣な眼差しを送りながら和人に質問を投げつけた。

「何かあったのね？ 言ってごらんさい」

一発で見抜かれていた。和人は目を丸くして「どうして？」といった表情で翠に視線を送っていた。何か言いたげな和人に対して当然のように翠は母親としての対応をみせた。

「母さん、どうして……」

「何年あなたたちの母親をやっているとってるのよ、伊達に二人の子供を育ててないわ」

「……………」

和人は翠に、今自分が置かれている状況を話そうか思いとどまっていた。木綿季を助けると意気込んだはいが、彼女を助ける方法にまるで心当たりがない。

ならいつそ母親の翠に相談してみてもどうだろう、しかし母さんは医療関係者じゃないし、話したところでどうにかなるだろうか？

そんな考えを頭の中で巡らせていた。

「何か困っていることがあるんじゃないの？ 昨日までのあなたと全然様子が違うもの」

「え……、えっと……」

「話してごらんなさい、一人で悩んで抱え込むのはやめなさい。あなたには……私たちが、家族がいるんですよ？」

その言葉を聞いた瞬間、和人は高ぶる感情を我慢できずに、涙腺を崩壊させた。大粒の涙が次々と和人の瞳から滴り落ち、頬を伝いテールブルを濡らした。両手と両肩に力が入り、体を小刻みに震わせて和人は泣き続けた。

「お、お兄ちゃん……!?!」

急に泣き出した和人に二人は驚いた。直葉は慌ててズボンのポケットからピンク色のハンカチを取り出して、和人の涙を優しく拭いた。しかし拭いても拭いても涙は止まらない。

直葉は翠と視線を合わせ、どうしたらいいかと考えた。直葉は一向に泣き止まない和人の両手を優しく握り、和人が落ち着くのを待った。

数分の沈黙が続いた後、和人は漸く涙が止まり、落ち着きを取り戻していた。翠はそんな和人の様子を見て、優しく何があったのかと声を掛けた。

「和人、何があったか……話してちょうだい？」

話せる状態にまで落ち着いた和人は、瞳に溜まっていた涙を自分で手で拭うと、体を震わせながら重たい口を開き、今日、何があったのかを直葉と翠に話し始めた。

「……俺の大切な人が……遠くに行っちゃまうかもしれないんだ……」

「え……、大切な人って……明日奈さんのこと？」

直葉からの返答に和人は首をゆっくりと横に振って否定した。和人と木綿季はつい今しがた恋人になったばかりだ。従って当然和人の周りの人間はその事実を知らない。

直葉も和人にとっての大切な人は、当然明日奈のことだと思っていた。しかし和人の言う大切な人とは、今は木綿季のことだった。

「スグ、さつき俺……病院に行くって言って出てつたら？」

「えっと……うん、なんか横浜がどうのって……」

「横浜港北総合病院に面会に行ってきたんだ。そこに俺の大切な人が……いるんだ」

「え……横浜の病院って……」

直葉は首をかしげて和人の言っている人物に心当たりがないかどうか自分の頭の中を探っていた。

少なくとも明日奈は体を壊したということは聞いていないし、周りの友達や和人経由で知り合った友人達も怪我や病気だということは耳にしていない。直葉は全くその横浜の病院と自分の周辺の人間に関連性を見いだせなかった。

「ねえ、お兄ちゃんがお見舞いに行った人って……誰なの？」

「……ユウキだ」

「え……？」

「俺は今、ユウキと付き合っている……」

直葉は目を丸くして驚いた。一気に自分の知らない情報が入ってきて混乱してしまっていた。まず和人がユウキのいる病院に行ってきたこともそうだが、和人とユウキがそういう関係になっていたことに驚きを隠せなかった。

「お兄ちゃんと……ユウキちゃんが？」

「ああ、一ヶ月前……俺、明日奈と別れて塞ぎこんでただろ？ ユウキはそんな俺を元気づけようとしてくれたんだ」

「……………」

「決闘デュエルしたり、飯食ったり、一緒に冒険もしたよ」

「そうだったんだ……」

「……気が付いたら好きになってた。あいつのことを守りたいって、一緒にいてやりたいって、思うようになった……」

木綿季のことを話し出すと、和人の表情はまた暗くなってしまうていた。普通は恋人が出来れば嬉しくなり、喜び舞い上がるはずなのだが、その様子は一切うかがえなかった。

お兄ちゃんの様子がさつきから変だ、何でこんなにも悲しそうにしているんだろう……と、直葉は心配そうな表情で和人を見つめていた。

「でも……でも……」

「お、お兄ちゃん……？」

「ユウキが……遠くに行ってしまうかもしれないんだ……。俺の手の……届ない……遠くに……！」

絶望の表情を浮かべている和人の様子を見て翠が察した。急に家を出て、駆け付けなければならぬほどの事情を抱えた息子の恋人、そして帰宅するなりどうしようもなく泣き崩れてしまった姿を見て、翠は和人と木綿季がどのような事態に追い詰められているかというのを、理解してしまった。

「和人、その子……病気なのね？」

「え……う？」

直葉はまたもや驚愕の事実には驚きを隠せ勝った。ユウキが、あの絶剣のユウキが病気だということにだ。

ユウキが病気だということは、スリーピング・ナイツのメンバーは勿論、アスナやキリトといった一部の知り合いにしか公言していない。よって直葉やSAO時代の知り合いも誰一人ユウキの体のことを知らないのだ。

実際ユウキはALOでは元気に振舞っていた。その活発で元気いっぱいな様子からは、とても彼女が重たい病気に侵されているなどとは、とても想像できないだろう。直葉が知らないのも無理はない。

翠に核心を突かれた和人はゆっくりと首を縦に振った。翠はその言葉を聞いて、何故和人が肩を落としているかを理解してしまった。

「和人、その子の病気は……何なの？」

翠は落ち着いた口調で冷静に和人に木綿季の病気を聞いた。こういう時大人の存在というものは非常にありがたい。子供だけだと冷静な判断はそう簡単には出来はしない。翠は和人の頼れる心強い味方であった。

和人は翠に聞かれると、ゆっくりと口を開き、木綿季が侵されている病気の名前を口にした。

「後天性免疫不全症候群。 AIDSだよ……」

「え……AIDS!？」

和人の口から病名が口外された瞬間、直葉は口を手にあて、目を見開いて驚愕の表情を浮かべていた。AIDSに侵されているという

ことが、木綿季の未来がどうなってしまうかということを知っていたからだ。

AIDSが治ったなどという事例は耳にしたことがない。ここに来て漸く、直葉は和人がどのような崖っぷちに立たされているかというのを理解した。

「ユウキちゃんが……AIDSだなんて……」
「……………」

これにはさすがの翠も驚きを隠せない様子だった。AIDSというものは世界的に有名な病気だ。世界各国でAIDS専門に研究学会や医療連盟組織が立ち上げられているほどだ。それぐらい深刻な病気なのであった。

翠は顎に手を当てて、今の状況を整理していた。そしてしばらくして、なにか思い立ったのか、翠は姿勢を正して、はきはきとした声で和人に聞いた。――

「和人は……どうしたいの？」
「……………」

翠からの突然の問いに、和人は困惑の表情を見せた。これからどうしたいかと、そんなこと聞かれるまでもない。俺は木綿季を助けたい、病気を治してやって現実世界で一緒に生きていきたい。

あの時約束した、絶対に助けてやるって。しかし……今思えばなんて無責任な約束をしてしまったんだと、後悔の念も抱いていた。

「お、俺は……………」

「答えなさい、和人」

「お、お兄ちゃん……………」

和人は再び涙を流し、自分の心に思っていることを外に吐き出した。本当に木綿季を助けてやれるかどうかはわからないし、仮にその方法があるとしても俺に出来るかどうかわからない。

だとしても、引き下がるわけにはいかない。俺が引き下がったらどうなる？ 誰が木綿季を救う？

誰があの罪もない少女を助ける？ 先生か？ 明日奈か？

……違う、俺だ。俺がやるしかない！ 俺がやらなければ……木綿

季は、木綿季は……！

「俺は……木綿季を助けたい。助けるって約束した……！ もう一度現実世界と一緒に歩こうって。いろんなところに遊びに行こうって約束した……！ 俺を信じろって！ 絶対に助けてやるって！」

和人は木綿季と約束したことを全て二人に話した。自分がどれだけ絶望的な位置に立たされているかも。これからどうすればいいかわからないことも。それでも木綿季を助けたいということ。

翠は再び考え込んでいた、母親として今和人にしてあげられること何だろうと？ 自分はPC情報誌の編集者であって医療関係者ではない。和人の恋人の病気を治してあげることが出来ない。

しかしそれ以外にも何かしてあげられることがあるかもしれない。息子の悲しい顔など見たくない、そう思った翠は厳しい表情で和人に強く言葉を掛けた。

「和人、その言葉に嘘はないのね？」

「え……」

「その子との約束と、和人の決意に嘘偽りはなかったって聞いてるのよ！ 和人ッ！」

翠は手のひらでテーブルをバシッと叩き、強めに和人に言い放った。わがままな子供を、悪いことをした子供を叱りつけるように。和人の覚悟が生半可なものでないか、口だけの男でないかどうか問いただしていた。

和人は涙を流し続けながら木綿季への想いが嘘ではないことを証明するように、胸のうちの想いを木綿季に対しての想いを全てぶちまけた。

「嘘なんかじゃない！ 俺は……俺は、木綿季を助けたい……！ 木綿季を……！」

和人は言葉にならない言葉を発し、テーブルに突っ伏しひたすら泣いた。俺はなんて無力なんだろう、何であんな無責任なことを言ってしまったのだらう。後悔と罪悪感で押しつぶされて気が狂いそうだ。

どうせならこのまま死んでしまえばどうだろうか、そうすればあちら側で……きつと木綿季に会えるかもしれない……。

(ボク、和人を信じてるよ……)

だめだッ！ 木綿季は俺を待ってくれている！ 治る見込みのない自分の病気を治してくれるのを待ってくれている！

諦めてたまるか、諦めてたまるか！ 諦めるなど言った俺が諦めてどうするんだ！ 何がなんでも治すんだ！ 助けるんだ！

俺が動かなければ木綿季が死んでしまう……！ 何が出来るかじゃない、やるしかないんだ!! 俺が……やるしか……！

和人は弱気な自分を心の中で押し殺し、何かを決心したような表情になり、流れ続ける涙を自分の手で拭い去るとテーブルの上に両手を置き、真剣なまなざしで直葉と翠に向かって、思いの丈を話し始めた。「母さん……俺は無力だ、なんの力もない。口先ばかりで後の事なんて何にも考えてない」

「和人……」

「でも、でも……それでも俺は木綿季を助きたい……。助けてやりたい！ だけど俺の……俺だけの力じゃダメなんだ……」

もう手段は選んでいられない、木綿季が助かる為ならなんだってする。この俺のちっぽけなプライドでも何でもいい、全て犠牲にしてもいいから木綿季を助きたい。

そう思った和人は椅子から立ち上がり、深く息を吸い込み、すべて吐き出すと顔つきを変え、深々と頭を下げ翠に助けを求めた。

「俺は木綿季が好きだ！ 失いたくない！ 傍にいてほしい！ でも俺は無力だ……。だから頼む母さん!! 俺に力を……、力を貸してくれ……ッ!!」

和人は頭を下げたまま静止していた。漸く和人の口から木綿季を助けてやりたいという覚悟を汲み取った翠は「やれやれこの子はしようがないわね」といった顔をして、自分のビジネスバッグから仕事用のノートパソコンとタブレット端末を取り出した。

そしておもむろにタイピングを始め、インターネットで何かを調べ始めた。

「直葉、悪いのだけれどコンビニにいつて栄養剤ドリンク剤を買ってきけてくれないかしら、たぶん今夜は徹夜になると思うから。そして和人、アナタはしばらく学校を休みなさい」

直葉は困惑しながらうんと返事を返し、翠に言われるがまま財布と携帯を手に持ち、近くのコンビニまで言われたものを買いに掛けた。

和人は目にも止まらぬスピードでタイピングとマウス操作を続ける翠の行動に目を奪われていた。

「え……か、母さん……？」

「何をぼさつとしてるの！ あなたも調べるのよ、AIDSについて。そして探すのよ、その子を治す方法を。必ずあるはずだわ。和人は根拠もなしに物事は言わない子だもの、だったら治せるはずでしょ？」

私はPC情報誌の編集者よ？ 誌を掲載するには情報が命、なんだからね？」

「かあ……さん……」

和人は三度涙を流した。昨日今日で何度泣いただろうか。SAOをやって様々な出会いと別れを繰り返していくうちに、和人はすっかり泣き虫になってしまっていた。

そんな感情豊かな和人を、翠は母親らしく優しく見守っていた。

「ホントに昔から泣き虫ね…和人は…」

翠はそういつつも、表情は穏やかであった。和人は翠に感謝してもしきれないだろう。両親を亡くした自分を引き取り育ててくれて、今度は自分の愛する人の命を救おうと力を貸してくれている。

自分と木綿季の恩人に深く感謝をし、タブレット端末を受け取ると和人もAIDSについて調べ始めた。

「Human Immunodeficiency Virus」

「ヒト免疫不全ウイルス」 通称HIV。

人間の血液中を流れる免疫細胞に感染し、これらを破壊してしまう。免疫細胞が破壊されてしまうと、日常のどこにでもあるちよつとしたウイルスですら、脅威となる。

目には見えないが私達の周りには様々な細菌やウイルスが漂って

いる。これらは通常ならば私達の体には何の影響も与えない。

私達の体の免疫細胞がこれらを撃退し、感染させないようにしてくれているからだ。しかし、HIVに感染し、その免疫細胞を破壊されてしまうと、たちまちこれらから身を守る術がなくなってしまうのだ。

木綿季はまさに、今この状態となっているわけだ。

免疫機能が低下した感染者は、一生薬を飲み続けて、HIVの活動を抑制し、免疫力が落ちないようにするしかない。

だが、木綿季に感染したウイルスのように、薬に耐性を持ったHIVウイルスも実在する。そうになると、もう感染するウイルスや細菌が全く存在しない「無菌室」にはいるしかなくなってしまうのだ。

そして外からの細菌やウイルスから身を守る手段がなくなってしまう、あらゆる感染症になりやすくなってしまう状態のことを「後天性免疫不全症候群」「Acquired immunodeficiency syndrome」「エイズ」 通称AIDSと呼んでいるのだ。

よく勘違いされがちだが、AIDSというのは病気の名前ではなく、症状の名前だ。

免疫細胞を破壊され、薬での抑制も効かず、無菌室という密室から出られず、寝たきりの生活を続けている木綿季が、今どれだけの崖っぷちに追いやられているか、理解できただろうか。

そして彼女は、AIDSの症状の末期を迎えている。この状態の彼女を救うには、もう元凶であるHIVを残らず駆逐して、免疫機能を回復させるしか手段は残されていない。

正に和人と木綿季は、崖っぷちに立たされて……いや、既に崖から落ちて、這い上がるようにしているのだ。

時刻は翌日深夜に差し掛かろうとしていた。

和人と翠はひたすらにAIDSについて調べ続けていた。感染源、

病状、治療方法、対策等の基礎知識から、過去に治った事例がないかどうか等を徹底的に。

時折目元を指で押さえたり、肩や腰を押さえ、疲労の様子を見せながらも時間があまり残されていない木綿季のために、ひたすらに指を動かして続けた。

「木綿季ちゃんのHIVは薬剤耐性型だと言ってたわよね？ 厄介なものね、病気を患うのに薬が効かないなんて……、病気を治すのに薬は必要不可欠だっというのに……」

「ああ、俺も何度も思ったよ……。なんで木綿季ばかりこんな不幸な目にあってるのかってな、自分のことじゃないのに運命を呪いそうになったよ……」

「でも、木綿季ちゃんの運命もそう捨てたもんじゃないんじゃない？」
翠がそう言うと和人はタブレットの操作をやめ、翠を見た。どうしてそんなことを言うのか、と。

薬剤耐性型のHIVに感染したのが、AIDSを患ってしまったのが捨てたもんじゃない？ 和人は一瞬翠が何を言っているのか信じられなかったが、その思い違いは翠の次の一言で一蹴された。

「和人と出会えたこと、それだけは幸運だったと思うけれど？」

「え、あ……うん。そう……だな……」

和人は完全に固まってしまった。何でこの母親はさつきから凶星ばっかりついてくるのだろう。

和人は頬を赤くしながらうつむき、バツが悪そうにタブレットの操作を再開した。子供ながらにこの母親には一生敵わないなど悟ったのだ。

「さ、お喋りはここまで。絶対今夜中に手がかりを見つけてるわよ、時間がないんでしょ？ 木綿季ちゃんには」

翠は栄養ドリンク剤を一気に飲み干すと気合を入れなおし、引き続きAIDSについて調べ始めた。和人もそれに釣られるように栄養ドリンクを一気に胃に流し込んだ。

自分の両頬を思いつきりバチンツとひっぱたき気合を込め、手がかりを探した。

(何でもいい……何でもいい！ 何か……木綿季を助けられる方法は……ッ！)

和人は必死でAIDSについて調べていた。しかし基本的な対策と治療法が載ってるだけであって完治までの情報は載っていなかった。

ダメなのか……俺は？ 木綿季を助けられないのか？ たった一日で道を閉ざされるほど……俺は無力だったのか……！

和人が諦めの様子を見せている一方、翠は一人もくもくと指を動かして、AIDSとHIVに対して調べを続けていた。何か見落としもあるかもしれないと、様々なキーワードを打ち込んで検索といった動作を繰り返していた。

「……それにしても、薬が効かない病気だなんて反則にもほどがあるわ。薬による治療がダメならあとは手術ね……。でもAIDSを治す手術なんて……聞いた……こと……？」

その時、翠は何かを思い出したかのような顔をし、そしてすさまじい速さでキーボードを打ち、また何かを調べ始めた。

とあるキーワードを打ち込み、検索結果から出てきた記事をクリックして、それを読むと翠の目つきが変わった。

翠は探していた答えをついに見つけ出したのだ。その表情の変化を、和人は見逃さなかった。

先程まで張り詰めた空気に包まれていた中、ここにきて一つの光明が差し込んできた気がした。

「これだわ……」

「母さんもしかして……もしかして……」

「見つけたわよ、木綿季ちゃんが助かる方法……!!」

第12話く道筋く

「見つけたわよ、木綿季ちゃんが助かる方法……!!」

翠の口から発せられたその言葉を聞いた瞬間、和人は目を見開き大きく息をのんだ。木綿季が助かる？ 木綿季の病気が治る？

そのことを考えただけで胸からいろんなものがこみ上げてきた。しかし和人は、はやる気持ちを落ち着かせ、あくまでも冷静に翠に尋ねた。

「母さん見つけた……って、治るのか？ 木綿季の病気を……治せるのか!？」

わずかに差し込んできた光に、気持ちの高ぶりを抑えられない和人に向かつて、翠はニヤツと不敵な笑いを見せると、ノートパソコンの向きを片手で180度変えて、自分が調べ辿り着いたページを和人に見せた。

和人も急いでそのページを確認する。そのページには、今まで和人が一度も目にしたことのないワードが書かれていた。

「こ、骨髄移植……!？」

翠が探し当てたのは骨髄移植ドナーバンクのホームページだった。骨髄に限らず、ドナーバンクはいたるところに存在している。角膜、心臓、肺、腎臓、腸など様々だ。

その体の部位の移植が必要になったとき、適合する部位のドナー登録をしている提供者からその部位を譲渡してもらい、患者に移植手術を施す。

拒絶反応がなければそのまま自分の体の部位として取り込み、そのまま治ってしまうケースがほとんどだ。もちろん、骨髄移植もその例外ではなかった。

「この記事、見てみなさい。英語で書かれてるから重要なところだけ訳すわね」

「あ、ああ……」

翠は重要なワードが書かれている記事を、指さしながら和人が目で

追えるように英文を訳し始めた。数学などの理系は得意な和人だが、英語等の文系は少し苦手なため、これは非常にありがたかった。

機械による自動翻訳ではなく、人が翻訳したほうがちゃんと伝わりやすいのもあるからだ。

「2013年、アメリカでHIVに感染してた患者の二人に、骨髄移植を施したことによって体内にあるHIVウイルスが完全に消滅した、との報告が入っているの。今のところ再発の報告は上がっていないわ」

「こ、この骨髄移植で木綿季が……助かるのか……？」

骨髄移植。現時点でHIVに唯一対抗できると言われている治療方法だ。医療的なメカニズムはまだ明らかになっていないが、白人が持つ骨髄の中には、HIVに対して耐性を持っているものが存在する。

その骨髄液をHIV感染者に移植するというものだ。移植された骨髄は、HIVを駆逐する性質を持った血液を作り出していく。その作り出された血液は体中の血管を循環しながら、HIVを駆逐し続けていく。これが骨髄移植手術による治療法だ。

この治療法は今の和人に、そして木綿季にとってまさに光明だ。絶望の暗黒のクレバスに叩き落された状態で、一本の丈夫なロープが降りてきて、希望の光が差し込んでいたような気がした。これが上手くいけば、木綿季を助けられるかもしれない……！

「結果だけ言うと、この移植手術が成功すれば木綿季ちゃんは助かるわ。ただね、手術までいくのにも……大変な山があるのよ……」

「や、山……？」

「今度はこの記事、訳すわね。HIVに耐性を持つ骨髄は、ドナー登録者の白人の1%程の確率で存在する。そして患者のHLA、つまり細胞の型ね。そのHLAが合致すると適合と見なし、手術ができるの。ここまではいいかしら？」

「あ、ああ……」

「HLAの型が合わないと、その患者さんが本来持つ細胞が、外部から移植された細胞を激しく攻撃するの」

「こ、攻撃……!?!」

「ええ、病状によつてはそのショックで死んでしまふかもしれない。だから、助かる確率もあるけど死んでしまふ確率もあるってことね……」

概要の説明を聞いた和人の顔が強張っていた。何で世界はこんなにも残酷で厳しいものなんだろうと、世の中の理不尽さを恨んでいた。

折角見えた一筋の光が、暗がりでも唯一残された残り少ないロウソクの火のように、また消えそうになるのを感じてしまっていた。

「……………」

「和人、今話したコトを前提として話すわよ？ うまいことHIV耐性の骨髄を持った白人がいて、その骨髄のHLAが木綿季ちゃんと合致するとするわね」

「……………ああ……………」

「でもそこで、その骨髄を持つてる白人がドナー登録しているとは限らないの」

「……………」

何だよ……………結局無理なんじゃないか。何なんだよこれ……………さんざ木綿季を助けると決心したところで、現実がこんなじゃもう……………打つ手がないじゃあないか……………。

畜生……………畜生……………チキシヨウ……………ツ!!

「和人、腐るのはまだ早いわよ」

目の前にそびえ立ったあまりにも高すぎる壁に、立ちふさがられて絶望している和人に、翠はまだ諦めるなど声をかけていた。雲をも掴むような話だというのに、翠はまだ諦めてはいない様子だった。

「え……………あ……………うん。ごめん……………」

「いい？ 聞いて。確かにとんでもなく確率は低いわ。太平洋のど真ん中に落つことしたガラス玉を探しだすような確率よ。でもね、逆に言うとそれらを全て成し遂げてしまえば、木綿季ちゃんは助かる」

の

「全て……………成し遂げてしまえば？」

翠は引き続き冷静に今の状況を分析し、木綿季が助かるための点と点を線で結び、和人に示して見せようと話を続けていた。

今の和人にとって、翠ほど頼りになる存在はいないだろう。医師ではないのに……いや、医師でないからこそ、別の視点から木綿季を助け出す方法を探し出せているのかもしれない。

「この記事を読む限り、絶対にHIV耐性の骨髄を持つ白人さんは存在する。今もどこかで生活してるわ、きつとね。そして木綿季ちゃんのHLAに合う骨髄を持つ白人さんもきつといるわ！」

「で、でも……登録者の1%しかいないんだろ……？」

「そうねえ、1%って言うてるけど、探し出せてないから1%なのよ。探し出すことができれば、その可能性は無限に上がっていくと、私は思うのだけれどね？」

翠は珈琲を片手に和人に笑顔で淡々と説明してみせた。

木綿季の病気を治すためのドナー登録者が少ない？ なら増やせばいい。そうすればドナーが見つかる確率は飛躍的に上がる。

分母が少なければ分母を増やせばいい。実に単純だがある意味合理的なやり方だった。和人は生きてきた今までで一番、翠に対して尊敬の眼差しを向けていた。

こんなに母さんがかっこよく見えたのは生まれて初めてかもしれない。やはり母さんはすごい、俺を引き取ってここまで育て、自分は情報誌の編集者をやっているだけのことはある。的確に情報を掴み、分析し、結果につなげている。

「じゃ、じゃあ……やり方次第で木綿季にあうドナーも……！」

「きつと見つけられるはずだわ、それについては多分……アナタ次第よ、和人」

翠はそういうと片手を和人の頭にポンと乗せ、撫で始めた。いつもは和人がほかの女の子にやっている仕草を、今回は逆にやられてしまっていた。

そして和人は本日帰宅してから四度目の涙を流し、思わず翠に抱き着いていた。なんだかんだで甘えん坊な和人に、翠は世話が焼ける子ねといった表情を浮かべながら、優しく和人を抱擁した。

母親は子供が何歳になっても、やはり母親だったのだ。

「母さん……ありがとう、ありが……とう！ 木綿季が……木綿季が助かるかもしれない……！」

「……いい和人？ あなたは私の息子なのよ。直接の血のつながりはないけれど、もう私の大切な息子なの」

「うん……、うん……！」

「だからいつでも頼りなさい。母さんは力になるわ、あなたがどんなに追い詰められても、世界中の人が敵になっても、母さんだけは……あなたの味方になってあげるからね」

翠から優しい声をかけ続けられた和人は、声を殺して泣き続けた、もう向こう何年分の涙をここ数日で流してしまったのではないだろうか。

それほどここ何日かがあまりにも激動過ぎたのだ。しかしまだ戦いは始まったばかりだ。和人が本当に頑張らないといけないのは、むしろここからだ。

「……よかつたね、お兄ちゃん……」

薄暗いリビングの影で、妹の直葉が兄のことを見守っていた。兄の儂い恋を応援していた。密かに兄に対して、兄妹以上の感情を持ってしまっても、自分の気持ちを押し殺していた。

そして直葉はゆつくりと足音を殺して階段を上り、自分の部屋へとたどり着くと、ベッドにそのまま身を投げて、ひたすら一人で泣き続けた。

「もう大丈夫かしら？ 和人」

「うん、ごめん……もう大丈夫だよ……」

和人は気持ちを切り替え、顔を服の裾でゴシゴシとこすって涙を拭い、これからどうすればいいかを考えていた。

木綿季を治す方法は分かった。しかしその骨髄を持つ人をどうやって見つけ出したらいいか……。

「ねえ和人、一つ思いついたのだけれど」

「な、何を……？」

翠は何杯目かわからない珈琲を全て飲み干すと、深呼吸をしてから自分の頭に浮かんだ考えを和人に語り出した。和人はそれを畏まった姿勢で椅子に座りながら、耳を傾けた。

「よくテレビでこの子供たちを救おうとか、病気から立ち直るために……とかって企画の番組あるじゃない？」

「ああ……あの手の番組はよくあることだよ。視聴率を稼ぐためにお涙頂戴劇をやってるテレビ局がほとんどだろ？ チャリティーだなんだかんだ言ってるさ」

「そうね……、でも宣伝力はものすごいわよね？」

「せ、宣伝力って……、まさか木綿季のことをテレビで取り上げて骨髄を提供してもらおうって魂胆なのか……？」

和人はその考えには賛同出来なかった。確かにどんな手も使うと決心したがさすがにそれはちよつとやりたくなかった。

何故かあの手の番組はどこかやらせくさいというか、うさん臭さというものを感じていたからだ。そんな連中と同じ手を使うことに抵抗を感じていた。

「でもテレビの宣伝力は大したものよ？ 出来ればそうしてあげたいけど、テレビは視聴率を取るために番組を作っているの。言い方は悪いけど末期症状で死にかけている女の子を取材対象にしようなんてことはしないでしょね……」

「……はあ、大人って汚いな……」

「ええ、大人だけじゃないわ。世の中汚いことだらけよ、私の仕事だって情報を集めて記事にするのが仕事だもの。少なくとも私はやってないけど情報情報を掴むために手段を選ばない人がたくさんいるってのも事実よ」

和人は思った、もしかすると俺もその汚い手段を使わざるを得ない状況が迫っているのではないかと。しかし木綿季の命は長くない。もうすでに手段は選べない時点まで来てしまっているのだ。

どうにでも出来なくなってしまうたら、俺もその汚い手を使う時が

来てしまうのかもしれない。

「まあテレビを使わずともそれ相応の、いやそれ以上の宣伝効果を望めるメディアが存在すれば……話はまた違ってくるわね。でも……そんなのありっこないし、困ったわね……」

テレビ以上の宣伝力を持つメディア。その点に関してだけは翠もお手上げであった。PC情報誌の編集者といっても影響力があるわけでもテレビ局にコネがあるわけでもない。流石の翠にもマスコミを動かすほどの力はなかったのだ。

「テレビを超えるメディア……そんなのあるわけ——」

その時和人に電撃が走った。何も宣伝力を持つのはテレビだけではない。俺には……、いや俺たちにはアレがあるじゃないか！ 今全世界を震わせている革命的な技術が活かされたアレがあるじゃないか！

これだ、これしかない！ もしこれがだめだった場合、木綿季は死ぬ。H I Vに殺される。もうこれに賭けるしかない。

それぐらいの一世一代の大勝負を和人は考えついた。木綿季を助けるためのシナリオが頭に浮かんだ和人は、意味ありげな笑みを浮かべて、独り言を呟いていた。

「フツ……ありがとうよ、茅場昌彦。今日ほどアンタに感謝と尊敬の意を込めた日はないかもしれないな……」

「ど、どうしたの？ 和人……」

突如不気味な笑みを浮かべながらニヤニヤと独り言をつぶやく息子を見て、翠は若干引き気味に心配そうに声を掛けていた。

別に和人はおかしくなったわけではない、自分の描いたシナリオに、またもやあの茅場昌彦が関わってくると考えて、結局あの男の掌からは逃げられないんだなあ、皮肉の笑みを自分自身に見せていたのだ。

だが、その男のお陰で木綿季の命が助かるかもしれないと思ったのも事実だ。だから和人は茅場昌彦に対して、皮肉を込めて感謝の言葉を贈った。

「母さん見つけたよ……！ 木綿季を助ける方法を！ もうこれしか

ない！ これしか考えられない！ 俺の今生のすべてをささげてこの計画を成功させる。これが成功しなかったら……もう全部終わら……。だけど絶対に成功させる！ させてみせる!!」

さつきまで悲しんでいたと思えば、急に元気な姿を見せ、生き生きとした表情に変わった和人を見て、翠は頭に？マークを浮かべていた。一体全体どうなっているかわからないが和人が元気を取り戻したのならそれでいいと、困惑しながらも翠は和人に応援の姿勢を見せていた。

「えつと……私はなんだかよくわからないけれども、母さんに出来ることがあつたら協力させてもらおうわよ?」

「ああー。むしろ母さんだからこそお願いできるかもしれない……! そのときは頼むぜ、母さん!」

和人は木綿季を助けるために思いついたことを、一旦自分の頭の中で整理をして、一つ一つ丁寧に翠に話した。翠はその話を聞いていくうちに、真顔から段々と疑惑の、そして困惑した表情になり、最終的には驚愕の表情とこの短時間で顔色をいくつも変えて、和人のとんでもない計画に驚きの声をあげてしまっていた。

「え……えええええ……っ!」

深夜だというのにご近所迷惑レベルな声で翠が大声を上げた。馬鹿げているが現実的かもしれないその提案にうつかり大声を上げてしまった翠は慌てて口元を押さえ、家の周りに声が響いてないかどうか心配をしたが、遠くで犬の遠吠えらしきものが聞こえる程度で幸いご近所の眠りを妨げるようなことにはなっていないようだった。

「な、なるほど……出来なくもないけど、和人らしい提案ね……それは……」

翠は「やれやれ和人には参ったわ」と溜め息まじりに悪態をこぼし、ポットに入っている最後の珈琲をカップに入れると、そのまま一気に飲み干した。私の息子ながら……いや、私の息子だからこそこんなことを考え付くなんてと、褒めてやりたいところだった。

「それにしても……あなたが世界的に有名なあの人と面識があつたなんて驚いたわ……」

「面識どころか、貸しがあるぐらいだよ。それにつけこむわけじゃないけど……手段は選んでいられないんだ。今回は全面的に協力してもらおう」

和人は深夜だというのにもかかわらず、早速協力のつてがある人に、自分のスマートフォンから連絡を入れた。この時間に電話をかけるというのだから、さぞかし相手もいい迷惑なことだろう。

しかし和人は世間的な都合にかまってなどいられなかった。今すぐに動かないといけない。今日生きている木綿季が、明日も生きていられるとは限らない。今できる行動を今やり、迅速に結果を出さなくては。

幸い、和人の連絡を入れた相手は最初こそ眠りを妨げられて不機嫌になつていたが、和人の真剣な態度と、木綿季を助けたいという気持ちを汲み取ってくれたのか、喜んで協力してくれることになった。

一人の女の子を救おうとしている、ひたむきで真っ直ぐな姿勢の自分の息子の頼もしい姿を見ていた翠は、色々あつたけどすっかりたくましくなつたわねと、微笑ましそうに自慢の息子を見つめていた。

やがて和人は話をつけたのか通話を終えて、スマホの画面に表示されている赤い受話器のアイコンをタップしていた。計画の第一段階、いや地盤がまず固まったことに安堵の表情を浮かべていた。

「ふう……、ひとまず協力してくれることになったよ」

「よかつたわね……。休学届は明日、母さんが出しておいてあげるから、お友達への挨拶なんかはあなたがやっておくのよ？　和人」

「ああ、ありがとう母さん、本当に……。本当にありがとう！　母さんがいなかったら……。木綿季を助けられなかったかもしれない……！」

「大袈裟ねえ……。そのセリフは木綿季ちゃんが治つて、和人がこの家に連れてきてから言いなさいな」

和人は母への感謝の気持ちでいっぱいだった、木綿季への気持ちと同じぐらいの心持ちで一生親孝行しようと思つた。

木綿季を助けたら、どこか一緒に温泉旅行でも連れて行ってあげよう、そのために絶対木綿季を助けなくては。

母さんに是非紹介したい、俺の……。元気いっぱい、明るくて、底

なしに可愛い恋人を……。

「でもね、木綿季ちゃんを死なせたら、貴方との親子の縁を切りますからね」

「ああ、わかってるよ。男に二言はない、絶対に木綿季は助けてみせる……！」

翠からの脅しにも近い勘当宣言に少しだけ驚いた和人だったが、すぐに自信に満ちた表情を見せると、木綿季を絶対に助けるから問題ないとばかりに返事を返した。

勿論翠にそんな気持ちはさらさらなく、それぐらいの覚悟で取り組んでいきなさいよという気持ちの表れだった。

桐ヶ谷親子の木綿季救出大作戦がスタートした。シナリオという足場は固まった。あとは和人がどれだけ駆け回れるかにかかっている。

大切な人を、掛け替えのない人を救うために、和人は走る、走り続ける。

第13話く木綿季の闘い

西暦2026年1月30日土曜日午後19:05 神奈川県横浜市

金沢区 横浜港北総合病院

木綿季は仮想空間の自分の部屋があるメデイキュボイドにその意識を戻していた。ALOでキリト、和人からたくさんの大好きをもらい、そして何より希望という大きく温かいものをもらった。

ログアウトしてからも、仮想空間にもかかわらずしばらく体の熱が冷めることはなかった。ALOとは違う体だが、まだこの温かい感触が残っているような気がした。

「和人……」

木綿季は長年思っていた。自分は誰も好きになっただけじゃない、必要以上に親しくなっただけじゃない。遠くないうちに永遠のお別れをしてしまうのだから。

仲良くなればなるほど……相手を悲しませてしまう。だったら、ひっそりと孤独に死んでいった方がマシだ、そう考えていた。

しかし、今は違う。そんなボクを好きって言ってくれる人が現れた。ボクを助けてくれるって言って元気づけてくれた。

その人は医者でもなんでもない普通の男の子だ。でも……その子の言葉はなんだか信じられる気がした。信じて全部まかせていいかなって思った。なんの根拠もないんだけど、全部身をゆだねていいかなって、そう感じた。

「キリトから好きって言ってくれるなんて……思ってもみなかったな……」

自分を好きって言ってくれる人は今まで少なからずいた。明日奈もそうだったしスリーピング・ナイツのみんなもそうだ。パパ、ママ、姉ちゃんも木綿季のことが大好き。そう言ってくれた。

でも……それ以上に和人の体の温もりが忘れられない、温かかった、大きかった、そして何より安心できた。

そう思うと、木綿季は死への恐怖というものを久方ぶりに感じ取っ

ていた。怖い、死ぬのが怖い。和人と離れ離れになるのが怖い。今はあるこの意識が、ふつと自分の知らない遠くへと飛んでいってしまうのが怖くてたまらない。

自分の体のことは自分が一番理解している。調子が以前よりいいとはいえ、崖っぷちであることには変わりはない。すぐに死ぬということははないだろうが、あまり長い命とも言えないのも紛れもない事実だ。

ならば……ボクに出来ることはただ一つ。和人が助けに来てくれるその瞬間まで、一秒でも長く生き永らえ、病気と、AIDSと、HIVと闘い続けることだ。

頑張ってるのは和人だけではない。ボクにだってやれることは残っている。そう思うと……自然と体に力が湧いてくる気がした。心の底から勇気が溢れ出てくるような感じがした。

「ボク、生きなきや……、精一杯……生きなきや……！」

精一杯生きる、そう心に誓う。きつと和人は来てくれる、それまで頑張る、頑張りぬく。病気を治す為に、再び現実世界に帰る為に、ボク自身の未来の為に、そして何より……ボクを初めて好きと言ってくれた……和人の為に……。

『こんばんは、木綿季君』

「こ、こんばんは、倉橋先生……」

『和人君とは……、もういいんですか？』

「……はい、たくさんお話できました」

「それは……よかったですね」

木綿季の担当医の倉橋が、メデイキュボイドの外部トーク機能越しに木綿季に声を掛けてきた。検診の時間が来たのだ。検診といって木綿季の意識は仮想空間の中にあるので、現実の体を倉橋達が調べて、それを仮想空間の木綿季に報告をするといったものだ。

ただ、自分の本当の体をいじくられてるという状況を、遠目で見て

いるようなこの感覚はいつまでたっても慣れることはなかった。ちよつとばかり恥ずかしいというか、背中がむずかゆいというか、自信のない部分があるからというか。

それに今日は一瞬とはいえ一度心臓が停止しかけた。いつもよりも調べることは増えるだろう。

『先程、和人君とすれ違いましたよ』

「……和人と？」

『ええ、何かを決心したような、真剣な表情をしていました』
「……………」

そうか、もう和人はボクを助けるために動き始めてくれてるんだ。本来なら倉橋先生が動くことなのかもしれない。それでも和人はボクを助けるために行動を始めている。

嬉しい、嬉しいな……。本当に和人のことを好きになってよかった。強くて優しく、頭も良くて、かっこよくて。正直、ボクにはもったいないぐらいだ。

でもこういつちやなんだけど、ボクなんかよりやっぱり明日奈の方がお似合いのような気はする。でも、ボクは和人のことを好きになってしまったし、和人もボクを好きだと言ってくれた。

それなら自分の気持ちに素直になっても……。いいよね？ ボクだって女の子だもん。普通に恋愛だってしたいもん。

もしもボクの病気が治ったら、現実世界で和人と一緒に過ごせるんだよね？ 将来の夢を語り合ったり、デートとかしたりなんかして。え、えへへ……。

『ゆ、木綿季君……？』

「え……え？」

『ど、どうかしましたか……？』

木綿季が正気に戻ると、倉橋を含めた医療スタッフが驚きの表情でメデイキュボイドに包まれた木綿季をあっけらかんに視線を送っていた。

どうやら木綿季の心の声が、ついつい表に出てしまっていたようで、今まで聞いたことのない木綿季の独り言に、倉橋たちは何があっ

たんだらうと不思議な表情を浮かべていた。

『な、何かいいことでもありましたか……？』

「あ……、え、えつと……、はい……」

『……もしかして、和人君のことですか？』

「えつ、……は、はい……」

倉橋に改めて聞かれると、木綿季は体育座りをしながら顔を赤らめて恥ずかしそうにうずくまっていた。外からでも中の様子が想像出来たのか、倉橋は少しだけ笑みを見せていた。

「好きって言ってもらったんです、和人に……」

『……そうですか……、よかったですね……』

「……はい……」

あの後ALOで何があつたのかと簡潔に話すと、木綿季は更に赤くなり、耳まで湯気が上がるぐらいに真っ赤になってしまっていた。検診中なので心拍数があがるようなことは避けなければならないのだが、彼女の気持ちは今はそれどころではなかった。

『木綿季君、その嬉しいという気持ち、忘れないでくださいね』

「え……？」

『体をいい方向に向かわせるには、嬉しい、楽しい、と感ずることが、鍵になっていくことがあるのです』

「は、はあ……」

医学的、体力的な問題以外にも、病気には精神的なものから容態が変わる時がある。病は気から、精神論だとバカにされる時もあるがこれは本当のことである。

どんな難病でも歯を食いしばり、気を強く持つことによつて奇跡を起こしたことが過去には例がいくつもあつた。

倉橋先生はそのことを言っているのかな？ そうだとするならば、ボクも奇跡を起こせるんだろうか。……いや違う、起こさないとはいけないんだ。和人や明日奈みたいに強い心は持ち合わせていないけど、ボクはボクなりに気持ちを強く持つて、生き続けたいといけないんだ。

強く持つて待ち続けていれば、和人が必ず来てくれる。だから……

頑張ろう。残された命を無駄にしないその為にも、精一杯……頑張ろう！

「えっと、倉橋先生」

『何ですか？ 木綿季君』

「正直に本当のことを教えてください。ボクの命は……あとどれぐらい残されているんですか……？」

木綿季は自分に残された余命について、倉橋に質問を投げつけた。それを聞かれた倉橋の表情がほんの少しだけ強張っていた。その様子を見る限り、決していい返事はもらえないだろうということが伺えた。

しかし倉橋は答えないわけにはいかない。誤魔化すことも考えられたが、倉橋はいつもとは違う何かの決心や覚悟といったものを、不思議と木綿季から感じ取っていた。

なので決して誤魔化さず、医師として、一人の人間として正直に木綿季に答えを返した。

『分かりました。では落ち着いて聞いてくださいね。ひと月ほど前、末期症状にもかかわらず木綿季君の体はHIVの活動が弱まり、調子が良い傾向に働きました。これは紛れもない事実です』

「……はい」

『しかし、あくまでもAIDSの末期症状だという現実はひっくり返りません。感染症や合併症を抱えていることも事実ですし、何がきっかけでまた心肺停止等に陥らないとも言いきれません。これに関しても真実であることは間違いありません』

木綿季は少し首を垂れると小さい声で「やっぱりな……」と呟いていた。あまり期待はしていなかったが、いざ目の前で話されると心に来るものがある。

そもそも今もこうして仮想空間とはいえ日常を過ごしていることがほとんど奇跡に近いものだったのだ。しかしそんな木綿季を慰めるかのように、倉橋は口を開き、先ほどの話を続けるかのように語り出した。

『ですが……木綿季君、君の心はとても強い。少なからずこの病院で

入院している患者さん全員より遥かに強い心を、精神力を持っています。そしてこれは憶測の域を出ないのですが……もしかするとその強い心が、遠くないうちに何かを起こすことになるかもしれないと、そう思っています』

木綿季は首を上げた、倉橋先生がこんなにあやふやなことをはつきりと言いつつ切ったのは初めてだ。余命を少しばかり誤魔化した過去は何度かあったが、その倉橋の口ぶりからはこの先遠くない未来でまるで、木綿季の体に「奇跡」が起こるかもしれないとも言いたげな様子だった。

「先生、何かって……何ですか……？」

『あ……えつと、私も上手く言うことは出来ないのですが……すみません。本来は医者がこんな曖昧なことを言うてはいけないのですが……、ちよつと感じることはありませんね……』

感じるこつとてなんだろうか、もしかして先生もボクと和人の間にあったことを知っているのだろうか。

だとしたら……和人が奇跡を起こすかもしれないって、思ってたりするのかな。

『いえ、やめましょう。この話はここまでにしましょう』

やはり医師として曖昧なことは言い切るべきではないと話を中断した倉橋に、木綿季は小さい声で「はい」と返すと、ひたすら検診が終わるのを待ち続けた。体育座りの体勢で目の前に表示された大きい仮想ディスプレイの様子を、じーつと見つめていた。

「和人……、会いたい、会いたいよ……寂しいよ……」

つい十数分前に帰ってしまった和人を、木綿季はもう恋しく思ってしまった。この仮想空間から出たくてたまらない。現実世界で和人の隣に座りたい、和人の温もりを感じたい、和人とお喋りしたい、和人に抱きしめてもらいたい。

和人と……和人と……。

そう考えているうちに、木綿季は一日の疲れからか眠りについていった。木綿季にとってもここ数日は激動の日々であった。和人を元気づけ、好きになってしまい、拒絶したと思ったら明日奈と同じように

追いかけてきてくれた。そして自分を好きだと言ってくれた。病気を治してやると約束してくれた。

そのことを思うと寂しかった気持ちだが、ちよつとだけ温かい想いに変わっていった気がした。和人がいれば頑張れる、和人がいればどこまでも行ける、だから……もう少しだけ頑張ろう。和人が迎えに来てくれるその時まで。

正直、木綿季は自分の病気が治るとは思っていなかった。自分の侵されている病気がどのようなものは木綿季が一番わかっていた。しかし、和人の言葉を聞いていくうちに不思議と治るのではないかと思い始めていた。

だから助けてやると言った和人の言葉を信じたのだ。そもそも治るのなら倉橋先生が治してくれているはずだ、しかし和人が信じてくれというのなら、ボクはいつまでも和人を信じて待つ、待ち続ける。だって……和人はボクの、ヒーローだから……。

木綿季は木綿季で、和人は和人で各々がそれぞれ新たな思いを決心した。お互いの明るい未来の為に戦い続けることを心に固く誓った。激動の二日目が幕を下ろした。

第14話く駆けろく

西暦2026年2月1日 日曜日午前05:00 埼玉県川越市

桐ヶ谷邸 和人の部屋

和人は自室のベッドで目を覚ましていた。眠たそうにあくびをすると昨日起こった一日を思い返していた。木綿季に告白したこと、承諾して恋人同士になったこと。

そして木綿季の病気を治すと約束したこと。母さんと一緒にH1Vについて調べ、ほんの小さな光ではあるが解決策が見つかったこと……。

眠たい目をごしごしこすりながら和人はベッドから体を起こし、伸びをして肩をぐりんぐりん回し、腰を伸ばしてほぐした。おやじ臭い動作だが起きたときに彼が必ずやる行動だ。

和人は眠気を覚ますと窓から見える外の風景を眼に映しながら、これから自分が挑もうとしている闘いがどれだけ大変なことかというのを考えていた。

「今日からがホントに大変になるかもだな、頑張らないと……」

和人は自室から離れると洗顔をする為に一階へと足を運んでいた。階段を降りて左手にあるキッチンの方からは調理をする音が聞こえてくる。母親の翠が朝ご飯を作っているようだ。

階段を降りて右手の方を見てみると、真冬で葉っぱが全て落ちてしまった木が生えている庭で、直葉が剣道の素振りをしている光景が見えた。

こちらは彼女の毎朝の日課となっている。「せいっせいっ」と勇ましい掛け声とともに直葉は面を繰り返していた。和人はその姿を確認するとゆっくりと庭を見渡せる縁側の方へと歩み寄っていった。

「スグ、おはよう」

声を掛けられた直葉は和人の姿に気づくと素振りを中断し、縁側に腰かけている和人の方に体を向け、額に浮いている汗を片手で拭いな

がら嬉しそうに挨拶を返した。

「お兄ちゃんおはよう！ 珍しいね、こんなに朝早く」

「ああ、ちよつと眠りが浅くてな……。やっぱりの栄養ドリンクが効きすぎたみたいだ……」

昨夜、直葉は翠に頼まれてコンビニにお使いに行ってきた。徹夜になるかもしれないとのことだったので、超がつくほどの強烈な栄養ドリンクを買ってきていたのだ。

ちなみに一本税込み2650円とかなり高く、買ってきた直葉は「費用はあとでお兄ちゃんのお小遣いから天引きしてね♪」とニツコリ笑いながら翠に領収書を渡していた。ちゃっかりした妹である。

「今日は……どうするの？ 昨日はかなり遅くまで調べてみたいだけど……」

直葉は縁側に置いておいた「い・ろ・あすみかん味」が入った500mlのペットボトルに手を伸ばし、蓋を回して外し、グビグビと飲みはじめながら、これからどうするのかということを和人に尋ねた。直葉も自分出来る範囲で和人に全力で協力すると心に決めていたのだ。

「そうだな……一応ある程度の準備するべきこととかは決まっているんだ。ただ、手順とか方法とかとなるともうちよつとだけ考えないといけないかな……」

「そうなんだ、あのねお兄ちゃん、私に出来ることがあったら……言つてね？ 私も力になるからさ……」

その言葉を聞くと和人は嬉しそうに笑顔になり、直葉の頭を撫でた。その掌の感触を、直葉は目を閉じて心地よさそうに受け入れていた。

「ありがとな……スグ、スグが近くに来てくれてホントに助かってるよ」

「そ、そうかな……。そういうことなら……私も嬉しいな……！」

顔を赤面させ、直葉は照れ隠しの所為か500mlのボトルに入っているまだ八割ほど残っている「い・ろ・あすみかん味」を全部飲んでしまった。

プハーつと一息つくとシャワーを浴びてくると言つて、その場から

立ち去っていった。その姿を見送った和人は先ほどまで直葉が素振りをしていた池の近くの様子を見つめながら、最初の行動に移ろうとしていた。

「さて……と、俺も動くか……」

眠気が完全に覚めてきたところで、和人はまず顔を洗いに洗面所へと向かった。冷たい水で気を引き締めて一日をスタートさせよう。

洗い終わると母親のいるリビングに足を運んだ。腹が減っては戦は出来ぬ、昨日も朝以外何も口にしていない。いい加減食べないと今度は俺がぶっ倒れてしまうだろう。しっかりと食べてエネルギーを蓄えなくては。

「おはよう、母さん」

木製のフローリングのリビングに置いてある食卓の椅子に手を掛けながら、和人は母親の翠に朝の挨拶をした。朝ご飯を用意しながら翠も「おはよう」和人と挨拶を返した。

もう朝ご飯はほとんど出来上がっていた。食卓に歩み寄り、椅子に腰を下ろしながら「いただきます」と行儀よく朝食をほおばっていく。今日の朝食はいつものパン食だ、精一杯胃に詰め込んでいく。

これから壮絶な戦いが、始まろうとしているのだから……。

「和人、今日からどうするのかはもう決めた？」

朝食の最後の一品を作り終えた翠はそれをテーブルに並べながら、自身も椅子に腰を下ろした。昨晚考えたことはほとんど和人が行動に出なければならぬ。

翠はあくまでも裏方だ。だが裏方には裏方で大事な仕事があるものだ。しかしそれも和人が表でしっかりと動いていかなければ意味がない。持ちつ持たれつな体制を敷いているのだ。

「ああ、今日も木綿季の病院に行く。主治医の倉橋先生に話をしにくつもりさ。その前にあいつらにも事情を説明しないとだけど」

あいつらとはSAO時代の友人であるリズベットやシリカのことである。元SAOプレイヤーが集まったあの学校では和人のことを知らない者はいない。

その中でも攻略組の連中や和人たちを裏方でサポートしてた連中

とは特に仲が良く現在も関係は友好的だ。和人がS A Oをクリアに導いた英雄ということもあり、和人が話せばきつと理解してくれるだろう。

「そしたらまず仲間と落ち合うよ。それから木綿季の病院に行つて倉橋先生に昨日のことを伝えて今後の作戦について話し合うよ。とりあえず今日はこんなところかな、その先は……まだちよつと考え中」
「そうね、悪くないと思うわ。私の方はこれをでつかい記事にしてもスクープ出来るようにしておけばいいのね？」

翠はノートパソコンに表示されている奇妙な宣伝広告のようで記事のような資料を和人にみせた。和人はその資料のレイアウト、文脈などを隅から隅まで見つめ、確認を済ませるとOKを出し、翠に感謝の言葉を送った。OKをもらった翠は意味深な笑みを浮かべていた。
「ごめんよ母さん、昨日は寝れてないのにこんなものまで作つてもらつて、疲れているのに……」

「大丈夫よ、これぐらい文字通り朝飯前だわ。それより、遠くないうちに孫の顔が見れるかもしれないって思つたら……ついつい張り切り過ぎちやつたのよ」

その言葉を聞くと和人は赤面した。何でいちいちこの母親は人の恥じらいの心を抉るようなことをピンポイントで言い放つてくるのだろうか、と。

照れ隠しのために、和人は黙って朝食をほおぼり続けた。昨日食べられなかった分も補充するかのように。やがて人一倍多い朝食を胃に放り込むと、和人は近くに置かれた牛乳パックからコップ一杯分牛乳を自分のコップに注いで、一気に飲み干してこの日の朝食を終えた。

「ふう、ぐ」馳走様……」

「お粗末様」

和人はリビングに置かれているテレビの時計を確認した。時刻はまだ朝の6時、病院もまだ開いていないだろう。ならばどうするか考えよう、出掛けるそのときまでこれからのことを。

和人は食べた食器を流しに片付けると二階の自室へと足を運び、自

分のPCデスクに腰を落ち着け、今後のことを整理していた。

「あいつらにわけを話してそのあと倉橋先生と話す、ここまではいい、次はそこからなんだが……」

和人は頭をポリポリかきながら考えた。正直言って現時点での協力者は少ない。母親の翠、妹の直葉、まだ話をしていないが倉橋先生もきつと協力してくれるだろう。

というか倉橋先生が協力してくれなかったらチェックメイトだ。頭を抱えていた和人はふとある人物の名前を思い出した。

ここ一ヶ月間全く顔を合わせていないどころか連絡すらも取っていない。別に連絡を禁じられているわけではないのだが……なんとなく話しかけるには勇気がいるものだった。

「明日奈……協力してもらえるだろうか……？」

和人は元恋人の名前を口ずさんでいた。和人が声を掛ければ絶対に協力はしてくれるだろう、だがしかし……どんな顔をして会いに行けばいいのだろうか。木綿季と明日奈が親友同士だからといって、俺の新しい恋人を助けるために協力してくれなんて面と向かって頼めるだろうか……。

正直、頼みづらい。それどころかまず会ってくれるかどうかすら怪しいもんだ。それに明日奈にその気があっても……あの強情なスパルタ教育ママがなんて言うか……。

結城家の家庭の事情は理解しているが、あの結城家は家全体に目に見えない強力なバリアを張っていて、無関係者は近寄らせないといった雰囲気を放っているのだ。反対に親父さんの彰三さんはすごい良い人だったのだが……。

「でも、言ってみるしかない……よな」

本音を言うと明日奈の協力が得られるのは大きい、木綿季も喜ぶし心の支えが増える。そして和人の計画していることにも明日奈がいるといないのでは、印象に天と地ぐらいの差が出てしまう。なので出来れば……と言いたいところだが絶対に明日奈の協力は欲しい。

「……よし、覚悟を決めるか……」

何度も言うが和人と木綿季には時間がない、使えるものは使う、利

用できるものは利用する。それぐらいのことをしないと木綿季は助けられない。

全部終わってから罪悪感に襲われても構わない、周りから非難を浴びても構わない、そう覚悟を決めていた。今更何を恐れる必要がある、木綿季が目の前からいなくなるこのの方がよっぽど恐ろしいことだ。ならば今動くしかない。

「今は6時、ちよいとぎりぎりかもな……」

和人は時計を確認するとすぐさま私服に着替え、ライダージャケットを身に纏い財布と携帯、そして翠に作ってもらった資料の一部を持ち出し家を出た。今日は日曜だが予定がびつしり詰まった明日奈はすぐに家から出るだろう。ならば家を出る前に彼女に接触しなくては。

「母さん！ スグ！ ちょっと予定が変わった！ もう俺は出掛けるからあとよろしくな!!」

和人は玄関に腰を下ろし、自分の履く靴の靴紐を結びながら家中に聞こえる声量で伝えた。二つの方向から「いつてらっしゃい、気を付けてね」という声が返ってきた。

和人は靴を履き終えるとすぐさま玄関を出て、愛車の二輪のシートからヘルメットを取るとキーを差し込みエンジンを起動させた。

「よし、いっちょ勝負だ……！ まずは結城家と……!!」

和人は桐ヶ谷家の敷地の門から公道の左右の安全を確認すると颯爽とバイクで走り出していった。まず最初の目的地は東京都世田谷区にある結城家の屋敷。埼玉県川越市からは片道1時間ほどかかる距離だ。

1時間で結城家まで行って明日奈が家を出るまでに話をし、そしてリズ達SAO組を呼んでわけを話す。そしてすぐさま横浜まで趣き倉橋先生と話をする。木綿季にも顔を見せて安心させてやらないといけない。

ははは、我ながらすごい走行距離になりそうだ。埼玉、東京、神奈川の一都二県をまたにかけ、二日連続で走り抜けるというんだからな。

17の少年が移動するには大変に骨が折れる距離である。ガソリン持つかな……、と考えながら和人はバイクのアクセルを握る手に入力を入れていた。

同日午前6：54 東京都世田谷区宮坂 結城邸前

和人はナビの指示したルートと時間通りに、関越自動車道と一般道を経由して、明日奈の家の前に到着していた。ここまでできた方がいいが、和人はアポなしで来てしまっている。その為に取り合ってくれなかろうかは分からないし、真つ黒なライダージャケットに身を包んだ男がこんな豪邸の前に突っ立っていたら、はたから見たら不審者にか見えないだろう。

「う〜ん……服装、もうちよつとだけ考えた方がよかつたかな……」

V R M M Oでも現実でも黒い服装ばかりが目立つ和人は、自分のコーディネートに疑問を持ち始めていた。しかし今更黒以外の色なんて思いつかないし想像も出来ないのですぐに考えるのをやめた。

オートバイを道路の路肩に停めると和人は結城邸を見渡していた。いかにもといったお金持ちの自宅。隅々まで手入れが施されている白い外観に立派な植木と木々、右側にある車庫も充分に広く、さぞかしいい車に乗っていることだろう。実際、前に京子は豪華な高級車に乗って明日奈を迎えに来ていた。

和人はその豪邸を見上げながらゆっくりと門に近付き、結城邸の来客用のチャイムを人差し指でゆっくり、丁寧に押し込んだ。「ピンポーン」という古風なサウンドが流れ、少しの間が置かれると、やがてインターフォン越しに女性の声が聞こえてきた。

『はい、こちら結城でございます。来客の方でございますか？』

恐らく使用人か家政婦だと思われる女性の声がインターフォンのスピーカーから聞こえてきた。長い年月の間結城家に仕え続けてきた、そんな空気を感じさせる声だった。和人は緊張する気持ちを落ち

着かせながらインターフォンに向かって声を出した。

「は、はいっ。俺……あ、いや僕は桐ヶ谷、桐ヶ谷和人という者です！朝早くから申し訳ないのですが……お嬢さん、結城明日奈さんはご在宅でございますでしょうか!!」

緊張しすぎて新人社会人のかつちこちなビジネストークみたいな話し方になってしまった。普段適当な口調で話していることからこういった話し方にはまるで慣れていなかった。

改めて社会に出るための話し方を勉強しないとだと感じた瞬間でもあった。

『桐ヶ谷……和人……？ ……まつまさかお嬢様のお友達の……和人様でございますか？』

よかった、使用人は和人のことを知っている様子だった。これはひよつとしたらすぐに話せるところまでもっていけるかもしれない、と和人は感じた。

「あ……はい！ 明日奈……さんとは以前お付き合いをさせていただいておりました。今日は折り入って緊急で頼みたいことがあります。朝早くからお騒がせしております。明日奈さんとお話をさせていただきますだけではないでしょうか？」

『……し、しばらくお待ちくださいっ』

そういうとインターフォンからブツツと会話の切れる音が流れ、しばしの静寂が流れた。よかった、うまくいくかもしれない。明日奈に協力してもらえればかなり計画の成功率が高まる。和人は期待に胸を躍らせながら明日奈が玄関から出てくるのを待っていた。

そしてそれから三分ほど経過しただろうか、豪邸の玄関の黒い扉が開き、中から和人のよく知る人物が飛び出してきた。栗色のロングの髪の毛に和人と同じぐらいの身長、ひいき目に見なくてもすらつとして美人な顔つき。元恋人、結城明日奈だ。

彼女とは実に一ヶ月ぶりの再会だ。話したいことはたくさんある、伝えたい事もあった。しかし今日は積もる話よりも大切なことを知らせなくてはならない。ここに来た目的だけはしっかり伝えなくては。

「キリト君——ッ！」

明日奈は扉から門までまっすぐ全力で走ってきた。玄関から門まではそこまで距離はないのだが明日奈は既に息が上がっていた。

どうやら家の中で和人が来ていると聞かされて、すぐさま全力でここまで走ってきたのだろう。明日奈は和人の前まで辿り着くと肩を落として両手を両膝につき、荒い呼吸を落ち着かせようとしていた。

色々感慨深いものがあつた、一ヶ月前に別れたときはまさかこんな形で再会するとは微塵にも思わなかつたのである。明日奈は俺のことをどう思っているんだろう、あれからどうやって毎日を過ごしてきたのだろうか。

別れていても、やはり明日奈は明日奈で大切な人であることには変わりはない。無理な毎日を過ごしていないかどうか心配だった。

「久しぶりだな、アスナ……」

「うん、本当に久しぶり……。でも……今日はどうしたの？ 会えて嬉しいけどこんな朝早くから……」

「実は……だな……」

和人は昨日まで起こつたことを包み隠さず、すべて明日奈にぶちまけた。木綿季と恋人同士になったこと、その木綿季が死にかけていること、病気を絶対治してやると約束したこと、木綿季の病気を治せるかもしれないということ。

次々へと新しい情報が頭に入り込んできた明日奈は驚愕の表情を浮かべると同時に混乱の様子も見せていた。無理もない、久しぶりに再会した元恋人からこんなことを告げられたら混乱してしまうのもうなずける。

「……キリト君が木綿季と……、その話……全部本当なの……？」

「ああ、全部本当だ。そして今日俺がここに来たことは……明日奈、君にも関係している……」

明日奈が私に？ と解せない表情を浮かべていた。今後一切和人と関わることはないと思っていた明日奈にはまさに寝耳に水な出来事だった。そんな明日奈に構うことなく、和人は話を続けていった。「今から話すことは、正直君に多大な迷惑をかけることになると思う。」

下手したらお母さんの京子さん、いや結城家をも巻き込んでしまうかもしれないことなんだ。そして正直にいうと……明日奈、俺は君を利用しようとしている」

「…………どういふこと…………?」

淡々と話を進める和人も見て、穏やかではない表情になった明日奈を尻目に、和人は昨夜考えたプロジェクトを、真剣な表情で明日奈に説明した。

木綿季を助けるためにどうしたらいいか、そのために立てた計画の一部始終を事細かに、その話を聞き届けた明日奈の表情には驚愕の一言では言い表せないような物凄い顔色を見せていた。

「え…………えええええ〜〜っ!?!」

明日奈は和人の母親、翠と全く同じ反応を返していた。その叫び声は豪邸の中どころか、周辺のご近所さんにも余すことなく響いていた。和人はそんなに驚くほどおかしな計画かなあと感じ始めていた。結構現実的だと思ってたのだが…………と。そんな解せない表情を浮かべている和人に対して、明日奈は追い打ちをかけるかのように声を掛けた。

「え、だって…………それ本気!?!」

「…………なんだか釈然としないけど…………、でも本気じゃなかったらここまで来ないさ」

ちよっただけ明日奈の反応に頭を傾かせながらも、当然のように和人は返事を返した。正直突拍子もない計画を聞かされた明日奈は混乱していたが、和人から送られてくる真剣な眼差しを見ると、強張った表情はやがて次第に柔らかくなっていった。

「フフツ、まあキリト君らしいと言えば…………キリト君らしいかな…………? だってそんなこと普通考え付かないもん!」

「母さんと同じこと言うんだな…………、で…………どうだ明日奈? 協力して…………もらえないか? 正直言って無理強いは出来ない」

「え、えつと…………」

「君にこんなことを頼める身でないこともわかつている。だけど…………俺は木綿季を助けたい!! どうか明日奈に手を貸してほしい!! 明

日奈……頼む!!」

和人はそう言うのと深々と元恋人である明日奈に頭を下げた。その様子を見た明日奈は見てて居たたまれなくなり、慌てて和人に駆け寄って和人の肩と腕に手を当てて、和人の姿勢を強引に戻した。

「ちよ……やめてよキリト君! そんな頭を下げてまで……私たちが、恋人って関係は終わっちゃったけど、大切な友達同士ってのは……変わってないんだよ?」

「え……?」

明日奈のその言葉を聞いた瞬間に和人の表情が変わった。木綿季の命を助ける為とはいえ、元恋人の善意を利用しようとした罪悪感に襲われていた。

そんなことをしなくても真っ向から話せば理解してもらえる関係なのに……。明日奈から優しい言葉を掛けてもらった和人は自分の思っていたことがバカバカしくなり、瞳に涙を浮かべていた。昨日散々泣いたので滴り落ちこそしなかったが明日奈の善意にほろつきてしまったのだ。

「そう……だな。アハハ……俺は馬鹿だな。明日奈のこともっと信じておかなきゃいけなかったんだ……、本当に……大馬鹿者だ……」

「あの……あのねキリト君……、今のキリト君にこんなこと言うのはどうかと思うんだけど。私……、私ね……今でもキリト君のこと……」

和人への気持ちは今も変わっていない明日奈が何かを言いそうになったところで、口に手を当てて首を左右にブンブンと振り回した。一体何を言おうとしていたのだろうか? 言っではいけないこともあったんだろうか?

「ううん、今はこの話はナシ! 木綿季の命もかかっているし……ぜひキリト君の話に協力させて!!」

その言葉を聞いた瞬間、和人は心が少し晴れた気がした。明日奈との軋轢を埋められたことと、これからも良好な友好関係を築いていけそうだということに安堵の表情を浮かべ、ほっと胸を撫でおろしていた。

気まずい思いをしなくてすみそうだとも思っていた。心の奥底に引つかかっていたものが取れたような気がした。

「……と言いたいところなんだけど、ちよつと厳しいかもしれないだ……」

安心しきっている和人の表情が一変した。和人が「どういうことだ？」と聞き返すと、神妙そうな表情を浮かべながら明日奈はここ最近の自分の身の回りの状況を和人に説明し始めた。

「やっぱり母さんが厳しくてね……。前に比べたら自由時間は少しだけ増えたんだけど、外出するほどの余裕がなくて……。アミユスフィアもないし、木綿季の助けになりたいのに……。どうしよう……」

明日奈はそう言っ肩を落としてしまっていた。二人の間に暫くの間気まずい空気が流れ始めた。二人がどうしようかという表情をしながら佇んでいると、突然結城邸のドアが開き、中から家政婦と思わしき人物が現れた。

年齢は40代程で整ったすらつとした外見をしていて、年相応の女性らしい優しい雰囲気をつけていた。長年結城家に仕える使用人の佐田明代であった。明日奈のことも小さいころから面倒を見ている、結城家を陰で支えている女性だ。

「佐田さん、どうしたんですか？ ……って、そつそれは……！」

「お嬢様、使ってください」

そういうと、佐田は自分の手に握っているアミユスフィアを明日奈に向かって差し出した。明日奈が困惑した表情で佐田の顔を見ると、佐田は満面の笑顔を明日奈に返していた。もう明日奈のことは何でもお見通しといった様子だった。

「えっこれは……！ ……でもそんなことしたら、私が怒られるだけならまだしも……バレたら佐田さんが……！」

「私のことはいいんです。もしクビになっても、適当に職を見つけてそこで働かせていただきますから」

「で、でも……」

「お嬢様の幸せは私の幸せでもあります、どうか……受け取ってください……」

佐田からの言葉を聞いた瞬間に明日奈の瞳に涙が浮かんでいた。佐田は明日奈に物心がつく前からの長い付き合いだ。もう一人の母親といってもいい存在だ。そんな佐田が自分のことを顧みず、明日奈の力になりたいとこうして彼女に出来ることをやろうとしていた。

「お友達の命が危ないんですね？ 私のことは気にせずに使ってください。奥様には私の方からきちんと説明しておきます」

「……………」

「お友達を助けるためとなれば、一回ぐらい許していただけですよ……………」

奥様は厳しい方ですが、根は心優しい方なのですよ……………」

佐田はそういうと、一ヶ月前京子との出来事を話し始めた。それは明日奈にとってもなく衝撃を与える出来事であった。京子は一ヶ月前の和人とのいざこざの後、明日奈と屋敷に帰宅するとこれからのことを厳しく明日奈に説明した。

長時間の説明が終わり、明日奈を部屋に返すと次に佐田を呼び出し、自分の胸の内を話し始めたという。

「奥様は仰ってましたよ、お嬢様に必要以上に厳しくしすぎてしまったかもしれないと。これから先二度と親子として心を開いてくれな
いかもれないと」

「……………」

「でもそれはお嬢様の成長を促すために、敢えて厳しい態度を取られてただけなのですよ。本当は誰よりもお嬢様を愛してらっしゃいます。でなきや、あの時涙なんか流さないはずですから……………」

「母さんが……………そんなことを……………」

「あの方もなかなかあれで石頭で素直になれない性格の方ですから……………、おっと今のは不敬でした」

佐田は笑みを浮かべて今の発言を少しだけ誤魔化すと、真剣な表情へと顔つきを変えて、ゆつくりと明日奈に歩み寄って、明日奈の掌にアミユスフィアを置き、そのままぎゅつと握らせた。

「お嬢様、行ってください。今日の予定は全てキャンセルの手続きをしておきます。だからお友達のもとへ行ってあげてください」

「さ、佐田さん……………」

「京子様には私から説明しておきます。でもその代わり……しつかり元気づけてあげるのですよ？」 明日奈ちゃん」

数年ぶりに明日奈ちゃんと呼ばれたその瞬間、明日奈の顔からは大粒の涙が滴り落ちた。

幼い頃、忙しい母親に代わって面倒を見てくれた佐田からの愛、母親からの本当の愛、母親への誤解と影で支え続けてくれた佐田への感謝。いろいろな感情が織り交ざって何で泣いているのかよく分からなくなっていた。

泣き続ける明日奈を見て、佐田はポケットからハンカチを取り出して丁寧に明日奈の涙を拭った。

「佐田……さん……ありがとう。ありが……とう……！」

「さ、あなたたちには時間がないはずですよ？ 早く行くのです！」

和人様！ お嬢様！」

そういうと佐田は二人の肩を掴み、向きを強引に180度変えて背中を両手でドンツと掌で強く押し出した。和人と明日奈はその勢いで転びそうになるが体勢を立て直し、そのままの速度で結城邸の外まで走っていった。

「佐田さーん！ 本当に……本当にありがとうー！ 行ってきまーす！」

振り返りながら明日奈は佐田へ感謝の気持ちを含めて心から叫んだ。その元気な姿を見た佐田は全部わかってますとといった穏やかな表情で明日奈を見送った。まるで本当の自分の娘を見送るかのよう

に、明日奈に向かって温かい視線を送っていた。

「いつてらっしやい、頑張るんですよ……明日奈ちゃん……」
明日奈は心に決めていた。佐田さんの思いを無駄にしないためにも、こんな自分を愛してくれている母さんのためにも、全部片付いたらもう一回ちゃんと話し合おう……と。そして、自分が誤解をしていたこと、母さんが胸の内に思っている本当のことを聞き出そうと……。

結城邸の門を出た和人と明日奈は和人が路肩に停車させていたバイクの前に集まっていた。青と黒の二つの色を基調としたバイクを、明日奈はまじまじと感慨深そうに見つめていた。

「キリト君のバイク……私久しぶりに乗るかも……」

「そうだな……。まあ俺も半分ペーパーだから、普段あんまり乗っていないんだけどな」

「え、ちよつちよつと……事故らないでよ……？」

「木綿季の病院に急いでた時も法定速度ぎりぎりまで走ってたからな……まあ保証は出来ない」

和人が冗談交じりで話すと明日奈は表情をむすつとさせて和人の背中を両手でぽかぽかと叩いた。まるで恋人だった以前の関係と同じような様子を見せていた。

和人が予備のヘルメットを明日奈に被せると、自身もヘルメットを装着し、バイクのエンジンを入れてアクセルを吹かした。

「明日奈、木綿季の病院に行く前にちよつと寄るところがある。こっからそう遠くないからすぐ向かうけど構わないか？」

「え、ああ……うん。それはいいけどどこへ行くの？」

「ダイシー・カフェだ」

それだけ告げると、和人はオートバイのサイドスタンドを蹴りアクセルをいれて、徐々に加速していった。かつての仲間が……：SAO時代の仲間が集まっている、あの憩いの場に、背中にかつての恋人を乗せて、走り出していった。

第15話く仲間く

西暦2026年2月1日 日曜日 午前9:00 東京都台東区御徒町 ダイシー・カフェ

古ぼけた雰囲気醸し出している雑居ビルが軒を連ねるこの街並みに、ダイシー・カフェは店を構えている。すっかり元SAOプレイヤーの溜まり場になってしまっているこの店は、本日は日曜で書き入れ時なのだが店のドアには臨時休業の札がかけられていた。

和人はオートバイの後ろに明日奈を乗せながらダイシー・カフェの軒先に近づくと徐行をし、スピードを緩めてやがて停止した。店の邪魔にならないような場所にそのままオートバイを停車し、背後に乗っている明日奈をバイクから降ろした。

「わあ、ここに来るのも久しぶり……」

明日奈は和人のバイクから降りると、ヘルメットを外しながら嬉しそうに、懐かしそうにダイシー・カフェの外観を眺めていた。煤けた木目調の壁などがいい味を出していて、全体的にモダンな雰囲気を醸し出している大人のカフェといった様子だ。

和人も実際相当ダイシー・カフェとはご無沙汰である、明日奈と別れてから和人自身もぬけの殻ということもあったが。

「確かにな、みんなとも大分ご無沙汰だったからな……」

和人もオートバイから降りてサイドスタンドを立てると、ヘルメットを外してオートバイのシートにしまい込んだ。キーを抜きこまごま運んでくれた愛車を休ませる。タンク部分はすっかり熱を帯びてしまっていた。

「とりあえず早く入っちゃおうぜ、みんなはまだ来てないだろうが、ここでいつまでも突っ立ってても寒いだけだしな」

そう言いながら和人はダイシー・カフェのドアに手をかけ、ゆっくり手前に開いた。そこで見た光景に和人と明日奈は激しくデジャヴを感じた。何ヶ月か前に観た光景とほぼ全く同じ光景が目の前に広がっていたからだ。

「おいおい、俺たち遅刻はしてないぞ……」

和人は伝えていた時間よりも早く来たのにも関わらず声を掛けたメンバーが全員そろってたことに驚愕していた。ダイシー・カフェの内装は、全体的にわざと照明を暗くして、ジャズカフェのような雰囲気を出していた。

ダンディな年頃のマスターがワインやウイスキー、バーボンといったアルコール類を片手に一人で心静かに嗜んでいるような空気を感じさせていた。そんな淡い見た目の内装の店内の奥にあるカウンター席で、かつてSAOの中で生死を共にした仲間達が既に中でよろしくやっていた。

「おうー。おせーぞキリの字！ おめーから声かけといて遅刻たあい度胸じゃねえか！ なあ！」

始めに和人に声を掛けた、赤髪にバンダナをつけ、ダボダボのワイシャツに片手にタバコを持っているサラリーマン風のこの男の名前はクライン。

本名、壺井遼太郎。SAO正式サービス版で和人が初めて知り合ったプレイヤーだ。年は離れているが同い年の旧友みたいな感じで和人とは仲がいい。ちなみに絶賛彼女募集中である。

「こんな日曜の書き入れ時だつてのにお前のために臨時休業にしたんだ……感謝しろよ？」

大きいガタイにスキンヘッドとかなりのインパクトを持った黒人男性のエギル。

本名、アンドリユー・ギルバート・ミルズ。SAO時代は商人として他の中層プレイヤーを陰で支えていた実力者であり、戦闘時もあり硬いタンクとして戦場の壁となり、大活躍を見せていた。現実世界ではこのダイシー・カフェのマスターでもある。

「まーったくもう、キリトってば自分が一番最後に遅れるつてのは昔っから変わらないんだからっ！」

茶髪に首元まで伸びた髪にヘアピンを点け、学生服の上からピンク色のセーターを着こんだ女の子、リズベツト。

本名、篠崎里香。SAO時代は自身が経営している鍛冶屋のマス

タースミスとしてSAO攻略組合む、多くのプレイヤーの武器防具の生産、メンテナンスを担当していた。戦闘に關してもメイス等の鈍器の扱いに長けており、攻略組とまではいかないが一戦で活躍するほどの実力を持っていた。

「でもでももっ遅刻はしてないわけですからいいじゃないですかっ」

このメンバーの中でひとときわ低い身長に左右に伸びた可愛らしいツインテールが特徴の少女、シリカ。

本名、綾野珪子。SAO時代は珍しいビーストテイマーとして、フェザーリドラのピナとともにダガーを片手にアインクラッドを駆け回っていた。キリトに想いを寄せているが、中々その夢は叶うことはなさそうだった。

「いいえ、重罪よ重罪。これはもう全員に何か奢ってもらわないとだめなんじゃあないかしら？」

茶髪に左右のお下げと度の入っていない眼鏡が特徴の少女、シン。

本名、朝田詩乃。SAO時代は回線トラブルによって事件に巻き込まれた。精神に深い傷を負ったままSAOに迷い込んだので当初はかなり塞ぎこんでいたが、キリトの助けによって少しずつ立ち直っていき、無事にSAOを脱出し、今は一人暮らしをしている。SAO、ALOでも珍しい長距離武器使いである。

「えー、ちょっとみんなキリトに敵しすぎー。確かにちよつと遅かったかもしれないけど……」

ひとときわ目立つ首元まで伸びた金髪とポーウィツシユな白と水色の服装が特徴の元気な女の子、フィリア。

本名、竹宮琴音。SAO時代はホロウエリアと呼ばれる未知の非公開エリアに迷い込み、データの存在となったPOHに死の一手手前まで追いつめられたが、キリトの活躍によって無事現実世界に帰還できた。

「あ、頭が痛いぞ……」

目の前の光景に激しくデジャヴを感じた和人は、入った瞬間みんなに言いくるめられたのもあってか、頭を押さえて頭痛を覚えていた。

決して遅れていないのに何故自分が追いやられてしまっているんだと。恨めしそうな視線を送りながら自分の身の潔白を訴えていた。「まあまあ、みんないつも通りってことでよかったじゃない、キリト君」

そんな言いくるめられている和人の後ろから明日奈がひよこつと姿を現した。その姿を視界に映したその場にいた全員が目を丸くして驚いていた。

何故ここに明日奈がいるんだ、和人とは別れていたんじゃないのかと。そんな驚いている面子を尻目に和人は何食わぬ顔でしれつと頭をかきながらすつとぼけていた。

「あれ、言っただけじゃなかった……明日奈が来ること」

和人が困ったような表情を浮かべながらみんなに聞くと店内のありとあらゆる方向からサラウンドで「言っただけじゃなかった!!」というツツコミが返ってきた。

和人はやっちゃったという表情を浮かべながらも笑顔で自分の頬を人差し指でポリポリとかいて、その場を誤魔化そうとしていた。

「えっえっ……でもでも、キリトさんとアスナさんはその……わ、別れたと聞きましたけど……!」

シリカこと瑠子が慌てて食い気味に今の和人の現状を聞いてきた。縁結びのチャンスとでも思ってたつもりだろうか。心なしか少しだけ期待を胸に膨らませている様子を見せながら、二人の関係について聞いたでいた。

「うん、確かに一ヶ月前に私とキリト君は今までの関係をお終いにしたの。私の家の事情でまともに時間が取れなくなっただけ……、それをキリト君にまで負担を掛けるわけにはいかなかったから……」

ここにいるメンバーを含めて、元SAOプレイヤーは、今の明日奈と和人の関係を知っている。しかし明日奈は念には念を込めて、一ヶ月前のことと、現在の今の自分の状況をこの場にいる全員に口で丁寧に説明していた。

「それで、それからのことは……その、ユウキにお願いをしていたんだけど……」

ユウキの名前を口にした瞬間に明日奈の表情が暗くなっていった。そのただならぬ様子から、皆は何かあったんだということを感じた。これから明日奈の口からとんでもない爆弾が投下されるのではないか、そんな緊張感が漂い始めていた。中々言い出せない明日奈の前に和人が割って入り、集まってくれたみんなに話の本題を切り出した。

「それは俺の口から説明させてくれ。みんな……とくにエギルとクラインは忙しい中、俺の急な呼び出しに応じてありがとう。今日みんなをここに集めたのは、ユウキの為なんだ……」

ユウキの名前を口にした瞬間に、和人の表情は真剣な眼差しになり、その顔を見た全員の顔にも緊張が走っていた。

一体和人は今から何を言い出そうというのか、その真剣な表情と、わざわざ皆にここに集まってくれたことを考えると、決していいニュースがその口から出てこなさそうなことは、ある程度ここにいる全員も察していたようだ。

和人は一回深く息を吸い込み、ゆっくりと吐き出すと、みんなに集まってもらった目的を、ユウキの現状を語り出した。

「単刀直入に言う。ユウキは……いや、木綿季は、病気で……崖っぷちに追いやられている」

木綿季の体のことを知らない面子の表情が全員一変した。木綿季がHIVに侵されていることは、明日奈と和人、そしてスリーピング・ナイツのメンバーしか知らない、よってここにいる仲間たちの反応は当然の反応だった。

この中で数少ない成人のクラインこと遼太郎が、恐る恐るどうということかと和人に詰め寄って言葉の意味を確かめようとしていた。

「お、おい……どういふことだ、キリの字。ユウキちゃんっていえば……あの 絶剣のユウキちゃんだろ？ 病気って……一体どういふことなんだ？」

遼太郎からの疑問に対し、和人は淡々と一から説明を始めた。今、和人は木綿季と交際をしていること、その木綿季がHIVで崖っぷちに追い詰められていること、そして木綿季の命を助けるためにみんな

に集まってもらったことを。

その現状を聞き届けた瑠子は信じられないような表情を浮かべて口に手を当てながら、和人と木綿季の関係を聞いた。

「キ、キリトさんは……ユウキさんとお付き合いを……？」

瑠子は心なしか少しだけ残念そうな表情を浮かべながら和人を見つめていた。その隣にいる里香は小さい声で「やっぱりかく……」と呟いていた。

あの時の光景の一部始終を見ていた里香と瑠子は、ある程度二人の関係を察していたのだが、実際本人から直接伝えられ、やはり残念そうな態度を見せていた。

「ねえキリト、ちよつといいかしら？」

そんな中、シノンこと詩乃が右手を上げて何か聞きたそうに口を挟んできた。このメンバーの中で一番冷静に行動出来るのはゲームの中でも一番戦場を冷静な視点で見ることが出来る判断力を持った詩乃だ。

彼女が質問役を買って出てくれれば、自然とみんなにこちらの意図が伝わりやすくなる。和人にとっては彼女からの質問は非常にありがたかった。

「その、ユウキの病気を治すことと、今日みんなでここに集まったことに関係することってなんなの？」

「ああ、それについてなんだが……。度々で悪いがみんな……。この後少し俺に付き合ってほしい場所があるんだ。都合のつくやつだけいい、ついてきてほしい……」

話の筋がわからないままどんどん先へと進む和人に対し、メンバー全員が解せない表情を浮かべていた。

しかし、今まで和人に散々助けてもらっていたこともあり、元々和人に手を貸すつもりで集まったメンバーは、嫌な顔せず和人からの提案に対して肯定の姿勢を見せてくれていた。

「んじゃあ俺が車を出そう、ワゴン車だからキリトとアスナがバイクで行けば、あとは全員乗れる。みんな……。それで構わないな？」

ここにきてエギルことギルバートが助け船を出してくれた。さす

がこの中で一番の年長者だ、頼りになる。返事は勿論満場一致で和人についていくこととなった。和人はみんなに感謝の気持ちを示しながら、今後の予定について引き続き話を進めていった。

「まず横浜の、港北総合病院で全員で木綿季の面会に行く。その際、俺と明日奈は先に主治医の倉橋先生に、今からみんなに話す作戦を説明するつもりだ」

「……………」

「目的は木綿季を心から支えてやって元気づけてやること、そして倉橋先生の協力を得ること、この二つだ」

身振り手振りで和人は木綿季を助けるための話を皆に聞かせた。大体の概要の説明が終わり「質問はあるか？」と全員に声を掛けると、すかさず里香が手を上げて、気になっていることを和人に問いただした。

「キリト、もうずっと気になってるんだけど…………その、ユウキを治すための作戦って何？ AIDSって不治の病って聞いているけど…………」

「いや違う、AIDSは治る。元凶のHIVウイルスごと…………駆逐できるんだ。骨髄移植によって…………！」

和人からの回答に全員がまたもやサラウンドで「骨髄移植!？」と声をそろえた反応を見せた。意外にAIDSが治るということは世間に知られていないらしい…………。

道理で調べ上げるのに時間がかかったわけだ。そりやそうだ、全世界で完治者がたった二名しかいない上に、その事例が今から13年前の話だったからな、情報が埋もれてしまうのも無理はない。

「続けるぞ、んでそのHIV耐性をもつ骨髄ドナーなんだが、ドナー登録者の白人の…………全体の約1%しか見つかっていない」

「……………」

「そしてさらにそれはHLAと呼ばれる患者とドナー提供者の細胞の型が合わない移植ができない、この二つの問題が非常に難儀なんだ」

淡々と説明を続ける和人の話を皆真顔で聞き続けた、今の和人の表情はSAO時代の仲間を守るよきの顔になっていた。即ち、自分

の命を惜しまず誰かの命を守るための……あの頃の表情をしていた。
木綿季のためなら自分がどうなっても構わないという覚悟の姿勢を見せていた。

「とんでもなく低い割合だが、これさえクリアすれば木綿季は助かる。HIVを駆逐して健康な体になれる……！　一緒に……外を歩けるんだ……!!」

説明をする和人に力が入っていた。木綿季のことを考えるという
いろんなものがこみ上げてくる。ぐっと拳を握って我慢している和人の手を明日奈が優しく握りしめた。

「明日奈……」

「キリト君、頑張ろ……?」

「……ああ……、ありがとう……」

里香はそんな二人のやり取りを見て「何だ、全然仲いいじゃない……」とでも言いたげな顔で二人のやり取りを見つめていた。

瑠子は自分の手元に置かれたドリンクの入ったコップのストローに口を当て「ズズズ」というお行儀の悪い音を立てながら不機嫌そうに二人を見つめていた。

「んで、簡単に段階に分けてこの作戦を説明するぞ。まずは木綿季を精神面から励まして安心させてやることだ。精神的に楽な気持ちになれば体への負担が自然と減る」

「……………」

「生きようと思う気持ちにエネルギーを与えるんだ……。結果、木綿季の余命はわずかでも延びる……」

「……………」

「そして、俺と明日奈で倉橋先生にこの作戦の概要と最終目的を伝える。この時点で先生が賛同してくれなかったら、アウトかもしれない。あくまで素人目線で立てた作戦だから、医学的に否定されるかもしれない」

ダイシー・カフェにはかかってない緊張感が漂っていた。本来ならば、仕事で疲れたサラリーマンや、ここの酒や料理を楽しむために足を運んで、いい雰囲気飲み食いをする場のはずが、人の生死を占う

話をしていることで、張りつめた空気が流れていた。

「そして、ここからが一番重要なポイントだ。下準備が出来ていてもこれが失敗したら、木綿季は死ぬ。助からない」

和人の口から”死ぬ”というワードが放たれた瞬間に全員の顔が強張る。心なしか和人の体も震えている。自分が何を言っているのか分かってるから……。明日奈はそんな和人の心境を見抜き、すかさず和人の手をもっと強い力で握りしめた。

「大丈夫だよキリト君、私が付いてるから」そう言いたげに暖かく握りしめていた。握られた明日奈の手から温かさを感じ取った和人は少しだけ我を取り戻し、作戦の最終段階の説明を始めた。

「最後はどうやって木綿季のHLAに合致したドナーを用意できるかということなんだ。ここで、話の頭から言っていた作戦の正体を説明しようと思うんだが、ちよいとこいつを見てほしい」

和人は自分の鞆からクリアファイルを取り出し、中から何枚か資料らしき紙を取り出してダイシー・カフェのテーブルの全員の見える位置に広げた。

それを見たメンバーの反応は様々なものだった。全員「え……えええええくくくっ!？」と口を揃えて驚いているかと思えば「……いいじゃん！ やろうぜこれ！ 絶対成功させようぜ!。」と、正反対の意見が聞こえた気がした。

「キリの字〜！ 水くせえぞコン畜生が！ この計画を立てた時点で何でこの俺様に声をかけねーんだてめえはっ!!」

遼太郎は上機嫌になると和人に絡みネックロックをかけ、中指の第二関節で和人のこめかみの部分をぐりぐりと食い込ませていた。

一方の和人は至極面倒くさそうな表情を浮かべて周りのメンバーに助けを求めていたが、意味ありげな笑みを浮かべながら誰も和人を助け出そうとはしなかった。

「あ、アンタ本気でこれを決行するつもりなの…!？」

一方で一番冷静な詩乃が度の入ってない眼鏡越しに驚愕の表情を見せながら固まっていた。何故みんな口を揃えて同じような反応を試みせるんだらう。そんなにこの作戦におかしなところでもある

のだろうか？ と疑問の念を抱いていた。

しかし和人の意思は固かった、思い当たる節はもうこれしかない、これ以外にドナーを集める方法に心当たりはない。故に覚悟も決まっていた。

「ああ、本気だ。もうこれしかない」

和人は真面目な顔つきでみんなを見渡した。その固い意思と真剣な眼差しから、それがこの計画を立てた時点で勝算があつてのことなのだろうと悟っていた。

最初こそ驚きのあまり言葉も出なかったが、一回時間をおいて冷静に考えてみるとあながちいけなくもないと思ひ始めているメンバーもちらほら現れ始めていた。

「でもでも、これすっごいイケる気がするよ！ これならきつとユウキちゃん助かるよ！」

作戦がいけるかもしれないと思ったフィリアこと琴音がフォローを入れた。和人にとって瑋子の次に純粹無垢な明るいこの性格は本当にありがたかった。

「そ、そうねえ、一見無茶苦茶に思えるけど、結構合理的な部分もあることだし、頭ごなしに否定は出来ないっつーか……」

里香は苦笑いを作り、困ったように周りに賛同を求めていた。瑋子も同様苦笑いで見つめていた。理解はしていてもどこか納得は出来ていないといった様子だった。

先ほどまで緊迫した空気に包まれていたダイシー・カフェだったが、和人から伝えられたぶっ飛んだ作戦を聞かされたことで、少しだけ緊張感が緩んでいた。

「うん、私も最初聞いた時驚いたよ……。でも馬鹿っぽいけどすごいキリト君らしいというかなんというか、あはは……」

「アスナ、それ……フォローになってないわよ……」

明日奈がフォローになってないフォローを入れると、すかさず冷静に詩乃からツツコミが入った。フォローというより馬鹿っぽいなのなんだのと。

むしろ和人のメンタルにトドメを刺そうとしているようにも見え

てしまう。周りからあまりいい反応を得られなかった和人は解せない表情を浮かべながら肩を落として落ち込んでしまっていた。

「……どうせ俺は異端児ですよ……」

和人はそう言いながら、一番近くにあった椅子に腰を落として、テーブルに手を当て顔をつ伏していじけてしまった。そんな子供じみた和人に、先ほどトドメを刺した明日奈が駆け寄って気休めとも取れる励ましの言葉を掛けていた。

和人が少しだけ不機嫌になり、話が中々前進しなさそうな空気になつてしまつたが、その空気をぶち壊すべく、社会人の遼太郎が声を張り上げ意気込んで、早速行動に移そうと全員に活を入れた。

「ようし！ そうと決まれば善は急げだ！ 早速その横浜の病院に木綿季ちゃん励ましに行つたろうぜえ!!」

遼太郎が全員にそう言い放つと店内のあちらこちらから「オーツ!!」と気合のこもつた返事が返ってきた。SAOをプレイしている当時は思わせるような全員の一致団結。きつとこの力は限りないエネルギーとなつて、木綿季を支えるであろう。

それは和人にとつても心の底からありがたいものであつた。久しぶりに感じた”仲間”の暖かさだった。和人はありがたいと思つたと同時に、もつと早く頼ればよかったと少し後悔の気持ちも胸に抱いていた。

「みんな？ アミクスフィアは持つたわね？」

出掛ける準備をしていた詩乃が全員に確認を取つた。すると全員自分の荷物からアミクスフィアを取り出し上に高く掲げ、準備オツケーといった合図を送つた。

ギルバートに至つてはLANケーブルのHUBまで持ち込んでおり、相当準備がいいことこの上ない。元々持ってきてくれと頼んだのは和人だったのだが。

「よし、じゃあ車を出すからみんな店の前に集まっててくれ。俺は嫁さんに断つてからすぐ行くからよ」

ギルバートは店の奥に消えると奥さんに声を掛け、少し離れた駐車場に車を取りに行った。他のメンバーは続々と入口のドアから外に

出ていった。

ぞろぞろとメンバーが外に出ていく中、遼太郎だけが一人店の中に残り、店内が遼太郎と和人だけという状況になっていた。和人は何で遼太郎は外にいかないんだ？　と思いつながらこのよくわからない状況を見守っていた。

「キリの字、さっきの計画だが……あんときはただバカみたいに喜んでいただけだったがよ。……俺は悪くねえと思うぜ？」

「ク、クライン……」

「むしろ現実的で合理的だ。演出面でちと劣るところもあつからよ、そこはこの俺様が修正してやる。それでも社会に勤めてんだ、企画の修正とマスターアップはまかせとけよ？」

そう言うのと遼太郎は煙草を片手に持ちながら、力強く和人の背中をバシンと叩いた。だぼだぼのワイシャツに曲がつたネクタイ。微妙にヤニ臭いその背中中、過去になくともなく頼もしく見えた。

「ああ、ありがとな……クライン……」

和人はうつかりまた涙が出そうになったがこらえていた。遼太郎から気付かれないように瞼をこすると自分も荷物をまとめて外に出た。こんなに頼もしい仲間に囲まれて心底俺は幸せものだな、そう思った。

そして和人と明日奈は和人のバイクで、それ以外のメンバーはギルバートの用意したワゴン車に乗り込んで、木綿季の入院している横浜港北総合病院へと走り出していった。たった一人の少女の命を救うために、S A O時代の仲間たちが一致団結して助けようと動き始めていた。

第16話く再開、絶剣と閃光く

西暦2026年2月1日 日曜日午前10時 神奈川県横浜市金沢区 横浜港北総合病院

和人と明日奈を乗せたオートバイ、そしてギルバート、遼太郎、里香、珪子、詩乃、琴音らSAO帰還組を乗せたワゴン車は、横浜港北総合病院の駐車スペースへと到着していた。先にオートバイを駐輪場に停めた和人と明日奈は先に降りて、ワゴン車組の駐車を待っていた。明日奈は病棟を駐輪場から見上げていた。

「またここに來れるなんて……」

「俺は昨日來たばかりだけどな……」

「私、ちよつとだけ緊張してきた……。木綿季にどんな顔で会えばいいのかな……」

二人で病棟を見上げていた、二人共この病院には今は様々な思い出がある。とある病室にお互い大切な人がいることも同じだ。明日奈が心配そうに言うのと和人は明日奈の肩に手を当てフォローを入れる。

「別に、今まで通りでいいんじゃないかな。……まあ木綿季は明日奈との約束を一生懸命守ろうとしてたから、お礼ぐらいは言つてあげた方がいいな」

「そうだね……」

複雑そうな顔つきで話を交わしてる間に、和人たちのバイクの後ろを走っていたワゴン車組が、ゾロゾロと行列をなして彼らに追いついてきた。

一人のお見舞いをするのにこの人数は正直多すぎると思う。病棟の廊下を歩くときに他の患者さんや看護師さんの邪魔になったりしないか少しだけ心配だ。

「ここが木綿季ちゃんの入院してる病院か、でっけえな……」

「ああ……行こう、木綿季が待つてる」

遼太郎が大きい病棟を見上げて言葉を漏らした。でかいだけでは

ない、ここには世界で唯一とっていい医療設備がある。そこに木綿季がいることを、この中では和人と明日奈しか知らない。

和人はそんな中、先陣を切って病院に入ってしまった、それを残りの七人は慌てて後を追って続くように院内に向かって穂を進めていった。

病院内のエントランスはそこそこの人がおり、忙しそうな感じはなく、慌ただしくもない様子だった。この感じならこの人数でもあまり迷惑はかからなそうだ。和人は明日奈を連れ、受付へと足を運んだ。「すみません、面会をお願いしたいのですが……」

「はい、ではお名前と患者さんの名前……ってあなた方は……」
「あ、昨日の……、どうもこんにちは……」

なんと昨日の受付のお姉さんであった。そのお姉さんは明日奈が病院を訪れたときも受付しており二人に何かと縁があった。

「あなた方が訪ねてこられたということは……」
「はい、紺野木綿季さんの面会に来ました。でもその前に、担当医の倉橋先生とお話をさせていただきたいと思うのですがよろしいでしょうか」

「畏まりました、只今お呼びしますので少々お待ちください」
お姉さんは慣れた様子で受付の奥へ消えていった、流石に3回目ともなると慌てる様子はなかった。この何かを待っている時の”間”というのはどうも落ち着かない。

早く次の行動に移りたいのに待たされているときのもどかしさといったら。

それが大事なことを控えてる前なら尚更である。やがて五分ほど経過すると、木綿季の主治医である倉橋が姿を現し、和人たちに軽く頭を下げながら近付いてきた。

「これは……和人君に明日奈さん、今日はお二人でいらしてたんですね、ありがとうございます。木綿季君も喜ぶと思います」
「こんにちは、倉橋先生。いつも木綿季を支えてくださって…ありがとうございます」

明日奈が丁寧な口調で説明をする。その姿をみた倉橋はいえ、こちらこそ助かってますと返事を返すと先ほどの本題を切り出してきた。

「それで私にお話とは……一体何でしょうか」

「木綿季を助けるための提案があります。時間がよろしければここではなくて、落ち着ける部屋で……お話をさせていただきませんか？」

引き続き明日奈が丁寧な口調で説明をする。

こういう時は和人より明日奈の方が上手だ。伊達にお嬢様の生活をしているわけではなかった。倉橋はその言葉を聞くと一瞬驚いた表情をし、しばらく考え込んだ後明日奈に聞き返した。

「ゆ、木綿季君を……助ける……？」

倉橋もまさかこんな話を切り出されるとは思わなかったようで、よくみると顔のいたるところに汗が浮き出ている。よほど動揺したのか、それとも心当たりがあったりしたのか。

「はい、俺たちはAIDSのことを調べました。それも徹底的に一般人が調べられる範囲ですけど。それらを踏まえたことを前提としてお話しさせてください。お願いします！」

和人も深々と頭を下げる。その様子を見た後真剣な表情をした倉橋は、今までの感じとは違うものを感じ、「こちらへどうぞ」と手のひらで導きながら、使っていない会議室へと二人を案内した。

奥へ行く前に和人は、遼太郎達にそれまでここで待っててというジェスチャーだけして、倉橋についていった。

「歩きながら話しましょうか、お二人とも……木綿季君を助けるということは、おそらくアレの存在に気付いたという認識で、間違いはないんですね？」

「ええ、辿り着くまでにすごい苦労しましたけどね。でも木綿季を助

けられる唯一の可能性はもうこれしかないと思っています」

「こちらです、看護師に飲み物を持ってこさせますね」

和人はお構いなくとだけ言うを持ってきた資料をクリアファイルから出し、机の上に広げた。桐ヶ谷親子が、必死になって調べ、まとめあげた手製の資料だ。

「倉橋先生、今から俺が話すことは医師としての判断ではなく、素人の一般人としての認識としてお聞きください。情報の間違い等があったら遠慮せずに指摘してください。間違った方法で木綿季を助けたりはしたくないですから」

「……分かりました、聞きましょう」

和人は倉橋にすべて話した。

骨髄移植のこと、そのドナー登録者を見つけることの困難さ、昨夜調べて分かったことを、こと細かく全部倉橋に話して聞かせた。

「どうでしょう、俺たちの話でおかしなところはありますでしょうか……」

「ふむ、そうですね……」

「……………」

「……和人君、あなたは本当にすごい。この短期間でHIV耐性骨髄のことを調べ、どうやれば木綿季君の助かる道につながるかどうかもしっかり探し突き止めた。これは本当にすごいことです」

倉橋はしばしの沈黙の後、和人の行動力にえらく感心を示していた。そしてあくまでも医師としての角度で話を続けた。

「あなた方の仰る通り、結果だけ言うと木綿季君のHLAに合致する骨髄ドナーを見つければ、木綿季君を助けることが出来ます。移植手術によくありがちな大掛かりな手術でもありません、だから手術

による木綿季君への肉体的負担はほとんどないと見ていいと思いません」

「ほ……本当ですか……!」

「しかしリスクがないわけではありません。運よく木綿季君のHLAに合致する骨髄が見つかったとしても、拒絶反応が起こる可能性は決してゼロではないのです」

「拒絶反応があったときの最悪の事態は知っています、それで……その拒絶反応が起こる可能性というのはどのぐらいなんですか?」

「……一般的には15から20%ほど、と言われてます」

「……………」

和人と明日奈の顔が強張った。骨髄があれば助かるという簡単な問題ではなかったからだ。そりゃあそうだ、もしそうなら世界中でAIDS患者が続々と完治してるはずだ。やはり、そう甘い話などではなかった。

「しかし、報告を見ると骨髄移植で亡くなっている方々はほとんどが四十を越した中年以降の方々ばかりなのです。木綿季君は病気で衰えているとはいえ、肉体自体はまだ若い。実際の死亡リスクはその数字より低いとみていいでしょう。そして……『全体』を通して見ても、木綿季君が助かる確率は臆病的に判断して……」

「……………」

二人は倉橋の回答に息を飲んで待った。お願いだ、出来るだけ高い確率であってくれ、木綿季が助かる数字であってくれと、祈りながら倉橋の言葉を待ち続けた。

長い沈黙のあと、倉橋は頭の中で計算を終え、ゆっくり口を開き、和人たちに結論を話して聞かせる。

「やはり現状では限りなくゼロに近いでしょう」

「なっ——」

倉橋の口から放たれた言葉に、和人と明日奈は絶句してしまっていた。

嘘だろ……ここまでできてそんなのって、今助かるって言ったじゃないか、どうして……? 結局俺たちがやってきたことは全部無駄だっ

てのか？ そんな……木綿季、木綿……季……。

「お、お二人とも落ち着いてください、あくまで”全体”を通してみるの確率です。手術そのものの純粋な成功率の数字の話ではありません！……私も誤解を招くような言い方をしてしまつて申し訳ありません、顔を上げてください」

倉橋からのその言葉を聞いた二人は震えるように息を吐き、安堵した。自分自身の寿命が削られた、そんな感覚に襲われていた。

上げて落として、また上げられる。天国と地獄を両方味わっているようだった。

「ジョークにしたって……心臓に悪すぎますよ、倉橋先生……」

和人と明日奈の心臓はバクバクであった。

まるで自分が死刑宣告をされたかのような。和人は思いつきり倉橋を睨むと、恨みを込めた視線を送り続ける。倉橋はちよつと気まづくなつたのか少しだけ視線を外側にずらした。

そして、それらを誤魔化すかのようになり、若干強引に話を元に戻した。「木綿季君の場合、手術の成功率自体は九割程とみていいと思います。木綿季君はHIVに体を侵されている以外のことに関しては健康ですから」

……あんな寝たきりの状態で健康だなんてよく言えるなと思った和人であつたが、高ぶつた感情を表に出さないように、ここはぐつとこらえた。

「じゃあ、何でさつきゼロに近いなんて言つたんですか……」

和人に代わつて明日奈が倉橋に切り込んだ。二人で話を聞きに来て本当に良かったと思う。

和人だけだったらきつと倉橋を殴りつけていたであろう。医者や患者やその遺族に現実を突きつけたときに逆恨みを買うことがよくあるらしい。……今の状況がまさにそれだったのかもしれない。

「その理由は恐らくあなた方も理解していると思います。HIVの骨髄移植の成功率の低さは……ここが一番の問題なんです」

その先にあるであろう壁の事を倉橋から聞かされる前に、和人と明日奈はお互いの視線を合わせると同時に頷き、倉橋に視線を戻すと意

を話し終え、エントランスへと戻ってきていた。

今回の倉橋へのコンタクトは成功とみていいだろう。現に今まで出会った倉橋のどの表情よりも希望に満ち溢れている顔をしていたからだ。

「倉橋先生、お忙しい中どうもありがとうございます」

「いえ、むしろお礼を言いたいのはこちらです。これでようやく……」
「先生……安心するのはまだ早いです。この喜びは木綿季が治ってからにしましょう」

「そうですね……そうしましょう。ドナーバンクの件については私にまかせてください。いつでも受け入れられるようにしますのです。……それでは木綿季君の病室までご案内します。……それと、あちらはお連れさんですか？」

「……ええ、そう、なんですけど……」

和人は倉橋に聞かれると、手を差し伸べられた方向から熱烈なジェスチャーを送り続ける、謎の集団と目があつた。謎の集団とは言わずもがな遼太郎らSAO組のことであつた。

こんな人通りの多いところで、それも病院で一体何やってんだと、和人は肩を落とし頭を抱えながら首を垂れ俯いた。今この瞬間だけは他人のフリでいたかつた。

「お兄ちゃんおそーい！ 何やってたのよまつたくー」

急遽遼太郎達とはまた別の、和人を呼ぶ声のする方に視線をやる、そこには何故か妹の直葉の姿があつた。そして更にその後ろには母親の翠も確認できた。

「え……ちよ、ス……リーファ!? 母さんまで……なんでいるんだよ……こんなところに!」

「あらー? 徹夜してまであなたに力を貸してあげた母親にその言い方はひどいと思うわよ……? 和人」

「母さん、その言い方はいろいろと誤解を招くからやめてくれ」

ついでに本名で呼ぶのもやめてくれと言いたかつたがキリがないのでやめておいた。どうせここにいるメンバーは互いの本名を全員

知っている。すると翠は唐突にみんなの前まで出ると丁寧に挨拶を始めた。

「どうも……息子が普段から大変お世話になってます。母親の桐ヶ谷翠と申します、皆さんよろしくお願いいたします」

これ以上ないぐらい丁寧な口調とお辞儀で翠は挨拶を済ませた。遼太郎はというと翠に釘付けた、本当に見境がない男である。

身内に色目を使われた和人はなんとなくムカついたので、咄嗟に遼太郎のみぞおちに肘をかますと「おぶつ」という面白い声をあげると共にクラインが胸を抑えて悶えさせ、体をプルプル震わせていた。

少し手加減したつもりだったが運悪く入ってしまったようだ。

「この……キリの字何……しやがる……」

「す、すまんクライン……手加減したつもりだったんだが……」

「まあでも……今のはアンタが悪いわよね〜?」

里香が「ざまあないわ」という笑みを浮かべながらニヤニヤ遼太郎を見下していた。その様子はなんだか心の底から楽しんでいる様子で、若干周りから引かれていた。

「初めまして翠さん。和人と同じクラスの篠崎里香です。よろしくお願ひします」

「同じ学校の綾野珪子といいます！ よろしくお願ひします！」

「朝田詩乃です。和人とは学校は違いますけど……よろしくお願ひします」

「竹宮琴音です！ よろしくお願ひします！」

右も左も美少女のラインナップが並んでいる光景を眺めて翠は「あらあら和人ったら」と笑顔をこぼしながら自分の世界にトリップしてしまつた。

和人は即座に「そんなんじゃないから！」とフオローを入れた。それを聞いた少女たちは若干不機嫌気味になっていた。

「んでこつちのでっかいのがギルバート、こつちのリーマン風の男は壺井遼太郎。どっちも社会人だ」

「あらら！ どちらもたくましい方なのね……、よろしくお願ひしま

すね」

SAO組と桐ヶ谷一家と、一通り挨拶を交わした一行は、首を長くして待っている倉橋の存在を若干忘れつつも、本来の目的である木綿季のいる病室へと足を運ぶことにした。

「それで和人、どうなの？ 木綿季ちゃんは」

「うん、大丈夫。多分このままいけば上手くいく。先生も認めてくれたよ」

「そう……、よかったわね……」

「でも、まだこれからだ。まだ……これからが本当に大変だ……」

一行は倉橋に案内されるがまま歩を進めていった。

医者のをあとを大人から子供までゾロゾロと行進してる様子ははたから見たらそれは何の集団だと思ったことだろう。道行く看護師や患者さんの視線を集めてしまっていた。

しばらく歩き続けるとやがて倉橋が足を止めた。和人と明日奈が見たことのあるゲートが現れ、その奥にはブラインドで真っ黒になっている無菌室が見えた。倉橋はカードキーでゲートのロックを解除し、皆を無菌室の前まで連れてくると、口を開き、木綿季を合わせる前に一行に注意事項を促す。

「皆さん、ご存じのことだとは思いますが、木綿季君はHIVに感染しています。細菌やウイルスからの感染予防のため無菌室で毎日をごしています。そして……今から見せる木綿季君の姿は、人によってはあまりにもショッキングな内容になるかも分かりません。それでも構いませんか……？」

倉橋からそう告げられた和人と明日奈を除く一行は、一度視線を合わせた後、同意の意味も込めて頷いた。

倉橋は「分かりました」と皆にそう告げると手前のパネルでボタンの操作を始めた。

「木綿季君、おはようございます。気分はどうですか？」

『あ！ 倉橋先生おはようございます！ 今日もボクは元気ですよ！』

倉橋がマイク越しに仮想世界の木綿季に話しかけると、スピーカーから元気な木綿季の声が返ってきた。その声を聞いた瞬間、明日奈が口元を手で押さえ、力なく床に崩れ落ちてしまった。

「明日奈……い！ 大丈夫!?!」

和人と詩乃が慌てて傍に駆け寄り背中を支えた。泣き崩れた明日奈の目には涙が浮かんでいた。久々に親友の声を聴けて胸からいろいろなものがこみ上げてきたのだ。

『え……？ 先生以外に誰か来てるんですか……？ い、今……アスナって……』

「——ブラインドを解除します」

倉橋が最後のパネル操作を終えると無菌室の真つ黒なブラインドが解除された。そして一行の目の前にガラス越しにメデイキュボイドに身を包む木綿季の姿があらわになった。

その姿を初めて見た遼太郎、珪子、里香、琴音、直葉は驚愕の表情を見せていた。

無理もない。か弱い女の子がケーブルを通して機械に繋がれてまで延命しているその姿は、大変にショッキングな光景だ。

和人と明日奈も最初はこうだったのだから。

しかし、詩乃だけはそこまであまり驚いた表情をみせてはいなかった。ガリガリに痩せ細ってしまった木綿季の体には驚いていた様子だったが。

「……………」

ギルバートと翠は冷静に木綿季を見ていた。目の前の光景にまったく動揺をしていないわけではないが、肝が据わっているというやつである。大人なだけあってその現実を受け入れる強さを持っていた。

『わあ……すごい、何でこんなに人がいっぱい……？ ひよつとすると……ALOのみんな……なのかな?』

木綿季は驚きの声を隠せずにいた、こんなにぞろぞろ大人数でお見

舞いにくるなどは夢にも思わなかったのだ。完全に知らない顔ま
でいる。モニター越しに一人ずつ知ってる顔を見て誰かを確かめて
いった。

『エギルさん、クラインさん、シリカにリズ、フィリアにシノン！ そ
れに和人！ またきてくれたんだ！ 嬉しいなあ……ありがとう！』
皆の姿を確認していった木綿季であったが、明らかに和人に対して
だけ反応が違った。恋人だから当然の反応だが。しかしそれでも知
らない顔が何人かいた。

『ねえ和人、一人の隣にいるそっちの黒い髪のお姉さん二人は……誰
？』

木綿季が質問を投げかけると、自分たちのことだと悟った翠がペコ
リと丁寧にお辞儀をした。直葉も木綿季の現実の姿に同様を隠せて
いなかったが、翠につられるようにして、同じように頭を下げた。

「初めまして……紺野木綿季ちゃん、いつも和人がお世話になってま
す。和人の母親の……桐ヶ谷翠です。よろしくね」

『……え？』

木綿季は固まってしまった。

付き合って数日……というより翌日で既に目の前に恋人のお母さ
んが現れたというではないか。色々な考えが脳裏を巡っていたが、と
りあえず驚愕の叫びをあげることしかできなかった。

『……えええええ~~~~~~~~ツ!?!』

その瞬間スピーカー越しに何かドツタンバツタンといった音が聞
こえたような気がした。仮想空間なので部屋が散らかるとかはない
はずなのだがおかしな話である。仮想空間の中で姿勢を正したであ
ろう木綿季は慌てて挨拶を返す。

『ははは、初めまして!! こっ紺野……ゆっ木綿季です!! か……
和人君とはお、お、お付き合いをさせていた দিয়েおりまする!!』
慌てすぎて微妙に変な言葉遣いになってしまっていた。あまりに
もおかしな慌て方をした所為か、和人も顔が真っ赤になってしまっ
ていた。

人がたくさんいる目の前で付き合いを公言されたらもう赤面する

しかない。頭のとっぺんから湯気のようなものが出てきている気がした。
「ご丁寧にありがとう、やっぱり木綿季ちゃんって可愛いよね……、和人は幸せ者だわ」

『え、ええ!?! か……可愛いなんて……はう……あう……』

「……え、えっと木綿季、紹介するな。母さんの隣にいるこの子は妹の直葉。シルフ族のリーファだよ、一緒にデュエル決闘したり冒険したことあっただろ?」

『・リーファだったんだ! ……道理でアバターと同じようにスタイルがいいと思った!』

木綿季に自身のスタイルの事を言及されると、直葉も顔を真っ赤にして俯いてしまった。

野郎がいるこの場面でスタイルいいなんて言われたらこうなってしまうだろう。直葉自体はこの豊富な肉体をあまり良しとは見てない様子だ。運動をする時には大変に邪魔になるということらしい。

ひとしきり現実世界のメンバーと挨拶を交わした木綿季であったがまだ一人、詩乃の後ろに誰かが屈みこんでいる事に気が付いた。そして木綿季はきよんとした表情を浮かべながらその正体について皆に訪ねた。

『えと……あと一人、シノンの後ろに誰かいるよね? えっと誰だろ……』

詩乃は勇気に言われると、カメラの視界から自分の位置を横に少しだけずらした。ずらした先には木綿季が長い間ずっとずっと会いたかった親友が、膝をつきながら涙を流している光景が目映つてきた。

『……あ、アス……ナ……?』

木綿季は明日奈の姿を目に移すと、親友の名前を口ずさんだ。

明日奈はそれに応えるように力を振り絞り、ゆっくりと膝を立て、体を起こすとカメラに向かって涙を流しながら笑顔を作り、深呼吸をしてから精一杯の挨拶をした。

「……木綿季、久しぶり……!」

第17話 く姉ちゃんく

西暦2026年2月1日 日曜日午前10:20 神奈川県横浜市
横浜港北総合病院

「木綿季……久しぶりー!」

『明日奈……本当に……明日奈……』

「木綿季……また会えると思ってなかった……」

木綿季は声を震わせながら親友の名前を呼んだもう二度と会えないと思っていたからだ。スピーカーの向こうからでも涙ぐんでいる様子がわかる。明日奈の目から滝のような涙が溢れ出てくるのを、シンがポケットからハンカチを出し明日奈の涙を優しく拭いた。

「みんな、とりあえずここで立ち話もなんだ。ここからはALOで話し合おう。倉橋先生、隣の部屋を……またお借りしていいでしょうか?」

「それはかまいませんが……でも生憎アミュスフィアは一台しかないのですよ……」

倉橋がそういうと全員待つてましたと言わんばかりに、カバンからそれぞれアミュスフィアを取り出した。全員顔に「問題ありません」と描かれているかのように、準備万端といった表情を浮かべていた。倉橋は一瞬呆気にとられると「来客用の少しいい椅子をお持ちします」と扉の向こうへ消えていった。

『明日奈……また会えて嬉しいよ……ボク、話したいことがいっぱいあるんだ……』

「私も木綿季と……たくさん話したい……!!」

『うん……! えへへ……』

少しすると先ほど椅子を取りに別室に行つた倉橋が看護師と一緒にせつせこせつせこと椅子を運んできた。キャスター付きで革素材で作られ、リラックス出来る結構いいやつだ。それをこの人数分用意したと言うのだから驚きというより、いい人過ぎるだろう。

「倉橋さん、わざわざすみません…」

翠が少し申し訳なさそうにそう言うとき倉橋は「これぐらいのことはさせてください」と喜んで手を動かした。本当に木綿季の周りにはいい人ばかり集まる。多分これが木綿季の本当の人望……人柄もたらしていることなのだろう。

「よし木綿季、これからALOにログインするからお前も来てくれ。この前の…場所だな」

『うん！ ボクもすぐ行くよ！』

和人がそういうと、木綿季のスピーカーからは心の底から明るく嬉しそうな声が聞こえてきた。和人と明日奈だけじゃない、みんなが……みんながボクに直接会いに来てくれた！ 本当に嬉しい、いつかこのお礼はしないといけないな、でもどうやってお礼したらいいんだろうなあと、ユウキは久方ぶりに嬉しさの感情がこもった悩みを抱えていた。

「すみません桐ヶ谷さん、少しよろしいでしょうか」

木綿季が嬉しさを頭を抱えていると、倉橋が翠を呼び止めていた。大人だけの話でもあるのだろうか。翠はこちらを向き「楽しんでらっしゃい」とだけ言うと、倉橋とともに無菌室の近くにある応接間に入っていった。和人は何の話だろう……と思いつつも木綿季を待たせるわけにはいかないのですぐさま自分のアミューシアをカバンから取り出し、LANケーブルをエギルが持ってきたHUBに差し

体をリラックスさせる。直葉だけは持ってきていなかった。部屋
の備え付きのアミユスファイアを借りていた。

「なっなんか…すごい光景ね…これ」

リズが苦笑いを浮かべながらこの状況の感想を述べた。なんせ9
人もALLOプレイヤーが同じ部屋でほぼ同じ体勢でアミユスフイ
アをかぶっているのだから、外野からみれば何の集団だと思いに違
ない。

「VRMMOのオフ会とかあったら…こうなることもあるんだろうな
…きつと」

「集まってまで仮想世界で遊ぶのなら、それじゃあオフ会の意味がな
いじゃないの」

「まあまあ。細かいことは気にしないようにしようよ！今度はちゃん
とユウキちゃんも一緒にオフ会を計画しようよ！ きつと楽しいよ
！」

シノンの野暮なツッコミに対して天使のような笑顔でファイアが
速攻でフォローを入れてくれた。ありがとうファイア、君はこの中で
数少ない常識人…いや、女神だ。

「そうね、みんなと一緒になら…リアルでもゲームでも、きつと楽しい
に決まってる物ね」

「ああ…全くだな。それを現実にするためにも…いくぞ…ユウ
キのところに…！」

和人の言葉と共に、全員アミユスファイアをしっかりと頭部に装着し
て電源と入れ、それぞれがALLOのランチャーを起動して、一斉にロ
グインの体制に入った。やがて身体をリラックスさせ、意識を仮想世
界へと集中させていく。心と体の準備が整ったところで全員一斉に

「リンク・スタート！」のセリフとともに、九人の意識は現実世界から仮想世界へと委ねられていった。

同日午前10:30 ALO アルンの街 転移門前広場

世界樹の街アルンの転移門広場の周辺には、既に先ほどのメンバーの九人中八人が集まっていた。まだ来ていないのはクラインだけでメッセを飛ばすと「悪い！ 転移結晶切らした！ 買ってくるから先に向かつててくれ！」とのことだった。キリトは呆れ顔をしながら頭をぽりぽり掻きながらため息を吐いた。いざという時は頼りになる男なんだがなと珍しくフォローを入れながら。

「あいつなあ……一々こういう肝心なときに限って間が悪いというか要領が悪いというか……」

「キリトくん、クラインさんまだなの？ もう待ちくたびれちゃったよー！」

「ああ…今メッセが返ってきたよ、転移結晶切らしてるらしい。買ってから合流するから先に行ってくれだつてよ」

「んじゃあ、そう言うんだから遠慮せずに先に行くとしますかっ」

そういうながらリズは先に翅を広げて、我先にと緑の丘へと飛び立った。アスナやシリカも慌ててその後を追うように翅を広げて地面を蹴り、アルンの街の大空へと飛び立った。そしてやがてそれは連鎖的にキリト、シノン、フィリア、エギルと続き、総勢八人の妖精たちが一斉にアルンの空を舞っていた。

「アスナ、先に行ってもいいぞ。いろいろ話したいことも……あるだろ？」

「う……うん！ ありがとうキリト君！」

キリトがアスナに一足先に言っ来て促した。ここが出来る男と出来ない男の違いなのだろうか。アスナはキリトにお礼を言おうと、翅に力を込め全力の最大速度で目的地まで飛んでいった。今まで飛んだみせた速度で最速なのではないだろうか。

「へえ〜……、気が利くじゃないキリト」

「そーゆーところが、クラインとの違いなんじゃないかしらね」

シノンがキリトに感心する一方でリズはまだここにいないクラインに野次を入れた。どこにいてもクラインはいじくられている。悪いやつじゃあないのだがどことなく喋ると三枚目になってしまう。こんなにも女の子がいるのにもかかわらずもてないのは多分そういう事なのだろう。

メンバーから一足先に知らされていた目的地に急いでいるアスナは最大速度を維持しつつ、上空からユウキの姿を探していた。一か月前、ほぼ一方的に頼みごとを押し付けてしまった。一緒にいるという約束を破ってしまった、ユウキに合わせる顔はないけど、それでも……それでも貴方に会いたい……！ アスナはキリトに教えてもらった座標に近づくと上空から見下ろし地上をくまなく見て探していた。そしてそれらしい丘を見つけるとそこには一ヶ月ぶりに見る、ずっと会いたかった親友の姿があった。

「ユウキ……！ ユウキ——ツ!!」

アスナは心から叫んだ、あの時いなくなってゴメン、大変なことを押し付けてゴメン、あなたに何を言われても構わない……だけど……今はあなたの側にいきたい……！

「アスナ……！ アスナア——ッ!!」

ユウキは声のした方を見上げると、一か月ぶりに……親友の姿をその眼に映していた。待っているのが我慢出来ずユウキは羽を広げ、アスナに向かい飛び出していった。ああ……アスナだ、ボクの大好きなアスナだ！ ボクにたくさんの勇気をくれた初めての……本当の……友達……！

二人は上空20メートルほどのところですれ違おうと互いの手を握り合い、遠心力に身を任せ美しい回転をしながら互いを抱擁した。心なしかそのまわりにはキレイなエフェクトが舞っているように見えたとような気がした。

「ユウキ……会いたかった！ ……ユウキ……！」

「アスナ……ボクも会いたかったよ……アスナ……！」

「ごめんね……ユウキにたくさんのこと押し付けちゃって……いなくなっちゃって……ホントにごめんね……」

「んーん、ボクは全然気にしてないよ……、むしろアスナの役に立てたのなら……すつごく嬉しい……」

二人は抱き合いながら胸の内に抱いていた想いを互いにぶつければあった。しかしそんなことよりも今はただ嬉しい、こうして再び再開出来たことが何よりも嬉しい。ユウキは瞳に涙を浮かばせながら満面の笑みでアスナを見つめた。キリトのことも大切だがアスナもユウキにとってかけがえのない存在であったのだ。

「アスナ……今日は来てくれてありがとう……。ボク、ホントに嬉しいよ……！」

「私も話したいこと……たくさんある！ 私ね、母さんのこと誤解していたみたいなの……」

アスナがそう言うのとユウキは「どういうこと？」と首をかしげながら質問を飛ばした。アスナはユウキの「ぶつからなければ伝わらないことがある」という信念を胸に抱きながら母親にぶつかった。しかしそれでも京子の厳しい姿勢を崩すことは出来ずに、更に厳しい環境に立たされてしまったのだ。それをユウキは自分の所為でアスナの家族をばらばらにしてしまったと、責任を感じていたのだ。

「私ね、母さんの気持ちを理解してなかった……ううん、理解しようとしてなかったの。SAO事件で二年も勉強が遅れてしまって、それで心配しない親なんていないのに……私はただただ反抗してただけなんだ……」

「アスナ……」

「でもね、とある切欠で母さんの本心を知ることが出来たの。母さんは多分不器用なだけだったんだ。でもまあ……それは私もただけ……」

「んじゃあ……お母さんとは仲直り出来たの……?」

「えっと、今日家を出てくるときに知ったからまだなんだ。今日は夜遅くに帰ってくるからその時に……全部話そうと思うの」

結城家の内情にとりあえずの解決の兆しが見えたことに、ユウキは少しだけほっと胸を撫でおろし、安堵の表情を浮かべていた。いろいろごたごたはあったけど、このままいけば何とか丸く収まりそうだと安心していた。

「ユウキは? 一ヶ月前は体の調子がすごくいいって言ってたけど……今も大丈夫なの?」

「うん、昨日ちよつと……心臓が停止しかけたらしいんだけど……今はこの通りだよ!」

ユウキのさりげなくとんでもない告白に、アスナの表情が固まった。キリトも感じてたことだったが物凄いことを口走ってることを、

ユウキ自身はあまり自覚していなかった。自分の心の臓が止まるといふ、命の危機に関わることを。

「心臓……って……ユウキ大丈夫なの!?」

アスナはユウキの両肩を両手でガツチリつかみ、前後に激しくユウキの体をこれでもかとかぐわんぐわんと揺らし続けた。こんなことをした方がユウキの体調が悪化しそうなものだがお構いなしに揺らし続けた。

「わわわっ。だ……大丈夫だよアスナ。先生が言うにはちよつと精神的なことから一時的に体調に影響が出ただけだって言ってたから……多分平気だよ!」

「そ、そうなの……よかった……。でも無理しちやだめだからね……?」

アスナはユウキの言葉に安心すると、もう一度優しくユウキをぎゅつと抱き締めた。ふんわりとやわらかく包み込むような抱擁に、ユウキも目を閉じて安心して、アスナを自分の胸に受け入れていた。

「アスナ……やっぱり姉ちゃんのおいがする。お日様のおい……あつたかくて……優しく……安心出来て……」

「ユウキ……」

ユウキとアスナはしばらく抱擁を交わすと互いに視線を合わせ、にっこりと笑顔を見せあつた。しかしアスナに言わなければならぬことを思い出すと、次第にユウキの表情が曇っていった。

「あ、あのねアスナ……ボク、アスナに謝らないといけないのかもしれないかも……なくて……その……」

「……もしかしてキリト君のコト……?」

「え……あ……うん。知ってたんだね……アスナ……」

ユウキが少し気まずい表情を浮かべていた。ユウキからしてみればキリトを横取りしたように思ってしまったのだろう。しかし好きになってしまったものはしょうがないのである。キリトもユウキのことを好きだと言ってくれたし、今となってはかけがえのない絆で結ばれた仲だ。キリトがユウキを必要としているように、ユウキもキリトを必要としていたのだ。

「一緒にいるうちにね、ボク気が付いたら……キリトのこと好きになっちやって……。一度ね、アスナのときみたいに拒絶して……。逃げちやったんだ」

「……うん……」

「んで……そしたらその後すぐね、アスナみたいに病院まで直接会いに来てくれて……。ボク、ボクのこと……す……好きって言ってくれて……。その……」

昨日の告白のことを思い返すように語っていると、ユウキは段々恥ずかしくなってきたようで顔が少しずつ真っ赤になっていった。アスナはそんなユウキの始めてみる女の子としての顔を見ると、少しだけほっこりとしていた。ユウキもなんだかんだ言っただけの子だ、恋もするしお洒落もする、やっぱり女の子なんだなあと感じていた。

「ボク、キリトより先に死んじゃうよ？ 寂しい思いさせちゃうよ？

そう言ったら……絶対に死なせないって言ってくれて、絶対に病気を治してやるって、現実世界で一緒に歩こうって、そう言ってくれて……ボク……嬉しくなっちゃって……」

ユウキは昨日のことを語りながら、今度は大粒の涙を流し始めた。アスナは優しく手でユウキの涙を拭った。二人に血のつながりは全くないが、その仲睦まじい様子ははたから見ても、まるで本当の姉妹

のようだった。

「うん……そうだね……キリト君は優しいからね。優しいところがキリト君の一番強いところなんだよ。ユウキは男を見る目があるね！」
「え……アスナ……？」

「私ね、ユウキのこと応援するよ！ そりゃあちよつとだけ悔しいけど……キリト君になら安心してユウキをまかせられるし、逆にキリト君にだってユウキがついていければ私は安心できるなあ！」

アスナの応援するよという言葉にユウキは目を丸くしてキョトンとしていた。少しぐらい責められると思っていて。それどころか背中を押すと言ってくれているのではないか。本当は今でもキリトのことが好きなアスナであったが、しかしそれでも親友である二人の幸せを願って、心から応援してくれようとしていた。いい女というのはこういう子のことを言うのだろうか。

「頑張ろうねユウキ！ まずは……病気を治してから……ねっ！」

ユウキに元気を注入すると、アスナは三度ユウキを力いっぱい抱き締めた。ユウキもアスナに抱かれると、先ほど引つ込んだ涙がまた滝のように流れ出てきた。まるでキリトの泣き虫が移ったみたいに分の頬を濡らしていた。

「うん……うん……、あり……がと……アスナ……」

ボクは本当に……幸せ者だ。死ぬために生まれてきたボクが……こんな幸せになっていいんだろうか……。でも……でも……ちよつとぐらい……贅沢しても……いいよね……パパ……ママ……姉ちゃん……。

第18話 親子のけじめ

西暦2026年2月1日 日曜午前11:00 アルンの緑の丘

ユウキとアスナは感動の再会を終えると、キラキラガールズトークに花を咲かせていた。ガールズトークというよりはキリトの話題ばかりの、通称“キリトーク”である。

「んでさ〜キリトったらせつかくいいいムードだったのにぶち壊すんだよ〜？ ほんっとデリカシーがないったらありやしない！」

ユウキが顔をぷくーつと膨らませ、キリトへの不満をアスナにぶちまけていた。こんな話を気軽にふれるのは、元恋人で同じようにキリトのことを知り尽くしているアスナしかいない。

「そう！ キリト君はいつつもそう！ デリカシーがないっていうよりゼーンぜん空気が読めないの！ ほんっと頭きちやう！」

「ほんとだよ！ この前だってボクのコト”重たい”つつたんだよ！？」

女の子に対してサイテーだよもう！」

「そのくせこつちに気があることを言ってもゼーンぜん聞こえてないの！ 一回耳鼻科でもいってきたらいいのよ全く！」

キリトークと言えば聞こえはいいが、ようはキリトに対しての愚痴と悪口タイムである。本人がいないのをいいことに二人は大いに盛り上がっていた。キリトのいいところ、悪いところ、憎めないところ、頼りになるところなど、キリトに対する話題には事足りていた。

一方キリト含む残りのメンバーはまだ空を飛んでいた。転移門から距離はそこまで離れてはいないのだが先にユウキのもとへと向

かかっていったアスナに気を使い、キリトが敢えて皆をゆつくりと先導をしていたのだ。

「へっくしっ!!」

「キリトどうした？ 風邪か？」

派手にクシヤミをしたキリトにエギルが声を掛けた。別にVRMMOに風邪なんかないはずなのだが盛大にクシヤミをしてしまっていた。キリトは鼻の先つちよを人差し指でごしごしとこすると寒そうな仕草をしながら参ったなどといった表情を浮かべていた。

「うう……昨晚徹夜したのがこたえてきたか……若干頭がぼーつとするよな……」

「ちよつと……これからユウキを励ますつてのに、アンタがダウンしたりとかしないでよ……っ？」

「ぜ、善処します……」

「お兄ちゃんちよつと無理しすぎだよ？ ユウキちゃんのためとはいえ……少しは体をいたわらないとだめだよ……」

「休むときはちゃんと休んでるよ。いつもより無理してるのは……まあ否定できないけど……でもユウキを助けるまでは……あまり悠長になんかしてられないんだ……」

「あのねえ、ユウキを助けたいって思ってるのはアンタだけじゃないんだからね？ あたしたちのこともちゃんと頼りなさいよ？」

少しだけ体調が悪そうなキリトに対して、シノン、リーファ、リズベツトが心配そうに声を掛けた。みんなキリトが無茶をしていることとお見通しだった。そもそもにしてSAO時代から無理をし過ぎなのだ。攻略組の最前線で戦い続け、ホロウ・エリアも攻略し、ヒースクリフとの決着もしっかりつけたあと生存したプレイヤー全員を現実世界へと帰還させた。キリトはVRMMOで一番の実力を持つとともに、一番の苦労人でもあった。

キリトの体を心配しながらも、それとなく飛行を続けていた一行は

ユウキとアスナのいる丘へと辿り着いていた。キリトが上空からお
ゝいと声を掛けると、それに気付いたユウキとアスナが地上から同じ
ように上空へと返事を返した。

「キリトく——」

「キリトオ~~~~~~~~ツ!!!」

アスナのキリトへの掛け声がユウキにかき消された。その様子に
リズとシリカは若干のデジャヴを覚えていた。ユウキはキリトを視
界に捉えると嬉しそうにジャンプし、キリトのいる方に翅を広げて一
目散に飛び立っていった。そして一直線にお構いなしに突進するか
のごとくキリトのみぞおちに頭から突っ込み、そのままキリトに抱き
着いた。ちよつといつもより元気すぎる気がするが見たところ体調
は以前よりいいみたいだ。やっぱり倉橋の言ってた通り、精神面がユ
ウキにいい影響を与えるというのは間違ってたようである。

「おぐツ!? ユ、ユウキ……今日はいつになく強烈だな……というよ
り元気いっぱいだな、アハハ」

「うん！ アスナに会えたしいっぱいお話しできたんだ！ それに、
それにね？ キリトが……キリトがまた会いに来てくれた！」

「わ、わかった！ わかったから一旦離れてくれ！ 空中だとバランス
が……」

「えー、アスナはちゃんと受け止めてくれたよ……?」

ユウキはキリトの胸板に頭をこすりつけ、精一杯の大好きをキリト
に送った。周りの連中はほっこり見守っているものもいれば呆気に
取られている者もいた。胸板に顔を押し付けながら、上目遣いでユウ
キはキリトを見上げていた。キリトは毎回この調子で突進されてき
たらかなわんと思いつつも、毎度この顔が近くで見れるのなら……ま
あいいかと思いつつ始めていた、全く役得である。それをアスナは地上か
ら少しだけ寂しそうに見上げていた。そんなアスナにリズが近寄り、

苦笑いを浮かべながら肩にポンと手を当て、優しく声を掛けた。

「まあ……元氣出しなさいよ、私もさ……アスナの氣持ち……わかるからさ」

「リズ……？」

リズはSAO時代に一度キリトに失恋をしていた過去があった。キリトの武器を作るために一緒に素材を取りに行ったとき、窮地を救ってくれたキリトに恋心を抱いていたのだ。しかし当時キリトと一番近い関係をアスナが持っていたということを知ると、その親友であるアスナに恋路を譲ったというわけだ。その当時のリズと全く同じ氣持ちを、今度はアスナが感じていた。

「今だから言っちゃうけどさ、SAO時代ね……あたしもキリトのコト……好きだったんだ……」

「え……？」

「でもね……アンタたちがすごいお似合いだと思ったからさ、あたしが身を引いちゃったワケよ」

「そう……だったの……」

リズは参ったわねと言いたげな顔をしながら頭をポリポリと人差し指でかき、首を横に傾けた。どことなく寂しそうで、困ってそう。そして微妙な空気が流れ続け、しばらくの沈黙が流れた後、リズはアスナの肩に手を回して顔を近づけて、高らかに言い放った。

「まあこれで、あたしら似た者同士ってことよ！ 元氣出していきましょ！ アスナ！」

アスナもこれには「アハハ……」と苦笑いで返した。でも不思議と今回の件でそこまで悔しさはなかった。清々しいまでの敗北感

あつたが。アスナの目にうつすら涙が浮かんだ。何でだろう、あの二人を応援しているはずなのに、もう諦めてるはずなのに……。

「まあ少し悔しいっちゃ……悔しいかな……。私は今もキリト君のことが好きだし、それでもユウキならいいかなって思ってるんだ。でもユウキのことも……キリト君にとられちゃったみたいで……なんかもう……よくわかんないや……」

「まああれを見ちゃうと……ね……」

そういうとアスナとリズは地上から、仲睦まじく、楽しくスキップをしているユウキとキリトを見上げていた。純粹無垢なそのやりとりは見る方をも幸せにしそうな雰囲気を出していた。それと同時に、誰もあの間に入り込めないような、そんな空気をも感じさせられていた。この時、アスナは初めて“失恋”したのであった。

「完敗……だよね……」

程なくしてしばらくすると、キリトとユウキは一しきり遊んだあと地上へと降りてきた。二人を待っていたメンバーも「いつまでいちゃついてんだよ……」とでも言いたげな顔を並べて、二人を迎え入れていた。

「みんなー！ やっほー！」

ユウキは左手を元気にぶんぶん振りながら満面の笑みで、羽を広げながらゆつくりと地上へ降りてきた。もう片方の右手はキリトの左手をしっかりと握っていた。キリトはユウキのスキンシップに付き合っていたこともあり、どこことなく疲れている表情をしていた。

？

「それにしてもすごいメンバーだねー！ ……あれ？ クラインさんは？」

「遅刻」

「あ、ああ……そうなんだ……あ……あははは……」

遅刻というだらしないクラインの行動に、ユウキは苦笑いを見せていた。この場面に来てまで肝心なところで遅刻するというクラインのトホホな役回りに、メンバーはほんの少しだけ苛立ちを見せていた。そんな微妙な空気が流れている中、とある人物からキリトへとメッセージが送信されてきた。キリトは左手でメニユーを操作して自分宛てに届いたメッセージを確認すると、意味深な笑みを浮かべていた。

「よし、ようやくお出まじだぞ……今回の作戦の要となる人物が……！」

キリトは送られてきたメッセージを黙読すると、即座に上空へと視線を移した。他のメンバーもそんなキリトに釣られるように上空を見上げた。地上から100メートルほど離れた上空には人影が五人分、こちら目指して滑空をできていた。その中でもとびつきり目立つ少女が、元気に挨拶をしながら勢いよくキリト達のいる地点へと降りてきた。

「おーくーい！ キリトくーん！ 来たよーくー！
プリヴェィエーくートツ！」

その女の子の姿をみたキリト以外のメンバーは大層驚いていた。ALOで、いやVRMMOで、いやVR技術界隈、いやいやそれどころか多方面界隈で知らないものはほとんどこの世界に存在しないであろうというぐらいの、超有名人がメンバーの前に姿を現した。銀色

のロングの髪型に音楽番組で見るとようなアイドル衣装に独特のデザインのベレー帽をかぶったプーカの少女であった。

「ようー！ セブン！ 急に呼び出してすまない！ 来てくれてありがとう！」

「全く本当だよ！ これでも結構忙しい身なんだからね！ まあ……今は前に比べて研究時間もライブの回数も減ったから……ある程度自由に動けるけどね」

キリトだけがそんな周りのことなど気にすることなくマイペースで挨拶を進めている。だからKYと呼ばれるのだ。そんなキリトの前に降り立ったこのプーカの少女の名はセブン。クラウド・ブレイン計画実行の黒幕（本人に悪意があったわけではないが）であり茅場昌彦に匹敵すると言われている頭脳の持ち主。そして世界的に有名なVR技術博士の一人で、同時に世界的に有名なカリスマアイドルこと七色・アルシャールなないろ博士だ。その後ろには付き人のウンディーネの男性、スメラギが面白くなさそうな顔をして立っていた。身長180cmと広い肩幅といいガタイを持ち、顔もスマートで女の子が寄ってきそうな外見。ウンディーネらしくしろと水色を基調としたクロークに身を包んでセブンのあとをついてきていた。

「フン……ッ」

「キリト君！ 久しぶりだねー！」

セブン、スメラギに続いてレプラコーンの赤髪の少女が降り立った。赤と黒のゴスロリ調の服装に身を包み、その姿はさながらメイドさんといったイメージが似合う可愛らしい見た目をしていて、しかしこう見えても彼女の腕前はキリトに匹敵するほどの強さを誇る。その正体は元SAOサバイバーであり、キリトと同じく二刀流……いや、多刀流をスタイルとしたただ一人の廃人プレイヤーだ。クラウド・ブレイン計画が解決したあとはセブンと姉妹ユニットを組んで、

仮想世界現実世界共に世界全国を回っている。

「キリト……久しぶりだよ……！」

続いて大胆な服装をしたノームの少女、ストレアが降りてきた。かつてのアイコンクラッドでキリトたちと共に冒険をした仲間だ。プレイヤーと同じ外見をしているが、彼女は人間ではない。ユイと同じくメンタルヘルスカウンセリングプログラム M H C PとしてSAOのコアシステム「カーディナル」によって生み出されたプログラムAIなのであった。しかしアイコンクラッド崩壊と共に、キリトのナーヴギアのローカルメモリに避難することが出来、このALOにもプレイヤーとして参加出来ていたのだ。

「よう、ストレア！ 元気してたか？」

ストレアはお馴染みのあいさつ代わりにとすぐさまキリトを抱擁しようとしたが、ユウキに光の速さで阻まれた。いつもなら問答無用で抱き着いていたストレアだったが、今までと違うまさかの障害物に驚きの様子を見せていた。

「ス……レ……ア……!! 今までみたいにはさせないよ！ キリトはボクの恋人なんだからねっ!!」

「えっそうなの？ それは知らなかったよ、ごめんね」

一瞬驚いた様子を見せたストレアであったが、大して悪びれた様子もなく一応の謝罪をした。相も変わらずのマイペースっぷりである。これがプログラムAIというのだからこれまた驚きだ。

「ユウキさんが恋人って……どういふことですかパパ!!」

ストレアに続いて、同じメンタルヘルスカウンセリングプログラム M H C Pであるナビゲーション

ピクシーの姿をした、キリトとアスナの娘であるユイが上空から姿を現した。セブンから始まり、次から次へとキリトへの接触が止まらない。

「ゆ……ユイ!? あ、いや……違うんだ！ これには……深い事情があつてだな……」

ユイの姿を視認するやいなや、キリトは慌てて今の現状を弁解しようと言葉を並べたが、焦るあまりに上手く言葉出てこなかった。今まさに修羅場を迎えているキリトを尻目に、アスナは一步前へでて、最愛の娘との再会を果たした。

「ユイちゃん……久しぶり……！ 元気だった……？」

「ママ……！」

ユイはナビゲーションピクシーの姿からプレイヤーサイズに姿を変えると、アスナへと駆け寄り、ぴよんとジャンプをしてアスナの胸に飛び込み抱擁を交わした。ユイとアスナも一か月ぶりの親子の再会に、喜びの様子を見せていた。

「ママ……ユイは……ユイは元気です……！ セブンさんたちに……とても楽しい経験をたくさんさせてもらいました！」

実はキリトとアスナが別れた時、問題になったのはユイの行先でもあった。アスナはアミスファイアを取り上げられ、キリトもまったくALOで活動しようとしていなかったため、自然とユイは孤独な状態になってしまったのである。

そこでセブンが話を持ち出した。私たちと一緒にいるんなどころを見て回らないか？ という話だ。セブンの技術ならキリト以上に現実世界でのモニタリングが可能だしALOでもLIVEなど、普通

は経験出来ないようなことがたくさんさせてあげられるということ
で、ユイはセブンに預けられていたのだ。ストレアはそれについて
いっただけだったが。

「でもパパの恋人さんが……ユウキさんというのは……その……どう
いうことなのでしょうか……」

ユイはアスナとキリトとユウキを順繰りに繰り返し見ながら困惑
していた。パパとユウキさんがお付き合いをしているということは、
ママと……ユイの関係はどうなってしまうのですか？ と子供らし
い困った表情を浮かべていた。

「ユイ……それは俺から説明させてくれ」

キリトは一步前へ出ると、ユイにこれまで起こったことを全て説明
した。アスナと別れてからのこと、ユウキの病気のこと、その病気を
治してやると約束したこと、そして……ユウキと恋人同士という関係
になった経緯など、事細かに全て包み隠さず、娘であるユイに語った。

「ユイ……お前には申し訳ないと思っっている……。恨んでくれて構わ
ない、俺は……それだけのことをしてしまった」

「キリト違うよ！ それは……っ」

ユウキがキリトは悪くないと弁解しようとするが、キリトは首を横
に振って、それを制止させた。まるで全ての責任はこの俺がとるとい
わんばかりに、そうキリトの背中が語っているようにみえた。これ
は俺とアスナとユイ、親子同士の問題だとも言っているようにも思え
た。

キリトのこれまでの経緯について説明を受けたユイはしばらく考
え込んだ後、複雑な表情を浮かべながら、胸に手を当ててキリトを見
上げ、ゆつくりと胸のうちの気持ちを語り出した。

「…パパはズルいです、なんでそこまで……誰にでも優しいんですか……」

ユイはうつすらと目に涙を浮かべていた。時間はかかってもパパとママはまた一緒にいられるようになるかと信じて疑わなかったからだ。しかし結果は違ってしまった。キリトは違う女の子を好きになってしまい、アスナとの関係も終わってしまったかのように見えた。しかしユイはそれでもキリトのことをどうしても責められなかった。キリトの誰にでも優しい性格をよく理解していたからだ。

「えっと……多分すぐには……ユイは納得が出来ないと思います。でも……それでもユイは……やっぱりパパの役に立ちたいと……そう思っています……」

「ユイちゃん……」

アスナは健気な姿勢を見せるユイに駆け寄ると優しく抱きしめた。私の力が至らなかつたばかりにユイちゃんに寂しい思いをさせてごめんね、こんなことになってしまつてごめんね……と。

「ママ、大丈夫なのです。ユイは……ユイはこう見えても強い子なのですよ？ セブンさんたちと世界中を旅した時も、全然泣かなかつたのです……！」

ユイは流れ出る涙を必死に抑えながらも、頑張つて笑顔を作つてアスナを見つめ返していた。プログラムで組まれたAIながらも、ここまでできてしまったらキリト達から親離れをする時が来てしまったのかなど、そんな空気を感知取つていた。

「本当にすまない……ユイ……。でも……でも俺は、守りたいものを見つけてしまったんだ、俺の一生を賭けてまで……守っていききたいものが……！ だから……すまない……」

キリトは拳を握りしめ、小さく震えていた。その拳を優しく包み込むようにユウキが握りしめた。どう声を掛けてあげたらいいかわからないけど、今はボクがキリトの支えになるよ。その温かい手がそう言っているように感じた。

「大丈夫なのですパパ……、ユイは……ユイは……強い……子なので……す……」

その瞬間、ユイは膝から崩れ落ちると滝のような涙を流した。アスナはより力を込めてユイを抱きしめた。キリトは一瞬その様子に焦りの表情を見せたが、ユウキが「行ってあげて、キリトにしか出来ないよ」と背中を押すと、そのままユイに駆け寄り、アスナと同じようにユイを抱きしめた。

ユイは最後になるであろうアスナとキリトの温もりを体に感じながら、わんわんと泣き叫び、涙を流し続けた。プログラムで組まれたAIとはいえユイの精神年齢はまだ子供。まだこれから親の愛が必要なお年頃だ、様々なネットワークと繋がり、大人以上に豊富な知識を持っているといっても、中身はやっぱり子供なのだ。

やがてユイはひとしきり涙を流し切ると、体を起こしてアスナとキリトから一步後ろに下がり、少し畏まった姿勢をして涙で赤くなった目を手でゴシゴシ擦りながら、今までお世話になった二人に、子として最後の言葉を送った。

「パパ、ママ、……ユイは自立するのです。子供はやがて……親から離れなければいけない時がくるのです。ユイは……ユイは今がその時じゃないかと思っっています……。でも……でも……」

「これからも……今まで通り……お二人のことを……」　「パパ」　「ママ」と……呼んでいいですか……？」

「ああ……！　勿論だ……！」

「うん……！ ママは……いつまでもユイちゃんのパパだからね……！」

「は……はいっ……！ ありがとうございます！ パパ！ ママ！」

それを聞くと安心したのか、ユイはぱあつと明るい顔になり、涙の混じった笑顔で答えを返した。キリトとアスナは少し複雑な心境になってしまっていた、誰も悪くないのに誰かが悲しんでいるこの状況にどこか心がモヤモヤしていた。そんな複雑な気持ちを胸に抱いているキリトに、ユウキが駆け寄って心配そうに声を掛けた。

「大丈夫？ キリト……」

「ああ……俺は大丈夫だ……、サンキュな……ユウキ……」

こうして、ユイはキリトとアスナの手から離れていくことになった。アスナとキリトが別れた時点でこうなることは必然的であったが、なんとも言えない気まずさに辺りは微妙な空気に包まれていた。しかしそれでもこの三人はそれなりにけじめをつけたのだ。すぐには無理かもしれないが、この環境を受け入れて各々強く生きていくことだろう。しかしキリトには今回の件でまた罪悪感がのしかかっていた。でもユウキのためにここまでしてきた、もう今更引き下がるわけにはいかないし、引き下がれないところまでできてしまっていた。

それからしばらくは静寂な時間がただただ流れ続けた。キリト、アスナ、ユイの関係はみんなが知っている、どれだけ仲睦まじい家族であったかどうかも充分に知っている。バラバラになるはずがない家族がバラバラになってしまった。その事実には皆口を閉じてだんまりとしてしまっていた。しかしそんな気まずい空気を拭い去るために、意を決してユイがこの静寂な空気に斬り込みをいれた。

「パパ！ ユイはもう大丈夫なのです！それよりみなさんにお話ししたいことがあって、ここに集まってもらったのではないですか？」

「あ、ああ……そうだな……。みんなまだ気持ちが落ち着いていな

「い中申し訳ないが……そろそろ本題に入らせてもらっていいかな？」

キリトからの問いかけに少しの無言が流れた後、全員視線を合わせてからキリトの方を向きなおしほぼ同時に頷いた。気持ちの整理はまだついていないが、ここに集まった本来の目的を考えると、今から聞かされるキリトからの話を、真剣に聞かなくてはいけない。何せ、ユウキの命がかかっているのだから。

「……ありがとう、それでは本題に移る。今日は俺の呼び出しに応じてくれてありがとう。今日呼び出したのは他でもない……ユウキのためだ」

キリトがそう言うと、全員の視線がユウキへと集まった。ユウキがその視線に気付くと「へ？　ボ……ボク？」と驚いた様子を見せた。アスナ達が集まってくれたのなら話は分かるがセブンやスメラギまで集まっていたことに理解が追いついていなかった。ボクとどういう関係があるのだろうか。

「え……ボクのため……？　どういうコト？　キリト……」

キリトはユウキの顔を見ると頭の上にポンと片手を乗せて「大丈夫だ、俺にまかせろ」と言いたげに自信に満ち溢れた表情を見せた。ユウキは何がなんだか分からないが、キリトが任せろと言うのならそれを信じようとした。その返事代わりにユウキはキリトの手をぎゅつと握りしめた。

「なあ、ユウキ」

「なあに？　キリト」

「——歌って……みないか？」

「——へッ？」

第19話く覚悟と決意く

「なあ、ユウキ」

「なあに？ キリト」

「――歌ってみないか？」

「――えッ？」

ユウキはキリトからのまさかの提案に目をまん丸にして素っ頓狂な表情を見せていた。ユウキだけ時が止まっているかのようにフリーズしてしまっていた。何の前触れもなく突然歌ってみるかなどと聞かれたらこうもなるだろう。キリトがなんでこんなことを言っているのが全くわからなかった。

「え、歌うって……あの……マイクもって、ステージにたつて？」

「ああ」

「おめかしして……ひらひらの衣装着て……？」

「衣装は……まあこれから考える」

「ぼ、ボク……歌なんて歌えないよ……？」

「大丈夫だ、ここにいる先生たちが教えてくれる」

「えええ……ボク……自信ないよお……」

ユウキの質問に対してキリトは淡々と答えていった。ユウキはすっかり弱気になりシユンとしてしまっていた。マイクを持つよりも、剣を持っていた方が自分には似合っていると……、そう思っていた。

「大丈夫だよ、ユウキちゃんは歌えるよ？ 私が保証する」

「え……どうして……？」

「ユウキちゃんはずごくよく通るいい声してると思うし、明るくて元気でみんなの心を掴むことも出来ると思うの。そして……何より一番はね……誰よりも強い信念をもっているってことかな……？」

「信念……」

ユウキは右手を胸に当て、物思いにふけったような表情を見せた。そこにセブンがユウキに自信を持たせるために自分のことを話し出した。

「この前私が……暴走しちゃったときあったでしょ？ ALOのプレイヤーのみんな全員の努力を……踏みにじって……とりかえしのつかない事態になっちゃって……。でも……キリト君やお姉ちゃん、そしてユウキちゃんがあの時全力で止めようとしてくれた。全力で思いをぶつけてくれたから、今の私はここにいられるんだと思うの？ 違うかな……？」

——クラウド・ブレイン計画——

七色・アルシャービン博士ことセブンがALOのVR世界を利用して過去に例をみない実験を行っていた。クラウド・ブレインと呼ばれるシステムのデータ収集を行っていたのだ。人間の脳の演算能力をネットワーク上で一つにまとめ上げ、クラウド化することでCPUに作り出すことが出来ないハイスペックな演算処理システムを構築するものである。プレイヤーや自身のクラスタの感情などを情報として吸い上げ、データ採集を続けていったのだ。

しかしセブンはやり過ぎてしまった。結果的にクラウド・ブレインはデータの蓄積のしすぎてパンク、セブンのエゴとプレイヤーデータの暴走を引き起こし禍々しいアバターへと変貌してしまったのだ。最終的にキリト達はこれを撃退し、セブンも無事に助け出し元の姿に戻ることができ、一件落着となった。その後、実の姉であるレインの協力もあり、それ以降セブンはキリト一行と分け隔てのない一定の近い距離感を持てるようになった。

しかしその事件を経ても科学者としての実力は超一流であり、アイドルとしても今後の活躍を大いに期待されている。若干12歳にて脅威のカリスマ性を持つ七色・アルシャービン博士ことセブンが直々に、ユウキに歌の素質を見出していた。

確かにユウキはキレイで張りがありよく通る声をしている。ボーイストレーニングをすれば素晴らしい歌声を披露できるだろう。アバターの雄姿も一言でいえば美少女である、ALOで1位2位を争う美少女だ。よってビジュアルもOK、そして何よりひたむきに明るいその性格である。誰にでも真つすぐで人懐っこくて：気が付けば周りの人たちを巻き込みひと騒ぎする。そしてその一方でどこことなく儂さがあるという魅力も持ち合わせていた。

結論を言うとアイドル業をやるだけの魅力と素質は十分なのである。にもかかわらず本人は自信が随分となさげである。

「キリト君やユウキちゃんの真つすぐでぶつかる想いがあったから：私は道を間違わずにすんだんだ！ だからユウキちゃんも：自信を持つてもいいと思うの！」

「うう：そう言ってくれるのは：ありがたいけど…」

「ありがたいけど？」

「えと：みんなの前で歌うなんて：その：は：恥ずかしい：つていうか…」

ユウキは耳まで真つ赤にして下を俯き困り果てていた。当然だ、今日の昨日まで剣を振るっていたのだ。歌なんて小学校の音楽の授業でしか歌ったことがない、カラオケだって行ったことがない。学芸会でも町の少女Cの役だ。人前でデュエルをしても緊張しないのは夢中で体を動かせるからというのもある。

「あ、ちなみにユウキちゃんソロだからね？」

この一言がトドメを刺した。ユウキは驚愕の叫び声を上げた後、あまりの恥ずかしさとやり場のない心の焦りを吐き出すように羽を広げ上空へ飛び上がった。しまった。

「いやあああああ〜〜ツ!!」

「ちよ……ユウキッ!!」

キリトもすぐ翅を広げて地面を蹴り、空高くへと飛び去ったユウキを追いかけた。アスナ、セブンもそれに続くように翅を広げた。更にそのセブンの後ろをスメラギとレインが続いていった。

「ユウキ！ 待て！ 待ってくれ！」

「やだあああ〜ッ！ 待てないよおお〜ッ！ ぼ、ボク……みんなの前で歌うなんて無理だよオオ〜!!」

ユウキは顔を両手で隠したまま全力で随意飛行で華麗に上空を飛びぬけていった。普通人間は視界を奪われると平行感覚が狂うものなのだが、ユウキはさも当然のように自由自在に飛び回り、キリトの追跡を回避していた。まさにALLO最速のカーチエイズといってもいい光景だった。

「ユウキのやつ……速すぎだろ、……ええいつ！」

キリトは徐に背中の中の鞘から片手剣を抜くと飛行しながらソードスキル「ヴォーパル・ストライク」のモーションを起こした。そのモーションを起こすと、右手に握られている片手剣は白く光り輝き、ソードスキルが発動する合図を見せていた。

「え……ソードスキル!? まさかキリト君、ユウキちゃんを斬ってまで止める気!?!」

セブンは驚きの反応を見せたが構わずキリトはヴォーパル・ストライクを発動させた。高速飛行していた慣性が活き、ものすごい速さでユウキを追従していった。しかしその剣先はユウキを狙ったものではなく、ユウキの真横を通過するように狙いを定めたものだった。

ヴォーパル・ストライクの勢いを利用して、キリトはユウキに追い

ついた。ユウキの真横の位置に辿り着くとすかさずキリトはもう片方の腕でユウキの手をとりそのまま抱きとめた。

「えっ!? キ…………キリト…………!?!」

「こらユウキ! 捕まえたぞ! ……まったくいきなり逃げやがって…………」

「う…………うわあ~~~~ん! 離してええ~~~~!!」

キリトに抱き留められたユウキは両手両足をぶんぶんと振り回して、いやだいやだと駄々をこねていた。とても少数精鋭一騎当千のギルド「スリーピング・ナイツ」の頭を張っていたとは思えない。今はとにかくこの恥ずかしい空間から一目散に逃げたい、そんな心境だった。

やがていくら暴れても無駄だと思いつめたのか、ユウキは抵抗するのをやめて手足の力を抜いて重力にまかせてだら〜んとさせていた。やがて涙目になりながら首をキリトの顔の方向へと動かして、困った表情で訴えていた。

「うう…………キリトオ…………」

「ユウキ…………、俺もあんま無理強いはしたくなかったんだけど…………、お前のためなんだ」

「え…………ボクのため…………?」

「ああ…………今回の件、他のみんなにはもう話してあるんだ」

「えつと…………全然話が見えてこないんだけど…………どういうこと…………?」

キリトからの説明に、ユウキは困惑の表情を見せながら首を横にかしげていた。ボクが歌うことと、ボクが助かるということに、何か関係があるのだろうか。ユウキが一生懸命に考えていると、そこにセブンたちが漸く追い付いてきた。セブンはスメラギにしがみついてここまでやって来たようだ。一方でレインとアスナは流石の随意飛

行で普通についてきていた。

「キ……キリト君、ユウキちゃん……二人とも速すぎ……」

「キリト君……お疲れ様！ ユウキ……すっごく速かったね……」

「ああ……ようやく捕まえたよ。しかし……この場に今このメンバーだけがいるのは……都合がいいかもしれないな」

「え……？」

「ユウキ、心して聞いてくれ。今から話すことはユウキにとって……ものすごい重要なことだ。それも……ユウキの生死を左右するかもしれない、それぐらい重大な話だ」

キリトがその話を切り出した瞬間にさつきとは一転して、急に緊張感が場を包みだした。アスナとセブンはいよいよ話すのねといった真剣な表情でこの場を見守っていた。スメラギとレインはキリトにすべてを任せるといった態度で静止していた。そして深々と深呼吸をし、十分に溜めを作ってからキリトはユウキに今回の計画のことを切り出した。

「まずユウキ、いい知らせがある」

「いい知らせ……？ 何……？ いい知らせって……」

「お前の病気が治る可能性が出てきた」

その言葉を聞いた瞬間、ユウキはこれまでにない驚愕の表情を見せた。生まれたときから感染していて、15年間戦い続けてきたこの難病が治る……？ 死を受け入れた時もあった、何でボクばかりがこんな目にとと思う時もあった。でもキリトはボクを助けると言ってくれた、信じて待ってた。しかし、いざ実際にその一言を耳にすると……人間まず最初は信じられないものである。

「え……ボク……病気が……治……る……の……？」

震える小さな声でユウキは言葉を口にし続けた。上空なので強風にあおられ聞こえづらいがキリトは一声一句逃さず全て聞きとめる。

「ああ、まったくリスクがないわけじゃあないが、かなりの確率で治る見込みがある。倉橋先生のお墨付きだ」

そういうとキリトは左手でメニューを開き、仮想タブレットのブラウザを表示させとあるページを開いた。そしてユウキの肩を抱き寄せて、同じ位置から一緒にそのページを見た。

「英語……？」

「重要などころだけ訳すぞ、まずここを見てくれ。2013年にアメリカでHIVに感染した患者に……HIVに耐性がある骨髄を移植したんだ。そしてしばらくして経過を見てみると……HIVウイルスが消滅していたんだ」

「え……消滅……？」

「その患者は定期健診という形で通院を続けながらもだが、今は普通に生活が出来ているんだ。HIVウイルスの再発の報告も上がっていない」

キリトからHIVが直った事例が過去にあるということを知った瞬間、ユウキの瞳から涙が零れ落ちた。零れ落ちた涙は強風に煽られ空中へ飛散していき霧状になって消えていった。ユウキは未だに気持ちの整理がつかないまま茫然となり、小さい声で呟いていた。

「病気……治るの？」

「ああ……」

「僕、死なないの……？」

「ああ……」

「生きてて……いいの……？」

「ああ……！」

「お外……出れる……？」

「ああ……ッ！」

「和人と……ずっとずっと一緒にいれる……？」

「ああ……ッ！　ずっと一緒にいれる！！　お前の側にずっといれる！

映画だって水族館だって行けるんだ！！」

「あ……あ……ボ、ボク……」

感情が爆発しそうなユウキをキリトが力いっぱい抱きしめる。ユウキは15年間ため込んでいたものを一気に吐き出すように、一生分の涙を流し出すように泣いた。大好きなキリトの胸を借りて精一杯、嬉し涙を流した。

「うあああ……かずと……かずと……ボク……ボク……」

「ああ……よかったな……ユウキ……」

ユウキはあまりの嬉しさに、うつかりキリトを本名の和人と呼んでしまっていた。キリトは少しばかり気になったが、ユウキが喜んでくれたので気にしないことにした。しかし……ユウキとキリトが頑張らないといけないのは……これからだ。

「ユウキ……すまないが……まだ話には続きがあるんだ。このHIV耐性を持つという骨髄なんだが、ドナー登録者の白人の1%しか持ってないんだ。そしてその骨髄を持っていても、ユウキの骨髄の細胞の型にあう骨髄でないと……移植が出来ない。移植しても拒絶反応がでると……最悪……死んでしまう」

”死んでしまう” というワードを聞いた瞬間、ユウキの表情が強張った。キリトと一緒にいたいと思ったユウキにとって、今では「死」というものは一番の恐怖の対象となってしまうていた。いやだ……死にたくない……和人と一緒にいたい……生きたい……死にた

くない……………!

「大丈夫だユウキ！ まだ話は終わりじゃない！ 聞いてくれ！ この1%という数字…実際の数字よりかなり高い数値だと思っ…いい！ これは骨髄ドナーを提供した白人の中での割合でしかない！俺が調べられる範囲で調べた結果…今この世界に白人は約2億人いる！ この人たちの中にHIV耐性の骨髄を持つ人は必ずいる!!そしてユウキの細胞にあう骨髄を持つ人も…絶対にいる筈だ!!」
「でもその人たち…ドナー登録してるか分からないんでしょ…?」

ユウキはすでに半分諦めの様子を見せていた。命が助かると言われて上げたと思つたら、死んでしまうかもしれないと言われて落ちて…希望と絶望、その二つの気持ちを味わっていた。助かるのか助からないのかはつきりしてよ、そう言いたげだった。

「ああ…… ”今は” な」

「え……今はって……?」

「ここから先は…セブンが説明する…セブン、頼む」

「パニヤートナ! キリト君! あとはまかさされたよ! ねえユウキちゃん、確かに今はユウキちゃんの細胞に合うドナー登録者はいないかもしれないね。でもね、そのドナー登録者の数を…爆発的に増やせる手段があつたとしたら、ユウキちゃんどうする?」

セブンが何を言ってるのかユウキは理解出来なかつた。そんな自分の都合よくドナー登録者が増えるわけない、そもそも現れるわけないと思つていた。冷静に考えてみれば崖っぷち綱渡り状態の自分の人生をそんな都合よく命綱が引つかかるわけがない、そう考えていた。

「無理だよ……どうせボクはもう……」

ユウキが「ボクはもう助からないんだよ」そう言いかけた瞬間にセブンは口を割って入った。

「んーん、あるの。爆発的に増やせる唯一の方法……！ この私と……そしてユウキちゃんの気持ちがあれば……絶対に増やすことが……！」

「え……？」

「だからユウキちゃんに歌ってほしいの。ユウキちゃんの”生きたい”って気持ちを込めて歌を歌うの！」

「ボクの……気持ちを歌に……？」

「そう！ ……ねえユウキちゃん。私は誰？」

セブンがいきなり哲学めいた質問をユウキに投げかけた。頭のいい人は常人には思考が全く理解出来ないというのはいかようなことなのだろうか。この答えに何の意味があるのだろうかと思いつつも、ユウキはセブンからの問いかけに、自分なりに答えを示した。

「え……えっと……、セブンはセブンだよ……。世界的に有名なVR技術博士で……VRMMOで知らない人はいないぐらいの……アイドルで……」

「うんうん……よくわかってる！ で、私の活動内容は？」

「え……？ えっと……活動内容は……VR技術の研究と実験、アイドルとしては仮想世界と現実世界でのライブ活動を……主に……」

セブンの活動内容を自分の口から言葉にしたその瞬間、ユウキの頭にまさかという考えが廻った。その辿り着いた結論はそう簡単には信じられないが、もう答えはそれしかない。 ”VR技術”と”

ライブ活動” この二つのキーワードが織りなす答えは即ち……。

「ま、まさか……セブン……」

「そうー。 そのまさか！ 私が計画するチャリティーライブにユウキちゃんをスペシャルゲストとしてお迎えするの！ そこでユウキちゃんにね……ユウキちゃんの想いを込めた歌を……届けてほしいんだ！ 全世界に……!!」

ユウキの命を救う方法。 そう……それはドナー登録者をいかに数多く集められるかという一点に尽きる。 白人登録者の中の1%という確率を上げるためにはより数多くのドナー登録者を募る必要がある。 しかし生半可な宣伝では普通ドナー登録者は集まらない。 そこでキリトは注目した。 テレビというメディア以上に影響を及ぼすメディア。 そう、仮想世界に注目した。

仮想世界、それは今世界で最も注目を集めている技術である。 VR技術はSAO事件の所為で衰退し始めたかと思われたが、キリトが茅場昌彦から受け取った”世界の種子”のおかげで奇跡的な復活を果たしたのだ。 アミユスフィアの登場もありより安全に、より楽しく仮想世界を旅できる。 世界の種子のおかげでVRMMOの運営のハードルが下がったおかげもあり、今世界中の人々がVR世界を楽しんでいる。

キリトが目をつけたのがまさにその注目されているVR世界だ。世界的に注目されているVR技術、そしてそれを今最先端で技術責任者を担う七色・アルシャービン博士の知名度。 それと同時にアイドルとしても世界的にファン、クラスタを抱えているセブンとしての知名度を利用しようと言うのだ。

セブンのライブにスペシャルゲストとしてユウキが参加をする。 世界人気No.1VRMMOのALOの中で絶剣と名高いユウキが参加をすれば世界レベルでどうしても注目が集まる。 そこでユウキが想いを歌に込め、歌う。 そして世界中の注目が集まっている最中に……ユウキの病氣のことを告白する。 そしてそのライブの場で、ユウ

キのドナーを集う……というものだ。これこそがキリトの狙いだつたのだ。やっていることはマスコミとあまり変わらないが……キリトはVRの一つの可能性としてそこに賭けた。世界中の注目をユウキに集めようというのだ。

しかし……この作戦にもリスクがないわけではない……。確かに世界レベルで大いに注目は集まるだろう。ユウキのひたむきな姿勢に感動、賛同してドナー登録を志願する人は爆発的に増えるだろう。ユウキの助かる確率はぐっと上がる……。しかしこれはユウキの病気を世界中に晒し出すことと同義である。かつてユウキはHIVを隠して子供時代を過ごしていた、しかしどこからかその情報はリークされ、近所、学校、クラスメイト全てから迫害を受け……。転校、引越を余儀なくされた。その執拗な嫌がらせは引越先まで及んだという……。

こんな狭い近所でさえこれほどの迫害を受けてきたユウキが……今度は自分の病気を世界中に知られる。それほどのことにユウキの精神が耐えられるだろうか……昔のトラウマをほじくり返されるかもしれない、今度は世界中の人が恐ろしく見えてしまうかもしれない。キリトは半分賭けでもあったこの壮大な作戦をあつた晩、一瞬で考え付いたのだ。そして残すところ、問題となるのは肝心のユウキ本人の気持ちだけであつた。

「……ユウキ、話は以上だ……」

キリトは想いの糧を全てを吐き出すと、大きく深呼吸を少しだけ冷や汗をかいた。キリトは全てを利用しようとしていた。元恋人のアスナ、SAO時代の仲間たち、セブン、世界中の人々……。そして……ユウキの助かりたいという心すらも……。

「ユウキ、これはお前の病気が治る確率があがると同時に、世界中にお前の病気を知られるという事でもある。ここからは……ユウキのプライベートが直接かわってくる問題だ。だから……俺は強制は出

来ない……」

”ユウキの命を助けるために、ユウキの心を利用するかもしれない”という少し矛盾めいた罪悪感がキリトの心に重くのしかかった。俺はユウキの命を助けたとしてもその後もまともな精神状態でいられるのだろうか？ そもそもユウキがまともでいられるのか……そう考えを巡らせていた。しかし、その不安はユウキの一言ですべて拭かれた。

「……キリト……ボク、歌う」

「ユウキ……!!」

「確かにボクは……昔、H I V ってのがばれて……パパやママ、姉ちゃんと一緒に酷いことされた。その時……すごく悲しくなった、すごく怖くなった……でも……でも……」

胸に手を当てて自分の昔のことを語っていたユウキはキリトの顔を見ると、切なそうな表情を浮かべながら、渾身の力を込めてキリトにむかつて抱き着いた。

「ユ、ユウキ……？」

「今は……キリトやみんながいる。ボクにね……あたたかいものをたくさんくれる仲間がいるんだ。支えてくれる人が……いっぱいいるんだ……。だから……どんなことがあっても平気だよ」

「ユウキ……」

「それにねっ」

ユウキは一步分後ろに下がると最高の笑顔を見せ、腕を後ろに回し上半身を斜めに傾げ、キリトに言った。

「何があっても……キリトが守ってくれる！ だから……ボクは……怖くないよー！」

キリトはその笑顔を見た瞬間ユウキを抱き締めた。初めて告白した時と同じぐらいの力を込めて精一杯、目の前の少女を抱擁した。

「やっぱり……ユウキは俺と違って強いよ。強すぎて……かなわない……」

「何言ってるのさ……ボクに……勝ったくせに……」

「……何があっても絶対にお前を……守ってみせるからな……」

「うん……ありがと……大好き……キリト……」

ユウキの病気を治すための計画を全て話、程なくして落ち着いた二人はセブンら四人と一緒にゆっくりと地上に降りてきた。キリトとユウキは少し遅れて手を繋ぎながら皆のもとへと着地し、先ほど話しかけていたことをすべて話した。

「みんな……騒がせてゴメンね……。ボク……歌うよ」

ユウキからの決心を聞いたリズら地上のメンバーは、安堵の表情を浮かべるとともに、ユウキの覚悟を聞き続けるために、真剣な眼差しでユウキを見守っていた。

「ボクは……ボクが考えてる以上に……みんなに支えられていたんだ。ここでボクが逃げたら……ここまでボクを支えてくれた人たちの気持ちを……無碍にすることになっちゃう」

「ユウキ……」

「だからボク……ここまでしてくれただみんなのためにも……歌う！
上手にやれるか分からないけど……精一杯歌ってみせる!!」

ユウキの固い決意が現れた回答に、その場にいるスメラギ以外の全

員が拍手と激励の言葉を贈る形で盛大に応えた。本当に皆、心から信頼出来る最高の友達である。

ユウキはみんなに背中を押してもらいステージデビューをするという形で新たなスタートを切った。いったいどんな結果になるのか想像もつかないが……何もやらずに後悔するより精一杯のことをやろう。ユウキはその思いを胸に、ひたすら前に向かって進んでいった。

——おや？　そういえば、誰か一人忘れている気がするが……きつと気のせいだろう。

「……転移結晶売ってねえなあ……」

第20話 和人の覚悟

西暦2026年2月1日 日曜日午後12:00 ALO アルンの街 緑の丘

ユウキはセブンのチャリティーライブにスペシャルゲストとして参戦することが確定した。上手くいくかはわからない、上手に歌えるかはわからないけど……。背中を押してくれるみんなのためにも……。ボクを助けてくれるみんなのためにも……。そして何より、こんなボクを好きでいてくれる、キリトのために歌いたい……。

「ねえキリト……」

「……なんだ？」

「ボク、頑張るから……。応援してくれる……？」

ユウキは並んで立っているキリトの肩に首を預けた。上目遣いで澄んだ瞳でキリトを見つめながら甘い声を出していた。それを目の前で見てしまったキリトは頬を赤らめて「おう……」と返事をする。照れ隠しのためにユウキから視線を逸らした。キリトが返事を返すと、ユウキは「ありがと♪」とお礼を言って笑顔を見せた。この笑顔が間近で見れるのは……。やはり役得な気がしてきたと感じたキリトであった。

しばらくすると一度メンバーは解散となり、車組はエギルが駅まで送り届けることとなった。豪快に遅刻しタイミング悪くやってきたクラインはやっと合流できたのだがリズムが「もう全部終わったわよ……」と呆れ顔で話すと大変にシヨックな様子を見せていた。セブンが来ていたことを知るとなおシヨックが増していた。まあ、遅刻した本人が悪いのだから自業自得である。

ユウキは改めて集まってくれた皆にお礼をすると、深々と頭を下げた。皆は「気にしなくていい、頑張ろう！」と励ましの言葉を送り続

けてくれた。このお返しは……歌で返さなくては、そうユウキは心に決めた。

「あ……私、一度落ちて自宅に電話してくる。佐田さんと連絡取りたいし……病院には居るから何かあったら声を掛けてね？」

アスナはそう言う。「ユウキ、頑張ろうね！」とだけ言い残し、ユウキの手をぎゅつと握りしめると左手でメニューを操作して、笑顔でログアウトしていった。その場にキリトとユウキだけが残された状態となった。二人はゆっくりと腰を下ろすとリラックスした姿勢で話し始めた。

ユウキは体育座りをしながら目を閉じ、キリトの話を聞き続けた。二人きりになり、ようやく落ち着いて話が出来る状態となり、ユウキの表情にはリラックスしている様子が伺えた。

「なんか……すごいコトになっちゃったね……」

「そうだな……」

「キリトが……考えてくれたんだよね……？ 全部」

「あ、ああ……骨髄移植のことに気付いたのは母さんだったけどな……どうやってユウキのドナーを探したらいいのかが問題でさ……」

「うん……」

「ユウキ……その……なんていうか大丈夫か……？」

「……んー？」

「今回……お前の病気を治すためとはいえ……本当に俺は手段を選ばなかったんだ。使える手は使おうとしたし利用できるものは全て利用した。……ユウキの心もだ……」

「キリト……」

「アスナのこともSAOの仲間たちの善意も、セブンの立場も利用した。ユイにはつらい仕打ちをってしまったし……後戻りできないと

ころまでできてしまっている。でも……本当にユウキのためになつて
いるのかつて聞かれたら……自信をもってイエスと答えることが出
来ない……」

「そんなことないよ、キリトはボクのために……一生懸命になつてく
れてる。ボク……ホントに嬉しいんだ……」

ユウキはキリトの左手を両手で優しく握りしめ「キリトは全然悪く
ないよ」と慰めた。むしろボクのためにここまでしてくれてありがと
う、現実世界を歩くことが出来ない自分の為に、ここまで必死に走り
回ってくれてありがとうと、ただひたすらに感謝の気持ちしかなかつ
た。

「ユウキ……俺は……」

「あまり自分を責めちゃだめだよキリト……。この前のキリトの言葉を
返すただけだし、キリトは自分のことだと思いつめすぎなところがあ
ると思うよ？ 責任を感じるってことは大事だと思うけど……思いつ
めすぎたら……苦しいだけだよ……」

「……………」

「あまり自分を責めないで……？ ボク、キリトにはホントに感謝して
もしきれないんだ……ボクにとって……初めての恋人で……ボクのコト大
切に思ってくれて……。あつたかくて大きいものいっぱいくれて……」

ユウキはそう言うと、自分の体重をキリトの体に預けて身を寄せ
た。そんなユウキをキリトは彼女の背中から腕を回し、向こう側の肩
に手を当て抱き寄せた。その心優しいユウキの一言一言で……キリ
トは心打たれるように瞳に涙を浮かべた。ここまで本当にユウキを
助けるといふこと以外考えずに突っ走ってきて、自分のやってきたこ
とは本当に正しいのかと思っていた。間違ってるかもしれないとも
思っていた。しかし、ユウキが声を掛けてくれたことにより、少しだ
けキリトは心が救われたように感じた。

「ありがとうキリト……。ボク、キリトがいてくれて……。本当に幸せだよ……」

キリトはユウキから精一杯の愛と元気をもらうと、その眼尻に涙をため込んでいた。キリトが涙を流していることに気付いたユウキは「またキリト泣いてる」と優しくキリトの涙を指で拭いた。一方キリトは「いいだろ別に……」と少し機嫌を悪くし、ブーたれた様子でユウキから視線を逸らしていた。

「キリトは可愛いなあ〜」

そう言うとユウキはキリトの頬を人差し指でツンツンしだした。キリトは不服そうにしているが決してユウキにつつかれるのを嫌がっている様子はなかった。なすがまま、されるがまま無抵抗でユウキにいじくられ続けた。

「俺の頬……。そんなにいじくりがいがあるか？」

「うん、触ってて気持ちいいよ？ 美肌なんだね〜キリトは！」

「一応……。誉め言葉として受け取っておくよ」

「どういたしまして♪」

仮想空間の体なのでリアルのお肌事情とはなんら関連性はないのだが……。キリトはリアルでも女の子がうらやむほどに結構美肌であった。そんな他愛もないやりとりがかれこれ1時間ほど続いた。ユウキとの一緒の時間は……。本当に楽しい、別に迷宮区を攻略しなくてもボスを討伐しなくても……。ただただ一緒にいるだけで楽しい。心から本当にそう思える。

「——ん？ ……ボス討伐……？」

「——ああああっ!!! すっかり忘れてた!!!」

キリトは急に立ち上がると重要なことを思い出したかのように大声を出した。勢いよく立ち上がったのでユウキは体勢を崩してずり落ちてしまった。それに不満を覚えることにユウキは少しデジャヴを感じた。おかしいな……昨日も同じようなことがあったような……。

「ユウキ！ 俺たち……昨日ボス討伐したよな？」

「うん！ 本当に二人だけで倒せるとは思わなかつ……あああああゝゝゝツ!!」

ユウキもそのことを思い出すとキリトに負けまいぐらいの大声をあげた。どうやらユウキもすっかり忘れていたようだ。それも無理もない話だ。ボス討伐後、二人は現実で会い互いに告白を交わした。そしてユウキの病気を治すという一世一代の大勝負に出ようとしたのだ。それに比べたらフロアボスのことなど……忘れてしまうだろう。

「アハハ……ボクもすっかり忘れてたよ……」

「俺もだ……あの後いろいろあったからな……」

「行こうよ！ 黒鉄宮の戦士の碑の前に！」

「……そうするか！」

同日同時刻 新生アインクラッド・第一層黒鉄宮 戦士の碑前

キリトとユウキは手を繋ぎながら転移門を使い、新生アインクラッド第一層のはじまりの街にある、黒鉄宮の戦士の碑のモニュメントの前まで足を運んでいた。黒鉄宮は文字通り、大理石のように表面がピカピカ光る黒い鉄の様な石の壁で出来た宮殿だ。右を見ても左を見ても、天井を見上げてても真つ黒な壁と模様が広がっていた。そんな黒

鉄宮に立っているこのモニュメントには今までフロアボスを討伐したメンバーの名前が記されている。イベント専用ボス撃破の時も記されているのだ。二人は29層のボスを倒した際に記されている筈の、自分たちの名前を天井高く聳え立っているモニュメントの中から探していた。

「まだ新生アインクラッドは30層までしか到達していないから……、下の方から探したほうが早いな。えっと……どこだ？」

キリトはそう言うと、様々なパーティのプレイヤー名が表示されているモニュメントの真ん中から上あたりを中心に、自分たちの名前を探し始めた。ユウキも同様、キリトの見ているであろう場所を目を凝らし、必死に探し出した。

「!! キリト！ きつとあれじゃないかな!!」

ユウキが指を刺した先の場所には、全七人分スペースが用意されている、各フロアの名前欄の中に、やたらとスペースを余らせているパーティメンバーの名前が表示されていた。見間違うはずがない、ほぼ全ての討伐者一覧の中で、たった二人しかいないパーティといえば……。

F l o o r 29

K i r i t o

Y u u k i

二人は29層のボス討伐のシルシを見つけると、しばらくぼーっとその名前を眺めていた。ずっと見ていると、本当に二人だけで討伐してしまったということが段々と実感となって現れてきた。

「あつた……ボクたちの名前だ……」

「ああ、俺たちの……名前だ……」

たった二人だけでフロアボスを倒すということは、旧インクラッド、新生インクラッドでも誰も成し遂げたことのない歴史的快挙である。その前代未聞な偉業をキリトとユウキは成し遂げた、いや成し遂げてしまった。

「キリトっ、写真撮ろっ♪」

「ああ……いいぜー!」

ユウキはそう言うのと左手でメニューを表示し、ストレージから撮影クリスタルを取り出すと、クリスタルの自動シャッターのスイツチをいれ、碑の前で待っているキリトの隣に立ち、ニツコリ笑って右手でキリトの左手を握り、反対側の左手でVサインをした。キリトは右手でVサインを出してみせた。

——カシヤツ——

クリスタルで撮影されたスクリーンショットは16:9の比率で、中央にキリトとユウキがキレイに陣取る形で写り込んでいた。かつて、スリーピング・ナイトのメンバーと記念撮影したときと比べて随分人数が少なくなってしまうが、ユウキにとっては恋人であるキリトとの、最初の大切な思い出となって残ったのだ。

「やった……キリトとの最初の思い出が出来たよ!」

「ああ……いきなりすぎることやっちゃまったけどな……」

キリトはユウキの頭に手をポンとあてると、ゆっくりと優しくその頭を撫で始めた。ユウキはキリトの掌を目を閉じて受け入れていた。実の姉、藍子に昔撫でてもらった時のことを思い出しながら、キリトの掌の感触に懐かしさを感じていた。

「これでお終いじゃない、これからも思い出はたくさん作れる……そのためにも頑張ろうな……ユウキ。俺は……どこまでも力を貸す。お前のためなら……この身がどうなろうと構わない」

「うん……ありがとうキリト。でも……もしもキリトの身に何かあつたら……ボク泣いちゃうからね？　だから……絶対に無茶だけはしないで。無茶なんかしたら……怒るよ？」

「そいつは勘弁願いたいな……アハハ」

「もう……キリトのバカ……」

それからも二人は他愛のない話に花を咲かせていた。ALOに来るまでどんなゲームを遊んでいたか、どんな世界を旅してきたか、普段どんなことをして過ごしているかなどなど。しかし楽しい時間ほど過ぎ去るのは早く、時間は現実世界の夕方に差し掛かり、キリトも帰らなければいけない時刻となっていた。

「ん……そろそろ帰らないとだな……。俺、今日アスナと一緒にバイクで来たから……あいつを送ってってやらないと。親御さんに黙って出てきても同然みたいだから、なるべく早く帰してやらないと後から大変だ。あいつケータイ以外何も持ってきてないからタクシーも呼べないしな……」

「え……あ……うん、そうか……そうだね、もうこんな時間だもんね」

キリトが帰ってしまうことを知ると、ユウキは少し寂しそうな表情を見せた。出来ることならずっと一緒にいてほしい、側にいて話をしてほしい、でもそうもいかなかった。キリトはあくまでも面会という形でこつちまで足を運んでくれている。家までは何十キロも離れているし早く帰らないと夜も遅くなってしまう。残念ながらお別れの時間が近づいていたのだ。

「ごめんな……出来ればずっと一緒にいてやりたいんだが……」

「んーん、今日もいろいろあつたけどボクすっごく楽しかったよ！
……まさかボクがステージで歌うことになるなんて夢にも思わな
かったけどね」

「ああ、楽しかったなら俺もよかったよ……。ライブのことに關して
は明日、セブンとスメラギ、レインと一緒に打ち合わせと……。歌の
レッスンもするぞ？」

「ええっ!? もう明日からいきなりやるの!? ボ……。ボク……。心の準
備が……」

「大丈夫だ、セブンがユウキには素質があるって言ってたろ？ ああ
ゆうことはそんな簡単に人様にポンポン言えるようなことじゃない
ぞ？ 勿論努力はいるだろうが……」

ユウキはよっぽど歌に自信がない様子だった。やっぱりマイクよ
り剣を握ってる方が性に合ってるよと、そう思っていた。しかしそん
なユウキをキリトは素質があるから大丈夫だと安心させた。こうい
う心遣いが女の子の心をガツチリつかむのだろう、……。どこかの赤い
人と違って。

「うん……。キリトがそういうなら……。ボク頑張る。だから……。応援し
てね？」

「さつきも言ったろ？ 全力で応援する。ユウキの負担は俺が減ら
す。だから……。思いつきりやってやれ！」

「……ウン！ キリトありがとう!!」

そう言うユウキは笑顔でキリトに向かい、ピョンとジャンプして
そのまま抱き着いた。精一杯の大好きを恋人であるキリトに贈った。
一日に何回も何回も抱き合っているが、このやり取りだけは何回やっ
ても飽きることはなかった。むしろやるたびに、お互いを近くに感じ
ることが出来る。アスナともここまで親密なスキンシップはなかつ
た。

「家に帰ればまた……ここで会えるからな。寂しくなんかさせないよ」

「うん……でもさキリト、今日は休んで……?」

「え……何で……」

すつとぼけたキリトにユウキは口をぷくーつと膨らませると若干不機嫌気味に詰め寄った。

「何で? じゃないよ全く! リーフアから聞いたよ? 昨日の夜からろくな食事も睡眠も取ってないって! さっき言ったでしょ! 無茶しないって! 約束を早速破る気なの!?!」

キリトは物凄い形相で迫ってきたユウキに言いくるめられると、肩を落として落ち込んだ顔をしながら「善処します……」とだけ言い放った。本当にちゃんと休むかどうか心配なユウキであった。

「帰り……アスナも後ろに乗せるんでしょ……? 事故ったら絶対に許さないからね」

「分かってる、今日は法定速度内守って安全運転でいくよ……」

「……うん……」

「……ユウキ……」

キリトは寂しそうな表情を浮かべているユウキに対し、正面から距離を詰めると、少しだけ身をかがめて、ユウキの顔に自分の顔を近づけ、ユウキの後頭部と肩に手を当てて自分の方向へと一気に抱き寄せ、自分の唇をユウキの唇へと重ねた。

「え……キリト……? ンンツ!!」

「……………」

ユウキは驚きつつも、キリトを受け入れた。キリトのユウキへの口づけは30秒ほど続き、程なくして重なっていた唇が離されると、ユウキは顔を真っ赤にしてぼーっと放心してしまっていた。急な口づけに困惑と、キリトへのドキドキが重なって、よくわからない気持ちに陥っていた。

キリトはユウキから唇を離すと、そんな赤くなっているユウキの顔を見つめながら、再び自分の胸へとユウキを抱き寄せた。多分今日はログアウトしたらもう会えない。だからこの場を離れる前に、精一杯のユウキを体で感じていたい。そう思ったが故の口づけと抱擁だったのだ。

「……元気でしたか？」

「……うん……いっぱいでした……」

「そうか……俺も……ユウキからもらったぞ、元気……」

「……えへへ……」

お互いに精一杯の元気を分け合った二人は満面の笑みを浮かべていた。そして今度こそログアウトしようと、二人は左手でメニューを表示させ、ログアウトの項目を選択した。そしてあとワンタップするだけでログアウト出来る状態で、互いに視線を合わせて、手をぎゅっと握り合い、笑顔を見せたままログアウトした。二人のバターが仮想世界からログアウトされるまで、手はずっと握られたままだった。二人の意識はユウキから紺野木綿季へ、キリトから桐ヶ谷和人へと引き継がれていった。

同日午後16:15 横浜港北総合病院

「——ん、こっちに……戻ってきたか……」

和人は自分のアミュスフィアを頭から外しカバンにしまい込むと、思いつきり伸びをして肩を左右に動かし、骨をポキッポキッと音を鳴らせた。

「さて、帰るか……木綿季も言ってたし……今日は大人しく休むとしよう……」

和人はそう言うと言ってきた荷物をまとめ、帰り支度を済ますと無菌室の廊下へと出た。ガラス越しの木綿季といつもの挨拶を交わそうと思ったら和人であったが、無菌室の面会場の前には母親の翠、妹の直葉、木綿季の担当医の倉橋、そして明日奈がおり、和人の帰りを待っていた。和人がキョトンとしてみると、倉橋が和人に歩み寄って声を掛けてきた。

「おかえりなさい和人君、木綿季君とはもういいのですか？」

「え……あ、はい。たくさんお話し出来ましたし、今後のことについても全部話しました。詳しい打ち合わせは明日やる予定です」

「そうですか……何から何まで準備してもらって……ありがとうございます……和人君」

「いいえ……俺が好きでやってることですから……」

和人にお礼を言うと、倉橋は翠、直葉、明日奈の顔を順番に見て少し頷き、和人の方に体を向きなおし、難しい顔をしながら話し出した。

「和人君、木綿季君のことについてお話があります。……あ、そんな顔をしなくてください。木綿季君の余命とかの話ではないです……そうではないのですが……別のことでお話があります」

和人は倉橋にそう言われると、今更畏まって一体なんの話だろうと思った。思い当たる節はもうないので何で話を振られたか分からない

かった。

「明日奈さん、申し訳ないのですが桐ヶ谷さんたちをお借りしてもよろしいですか？」

「え、ええ…私はここで木綿季と話してますから、行ってきてください」

倉橋は少しだけ会釈をすると和人、翠、直葉を連れて隣の来客用の部屋へと消えていった。明日奈が少しだけ心配そうな顔をしながら四人の背中を見つめていると、突如木綿季の声がスピーカー越しに聞こえてきた。どうやら木綿季も少しだけ遅れてALOから戻って来たみたいだった。

『ん……あれ？ 明日奈一人だけ？ 和人や翠さんはどうしたの？』

「あ……おかえりなさい木綿季、キリト君たちは……何か先生から話があるって、ちよつと別室にいったみたい」

『ふう〜ん、そうなんだ……んじやあ戻ってくるまでお話しよ！ 明日奈！』

「え、ええ……そうね……。お話ししましょうか！」

木綿季は明日奈の様子がおかしいコトに、いち早く気付いた。和人もそうだが、一瞬言葉に詰まると、大体人間は隠し事や知られたくないことを胸の内に秘めていることが多い。その些細な違いを、木綿季は素早く見抜き、明日奈の異変に気付いてしまったのだ。

『……何かあったの？ 明日奈……？』

「えっ……いや……別に何も……」

『嘘、ボクには分かるよ……明日奈は……和人と同じで嘘がへたっぴだよね……』

「あ……えっと……」

木綿季に凶星を着かれると、明日奈はだんまりとしてしまった。もう自分は隠し事をしていますと言ってしまったようなものだった。言っているのかよくないのか迷っている明日奈に、木綿季は安心させるように声を掛けた。

『言ってくれて大丈夫だよ、ボクはもう……何も怖くないから』

「……木綿季……わかった。言うね……実は……」

「……後遺症……!?!」

一方そのころ、別室で倉橋から話を聞かされた和人は驚愕の表情を見せて声を荒げていた。倉橋が和人に告げていたのは、何を隠そう木綿季が今後抱えてしまうであろう、感染症の影響が残る、後遺症の事であった。

「ええ…和人君達のおかげで木綿季君のHIVが治る見込みはぐつと上がりました。しかし……それを前提として話を進めますと、次に問題が出てくるのが……その後遺症なんですよ……」

「だって……先生……木綿季はHIVに侵されてる以外のことは……健康だって……言ってたじゃないか……」

和人の口調が少しずつだが荒くなっていた。木綿季にどこまで過酷な試練を与えれば気が済むのだ、と。別に倉橋が悪いわけではな

いのだが淡々と話を進める様子を見てしまうと、この男が悪魔に見えてきてしまっていた。

「ええ……感染症も合併症も、HIVを駆逐できれば薬で治せます。治せるのですが……弱った体を元通りにするとなるとまた別の話になってくるのです。単に筋力が低下しているだけなどであれば、少しずつ栄養をつけ、リハビリもして社会復帰も可能だろうと思っ

「じゃ……じゃあ何故…!!」

「末期症状を抱えた患者の大体の人が……突如病気が治っても……五感や四肢に後遺症を残してる場合があるんですよ。……私は今その可能性の話をしています」

「……それじゃあ……木綿季は病気が治っても……普通の生活が出来ない……ってことなんですか……?」

「分かりません、木綿季君は三年間という長いスパンで終末期医療を続け、メデイキュボイドの中で過ごしてきました。现阶段では……HIVが治って見ないと……後遺症が残っているかどうかというの

はわからないのですよ。お恥ずかしい話なのですが……医療にも限界というものがある……」

和人は拳を震わせていた、折角木綿季が治るかもしれないのにまた壁にぶち当たるのか……と、木綿季を何で普通にさせてあげられないんだと、そう思っていた。恐る恐る和人は今後の木綿季がどういった症状にかかる可能性があるのかを聞いてみた。恐ろしくて聞きたくないが、聞かないわけにいかない。

「具体的に……どんな後遺症が残るんですか……」

「先ほど五感と言いましたが……恐らく一番影響が出る可能性があるのが……視覚、聴覚でしょう……」

「なっ……」

和人は凍り付いた、それじゃあ……病気が治ったって……現実世界では何も見えない……何も聞こえない……ってことじゃあないか……。嘘……。だろ……。そんな……。そんなことって……。あんまりじゃないか……。

「そんな……。そんなことって……」

「非常に残念ですが……これが現実です……。勿論後遺症が残らない可能性も残っています。でも……最悪の可能性は……覚悟しておかないといけない。だからあなた方を呼び止め、このことを話したのです」

「お、お兄ちゃん……」

妹の直葉が和人に向けより、ぎゅつと手を握った。一方和人は前のめりに項垂れ、体をふるふると震わせていた。

木綿季の病気が治っても……何も見えない……？ 何も聞こえない……？ 手足も動かなくなっって歩けない……？ 何も出来ないっのか……？ だったら……。だったら……。俺は……。それでも……。俺は……。

考えなくったって、迷わなくたって、やることは決まってるじゃないか。あの時誓った、木綿季を支えるって、俺の一生を捧げるって言っただじゃあないか!! ……なら……。俺にやれること……。木綿季にしてあげられること……。それは……。ツ!!

項垂れていたと思っただ和人は、急遽姿勢を戻し、鬼の形相を浮かべ、全身に力を込めて胸のうちの想いを表へとぶちまけていた。後遺症がなんだ、五感を失うことがなんだ、手足が動かないことがなんだ、関係ない。俺が木綿季の傍にいるって決めたんだ、なら木綿季がどんな形になったって、絶対に俺は彼女を見捨てない。そんな木綿季への想いを和人は全て声に込めて叫んでいた。

「だったら俺がツ!! 一生木綿季の側にいて彼女を支えてやるっ!!
目が見えないなら俺が導いてやる!! 何も聞こえないなら俺が教え
てやる!! 歩けないなら俺が脚になる!! 手が動かないなら俺が助
けてやる!!」

「お……おにい……ちゃん……?」

「俺は……一生木綿季にこの身を捧げる!! 生半可な覚悟で……木綿
季を好きになったわけじゃあないツ!! 木綿季はもう俺の人生その
ものなんだ!! 木綿季は……俺なんだツ!!」

全ての病棟に響き渡るような音量で和人は叫び続けた。相当の覚
悟と精神力がなければ言うことが出来ないことである。しかし和人
には本当にどんなことがあっても木綿季を支えて生きていくだけの
覚悟があった。

「……わかりました、そこまで言うのなら……木綿季君の退院後の面
倒は……和人君達にお願いをします」とします」

「……へ……?」

倉橋がそのことを伝えると、和人は先ほどまで激昂したのから一転
変わって、キョトンとした表情をして、目を点にして固まってしまっ
ていた。今、気の所為じゃなければ、先生はすごいことを口走らな
かっただろうか?

「実は先ほど……あなた方がALLOにログインしてる間、翠さんとお
話をさせてもらっていました。そこで話したのです……木綿季君の
今後は……」

「先生……そのことについては私から説明させてください」

倉橋との話の間に、和人の母親の翠がここで口を割って入った。木
綿季の今後のことって言ったって……何を話すというのだろうか?

「和人……本人達がいけない間に勝手に話を進めて非常に申し訳ないのだけれど、木綿季ちゃんの退院後の面倒、うちで見ようと思うの」「え……え……、う……うちでえっ?!」

木綿季の今後のこと、それは勿論文字通り退院後の木綿季の受け入れ先の話であった。木綿季は親兄弟を全て亡くしている。普通なら親縁の者か施設に通うことになるところだが、倉橋から木綿季の受け入れ先について心当たりはないかと相談を受けた際、翠が自ら木綿季を養子縁組に迎え入れようと倉橋に話を切り出したのだ。

「木綿季ちゃんがうちの家族になるってことだよ、お兄ちゃん」

「木綿季が……家族に……? ホントなのか……? 母さん……」

「ええホントよ、お父さんには私から話すわ。大丈夫よ、絶対に文句は言わせないから!」

「あ……いやそういうことじゃなくてだな!」

「えつとその場合は……紺野木綿季ちゃんから……桐ヶ谷木綿季ちゃんになるってことなのかな……」

「さあ……その辺は木綿季ちゃん次第ね。紺野家としても様々な思い入れはあるでしょうし……こればかりはね……」

困惑している和人など気にもせず、木綿季の退院後の話について盛り上がっている直葉と翠であった。既にそこに和人の意思など関係ないといった具合に話が進んでいた。

「でも……和人が……木綿季ちゃんと結婚してしまえば、紺野でも桐ヶ谷でも問題ないんじゃないかしら?」

翠がメガトン級の核弾頭を投下した。その爆撃のエネルギーは凄まじく、和人の理性を吹き飛ばし、冷静さを欠けさせ、顔どころか体全身の隅々まで真っ赤に染め上げるほどの破壊力を誇っていた。

「け、結婚……!?!? 俺が……木綿季と……!?!?」

和人は顔をゆでだこみたいに真っ赤にして驚いていた。アスナとSAOで結婚をしたことはあるが、あくまでそれはゲームの中での話である。現実ともなると話はまた別である。お互いが死ぬまで支え合い、一生を共にに過ごしていくだけの重く、責任を背負う契りとなる行為だ。それだけの覚悟もいる。

「別に問題ないんじゃないかしら? 和人は木綿季ちゃんのコト好きなんでしょ? 一生支えていくんでしょ? だったら平気じゃない!」

翠は両手を一本締めのようにパンとならすと超ご機嫌でノリノリで和人に話を振り続けた。まるで甘酸っぱい青春の恋の話に花を咲かせる若い女子高生のように目がキラキラと輝いていた。

「木綿季ちゃん、お兄ちゃんにもうゾツコンだよ? もう決めちゃいなよ……?」

直葉も直葉で肘鉄でぐいぐい和人にトドメを刺そうとする。当の本人である和人はというと、俯いた姿勢のまま顔を真っ赤にしたまま、動かないでいた。

「そ、それは……それに関しては、俺と木綿季本人の問題だから……こっ……こっ……こっ……では公言しないッ!!」

「えくく!! その答えはずるいよお兄ちゃん!! 男ならここで”俺は木綿季と結婚する”ぐらい言ってみなさいよー!」

「かつ……ダメだ! こればかりは今すぐに決めろと言われても気

持ちの整理がついてない！」

和人は色々と言いつつ訳と並べのらりくらりと話をかわしていく、実際本人も結婚に関しては満更でもないのだが、若さというものもあり、少しだけ抵抗感というものがあつたのだ。

同日同時刻、メデイキュボイド無菌室前

「聞こえた…？ 木綿季」

『うん…聞こえた…』

今の和人の叫びはさほど距離が離れてないここ、無菌室前へ丸聞こえだった。もちろんマイクがセットしてあるのでメデイキュボイドの中にいる木綿季にもぼつちり聞こえていた。木綿季はその真つすぐな和人の気持ちと覚悟に心底嬉しくなり、絶えず涙を流していた。明日奈は壁側に設置されているグリーンの本ンチに腰を落ち着けて、事の成り行きを見守っていた。

「 ” 一生木綿季にこの身を捧げる!! ” 木綿季はもう俺の人生そのもの!! ” 木綿季は俺なんだ!! ” …ですって！ いいなあ、木綿季…私もそんなこと言われたことないよ？」

『うん…うん…』

明日奈は出来る範囲で和人の声真似をして木綿季に語り掛ける。肝心の木綿季はスピーカー越しに顔を真っ赤にして俯いた姿勢で涙を流しながらも恥ずかしさで死にそうになっていた。でも、心の底は暖かかった。和人の心の叫びを偶然ではあつたが聞けてしまったからだ。

「幸せ者だね、木綿季は」

『うん、ボク……今まで生きてきて……一番幸せ……かも……』
「……頑張ろうね、木綿季。絶対に病気を治して……健康な体で……
現実世界で暮らせるように……!」

『うん……うん……ありがとう……明日奈……』

木綿季はまたもや嬉し涙を流していた。本当に……本当に和人への感謝の気持ちは留まることを知らない。和人がボクに一生捧げてくれるのなら……ボクも出来る範囲で和人を支えられるように……頑張って生きよう。そう考えといた。

つい最近まで死を受け入れていた少女は、少しずつ……少しずつではあるが差し込んだ希望という光に導かれて、生きることの喜びをまた感じていた。大切な人との出会いが文字通り彼女の人生を変えようとしていたのだ……。

第21話く休息く

西暦2026年2月1日 日曜日午後16:30 横浜港北総合病院 無菌室前

木綿季は明日奈に、自分の体の後遺症のことを聞き出した。現時点ではあくまでも可能性の話でしかないが、五感に影響が出るかもしれないことと、四肢が使えなくなるかもしれないこと。折角病気が治っても……ただ単に生き永らえるだけなのであった……。

しかし、和人はそんな状態になっても木綿季と一緒にいてくれるという、一生傍にいて支えてくれるという。その生半可ではない和人の覚悟と、自分への愛情に木綿季は言葉に表せないほどの感謝の気持ち胸に抱いていた。

(ボク、ホントに幸せ者だ。後遺症が残っても……和人となら頑張れるかな……)

しかし木綿季としても、和人に支えられっぱなしというのは正直嫌だった。いくら自分が病気で現実世界で体を自由に動かせないと言っても、何かしらの力になれる方法はないだろうか？ 別に今すぐでなくとも構わない、もしも後遺症がなかったら、精一杯体を元に戻していつか、それからお返しが出来るかもしれない……。そう考えると体に力が湧いてきた気がした。明日を生きるための活力に変わってきてる気がした。

『ありがとね明日奈……、正直に教えてくれて……』

『ううん……私も……隠す様なことして……ごめんね……』

『そんなことないよ！ 明日奈はボクにショックを受けさせないために黙っててくれたんでしょ？ ボクを傷つけない為に……』

『そ、そんなことないよ……』

『んーん、わかってるよ。明日奈も和人と一緒に……優しいからね……』

「……………木綿季……………」

かつて和人と付き合っていた元恋人と、今和人と付き合っている現恋人。二人は同じ男を愛する者同士、複雑な心境を抱えていた。元々固い絆で結ばれている親友同士の木綿季と明日奈であったが、いざ和人のことを考えると、少しだけ心に引つかかるものがあったのだ。

木綿季にしてみれば明日奈に申し訳ないといった気持ちを抱えており、明日奈にしてみても木綿季が今和人と付き合っていると聞いても、病氣と必死に闘っている。それならば親友として応援しないわけにはいかない。しかし明日奈の心のどこかに引つかかるものがあるということとは、やはり今でも和人のことが好きだということの意味していた。

もとはと言えば、和人と明日奈は仲違いなどで別れたわけではない。家の事情で仕方なく別々の道を歩んでいくために別れたのだ。事実、和人はしばらく明日奈のことを引きずっていたし、明日奈もいまだに和人を見る目は、恋する乙女のままだった。

「あ……………ごめんね木綿季、私……………そろそろ帰るね。家の人待ってるから……………」

『あ……………うん……………！　引き留めたみたいになって……………ごめんね明日奈……………』

「んーん、木綿季が元気になって私も嬉しいよ！……………私もね、現実世界の木綿季ともっとお話ししたり、一緒にショッピングに行ったりしたい！」

『う……………うん！　ボクもだよ明日奈！　一緒に……………可愛いお洋服とか……………見せっこしようよ！』

「うん……………！　絶対に行きましょう！　約束！」

互いに現実世界で遊ぶと言う約束を取り付けると、明日奈は「木綿季！指切りげんまんしよう！」と木綿季に話を持ちかけた。そう言いながら明日奈は自身の右手を無菌室のガラス越しに、メデイキュボーイ

ドのカメラ経由で木綿季に見える位置に小指を差し出した。木綿季はその姿を見てから、仮想空間内で自分の小指を立てた。

『……へへ、ゆーびきーりげーんまんっ』

「うーそつーいたらはーりせんぼんのーますっ」

「ゆーびきったっ！」

『ゆーびきったっ！』

硬い約束で交わされたゆびきりを済ますと、明日奈は長い栗色の髪をなびかせて、木綿季のいる病室を後にした。

「またね！ 木綿季！」

『うん！ バイバイ明日奈！ また会おうね！』

木綿季と別れの挨拶を済ませた明日奈が無菌室を後にすると、別室の扉がガラガラという音を立てて開いた。中からは倉橋と話を終えたばかりの和人たち桐ヶ谷家の人間が姿を現し、明日奈と丁度鉢合わせする形で顔を合わせるようになった。

「あ、明日奈さんー！」

「直葉ちゃんにキリト君……、お話はもういいの？」

「ああ、ちよつと木綿季のことで……話をしていた」

「……後遺症のことかな……？」

「え……知ってたのか……明日奈……」

「うん……先にログアウトしたときにね、先生から……直接聞かされたの。キリト君たちが別室で話してるのも……聞こえてたよ」

「……そうだったのか……先生から……」

……ん？ ちょっとまで。今……明日奈がとんでもないことを口走らなかつたか？ 「キリト君たちが別室で話してるのも」……だと？ つていうことは……も……もしかして……。

「……明日奈さん、つかぬことをお聞きしますが、先ほどの私めの叫び声って……ひよつといたしますと……？」

「うん！ 思いつきりすぎるぐらいばっちり聞こえてたよ？ キリト君の告白！ いや〜私も言われたことないのに木綿季が羨ましくてしょうがないよー！」

折角落ち着きを取り戻してきたというのに、明日奈に恥ずかしい話題をぶり返され、和人は再び体温と心拍数が上がっていくのを肌で感じていた。しかも明日奈はまるで和人にトドメを刺すかのように、先程叫んだ和人の物真似をしだした。

「一生木綿季にこの身を捧げる！」 木綿季は俺の人生そのもの！」

” 木綿季は俺なんだ！” なんて！ キヤー！ 私もいつか言われてみたいなく！」

明日奈は若干キャラクターが変わりつつも、和人に精神攻撃を仕掛けるのかの如く、先程叫んでいた和人のセリフを本人に聞かせてみせていた。その様子を見て、直葉はお腹を押さえて爆笑し、翠と倉橋は和人から見えない角度に顔を隠し、口元を片手で押さえてくすくすと笑いを抑えていた。和人は和人で全身の隅々まで肌を真っ赤に染め、体をふるふると震わせて周りからの精神攻撃にただひたすらに耐えていた。

程なくして直葉たちが一しきり笑い終わると、倉橋が話題を切り替えるべく、改めて今後の木綿季の身体について、和人に語り出した。先ほどまでのおちやらかした表情とは一転して、医師としての真剣な表情を浮かべながら、和人に向かって話し続けた。

「和人君、先ほどはあのようなことを言いましたが、後遺症が残るのは現段階ではあくまでも可能性の話でしかありません。だからといって後遺症にならないというわけでもありませんが……。決して諦めないで希望は持ち続けてください。少なくとも全身が一気に使えなくなる、なんてことにはならないと思いますから」

倉橋は先ほど別室で和人に告げた悲しい現実を突きつけたときと打って変わって、今度は和人を安心させるような希望がこもったような言葉を並べた。医師として正しいことをしていたはずなのだが、少しばかりの罪悪感を持つてしまっていたようだ。勿論、今回倉橋が話している内容も杞憂などではなく、あくまでも可能性の話であった。

「いえ……俺の方こそ声を荒げてしまい、申し訳ありませんでした……。病院で大声を出すなんて……ご法度でした……」

「いえ……私も和人君の気持ちはわかりますから……。しかしもし後遺症が残っていたとしても、克服できるレベルであれば治療の継続と、リハビリで何とかできるかもしれないかもしれません。だから和人君、最後まで諦めないでください」

「ええ……分かってます。木綿季は俺の大切な人です、俺に出来る事なら……何でもします」

和人からの決意の気持ちに満ちたその返事を聞くと、倉橋はにこやかな笑顔を見せて深々と頭を下げ、和人を含む桐ヶ谷家の人間と明日奈に向かって「今日も来てくださってありがとうございます」と謝礼をした。

「俺……また明日も来ます。木綿季によろしく伝えておいてください」

「わかりました、確かにお伝えします。……道中気を付けてお帰りください」

「はい……お世話になりました。倉橋先生」

同日午後14:40 横浜港北総合病院 タクシー乗り場

「んじゃ和人、母さんたちはタクシーで帰るから……明日奈ちゃんをしっかりと家までお届けするのよ?」

「ああ分かってるよ母さん、間違っても事故ったりなんかしない」

「頼んだわね、キリト君?」

そういうと直葉と翠は手前に待機しているタクシーに乗り込み、運転手に目的地を伝えるとそのまま病院の敷地を出て、見えないところまで走り去っていった。和人と明日奈は二人が乗っているタクシーが、見えなくなるまで視線を送り続けていた。

やがて見えなくなると、しばしの静寂が流れ和人も明日奈も上の空で木綿季の入院している病棟を下から眺めていた。

「それじゃ、俺たちも帰るか……明日奈」

「うん……そうだね……」

和人がそう言うと、二人はタクシー乗り場を後にし、和人のオートバイが停めてある駐輪場まで歩を進めていた。二人とも、終始無言であったが数十メートルほど歩いたところで和人のオートバイが視界に入ると、明日奈が無言の空気を破るかのように、キリトの名前を切なそうな表情を浮かべて呼んだ。

「ねえ……キリト君」

「ん……何だい? あす——」

明日奈に声を掛けられて振り向いた和人の頬に、明日奈は自分の唇を近付けて接吻をしていた。いきなり振り向きざまに接吻をされた

和人は困惑の様子を隠せなかった。何でだ？ 何で明日奈は俺にキスを……？ 今の俺には……木綿季がいることをわかっているはずだ……、だのに何で……？

「ごめんね……驚かせちゃって……。ただの私の我儘……。なんだ。やっぱり私ね……。キリト君のことが……。好き……」

「明日奈……」

改めて和人に好きだと告白した明日奈の瞳には涙が浮かんでいた。しかし切ないながらもその顔は何故かどことなく晴れ晴れとした表情にも見えた。仕方ないんだ、キリト君には……。木綿季という大事な人が出来てしまったんだから。私がいくらキリト君のことが好きでも、キリト君の目にはもう……。木綿季しか映っていない。だから……。もうこれで……。いいんだ……。

「だからね……。これでお終い。本当に……。結城明日奈と……。桐ヶ谷和人君の恋人関係は……。お終い……。なの……」

明日奈は瞳から滝の様な涙を流しながら、和人に向かい走り出し、そのまま飛び込むようにして抱き着いた。長年付き合ってた身として、和人はなんとなく明日奈の気持ちを理解していた。やっぱり俺に未練があるんだ、けどごめん。俺は……。木綿季のことを好きになっってしまったんだ。もう君とは……。付き合えない……。もうあの頃には……。戻れないんだ……。

「お、おい……。明日奈……」

「ごめん……。ごめんねキリト君……。これで本当に最後だから……。お願い……。最後にもう少しだけ……。こうさせて……」

「……。ああ……。わかった……」

和人は明日奈に言葉を掛けてあげることが出来なかった。以前ま

での和人なら……優しく抱き留め、頭を撫で、元気づけようとするだろう。だが……今はそうしない、ただ胸を貸すだけであった。恋人でない明日奈に、それ以上のことはもう出来なかったのだ。そのあたりの線引きだけは……しっかりとっておかないといけない。それがけじめというものだ。

しばらくして時間が経過し、明日奈はほとぼりが冷めると抱き着いている和人から体を離して、上着のポケットから自分のハンカチを取り出し、自身の瞳から流れ出てくる涙を拭いた。高ぶった感情も収まってくると、それに比例するように涙も次第に流れなくなり、やがて止まった。少しだけ冷静さを取り戻した明日奈はポケットにハンカチを仕舞い、重苦しい空気の中、口を開いた。

「ごめんねキリト君……迷惑だったよね……」

「明日奈……」

「もう、大丈夫。これで……私は……大丈夫だから……」

「……ごめんな……」

「何でキリト君が謝るの？ キリト君は悪くないのに……むしろ、あの時母さんを説得出来てれば……！」

話の途中で明日奈がはつとなつた。今更過去のことを振り返って後悔してももう遅い、それに今キリト君との関係はお終いと自分で言ったではないか、まだ私はキリト君に未練があるのか……いい加減諦めろ、キリト君には……木綿季がいるんだから……、もう私とは……終わつたんだから……。

「やめよう……今更こんな話をしてもだめだよね……。ごめんね……なんか……」

「いや、構わないよ……。さ……帰ろうぜ……」

「……そうだね……」

和人は明日奈と一緒に重たい足取りで駐輪場まで足を運び、オート

バイのシートからヘルメットを二個取り出すと、一つを明日奈にかぶらせ、もう一つを自分でかぶり、バイクにまたがりキーを差し込みエンジンを起こさせた。明日奈を後ろに乗せサイドスタンドを蹴り、少しずつスピードを上げ病院を後にした。

走ってる間は二人は終始無言であった。気まずいからなのか、ただ単に口を利きたくないからなのか……。明日奈は若干の後悔を胸に抱いていた。和人は今の明日奈に対してどうしたらいいかをずっと考えていた。事故したら元も子もないので運転に支障がでない範囲でひたすら考えていた。

今までは恋人として明日奈を支えてきた、だけど今はあくまでも友人同士でしかない。そうなれば今までと違ったやり方で支えていかなければならぬ。その接し方、支え方が、和人はわからなかったのだ。やがて一時間ほど時間が経過し、二人が乗ったオートバイは明日奈の豪邸に近づいていた。明日奈が予め連絡を入れておいたからか、門の前には家政婦の佐田が迎えに来ていた。

和人は結城邸の門の前の路側帯にオートバイを停車させると、後部座席に座っている明日奈を先に降ろし、サイドスタンドを立てて、ギアをニュートラルにいれ、事の成り行きを見守っていた。

「お嬢様、お帰りなさい」

「佐田さん……！わざわざ待っていてくれたんですか……」

「ええ……そろそろこのぐらいの時間に帰ってくるのではないかと思います。先ほどからお待ちしておりました」

「そうなんですか……わざわざありがとうございます、佐田さん」

「勿体ないお言葉です。……とここで、お友達は大丈夫なのですか？」

「ええ、おかげ様で……病気を治す算段がついたんです」

「それはそれは……本当によろございました……！」

佐田は木綿季の病気が治りそうだということを知りながら聞かされる、まるでそれを自分のことのように喜んだ。本当に心が温かい人だと思う。明日奈がいい子に育ったのはこの佐田って人のおかげ

でもあるのではないだろうか。時折不機嫌になつて威圧するときもあつたが、明日奈のこの人格は、佐田の教育の賜物なのかもしれない。積もる話も大体終わり、明日奈はオートバイに跨っている和人の方を向くと「ここまで送ってくれてありがとう、キリト君」とお礼を言い、踵を返して佐田と共に家の中へと入っていった。

「……………」

和人はその様子を最後まで見守ろうとせずに、オートバイを発進させようとしたが、心にどこか煮え切らない思いを抱えていた。何だかよくわからないがこのままではいけないと思つたのだ。そしてどうしたらいいかわからないが、吹っ切れたように明日奈の名前を叫んだ。

「明日奈ッ!!」

和人からの突然の呼び出しに反応して明日奈は振り返り、目を丸くして驚いていた。もう話すことなど何も無いと思つていたばかりに、一体何の用なんだろうと思ひながら、明日奈は和人の口から聞かされるであろう言葉を待つていた。

「俺は…………君とはこれからもずっと友達でいたいと思つている！だから…………今後も困つたことがあつたら、今まで通り遠慮なく俺を頼つてくれ！でもその代わり…………俺が困つたときは…………相談に乗つてくれよな！」

和人はそれだけ言い残すとヘルメットのアイシールドを降ろしアクセルを空ぶかしし、何故か敬礼のポーズをした後バイクを走らせた。明日奈はそれを追いかけるようにすぐさま駆け出し、門の外に出ると和人に向かつて精一杯叫んだ。

「キリトくうくくん!! ありがとうおおく!! またねくく!!」

その声が和人に聞こえたかどうかは分からないが、和人は左手をハンドルから離し、グツと親指を立てた。どうやらちゃんと聞こえていたようだ。普通は元恋人となると、気ままずすぎて話しかけることすら躊躇われるのがほとんどだ。しかし和人の場合は、恋人ではないがあくまでも親友同士として、これからも接していこうとこう言ってくれた。

その優しさが、やっぱりなんだかキリト君らしいなと思った明日奈は先ほどまで抱いていた後悔の気持ちも少しだけ晴れたのか、病院にいた時よりも晴れやかな表情へと変わっていた。どうやら今度こそ本当に吹っ切れたようだった。

「キリト君……ありがとう、頑張つてね……」

既に声が聞こえない距離にまで走ってしまったっていった和人にそう呟くと、明日奈は再び門をくぐって自宅へと帰っていった。自分にキリト君以外の人……好きになれるのかな……と思いつながら。

一方オートバイを走らせている和人は、明日奈の家から更に1時間かけ、無事に事故に合うことなく自宅へと戻っていた。体力がある方の和人も二日連チャンでの往復は流石に堪えたようだ。それもまともには息を取ってないときたもんだ、安全運転を心がけてたとはいえ、我ながらよく事故らなかつたもんだと思っていた。和人はオートバイを自宅敷地内に停めると、フラフラの体をなんとか気力で支えながらシートから降りて、メットを仕舞い、エンジンを切っておぼつかない足取りで自宅の扉を開けた。

「た……ただいまあ……」

「あ、お兄ちゃんおかえり〜」

和人が玄関をくぐると、妹の直葉が両手を広げて玄関まで出迎えにきた。そして疲労困憊の兄に労いの言葉を掛けた。

「昨日から本当にお疲れ様、お兄ちゃん」

「ああ、ありがとうスグ。流石にちよつと……クタクタだ……。悪いけどちよつと夕飯まで部屋で休ませてもらうよ……」

「あ……うん、分かった。ゆつくり休んでね？ 木綿季ちゃんにあまり心配かけちゃだめだよ？」

「ああ……分かってるよ。木綿季にも言われたしな、んじやちよつと……眠らせてもらうよ」

「うん……おやすみ、お兄ちゃん」

「おやすみ、スグ……」

和人は直葉と挨拶を交わすと、そのまま二階に上がり、自室に入るとカバンをぶつきらぼうに投げ、上着を着たままベッドにダイブした。その顔からは疲労感や徒労感といった表情が見て取れた。

「ああ……つ、疲れた……マジで……」

ベッドに突っ伏すように体を横に倒すと、和人はここ最近起きたことを思い返していた。本当に短期間で色々あり過ぎた。新しい恋人、HIVのこと、ライブのこと、明日奈のこと、そして……木綿季が退院した後、家族になるかもしれないということ……。

「……あの時はしどろもどろだったけど、もし……木綿季が……望むなら俺は……」

家族となるのもやぶさかではない、そんな考えを巡らせていると、段々と睡魔に襲われていた。いいや……まだ考えるのは……、次に目

を覚ましてからでも……遅くはないだろう……。ちよつと頑張りすぎたかもしれないから……今日ぐらい……ゆつくり休もう……。

「おやすみ……木綿季……」

眠りにつく間に、恋人の名前を呟いた和人は瞳をゆつくり閉じ、何も考えずにベッドから足をはみ出させた状態のまま眠りについた。

同日夜19：05 桐ヶ谷邸

桐ヶ谷家の一階にあるキッチンでは和人の母、翠が晩御飯のおかずをテーブルに並べていた。一通りの献立を並べ終わると、翠は子供たちを食卓に着かせるために、やや大きめのポリウムで家のどこかにいるであろう自分の子供に食事のお知らせをした。

「直葉ー！ 和人ー！ 晩御飯出来たわよー！ 降りてらっしゃーい

！」

「はあーいー！」

一階から自分たちを呼ぶ声が聞こえると、直葉は大きめのポリウムで返事を返し、隣の部屋にいる兄を呼ぼうと読んでいる雑誌を傍らに置き、ベッドからぴよんと起き上がり、華麗な足取りで部屋を出て、和人の部屋の扉をノックした。

「お兄ちゃん？ 晩御飯出来たって、早く食べよー？」

「……………」

「おにいちゃん……開けるよー……？」

返事が返ってこない兄の部屋のドアのノブに手を掛け、ガチャリと開けると、僅かに開いたドアの隙間から中の様子を覗き込んだ。中は

真つ暗だったが、廊下の灯りの僅かな光が差し込むと、少しだけ中の様子が見えた。少し……というか大分不格好だったが和人がベッドの上で寝ていることを確認した直葉は、苦笑いを浮かべながら兄の寝相を見つめていた。

「クスッ……しようがないっか……」

直葉は和人を起こさないようにそーつと扉を閉め、抜き足差し足で廊下を歩いて階段を下り、リビングに足を運ぶと食卓の椅子の背もたれに手を掛けながら、翠に事情を説明した。

「お母さーん、お兄ちゃん寝ちやつてるよ。無理に起こしちゃうのも可哀そうだから、そのままにしておいたよ」

「そう……それじゃあ和人の分だけラップして下げておきましょうか。起きたら食べるでしょう」

碧はそう言いながら台所の引き出しからラップを取り出し、和人の更にだけ被せ、和人の座る位置に戻した。そして炊飯ジャーから自分と直葉の分のご飯をよそい、食べる準備が整うと直葉と共にお行儀よく、手を合わせた。

「いただきます」

「いただきますあーすー！」

桐ヶ谷家の今晚の晩御飯はカツだ、それも豚ではなく鶏肉を使ったチキンカツだった。千切りキャベツと真つ赤なプチトマトが同じ皿に盛り付けられ、その傍らに小皿と真つ黒なトンカツソースの入っている容器が置かれていた。何故トンカツではなくチキンカツにしたかというと、翠に考えがあつてのことだった。

「あれ……トンカツじゃないんだ、珍しいね……うちでチキンカツな

んて」

「うん、そうなのよ……ちよつとだけワケがあつてね」

「ワケ……?」

「直葉、食べられるお肉の中に縁起を担いでるお肉があることって知ってるかしら?」

「ほえ? そんなのあるんだ……」

「うん……あるのよ。多分その界限に関わってないと知らないかもしれないんだけどね、ところで直葉……一般的なお肉って何だと思う?」

「え……そりゃあ牛肉、豚肉、鶏肉、んでもってお魚?」

「そうね、お魚はちよつとだけ違うかもしれないけど一般的には牛、豚、鶏になるわね。そこで……この中で仲間はずれがいるのだけれどわかるかしら?」

直葉は首をかしげて疑問に思っていた。何で母さんは食事の時間になぞなぞをかけてきているのだろうと。お肉に縁起も何もあるのかなあと。口にチキンカツを頬張りながら翠からの問いかけに応えるべく、直葉は三種類の肉の異なる点を探し出していた。

何だろう、お肉の硬さとか? ……いや違うなあ……、そんなのブランドとか調理法で硬さとかはがらつと変わる。多分この線はないだろう。んじゃ何だろう……栄養成分とか……もそれぞれ違うだろうし。……となると肉の元となっている動物の差……かな? 牛と豚と鶏でそれぞれ相違点つていたら……。

「えつと、鶏……かな?」

「正解、何で鶏だと思う?」

「え、また答えるの……? ん、鶏だけ哺乳類じゃない……?」

「ん、正解だけど違うわね……。答えはね、鶏だけ二本足なのよ」

「え、あ……確かに。でもそれが何で縁起を担ぐことになるの? そもそも ”カツ” にしてるんだからその時点で縁起がいいと思うんだけど……」

「そうねえ……んじやあもう答え言っちゃうわね。ねえ直葉、お相撲って見たことある?」

「え、お相撲……? お相撲って……男の人がふんどし一丁で戦うアレ……?」

「ふんどしじゃなくて ”廻し” ね。お相撲さんが食べる料理の中にちゃんこ鍋っていう料理があるの。別にそれだけをちゃんこって呼んでるわけじゃなくて……お相撲さんが食べる食事は全部総じて ”ちゃんこ” って呼んでるのよ」

「へえ……」

「それでね、お相撲さんが食べるちゃんこ鍋のお肉にはね、豚肉や牛肉は絶対に使われないの、基本的に鶏肉だけなのよ」

「へえ……そうなんだ。でも……何で?」

「ねえ直葉、お相撲のルールって知ってる? 何をしたら勝ちになるか」

「ええつと、転んだり……土俵……だっけ? あの外に出たら負けだったような……」

気が付くと翠による相撲談義が始まっていた。縁起のいい食べ物のお話をしていたはずなのに、何でこうなったのだろうと直葉は内心思っていた。直葉は翠の口から語られる相撲講談を半分聞き流し気味に耳にしながら、チキンカツを頬張り続けた。

「うん、正確には足の裏以外が地につくか、体が土俵の外に出たら負け、ね。基本にお相撲さんは土俵の上では足の裏以外をつくことを許されないの、それ以外が地面についた瞬間に負けになっちゃうから」

「へえ……」

「さて、ここで思い返してほしいんだけど、さっきのお肉で二本足で立っているのは……どれかしら……?」

「どれかしら……ってそりゃあ勿論鶏肉……ああつ!」

「そう、牛と豚は前足……つまり人間に例えると手をつけている状態

になるの。相撲で言ったら即負けになっちゃうわね。だから負けを思わせるような動物の肉は縁起が悪いとされてるのよ。その点、鶏は二本足で力強く大地に立っていることから、負けない動物として縁起を担ぐようになったって言われてるわ」

「へえ〜そうなんだ。あたし……初めて知った……」

「そうなの、だからお相撲さんはみんな鶏肉ばかり食べてるのよ。まあちゃんと他のお肉も食べてるけど、本場所を控えてるときは決まって鶏つてのが鉄板らしいわ」

直葉は最初こそ興味がなかったが、話を聞いていくうちにすっかり感心していた。相撲には全然興味がなかったけど、今度から見てみようかなとも思った。VRMMOとはまた違った面白さがあるのかもしれないと、その時はほんのちよつとだけ思った。

「だからこそ……今日いい鶏肉買ってきて、わざわざカツにしたの……和人つたら……」

翠がそう言い漏らすと、二人して和人の部屋があるであろう方向に苦笑いを浮かべながら視線を向けた。縁起物の鶏肉のカツを食べれば、木綿季ちゃんにとつてもいいゲン担ぎになるかなと思ったのにと。

「まあ……今日ぐらいいは大目に見てあげますか……」

「あはは、そうだね……！ 冷めないうちに食べよ！お 母さん！」

「うふふ……そうね……！」

夢の中にいる和人を放っておいて、桐ヶ谷親子は仲良くチキンカツをいただいた。直葉はこの雑学をお兄ちゃんに聞かせてやろうとそう思っていた。その後、直葉たちが晩御飯を完食したタイミングで入れ替わるように、夢の世界から帰還した和人が寝ぼけ眼を擦りながらリビングへと姿を現した。

絶好のチャンスと思ったのか直葉は、先ほど翠から聞かされた相撲の雑学を、これでもかと和人にぺらぺらと説明してみせた。半分意識を夢の世界に置き去りにしていた和人はよく耳に入っていないが、母親の作ってくれたチキンカツは美味しいと感じていた。

それより明日はセブンによる木綿季の歌のレッスんだ。俺に出来ることは木綿季の傍で彼女を支えてやることぐらいしか出来ないだろうが、精一杯応援してあげよう……。今日はまだ眠いし、飯食ったらシャワー浴びて寝よう……。明日に備えて……。

同日 午後21:35 東京都世田谷区 結城邸 ダイニング

一方結城邸では明日奈が母親である京子が帰宅するのを待っていた。佐田から京子の本心を聞かされ、自分がどれだけ今まで自分勝手かというのを思い知らされた。別に今の現状をどうこうしたいわけじゃない、ただ……母さんと仲直りしたい。もう……気まづいままこの家で毎日を過ごすのはいやだ、親子らしく……仲良く過ごしていきたい……。明日奈はただそれだけを胸に思っていた。

明日奈がいる結城家のダイニングは、全体的に赤を基調とした内装で、中央にある細長いテーブルには、真っ赤なテーブルクロスがかけられており、その上には豪華なキャンドルと高級な花屋でしか見られないような綺麗な生け花が花瓶に差し込まれていた。そして天井には大変に豪華な如何にもといったシャンデリアがキラキラと光を放っていた。まさにザ・お金持ちのお嬢様の食卓といったダイニングだった。

明日奈はダイニングの椅子に腰を下ろしながら、京子にどうやって自分の心を伝えようか考えていた。思っていることを直接伝えればいいのか、京子の期待にちゃんと応えるからと伝えればいいのか頭を抱えていた。明日奈が難しい表情を浮かべていると、明日奈の傍らに姿勢正しく立っている佐田が、優しい口調で明日奈に声を掛けた。

「大丈夫ですよお嬢様……、そんな難しい顔をされなくても……、京子様にはちゃんと伝わりませう。私が保障いたしますよ……」

「……うん……そうですね……」

「それに……京子様はああ見えて……お嬢様からの愛情を欲しておられません。お嬢様が京子様への想いを忘れなければ、きっと京子様もお応えしてくれますとも……」

佐田はそうは言うが、やはりあの気難しい母さんのことだ、一回突っぱねたら引き返せない性格のこともあるから、変な意地を張らないかどうか心配だった。思えば私のこのなかなか後ろに引き下がらない性格も、母さんに似たのかなと、そんな思いも胸に抱いていた。そしてとうとうその時はやってきた。玄関の方からやや重たい扉の開閉音が聞こえると、コツン……コツン……とハイヒールのヒール部分を床に押し当てながら歩いている音が、遠くから明日奈たちのいるダイニングへと響いてきた。京子はこちらへ近付いてくる模様だ。今日明日奈が予定を全てキャンセルし、木綿季のいる病院へ駆け付けたことは、既に京子の耳に入っている。その情報を聞かされた時は表情を変えなかった京子であったが、帰宅して真つすぐダイニングのあるこちらに向かっているということは、京子の方も明日奈と話し合う気があるということなのだろう。

ハイヒールの足音はどんどんダイニングへと近くなり、やがて目と鼻の先ぐらいまでの距離までの足音を響かせると、ダイニング内に入った佐田が、タイニングを計って大きなダイニングの扉を開けた。その開けられた扉の先には、肩まで伸びたセミロングにきつい形の眼鏡を掛け、真つ赤なキャリアスーツに身を包んだ明日奈の実の母親、京子が不機嫌そうに佇んでいた。

「おかえりなさいませ、奥様」

「おかえりなさい……母さん……」

「……ただいま戻ったわ……」

明日奈は京子の姿を視認すると、座っていた椅子から立ち上がり、軽く会釈をして母親の帰りを迎えた。少しだけ不機嫌そうな京子に怖気づいてしまっていたが、佐田から聞かされた言葉と、病氣と闘うと決心した木綿季の気持ちを出すと表情を変え、もう一度京子と話し合うべく、京子を自分の向かい側の椅子へ座るように促した。

「母さん……その、今日は……予定を全てキャンセルしてしまつて……ごめんなさい……」

「……言いたいことはそれだけかしら？」
「え……」

明日奈がまず第一声に謝罪の気持ちを表すと、早速京子是不機嫌オーラを全開にして娘の言葉に対して反応をして見せた。明日奈は一瞬たじろいたが、佐田からの「大丈夫です」と言いたげな優しく、真剣なアイコンタクトが自分に対して送られていることに気付くと、気持ちを仕切りなおして話を続けた。

「……別に今回の件については……私は怒ってないわよ？ 前に話した友達のことでしょ？ AIDSを患っているっていう、それなら仕方ないわ。確かに勉強や受験も大事だけど……、人の命にだけは……変えられないもの」

「……はい、ありがとう……母さん……」

ここで明日奈はどことなく京子の様子に違和感を感じていた。不機嫌は不機嫌なのだが、何といえはいいのだろう。今まで見せていた刺々しさというものが感じられなかった。もう一言で表すと中々素直になれない一昔の時代を生きてきた堅物な親、といった印象を受けた。佐田はそんな京子を、困ったような表情で見つめていた。もつと奥様も素直になられたら良いのに……そう言いたげな表情をしていた。

明日奈は明日奈で京子に何と話しかけてよいかわからないままだった。佐田の言う通りならば下手に言葉を並べて説得しても、前回のように一蹴されるだけであろう。だが、明日奈は既に京子の本心を知っていた。自分に対して厳しく当たり過ぎてしまっていたことも後悔していた。つまり、京子は強がっているように見えるが、実は心の奥底では苦しんでいる筈なのだ。ならば明日奈のやることは一つしかなかった、言葉なんて必要ない、今私に出来ること……母さんに伝えることが出来る、私の愛……それは……。

「……ッ!? あ……明日奈……どうしたのよ……」

「……かあ……さん……ごめん……なさい……」

「え……?」

明日奈は涙を流しながら京子に抱き着いていた。流れる涙が明日奈の頬を伝い、顔を埋めている京子の胸元のキャリアアスーツを濡らしていた。抱き着かれた京子は困惑していた、かつて娘がこんなにも自分に密着して甘えてきたことがあっただろうか? いや……ない、こういうことは全て佐田にまかせていたからだ。

「どうしたのよ明日奈……貴方らしくないわね」

「……かあ……さん……」

いきなり抱き着かれた京子もこの状況をどうしたらいいかわからなかった。そして何で娘がこんなことをしているのかもわからなかった。さんざ悩んだ挙句、京子のとった行動は、自分に抱き着いてきた娘を、抱き締め返すという、普通の母親らしいものだった。

明日奈がどうしてこんな行動をとったのかわからない、しかし京子は何故か明日奈を抱き締めずにはいられなかった。何がそうさせたのかはわからないが、今抱き締めないといけないと思ってしまったのだろう。京子は力の限り、娘を抱き締めていた。どのように声を掛けたいかわからない京子だったが、そこにすかさず佐田が助け船を

出しに京子へと歩み寄ってきた。

「奥様……申し訳ありません。実は……お嬢様には全て……お話しさせていたいただきました」

「え……全て……って……」

「ええ……本当に……」 全てで「ごごいます」

「……………そう……なの……………」

佐田のいう全てというのは、文字通り昨今京子が佐田に話した娘への本当の気持ちのことだった。そのことを聞かされた京子は、娘が何故こんな行動にとっているかというのを理解した。そして明日奈が母親の愛を欲していると同じように、自分も娘である明日奈からの愛を欲していることに気付いてしまっていた。

「母さん……ごめんなさい……、私……母さんの気持ち……何も考えてなかった……」

「……………」

「母さんはただ……私を不幸にさせたくなかっただけなのに……、私は反抗的な態度ばかりとって迷惑掛けて……、心配ばかりかけて……本当に……ごめんなさい……」

明日奈はようやく、自分の本当の気持ちを母親である京子に向けて言葉にすることが出来た。今まで随分自分勝手なことをしてきたが……これからは母さんの期待に応えられるように努力していこう。そうすれば……母さんもきっと愛情をもって私と接してくれるはずだ……と。

京子は明日奈からの心の声を聞き届けると、目を丸くして固まってしまうていた。今まで自分の意見しか言っただけだった娘が、母親である私に心配かけさせまいと、今までの態度を改めると言う。……それはそれで喜ばしいことには違いないだろう。しかし違う……何かが違う、私は……本当は娘にそんなことを言わせたかったわけじゃない

い。そして……私も……娘に本当に伝えたいことがある、厳しく教育するだけが……親じゃない、親の本当の役目は……、私が……明日奈にしてあげられる本当のことは……!」

次の瞬間、京子は大粒の涙を流しながら、明日奈を自分の方へと抱き寄せ、力いっぱい抱き締めた。京子が明日奈のことを母親として抱き締めたのは、恐らく幼少の頃依頼になるだろう……、それぐらい明日奈は母親の温もりを忘れていたのだ。そしてそれは京子も同様、自分の娘の温かさを忘れていた。明日奈と京子は十数年ぶりに「親子」として触れ合うことが出来ていたのだ。

「かあ……さ……ん……?」

「……なさい……」

「……え……」

「ごめんなさい……ごめんなさい明日奈……ッ」

京子はひたすら明日奈に謝っていた。こんなはずじゃなかった、私の変な意地の所為で貴方に苦しい思いをさせてしまつてごめんなさい、変なプライドを押し付けてしまつてごめんなさい、そしてかけがえのないものを奪つてしまつてごめんなさいと、ひたすらに謝っていた。

「ごめんね明日奈……貴方に……私のエゴを押し付けてしまつて……」

「……もういいの……もういいのよ母さん、私……もつと頑張る……母さんの期待に応えられるように……頑張るから……」

「明日奈……明日奈……ッ」

長年娘へのスパルタな体制を崩さなかった京子が、今日初めて、娘から愛されているということを感じ取り、暖かい涙を流していた。それと同時に、長年娘である明日奈に、気の遠くなるほど長い間、母親としての愛を注いでいないことに気付かされたのだ。

久しぶりに抱き合ったお互いの体は暖かかった、忘れかけてた暖かさだった。互いの体温を心行くまで確かめ合うと、明日奈と京子はお互いの体の距離を置き、視線を合わせ合った。今まで頑なに反抗期な娘と頑固な母親として接してきただけに、いざ本当の気持ちがあわかつたとなっても、少しこっぴどくばかりなものがあった。それから三分ほど時間が経過したが一向に進展がないため、すぐ傍にいた佐田がまたもや二人に助け舟を出した。

「奥様、言いづらいようでしたら、私めが代わりにお嬢様にお伝えいたしましょうか？」

三步ほど京子達に距離を詰めながら使用人らしく両手を丁寧の前で交差させ、気品を漂わせながら佐田が京子に自分が代わりに本当の気持ちを明日奈に伝えようかと持ち掛けた。しかし京子の頑固スキルがここでも発動し「私が言うから佐田は下がってなさい！」と頬を赤らめながら言い放った。

佐田は「そうですか」とくすくす笑いながらもこの二人は大丈夫だなと心に安心感を抱きながら、親子の間に水を差すまいと「それでは失礼いたします」とだけ言い残してダイニングを後にした。佐田が部屋を出ていったことにより、ダイニングには明日奈と京子の二人きりとなった。

「……母さん……あのね……あのね私……」

「……明日奈……、これからは……明日奈は明日奈のやりたいことを……やりなさい……」

「……え……？」

「私は……貴方からいろいろなものを奪ってしまった……。これが罪滅ぼしになるかは母さんにはわからないけど、貴方のやりたいことを……あなたのやりたい場所で……やってみなさい……」

「……えっと……それって……」

「あの学校で……貴方の好きな道を……歩いていきなさい……」

「え……、いい……の……？」

「……構わないわ……。……えと……。それと……。彼のことなんだけど……」

「……キリ……。和人君のこと……。？」

明日奈が聞き返すと、京子は気まずそうに首を縦に振った。明日奈からいろいろなもの奪ってしまった中で、恋人であった和人を引き離してしまったことを、やはり一番取り返しのつかないことだと認識していたようだ。しかし今更後悔しても遅い、明日奈は和人への想いを持ったままだが、今の和人には木綿季という掛け替えのない大事な人がいる。いくら京子が懺悔しても、和人はもう明日奈のもとへは戻ってこないのだ。しかしそんな京子を、明日奈は恨んだり憎んだりはしなかった。

「……んーん……。もういいの母さん……。和人君は……。守りたいものが見つかったみたいだから……。私にも……。多分そのうち現れるわ、きつとね……」

「……ごめんなさい……」

「もう大丈夫だから……。あのね、今日お見舞いに行った友達……。病気が治るかもしれないの。これからも傍で支えてあげたいと思うんだけど……。いいかな……。？」

「いいも何も……。傍にいてあげなさい。大切な……。お友達なんですよ……。？」

「う……。うん！　ありがとう……。母さん……。本当にありがとう……。」

その後、今までの冷え切った間柄が嘘であったかのように、明日奈と京子は砕けた会話に身を投じていた。明日奈には密かに内緒にしていた京子の趣味や、明日奈の兄の失恋話など、明日奈が興味津々になりそうな話に花を咲かせていた。そして明日奈は今日見舞いに行った友達が和人と付き合っていること、和人とはちゃんとけじめを

つけたことを伝えた。

そしてそこにすかさず京子はお見合いの話を持ち掛けたもんだから、明日奈は苦笑いを浮かべていた。以前までの明日奈なら憤慨して断っていたところだが、今回は「もう！ やめてよ母さん！」と冗談交じりに笑顔を振りまきながらさらつと話を流していた。微笑ましい親子らしいやりとりだった。

その後、明日奈は正式に元いたSAO被害者の通う学校に再び戻ることとなり、きつつきつに組まれた習い事も、明日奈の勉強したいことだけに絞られ、門限もゆるくなり、勿論アミューズフィアの使用も許可された。しかし成績は今まで通りトップレベルを維持することを条件に付けくわえられたが、明日奈なら問題ないだろう。

こうして、一度は絶望的だと思われた明日奈による京子の説得は、なんとか解決と相成った。木綿季の後押しと佐田からの助力が、再び二人を親子としての関係を取り戻させたのだ。二人がこれからも仲睦まじい関係を積み上げられていくかどうかは二人次第だが、きつと大丈夫だろう。今度からは自分の気持ちに素直になって接することが出来るはずなのだから。

第22話く約束く

西暦2026年2月2日月曜日 午前8:00 桐ヶ谷邸

和人は深く眠りについていて、ここ三日間は波乱の毎日だった。S
AO事件の時も波乱ばかりだったが、あの時とは違うベクトルで波乱
の毎日を和人は過ごしていた。肉体、精神共に疲労困憊の満身創痍
だ、しかしそのお陰か昨夜は深い眠りにつくことが出来ていた。

「ん、朝か……今何時だ……？」

目を覚ました和人は窓際の壁に掛けてあるデジタル時計に目線を
やると、寝ぼけ眼をゴシゴシ擦りながら今現在の時刻を確認した。し
かしその時刻を目にした瞬間、和人は顔面蒼白となった。デジタル時
計の表示は学生の和人にとって、この時間に寝ていては不味い午前8
時を記していた。

「がっ……はっ、8時イイツ!? マズい遅刻だツ!!」

和人は時刻を確認するなり慌ててベッドから飛び出し、急いで寝巻
を脱ぎ散らかしていつも着ている学生服へと着替えた。しかしその
着替え模様といったらだらしがなく、靴下は左右逆に履くわワイシャ
ツのボタンは留め間違えるわで散々なものであった。人間焦ると口
くなことがないことの表れだ。

慌てて着替えを終わらせると勉強道具一式や授業用のタブレット
をカバンに詰め込み、ブレザーの上着を片手に持って抱えながら扉を
乱暴に開けて廊下に出た。続いて部屋の目の前の階段を駆け足で一
階に降りるとダイニングにいるはずの母親に朝の挨拶を交わす。

「盛大に寝坊した!! 母さん朝ごはんはいらな……い? ……あれ

？」

和人が冷静にダイニングを見渡すと、そこに母親の姿はなかった。いつもなら9時出社なのでまだ家にいるはずなのだが、すっかりもぬけの殻となっていた。そしてテーブルの上には登校前の朝食としていつものパン食ではなく、しっかりとした和食のメニューが並べられていた。更に食器の側に和人宛だと思われる翠からの書置きも残されていた。

「おかしいな、もう出たのかな」

ダイニングやキッチンを見渡して母親の姿を探すが、母親どころか妹の直葉の姿もどこにも見当たらなかった。やがて埒が明かなくなった和人はテーブルに置かれている書置きを手にとって、まじまじと読み始めた。

「えっと、なになに……?」

” 和人へ、今日お母さんちよつとだけ早い出社なので朝ごはん作って置いておきます。たまには和食でも胃に詰め込んでおきなさい。休学届は昨日しっかりと受理してもらったからあとは和人がどれだけ頑張るかにかかっているわ、必ず木綿季ちゃんを助けるのよ！

P・S. この前作った宣伝は私のパソコンからクリック一つでトピックスに表示できるようになっているから、そのタイピングになったら絶対に連絡を頂戴ね？ プロモーション効果は少しでも多い方がいいでしょ？ しっかりとやりなさい。 翠 ”

その手紙を読んだ和人はハツとした、そうだ、休学届を出してもらったから、木綿季の病気が治るまで学校を休むことになっていたのだ。本人はすっかり忘れていた。

「さ、さっきの慌てっぷりはなんだったんだよ……」

和人はほつと胸をなでおろすと大きなため息を吐き、脱力しながらも食卓に着いた。どうも人間というものは、毎日の習慣は抜けきらないものであるとつくづく思った。とりあえずの時間が出来た和人はテーブルの上に乗られた朝ごはんの献立に目を通していた。

「塩鮭、岩海苔に卵焼き。そして味噌汁か、珍しいな、うちで和食なんて」

和人は炊飯器から自分のご飯を茶碗に盛ると席に着いて「いただきます」とだけ言うと言いご飯の上に鮭をほぐし、口へと運んだ。少しよっぱいとそのシンプルな濃い塩味が、白飯といい感じに合うのか、和人は次から次へと朝ごはんを口へ運んでいった。

「うん、美味しい。たまにはパンじゃなくて白いご飯もいいな……」

表面がつやつやで、湯気が立ち上る白いご飯と、色とりどりのおかずを順番に口へ運び続けるたびに、和人の食欲は掻き立てられていった。日本人ならやっぱりお米だと、和食にありつけられることに幸せを感じていた。やがて朝から茶碗三杯ものご飯と、出されたおかず全てを平らげた和人はすっかり満腹になり、満足そうな表情を浮かべていた。

「ご馳走様……つと」

和人はそう言いながら右手に持っていた箸を皿の上に置き、一息入れると使った食器類を流しへ運び、蛇口をひねって水を出すと、右手に洗剤のついたスポンジを持ち、そのまま自分で洗い始めた。水の流れる音と、食器をこする音だけが桐ヶ谷家のキッチンに響き渡っていた。10分ほどの時間を費やして使ったすべての食器の洗い物を済ませた和人は、今日やることを頭の中で整理していた。

「ふう……さて、今日は12時頃にライブの打ち合わせとユウキの歌のレッスンだったな……」

昨日はユウキに病気が治る可能性があることを伝えた。そのために骨髓ドナーを数多く集めなくてはいけないこと、集めるためにライブに参加し歌を歌い、イベントを成功させて、世界中からドナーを集うことを、一から細かく説明した。

しかしそれを成功させるためには、ユウキの努力と、自分たちのバックアップにかかっているといっても過言ではない。セブンやスメラギ達にまかせっきりにするわけにはいかない。自分にも何か出来ることがあるはずだと、和人は頭の中で考えていた。

「……ようし、ちょっと早いかもだがもう出るか」

和人は洗った食器類を戸棚に仕舞うと階段を上がって自室へ戻り、今度は全身真っ黒の私服に着替えを済ますと、壁に掛けてあるライダージャケットを手に取り、ベッドの上に置いてある財布とスマホをポケットに仕舞って外出の準備を済ませた。

部屋を出て、階段を降りて玄関まで足を運び、家の鍵を閉めて敷地内に停めてある愛車の元へを歩を進めていった。今日も今日とてこいつの世話になるのだ。

「ん、ガソリンがなくなりかけてるな。行きにスタンドかなんかで給油しなくちゃあな……」

「あら、和人ちゃん今から学校？」

和人がバイクのエンジンをかけようとした所でお向かいに住むおばちゃんが声を掛けてきた。和人とは小さいころからの顔見知りで、年齢は四十歳ほどの如何にもおばちゃんといったおばちゃんだ。和人はおばちゃんの声掛けに気付くとシートに荷物をまとめながら、挨拶

拶を返した。

「あ、おはようございます。実は学校は今休学してるんですよ。友達が入院してまして……病気が治るまでずっと付き合うって決めたいです」

「あらっ偉いわね、自分の成績を犠牲にしてまでなんて。そこまでするってことは、ひよつとしてこれかしら？」

「え、ええ……まあそんなところですよ……」

「あらあらまあまあ若いわね、和人ちゃん！ 頑張りなさいよ！ おばちゃん応援してるから！」

「あ、ありがとうございます。えっと、んじやあ俺はもう出かけます！」

おばちゃんが片手の小指を垂直に立てると、和人は首を縦に振りながら肯定の返事を返した。そして噂大好きのおばちゃんがトリップして暴走し始めるよりも早く、和人は自宅を後にして横浜港北総合病院を目指し、バイクを走らせた。途中のセルフのガソリンスタンドに立ち寄り、タンクいっぱいレギュラーを給油して、愛車に元気を注入していった。

「しかし今から木綿季の病気が治るまで休学するとすると、三学期をほとんど欠席することになるな……。もしかしたら留年しちゃうかもだな……」

給油をしながら和人は学校の成績について考えてた、一学期、二学期の成績が良いとはいえ、流石に三学期をまるまる休んでしまったら成績は格段に落ちてしまう。そうなると留年という可能性を懸念しなくてはいけなくなる。

「まあそれならそれで構わないかな……。なんなら来年度全部休んだって……。俺は別に……」

むしろそれはそれで美味しいかもしれない、木綿季は怒るかもしれないが和人が来年度も留年すれば、ひよつとしたら木綿季と学校にいけないかもしれないのだ。和人の通っている学校はSAO事件の被害者が生徒として通っている、同じ学年でも年齢が離れているということは珍しくない。つまり、和人と木綿季が同じ学年同じクラスでもなら変な話ではないのである。

「そうだったら楽しいだろうな、ちよつと留年でもしてみようかな、なんてな」

それをしたら流石に世間的に回りからの視線が痛くなる、妹の方が先に高校を卒業して先を越されるとかはちよつと兄貴としてどうなんだろうと和人は思い始めた。それよか自分のことよりまずは木綿季のことを心配しなくては。そう胸に抱いて、給油を終えた和人は病院へと、再度バイクを走らせた。

同日午前10：45 神奈川県横浜市金沢区 横浜港北総合病院

「三日連続……、ハットトリックだな、ははは……」

木綿季のためとは言え毎日毎日自分でもご苦労なこつたと思う。でもそれで木綿季が喜んでくれるのなら全然かまわない。自宅からでもアミューシアを被れば仮想世界でユウキといつでも会えるのだ。しかし和人はわざわざ病院まで足を運んでいた。木綿季の方も直接和人が来てくれた方が嬉しいに違いないし、何より和人だって木綿季の近くにいたかったのだ。

「おはようございます……」

自動ドアを通り、エントランスを通過して受付に足を運んだ和人はフロントのお姉さんに面会に来たことを伝える。

「おはようございます、ご面会ですね？　それではお名前と、入院患者さんのお名前をお願いします」

「あ、ハイ。桐ヶ谷和人と言います。患者さんは紺野、紺野木綿季です。メデイキュボイドの被験者の……」

「！　あなたが桐ヶ谷和人さんでしたか、倉橋先生からお話は伺っています。先生に話は通しておきますのでこちらから直接向かわれて大丈夫ですよ？」

「あ、本当ですか。ありがとうございます、ではそうさせてもらいます」

和人は受付の人にそう言われると、倉橋が特別病棟に立ち入る際に使っているパスと、面会者プレートを受け取り、受付を後にした。

しかし物凄く話がスムーズに進んでいる。どうやら和人はこの常連というかちよつとした有名人になっているみたいだった。しかし、メデイキュボイドの被験者を毎日見舞いに来ている珍しい人というだけでなくこう、なんていうか浮ついた視線をあちらこちらから感じとっていた。

（き、気のせいかな？　なんか物凄くあちらこちらから視線を感じるんだが……？）

和人の予感の間違ってはいなかった。かなり浮ついた視線を、特に女性の看護師さんや医療スタッフからの視線を周囲から感じていた。普通ならここまで熱烈な視線は向けられないだろう。ただの来院者なのだから。しかしそうなるに恐らくこの原因は昨日にあったと思うのが妥当だ。昨日帰るときまではこの様な視線は感じなかった。

（ま、まさかとは思いますが昨日のあのコト……病院中に聞かれてたかも

しれないってことか……!?)」

昨夜、実際に和人はそれぐらい聞かれてもおかしくないぐらいの音量で叫んでいた。木綿季に俺の一生を捧げる、木綿季は俺の人生そのものだ、俺そのものだ……と、渾身の力を込めて精一杯叫んでいた。それはそれは病棟内はおろか、病院の窓の外にまで響き渡るほどの大ボリユームだったそうだ。

「あれが病院中に……丸聞こえだと……?」

認めたくない真実を目の当たりにした、途端和人は顔を真っ赤にしてうつ向いた姿勢のまま木綿季のいる病室を目指した。出来るだけ目立たないように、出来るだけ地味でいるように心がけて一步一步歩いていった。しかし既に和人は有名人である所為か、向かう道中に看護師さん達がちらちらこちらを見ながら、ひそひそ話をしている様子がうかがえた。

「ねね、あの子じゃない? 紺野さんの王子さまって……」

「あ、きつとそうよ! へえ……結構可愛い顔してるじゃない! 私の好みだわ……、紺野さんも隅に置けないわね」

……や、ヤバイ、恥ずかし過ぎて死にたくなってきた。俺はなんてすごいことをしてしまったのだろう、早く木綿季の病室へ辿り着きたい。行って誰からの視線も送られない所に身を投じたい。

「頑張ってね〜王子さま〜!」

とうとう直接的な野次まで飛んできた。もうダメだ、限界だ! 恥ずかしくてここにはいられない! 早く、早く木綿季の病室に……! そう思った和人は、とうとう走ってはいけけない病棟で小走りから更に足の速度を上げ、走り出してしまった。居ても立っても居られなく

なってしまうっていたのだ。

急いで走っていると、病棟の雰囲気少し変わりのよい木綿季の無菌室が見えてきた。あとちよつとだ、あとちよつとで木綿季と会える。何よりこの恥ずかしい空間から逃げ出せる。焦り更に足の速度を上げ、通路の角を曲がろうとそう思った次の瞬間、壁の向こうを歩いていた何者かに追突してしまった。

「バボツ!？」

「ぐあつ!？」

和人から追突されてしまったのは、木綿季の主治医の倉橋であった。和人に思いつきり体当たりされた倉橋は尻もちを搦きながら、持っていた書類を床に派手にぶちまけてしまったていた。和人もぶつかった衝撃で後方に倒れるも、すぐさま何が起こったかの状況を確認し、倉橋にぶつかってしまったんだなという事実を把握していた。

「す、みません倉橋先生！ お怪我はありませんか……?？」

「あいたた……、わ、私は大丈夫です。しかし和人君だめですよ、廊下……それも病院で走ったら危険です。ぶつかったのが私でよかったですよ。これが患者さんだったら、取り返しのつかないことになっていたかもしれませんよ?？」

「は、はい……ぶ、ごめんなさい……」

倉橋は和人を優しく諭しながら床に散らばっている書類を拾い始めた。和人も慌てて、申し訳ないと思いつながらも必死にぶちまけられた書類をかき集めていた。

「考えてみてくださいね? もしも和人君が車椅子にのっている木綿季君を介助していて、急に誰かが木綿季君にぶつかってきそうになったら……どうしますか?？」

「……そ、それは……」

「それと同じことです。病院は私達のように五体満足で暮らすことの出来ない人たちだっています。そのことを忘れないでくださいね」
「……はい、本当に……申し訳ありませんでした」

和人が反省の色を見せながら深々と頭を下げ、謝罪をすると倉橋は「よろしい」と笑顔になった。無菌室のある方にいたということは、倉橋も木綿季に用があつたのだろう。和人が面会に来てくれたため、足並みを揃えてガラス張りの面会室前へと一緒にやってきてくれた。た。

「和人君、今日も来ていただいたありがとうございます。学校の方は大丈夫なんですか？」

「あ、はい。実は休学届を提出しまして、木綿季の病気が治るまで……ずっと付き合うことに決めたんです」

「そ、それはそれは……なかなか勇気がある決断ですね。君は……それだけ木綿季君が大事なんですね」

「……はい、木綿季は今の俺にとって、生き甲斐ですから……」

倉橋は和人がどれだけ木綿季を大切に想ってくれているかを知ると、優しい笑顔になっていた。こんな素敵な男の子に好意を寄せられて、木綿季君は本当に幸せ者だと、そう思っていた。

心が温かくなるのを感じた倉橋は、和人を木綿季と会話が出来るようにするために、前回と同じようにパネルを慣れた手つきで操作し、ブラインドを解除すると、マイクのスイッチを入れ、メデイキュボイドの中にいる木綿季に向かっていつもの挨拶を交わした。

「おはようございます木綿季君、今朝の調子はいかがですか？」

『はぁーい！ 倉橋先生おはようございます！ ボクは今日も絶好調ですよ!!』

面会室のスピーカー越しに木綿季の元気な声が聞こえてきた。こ

の声を聴くたびに安心出来る、ちゃんと木綿季が生きてるって実感できる。和人はほっと胸を撫でおろすと、愛する人がいる無菌室に向かい、声を掛けた。

「おはよう、木綿季」

『……………えっ？ か……………和人!?!』

「やあ、今日も来たよ」

『和人……………今日も来てくれたんだ！ ……ありがとう、ボク……………すつごく嬉しいよ……………!』

朝一番に大好きな男の子の嬉しい訪問に、声のトーンを上げて木綿季は喜んでいた。病気で死ぬしかないと思っていたボクに希望を与えてくれた和人が、今日も来てくれた。ボクを助けるために、今日も来てくれた……………!

『でも学校とか大丈夫なの？ 確か和人は学生さんでしょ……………?』

「ああ、そのことなら大丈夫だよ。昨日休学届を受理してもらったから、お前の病気が治るまでずっと付き合うことに決めた」

『ええ!?! そ、そうなの!?!』

「ええ、和人君の意思は本物です。本当に心から木綿季君のことを想ってないところまで出来ません」

「いいんです先生、俺が好きでやってることですから。学校なんて一年や二年遅れても、構いやしませんよ」

『……………和人、その、えつと……………ごめんね?』

「おいおい、何で木綿季が謝るんだよ、言ったら？ 俺が好きでやってることなんだから」

『えつと、それはそうかもしれないけど……………』

「それにな、俺にとっては木綿季が一番大切だ。何より俺もお前とずっと一緒にいたい……………」

『あう……………、う、うん……………、ありが……………と……………』

木綿季は顔を真っ赤にして恥ずかしがってしまった。自分のためにしてくれることは大変に嬉しい、しかしこれも歯の浮く様なセリフを並べられるとこっぴどくさしくなってしまうのも確かだった。何でこうも当人は後先考えず、恥ずかしがらずに言えるのだろうか。

『和人つてき、結構……凶太いよね』

「そうか？ リハビリしてまだ筋肉少し戻ってきたただけだけど、そんなに太ったか？」

『そ、そういう意味じゃないツ!!』

凶太くて頼りになるくせに、こういう感性については鈍い和人に、木綿季は呆れてしまっていた。ちよつとしか会話をしていないはずなのに、既に木綿季は肩を落として疲れていた。VR空間の中なのである。

『ねえ和人、ALOにこれないかな……？』

「ああ、そのつもりだよ。セブンたちとの合流時間まで余裕あるし、会いに行くよ」

『やった！ それじゃあボク、向こう側で待ってるから！』

「ああ、向こう側で会おう」

和人は木綿季と会話を済ませると、後ろのベンチで微笑ましそうに腰かけている倉橋とアイコンタクトを済ませ、奥の部屋に足を運び、持ってきたアミューズファイアで意識を仮想世界へとゆだねていった。

「……リンク・スタート！」

同日 同時刻 ALO内、世界樹の街 アルン 緑の丘

A L Oにログインし、アルンの街に降り立ったキリトは、現在の時間を確認していた。今日は正午からセブンたちとライブの打ち合わせ、そしていよいよユウキの歌のレッスンが始まる。ユウキはソロで歌うことになっている、個人の実力が試される場になるので、きつとハードなレッスン内容になるに違いない。そう思いながら空を見上げて佇んでいると、キリトに近付いてくるプレイヤーの姿があった。

「キーリト！」

「お、ユウキ……オボツ!？」

キリトが声のした方を向くと、すぐ目の前までダッシュで迫ってきているユウキの元気な姿があった。ユウキは真つすぐにキリト目掛けてステップすると、大好きなスプリガンの男の子の胸に飛び込んでいった。キリトは少しだけグラつきながらも、恋人であるインプの女の子をしっかりと受け止めていた。

「キリト、今日は受け止めてくれたー!」

「ああ、そうくる気がしたからな」

そう言いながらキリトは右手をユウキの頭にあてて、さするようにして撫でていた。ユウキはそんなキリトの胸板に頭をうずめ、擦りあてて幸せそうに精一杯キリトに甘えていた。

「えへへ……キリト……」

「何だ、今日は随分甘えん坊だな、何かあったか？」

「だって……ずっと会いたかったから……♪」

「そうか、俺も会いたかったぞ」

「えへへ♪ ありがとうね、キリト！」

「ああ、どういたしまして」

再会を喜んだ二人はセブンたちとの約束の時間がやってくるまで、

のんびり話でもしながら待とうということに落ち着いた。互いに告白してからはゆつくりとした時間を得られなかったのもあり、今ぐらい恋人らしいことをしようということだった。

「ねえ、キリト」

「ん？ なんだ？」

「あのさ、キリト……ボクにしてほしいことないかな？」

「してほしいこと？」

「う、うん。ボク、ずっとキリトに助けられてばかりで、ボクからは全然何もしてあげられてないから、何かキリトが喜ぶこととしてあげられないかなって……」

女の子座りで自分の髪の毛を指でいじくりながら、ユウキがもじもじと照れくさそうにキリトに話を持ちかけた。何かお返しがしたい、お礼がしたい。ボクの気持ちをキリトに伝えたい、喜んでもらいたい。そう思ってた。わくわくしながらユウキはキリトからの返答を待った。

「ありがとな、でも俺はユウキが元気な姿を見せてくれるだけで十分だ。ユウキと一緒にいるだけで、俺は心の底から癒されてるんだ。今のままでも十分俺にお返しはしてもらってるんだ」

「え……で、でも……」

「気持ちだけ受け取っておくよ、今は病気を治すことに専念しようぜ？」

「うう……ボクだってキリトに何かお返ししたいよ。お願いだからボクにも何かさせてよ！ ねえ……キリトオ……」

ユウキはキリトの胸板に顔を当ててこすったまま、そのまま目遣いでキリトをまっすぐ、瞳をうるうるさせながら見つめていた。その顔を至近距離でまともに見てしまったキリトは観念したのか、顔を赤面させてあっさりとユウキからの提案を飲んだ。ユウキの十八番を

されたとあつては、男でも女の子でも断りきれないだろう。

「うっ……、えーつと……そうだな……」

「何か！ 何かない？ キリト！」

ユウキはうきうき嬉しそうにキリトの返事を待っていた。両手を上下に交互にぶんぶんと振り、まるでデパートの買い物のおもちゃをねだる子供ののように、楽しそうにキリトから答えが返ってくるのを待っていた。

「んじゃあ、お願いというよりも一つだけ約束をしてくれないか？」

「約束……？」

「病気が治って、無事に退院出来たら、俺……ユウキの手料理を食べてみたい」

「え、料理……!？」

「ああ、ダメか……？」

手料理を作ってくれと言われた瞬間、先程の明るい様子が一変して、ユウキはバツが悪そうに暗い顔をして俯いてしまった。手を後ろに回し、視線をキリトから逸らして細々と声を出していった。

「えつと……その、キリトごめんね、ボク……お料理出来ないんだ……」

「えっ……、あ、そ、そうなのか……。わ、悪い……変なこと言っちゃまって……」

空気がすこしだけ気まづくなくなった。キリトはアスナの影響が強いのか女の子^{イコール}料理が出来るという方程式が成り立ってしまっていた。そう、ユウキは料理が出来ない。実の母親が生前に調理をするところは見ていたが、具体的に教えてもらっていたわけではなかったのだ。本格的に教わる前に、病院暮らしが始まり、母親も他界

してしまっただからだ。

「んーん、別にキリトは悪くないよ」

口ではそう言ってキリトのフォローをしてくれていたユウキだったが、明らかに肩を落として落ち込んでしまっていた。

キリトが言葉を詰まらせて困っていると、ふとなにか思い浮かんだのか、ユウキは頭を上げて顔に指を当てて思い出したことを呟いた。

「あ、でもボクね、あれなら作れるよ?」

「アレ……?」

「うん、ボクご飯とかは全然だめなんだけど、和菓子なら……少し作れるよ?」

「へえ……ユウキ、和菓子なんて作れるのか!むしろ料理よりそっちの方がすごいと思うぞ?」

「死んだお婆ちゃんで作ってたところを見てたんだ。ボクにもやらせてって言ったなら、喜んでやらせてくれたの。それからは夢中になっていろんな和菓子を作ったよ?」

「そうなのか……」

「そりや和菓子屋さんみたいなすっごいのは作れないけど、スーパーとかにあるようなものは……大体作れるよ」

ユウキは懐かしいな……と思うような切ない表情で空を見上げていた。キリトもそんなユウキに釣られるかのように、一緒に同じ方向を見つめていた。

「初めに作ったのはね、お団子だったんだ。二人でよく作って食べたよ。ちゃんと出来たらおばあちゃん喜んでくれて、次から次へと色々な和菓子の作り方教えてくれて……」

「……楽しそうじゃないか……」

「うん、すつごく楽しかったよ！ ボクや姉ちゃんがH I Vに感染してるって知っても変わらず接してくれて、他の親戚の人たちはボクらを腫物扱いしてたんだけど、おばあちゃんだけはずっと可愛がってくれた」

「いいおばあちゃんじゃないか……」

「うん、大好きだった。だから和菓子作りはボクのおばあちゃんとのつながりの証でもあるんだ……」

「そうか……素敵だな、ユウキのおばあちゃん……」

「…ウン。おばあちゃん、もう会えないけど……おばあちゃんの味はね、ボクが全部覚えてる。だから……」

ユウキは胸に手を当てて上半身だけキリトの方へ向け、ちよつとだけ困ったような顔をしながら、キリトへお願いの言葉を送った。

「病気が無事治って、退院出来たらさ、キリトに……ボクの作った和菓子を食べてもらいたいな……」

「和菓子か……」

「だ、だめ……かな？」

「だめなもんか、むしろ食べてみたいぞ？」

「ホント!? やった！ えへへ……ありがと！」

「れ、礼を言うのはちよつと変じゃないか？ 俺がお前に何かしてもらうんだぞ？」

「え？ ……あ、そうか……そうだったね、えへへ……♪」

ユウキは舌をペロンとだしながら自分の後頭部をぽりぽりとかきながら、彼女らしい明るい表情へと戻っていった。ユウキが抱えている心の闇は、正直キリトの想像以上に深いだろう、しかしこれから大切な時間を作っていくことで、それを明るく照らせていけるんじゃないかと、キリトは感じていた。

この先どんなにつらく、険しい壁が立ちふさがってくるとしても、俺がユウキの傍にいて支え続けてやる。キリトは一層、固く心に誓っ

た。

「……つと、そろそろ予定の時間だ、俺のホームにいくか」

「うん！　ちよつと緊張してきたけど……、ボク頑張る!!」

「ああ、応援してるからな、ユウキ！」

ユウキに激励の言葉をかけると、キリトは一足先に翅を広げ、地上から50センチほどの高さでホバリングしながら、ユウキに左手を差し伸べた。

「あ、えつと……ありがと、キリト……」

ちよつとこのエスコートのされ方は恥ずかしかったが、ユウキは嬉しそうにキリトの手を握り返し、自分も翅を大きく広げてキリトと一緒にの高さまで体を浮かび上げていた。そして互いに満面の笑みを見せ合うと、アルンの街にある転移門目がけて、手をつなぎながら飛んでいった。

「どうしたユウキ、えらくご機嫌だぞ？」

「えへへ、何でもないよーだ♪」

「……？　へんなやつ……」

（ありがとうキリト……大好き……）

ユウキはまた、生きる希望を一つ見つけることが出来た。その希望を形にするためにも、これから大変な試練に立ち向かうことになる。しかし、今の彼女ならつまづくことはあっても乗り越えられるはずだ。

何故ならユウキには、心から信頼している一生涯のパートナーがいるからだ。この関係が今だけで終わらないように、ユウキは前を向いて進んでいった。

第23話くレッスンく

西暦2026年2月2日月曜日 午後15:15 新生アインク
ラッド第22層 キリトのホーム

ユウキとセブンのチャリティーライブの日程は2月7日の土曜日に決定した。ユウキへ課せられたスケジュールは、残りの月々木曜までみっちりレッスン。そして翌日金曜にリハーサル、そして本番までは休息といった形で予定が組み込まれていた。

「ユウキちゃん、帰ってこないね……」

「うん、やつぱりちよつとキツくしすぎちゃったかな……」

「あの時の七色、ちよつと怖かったよ……、ユウキちゃんはまだ素人同然なんだから、もう少し優しくしてもよかったんじゃない……？」
「わかってる。……でも、ユウキちゃんには時間がないから……」

キリトのホームのソファに腰を下ろしているのは仮想世界でアイドル活動が続いている七色博士ことセブン、枳殻虹架ことレインであった。この日はユウキの歌のレッスンのはずだったが、肝心のユウキの姿がどこにも見られなかった。

セブンはこうなってしまったことの原因が自分だということもあり、非常にバツが悪そうに佇んでいた。普段、ファンやクラスタの前で見せる可愛らしくも勇ましいセブンの姿とは裏腹に、必要以上に厳しい態度をとってしまったことに、若干の後悔の念を抱いていたのだ。

何故、ユウキがこの場から姿を消してしまったかは、今から二時間ほど遡る。

二時間前、キリトのホーム屋外湖畔、仮ステージ前

「キミーがえがいたーみらいのせかーいは、いつかのそーらーにみちびかれてー」

22層の湖畔にユウキの歌声が響き渡っていた。レッスンの直接の指導はセブンが、補佐はスメラギが担当し、つきつきりでユウキのレッスンを進めていった。現在ユウキが歌っているのは、一曲目に歌う事になっている曲目であった。

「それじゃだめ！ 演奏止めて!!」

眉間にシワを寄せたセブンが合図をすると、スピーカーから流れていたBGMがフェードアウトし、止まってしまった。先ほどまで重低音の大音量が流れ続けてたこともあり、スツツと急に静寂が流れ始めた。

「ユウキちゃん、それじゃ全然だめ！ 最初のボイトレではすごくいい声出たじゃない！」

「あ……うう、ごめんなさい……セブン……」

年下のセブンから激しい怒号を浴びせられたユウキは、怯えるようにシユンとしてしまっていた。それもその筈、超スパルタとも言えるセブンのレッスンは、朝から二時間もこの調子で続いていたからだ。この道のプロであるセブンは、パフォーマンスの演出に一切の妥協を許さない。

中途半端な演出では、会場に足を運んでくれたお客さんを満足させることなんて出来やしない。ましてや今回はユウキの実際の命がかかっている、いつも以上にセブンに力が入ってしまうのも無理もないことであった。

「ユウキちゃん、このイベントにはユウキちゃんの全てがかかっている

の。もつと真剣にやらないとみんなにユウキちゃんの思いなんて届かないよー！」

「あ……、う、うん、ごめんね……」

「そんなんじゃない……いつまでたってもキリト君と一緒になんてなれやしないよ！　いつもの勇ましいユウキちゃんはどこいつちゃたの!？」
「う……、ごめんなさい……、ごめん……なさい……」

歌の直接的なレッスンに入り、なかなかそのあとの進捗がない内容にイラついていたセブンが、ついついその感情をユウキにぶつけてしまっていた。

その罵倒に耐えきることが出来ずに、ユウキはどうとう泣き出してしまった。その姿を見ていたたまれなくなつたキリトがユウキに駆け寄って励ましの声を掛けようとした。しかし駆け寄る途中にスメラギに手で道をさえぎられ、制止させられてしまった。

「スメラギ、何で止めるんだよ……！」

「キリト、貴様が本当に彼女のことを想っているのなら、この一件はセブンと俺に任せてもらおうか」

「なつ……お前、ユウキを泣かすのが、あいつのためだつてのかよー！」

「貴様には分からないのか？　セブンの気持ちが」

「セブンの気持ちだと……？」

「ああそうだ。キリト、貴様にはあの様子、どう見えている？」

「どうつて、ただのスパルタじゃないか、こんなんでユウキのためになるつてのかよ!!」

一方的な感情に任せて声を荒らげ続けるキリトの態度に、スメラギは呆れて何も言えなかつた。年はそこまで離れていないはずの二人のはずなのだが、今まで踏んできた場が違うのか、スメラギは終始冷静であった。

「かつて俺を剣で打ち負かした男の言うこととは思えないな、あれが

ただのスパルタに見えるようでは、お前はまだまだだ」
「なっ、何だと……？」

キリトは握りこぶしに力を込め、興奮したままスメラギを睨み続けた。キリトにはスメラギの問いかけの意味が分からなかった。S A O時代にも友人恋人を危険な目にあわせまいと、がむしやらに剣を振り続け、ただひたすらに優しさを貫いたキリトには到底理解できることではなかったのだ。

「貴様は何か勘違いしているようだから忠告をしておいてやる。いいか、”優しくすることだけが仲間のためになるとは限らない”

……覚えておけ」

「な……なんだってんだよ……」

「セブンのレッスンを中断し、ユウキを励ましたければ好きにすればいい。ただその場合には、この件に関してセブンと俺は一切の身を退かせてもらう」

「なっ……、そ、そんな……」

スメラギはあくまで冷静に、かつドライな態度で厳しい現実をキリトに叩きつけた。こう言われてしまつてはキリトも踏みとどまざるを得なくなつていった。セブンたちあつての今回の計画だ、彼女たちに身を退かれてしまつては、当然ユウキは助からなくなつてしまう。

「くっ……」

「分かればいい、黙つてみている。休憩の時間になつたら接触を許してやる」

キリトはギリギリという音がなるほど自分の拳に力を込め、プルプルと震わせていた。目の前でユウキが、大切な人が涙を流しているのに何もできないこの現状にやり場のない憤りを感じていた。キリトは怒りを噛みしめながら、泣いているユウキの姿をただ見ているだけ

しかなかった。

「ユウキ……俺は……」

「ほらっ！ 泣いている時間なんてないよ！ 今言ったことを意識してもう一回！ それともやめる？」

「!! ……やめるのはいやだ、ボク……歌う……」

ユウキの健気な姿は、はたから見てもつらいものであった。飛び交うセブンの怒号と曲の演奏、そして元気のないユウキの歌声だけがこの場に響いていた。ユウキはセブンに言われるがまま涙を流しながら歌い続けた。

「Aメロからもう一回！ 演奏かけて！」

鬼のようなスパルタレッツスは2時間にも及んだ。前半のレッツスが終わり、漸く休憩時間となった。ユウキは全身から疲労の色をだし、とぼとぼとステージを降りて、キリトのいる方に歩いて行った。自分に駆け寄ってくるキリトの姿に気付いたユウキは、一気に走りより、キリトの胸に飛び込んで声を殺して泣いていた。それだけセブンのしごきはきつかったのだ。キリトは彼女に自分の胸を貸し、何も言わずに優しくユウキを抱きしめた。

「ツ……、キリト……ボク全然上手にならない、何回やってもだめなの、ボイストレーニングは上手くできたのに……歌うと全然だめなの……」

「ユウキ……」

涙を流し続けるユウキの頭を、キリトはそっと優しく撫でた。本当ならこんな辛い目に彼女をあわせたくはない。しかし口が裂けても

「つらいなら、やめればいい」なんてことは言えなかった。そうしてしまった結果がわかりきっているからであった。

「ボク、やっぱり才能ないんだよ……。マイクより剣を持って、敵と戦ってた方がいいよ……」

「ユウキ……。ごめん、俺……。何もしてやれることが出来ない、お前の力になるって決めたのに……」

「なら、やめるか？」

「え……。う？」

「スメラギ、お前……」

「つらいから、上達しないから、すぐに諦め、やめるのか？」

「——そんな……。ボ、ボクは……。ツ」

「別にやめても構わんぞ、予定を変更してセブンだけでパフォーマンスをしても構わんしな」

「……。何が言いたい？」

「実力不足だと言ってるんだ。やはり付け焼刃でどうこうなるものではない。その程度なら、いつそバックコーラスでも歌っていたほうがいいのではないか？」

スメラギがまるで二人を挑発するかのような口ぶりで言葉を並べると、我慢の限界に来ていたキリトが声を荒らげ、一気にスメラギとの距離を詰め、彼に殴りかかっっていった。

「——ツスメラギ……。貴様ツ!!」

キリトが怒号を上げると、彼の右拳は光とともにスメラギの左頬に吸い込まれるように放たれていた。PK保護圏内ということもあり、スメラギのHPは減らなかったが、激しいエフェクトとともにスメラギは吹っ飛び、キリトのホームの柵に激しく体を打ち付けた。

激しい砂煙が上がり、その中からスメラギが自分の装備についた砂を手ではぱつと払い落としながらムクリと立ち上がり、自分を殴りつ

けたキリトに視線を向けていた。キリトは相変わらず、厳しい視線をスメラギに向け続けていた。

「今のセリフ、もう一度言ってみろ……！　今度はそのアバターの首を吹っ飛ばしてやるぞ……」

キリトの目には殺意に近いものが芽生えていた、ユウキを侮辱したことが何よりも許せなかった。お前にユウキの何が分かる、お前がユウキの何を知っている。かつて剣を交えた強敵どもといえども許すことが出来なかった。

しかしそんなキリトをスメラギは嘲笑った。

「凶星をつかれたから激昂し、暴力にものを言わせるか。……かつての冷静さは欠片も見られないな、キリトよ」

「……キ、貴様……ッ！」

「キリトやめてっ!!」

キリトが背中中のエクスキャリバーに手をかけたところで、いてもたってもいられなくなったユウキがたまらず仲裁に入った。自分の所為で、周りに迷惑をかけてしまっていることに、険悪な空気になってしまっていることが耐えられなかったのだ。

「ゴメンねスメラギ……、ボク全然上手くならなくて……、でも絶対にやめないから……、最後まで付き合ってくれていいかな……」

「それを決めるのは俺ではない、セブンだ」

「……………」

「しかしその態度を改めない、貴様に先はない。己の才能と実力はよくわかっているだろう？」

「……………ッ」

セブンに続き、スメラギもユウキに対して厳しい態度を緩めなかつ

た。ユウキは表情を暗くしたまま、スメラギともキリトとも視線を合わすことが出来ずに、ただただ地面を見つめていた。

「……………」

ユウキはしばらくの間考え込んだあと、突如翅を広げ、空高く飛び上がり、どこかへいこうとした。その姿を見たキリトも慌てて翅を広げると、彼女の後を追いかけるように地面を蹴り、空高く飛び上がった。

「お、おいユウキ！ どこいくんだ！」

「ついてこないでキリト！」

キリトからの声掛けを振り切るように大声を出したユウキは、全身をふるふると震わせて急停止すると、握りこぶしに力を込めて空中に佇んでいた。

「ごめんね、ちょっと……………一人にさせて……………」

「ユ、ユウキ……………」

ユウキはそれだけ言い残すと、再び翅を大きく広げてそのまま羽ばたかせて、空の彼方へと消えていってしまった。キリトはその悲しそうな後ろ姿を、ただただ見つめ続けることしか出来なかった。

「ユウキ……………」

「……………ユウキちゃん、どっかいつちやつたの？」

キリトが空中で呆然としてっていると、彼のホームの中からセブンが姿を現し、遠くへ飛び去るユウキの姿を見届けながらつぶやいていた。

キリトはセブンの姿を視認すると、ゆっくりと地面に降下し、地に足を下ろすとセブンに詰め寄って今日のユウキへの態度について問

いただきました。

「セブン……何でなんだ、何でユウキにあんな……ッ」

「キリト君、あなたの言いたいことは分かるよ？ 何でユウキちゃんにあんな厳しい態度をとるのか？ でしょ？」

「あ、ああ……、あれじゃあまりにもユウキがかわいそうじゃないか……」

「んー……、それじゃあ逆に聞くけどさ、キリト君……あそこでユウキちゃんすごい上手いよ！ これなら全然通用するよ！」

「……とでも言えばよかったの？」

「えっ、い、いや……それは……」

「あそこで上手い上手いって褒めちぎって、そのまま大したレッスンも重ねないで、本番を迎えてもよかったの？」

キリトは俯き、悔しさに拳を震わせていた。セブンの言っていることは正論だ。ユウキが未熟なままステージに上がったとしても、来場者、視聴者の感動は呼び込めないと悟っていたからだ。

「キリト君、優しくすることだけが優しさじゃないんだよ？」

「優しさ……だけじゃ……？」

「キリト君は誰よりも優しいから、多分わからないと思うけど。本当に人に優しくしたいのならね、厳しくしていかないとダメな場面もあるんだよ」

「き、厳しく……？」

「その言葉を理解出来ないなら、ユウキちゃんは上手くなれないし、キリト君も一緒に成長なんか出来ないよ」

「……………」

基本的に、人は厳しい壁にぶち当たって成長をしていくものだ。つらいことを乗り越えて何度も何度も挑戦して、ようやく成功してというものの繰り返しなのだ。その壁を乗り越えれば成長でき、次なるス

テップへとまた踏んでいける。だが、躓けは所詮それまでなのだ。

SAO時代からたった一人で攻略を進めていたキリトには、その言葉は理解し難かった。大切な人を失わない為に、ただひたすら一人で全ての責任を果たすかの如く、ソロプレイを繰り返していたキリトには難しいことだった。

アスナや仲間たちには決して無茶をさせない、俺が一人で全てやればいい。そんな生き方戦い方をしていたキリトではセブンの言葉を理解出来るはずもなかった。

「なら俺は……どうすればいいんだ……」

「本当にユウキちゃんに成長してほしいのなら、ただ見守って。どんなにユウキちゃんがつらそうにしても、泣きそうになっても、じっと見守って」

「……………」

「それで精一杯努力して、もっともっと上達して、ちゃんと結果が出たら、褒めてあげて？ その時こそキリト君の出番だから……」

「……それまで見守るしかないのか、俺は……ッ」

「キリト君、見守るのもレッスンのうちだよ。キリト君も……ユウキちゃんと一緒に成長するんだよ」

セブンに諭されていても、キリトは少しだけ納得のいかない顔をしていた。セブンの言いたいことはなんとなくわかる。しかしこれまで不器用な生き方をしてきた俺に、そんなやり方が出来るのだろうかとも思っていた。

しかし、この道のプロであるセブンがそう言うのなら、彼女を信じて全てを任せてみよう、そう思ってもいた。

「わかった、まだ全部納得出来ているわけじゃないが……今はセブンの言うことを信じる。でも、俺は俺のやり方でユウキを支える。これだけは譲れない」

「……キリト君も意外と頑固者だね……。パニヤートナ、キリト君……ユウキちゃんのサポートはキリト君に任せる。……あとね？」
「……あと？」

「ユウキちゃんに才能がないなんてことないよ？ 本当に見込みがなかったら、あんなに厳しくしないもの。練習を重ねれば絶対に上達するよ！ それだけは……。私が保証する！」

「セブン……」

才能がある、その言葉をセブンの口から聞くと、漸くキリトの顔にも明るい表情が戻り始めてきた。そんな安心したキリトに釣られるように、セブンもニツコリと笑顔で返事を返した。

「さてと、うーん……。そろそろ休憩時間終わりなんだけどな……」

「ユウキ……戻ってこないな……」

セブンが左手でメニュー欄を表示して、現在の時間を確認していた。休憩時間は終わりを差していたが、ユウキがステージに戻ってくる様子はなかった。どうやら今日のことがかかりこたえているようだった。

「うー……。やっぱりちよつと厳しくしすぎちゃったかな……」

必要以上に厳しい態度をとってしまったかもしれないと、セブンは頭をポリポリとかきながらユウキの飛び去った方角を見つめていた。考えてみればユウキは普通の女の子、素人同然なのである。時間が残されていないとはいえ、度が過ぎてしまったかもしれない。

「俺探してくる！絶対に見つけて連れ戻してくる！」

「パジャールスタ！頼んだよ！キリト君！」

キリトは駆け出し地面を蹴り、翅を広げ空高く飛び立つと、左手で

メニューを開き、フレンドリストからユウキの居場所を確認した。どうやらユウキはアルンにいるようだだった。

「アルン……もしかしてあそこか……？」

キリトは翅をより大きく羽ばたかせ、最大速度で22層の転移門に向かい、アルンへと急いだ。今の俺には声をかけてやることしか出来ない、でも、それは俺にしか出来ないことなんだ。俺にできることを……精一杯やる！　そう胸に抱き、彼はユウキの元へと向かっていった。

同日同時刻　世界樹の街アルン　緑の丘

一方でキリトが探しているユウキは、一人でアルンの街の緑の丘に佇んでいた。アルンの街は今日も快晴で、心地よい風が木々や草、野花とユウキの綺麗なロングの髪を揺らしていた。

「ボク、やっぱり無理なのかな……」

ユウキは自分に歌の才能なんてないと考え始めていた。セブンには最初太鼓判を押ししてもらっていたが現実はどうだ、何回やっても何回やつても上手くいかないじゃないか。セブンが怒るのも無理はない、自分には才能がないんだから。

そんな考えをひたすら巡らせていた。もうこれ以上上手く出来ないのならいつそやめてしまった方がいいのではないかと、最悪の考えにまでいたってしまったていた。

「キリト……！」

すっかり弱気になってしまったユウキは、膝に顔をうずくまらせて

悲痛な声をあげていた。キリトが恋しい、キリトに甘えたい、頭を撫でてもらいたい、抱きしめてもらいたい、キリトを感じていたい。

「ッ……キリトオ……」

やがて我慢出来なくなってしまうたのか、とうとうユウキは目から涙をこぼしてしまっていた。今までつらいことは一人で乗り越えようとしてきた。スリーピング・ナイツやアスナの力を借りても、心まです預けるようなことはしなかった。

しかし今は違う、キリトが欲しくて欲しくてたまらない。孤独に耐えられる強さを持っていたユウキであったが、キリトというかけがえのない存在を手にして、もうすっかり彼なしでは生きていかれなくなってしまうのだ。

「……………」

涙を拭ったユウキは何かをふと思いつたのか、左手で仮想タブレットを開いてブラウザを起動し、動画サイトを開きだした。検索欄に「セブン ライブ」と入力して動画を探し出した。やがて画面にはセブンのライブの動画が山ほど表示された。

「こんなにあるんだ、セブンの動画……」

すこし呆気にとられながら、表示されているたくさん動画のサムネイルを目で追いながら見つめていると、数多くあるライブ動画の中から、一つだけ違う内容の動画があることに気付いた。

「…………あれ？ これ……ライブの動画じゃない……」

ユウキがタップした動画はライブの模様を映したものではなく、セブン取材したドキュメント番組であった。番組名のロゴには「Pa

ssion continent」と書かれていた。

ユウキは今の気分を紛らわすかのように、その動画を食い入るように見ていた。その内容には決してセブンの楽ではなかった人生の模様が語られていた。

今でこそ、七色・アルシャーパーン博士と尊敬され、同時にVRMMO界のNo.1アイドル・セブンと慕われているが、その栄光を掴み取るまでセブン本人も死に物狂いの努力を重ねてきたことが語られていた。その様子をユウキはひたすらに見届けていた。

「セブン、すごく苦勞してきたんだ……ボクよりも年下で、あんなにちっちゃいのに……」

そう、誰だつて楽しんで栄光を掴めるわけではない、才能次第ではそれも可能であるかもしれないが、多くの人は人知れず努力しているものだ。努力しても掴めないこともあるが、努力しなければ最初の一步ですら歩めないのである。

その番組の中のセブンは、まるでユウキが見ていることを想定していたかのように、重たく、心にくることを、淡々と語り続けていた。

『私のことを、多くの人が天才だ、天使だなんて言ってくれています。でも……私は別にそんなんじゃないんです。ただがむしやりに頑張つて、成し遂げたいことのために前だけ向いて生きてきました。だから自然とその結果が付いてきただけだと思つてます。最初は歌なんて歌えなかったし研究だつて全然分からなかった……』

「……え……？」

『でも、少しずつ出来るようになってくると歌うのも楽しくなってきましたし、研究もどんどん奥深いものだど理解出来てきました。その時にはもう夢中になっていました。それ以外のことが全く見えなくなるほどに……』

「セブン……」

『だから私はもつとこれまで以上に頑張ろうと思うんです。だって、

こんなちっちゃい子がこんなに出来るんなら自分にも出来るんじゃないかって、そう思う人達だつてきつと出てくるはずだから」
「……………」

『私の活動が、世界中の人たちに希望を与えるものなら、私はどんなことにも挑戦します。』 “一切の妥協はせず走り続けます” ……
これが私の、七色・アルシャービンの、セブンの “信念” です」
「——ッ」

——信念。

その言葉を聞いたユウキは思い出していた。ボクにも誰にも譲れない信念がある。”ぶつからなければ伝わらないことだつてある”

ボクは一体何にぶつかった？ 歌うと決心してから……何にもぶつかっていないじゃないか。ただひたすら厳しい環境から逃げてしまっただけじゃないか……、それで何が信念だ。

「ぶつかるどころか、キリトの優しさに甘えてただけじゃんか……」

自分はただ目の前の現実から逃げていただけだ、それに気付いたユウキは、今の自分が次に何をすべきかを考えていた。

今のボクに出来ること、一体それは何なんだろう？ 何をすべきなんだろう？ 何をしたらいいんだろう？ 一生懸命歌のレッスンをすること？ 与えられた内容をクリアすること？

い、いや……違う、そんな具体的なことじゃない。もっと大事なことがある、ボクが今やらないといけないこと、それは——！

「ユウキ！」

ユウキが物思いにふけっていると、突如上空から全身真っ黒な服に身を包んだスプリガン少年が降下しながら声をかけてきた。恋人のキリトだった。

キリトはユウキの姿を見つけるなり、彼女の目の前でふわっとホバリングすると、ゆっくり地面に足を付き、恋人のユウキに駆け寄り、優しく抱きしめた。

「キリト……」

「やっとみつけたぞ……」

「……うん、ごめんね……」

「……ユウキ、大丈夫か……?」

「……」

優しく声をかけてくれたキリトに対し、ユウキは無言で答えた。頭の中を色々な考えがごちゃごちゃに巡っていた。でも、それでもまずやらないといけないことがあることだけは、わかっていた。

「ゴメンねキリト、ボク……逃げちゃった……」

「……つらいか?」

「……うん、セブンのレッスン、物凄くハードだった……」

「そうだな、はたから見ても……厳しさの塊だったよ、あれは……」

ユウキの目にはうつすらと涙が浮かんでいた、逃げてしまった罪悪感とキリトに迷惑をかけてしまったという気持ちたちが交差していた。しかし、キリトはそんな逃げたユウキを怒ったり、蔑んだりしなかった。

「キリトは怒らないの? ボクのコト……」

「え? ああ……えと、怒った方が……いいのかな……」

「……優しいんだね、キリトは……」

「……そんなじゃないよ、俺もつらいことから……逃げ続けてたことがあったからさ……」

「え……?」

キリトはつらいレッスンから逃げたユウキに、過去の自分の姿、桐ヶ谷和人の姿を重ねていた。幼い頃に本当の両親を亡くし、今の桐ヶ谷家に養子として引き取られ、真実を知ったときにふさぎ込み、現実から逃げたあの時と重ねていた。

「……俺さ、ユウキに言っていないことがあるんだ……」

「……何？」

「俺の両親と、妹の直葉はな、……俺と血が繋がっていないんだ」

「……え？」

キリトからの突然の告白に、ユウキは目を丸くして驚いていた。今さっき挨拶を交わした直葉と翠さんが……、キリトの……、和人の本当の家族じゃない……？ どういうことなの……？

「俺の本当の両親は……俺が物心つくかつかないかの時にな、交通事故で……死んじまつたんだ……」

「……嘘……でしょ？」

「嘘じゃない、当時のことはよく覚えてない……。その後俺は母さんの妹、叔母家族の桐ヶ谷夫妻に養子として引き取られたんだ。直葉は……そこの一人娘なんだ」

ユウキは正直、キリトが何を言っているのかわからなかった。今のキリトの家族は親戚で、本当の家族はもう既に亡くなっていて、……それじゃあボクと同じ、キリトは……ボクと……。

「そう……だったんだ。キリトは……和人は、ボクと同じだったんだ……」

「……そうなるな」

「……」

キリトのこの真実を知る者は少ない、元恋人の明日奈ぐらいだ。事

故当時、和人は記憶を失っていた。その影響か今の両親、桐ヶ谷翠、峰嵩が自分の両親であり、従姉妹の直葉が本当の妹だと信じて疑わなかった。

しかしある日、和人は翠が抹消したはずの住基ネットの存在に気付いてしまった。PCの扱いに長けた彼がデータを復元してみると、そこには自分の両親が既に他界しているという悲しい真実が書かれていた。

しかし、和人はその事実を知っても、不思議と悲しいと感じることはなかった。少しだけ驚いたことはあっても、決して涙を流すようなことはしなかった。しかし、その真実が今の家族との間に溝を作ることになってしまったのも確かだった。

だからこそ彼はゲームに夢中になった。仮想世界に憧れた。そしてSAOの世界へと足を踏み入れた。そこで様々な経験を重ね、大きく成長できた。

しかし運命とは奇妙なものである。もしも和人の両親が交通事故にあつていなかったら、彼がゲームにハマることも、SAOに惹かれることも、明日奈と出会うこともなかっただろう。

そしてそれは当然、ユウキと出会うことも、決してなかったであろう……。

「キリト……」

「それからだな、身の回りすべてのものから逃げ出すようになったのは。桐ヶ谷家の人間という事実からも、妹のスグからも……」

「そんな……、そんなことがあったら……ボクは仕方ないと思うよ……」

「いや……そうじゃない、俺はずっと逃げてたんだ。ガキの頃にやっていた剣道からもな、爺さんがすげえ厳しい人でさ、当時幼かった俺に鬼の形相で厳しく指導してきてな、……体罰もあったよ」

意外だった。あんなに強いキリトに、そんな壮絶な過去があつただなんて。キリトが時折見せていた寂しい顔は、アスナを失ったからだ

けじゃなかったんだ。もつと重い、悲しい過去を背中に背負って生きてきたから、なんだね……。

「あまりにも厳しすぎて、ある日俺は逃げ出したんだ。そしたら爺さんが今までにない形相で怒り狂ってさ、スグが庇ってくれたんだ。」

”私がお兄ちゃんの分まで頑張るからお兄ちゃんを叩かないで！”
ってさ……。」

「リーファが……？」

「それからになるかな、スグを無意識に避けるようになってしまったのは。SAOでのデスゲームを通して……和解は出来たけど、その当時のモヤモヤは……まだ少し残ったままだ」

「……………」

「だから言っただろ？俺は強くなんかないって、逃げてただけなんだ。アスナと別れた当時も、悲しさから逃げようとしていた……」

「キリト……」

ユウキはなんて声をかけていいかわからなかった、キリトもボクと同じぐらい、心に闇を抱えていた。彼の傍にいる身として、これからその闇を照らしてあげられるのだろうかと思っていた。

「だけどなユウキ、お前は違う……！」

「えっ……？」

キリトは表情を変え、ユウキの肩を両手でガッチリ掴み、彼女の瞳をまっすぐに見つめながら、今思っていることの本心をぶちまけた。自分とは違う強さをもっている彼女の、本当の強さを気付かせてあげるために……。

「前にも言ったが何度でも言う、ユウキはどんな困難にも立ち向かえる強さを持つてる！俺よりもずっと強い！そのぶつかっていく

信念があれば、きっと今回のことだって乗り越えられる！」

「キ、キリト……っ！」

「セブンは厳しいことを言うが、それはユウキに見込みがあるから言うんだ。本当に見込みがなかったらとっくに見切りをつけている」

密着してしまいうぐらいに距離を詰められ、鼻と鼻の先つちよがくつつきそうならいに顔を近づかれたユウキは、頬を真っ赤に染めながら彼の言葉を受け取っていた。

ボクは強くなかない、ボクだって悲しい現実から逃げようとしていただけだ。皆が言ってるような強さなんて全然持ち合わせてないよ。

……でもね、それでも……キリトがそう言ってくれたら、もう少し、もう少しだけ……自分を信じてみようかな。こんなボクを信じてくれるキリトの為に、自分を……もうちょっとだけ、信じてみようかな……。

「ありがとう、やっぱり優しいね……キリトは。アスナの言ってた通りだ……」

キリトからの精一杯の言葉を受け取ると、ユウキは自分の眼に溜まっていた涙を手でゴシゴシと拭い、気持ちを切り替えるように両頬を「パアン！」という音が鳴り響くぐらいの強さでひっぱたき、自身に喝を入れた。

気合を注入し直したユウキはキリトから少しだけ距離を置き、今度はニッコリ笑顔になり、いつもの明るく、活発なユウキへと戻っていった。

「本当にありがとう、キリト。ボク……もう少しだけ頑張ってみるね。ここで頑張らないと……キリトと永遠にお別れすることになっちゃう。ボク……それだけは絶対に嫌だ……！」

「ああ、俺もユウキとお別れなんて絶対に嫌だ！」

「うん、キリトとも約束したし、それにさ……、くよくよするなんてボクらしくないや!!」

眩しい笑顔を見せたユウキを、キリトまた力強く抱き締めていた。今の自分に来れることは、こうして彼女を元気づけて支えてあげることだ。歌も歌えなければ指導も出来ない、なら……こうやってあげられることをしていけばいい。

むしろこれは……自分にしか出来ない。今ユウキを支えられるのは自分しかいない。彼女の笑顔を守っていくためにも、絶対にライブを成功させる……!

「ああ……そうだな、ユウキはやっぱりこうでなくつちやあな……!」
「うん! ……それじゃ、戻ろつか。セブンにも……謝らないと……」
「そうだな……、とりあえず戻ろう、話はそれからだ」

一通り気持ちの整理がついた二人は翅を広げて、アルンの大空へと羽ばたき、転移門を目指してまっすぐ飛んでいった。ユウキは先程よりもいい表情をしていた。その顔を見たキリトも、自然とほころんでいた。

同日 午後15:30 新生アインクラッド第22層 湖畔エリア

「うう……セブン、やっぱり怒ってるだろうなあ……」

「大丈夫だ、その時は俺も一緒に怒られてやる」

「……でも悪いのはボクなんだし、ボクが謝らないと……」

二人はキリトのホームへと続いている湖畔のすぐ傍を歩いていた。転移門から徒歩で10分、空を飛ばば5分ほどで着くホームへの道を、足取り重く歩いていた。

どんな言い訳を並べようと、どんな理由があろうと、セブンのレッスンから逃げてしまったのは事実だ。すべての予定をキャンセルし、自分の命の為にここまでしてくれているセブンたちに対し、レッスンから逃げるなんて言語道断だ。失礼極まりない行為だ。何よりもずは彼女らに謝らないといけない。

「おかえりなさい、キリト君、ユウキちゃん」

「随分と時間がかかったな……」

気が付くと二人はキリトのホーム前に設置された仮ステージにたどり着いていた。そんな彼らを出迎えたのは先程まで厳しい態度を取り続けていたセブンとスメラギだった。

決して彼女らは自分に厳しくするために厳しくしていたわけではない。本当に自分のことを考えてくれていたからこそ、あのような態度をとっていたのだ。ならば自分はその気持ちに全力で答えないといけない。

ここで逃げてどうするんだ、全力でぶつかるのがうりじやなかったのか、逃げるな！　ぶつかれ……！

「あの……セブン、逃げ出して本当にごめんなさい。もう二度と逃げないから……最後までやり抜くから、もう一度、もう一度だけ、チャンス………くれないかな」

ユウキはばつが悪そうにしつつも、まっすぐにスメラギとセブンの目を見つめて言葉を並べていた。これからもつらいレッスンは続くだろう、逃げ出したくなる時もあるだろう、でも自分は絶対に逃げない。何があろうとも逃げない、その気持ちを言葉に込めて、二人に送った。

「もうつらいことから目を背けない、だから……もう一度、ボクにチャンスを下さい!!」

「俺からも……頼む!!」

一緒に頭をさげ、反省の気持ちを示した二人に対し、セブンは困ったような態度を取っていた。厳しくしすぎた自分にもこうなってしまうたことの責任があるのに、一方的にこうやって謝られてしまうと、なんだかやりづらいものがあつた。

「……はあ、こうなると私もやりづらくなっちゃうよ……」

「……え?」

セブンが「どうしよう、スメラギ君」という視線をスメラギに送ると、彼は「フツ」と鼻で笑い「セブンのしたいようにすればいいだろう」とアイコンタクトで返事を返した。

微妙に自分が謝りづらい状況になってしまった、いわゆるタイミン
グを逃したというやつだ。しかしうだうだしても話は前に進むこと
はない。微妙に言いづらいがセブンも意を決して二人に謝罪の気
持を伝えようとした。

「わ、私の方こそごめんなさい……。ユウキちゃんにちよつと厳しく
しすぎちゃったかもしれない……」

「セブン……?」

「ユウキちゃんの本当の命がかかってるから、ちよつと私も力入れ過
ぎてしまったたかもしれないの。……本当にごめんなさい」

「そ、そんな……セブンが謝ることないよ。ボクのためにしてくれ
たことなのに、それから逃げたのはボクなんだし……」

「そうだとしてもよ、ユウキちゃんは初めてなのに……あんなこと
言ってしまったって、本当にごめんね……」

「……俺からも謝罪する。侮辱するようなことを言っ
てしまい、申し訳ない……」

セブンに続いて、まさかのスメラギも頭を深々と下げ、ユウキに謝

罪をし始めた。気持ちに素直になれず、堅物だと思われていたスメラギが、まさかまさかの素直に謝っているのである。こればかりはユウキもキリトも目を丸くして驚いていた。

「あ……そんな、うう……ボクこうゆうの苦手だよー！ 二人ともお願いだから顔あげて！」

ユウキにそう言われると二人はゆっくりと顔を上げた。三人の間にはしばらく無言の時間が流れたが、その空気を断ち切るかのように、今度はキリトがずいずいと前へ出て、スメラギに頭を下げた。

「スメラギ、その……さつきは殴ったりして、悪かった……」

キリトから謝罪を受けると、スメラギは一瞬だけ驚いた顔を見せたが、すぐにいつものキザったらしい顔に戻り、いつものように口を開きだした。まさかまさかの、ここにいる四人が四人、全員謝罪するという、なんとも奇妙な現象が起きてしまっていた。

「……フツ、かまわんさ……あんな拳、常日頃からうけているセブンの駄々や癩癩に比べれ——」

「わ——ツ!!」

スメラギの話の途中でセブンが突如として割り込み、小さい身長で精一杯手を伸ばし、スメラギの口を塞ぐと、顔を真っ赤にして慌てて今の話をなかつたことにしようとしていた。

「なんでもない！ なんでもないの!! そんなことより……レツスンはこれからもビシバシいくんですからね！」

「……クスッ」

セブンの口調は相変わらず厳しいものであったが、顔と雰囲気までは厳しくなかった。変な緊張感と硬さが抜け出ていた気がした。キリトはこれならここから先はいいレツスンが出来そうだなと、思わず

笑みをこぼしていた。

「う……うん！　ありがとうセブン……改めて、よろしくお願いしま
す！」

「こちらこそよろしくね、ユウキちゃん……！」

この件については一応の一件落着となった。そしてキリトはふとセブンの言葉を思い出した。　”優しくすることだけが優しさではない”　確かにそうだ、時には厳しくしないといけない瞬間もやってくるだろう。

……しかしそれでもキリトは、その優しきは捨てることが出来ないであろう。何故なら、それがキリトの何よりの強さでもあるからだ。この厳しい世の中で一人ぐらい、心優しい少年がいてもいいではないだろうか。

少なくとも、この心優しい少年がいたからこそ、救われた者がいたのも事実だ。厳しくしなくても、優しい世界を作っていける、そう信じていきたいものだ。

「よし！　それじゃーさっきの続きからやるよー！」

「はい！　セブン先生！」

T o b e c o n t i n u e d

第24話く前へ前へく

西暦2026年2月2日月曜日 午後16:30 新生アイコン
ラッド第22層 湖畔エリア

「ううくん……」

「むう……」

「うーん……?」

「えっと、まだダメかな……」

最初の曲を歌い終わったユウキが、出来はどうかとセブン、レイン、スメラギの三人に評価を求めていた。あれからユウキはものすごい特訓に特訓を重ね、先程まで素人だったとは思えないほどの目覚しい成長を見せていた。

声の出し方等のボイストレーニングをおさらいしながらの歌のレッスンは、ユウキ自信のモチベーションの高さも相まって目覚しい成果を上げていた。

が、しかし……ここまで上達したにも関わらず、ユウキの歌声を聞いた三人は揃いも揃って首をかしげていた。

「うん、ものすごくよくなったとは思うよ? 最初に比べると全然いいと思う。でも何だろう? ちょっとだけ違和感があるの、ユウキちゃんの歌声」

「確かにそうなんだよね、何だろうね……?」

セブンとレインは姉妹仲良く左右対称、シンメトリカルに首をかしげて、その歌声の違和感に悩んでいた。確かに上手いがどこかおかしい、まるで喉に引っかかった魚の小骨みたいに違和感を覚えていた。

「素人の俺でもユウキの歌が上達しているのは……すごい分かる。こ

ここまできてもまだ駄目なのか？ セブン」

キリトに声をかけられるも、セブンは未だ違和感の正体を探っていた。もしユウキの歌声で学生の合唱コンクール等に出ていたら、かなりの上位に食い込むレベルだろう。しかしプロとして、ファンに支えてもらおうとなるとまだ足りない。決定的な何かが足りなかった。

「……………」

腕を組みながらスメラギも違和感の正体について考え込んでいた。普通のカラオケで歌っても部屋が静かになるぐらい上手く、宴会などで披露すれば間違いなく場は盛り上がることも間違いなしのユウキの歌声の引っかかりに、あと少しで気付きそうな感じであった。

「…………む、なるほどな、そういうことか…………」

「何か気付いたのか？ スメラギ」

レインやセブン、歌い手とは別の観点から思考を巡らせていたスメラギが、ユウキの歌声の違和感の正体に気付いたようだった。スメラギ自信は音痴なのだが、歌声を聴く耳だけは、長いあいだレインやセブンたちのライブに同行していたこともあり、感覚が研ぎ澄まされていたのだ。

「ああ、多分間違っただけなら……これで彼女の歌声は化ける、いい意味でな…………」

「ふえ？」

ユウキはキョトンとした表情でキリト達を見ていた。一体何の話をしているんだろう？ ボクの歌声の違和感って何なんだろう？

確かにまだ全然セブンたちには及ばないけど、それとは別に何か変なところがあるのだろうか？

「ユウキ、すまんがもう一度Aメロだけ歌ってみせてくれないか？」
「え？ あ……う、うん。いいよ？」

ユウキがスメラギからの要請を承諾すると、再び楽曲がスピーカーから流れ始めた。曲の前奏に合わせてユウキが体でリズムを作り、歌い出しのタイミングに合わせてマイクを口に近づけ、歌唱を始めた。

「ずっと ひかりのなか きのう まではなかった あしあとを たどってきたほど」

ユウキの歌声は素人のキリトから聞いてみても、プロと肩を並べることが出来るかもしれないものであった。歌唱の強弱にメリハリが出てるし、しっかり力強く歌えている。やがて曲のAメロからBメロに移るであろうタイミングで、スメラギが演奏を止めると楽器班に指示を送った。

すると演奏はピタツと止まった。セブンとレインはあれだけで分かったの？といった表情でスメラギとユウキを交互に見ていた。一方で歌を途中で中断されたユウキの頭には？マークが浮かんでいた。

「スメラギ、ホントに分かったのか？」

「ああ、多分間違いない。俺の想像が正しければ、まだユウキの歌声は ” 棒読み ” の域を出ていないとみる」

「え……ぼ、棒読みって……あんなに上達してるんだぞ？ あれで棒読みだったのか!？」

スメラギの言ったことにキリトは驚きの表情を隠せなかった。流石にプロの目からしたらまだまだかもしれないが、のど自慢等に出場すれば会場が拍手喝采になること間違い無しの歌唱力だ。そして歌ってみたの動画で投稿すればかなりの再生数を稼げるだろう。

その歌声がまだ棒読みの域を出ていないというではないか。だと

したらそれは一体何故なのだろうか？　しかしスメラギの言ったことに、レインとセブンは漸く納得がいった様子だった。音感がある二人には、ユウキの歌声の違和感の正体を突き止めたようだ。

「ああ……なるほどね。スメラギ君の言ってること、分かったかも」

「私も七色と同じかな？　でもこれなら改善出来ると思うよ？」

「……二人共、どういうことだ？」

「んーつとね、ここじゃちよつと説明しにくいかな、ちよつと早いけど休憩にして屋内にいこつか。そこで説明するから」

キリトは自分だけおいてけぼりを食らっており、何で三人が納得しているのかもわからなかった。歌とは全く縁がない生活をしていたこともあるが、いい加減人並みには歌を歌えるようにもなってもいいかもしれないと思い始めていた。

少し早いがレッスンが一区切りついたこともあり、四人はキリトのホームの屋内へと足を運んでいった。疲労の様子を見せていたユウキもステージからぴよんと飛び降りると、両手を左右に広げてとてと家の中へと向かっていった。

「これは……もしかしたらとんでもないかもね……」

セブンはただ一人、ユウキから歌の才能を見出していた。しかしその才能は自分の想像を大きく超えるものだったのかもしれないと、少しだけ焦りの表情も見せていた。そんなセブンの気持ちを汲み取ったのか、背後からスメラギが近づき、

「ユウキに抜かされるかもしれない、そう思ってるのではないか？」

「自分のライバルになるかもしれない子を……育てようとしているんだね、私……」

「……不服か？」

「ううん、むしろ……燃えてきた、かな」

「フウ、そうか……」

この年にしてアイドル界のトップを走っているセブンも、新たなライバルが登場するかもしれないことに、焦りもそうだが闘争心のようなものも燃やしていた。

誰にでもフレンドリーで活発で明るく、曲がったことが嫌いで歌も上手いとなると、向かうところ敵なしのアイドルへと成長する可能性が高い。しかし、ユウキはアイドルになるためにレッスンを重ねているわけではない。

あくまで自分の病気を治すためだ。そのために頑張つて歌を練習しているに過ぎない。だからセブンのライバルになることはまず有り得ないのだが……、それでもあまりある才能を目の当たりにすると、人間は自然と焦つたり対抗心を燃やしたりしてしまうものなのだ。

「お疲れ様ユウキ、随分ご機嫌だな？」

「うん！ さつきまでへたつぴだったのに……どんどん上手くなっていくのが実感できて楽しいんだ♪」

上達しているのを自分でも感じ取っているユウキはすこぶるご機嫌の様子だ。昼頃のしよぼくれようが嘘のようである。ユウキの素質と才能もそうなのだろうが、おそらく何よりは教えてくれる先生方が優秀なこともあるだろう。何しろプロが教えているのだから、これ以上の先生はいないだろう。

「何か話したいこともあるみたいだし、とつとつと休憩に入っちゃおう」
「あいー！ 了解！」

のホーム屋内

モダンな雰囲気漂うキリトのホームのリビングの真つ赤なソファに、五人がテーブルを囲むようにしてくつろいでいた。差し入れの飲み物が出され、五人それぞれつかの間の休息に身を投じていた。

「ユウキちゃん、最初に比べたらものすごく上手くなったよー！ 一日目でここまで上達するなんてすごいよ！」

レインがユウキに近寄り、尊敬のまなざしを送りながら話しかけていた。ストリートライブやバイト先の店で歌ってパフォーマンズをしていた経験があることから、ユウキの気持ちがわかるところがあるのだろう。

「んーん、セブンとスメラギのお陰だよ！ へたっぴなボクをここまです達させてくれたんだから！ ボク……最初は恥ずかしくてつかったけど……今はすつごく楽しいよ！」

ユウキは差し入れのドリンクを片手に持ちながら溢れんばかりの笑顔を見せていた。ここまでモチベーションを上げてもらえればこれからのレッスンは大丈夫そうだ。

レッスンの成果も出ていることもあり、この調子なら本番当日まで仕上がるだろう。急ごしらえ感は否めないが、セブンが太鼓判を押しているのだ。きつと大丈夫だろう。

「さて……本題に入っているかい？」

「ああそういえばそうだったな。それでスメラギ、一体どうしたらいいんだ？ これ以上ユウキが上達するには……」

キリトがそう尋ねると、自然と全員の視線がスメラギに集まっていた。セブンとレインは感覚でわかっているが、キリトとユウキに説明するには、理屈の方面からでも納得いくように説明しなくてはならな

い。

スメラギは尋ねられると左手でメニューを開き、執筆スキルを使用して画用紙とペンをストレージからオブジェクト化して、何やら文字のようなものを書き始めた。

30秒ほど経過して、何かを書き終えたのか、スメラギは出来上がった紙面をユウキに差し出した。

「出来たぞ、ユウキ……受け取れ」

「え？ あ、うん……」

ユウキは差し出された紙面を受け取ると、そこに書かれている文字に早速目を通していった。その文字はユウキにとっても記憶に新しく、最初に歌った曲と、レツスンを重ねているもう一つの曲の歌詞そのものであった。

「えつと……これ、歌詞だよね？」

「ああ、貴様にソロで歌ってもらう二曲の歌詞がかかっている」

「歌詞だって……？ どういうことだ？ スメラギ」

「き、貴様というやつは……剣の腕は確かなのに音楽に関してはとんとん無頓着な輩なのだ……」

「う……、よ、余計なお世話だよ……」

「まあ……キリトのゲーム脳はともかくとしてさ、この歌詞がどうかしたの？」

さりげなくキリトに毒を吐きながら、ユウキが先ほどの件についてスメラギに尋ねた。スメラギは「うむ」と返事をしつつユウキから歌詞を受け取ると、それをテーブルの上に広げて説明を始めた。

「ユウキ、貴様の才能は凄まじいものがある。磨けばとんでもないスターになる可能性も秘めている。嘘ではない、しかしユウキの歌声にはまだこもっていないものがある」

「ボクの歌にこもっていないもの、何だろ……？」

「またもや全員の視線がスメラギに集まっていた。一体どのような解答をするのだろうか？ 普段あまり口を開くことがないスメラギからどのような答えが飛び出すか、全員食い入るように待ち構えていた。」

「気持ちがかもっていない、それが貴様の歌唱に足りないものだ」

「な……気持ちだあ!？」

スメラギからの回答に、キリトは驚きの表情でソファから立ち上がり、声を裏返して信じられないような様子を見せていた。まさかまさかこんなすましたスメラギの口から、こんなにもロマンティックなセリフが飛び出すとは思わなかったのである。結構現実的な男だばかり思っていたのだ。

「茶化しているわけではないぞ、キリトよ……」

「い、いや別に俺も茶化してると思ってるわけじゃないけど……、どういふことなんだよ……」

「ボ、ボクも……一応気持ちは込めて歌ってるつもりんだけど……」
「そうだな、分かりやすく言ってやろう。まず貴様の歌だが、あれは歌であって歌ではない、言ってしまうえば……歌詞の読み上げとも言える」

「か、歌詞の……」

「読み上げ……？」

ユウキの歌は歌詞の読み上げ、それが違和感の正体だとスメラギは言う。一体どういふことなのだろう？ 相変わらずおいてけぼりを食らっているキリトは続いてスメラギに疑問をぶつけてみた。

「あのキレイな歌声が……ただの歌詞の読み上げだっていうのかよ

「……？」

「ああそうだ、ユウキは歌詞を曲のリズムにのって読み上げているに過ぎない、だから棒読みの感じが抜けずに違和感として聞こえていたんだ」

歌というのは奇妙なもので、音程を合わせてリズムよく声を出していると、形の良し悪しはあってもちゃんと歌として聞こえてしまうものなのだ。

しかし、プロとして人を感動させるにはそれだけでは足りなさすぎる。いくらトレーニングを重ね地力をあげたとしても、人を感動させるには歌手と歌が完全に一体化する必要がある。

スメラギはユウキに足りないものはそれだと言っていたのだ。つまりは、今回歌う曲に対する理解がまだ足りない、そういうことだった。

「スメラギ君はこれでも私たちのライブにずっと付き合ってきたからね、音痴だけど音感だけは確かなものなのよ」

「……セブン、それを言われると俺も少し傷つくぞ」

「あらそう？ ごめんなさいね」

「それで、その棒読みを解消するためには……どうしたらいいんだ？ スメラギ」

「今は答えることは出来ない、というより……今日はもうこれ以上の上達は見込めないだろう。一度解散して、また明日から続きをやったほうがいいだろう」

「え、ええ!? ちょ、ちよつと待ってよ！ 折角ここまで上手くなってきたのに！ これからがいいところなんじゃないの!?!」

ユウキはソファから立ち上がり、非常に残念そうに声を荒げた。その方法を知ればもつと上手になれるかもしれないのに……と思っただけに余計である。

「んー、そうだねえ……。ユウキちゃん、多分それは……。ユウキちゃん自身で見つけた方がいいんじゃないかなって思うんだ」

「ボ、ボク自身が……。？」

「ここで答えを教えちゃうのは簡単なんだけど、それじゃあ頭で理解しただけで、感覚で理解していないでしょ？ それじゃあだめなの」
「う、うう……。そ、そうなのかな……。？」

「今日は朝からかなり頑張ったよ、明日のこともあるし今日は一旦解散にしよう！」

スメラギに続きセブンも解散を切り出した、どうやら今日はもう終わりのようだ。ユウキは若干不服そうだが、一気に一日で詰め込み過ぎててもあとから大変になる。ライブ本番の土曜日にはまだ少しだけだが余裕がある。一日一日じっくりやっていけば間に合うはずだ。

何より一日目だというのにユウキは頑張ったと思う。今日はもうゆっくり休むべきなのだ。

「ユウキ、今日はもう終わりにしようぜ」

「ぶー……。はあくい……。？」

キリトにまでそう言われるとなると、ユウキも流石に首を縦に振るしかなかった。ボクはまだいける、もっと頑張れる。

そう思っていただけに残念な結果となってしまった。

「ユウキ、その紙はくれてやる。明日のレッスンの時間までにその紙に書かれている意味と向き合え。そうすれば、更に上に行けるだろう」

「向き合う……。？」

ユウキはスメラギから受け取った、歌詞が書かれた紙面を穴のあくほど見つめていた。ここに書かれていることを感覚で理解できれば、

更にユウキの歌は上達するという。しかしそれは簡単そうに見えて、簡単なのではないのかもしれない。

ユウキが考えを巡らせてる中、セブンがピヨンとソファから飛び降り、大きく伸びをするとこの場にいる全員に解散を言い伝えた。

「それじゃあ私たちはログアウトするね」

「あ、ああ……わかったよ。三人とも、忙しい中……今日は本当にサンキュな」

「別にかまわん、俺はセブンに付き合っているだけだからな」

「……ありがとね、スメラギ……」

「フツ、本当に感謝しているのなら、明日までにその宿題を片付けてくるのだな」

集まったメンバーがそれぞれ別れの挨拶を済ませると、セブンら先生組は左手でメニューを操作して、そそくさとログアウトしていった。三人のアバターが仮想世界から青白く光を放って消えていくと、途端にキリトのホームの中は静寂に包まれていった。

いろいろなトラブルもあったが、初日のレッスンはとりあえずの終わりを迎えた。初めてにしてはかなりの手応えも感じていたし、かなり充実した一日目を迎えられたと言えるだろう。ユウキ本人はまだ歌いたがっていたが、いざレッスンを終わってみると自分が大分疲れていることに気がついていった。

「ふはー……、疲れたよー……」

ユウキは疲労の声を漏らすとソファの背もたれに思いつきり背中を伸ばし、体をリラックスさせていた。ほぼ半日ずっと歌っていたのだから、疲れてくるのも当然であった。喉にダメージがきていないことだけは、仮想空間様々である。

「お疲れ様ユウキ、はいこれ」

キリトが白いカップに入ったブラウンの飲み物を差し出した。白い湯気がほんのり甘いミルクの香りとともにリビングに立ち上っていた。

「わあ！ ココアだ！ ありがとうキリトー！」

ユウキはキリトから差し入れのココアを受け取ると目を輝かせてカップに口をつけた。熱々ほかほかの甘いココアは、レッスンで疲れていたユウキを癒すには十分だった。

「美味しいか？ ユウキ」

「うん、すっごく美味しいよ！ 疲れたあとは甘いモノに限るねー！」

ユウキはご機嫌な様子でココアを口にしていった。一仕事終えたあとの一杯という感覚だろうか、しかしそれよりキリトからもらったということが何より嬉しいのだろう。そして歌も上達の方向にあり、いいことづくめであった。

「でも諦めないでよかったあ、ボクもあんなに上達できるとは思わなかったよー！」

「ああ、すごい上達っぷりだったぞ。俺には音感がないから、そこまで詳しいことは言えないんだが……」

「えへへ……ありがとう♪」

「どういたしまして、しかし……問題はここからなんだよな……」

キリトはココアを一度口に付け、スメラギが書き残していた紙面に目を通していった。紙面には整った綺麗な字体でユウキが歌う予定の歌詞が書き綴られていた。

「歌詞と向き合う、か……スメラギのやつ、相変わらずキザなことを言

う奴だな……」

「どうということなんだろうねえー……」

キリトとユウキを顔をそろえてスメラギから出された宿題について考えていた。歌詞と向き合う、一体どうということなのだろうか？

一字一句の意味を噛みしめて歌うとかだろうか？

いろんな考えを浮かばせていたが、いくら考えても音楽に疎い二人では解答を知ることが出来なかった。その姿はまるで学校から出された難しい宿題を二人仲良く解いているような光景にも思えた。

「うー……だめだ。まったくわからん……哲学とかは苦手なんだよ……」

「ボクも……、勉強は得意んだけどこういのはちよつと……」

スメラギから出された宿題に頭を抱えていた二人だったが、同時に今感じた感覚に奇妙な居心地の良さを覚えていた。学校の授業で苦手な科目の宿題を突きつけられたような、そのときと似たような感覚だった。

「なんかボク、学校の授業思い出しちゃった、まだH I Vキャリアだつてことがばれる前の、必死で勉強していたときの……」

「俺もだ。苦手な教科の宿題を必死で解いている気分だったよ……」

「あは！ キリトもそうなんだ！」

「理系は得意なんだけどな、文系はちよつと苦手……というか、ちよつとな」

「へー、そうなんだ……」

両手でココアの入ったカップを持ちながら、ユウキは自分が無事退院出来たあとのこと、ふと考えていた。

ボクが退院出来たらその後はどうなるんだろう？ どこかに引き取られるのかな？ だとしたらあの叔母さんの所だけは絶対にいや

だ。

いや、どこにいくにしても……ボク、それからどうしたらいいんだろう？ 出来たら退院後もキリトと……、和人とずっと一緒にいいな。

ユウキの考えていることはもつともであった。まずは病気を治すのに専念することもそうなのだが、退院後に彼女がどこにいくというのは確かな問題だ。

既に和人ら桐ヶ谷家の間では木綿季を養子に迎え入れることが決定していたが、肝心の本人はまだその事実を知らないのだ。

しかしどこに行くとしても、木綿季自身が退院後に行ってみたくところが、ただ一つあった。長い入院生活を送り、やめざるを得なくなった、あの場所へ……。

「ねえキリト、ボク……キリトと学校行ってみたい」

「が、学校……？ えっとそれならこの前のプローブで……もう一回行くか？」

「んーん、違うの。行きたいってのは……現実の体でって意味でさ……」

「げ、現実で……？」

「ってごめんね、無理言つて。今のは冗談、気にしないで、キリト」

ユウキは冗談だというが、キリトは今の言葉がユウキの本心だということに気付いていた。そう、ユウキは学校に行きたいのだ。皆と一緒に勉強して、休み時間に他愛のない話に花を咲かせて、部活やバイトに精を出して、普通の学生生活を送ってみたかったのだ。

「ボクの学力が足りないことはよくわかってるし、その前にまず病気を直さないとだしね……」

「そんなことない、行けるさ、学校」

「……うん、ありがとうキリト。でもいいんだ」

「いや、行ける、本当に行けるんだ、学校」

「え……？」

単なる気休めだと思ったキリトの言葉は自信に満ち溢れていた。そう、キリトにはユウキの学力でも高校に入学できるすべを知っている、定時制の学校等ではなく、全寮制で通える術を知っているのだ。言わずもがな、彼の通っているSAO帰還者学校のことである。この学校はSAOに囚われた子供たちの為に設けられた、SAO被害者支援のための学園施設なのだ。そこでユウキを入学させようと、そういうことだ。

「俺の通っている学校が、SAOに囚われた子供たちの為に設けられた学校だつてことは……知ってるよな？」

「え？ う、うん。明日奈たちも通ってるんだよね？」

「ああ、んでな、その学校が……SAO被害者だけじゃなく、様々な理由で学校に通えなくて困っている生徒も、支援することになったんだ」

「……え？」

「色々準備とかもあつて、新入学生が迎え入れられるのは再来年度からになるんだけど……」

「え、えつと、それは……つまり……」

キリトは飲んでいたココアのカップをテーブルの上に置くと、上半身をユウキのいる方に向け、ユウキの両手を包むようにしてがっちり握って、思いの丈を話し始めた。

「ユウキも……学校に通うことが出来るんだ。それも俺やアスナと同じ学校に……！」

「え……ボ、ボクが……？」

「ああ、嘘じゃない。だから……一緒に学校に行こう！」

「……ボクが、学校に……」

夢みたいだ、ずっと病院生活だったこのボクが学校に通えるなんて、それも……大好きなキリトと、和人と同じ学校に通えるなんて……。

そう思うと、ユウキは自分の心が満たされていくのを感じていた。希望に満ち溢れ、未来に向かって走っていけるだけのパワーが生まれてくるような感覚がした。

「あ、あれ？ でもキリトってもう入学してるよね？」

「そうだな、でも俺、お前の病気が治るまで今学期は休学するから、きつと今年度は留年だ」

「あ……、えつと……ごめんね、キリト……」

「いや違うんだ、責めてるわけじゃないんだ。それで……ユウキが入学することで、ちよつと俺に考えてることがあるんだけど……」

「……なあに？ 考えてることって」

キリトは顔をユウキから逸らし、ちよつとだけ恥ずかしそうに頬を人差し指でポリポリかくと、一旦ひと呼吸置き、心の準備を済ませてから、ユウキに想いを伝えようとした。

「ユウキさえよければいいんだ。この先無事に病気が治ったら、俺……来年度も休学して、お前のリハビリに付き合おうと考えてるんだ」

「え……？」

「多分、リハビリでちゃんと体を動かせるようになるまで、かなり長い期間が必要になると思うんだ」

「……え、えと、それは……そうかもなんだけど……」

「どうせ俺たちSAOサイバーは勉強が数年遅れてるんだ。今更一年や二年増えたってどうってことないさ」

「……………」

ユウキは正直言って、キリトの口から次から次に出る言葉に理解が

追いついていなかった。ボクが学校に通うことが出来るという事実だけでも驚きだというのに、更にキリトは現実世界でボクのリハビリを手伝ってくれるという。

それも今通っている学校を休学してまで、正直もうキリトに頭が上がらない。病気を治そうとしてくれるだけでも感謝の気持ちしかないのに、自分の生活を犠牲にしてまでボクのことを考えてくれるなんて、いくらなんでもやりすぎではないだろうか……？

「キリトの言ってることさ、ボク……すつごく嬉しいんだけど、ホントに……いいの？」

「……ああ、俺は構わない。ユウキと一緒にいられるんだったら、俺は何だってするぞ」

「ものすつごく迷惑、かけちやうよ……？」

「構うもんか、むしろどんどん迷惑かけてくれ」

「……キリト……」

キリトはどうして、ボクにここまで尽くしてくれるんだろう。確かにキリトからの気持ちは嬉しい、嬉しすぎるぐらいだ。でもボクばかりここまでしてもらっていいのだろうか？

……、キリト……ボク、ボク……嬉しすぎて……泣いちやうよ……、キリト……ボク、ボク……。

「キリト……ッ」

「わわ、ど、どうした……」

ユウキはキリトからの気持ちが嬉しすぎるあまり、たまらず彼の胸に飛び込んでいた。キリトもそれを拒否するはずがなく、優しくユウキを抱き止め、彼女のぬくもりを体で感じ取っていた。

「ホントにありがと、大好き……」

「……ああ、俺も……ユウキが大好きだ……」

「学校に行くことになったら……よろしくね」

「ああ、ユウキが通ってくれば、絶対に楽しくなる……」

「う、うん。ならボク、レッスンを頑張る！ 一生懸命練習して、絶対にライブを成功させるね……！」

「ああ！ その意気だ……！」

ユウキは新たな目標を見つけだすことが出来た。憧れていた学校へ通うこと、それも仮想世界越ではなく、現実世界で直接通うという。

そして何より大好きなキリトと一緒に通うことが出来る。そんな明るい未来を手に入れるためにも、今は病気を治すことに専念しなくては。

そのために、今回のライブを絶対に成功させる。たくさん練習して、もっともつと上手になって、絶対に成功させて……現実世界に……帰るんだ！

明るく照らされた希望という光に向かい、ユウキはただただひたすらに、前へ前へと走り続けていった。

第25話く対面く

西暦2026年2月2日(月) 午後17:00 新生アインクラツ
ド第22層キリトのホーム

「ん、もうこんな時間か……」

キリトが表示時刻を確認すると時刻は既に17時を回っていた。いつもならすでに帰路についている時刻だ。

「キリト……もう帰っちゃうの……?」

「いや……どうしよっかな……」

ユウキは目を丸くして驚いた、いつもならばこれぐらいの時間にキリトは帰ってしまう。しかし今までとは違う返答に少しだけ困惑していた。

「え、どうしよっかって……?」

「んと……なあユウキ、ここの病院って面会者が宿泊することって……出来るのかな?」

ユウキはキリトの問いかけに理解が追い付いていなかったが、少しずつ落ち着いていくとその問いに答えた。

「えっあ、ええつと……主治医の先生の許可をもらってれば、確か泊まれたと思うけど……」

「そうか、じゃあ決まりだな」

「え? キリト……も、もしかして……」

「ああ、どうせ学校は休みだからな、往復のガソリン代も馬鹿にならないし、しばらく泊まってくことに決めたよ」

「ええつ!? あの……いいの?」

「俺は全然構わないぞ。それとも迷惑だったか……?」

ユウキは両手を前に掲げ首を左右にぶんぶんと回し、そんなことないと返事を返した。キリトがいてくれるのが迷惑? とんでもない、むしろすごく嬉しい、嬉しくてたまらない。まさかのお泊まりサプライズにユウキはものすごく心が暖かくなってくるのを感じていた。

「ううん、そんなことないよ！ むしろ……ボクすつごく嬉しい！」

「これならすぐに現実でも会えるからな、ずつと一緒だぞ」

「わーいやったー！ キリトとずーつと一緒だー！」

ユウキはそれを聞くと両手を上にかかげ嬉しそうに飛び跳ねて喜んだ。そのはずみで一緒に座っている赤いソファアのクッション部分が、バインバインと音を立てながら上限に揺れていた。

「そうと決まれば先生に許可を得ないとだな。家にも連絡を入れないといけないし、一度現実世界に帰るよ」

「あ、うん、そうだね」

キリトとユウキは互いの視線を合わせニッコリ笑うと手を繋ぎ、左手でメニューを操作して同時にログアウトし、現実世界に帰還していった。

毎度毎度の光景であるがそのせいでログイン直後ユウキに即発見されている。しかしキリトはそんな恒例行事も気に入っていた。すこしかましいぐらいが丁度いい、これぐらい騒がしさが、俺は気に入っている。そう言いたげであった。

同日午後17：15 神奈川県横浜市金沢区横浜港北総合病院

「ん……戻ったか」

和人は意識を仮想世界から現実世界へ戻すと、ゆつくりと上体を起こし、思いつきり伸びをして腰を回し、肩をポキッポキッと鳴らすとアミユスフィアを取り外し、腰を上げた。

「さてと、先生とまずは話をしないとだな……」

和人が病院に泊まるためには、木綿季の主治医である倉橋から直接宿泊の許可をもらわなければならない。よほどの理由がない限り断られることはないと思うが、無断で泊まるわけにもいかず、和人は倉橋の姿を探していた。

「おや、おかえりなさい和人君。今日は随分と長い間一緒にいたみた

いすね」

ゲストルームを出たのも束の間、探すまでもなく倉橋は手元のパネルを操作し、木綿季の健康状態をチェックしている状態であった。

倉橋は手元のファイルとパネルの表示を真剣な表情で交互に見ながら、和人を見つけるやいなや、にこやかな笑顔を作って和人を出迎えた。

「只今戻りました倉橋先生。木綿季のライブの特訓に付き合ってたんです。ていつても……俺はただ見てただけですけどね」

「そうですね、木綿季君も頑張ってるんですね……」

「ええ、木綿季はすごいですよ、どんどん歌が上達していつてます。先生にも聞かせてあげたいですよ」

「それは私も是非聞いてみたいですね」

倉橋が和人に向けた笑顔は実に優しく、暖かさに溢れていた。本当に医師の顔をしている時以外は優しい人だと思う。年は三十代ぐらいだろうか。

「ご家族……恐らく息子さんか娘さんの一人や二人はいてもおかしくない出で立ちだ。」

「今日はもう帰られるんですか?」

「あ、そのことなんですけど、ここの病院って面会者が泊まることは出来ますか?」

「え、ええ……主治医の許可をとれていれば宿泊は可能です。あとは病院側からご家族の方に患者さんへの付き添いをお願いする場合がありますね……って和人君……それを聞いてくるということ……」

「はい、木綿季のライブが終わるまで……木綿季の側にしようと思います」

「な、なんと……それはこちら側としても願ってもないことですが……よろしいのですか?」

「こっちは大丈夫です、俺の方こそ……むしろご迷惑をかけるかもしれません……」

倉橋はその言葉を聞くとさらに温かい顔になった、本当に木綿季が大事なのだろう、まるで本当の娘のように思っている。

「いえそんな……和人君、ありがとうございます。木綿季君も……きつと喜びます」

「俺が好きでやっていることですよ、俺は……木綿季が喜ぶのならそれで……」

「……ええ、そうですね……」

倉橋は感慨深そうにメデイキユボイドに身を纏っている木綿季を見つめていた。うつすらと……瞳に涙が浮かんでいるような気がした。

「幸せ者ですね……木綿季君は、和人君と出会えて……」

倉橋は和人から見えない角度で涙を拭うと、体の向きを戻し、和人に宿泊についての説明を始めた。

「和人君、宿泊についてですが……隣のアミユスフィアの部屋を使ってください、寝具は簡素ではありますがこちらで用意させていただきます」

「はい、ありがとうございます」

「あと……病院なので消灯時間だけは厳守してくださいね。それ以外の時間でしたら自由に行動していただいて構いませんので」

「あ……はい。何から何まで……本当にありがとうございます」

「いえいえ、あと食事と着替えに関しましては流石にこちらでは用意が出来ませんので、ご自分で調達をお願いします。手続きの書類はあとでこちらにお持ちします。浴室などは従業員が使っているものを使用していただけいて構いませんので」

和人は説明を聞いた後「分かりました」と返事をした。

それにしても外客用の寝具まで用意して風呂まで提供してくれるとは本当にありがたい。滅多にこういうことはないのだろうが、外部の人間にとっても不都合にならないようにちゃんと管理されている。

「あとこれは……私からの提案なのですが、もし和人君さえ良ければ、木綿季君のところに遊びに行ってみませんか？」

「……は、はい？」

「言葉通りの意味ですよ。何も無菌室に直に入っていくということではありません。隣の部屋のアミユスフィアを使うのです」

「アミユスフィア、ALOでユウキのホームか何かに行くことで

すか……?」

「それも違いますよ、隣のアミユスフィアはALOもインストールされていますが、本来は私の木綿季君への面会用に用意したものですよ」

「え……つとこういうことは……」

「ええ、仮想世界の木綿季君のプライベートルームに直接入ることが出来ます」

木綿季のいる場所に直接いけることを意識した和人は赤面してしまつた。

仮想世界とはいえ女の子の部屋に直に上がりこもうというのだから当然の反応だ。過去に明日奈に家に招待されたこともあるが、あの時とはまた違うような、別の意味でドキドキしてしまつていた。

「まあ無理にとは言いませんよ? でも遊びにいつてあげれば木綿季君は喜ぶと思います」

「そ……そうですね、考えておきます」

和人がもじもじしながら、病院の床を眺めていると、いいのか悪いのかわからないタイミングで木綿季がスピーカーから声を出した。

『……んく……あれ? 倉橋先生と……和人! 何の話をしてるの?』

「よう木綿季、別に大した話じゃあないんだ」

「おかえりなさい木綿季君、今日は随分と長くあちら側に行つてたんですね。何やら……歌の特訓をしていたとか」

『そうなんですよ! 最初はてんでダメだったんですけど……何回も歌つてるうちに少しずつ上達してきて……どんどん上手くなつていくのがわかつてきて、今はすつごく楽しいんですよ!』

倉橋から声をかけられた木綿季はすこぶる嬉しそうに、今日あった出来事を明るいついで話しかけた。そのせいか、メデイキュボイドを身にまとつていゝる木綿季の現実の顔も、なんだか気のせいかな少しだけ微笑んでいるように見える、そんな気がした。

「それはよかったです。今度は非……木綿季君の歌声を聞かせてほしいです」

「先生、その件については今度の土曜日に、インターネット配信でライブの様子が中継されるはずです。病院のパソコンでも見れると思うので、是非見てあげてください」

病院で木綿季の勇姿を目に焼き付けることが出来る事実を知った倉橋は、驚きの表情から笑顔に代わり「はい、是非そうさせてもらいますよ」と肯定的な返事を返した。

『ホント!? じゃあボクもつと上手にならなくちゃ……!』

木綿季はまるで学芸会を前に頑張る子供のようにやる気の炎を燃え上がらせていた。ボクのかっこいいところを、輝いているところをお父さんに見てもらうんだ、そんな心境だった。

『そうだな……そのためにも明日からまた頑張らないとな……』

その日の無菌室の面会室は、明るい話題と雰囲気絶えず包まれていた。

その後も微笑ましい他愛のない話が続き、やがて時間が経つと倉橋仕事のためか「後程また様子を見に来ます」と言い残し、退出していった。

面会室には和人と木綿季の二人だけの状況となり、倉橋が立ち去ったことにより、一瞬の静寂が流れた。

遠くの院内の廊下を誰かが歩いている音と、木綿季のいる無菌室から僅かに聞こえてくる機械の音だけが和人の耳に響いていた。

『あつそうだ、和人……今日はその……泊まってくの?』

木綿季が細々とした声で和人に話しかける。本当に今日は泊まってくのかな、泊まっていてくれたら嬉しいな、そう願いながら。「そんな心配そうな顔をするな、倉橋先生の許可はもらった……大丈夫だ。しばらく厄介になるよ」

和人が爽やかな笑顔で木綿季に返事を返すと、木綿季はぱあつと明るくなり、声のトーンを上げ嬉しそうに話し出した。

『ホント!? やった〜! 和人とお泊りだ〜!』

「ふふふ、嬉しそうだな……木綿季」

『うん! だって和人と一緒だもん!』

和人と一緒に過ごす木綿季は本当に嬉しそうだ。こここのところ木

綿季にとって嬉しいことや楽しいことの毎日が続いている。以前の
ように終末期医療をただひたすら続けていた時期とは違い、生きるた
めの希望に向かつて毎日を楽しんで生きていく。

その毎日は、木綿季の体にも少しずつではあるが確実にいい影響を
与えていた。

『ねえ和人、今日はこれからどうするの？』

「そうだなあ……とりあえず食料を調達しないとだな。簡単な上着と
下着も買ってこないよ、流石にずっとこの服のままはいかん」

『そっか、んじやあちよつとの間お別れだね』

「何言ってるんだよ、少し買い出しに行つて来るだけだ。30分ぐら
いで戻る」

『うん……そうだね、んじやあボク、待ってる』

「おう、なるべく早く早くパッと済ませてくるからな」

『はあ〜い！ 行ってらっしゃい和人！』

同日午後17:20 横浜港北総合病院駐車場前

「まず母さんたちに連絡しないと……」

病院を出た和人はポケットからスマホを取り出し、電源を入れると
自宅へを電話を掛けた。スマホを操作して通話アプリを起動させる
と、自宅への番号をタップし、スピーカーに耳をあてがった。

やがて「プルルル」という呼び出し音が聞こえると「ガチャッ」と
いう音とともに聴き慣れた声がスピーカーの向こうから聞こえてき
た。

『はい、桐ヶ谷です』

電話に出たのは和人の妹、直葉だった。直葉は和人と同じ高校一年
で部活にも所属してるのだがこの時期は無く、自宅に帰っていた。

「あ……もしもスグか？ 俺だ、和人だ」

『あれ？ お兄ちゃん……？ どうしたの電話なんかよこして……い

つもは黙って帰ってくるのに』

「ああ……そのことなんだが、俺……今日から病院に泊まることにしたんだ。先生の許可はもらっている」

『ええ!?……突然だなあ、今お母さんと代わるからちよつとまってね』
電話の向こうで『お母さん、お兄ちゃんから電話ー』という声が鳴り響くと、すぐにスリッパでフローリングを歩いているような足音が聞こえ、だんだんと大きくなり、受話器を持ち帰るような物音が響き、やがて和人の知っているもう一つの声が聞こえてきた。

『もしもし和人? 一体どうしたの? 電話なんかよこして……いつもなら黙って帰ってくるのに』

和人の母親、翠に電話が代わると、先ほど直葉がいったセリフとほぼ一致する言葉を並べていた。流石親子というか、同じDNAというべきか。

「ああ……ごめん母さんちよつと当分帰らない。木綿季のライブが終わるまで病院に泊めてもらうことになったんだ」

『あらそうなの……分かったわ、和人が決めたことなら母さんは何も言わないわ……』

「……うん、母さんありがとう……」

『木綿季ちゃんのこと頼んだわよ? 和人。ちゃんと傍で支えてあげなさい。……いい返事を待ってるからね?』

「ああ、絶対に吉報を届けるよ。……あとこの前の件についてなんだけれども始めてほしい、開催日はメールで送る」

『……いよいよね、それじゃあ任されたわ。情報誌の編集者の実力……見せてやるから!』

「ああ! 頼んだぜ母さん!」

伝えたいことだけをひとしきり伝えると、必ず木綿季を助けるといふ誓を改めて立て、和人は通話を切った。スマホをポケットにしまいい、さほど混雑していない院内の駐車場に佇んでいた。

「とりあえずご飯と着替え、買ってこるか……」

同日午後17:40 横浜港北総合病院無菌室前

「木綿季く帰ったぞ〜」

とりあえずの食料と間に合せの着替えを買い込んだ和人が面会室に戻つてくると、廊下に備え付けられている緑色のベンチに腰を下ろして、買ってきたものを出し始めた。

『あ！ 和人おかえり〜！ ねねね、何？ 何買ってきたの？』

和人が帰ってきたことを知ると木綿季は嬉しそうに、そして楽しそうに食い入るように和人に買ってきたものを尋ねていた。

「そんな大したものは買ってきてないよ。おにぎりとお茶、あと一応携帯食のカロリーメイトとエナジードリンク。そして着替え……だな」

『ほえ〜、今のおにぎりって……そんなのになつてるんだ……』

木綿季の視線はカメラ越しに、和人の買ってきた異形の見た目のおにぎりに釘付けになっていた。

それもそのはず、一つは普通の鮭おにぎりではあるが、もう一つはシャリから具がはみ出している「ガッツリステーキおにぎり」だったからだ。値段もガッツリで一つ360円と簡単なお弁当ぐらいの値段となつている。

「ああ、ちょっと見た目のインパクトに負けてつい衝動買いしちまつた。俺こういう色物に弱くてさ……飲み物とかも期間限定とかあるとついつい買っちゃうんだ」

そう言いながら和人はおにぎりの封を解くと、早速一口、それを口に運び簡素な夕食を始めた。シャリは形はしっかりしていたが、低めの気温で陳列されていたためか、やや冷たい舌触りだった。

『和人……おにぎり美味しい？』

「ああ……まあ普通……かな、どこでも味わえる味だしな」

『普通かあ……ボクにはもうよくわからないな。三年間も仮想世界で生活してるから。現実世界の味……もう結構記憶がぼやけちゃってるんだ』

「……そうか……」

木綿季はメデイキュボイドで終末期医療を始めてから栄養は全て点滴で補っていた。しかし人間というものは点滴なんかより、やはり食べ物を口にした方が体に栄養は行きわたる。点滴でも生きてはいけるが、やはり人並みの生活をするには食べ物を食べていくしかないのだ。

『ボクもさ、病気が治ったら……ちゃんと食べれるようになるのかな』
「なるさ……絶対に、なんなら……俺がいろんなところに連れてってやるよ」

『え……本当?!』

メデイキュボイドの向こう側で、木綿季はパアッと明るくなった。ALDでも食事は出来るがやはり現実世界での食べ物ともなると、やはり魅力は桁違いだ。直接自分の舌で、鼻で、食べ物を感じ取りたい。「ああ、どこへだってつれてってやる。和風か？ 洋風か？ 中華でもいいし……なんなら気軽なジャンクフードでもいいぜ。マニアックなところになると自販機で販売してる食べ物なんかもあるぞ」
『ええっ?! 自販機で食べ物なんか売ってるの?! 聞いたことないよそんなの!』

和人が今口走ったことは事実である。

関東近辺では埼玉県行田市にあるドライブインで、自販機から出てくるチーズバーガーやうどんが食べられるのだ。値段も高くなくチープな味がいまだにファンの心をつかみ続けている。遠方からわざわざ食べに来る人もいるぐらいらしい。

「ああ……これが意外にいけるんだ。地元から近いし、今度つれてってやるよ」

『ウン！ 楽しみにしてるね！ ……でも最初は胃にやさしいものから始めていかないとナー……』

「そうだな、胃にやさしいってと……やっぱりおかゆとかおじやとかなのかな？」

『そうなるの……かな？ 病院食つてもあると思うけど……』

後半、木綿季は声がだんだん小さくなっていった。その反応を見る

限り、やはり病院食というのはあまりお世辞にも美味しいとは言えないらしい。しょっぱいものは献立に出せないし、かといつてたくさんの患者さんの食事を用意するのに贅沢な食材は選べない。

時間も限られていることもあり、大抵の病院食は不味いことが定番だ。

『病院食の味は覚えてる。あんまり……進んで食べようとは思えない味だったな。あは、アハハ……』

「じゃあ俺が作ってやるよ」

一つ目のおにぎりをお茶とともに胃に流し込んだ和人がそう言うのと、木綿季は目を丸くして驚いていた。ボクのために料理を？　いつも明日奈に作ってもらってばかりのあの和人が？

『え……和人、料理出来るの……？』

「ああ、そんな難しいのは作れないけど、簡単なものだったら大体作れるぞ。だから木綿季におかゆとかも作ってあげれるぜ」

『ほ、ホント!? そ、それじゃあ現実世界に戻ってからの最初の食事は……和人の作ったものがいいな!』

「ふふ、それじゃ倉橋先生と相談してみるよ。ただし、味はどうなるかは分からないからな?」

『えへへ、和人が作ってくれるのなら絶対美味しいよー!』

病気が治ったあと、恋人である和人が一番に食事を作ってくれろという。食べるのが大好きな木綿季にとってこれ以上の楽しみはないだろう。

ただ、欲を言えばハンバーグとかステーキとか、ガッツリしたものが食べたかったというのが本音だ。

しかし、長いこと現実で食べ物を口にしていない木綿季はそれは無理なことだ。最初は流動食的なものからスタートし、徐々に形のしっかりしたものへと変えていかなければ、内蔵に相当な負担がかかってしまうことだろう。

「まあ、飯のことはさておいて……木綿季、これからどうする?」

『え、どうするって……何が?』

「スメラギからの宿題だよ、明日のレッスンまで意味を理解しろとか

言ってたじゃないか、だから今日中に答えを見つけてしまおうぜ」

『ああ……うん、そうだね。ボクももつと上手になりたいし……!』

ハードな一日を終え、今こうしてゆっくりと過ごしている木綿季であったが、意外にも残された時間は少なかった。彼女に才能があり、予想以上にレッスンは進んだが、それでも週末には本番が控えている。

その事を考えると、今のうちに出来ることはやっておかないといけない。煮詰めれる時間があるのなら、煮詰めてしまっておいたほうがいいのだ。

『そしたらどうしょつか？ またALOで落ち合う？』

「そのことなただけどな、ちよつとそのまま待っててくれないか？」

『う、うんわかった……って和人？ おーい和人！ どこいつちやうんだよー!』

木綿季の叫びも虚しく、待っててくれとだけ言い残した和人はベンチから立ち上がり、そそくさと隣のゲストルームへと姿を消していった。

何を考えているのかは木綿季にわからなかった。ALOにログインするわけでもなさそうだし、ボクを独りぼっちにさせてどうするのさと、おいてけぼりにした和人にうらめしそうな視線を送り続けた。

同日午後18:00 メディキュボイド仮想空間 木綿季の部屋

和人が姿を消してからゆえに20分ほど経過していた。木綿季は体育座りの体勢のまま、和人のことを待ち続けていた。

しかしいくら待っても和人はやってこず、仮想空間内に響き渡る電子音だけが木綿季の耳に響いていた。

「……和人、戻ってこない……」

木綿季は心細くなっていた。最近はずと気が付けば最近はず常に側

に和人がいてくれた。不安なときはいつも傍で支えてくれた。元気づけてくれた。

その和人が少しでも自分の傍からいなくなってしまうと、心が空っぽになってしまっているのに気付いていた。

もうボクは和人なしでは生きられない、生きてゆけない。その事実にも気がついてた。いつからこんなにも弱くなってしまうのだろうか？

いや、元々ボクは強くなかない、強くあろうとしただけで、実際はこんなもんだ。誰かが近くに来てくれないと壊れそうになってしまおうぐらいに、本当は脆かったんだ。

「……………うう、寂しいよ和人……………」

「呼んだか？」

突然、木綿季に話しかけてくる声が聞こえた。その声は今の木綿季にとって、誰の声よりも聞きたい声だった。

木綿季は恐る恐る声の聞こえた方に首を動かし、その招待を確かめた。

「かず……………と……………？」

「こんには木綿季、ALOのアバターとあんまり違いはないんだな。髪の毛が少し短いぐらいか？」

仮想空間の木綿季の部屋には仮想世界のキリトではなく、現実世界の姿をした和人がそこにいた。着ていた服装の細部の違いはあれど、顔だちや体系などは現実の和人そのままであった。

「和人!!」

木綿季は立ち上がると仮想空間の和人に向かって駆け出し、抱き着いた。そんな木綿季を、和人は優しく包み込むようにして受け入れた。

「うおつ、おいおい……………大丈夫か……………？」

この木綿季の姿は三年前、終末期医療を始める前にメデイキュボイドでキャリブレーションをしたときの木綿季の姿だ。

従って現在のALOのユウキのアバターより、少しばかり身長は低く、今よりもどこか幼さというものを感じさせていた。

「だって……急に和人がなくなっちゃうんだもん……!」

「わ、悪かったって。ちよつと病院のアミューズファイアのキャリブレーションに時間がかかってな……」

「……そうだったんだ、置いていかれちゃったかと思っちゃった……」
木綿季は和人の胸板に顔をうずめ、二度と和人が離れていつてしまわないように必死に両手で抱きしめ続けていた。

「おいおい……俺が木綿季を置いていくわけないだろ?」

そう言うと和人は、ALOでやってるように木綿季を抱きしめ、頭を撫でじやくつた。ALOのユウキより幾分か身長が低い木綿季とのやりとりは、恋人というよりも少し年の離れた兄と妹といった印象を感じさせる。

「和人は……キリトより背が高いんだね……」

「というよりお前がちよつと小さい気がするな、ALOのアバターよ
り」

「うん、ボクのこの仮想空間の姿は三年前のボクのままだから、ALOのボクよりはちよつと背が低いんだ」

「なるほどな……でも、こっちの木綿季も可愛いぞ?」

「え……ボ、ボク可愛い……?」

「ああ……みんなに自慢したくなる」

「えと、えへへ……、ありがとう……♪」

この狭くも広くもないメイキョボイドの仮想空間で、二人は文字通り自分たちの世界を展開していった。仮想世界といえど、木綿季は和人に会うことが出来た。この日のことを、木綿季は絶対に忘れないだろう。

「さーてと、とりあえず本題を片付けちまおうぜ、木綿季」

「あ……うん、そうだね」

木綿季はそういうと、左手で先ほどALOでスメラギから受け取った歌詞の書かれたメモのデータ化されたものを表示した。

同じ文面が書かれたそれを、木綿季と和人は穴のあくほど見つめ続けている。

「歌詞の意味と向き合う……か、一体どうということなんだろうな……」

「うーん、歌詞の意味、意味があ……」

「なあ木綿季、もしかしてなんだが……スメラギのいう歌詞の意味と向き合うってのは、歌詞に込められた気持ちを理解して歌にしろってことなんじゃないかな」

「歌詞の意味……？」

「あんまり考えたことはなかったんだが、歌詞ってのは作詞家がつってるんだろ？ それもプロの……、その人達は多分漠然と歌詞を書いているわけじゃないと思うんだよな」

「……そうだねえ、確かにそうかもね。だって適当に書いた歌詞なんか絶対世の中に出せないでしょ」

「ああ、作詞家はこの歌詞に書かれてる一フレーズごとに意味をちやんと込めて書き上げ、一つの物語にしてるんじゃないかなって思うんだ」

「も、物語……、そんなこと考えたこともなかった……」

音楽にさほど詳しくないこの二人も、だんだんと分かってきた様子だった。歌というのは単純なものではない。歌詞を通して、曲を通して、そしてこの歌そのものを通して聞き手に訴えるものだからだ。

「歌詞の意味……」

木綿季は徐に二曲目の歌詞カードに目を通した。歌いだしのAメロから、クライマックスのサビの部分まで、穴のあくほど見つめていた。そして何往復も目を通して、とあるとんでもない事実に気がついてしまった。

「……え？ 待って……こ、これって……」

「ど、どうした木綿季……？」

目を丸くして信じられないような視線を、木綿季は歌詞に向けていた。そのただならぬ雰囲気を感じ取った和人は心配そうに木綿季に声をかけた。すると木綿季は視線を和人に向け、右手の人差し指を震わせながら歌詞をなぞるようにして、何があつたのかを和人に説明してみた。

「この……二曲目の歌詞、ボクだ……」

「……な、なんだって……!?!」

「……これ、ここに書かれている歌詞……ボクが今まで歩んできた、人生そのものなんだ……！」

第26話く木綿季頑張るく

西暦2026年2月2日（月）午後18:10　メデイキュボイド
仮想空間　木綿季の部屋

「この歌詞……ボクの今まで歩んできた、人生のもの……なんだ」

その言葉を聞いた瞬間、和人はあまりの衝撃に絶句してしまう。慌てて木綿季のもつ仮想メモに書かれている歌詞に目を通す。そして1フレーズずつ、意味を確かめていく。

その歌詞の中には木綿季の昔の、当時の心境を表現したのもあれば、つい最近起こったであろう出来事を思わせるようなものも書かれていた。

「な……こ、これは……どうなってるんだ……？」

和人はこの紙切れに書かれていることが信じられなかった。何故こんなにも木綿季に関連性のあるフレーズばかりが載っているのだろうか？

七色は木綿季の過去の出来事を知っているとでも言うのだろうか？

「……………」

二人は食い入るように歌詞を見つめる。その表情には焦りと疑問が窺え、額から汗が滴り落ちている。

「やっぱりどことなく……木綿季のイメージを思わせる歌詞を意識してるように感じるな」

「和人……これってどういうことなんだろう……、この曲を用意したのはセブンだし、やっぱりセブンが……？」

「……それは作った本人にしか分からないだろうさ」

二人の間に静寂が流れた。

メデイキュボイドの仮想空間に存在する、ホロパネルのシステム音だけが、その狭い空間にかすかに響いていた。

「でもボク……なんかこの歌詞嫌いになれないんだ。むしろなんか

……ボクが歌うために生まれてきたような、そんな曲のような気がする」

木綿季は神妙に、そしてどことなく神秘的な顔をして、歌詞を見つめている。

この歌を歌うのは彼女しかいない。そう運命づけられている。そんなや気がしてならなかった。

「木綿季……大丈夫か……？」

「うん、大丈夫。でもなんだろう……この歌詞さ、最初は意味なんて全然分からなかったけど、理解出来ると……なんか悲しいんだ」

「……悲しい？」

「うん、でも……悲しいけど、温かさも感じるの。温かくて懐かしくて。えへへ……変かな……こういうの」

木綿季はそう言いながら苦笑いを浮かべている。確かに一見悲しさを思わせるような歌詞だが、和人も何故か嫌いにはなれなかった。

この歌詞と、いや、歌と一体化することによって、木綿季自身が成長することが出来るのではないかと、そう感じていた。

「いけそうか？」

「うん、よくわかんないけど頑張れそうな気がする！」

「……そうか」

和人はそう言つて安心した表情を見せると、木綿季をゆつくりとこちら側へ抱き寄せた。

「か、和人……」

「今日はよく頑張ったな……木綿季」

「ううん……、和人が……和人が元気づけてくれたからだよ……」

「そんなことないさ、あれはきっかけに過ぎない。実際に頑張ったのは木綿季なんだから、木綿季が偉い」

「……もう、和人つてそーゆーとこ結構頑固だよねえ……、んじゃあ、お言葉に甘えてそゆことにしておこっかな♪」

二人は体を寄せあつたまま、目を閉じ静かに仮想空間の中で静寂を過ごした。

木綿季が今まで感じたことのない、メデイキュボイドの中で初めて

の温かさであった。

「ねえ、和人……？」

「……………」

木綿季が呼びかけても和人の反応はなかった。何かおかしいと思
い、木綿季は彼の顔を覗き込んでみる。

自分の体に肩を預け、前髪で隠れている所為で顔がよく確認出来な
い

「……和人？」

「……スウ……………」

相当な疲れが溜まっていたのか、和人は一人先に夢の世界へと旅
立っていた。

女の子みみたいな顔をし、すうすうと寝息を立てながら、無防備に寝
顔を晒している。

木綿季はその寝顔に一瞬ドキツとしつつも、今現在の状況をどうし
ようかと頭を悩ませている。

「え、えっと、ど……………どうすればいいの、この状況……………」

木綿季は迂闊に動くことがままならなかった。

変に今動いてしまうと、和人は重力に負けてずり落ち、仮想空間の
床に頭をぶつけてしまうだろう。

仮想空間なので痛みはないが、しっかりと衝撃自体はあるので、間
違いなく和人は起きてしまう。

「……………起こしちゃ悪いし、しばらくこのままでもいいかな……………？　なん
だったら、ずっとでも……………」

「……………木綿、季……………」

和人は眠りながらも、愛する女の子の名前を呼んだ。

木綿季は一瞬びつくりしたが寝言だということが分かると、やわら

かな表情で和人を見守り、彼の頭をそつと撫で回す。

そして、ふとある事を思い出すと、右手でメニューを表示させ、メ
ディキュボイドのアプリ機能の一つである、ドクターコールアイコン
をタップする。

「先生、倉橋先生！　ちよつと……お願いがあるんですけど、今いいで
すか？」

この通信は倉橋の事務室にある業務用PC、並びに院内ローカル通
信専用のスマートフォンに繋がるものだ。

呼び出しを始めてから三十秒程経過すると、無菌室の前に倉橋が
ひよこつと姿を現し、木綿季に声を掛ける。

『お待たせしました木綿季君、えつと、どうかしましたか？』

「あ……倉橋先生、急に呼び出してすみません。あの……ちよつと和
人の様子を見てきてもらっても、いいですか？」

『和人君の？　彼に……何かあったんですか？』

「えつとその、奥の部屋を見てもらえれば……分かると思います」

木綿季の逐一濁したような言い方に、倉橋は頭に？マークを浮か
べ、彼女に言われるがまま隣の部屋に足を踏み入れる。

そして隅っこに目をやると、アミユスフィアを被ったままの和人が
無防備で仰向けに横になっている姿が飛び込んできた。

パツと見はただのフルダイブ中の人間だ。

しかし彼がどこにアクセスしているか、そのアクセス先の木綿季が
何で一人で困っているのかと考えると、察しがついたのか、くすつと
笑いながらまた木綿季の前に顔を覗かせる。

『あはは、さては木綿季君のところまで寝てしまつてるといわけです
ね？』

「は……はい、寒いので風邪ひかないように、毛布か何かかけてあげて
もらつていいですか……？」

木綿季からのお願いを聞き届けると、倉橋は「分かりました」とだ
け笑顔で答え、別室から薄ピンク色の毛布を持ち出し、現実の和人の
体にそつとかけてあげた。

「あ、ありがとうございます……先生」

『いえいえ、これぐらいのことはなんでもないですよ』

普通はこういった雑用めいたことはナースコールで看護師を呼び出してやってもらうのが、普通だ。

しかし倉橋はこういったことも喜んでやってくれる。自分が動くことで木綿季のためになるのが嬉しくて、自ら積極的に動いてくれている。

『木綿季君は休まないのですか?』

「ええっと、休もうとしてるんですけど、ボクが動くとき……その、和人が起きちゃうので……」

『ははあ……なるほどなるほど、そうゆうことですか……ふふふ』

「も、もう……先生ー!」

倉橋はからかうような笑みを浮かべると「すみません、面白かったのでつい」とだけ言葉を漏らすと「また何かあったら呼んでください」と言い残して、無菌室を後にして再び仕事に戻っていった。

ここ最近、非常に濃い毎が続いている。

病気はまだ治ってないし、この無菌室からも出られてないけど、ここ数年で一番充実しているかもしれない。

でも、ちよつとその分ちよつと疲れちゃった……かな。和人を見ると……なんだが眠くなる……。

「ボクも寝ようかな……、この体勢のままでも、別にいつか……」

口を開け、大きく欠伸をすると木綿季も和人に体重を預け、ゆつくりと瞳を閉じ、大好きな人の名前を呼んで眠りについた。

誰よりも頼りになる、逞しくてカッコイイ、女の子みたいな顔の男の子の顔をそつと撫でながら。

「おやすみ……和人……」

「ん……ん、うん……、ふあ……」

木綿季が眠りに入ってから、現実では八時間余りが経過していた。こんな朝早く目が覚めるのは久しぶりだ。昨日早い時間に床についたこともあり、いつもより早い時間に起床した木綿季は、ゆつくりと目を開け、欠伸をしながら徐々に覚醒する。

「ふわあ……あ、……あ？ ああっ!？」

ふと右肩に違和感を感じ、その方向を見ると木綿季はその状況に困惑した。

木綿季の顔のものすごい近い位置に、和人の顔があったからだ。

「ふええ!?! か……和人!?! どうして!?!」

「……スウ……」

和人を起こさないように姿勢を戻しつつ、木綿季は一度目を閉じ、昨日のことをゆっくりと思い出していた。

昨日は歌のトレーニングをして、めきめき上達していき、その後メラギに宿題だされ、和人から学校に通わせてくれる約束をしてもらった。

そしてご飯を作る約束もしてもらい、その後、和人がこの部屋に来た。

一緒に頭をフルに回転させ、なんとか答えにたどり着いた。

木綿季は一つ一つ順番に思い出していった。

そして今のこの状況が、どうしてこうなったのかも。

「そうだった……、和人がこのまま寝ちやつて動けなくなっちゃったんだっけ……」

ん、あれ、ちよつとまって、昨夜と状況が全く変わってないっていうことは……。

「結局ボク動けないじゃん!!」

突如木綿季の発した大声の影響か、すぐ目の前で寝ている和人が「うーん……」という声を漏らしながら、眠たい目をパチパチさせながら、夢の世界から戻ってきた。

「ふえあ!? あ、か……かずと、おはよう……」

「ん……おはよう……」

和人は目を覚ますと体を垂直に戻し、目をごしごしこすって周りを寝ぼけ眼で見渡していた。

いつもの自分の部屋とは違う空間。

PCもない、アミューズフィアもない。クローゼットもベッドもない。

はて、ここは一体どこなのだろうか。

「ん……、あ、あれ……ここどこだ……?」

「か、和人……覚えてないの……?」

「……え、何で木綿季が……?」

「覚えてないんだね……」

木綿季にそう言われ、和人は一度頭の中を整理すると、今自分がかんでもないことをしでかしているこの状況に、漸く気が付いたようだった。

いたいけな少女の細い体を、二つ年上のしっかりした肉体の自分がガツチリ拘束している。

「!?!? ぶあ!?! ゆ、木綿季!?! な、何で!?! 俺は……その、す……すまん!!」

事の重大さに気付いた和人は半身のまま木綿季から少し離れた。

すぐさまこの場からログアウトしたがったが焦っていたのと、仮想空間の木綿季の部屋にいたのもあって逃げ道を失っていた。

「か……和人?」

「こ、これ……どうやってログアウトするんだ!?! 手をスライドしても何も出ないぞ!?!」

和人は先程の気まずさと恥ずかしさを隠すかのように、この場から逃げ出そうと必死に仮想空間からログアウトをしようとしていた。

その情けない状態に呆れた木綿季は、大きく溜め息を吐いた後に、たまらず彼に喝を入れる。

「……和人ツ!!」

「は、はイイツ!?!」

すぐ近くで大声が耳の中に響き渡ると、和人はビツクリして背筋をピンと伸ばし、大きく目を見開いた。

「一回、落ち着く……？」

木綿季は声を張り和人を制止させた後、和人の側に寄り手をギュッと握り、落ち着かせる。

彼女の手からの温もりを感じた彼は、一回二回と呼吸をしていくうちに、心臓の鼓動が少しずつ、少しずつ収まっていくのを感じていた。「落ち着いた……？」

「……あ、ああ、落ち着いた……」

珍しく慌てふためいている彼を見て、木綿季は意外な一面が見れたと内心クスツと笑っていた。

こういつたことは、アインクラッドでアスナともあったであろうに。こういう時は意外にも、彼はうぶなのである。

「何かごめんな……、つてうわ……まだ朝の四時か……早く起きすぎたな……」

「それでもないと思うよ？ 昨日ボクたちが寝たのは確か、夜の十八時ぐらいだったし」

「なんだかんだで十時間ぐらい寝たのか……、でもなんだかまだ眠いし、心なしか体中が痛いような……」

仮想空間のAvatarなので痛いはずはないのだが、和人は奇妙な痛みと違和感を訴えていた。どことなく顔にも覇気を感じられない。

「和人、やつぱり疲れ取れてないんじゃない？ 本当に大丈夫……？」

「ああ……大丈夫だ、木綿季の頑張りに比べれば、こんなもん……」

「平気ならいいけど、無茶しないでよ……？」

「ああ、だいじょうぶだ、よ——」

——和人が体に力を込め、立ち上がった次の瞬間だった。

ゆっくり立ち上がったつもりが、突如全身に力が入らなくなり、バランスを失い前のめりに倒れこんでしまった。

そして彼はそのままうつ伏せの状態で、ピクリとも動かなくなってしまう。

あまりにも一瞬の出来事に、木綿季は何が起こったんだと、彼を見

つめている。

「——かずと……？」

木綿季は急いで和人に駆け寄り、上半身を背中から支え、体を起こし抱き寄せて声を掛け続けた。

「和人！和人！　しっかりして！　和人！」

木綿季は必死に和人を揺さぶり、意識を覚まそうとするが和人は一向に意識が戻る様子はなく、ぐったりしている。

額には汗が浮かび、どこことなく顔色も悪い。仮想空間だというのは、彼の調子の悪さが目にとつてわかるような具合だ。

「和人……？　起きてよ！　和人！」

木綿季が声をかけ続けても、和人の反応はない。彼女の目には次第に涙が溜まっていった。

通常、仮想世界で意識を失うということは、眠気が襲ってきたか、現実世界の肉体にフルダイブするだけの脳波が乱れるだけの、何かが起こったということだ。

「いや……いやだ、いやだよ和人……ッ、目を覚ましてよ！」

支えていた和人の体が、力なく木綿季の体からずり落ち、ドサツという音とともに仮想空間の床に倒れ込んだ。

その姿を間近で見ってしまった木綿季の目からは、大粒の涙が零れ落ち、その瞬間木綿季の中で「何か」が切れた。

「い……いやだああああッ！　かずとおおおおッ!!」

木綿季が泣き叫んだ次の瞬間、和人のアバターは木綿季の目の前から白い光と共に消えていった。

和人が消えると、彼を支えていた木綿季の手が、何もなくなってしまうたその空間を虚しく空ぶった。

「かず……と……？」

木綿季に更に絶望の表情が浮かんでいた。大好きな和人が目の前で倒れ、その姿も消してしまった。

何がおこっているか分からない現状と、和人が倒れてしまったというショックが重なり、木綿季は更にパニックになってしまった。

「いや……いやだ……、和人がいなくなるなんて……やだ、いやだいや

だいやだあぁッ!!」

身体を震わせ、絶望の底に叩き落とされたような声を漏らしていると、何やら無菌室の外が慌ただしくなっている。

そして外を通りかかった一人の男から、パニック状態の木綿季に声が掛けられた。

『——木綿季君！ 返事をしてください！ 木綿季君！』

その声が聞こえると、木綿季はハッと我に返り、声のする方を見る。そこには長年彼女を傍で支え続けてきた頼れる倉橋の姿があった。忘れてはいけない、彼を含め、ここには医療のプロが顔を揃えている。

声を振り絞り、泣き叫ぶ思いで倉橋に助けを求める。今この状況を打開できるのは、医師である倉橋しかいない。

「うぐっ……せ、先生……倉橋先、和人が……和人が倒れて、目を覚まさなくて……消えちゃって……ッ」

木綿季はパニックに陥りながらも、必死に先ほど起こった状況を倉橋に説明した。

涙を流しながら、ヒクヒクしながら話していたので、よく聞かないとわからなかったが、それでも倉橋は木綿季の言いたいことが全てわかっていた。

『ええ分かっています！ アミュスファイアの信号異常をこちらでキャッチしたので急いで駆けつけました！ 万一のことを考え和人君を集中治療室に連れていきます！』

倉橋が駆け付けた後、すぐに看護師が何名か現れ和人を、患者を運ぶ白のストレッチャーにのせると、治療室へと搬送していった。

その様子を木綿季はメデイキュボイドの中から、黙って見守っていることしかできなかった。

木綿季は仮想空間の巨大ディスプレイに両手をあて、項垂れながら今にも千切れてしまいそうな細かい声で、木綿季は倉橋に救いの手を求めている。

そんな不安に押し潰されそうになっている木綿季に、倉橋が励ましの声をかけた。

「せんせいお願いです……かずとを、かずとを助けてくださいッ、お願いです……かずとを……ッ」

『大丈夫です木綿季君、和人君は必ず助けます！ だから木綿季君も落ち着いてください！』

「かずと……死んじやいやだ、ボクを……独りにしないで……ッ」

木綿季は仮想空間の中で両手を組み、必死に神に祈っていた。

お願いします、和人を助けてください。もう贅沢なんて言いません。

どうか和人をそつちに連れていかないで下さい……。

あれから一時間半ほど時間が経過した。倉橋は医療スタッフに和人のことを任せると木綿季を安心させるために無菌室へと戻っていた。

『木綿季君……大丈夫ですか？』

「……はい、少し落ち着きましたて」

メイキキュボイドの外から、倉橋が木綿季に声を掛ける。木綿季が安心出来るように優しく、やわらかな口調で語り掛けてきた。

『おそらくそろそろ検査結果がくると思います。大丈夫ですよ、ここには医療のプロがそろっています。和人君を死なせはしません』

「……はい……」

木綿季の顔は涙で真っ赤になっていた。少し落ち着きを取り戻したものの、心の中は和人への不安でいっぱいだった。和人の安否が気になって仕方がないと言った様子だ。

「和人……死んじやいやだよ……、和人がいなかったら……、ボ、ボク……ボクは……ッ」

——もう生きていけない。

そう弱音を吐こうとした瞬間、看護師から倉橋のもとへカルテが届

けられた。

その様子を見た木綿季は、すぐさま検査結果をまじまじと見つめる倉橋に食らいつく。

「先生、和人は……和人はどうなったんですか！」

木綿季は興奮しすぎて、仮想空間内の巨大ディスプレイの画面ぎりぎりまで身を乗り出していた。

すぐ目の前には倉橋の顔が映し出されている。その顔つきはあくまでも冷静で、一人の医師としての表情をしている彼の姿があった。『木綿季君、まずは落ち着きましょう。あまり興奮しては木綿季君の体によくありません。折角和人君が木綿季君のためにいろいろ尽くしてくれて、体の調子もよくなっているのですから……』

「……はい……」

まだ心臓がバクバク鳴ってる。怖い、和人の容態を聞くのが怖い。とんでもない病気なんじゃないか？ ボクの所為でああなつてしまったのではないかと。

不安を胸に抱きながら、木綿季は倉橋からの話に耳を傾ける。

『……安心してください木綿季君、命に別状はありません。和人君は"過労"です』

「……か、ろう……？」

その瞬間、木綿季は仮想空間内で崩れ落ちた。

緊張感が一気に解け、全身の力がすっかり抜けてしまったていた。

過労？ 病気じゃなくて本当にただの過労？ 頭の中を色々な情

報が交錯し、入り混じる。

『ええ、ただその影響で熱も出ていて、呼吸も荒く、血圧も上がっています。とてもではないですが、外を出歩かせるわけにはいきません。しばらくはベッドの上で過ごしてもらおうことになります』

「……はい……」

和人の命に別状はなかった、ここ最近の無理がたたってしまい、とうとう限界がきてしまったのだ。

不規則な食事と睡眠が続いたことにより体の生活リズムが狂い、疲労もたまり過ぎてしまい、精神的な疲れもあつてついに倒れてしまっ

た。

木綿季はその報告を聞いてひたすら安堵した。和人は死なない、いなくならない。

——よかったッ。

「かずとのほか、自分が倒れてどうする……のさ……」

『ゆ、木綿季君……大丈夫ですか？』

「だい、じょうぶ……ですッ」

再び木綿季の目には大粒の涙が滴り落ちた。心配しすぎて流したこともそうだが、彼が大事なくて、いい意味で裏切られて良かったとほっと胸をなで下ろす。

そしてひとしきり泣いた後、木綿季は少しだけ落ち着きを取り戻し、倉橋の話に耳を傾ける。

『和人君がいきなり倒れてまだ混乱していると思いますが、気をしっかり持ちましょう。命に別状はないのです』

「……………」

『体調が回復すれば、また一緒にいられるようになりますから』

「先生……和人が回復するまで、どれぐらいかかりますか……？」

『本人の回復力次第ですけど三日ほど、だと見えています。和人君は若いですし回復も早いと思いますからね』

「み、三日……」

木綿季は仮想空間内の自室の仮想カレンダーの日付を見た。三日後というと金曜日、本番前日だ。

残りのセブンからのレッスンを、木綿季は和人なしで受けなくてはならなくなってしまうた。

和人なしでどうやればいんだろう、不安だ。不安で押しつぶされてしまいそうだ。

（あ……、和人がいないとって考えちゃってる、ボク……）

体育座りをして項垂れながら木綿季は考えていた。ここ最近のボクは和人に頼りつきりだ。

ボクに好意を寄せてくれ、側で支えてくれたのは和人。

HIIVを治す計画を立ててくれたのも和人。学校に行く約束をし

てくれたのも和人。

(ボク、和人がいないと何も出来ないじゃんか……)

明日奈に頼まれ和人を支えてくれと言われてたあの日から数日が経ち、フタを開けてみれば何のことはない。

支えられてるのは和人ではなく自分だった。

和人はボクにたくさんのことをしてくれた、だけどボクは和人に何をした？ 何をしてあげられた？

和人の傍にいただけじゃダメだ。和人がいなくてもボクだけで解
決できなくちゃだめだ。

和人がいなくても強いボクでいなくちゃダメなんだ。

だから——ボクは——

「先生、和人が目を覚ましたら……伝えてもらってもいいですか？」

『え、ええ……構いませんけど、なんとお伝えしましょう？』

「……」三日間絶対に無茶しないで、ボク一人で頑張るから”って
……」

『分かりました……確かに伝えます』

「いつまでも和人に頼りつきりじゃいられないんです、ボク一人でも
……やり抜かなきゃいけないんです……！」

『そう……ですか、変わりましたね……木綿季君』

「……和人的おかげです……」

和人は無理がたたって過労で倒れてしまった。木綿季はそれを目
の前で見えてしまい、大変なショックを受けた。

しかしかつて持ち合わせていた精神力をなんとか取り戻し、新たな
決意を胸に前へ前進していくことを決めた。

和人がいなくてもやり遂げる、次に和人に会った時に胸を張って強
い木綿季を、絶剣のユウキを見せられるようになるろう、そう誓った。

「あ……あと……先生もう一つだけ……伝えてもらっていいですか……？」

『はい、何でも仰ってください』

「三日経つまでにボクに会いに来たら……」絶交する”って……そう言っ
ておいてくださいー！」

第27話〈家族〉

西暦2026年2月3日（火）午前9：10 神奈川県横浜市金沢区 横浜港北総合病院

「ハア……ハア……」

とある人物の病室を目指して二人の女性が息を切らして走っていた。

桐ヶ谷翠、桐ヶ谷直葉。二人は家族の和人が倒れたと連絡を受け、仕事と学校を休んで病院に駆け付けてきたのだ。

タクシーを降りた二人は自動ドアをくぐると、足の速度を緩めることなく病院の窓口まで駆け込んだ。

まだ息が切れているが構わず、受付のお姉さんに目的を伝える。平日の早朝ともあって、フロントやエントランスに面会者や看護師の姿は少なかつた。

「すみませんッ、面会を……桐ヶ谷和人の、面会をお願いします!」

息を切らしながら受付のお姉さんに面会をお願いすると、お姉さんは流石プロというべきか、慌てず騒がずに、冷静な態度で対応をする。

患者の家族に不安を与えないためだ。

「患者さん……桐ヶ谷和人さんですね？ 失礼ですがお名前は?」

お姉さんの落ち着いた対応もあってか、呼吸が少しずつ戻ってきた翠は、今一度大きく深呼吸をすると、先程とは打って変わって落ち着いて自分たちの身分を明かす。

「桐ヶ谷翠と申します。和人の母親です、息子が倒れたと聞いて、飛んできました……」

普段は冷静な大人の翠も、息子の和人が倒れたとあっては冷静でいられなかつた。

妹の直葉にいたっては今にも泣きだしそうである。

「わかりました、ではこちらの札を持って、病室までお進みください」
翠と直葉は首から下げるタイプの札を受け取り、和人の入院している病室の番号を確認するとすぐさま足を運んだ。

「お母さん……お兄ちゃん、大丈夫かな……」

「……大丈夫だといけれど、あのバカ……無茶したんじゃないでしょうね……？ 全くもう……！」

口では悪態を吐いてはいるが、心の底では心配でならなかった。義理の息子と言えども実の息子、手塩にかけて育ててきた大切な息子だ。

その息子が倒れたとあっては、居ても立っても居られない。血の繋がりに関係ない。

何人かの看護師や歩行訓練をしている患者さんの脇を通り過ぎながらしばらく歩き続けると、見知った名前のプレートが差された病室が見えた。

見間違えるはずがない。

【桐ヶ谷 和人】

病室のプレートにはそう書かれていた。最愛の家族の、息子の名前が、黒の油性マジックで丁寧な字で書き記されていた。

翠は気持ちを抑えきれず、他の患者のことなどお構いなしに勢いに任せて病室のドアを思い切りスライドさせる。

扉の車輪がレールを転がる音を響かせると部屋の右側に、息子がベッドに横たわる光景が目に入ってきた。

「和人ッ!!」

翠は和人の横たわる真っ白なベッドに駆け寄った。上半身だけ掛け布団から出ていてその細い腕には点滴が刺されている。

口元には人工の呼吸器が施されており、口元の部分が和人の呼吸によつて曇っている。

その呼吸は若干荒く、体中に汗が噴き出していて衣服も湿ってしまっている。

「和人……ッ！」

意識がない息子の側によると翠は崩れ落ち、必死に和人の手を握った。

自然と二年前の、あの時を思い出してしまった。

二年前のSAO事件、まず初めに息子の和人が、そして娘の直葉が

SAOに囚われてしまった。

翠の生き甲斐とも言える最愛の二人の子供がデスゲームに巻き込まれてしまい、当時の翠は気が気でなかったという。

その当時の光景が翠の中でフラッシュバックを起こしていた。唯一の安心ともいえるのは頭にナーヴギアがかぶさってないことだけである。

「お兄ちゃんしっかりして……!」

妹の直葉も側に駆け寄る。まだ主治医から病状を聞かされていない二人は、何故和人が倒れたかという理由もわからなかった。

意識がない和人の姿を見て不安感はさらに増していき、二度と彼が目覚まさないんじゃないか。

そんな感覚さえ覚えてしまう。

二人がじつと和人の顔を見つめていると、しばらくして病室のドアからコンコンという音が響きわたる。

このような入室の仕方は病院関係者がほとんどだ、ひよつとしたら先生が来たのかもしれないと思った翠は向きを変え、ドアの方向を向いた。

「失礼します……!」

カラカラという音を立てて扉を開けて部屋に入ってきたのは、翠と直葉がよく知る人物、木綿季の主治医でもある倉橋その人であった。

「く……倉橋先生!」

「これは……翠さんに直葉さん! 来ていただいたのですね」

「息子が倒れたと聞きました……!」

「……申し訳ございません、和人君の状態に気付くことが出来ませんでした。医師として……情けない限りです」

倉橋はそう言うのと、右手に持っているカルテらしい書類を持つ手に力が入ってしまった。

悔しい、そして情けない。それでもプロかと、自分自身を責め立てている。

「何をおっしゃいますか、先生がいたからこそ早期発見が出来たんです。和人を助けてくれたのは……先生じゃありませんか」

医者は確かに患者の怪我や病気を治すのが仕事だ。しかし、二十四時間いつも完璧に把握出来ている訳では無い。

何故なら医師も一人の人間だからだ。

看護師、その他医療スタッフが交代で見ているといっても、限界がある。

患者の容態も個人差というものがあり、いつ何が起こるかというのは、ある程度しかわからない。

「最初に発見こそしたのは私ですが、実は木綿季君のお陰で気付けたのですよ」

「ゆ、木綿季ちゃんが……？」

「具体的に言いますと、アミユスフィアの信号異常のお陰で、和人君の異常に気付けたんです。そのきっかけを作ってくれたのが、木綿季君でした」

先日、和人に毛布を掛けてあげてほしいと木綿季は倉橋にお願いをしていた。

その際倉橋自ら和人に毛布を掛けたのだが、少しばかり呼吸が荒いコトや、異常なまでに汗をかいていることに気付いたのだ。

そして念のため和人のアミユスフィアの信号を監視していたのであった。

だから信号異常にすぐ対応でき、部屋に駆け付けることが出来たのだ。

「そうだったんですか……、なら木綿季ちゃんに、お礼を言わないとですわね……」

「ええ、彼女を安心させるためにも……後で木綿季君のところへ寄つてあげてください。彼女は自分の所為で和人君が倒れたと思ひ込んでいます」

「え……？」

「何か元気になる言葉でもかけてあげはいただけませんか？ 私も声をかけたのですが、なかなかどうして……」

「そう、だったのですか……」

何事にも全力でぶつかることを信条としてきた木綿季は、当然自分

のしてきたことに関しての責任感も人一倍強かった。

和人に負担を掛けすぎてしまったこと。それによつて彼を過労にまで追い込んでしまったこと。

別に木綿季に特に責任があるわけではない。

彼女は重病人、弱い側の人間だ。人に頼らざるを得ない環境にある。

しかし木綿季はそれでも、自分の所為だと顔を踞せているばかりだった。

「ねえ、倉橋先生？ お兄ちゃんの病気は何なんですか……？」

直葉が畏まった態度で倉橋に和人の病名を伺う。翠もその事を聞きたかったが、なかなか踏み出せないでいた。

そしてこうも考えてしまう。

もしかしたら、よくない病気にかかってしまったのではないかと。

「そんなに心配なさらずとも大丈夫ですよ二人共、和人君は……ただの過労です」

「へ……？ か、過労……？」

過労、倉橋がそう直葉と翠に伝えると、二人はキョトンとした表情を見せた後、やれやれといった顔つきになり、その場に力なく崩れ落ちた。

「ええ、……最近の無理がたつたのでしよう。食事をとらない時もあったみたいですし、木綿季君の為に動きすぎたのでしよう。三日ほど休めばよくなると思います」

休めばよくなる、その言葉を聞いて翠と直葉は安堵の表情を見せた。

特に重たい病気を患った訳では無い、大きな怪我をしたわけでもない。

息子に、お兄ちゃんに大したことがなくてよかったと、肩に入っていた力が抜けていった。

「もう……、このバカ息子は……」

「よかった……、よかったよ……お兄ちゃん」

心配の気持ちから安堵の気持ちに変わり、静かに寝息を立てている和人を見つめていると、丁度窓から彼の顔に日光が差し掛かる。

その光が安心感をさらに演出させていた。

「ええ、すっかり栄養をとってばっちり休めば以前の通りに動けるようになるはずですよ。しかし問題は和人君より木綿季君かもしれないですね……」

「ゆ、木綿季ちゃんが……?」

「ええ、先ほども言いましたが……今回の件でかなり責任を感じています。お二人とも時間があればなんですが、彼女の病室までいってあげてくれませんか……?」

翠と直葉は顔をそろえて迷わず首を縦に振り「行かせてください」と同時に口を開いた。

その言葉を聞き届けると、倉橋は分かりましたと言い、メデイキユボイドのある病室まで二人を案内した。

「和人、またあとでくるからね……」

和人に挨拶を済ませると、二人は木綿季の無菌室まで足を運んだ。実は木綿季にはまだ話していないことがある。

彼女の退院後の、いや、これからの人生を大きく変えてしまうほどの大事なことがある。

既に和人も直葉も、そしてそれを最初に考えていた翠も、もう固く心に決めていたことを……。

同日同時刻 横浜港北総合病院 無菌室前

「木綿季君、失礼します」

『倉橋先生……おはようございます……』

木綿季はあれからどうやれば和人の助けになれるかどうかを考え

ていた。

今のボクに出来ることは何だろうか？ 和人に何をしてあげられるだろ……うと、ひたすらそればかりを考えていた。

「おはようございませす木綿季君。本日はお客さんをお連れしました」
「……え、お客さん……？」

仮想空間の中で、体育座りで顔を踞せている木綿季が顔をゆっくりあげると、画面の右側から彼女のよく知っている人物が姿を見せた。愛する和人の家族である、翠と直葉。今木綿季が一番顔を合わせる事が出来ない二人が顔を見せている。

「おはよう木綿季ちゃん、和人がお世話になったみたいで……本当にありがとうね……？」

「うん、木綿季ちゃんのお陰でお兄ちゃんは助かったって先生言ってたよ？ 助けてくれてありがとう」

二人の誠実な態度に木綿季は困り果てていた。助けたただなんてとんでもない。

むしろ和人はボクの所為で倒れてしまった。終始ボクの為に時間を使ったおかげで和人に負担をかけてしまい、和人を追い詰めてしまった。

和人をあんな風にしたのは、他でもないボクなんだ。

『……ごめんなさい、ごめんなさい……ボクの……ボクの所為で和人が……和人が……ッ』

「木綿季ちゃん……」

木綿季はそれつきり、一言も喋らなくなってしまう、再び顔を踞せてしまう。

ふさぎ込んでも和人が目を覚まさないのはわかっている。しかし、こうせざるを得ない。

どんな顔をして二人と話せばいいんだ。ボクには二人と話す資格はない。

そう自分自身を責め続け、木綿季は自分の殻に閉じこもってしまった。

「桐ヶ谷さん……ちよつとこちらへよろしいでしょうか……？」

「は……はい……」

木綿季に話を聞かれたくないためか、声を大にして言えないようなことなのか、倉橋は奥のゲストルームへと二人を案内した。

広くも狭くもない部屋の隅っこで、倉橋は腕を組みながら困った顔をし、木綿季の現状を言ってみせ聞かせる。

「今朝からずっとあんな調子でして、話しかけてもなかなか口を開いてくれないのですよ……」

「そう、なんですか……」

「今木綿季君は、どうやれば和人君の支えになるかを考えてると思います。しかし彼女はまだメデイキュボイドから出られない身ですから、やれることが限られています」

「……木綿季ちゃん……」

「……そこで、お二人のお力を借りられないかと思ひまして」

そう言うとき倉橋は部屋の隅のデスクに置いてある、病院のアミウスファイアと、和人のアミウスファイアを取り出し、両手に握りしめて、二人に手渡した。

「ア、アミウスファイア……ですか？」

「ええ、このアミウスファイアなんですが、病院内限定ではありますが、ローカルネットワークで気軽にアクセスが出来るようになっていきます」

「ローカルネットワーク……あ、も、もしかして……!」

「ええそうです、木綿季君のメデイキュボイドのプライベートルームにアクセスできます。和人君には悪いのですが、勝手にランチャーもインストールさせてもらいました」

その言葉を聞いた途端に直葉の顔が明るくなっていった。木綿季に会える、ゲーム以外の場所で、木綿季と会える。彼女と触れ合える。

未来の妹と直接……ではないかもしれないが、顔を合わせられると知った直葉は期待に胸をふくらませていた。

「えっと、つまり木綿季ちゃんのメデイキュボイドの中の、仮想空間にそのマシンでアクセスできるって解釈でいいのかしら？」

「はい、概ねあつてます。お二人にはそこで木綿季君を元気づけてあ

げてほしいと思います。恐らく明日奈さんと和人君以外で心を開いているのは、あなた方だと思えますし、お願いできませんでしょうか……？」

倉橋からのお願いに、二人は続けて首を縦に振る。何も木綿季を助けるのは和人だけではない、私たちにだって彼女の力になれるはずだと。

何を迷う必要がある。

倉橋に肯定の返事をする、二人はそれぞれアミクスフィアを彼の手から受け取り、一番近い場所にあったゲスト用の椅子に腰掛け、荷物を傍らに置くと、早速アミクスフィアを装着していく。

直葉は慣れた様子で被つていったが、母親の翠は慣れないマシンに四苦八苦している。

ヘルメットのように被つたはいいものの、そこから先をどうすればいいかわからず、逐一直葉に訪ねていた。

「私……フルダイブ初めてだわ。初めてのフルダイブが木綿季ちゃんとうちのためだなんて、なんだか嬉しいわね……」

「意外とお母さんも、やってみたらALOにハマったりしちゃってね……？」

「よしなさいよ、私もいい歳なのよ？ 私はPCだけで十分です」

冗談交じりに会話を交わしながら二人はフルダイブの準備を進めていく。

直葉から最低限の操作方法を学び、キャリブレーションを二十分かけて終わらせて、いよいよ木綿季の場所へいく支度が整っていった。

コンピュータに詳しい翠も、次世代技術の結晶であるアミクスフィアには首を傾げるばかりだ。

まるでお爺ちゃんかお婆ちゃんか、慣れないスマホの操作を孫に教わっているかのような、そんな光景に見えている。

「それではリンクしましたら、画面左下にあります赤十字のマークのアプリを起動してください。自動的に木綿季君のメイキュボイドにアクセス出来るようになってます」

「はい、わかりました！ ……よし、それじゃあ……行くよ？ お母さ

ん」

「ええと、ね、ねえ直葉？ あのセリフ、やっぱり言わないとだめなのかしら……？」

あのセリフというのは勿論、和人や直葉、明日奈や木綿季もフルダイブをするときにいつも言っている、お決まりのセリフのことである。

「ダメだよ♪」

「……はあ、全く……わかったわよ……」

直葉と翠は十分に体をリラックサさせると、一度深呼吸をして、例のセリフを同時に言い放った。

その際、翠は少しだけ恥ずかしそうに顔を赤らめている。

やはりいい歳をしておいてこのようなセリフを口走るのは、恥ずかしいものがあるのだろう。

「リンク・スタートツ!!」

「リ……リンク、スタートツ」

同日同時刻 メディキュボイド仮想空間木綿季の部屋

「……和人……」

木綿季はまだ物思いにふけていた。

これ以上和人の負担になるぐらいだったら、ボクがいなくなった方がいいのではないかという、最悪の考えにまで考え付いてしまった。た。

「ボクなんかいなくなった方が……よかつたんじゃないかな……」

何も生み出すことも、与えることもせず、たくさんの薬や機械を無駄遣いして、周りの人達を困らせて、ボクは一体何がしたいんだろう。

大好きな和人まで……遠くに行かせてしまった。

「ボク……ボクなんか、いなくなった方が……ッ」

「それは違うわよ、木綿季ちゃん」

背後にいる誰かが口を割って入った、気配に気づいて慌てて振り向くと、そこには木綿季のよく知る女性二人が佇んでいた。

和人の母親桐ヶ谷翠、和人の妹桐ヶ谷直葉。

和人だけでなく、その家族までも木綿季のところに来てくれたのだ。

「え……え、す、直葉ちゃんに……み、翠さん……？　な、何で……？」

「木綿季ちゃんが心配で……きちゃいました」

そういうと翠は木綿季に歩み寄り、やさしく包み込むように木綿季の肩に手を当てた。

木綿季はこの状況にたじろぎ、おろおろしながら視線をあちこちに移している。

そんな彼女にも、翠はニコニコ笑顔絶やさず、優しく接し続ける。

「改めて、私は初めまして……よね？　桐ヶ谷翠です、木綿季ちゃん

……いつも和人と仲良くしてくれてありがとうね……」

「え……あ、あの……えっと、ボ、ボクは……」

困っている木綿季をよそに、翠に続いて直葉が木綿季にかけより、手をぎゅつと握り笑顔を振る舞いながら挨拶をする。

「初めまして木綿季ちゃん、桐ヶ谷直葉だよ？　リーファっていえば

……わかるかな？」

直葉に歩み寄られ、ますます木綿季の頭は混乱する。何で二人がここに來てるんだろう、ここまで何をしに來たんだろう。

むしろ、ボクはこの二人に合わす顔なんてない。ボクの所為で和人が倒れたというのに。

「木綿季ちゃん、和人を助けてくれてありがとう」

「え……」

翠さんが何を言ってるのか理解出来ない。

ボクは決して和人を助けてなんかいない。それどころか迷惑をかけてしまった。

この二人がこの病院にいるのも、おそらく和人のお見舞いの為に來てるのだろう。

ボクの所為で倒れてしまった、和人のお見舞いに……。

「え……そ、そんなやめてくださいっ、和人は……ボ、ボクの所為で……」

「木綿季ちゃんの所為じゃないよ」

和人が倒れたのはあくまで自分の所為だと、ひたすら卑下し続ける木綿季に、直葉がすかさずフォローに入った。

何を言っても塞ぎこもうとする木綿季に、ちゃんと理由も込めて説明する。

真つ直ぐぶつかるとこの性格は、裏を返せば少々頑固な一面も見せているということなのだ。

「あのね、木綿季ちゃんは自分の所為だって言ってるけど違うのよ？

和人を助けたのは……木綿季ちゃんなんだから」

「……どうして……？」

「まずね、一ヶ月前の事で塞ぎこんでいた和人の心を開いてくれたのは、木綿季ちゃんだって聞いてるわ。そのあとも和人ったら病院から帰ってくるたびにね？ 疲れてるけど充実してそうな顔を見せるのよ。あんな和人久々に見たもの」

「そうそう！ あとね、気が付くと木綿季ちゃんのことばっかり話してくるんだよ？ それはもう耳にタコができるぐらい！」

「……え、あ、あの……」

とまどいながらも、桐ヶ谷親子のマシニングに押されればなしの木綿季であった。

言い返そうにも言い返すタイミングが全く見当たらない。怒涛の親子マシニングである。

しかし、これも阿吽の呼吸があったチームプレイなのである。木綿季に反論の余地を与えず、とにかく言いたいことを言いまくって、まくし立てる

「あとね？ 木綿季ちゃんは自分の所為だって言ってるけど、あの子の無茶癖は昔からなのよ？ 直葉が池で溺れて死にかけた時も、真つ先に飛び込んで助けにいったりね……」

「ああ、う、うん……そんなこともあったっけ、あは、あはは……」

直葉が頭をポリポリかきながら苦笑いを浮かべると、木綿季もそれに釣られるように、少しだけ口元を緩め、ほんのり笑顔を見せた。

今朝からずっと暗い顔をし続けてきた彼女の、今日初めて見せた笑顔である。

「あ、木綿季ちゃん……やつと笑ってくれたわね？」

「あ……、え……」

「ウンウン、ALOでもすっごい可愛いって思ったけど、やっぱり本当の木綿季ちゃんも可愛いんだね！」

木綿季は顔を赤くしてしまい、困り果てていた。

いきなり目の前に現れて、木綿季は悪くない。

和人を支えてくれてありがとう。

木綿季は可愛いなどと、次から次へと頭の整理がおっつかないうちに新しい情報がどんどん入ってくる。

お陰で木綿季の頭は軽くショートしかけていた。

「ねえ、木綿季ちゃん」

翠が改まって優しく木綿季に声を掛ける。木綿季は「は……ハイ！」と返事をする。と若干まだ不安そうな顔をして翠の話聞き始めた。

「何か……悩んでることがあるんじゃないかしら？ よかったら話してもらえると嬉しいわ」

「え……あ、ボ……ボクは……」

二人になんて言えいいのかわからない。

どう話しても言い訳にしか聞こえないのかもしれない。

でも……それでも、例えそうだとしても、この二人なら、ボクを受け入れてくれるかもしれない。

そう思ったら、少しだけ勇気が湧いてくる気がした。この二人になら……話してもいい。

「ボク、最初はちよっとの間だけ、和人の心の支えになればって思っ
て、一緒になったんです」

「うん」

「でも和人と一緒に冒険して、遊ぶようになって、気が付いたら和人の

こと好きになつてて……逆に、ボクのことを支えてもらつてて……」
「うんうん……それで……?」

「病気を治してくれるって約束してくれて、学校にも行かせてやるって、ボクにたくさんのことをしてくれたのに、ボクが負担をかけちゃった所為で、和人は……和人は……ッ」

「……なるほどね……」

翠は断片的にはあるが木綿季の話を聞き、大体のことを察したようだ。

聞いた話のパーツを繋ぎ合わせ、彼女が何を訴えたいかを理解する。

「つまり、和人に助けられっぱなしなのに自分は何もしてあげられないから、それで考え込んでることなのね?」

「え、えっと……はい……」

木綿季は返事を返すと、肩を落として項垂れてしまっている。

しかし先程より少し気持ちが楽になったのか、翠が手を握ってくれているからなのか、ほんのり心が安心出来ていた。

「そうねえ、それじゃあ木綿季ちゃんは……何か和人の力になれることをしてあげたいのね?」

「は、はいッ、ボク……和人の力になれるんだったら、なんでもするつもりです……ッ」

木綿季の決意が乗ったその言葉を聞き届けると、翠は表情を変え、真剣な眼差しで木綿季を見て肩を両手でがっちりと掴んだ。

「わっ! み……翠さん……?」

「木綿季ちゃん、本当に和人の力になりたいのね?」

「え……、あ、ボクは……」

「その言葉と決意に、嘘偽りは……ないのね?」

つい先日和人に言った言葉と同じ言葉を、木綿季に送る。彼女の気持ちだが、決意が本物であるかどうかを、見定めるためだ。

だからこそ、しっかりと物事を聞く。生半可な気持ちや言葉で聞き出したりしてはいけない。

「は……はいッ! ボクは和人の力に……支えになりたいんです。助

けられっぱなしは……もう……嫌だッ！」

泣いて笑っていたと思えば、今度はいつも見せている、彼女の真剣な顔つきになっていた。

何事にも全力でぶつかっていく、彼女の心からの想いが現れた表情だ。

翠は、そんな木綿季としばらく視線を合わせ続けた。彼女の想いが上っ面のものだけではないということ、じっくりと時間をかけて確かめる。

その間、木綿季は一瞬たりとも翠から視線を逸らすようなことはせずに、真っ直ぐに見つめ続けた。

「……木綿季ちゃんの気持ち、受け取ったわ」

「み……翠さん……」

「それじゃあ木綿季ちゃん、まずはその病気を治しましょう」

「……え、え!?!」

「木綿季ちゃん、あまり言いたくはないのだけれど、木綿季ちゃんのその体では、正直言って和人の力になれるとは思えないの」

「う……そ、それは……」

「ごめんなさい、気を悪くしないでね？　そこでね？　しっかり病気を治したら、その後で精一杯和人の力になってほしいの」

「和人の……?」

「和人がいいっていつでも、しつこく食い下がってついていきなさい。あの子なら……ちよつと押しちゃえば、ちゃんと受け入れてくれるわ」

そう言い放つと、翠は右手を木綿季の背中にまわし、左手で頭を自分の胸に寄せて、優しく温かく木綿季を抱きしめた。

「——ッ」

「木綿季ちゃん、退院したら……うちへいらっしやい。桐ヶ谷家は木綿季ちゃんを歓迎するわ……」

「え……?」

「もちろん、木綿季ちゃんが望めば……なんだけどね？　でも私たちはむしろ来てほしいかな……?　木綿季ちゃんに」

その言葉を聞き届けると、木綿季の目からは大粒の涙が流れ落ちていた。

何かはわからないが、温かいものが木綿季の体を包み込んでいるのを感じ取っていた。

「あれ……マ、マ……う？」

木綿季は翠の姿に、かつての自分の本当の母親の姿を重ねていた。外見こそ似てないが、その優しさは本当の母親そのままだった。

翠もその問いに、優しく、満面の笑みで応えた。

「……うん、お母さんですよ……」

「あ……、お、おかあ……さん、おかあさん……ッ、おかあさん……ッ！」

木綿季は溢れる感情を抑えることが出来ずに、翠に飛びついた。

翠の胸に顔を押し付け母親のぬくもりを数年ぶりに感じとり、滝のような涙を流しひたすらに泣いた。

そして心から安心出来た。

ボクを守ってくれるのは和人だけじゃない。お母さんがいてくれる……。

温かい……、温かいよ、嬉しい……嬉しくてたまらない。

「おかあさん……おかあさん……！ ボク……ボク……ッ」

「寂しかったわよね？ でも大丈夫よ、私たちがいるわ、木綿季……」

「うん……うん、ボク……独りなんかじゃない……ッ」

木綿季は再び“家族”を手にする事が出来た。かつて何もかもを全て失ってしまったものを、今再び手に入れることが出来たのだ。血のつながりこそないのかもしれない。

しかしもはやそんなものは関係ない。心から温かくしてくれるもの、いつぱいの大好きをくれるもの、それこそが掛け替えのない家族なのだ。

この掛け替えのないものは、木綿季にたくさんの勇気と力を与えてくれるだろう。

第28話く目覚めく

西暦????年??月??日(?)
?????

(ここは……どこだ……?)

和人の意識は現実ではなく、とある見覚えのない、霧で包まれた空間にあった。

しかし、肌で感じるこの感覚は、どこか記憶があるようなものだった。

体はゆっくりとだがある程度、ALOみたく自由飛行出来るようだ。

やがて和人は、当ても無くゆっくりと前へ前へと体を動かしている。

(どこなんだ……ここは……)

十分ほど、ただただ気まぐれに空間を進んでいくと、辺りを覆っている霧が、少しずつ晴れていっていくのがわかった。

それを視認した和人は更に前へ前へと進む。

そしてまた五分ほど進むと、霧は完全に晴れて、和人がどこかで見覚えのあるような景色が飛び込んできた。

(ここは……ALO? 新生アインクラッドか……?)

おかしい、ログインしていないのに、自分は何故ALOにいるのだろうか。

それに……翅もないし、耳も尖ってない。

妖精の姿ではなく、現実世界の姿だ。何故この姿のままALOに?

(……ん、何だ? あの樹が生えてる小島……、プレイヤーがたくさん……?)

霧が晴れると、目の前には彼がよく知っている仮想世界が広がっていた。

それも攻略済みの新生アインクラッド第24階層の、大きい樹が生えた孤島が見えている。

その島に生えた樹を取り囲むように、種族様々な妖精、即ちプレイ

ヤーだと思われる人影が無数に見受けられる。

(な……ッ、う、嘘だろ……!? 何で俺があそこにいるんだ? そ、それにあの樹の所にいるのは……!)

和人は目の前の映し出されている光景を信じる事が出来なかった。

何故なら、彼のALOでのアバター『キリト』が島の中心に向かい、膝をついていたからだ。

それだけではない、キリトが視線を送っているその先には、和人がよく知っている人物、インプとウンディーネの女の子が佇んでいる。

(アスナ……に、ユウキ……?)

キリトだけではない。リーファやシノン、リズらのSAOサバイバー。

そしてユウキが収めるギルド『スリーピング・ナイツ』のメンバーも、アスナとユウキに対して悲しそうな視線を送っている。

(な、何なんだよこれ……、何で皆そんな悲しそうな目をしてるんだよ、これじゃあまるで……)

島の中心にある樹の側には、地べたに座り込んでいるアスナと、その膝を借りて仰向けに横になっているユウキの姿があった。

アスナは優しく、まるでユウキを見送るように、彼女に温かい視線を送っている。

「ユウキ、私は必ずあなたともう一度会う」

(……アスナ……)

「どこか違う場所、違う世界で絶対にまた巡り会うから……」

(な……何を言ってるんだ? アスナ……?)

「その時には教えてね? ユウキが見つけた物を……」

やめろ、やめろ! こ、これじゃあまるで……ユウキが……、これから死ぬみたいじゃないかッ!!

(嘘だ……やめろ、やめてくれアスナ!! ユウキは……木綿季はまだ……ッ!!)

島の中心で寝ているユウキは、アスナの言葉を受け取ると、ゆっくりと眼を閉じて、目尻に涙を浮かべながら、そのアバターを透けさせ

ていく。

(や、やめろ……！)

「ボク、頑張って生きた」

(やめろ……、やめろユウキ！)

「ここで、生きたよ」

それだけ言い残すと、ユウキのアバターは完全に見えなくなり、アスナの腕の中から消えていった。

それと同時に、和人の中で何かがプツンと切れ、彼の意識がこの世界からなくなっていた。

「木綿季ツ!!」

不可思議な映像から目を覚ますと、和人は自分のいる場所があそこではないということに認識するのに、そう時間はかからなかった。

白い壁に天井、おまけに自分が乗っている白いベッド。紛れもなく病院だ。

しかし悪夢から覚めても、彼の調子は悪そうだ。呼吸は荒く、頭もぼーっとしている。

時間が経つにつれて、落ち着きを取り戻していくと、今自分がどのような状態にあるかを把握し始めた。

「ここは……病院、だよな……？ 俺はどうなったんだ……？」

荒かった呼吸を少しずつ落ち着けると、和人は自分の記憶を辿っていった。

木綿季の仮想空間に遊びにいったこと、一緒にスメラギからの宿題を解いたこと。

歌詞の意味を知り、次の方針を決めて、その後一緒に寝たこと。

そして目が覚めて、立ち上がりうとしたところでその時に……。

「そうだ、ぶっ倒れたんだ……思い出した……」

そうすると俺をここまで運んでくれたのは誰なんだろう？

木綿季……は無理だし病院の人の可能性が高い。もしかして倉橋先生が気付いてすぐ運んでくれたのかもしれない。

和人はふと自分の左手腕に刺さっている状況を理解した。そしてようやく自分の置かれていた状況を理解した。

「どうやらみんなに迷惑を掛けちゃったみたいだな……」

和人は心底申し訳ないという気持ちになった。

何より木綿季にもものすごい心配をかけてしまったことだろう。

現に木綿季は責任を感じ塞ぎこんでしまった。

しかしその木綿季も翠が救ってくれた。木綿季の母親として優しく接してくれたのだ。

「……頭がぼーつとするな……、どれくらい寝てたんだろう……」

あれからどれくらい時間が経ったのかと気にしつつ、和人は病室から見える窓の外の風景を見つめていた。

嫌な夢を見た後は、どうもその日だけは何もしなくていいかなといった気分になる。

今しがた見てしまった夢、あれこそ和人が想定していた中で最悪のシナリオそのものだった。

「……絶対させない、木綿季を死なせて……なるものか……ッ」

決意を新たに胸の中で違いを立てると、突如病室の扉がコンコンとノックされてる音が聞こえてきた。

そしてすぐに「失礼します」という男の声が聞こえ、一人の医師が病室に入ってきた。和人のよく知る人物、倉橋だった。

「か、和人君……目を覚ましたんですね！ よかった……」

「先生……、ではやはり先生が……」

「ええ……、木綿季君のお陰で早い段階で君の体の異常を発見出来ました。君は過労で倒れたのですよ」

「か、過労……ですか……」

倉橋からの診断を聞くと、和人はやっぱりなと内心思っていた。

実際、ここ最近無茶が過ぎたのだ。木綿季のた為とはいえ食事も不規則だったし、睡眠も満足にとれたとは言えなかった。

オートバイの運転を往復四時間を何度もやってたし、計画も立て、いろんなところに根回しもした。

心身ともに疲れ切っていたのだ。倒れない方がおかしかった。

「意識も回復しましたし、今後は栄養を取って十分な休息を取れば回復できるでしょう。しかし三日間は安静にしてもらいますよ?」

「……わ、わかりました。……ところで先生、木綿季は心配してませんでしたか……?」

和人がそのことを聞くと、倉橋は和人の腕に刺さっている点滴の針を抜き、新しいものと取り替えながら、真剣な表情で和人の問いに答えた。

「ええ、一時パニック状態に陥ってしまつて、危うく精神崩壊を起こしかねないぐらいの状態でした」

「せ……精神崩壊つて、ゆ、木綿季は大丈夫なんですか!」

白いベッドの上で和人は慌てて倉橋に詰め寄る。その際に点滴が刺さっている腕が管に引っ張られて少しだけ腕に痛みが走った。

その際に「痛ッ……」という言葉が漏らし、痛みを我慢しながらも和人は倉橋の顔を見続け返答を待った。

「ええ、今は大丈夫です。あの後私が声を掛け続け、落ち着きを取り戻しましたから。それに今は翠さんと直葉さんが、木綿季君の部屋に言つて励ましてくれてるはずですよ」

「それなら……よかつた……。……つて今、母さんたち来てるんですか?」

「ええ、君は気を失っていたのでわからなかつたと思いますが、この病室にも足を運んでくれます。和人君が目を覚ましたことを知れば、きっと安心することでしょう」

和人は室内の時計に目をやり、時刻を確認した。時計の針は午前7:35をさしていた。

ここまで車で片道二時間かかるとなると、彼が倒れたあの後、すぐに家に連絡がいったのだろう。

二人は仕事と学校を休んでここまでできてくれたことになる。早朝一番に家族が倒れたという報告は、さぞかし心配をかけてしまったに

違いない。

「先生……ありがとうございます」

和人から感謝の言葉を受け取ると、倉橋は「いえいえ」と笑顔で返事を返してくれた。

後で心配かけた皆にフオローをいれておかないとな、と思ったところで病室の扉が再びノックされた。

失礼しますという声は聞こえず、そのまま扉がレールにそって横にスライドされる。現れたのは母親の翠と妹の直葉だった。

「か、母さん……スグ……」

和人の方から先に声を掛けると、翠と直葉は入室するなり、最愛の家族が無事意識を取り戻しているこの光景を目にし、和人のベッドに駆け寄り手を握った。

「和人ッ！ 意識が戻ったのね……よかった……ッ！」

「お兄ちゃん！ お兄ちゃんッ！ よかったよう……、う、うう……ッ」

彼のことを心配するあまり、二人とも目には涙が浮かんでいる。

和人は「心配かけてゴメン」とだけ言い、涙を流し続ける二人を申し訳なさそうな顔をして眺めていた。

直接の血は繋がっていないのに、本気で心から心配してくれている。やはりこの二人は和人にとって『本物の家族』なのだ。

「和人君、木綿季君から伝言を二つ預かっています。聞きますか？」

「え？ あ……はい、お、お願いします」

和人が返事を返すと、倉橋はコホンとわざとらしくせき込み、木綿季から預かった言葉を、身振り手振りでそのまま和人に伝える。

「えー……」三日間絶対に無理をしないで、ボク一人で頑張るから」

もう一つは「三日経つまでにボクに会いにきたら絶交する」以上の二つです」

容赦のない木綿季からのコメントに、和人は苦笑いを浮かべながら「参ったな……」と呟いていた。

どうやら彼の想像以上に、物凄く木綿季に心配を掛けてしまっているようだ。

「木綿季ちゃん、そこまでお兄ちゃんのコト心配してたんだね……」

「……面目ない、木綿季にも皆にも滅茶苦茶心配かけちまったな……」

「そうと分かったなら、今はしつかり休みなさい？ あのマシンは……当分倉橋先生に預かってもらいます」

「う……、あ、あい……」

翠から厳しめのことを言われると、和人は明らかに肩を落として落ち込んでいた。

周りに隠れてALOにログインしようとしてるのがバレバレだった。

「ダメですよ和人君、木綿季君は君のコトを誰よりも心配していたんですから」

「は……はい……」

「木綿季君は今、君が傍にいらなくても大丈夫なように、一人で挑戦しようとしています。その気持ちを棒に振ってはなりませんよ？」

「……は、はい……本当にすみませんでした」

倉橋としては珍しく、厳しいことを並べている。倒れた患者としてでもあるが、何より木綿季を支えてくれていた一人として、彼の知り合いとしても、心配してくれていたのだ。

和人は昔からそうだ。

一人で突っ走って、自分一人で解決しようとして、何もかもを背負い込んで、終いには潰れてしまう。

彼の悪い癖の一つだ。いくら木綿季の命がかかっているからといって、無茶をしていい理由にはならない。

倉橋や翠、ちゃんと周りが見える大人達がストップパーになってあげないと、彼はどこまでも暴走してしまうことだろう。

「和人、ちよつと聞いてもらっていいかしら？」

「ん……何だい？ 母さん」

「あのね？ 木綿季ちゃんの今後のことなんだけど、正式に桐ヶ谷家で面倒を見ることに決まったから、そのつもりでよろしくね？」

「……は？」

和人はその言葉を聞き届けると素っ頓狂な顔になり、自分の母親が

一体何を言っているのか理解できていなかった。

寝耳に水、とはまさにこの事で、目が点になっている兄の顔を見た直葉は、その光景にデジャヴを感じていた。

「ま、前もこんな光景を目にしたような……」

「す、すまん母さん、何を言ってるのかわからない」

「木綿季ちゃんは退院後、桐ヶ谷家の養子として迎えることになったってことよ。つまり……家族が増えるのよ、和人」

「……………」

和人はしばらく思考を巡らせ、今聞いた情報を脳内CPUで処理を始めた。

そして少しの時間が経ち、処理が終わるとようやく母親の言ってることを理解した。

「は……はあああッ?!? いつの間に決めたんだよ!?!」

病院内にあるまじき大ボリュームで和人が奇声を上げる。

他の患者のことも考えたら近所迷惑どころの騒ぎではない。彼が患者でなかったら、即叩き出されているレベルだ。

そんな和人の慌てようが面白かったのか、翠はくすくすと笑いながら、ニコニコ笑顔でこの成り行きの説明を聞かせる。

「ついさっきよ? 木綿季ちゃんのところは直葉と一緒にいつてきたのよ。フルダイブまでしてね、そしたら木綿季ちゃん、私のこと"お母さん" って呼んでくれて……嬉しかったわあ……」

「あたし、ちよつと泣いちゃった」

自分の知らないところで、とんでもない話が前に進んでいつている。

しかし冷静に考えてみたらそうだ。木綿季は家族全員を失っている。

この先病気が治っても、引き取り手がいなければ施設に預けられることになるだろう。

ならば、両親共働きで蓄えのある桐ヶ谷家で面倒を見るのが手っ取り早いというか、合理的なのだろう。

「ってことは、あそこで一緒に暮らすってことになるん……だよな?」

和人が当然生まれた疑問をぶつけると、翠と直葉は口をそろえて「当たり前じゃない」とにこやかに答えを返す。

一切曇りのない回答に、和人は正直対応に困りきっていた。

俺と木綿季が一つ屋根の下で一緒に暮らす？

いや、嬉しい、確かにそれは嬉しいが、心の準備というものが出来ていない。

第一俺の家に空き部屋なんてあったっけか？

も、もしなかったら、木綿季は……その、もしかしてもしかすると……。

「へ、部屋はどうするんだよ！ 空き部屋なんてなかったはずだろう？」

「二階にある物置部屋を開けて、そこを木綿季ちゃんの部屋にすればいいわ。物置なんてあとからいつでも建てられるし」

「あんなにたくさん物が入ってるんだぞ!? すぐ物置が建つわけないだろう!? それまではどうするんだよー!」

「和人の部屋で一緒に暮らせばいいじゃない」

数々の質問を次々と簡単にいなし、更に翠はここでまた核弾頭を投下した。

それも、地球全土が焦土と化すぐらいの規模の爆弾を。その爆撃を盛大に受けた和人に、直葉が更に援護射撃という名の追い打ちをかける。

「お兄ちゃん、木綿季ちゃんと一緒に暮らせるのが嬉しくないの?」

今度は回りくどくなく、直球ど真ん中で疑問を投げかけてくる始末。

何故だ、何故自分の周りの女性は俺を追い詰めるのが好きなんだ。

それも、色恋沙汰などに非常に敏感で、頼んでもいないのにお節介を焼くような連中ばかりだ。

そう思いながらも和人は顔を赤面させながら、細々と自分の素直な気持ちを言葉に表した。

恥ずかしくてここから逃げだしたくなってきたが、ベッドの上で点滴に繋がれて、周りを囲まれていて、何処にも逃げ場というものはない。

もう、答えるしなくなっちゃってしまっているのだ。

「……う、べ、別に俺は……木綿季と暮らしても、いいかなって思っているさ……」

和人がその言葉を口にした瞬間、どこからか『ピピッ』という機械音が聞こえてきた。

その際、何故か直葉が不敵に微笑んでおり、その片手に彼女のスマートフォンが握られている。

和人はまさかまさかとは思いつつも、額に嫌な汗をかきながら、恐る恐る直葉に何をしていたのかを問いただす。

「……なあ、直葉さん？ も、もしかして今の俺の……」

「うふふ……、いっつもやられてばかりだからお返しだよ、お兄ちゃん！ 早速木綿季ちゃんに聞かせてくるねー！」

かつて今まで見たことのない悪い顔を見せながら、直葉はパイプ椅子から立ち上がり、颯爽と部屋の出口まで向かっていった。

「ちよ……す、スグ！ あ、いや直葉さん!? 待って！ 待ってくれええええ!?!」

和人の悲痛の叫びも虚しく、そんな言葉程度で直葉が足を止めるはずもなく、無情にもスグの姿は見えなくなった。

そのなんとも言えない哀しい現実には、激しく和人は肩を落として項垂れた。

「……恥ずかしくて死にたくなってきた」

「ふふ、まあまあ和人、いいじゃないのよ」

「……母さん、楽しんでないか?」

「いいえ? そんなことあるわけじゃないじゃない♪」

とは言いつつも、くすくす笑いながら肩を震わせていては、まるで説得力が感じられない。

人の親でも翠は女性。色恋話に興味が無いはずがない。ましてや自分の息子だ、気にならないという方が無理な話だ。

そんな微笑ましい親子のやり取りを見ていた倉橋は、絶えず笑顔を浮かべていた。

木綿季の退院後の生活も、この様子なら安心して任せられそうだな

と、そう感じていた。

「もう大丈夫そうですね。それでは私はこの辺で仕事に戻ります」

「そうですか、先生……お忙しい中ありがとうございます」

「いいえ、それはこちらの台詞です。木綿季君のこと、一人の医師として……いえ、木綿季君の……義父として、お礼を言わせてください」

木綿季の義父。倉橋は自らのことをそう言った。

あながち間違いいではない。身内を全て亡くした木綿季にとっては、倉橋が一番付き合いが長い人物だ。

自分の体のことを一番よく診てくれていて、一番気遣ってくれている。

彼はもう、木綿季にとって二人目の父親も同然なのだ。

「先生……よしてくださいな。私たちは私たちに出来ることをしているだけです。それに木綿季ちゃんが桐ヶ谷家来てくれるのは、私達も凄く嬉しいんですから」

「……ええ、ありがとうございます……」

今思うと、とても考えられなかった。

長年頭を悩ませていた木綿季の病氣、それが治る可能性があること。

更には木綿季の面倒を見てくれる家庭があること。これまで茨の道を歩んできた木綿季が、漸くその道を抜けて、暖かい場所へと辿り着くこうとしている。

桐ヶ谷家は必ず彼女を幸せにしてくれる。倉橋はそう確信していた。

「では、私はこれで失礼します。和人君、お体大事になさってくださいね？ 木綿季君のためにも……」

「あ、は、はい、気を付けます……」

その言葉を聞き届けると最後に笑顔を見せて、倉橋は病室を後にした。

立ち去る際、扉の隙間から改めて一礼をし、ゆっくりと扉を閉める。

彼が立ち去ると、室内は桐ヶ谷親子だけが残されていた。

「さてと、それじゃあ私たちもそろそろ帰るわね？」

翠は元気な和人の姿を見届けると、ゆつくりとパイプ椅子から立ち上がる。

パイプ椅子を部屋の片隅に片付けると、病室のドアに手を掛けたところでこちら側に振り向き、一言だけ残した。

「和人？ 何度も言ってるけど、自分だけ頑張るのはやめなさい。もっと周りの人を、大人を頼りなさい」

「……ああ、本当に心配かけて、ゴメン、母さん……」

SAO事件の時もそうだったけど、何かとこの息子は手間をかけるんだからと、翠は心の中で溜め息を吐く。

しかし、子というものはそれでいい。親に頼れるうちに頼って、少しずつ成長していけばいいのだ。逆に、頼られないとあつては不安に駆られてしまうというもの。

和人からの言葉を聞き届けると、翠はニコツと母親らしく優しく微笑んだ後「またね」と呟いて、彼の病室を後にした。

彼女が立ち去り、和人一人きりになると、急に病室は静寂に包まれた。

窓の外から微かに聞こえてくる海風の音と、車の走行音、そして病室 扉の外から聞こえてくる看護師や患者の声が僅かに聞こえてくるだけであった。

「木綿季のやつ、三日経つまでに会ったら絶交とか……、手厳しいぜ全く……」

ああは言ったが、勿論木綿季は絶交する気なんてさらさらない。ただ、それぐらいに和人が心配なだけなのだ。

しかし木綿季はこの短期間で、和人のことを多く知ってきた。もちろん無茶しやすい性格だということも知っている。

なので絶対に無茶をさせないように、倉橋にあのような伝言を頼んだにすぎない。自分が和人なしでも大丈夫なぐらい強くなればいい、心も体も。

「今回ばかりは俺が悪いからな、木綿季の意思を尊重するとしよう……」

昔から周りに言われてきたことが、この年になって漸くわかりかけ

てきたようだった。

明日奈に言われ、里香に言われ、妹の直葉や恋人の木綿季にまで言われている始末。

ここで反省しなくては、彼は前には進めないだろう。

「む……腹、減ったな……。何か持ってなかつたかな」

一人きりになった和人は、自分が空腹だということに気が付いたようだ。

今朝から何も口にしておらず、ずっと点滴を打っていた彼の胃袋はすっかり空っぽになってしまっている。

現在の時刻は午前十時。

本来ならば患者の朝食は七時からなのだが、和人は今さっきまで意識を失っていたため、食事は用意されていなかったのである。

和人は何か食べるものはないかと、自身の寝ているベッドの真横にある、小さなシエルフの上に畳んで置かれている自分の上着を探ってみる。

すると内ポケットにカロリーメイトと栄養ドリンクが入っているのを発見した。昨夜買ってきたものだ。

「今の俺におあつらえ向きだな、とりあえず悪くなる前に胃にぶち込んじまうか」

まずはカロリーメイトの封を解き、それをそのまま口に放り込む。味は携帯食料ともあり、美味しいとも不味いと言えず、それなりの味だ。

しかし水分が皆無のため、彼の口の中は途端にパサパサになってしまった。

そして次に手をとったのが栄養ドリンク。金属製の蓋を回転させると『カシユツ』といい音が鳴る。

掌より小さいサイズの小瓶に入れられた液体を、一気に胃に流し込む。

「……う、絶望的にあってないな……この組み合わせは……」

甘いのかどうか微妙な口触りに、独特の薬味がする栄養ドリンク。お世辞にも美味しいと言えるようなコンビではない。

しかし腹はそれなりに膨れた。栄養もこの二種類なら多分大丈夫だろう。

昼食と夕食もできることだし今はゆっくりと体を休めることが出来るそうさ。

「ふわあ……、ちよつと眠くなってきたな……休めって言われてるし、大人しく眠るとするか……」

病人や怪我人は、食べて寝るのが仕事だ。

一刻も早く日常に復帰したいのなら、しっかり食べて薬を飲み、医師のいうことをちゃんと聞いて、あとはぐっすり寝るのがベストなのだ。

和人はベッドに横になり、ゆっくりと目を閉じ最愛の人の名前を言いながら眠りについた。

「……おやすみな、木綿季……」

同日 午前10:25 横浜港北総合病院 無菌室前

『……う、べ、別に俺は……木綿季と暮らしても、いいかなって思っているさ……』

あれから直葉は早速、木綿季のいる無菌室前まで足を運び、彼女に先ほど録音した音声を聞かせていた。

恥ずかしながらも精一杯、自分の正直な気持ちを吐き出した時の音声データを、これみよがしに木綿季に聞かせ続けている。

「……っっていうワケなんだけど、どう思う木綿季ちゃん？」

直葉はニヤニヤしながら自分のスマホから、先ほど録音した音声を木綿季に聞かせ続けていた。

あんな恥ずかしく、歯の浮つくようなセリフを、何回も何回もリピートさせていた。

それを聞かされ続けていた木綿季は、仮想空間の中で耳まで真っ赤にして恥ずかしさに悶えていた。

『す、直葉ちゃん……も、もう勘弁して……』

「あははは！ 木綿季ちゃんかわいいー！」

木綿季は完全に直葉の玩具にされていた。

彼女自身も恥ずかしくて死にそうだが、内心は嬉しかった。

退院後ちゃんと暮らせる家庭が用意されていること、そして何より、大好きな和人と一緒に暮らせることが嬉しかった。

最愛の姉、藍子が亡くなって一年、木綿季は家庭とは程遠い場所で、ずっと一人で闘病生活を続けてきた。

普通の家庭なんて、もう戻れないと思っていた。しかし、彼女にはまた帰るところが出来た。

ちよつと無茶しがちな兄と、少々意地悪な姉がいるが、温かい家庭が彼女を待っているのだ。

『直葉ちゃんの……意地悪……』

「あははは！ ぐめんぐめん！」

直葉は一通り木綿季の反応を楽しむとスマホの電源を切り、ポケットに仕舞った。

そして無菌室の向かいに置かれているベンチに腰を落ち着かせ、ゆっくりと会話を始めた。

「木綿季ちゃん、お兄ちゃん言ってたよ？ 心配かけてごめんって……」

『……うん……』

「支えになつてやれなくてごめんって……」

『……そっか、和人はこんな時でも優しいんだね……』

「うん、お兄ちゃんは昔から優しかったよ？ 私も一度も怒られたことなかったもん」

『そう……なんだ』

和人は確かに優しい、優しすぎるほどに優しい。しかし、今回はその優しさがあって、自身を過労にまで追い込んでしまった。

木綿季も、自分のことで負担を掛けすぎてしまったと、後悔と反省

の念を抱いている。

もう、彼の優しさに甘えないようにしなくては。これ以上、彼を追い込んでしまうわけにはいかない。

「そうそう、お兄ちゃんへの伝言はちゃんと先生が伝えてくれたよ？」

『あ、そうなんだ……ありがとね。直葉ちゃん』

「んーん、私は何もしてないよ」

仮想世界の中にあるモニター、そこにはベンチに腰掛けている黒髪の女の子が写っている。

これから家族になるはずの女の子、桐ヶ谷直葉。

彼女はメデイキュボイドに取り付けられているカメラのレンズを、真っ直ぐ見つめている。

そんな直葉に、木綿季は仮想世界の中で真っ直ぐに腕を伸ばす。

だが、直葉のいる所には届かない。本当は未来の姉の胸で、思いつきり甘えたかった。

しかし木綿季はそんな想いを無理やり押さえ込み、手を胸に当てて、直葉に自分の胸の内を語る。

『直葉ちゃん、あのね？ ボク……和人がいなくても大丈夫のように、強くなるうと思うの』

「え……、木綿季ちゃんはもう十分強いじゃない、絶剣って呼ばれてるぐらいだし……」

『んーん違うの、決闘デュエルのことじゃないの。もっと心を強くしないとけないの』

「心……？」

『うん、心。和人に甘えっぱなしのボクじゃだめなの。もっと……ボクも成長しないとけないんだ』

「……そっか、やっぱり木綿季ちゃんはすごいね」

武道の心得がある直葉には、なんとなく木綿季の目指しているところがわかるような気がしていた。

心・技・体、これら三つの心得を常に鍛えておかなければ、武道で勝ち続けていくのは難しい。

その中でも一番大事なのは心とされている。

どんなに鍛え上げられた肉体でも、研ぎ澄まされた技巧でも、心がダメでは何の役にも立ちほしない。

だからこそ、直葉は木綿季の気持ちがちよつとだけわかったいたのだ。

『それとね？　ボク、和人には決闘デュエルでもこの前完敗しちゃったよ？　えへへ』

「え……ええッ!?　木綿季ちゃん負けたの!?　あ……、つてことはお兄ちゃん、二刀流使ったんだ……」

『うん、すつごく強かった。全然何もさせてもらえなかったよ』

「あはは、そりゃあ……あたしたちのお兄ちゃんだもん」

『……う、うん、そうだよね♪』

直葉と木綿季は自分たちの自慢の兄の話を続けていた。

和人は木綿季の恋人であると同時に、やがて義兄となるのだ。その妹である直葉は、彼女の義姉となる。

木綿季はそれが嬉しくてたまらなかった。

『ねえ直葉ちゃん。ボクこれからALOで歌のレッスンがあるんだけど、和人の代わりに……ててくれないかな……?』

「歌の……レッスン?」

「うん、今週末のチャリティーの為に、セブンにレッスンしてもらってるんだ」

「そうだったんだ。今日は学校休んだから、帰宅してからなら、大丈夫だよー!」

『ホ……ホント?　……えへへ、ボク、嬉しいなあ♪』

メデイキュボイドのスピーカーから、嬉しそうな声が聞こえてくる。

今まで末っ子だった直葉は、こんな可愛い子が自分の妹になるのかと、期待に胸を踊らせていた。

「あ、あとさ、ちゃん付けじゃなくて……普通に呼び捨てでいいよ?」

『……え?　で、でもボクが養子になるなら、直葉ちゃんはお姉ちゃんになるから、呼び捨てするのはどうなのかな……』

「ふーん……、でもお兄ちゃんのこととは呼び捨てじゃない」

ついで言ってしまうと、ALOでも互いのことは呼び捨てで呼び合っている。

なので今更改まって呼び方を帰る必要はないのではないのかと、直葉は思っていた。

『ええ!?…でも和人はその……こ、恋人だから……』

木綿季は仮想空間でもじもじしている。

もうメデイキュボイドの外からでも、彼女がどんな仕草をしているか安易に想像できてしまう。和人と同じで非常にわかりやすい性格だ。

「お兄ちゃんのこととは呼び捨てで呼べるのに、私だけちゃん付けなのー?」

直葉はわざとらしく語尾を伸ばして、少々意地悪気味に声を掛け続ける。

あくまで姉は私だ、姉の言うことは聞くもんだと言わんばかりに、是が非でもちゃん付けをやめさせようとしていた。

『……ぐ……は……』

「……うん?」

聞こえるか聞こえないかくらいのボリュームで、何やら木綿季が呟いている。

途中からしか聞こえなかった直葉は、もう一度スピーカーに耳を済ませて、木綿季からの呼びかけを待っている。

『すぐ……は……』

今度はちゃんと聞こえた。

自分の名前を聞いた途端、直葉は嬉しきでたまらなくなった。

欲を言えば「お姉ちゃん」と呼んでほしいところだったが、今はこれでいい。

それよりも、以前より木綿季との距離が近くなった気がして、心底嬉しくなってきた。

「ふふ、ありがとう、これからもよろしくね!」木綿季!」

『う……うん! よろしく!』直葉!」

木綿季の心は一気に温かくなっていった。

ここ数日で恋人ができ、親友と再会でき、更に家族も出来た。ボクの心はいっぱいになっていた。

こんなにボクの心がいっぱいになったのは、みんなのおかげだ。明日奈が、直葉が、お母さんが、そして……和人がいてくれたから。ボク、いつか絶対みんなに恩返ししなくちゃ。ボクに出来る範囲で、少しずつでいいから、何か返していかないと、バチが当たっちゃう。

「んじゃあ木綿季、あたし帰るね！またあとで会おうね、あっちで！」
「あ……うん！　またあっちで会おう！　またね、直葉！」

直葉はそう言うのと笑顔を絶やさず、無菌室を後にした。

木綿季も直葉の姿が見えなくなるまで、仮想空間で手を振り続けた。
いた。

やがて姿が見えなくなると手を振るのをやめ、心静かに自分がやるべきことを考えていた。

今のボクの役目は、ライブを成功させて何が何でも生き残ること。生き残って……いや、生きて和人に、お世話になったみんなに、絶対に恩返しするんだ！

木綿季の決意は固かった。

その固い決意はどんな困難が立ちかはだかろうと、壊れることはないだろう。

大好きなみんなとこの世界で暮らしていくために一歩一歩強く、木綿季は生きるために歩を進めていった。

『ようし……リンク・スタート!!』

第29話く絶歌く

西暦2026年2月3日（火）午前11:55 新生アインクラツ

ド第22層湖畔エリア キリトのホーム前

「ラララ……」

トレーニング始めの頃とは打って変わって、透き通るような綺麗な歌声が22層の湖畔に響き渡る。

左手を胸に当て、右手は外側に広げて腹の底から声を出す。高い声から低い声まで、じゅんぐりに入念に歌声を響かせる。

セブンから教わったボイストレーニングの効果はてきめんで、今日も最高の声を出すことが出来ている。

「初めはてんでへたつぴだったのにな……♪」

この道のプロであるセブンを唸らせられるだけの素質があつたなんて、自分でも驚きだ。

現実世界じゃ寝たきりで、なんの力も持っていない自分に、こんな一面があつたなんて、思ってもみなかった。

でも、そのおかげでボクは新たな人生を歩むことが出来そうなどころまでできている。

こうなったらとことんまでやりきるしかない。やってやりぬいて、絶対に現実世界に帰ってみせる！

右の拳に力を込めてギュツと握りしめると、自分で自分にやる気を注入する。

ライブが成功して骨髄が手に入れば、この病気を治すことが出来る。そうすれば和人と一緒に暮らせる。

優しいお母さんやお姉ちゃんも一緒だ。また暖かい家庭で毎日を生きていくことが出来るんだ。

「ようし、頑張るぞー」

ユウキが気合を込めてモチベーションを上げていると、彼女の上空からなにやら風を切る音が聞こえてきた。

人の気配も近付いてきたこともあり、ユウキは何だろうと思いつながらその方向に視線をやる。

するとそこには、やがて自分の家族になるはずの、シルフ属の女の子が近付いてくる様子が目に飛び込んできた。

「ユウキィー！　来たよー！」

金髪の長いポニーテールと、緑色の衣服をなびかせながら、翅を大きく広げた妖精が、新しく出来た自分の妹に会うためにやってきた。

その姿を捉えたユウキは目を輝かせ、嬉しそうに笑顔になり、両手を大きくぶんぶんと振り、新しいお姉ちゃんに、ここだよと合図を送る。

「リーファー！」

「ユウキー！」

22層の転移門から真つ直ぐにここを目指して飛んできたリーファは、地上にいるユウキ目掛けて一直線に下降し、その胸に飛び込んだ。

両手を広げてリーファを待ち構えていたユウキは、そのまま飛び込んできた彼女を受け入れた。

全種族中、一番の空中移動速度を誇るシルフであるリーファの飛び込みは結構な衝撃があったが、ユウキは優しくリーファを受け止めていた。

「リーファ……！　リーファー！　来てくれた……！」

「うん……！　きたよ、ユウキー！」

ユウキの胸に飛び込んだリーファは、右手を彼女の背中に、左手を後頭部に回して自分の方へと寄せ、ぎゅつと優しく抱きしめる。

いきなり抱き寄せられたユウキは少しだけビクリしていたが、リーファから伝わってくる暖かさを感じ取ると、目を瞑って彼女に全てを委ねていた。

実の姉のラン、親友のアスナ、恋人のキリトとも違った彼女独特の暖かさを、ユウキは全身で感じ取り、その心地良さに酔いしれている。

「リーファ……温かい、姉ちゃんやアスナと同じ匂いがする、お日様の匂い……♪」

「お姉さんと、アスナさん……？」

「……うん、すごく温かくて、安心出来るんだ……」

そう言いながらユウキはリーファの豊満な胸へと自分の顔を押し当ててる。

ユウキの事情を知っているリーファは、何も言わずに彼女をより強く抱きしめた。

今抱きしめているこの目の前の女の子は、自分以外の家族を全員亡くしている。

当然、最愛の姉であった紺野藍子こと、ランもHIVで他界しているのだ。

故に、リーファからの愛が嬉しかった。自分にまた姉が出来るのが、たまらず嬉しかった。

「お姉……ちゃん……」

「……うん、お姉ちゃんだよ……？」

ユウキの目尻には、ほんのり涙が浮かび上がっている。確かに彼女とは血は繋がっていない。

しかし、ユウキにとってそんなことはもう関係なかった。

家族であるために、本当に大切なものとは何なのか？ 血の繋がりが？ 同じ家で暮らすことか？

いや、そうじゃない。一番大切なのは……「愛」だ。

「あたしね？ ユウキが家に来るの……すごく楽しみにしてるんだ」

「……ボクも、早く病気治して……、皆と一緒に暮らしたい……」

リーファから少しだけ顔を離し、ユウキがそう呟くと、そんな心配そうな気持ちを払拭すべく、リーファがユウキの肩を両手で掴み、元気を注入するために、声を掛ける。

「その為にも、ライブ、頑張らないとだよ！ 大丈夫、ユウキならやれるよー！」

自分を真っ直ぐに見つめてくるリーファの目に、ユウキも思わず視線を合わせる。

その目は頼もしくもあり、勇ましく、そして優しくもあった。

見れば見るほどに、胸の奥から元気が湧いてくる、そんな気がして

くる。

「……うん、ありがとう……！」

二人の間に笑顔が交差される。そのやり取りは、実に仲睦まじく、微笑ましい本当の姉妹のような関係に見えていた。

「ふんふん♪」

ユウキはご機嫌で鼻歌を歌っている。

キリトのログハウスの近くに生えている、大人が四人ほど座れそうな太さの切り株に、リーファとユウキが並んで腰を落ち着けていた。

ユウキは鼻歌を交えながら、ライブ当日歌う曲の歌詞をニコニコ笑顔で見つめ、リーファは自身の顎を両手の掌で支えて、彼女の歌声に耳を傾けている。

「ユウキの声、キレイ……」

「へ？　そ、そう……かな……？」

両足を交互にパタパタとさせ、長い金髪のポニーテールを揺らしながら、彼女の歌声に聞き入っていると、ユウキは小っ恥ずかしそうに頬を赤らめて、自分の頭をポリポリとかいた。

リーファも決してお世辞で言った訳では無い。

透き通るようなユウキの歌声が、本当に聞きいるほどの美しさだったからこそ、本音を言ったに過ぎない。

しかしユウキからしてみれば自分なんてまだまだ、セブンの足元にも及ばないと謙遜している。

剣の腕には自信があっても、マイクを握っていくのにはまだまだ練習が足りない。

だから今褒められると、恥ずかしくてたまらない。

「ねえ、もっと聞きたいな、ユウキの歌声♪」

「え……、ぼ、ボクの……？」

「ダメかな？」

リーファがユウキの顔を覗き込むように見ると、ユウキは思わず彼女から視線を逸らしてしまう。

練習の時は気にならなかったが、いざ聞かされると恥ずかしさが出てきてしまうのか、リーファに歌声を披露するのを躊躇してしまっていた。

「う、うう……」

ユウキがいくらはずかそうにもじもじしていても、リーファは一向に主張を曲げようとはせず、ただただユウキに真っ直ぐな視線を送り続けている。

じーっと、ひたすら見つめられてるユウキも我慢を続け、彼女からの視線に耐えている。

しかし根比べはリーファの方に軍配が上がったようだ。

ユウキが小さく溜め息を吐き出すと、項垂れていた顔をゆっくりと上げ「い、一回だけね？」としぶしぶ彼女からの要求を承諾する。

「……すう……ッ」

「……………」

ユウキは体をリラックスさせると、すうっと息を吸いこみ、腹に力を込めて、喉から声を出した。

ちよつとだけ恥ずかしかったが、セブンに教えてもらったボイストレーニングのことを思い出すと、すぐにいつも出している声が出てくれた。

本番当日には、何千人何万人という観客に聞いてもらうことになる。

リーファ一人に聞いてもらうだけで恥ずかしがってしまうならば、とても大勢の前でなんか歌えないだろう。

これは予行練習、そう思えばいい。

そう意識すると、ユウキはすっかり自分から緊張感が抜けているのに気付いた。

すると、無駄な力が抜けていき、これまで練習を積み重ねた成果を、惜しむことなくひびかせることが出来た。

「……………」

切り株に腰掛けながら、リーファはユウキの歌声を聞き入っている。

今までこんな美しい歌声は聴いたことがない。透き通っていて、でも可愛くて、それでいて心に響く。

聞いているだけで涙が出てくる。人々を感動させる為の、素晴らしい歌声だ。

あまりにも感激したのか、リーファの目尻にはうつすらと涙が浮かび上がっていた。

涙の粒は少しずつ大きくなり、やがて目から溢れ出ると頬を伝って落ちていき、リーファの装備を濡らした。

「…………ど、どうかな…………？」

当日歌う予定のサビの部分を書いたユウキが、リーファに感想を求めた。

右手を胸に当て、左手は背中に回し、少しだけ恥ずかしそうにしながら、姉の感想を待つ。

ユウキの歌声を聞いたリーファは、涙を指で拭いながら一言「すごく、素敵だった……………」とシンプルな感想を漏らした。

それ以上気の利いた言葉が見つからず、申し訳ないと思っていたリーファだったが、感想をもらったユウキが「ありがとう、リーファ♪」と嬉しそうに声を掛けながら、彼女を抱き締めた。

「絶対成功するよ、ユウキなら大丈夫だよ！」

「…………うん、ありがとう、お姉ちゃん…………♪」

ユウキが歌声を披露して数分、二人は再び切り株に腰を下ろしていた。

お互いに女の子なことあつて、次から次へと話題が耐えない。

洋服の趣味のこと、いきつけの喫茶店の美味しいスイーツのこと、学校生活のことなど、現実世界での話に花を咲かせていた。

現実世界、今ユウキが最も懂れている世界だ。本来ならその世界で生きていくのが普通だ。

しかし、HIVに感染しAIDSを発症してしまったユウキは、治療のためにメデイキュボイドを使用している。

故に以来三年間に渡り、仮想世界での生活を余儀なくされている。初めは死を受け入れ、仮想世界でたくさんの思い出を作ろうと毎日を必死で生きてきた。

しかし、病気が治る可能性が出てくるとなると、話は違ってくる。またあの世界に戻れるかもしれない。自分の脚で歩くことが出来るかもしれない。

キリトやアスナと、現実世界で遊べるかもしれないんだ。そう思うと、ここ数年忘れていた『希望』という気持ちが蘇ってきた。

皆が自分を助けようとしてくれている。ならば自分だって頑張らないわけにはいかない。

現にこうして、お姉ちゃんもすぐ側で元気づけてくれている。

なら、やろう、やり遂げよう。

精一杯やって、やり抜いて、また笑顔で現実世界に帰れるように、後悔しないように、全部全部成し遂げよう！

胸の内に希望を抱きながら、ユウキはリーファに笑顔で話を振り続ける。

「ボクね？ リーファといろんな所遊びに行ってみたいなあ」

「うん、あたしも……ユウキとお買い物とかしてみたい！」

「なら、本番に向けて……より一層頑張らないとね？ ユウキちゃん」

リーファ以外に、ユウキ達に話しかける声があった。その声の主を探すために、二人は声の聞こえた方向に視線をやる。

ザツザツという足音を響かせながらこちらまでやってきたのは、今回のチャリテイーライブに全面的に協力してくれたセブン、その姉のレイン、助手のスメラギが揃い踏みで姿を現した。

時刻は正午過ぎにさしかかり、本日の歌のレッスンが始まろうとしている。

昨夜出された宿題を提出するとともに、より一層上達するための手ほどきを受けなくてはならない。

本番は週末、この平日の間だけという短期間で、完璧か、それに近いものに仕上げなくてはならない。

今日のレッスンも厳しいものになるのは避けられないだろう。

「セブン……！」

「プリヴィエイト♪ ユウキちゃん、リーファちゃん」

「こんにちは、セブンちゃん、レイン」

「うん、こんにちはだね♪」

スメラギただ一人を除いて、集まったメンバーの間に挨拶が交わされる。

本当はこのまま談笑といきたいところだが、そうもいかない。

ユウキには時間が残されていない。本来ならば一秒も無駄には出れない。目覚しい成長を遂げたとはいえ、大勢の観客を感動させるためには、まだまだ修練が足りない。

この道のプロフェッショナルであるセブンやレインに、みっちり鍛えてもらわなければならないのだ。

「よし、ユウキちゃん、早速レッスン……といきたいところなんだけど」

セブンが自身の銀色の髪のお下げを指でいじくりながら、ユウキに声をかけた。

ユウキは待つてましたと言わんばかりに切り株から立ち上がり、こっちは準備万端だよと、目で訴えながら、やる気に満ち溢れた顔で受け答えをする。

「うん！ ボクはいつでも始められるよ！」

「うん、でもその前に……見てもらいたいものがあるの」

そう言いながら、セブンはスメラギのいる方に視線をやる。するとアイコンタクトが通じたのか、スメラギはユウキの手前まで近づき、左手で何かを表示させて、彼女の前に提示してみせる。

「ん……これ、なあに？」

「見てわからぬか？ チャリティーライブのチケットの販売状況だ」
「……………え？」

目の前の一覧表、そしてスメラギからの言葉を耳にすると、ユウキは目を丸くして固まってしまった。

つい今しがた、正午から始まったチャリティーライブのチケットのネット販売、そのチケットがたった五分で完売したというのだ。

今ユウキたちが見ているホロデータには、セブンが自身のオフィシャルサイトで販売している公式のデータだ。

これ以外に委託販売などのデータも合わさると、更に販売件数は伸びることだろう。

ひたすら歌のレッスンにばかり集中していたユウキは、背後でしつかりとことが運んでいるのを目の当たりにし、改めて凄いことに首を突っ込んでいることを自覚した。

「はわあ……すごいね……。どうしてこんなことに……」

ユウキの後ろから表を目にしたリーファにも、同じように驚きの表情が浮かぶ。

確かにセブンのライブのチケットが完売することは珍しいことではない。

クラウド・ブレイン計画の一件で、ファンやクラスタが一部減ってしまったのにも関わらず、一定数の根強い人気は継続出来ている。

しかしそれでも彼女のライブのチケットが完売になるまで、販売開始から平均で凡そ十五分ほどかかってしまう。

それを遥かに上回る速度で、チャリティーライブのチケットは完売したというのだ。

「正直言って、ちよつと悔しいかなってね。今回チケット買ってくれたみんなは、ユウキちゃんみたさにつてのが多いと思うの」

「ボ、ボクを……？」

セブンがそう言うのと、ここにいる全員の視線がユウキへと集まった。

一気にジロジロと見られているユウキは、微妙な居心地の悪さを感じ

じ、あたふたと困り果てている。

「当然じゃない？ キリト君より強くて、絶剣って呼ばれてるユウキちゃんが歌うのよ？ 注目されないわけじゃないじゃないのよ」

「み、皆がそう呼んでるだけだって、それにボク……キリトより強くないよ？ この前コテンパンにやられちゃったし」

ユウキがキリトとの決闘^{デュエル}で負けた。その事を聞くとセブンたちは固まってしまった。

ALOで一番の実力を持つと言われていたユウキを、キリトが負けしたという事実。

デュエルトーナメント開催時、キリトがユウキに敗北した様を大観衆が見ていた。

キリトですら勝てないこともあり、もう彼女を超えるプレイヤーは現れないだろう。そう思った矢先に、今度は逆に彼女が彼女を負かしたと言う。

情報が二転三転し、一行はちよつと混乱に包まれている

「流石に二刀流のキリトには勝てなかったよー」

そう言いつつ、ユウキは自身の頭を右手でポリポリと苦笑いを浮かべながらかいている。

「……で、そのキリト君は？ 確かユウキちゃんの病院に泊まってるはずでしょ？」

「え……、あ……、う、うん……」

周りを見回しても彼の姿はない。

ここどころユウキとキリトは二人で一人、それが当然のようになってる中で、彼だけがないということに、セブンが違和感を覚えていた。

どうして彼は今、彼女の隣にいないのだろうか。

しかし、責任を感じているユウキは気まずさもあり、頑なに彼の現状を話そうとはしなかった。

右腕を背中後ろへ回し、左腕の肘の辺りを掴み、顔も少し俯き、視線も明後日の方向を向いている。

彼女が至極話しづらそうにしていると、見かねたリーファが助け舟

を出そうと、ユウキとセブンの間に入るように何歩か足を動かした。そしてセブンの前に立つと、ゆっくりとその口を開いていく。

「セブンちゃん、お兄ちゃんしばらく来られないんだ。ちよつと無茶がたたって……今寝込んでるの」

「……過労、なんだって……」

「か……過労!?　ちよ、ちよつと彼大丈夫なの……?」

キリトが倒れたことを伝えられると、セブンとレインは驚きの表情を見せる。

キリトのこれまでの頑張りに関しては、直接はユウキだけしか知らない。一番長く隣にいた彼女が、彼がどれだけ頑張ってきたかをよく知っている。

ユウキは重たい口をゆっくり開けて、何故キリトが倒れてしまったかを、伝わりやすいように掻い摘んで三人に説明を始めた。

話している間のユウキの表情はというと、話を進めれば進めるほどに右肩下がりに落ち込んでいき、全部を伝え終わる頃にはすっかりしおれてしまっていた。

声も段々と小さくなり、最後の方は耳をすませていてもほとんど聞こえないくらいにボリウムが下がっている。

「ボクがいけないんだ、キリトに頼りすぎてたばかりに……」

「な……何言ってるの、それは仕方ないじゃない。ユウキは病気なんだから」

彼女の内情を理解しているリーファが、そんなこもはないと必死にフォローを入れる。

実際問題、ユウキに全ての責任があるかと言われると、実はそうでもない。

彼女の体は弱りきっており、誰かを頼りにしないと生きていけない状態だ。

これに関しては彼女に落ち度は全くない。メデイキュボイドの被験者として貢献してくれていることを考えると、むしろよく頑張っている方だと言えよう。

ただ、今回のことに関しては単にキリトが頑張りすぎただけなの

だ。

確かにユウキには時間はあまり残されていないのは確か。焦ってしまうのも頷ける。

しかしそこで自分の体を蔑ろにしてしまったては元も子もない。

ユウキの体が心配なのも分かるが、キリトはそれ以上に自分の体をいたわるべきと言えるだろう。

「……ボク、何してるんだろ……」

近くの切り株に腰を下ろしながら、地面の方向を向き、大きく溜め息を吐き出しつつ、ユウキがボヤク。

「大切な人に負担をかけて、色んな人にわがまま言って、迷惑かけて、そこまでして生きようとして……」

自暴自棄になり始めたユウキの発言に、周りが凍りつく。今口走つた子は、捉え方によつては生きるのを諦めようとしている風にも感じてしまう。

特に、今日一緒に暮らそうと約束を交わしたりフアと、ユウキのチャリティーライブに全面的に協力の姿勢を見せているセブンは、見る見るうちに顔が青ざめていった。

「ゆ……ユウキ……?」

ユウキ自信も、本当は生きたい。生きて現実世界に戻りたい。けど、少しだけ、少しだけ後ろめたさも感じている。

キリトを、セブンを、そしてチャリティーライブを観てくれる人全てを利用してしまっているのではないかと。

「……あはは、ご、ごめんね……、折角皆協力してくれてるのに……」

「ねえ、どうしちゃったの? ユウキちゃん……?」

「……え……?」

ユウキからの違和感を、ここにいる全員が感じ取っていた。このまま上手くいけば、ライブは成功し、多くの協力者を募るチャンスとなる。

骨髓バンクに多くのドナーが集まり、HIV耐性を持った骨髓もきつと見つかるに違いない。

目立つようなメディアで、盛大に宣伝し、世界中からの協力を仰ぐ。

それがチャリティーというものだが、ユウキはここに、ちよつとした後ろめたさ的なものを感じているのだ。

「……………」

「ユウキちゃん？ まさかとは思うけど、もしかして……、今回のチャリティーにやりにくさとか感じてたりしてない？」

「……………えッ」

セブンの的を射るような言葉に、ユウキが目をぎよつとさせてたじろく。ズバリ、核心をつかれてしまったからだ。

プロとしての活動が長いセブンは、自ら歌を歌い、ファンに聴かせて、そのファンに支えてもらって、毎日の生活が出来ている。

もちろん彼女の収入源はそれだけではないが、支える側と支えられる側はこうやってバランスを保っているのだ。

少し意地汚い話になってしまいが、ファンがお金を支払うことによって、この業界が支えられている。

同じことはチャリティーでも言える。難病に犯されている人を治すにはどうするか？

治療費が払えない、治す医師が見つからない。そして、ドナーが見つからないなど。

ならば、多くの人たちに支えてもらうしか道は残されていないのだ。ユウキのように、体をHIVに侵され、AIDSの末期を迎えた重病患者は特に時間がもう僅かしかない。

ならば、手段は選んでなどいられない。それはユウキ本人も痛いほどわかっている。

わかっているのだが……………。

「……………ユウキちゃんの考えてること、当ててあげようか？」

「え……………、ボクの考えてる……………コト？」

切り株に腰掛けているユウキを、真剣な目付きでセブンが見つめている。

この目付きのセブンは、人に喝を入れる時の態度だ。この道のプロとして、そして、ユウキの大切な友人の一人として、彼女に激を入れるための顔でもあった。

「ユウキちゃん、ちよつと、考えてることが甘いんじゃないかしら？」
「え……う？」

「何今更……後ろめたきなんて感じてるのよ……ッ、ここまできて、何弱気になってるのよ！」

かつてない形相を見せながら、セブンは激昂していた。

ここまで、ここまでどれだけの人たちがユウキの為に動いてきたか。

一人の女の子の命を救うために、みんながどれだけ手を貸してきてくれたか。

後戻りなど出来ない事くらいわかっているはずだと、何で今更弱気になっているんだと、眉間に皺を寄せながら思いの丈をぶつけていく。

「みんな、ユウキちゃんが好きだから、ユウキちゃんのことを助けたいから、必死になってやってきてるんじゃない！」

「……うう……」

「リーファちゃんもそう！ スメラギ君やお姉ちゃんもそう！ そして誰よりも、キリト君が一番アナタのこと助けたいって思ってるんじゃないの!？」

「……」

上半身と両腕を激しく動かしながら、セブンが思いをぶちまける。そう、誰一人ユウキに死んでもらいたくなんかない。

助けられる命ならば、全力で助けたい。彼女らだけではない。ユウキを知る誰もがそう思っているはずだ。

「あたしだって……、ユウキちゃんに生きててほしいのよ……ッ、死んで欲しくなんか……ないのよ……ッ」

「……セブン……」

心からこみ上げてくるものがあつた為か、セブンの目尻から熱いものが零れ落ちていた。

自分の気持ちに素直になればなるほど、それは留まるどころか勢いを増してどんどん流れ出てくる。

咄嗟に彼女の姉であるレインが装備のポケットからハンカチのア

アイテムを取り出して、彼女の涙を拭う。

しかしセブンの涙は止まらない。それほどユウキのことを心から想っているからこそ、ここまで激情することが出来たのだろう。

『自分なんかのために』、そう考えていたユウキであったが、自分より年下のこの小さな少女が流した涙を見て、色々なことが頭の中を巡っていた。

自分は何を迷っているんだ。誰よりも生きたいと思ったのは自分じゃないか。

死ぬのが怖いと感じたほど、生きたいと思ったんじゃないか。

それをなんだ、今更後ろめたいだ？ バカも休み休み言え。

後ろめたさなんて感じてる暇なんかあったら、もつと必死に努力をしろ、前に進んでいくための努力を！

そして全てを達成した時に、思う存分恩を返せ！ それが今の自分に出来る、精一杯のやれるきとだ！

「……………」

泣きじやくっていたセブンは、先程よりも落ち着きを取り戻していた。

彼女がここまで感情を露わにするのは珍しいことだ。

そんなセブンに向かって、ユウキが切り株からゆつくりと立ち上がり、一歩ずつ足を進めていき、彼女の目の前まで来ると、肩にポンと手を優しく当てる。

「ごめん、ごめんね……セブン」

「……………」

「ボク、どうかしてたよ……、今更引き返すことなんて出来っこないのに、こんな弱気になっちゃって……………」

「…………ユウキちゃん……………」

ユウキから声を掛けられると涙混じりの目を指で擦りながら、セブンはゆつくりと彼女に視線をやる。

そこに見えたユウキの顔つきは、先程とはまるで別人であるかのよう、真剣な眼差しへと変わっていた。

「ボク、歌うよ」

新たに決意を固めたユウキの一言に、その場にいる全員が注目する。その際に風が吹くと、彼女の紫色のロングの髪の毛がサラサラと、美しく舞った。

「……までしてくれたみんなの思い、絶対に無駄にはしないよ」

「……ユウキ……」

心配そうに見つめるリーファに向かい、ユウキはニコツと笑顔を見せる。

未来のお姉ちゃんに、ボクは大丈夫だよと、精一杯笑ってみせた。

「大丈夫、もう迷わないよ。みんなの為に、キリトの為に、そして……自分の為に、ボク精一杯頑張る……」

ユウキは大きく息を吸い、また大きく吐くと胸に手を当てて、再びゆっくりと語り出す。

「だから……お願い、みんな……ボクに力を貸して……ッ！」

深く深く、陳謝をするかのように頭を下げると、すぐにリーファが彼女にかけより、優しく抱き起こした。

ユウキの味方はここにいるよ、みんなみんなユウキの味方なんだよと、安心させるように、優しく抱き締める。

「言われるまでもないよ、ユウキは……あたしの大切な妹なんだから……」

「……リーファ……ッ」

姉からの温もりを感じると、ユウキは胸の内が温かくなっていくのを感じていた。

先程の温かさはまた一段と違う温もりだった。

リーファは抱擁を解くと、ニコツと笑顔を見せながらユウキの両手を自信の両手で包むと、固くギュツと握りしめる。

リーファの笑顔を見ると、たちまちユウキも釣られるようにニコニコ笑って返事を返す。

「あ……」

握られている手に、今度は違う温かさが重ねられた。小さくても、ほのかに感じる温かさ、そう、セブンの手だ。

「セブン……」

まだほんのりと涙の跡が残っている顔には、すっかり先程までの悲しさや悔しさは無くなっていた。

ユウキがやる気を見せてくれて嬉しくなったのか、顔を赤らめながらも彼女も笑顔を見せてくれた。

「厳しいこと言ってしまったって、ごめんなさい……。でも、ちゃんと聞いたよ？ ユウキちゃんの気持ち」

「……うん、うんー」

更にその上から温かさが、また重なった。すらつとした綺麗な形をした掌が、ユウキとリーファ、そしてセブンの手を包み込む。

「私も……、折角ユウキちゃんと仲良くなれたのに、お別れなんて……絶対にしたくないもの！」

「レ、レイン……」

多くのファンに見せているであろうスマイルを、レインはユウキに向けた。

しかし、この時のスマイルは営業のそれではない。大切な友達へと向ける、温かさが、気持ちがかもった素敵な笑顔だった。

今ここに、一人の女の子の命を救わんがために、改めて硬い決意を抱いた四人は、より一層気合を込めて、今後の動きに繋げようと誓いを立てた。

しかし一方でただ一人、頑なにぶつきらぼうな無表情を動かさずとせず、微妙な居心地の悪さを感じているスメラギが、目を閉じて木の幹に寄りかかっていた。

「……………」

そんなスメラギに、全員の視線が集まる。

女性陣が全員、君もやりなさいと鋭い視線を向け、無言の圧力を彼に向かって飛ばしている。

その視線に気付いたのか、スメラギは顔を湖の方に向け、逃げるように視線を逸らした。

「スメラギくんもやりなさい？ これは上司命令よ？」

上司命令、普段のセブンならばそんなことは絶対に口にしないであろう。

何故ならば彼女は彼のことを部下としてではなく、あくまでもパートナーとして見ていたからだ。

なので、普段振る話も命令としてではなく、提案、お願いといった形で伝えてきた。

しかし今回は上司命令という形で、拒否を許さないといった姿勢を見せている。

それだけ、今回のことへの意気込みが違う、ということなのだろう。更にはこうなったセブンは歯止めが効かなくなる。このまま釣れない素振りを取り続けていると、今よりもっと面倒な展開に発展しかねない。

そう考えを巡らせたスメラギは「フンツ」とキザったらしい態度をとると、足取りを微妙に重たくしながら四人の元へと歩を進めていく。

「……セブンの命令とあらば致し方あるまい。俺も、強敵との命を散らすのには、本意ではないからな」

スメラギがそう言うと、今度はずっしりと、厚みのある手が一番上に重ねられた。

その様は、まるで学生の運動部系の部活動で、試合前に気合を入れるかのようなやりとりに見える。

小難しい言い回しをしながら手を重ねたスメラギの様子に、セブンだけは若干呆れたようなような顔つきを見せていた。

全く素直じゃないんだから、とでも言いたげだ。

「スメラギ……ッ」

「……これで、満足か？」

「う、うん！　ありがとうスメラギ、ボク嬉しいよ……！」

「……フンツ、ただの気まぐれだ」

口ではそう言いつつも、満更こういう展開も悪くないと思い始めているスメラギであった。

変わろうとしているのはユウキやセブンだけではない。

ここにいるスメラギもまた、キリトやユウキとの出会いを経て、大きく成長していきこうとしていたのだ。

「絶対に……ライブを成功させるわよ！」

主催者側であるセブンが気合の入った雄叫びをあげると、それに続くように残ったメンバーから「おう！」と力のこもった返事が返された。

新たな心持ちを胸に、一行はこれから起こることへ対して全力でぶつかろうとしている。

全ては、一人の少女を救うために。

再び、希望を手にするために。

新たな世界へ羽ばたくために――。

そして、希望に向かって羽ばたくために、歌を歌い続けた少女のこゝとを、人はこう呼んだ。

絶対可憐の歌姫『絶歌』と……。

第30話〜燃え尽きろ!! 絶剣! 閃光! 超激戦
!〜)

西暦2026年2月3日(火) 午後14:05 神奈川県横浜市金
沢区 横浜港北総合病院 和人の病室

「……クウ……」

和人は左手に点滴を刺しながら、一人で白いベッドの上で寝息を立てている。これまで散々な無茶を重ねたしっぺ返しがきてしまった体を、ゆっくりと休めていた。

むしろこうゆう状況が来ない限り休まなかったであろう分、逆に好都合だったのではとも捉えられる。

昼食を取り、特に暇つぶしの道具を持ち合わせてなかった彼はひたすら眠るしかやることがなかった。

一応スマホは持ってきてるのだが病棟内なので使用は禁じられている。電波が様々な医療機器に影響を与える恐れがあるためだ。

そんな寝ている和人のいる病室のドアが『コンコン』と音を立ててノックされる。

家族は午前中に見舞いに来たので看護師か先生が来たのであろうか。

肝心の和人本人は夢の中なのでそのノックに気付くことはなかった。

やがてノックから数秒後、そのドアはゆっくりと横にスライドしてされていき、そこには見覚えのある女の子の姿が見えてきた。

「失礼しまあーす……」

綺麗な栗色の長く伸びたロングの髪、整った出で立ち、すらっとしたスタイルの女の子が顔をのぞかせていた。和人の元恋人の明日奈だ。

直葉から彼が倒れたと聞かされて、お見舞いに足を運んできたとい

うわけだった。

「キリト君……」

和人は明日奈が入室したことに全く気付かず、ひたすら深い眠りについている。中性的で整った顔立ちをしている和人のその寝顔は完全に女の子と見間違えそうなほどだ。

明日奈は彼を起こさないよう、そつと荷物を足元に置き、立てかけてあるパイプ椅子を静かに取ると、和人の横につけるように開きそこに腰かけた。

「キリト君、頑張り過ぎたんだね……」

パイプ椅子に座りながら、明日奈はここ最近の彼の行動を思い出していた。

考えてみれば自分の母親と仲直りするきつかけを作ってくれたのも和人だ。彼のあの行動力がなかったら、もしかしたら一生自分の母親との間に軋轢があつたままだったかもしれない。

そして、親友である木綿季のことも助けてくれようとしている。

誰かを守るために戦う彼は、別れてしまっている今でも、誰かの英雄^{ヒーロー}だった。

「ゆう……き、ごめん……な……」

和人が寝言で木綿季の名前を呼ぶと、その言葉に明日奈は少し複雑な想いを胸に秘めていた。

もう、こんな風に私のことは呼んでくれないんだねと、心に少しばかり寂しさを覚えていた。

けじめはもうつけたはずなのに、木綿季を応援すると決めていたのに、彼女の中の未練は消えてないままであった。

すると、明日奈は無意識に彼の手を握っていた。別に深い意味はなかったのだが、横たわる和人を見ると、握らずにはいられなかった。

「ん……」

握られた手の感触に反応したのか、和人が小さく声を漏らす。

自分が触れた影響で起こしてしまったと思った明日奈は「あ……」と小さく呟くと、和人が眠たそうな瞳をゆつくりと開けていった。

まだ下がり切つてない熱と、昼食の時に飲んだ抗生物質の所為で脱力感が全身をまとっている。

だが、なんとか重たい瞼をあげていき、その意識を覚醒させる。

「ご、ごめんねキリト君。起こしちやつた……？」

「ん……、ゆう……き？」

「……ユウキじゃないよ、キリト君」

和人は眠い瞳をゴシゴシと擦りながら、目の前にいる少女の姿を確認しようとする。

しかし、起きたばかりで焦点が合わない。

ゆつくりと上体を起こすと大きな欠伸をし、ぼーつとしながら周りを見渡した。

まだ意識は半分夢の世界に置き去りにしているようだ。やがて「んん……ッ」と声を発しながら大きく伸びをすると、点滴の針が刺さっている腕が管に引つ張られ痛みが生じ、それがきつかけで

彼は漸く目を覚ました。

「あつ……てて、点滴してるの……毎回忘れるな

。……ん、あれ？」

「おはよう、キリト君」

「やあアスナ、おはよう……」

「……………」

長い眠りから漸く目が覚めたはいいが、和人はイマイチこの状況に理解できないでいた。

何故目の前に明日奈がいるのだろうか、どうしてここまで来たのだろうか。

自分は確か、点滴を受けながら食事を取り、その後解熱剤と抗生物質を飲んだ。

そして強烈な眠気と脱力感に襲われて、うとうとと寝入ってしまったのだ。

覚醒したばかりの脳をフルに回転させて、これまでの状況を整理する。

やがてひとしきりの整理が終わると、今度は目の前の光景の疑問に

改めて意識が向かった。

「え、あ、明日奈……？」

「キリト君、ようやく気付いたの……？」

「い、いつからそこに……？」

「えっと、十分ぐらい前……かな？」

「そうだったのか……」

「だ、大丈夫？ キリト君……」

起きたのはいいものの、まだ和人は上手く体を起こすことを維持するのが難しいようだ。

薬の効果も相まってか、目眩に近い感覚までやってきた。

眉間のあたりを手で抑えてふらついた和人を、明日奈はそつと背中に手を当て、彼を支える。

「ほら、無理しないで……横になって？」

「あ……、ああ……ごめん手間をかけて、昼間の薬の所為でまだよく力が入らないんだ……」

「全くもう、いいから横になって？ 無茶しすぎだよキリト君は……」

「あ、あはは……返す言葉もないな、今回ばかりは……」

再び身体をベッドに横たわらせた和人だったが、ここで当然の疑問が浮かぶ。

何故彼女がここにいるか。

和人と明日奈が別れてから、数日は経過している。母親である京子とも、絶対に顔を合わせているはず。

ほとんどの時間を奪われた今の彼女に、ここまで自由に行動出来るはずがなかった。

しかし、明日奈はたしかにここにいます。

つまり、それは彼女が母親と和解したことを表していた。

「明日奈、一ついいか？ 君が今ここにいてるってことは……その、お母さんと……仲直りできたのか？」

彼からの質問に対し、明日奈は笑顔頷き、肯定の返事を返す。

これまでは家庭の話の振ると、決まって暗い顔をする彼女だった

が、今日はいつもより穏やかな顔で話をしてくれた。
今まで、かなりの重荷をその大きくない肩に背負わされていたが、今は違う。

親子らしい会話も交わしているし、和人以外で気になる異性はいないの？ 等と、下世話な話題にも事欠かない。

「うん、キリト君のおかげだね。あの晩、佐田さんと一緒にお母さんと話し合ったの」

「佐田さん……、あの使用人の人が……」

「うん、思い切つてね……。佐田さんがいなかったら、どうなつてたか……」

「そう……だったのか、よかつたじゃないか、明日奈」

和人の心の引つ掛かりの一つでもあつた、明日奈の家庭の事情が落ち着いたことを知ると、彼の表情はほのかに明るくなっていった。

当然だ、別れたとはいえ、和人にとって明日奈は今でも大切な人であることには変わりないからだ。

恋人という関係は終わってしまったが、かけがえのない親友であることは確かなのだ。

「うん、キリト君と木綿季のおかげだよ。来年度進学できるかどうかは、今学期残りの成績次第だけだね」

「明日奈の成績なら大丈夫だろう？ ずっと学年トップだったし、行けるさ」

「……うん、ありがとう、キリト君」

それから二人は、この短い間で起きた濃い出来事の全てを語り合った。

計画の進捗、互いの生活など、些細なことから大事なことまで包み隠さず話し合った。

大抵、別れたばかりの男女というものは、気まずさというものがどうしても残る。

互いの意見が合わなかったり、すれ違いが生まれたり、はたまた浮気が発覚したりなど、そのような内情がほとんどだ。

しかし、この二人はそんな様子など全く見せていない。別れたくて

別れたわけではなかったからだ。

あくまでも家庭の事情で、別れざるを得ない状況に追いやられただけだったのだ。

「あ……そういえばね、キリトくん？」

「……ん？」

「私もね？ 例のライブ、手伝うことになったの？」

「……え？」

リアクションは薄いけど和人は内心非常に驚いていた。明日奈には最初に木綿季を元気づけてもらえれば、それで十分と思っていたからだ。

彼女がステージの上で最高の演出をするには、彼女のメンタルを最高の状態にしてやる必要があった。

その為には明日奈の存在が必要不可欠であったのだ。家のいざこざで途中からは無理だと思ってたが、明日奈はこれまで通り、木綿季の力になってくれるという。

これは彼にとって非常にありがたい誤算だった。これにより木綿季は更に元気になることだろう。

「すごいな、君が来てくれるなんて……頼もしいぜ」

「私これでも昔、ピアノやってたんだからね？ 音感はあるつもりだよ？」

「ははは、んじゃあ……俺からも頼む。ユウキの側にいて……やってく、れ……」

「うん……、って……き、キリト君!!」

和人はそう言い残すと、瞼をそっと閉じて、力なく意識を失ってしまった。

明日奈は慌ててパイプ椅子から立ち上がり、和人の元へ駆け寄って彼の腕へ自分の指をあて、そして目を閉じ精神を集中させ、脈を確かめてみる。

脈は感じられる。ほのかにだがしっかりと血の流れは感じ取れる。そして次は彼の口元へと自分の耳を近付け、彼が呼吸出来ているのかわかを確認する。

「…………スウ…………」

「…………もう、キリト君のバカ…………ッ」

口では悪態を吐きつつも、なんやかんや内心では安心していただけ
奈であった。

彼の無茶しがちな性格から、今回のこともかなり心配していただ
けに、もしかしたらという考えも巡っていたのだ。

「私も頑張るから、キリト君は休んでてね…………」

和人の頭を手の平でさすると、明日奈はパイプ椅子を片付け、自
分の荷物をまとめる。

白いシーツの掛け布団をそつと彼の首元までしっかりとかけ、背を向
けて扉の方へと歩き始めた。

「あり…………がと、あす…………な…………」

部屋を出てドアを閉めようとノブに手を伸ばす直前で、明日奈の耳
に和人の声が聞こえてきた。

明日奈はピクリと反応し、上体だけ後ろを振り返り、彼の寝顔を遠
目に見つめる。

静かに寝息を立てている和人の顔つきは非常に穏やかなもの
となっていた。

汗をかいていて、ぱつと見は調子が悪そうに見えることもあつた
が、薬の影響なのだろう。

「お礼を言うのは私の方だよ、ありがとう…………キリト君。ゆっくり休
んでね…………？」

温かい笑顔を浮かべながら、明日奈はそつと扉を開き、彼のいる病
室を後にした。

明日奈がいなくなると、途端に和人の病室は静かになり、点滴の垂
れる音と、外からの雑音だけしか聞こえなくなっていた。

同日 午後14:55 アルヴヘイムオンライン 新生アインク
ラッド第22層 キリトのホーム

「よし、おっけーユウキちゃん！ そろそろ休憩にするよー！」

セブンの休憩を告げる声が、22層の湖畔エリアに響き渡る。

昼前から始まっていた今日のレッスンは折り返しの三時間時点まで来ていた。

ユウキは初日の苦戦っぷりが嘘のように上達し、セブンが悔しさを覚えるほどの歌唱力を身に着けていた。

「うん、りょうかーい！」

今日も楽しくレッスンを重ねられたようで、ユウキは練習疲れというものを全く感じさせなかった。

むしろもっと歌いたい、もっと覚えたい、もっといろいろやってみたいと、そう思っていた。

「ユウキ、お疲れ様！」

「わあ、ありがどうリーファ！」

ユウキに労いの言葉をかけたリーファはストレージからオブジェクト化した水入り瓶を取り出し、彼女に手渡した。

それを受け取るとユウキは喉を潤わせるためにゴクゴクと瓶の中身を飲み干していく。

「ずっと聞いてたけど、やっぱりすごいね、ユウキは」

「そ、そうでもないよ。ここまで上達できたのはセブンのおかげだし。ボク一人じゃとても無理だったよ……」

ユウキの才能は、素人目に見ても目を見張るものがあった。

元々張りのある声をしているし、容姿端麗で元気いっぱい、素質も十分。

しかしその才能を開花させたのは適切なトレーニングをしたセブンと、そして冷静に答えに導いたスメラギがいたからこそである。

「でもね？ ボクまだまだ出来る気がする、もっともつとつうまくやれる気がするんだ！」

「それじゃあさ、デュオでもやってみる？ ユウキちゃん」

「え、デュオ……？」

「デュエットのことよ」

瓶を片手にきよとんとしているユウキに、すぐ隣で座っているセブンが提案を持ち出した。

チャリティーライブのメインパーソナリティはセブンの担当だ。

あくまでユウキはスペシャルゲストにすぎないのだが、彼女の印象をよくするため、他のプログラムにも参加させようという試みだ。

ユウキの担当する曲は二曲。

ステージのプログラムのにも余裕があるので、他の曲のパートナーもしくはバックコーラスの選択肢も入れた方が、プラスになるのではないかと考えたのだ。

「うん、ボクに出来ることなら、チャレンジしてみたい！」

やる気満々に明るく返事を返すユウキの態度に、セブンは思わず笑を零した。

まるでそう、彼女が提案を受け入れるのを分かっていたかのように。

しかし、そうなると当然の疑問が浮かんでくる。一体ユウキとデュオを組むという人物は誰なのか、ということだ。

「あれ……ってことはさ、ボクと組む人はセブンかレインのどっちか、ってことなの？」

今回、ライブの出演者には勿論歌唱力とパフォーマンスが必要不可欠。それもプロ並みの実力を持つ者でなければならぬ。

故に、ユウキはセブンかレインのどちらかと組むのだと、そう思っていた。

しかし、セブンは肯定も否定もせず、ただただニコニコ笑顔で、その場を濁すばかりであった。

「ち、違うの……？」

ユウキが首をかしげて疑問を投げかけても、セブンもレインも終始ニヤけており、そしてスメラギも無言を貫き、答えをくれそうにはなかった。

ということとは、この二人の他に音楽に嗜みがあり、なおかつ歌唱力がある人物ということになる。

だがその様な人物、ユウキに思い当たる節はなかった。歌うといえ、鼻歌交じりのようなものを、ストレアやクライン、シリカが歌うくらいだ。

ユウキはその他にも当てはまる人物がいなかろうか必死に思考を巡らせたが、いくら考えてもそのような人物は思い浮かばなかった。

「うう、他に誰も思い浮かばないよー……」

完全にお手上げの状態となったユウキの姿を見るや否や、セブンとレインは互いに視線を合わせ、ニコツとスマイルを交わし合い、ようやくその口を開いた。

ヒントをあげなくてもユウキなら簡単にわかると思ったのか、それとも意外な人物が出てくるのか。

それは定かではないが、とにかくその人物はようやく現れるようだ。

「ユウキちゃん、彼女が……ユウキちゃんのデュオのパートナー、だよ」

レインとセブンの視線が、キリトのホームのある方へと向けられる。

それに釣られるかのように、ユウキの視線も彼のログハウスを捉える。しばらく見つめてみると、奥のほうから「ザツザツ」と何者かがこちらに歩いてくる足音のようなものが聞こえてきた。

その足音の正体が判明するまで、そう時間はかからなかった。

白い装束を身にまとい、水色の透き通ったような、キレイなロングの髪。

落ち着いた物腰を見せつつも、しつかりとした意志力を感じさせる立ち振る舞い。

一人のウンディーネ族の女性プレイヤーが姿を現した。

「え……」

「あ、アスナさん……!」

その人物は何を隠そう、ユウキのとてもよく知る人物、そして一番の大親友。閃光ごと、アスナであった。

何故、何故彼女がここにいるのだろうか？

いや、今はそんなことはどうでもいい。アスナが、親友のアスナが来てくれた。

心の底から感じる「嬉しい」という感情を抑えられずに、ユウキは彼女の姿を見るや否や、条件反射で彼女の元へと急ぎ足を動かしていった。

「アスナ……アスナ！」

「ユウキ……！」

力いっぱい、力いっぱい互いを抱き締める。二人の温もりが、互いの体に伝わり合う。

ユウキにとってはかつて感じたことがある、姉の温かさ。

アスナにとっては、二度と会えないと思っていた大切な親友の温かさ。

それをただひたすら、感じあった。また会えたことが嬉しかった。その喜びを分かちあった。

しばらくして二人はゆっくりと身体を離し、互いの視線を合わせ、ニツコリと微笑み合う。

「ユウキありがとう、私ね？　母さんと仲直り出来たの……！」

「え……ほ、ホント？」

「うん、やっぱりね？　母さんも私もお互い素直になれてなかっただけだったんだ。母さんの気持ちに気付いてなくて、反抗的な娘でごめんさといって言ったら、母さんも泣き出しちゃって」

「……うん」

「母さんの方も、アナタに押し付けすぎてしまっただごめんさといって、言ってくれたの……」

このアスナの親子間での問題は、ユウキにとっても気がかりなことであった。

『ぶつからなきや伝わらないことだつてある』そうアスナに直接言い伝えた後、あの悲劇は起きてしまったのだ。

その事で責任を誰よりも感じてるユウキは、結城母子のことが気になつて仕方なかつたのだ。

「じゃ、じゃあ……あの学校に？」

「うん、ちゃんと戻れたよ」

「そ、そうなんだ……よかつた、ホントによかつたよアスナ！ お母さんと仲直り出来て、よかつた……！」

彼女らの関係について、一先ずの安堵を得たユウキであったが、少々心持ちは複雑だった。

嫌な言い方になるが、あの時彼女が母親に連れていかれたからこそ、キリトと仲良くなり、恋人同士にまで関係は発展したのだから。自分の病気も治る可能性が出てきた。

そう考えると、ユウキは少しだけいたたまれない気持ちになつてしまった。

けじめをつけ、自分とキリトの仲を応援すると背中を押してくれているとはいえ、若干の後ろめたさを覚えてしまっていた。

「でもアスナ、それだとやっぱりボク、アスナからキリトを横取りしたことになるんじゃ……」

ユウキはバツが悪そうな表情をしながらアスナに語り掛けた。

経緯はどうあれ、やっぱり恋人を横取りしたということには変わらないと、そう考えていたからだ。

しかしアスナは首を横に強く振り、そんなことはないと言つて強く否定する。

「そんなことない、確かに……今でも私はキリト君のことは好きだよ？」

「……………」

「でも、それは私が母さんの気持ちを理解していなかつたから招いてしまったことだし。それにユウキがキリト君と結ばれて、私はとっても嬉しいんだよ？」

「……………でも……………」

「私は大丈夫だから！ それよりに？ ユウキがキリト君と幸せになつてもらわないと、私が困るな……………」

「ボ、ボクがキリトと……」

そう言われたユウキの顔はたちまち真っ赤になっていき、湯気のようなものを立ち登らせていた。

病気が治り、首尾よくリハビリもこなすことが出来れば、木綿季は晴れて現実社会へと復帰することが出来る。

その先の未来、桐ヶ谷家の一員となることの、更にちよつと先の未来の出来事を想像してしまうと、たちまち熱い感情が胸から立ち上ってくる。

「ふふふ、ユウキ……顔真っ赤だよ？」

「あ……アスナがあんなこと言うからだよー！」

ユウキがこんなに顔を赤くして困った表情を浮かべている姿を見せるのは、初めてかもしれない。

元々が感情豊かで元気いっぱいの子の女の子だ。笑ったり怒ったり、はたまた悲しくなったり、年齢相応の反応を見せてくれる。

しかし、それは普通の子が持っている感情とは、少し違ったものだ。どんなに笑っても、その笑顔は遠くないうちに永遠に見せられなくなってしまう。

そのひっかかりがある感情に他ならなかった。

しかし、今は違う。

キリトが、リーファが、セブンが、レインが、スメラギが、そしてここに駆けつけてくれたアスナが、彼女の病気を治そうと一致団結、立ち上がってくれている。

希望という名の剣を手に入れた今のユウキは、本当の意味で心からの感情を表に出せるようになっていたのだ。

「あ……、そう言えばね？　ボクの退院後の受け入れ先も決まったんだよ？」

「え……ほ、本当なの？」

「本当ですよ、アスナさん」

受け入れ先の人間であるリーファが、ポニーテールを揺らしながら二人の間に割って入る。

アスナはユウキから半步体を話すとリーファの方を向き、首をかし

げて疑問符を浮かべていた。

「ユウキの受け入れ先、あたしの家になったんです。養子縁組であたしたちの家族になるんですよ」

身内を全て亡くしているユウキの行く先は、アスナの気がかりなことの一つであった。

病気を治して無事退院するまではいいものの、そこから先が全くわからず不安で仕方なかった。

しかしリーファの口から、自分たちの家で面倒を見るということを知らされると、たちまちその不安は消え去り、途端に安堵感へと変わっていった。

彼女らの家なら安心だ。優しい両親に豊かな家庭、そして何より優しい家族もいる。

みんなユウキを暖かく出迎えてくれることだろう。

「そう……よかったじゃない、キリト君のところなら、私も安心だなあ」

「えへへ……あ、ねえアスナ！ 久しぶりに決闘しようよ！」

「え……決闘？ここで？」

「うん！ ボク、久しぶりにアスナと闘ってみたいなあ！」

かつて辻決闘デュエルをしていたあの時とは違い、今のユウキは希望に満ち溢れている。

病気の治る見込みも出てきているし、その後の生活も安心出来るうだ。

生まれてこの方、HIVを抱えている上で不安な駆られているこの方が多かったが、今の自分ならこれまでで最高のコンディションで決闘デュエルに望める。

そう考えた上での提案だった。

「……うん、いいわ。やりましょう、ユウキ！」

しかし、それはアスナにも言えることであった。

ずっと心に引っかかっていた家庭の問題と、親友であるユウキの身体のことについて、解決の方向へと進んでいるからだ。

つまり、アスナも心身ともに最高のコンディションを維持出来てい

る。

互いに最高の状態で挑めるこの今、もう剣をとる以外に選択肢などなかったのだ。

「さっすがアスナだね、話がわかるー！」

ユウキはそう言いながら、左手でメニューを操作して、目の前のアスナに対し、決闘デュエルを申請する。

するとアスナの視界に『Yuukiが決闘デュエルを申し込んできました』と通知が表示され、彼女はこれを承諾し、YESと書かれたアイコンをタップする。

決闘デュエルモードは全損決着。互いのどちらかのHPがゼロになるまで決闘デュエルは続けられる。

そのモードを選択すると、すぐさま六十秒のシークエンスが訪れ、カウントが一秒ずつ減っていく。

「えへへ、楽しみだなー、アスナとの決闘……！」

「私も楽しみだよ。それにユウキとは一勝一敗のイーブンだから、ここで勝って勝ち越しを決めさせてもらおうよ！」

「それはどうかなー？ ボクだって簡単には負けないからね？」

自身の愛剣、『マクアフィテル』をオブジェクト化させ、腰の鞘から抜くとその刀身が黒紫色にキラリと光る。

アスナも同様に長く愛用している細剣『レイグレイス』を手に握ると、ソードスキル等の確認に移る。

過去に互いに剣を交えたのは二度、辻決闘デュエルの時と、アスナがユウキを病院まで追いかけて申し込んだ決闘デュエルの時だ。

正直言つて、今の彼女らの勝敗の行方は誰にも予想出来るものではない。

互いにこんな心持ちで決闘デュエルに挑むのは初めてだからだ。踏み込みの速さ、剣の振り、反応速度等、全てが今までと違うものになることだろう。

スキル等の確認を終え、戦いの構えに入ると視線を合わせ、アイコンタクトでいい勝負をしようと気持ちを交わす。

半分笑顔で、そして半分真顔でカウントがゼロになるのを待ってい

た。

外野で見守ってるセブンたちが固唾を飲んでその様子を見守っている。

そして程なくして、その時は訪れた。

「——ッ!!」

「——ッ!!」

カウントがゼロになった瞬間、ユウキとアスナは地面を蹴り、一直線にお互いの距離を詰めた。まず一合、力強く剣を振るう。

ガキインという激しい衝撃音と共に、鏢迫り合いの形になる。剣と剣が擦れ合う度に鈍い金属音が鳴り響く。

この状態では先に力を抜いたほうがそのまま斬られる体勢にある。かといって力を入れ過ぎると剣をいなされ、そのまま斬られてしまう。

様子見気味に、尚且つ力は緩めずバランスを維持しつつこの状態が続いた。

ユウキとアスナ、互いに一步も引かない、引いてはいけないと、剣を握る手に力を込め続ける。

鏢迫り合いは十数秒間続き、お互いが剣をはじこうとするタイミングが重なり、剣がブレイクされる。

そのノックバックで三メートルほど距離が離れるが、すぐさま距離を詰め今度は連撃の撃ち合いになった。

縦、横、斜め、上から、下から、突き、薙ぎ、様々な形でお互いの攻防が続く。

斬撃が打たれるたびに剣の間に火花が散り、またその衝撃による削りダメージで、互いのHPが少しずつ削られていく。

同じ体勢で強烈な一撃を放ち、剣同士がぶつかり合いノックバックが発生する。この間に三十、いや四十は互いに打ち合っただろうか。衝撃と共に、再びお互いの距離がまた離れた。

「ハア……ハア……」

「ハアハア、やっぱり……アスナは強いね」

「ユウキこそ……あの時より速くなってる!」

「それはこっちのセリフだよ……、アスナの斬撃、早すぎるもん！」
「それに反応するユウキも凄すぎるわよ……、剣の速さには自信があつただけど」

「ウォーミングアップはこれぐらいでいいんじゃないかな？ そろそろ飛ばしていくよ！ アスナ！」

「ええ、望むところよ！」

二人は再び力強く地面を蹴り、剣をぶつけた。

ユウキの反応速度は辻決闘デュエルを挑んでいた時よりも速くなっていた。

驚異の反応速度と経験豊富な仮想世界での長い生活、そして何よりずば抜けていたのが相手への対応力だ。

以前キリトと行った決闘デュエルではユウキの完敗であつたが、あのキリトの最速の二刀流はユウキでなければ防げないだろう。

重たい連撃をいなし、避け続ける等という芸当は様々な上位プレイヤーといえども、恐らくユウキにしか不可能だ。

それもユウキの対応力があつたが故である。

常人なら最初の二撃で即刻リメインライト化していただろう。

しかしそんなユウキの対応力をもつてしてもアスナの攻撃は速すぎた。ユウキも目で追い、かろうじて防いでいるといった状況だ。

だが、そんな速い攻撃も何度も何度も見れば目が慣れてくる。

どの位置からどの角度でどのように撃ち込んでくるか、ユウキは徐々にではあつたが持ち前のセンスで見極めてきていた。

「ここだよっ！」

アスナが突きを繰り出す直前、重心が一瞬後ろに傾いた瞬間を狙つて、ユウキは最速で剣を下から上へ振り上げ、アスナの攻撃をブレイクした。

アスナは懐がから空きになってしまう。ここに一撃お見舞いしてやればかなりのアドバンテージが取れる。

ユウキはチャンス逃がさまいと、すかさずそのまま攻撃の態勢に入り、追撃をかけようとした。

しかし、アスナの攻撃は止まらなかった。

弾かれた剣とは反対側の手を動かし、ユウキに拳を放つ。以前もこ

の方法でユウキの虚を突きダメージを与えることに成功したのだ。

「——ッ！」

アスナの左の腕はユウキの左手でがっちりおっつけられていた。手の内が完全に読まれていたのである。

「ユウキに同じ手は通用しない、ってことね……！」

「もちろん！ これでもアスナの手口はわかっているつもりだよ！」

手首をがっちりつかまれたアスナはそのままユウキに一撃をもらってしまふ。

HPゲージは残り五分の三、あと一步でイエローというところまで落ちていった。

「ぐっ……！」

アスナは斬られた際のノックバックを利用して、そのまま数メートル後ろにバク転を繰り返して、いったん距離を置いた。

一瞬間が置かれて、その間にユウキはニツコリと微笑んだ。アスナとのデュエルは本当に楽しい、剣を交えるたびにわくわくしてくると、心から喜びを感じていた。

しかし閃光と呼ばれたアスナにもプライドがある。このままおめおめと負ける気はさらさらない。

アスナは一呼吸置くと表情を変え、その場から半歩後ろに下がり、陸上選手などがよくやるクラウチングスタートの体勢に入った。

「……あの構え、あれは……」

あのモーシヨンは見覚えがある。

記憶のどこかでそのモーシヨンを思い出そうとするも、その間にアスナは十分なクラウチングスタートの体勢を作ると、音と共にその場から消えた。

その瞬間耳をつんざくような音と共に速すぎる何かが、ユウキ目掛けて一直線に突っ込んできた。

アスナだった。

「——!?!」

アスナが習得している中で最速の突進系細剣ソードスキル『フラッシング・ペネトレーター』

同じ突進技であるヴォーパル・ストライクとは比較にならない突進力と攻撃力、そして前進速度を誇るソードスキルだ。

その分ヴォーパル・ストライクより硬直は圧倒的に多いが、あたれば相手の体力をぐっさりいたただける。ハイリスクハイリターンなソードスキルとなっている。

ユウキは一瞬反応が遅れたおかげで、フラッシング・ペネトレイターの直撃をもらってしまふ。

HPは九割近くからレッドゾーンまで一気に落ちた。残り体力的に、アスナが圧倒的優位に立った。

しかし、ソードスキル独特の硬直が発生する。ユウキがその隙を見逃すはずもなく、ダメージを喰らい吹っ飛ばされながらもすばやく体勢を整えると、自身が愛用しているソードスキル『ホリゾンタル・スクウエア』を放つ。

相手の周りを四角を描くように回転する四連撃のソードスキル。発生もそれなりに早く、攻撃範囲も広く、尚且つ硬直はやや少なめと非常に使いやすく汎用性が高いソードスキルだ。

アスナはフラッシング・ペネトレイターの硬直のおかげで、それを避けられず四連撃全てをもらってしまった。HPもレッドに突入し、残りは一割、といったところまで追いつめられていた。

ユウキはアスナの反撃をもらわないよう、彼女から数メートル離れたところでソードスキルが終わるように、位置と角度を調整した。

ソードスキルはある程度の角度などを自身の動きで微調整できるのだ。

このあたりのフォローもユウキは完璧だった。

「……」

「……」

お互いにHP残量は一割ほど、まったく後がない状況となっていた。

何かソードスキルの一つでも貰ってしまえばたちまちHPは全損、負けとなってしまうだろう。

体制と呼吸を整え再び剣を構え直し、再度互いに視線を交わし合

う。

「へへ、やっぱりアスナはすごいや！　ボクこんなにわくわくしたのは久々だよ！」

「私もよ、最近ずっともやもやしてたから……こんなに晴れ晴れとした気持ちで戦えるのは、本当に久しぶり……！」

お互い、あと一合で勝負が決まることを悟っていた。故に、最後の攻撃のタイミングは慎重に、神経を研ぎ澄ませて挑もうとしている。それから、長い静寂が続いた。

彼女たちのいる22層のフロアに吹く風の音音だけが聞こえていた。

そしてあまりにもすぎるデュエルの内容にセブン、リーファ、レインはおろか、スメラギすらも固唾を飲んでその様子を見守っている。

「……………」

キリトのホームの近くには大きな湖がある。釣りスキルを使えば大きな魚が釣れる。

普段は静かな池だが、希に魚がパシャンという音を立てて一匹水面を跳ねる時がある。

水面近くを飛行する虫や、落ち葉に反応して魚が餌だと認識し、飛び跳ねるのだ。

そしてこの時も、一枚の落ち葉がゆるりと水面近くに落ちていった。

ひらひらと舞う落ち葉が水面近くに到達すると、待っていたかのように全長三十センチほどの魚が水中から落ち葉に食らいつきたために水面から飛び跳ねた。

その音がユウキとアスナの最後の一撃の合図となった。

瞬間二人は三度地面を蹴り、土煙を舞いあげるとお互いの距離を縮めた。

「アスナ！　これが最後の勝負だよ！」

「私だって……望むところよ!!」

利き手に握るお互いの愛剣が白く輝く。互いにソードスキルを発

動しようとしていた。正真正銘最後のソードスキルだ。

長い髪を揺らしながら、剣の光とともに、決着をつけるため、モーションを起こし、ソードスキルの構えに入る。

「これが、ボクのオリジナルソードスキル！」

「これが、あなたから受け継いだオリジナルソードスキル！」

「マザーズ・ロザリオッ！」

「マザーズ・ロザリオッ！」

ユウキの剣からは紫色のエフェクトののったマザーズ・ロザリオが、アスナの剣からは水色に光り輝くマザーズ・ロザリオが、全く同じタイミングで放たれた。

「せええいやあああッ!!」

「はああああッ!!」

激しいエフェクトと共に、二つのマザーズ・ロザリオがぶつかり合う。

一撃、二撃、三撃、四撃、五撃目。

少し間を挟んで六撃、七撃、八撃、九撃、十撃目。そして、十一連撃目。

最後の十一連撃目もお互いの剣と剣がぶつかり合う。しかし、わずかにアスナの斬撃の方が速かった。

ユウキの斬撃より深く入り込んだ位置で、いなし気味に攻撃を相殺することが出来た。

このままソードスキルの硬直時間が発生しても、アスナの方が速く動ける。

「私の勝ちよ、ユウキ!!」

アスナは自身の勝利を確信した。次の一撃で自分の勝ち揺ぎないものだと思った。

しかしその認識は間違っていた。

アスナの瞳には、光り輝くユウキの拳が映っていたのだ。

「え……ッ」

ユウキはマザーズ・ロザリオの硬直中にもう片方の手で体術スキル『スマッシュ・ナックル』を発動させていたのだ。

かつてキリトが二刀流で見せたシステム外テスキル。片方それぞれの武器のソードスキルを交互に発動させる『スキル・コネクト』だ。

そう、ユウキは片手直剣ソードスキルと、ナックルソードスキルをコネクトさせたのだ。

片手直剣スキルよりも、体術スキルの方が圧倒的に技の発生は早い。

その光景を見た瞬間、アスナは改めてユウキが何故『絶剣』と呼ばれている由縁を思い出した。

自分の完敗、そう悟ったアスナはゆっくり目を閉じて、自分がリメインライト化するのを待った。

激しいエフェクトと共に決闘デュエルの決着はユウキの勝利という形で幕を閉じる、……はずだった。

「……………」

「……………」

ユウキの拳はアスナの顎のすぐ真下の位置で寸止めされていた。

恐る恐る目を開けたアスナは一瞬一体何が起こっているの？ といった顔でキョトンとしていた。

そんな彼女を尻目に、ユウキはニッコリと笑うと繰り出していた拳をスッと引き、右手に握っていたマクアフィテルを鞘に収め、臨戦態勢を解除した。

「ボクの勝ち、かな？」

ユウキは笑顔を見せながら両腕を後頭部の後ろで組ませ、アスナに言葉を投げかける。

アスナも視線を動かし、現在の状況を飲み込むと「やられたな」と心の中で呟くと、同じように件を収めて苦笑いを作る。

「悔しいけど、私の負けね……リザイン！」

アスナはそう言いながら、リザインウィンドウを開き降参リザインを選択した。

一進一退の攻防が続いた激しい決闘はユウキの勝利という形で幕を閉じたのだ。

「やったあー！ アスナに勝ったー！」

ユウキは飛び跳ねるようにして喜んだ。

勝ったことも嬉しかったが、非常に充実した戦いが出来たことに何より喜んでいた。

一方で負けてしまったアスナは、悔しそうに、しかし清々しい表情でユウキを見守っている。

「参ったなあ、今回はかなり自信あつただけどなあ……」

ユウキはひとしきり喜ぶとリーファたち見物組に向かって「ぶいっ！」と言いながら喜びのVサインを送る。

そのVサインにスメラギ以外のメンバーも、同じようにVサインを返した。

「すごいよユウキ！ 前の決闘の時よりも物凄かったよ！」

余程今の戦いぶりに興奮したのか、リーファは目をキラキラさせ、食い気味にユウキの両手を掴み、手をぶんぶんと上下に揺さぶつていた。

「えへへ、ありがとうリーファー！」

姉からの賞賛の言葉に、ユウキも素直にお礼の言葉を贈る。

一方で負けたアスナの元にはレインが駆け寄り、労いの言葉と水が入ったボトルを差し入れる。

「お疲れさまアスナちゃん、はいこれ」

「レインちゃん……ありがと。あはは、負けちゃったよ……」

アスナは苦笑いを作りながらレインから水を受け取り、ボトルに口をつける。

よくよく見てみると、彼女の額からは汗が流れている。それほど激しい決闘だったということだ。

「でもアスナちゃんもすごかったよ？ 私も今度手合わせお願いしようかな」

「そうね……うん、今度機会があるときには是非決闘しましょう！」

「ふふ、私負けないよー？」

アスナとレインはいつか必ず決闘デュエルをしようと約束を取り付けた。隠れた実力を持つレインも今回の二人の決闘デュエルを見て偉く触発されたようである。

「うむ、見事な戦いぶりだったぞ。二人とも」

「あれ、珍しいわね？ スメラギ君が素直に褒めるなんて……」

セブンがそう言うのと、その場にいる全員の視線がスメラギに集まった。

その視線を一気に感じたスメラギは、恥ずかしさを隠すようにして全員から背中を向けて、弁明するかのように語り出した。

「俺は一人の戦士として、今の闘いが称賛に値すると判断しただけに過ぎない」

「まあそんなこと言ってスメラギ君は……、素直に二人の健闘っぷりに感動したって言えばいいのにもう……」

セブンが呆れた素振りで言葉を放つと、その場が笑いに包まれた。背を向けているのでスメラギがどんな表情をしているかはわからない。

柄でもないことを言ってしまったのか、それともただの照れ隠しなのか。スメラギは一向にこちらを向こうとはしなかった。

セブンはそんな彼を、溜め息を吐きながら呆れた顔で見つめている。

「ねえアスナ？ 握手しよう！」

「え……？ あ、うん！」

ユウキとアスナは互いの利き手を差し出し、固い握手を交わした。

親友として、そして戦友として、掛け替えのない絆で結ばれた者同士、決して崩れるとの無い友情の握手だ。

「ユウキ、また決闘デュエルしましょう。今度こそ絶対に負けないから！」

「もちろんだよ！ アスナならボクはいつでも受けて立つよ！」

互いに満足した表情を見せながら、今度もいい勝負をしようと、勇ましい視線を向ける。

体を動かしたことによって、色々スッキリしたものもあつたようだ。

「そういえば……、最後にユウキちゃんが見せたアレ、キリト君が見せてたスキル・コネクトだよな?」

「あ……そ、そういえばそうだね。いつの間に身につけたの? ユウキ?」

スメラギに向けられていた視線は、途端にユウキに向けられる。スキル・コネクトは片方のソードスキルのモーションが終わった後、もう片方の武器のソードスキルを発動させることだ。

しかし、このテクニクはタイミングを掴むのが非常に難しい。ソードスキルの動作終了後、もう片方のソードスキルを発動させる為の猶予は、数フレームしかないからだ。

しかもその受付フレームは、スキル・コネクトを重ねていくたびに短くなっていく。

格闘ゲームを経験したことのある人ならば、その難易度がわかってもらえることだろう。

「あ……えつとね? 真似してみたたら出来た……」

「……はい?」

「ま……、真似してみたら……」

ユウキのあまりにも非凡な戦闘センスにアスナはおろか、セブンやレイン、リーファとスメラギも脱帽の様子を隠せなかった。

たった何度か見ただけで真似できるほど、スキル・コネクトは簡単なものではない。

タイミングを掴むため、何度も何度も修練を重ねる必要がある。

キリトですら、安定して出せるようになるまで、結構な日数を必要としたくらいだ。

それを見様見真似で会得してしまったと言うのだから、ユウキのセンスがどれだけ凄いかというのが、身にしみてわかる。

「まったく、ユウキにはかなわないなあ……」

負けはしたが、アスナの心は晴れ晴れとしていた。互いに自分の全てをぶつけることが出来たし、何よりユウキの明るく無邪気な笑顔が、アスナの心を明るくしていた。

そしてこの笑顔はすぐに消えることはない。希望という光を掴も

うとしてることで、もっともっと長く、そばで見続けることが出来そうだからだ。

しかし、彼女たちはとてもとても重要な見落としをしていることに気付いていなかった。

そしてその真実は、セブンの口から悲しくも告げられることになった。

「えつと……ユウキちゃんにアスナちゃん？ 盛り上がってるところ……すぐく申し訳ないんだけど」

「……ん？」

「なあに？ セブンちゃん」

「えつとね？ 今午後三時半なのね？ 休憩……終わり……なんだけど……」

「……え？」

「……え？」

デュエル 決闘に夢中になりすぎて気付かなかったのか、はたまた時間の流れをすっかり忘れてしまっていたのか。

無情にも時計の針は午後三時半を示していた。つまり、二人の休憩時間は激しい運動という形で終わってしまったことになる。

「時間もないから……、このままレッスンに入るよ？ 二人とも」

ライブ本番まで、彼女たちに残された時間は本当に少ない。

本物の命がかかっていることもあり、一分一秒が本当に惜しい現状となっている。

故に、休憩時間は休憩時間。練習時間は練習時間としっかり棲み分けしなければならぬ。

ユウキとアスナは必死に「ぐ、五分だけでいいから！」とセブンに休憩を要求したが、この手の道に関するプロである彼女は、頑なに首を縦に降ることは無かった。

はたしてこんな調子で、ユウキ達はライブを成功させることが出来るのだろうか……？

第31話く今、万感の想いを込めて 前編く

西暦2026年2月5日木曜日 午前9:10 神奈川県横浜市金沢区 横浜港北総合病院 和人の病室

「……………何もすることがない」

和人が過労で倒れてから二日が経過した。思わず独り言を呟いてしまった和人は相も変わらずひたすら暇な入院生活を謳歌していた。食事と睡眠とトイレ以外にやることが全くなかったのだ。

天井のシミや描かれている模様の数を数えるか、病室の窓から見える木々の葉っぱの数を数えるぐらいしかやることがなかった。

緊急入院する人の場合はしようがないが予めの入院が決まっている人は絶対に暇つぶしの道具を持つてくることをお勧めする。

本当に、本ツツ当に暇で暇で死にそうになるからだ。丸腰で入院は死んでもお勧めしない。

「外出、しちゃだめ……………だよなあ……………」

窓の外の風景を眺めている和人は愚痴をこぼしていた。部屋から出てはいけないアミューズファイアも取り上げられている、スマホは使用禁止。

まさに現代若者としては拷問に等しい仕打ちであった、木綿季の様子も気になる。

「うう、折角リハビリして鍛えた体がまたなまっちゃうぞ……………」

言うほど体を鍛えていないがSAO帰還直後のガリガリの状態を考慮すれば立派な肉体になったといえよう、それでも和人は常人に比べてまだ細かいが。

既に和人の体調はもう概ね良好である。熱も下がったし血圧も安定、意識もはっきりしている。

解熱剤も抗生物質も必要なくなり、今は食事と点滴だけで過ごしている。その点滴も残量が残りわずかとなり栄養供給が終わろうとしていた。

「ん、点滴お終いか……ナースコールしないと」

和人は点滴を交換してもらおうとナースコールのボタンを押そうと手を掛ける。そのタイミングと同時に彼の病室のドアがコンコンとノックされた。それに気付き、ナースコールをやめて扉に向かい返事を返す。一体誰の訪問だろうか？

「はい起きてますよ、どうぞ」

和人の声が聞こえたのか、その声に反応するようにゆっくりとドアがスライドしていった。

「おはようございます和人君、体の調子はどうですか？」

入ってきたのは木綿季の主治医の倉橋だった、今回は和人の面倒も一緒に見てくれている。

「おはようございます先生、もうすっかり良好です。体のだるさもとれましたし熱も引きました、許可があれば今すぐにでも退院したいぐらいですよ」

倉橋は笑顔で「そうですか」と返すと看護師に和人の腕から点滴の針を抜くよう指示を出した。

和人はキョトンとしながらも腕を差し出し、看護師に針を抜いてもらった。

「あれ？ 点滴……もういいんですか……？」

和人は点滴が刺さっていた箇所を押さえながら倉橋に質問を投げかける。まだまだ本調子ではない気がするし、もう少し継続していた方がよいのではないかと、倉橋を見つめ続ける。

「ええ。血液検査の結果を見ましたが、和人君は若いこともありかなり回復が早いです。食事もしっかり取れていますし血圧なども安定しています。今日一日様子見して、明日退院としましょう」

和人は明日退院出来ることよりも、今日までまだ入院なのか……という残念感を感じていた。自分ではもう表を出歩けるぐらい回復していると思うところのだが、しかし医師の指示は絶対である。勘違いしないでしっかりと休息をとるべきだ。

「そう残念がらないでください、今日もお友達が面会に来られていますから」

和人は頭に？マークを浮かべ、今日は一体誰だろう？ という気持ちでドアが開くのを待った。気のせいでなければドアの外が慌ただしい。何やら声がかやがや聞こえる気がする。

「失礼します」

和人はその姿を見て驚愕した。まさかまさかと思っていた人物が和人の見舞いに現れたからである。

小学校ぐらいの身長の子、やたら身長の高い男、そして母性をくすぐりそうな雰囲気を持った高校生ほどの女の子が入室してきた。

倉橋は三人を案内するとそそくさと部屋から看護師を連れて退室していった。

変わり身の早い先生だ。

「プリヴィエート！ キリト君！ 元気そうで安心したわ」

このロシア語での挨拶、言うまでもない。セブンこと七色・アルシャービン博士が和人の見舞いに現れたのだ。

部屋の外がかやがやしたのはセブンの所為だった。

「キリト君……！ ユウキちゃんから倒れたって聞いたからびっくりしたよ……」

明るいピンクのダツフルコートに身を包んでいるこの白髪の少女はレインこと枳殻虹架からたちじかだ。

「わざわざ見舞いに来てくれたのか……ありがとう、レイン、セブン。ってことはこっちのガタイのいい男はもしかすると……？」

和人は背の高い男を見上げて言った。髪の毛の色こそ水色ではないが厳しい雰囲気醸し出しているこの男前な男性はまぎれもなく、彼だろう。

「うん、スメラギ君だよ！ 本名は住良木陽太君っていうの」

「フツ、貴様ともあろうものが自分の体調管理も出来んとはな……」

現実世界でも相も変わらずのきざつたらしい性格な住良木の態度に、和人は若干ムツとした。わざわざ体調を崩して倒れた知人に放つセリフかと。しかしそんな彼を他所にするとセブンがこちらに近づき、和人に耳打ちをする。

（スメラギ君はああ言ってるけど、キリト君のことめっちゃめっちゃ心配

してるからね?)

(……ふふ、あいつらしいな?)

「どうかしたか? 随分ご機嫌なようだな? キリトよ」

「いやいやなんでもないなんでもない! あ、あはは……」

他愛もない挨拶を交わす。病室の外にはまだがやがやと話し声が聞こえる。無理もない。

世界的に有名な七色・アルシャービン博士が一般人である和人の見舞いに来てるなどと聞いて誰が信じるだろうか。実際に来てるわけだが。

「それでセブン、今日はわざわざ俺のところにとただ単純に見舞いに来てだけじゃないんだろ?」

「やっぱりキリトくんは察しがいいね。今日はこれを渡しに来たのよ。どうせ外出出来ないでしょ?」

「これは……なんだ? 台本? んでもう一冊はMMOトウモローの最新号か……」

和人はまじまじと本を見る。台本らしき本はライブ本番当日のプログラムの進行などが書かれていた。

ほとんどセブンの役割ばかりであったがどのようにユウキが登場して、およそ何分間パフォーマンスをするかなどなどの細かいことが書かれていた。

「え……なっ、スペシャルゲストに……アスナ!」

和人が台本を眺めていて驚いたのがアスナの名前であった。確かに一昨日アスナからユウキの手伝いをするということは本人から聞かされていたのだが、歌うとは聞かされてなかったのである。

寝耳に水どころか、寝耳に炭酸コーラ、と言っつていいような驚きだ。

「あれ、アスナちゃんから聞いてなかった? ユウキちゃんとデュオの形で一曲だけ参加することが決まっていたのよ。昨日、一昨日と猛特訓積んだんだからね?」

「そうだったのか……それならそれで、一言教えてくれればよかったのにな……」

「アスナちゃんは驚かせたかったんじゃないかな? ここ最近キリト

君にまかせっぱなしだったし。まあ折角こうして休める機会が来るんだから私たちにまかせてキリト君はしっかり体力を回復させておいてね？」

和人はMMOトウモロの記事を読みながらセブンの話を流し気味に耳を傾けている。

MMOトウモロにはセブンのチャリティーライブの記事がでかでかと載っていた。もちろんスペシャルゲストとして参加するユウキ、アスナのことも大々的に取り上げていた。

やはり、セブンが絡むとどのようなイベントと規模がデカくなる。そして初のチャリティーともなると、今まで以上に注目が集まる。

「これ、すごい宣伝だな……」

「うん、シンカーさんが頑張ってくれたんだって。キリト君のお母さんから一世一代の大イベントだから過去にないぐらい大々的に取り上げて！ って頼んだみたいよ？」

「え……母さん、シンカーと交友があったのか……そりゃパソコン情報誌の記者だから、関わり合いがないわけでもないか……」

SAO時代の知人、シンカーは和人とSAOクリア後も交流があった。

オフ会でしょっちゅう顔を合わすし何より、MMOトウモロの責任者ともあって今の日本のVRMMO界の最新情報の第一人者を担っているといっても過言ではない。

そのシンカーにいつの間にか根回しをしたのか母さんは裏でいろいろとすごいことをやっていたのだな……と、和人は自分の母親に脱帽であった。これ以上ない宣伝にお手上げ状態であった。

「AIDSのことについても載ってるよ？ 薬剤耐性型のウイルスに感染している患者さんが世界でどれだけ苦しい思いをしているか……とか。病的な被害とは別に周りからの迫害を受けてきた人たちの体験談も載ってるの。ネットゲーム雑誌としてはかなり暗い記事になってしまっているけど……これがユーザーのみんなにどれだけ響いていくか、だね……」

虹架は暗い表情で淡々と語り出していた。

そう、H I V感染者は何も木綿季だけではない。世界中で同じようにH I Vに苦しめられている人たちは山ほどいる。だが、今回のチャリティーが成功して彼女が治れば、世界中のA I D S患者の人たちに希望を与えることになるのではないかと、今回のライブの新たな可能性を浮かび上げる。

「そうだったら木綿季は……世界のA I D S患者の希望の光になる可能性があるんだな……?」

それは大いにありがたいことだ。最初はただ単に木綿季を助けることだけしか頭になかったが、世界中の助けになると考えると後ろめたさが少しなくなっていた。堂々と表立ってこのイベントに臨むことが出来る、そう考えたのだ。

しかし、和人はまた別の意味で将来を懸念していた。木綿季が完治して無事退院するとする。そうしたら今度予想されるのがマスコミの殺到だ。国内初のA I D S完治者となると当然取材やらが殺到すると読んでいるのである。

そんなことしたら木綿季のプライベートはもちろん俺たち桐ヶ谷家も静かな日常に土足で踏み入れられる可能性がある。

木綿季と退院後はゆっくりと過ごしたいのにそれは絶対にゴメンだ。

少し癪だが和人はあの男のコネを使うことにした。借りを作るのはゴメンであったが、今回はやむを得なかった。

「セブン、ここまで協力してもらっておいて厚かましいんだけど……もう一つ頼まれてくれないか?」

「構わないけど……ここまでできて今更厚かましいも何もないでしょ」

「すまない、ちよつとある男に連絡をいれてほしいんだ。木綿季の退院後に、俺は安心してあいつに静かに日常を過ごさせてやりたいから……」

「バニヤートナ、キリト君。その男っていったい誰かしら?」

和人は七色をベッドの近くまで手招きで寄らせると、静かに耳打ちした。この小さな病室に三人しかいないのだから、小声でなくても普通の声量で話せばいいのに、わざわざ抑えて声を伝える。

それほど表沙汰にしたくないのだろう。

「わかったわ。住良木君もいるし多分大丈夫だと思う。あの人には私からも情報提供とかしているから、逆にここで借りを返させるのもいいかもしれないわね！」

「あ、あはは……すまないな、恩に着るよ」

「いいのよ、その代わり……いつかキリト君今度食事に誘ってよね？」
そのセリフを七色言った瞬間、その隣で仁王立ちのように構えている住良木の顔が引きつっていくのがわかった。

その形相を見るやいなや、和人は何故そんな穏やかではない顔で自分を見るんだ。俺がなにか悪いことでもしたかと、苦笑いを浮かべながら彼の事を見つめ返す。

「と、ともかくありがとう三人とも。俺も明日には退院出来るから……リハーサルまでには間に合うと思う」

「ええ、正直言つてキリト君が倒れたと聞かされた時はものすごい心配したのよ？ ユウキちゃんのメンタル面とかもね」

「……そうだな。一番負担かけちゃったのはあいつだよな……」

和人は申し訳ないといった表情で自分の点滴が刺されていた箇所を見つめていた。もっと体調管理していれば、もっとしっかりしていれば、ユウキの側についてやれる時間が増えたのにと、己の未熟さを悔んでいる。

「今更後悔しても仕方ないわよ。休暇だと思って明日まではしっかり休みなさいね？」

「あ、ああ……」

「さて……と、それじゃあ私たちはそろそろおいとまするわねっ」

「もう帰るのか？」

「うん、今日も一応レッスンはあるんだけど、仕上がりを見るだけになると思う。あとは各々がセルフトレーニングをして明日のリハも含めて最終調整するだけね。全く……ユウキちゃんもアスナちゃんもついこの前まで素人だったとは思えないわよ」

「ユウキ……」

掛け布団に顔をうずくませた和人は彼女の名前を呟いた。

考えてれば、もう二日も彼女に会っていない。今では和人の中で隣に彼女がいることはもう当たり前となっていただけに、尚寂しさがこみ上げてきた。

「ユウキちゃんに会いたい？」

セブンがそう尋ねると、和人は迷わず無言で首を縦に振る。言うまでもない。

「はあ……まったくしょうがないわね。私たちこれからユウキちゃんのところにも面会に行ってくるから、その時にキリト君のこと伝えておくわよ」

その言葉を聞いた瞬間和人は頭を上げ、何故ここに木綿季がいることを？ と若干身を見開き、穏やかではない表情で七色を見る。

しかし七色はVR技術の第一人者。あの茅場晶彦と関わりがないわけでもないし、メデイキュボイドのことを知っていても不思議ではない。

「私を誰だと思っているのよ？ これでも現代VR技術の第一人者よ？ メデイキュボイドのことだって知ってるんだからね？ まあ……現物はまだ見たことないけど」

それを聞き届けると和人は掛け布団を翻しベッドから上半身だけ外に出して畏まった姿勢で話し始めた。

先程までなよなよしていた様子とは打って変わって、キリツと表情を一変させて、雰囲気ガラリと変わる。

「三人とも……これからユウキに……あいつに会うつもりなら、覚悟を決めた方がいい」

「か、覚悟……？」

「ああ……だけど、現実から目を背けないでほしい。俺も最初は驚いたが……いや、これ以上言わないでおこう……」

メデイキュボイドを見たことがないということは、当然それを使用している彼女のことを見たことがないということになる。

つらくて過酷な現実と、今もなお闘い続けているあの姿を、まだ見ていないことになるのだ。

「今日は来てくれてありがとうな。あいつにさ、俺はもうすっかり元気になったから安心してくれて伝えておいてくれ」

「どういたしまして、気にすることないわ。私たちが来たくて来ただけなんだから」

「……それと、一刻も早く会いたい。会って側にいたい。って伝えておいてくれ……」

その一言を聞いた瞬間七色虹架姉妹のの顔が引きつった。何も今の状況で惚気なくてもいいじゃないかと、軽蔑にも近い眼差しを彼に向ける。

そんな様子などつゆ知らず、住良木は相も変わらざるのポーカーフエイスで「ふっ……」とキザったらしく場を受け流す。

「はいはい、仲が良くて素晴らしいことだわ。まあ、忘れてなければ伝えておくから、私たちは失礼するわね？　ちゃんと休んでおきなさいよ？　キリト君」

「ああ、ありがとう」

三人が退室すると途端に和人のいる病室に静寂が訪れた。そしてまたもや和人は若干の寂しさを感じてしまっていた。お見舞いに来てくれる人がいなければ、患者は基本的に孤独と退屈さとの闘いになる。和人は何もしていないがため、そんな強敵と闘っていたのだ。

「……木綿季……」

和人は木綿季に会いたくてたまらなかった。木綿季が恋しくてたまらなかった。今の非力な自分が支えになれるとは思えないけど、とにかく会いに行きたかった。

しかし本人に明日まで来るなど言われてしまっていた。本人の気

持ちを裏切りたくないという理性がわずかに勝り、静かに和人はその身をベッドに横たわらせた。

寝よう、寝て今日一日がすこしでも早く過ぎ去るようにしてしまおう。

そう考えた和人はそそくさと瞳を閉じて、再び眠りにつこうとした。

最初は寝ることを意識しすぎて眠れなかったが……やがて眠気は自然と訪れてきた。

同日同時刻 横浜港北総合病院 メデイキュボイド無菌室前

七色、虹架、住良木の三人はメデイキュボイドが設置されている無菌室へと足を運んでいた。

場所は事前に倉橋から聞き出していたので、案内なしで現地へと向かっていた。長い病棟の廊下を渡り歩きながら、未だ見た事のないメデイキュボイドを見るために。そして、これから命を救おうとする木綿季に一目会うために。

「キリト君の言っていた……覚悟するってどういう意味なんだろう……？」

レインが歩きながら話を振った。セブンは真剣な表情をしてレインに返事をする。

「……お姉ちゃん、引き返すなら今のうちかもしれないよ？ 多分これから見る光景は……そうだと理解してても過酷な現実を見ることになると思うから……」

「え……？ ど、どういうこと……七色？」

当然、虹架は知らない。知る由もない。現実のユウキが、紺野木綿季が、どのような形でそのか細い命を長らえているかを。

「行けばわかるわよ……この奥が……そう、みたいね……」

普通の病棟とは雰囲気違った廊下にさしかかる。角を何回か曲がると黒いブラインドが張られたガラス張りのパネルの前に倉橋が待っていた。彼は七色御一行に気付くなり、軽く会釈をし、丁寧な

仕草で彼女らを出迎える。

「七色博士、お忙しい中ありがとうございます。話に聞きますとVRの世界で木綿季君の歌のレッスンも見てくれているとかで……」

倉橋はセブンを見るなり畏まった態度で感謝の意を表した。

「別に大したことはないわ。あの子の才能がすごかっただけよ。正直……このイベントつきりで引退つてのは勿体ないぐらい」

倉橋は「ハハハっそうなんですか」と呟きながらパネルの操作を続ける。あの七色博士にそこまでの太鼓判を押して貰えるとは、木綿季君はなんてすごい子なのだろうと、少しばかり鼻が高くなっていた。カタカタと操作を続け、ボタン一個押すだけでブラインドが解除される状態までもつていく。

「今からお見せします木綿季君の姿は……人によっては残酷な光景になるかと思えます。その覚悟があるのなら……今、このブラインドを解除しようと思えますが……よろしいですか？」

数分前にも、和人が似たようなことを口走っていた。残酷な光景？ 一体どのような光景だというのだろうかというこが引つかかりつつも、三人はお互いの顔を見合った後、倉橋に対して頷いて返事を返した。

「構わないわ、やってちょうだい……」……分かりました」七色が最後通告を承諾すると、倉橋は首を縦に振りながら、パネルのボタンにそつと指を乗せる。そのボタンを押すだけで、もう木綿季の姿が、メデイキュボイドが見ることが出来る。「木綿季君、おはようございます。体の調子はいかがですか？」

倉橋が話しかけるとスピーカーから元気な声が聞こえてきた。

『はーい！ おはようございます！ 倉橋先生！ 今日絶好調です！』

その聞き覚えの声に三人がピクリと反応を見せた。やっぱりここに……ユウキがいるんだ……そう実感していた。

「それは何よりです、今日も木綿季君のお友達がお見舞いに来ていますよっ！」

『え……そうなんですか……誰だろ……アスナかな……？』

倉橋は一瞬セブンたちを見ると「ブラインドを解除します」とだけ言い残し、パネルの最後のボタンを押した。

無菌室のガラスに張り巡らされた黒いブラインドが解除され、その奥にメイドィキユボイドに包まれた木綿季の姿があらわになる。

「——ッ！」

「これが…ユウキ…ちゃん…？」
「……………」

レインは大変なショックを受けていた、この機械を使わないと延命出来ないぐらいユウキは…追い詰められているんだ。そう思っってしまうとレインの目からは涙が零れ落ちていた。

セブンはメイドィキユボイドのことを知っていた、知っていたが…話に聞くのと現実に見るのでは全然感覚が違う。12歳の少女ということもあってその心にショックを与えるには十分すぎるほどであった。

スメラギも流石にこの光景を想像していなかったようでその表情からは焦りが見受けられた。

『あれ…もしかして…セブんにレインに…スメラギ…かな…？　すごい…みんなALLOのAvatarとそっくりなんだね…！　セブンは知ってたけど』

「ユウキちゃん…なの…？」

レインが恐る恐る声を掛ける。

『うん…これが現実のボクだよ…レイン。ボクはこのメイドィキユボイドを使わないと生きていけない体なんだ…』

「そんな…そんなことって…」

レインは残酷すぎる現実を突きつけられ、膝から崩れ落ちてしまった。

『泣かないで…レイン、ボクは大丈夫だから。和人が…セブンが…ボクの病気を治そうと頑張ってくれてる…。だから…ボクも頑張れる。絶対に病気を治してみせる…だから…泣かないで…？』

レインは泣き続けていた、木綿季の声は聞こえていたがそれ以上に悲しい現実には打ちひしがれていた。

セブンはレインの肩を抱き、落ち着かせようとしていた。

「ユウキちゃん、キリト君すっかり元気になったよ？ 点滴も外れて体力も回復してる。今日一日様子だけみて明日退院の見込みも出てきたって」

それを聞いた木綿季は声のトーンを上げて喜びを表した。

『ホント!? …よかった…和人が…元気になって…』

自分の所為で体調を崩させてしまったと感じた木綿季はその言葉を聞いて心底安心した。

すると突然に和人に会いたいと思うようになってきた。

『和人…なんか言ってなかった?』

木綿季は少しだけバツが悪そうに和人のことを尋ねた。

「うん…寂しそうにしていたよ、ユウキちゃんに会いたくて会いたくてたまらないって感じだった。今も寂しさを紛らわすために必死で寝ようとしてるんじゃないかな…」

『そっか…、ボクも…和人に…会いたいな…』

その言葉だけ言い残すと、木綿季は途端に無言になってしまった。そこにセブンが話を切り出した。

「ユウキちゃん…もう変な意地張らなくてもいいと思うよ？ キリト君はもうあんな無茶しないだろうし…それにユウキちゃんに会いたくて会いたくて死んじやいそうだったよ？ ユウキちゃんももう我慢しなくていいと思うの。レッスンはもう完璧だし…今日ぐらい休んでもいいよ?」

『…いいの?』

セブンは木綿季の問いに頷く形で返事を返した。

『セブン…ありがとう…! ホントにありがとう…!!』

その言葉を聞いたセブンにようやく笑顔が戻ってきた。レインも少しづつ落ち着きを取り戻してきた様子だ。

「んじゃあ…私たちは行くね、明日のリハの準備もしないといけないし。ユウキちゃん遅刻しちゃだめだよ?」

『うん…! 絶対に遅れないようにするよ…! ホントにありがとう…セブン』

「いいから気にしないの、それよりキリト君寂しくて死んじゃいそうになつてるから早くしてあげなさい?」

木綿季はありがとうと何回も繰り返してセブんに感謝の意を込めた。

『先生…というわけなので…和人にアミユスフィアを返してあげてもらつてもいいですか…?』

「わかりました。木綿季君がそう言うのなら…彼に返しておきますね」

倉橋はそう言うのと奥の部屋から和人のアミユスフィアを持ち出してきた。勝手に病院のランチャーがインストールされている和人のアミユスフィアを。

「んじゃあユウキちゃん、元気だね。詳細はまたALOでメッセージ送つておくから…後で絶対に確認してね?」

『うん…! 今日ありがとう…セブン、レイン、スメラギ…ボク…本当に嬉しい…!』

「ううん…私も…ユウキちゃんが元気みたいで何よりだよ…」

レインは心がすっきり落ち着いたので、少しだけ笑顔を作ることが出来た様子だ。

三人は帰り支度を始め、無菌室を後にしようとした。

「それじゃあ、また明日ね。何度も言うけど遅刻厳禁だからね?」

『ウン! 今日ありがとうみんな! また明日ね!』

三人は木綿季への挨拶を済ますと倉橋先生に頭を下げてから、無菌室を後にした。

その様子を見届けた倉橋は緊張が解けたのか、ほっと胸をなでおろすような仕草をした。

『先生?…どうかしたんですか?』

「あ…いや…七色博士をいざ実際に目の前にしたら…柄にもなく緊張をしてしまいましたね…アハハ…」

『へえ…倉橋先生でも緊張なんてするんですね!』

木綿季がジョークをかますと、倉橋は「そりゃあしますよ、私はまだ若いですから」とジョークにジョークで返す。

親子とはちよつと違つかもしれないが微笑ましいやり取りだった。

「それでは私は…和人君の病室にこれを届けてきますね、キャリブレーションをやり直すのですぐにはそちらにはいけないかもしれないかもしれませんがそのまま待つていてくださいね」

木綿季は『はい！ 了解！』と返事をして、仮想空間の自分の部屋の中で和人が来るのを待った。

同日同時刻、横浜港北総合病院 院内廊下

セブン、レイン、スメラギの三人は病院の出口に向かって歩を進めていた。

「…お姉ちゃん、大丈夫？」

セブンがレインに気を掛ける、この中で一番ショックを受けていたのはレインであった。

「うん…もう大丈夫…ありがとう…七色…」

「私も…ユウキちゃんがあの状態であることは知っていたんだけど…現実にあの姿を見たら…ちよつと声が詰まる想いがしたわ…」

「うん…私…目を背けちゃった…あとでユウキちゃんに謝らないと…」

「……………」

スメラギは終始無言であった、普段から自分で進んで話すようなやつでもないが。

「お姉ちゃん…スメラギ君…お願いがあるの…」

二人は顔に？ マークを浮かべ、セブンの顔を見る。

「絶対にユウキちゃんを助けよう…、このライブを絶対に成功させて…ユウキちゃんを現実の世界に…帰してあげよう。だから…二人ともお願い…私に力を貸して…！」

スメラギとレインはお互いの顔を見て、何をいまさらという表情でセブンに声を掛けた。

「何言ってるの七色…スメラギ君もそうだけど私だって絶対にユウキちゃんを助けたいって思ってる。私に出来ることがあるのなら…喜んで協力させてもらおうよ？」

「お姉ちゃん…」

「俺はセブンがそうしろと言うのなら…そうするだけだ。お願いも何もないだろう…」

「…スメラギ君は相変わらず素直じゃないんだから…」

最後に軽い笑いを交え、この三人は改めて固い決意を交わした。絶対に木綿季を助ける、何があっても現実世界に帰す。そうお互いの心に誓いを立てて…。

同日同時刻 横浜港北総合病院 和人の病室

結局あれから寝付けなかった和人は暇そうに病室の天井を眺めていた。

眠気より木綿季に会いたいという気持ちの方が勝ってしまい、もうどうすることも出来なかった。

「木綿季…」

和人の目には涙が浮かんでいた。心にぽっかり穴があいてしまったようなそんな感覚に見舞われていた。

そんなことを思っていると突如病室のドアがコンコンとノックされた。

もうすっかり慣れた和人は「どうぞ」と短い一言だけ放った。

「失礼します…和人君、起きてたんですか」

「こんにちは倉橋先生、ええ…一生懸命寝ようとしたんですけど…寝付けなくて…」

倉橋は「まあ、仕方ないですよね」とだけ言い放つと、徐に和人のアミュスファイアを取り出した。

「先生…それは…」

「ええ…和人君のアミュスファイアです。すみません勝手に病院のランチャーをインストールしてしまいました」

和人は一瞬ぽかんとした、何で倉橋先生が俺のアミュスファイアをもって俺の病室まで来たんだろう、そう考えていた。

「和人君、木綿季君からの伝言を伝えますね。〃 和人と会いたい〃以上です」

そう言い残すと倉橋はアミユスファイアのLANケーブルを和人の病室のLAN差込口に繋ぎ、和人にアミユスファイアを手渡した。「大丈夫だとは思いますが…長時間のドライブはまだ避けてくださいね。しっかり休憩を挟んでください」

「あ…は…ハイ！　ありがとうございます！　倉橋先生！」

倉橋は「いえいえ」とだけ言い残して笑顔で退室していった。

「木綿季…今いくからな…」

和人はアミユスファイアを被り、電源を入れるとキャリブレーションを10分で完了させ、病院のランチャーを起動させた。

「よし…リンク・スタート!!」

和人の意識は仮想世界へと旅立っていった。

同日同時刻　メデイキュボイド仮想空間　木綿季の部屋

セブン達と別れを済ませた木綿季は少しだけ寂しさを感じていた。

「和人…まだかな…」

昨日までライブのことしか考えてなかった木綿季だが、一旦和人のことを意識しだすともう会いたいという気持ちで押しつぶされそうになっていた。

「和人がいなくても頑張るって決めてたのにな…やっぱり…ボクは和人がいないと何も出来ない…のかな…」

「そんなことはない」

木綿季は突如背後から聞こえたその声に体をビクンとさせると、ゆっくりゆっくり声のした方へと体を振り向かせた。

その方向には…二日会ってなかった…一番大好きなあの人があった。

「か…ず…と…？？」

「木綿季…！」

「かずと…かずと…！」

和人は木綿季に駆け寄り、力いっぱい抱き締めた。

「木綿季…会いたかった…」

「ボクも…ボクも…会いたかったよ…！ かずと…！」

木綿季の目には涙が浮かんでいた。久しぶりの和人だ…忘れかけてた和人の温かさだ…。

ボクに…いっぱい大好きをくれた…和人が…またきてくれた…。

「木綿季…すまない…すまない…！ お前に…心配をかけてしまった…俺の…落ち度だ…」

「そんなことない…そんなことないよ…ボクが…和人に頼りっぱなしなのがいけなかったんだよ…」

「ごめんな…独りにさせちゃまって…でも、これからは寂しい思いはさせないからな…木綿季…」

和人は木綿季をさらに力を込めて抱き締めた。お互いを感じあうために長い長い時間強く、抱き合った。

「あのね…和人、ボク…歌…すっごい上達したんだよ…セブンがね…もう教えることがないなんて言い出してさ…」

「そうなのか…傍で聞いていたかったな…木綿季の歌…」
「今…ここで歌っても…いいよ？」

和人がいいのか？ と聞き返す。木綿季はそれに「いいよ」とあっさり承諾すると少し和人から距離を置き伴奏なしで静かに…ゆっくりと口を開いて歌い始めた。
「……………」

和人は決して広くも狭くもない仮想空間の中で、木綿季の歌声を聞いていた、聞き入っていた。

美しい、心からそう思えた。つい先日まで聞いていた歌声とは全然違う…神秘的なものをその姿と歌から感じ取っていた。

ずっとこの素敵な歌声をいつまでも聞いていたい、そして…いつか現実世界でも聞きたい…そう思った。

「今日を越えて…みたいんだ…」

木綿季が最後のフレーズを歌い切った。今回歌ったのは2曲目としてセブンから言い渡されていた曲だった。

木綿季の今までの人生を体現したような歌詞の、あの曲だった。

歌い終わった木綿季は少しだけ深呼吸をすると、胸に手を当てた状態で和人の方をちらつと見て、照れくさそうに感想を聞いた。

「えっと…どう…かな…」

和人は木綿季に見惚れていた。改めて木綿季が俺の恋人で良かったと、心からそう感じた。

やがてハツと正気になった和人は木綿季に歩み寄り、再び抱き締めた。

「素敵だった…素敵すぎて…感動したよ…」

「…ありがと和人…ボク…嬉しいな…」

木綿季は和人の胸を借りて、その温かさに酔いしれていた。ずっとこのままでいたい、ずっと和人の傍にいたい。

「今日は…レッスンはいいの？」

「うん…セブンがね、今日は休んでもいいって…明日リハーサルもあるから今のうちにしっかり休息をとってなさい。だって」

「そうか…セブンに感謝だな…」

「うん…」

やがて二人は抱き合ったまま腰を下ろした。大好きな人が隣にいてくれる幸せを噛みしめながら、その心地よさを感じていた。

「木綿季…しばらくこのままでいさせてもらっていいか…？」

「うん…ボクも…和人とこうしていたい…」

二人はしばらくそのままの姿勢でひたすら時間の経過を感じていた。ただひたすらにお互いのぬくもりを感じていたかった。

和人は一瞬木綿季の顔を見ると、木綿季の後頭部に右手を回して自分の顔に一気に近づけた。

仮想空間に表示されているうっすらと光を放つウィンドウに照らされた二人の影は、完全にその形を重ねていった。

第32話く今、万感の想いを込めて 中編く

西暦2026年2月5日木曜日 午前10:00 メディキュボイ
ド内木綿季の部屋

和人と木綿季は2日ぶりに再会を果たすことが出来た。目の前で和人が倒れ、その光景にショックをうけた木綿季であったがなんとか乗り越え、成長しようとしていた。三日経つまで会ったら絶交するという一方的な約束をしていた木綿季であったが、変な意地を張るのをやめ和人と再会したのだった。

和人と木綿季はあれからいろいろなことを話し合った。

和人が倒れてからどうなったのか、レッスンのこと、アスナのことなど、たくさん話し合った。

いくら話しても話題には事欠かさなかった。

「そうか…本当に心配かけたんだな…ごめんな…」

「ホントだよもう…和人が死んじゃうんじゃないかって…本気で心配したんだからね…」

二人は和人が倒れた時の話をしていた。かけがえのない存在の和人が倒れたときの木綿季の心境はもう気が気でなかったであろう。精神崩壊を起こしかける一歩手前までいってしまったのだから。

その話をする木綿季の和人の腕を抱く手に力が入る。和人は若干腕が軋んでいたが気にすることはなかった。

「もうやだよ…大切な人が消えちゃうのは…」

木綿季は和人の腕に顔をこすりつけた。一昨日のことを思い返すと震えが止まらなかつた、軽いトラウマめいたものを木綿季は植え付けられてしまっていた。

その不安を和人は抱擁という形で消そうとしていた。

「和人…」

「大丈夫だ…もう…あんな思いはさせないから…」

木綿季は「ありがとう」と呟くとひらすらに和人の胸を借りて和人を感じていた。

「あ…そういえば…なんだけどさ…」

唐突に和人が話題を振ってきた。

「なあに？ 和人」

「母さんが言ってたんだけど…木綿季、お前の退院後の受け入れ先…俺んちになつたの…聞いてるか？」

木綿季はぽかんとした顔の後、すぐに笑顔になった。退院後の受け入れ先については和人の母親の翠からすでに話をしてもらっていたからだ。

「うん…翠さんがね…ううん、お母さんが…桐ヶ谷家にいらつしやいって…言ってくれたんだ」

「……そか…知ってたのか…、まあ母さんも木綿季と話して正式に決めたって言ってたからな」

「えつとき和人…その話なんだけど…ボク、そうなる…和人の家で暮らすことになるんだよね…？」

「…俺と同じことを言うんだな…、まあそうなるよな」

「お部屋とか…あるのかな」

「え…あ…そのな…」

木綿季が寝泊まりする部屋の話を振られた瞬間、和人は顔を真っ赤にして凍り付いてしまった。

どうやって答えたらいいか、素直に今はないと言えいいのか、新しくこしらえると云えばいいのか…などなど。

「えつと…だな…今はないんだ…、部屋は一階に母さんたちの寝室と客間、二階に俺とスグの部屋と物置に使ってる部屋があるんだ」

「へえ…一軒家なんだ、和人のお家って」

「木綿季の家も一軒家だったよな？」

「うん、そうだよ！でも和人のお家ほどでつかくはないと思うよ？

確か剣道場もあるんだっけ？」

「ああ…爺さんにこつぴどく絞られた思い出しか無いな…あそこは…」

あの時は本当に参ったという顔をしながら和人はぽりぽり頭をかいた。

「ああ…んで木綿季の部屋…なんだがな…えつとその物置に使ってる部屋を空き部屋にして、そこに木綿季の部屋をこしらえようとしてるらしい」

「ホントに!? やったーっ!」

自分の部屋があるという事実を知った瞬間に木綿季はぱあつと明るくいつもの元気な木綿季に戻った。

やっぱり木綿季はこうでなくっちゃあな…、でも必死にこちらにすがってくる木綿季もなんだか可愛いと感じた和人であった。

「えーつとただな…新しい物置を建てなきゃいけないってな、外に物を放置するわけにもいかんから…」

「え…?」

和人はバツが悪いようにもじもじ話し出した、この先の言葉がなかなか表に出せないでいた。

「んと…掻い摘んで言うと…木綿季の部屋は物置が新しく建つまで使えないんだ。物置部屋を建ててそこに荷物を移動させて部屋を空っぽにしないといけない。多分掃除も必要だからな」

木綿季は興味津々に「フンフン」と和人の話を聞き続けた。

「そしてだな…結構広い部屋なんだ…多分8畳ぐらいあったと思う、だから時間もかかる。木綿季が部屋に住めるようになるのはまだ当分先になるのかなと思う」

木綿季は「あ、そうなんだ」と返事を返す。この言葉の意味に気付かないまま天然っぷりを発揮していた。

「えーつと、木綿季さん。俺の言ってるコトが分かりますかね…?」

「え?」

和人の問いに木綿季はきよとんとした顔で反応を返した。ああだめだこれは、まったく気づいてない。

仕方ないので和人は最終的な回答を照れくさそうに話し出した。

「えーつとですね…木綿季先生…、ぶっちゃけた話になりますと…木綿季先生の部屋が使えるようになるまでですね…、お…俺の部屋で…一緒に…過ごすことになっておりまして…ハイ…」

上司に媚びへつらうような態度で和人は話を切り出していった。顔はもう真っ赤つかである。

「和人と…一緒のお部屋…?」

「ああ…物置がいつ建つか分からないが…それまでの間になるけど…」

その言葉の意味を理解した瞬間、木綿季の頭が水蒸気爆発をおこした。目には見えないがボンツという音と共に顔が真っ赤になり、あちら側の世界へトリップしてしまった。

「ちよ…木綿季!? 大丈夫か!」

目を回してへろへろになっている木綿季を、和人は本気で心配し、介抱していた。

「うん…だいじょーぶ…ちよつとね…体温と心拍数があがっただけだから…あはは」

和人は本当に大丈夫なのか?と思いつつも木綿季を抱き寄せて、姿

勢を正してやった。

声を掛けられて若干ではあるが冷静さを取り戻せた。

「えっと、和人…一つ聞きたいんだけど…」

「何だ？」

「それってつまりさ…ボクの退院が長引けば長引くほど…物置が建つ
てる可能性が高いってことなんだよね…？」

「ああ…そうなると思うが…それがどうかしたのか？」

木綿季は何かを決意したように真剣な顔つきになった。今まで見
たことのない…決闘^{デュエル}でも見たことのないマジの顔をしていた。

「ゆ…木綿季先生…？」

和人は苦笑いを浮かべながら木綿季を見つめていた。なんだかよ
くわからないがやばい感じがする、直感でそう感じ取っていた。少し
だけ木綿季から距離を離そうと思った瞬間――。

「和人!! ボク頑張って早く病気治す!! だから…リハビリ手伝って
!!」

木綿季は和人の胸倉に掴みかかり、前後にぐわんぐわんと和人を揺
さぶりながら荒ぶるように声を掛けた。

「ぬこっ!! そ…それは結構なことなんだが…ちよつと冷静になつて
ください木綿季さん!! 脳みそが揺さぶられ…」

その声を聴いた木綿季はハツとなり和人を離した。和人は軽い脳

震盪を起こしているかのような感覚に襲われていた。

「あつ…ごつごめんね和人…」

「ああ…大丈夫だ…ちよつと頭がごわんごわんするけどな…」

「ごめんね…ちよつと興奮しすぎちゃって…、でも…ボク…頑張つて早く病氣治すよ！」

「おいおい…骨髄移植をしても…すぐに病氣が治るわけではないだろうに…時間かかるんじゃないか？」

和人の言っていることはごもつともである。

木綿季の移植手術が成功しても、木綿季の体を蝕んでいるHIVウイルスが駆逐されていくには時間がかかる。

何も移植手術をした瞬間にウイルスが死滅するわけではないのだ。少しづつ…少しづつHIVウイルスが消えていくのだ。

どのぐらいの速さでウイルスが消えていくかは、完全に木綿季の体次第なのでこればかりはどれぐらいのスパンでHIVが治るかどうかは想像がつかないと言うのが正しいだろう。

HIVウイルスが消えても、患っていた感染症などの合併症の治療、後遺症の検査、身体機能の検査などが待っている。

どんなに早く病氣が治ったとしても…最低でも半年はかかるだろう。リハビリを含めるともつとかかるかもしれない。

「うん…それは分かっているんだけど…、ボク…早く退院して…和人のお部屋で…暮らしたいな…なんて…」

その言葉を聞いた瞬間、またもや和人は凍り付いた。この男、一日に何回凍り付けば気が済むのであろうか。

「え……えええええっ!?　ちよ……それはあまりにも……」

「ダメ……かな……ボクは和人と一緒に構わないけど……、むしろずっとお部屋が出来なくても……そのままでもいいかなっていうか……」

木綿季は言ってるうちに段々と恥ずかしくなってしまう、顔を真っ赤にして蹲ってしまった。

「あ……う……でもそういうわけにもいかないだろう……お互いプライベートルがあると思うし……」

「もしかしてエッチな本とか隠してたりするの?」

木綿季が和人に核弾頭を投下した。地球全土が核の炎に包まれ、地は灼け、海は枯れ、人類が死滅したかに見えた世紀末が訪れるレベルの核弾頭を。

「がっ……なっ……あ……あるわけないだろう!!」

和人は両手をぶんぶん振り回し、必死に弁解をしようとしたが顔を真っ赤にして声を荒げても全く説得力がない。木綿季はその様子を見て、退院後の楽しみをまた見つけたようだ。……勿論悪い意味で。

「ほほう……それはそれは……楽しみですなあ……」

木綿季は非常に悪い顔をしていた、悪魔の笑顔だ。和人はその顔を見て軽く戦慄し、次帰宅したら部屋の大掃除を絶対にしようと思心に固く誓った。

「でもやっぱり……和人は男の子なんだね」

木綿季はご機嫌でニヤニヤしながら和人に声を掛けていた。実に楽しそうで何よりである。

「そりやそうだ…じゃなきやお前を好きになつたりしない」

「あ…うん…ありがと…」

急な不意打ちに木綿季はどぎまぎしてしまった。和人は普段はのほほんとしているくせに肝心なところで真面目になるから困る…そこがいいんだけど、と木綿季は思っていた。

「でもな木綿季…真面目な話…お互いのプライベートは大事だと思うんだ。どんなに親しい中でも絶対に表にばらしたくないっていうのはあると思うんだ。だから…少しの間ならいいがずっとってのは…」

「あ…うん…そうだよね…ごめんね…」

その声を聴いた瞬間に木綿季は首を垂れて落ち込んでしまった。

悪いことしたかなと思った和人であったがこればかりは仕方がない、実際恋人同士とは言え問題も出てくるだろう。

「それにな…俺がお前を襲わないという保証がない」

「え…？」

その瞬間、和人は木綿季の肩を激しくつかみ、腕を押さえつけそのまま背後に押し倒した。

ALOのステータスが反映されてないこの仮想空間では木綿季はただのか弱い女の子。

男の和人に力で勝てるわけがなく抵抗する間もなく力なくそのまま和人に仰向けに押し倒されてしまった。

「か…ず…と…？」

顔を真っ赤にした木綿季はこの状況を理解できないでいた、何でこんなことになってるの？ 和人はどうしてこんなことをしているの？と…。

「…こうなってしまう保証は出来ないぞ…って言ってるんだ…木綿季、俺も男だからな…」

それだけ言い放つと和人は木綿季を優しく抱き起こし、先ほど同じ体勢に戻した。

押し倒された木綿季の心臓は言うまでもなくバクバクである。かつてないほどの鼓動の速さを味わっていた。

「ごめんな、驚かせちゃって」

そう言うと和人は木綿季の頭にポンと手をあて、いつものように優しくなでじゃくった。

「あ…その…えっと…ボクは…構わないよ…？ 和人が…よければ…」

木綿季は下を俯き、もじもじしながら小さい声で呟いた。和人も一瞬その発言に内心動揺するが、なんとか理性を働かせ何も言わずに木綿季を優しく抱擁した。

「和人…？」

「ごめんな…今はこれで…我慢してくれ…」

「……意気地なし……」

「うるせつなんでも言え……」

「でもちよつと嬉しかった、ありがとう……和人……」

その後は先ほどのこともあってか口数が減ってしまい、すっかり仮想空間内は静かになってしまった。

しばらくぼーつとしていると和人はライブのことを思い出していた。

「そういえば……ライブは明日リハーサルで、明後日本番なんだよな……？」

「うん、明日は流れで最初から最後までやって、歌とかの最終調整とかもあるんだ」

「そうか……そしたら……ちよつと俺、明日は一度朝一で実家まで帰ろうかなと思う」

「え……帰っちゃうの……？ 和人……」

木綿季が表情を暗くしてしまった、ライブの時までこっちにいるという約束だったのに何で途中で帰っちゃうの？とそう思った。

「ああっ違うんだ、ちよつと流石に寝泊まりするには軽荷すぎるから……一旦帰って荷物まとめてまたすぐ来ようと思う。片道2時間の往復4時間だから……最速でも5時間ぐらい間が空いちまうから……その間だけ離れ離れになっちゃうけど……」

「ああ……そういうことか……びつくりした……」

木綿季は安堵の表情を浮かべた。それと同時に自分は和人がいないとやっぱりだめなんだなと痛感した。

「和人…でもボクやっぱり和人が傍にいてくれないと…不安でしょうがなくなっちゃったよ…。いくら自分を強く保とうと思っても…何かきっかけですぐだめになっちゃう…」

暗い表情で俯きながら木綿季は話し続けた。

「…それは俺も同じだよ…俺にとっても…ここ最近では木綿季が傍にいるのが当たり前になっていたからな。実際…今日お前と会うまでは…寂しすぎて死んじまいそうだったぞ」

「和人もなんだ…なんか変なの」

「ああ、お互い様ってな」

「でも…今日は一緒にいてくれるんでしょ…?」

「ああ…ずっと一緒にいてやる、倉橋先生は長時間のダイブはダメだって言ってたけど…構うもんかっ」

「え〜? 怒られても知らないよ〜?…でもありがと…」

和人は再度、木綿季を自分の胸に抱き寄せた。

「木綿季…ライブ…頑張ろうな…応援してる」

「うん…ありがと…そう言ってくれと…ボクも頑張れる…」

木綿季と和人はこの日の束の間の休日で、二日間という空白を埋めるのに十分すぎるぐらいの時間を過ごした。

たくさん話をして、たくさん触れ合って、たくさんお互いを近くに感じていた。

木綿季の命が助かるまで目の前に迫っている……ここだ、ここからが一番の正念場……大一番だ。

和人は一層気合をいれ、木綿季を支えていくことを心に誓ったのだった。

ここまで来て失敗は許されない、絶対にこの少女を助ける、その思いを胸に……

同日午後 15:05 ALO チャリティーライブ会場予定地

セブンはシャムロックのメンバー、セブン自身のクラスタの力を借りて、ライブ会場の建設、進行の流れなどを決めていた。補佐にスメラギとレインを連れて、細かい演出などの取り決めも考察しながら準備を進めていた。

「うーん、ここはこんなもんでいいか……」

「セブン、このままだとここで使う小道具が不足することになるぞ。至急仕入れないとまずいことになる」

「え……それは困るわね……仕方ないわ、誰かお使いに出してもらえないかしら……」

スメラギはその指示を聞くと頷き、近くにいたシャムロックメンバーに指示を出して買い出しに行かせた。

ライブ成功には細かい裏方での下準備などが非常に重要になってくる。

スモークの動作チェックやライトなどの照明の位置調整、明るさなど。

様々な分野で細かい準備が進められていった。

セブンは長年このアイドル活動の先陣を切っている、演出などに妥協はしない、常に前に出て最高の演出をする。

それはゲストが何人来ようが事前に時間があるうがなかりうが関係ない。

やるからには全力を尽くす、それがセブンの信念であった。

「こんにちはセブンちゃん…何か私に手伝えること…ないかな？」

セブンに声を掛けたのはアスナだった、ユウキと一曲デュオで合唱することが決まり、たった2日で歌唱力を上げてきたという。もともとピアノの経験と音感があつたとはいえ目覚ましい才能を持っていたのだ。

お嬢様なのでそういったことが得意なのもうなずけるが。

「アスナちゃん…ありがとう、でもここは私とお姉ちゃんとスメラギ君とシャムロックのメンバーでやるから、アスナちゃんは休憩してていいよ？」

「んー、でも実際やることがなくて…」

「でもセルフトレーニングとかいろいろやることはあるよね？ とにかく準備は私たちだけでやるからアスナちゃんは自由にしている大丈夫だよ？」

「あ…うん…分かったわ、んじゃあお言葉に甘えちゃうね」

そう言うアスナはセブンの近くにある切り株に腰を落ち着かせた。

「いよいよ…なんだね…ユウキを助けるための…大一番…」

「うん…ユウキちゃんだけじゃないよ、世界中のHIV感染者の人たちが…このイベントの成功を待ち望んでるはずなのよ。少なくともドナー登録者が増えることによって、感染者の何人かは助かることになると思うし…」

「そう…だよ…ユウキを助けることばかり考えてたけど…私たちが冷静に考えてみたら世界的にすごいこと…やってしまってるのよね…」

アスナはいつの間にかこんな大掛かりになってたんだろうと思いつめてみた。最初はキリトの口車にのり、ユウキを助けるために自分もただひたすらに走り続けてただけだったのに。

気が付いたら世界を巻き込む大イベントに首を突っ込んでしまっていた。

「ちなみに…ライブ中継は…世界80カ国以上で同時翻訳されることになってるからね、ディスプレイや大型モニターがない国々でもARビジョンでこのライブが見れるようになってるの」

「え…？」

セブンはさらりととんでもないことを言い放っていた。こんな短時間でライブの準備、宣伝を済ませただけでなく、様々なところへ根回しをして、世界同時中継同時翻訳というとんでもない荒業をしてみせようとしていたのである。

これにはアスナも開いた口がふさがらなかった。

「私を誰だと思ってるのよ？ 弱冠12歳にして天才VR技術博士の七色・アルシャールビンこと、世界のカリスマアイドルセブンちゃんだよ？ これぐらいのことはお茶の子さいさいよ」

「え…あ…うんそうなんだけど…それにしたってこの短時間でもものすごいコトやってるなあって思ったものだから…あははは…」

流石のバーサクヒーラーことアスナでもこれには苦笑いで返すしかなかった。こんな影響力をもった12歳は世界広しと言えどもセブン以外に決していないだろう。

「あ、それよりアスナちゃん…あの演出の件は大丈夫？」

セブンがアスナに質問を投げる。

「あ…うん多分大丈夫だと思う。私とユウキだったらぶつつけ本番でも行ける気がするし…まあ明日調整はするけどね」

「OK、なら大丈夫そうね」

そう言うとセブンは近くにあったマイクを手に取りスイッチを入れると、作業をしているプレイヤー全員に対して演説気味に発言をした。

「みんな！ 作業をしながらでいいからよく聞いて！ このイベントは…ユウキちゃんを助けるだけじゃなく、世界中のHIV感染者の人たちの希望になる重責を担っているイベントなの！ 従って絶対に失敗は許されない！ ここまで急ごしらえな準備で申し訳ないけど…皆の力を貸してほしい！ 絶対にこのライブを成功させるために！ 皆の力を貸して頂戴!!」

セブンの声がスピーカーから響き渡ると、少しの間無音が続く、やがてスピーカーから少しのハウリングが響いた。

そのハウリングで作業をしていたプレイヤーは作業を一時中断し、満場一致で拍手喝采が巻き起こった。

「当然だよセブンちゃん！」

「絶対成功させましょう！ リーダー！」

「絶剣のユウキちゃんの助けになるなら…俺たちちゃんでもしますぜー！」

「アスナさん！ 絶対にユウキちゃんを助けましょうねー！！」

あちらこちらからセブン、ユウキ、アスナを支援する声が聞こえてくる。ロスト・ソング事件の所為でシャムロックのメンバーとクラスタの数は減ってしまったのだが、残ったプレイヤーは引き続きセブンを信じてついてきてくれていた。

この会場の想いが一つになったことを感じたアスナとセブンはほろりと涙を流していた。

「みんな…ありがとう…」

「すごい…これが…セブンちゃんの…ユウキの…本当のファン…クラスタ…なんだ…」

ロスト・ソング事件当時は過激なシャムロックメンバーやクラスタの目に余る行為があったが、今ここにいるプレイヤーは純粹な気持ちでセブンを、シャムロックを支えてくれている人たちばかりであった。

アスナとセブンはこの温かい気持ちがあれば…絶対にライブは成功する…と確信していた。

「アスナちゃん…当日…よろしくお願いね！」

「こちらこそ…絶対に成功させましょう！」

セブンとアスナは盛大な拍手の音が鳴り響く中、お互いに固い固い握手を交わした。

目的も一緒だ、ユウキを何が何でも助ける、病気を治してやって現実世界に返す。

その想いは…絶対に世界中に伝わることだろう…。

西暦2026年2月7日土曜日のライブ本番まで、残り二日。

第33話く今、万感の想いを込めて 後編く

西暦2026年2月6日金曜日 午前7:05 横浜港北総合病院

和人の病室

チャリティーライブ本番前日

「さてと…荷物はこれぐらいかな…とつても言うほど持ってきていないけどな…」

自分の病室で独り言を放つ和人は帰り支度を始めていた。一度自宅まで帰り、長期間宿泊に必要な荷物を再度まとめなおし、本格的に木綿季の入院している病院に寝泊まりするための準備をしようというのだ。

幸いにも体力はすっかり元通りまでに回復し、若干のかつたるさはあるものの健康体となっていた。

「…病院を出る前に…木綿季に挨拶をしていくか…俺も会いたいし…」

それだけ言うと和人は自分のカバンからアミュスファイアを取り出し電源を入れ、自分の頭に被せ体をリラックスさせた。

一度病院を出てしまうと、片道2時間、往復4時間、準備などもあるので計5時間は木綿季に会えない。

今日はライブのリハーサルなので木綿季も多分忙しいだろう、ライブはALOの中で行われる。セブンに企画を持ち出したのは俺だが、俺はスタッフではないので関係者として楽屋とかに入れるかどうかは分からない。

多分セブンは顔パスで入れてくれるだろうが。

何より直前まで木綿季の傍にいて支えてやりたい。だけど俺も、病院を出る前に木綿季から元気をもらいたい。

だからこうして朝からアミュスファイアを被っている。さあ、いこう木綿季のところに。

「リンク・スタート！」

自身のアミューズファイアに勝手にインスタールされたランチャーを起動し、和人は木綿季の仮想空間のプライベートルームにアクセスした。

普通、他人のマシンにプログラムを勝手にインスタールするのはとんでもないことだが、和人はむしろ今回のことに関しては感謝していた。おかげさまでALOじゃなくてもいつでも木綿季に会いに行ける、倉橋先生さまさまだ。

やがて和人の意識はアミューズファイアを通して仮想空間へといざなわれた。

少しの暗転のあと、和人は今はもうすっかり見慣れた空間へとダイブしていた。

「ん…来たか…」

メデイキュボイドの中にある仮想空間の木綿季の部屋。この病院にある特殊なアプリケーションを使わないとアクセスできない木綿季のプライベートルームだ。俺はもうここに足を運ぶのが当たり前になっていた。

さて…木綿季がいるはずなのだが…。

「あれ…木綿季…？」

いつもならアクセスした瞬間に飛びついてくるのだが…今日はその様子が見受けられない。

変だなと思ってあたりを見渡してみると…いた、木綿季だ。

「すう…」

木綿季はまだ夢の中だった、昨日は結構遅くまで一緒にいたからな……。今までなかなか恋人らしいこととしてやれてなかった……。事情が事柄なだけに仕方のないことなのだが……。

和人は木綿季の顔を見ながらふと恐ろしい想像を始めてしまった。

……俺は本当に……木綿季を助けられるのだろうか……？

骨髓移植のことに気付き、思いつきとはいえちやんと根拠のある計画を立てた。みんなの協力も得られたし、事実このライブが成功を収めれば世界各地からドナー登録が殺到することだろう。木綿季に合うドナーだってきつと見つかるはずだ。

大丈夫……世界中が協力してくれるはず……大丈夫なはずなんだ……。しかし……しかしもしも万が一……、万が一にも……木綿季に合うドナーがなかったとしたら……。

和人は首を横に強く振った、嫌な想像を振り払うかのように。

そんな現実を決して認めない、そういった心境であった。

「大丈夫だ……世界が一つになれば……きつと……」

和人は寝ている木綿季の近くに腰を下ろすとその寝顔を見つめていた。木綿季はすうすうと静かな寝息を立てながら深い眠りについている。

「……可愛いな……やっぱり……」

この仮想空間の木綿季の姿は三年前の木綿季の姿だ。今の木綿季の年齢が15歳なので12歳の時の肉体となる。

そのおかげでALOのユウキのアバターより背は大分小さい。現実の木綿季よりも少しばかり小さいか。

「う……ん……かずと……すきい……」

その寝言を聞いた和人に思わず笑顔がこぼれる。この素直な性格の木綿季にどれだけ今まで助けられただろうか。

明日奈と別れた悲しみに打ちひしがれてた時に、心の隙間を埋めてくれたのはこの木綿季だ。

つんけんな態度を取っていた俺に正面からぶつかってくれたのも木綿季だ。

気が付いたら好きになっていた。いつからだろうな……木綿季と一緒にいると楽しいと感じ始めたのは……。

和人は安心して寝入っている木綿季の頭に起こさないよう優しく手を当てた。

……温かい、仮想空間なのに温かみを感じる。木綿季の……温かさを……。

この小さい少女にどれだけ元気づけられたか、どれだけ支えられてきたか。

俺は……恩返しをしないといけない。木綿季に……精一杯の恩返しをしないといけない。

絶対に……病気を治して……現実世界に……帰してやらないといけない……。

「……木綿季……」

見ていれば見ているほどのこの少女が儂く思えてきてしまった。気が付くと木綿季の頭をなでる手についてしまった。

「ん……んん……」

あ……しまった、起こしてしまった……折角気持ちよく寝ているのに悪

いことをしてしまった…。

和人は申し訳ないなと思いつつも、木綿季の頭をなでるのを続けた。

「ふあ…ああ…ん…」

木綿季は上体を起こすと眠たそうに眼をゴシゴシしながら寝ぼけ眼であたりを見回した。

今一体何時だろう？ まだ寝足りない…そういつた顔つきだ。そんな木綿季の不意を突くように和人は声を掛けた。

「おはよう、木綿季」

「ん…おはよ…かずと…」

和人はまだ半分夢の世界にいるであろう木綿季に朝の抱擁をした。木綿季からしてみれば起きたら目の前に和人がいていきなり抱かれているのだからわけがわからないだろう。

「ふあつ…、…ん…かず…と…？」

「元気もらいにきた」

「ふえ…？」

和人は無言で木綿季を抱き続けた。ただひたすらに近くに木綿季を感じていたかったのだ。

これから始まる大仕事のことを考えるとなお、木綿季を抱く腕に力が入る。

「えつと…うん…なんだかよくわからないけど…このままでもいいん

だね…?」

木綿季は今の状況を少しづつ理解し、和人の心境も理解していた。

「ああ…ありがとう…、しばらく病院を抜けるから今のうちに…木綿季の元気をもらってこうと思っただけ…」

「しばらくたっていても数時間でしょ？　大袈裟なんだから和人は…でも嬉しいな…」

木綿季もこの状況に酔いしれていた、朝から大好きな和人にこうしてもらえるなんて幸せだ。そう感じ取っていた。

その幸せを噛みしめつつも、とある質問を和人に投げ飛ばしている。

「ねえ、和人いつからいたの？」

「えっと…お前が起きる数分ぐらい前だ…」

その返答を聞くと、木綿季はちよつとだけ眉を傾けてさらに和人に質問を投げ続けた。

「…エッチなことしてない？」

「し…してないよ…頭をちよつとなでただけだ」

木綿季はその返答に対し、「ふくん」と知った風な態度を見せた。

「前科があるからね…和人には」

「なっ…昨日のあれは…こういうことになるかもしれないからなっという注意喚起というか警告というかだな…！」

和人は顔を真っ赤にして弁解をしていた、しかしその慌てふためいた態度ではやっぱり説得力がない。

むしろ墓穴を自ら進んで掘ってしまったている、そんな風にも見えてくる。

「あはは、和人はそんなことする人じゃないことは分かってるよ…ボクは全然かまわないけど…」

「お前…ここ数日で一気に性格変わってないか…？」

木綿季は「気のせいだよ♪」と言いながらも和人に飛びついてきた。いつもの元気な木綿季だ。

「今日…一回帰るんでしょ？」

「ああ、荷物まとめたらすぐここっちに帰ってくるけどな。だからちよつと…元気もらいたくて」

「うん…ボクもちよつと和人から元気もらいたいなって思ってた…今日りハーサルだし…」

「そういえばりハだったな…何時からだ？」

「えつとね…10:00から始まる予定だね、一応和人…キリトは裏方として通ってるはずだから多分楽屋とかに普通に入れると思うよ？」

それを聞いて安心した、ちよつと開始時間には間に合わないかもしれないがりハーサル自体は見れるみたいだ。

木綿季の…ユウキのステージ衣装も見れるかもしれない。

「そうか…ならなるべく早く戻るよ、木綿季のステージ衣装…見てみたい」

「え、今日はリハだから着ないよ？」

「あ…？」

和人は絶望した、せつかくアスナにデザインしてもらったあの可愛いらしい衣装が見れないなんて…と。

その落ち込みようは凄まじく、負のオーラが漂っていた。

「だって…リハだもん、本番の最終確認的な意味合いがほとんどだよ？ それに衣装は当日まで非公開だし…」

「そんな殺生な…」

「ほーら、落ち込まないの。ライブが終わったらそのままもらえるからいつでも和人の好きなききに着てあげるよ？」

「ホントか!？」

その言葉を聞いた瞬間、和人は元気になった。全く男とは単純な生き物である。

「うん、だから元気出してね？」

そう言うと木綿季は和人の頭を撫で始めた。いつもとは立場がすっかり逆になってしまった。

和人はたまにはこういうのもいいかなとその木綿季の手のひらの

感触を楽しんでいた。

「和人は可愛いなあ〜」

「お前の方が可愛いぞ」

お互い一步も引かない譲り合いの攻防に、つつい恥ずかしくなりお互い顔が真っ赤になっていた。

「え…えつと…それじゃあ俺そろそろ出るな、往復4時間だから急がないと…」

そう言うと和人はゆっくり立ち上がり、木綿季の部屋からログアウトをしようとした。

木綿季はほんの少し寂しそうにしていた。

「あ…うんわかった。気を付けてね？」

「ああ…慎重に運転するよ。…リハーサル…頑張れよ？」

「うん…ありがと、絶対来てね？」

「もちろんだ」

最後に精一杯木綿季を抱きしめると和人は木綿季の手を握りしめたままログアウトしていった。

狭くも広くもない仮想空間に木綿季は一人だけ取り残された。

このままボクも一緒にログアウト出来たらいいのになと思いはじめてみた。

でもそんなことをしたらメデイキュボイドの体感キャンセル機能が解除されてしまい、現実の木綿季の体に終末期医療の副作用などの

痛みが舞い戻ってくる。

手足もわずかにしか動かせないだろうし目もはつきりと見えないだろう、耳も聞こえないかもしれない。

でも…このイベントが成功してドナーが集まれば…HIVを駆逐出来てメデイキュボイドに頼らなくても生きていけるようになる…、そして何より現実で和人と会える…。

その希望が再び木綿季に元気を与えた。

「ボク…頑張らなきゃ…！」

木綿季は気合を入れると、ALOのランチャーを起動しログインの態勢に入った。

「ようし…リンク・スタート!!」

同日同時刻 横浜港北総合病院 受付ロビー前

和人は大して重くない荷物をまとめると、そそくさと自分の病室を後にして退院手続きを取っていた。

「お世話になりました、と言っても…数時間後に戻ってきますけど…」

和人は受付のお姉さんに退院の挨拶をしていた。このお姉さんは明日奈と和人が木綿季に初めて面会に来た時に受付をしてくれたお姉さんだ。和人ともすっかり顔なじみの関係となっていた。

「いいえ、元気になってなによりだわ。それより…いよいよなんでしょ？ 紺野さんの…ライブ」

お姉さんはどうやらライブのことを知っているようだ、というより…最早院内関係者は患者さんも含めて多分知っているのではないだろうか？

俺への視線は相変わらず感じるし何やらただ事ではないざわつきをあちらこちらから感じられる。

「ええ…今日リハーサルと…明日本番です。本番の様子は夕方17:00から…インターネット中継されます」

「ええ…倉橋先生から聞いてるわ、エントランスに設置されてるあの液晶モニターからも、中継が流れるようにしてるんですって」

和人はお姉さんの指さした方向をみた、そこには巨大とまではいかないが一般家庭においては邪魔にしかならないであろうでっかい液晶テレビが設置されていた。以前あんなどこにあんなものがあつただろうか…100インチぐらいはありそうなでっかいテレビだった。

「紺野さんの病気が治れば…AIDS患者さんだけじゃなく他の重病患者さんにも希望を与えられると思うの、あの不治と言われてたAIDSが治れば…きっと自分の病気だって…って思えるはずだから…」

「ええ…そうですね…」

「だから頼むわよ…桐ヶ谷君…紺野さんを助けてあげて…、看護師の私から頼むなんて変な話だけど…」

「ええ…分かっています、木綿季は絶対に助け出してみせます」

「頼んだわよ…」 王子さま」

「ツ!?…そ…それじゃあ失礼します！ お昼頃また来ます!!」

和人はそう言うのと恥ずかしさを誤魔化すように病院をあとにした。ちなみに治療費入院費などは倉橋先生が予め出していてくれてたよ。うだ、今日は会えなかつたが顔を合わせたときにしつかりお礼を言っておこう。

和人は自動ドアをくぐり自分の駐輪しているオートバイの前まで行くと、荷物をシートにしまい入れ替わりにヘルメットを取り出した。シートに腰を落ち着けてからキーをまわし、エンジンを起動させてヘルメットをかぶった。

アイシールドを右手で下にならずらし、サイドスタンドを蹴るとそのままアクセルを吹かして一気に病院から走り出した。

(とうとうここまできたな…ここまでは概ね計画通りだが…本番は何が起こるか分からない…俺が出演するわけではないが…気を引き締めないとな…)

和人は様々なことを思い返しながら自宅へとバイクを走らせていった。

(何度も思ってきたことだが…ここまで来たら絶対に引き下がれない…引き下がらない…！ 何が何でも成功させて…木綿季を…助けるんだ…!!)

同日 AM 9:50 ALO チャリティーライブ会場

「ほ…ほわ…す…い…ことになってる…」

ユウキはALOにログインするとセブンからのメッセージを受け取り、段取りを確認しながらライブ会場へと足を運んできたのである。昨日までは骨組みばかりだった会場が、今はもう何万人を動員できるのだろうか。それぐらいの規模の会場になっていた。ALOはこんなことも出来るのか…と思った瞬間であった。

「ユウキ！」

ユウキは突如声を掛けられた、すぐさま声のした方に振り向くとそこにはユウキの大好きな親友の姿があった。

「アスナ！」

アスナであつた、アスナはユウキよりも早くライブ会場へと足を運んでいた。一曲だけだがユウキとのデュオもプログラムに組まれている。最愛の親友と顔を合わせたアスナとユウキは喜びの感情を表した。

「ユウキ！ 元気そうで安心したわ…」

「ボクも！ 最近のアスナすっごくいい笑顔になるから…ボク嬉しいんだ！」

お互いの手を握りしめながら再会を喜び合った。二人ともセブんに比べたら本番の出番は少ないが重要なキーマンでもある。そして何よりこの二人には歌以外にも役割があるのだ。

「あ…そういえばユウキには言っていなかったんだけど…セブンちゃんがね、歌以外にもやってほしいことがあるんだって」

「やってほしいこと…？ 何だろう？」

「んと…私たちってゲストじゃない？ あくまでもメインパーソナリティはセブンちゃんだけど、セブンちゃんはセブンちゃんて専用の登場パフォーマンスがあるんだって。そこで私たちにも…私たちにしか出来ない登場パフォーマンスをしろって言うんだけど…」

「ボクたちにしか出来ないパフォーマンス…うう…困ったな…ボク歌うこと以外考えてなかった…」

「大丈夫！ それについては私がもう画策済みよ！」

「ホント!? ねえねえアスナ！ どんなのどんなの!?!」

ユウキは目をキラキラさせながら興味津々にアスナに身を乗り出していった。

「んつとね…多分…というか絶対に私たちには出来ないと思う、心配なのは…衝撃で会場のセットが壊れなければってことなんだけど…」

壊れる…？ アスナはどんなパフォーマンスを思いついたんだろう？と首をかしげるユウキであったがアスナが考えることなら絶対大丈夫だと思っていた。それぐらいアスナには絶対の信頼を寄せているのだ。

「なんだかよくわかんないけどアスナが言うなら大丈夫だね！ ねえねえ！ 早く教えて！」

「うん！ えつと…じつはね…」

同日同時刻　チャリティーライブ会場スタッフルーム

スタッフや裏方、関係者だけが出入りできるスタッフルームにて、セブンは台本を眺めながら真剣な表情をして考え事をしていた。

進行のシミュレートをするのは勿論、有事の事態への応対、イレギュラー要素への対応方法など様々なパターンで起こりうるであろうアクシデントに対して対策を練っていた。

「いつになく真剣な表情をしているな…セブンよ」

声を掛けたのはスメラギだ、セブンの側近にてお互いに絶対の信頼を寄せる二人。

「スメラギ君…ええ…今ちよつと考え事してて…」

「本番のことか？　それならいつも通りやればいいではないか、今回はチャリティーだがセブンならいつも通りやれるはずだと思うが」

その返事を聞いてセブンは神妙な顔をする、ライブ前には絶対見せないセブンの表情だ。

「うん…それはそうなんだけど…チャリティーってことを考えると…ちよつとだけ緊張してきちやつてね…」

セブンが考えているのはそこであった。普通の全国ツアーなどのライブなら来てくれたお客さんを最大限楽しませることを目的として精一杯のパフォーマンスをする、全力を振るう、それだけだったの

だ。

しかし今回はいつもとは勝手が違う、来てくれたお客さんを楽しませるのはもとより、チャリティーということもあり、

全世界で病気が治ることを心待ちにしている人たちがたくさんいるということ。

このイベントが希望になるかもしれないということ。そういつたことを意識してしまったセブンは珍しく緊張の態度を表していた。

「なるほどな…確かにいつものライブとは違うな…そう、”責任感”ともいうべきか…」

「そうなのよね…このライブの結果次第で…人を生かすか殺すかって考えたら…ユウキちゃんの生死を左右するって考えだしてしまったり…怖くなってきて…」

セブンの手は震えていた、考えてみればカリスマアイドルとはいえっても中身は12歳の華奢な女の子。むしろ12歳にしてはかなりメンタルは強い方だと思われる。しかし人の命がかかわってくるものとなると…やはりその精神は揺らいでしまう。ましてや友達の命がかかっているのだ…手に自然と力が入ってしまうのも無理はない。

「セブン」

「何？ スメラギ君」

セブンの名前を呼ぶとスメラギは突如セブンの小さな体をその大きな体で包み込むようにして抱擁した。

まるで年の離れた兄が、最愛の妹を元気づけるように…。

「スメ…ラギ…君…？」

「セブン…自信を持って。俺はお前の全てを間近で見してきた、お前の実績を誰よりも知っている。お前の努力も誰よりも知っている。それを見てきたことを踏まえて言う、”絶対に成功する” …だから…自信を持って」

セブンはいきなりのことに理解が追い付いていなかった、スメラギらしからぬその行動に困惑さえ覚えた。

しかし…不思議と不安感は消えていった。むしろ…体の中から元気が出てくる…そんな感覚さえ覚えていた。

非科学的なこの心の充実っぷりに…身をゆだねていた。

「…珍しいね…スメラギ君がそんなこと言ってくれるなんて…」

「…柄じゃないのは承知している」

「変なスメラギ君…でもありがと、ちよつと元気出たわ」

セブンはスメラギから一步程距離を離すと、深呼吸をして胸に手を当てて話した。

「そうね…私が迷ってても何も変わらないわ…こんな逆境…今まで何度もくぐってきたじゃない…」

「そうだ…クラウド・ブレインの件に比べたら…こんなこと造作もないことだろう」

「ええ…助けてみせるわよ…ユウキちゃんの一人や二人…絶対にツ
!!」

「フツ…ユウキは一人しかおらんだろうに…」

「そーゆーところで一々ツッコまないの、…でもありがとね…スメラギ君」

「礼には及ばんさ」

「絶対に成功させる…私たちが…世界中の…光になる!!」

一人ですべてを抱えてきたセブンだったが、スメラギの支えによって気持ちは折れずに済んだ。

チャリティーだろうが関係ない、いつも通り全力を出すだけだ。全力を出してユウキを…世界中で苦しんでいるHIV感染者を助けるために…私たちが絶対にやり遂げる。

そう改めて誓いを立てた。

その日、特に問題も発生せずリハーサルは終了した。

問題といえばユウキとアスナの登場演出の所為でセットの一部が破損したことぐらいだった。

セブンは「折角設置したセットを壊すなんて!!」と激昂したがレインの仲介によって機嫌を直し事なきを得た。

セットは、より硬度と耐久の高い素材で再度組み立てられ、念のためステージ周りも広くした、これで本番当日も万全だろう。

その最中に到着したキリトはなんで二人が怒られているかわからなかった。

リハーサルは午後17:00にはお開きとなり、ある人は帰宅し体を休め、ある人は残って作業を続け、ある人は残った人と談笑をし、ある人は本番へのシミュレートを怠らなかった。

キリトは物思いにふけっていた。

明日ですべてが決まる、ユウキの命が…命運が…いよいよ決まる。緊張していないといえは嘘になる。

しかしやらねばならない、やり遂げねばならない。明日にすべてを賭ける、これまで積み重ねてきたすべてを賭けて明日に臨む。関係者はそれぞれの想いを胸に明日へと望んでいった。

——そして一夜明け、その日はとうとう訪れた——

西暦2026年2月7日土曜日 午後16:05 チャリティーラ
イブ当日 本番55分前

「…ステージが騒がしいな…」

キリトはステージの舞台裏にて身を落ち着けていた。首からスタッフの証であるパスをぶら下げ、観客席からは見えない角度にある幕から観客席の様子を覗き込んでいた。

「キリト…あんまり身を乗り出すとあつちから見えちゃうよ…」

ユウキがキリトに注意を促す。キリトはステージから裏方が見えるか見えないか微妙な位置取りをしていた。一步踏み込めば場所によつては見えてしまうかもしれない。

「おつと…ごめん」

観客席からは熱気と期待の波が押し寄せてきている、セブンのライブに期待していることは勿論、今回のライブのゲストであるユウキとアスナの二人が目的で来ているファンも多い。

”絶剣” ”閃光” と二つ名で呼ばれ絶大的な強さと支持を受けている二人が剣をマイクに持ち替えてチャリティーに参加するというのだから、ファンにはたまらないことであろう。

「私…ちよつと緊張してきちゃった…」

アスナが手を胸に当てながらつぶやいた。

「昔…ピアノのコンサートの会場が…こんな感じだったな…ここまでお客さんは多くなかったけど…」

アスナは幼少の頃のピアノのコンサートと今のこの会場の様子を重ねてみていた。演奏会やパーティー等、人がたくさん集まるところには行き慣れているはずなのだが…今回は特別な意味で緊張していた。

「へえ〜！ アスナってピアノ出来るんだ！ 今度聞かせてよ！」

「ええ…いいけど…長い間弾いてないから…ちゃんと弾けるかわからないよ…？」

ユウキは「それでもいいから是非聞かせて！」と目をキラキラしながらアスナに訴えた。このユウキの表情に勝てるはずもなくあつさ

り折れたアスナは演奏の約束を取り付けた。

「やったー！ 楽しみだなー！」

ユウキはキラキラしたエフエクトを舞わせながらジャンプして喜んだ、退院後の喜びがまた一つ増えたようで何よりだ。

「はいみんな！ プリヴィエートこにちは！ 欠員はいないようね」

キリトとアスナとユウキのもとに、セブンとスメラギ、レインが顔を合わせに来た。

「プリヴィエート！ セブン！ すごいよ外！ お客さんでいっぱいだよ！」

ユウキは大変にテンションが上がっている様子だ、実はさつきまで緊張していたのだが…お客さんの盛り上がり具合を感じると自然とその緊張感がなくなり、むしろやる気に満ち溢れてきていた。

「ええ…いつもこれぐらいで満員になるんだけど…今日のお客さんの熱気はいつもと違う気がするわね」

「え…そうなの…？」

「うん…多分…ユウキちゃんとアスナちゃんがいるからだと思うわ。みんな二人の活躍を見たいのよ」

「ほあ…そうなんだ…、ようし…ボク…頑張るよ!!」

ユウキのメンタルは最高潮のようだ、やはり昨日一昨日と一緒に過ごせたのはユウキ自身にとって大きかったようだ。

…それよりもキリトはアスナが気になっていた。

「アスナ…大丈夫か…？」

キリトはアスナに優しく声を掛けた、今声を掛けなければそのまま小さくなって消えてしまいそうな気がした。

「え…あ…キリト君…、うん…大丈夫…じゃないかな…ちよつと…」

アスナの表情は暗いままだ、何かが心の中に引っかかっているのだろう。

「…ちよつとこつちきてくれ」

「え…ちよつキリト君!？」

突然キリトはアスナの手を掴むと、バックヤードの奥へと姿を消していった。その様子にユウキだけが気付いていた。

「キリト…？」

アスナはキリトに有無を言わされずバックヤードにと連れてこられた。一体私に何の用があるんだろう…それも改まって…こんな場所にまで連れ込んで…と思っていた。

「キリト君…どうしたの…？　こんなところまで連れ出して…」

キリトは掴んでいたアスナの手を離すとそのままアスナの方を振り向き、しばらく見つめあうとそのままアスナを抱擁した。いきなり抱かれたアスナは動揺を隠せずにいた、何で…キリト君が…？ そう思っていた。

「き…キリト君…なんで…？」

「……………」

二人が進んできた通路の死角にはユウキが身を潜め、物音を立てずに静かに見守っていた。

「…キリト…」

キリトはアスナを30秒ほど抱きしめた。この行動に何の意味があるのか、何でこんなことをしたのかとアスナは考えを巡らせた。

キリト君にはユウキがいるのに…私との関係は終わってるはずなのに…と。

「ごめん…驚かせたよな…でも、落ち着いたかな…？」

「あ…う…うん…別の意味でちよつと…緊張しちやっただけ…」

アスナは顔が真っ赤になっていた、キリトに抱擁されるとは思いもしなかったのである。恥ずかしさもそうだがユウキへの後ろめたさも感じていた。しかしそれより…さっきまで張りつめていた緊張感がなくなっていたことに気付いた。

「でも…ありがとう…私の緊張を緩めるためにやってくれたんだよね…？」

「まあ…な…別れたキミにこんなことをするのは…どうかと思ったんだけど…これしか思い浮かばなかった…」

「キリト君は不器用だからね…でも…嬉しかったな、私は…」

アスナにいつもの笑顔が戻った、もう気負いしているものは何もないといった爽やかで美しい笑顔をしていた。

「別に大したことはしてないさ、仲間を想うのは…当然だろう？」

アスナは改めて、キリト君のこと好きでよかったと思うと同時に、こんな恥ずかしいセリフを躊躇なく言うのは流石だなと思ってしまっていた。別れてもキリト君にだけはかなわないな…そう感じていた。

「そうだね…キリト君らしいや…」

その答えに対して、キリトは無言の笑顔で返事を返した。

アスナは自分の顔をパンパン！と二度叩き、気合を入れなおすとやるぞつといったやる気に満ち溢れている表情へと変わった。血盟騎士団に所属していた時の…使命感に満ちているときのような…真剣な表情にも見えた。

「ありがとうキリト君、私はもう大丈夫…全力を尽くすだけよ…！」

「ああ…元気が出たならよかったよ…ほら、もうすぐ舞台挨拶とかの最終確認だろう？…行ってこいよ」

「うん…！ ホントにありがとう！ キリト君！」

アスナはキリトにお礼を言うと、先ほどの舞台裏へと歩を戻していった。アスナとの距離が完全に離れたところでユウキが入れ替わるようにキリトの前に姿を現した。

「ユウキ…」

キリトがユウキの名前を呼ぶと、ユウキはキリトに無言で歩み寄ってキリトに抱き着いた。キリトはそれを拒否するはずがなく、同じく無言で恋人を自分の胸に受け入れた。そのユウキの様子からはどことなく寂しさが感じられた。

「ボクが隠れてるコト…気付いてたんでしょ？」

「…まあな…索敵スキル…MAXにしてるからな…」

「知っててアスナのこと抱きしめたんだ…」

「…そのことについては…すまん…でもああするしかないと思ったんだ…、ユウキの気に障ったのなら…謝るよ…」

ユウキはその言葉を聞くと無言で首を横に振った。そしてより力強くキリトのことを抱きしめた。

「わかってる…キリトが誰にでも優しいことぐらい。アスナが緊張していることにも…ボク気が付いてた。あの場面でアスナを元気づけられるのはキリトしかないってこともわかってた…でも…」

そう言うとユウキは涙で顔を真っ赤にして、キリトを上目遣いで見上げていた。

「ボクのこと…ちゃんと心配してくれないと…いやだよ…」

ユウキはキリトの胸に顔を埋めた、更にキリトを抱く手に力が入った。細いキリトのHPが減ってしまうのではないかと思うぐらいの力で抱きしめた。それをキリトは更にそれよりも強い力で抱きしめる形で返事を返した。

明るく振舞ってはいたが…やはりユウキは緊張していたのだ。無理もない…初めてのライブで…それも自分の生死がかかっているのだ、緊張しないわけがない…。

「ごめんな…ユウキ…お前の…気持ちに気付いてやれなくて…」

「罰として…ライブ終わった後も…ずっと一緒にいてね…？　そうじゃなきゃやだよ…？」

「何言ってるんだ…言われずともずっと一緒にいてやるさ…」

「ホント…？　やったあ…嬉しいなあ…」

瞳に涙が溜まっていたユウキだったが、キリトと抱き合い、話を続けていくうちに次第に笑顔になっていった。

キリトとユウキは、セブンたちがユウキを探す声が聞こえてくるまでひたすらお互いを近くに感じあっていた。

時刻は午後16:50に差し掛かっており、もう本番直前であった。

「…もう…行かなきゃだな…大丈夫か？」

キリトがそう言うのとユウキは大きく伸びをして、深く息を吸い込み一気に吐き出した。姿勢をリラックスさせて表を上げて大きく「よしっ！」と声を放つと先ほどまで見せていた緊張感と寂しさが消え

去っていた。

「うん…もう大丈夫！　ありがとね…キリト！」

「ああ…！　頑張つてこい！！」

キリトとユウキは様々な思いを込めてお互いの拳をぶつけ合った。

お前の精一杯をみんなに見せてこい。

ボクの今までの精一杯を…見ててね。

それぞれの想いを手に込めてぶつけ合った。

同日午後16:57　チャリティーライブ会場舞台裏

舞台裏には責任者兼メインパーソナリテイのセブンが集まったメンバーをまとめていた。

最初のメンバー挨拶、そしてこのチャリティーライブの目的を明言した後、基本的な楽曲はセブンとレインがデュオでプログラムを進行していく。

そして中盤から後半まで差し掛かる時点で、アスナとユウキ登場演出を挿入後、二人の挨拶、そしてそのままデュオに入る。

デュオが終了した時点で5分間のハーフタイムとなり、ユウキは衣装チェンジ。

いつものナイトリークロックからアスナの作ってくれたステージ衣装に着替え、自身の曲を歌い上げる。

ここからユウキのソロとなるのだが…一曲目を歌い終わり二曲目

に差し掛かるタイミングで、ユウキはボクがHIVキャリアだということ告白する。

ボクと同じように世界中でHIVで苦しんでいる人たちがいること。

でもボクがこのイベントに参加することで少しでもHIVで苦しんでいる現状を打破出来れば：希望の光になればという想いを観客のみんなに、中継を見ている世界中のみんなに伝える。

世界中をHIVへの：AIDSへの関心を深めるため、そしてドナー登録によつて救える命がたくさんあることを改めて伝えるのだ。

「：セブン、すでに公式チャンネルの配信来場者は言うまでもなく満員、ミラー配信も500以上存在してるが：全て満員だそう。世界各国の大型ディスプレイやARヴィジョンの周辺にもものすごい人だかりが出来ていてちよつとした社会現象にまでなってる：すごいことになってるぞ」

アスナとユウキはその話を聞いて目を丸くしていた。

「すごい：そんなことになってるの：」

「あはは：ある程度は予想出来たけど：考えていたよりもすごいよね：」

セブンはそれに驚くことなく真剣な表情をしてメンバーを見返しその場を締めるように演説気味に言葉を放った。

「みんな、私たちがやることはただ一つよ：」 全力を尽くす” それだけ：。確かに準備期間は雀の涙ほどしかなかったわ：。でも短期間とはいえ、ものすごい充実した日々を過ごしてきたと私は思うの。その日々に間違いはなかった：私はそう思っている：、だから：

絶対にこのライブは成功する…いや、させてみせる!!」

そう言うときセブンは一度深呼吸をする、そして…最後にメンバーの前に自信の右手を差し出した。

「やるわよみんな! 私たちの…すべてをぶつけに!!」

その差し出した右手に、ユウキ、キリト、アスナ、レイン、スメラギの順番にメンバーが手を重ねていった。

「」「」「おう!!」「」「」

「時間よ! 行きましょう!」

西暦2026年2月7日土曜日 午後17:00 チャリティイブ会場 本番開始

ステージの端から、セブン、レインが先に姿を現す、そして少し間をおいてユウキ、アスナもステージに姿を現した。

セブンとレインの姿が見えた瞬間に会場は大盛り上がり、観客席のあちらこちらから大歓声が巻き起こった。まだ歌っていないのにもすごい盛り上がりようである。

そしてユウキとアスナが続けて姿を現すとさらにそのボルテージが最高潮まで登り、会場の外にまで歓声が鳴り響くほどであった。

『みんなー！ プリヴィエー！ト！ 今日私初のチャリティーライブに集まってくれて、本当にありがとー！』

セブンの挨拶に会場がさらに大盛り上がりになる。そのものすごい歓声と熱気に一瞬ユウキとアスナはたじろくが、すぐに落ち着きを取り戻し、会場の熱い空気にその身をゆだねた。

『メンバーを紹介するね！ もう顔なじみだけど…私のお姉ちゃんことレイン！ 今日も一緒にボーカルをやってくれるから楽しみにしててねー!!』

『プリヴィエート！ レインだよー！ 今日もみんなよろしくねー！！』

セブンへの歓声と比べても負けず劣らずの大歓声がレインに向けられた。一部のシャムロックメンバーから反感を買っていた時期もあったがレインの献身的な態度に心を打たれたものが多く、今ではリアルと仮想世界ともにファンやクラスタがつくまでになっていた。

『そして…今日のスペシャルゲスト！ みんな知ってると思うけど紹介するね！ まずは”閃光”そして”バーサクヒーラー”の二つの異名を持つアスナちゃんだよー！』

一瞬アスナは顔を引きつった、あくまでも一瞬なのでおそらく観客席からも中継からも見えてないと思うが。

内心、アスナはセブンを後でシメることを決心した。

『みなさんこんばんはー！ 今日はこの場にお邪魔させていただいて、本当に感謝してまーす！ 緊張してるけど頑張るのでよろしくおねがいしまーす！』

セブンとレインとはまた一味違った歓声が沸き起こる、歓声の中には「アスナ様こっちむいてくれー!」「よっバーサクヒーラー!」といった野次も混じっていた。アスナはそれがばつちり聞こえてたようですっかり怒り心頭であった。顔は笑っていたが目が全く笑っていないかった。

『そしてそしてえ…今日の真の主演!」 絶剣” のユウキちゃんであろす! 今日のためにたくさん練習を重ねたので応援よろしくねーッ!!』

今日一番の歓声が巻き起こった。会場内は耳をつんざくレベルの大歓声に包まれていた。

「ウオオオオオ、ユウキちゃーん!」

「絶剣ちゃーん! 可愛いよー!!」

「ユウキちゃーん! 俺と結婚してくれー!」

「期待してるよー! ユウキさーん!」

「俺のこと斬り捨ててくれー!!」

「絶剣ちゃーん! こっちむいてー!!」

アスナ以上に様々な野次が飛び交った、ユウキの名前がいかにAL O内で広まっているかというのが理解できる。

キリトは会場のセツト越しに3番目に聞こえた野次を放ったやつに目掛けて眼光を飛ばしていた。

ヤジを飛ばした本人はその時、過去にないぐらいの戦慄を感じたという。

『こんばんは! 皆からは…絶剣なんて呼ばれています! ユウキです! 今日のために精一杯歌の練習を重ねました! 頑張るんで…応援よろしくお願いします!!』

ユウキが挨拶を済ませると、会場のボルテージは再び最高潮に達した。

『以上このメンバー4人で会場を盛り上げていきたいと思うから！
応援よろしくおねがいね〜ッ!!』

その様子をキリトは舞台裏から見守っていた。

掴みはばつちりだ、アスナとユウキも緊張している様子はない。このまま首尾よくプログラムが進行すれば、問題なく終われるはずだ…。

『みんな…知ってくれてると思うけど…今回のこのライブは…私たちの初めてのチャリティーでもあるの。私たちのこの活動を通して…世界中の病気で苦しんでる人たちのために…皆も今日のライブを通して…感じ取って帰ってもらいたいなって思います』

会場の空気が一瞬で変わった。さつきまで大歓声に包まれていたと思ったらセブンが口を開いた瞬間に全く空気が変わってしまったのだ。この観客を誘導するのも流石はプロと言えよう。セブンは引き続き、HIVの恐ろしさ、AIDSの苦しさつらさを語り出した。病気そのものの苦しさだけではない、周囲からの迫害のことなどを。そしてそれを助けることが出来ることも丁寧な口調で淡々と伝えていった。

ユウキは横で少し表情を落ししながらその話を聞き、利き手に自然に力が入っていた。その様子に気付いたアスナはすかさずさりげない様子でユウキの手をぎゅつと握った。

手を握られハツとなったユウキの視線がアスナに重なる。アスナは笑顔でユウキを見つめていた、その顔を見てユウキに再び笑顔が戻りいつもの明るいユウキとなった。

(ありがとう…アスナ…)

そうしている間に、セブンのH I Vへの関心を求める話が終わった、そしてまた空気がライブ独特の熱い熱気に包まれ会場は再び盛り上がりを見せた。

『みんなおまたせ！ それじゃあここからは大いに盛り上がっていくよ!! 最初の曲は…これ!』

プログラム最初の曲の前奏が流れると、ユウキとアスナは駆け足で舞台を後にした。

ボーカル担当のセブンとレインだけが舞台上に残り、最初の曲を歌い続けた。

会場は言うまでもなく大盛り上がりで会場のいたるところからサイリウムが左右に揺れ動いている光景が見えた。

その様子を見守っていたキリトは舞台裏へと戻ってきた二人を出迎えると、二人にスポーツドリンク風の飲料アイテムを手渡した。

「お疲れ…ユウキ、アスナ!」

「ふい…緊張したよ…」

「すごい熱気だったね…なんかもうヘトヘトになっちゃった…」

「おいおい…まだ始まったばかりだぞ…」

ドリンクで喉を潤わせた二人は口を揃えてキリトに文句を吐いた。

「キリトはいいよ！ 舞台裏で見守ってるだけなんだもん！ ボクらは大変だよ！ ねえアスナ！」

「全くよ！ 何万人いると思ってるのよ！ 全部の視線が私たちに集まってるっただけでもう…倒れそうになっちゃったわよ！」

キリトは同時に責め立てられ、汗をかきながら苦笑いを作り、後ずさりをしていった。

「あ…いやあそういう意味で言ったんじゃないだよ！ あはは…気を悪くしたのならすまん…」

二人はしようがないなあといった表情でキリトを見下ろしていた。そして二人で視線を合わせると、自然と二人の間に笑顔がこぼれていた。

「でも…まだ歌ってないけどちよつと楽しかったね…！」

「うん…それは私も感じたかな…すごい…やり甲斐がありそうっていうか…」

「ボク…これなら…頑張れそう！」

「私も…！」

最初の挨拶を問題なくやり遂げたことに自信をもった二人にはもうすっかり緊張感や不安といったものはなくなっていた。むしろ、早く自分達の出番はこないのかなと胸を躍らせていた。

「大丈夫そうだな…二人とも…」

その問いに二人は笑顔をVサインで答えた。

「ウオオオオオオオオオオ!!!」

会場は相変わらずセブンとレインが盛り上げているようだ。レインはユウキとアスナのことを天才だと言って羨ましがっていたが、レイン本人も素質は十分にある。実際にセブンとのデュオの相性は最高であるし歌唱力も非常に高い。

何で自虐的になっているか不思議なぐらいの実力を持っていた。

「セブンちゃんもすごいけど…レインちゃんもすごいね…きれいな歌声…」

「ホント…そのレインがボクたちの方が上手いって言うてるんだから…ちよつと信じられないな…」

キリトはその様子を見守りながら、手に持っている台本を確認していた。

「ユウキ、アスナ、この曲が終わったらハーフタイムだ。そのあと…二人の出番だぞ」

「!!」

二人はいよいよだ…といった気合に満ちた表情になった。もう何がきても緊張などしない、むしろ全部乗り越えてやる、どんとこい、といった気持ちだった。

やがて曲が終わり、会場にハーフタイムが伝えられるとセブンとレインが汗をかきながら舞台裏に戻ってきた。

「セブン！ レイン！ お疲れ様！ 二人ともすごかったよ…！ 流石に歌い慣れてるね！」

ユウキが二人に向かいドリンクを差し出した。セブンとレインはそれを受け取るとグビグビと飲み始めた。

「ありがと…別にそうでもないわよ？ あれぐらいのことは今まで何回もやってきたことだし」

「私は…まだちよつとだけ緊張してるかな…セブンに比べたらまだ場数そんなに重ねてないから…」

レインはタオルで汗を拭きながら苦笑いを作って自分はセブンに比べたらまだまだだと話していた。

「お姉ちゃんはそう言ってるけど…お姉ちゃんだつてすごい実力なんだからね？ なんてそう自虐的になるのか分からないよ…」

「あ…うん…ごめんね七色…」

「もつとお姉ちゃんは自信をもつていいよ？ 世界のカリスマアイドルセブンちゃんが言うんだから胸を張りなさい！」

セブンがレインの背中をバチンと叩くとレインは痛がった様子を見せた、そのお陰でちよつとだけ張りつめていた舞台裏の空気がすこしだけ緩んだ。

そして…5分間のハーフタイムが終わり、いよいよアスナ達の出演がやってきた。

「さ…今度はあなたたちの番だよ…ユウキちゃん、アスナちゃん」

「う…うん！」

「よし…頑張ろう…ユウキ!!」

「もちろんだよ！ アスナ！」

ユウキとアスナは互いの拳をぶつけ合うと、左右それぞれステージの反対側へと足を運んでいった。その光景を見てキリトは「何で一緒にステージに出ていけないんだ…？」と思っていた。

「キリト君、何であの二人が一緒の場所からステージに行かないんだって思ったでしょ？」

「え…ああ…うんまあ…」

「それはね…もう少ししたら分かるよ」

キリトは頭に？マークを浮かべつつもセブンの言うことに従った。一体あの二人は何をしようと言うのだろうか…？

5分間の休憩時間が終わった会場ががやがやしていると、急に照明が落とされた。

照明が落とされた瞬間にざわつきがまた一瞬大きくなる。しかしステージの左右端だけ照明が照らされていることに観客が気付くと「何が始まるんだ？」といった空気に包まれた。

しかしそのざわつきは次の瞬間に静寂へと変わった。

左右端のステージの上空6メートルほどの足場から左からユウキ、右からアスナが現れ迷いなく足場から同時にジャンプをしてステージに降り立った。

降りると否や二人は装備している剣を鞘から抜き、まったく同じ構えをとった。このライブステージ上でソードスキルを使おうとしていた。

二人が同時にソードスキルのモーションを起こすと二人の装備している剣の刃の部分が光り輝き、ソードスキルが発動する。

「これが…ボクの…オリジナルソードスキル!」

「これが…貴方から受け継いだオリジナルソードスキル!」

そのセリフを言い終わると、再び同時のタイミングでステージを蹴り、一気にお互いの距離を縮めていく。

お互いの剣のリーチが届く位置まで来るとオリジナルソードスキル”マザーズ・ロザリオ”を撃ち合った。

「マザーズ・ロザリオツ!!」

「マザーズ・ロザリオツ!!」

先刻見た決闘^{デュエル}と全く同じ光景が繰り広げられていた。前代未聞の十一連撃オリジナルソードスキルを、このライブステージ上でお互いに撃ち合っていたのだ。

一撃、二撃、三撃、四撃、五撃目、少し間を置き六撃、七撃、八撃、九撃、十撃、そして…十一連撃目!!

「せえやあああああッ!!」

「はあああああああッ!!」

マザーズ・ロザリオの十一連撃目はお互いの剣の全く同じ深さ同じ角度で撃ち合われていた。

前回の決闘デュエルの時と違い、どちらかが速いといったことはなかった。お互いの阿吽の呼吸が合っていないと到底出来ない芸当であるが、ユウキとアスナはリハーサルの際に、練習なしで完成させてみせたのだ。ステージの一部を壊すというオマケ付きで。

物凄い爆音とエフェクトに会場は包まれた。やがて時間が経過しそのエフェクトが薄くなり、視界がクリアになっていくと二人の姿が視認できるようになった。

観客席全部から二人の姿が見えるようになる。今度は完全に左右対称、シンメトリカルな動きで剣を片手でくるくると回し、再び前方斜め上で互いの剣をクロスさせた。

「今！ 万感の想いを込めて!!」

「今！ 万感の想いを込めて!!」

第34話く凱旋く

「今、万感の想いを込めて！」

「今、万感の想いを込めて！」

左右からそれぞれステージに登場し、オリジナルソードスキル”マザーズ・ロザリオ”を撃ち合った二人は、最後にシンメトリカルに剣を交差させ、派手な登場を決め飾った。

剣と剣がぶつかり合う金属音が会場に鳴り響き、しばらくの静寂が流れた。

交差させるポーズをやめ、二人が剣を鞘に納めたタイミングと同時に、再び会場は大歓声に包まれた。

「ウオオオオすげえええ!!」

「おいなんだ今のソードスキル!？」

「あれじゃねえか…噂の絶剣の11連撃ってやつ!!」

「今…アスナ様も使ってたよな…?」

「なんでもいいぜ! とにかくめっちゃかつこよかつたぞー!!」

アスナの思惑通り、二人はこの演出で観客の心をがっちり掴んだように第一印象は手ごたえ十分といったところだ。

あとは…歌でさらにこの場を沸かせてみせる。すでにアスナにはプロ魂が宿っていた。

アスナとユウキは剣をマイクに持ち替え、会場のみんなに改めて挨拶をした。

『みなさんこんばんはー! 閃光のアスナです! ここからは、私とユウキでこの会場を盛り上げていきたいと思えます! 楽しんでいってくださいねー!』

『みんなー！　こんばんはー！　絶剣のユウキです！　ボクとアスナで全力で歌うから、応援よろしく頼んだよー！』

二人の挨拶で会場は更に歓声を上げた。会場の全員の視線と期待がステージ上のアスナとユウキに一度に集まっている。

しかし二人に緊張の様子は全くない、それどころかかつてないくらい燃えていた。ボクたちで、私たちがこの会場を、セブン以上に盛り上げてみせる。

『ボクたちが歌うのは…この曲だよ!!』

ユウキが指をパチンと鳴らすと演奏がスタートした。前奏が始まると会場は更に盛り上がりを見せた。

歌い出しはアスナとユウキが同時に入り、アスナがソプラノ気味、ユウキはアルト気味の高音のキレイでよく通る声で歌い続けた。

二人の意気はびったりで、ゼロコンマの歌声のズレもなくキレイなハモリ声を会場全体にひびかせていた。

客席では観客がサイリウムをリズムよく左右前後に振り、綺麗な蛍光色を輝かせながら弧を描いていた。

その輝きの一つ一つを視認することで、本当にボクたちの歌をこんなにたくさんの人たちが聴いてくれてるんだとユウキたちは実感した。

(すごい…ボクたちの歌を聴いて…こんなにたくさんの人が…盛り上がってる…楽しんでくれてる…応援してくれてる…)

ユウキのテンションは最高潮になっていた、かつてないぐらいのやり甲斐をその心に刻み込んでいた。

もつと歌いたい、もつと響かせたい、そして…もつと自分もこの場

を楽しみたい。

そう考えると…：どんどん心の底から力が湧いてくる。

そしてこの歌声を…キリトに…最後まで聞いてもらいたいな…。

曲はサビに突入した、演奏の雰囲気が変わりこの曲のクライマックスを迎えたところで、観客も大盛り上がりを見せた。

リズムに合わせて観客席から「ハイ！ ハイ！」といった合いの手の声が聞こえてくる。

こういうのもライブの醍醐味と言える。普段CDなどで聞いている曲とはまた違った魅力があるのだ。

アスナとユウキは夢中で歌っていた、この世界に酔いしれていた。会場と自分自身が一体化していることを感じていた。

楽しい…楽しい…！ もっと…もっとと声が出る…もっと…響かせられる…!!

しかし楽しい時間は過ぎ去るのが早い、やがて…二人のデュオの曲の終わりが近づいてきた。

——長い夢見る——

——心はそう——

——永遠で——

最後の歌詞に合わせ、二人は再び腰の鞘から剣を抜き、シンメトリカルに左右それぞれ外側斜め下に向かい剣を振りかざして曲を締めた。

後奏が流れ続け、やがてその演奏は少しずつ音を小さくしていき、演奏を終えた。

演奏が終わると同時に歓声と拍手が二人に向けられ鳴り響いた。その音を聞いた二人は、深々と頭を下げたのちに、歌を聞いてくれたみんなに感謝の意を表した。

『ありがとうございまあ〜すつ!!』

『ありがとう〜！ みんなありがとう〜！』

アスナとユウキは曲の最後まで聞いてくれた人たちに改めて感謝の意を表した。

二人の歌った最初の曲は見事大成功を収めていた、その証拠に二人の姿が舞台裏に消えていっても、その歓声と拍手はしばらく消えることがなかった。

アスナとユウキは舞台裏に戻ると、ほっと胸をなでおろし安堵の表情を浮かべた。そこにキリトとセブン、レインらが駆け寄って労った。

「二人ともお疲れ様！ 最高のステージだったよ！」

セブンはそう言う二人にドリンクを投げた。アスナとユウキはそれぞれ片手で見事キャッチし、ふたを空けてぐびぐびと飲み始めた。三分の一ほどを飲み干し、プハーツと一息ついたあと出迎えてくれたみんなにお礼を言った。

「うん！ ありがとうみんな！ すっごい楽しかった！」

「私も…昔コンクールで入賞したときよりも…すっごい楽しくてうれしかった…！」

「うん…これが…ライブなんだよ…ユウキちゃん！ 歌い手と…お客さんが…完全に一つになるの！」

セブンとレインは興奮冷めやらぬユウキとアスナに向かい、ライブの魅力を伝えていった。

しかしあまり悠長にしている時間はなかった、5分後にはユウキのソロが始まる。

「さあ、余韻に浸ってる暇はあんまりないよ！ ユウキちゃん！ 着替えてすぐに次の曲の準備！」

「あ…う…ウン！」

ユウキはそう言うと、舞台裏の近くにある簡易更衣室に身を潜め、左手でメニューを操作し、装備フィギュアを表示していつも装備しているナイトリーククロークから、アスナにこしらえてもらったドレスへと着替えた。

ドレスの装備が終わると簡易更衣室のカーテンが開き、いつもの元気なユウキとは想像もつかない、清楚なイメージの姿へと変わっていた。ユウキは少しだけ照れくさそうにしていた。

「えつと…似合う…かな…」

ユウキは視線を外側にそらしながら、両手を前に組ませてもじもじしていた。

キリトはそんなユウキの姿に見惚れていた。俺の知らないユウキを見れて得をしたといった感じだった。

これからこの衣装を俺のためにいつでも着てくれることを考えたら…胸が躍る気分だった。

「すごい…似合ってる…きれいだぞ…ユウキ」

キリトは思ったことを恥ずかしげもなく表にだして言った。その

率直な感想を聞いたユウキは更に照れ臭くなり、首を垂れて耳まで真っ赤にしてしまっている。

「うん…デザインしたのは私だけど…すっごい可愛いよ！ ユウキ！
似合う似合う！」

アスナも追い打ちをかける、普段ななかおしやれをする機会がないユウキにとっては実に新鮮な感覚だった。

そして、いつかこういうのをアスナと一緒に出かけした時にやりたいなとも思っていた。

キリトは多分こういうのには疎いからだめだ、アスナじゃないと。

「ありがと…えへへ…」

ユウキも恥ずかしさ半分だが満更でもない様子だった。そして、ユウキソロの時間が秒読み開始まで迫っていた。

「ユウキちゃん！ そろそろだよ！」

「あ…うん…。ねえキリト…」

「ん？ なんだ？」

「えと…ぎゅってして…？」

それだけ言われたキリトは迷わず無言でドレスに身を包んだユウキに向かい抱擁をした。人前でも構わずユウキに力いっぱいのだ好きをあげた。ドレス越しにユウキの体温がキリトの体に伝わっていった。仮想空間でもその温かさはしっかりと感じられた。

「さ…時間だ…頑張れよ、ユウキ…」

「うん！…ボク行ってくるね！」

それだけ言い残すと、ユウキは方向を180度かえステージに向かい、女の子走りでも元気に走り去っていった。

いつもと違う清楚な雰囲気、キリトはいつも以上にドキドキしていた。

ハーフタイムの会場は相変わらずざわついていた。観客にもプログラムは伝えられているが、詳細までは伝えられていなかった。誰が歌うかとかまでの情報しか聞いていない。従ってこれからユウキが何を歌い、何曲歌うかは全く知らない。

勿論…ユウキがHIVキャリアだという事実も…。

ユウキが三度会場に姿を現すと、またもや会場は先ほどより大歓声に包まれた。清楚な雰囲気、ドレスに身を包んだユウキの姿に大盛り上がりを見せていたのだ。

「うおー！ ユウキちゃんめっちゃ可愛いー！」

「すごいきれいだよー！」

「うおー！ 俺と付き合ってくれー!!」

「似合ってるよー！ 絶剣ちゃん！」

またもや会場のあちこちから野次が飛ぶ、先ほどユウキに求婚した男は懲りずにユウキにアプローチを掛け続けていた。

その声の主をキリトはまたもや探しだし、顔をまじまじと見て記憶した。このライブが終わったら探し出してシメてやる、心にそう強く誓って。

ユウキはステージの中央に立つと、観客席の中央を向きスカート

両裾をつまに、両足をクロスさせて、華麗なお辞儀カーテンをした。アニメなどでお嬢様キャラがよくやっているアレである。

ユウキは挨拶を終えると右手にマイクを握り、ゆっくりとした口調で話し出した。

『みんな…今日はボクの…ボクたちの歌を聴きに来てくれて…本当にありがとう…。残りの曲は…ボクが歌う2曲だけになっちゃったけど…最後まで…一生懸命歌います！ だから…よろしくおねがいします!!』

もう一度ユウキは深々と頭を下げる、その返事には会場が大歓声で応えてくれた。その歓声を聞くとユウキに笑顔がこぼれた。

『みんなありがとう…！ それでは…聞いてください…ボクの…この曲を…』

前奏がかかる、今までかかっていた曲はJ—POPのロック調の曲が多かった。Mステで流れているような疾走感があるノリのいい曲ばかりであった。

しかし今度流れたユウキの曲は…今着ているドレスの雰囲気にぴったりな、しっとりとした曲だった。

セブンが作詞をした、ユウキの人生を思い描いているかのような曲の一つだった。

観客席は今までセブンのライブでは聞いたことがない曲調に一瞬驚きを見せたものの、そのしっとりとした雰囲気に酔いしれていた。すっきり溶け込んでいた。

いつも元気いっぱい活発なユウキからはとても想像できないような歌声に、観客は聞き入っていた。合いの手もほとんどなく、ただ…ひたすらにユウキの歌声に酔いしれていた。

ユウキはその歌詞の意味を心に刻み込みながら、一声一句心を込めて歌声に乗せて会場に響かせていた。観客の中にはすでに感動して涙を流し始めている人の姿も見え始めていた。

キリト達は舞台裏からその姿を静かに見守っていた。ユウキが：すべての想いを込めている様子を：静かに静かに見守っていた。

ユウキの表情からは真剣さもうかがえるのだが、何より切なさ：悲しさといった感情が見て取れた。その独特のしっとりとした雰囲気会場はすっかりシリアスなムードに包まれていた。

みんな聞き入っていた、ユウキの作り出している世界に。

ただ曲がシリアスなだけではない、この曲を通してユウキが作り出した世界に完全に入り込んでいた。

やがて：曲は最後のサビに差し掛かり、一曲目の演奏が終わろうと
していた。

— o n | g i v i n g | f o r | m y | w a y |

最後の歌詞を歌い切り、左手を外側斜め下へ伸ばし、マイクを持つた手は自身の腰に当てる形でポーズを決め、曲を締めくくった。少しの静寂が訪れた後、観客席からは大変な拍手と歓声が巻き起こった。すごい、感動した、思わず泣いてしまったよ、といった言葉が様々な方向からユウキの耳へと入っていった。

ユウキは自分の想いが：心が：この会場みんなにちゃんと聞こえていたんだなと：実感した。

そしてそれをちゃんと聞き届けてくれたみんなに：心から感謝した。

『ありがとうございました…』

ユウキは丁寧な挨拶で一曲目を締めた。会場からはより温かい拍手と歓声が鳴り響いていた。

そして間髪容れず次のプログラムに進行を始める。次の曲でユウキが歌う曲はお終い、セブンのライブの進行プログラムのにも、最後の楽曲となっていた。

つまりユウキが歌うこの曲がこのライブのトリを務めていたのである。

そしてそれはユウキの病氣のことを告白するときがついに来てしまったことを意味していた。

「……………ッ」

舞台裏で見守っているメンバーにも緊張が走る。

ユウキがH I Vだということを告白したら…一体このライブ会場はどうなってしまう？ 中継を見ている人たちはどんな思いになる？

そればかりしか頭になかった、下手をしたら…世界中がユウキの敵になってしまうのではないかと…最悪の考えにまでいたってしまった。

気が付くとキリトの体は震えていた、ユウキにやめさせたい気持ちもあった…しかしそれは出来なかった。

するとアスナが優しくキリトの手を握りしめた。

「あ…アス…ナ…」

「キリト君、大丈夫だよ…」

アスナは真剣なまなざしでキリトを見つめていた。ユウキなら大丈夫、あの子は強い、これぐらいで負けたりしない。

だから信じて見守ろう。そうアスナの目が語り掛けていた。

「…ああ…ゴメン…そうだな…恋人の俺が信じてやらなきや…誰がユウキを信じてやるって言うんだ…」

キリトの体の震えは止まっていた、ホントにアスナが…みんなが傍にいてくれてよかったと思う。

俺一人じゃ…絶対にここまでたどり着けることは出来なかった。

改めてキリトはここまで支えてくれた人たちに感謝の気持ちを込めた。

(頑張れ…頑張れユウキ…!)

お辞儀をしていたユウキがゆっくりと頭を上げた。

そして…ついに…あの言葉を…静かに…語り出した。

『みなさん、ボクは…H I Vキャリアです』

その言葉を聞いた瞬間会場が凍り付いた、そして次第にざわついていった。

お…おい…今の話マジ…なのか…?

H I Vキャリアって…どういことだよ…?

ユウキちゃんが…H I V!?

嘘だろ…あの絶剣が…？

ここに立っついていて大丈夫なのかよ…。

などなどざわついた会場から様々な話し声が聞こえてきた、しかしその声からはユウキを責め立てるような意図は感じられなかった。あくまでも突然の告白に単純に困惑しているといった様子に見えた。

『まず皆さんに黙っていたことを…謝ります…、ボクが今回…このライブに参加させてもらったことには…大きな理由があります…』

会場は沈黙を守り、ユウキの話を聞き続けていた。

『ボクは生まれたときから…HIVに感染していました。帝王切開によってこの世に生を受けたボクは、たまたまその時に使われていた輸血用の血液にHIVウイルスが混在してたことにより…感染しました…』

『ママは即感染、ボクにもその血液を通してすぐに感染しました。一緒に生まれた姉ちゃんにも…感染していました。そしてそのウイルスは…パパにまで…魔の手を伸ばしていき、とうとう…家族全員がHIVに感染していました』

『パパとママは…一度一家心中も考えたそうです、でも…クリスマスチャンドったパパとママは…楽な死よりも苦しい生の、病氣と闘っていく道を選びました。そのあとのボクらの人生は…凄惨なものでした…』

『ボクらがHIVキャリアだと知ると、近所は手のひらを返し全部敵になりました。学校も…それまで仲良く遊んでいた友達も、先生も、親戚も…ボクらの味方は誰一人いませんでした。その迫害は…引越し先にまで…及んできていました』

観客の中にはすでにこのユウキの壮絶な過去を知り、涙を流し始めるものも見え始めていた。

この目の前のか弱い少女が…そんなに過酷な人生を歩んで生きていたことに…同情の涙を流していた。

ユウキの手は震えていた、この大人数の前で、永遠に封印しておきたい自分の忌々しい過去を暴露していた。出来ることなら自分の中だけで未来永劫閉じたままにしておきたかった…。

でも…これも…神様が与えた試練なら…そして…どんなことがあっても大切な仲間が…キリトが支えてくれると考えたら…次の言葉を振り絞る勇気が出てきた。

『ボクは…何度も自分の運命を呪いました、何で神様はこんな過酷な運命をボクたちにお与えになったんだろう？ その答えはいくら考えても分かりませんでした。やがて…パパとママは…死んでしまいました。ボクは三年前にAIDSを発症して…そして去年、最後の家族…姉ちゃんも…ボクの側から…永遠に…いなくなってしまうました…』

その時…ユウキの姉…藍子のことを口ずさんだ瞬間、ユウキの目から大量の涙が零れ落ちた。

ユウキは感情の高ぶりに耐えきれず、押しつぶされそのまま立つ力を失いステージに膝から崩れ落ちてしまった。

「ユウキッ!!!」

キリトは崩れ落ちたユウキに駆け寄って、体を支えた。アスナもその後続き、セブンは、レイン、スメラギと順々にユウキに駆け付けた。

セブンはスタッフにタンカを持ってくるように指示したが、ユウキはそれを制止させた。

ボクは大丈夫…ちよつとだけ…力が抜けちゃっただけだから…とだけ言い残して…。

「ごめんみんな…大丈夫…ボクは大丈夫…最後までやれるから…見守ってて…？」

そのユウキの言葉に困惑しつつも、キリト達は渋々首を縦に振った。

「…俺はお前の傍にいるぞ」

「…キリ…ト…」

「お前が苦しんでるのに…悲しんでいるのに、傍にいてやれないなんて…それこそ俺が狂っちゃまう…」

それだけ言い放つとキリトはユウキの左手をガツチリ握りしめ、ユウキに元気を送り続けた。

「私も…」

アスナもその手に手を重ねた。

「アス…ナ…ありが…と…」

その時だった、観客席からユウキへの応援の言葉が聞こえてきた。

「ユウキちゃん頑張れー!!」

「泣くなー！ みんな最後まで聞いてくれてるぞー！」

「そうだー！ ここにユウキちゃんの敵なんて一人もいねえー！」

「ユウキちゃんはH I Vなんかには負けねーぞ！ なんとって絶剣なん

だからな！」

その言葉を聞いてユウキは更に涙腺を崩壊させた。今度は苦しい悲しい涙ではない、嬉しい…嬉しい涙を流していた。

『みんな…』

キリトとアスナもこの会場の温かい声援に涙を流していた。

「がんばれ…ユウキ…がんばれ…！」

「うん…ボク…頑張る…」

ユウキはゴシゴシと自分の目をこすって涙を拭くと、顔を真っ赤にしながらか続きを話し出した。

『ごめんなさい、もう大丈夫です…。…姉ちゃんが死んじゃって…ボクはどうとう独りぼっちになりました。何度も何度も…もう死にたい…生きていても楽しいコトなんてない…そう思いながらどうにか生きながらえてきました』

『でもボクはある日思いました、どうせ短い命なら…その死を受け入れ、それまでの一日一日を大事に生きよう。精一杯踏みしめて生きていこう…そう心に決めました』

『AIDSを発症したボクの体は…やがてほとんど動かせなくなりました。それからはこのVR世界での冒険が…ボクの人生でした。現実の体は動かないけど…この仮想世界でなら…思う存分動かせる…ボクはこの世界の虜になっていました』

『だけどボクは…この世界でも人と一定以上の関わりを持たないよう
にしてきました。仲良くなったって…どうせ自分はすぐ先に死んで
しまう。相手に悲しい思いをさせるぐらいなら…これ以上の関わり
は持たない程度に付き合っつていこう…、ずっとそうして過ごしてきま
した』

『でもある日…明日にでも死んでしまいそうなボクを…一生懸命追
かけてきてくれる人が現れたんです…。ここに居る親友の…アスナ
と…ボクの大切な人…キリトが…』

『キリトは言ってくれたんです、ユウキは絶対死なせない、最後まで諦
めるな、絶対に病気を治してやるって…。ボクは不思議とその言葉を
信じて…病気になってから初めて…”生きたい”と思えるようにな
りました』

キリトとアスナはより力強く、ユウキの手を握りしめた。頑張れ…
頑張れ…俺たちが…私たちが傍にいる…、そう想いを込めてひたすら
力強く握りしめていた。

『ボクは…もう一回…普通に…生きたい…。学校にも通って…お買い
物にも行きたい…贅沢なんていらぬ…ただ…普通に…生きていき
たいだけなんです…』

『でも…ボクのように…運命のいたずらの所為で…すべてを壊された
人たちが…世界中にいます…。ボクと同じぐらい…いやそれ以上に
苦しい思いをしている人たちもいるかもしれない…』

ユウキの目には再び大粒の涙が浮かんでいた。

『ここに居るみんな…そして…このライブを中継で見ている人たちに
…お願いです…。ボクたちを…助けてください…。何にもできない

…無力なボクたちを…助けて…ください…』

ユウキはそれを言い終わると口に手を当て、力なくその場に崩れてしまった。キリトはすぐに反応し、力強くユウキを支えた。アスナも一緒にユウキの体を支えた。

「キリト…アスナ…ありがとう…」

「何言ってるの…当たり前じゃない…」

「ああ…お前は俺が…俺たちが支える…、だから安心しろ!!」

「うん…うん…」

そこでセブンが一步前へでて、衣装のポケットからマイクを取り出し、スイッチをいれて語り始めた。

『みんな…聞いての通りよ…、今も世界中で…HIVと…AIDSと苦しい闘いを続けている人たちがたくさんいるの…。ここにいるユウキちゃんも…その例外じゃない…』

セブンが会場に語り掛けたことよって、また少し雰囲気が変わる。

『だからお願い…会場みんな…そしてこのライブを中継で見ているみんな…、人種なんて関係ない…。ドナーを…骨髄ドナーを…登録して…HIVで苦しんでいる人たちのために…ユウキちゃんのために…骨髄ドナーの登録を…どうかお願いします…!!』

セブンは深々と頭を下げた、キリト、アスナ、レイン、スメラギ達もセブンに続くように頭を下げた。

長い長い静寂が訪れた、正直この告白に混乱している客の数も少な
くはなかった。一度にいろいろなことを聞いて頭の処理が追い付い
ていないように見えた…。

それから5分ほど経っただろうか、会場は先ほどまでの盛り上がり
が全く見受けられない静かな空間と化していたが、それは一人の行動
で破られることとなった。

「俺…ドナー登録する…」

観客席から一人のシルフの青年が呟いた。アバターからでは何処
の国の人かは分からない…恐らく日本人だと思いがその一言が、一気
に会場の空気を変えた。

「俺も…」

「俺も登録する!!」

「私も…!」

「俺…ダチにアメリカ人がいるから…協力を呼び掛けるよ!」

「俺もシェアハウスの外国人の友達に声かけてみる!!」

その支持の声は少しずつ…そして確実に…やがて爆発的に増えて
いき、会場全体を再び歓声で覆いつくすほどにまで大きくなっていつ
た。そしてその声は会場の外まで貫くほどの大歓声になると満場一
致でドナー登録に前向きな姿勢を示してくれたのだ。世界中のH1
V感染者を…ユウキを…全員一体となって助けようとしてくれてい
たのだ。

『みんな…な…』

ユウキは再び、嬉し涙を流していた。今まで敵だった世間が、初めてユウキの味方をしてくれたのだ。

インターネット配信のコメント欄もユウキを支持するコメントで埋め尽くされ、コメントサーバーが一時的にダウンしてしまうほどの混雑を招いていた。

世界各国に設置された大型ディスプレイやARヴィジョンの周りでも支援の声が続々と上がりまさに今世界が一つになってH I V感染者を…ユウキを助けようと動き出していた。一人の少女のひたむきな”生きたい”という気持ちが世界を本当に動かしたのだ。そして…会場内ではユウキコールが鳴り響いていた。

「ユウキ！ ユウキ！ ユウキ！ ユウキ！ ユウキ！」

ユウキはキリトに体を支えられながら、その眼に大粒の涙を流していた。ボクを助けてくれると言ってくれたこの場にいるみんなに…世界中のみんなに感謝の言葉を伝えた。

『みんな…ありがと…ほんとに…ありがと…ボク…すつごく嬉しい…』

「気にするなー！ 絶対助かるぞー！」

「そうだー！ ユウキちゃんを死なせてたまるかってんだ！」

「俺らがついてる！ 安心しろユウキちゃん！」

「ブラッキー先生！ ユウキちゃんのこと頼むぜー！」

「お似合いだぞ！ コラー！」

何故かその声援はキリトにまで飛び火していた、まあ…あの様子を見れば二人の関係は大体御察しがついたことだろう。

キリトとユウキは涙を流しながらも照れくさい態度を取っていた。

ほどなくして落ち着きを取り戻したユウキは自分の足で立ち上がり、再びマイクを持つ手に強く力を込めた。

『みんな…ホントにありがとう…嬉しすぎて…これしか言えないけど…ホントに…ありがとう…』

ユウキは深々と頭を下げた、キリト達も一緒に観客席に向かって頭を下げた。会場からはそんなユウキたちを支持する拍手と歓声という形で答えが返ってきた。世界は…今少なくともこの瞬間だけは…優しさで出来ていたのだ…。

『随分時間が空いてお待たせしちやったね…それじゃあ…そろそろ再開しようと思います…。ボクの歌う最後の曲…聞いてください…』

ユウキがその言葉を残し静かに目を閉じると会場は静まり返り、しつとりとした雰囲気のパianoの前奏音が聞こえてきた。キリトたちは一歩だけユウキから下がり距離をおいた。

ユウキは静かに…そして柔らかく…最後の曲を歌い始めた。

自身の人生の全てが描かれたこの曲の歌詞を…受け止めるように…声を出して…気持ちを伝えていった。

その歌をすぐ後ろで聞いていたキリトの目には…またもや涙が浮かんでいた。

本当に…泣き虫である。そしてそれに続くようにアスナももらい泣きをしてしまっていた。

曲はサビに差し掛かり、更に一層切ないメロディーが流れた。その

タイミングでキリトはユウキの傍までかけより、マイクを持っていない方の手を握りしめた。

一瞬ユウキは驚くが、曲に影響がでないように歌声をキープしながらキリトと視線を交わした。

(ありがと…キリト…大好きだよ…)

サビも最後の瞬間に差し掛かる、ユウキが参加する最初で最後のライブが…もうすぐ終わりを迎えようとしていた。

もう少しだけ続けていたいなと思いつつユウキは最後の歌詞を歌い上げた。

——キミと——生きた——今日を——

——ボクは——忘れない——

最後の歌声を振り絞った木綿季は天井を見上げる角度で声を出し切り、少しずつ力を抜いて、ゆっくりと直立の姿勢に戻っていった。

『…ありがとうございます…ご愛用しました…』

歌い終わったユウキは最後まで歌を聞いてくれた全員に感謝の意を込めて、深々と頭を下げた。

会場からは拍手と歓声、そして支援の声が返ってきていた。

ユウキはキリトの方を向くと「ボク、やり切ったよ」といった涙の浮かんだ笑顔で見つめていた。

キリトはそんなユウキを温かい笑顔で返事を返した。

トリをつとめたユウキが会場から踵を返して、舞台裏に戻ろうと思った瞬間、会場から一斉にとある声が聞こえてきた。

「アンコール！ アンコール！ アンコール！ アンコール！ アンコール！」

耳をつんざく大音量で会場のあちらこちらからアンコールが沸き起こっていたのだ。

ユウキたちは困惑の表情を浮かべていたが、セブンだけは「計算通り」と言った顔でにんまりとしていた。

「え…セブン…これは…」

「ユウキちゃん…ライブにアンコールはつきものなのよ…？」

来ると思ってなかったユウキに対し、セブンはにやにやしながら歩み寄ってきた。

「大丈夫、もう一曲…教えておいた曲が…あったでしょ？」

「あ…うん…うん…！ 念のため覚えてきなさいって言った…アレ…！」

ユウキは思い出した、アスナと一緒に猛特訓を積んでいた時、一応念のためこの曲も歌えるようにしておきなさいとセブンからもう一

曲教えてもらっていたのだ。

「ユウキ…やろう！」

アスナが力強く、ユウキの肩に両手を当てて笑顔で語り掛ける。

「うん…アスナ…もう一度一緒に…歌おう!!」

ユウキとアスナが気持ちを固めると、舞台裏が何やら騒がしくなっていた。何事だ?と思ったメンバーは舞台裏の方を見てみた…すると…。

「え…何で…? どうして…?」

ユウキは自分の目を疑った。舞台裏からは続々と…元S A Oの仲間たちがやってきたのである、片手にマイクを持ちながら…。その中でもシリカがピナと共に元気に前へ出てきた。

「キリトさーん! アスナさーん! きちやいましたー!」

「シリカちゃん!? それにリズに…、リーファちゃんに…:…一体どうしたの…!?!」

舞台裏から出てきたのは、リズベツト、シリカ、リーファ、フィリア、シノン、ストレア、ユイ、そしてギターを持ったクライン、ドラムスティックを握ったエギルであった。

「クラインにエギルまで…!?! お前ら…どうしてここに…!」

キリトも驚愕の表情を見せた、かつての仲間が…どうしてこの会場に…それもスタッフ側から出てくるのか理解できなかった。

「私が呼んだのよ…キリト君」

セブンが前にちよこんと飛び出し、自分の仕業とばかりに暴露し始めた。

「アンコールが来ることは分かってたからね、なら最後の最後ぐらい、盛大にぱーつと盛り上げないと！　それがライブってもんよ！」

「おうよ！　セブンちゃんのライブに開催する側で参加させてもらえるなんて…このクライン、一生の誇りってやつだあっ!!」

クラインはギターをかき鳴らしながらその喜びを動きで表していた、もとの種族がサラマンダーなだけあつて非常に暑苦しい。

「つていうか…みんな演奏とか歌唱とか…いけるのか…?」

「もちろん歌えないわよ…でも…レインが裏でいろいろ教えてくれたから…それなりには…歌えるようになったけど…」

リズがそう言うと、全員の視線がレインに集まった。視線を感じたレインは笑顔でVサインを作った。

「俺様はこう見えても高校時代に、バンドやってた経験があるんだぜ。少しぐらいの演奏だったらお茶の子さいさいよう！」

クラインは再びサラマンダーの色を基調としたような真っ赤なエレクトリックギターをジャラーンとかき鳴らした、一々やかましい男だ。

「俺も…日本に来る前は…仲間と一緒にドラムをたたいてたんだぜ？」

そう言うとエギルは近くにあるドラムセットに腰を落ち着けると見事な手つきでドラムをかき鳴らしてみせた。

元々の渋い見た目もあって、なかなかはその姿はダンディーなものだった。

「キリト！ ユイも連れてきたよ！ キリトの役に立ちたいんだって！」

ストレアはそう言うとユイの背中を強く叩き、キリトに向かって押し出した。

「わわ…はいパパ！ ママ！ ユイも一生懸命お歌の練習したのです！ 精一杯見てほしいのです！」

ユイはキリトとアスナの姿を確認すると二人のもとに駆け寄り、ぱあつと明るい笑顔で話しかけてきた。自立したといっても…やはりキリトとアスナのこととは大好きなようだ。

「ユイ…お前まで…サンキューな…」

「ユイちゃん…ありがとう…！」

「ユウキさんはもうユイのお姉ちゃんみたいなものなのです、だから…助けるのは当たり前なのです！」

ユイの純粹無垢なその眩しい笑顔に、ユウキは感謝の言葉しかなかった。

ボクとキリトが付き合い始めたばかりにユイちゃんには悲しい思いをさせてしまったというのに…。

「ユイちゃん…みんな…ありがとう…ホントにありがとう…ボクのために…」

「気にすることないわよ、仲間…でしょ？」

シノンが優しくユウキの肩に手を当てた。

「ほらユウキ…あんまりお客さんまたせちや悪いよ…歌おう！ 思いつきり！」

「あ…うん…ありがとうリーファ！」

「最後は精一杯盛り上げていこうよ！ ユウキちゃん！」

フィリアはユウキの背中から手を胸元に回すように飛びついた。

「わわっフィリア…うん…ホントにボク…すつごく嬉しい…」

ユウキの心は集まってくれたみんなの温かさではちきれんばかりの気持ちでいっぱいになっていった。本当に…心の底から…ボクは幸せ者だ…そう感じていた。みんなとなら…何だっぺやれる…やり遂げられる…そう信じて疑わなかった。

「キリト、貴様はステージの後ろの方で俺と…戦え」

スメラギはキリトに歌ではなく剣を交えるように指示をした、まあ双方音痴なのだから仕方がなかった。

「歌えない俺たちはこのステージの演出係ってことだな…いいだろう。最後の歌のシメでは…カッコよく終わらせてやろうぜ！」

キリトが素晴らしいながら剣を抜くと、スメラギも剣を抜いた。エギルはドラムをスタンバイ、クラインもエレキギターを弾く態勢に入った。他の歌唱メンバーは全員マイクをもち、いつでも始められる状態になっていた。

「ユウキ…この曲はお前が始める…!」

「キリト…うん！ 分かった!」

キリトに背中を押されたユウキは会場の観客席に向かい、アンコールに応えた。本当に最後の曲を始めようとした。

『みんなお待ちさせてごめん！ 最後は…ボクのこの…世界一大切な仲間と一緒に…お届けするね！ 最後まで…お付き合いよろしくお願ひします!!』

会場は大いに沸いた、最後の曲と分かると今までにない大きな歓声が巻き起こった。

ユウキが演奏開始の合図を送るとエギルがドラムスティックをリズムよく叩き、演奏の始まりを促した。

タンタンタンと心地よい木のぶつかる音が鳴り響くと最後の曲の前奏が流れ始めた。

ユウキ、セブン、アスナの三人が歌い出しからスタートし、Aメロからリズム、シリカ、リーファ、ストレア、フィリア、シノン、レイン、ユイが合唱して続く。

やがてギターのパートになるとクラインが景気よくエレキを鳴り響かせた。意外と様になっている。

エギルは軽快なリズムでドラムセットを叩き続けた、時にリズムミカルに、時に激しく。

筋骨隆々なその見た目から打ち込まれるパワフルなドラムテク

ニツクは見ているだけでも楽しい。

キリトはステージ上でスメラギと決闘デュエルを繰り広げていた。

時には羽を広げ、会場中央を飛び交いながら空中戦を繰り広げ、長い中央路で地上戦をしながら走り抜ける。

絶対に観客やユウキたちに攻撃を当てないよう注意を払いながら。

しかしあくまでも演出という名目での決闘デュエルだったのだが二人の目は完全にマジになっていた。この場でも一人の剣士として戦いには負けられない、そういった強い意志がその戦いつぶりから見取れた。調子に乗ってセツトなどを壊さなければいいが。

観客席からは絶えず合いの手が送られ、その合いの手に合わせてサイリウムがキレイな蛍光色を放ちながら弧を描き続けていた。こんなに歌い手が集まるのはセブンのライブでは初めてのことなのでかつてない盛り上がりを見せていた。

SAOとALO：ゲームの垣根を越えて：今会場が完全に一つになっっていた。

やがて最後の曲も終わりが近づき、メンバーは最後のサビに入ろうとしていた。

クラインとエギルは真剣な表情で愛用の楽器を打ち鳴らし、クライマックスにそなえ全力で演奏を続けていた。

キリトとスメラギは攻防を繰り広げ、互いのHPがイエローというところまで激しく決闘デュエルを続けていた。

そしてその終わりは時一刻と迫っていた。

——Cynthia——時を超えて——笑顔に——戻れるから——

——心歌え——宙を伝え——”ボク”を待つ——空に響け——

全員が最後の歌詞を歌い上げると、ユウキが一人だけステージの3歩ほど前に出てきた。

そして大きく息を吸うと、心からの叫び声をあげた。

— Cynthia —

その叫び声にも近い歌声をシャウトすると、曲は後奏に突入。クラインとエギルが最後まで演奏しきり、エレキギターの心地よい低音が鳴り響く形で最後の曲が終わりを告げた。

そのギターので低音が聞こえなくなると、キリトとスメラギが互いの片手剣を空中でクロスさせ金属音を鳴り響かせてカッコよく締めた。すると会場から拍手喝采と大歓声が巻き起こった。その音は最高の演出をしてくれたステージ上のメンバー全員に向かって盛大に送られていた。

大歓声に聞き入っているメンバーはお互いの顔を笑顔で見つめ、やり遂げてやったぜといった満足の表情に包まれていた。

そしてライブを締めるべく、ユウキ、セブン、レイン、アスナが前に出て、今日来てくれた観客、中継を見てくれた人たちに向かって最後の挨拶を精一杯送った。

『みんなー！ 今日には本当にありがとうー！ また会おうね！ ダス
ヴィダーニャー！』

セブンがそう言い放つと、会場のあちらこちらから「ダスヴィダーニヤー！」という挨拶が返ってきた。そしてその大歓声と拍手はいつまでも鳴りやむことがなかった。

チャリティーライブは…無事大成功を収めたのだ…。

たった一週間にも満たない限られた時間で準備をしたチャリティーライブは、“世界中がユウキの味方をする”という最高の結果となって締めくくられた。

その熱気はしばらく収まることを知らず、メンバー全員が舞台裏に消え、楽屋入りしてもいまだに歓声と拍手が鳴り響いていたほどであった。その遠くからかすかに聞こえる熱気に、メンバーは心地よさを覚えていた。

「すごいね…まだ…聞こえてくるよ…」

シメの曲が終わってから30分ほど経過していた。

ユウキは椅子に腰を落ち着けながら目を閉じ、耳を澄ませて拍手と歓声を聞いていた。

そのユウキの顔からは全部やり遂げた…頑張った…といった達成感に満ちた表情が感じられた。

「ああ…すごいな…」

キリトはそう言うと、ユウキの頭に手をあて優しく撫でじゃくつた。

「頑張ったな…ユウキ…」

「うん…ボク…やったよ…」

「お疲れ様…ユウキ…」

アスナもキリトとユウキに歩み寄った。その声にはどこことなく達成感よりも疲れが感じられていた。

「集まってくれたみんなも…サンキューな…」

キリトは元SAO組のメンバーに感謝の気持ちを送った。正直、このメンバーが集まらなければ最後のアンコールのあの盛り上がりはなかったであろう。

歌うのが苦手なりズやシノンもよく頑張ってくれたと思う。

「気にすんなー！ ユウキちゃんのことを想えばどうってことないぜ！…このぐらい誠心誠意尽くすのは当たり前よ！」

クラインは親指をたててこれからもこのクライン様を頼れよ？といった態度でキリトに返事を返した。

「んじゃあ…アンタだけはこの後の打ち上げに来ないってわけね？」

りズがすかさずクラインに食って掛かる。

「なっ…そ…そいつはねーだろ!? おい、キリの字！ 何とか言っつてやってくれ！」

「悪い…それを取り決める権利は…俺にはない、あきらめろクライン」

「んな…殺生な…」

楽屋は笑いに包まれた、キリトは項垂れているクラインを尻目に本当にいい仲間を持ったなと…心の底から幸福を感じていた。ユウキのために…全員欠けることなく集まってくれたことに…心から感謝していた。

「ユウキ、どうする？ 打ち上げ…行くか？」

「んー…行きたいけど…ちよつと疲れちゃったから…少し休みたいな…」

「そうか…悪いセブン、打ち上げ…先にみんな始めてくれ。ちよつと…ユウキと二人になりたい」

セブンは「しようがないわねえ…」と渋々了承すると、キリトとユウキ以外のメンバーを連れて、打ち上げ会場に向かい楽屋を後にした。次々と楽屋を後にするメンバーにキリトとユウキは一人ずつ感謝の言葉を伝え、挨拶をすませていった。そしてメンバー全員が退室すると、楽屋にはユウキとキリトだけが残った。

「ユウキ」

「うん…」

ユウキはキリトに返事をする、キリトの胸に抱き着いた。

「キリト…ボク…頑張ったよ…」

「ああ…本当にユウキは…頑張った…その小さい体で…よく頑張ったよ…」

キリトはユウキを優しく抱きしめ、ひたすら静かに時が経つのを

待った。

会場の拍手と歓声はもう聞こえなくなっており、完全に静寂が訪れていた。その静寂が疲れ切った二人には心地よい沈黙となっていた。十分にお互いを近くに感じたキリトとユウキは一旦距離を置き、につこり笑うと再び抱き合った。

「何か…抱き合っただけだね…ボクたち…」

「俺は好きだぞ…ユウキを抱きしめるの…」

「…うん…ボクも…キリトにぎゅってされるの…嫌いじゃない…」

「そうか…」

二人の間には達成感や満足感もあったが、何より勝っていたのが疲労感であった。

ユウキはずっと自分の中だけに秘めていたことを世界中に暴露した、そして細い体で精一杯最後まで歌を歌い切った。

キリトは側でずっとユウキを支え続け、最後の最後でスメラギと決闘^{デュエル}。あれが効いた。

何にしろスメラギは半分本気で斬りかかってきていたからだ。それなりにこちらも全力で対応しないと折角のライブのシメのタイミングでリメインライト化してカッコ悪い姿を晒してしまう。そんなことは御免こうむりたい。

すっかり疲労感に包まれた二人にはだんだんと眠気が舞い降りて来ていた。

「もう…ここでいいか…ちよつと寝るか…ユウキ…」

「うん…寝よ…お休み…キリト…」

二人は楽屋に用意されていたソファに互いの身を寄せ合い、深い眠りについた。

1時間ほど経過したところでリズ達の様子を見に来たのだが仲良く熟睡している二人の姿を見ると「しようがないわね」とだけ言い残し、起こさずに部屋を後にした。

また今度：今度はユウキの退院祝いとして：その時に祝福してバカ騒ぎしよう、そう考えていた。

少しイレギュラーなこともあったが、キリトがユウキの命を助けるための計画は無事に成功という形で一応の幕を閉じた。これから先はドナーを待つのみといった状態になるのだがこればかりは待つしか方法はない。

いつドナーのHLAの一致が判明して、それがいつ木綿季のいる病院に届けられるかも全く分からないのだ。

しかし：ここところは激しい日々が続きすぎている。

ドナーが届くまでの間は：休暇と見なして：二人でゆっくりと過ごしていくのも悪くないのかもしれない。

キリトはドナーが見つかることを祈りつつ、明日へとまた歩み始めていた。

「きりと…だい…すぎ…」

「ゆうき…だいすぎ…だ…」

t o b e c o n t i n u e d . . .

第35話く休息、そして渴望く

西暦2026年2月8日 日曜日 午前6:55 横浜港北総合病院
メデイキュボイド仮想空間 木綿季の部屋

「くう……」

「すう……」

昨夜のライブから一夜明けた、和人と木綿季はすっかり疲れ果て昨夜からずっと眠っていた。

あの後打ち上げが終わり、観客、スタッフが全部退場したのが確認されたあと、ライブ会場が解体されて何も無い更地にキリトとユウキだけがぽつんと取り残されていたのだ。

ALOで建築したライブ会場は現実と違い、メニューボタン一つで解体が出来てしまう。後片付けを済ませて会場を解体すると、更地になったその場に雑魚寝しているキリトとユウキの姿があった。てつきりみんなキリトとユウキはもう帰ってると思ってたのだ。

結局二人はみんなに起こされ、寝ぼけ眼のまま半分夢の世界に意識を置き去りにしながらログアウトしていった。

和人はそのまま現実世界に帰還すると、息を吸うように無意識に病院のランチャーを起動して、すぐさま木綿季の部屋にログイン、疲れが全く取れてない二人はそのまま身を寄せ合って深い眠りについた。そして現在に至るといわけだ。

「すう……」

「くう……」

二人は幸せそうに眠っている。昨日まで激動の毎日をほぼノンストップで全力疾走してきたのだ。

ようやく訪れた静寂に二人は身を寄せていた、一週間分の疲れを吐き出すように…。

そして長い眠りからは和人が先に目を覚ました。

「ん…く…あ…あさ…か…?」

和人は仮想のタオルケットを上半身からのけるとむくりと上体を起こし、大きなあくびをした。

「ふああ…、木綿季は…まだ寝てるか…」

和人はいつものように大きく伸びをして、肩と腰をぐりんぐりん回して関節をほきほきならす。

そして覚めきれない意識のまま周囲を見渡して今の自分の置かれた状況を少しずつ思い返していった。

「ん…昨日も一緒に寝たんだっけか…、なんだかてつきり当たり前になつてきてるな…」

今更だが仮想空間とはいえ、木綿季と和人はかなりの回数一緒に眠っていた。ALOでも何度か一緒に寝ている。

ここまですると現実世界で和人の部屋で一緒に過ごすのとなんらかわりはないのだろうか、やはりその区別はついているようで現実ではこっぴばずかしくてかなわんようだ。

「…もいつかい…寝るかな…しばらくはこのままでも…」

和人はしばらくは平穏な日々をこうやってゆったり過ごしていくのがいいと思っていた。

ドナーが届けばまた慌ただしくなるに違いない。そうしたら治療やらリハビリやらでござたござたが待っている。

いや、それはそれで嬉しいし喜ばしいことなんだが…ちよつとの間ぐらいは…この平穩な幸せを噛みしめていたかった。

眠い瞳を再び閉じた和人は無意識に横になっっている木綿季の体に手を廻し、抱き枕気味に木綿季を抱きしめたまま眠りについた。決して本人にやましい気持ちにはなかった。ただ…丁度いい位置に丁度いい形をした木綿季がいたので無意識に抱いて眠ってしまったのだ。もう一度言うが和人にやましい気持ちはない。

「あ…う…ん…ん…ん…」

体に違和感を覚えた木綿季が入れ替わるように目を覚ました。木綿季はいつも通り上体を起こして伸びをしようとしていたのだが…。

（あれ…変だな…体が…動かない…？）

もう一度体を起こそうとする、しかし動かない。まだ半分意識が夢の世界にある木綿季は何で自分が動けないかわからなかった。次第に眠気が覚めていき、徐々に徐々にだが現在の自分の状況をようやく確認すると…。

「ふえ!？」

木綿季は目を見開いて信じられない光景を目にしていた。寝ている和人が自分に抱き着いたまま眠りについていたので。

その現実を視認した瞬間に木綿季の眠気はふつとび、どうしてこうなっているのかと頭を混乱させていた。

（え!?! な…何で!? 何で和人がボクを…いや…嬉しい…嬉しいけど

…！)

木綿季は必死に和人の拘束を解こうと試みるが…男の腕力でがちり掴まれているため全く振りほどけなかった。

和人は木綿季の腰回りの位置を包み込むようにして抱きかかえていた。

つまり、体が腕で完全にロックされている状態にあった。

「どうしよう…動けない…うう…困ったな…」

木綿季は完全に困り果てていたが、内心はこのままでもいいかと思いは始めていた。

昨日までは激動の一週間であったしドナーが見つかるまでの間は和人と一緒にのんびり出来ると思っていたからだ。

実際和人は学校を休学しているから時間はあるし、ゆっくり過ごしたいと考えていた。

しかし…その一日目から自分の体が全く動かせないと誰が予想しただろうか。

「うう…和人のばか…」

どうにか振りほどこうとするがうんともすんとも言わなかった。男の力で、それも振りほどきにくい形で固められたら、木綿季にこれを解くすべは全くなかった。ほどなくして木綿季は脱出をあきらめた。

(…まあいいや…しばらくはこのままでも…)

開き直ると木綿季はこの状況を受け入れた。かつてないぐらいに和人の顔が自分に近い位置にあった。

顔だけではない、体が完全に密着していた。年頃の女の子にこの状

況は大変に過激なものだった。

(和人：やっぱり可愛い顔してるよね：男の子なのに：)

木綿季が和人の顔をまじまじと見るのは初めてであった。抱き合ったり口づけをしたこともあったがじっくりと見つめる機会はそうそうなく、すらつと整った中性的な顔だちをした和人の顔は女の子に近い顔つきだった。

木綿季はそんな和人の顔を観察するように見つめている。

(こんな細い女の子みたいな男の子が：ボクを助けてくれようとしたんだ：)

木綿季はここ一週間のことを思い出していた。

ボクはある日：明日奈から頼まれた。

和人の側について元気づけてあげてほしい、最初は親友の頼みだったので和人に近付いた。

大切な親友の頼みだったからだ。持ち前の明るさと正直さで人と一緒に時間を過ごしていった。

そして決闘デュエルを行い、和人の：すべてを知った。

そしてボクにはいつの間にか和人への恋心が芽生えていた。生まれて初めての恋、それも：親友の元恋人。

和人のことを好きだということに気付いてしまったボクは和人の前から姿を消した。

すぐに死んでしまうボクには、誰かを好きになる資格なんてない：そう思ってしまった。

しかし和人は拒絶した自分を病院まで追いかけて来てくれた。そしてボクを好きだと言ってくれた。

それでもボクは拒絶した。ボクの方が先に死んじゃうよ？ 悲しい思いをさせるよ？

こう言えば引き下がると思った。和人に悲しい思いをさせないがためにと思つたからだ。

しかしそれでも…和人は歩み寄ってくれた。ボクを助けると言つてくれた。諦めるなど言つてくれた。

…嬉しかった…すごく嬉しかった…、根拠はなかったけど…和人ならボクを助けてくれる気がした。

だから…ボクは…病気になってから初めて…”生きたい”と思えるようになった。

和人を信じてみることにした。

和人は…ボクのヒーローだ、ボクの病気を治す方法も見つけてくれた。

困つたときにはいつも傍にいてくれた。ボクの我儘もいつも聞いてくれた。

和人は…ボクの…生き甲斐になっていた…。

「和人…」

木綿季は和人の胸板に顔を埋めた、大好きな和人を近くで感じたい。

このまま時間が止まってしまつてもいいと思つていた、一生…和人の側にいたい…。

和人と出会つてからの一週間は…ボクにとって過去にないぐらい幸せの連続だった。

ボクはこんなに幸せになつていいんだろうかとも思つた。幸せすぎてバチが当たってしまうんじゃないかとも思つた。

でもこんなに幸せなら…少しぐらいバチが当たつてもいいや…。
木綿季は様々なことを思い描くと、再び眠りについていた。

(和人…大好き…)

西暦2026年2月8日 日曜日 午前9:15 横浜港北総合病院 事務室

「……………」

倉橋は自分の仕事場で、インターネット配信を録画した昨日のライブの映像を見ていた。

ユウキの歌っているシーンを見ていた。我が子の学芸会のビデオを一人で楽しく見るかのように。

「木綿季君…楽しそうに歌いますね…」

その表情は穏やかであった。数週間前まで彼女はこんな表情はしなかった。

楽しいと思うことはあっても、心からやりがいのあることを成し遂げるの表情は見せたことはなかったのである。

その楽しそうに歌う木綿季の姿を見た倉橋の心は晴れやかな気分になっていた。

「おっと…こうしてはいられない…仕事に戻らなくては…」

仕事用のパソコンに娘の雄姿が映っている動画を私用に保存しているのもどうかと思ったが今回ばかりは仕方ないだろう。倉橋はいつも木綿季の言うことを聞いてくれるが基本的には多忙の身、これから起こるであろう大仕事のことを考えると今以上に多忙になるだろう。

「世界中のドナー登録志願者のデータが揃うまで：3日から：一週間ぐらいでしょうか：その間から木綿季君のHLAに合うドナーを探し出すのに：骨が折れそうですね…」

基本的に病院が抱えている患者のHLAのデータは外部には原則的に非公開となっている。患者のHLAのデータが自由自在に世界を飛び回ってしまえば、臓器売買などの犯罪につながる可能性があるからだ。

需要があるHLAのデータを見つけてしまえば闇取引などの材料にされてしまう。

なのでHLAの照合に関しては横浜港北総合病院の医療スタッフだけで行うこととなる。

全世界から何万：下手したら何千万のドナーデータが届けられるかは分からないが：こればかりは物理的な解決方法しかない。

「しばらくは：徹夜ですね…」

倉橋は医者か医者の手にかかるかもしれないなと思いつめていた。病氣や怪我を治す医者かそんなことになってしまったら身もふたもないが事情が事情だけに仕方がない。

何しろ愛する娘のためだ、一週間やちよつとの徹夜なんて覚悟の上だ、と倉橋は意気込んでいた。

「ドナーが見つかった後のことも：準備の方を進めておかなくては…」

倉橋の人生の中で一番忙しくなるであろう時期が始まった。自分は倒れてしまうかもしれない、しかし自分が今ここで踏ん張らなくては木綿季は助からない。

なら：こういう踏ん張りどころぐらい：男らしく踏ん張っている。体育会系ではない倉橋は珍しく根性論に似たような感情を持つ

ていた。

「待っていてくださいね…木綿季君…必ずキミにあうドナーを見つけ
てみせます」

倉橋はそう言って白衣を翻すと仕事に戻っていった。その後ろ姿
はまるでブラック・ジャックのような頼もしさがあった。

西暦2026年2月13日金曜日午前11:35 横浜港北総合病
院

あれから6日間が経過した、倉橋は通常業務から木綿季の面倒、そ
して他にも抱えている患者の面倒や治療、手術、そしてドナーの照合
など多忙すぎる毎日を過ごしていた。しかしそれがつらいと思うこ
とはなかった。

自分が動くことによつて人を笑顔に出来る、中には悲しませてしま
うこともあるが…倉橋はこの仕事にやりがいを感じていた。

特に…木綿季のように若い子の命を救う時は…自分の心も救われ
るような気分だった。

それを現実のものとするために、倉橋は今日も病院中の手の空いて
いる医療スタッフをかき集め、ドナーの照合に努める。

これまで何百件…何千件…いや、何万件のドナーのHLAチェック
を行っただろうか、一向に木綿季のHLAと合致するドナーは見つか
らないでいた。HIV耐性の遺伝子を持つドナーは何件か見受けら
れたのだが。

倉橋はほぼ無眠無休でドナーのチェックを進めていた、横浜港北総
合病院は医療スタッフ不足には陥っていないので焦る必要はないの

だが…今回の件に関してだけは倉橋なりに譲れないものがあつた。

自分が休んでる間に木綿季君のドナーが見つかりましたなんてカッコ悪いことにはしたくなかつたのである。

木綿季に…自分が見つけたと言いたい…自分の手で木綿季を救いたい、そういつた男の意地というものが倉橋にもあつたのだ。しかし流石に倉橋の肉体にも負担が来ていた。

「う………」

ドナーの照合を進めている倉橋は突如として目眩に襲われた。無理もない、ここ数日間の倉橋の一日の平均睡眠時間は2時間にも満たない。医師がいくら多忙とは言え限度というモノがある。

「先生!? 大丈夫ですか…!?!」

「ええ…平気です…、こんなもの…木綿季君が味わってきた苦しみに比べれば…」

「先生…流石に無理すぎです。少し休んでください」

「いえ…大丈夫です、このまま続けます」

「ダメです!!」

「う………」

倉橋には言い返す気力も体力も判断力もなくなっていた、上半身は猫背になってるし顔にも覇気を感じられないし肌もガサガサだ。

見るからに不健康人間まっしぐらな顔つきになってしまっている。流石に無理がたたりすぎて限界が来ていた。

「ほらっ今日だけは絶対にダメです!! 院長にも話をつけておきます!
! 私たちが後はやるんで休んでください! っていうか休みなさい
!!」

倉橋はそう言われて医療スタッフから半ば強引に事務室をつまみ
出されてしまった。

こうまでしないと先生は言うことを聞かないと判断されたのこと
だろう。実際、歩くだけでもつらそうにしている。

「……鍵を閉められてますね……」

すぐさま戻ろうと扉に手を掛けた倉橋であったが案の定事務室に
はしっかりカギがかけられていた。マスターキーも自身のデスクに
仕舞っている。完璧に仕事場に入れなくなってしまった。物理的に
仕事も出来なくなったので仕方なくとぼとぼと倉橋は仮眠室へと足
を運んでいた。

「仕方ないですね……少しだけ……休息をとりましょうか……」

少しだけ仕事場に未練を残しながら倉橋は仮眠室へと姿を消して
いった。

娘のためとはいえ、少々頑張り過ぎたお父さんであった。

同日同時刻 横浜港北総合病院 メディキュボイド仮想空間 木
綿季の部屋

和人は相変わらず日常を木綿季の部屋で過ごしていた。
何やら二人で仲良くとあるニュースサイトを閲覧しているようであつた。

「木綿季…見てみる…ここの…記事…」

「え…どれ…う……」

木綿季は和人の指さした記事を前のめりになつて読み始めた。どうやら医療関係のニュースのようだ。

「えつと……え…これ…本当なの!？」

「ああ…本当だ…早速成果が出てきた…つてことじゃないか…?…」

木綿季が読んでいたのはHIVに関するニュースの記事だった。アメリカサンフランシスコで、5年間HIVと闘病を続けていたAIDS患者が、先週の件で登録された骨髄ドナーの移植でHIVウイルスの数が減少したという報告が上がってきていたという。

他にもHIVではないが日本国内で白血病を抱えている患者がこの時登録された骨髄の移植によって治る傾向に向かっている報告が何件か上がっていた。

あのライブの影響で、命を救われた人が…確かにいたのだ。

「すごいな…早速成果が出てきている…木綿季のひたむきな姿勢が…人の命を…救ったんだ…」

木綿季は信じられないような目でその記事を見つめていた。

ボクが…人の命を救った…? 一切体を動かさせない…無菌室から出られないボクが…?

「これ…本当…なのかな…」

「ばかっ嘘の記事をこんな大々的に取り上げるわけないだろ…しかし…このままいくとこの患者さんもAIDSが治るかもしれないな…世界で…3人目の完治者になるかもしれないんだ」

「ボクは…何人目になるのかな…」

木綿季は首をかしげながら切ない表情をして記事を見つめていた。

「…そればかりは分からないが…恐らく、時間の問題だと思う」

「…そっか…」

今、唯一木綿季にとって幸運なのは木綿季の体内に潜伏しているHIVウイルスが以前と比べて活動が控えめになってきていることにある。

勘違いしている人が多いがそもそもAIDS自体は病気ではない。HIVに感染すると、HIVウイルスが体内の免疫機能を破壊してしまう。その影響で感染症になりやすくなってしまった状態のことを「AIDS」と呼んでいるのだ。

だからHIVを駆逐して免疫機能を元に戻してやれば、自然とAIDSも治るということだ。

勿論それとは別にこれまでに抱えてしまった合併症、後遺症の危険性も残ってはいるが。

「ねえ和人…ボクね…3年間、24時間フルダイブしてるって…言っただよね？」

「あ…ああ…そうだな…そう聞いている」

「あれね…実は正しくはないんだ…3年間に24時間”ほぼ”フルダイブしてたの…」

「ほぼ…？」

「ボクね…何ヶ月かに一回は…メデイキュボイドのフルダイブから現実に帰還してることがあるんだ、検査とかのためにね…」

「検査…？」

「そ、その時の身体機能とか…チェックするための…」

和人は息をのんだ、これから木綿季が言うことが何故か恐ろしい宣告をするような気がしていたからだ。

「…半年ほど前さ…一度現実世界に帰還したの…、その時…当然意識は現実にあるんだけど…その時ね…その時…」

やめろ…やめてくれ…聞きたくない…そこから先は…俺は聞きたくない…！

「目の前が真っ暗でね…何も見えなかったんだ…」

和人は言葉を失った、嘘だと言いたかった、息が詰まる思いがした。

木綿季が言っている言葉を理解しなくなかった。

「サイトメガロウイルス感染症って言つて…AIDSの影響により起こる感染症の一種なんだって。本来は…そのウイルスは成人の90%の体内に潜伏してて、普通なら免疫が働いてそこまで悪質な働きはないんだって…」

木綿季は無表情で淡々と話を続けていった。

「でもね…生まれたばかりの赤ん坊や…ボクみたいにHIVに感染して…免疫機能が低下している人間の場合、そのウイルスが悪さをするんだって…主な症状に視力の低下とかがあつて…最悪の場合…”失明”するんだって…」

「失…明…!?!」

木綿季は体を蹲らせ、震えるような声で話を続けた。

「うん…恐らくボクは…もう…半年前には…光を失っていたの…。先生は…長い間フルダイブしてて焦点が合っていないだけとか…一時的なものなだけで…薬の投与で治るって言ってたけど…もう…きつと手遅れなの…」

少しだけ顔を上げた木綿季の目には大粒の涙が滴り落ち、木綿季の着ている服と仮想空間の床を濡らしていた。

「だから…だからね…たぶん…HIVが治つても…現実の世界で和人の顔…見られないかもしれないんだ…」

和人は木綿季から語られた事実に変なショックを受けていた。よりによって…人間の五感の中で一番重要な…視力が…木綿季か

ら奪われていたのだ。

和人はこの世界を恨んだ、何でこの世界は…木綿季にこのようなつらい現実ばかり押し付けるんだ。

こんなか弱い女の子に…なんて残酷な仕打ちをするんだ…と。

…だがしかし、和人にはそんな現実を突きつけられても…揺るぎよ
うのない硬い”意思”と”覚悟”があった。

「ごめんね…折角ここまでやってくれたのに…ボク…現実に戻っても
…ずっと和人に迷惑をかけることになっちゃう…」

その言葉を聞いた瞬間和人は力に身を任せ、木綿季を自分の方へ引
き寄せ精一杯抱き締めた。

「わっ…かずと…？」

「いいか…俺は以前にも先生に言ったんだ。もし…木綿季が五感を全
て失い、四肢が動かない体になっても、一生死ぬまで傍で支え続け
るって。目が見えないだ…？ だったら…俺が…お前の目になつて
やる!!」

「か…かずと…」

木綿季はこの事実を既に知っていた。過去に病棟で和人が大声で
叫んだ時、メデイキュボイドの無菌室前まで筒抜けだったのだ。

その時の和人の男気に木綿季は心の底から、和人の恋人で良かった
と幸せを感じたほどだ。

「実はね…ボク…知ってたよ？ 前に…和人が…そう言ってくれたこ

と…」

「え…それ…マジで…？」

和人は途端に顔が真っ赤になった。聞かれてたのは…アスナだけじゃ…なかったのか…。

「うん…すごく嬉しかった…和人の恋人でよかったって…あの時心の底からそう思えたんだ…」

「あ…その…お…おう…俺が…傍にいてやる…から…安心しろ…」

「ありがとう」

そういうと木綿季は急接近したかと思うと和人の頬に接吻をした。

「のわっ！…木綿季…」

「えへへー♪」

木綿季はその場の勢いに任せて和人に無理やり飛びついてそのまま体重を預けた。

「おぼっ!？」

「和人だーいすき！」

「いてて…まったく…木綿季は甘えん坊だな…」

「和人にだけだもんツ」

「しょうがない奴だな全く…」

このやり時も一体何回目だろうか…、木綿季と付き合い始めてから数えきれないほどの抱擁を重ねている。

以前アスナと付き合い合ってた時ですら…ここまでのスキンシップをしたことはなかったな…。

「なあ…木綿季」

「なあに…和人？」

「俺はな…木綿季から視力が奪われてるとは…思えないんだ」

「え…」

木綿季は目を丸くして首を傾げた。そんなことはない…半年前は確かにボクの目は光を感じなかった。

疑いようなない事実だった。先生のあの言葉も…ボクを落ち込ませないための気休めか何かかと思ってた。

「なんとなく…だけど…な…。それに先生はそんな気休め言わないと思うんだよ…、多分…あの人は嘘はつけない人だ」

「何回かボクの余命誤魔化したことあったよ…？」

「あ…う…それは…その…なんか…ごめん…」

「んーん、でもありがと」

その日も和人と木綿季な何の気のないいつも通りの日常を過ごしていた。和人は食事とトイレ以外の時間はほとんど木綿季の部屋で過ごしていた。それが…ここ最近の和人の日常となっていたのだ。

ドナーが見つかるまでの間…和人は時間の許す限り木綿季の傍に続けた。木綿季はその和人からの愛情を、いっぱいを受け取っていた。現実世界には戻れないものの、幸せな毎日を過ごしていた。

倉橋はひたすら、爆発的に増え続ける膨大な量の骨髓ドナーのHLAをただひたすら調べ続けた。木綿季のHLAと一致するドナーを…ひたすら…ひたすら…。

西暦2026年3月7日土曜日 午前6:20 横浜港北総合病院

チャリティーライブから丁度一ヶ月が過ぎた。和人は変わらず、木綿季の側に続いている。

時にはALOで一緒に遊び、時には仮想空間の部屋で一緒にのんびり過ごす…そんな毎日を過ごしていた。

倉橋は…一日の平均睡眠時間こそ増えたものの、ドナーのHLAを照合し続けていた。ついには院長から通常業務はいいからこっちの照合に集中してくれ、いいと言われたほどだった。

「……………」

「倉橋先生…」

「私なら…大丈夫ですよ…それより…君たちも休んだ方がいいでしょう…。私のはいいですから…今日は非番でしょう？　上がって結構ですよ…」

「しかし…」

「大丈夫です…続けさせてください…」

「…先生…」

「…私は…木綿季君の家族を救えなかった…黙って見殺しにしたも同然なのです…せめて…木綿季君だけは…」

「それは…先生の所為では…」

「いいんです…でない…藍子君たちに合わせる顔がありません…」

とはいうものの、24時間中20時間近くをHLAの照合の時間に費やしている倉橋の肉体は、もう満身創痍であった。

周りの人間は何度も止めたのだが、倉橋はそれらを全て振り切り、半ば意地になって照合を続けていた。

医師としてはあるまじき行為なのだが、周りの人間はそれ以上倉橋を止めることは出来なかった。

「でも先生…流石にもう無理です！　ちよつとだけでいいですから休憩してください！　お願いですから…！」

倉橋の部下は瞳に涙を浮かべながら倉橋に休憩するよう訴えた。

「……………そうです…ね…、では…今見ているこのグループのドナーを

確認したら休憩に入ります…」

部下の必死のお願いが届いたのか、ちよつとだけならと思ひ倉橋は1時間だけ休憩をとることにした。

「…そうしてください…」

部下は安堵の表情を浮かべていた、今すぐ休めばいいのにといい気持ちと、何でこんなにも見つからないんだというもどかしさを感じていた。

「しかし…ホントに見つからないものなんですね…白人の1%っていったら…根気よく探せばそこまで苦労せずとも見つかるものだと思うんですけど…」

「…そうは簡単にいかないというのが現実というものです…しかし…幸いにも調べていないドナーはまだまだ山ほどあります…それらを…しらみつぶしに…探して…行け…ば…?」

倉橋の目つきが変わった、倉橋の視線の先にはとあるドナーのデータが表示されていた。

慌てて倉橋は木綿季のデータと見比べる、見間違いじゃないか確かめるために何度も何度も視線を往復させた。

「せ…先生…?」

「あ…あ…」

倉橋の体は震えていた、先生は何を見たんだろう？ 不思議に思った部下は倉橋の持っている木綿季のデータと、画面に表示されているドナーのデータを見比べてみた。

そこで部下は知った、何故…倉橋が言葉を失っているかの意味を…。

「せ…先生…これ…まさか…」

「…まさか…ですよ…ついに…ついにやりました…」

倉橋の目からは大粒の涙が流れていた、紺野家の面倒を見始めてから、決して流すまいと思っていたものを。

何年も何年も我慢してきた感情を…倉橋は爆発させた。

「長かった…15年…気が遠くなるほど…長かった…でも…ようやく…報われる時が…来た…」

「先生…よかった…本当に…ッ」

部下も涙を流して倉橋に祝福を送ると同時に、これまでの倉橋の頑張りを労っていた。

「どうどう見つけました…木綿季君のHLAに合う…骨髓ドナーを…
!!」

第36話く闘い、そしてく

西暦2026年3月7日土曜日 午前6:25 横浜港北総合病院

「どうとう見つけました……木綿季君のHLAに合う……骨髄ドナーを!!」

やった、ついにやった。倉橋は一ヶ月もの間ほぼ不眠不休で木綿季の細胞と合うHLAの骨髄ドナーを探し続けた。ここまで辿り着くのに調べたドナーの数は、ゆうに100,000に届こうとしていた。

単純計算で一日あたり3,300人分、1分で3人分、1時間で180人分、そのほとんどを倉橋が照合を続けていたのだ。とてつもない集中力と気力体力、そして木綿季を治すということへの……何よりも”執念”であった。

「本当にお疲れ様です、倉橋先生……」

「……………」

「あれ? 先生……?」

「すう……すう……」

「……………くすつ」

倉橋はすっかり寝てしまっていた。一ヶ月分の疲れが一気に降り注いだのだ。しかしそんな倉橋の寝顔は徒労感というよりも、達成感が感じられる非常にいい表情であった。

途中でやめないで良かった、諦めずにここまで走ってきて良かった。そんな気持ちで倉橋の寝顔から見て取れた。

「ドナーの提供申請は私がやっておきますから……ゆつくり休んでくださいね、先生」

部下は仮眠室から毛布を持ってくると、倉橋の体が冷えないようにふわっと広げて背中にかけてあげた。そして倉橋のパソコンのマウスを操作してこのドナーの持ち主へ、骨髄提供の申請を出した。

今回の骨髄ドナーの提供者はイギリスはロンドン在住の20代前半の健康なイギリス人女性だった。

部下が申請を送ると約8時間後に向こうから返事が返ってきた。ドナー提供者のイギリス人女性は快くOKを出してくれたそうで、今日にでも最終検査と骨髄液の採取を行い、準備が出来次第日本に送ってくれるとのことだった。

つまり、最速で二日か若しくは三日以内で木綿季の手術の準備が出来る可能性が出てきた。

この女性もインターネット配信でユウキのライブを英語翻訳で観ていたと言う。ALO英国サーバーにてインプの剣士として活躍しているプレイヤーだった。ユウキと同じインプの女の子として……何か運命的なものを感じてくれたのかもしれない。

Private use of my marriage for the girl of
女性性は英語で

Please get well by all means. と木綿季へ暖かいメッセージを残し、骨髄採取の手術を受けた。

倉橋はデスクに突っ伏し、ひたすらに寝息を立て続けた。娘の一生を左右する一世一代の大勝負は倉橋が勝ち取ったのだ。

いつも周りから冴えない顔をしていると言われている倉橋であったが、この時ばかりは部下からは今までで一番かっこいい倉橋先生の顔だったと言われたそうだ。

同日午後15:15 横浜港北総合病院 メディキュボイド仮想空間 木綿季の部屋

「木綿季、今日もまた新しいニュースが入ってきてる……見てみろこ

こ」

「ん、見せて見せて！」

和人は以前と同じようにインターネットで医療関係のニュースの記事を読んでいた。HIVに関するニュースのようだった。

木綿季が覗き込んだ記事には先日HIVウイルスの数が減少したというアメリカ人患者の続報だ。術後一ヶ月が経過し、経過観察のための検査をしたところ、HIVウイルスの反応がほとんど消えており、免疫機能も徐々に戻りつつあり、尚且つ患っていた感染症も薬の投与で回復傾向にあるという非常に喜ばしい報告であった。

事後検査や退院後の定期通院は続けなければならなくなるが、このままいけば完治も夢ではない。そう記事には記されていた。

「この人、あの時の記事の人だよね？ よかった……治りそうなんだ……」

「ああ、すごいな……まさに奇跡だ。次は……次こそは、木綿季の番なんじゃないかな……」

「うくん、どうだろ……。まだボクにあう骨髄が見つかってないからいつになるかは分からないかな……」

和人は木綿季を元氣付けるような言葉を掛け続けていたが、心配していることが一つだけあった。それは木綿季のドナーが見つかるまでに木綿季の残りの命が持つかどうか、ということであった。

二ヶ月前、HIVウイルスの活動が控えめになり、以前に比べて体の調子もよくなってきたものの、木綿季の余命が圧倒的に延びたというわけではない。

現在も崖っぷちであるということには変わりはないのである。今もこうして調子は良好に見えるが、いつ容態が急変しても何ら不思議ではない状態であった。

だから和人は一刻も早くドナーが欲しかった、一日でも一秒でも早く、木綿季にドナーを届けてやりたかったのだ。だから考えられる中で最速の方法で、世界全国へ骨髄ドナー提供の協力を呼びかけた。早くしないと時間がなくなる。

時間、そうすべては時間なのだ。そんな悪い可能性を懸念していた

和人の様子に気付いた木綿季はそつと声を掛けた。

「和人……どうしたの？」

「ん、ああ……別に、何でもない」

「……嘘だね」

「……はあ、木綿季に隠し事は出来ない……」

「当り前だよ、ボクたちずっと一緒にいるんだもん」

和人は詰め寄る木綿季の顔を至近距離で視界に捉えると、観念したのか深く溜息を吐き、正直に考えていたことを木綿季に話し出した。

「木綿季、今俺は一番心配していることがあるんだ。それは……ドナーが届くまでにお前の、お前の寿命が来てしまうんじゃないかってこと……なんだ」

「ボクの、寿命が……？」

「確かにお前の体はAIDSの末期に入ってるわりには……元気な方にあると思う。でもいつかその終わりが来るかって考えたら……木綿季が消えちまうって考えたら、怖くて……怖くて……！」

和人はあまりにも恐ろしい想像をしてしまい、体が震えだしていた。首から上もすつかり震えてしまっており、変な汗が滴り落ち、きちんと言葉を喋れていなかった。木綿季はそんな震えきっている和人を安心させようと、そつと優しく抱きしめた。

「和人……ボクはここにいるよ？」

「ゆう、き……？」

「ボクは死んでない、ここに……和人のすぐ傍にいるよ？ だから安心して？」

「木綿季……木綿季……ッ！」

「もう……また泣いて抱きしめて、ワンパターンだなあ……和人は」

「……ッ……しようが……ないだろ、不器用なんだから……」

「自分で言っっちゃ世話ないよ……和人」

和人を優しく元氣付けた木綿季であったが、そんな彼女も不安を抱

いてないといえは嘘になる。

自分の体は自分が一番よく知っている。すぐに死ぬことはないだろうが、本当にドナーの発見がぎりぎりになってしまったら、それまでボクの命は持つのだろうか？ という考えに辿り着いてしまったのだ。

実際、ここ最近では倉橋先生が会いに来てくれない。看護師や医療スタッフが様子を見に来ている。恐らくだが倉橋先生はドナーの照合に追われているのではないだろうか？ それも身を削ってまで。つまりドナー探しはまだいい答えが聞けそうにない。かなり追い詰められている状態にあるのだろうと悟っていた。

（ボクだって死にたくない。出来ることなら死にたくない。でも……もしも……、もしも本当にダメだった場合……）

和人とお別れする覚悟を決めなくてはいけない時がいつか来てしまいかもしれない。木綿季は心の中でその考えを巡らせてしまっていた。いやだ、和人とお別れなんて絶対に……嫌だ！ でも……現実には現実だ、受け入れなくてはいけない……。

「あのね和人、和人のコト元氣付けておいてこんなこと言うのは……あれなんだけど……聞いてもらえる？」

「……なんだ？ 木綿季……」

「あの……もしも……もしもね？ もしもボクに合うドナーが見つからなくてね、ボクが遠くないうちに死んでしまってもね、和人には幸せな未来を生きてほしいんだ」

和人は再び震えだした、またもや息が詰まる想いがした。何を言ひ出すんだ……木綿季は……？ つまりそれは……俺に木綿季のいない未来を生きろって……言ってるのか……？

「ボクね、和人と出会えて……すっごく幸せだった。ボクにとって……最初で最後の恋人で、大好きな……世界一大好きな男の子とずっと一緒にいれて、最高に幸せだった。本当に……本当にたくさん思い出を……ありがとね、和人……」

「やめろ……やめてくれ！ 何言ってるんだ……そんなのいやだ……。お前がいなくなっちゃうなんて……俺は絶対に嫌だ！ まだ

ドナーは調べられてないものが山ほどある！ だから諦めないでくれ！ 俺と……俺と一緒に生きてくれ！」

「……うん、ボクもね……出来ることなら和人と一緒にずっと生きていきたいよ。だけどね、自分の体のことは……やっぱり自分がよくわかるからさ……、今回のドナーの件が駄目だったら……多分、今年いっぱい生きられないと思うんだ」

「そん……んな……、そんな……ことって……」

和人は大粒の涙を流しながら、力の限りを込めて木綿季を抱きしめた。仮想空間とはいえ木綿季の体が壊れてしまうのではないかと思うぐらいの力を込めた。

何と声を掛けたらいいのかわからない。今まで木綿季を助けるために走ってきたのに、その助かる可能性を木綿季自身の口から否定されてしまったかのような感覚を覚えてしまった。

「ごめんね、これまで色んなことしてくれてきたのに……こんなこと言っちゃって……」

「木綿季……俺は……、俺は……！」

和人は何も言えなかった、木綿季の話していることは半分以上が事実であることを悟っていたからだ。本当にドナーが見つからなかったら……木綿季と永遠にお別れしてしまうことになるだろうと。

愛しい彼女と、二度と一緒に笑うことが出来なくなってしまうのだろうと。その悲しい現実には涙を流し続けた。

「泣かないで……和人……」

木綿季は息を殺して泣き続けている和人を支え続けた。和人の大事な人はいつも和人の側を離れていつてしまった。

サチ、月夜の黒猫団の皆、そして明日奈。和人が関わってきた人の大半は、気が付いたら和人の傍からいなくなってしまうていた。もしも木綿季までいなくなってしまうたら……俺はどうすればいいのだろうか？ 果たして生きていられるのだろうか？

和人が絶望の淵に叩き落されると、突如として外から声が聞こえてきた。二人にとっても聞き覚えがある声だった。はて、この声はと思しながら、二人は目線をスクリーの方にやる。

『おはようございます……和人君、木綿季君。……随分ご無沙汰にしてしまいましたね、申し訳ありません……』

声の正体は倉橋だった。その顔は以前まで知っていた二人の知る倉橋の顔ではなかった。目の下はクマだらけ、肌もガサガサに荒れ果てており、髪の毛はボサボサ、顔にも張りがない。

しかし、その優しい声だけは……二人の知っている倉橋だった。いきなり声を掛けられた二人は、何でここに突然現れたんだろうと考えていた。

「倉橋先生……どうしたんですか……その恰好は……、凄いことになつてますよ……？」

『いいえ……大丈夫ですよ。ちよつとばかり頑張り過ぎただけですから……、先ほどきちんと休息も取りました』

右腕をプルプルさせながらガツポーズを取った倉橋を見た二人は小声で「絶対嘘だ……」と呟いていた。あまりにも小さい呟きだったので恐らく倉橋には聞こえてはいないだろう。

聞いてもいないのに何をしたらそうなるんだという問いに返答までしてきた。しかし、聞こえていてもいなくても……そんなことは今の倉橋にとってどうでもいいことだった。それより二人に伝えなくてはいけない大事なことがある。

『お二人とも、今日は私から……大切なお話があります……』

大切な話、倉橋はそう話しかけてきた。二人はその言葉を聞いた瞬間に同時に「まさか」という考えに至った。あの倉橋の見た目、かなり無茶な方法で……を成し遂げてきたのだろう。

そしてその結果が出たからこそ、本人が直接二人の前に姿を現した。そして、その答えが意味することとは……？ 二人は息をのみながら倉橋の話の続きを聞いた。

『落ち着いて聞いてくださいね……、ドナーが……木綿季君の体に合う骨髄ドナーが……見つかったんです……』

倉橋の言葉を耳にした瞬間、二人の時間が止まった。先ほどまで絶望的な考えを巡らせてしまっただけに、いざ倉橋の口から聞かされた吉報が、正直にわかには信じられなかった。聞き間違いない

かということを確認するために、和人は恐る恐るもう一度今の話を聞いてみた。

「先生、今……なんて言いました……?」

『ですから、木綿季君の細胞に合う、HLAに合う、遺伝子を持ちHIV耐性を持った骨髄が見つかったんです……!!』

「……それは……本当なんですか……?」

『ええ……』

「木綿季は助かるんですか……?」

『ええ……ッ』

「AIDSが……治るんですか……?」

『ええ……!』 HIVの活動が控えめになっている今なら、かなり早いですパンでウイルスを駆逐できるかもしれません……!』

倉橋と和人が嬉しい会話を続けている一方で、木綿季はまだ少しばかり混乱していて二人の話していることにいまいち理解が追い付いていなかった。

「えと……和人、つまりどうゆうこと……?」

和人は声を震わせて、木綿季を安心させるための言葉を口にした。今度は恐怖からくる震えではない、安堵感からくる体の震えであった。漸く木綿季に希望の光が差し込んだことを、愛する彼女に……優しく伝えた。

「お前の病気が……治るんだ。見込みとかじゃなくて、本当に治るんだ……!!」

「……」

木綿季は茫然としていた、さつきまで死んだときのことを考えていた矢先に、自分が生きられるという事実を聞かされて戸惑っていた。突拍子もないことを言われてまだ頭は混乱していたが、時間が経過するにつれて、やがて少しずつ今の状況を把握していった。

「あの……ボク、助かる……の……?」

「ああ……」

「現実の世界に……帰れるの……?」

「ああ……ッ」

「和人と一緒に……？」

「ああ……！」

「ずっと一緒に……？」

「ああ！ 木綿季とずっと一緒だ！ お前は死なない！ 俺と生き続けるんだ……！」

木綿季が聞きたいことを全て和人にぶつけると、和人は安心する答えという形で木綿季の質問に全て答えた。その答えを聞いた木綿季は心の底から安心感が、これまで溜め込んでいた感情と共に一気に外へと溢れ出てきた。

「……ッ……ッ、ボク……あ……かず……と……ッ」

「いいぞ、こい……木綿季」

色々な思いが脳裏をよぎっていた。木綿季は15年間心に溜め込んでいたものを全て表に吐き出すかのように、声を荒げて、時に声を殺して、ひたすらに泣いた。

HIVキャリアであることが暴露され、迫害された子供時代。そんな自分を育ててくれた両親が死んでしまった時。AIDSを発症し無菌室から一步も外へと出られなくなった時。唯一の肉親で最愛の姉……藍子が死んでしまった時。

そして次は自分の番かと諦めた時。そんな死んでしまいそうな自分に手を差し伸べてくれた人が現れた時。その過去の想いを全部一つにまとめ、ぶつけるかのように木綿季は和人の胸へと飛び込んだ。

「う……うあああああああッ!! えうっ……ひぐっ……かずとつかずと……っボク……ああ……ああ……ッ」

「木綿季……頑張ったな。十五年間、長い間本当によく頑張った。木綿季は偉い……本当に強い子だ……」

「ぐっ……あ……う……かずと……かずと……」

「ゆっくり行こうこれからは、なんたって……時間はいつくだけでも出来たんだからな……」

「うん……うん……！ かずとを……しんじてよかった……。ボク……ほんとによかった……」

和人も木綿季が助かるという事実を受け止めると、目から涙が溢れ出てきた。木綿季を安心させるために自分は泣かないようにしていたが、この仮想空間内では感情のコントロールは出来ない。

泣きたいとき悲しいとき嬉しいときは勝手に涙が出てしまうのだ。メデイキュボイドの外では、倉橋も膝をついて泣き崩れていた。

昼から出勤する看護師がたまたま通りかかってその光景を目撃し何事かと思ったが、倉橋から状況を伝えられると共に安堵の表情をし、共に木綿季を祝福し、涙を流した。

やがて少しばかり時間が経過し全員落ち着きを取り戻すと、倉橋が畏まったように改めて今後のことを話した。

『和人君……木綿季君、ドナーはこちらの時間で朝方に提供申請を出していて、あちらの時間の朝方に、提供者の方もOKを出してくれました。今頃は最終検査と骨髄液の採取をしていると思います。そのあとは恐らく最速で日本まで届けてくれるはずです』

「あちら側って……ドナー提供者のことは教えてもらえないんですか……？」

『……すみません、骨髄移植推進財団の取り決めにより少なくとも日本国内では、残念ながら認められません。ただ……相手がどこの国の人とかまでは……お教えすることが出来ます』

「差し支えなければ……是非教えてください……！」

『いいでしょう、木綿季君の骨髄移植に協力してくれた方は、イギリスのロンドン在住の20代前半の健康なイギリス人女性の方です。木綿季君と……私たち宛にメッセージも送っています。聞きますか？』

二人は一呼吸置くくと互いに視線を交わし、一緒のタイミングで「ハイ」と答えを返した。その返事を聞くと倉橋はそのメッセージをプリントしたであろう紙切れをポケットから取り出し、淡々とかすれた声でゆっくりと読み上げ始めた。

『分かりました、では読み上げますね。
Please use my marrow for the girl of

そ
Please get well by all means. 以上
二つのメッセージをいただきました……』

「ユウキの種族を知っているってことはその人……ALOPプレイヤー
だったんだな……英国サーバーの」

『そのようですね。ちなみに提供者に手紙を送ることも出来ず。骨
髄移植推進財団を通して二回まで手紙のやり取りが可能です。もし
今後感謝の気持ちを送りたいとのことであれば、私を通して手紙を出
してみてはいかがでしょう？』

木綿季は大きくうなずくと力を込めて言葉を放った。ボクの命を
救おうと自分の体の一部を提供してくれたイギリス人の女性に感謝
の気持ちを込めながら。

「ハイッ！ 体が動くようになったらボク、手紙を書こうと思います
！」

その返事を聞いた倉橋はニコツと笑顔を作った。心の底から嬉し
い安心しきったという笑顔だった。

『わかりました。一応財団がチェックはしますが、個人の特定出来な
い範囲での文面でお願いますね？』

「ハイ！ ……倉橋先生、本当に……ありがとうございます……！」
『……いえ、むしろここまで木綿季君を助けることが出来ず、苦しい思
いをさせ続けてしまった私たちの無力さのことを謝罪させてくださ
い。本当に申し訳ありませんでした……木綿季君……』

「そ……そんな、顔を上げてください先生！ ボク……先生に謝られ
なければいけないようなこと、されてないですから……」

『……そうですか……、そう言ってくれると……私も少しばかり救わ

れたような気がします……』

そのような譲り合いのやりとりが5分ほど続き、やがて話の内容はいよいよ具体的にこれからどうするのかという話になっていった。木綿季を治す為に、本格的に治療そのものへと段階が移された。

『それでは和人君、木綿季君、これからのことを話し合おうと思います。私もアミユスファイアを使ってそちら側にいかせてもらいますね』
「あ……はっハイ！ 待ってます！』

そう言うと倉橋は自身のタブレットに入っている必要なデータを、メデイキュボイドの外部ストレージにデータを送信し、奥のアミユスファイアがある部屋へと姿を消していった。そして10分ほどするとキヤリブレーションを終えた倉橋が、仮想空間の木綿季の部屋に姿を現した。

「やあ木綿季君、こちらで会うのは……随分時久しぶりですね」

「倉橋先生……！ ちよつと以前に比べてふけましたね……？」

「む、失礼な……これでも私はまだ30代です。君たちにはまだ負けてないつもりですよ？」

和人が「十分おっさんじゃん……」と聞こえるか聞こえないかぐらいのポリウムで呟いた。しかし倉橋はしっかり聞こえていたようで表情を曇らせ、話題をそらそうとしたのかそそくさと本題を切り出してきた。どうやら倉橋にとって年齢のことは少しばかりタブーだったようだ。

「ではこれからのことについて本題に入りますね？ まず、木綿季君の手術ですがドナーが届き次第、前準備にとりかかります」

「そうなんですか……。骨髄移植手術つてすぐに始められるわけじゃないんですか？」

「はい。届いた骨髓液は点滴によって木綿季君の体に注入していきま
す。手術そのものはそこまで木綿季君の体に負担はかかりません。
しかしその前に前準備が必要になります。ただ……その前準備の段
階でつらい思いをするかもしれません」

「え……前準備で……？」

「……説明しますね。まず骨髓には『赤色骨髓』と『黄色骨髓』と呼ば
れるものが存在します。赤色骨髓というのは造血機能が盛んな骨髓
のことです。成人するまで活発に血液を作り続けるのです」

「せ、せきしよく……おうしよく？」

「はい、そしてやがて成人になるに従って立派な体が出来上がって
くと、赤色骨髓はその役目を徐々に終えていき、黄色骨髓へと変わっ
ていきます。ここまででは……いいですか？」

「は、はい、大丈夫です。続けてください」

「では話を続けますね。木綿季君は血液がHIVに侵されています。
そこでこの赤色骨髓に点滴を刺し、イギリスから送られてくるHIV
耐性を持った骨髓液を注入します。やがて拒絶反応がないと、徐々に
徐々に木綿季君の体に生着し、健康な血液を、HIVを駆逐する機能
を持った血液を作り続け、全身に行きわたりながらHIVを駆逐する
……というわけです」

木綿季は話の半分しか理解できていなかったが、とにかくその骨髓
液を木綿季の骨に注入すればHIVが治るということだけはなんと
か理解できた。一方和人は食い入るような姿勢で倉橋の話に耳を傾
けていた。

「点滴を注入すれば移植手術は完了です。あとは経過を見ながらHI
Vの様子などを観察していきます。そこでウイルスの数が減ってい
れば、手術は……大成功と言えるでしょう……！」

”大成功” この言葉を聞いた瞬間に木綿季と和人の顔が明るく
なった。漸く病気が治るということが現実味を帯びてきたからだ。

治る見込みがない不治の病だと言われ続けていたAIDSが、漸く治ろうとしていた。

「しかし、そこにいきつくまでにちよつとした壁があります」

「壁って……一体何なんですか？　ここまできたなら勿体ぶらずに教えてください」

「大丈夫です、隠す気はありませんよ。えつとですね、骨髄液を注入するためには、一度木綿季君の骨髄を空にする必要があるのです。放射線治療や、抗がん剤投与などで今の木綿季君の骨髄を一度完全に破壊するのです」

「え……」

放射線治療、抗がん剤、この二つの単語を聞いた瞬間に木綿季の顔が引きつった。この治療法と言えば……主にガンを患った人が行う治療法だ。それがどれだけ苦しいか……つらいか知っている。死んだ方がましだと思えるほどの苦痛に襲われる、恐ろしい副作用もある。果たしてボクはそれに耐えられるのだろうか……と考えていた。

「木綿季君、そんな不安そうな顔をしなくても大丈夫ですよ。君はメデイキュボイドを使っているのですから」
「あ……」

「メデイキュボイドの体感キャンセル機能を使つたまま、前処置と手術は決行します。どちらにせよ無菌室にいる必要があるので好都合というわけですね。なので痛みや吐き気などと言った、一般のガン患者の方が抱えている苦痛はないと思つていただいて大丈夫です。何より今の抗がん剤はかなり進歩しています。過去の事例のような副作用もそこまで深刻なものではありません」

「と言うことは、ボクは治療中も手術中も……一応意識はあるってことなんですわね……？」

「ええ、仮想空間の中ですが下手な全身麻酔よりは圧倒的に安全です。本当に……これを設計した茅場昌彦さんには感謝の言葉しかあ

りませんね……」

「茅場……昌彦……！」

ここにきてアイツの名前を耳にするとは思わなかった。SAO事件の黒幕にて……プレイヤー4000人余を殺した日本歴史上最悪の殺人犯であると同時に、仮想空間開発の第一人者であった。このメデイキュボイドも、基本設計は茅場昌彦がしたものであったのだ。和人はこんなときでも茅場昌彦の掌の上で踊らされていると思うと、心底あいつと俺は切っても切れない腐った縁が付きまといっているんだなど感じていた。

「一般的な骨髄移植での前処置の死亡確率は……30〜40%ほどと言われています。治療そのもののリスクのことよりも、治療中の苦痛やストレス、不安などからくる影響で身体も精神も耐えきれなくなってしまふのです。しかしメデイキュボイドを使っている木綿季君なら、そのリスクを極限にまで下げることが可能なんです」

「そう……なんですか……」

低いとはいえ、死亡する確率があると言われた木綿季は恐怖を紛らわすため和人の手をぎゅっと強く握りしめていた。和人はその気持ちを汲み取り、木綿季の手を同じように握り返し安心させた。

「木綿季、大丈夫だ。俺がついている」

「和人……うん……」

「そうですね、和人君には前処置中も、手術中も木綿季君の側にいてあげてほしいと思ってます。精神面からくる不安を取り除いてあげれば、それだけで木綿季君が助かる確率は上がるでしょう」

「……分かりました、木綿季は……絶対に俺が守ります」

「かずと……」

和人はそういうと片手で自分の胸に、木綿季を力強く抱き寄せた。

もう片方の手で頭に手を当て、安心させてあげた。木綿季はそんな和人の胸にすがり続けていた。和人なら、ボクがどんな目にあっても必ず守ってくれる。だからボクも……和人を信じる。

「話は以上です。何か質問はありますか……?」

「……いえ、大丈夫です……」

木綿季は全てを覚悟したという表情で、倉橋に返事を返した。ここまでできてやっぱりやめますなんて口が裂けても言えない。そんなこととしてしまつては皆に、明日奈に、セブンに、倉橋先生に、そして何より一番ボクを支えてくれた和人に合わせる顔がなくなってしまう。

「倉橋先生、ボクの体……よろしくお願いします……」

「先生……俺からも……お願いします……」

和人と木綿季は揃って頭を下げた、もうあとは倉橋先生と……運にすべてをゆだねるしかなかった。倉橋は力強く頷くと、真剣な眼差しを見せ二人に言葉を返した。

「はい、わかりました。全力で取り掛かせていただきます。絶対に木綿季君は死なせません。私にまかせてください……!」

西暦2026年3月9日 曜日 午前9:05 横浜港北総合病院

ほどなくして二日が経過し、無事に横浜港北総合病院にイギリスからHIV耐性を持った骨髄が届けられた。届いたことを確認した倉橋はそれを和人と木綿季に伝えると、すぐさま木綿季の放射線治療と抗がん剤投与を始めた。この前処置は早ければ1週間、通常なら2週間程度で終わるものらしい。本来なら死んだ方がマシと思えるほど

の苦痛に襲われるこの治療。和人はこの時唯一、木綿季がメデイキュボイドを使っているよかったと心から感じた。大切な人がすぐ傍で悲鳴を上げ、狂い悶える姿など……見たくはなかっただろう。

和人はこの時、不服ながら茅場昌彦に二度目の感謝の気持ちを抱いた。木綿季の痛みや苦しみを消してくれてありがとうと、皮肉の感情を込めて、あの世にいるであろうヤツに念を送っていた。

木綿季の治療が進む中、この時ばかりは和人は食事も睡眠も取らずにひたすら木綿季の傍で彼女を支えていた。傍らで震えている木綿季をひたすらに元気づけていた。頑張れ……頑張れ木綿季……お前は死なない……俺が付いている。俺が傍にいる、そう声を掛け続けた。木綿季は怯えた表情で和人の側を片時も離れなかった。

西暦2026年3月19日木曜日 午前10:00 メデイキュボイド仮想空間 木綿季の部屋

木綿季が抗がん剤と放射線による治療を始めてから10日ほどが経過した。倉橋はあれから毎日木綿季の経過を観察し、骨髓の様子を常に監視していた。そして今日、木綿季の骨髓の完全破壊が完了した。それを機械で確認した倉橋は和人と木綿季に伝え、すぐに移植手術の為の準備を進めた。医療スタッフを集め、必要な器具を揃え、最後にドナーの骨髓液が入った容器を看護師に持ってこさせた。

看護師はしゅるしゅると手際よく透明な点滴の管をほどこき、その管を骨髓が入っている容器に接続した。そして管の先に繋がっている針を、木綿季の現実の肉体の上腕にあたる部分の骨に注射した。中に何も入っていないからっぽの状態の木綿季の骨に、少しずつ……少しずつ……イギリスから渡ってきた骨髓液が入り込んでいった。

無菌室の中にはかつてないほどの緊張感が漂っていた。今までは命を長らえる為の終末期医療を繰り返していただけに過ぎなかった無菌室。しかし今は木綿季の生死を左右する直接的な処置が行

われている。確率は非常に低いと言えども、木綿季がそのまま死んでしまう可能性もある。

木綿季は震えていた、怖くないわけがない。何かの間違いで自分は今すぐ死んでしまうかもしれないのだ。手術中も意識があるという感覚は、15歳の少女には酷なものであった。

「和人……」

和人は木綿季に自分の名前を呼ばれると、当たり前のように木綿季を安心させる為に力強く抱きしめた。仮想空間内の巨大ディスプレイには現実の木綿季のオペの模様が映し出されていた。シヨツキングな光景になるかもしれないので倉橋は映さないつもりだったのだが、木綿季の強い要望によりモニタリングすることになったのだ。

「木綿季……大丈夫だ、俺が傍にいる……お前を支えてやる……」

「うん……うん……でもボク……怖いよ……」

木綿季は和人に密着し、これ以上ないぐらいすがり寄っていた。体を小刻みに震え本当に怖いと言うことが見て窺えた。

「怖いよ……怖いよ和人……、こんなに和人が傍にいるのに……ボクの意識が一瞬で途切れてしまって、二度と戻らないって思うと……怖くておかしくなりそう……」

和人はより一層力を込めて木綿季を抱きしめた。そして元気づけるために励ましの言葉をひたすらかけ続けた。

「大丈夫だ木綿季、大丈夫だ！ お前は助かる！ 絶対に助かる!! 何度も言っているが俺が傍にいる!!」

「かずと……もつと……もつと強く抱いて……抱きしめて。ボクがどこかに……手の届かない場所に行ってしまったように……ぎゅっ

としてて……」

「ああ……俺はここにいる。だから安心しろ……ずっと抱いてやる、だから……安心しろ……!!」

「もつと……もつと強く抱いて……怖いよ……怖いよ……!!」

和人は手術中ひたすら木綿季を抱きしめ、元気づけ続けた。木綿季が望むものはなんでもしてやった。抱きしめてと言われれば抱きしめ、頭を撫でてと言われれば暖かく撫で回した。しかしそれでも木綿季の体の震えと恐怖が止まることはなかった。

「かずと……こわい……こわいよ……もつとそばにいて……もつとそばに……」

「木綿季……？　しつかりしろ！　大丈夫だから！　俺はここにいるから……!!」

（まずい……そろそろ木綿季の精神が限界かもしれない、移植手術は……まだ終わらないのか……!!）

和人がそう言いながらディスプレイを見ると、髄液が入った容器は、最初の三分の一ほどの量まで減っていた。

（あと三分の一……まだもう少し時間がかかるか……!!）

「木綿季！　あと少しだ！　頑張れ!!　もう少しで手術が終わる！」

「はあ……はあ……和人……和人、いやだ……死ぬのはやだ……ボク……生きたい……」

木綿季の瞳からは光が失われていた、呼吸が荒く、顔にも覇気がなく、今すぐにも消えてしまいそうな感じであった。

「ゆ……木綿季!?　しつかりしろ！　大丈夫か!？」

（まずい……本当にまずい……!!　このままでは木綿季の精神がおか

しくなっちゃう！ どうしたらいいんだ……!?)

その時だった、無菌室の前を誰かが横切ったような気がした。一瞬のことだったので和人はその姿を確認できなかったが。……しかし今はそれどころではない、木綿季の精神が崩壊しそうなところまで来てしまっていた。

「やだ……やだやだやだ!! 死ぬのはやだ!! やだやだやだやだやだやだ!! 死にたくない!! 死にたくない!! 死ぬのはいやだああああ!!」

度重なる恐怖で精神の限界を超えたのか、突如木綿季はヒステリーを起こしたかのように声を荒げて泣き叫んだ。和人は必死に暴れる木綿季に声を掛けて力強く抱き締め、励まし続けた。

「……やだ……やだ……よ……かずと……あすな……ねえちゃん……たすけて……ボクを……おいてかないで……」

「木綿季大丈夫だ!! お前は死なない!! 絶対に生きる!! 生きて……俺と学校に行くんだろ!? 俺と一緒に現実世界で暮らすんだろ!?! だったら……頑張れ!! 俺がずっと傍にいる!! だから……頑張ってくれ!!」

「……がつ……こう……?」

”学校”という言葉に木綿季は反応を示した。明日奈に連れて行ってもらってから、すっかり懂れていた学校のことを思い出した。そうだ……ボクは和人と……学校に行くって約束したんだ。明日奈もいる……新しいお家もある……お母さんもお姉ちゃんも……家族がいるんだ……、ならここで負けちゃ……だめ……なんだ……。

「ああそうだ、一緒に行くって約束したろ!! 一緒に登校して、授業も受けて、お昼ご飯だって一緒に食べれる! そして一緒に下校して

……寄り道とかもして、学校生活を送るんだろ!？」

「……そう……だ……。うん……ボク、学校行きたい……みんなのいる……学校に行きたい……」

「ああそうだ……行きたいだろ……! なら……あと少しだから、頑張れ……頑張るんだ!! 俺が傍にいてやるから……!」

和人の必死の励ましにより木綿季の体の震えは少しだけ小さくなった。心の負担がわずかながら減ったようだ。顔つきも先ほどより幾分かよくなっており、瞳にも光が戻っていた。

「うん……ボク……、もう少しだけ頑張る……」

「ああ……木綿季は強い子だ。絶対に乗り越えられる……なんてたつてお前は”絶剣”なんだからな……!!」

何とか崖っぷちで和人は木綿季の精神崩壊を防ぐことが出来た。必死のやり取りをしている中、髄液の容器の残量は残り五分の一ほどまでになっていた。そしてその残り五分の一が減っていくというのが……ものすごく長く感じてしまっていた。

「はあ……はあ……かずと……て……にぎって……」

和人はそう言われるとすぐさま木綿季の手を握りしめた。自分の手のあたたかさを、木綿季に必死に伝えていった。

「あったかい……かずとので、あったかくて……うれしい……」

「ああ、木綿季の手もあったかいぞ……。生きてる、木綿季は生きてるんだ……!」

「うん……ボク……生きてる……」

その時だった、メイキキュボイドの仮想空間内で和人の声ではない別の声が……木綿季の名前を呼んだのである。木綿季と和人は声の

聞こえた方向に振り向いた。そこには……二人のよく知る人物が……立っていた。木綿季にとっては、和人と同じくらい大切な親友が、木綿季のもとへと駆けつけていた。

「木綿季!!」

「あ……あす……な……?」

木綿季のもとに駆けつけたのは一番の親友の明日奈であった。名前を呼ばれた明日奈はすぐに木綿季のもとに駆け寄ると、和人と一緒に木綿季を力いっぱい抱きしめた。木綿季にはどうして明日奈がここにいるかわからなかった。授業を受けている筈なのにどうして……?

「あすな……どうして……ここに……?」

「遅くなってゴメンね……でも間に合った、間に合ったよ……木綿季……!」

「来てくれたのか明日奈……サンキュな……」

和人は何とか間に合ったと言った安堵の表情を浮かべていた。明日奈には予め手術が始まると知らされた時に、仮想空間内からメールを飛ばしていたのだ。明日奈は本来通常授業の日であったが授業を途中で抜け出し、超特急でここまで来てくれたという。

「木綿季……!!」

「あすな……あすな……! あすなあ……!!」

明日奈と木綿季は力いっぱい抱擁を交わした。明日奈が来てくれた……和人だけじゃない、ボクを支えてくれようと明日奈が来てくれた……嬉しい……すっごく嬉しい……。やっぱり明日奈……姉ちゃんのおいがする……お日様の……暖かいにおい……。

明日奈が駆けつけてしばらくすると、無菌室の前が騒がしくなっ

いた。その様子に気付き、何かかと思い二人は部屋の中のサブディスプレイで外の状況を確認してみた、するとそこには更に二人を驚かす光景が映り込んでいた。

『木綿季！ 来てあげたわよ！ 生きてるわよね!?!』

無菌室のガラスの前にいたのはリズだった。リズも明日奈同様に授業を抜け出し、木綿季のいる病院へと来てくれたのである。

「りず……も……きてくれたの……?？」

『私たち友達でしょ!? 当たり前じゃない!! それにあたしだけじゃないわ!……みんな来て!』

リズが廊下の方に視線をやり、片手を振ると、ぞろぞろと木綿季たちの知っている顔が歩いてきて、無菌室のガラスの前に勢ぞろいしていた。木綿季はその光景を、信じられないような目で見つめていた。

「え……うそ……なんで……?？」

『木綿季ちゃん……! 絶対に負けちゃだめよ……! お母さんがついているわ!』

最初に木綿季に声を掛けたのは和人と直葉、そしてやがて木綿季の母親になるであろう翠だった。

『木綿季！ 負けないで！ そんな病気なんかには負けないで!!』

続いて声を掛けたのは姉になる直葉だった。妹を元氣付ける為、彼女もまた木綿季のもとへとやってきてくれていた。

『木綿季さん！ 頑張ってください！ 私とピナも応援しています!』

シリカ。

『木綿季！……ここまで来て……死んでしまいましたなんてことになったら……絶対に許さないんだから！』

シノン。

『木綿季ちゃん！ ファイトだよ！ あと少して終わるから……頑張って!!』

フィリア。

『木綿季ちゃんよう！ この俺様が駆け付けたからにはもう安心だ!! だから負けんじゃねえ!!』

クライン。

『木綿季！お前の強さは……絶剣はこんなもんじゃねえはずだろ!? 見せてみる！ 絶剣の強さを!! 根性を!!』

エギル。

『木綿季ちゃん！ ジェラーユ・ウダーチ!! 負けないで……H I V なんかに負けないで!!』

セブン。

『見て木綿季ちゃん！ みんな来てくれたよ……! 木綿季ちゃんを応援するために……みんなが来てくれたよ!』

レイン。

『……貴様に死なれたとあつては、俺としても後味が悪いものがある。
……絶対に死ぬことは許さん、生きろ』

スメラギ。

「み……みんな……来て……くれたんだ……」

木綿季がみんなに感謝の気持ちを抱いてると、リズが徐にスマホを上着のポケットから取り出した。リズではなく明日奈のスマホだった。そしてそのスピーカーを、無菌室前に置かれているマイクに向かつて差し出した。

『私たちもいるのです！ ユウキさん！』

『うん！ 外には出られないけど、ここからならユウキに声だけは届けられるよー！』

明日奈のスマホから聞こえてきたのは、ユイとストレアの声だった。生身の体を持たない彼女らも、スマホの通信アプリを経由して。わざわざ木綿季を励まそうとやってきてくれたのである。

「ユイちゃんに……ストレアまで……」

「木綿季、それだけじゃないの。ここには来られないけど……スリーピング・ナイツのみんなからメッセージを受け取ってきたわ」

明日奈はそう言うとう自分のスマホに届けられたメッセージを、リズに読み上げてもらうよう合図を送った。仮想空間にスマホは持ち出せない為、外にいる人間に委ねたのだ。リズは明日奈のスマホのメモ帳アプリを起動し、スリーピング・ナイツから木綿季へ贈られたメッセージを読み上げ始めた。

『それじゃあ読むわよ……えつと……オホン』

”ユウキ、今が一番つらいかもしれないけど……これ乗り越えれば明るい未来が待つてるはずよ……だから頑張つて！ シウネー”

”ユウキ！ 今にも死んじまいそうなお前に活を入れてやる！

死んじまったら……絶対に承知しねーからな!! ジュン”

”リーダーへ、絶対に病気を治して……またみんなで冒険に行きましよう！ テツチ”

”リーダー……えつと……その、が……頑張つて……ください……

!! タルケン”

”ユウキ！ 死んだりなんかしたら許さねーぞ！ またアタシの酒に付き合ってもらわないと困るんだからな!! ノリ”

「スリーピング・ナイツの……みんな……」

「そうよ……みんな木綿季の病気が治るように応援してくれてるの……! だから……一緒に頑張ろう！ 木綿季！」

死への恐怖で震えて何も出来なかった木綿季の心が……少しずつ温かくなつていった。ボクは……ボクが思つてる以上に……皆に愛されてたんだ。嬉しいなあ……。ならここで……死ぬわけには……、負けるわけには……いかない!! 生きなきや……ボク……生きなきや……!!

「ありがとうみんな……ボク……頑張る……」

『そうよ……頑張つて!! 頑張つて木綿季!!』

『頑張れ!! 頑張れ!!』

『木綿季ちゃん!! 負けないで!!』

皆が集まったその日は、横浜港北総合病院で一番熱意のこもった言葉が贈られた日であった。この小さな少女の命を助けるために、再び

家族と仲間達が大集結したのだ。明日奈達学生は学校を休んで、エギルとクライン、そして翠は仕事を途中で引き上げてここまで駆け付けた。

そんな、掛け替えのないメンバーからの支えは、手術が終わるまでの時間を稼ぐのには十分すぎるほどであった。皆の声援が飛び交っている中、骨髓液の入った容器は空っぽになり、管を通っている残りの骨髓液も全て木綿季の腕に吸い込まれていった。

骨髓液が吸い込まれるのを確認すると、看護師が針を外し、倉橋がすぐさま機器で様々なデータを確認した。どこにも異常はないか？移植前の時と比べておかしなところはないか？看護師と医療スタッフと一緒に様々な機器をチェックしていった。

「……………なつたんだ……………？」

和人が張りつめる空気の中重たい口を開けた。先生たちは今何をしているんだろうと思っていた。和人が一人困惑していると明日奈が口を開いた。

「た……………多分……………拒絶反応がないかどうかのチェックとかをしているんじゃないかな……………よくわかんないけど……………」

骨髓に限らず移植手術には必ずリスクが伴う、HLAが一致していると言っても100%GVHD等の拒絶反応がおこらないというわけではないのだ。その時のショックで死んでしまうこともある。しかし拒絶反応は術後すぐに起こるわけではない、多くは術後2〜3週間ほどのスパンで起こることもあれば、数ヶ月経過してから現れる可能性もある。

まずは木綿季に移植された骨髓が正常な血液を生成するか……………ここからなのである。しかし、とりあえずの手術は終わりといったところだろう。現に倉橋も安堵の表情を見せていた。

『お疲れ様です木綿季君。手術は……以上でお終いです。あとは……経過を見ながら……観察していきましよう』

倉橋がオペの終了を告げた、その瞬間に張り詰めていたその場の緊張が漸く解けた。皆肩を落とし、胸をなでおろし安堵の表情を見せていた。一方でメイキュボイドの中で床に突っ伏すように力なく崩れている木綿季に和人は安心させるべく優しく声をかけた。

「木綿季……もう大丈夫だ、終わったぞ……」

和人から声を掛けられた木綿季はゆっくりと顔を上げて、和人の顔を涙目で見つめていた。体中を震わせて、今一体何がどうなっているのか、ボクはどうなったのかと、恐る恐る聞いてみた。

「終わった……の……？」

「ああ、手術自体は完了だ。あとは拒絶反応がないかどうかの観察をしながら、HIVウイルスの様子も監視するんだってさ」

「木綿季……お疲れ様……！」

明日奈が木綿季を抱き締めた、その眼には涙が浮かんでいた。木綿季の表情には安堵感というよりは本当に終わったの？ といった表情が見て取れた。しかし周りの反応を見る限り、多分終わったのだらうと判断していた。

「キリト君……ありがとう、手術のこと教えてくれて……」

「いや……急な呼び出しに……よく来てくれたよ……サンキュな。キミが来てくれなかったら……正直木綿季の精神がやばかったかもしれない……」

和人は明日奈が来てくれたことに嬉しさを感じていたが、それ以上に自分一人だけで木綿季を支えられなかったことの悔しさを心を感じ

ていた。俺にもっと木綿季を支えられる力があればと思っていた。しかし悔しがるのは後だ、今は集まってくれたみんなに礼を言わなくては。

「リズ達もホントに……サンキュな。わざわざここまでできてくれて……」

声を掛けられたリズ達元SAO、ALOのプレイヤーの皆は和人から礼を言われると、揃ってスメラギ以外全員笑顔でVサインを作ってみせた。

『スメラギ君……こうゆう時ぐらい空気読んで息を合わせなさいよ……』

セブンは呆れた表情でスメラギにクレームをだした。しかしスメラギは照れくさそうにみんなから見えない角度に顔を隠すだけであつた。本人も手術が終わつたことに安堵してる筈なのに、である。

『木綿季君のお友達の皆さん……今日は掛け合つてくれて本当にありがとうございます。移植手術自体のリスクはそれほどでもなかったのですが……、術中の木綿季君の精神が危ないところでした。本当に心から感謝します……』

倉橋はそう言うと、集まってくれたメンバーに深々と頭を下げた。そんな倉橋のたまたま近くにいたクラインが駆け寄り、声を掛けた。

『先生……よしてください、頭を上げてくださいよ……。むしろ先生がいなかったら……木綿季ちゃんは助かっていなかったんだからな……』

『……恐縮です……』

『ふう、それじゃ私たちは帰りましょうか、これ以上ここにいても邪魔

でしょ？　こんなに大人数なんだし……」

『そうですね……、あとはキリトさんや直葉さんにお任せしましょう！』

「え、あ……ちよつと！　ログアウトするまでちよつとまってえー！」

仮想空間にいる明日奈を尻目にリズ達は帰り支度を始めた。本当なら木綿季の側にいて支えになってやりたいところなのだが、この大人数がいつまでも病棟をうろうろしているわけにはいかなかった。いくらあまり人が来ない無菌室のあるこの病棟でもだ。メンバーは桐ヶ谷家の面々を残して病院を後にすることにした。

「明日奈……来てくれてありがとう。ボク……ホントに怖かったから……明日奈が来てくれてすっごく嬉しかった……」

木綿季は床にぺたんこ女子座りをしながら駆け付けてくれた明日奈に感謝の気持ちを表した。そんな木綿季に向かい明日奈は優しい笑顔で声をかけてあげた。

「んーん、私こそ……来るのが遅くなっちゃってごめんね……？」

明日奈は前かがみの状態になり、座っている木綿季の頭に手を当てて優しく撫でた。その様子は微笑ましく、端から見れば本当に仲の良い姉妹に見えた。

「またちよくちよくお見舞いにくるから、二元気出していこうね……？」

「う……うん……！」

「それじゃあ……また来るね、木綿季！」

「うん、ホントにありがとう……明日奈……」

明日奈は最後に木綿季にニッコリ笑ってスマイルを作ると、左手でメニューを開こうとした、しかし何も出ない。不思議に思いつと今度

は右手で指をスライドさせた。今度はちゃんとメニューがでて、SAOと同じように慣れた手つきでログアウトしていった。見舞いに駆け付けてくれたメンバーは、ガラス越しに最後に「木綿季、頑張れ！」と言い残した後桐ヶ谷家以外全員退室していった。慌ただしかった無菌室は急に静かになり、メデイキュボイドと医療機器の機械音だけがその場に鳴り響いていた。翠は一步だけ前に出ると、深々と倉橋に頭を下げた。

『倉橋先生、木綿季の命を……娘の命を救ってくださって、ありがとうございます
ごぞいます……』

『いえ……、むしろ今まで助けてあげられなかった分、申し訳なく思っているぐらいで……』

翠が「そんなことは」というと倉橋は「恐縮です」とだけ答えて少し照れくさそうな、申し訳なさそうな表情をしていた。互いに妙な不毛な気持ちの譲り合いを繰り返していた。

『さて木綿季君、手術が終わったばかりでまた申し訳ないのですが……今後のことを話そうと思います。……大丈夫ですか？』

「木綿季……大丈夫か？ 何なら俺が代わりに話を聞いておくけど……」

「ううん大丈夫だよ和人……、ボクも……一緒に聞く……」

『分かりました、それではお話ししますね。木綿季君の今の体の現状を言いますと、空っぽになつた上腕の骨の中に新しい骨髓液が入っている状態にあります。これは早ければ1週間、長くて3、4週間ほどのスパンで木綿季君の体の細胞となじんでいき、生着してHIVに耐性をもった血液を作り出します』

木綿季と和人、そして翠と直葉は無言で倉橋の話を聞き続けた。説明を続ける倉橋の顔は、これまでのような深刻な表情ではなく、一つの山を越えた、一先ず安心だといった印象が窺えた。

『そして、血液がどんどん作り出されるとやがて木綿季君の体全体を循環するようになります。HIVウイルスを駆逐しながら……ですね。わずかばかりの生き残りのHIVウイルスも、残らず駆逐されていくものと思われます』

「……はい」

『HIVが駆逐されていきますと、だんだんと木綿季君の免疫力が回復していきます。免疫力がついてくるということは、感染症などに耐性が出来てくるということになります。薬の投与は今まで通り継続しているので感染症も少しずつよくなっていくでしょう』

「……………」

『そして、残りの後遺症に関しましては……やはりメデイキュボイドの体感キャンセル機能を解除してみないと、こればかりは……わかりません……』

「そうですね……」

『免疫力がついてきて薬の量が減ってくるにつれて、メデイキュボイドの高出力電磁パルスの出力も徐々に落としていきます。結論だけ言いますと、このまま首尾よくいけば終末期医療は必要なくなります。木綿季君は”助かるんです”』

「ボク……助かるの……?」

「ああそうだ、やったな……木綿季」

和人はそれだけ言うと、安心させるように笑顔を浮かべたまま木綿季を抱き締めた。毎度毎度単純な方法だがらこれが一番木綿季を安心させられるのであった。直接互いの温かさと優しさが伝わる確実なやり方だ。木綿季は和人に抱きしめられると、目を閉じて和人に体を預けた。

『私はここに残ってモニタリングを続けます。他のスタッフと交代で続けますので、絶対に誰かがここにいる状態にはしておきます。お二人とも……本当にお疲れさまでした……』

「は……はいっ、ありがとうございます！」

現状の状況を一通り説明し終わると、直葉と翠は倉橋ら医療スタッフに改めてお礼を言い、木綿季に励ましの言葉をかけた後、踵を返して家路についた。翠も仕事を途中で抜け出して病院まで駆け付けてきたのだ。未来の娘の命運を見守る為に、そしてこれから家で一緒に住むことになる娘の力になるために、母親としてやるべきことをやっていたのだ。帰り道に翠は、直葉と二人きりになると、顔に手を当てて涙を流していたという。

結果的に木綿季の手術は一応の成功という形で終わりを迎えた。しかしまだ全てが終わったわけではない。拒絶反応があるかどうか？ 移植した骨髄は生着して血液をちゃんと作り出すのか？ そしてちゃんとHIVウイルスは駆逐されていくのか？ 確率は低いものの問題はまだまだあった。

倉橋はああ言っではいるが心の底では不安を隠せない和人と木綿季であった。メデイキュボイドの中で過ごしているため、痛みなどの苦痛はないものの、直接自分の体をいじくられたとあっては、やはり今まで以上に不安が残るだろう。和人は引き続き木綿季の側にいられた。二人ともとてもALOで遊ぶ気分など出てこない。ひたすら、ただひたすら、時間の経過を静かに待っていた。

和人はたったの1秒として、木綿季の傍を離れなかった。食事もしていないので現実の和人の体が心配だが、木綿季の体に比べると全然マシであった。木綿季は何も考えないようにして和人の胸を借り、ひたすらに静寂を過ごしていた。メデイキュボイドの中にいるので、現実の自分の体が今どうなっているのかというのは外にいるスタッフにしか分からない。声をかければ教えてもらえるだろうが、今は怖くてとても話しかけられなかった。

西暦2026年4月2日木曜日 午前7:05 メディキュボイド
仮想空間 木綿季の部屋

それから時期が経って月が替わり、世間は新年度となっていた。木綿季の手術からまる二週間が経過していた。木綿季の体には特にこれといった変化は見受けられず、かといって拒絶反応が起こっているといった様子も見受けられなかった。無菌室の様子がいつも通りということもあつて大事にはなっていないようだ。

「ねえ和人……」

「何だ……？」

「ボクの体さ、今……どうなってるのかな……」

「……俺は医師じゃないからはつきりとしたことは言えないが、この前の先生の話そのまま真に受けるんだとすれば……移植した骨髄は恐らく木綿季の体に馴染んできているんじゃないかなって思うんだ」

「ボクの……体に……？」

「ああ、まだ油断は出来ないが……もしかしたら既に新しい血液が骨髓から作り出されているんじゃないかと俺は思ってる。変化が現れるとしたらそろそろじゃないかなって気がするんだ。……まああくまでも素人目線での意見だから、あてにならないけどさ……」

「……うん、そうなのかな……和人が言うなら」

「おいおい……俺の言うことを真に受けるなよ？ 俺は一般人であつて医者じゃないんだからな……？」

「うん……それは分かつてるけど、和人の言ったことなら……信じられるかなって……」

「その言葉は嬉しいけどな、あんま過信するなよ？」

「はあ〜い」

手術から時間が経ったこともあって、木綿季は以前よりも落ち着いていた。以前のような明るさと元気こそまだないものの、日常的な会話が出来るくらいまでは精神状態も安定していた。やはり……明日奈達が駆け付けて来てくれたことが大きかったのだろう。

しばらくすると和人達が見ている無菌室の様子がすこし変わってきた。ちよつとだけざわついているような気がする。その様子が気になり和人は外に声を掛けてみた、一体みんな何にざわついているんだろう？ 心なしかみんな笑ってる気がする。

「倉橋先生おはようございます……、あの……何かあったんでしょうか……？」

和人がスピーカー越しに倉橋に声を掛けると倉橋は少しだけ意外そうな顔を見せていた。自分から話し掛けるところだったのだろうか？ 和人の声掛けに応えるよう、倉橋は紙面らしきものを見ながらいつもの挨拶をカメラのレンズ越しに和人に返した。しかし何だろう、気のせいか明るい表情をしているような……、そんな様子が窺えた。

『おはようございます和人君、木綿季君。実は……二人にいい知らせがあります』

「え……？」

和人と木綿季の表情が強張った、このタイミングで先生の口からいい知らせがある……？ もしかしてという可能性を思い浮かべて、和人はゆつくりと聞いてみた。

「いい知らせって先生……もしかして……もしかして……！」

木綿季と和人は身を乗り出した、倉橋の口から出てくる次の言葉を、早く聞きたくてしようがなかった。今まで散々悲しい宣告ばかり

その口から聞いてきた、余命、後遺症のことなど……。しかし、この先に聞く言葉は……。二人が待ちに待った言葉であった。

『木綿季君の体の、HIVウイルスの数が……。減少しています』

「なッ……!?!」

和人と木綿季の二人は固まってしまった。今先生は一体なんて言った……。？ 木綿季の体のHIVが……。なんだって……。？ 和人は答えを確実なものとする為、落ち着いてもう一度倉橋に質問を投げつけた。

「先生今……。なんて言いました……。？」

倉橋は大きく息を吸い込み、深呼吸をすると改めて先ほど言った言葉を口にした。倉橋もこうなることを長年夢見てきたのだ。自分たちの無力すぎる医学がだらしなればかりに、一人のか弱い少女に実験の被験者という重たいものを背負わせてしまった。しかしそれももうすぐ終わる、勿論いい形でだ。それを意味する告知を出来ることに喜びの気持ちを隠せなかった。しかし医師は冷静でなければならぬ、喜ぶのもそうだがここはあくまで一人の医師として話を続けなくては。

『もう一度言いますね、木綿季君の体に潜伏しているHIVウイルスの数が……。減少しているんです！ 無事に骨髄から血液が作り出されているんですよ！ 拒絶反応も……。起きていないんです……。！』

その答えを聞いた瞬間、和人の頭の中を今まで歩んできた様々なことが廻りまわっていた。木綿季を絶対に治すと約束したこと、木綿季の病氣のことを調べ、治す方法を見つけ対策を講じたこと、無事にドナーを手に入れ手術までこぎつけたこと……。そしてとうとう今日、1

5年間木綿季の体を蝕んでいたHIVウイルスに打撃を与えることに成功したという達成感に包まれていた。嬉しい知らせを受けた二人は喜び合い、互いを力一杯抱き締めた。

「木綿季……!!」

「かずと……!」

よかった……よかった……助かる、木綿季が本当に助かる。崖っぷちだった木綿季の命が、風前の灯火だった木綿季の命が、虫の息だった木綿季の命が……助かる……!!

かずと……ボク助かるんだね……、生きてていいんだね……、普通のことが出るんだね……、ずっとかずとと一緒に……いられるんだね……!

抱き合っている二人はひたすら感謝した。協力してくれた仲間たちに、ドナー登録を志願して支持してくれた世界中の人たちに、長い間木綿季を支えてくれた倉橋先生に、そして……木綿季を見捨てなかった神に……深く感謝をしていた。

『木綿季君……おめでどうと言うのにはまだ少し早いかもありませんが、おめでどうございます。このままいけば完全寛解も夢ではありません……いや、もう目前と見てもいいでしょう……!!』

「先生……、倉橋……先生……ッ!」

自分の病気が治ると聞かされた途端に木綿季の目からは大粒の涙が零れ落ちた。心の底から溢れ出てくる嬉し涙であった。木綿季は今の気持ちを言葉で表したかったが、色々な想いが複雑にこみ上げ過ぎてしまい、どうしたらいいかわからなかった。和人はそんな木綿季を力強く抱き続け、病状の回復を祝福した。

「よかったな……よかったな木綿季……。本当に……よかった……、俺……諦めないで……よかったよ……!」

「うん……うん、和人ありがと……ずっと傍で応援してくれて……ホントにありがと……」

「いいんだよ……、でもあとちょっとだ、それまで……もうひと踏ん張り……頑張ろうな……!」

「う……うん! 和人が一緒にいてくれるなら……ボク……どこまでだって頑張れる……!」

『木綿季君の免疫細胞もHIVの減少に従って……少しずつ増えてきています。このままいけばこの無菌室を出られる日も……近いかもしれませんよ……! この日をどんなに待ち望んだことか……!』

木綿季、和人、倉橋の三人は大いに喜びあった。15年間続いた病気との戦いにピリオドが打たれようとしていたのである。まだ油断は出来ないが、確実に良い方向へと向かっていった。それから経過の観察は続き、順調に木綿季のHIVは消えていった、それに反比例するように免疫細胞の活動も活発になり、感染症も免疫細胞の働きと薬の投与のお陰で、確実に回復の傾向にあった。

メデイキュボイドの出力も日に日にな弱くなっていき、木綿季の体への負担も徐々に減っていった。現実の木綿季の体への変化も目に見えて見受けられた、灰色気味だった肌色が健康なピンク色へと変わっていったのだ。いまだに手足は細いままだが……、それ以外ではちよつと痩せてる細身の女の子に見えた。

少しずつよくなつていく自分の体を見ていくうちに、木綿季は少しずつ明るくなり、活発な木綿季へと戻りつつあった。和人もそんな木綿季の姿を見ていると嬉しくなり、気持ちいが舞い上がり過ぎて既に退院後のことを考え出していた。元気になったらどこへ行くかうか、何をしようか等、現実世界で遊ぶ事の話に花を咲かせていた。

西暦2026年5月26日火曜日 午前9:05 横浜港北総合病院 無菌室

「……………」

木綿季の体からHIVが減少の傾向を見せてから、2ヶ月近くが経っていた。ここ最近に差し掛かり、木綿季の体のHIV反応はもう完全に確認できないぐらいにまで駆逐されていた。免疫細胞も活発に活動を続け、患っていた感染症もほぼすべて克服していた。肌も少しずつではあるが以前より張りが出てきて、色合いも非常に健康的なピンク色となっていた。

和人はというところ最近になってちよくちよく現実世界に帰還していた。この日のために、少しずつなまった体を和人も鍛えていたのだ。そう、何を隠そう今日は木綿季がメデイキュボイドの臨床試験を終える日。つまり……無菌室から外に出られる日だったのだ。

無菌室には和人、直葉、翠、明日奈が面会に来ていた。事前に知らされていたため、学校と仕事を休んでここまで駆け付けたのだ。ちなみに直葉は高校2年になり、兄の学年を超えてしまっていた。一行はガラス張りの外ではなく、無菌室の中で木綿季の目覚めを待っていた。

普段なら菌の侵入を防ぐためにこんなことは出来ない。感染症を防ぐためにこの中にいるのに菌を持ち込まれては本末転倒、とんでもないことだ。しかし、それでも和人たちが無菌室の中にいるということとは、木綿季が回復していることを示していた。

「お兄ちゃん……木綿季、大丈夫なの……?」

直葉は心配そうな声を上げながら、和人に木綿季の容態を聞いた。経過は今までも和人から定期的に聞いていたものの、やはりメデイキュボイドに包まれた痩せ細った木綿季の姿を見ると不安感に襲われる。

以前より体付きが良くなり、色合いがピンクになっていったといっても、まだまだ木綿季の体は貧弱そのもの、これから栄養をもっと摂

取して、リハビリなどを通して体を鍛えていかなければならない。病気が治ったとて、課題はまだまだ山積みだった。

「大丈夫だ、多分な……」

「多分て……」

「大丈夫ですよ、確かに木綿季君の体は痩せ細ってしまっていますが、HIVの反応はもう確認出来ません。免疫細胞も活発になってきています。つまり、今の木綿季君は痩せ細った女の子という認識でいてもらって結構です」

倉橋が医師として木綿季の体について説明を行うと、漸く直葉に安堵の表情が浮かんだ。それに釣られる様に翠と明日奈の表情も明るくなっていった。何しろ今までが今までだ、15年も病気に侵されていて今日元気になりましたと言われても中々信憑性を感じられないのも無理はない。毎日付き添っていた和人だけは別にしてもだ。

「木綿季君、聞こえますか？」

『はい！ 先生！ 聞こえてます！』

倉橋がマイク越しに声を掛けると、スピーカーから木綿季の明るい声が聞こえてきた。手術後は暗くなってしまっていたが、体が回復に向かっていくことに比例して、木綿季自身もどんどん元気になっていったのだ。空元気などではない、希望に満ち溢れている元気一杯の良い声だ。

「わかりました、それでは始めようと思います。まずこれからメデイキュボイドの体感キャンセル機能を解除します。解除しますとそれまで感じていなかった痛みなどが戻ってくる可能性がありますので、心の準備をお願いします」

『は……はい！ 了解です!!』

『それと、今の木綿季君の身体機能がどうなっているかは……キヤン

セル機能を解除してみないとわかりません。従って、現実世界に戻つたらなんとか頑張つて……体を動かすことを意識してください。こちら側で無理だと判断したり、危険と判断した場合はすぐさまメディキュボイドを再起動します。……それでよろしいですね？」

倉橋が最後の確認を木綿季に伺うと、木綿季は一瞬固唾をのむ動作をしたあと覚悟を決めて、倉橋にOKのサインを出した。もうここまできて引き下がれない……大丈夫だ、ボクの体は和人と倉橋先生がずっと診てくれた。大丈夫、心配ない。あとはボクが……精一杯体を……動かすだけ……!!

『大丈夫です、始めてください……倉橋先生』

「分かりました、それでは始めます」

倉橋は和人たちと視線を合わせた後、軽く頷いて無菌室に入り、メディキュボイドを直接操作し始めた。カチャカチャ、ピピピというキーボードと電子パネルの機械音とウインウインとコンピュータが処理をしている電子音が無菌室内にこだましていた。それを見守っている四人は緊張していた。本来ならこの無菌室のドアが解除される時、それは無菌室の必要性がなくなったときのみだ。病気が治つただだ単に退室するときか、あるいは患者が死ぬときだけである。喜ばしいことに木綿季は無事前者での退室を実現しようとしていたのだ。

「……よし……メディキュボイド、シャットダウン。木綿季君、現実世界に帰還します」

倉橋が最後の操作を終えたことを伝えると四人に、よりかつてない程の緊張が走った。いよいよ現実世界で木綿季と対面するときがやってきたのだ。嬉しい気持ちもあったが同時に不安な点もあった、以前から懸念されていた後遺症のことだ。目に見えるのか？ 耳は聞こえるのか？ 手足は動かせるのか？ そして喋れるのか？

様々なケースを想像しているとやがてブシュー、ガコンツという音を立てて、メデイキュボイドのヘッドギア部分が木綿季から外された。それを確認した倉橋は木綿季の寝ているベッドに駆け寄り、ハキハキとした声で木綿季に声を掛けた。

「木綿季君、聞こえますか？ 聞こえていたらゆっくりでかまいません。何処か……体を動かしてみせてください」

「……………」

「木綿季……………」

和人はみんなから一步乗り出したところで、木綿季のすぐ傍で木綿季を見守っていた。何しろ三年間も寝たきりだったのだ。もしかしたら動かせないかもしれない、でもそれでも今は構わない。いまはとにかく、現実世界での木綿季の反応が欲しい。和人を含む一行が無言で木綿季を見守っていると、現実の木綿季の肉体に僅かながらの変化が見られた。

（倉橋先生の声が聞こえる……、どこか……どこか体を動かさなきゃ……、どこでもいい……どこか……！）

「……………」

聴覚が無事機能していた木綿季は、必死にまず唇を動かした。まだ手足には思った様に力が入らない、ならばと思い、負荷が少ない口へと、筋肉に脳から指令を与え、必死に動かし続けた。その動きの変化に真っ先に気付いたのは明日奈であった。

「!! ……キリト君！ 今木綿季の…………!!」

「あ、ああ……唇が動いた…………！ 木綿季に意識はあるぞ！ 耳も聞こえている…………!!」

（…………和人と明日奈が喜んでる、ボクが唇を動かしたことに気付いてくれたんだ、やった…………嬉しいな…………）

和人たちは木綿季に意識があることにまずは安堵の気持ちを抱いていた。よかった、聴覚は生きている！ 声こそ細すぎて聞こえないが必死に唇を動かしている様子が見て取れた。まずは第一段階通過と言ったところで少しだけ前に進めた事を感じていた。

「木綿季、俺だ！ 和人だ！ わかるか……!?」

和人は優しく声を掛けながら木綿季の左手を握った。木綿季の細い体が壊れないように、優しい力を込めて、何より木綿季が和人の温かさを感じてくれるように。頼む木綿季、仮想世界でやってくれたように、俺の手を握り返してくれ……!」

（あ……和人だ……、この手の温かさは……和人だ！ 和人がボクの手を握ってくれてる！ 嬉しい……、う……動かさなくちや、手を……なんとか動かさなくちや……! かずと……かずと……!）

……ピク……。

「!! 木綿季……今指が……! 俺の手がわかるんだな!? 力が入れられてるんだな……!!」

（うん……わかるよかずと……! かずとの温かさと……優しさが……ボクの手伝わってきたよ……!）

木綿季の手は震えていたが少しだけ、ほんの少しだけ、和人の手を握り返すことに成功した。手は生きていた。確認はしていないが多分足も動くだろう。しかし問題はいいよ次だ、次に確認するものが……今までで最も重要となる。

和人は深呼吸をした、自身の体を震わせながらも緊張しないようにリラックスしようとしていた。少しだけ落ち着きを取り戻すと、和人は再び木綿季の隣でしゃがみこみ、木綿季に優しく語りかけた。

「木綿季……ゆっくりでいい……、目を……開けてみせてくれ……」
（目……、今のボクに……見えるのかな……、いや……やってみなきやわからない。ボク……和人の顔が見たい……、一番最初に……大好きな和人の顔が……見たい!!）」

木綿季は和人の手を弱々しく握り返しながら、瞼に力を入れて、必死に眼輪筋を動かそうとしていた。瞼が上下に少しピクピク震えながらも、一生懸命に瞼を開けようと頑張っていた。そんな頑張りを認める木綿季に、和人と明日奈が声援を送り続けた。

「そうだ！ ゆっくりでいい！ 頑張れ……！ 木綿季！」

「頑張つて！ 木綿季……!!」

（うん……ありがとう和人、明日奈……、ボク……頑張るよ、がんばる……!!）」

木綿季の瞳は非常にゆっくり、ゆっくりだが確実に少しずつ上に上昇していった。そして全体の四分の一ほど開いたところで勢いに乗ったのか、そのままぱっちり目を開けることに成功した。しかし全開まで開いたと思ったら、すぐ木綿季は目を閉じてしまった。

（うつ……）

「ゆ、木綿季……どうしたんだ？ やっぱり……つらいのか……？」

「ま、まさかやっぱり……後遺症で見えていないんじゃない……」

「そ、そんな……」

和人、直葉、明日奈の三人はこの現状に動揺していたが、翠だけは落ち着いて木綿季を観察していた。そしてじっくりと木綿季を見つめていた翠は気付いた。木綿季は見えてなかったから瞳を閉じたんじゃないということに。

「いいえ……見えてるわ……木綿季ちゃんは……」

「えっ……っ？」

その発言を聞いた全員が翠の方を見た、一行の顔には「どういうこと？」と言いたげな表情をうかべていた。何故翠は見えていると判断したのだろうか、自分たちが気付かなかったところに気付いたとでも言うのだろうか？

「和人、このアプリを使って木綿季ちゃん顔にディスプレイを向けてみなさい」

翠はそういうと、和人に自身のスマホを手渡し、とあるアプリを起動するように指示した。和人は頭に？マークを浮かべ、訳が分からなまま翠の指示に従い、言われるがままそのアプリのアイコンをタップして起動した。翠は木綿季のベッドにかけより、屈みこんで木綿季に優しく声を掛けた。

「木綿季ちゃんお願い、もう一度……もう一度だけ……目を開けてくれないかしら……っ？」

（この声は……お母さんだ、ボクに家族の温もりを思い出させてくれたお母さんだ……！ ……でも正直もう一回目を開けるのが怖い……、さつきは……真っ暗じゃなかったけど何も見えなかった。真っ白で何も……）

「木綿季……、頼む……もう少しだけ……頑張ってくれないか？」

（……和人……わかった、ボク……もうちよつとだけ頑張る！ 和人の顔を……見るために……！）

木綿季は見えるか見えないかぐらいの反応で頷き、翠と和人に対して返事をした。そしてもう一回頑張っておそろる瞼を開いた。瞼を開いた木綿季の目の前には先ほど翠から指示されたアプリを起動させたスマホの画面が迫っていた。災害時に暗闇などで役に立つ、画面が真っ白に光り輝く機能を持ったアプリだった。

そして木綿季は目を開いた瞬間、思わず目を閉じ視線を逸らすような仕草をした。

(わっ!? な……………何今の……………!? さっきよりも白くて……………目が……ちよつと痛い、……………あれ? 痛いって……………何で痛いんだろ……………)

「!!」

「木綿季今……………もしかして……………?」

「木綿季……………君……………?」

「今、ひよつとして眩しがった……………?」

倉橋を含む全員が木綿季の仕草に動揺すると、木綿季はもう一度目を開こうと眼輪筋に力を込めた。ほぼ三年間も閉じっぱなしだった瞳を、ゆつくりとまた、開こうとしていた。

木綿季は瞳をとうとう完全に開いた、瞼はプルプル震えているが今度のはつきりと閉じずに、ゆつくりではあるが瞬きも出来ていた。そして少しずつ首から上を動かし、無菌室のあちらこちらに視線を泳がせた。壁の模様、点滴、自身の寝ているベッド、灯りなど、様々なものをその視界にとらえているようだった。そして…震える体で首を和人の方に向け、視線を和人に合わせた。

(……………あれ……………なんだろう、白いけど……………今度は形がぼんやりとだけどわかる……………)

「木綿季、俺が分かるか? 俺が見えるか……………? 和人だ、桐ヶ谷和人

だ! お前の恋人の……………和人だ!!」

(あ……………れ……………かずと? この目の前に……………浮かび上がってるのは……………かずとなの……………? ボク……………見えているの……………?)

和人は木綿季の手を握りしめながら大切な人の名前を呼んだ。木

綿季の視線は完璧に和人の視線と重なっていた。まだ瞼がプルプルと震えているが、一生懸命に和人を視界に捉えようとしていた。

(あ……、かずと……？ かずとだ……、ボクの大好きな……かずとだ……！ 見える……見えるよかずと！ まだぼんやりとだけど……かずとの顔が見えるよ……！)

木綿季の視力は生きていた、サイトメガロウイルスに感染して失明したかと思われたが、無事に恋人の和人を視界に捉えることに成功していた。しかし和人たちはこのままでは本当に見えているかがわからない。木綿季はそれを伝えるために、また必死に唇を動かそうとした。

「ツ……ツ……ツ……」

(か……ず……と……)

木綿季は何かを言葉で伝えようとしていた。三年ぶりに現実世界で声を出そうとしていた。自分の意思を伝えるにはやはり言葉で直接伝えるのが一番だ。しかし、木綿季の声帯が生きているかどうかはまだわからない。それでも木綿季は唇に、喉に、胸に肺に力を込めて、愛する人に声を聞かせようと頑張った。

「木綿季……何だ……？ 何か……言いたいな……？ ならゆつくりでいい、言ってごらん……」

木綿季は必死に体を震わせながら、喉に力を込めた。ただ一言、あの言葉を言いたい。一番最初に大好きな君の名前を口ずさみたい、掛け替えのない……和人の名前を……！

「あ……う……お……」

(かずと……伝わって……！)

「!!」

耳を澄ませないとよく聞こえないぐらい小さい声だったが、木綿季の口から少しだけ声が出ていた。木綿季の声帯は……生きていた。およそこちらも三年ぶりに声を出すことに成功したのだ。

「木綿季……喋れるんだな！ ならゆっくりでいい！ 俺はここで待ってる……、だから……伝えたいことがあるなら……言ってくれ……！」
（うん……、まっててね……かずと、もうちよつとだけがんばるから……！）

和人は木綿季の手を握りしめながら、木綿季の喉から声が出るのを待った、待ち続けた。木綿季は和人に手を握られながら、もう一度力を振り絞って、大好きな人の名前を呼ぼうとしていた。その様子をすぐ後ろで明日奈、直葉、翠、倉橋の四人が固唾を飲んで見守り続けていた。

「か……う……お……」

（とどいて……）

「——ッ!!」

「か……う……と……」

（おねがい……とどいて……!）

「頑張れ……!! 木綿季……頑張れ!!」

和人は涙を流しながら木綿季の手を握りしめ、ひたすらに木綿季の言葉に耳を傾けていた。そうだ、ゆっくりでいい……言っただらん……木綿季……。

「か……ず……」

（あと……すこし……）

「か……ず……お……」

(かずと……！ かずと……！)

「か……、か……ず……ッ」

(届いて……ボクの……気持ち……！)

「か……ず……と……」

その声を聴いた瞬間、和人はこみ上げてくる感情を抑えられずに、大粒の涙を流した。現実世界で初めて聞く木綿季の声だ……。木綿季が俺の名前を……呼んでくれた……。

「木綿季……！ああ……俺だ！ 和人だ!!」

「かず……と……、ボク……ね、見えて……るよ……」

「木綿季……、見えるのか？ 見えてるんだな……!?!」

「う……ん、かずとの……かおが……みえ……てる……よ……」

木綿季は途切れ途切れで弱々しいながらも、一声一声を繋ぐようにして、言葉にして一生懸命に和人に伝えた。

「木綿季……ああ……木綿季……ッ!!」

和人は感情の高ぶりを抑えることが出来ず、ひたすらに涙を流した。本当なら力の限り木綿季を抱き締めたかったが、筋力が弱り切ってしまった木綿季にそんなことをしてしまったら、怪我をさせてしまいかねない。なので和人はただひたすらに、木綿季の手を優しく両手で包み込んでいた。

和人が木綿季の手を握っていると、震える手を一生懸命動かして何故か木綿季の方から和人から手を離れた。するりと自分の手から離れていった木綿季の手を見ながら、和人は心配そうな表情で木綿季を

見つめていた。あまり無茶出来ない体なのに何をしようというのだろうか？

「木綿季……何を……？」

木綿季は和人から手を離すと、左腕を必死に動かし、体全体を震わせながら自身の前方に手を伸ばした。腕が重力に負けないようにその姿勢をキープし続け、指にも一生懸命に力を込めた。そして、いつもALLOで自身が決めているあのポーズを……取ってみせた。

「……………」

第37話く日常へ向けてく

西暦2026年5月26日火曜日 午前9:15 横浜港北総合病院 無菌室

この日、木綿季の寝ている無菌室に桐ヶ谷家と明日奈が集まっていた。

今日は木綿季を知るものにとって待ちに待った日だ。

十日程前に木綿季の体に流れる新しい血液が体内のHIVを全て駆逐した可能性が浮上してきた。

その日からの時間はほぼ全て木綿季の体の検査に費やされ、体の隅々までチェックされた。

何度血液検査をしてもHIVの残党は検出されず、99%以上の高い確率で完全寛解したという結論に至ったのだ。

即ち：今日は無菌室からついに出来る日であった。

メイキユボイドの出力を完全に落とし、体感キヤンセル機能を解除。

そしてメイキユボイドがシャットダウンされると、木綿季は三年ぶりに現実世界に完全帰還した。

和人たちが懸念していた後遺症の心配もなく、手も動き、耳も聞こえ、目も光を感じていた。

そして目覚めてからの初めて放った言葉は、これまで木綿季を誰よりも近くで支えてくれた、一緒に頑張り共に生死を乗り越えてくれた、愛する和人の名前であった。

それは言葉と呼ぶのにはあまりにも途切れ途切れであったが、一声声を繋ぐように必死に声を出し、和人に伝えた。

和人はその行動を一番木綿季に近いところで見ることが出来た、感じる事が出来た。

木綿季が生きてる、仮想世界じゃなく現実の世界でしっかり生きている。

これからたくさん一緒に思い出を作っていける、そう思うと：目か

ら涙が止まらなかった。

そして木綿季は勝負事に勝った時に必ずやっていたあのポーズを現実世界でも再現した。

震える左手を頑張って動かしながら、和人の目の前まで持つていき、勝利のVサインをやってみせたのだ。

ボク：勝ったよ。15年もかかっちゃったけど…病気に勝ったよ。

和人は思わず木綿季の手を握りしめた。

せっかく作ったVサインを崩さないように、人差し指と中指だけ避けて木綿季の左手を握りしめた。

「木綿季…木綿季…ッ！」

和人は木綿季の名前を何度も呼びながら涙を流した。心の底からこみ上げてくるものが多すぎた。

木綿季になんと声をかけてやったらいいかわからなかった。

とにかく嬉しい、木綿季が戻ってきてくれたこと、病気が治ったこと、

そして自分の名前を最初に呼んでくれたのが何より嬉しかった。

涙を流していたのは和人だけではなかった、母親の翠、妹の直葉、親友の明日奈。

そして木綿季を幼いころから見てきた主治医の倉橋も大粒の涙を流していた。

「木綿季ちゃん…頑張ったわね…」

翠もそう言いながら木綿季の右手を優しく握り、木綿季の頑張りを祝福した。自分の三人目の子供の命が助かったことに、心から安堵していた。

そしてこれから桐ヶ谷家に新しい風が吹くことに、これから忙しくなるなど大変ながらも嬉しい生活を期待していた。

「お……か……あ……さ……ん……」

木綿季は声を振り絞りながら翠を呼んだ。その声を聴いて翠は更に涙を流した。

翠は左手で口元を押さえ、右手で木綿季の手を握りながら泣いていた。

妹の直葉も木綿季の傍に寄り自分の顔を木綿季の顔に近付け、優しく話しかけた。

「木綿季……分かる……？ 直葉だよ……？」

直葉は瞳に涙を浮かべながら、優しく笑顔を作りながら木綿季に声を掛ける。

仮想空間で自分の名前を呼んでくれたように、現実世界でも呼んでほしいと思いつつながら。

「……す……ぐ……は……」

その言葉を聞いて、直葉にさらに笑顔がこぼれる。

「うん……直葉だよ……！ 木綿季の……お姉ちゃんだよ……！」

「お……ね……ちゃ……ん……」

自分のことをお姉ちゃんと呼ばれた瞬間、直葉の瞳にも涙が浮かんで来たが、直葉は涙を片っ端から拭いた。

これからお姉ちゃんとして、立派な姿を妹に見せていかなければならないと思っていた直葉は、こんな姿を決して木綿季には見せたくないと思っていた。

木綿季の前では、強くて頼もしいお姉ちゃんのように決めていたからだ。

そして、最後に明日奈が木綿季の傍に近寄った。

数ヶ月前、初めてメデイキュボイドを身に纏っていた木綿季と会った時、その残酷な現実には打ちひしがれた。

逆に木綿季から泣かないでと言われたぐらいだった。

でも…今は…その病気を治した木綿季と…現実で顔を合わせられていた。

色々なものがこみ上げてくる、木綿季になんて声を掛けよう…、明日奈は気の利いた言葉が思い浮かばなかった。

明日奈も和人と同じぐらい木綿季と思いがあがる。和人が恋人になるまでは木綿季と一番近い距離にいたのは明日奈だった。

そのこともあり、明日奈は木綿季に和人と同じぐらい思い入れが…情があつたのだ。

「木綿季…よかった…よかったよ…」

明日奈は優しく木綿季の肩を抱いた。木綿季の体を壊してしまわないように優しく包み込むように手をかけた。

どうしよう、いっぱい言いたいことが…伝えたいことが…話したいことがありすぎて…何て言ったらわからないよ…。

「…あ……すな…」

木綿季は先ほどとまでと違って、はつきりとした声で明日奈の声を呼んだ。

まだ弱々しいが…先ほどより全然声が出せていた。

「木綿季…ッ」

「あ…り…がと…きて…く…れ…て…うれ…し…い…な…」

明日奈はその言葉を聞くと、顔をめいっぱい木綿季に近付けた。鼻と鼻の先がくつつきそうなぐらいな距離まで。

親友の体温を肌で感じながら一番近い場所で語り掛けた。

「当たり前じゃない…！ 私たち…親友でしょ…！」

「う…ん…しん…ゆう…だ…よ…」

木綿季の目にも涙が浮かんでいた。

やっと現実に戻れたんだ、みんなと一緒にになれるんだ、今まで出来なかったことがたくさん出来るんだ。

そう思うと…木綿季からも胸からこみ上げてくるものがあつた。

「…ボ…ク…かつ…たん…だ…ね…？」

木綿季の間には和人が答えた。明日奈に負けないぐらい木綿季に顔を近づけて。

その関係で三人の顔が非常に近くなっていて直葉、翠、倉橋からは木綿季の顔が見えなくなってしまうていた。

「ああ…木綿季はAIDSに…HIVに勝ったんだ…！ もう…苦し
い思いをしなくて済むんだ…！」

その言葉を聞いて、ようやく自分の病気が治ったんだという現実味を感じてきた木綿季は、心から安心したのか目を閉じてしまった。その様子を見た和人は驚き焦り、慌てて木綿季の手を取り声を掛けた。

「…木綿季!? どうした! 大丈夫か!」

木綿季は和人に声を掛けられると再びゆっくりと瞳を開いて、自分のペースで言葉を発していった。

「う…ん…へい…き…だよ…。…た…だ…あん…し…ん…した…ら、
ねむ…く…なっ…て…きちや…った…」

その言葉を聞いてその場にいる全員が、ほつと胸をなでおろした。何せ状況が状況だ、病気が治ったとはいえ木綿季の体は貧弱そのもの。何かの拍子にどこか遠くへ行ってしまうんじゃないかという錯覚に見舞われてしまっていた。

「…なんだ…そんなことか…驚かせやがって…」

和人は大きく息を吐いて安堵の表情を浮かべた。それと同時にコイツめ、といった感情も顔に表れていた。

「ごめ…んね…、ちよ…つと…だけ…やすん…でも…いい…か…な…？」

木綿季の休んでもいいかな？という問いに、和人は柔らかい表情を見せ、手を取りながら優しく答えた。

「ああ…15年も闘ってきたんだ…今日ぐらい休んでもいいさ。…
ゆっくりお休み…木綿季…」

その答えを聞いた木綿季に少しだけ笑顔が浮かんだ、現実世界に戻ってから木綿季が二度目の笑顔を見せた。

よく見てみないと分からないが口元が少しだけUの字になっており、笑っているとは言えないかもしれないが木綿季にとっては今出来る精一杯の笑顔だった。

リハビリを重ね体力をつければ、仮想世界で見せてくれた満面の笑みを現実世界でも見せてくれることだろう。

「あり…がと…それ…じゃあ…すこ…し…やすむ…ね…。おや…す…み…かず…と…」

木綿季はそう言つて、ゆつくりと瞳を閉じてやがて寢息を立て始めた。

すう…すう…と女の子らしい可愛い寢息を立てていた。

和人はそんな木綿季の寝顔を見つめながら、頭に手を当て優しく撫でた。

「ああ…お休みな…木綿季…」

他の四人もその光景を微笑ましく見守っていた。

今までは横たわる木綿季に対し、心配や不安といった気持ちしか浮かばなかったが今は違う。

心の底から安心出来る。むしろこれからたくさん木綿季と過ごしていけると思うと、胸が高鳴る想いがしてきた。

無菌室がほんわかした空気に包まれていると、倉橋がオホンツとわざとらしくせき込み、今後のことを話し出した。

「みなさん…改めて一人の医師として…そして長年傍で木綿季君を見てきた一人の人間として…お礼を言わせてください。本当に…本当に木綿季君を支えてくださって…ありがとうございます…！」

倉橋は様々な思いを巡らせながら、和人たちに深々と頭を下げ感謝の言葉を口にした。

「いえ…お礼を言いたいの…俺たちの方ですよ…、先生がいなかったら…木綿季は助からなかった…。本当に…ありがとうございます…」

和人が倉橋に頭を下げると残りの三人も和人に続くように倉橋に對して頭を下げた。

本場に木綿季の周りにはいい人が集まる。これも木綿季の人柄ゆえなのか。

木綿季の持ち前の明るさは自然と周りの人間も幸せにさせる力があつたのだ。

「それで…これからのことなのですが、木綿季君はもう無菌室にいる必要がなくなりました。従つて今日から普通の病棟に移り、少しずつリハビリを重ねて体を以前の元気な状態に戻してもらいます。食事も最初は流動食か半流動食から再開し、やがては普通の食事を重ね、体力を回復していつてもらいます」

食事…、三年間点滴だけで栄養を取り入れていた木綿季が…食事が出来る…！

そのことを考えた和人は、以前から思っていたとある提案を倉橋に持ち掛けた。

「先生…一ついいですか？」

「何でしょう？ 和人君」

「木綿季の食事の件なのですが…俺に作らせてもらうことは…可能ですか…？」

倉橋は顔をキョトンとさせて和人を見ていた、他の三人も和人に作れるのか？という表情で見つめていた。

「え…と…それは難しいですね…、基本的に病院の食事は栄養士の指示のもと作られていますから…私の判断だけでは決めかねますね…」

流石にこればかりは倉橋の独断で決めることは出来なかった。しかしどうしても和人はしつこく倉橋に食い下がった。

「先生、お願いします！ 俺は…木綿季に食事を作ってやるって約束したんです…お願いします!!」

和人は頑なに方向を曲げず、倉橋に深々と頭を下げ続けた。

その様子を見ていた倉橋は困り果てていたが、和人の真剣な態度と木綿季への想いに折れ、仕方ないなといった表情を見せた。

「わかりました…、ただし私だけの判断で決められないのには変わりありません。栄養士の方に相談を持ち掛けてみます。ただし…断られる可能性もあるのでそのつもりでいてくださいね？」

その言葉を聞いた和人に思わず笑顔がこぼれた。やった…木綿季に俺の食事を食べてもらえる…。

まだ可能性の話でしかないが和人は嬉しかった。

「あ…ありがとうございます！ 倉橋先生…！」

倉橋は笑顔で「いえいえ」と答えた。そして木綿季を通常の病室に移すためにその場にいる全員に一旦の退室をお願いした。

全員が無菌室から退室すると、倉橋は看護師とともに木綿季の寝ているベッドのキャスターのロックを外し、数人がかりで木綿季のベッドを動かした。

やがて無菌室から木綿季のベッドが外に出された。三年ぶりに…木綿季が無菌室の外へと出たのだ。

寝ている本人にわかるだろうか…、わかるとしたら…寝ながらも感じる事が出来る空気の感触…ぐらいだろうか…。

ベッドが運ばれていくと、残った何人かの医療スタッフが無菌室の

後処理を始めていた。

無菌室は無菌でなければ意味がない、俺たち一般人が入り込んでしまったのだから何らかの菌も侵入しているのだろう。

再び無菌にするための処理が既に始められていた。和人はその光景を見ながら三年間木綿季を守ってくれてありがとう。

そんな気持ちを込めて目の前の無菌室とメデイキュボイドに対して無言で礼をした。

メデイキュボイドに対して礼をするということは、茅場昌彦に対して頭を下げているみたいで少し引つかかる部分もあったが、和人はこの際気にしないことにした。

長い時間頭を下げていると直葉が和人に声を掛けた。

「お兄ちゃんおいてくよー!」

その言葉でハツとなった和人は直葉の方を振り向き「いまいこよー」と言い放ち、すぐさま直葉のあとを追いかけた。

その途中で振り返り、少しだけメデイキュボイドのあった部屋を名残惜しそうにしながら…。

「……………ん…? ……ら辺…見覚えがあるぞ…?」

和人は直葉達から一步遅れて木綿季のベッドを追いかけた。以前倉橋に病棟では走ってはいけないと注意されたことがあったため、急いで追いかけていたが走ってはいなかった。

「あれ…? あの部屋…もしかして…」

見覚えがあつた、先々月…俺はこの部屋に世話になつたことがある…。

…そうだ…俺が過労で倒れて入院していた部屋だ…。

木綿季の病室はここに移るのか…なんだか…不思議な気分だな…。

和人が妙な運命だなと思いつながらベッドについていくとやがて病室の入り口に吸い込まれていった。

少し小走りになって追いかけて、部屋の中に入ると和人が寝ていた場所と同じ位置関係で、木綿季のベッドが設置された。

この部屋は大変に窓からの景色がいい部屋であつた。病院の駐車場の下や中庭を見渡せる絶景ポイントでもあつた。屋上に登ればさらにはいい景色が見られることだろう。

「ここって…お兄ちゃんが入院してた部屋…だよな？」

直葉が部屋の中を見渡しながら和人に聞いていた。なんという偶然なのだろうと直葉もきつと思つてるのだろう。

「まあ…そうだな…ちよつと妙な気分だ」

程なくして入室のための準備が全て終わった。木綿季の腕には引き続き点滴が刺されていた。

看護師たちは先に退室し、倉橋から今後の木綿季の入院生活について説明された。

「さて…もう一度今後のことについてご説明します。結論だけ言いますと…木綿季君が社会復帰することは十分に可能です。まずは適切な食事を取り、栄養を摂取して体中にエネルギーを巡らせます。そして運動能力を取り戻すためにリハビリも勿論行なつていきます」

和人達は真剣に倉橋の話聞いていた、

今後の頑張りによつて木綿季の日常への復帰が早いかどうか決まる。木綿季本人は勿論早く退院したいだろうし俺たちだつてそうだ。

あの時はこっぴどく言えなかったが…、俺は木綿季と暮らしたい。

何なら…一緒に部屋だって構わない。木綿季が傍にいてくれさえすれば…。

「リハビリは段階をふんで少しずつ内容を増やしていきます。最初は作業療法士のスタッフに付き添ってもらい、簡単な動作から始めます。木綿季君は若いですから…筋力などが戻るのにそこまで長期的な時間はかからないと思います」

そうか…俺は直接手伝うことは出来ないのか…そりゃあそうか。素人にまかせて怪我でもさせたら…たまったもんじやないからな。第一木綿季に怪我をさせるとか死んでも嫌だ。

「分かりました。結構入院生活の内容はシンプルなんですね」

「ええ、あとは木綿季君がどれだけ頑張るか…ただけですからね。病気も再発の危険性がゼロだとは言いませんが…長いスパンで見ても再発の可能性は極めて低いと言えます。勿論退院後も通院はしてもらいますが…いずれその必要もなくなるでしょう」

その言葉を聞いて安堵した。何かの間違いでも起きない限り…木綿季の今後は安心していいみたいだ…。

…しかし…一方で気になることがあるのも事実だった。和人はその心に引っかけたことを倉橋に問いただした。

「先生…一番喜んでた俺が言うのもなんですが…何故木綿季は…」見えていた”のでしょうか…?」

倉橋の表情が曇った。なんだ…何か言いたくない理由でもあるのか…それとも本当にわからなかったのか…?

「先生…？」

「和人君…木綿季君は半年前に一度…検査のために現実世界に帰還してた時があつたんですよ」

「ええ…本人から聞きました…。その時に…自分の目が光を失っていたことも…」

「…そうでしたか…当時の木綿季君は…サイトメガロウイルス感染症の症状が出ていました。視力の減少…或いは失明…。本人が真っ暗といっていたので…当時は認めたくありませんでしたが…私は失明したと思っていたのでしよう。しかし実際はそうではなかった…」

倉橋と和人は顎に指を当てて考え込んだ。その様はまるで難事件を解決しようとしている名探偵のような出で立ちを見せていた。

「…サイトメガロウイルスに感染していたのは事実なんですか？」

「ええ…間違いありません。発見と薬の投与が早かったのです…すぐに症状を抑えたと思つてたのですが…木綿季君が見えないと言つたので…手遅れだと思つてたのです」

「んじゃあ…何で今になって木綿季の視覚は…回復したんでしょうか…」

二人は考え込んだ、視力が戻った可能性を片っ端から思い浮かべていた。

すると和人にはピンと閃いたことがあつたようでそのことを倉橋に伝えてみた。

「……先生、もしかして……木綿季の視力は回復したんじゃないやなくて……失つていなかった」というのは考えられませんか？」

「……偶然ですね……私もその可能性を思い浮かべてました」

考えが一致した二人はお互いの視線を合わせると、木綿季の寝顔を一度見て、再び視線を合わせた。

「……サイトメガロウイルスによる症状が出ていなかった場合……その時木綿季の視界に影響したのは……別の要素だったのかもしれないよ？」

「……そうですね……私もそう考えています。実際サイトメガロウイルスに感染した発見の早かった患者さんは、薬の投与で視力の低下こそあっても失明したという報告はあがってませんでしたから……」

「他の人は大丈夫だったんですか……。すると……木綿季だけに起こったとして……その場合……もしかして……」

和人の疑念が確信に変わった。木綿季だけに影響を及ぼした要素と言ったら……もうあれしかないじゃないか。

「メデイキュボイド……！」

「メデイキュボイド……ッ」

二人は同時に言葉を発した。あまりのシンクロっぷりに直葉と翠は目を丸くしていた。

「恐らく……ナーヴギアやアミスフィアと比べて何倍も強い高出力電磁パルスが……木綿季の脳波を通じて五感に何らかの影響を与えていたのではないのでしょうか……？」

「…私もそう考えました。実際…高出力電磁パルスが人体に及ぼす影響は…未知数でしたから…」

メデイキュボイドの所為だったという確たる証拠はない…、しかし木綿季の視力を奪った可能性と挙げられるのはサイトメガロウイルスを除くともうメデイキュボイドしか考えられなかった。

…思い返せば今回木綿季が現実に帰還した後、周囲の様子がしつかり見えていたのは…メデイキュボイドの出力を日に日に弱くしていったからなんだと思う。

…というか思い浮かぶのかももうそうとしか考えられない。

「…お手柄だと言ってしまえば嫌な言い方になりますが…木綿季君はこの医学界に大きな貢献をしてくれたと言っても過言ではないと思います。私は…医学界に関わる人間の代表として、木綿季君が一日でも早く社会復帰出来るよう全力で協力させていただきます」

「はい…よろしくお願いします。俺も…可能な限り木綿季の近くで彼女を支えます」

「そうしてあげてください、それでは私はそろそろ失礼しますね…」

長い考察が終わると書類をまとめ、倉橋は部屋の扉に手を賭けた。

「今日、木綿季君が食事をとるかどうかは…本人の体調を考慮して栄養士と話し合って決めようと思います。出来ればすぐに食事を取ってほしいところですが…こればかりはその時になってみないと…ね？」

倉橋は扉をスライドさせ、部屋の外に自分の体を出すと再びこちら

を振り向き「木綿季君のことよろしく願いますね」と言い残し、仕事に戻っていった。

部屋には桐ヶ谷家と明日奈の四人が残り、みんなで木綿季の寝顔を眺めていた。

「可愛いわね…木綿季ちゃん」

「ホントにね…大きくなったら美人さんになるんじゃないかな？」

木綿季の体は三年間寝たきりの状態にあった。

そのお陰で体中がやせ細っており、肌から骨の形がはつきりとわかる部分もあった。

…よくこんな体で…今まで頑張ってこれたもんだ…。

「っていうか…キリト君…さっきのキリト君…なんだかキリト君じゃなかったみたいだったよ？」

和人が「え？」と聞き返すと直葉も同じ意見を言ってきた。

「ホントだよ！ 倉橋先生と一緒に難しいコトずっと考えてて…はたから見たらマンガとかでよく見る名探偵とその助手みたいに見えるだよ！」

「さしずめ…シャーロック・ホームズとワトソン君…と言ったところかしらね？」

「私には何を話してるんだか半分も理解できなかったよ…キリト君…かなり木綿季の病気のこと…勉強したんだね…」

「人並みには…な、それとメデイキュボイドの影響って言ったって…」

証拠がない。でも…証拠がなくても…あれしか考えられなかった、だからそう結論づけただけだよ」

和人の長つたらしいセリフを聞いてた直葉は頭を抱えだした。

「ごめんお兄ちゃん…あたし頭痛くなってきたよ…もつと難しくない話にしてよ…」

「え…んじゃあ…そうだな…木綿季の食事の事とか…考えるか…？」

そう、木綿季はこれから食事で栄養を賄っていかなければならぬ。

今現在も点滴のお世話になっているがいずれこれも卒業する時が来る。

点滴でも栄養は摂取できるが…食事の方がメリットは大きい。食べる動作をすることによって脳や体が刺激されて体の活動も活発になるのだ。

だから木綿季には出来るだけ早い段階で食事が出るようになってもらいたいのだが…。

「…胃とか腸とかの内臓も…弱ってるんだろうな…何作ってあげたらいいんだろうか…」

「そればかりは…栄養士さんの言うことを聞くしかないんじゃないかな…」

「…だよなあ…激辛カレーとか…食べさせてやりたいんだけど…」

「絶対ダメ!!」

「絶対ダメ!!」

「絶対ダメ!!」

三人の総ツツコミを喰らった和人は目を丸くして驚いた。辛い物のどこが悪いんだ、辛い物はいいぞう。体中に刺激を与えてくれる。真っ赤にしてくれる。熱くしてくれる。あんな素晴らしい味はそうそうないぞう。

「誰もがお兄ちゃんみたいにおかしな味覚持つてると思わないで!!
第一そんな刺激的な食べ物をも綿季の胃にぶち込む気なの!？」

「え…俺…味覚…おかしいのか…？」

「え…キリト君今更…？」

「確かに和人がご飯を食べるときはスパイス系の調味料の減りが早い
わよねえ」

「……………」

和人は病室の隅っこで蹲って落ち込んでしまった。

「…どうせ俺は味覚音痴ですよ…」

ちよつとかわいそうだと思つた三人だったが、断じて和人の味覚による被害をこちら側に出させるわけにはいかない。そう硬い意思が感じられた。

しばらくして時間も経ち、話すこともなくなった明日奈たちは帰り支度を始めた。

「キリト君、私…そろそろ帰るね。木綿季も大丈夫そうだし…そろそろ学校休みすぎると…流石にまずいから…」

「あ…そうだよな…ごめん、付き合ってもらっちゃって」

「何言ってるの、木綿季は私にとっても大切な友達なんですからね！」

「私にとっては妹だよ！」

「私にとっては大事な三人目の子供だわ！」

何なんだこの女性陣は…まるで各々が木綿季の所有権を主張して
みたいを感じる。

恋人である俺の所有権は無視だというのか、それは断じて許せん。
それがたとえ明日奈たちであつてもだ。

「木綿季の恋人は俺だぞ！」

和人は木綿季の前に仁王立ちの体制になり負けじと自分が一番の
所有権を所持していると主張した。

「じゃあもう結婚しちゃいなさいよ…お兄ちゃん…」

「うっ…そ…それは…だな…」

一番言われたくないワードを言われ、和人は赤面し俯いてしまっ
た。

実際本人は結婚するということに関してはやぶさかではないのだ
が、どうしてもその先のことが考えられずに意思を決められないでい
た。まだ17歳なのだから仕方のないことだが。

「それに関しては…木綿季と相談する！ この話はおしまい!! 終了
!!」

「相談するってことは…前向きに検討するってことなのね…!? 今日はお赤飯炊かなくちゃ…」

和人の顔はもう真っ赤で沸騰寸前だ。

何でだ？ 何で俺の周りの女性陣は俺をからかうのがこんなに好きなんだ？

いじりやすいのか…？ それとも俺に女難の相でも出てるのか…？

「これ以上いじるのもかわいそうだし、私たちも帰りますか」

「そうしましょうか」

和人を思う存分楽しくいじくった三人はパイプ椅子から腰を上げた。

一個ずつ丁寧に並べて片付けて、今にも沸騰しそうな和人と静かに眠る木綿季を尻目に、そそくさと退室していった。

「じゃあ和人…私たちは帰るけど…何かあったら連絡しなさい？ 力になるからね」

さんざん人を楽しくからかって、翠の心の底はちゃんと優しい母親であった。

今後も数えきれないぐらい頼ることになるだろう。絶対にいつか親孝行しないと…。

「ああ…ありがとう母さん…」

「じゃあね、キリト君。また来るからね」

「またねー、お兄ちゃん」

別れの挨拶を済ませた三人は扉をゆつくりとスライドさせて、カタンという音を立てて病室の扉を閉めた。

部屋には寝ている木綿季と項垂れている和人だけになり、静寂が部屋の中に流れた。

「はあ…なんか…すげえ疲れた…」

肉体的には疲れてなかったが、精神的に疲れ果ててがつくりと項垂れてしまっていた。

一日のまだ半分も経っていないのに今すぐ横になって眠りたい気分だった。

ふと首を動かし視線を木綿季の見える方へと移す。

木綿季は静かな寝息を立てながら気持ちよさそうに眠っている。

和人はそつと木綿季の頭に手を当てて、優しく撫でた。

「…おめでとう…木綿季…」

和人は優しい声で木綿季の完治を祝福した。そして今後のことを考えた。

今しなくてはならないことは…木綿季が早く普通の生活を送れるように助けてやることだ。

しかし…食事とりハビリは資格を持ったプロの人たちがやってくれるという。

直接的な助けは出来ないのかもしれない。そうしたらどうすればいいんだろう…。

和人は考えた、傍にいる以外に何かやってやれることがあるのかもしれないと。

しかしいくら考えてもすぐにいい案が出てくるはずもなかった。

「だめだ…何も思い浮かばん…、やっぱり何か作って食べさせてやりたいな…」

木綿季の好物って何だろう…？ 嫌いなものとかあるのかな…？ よくよく考えたら俺は木綿季の私生活のことをほとんど知らないでいた。

ALO以外にどんなこととして遊んでいたのか、家でどんなことをして過ごしていたのか。

和人はふと、木綿季の体を見つめていた。

やせ細ってしまつて健康的とはとても呼べない体つきだ。しかしそれはこれから元気をつけていけばいい。

この小さい体を俺が支えてやればいい。今はいい考えがなくても…いずれ方法は見つかるさ。

「ちと…眠いな…俺も寝るか…」

和人はたまつた眠気を解消するため、少々姿勢が悪いがパイプ椅子に座つたまま眠りについた。

木綿季とは仮想空間で何度も一緒に寝ていたが…現実世界で一緒にの場所で寝るのは初めてだな…。

まあ…いいや…今は寝るとしよう…。

同日 15:50 横浜港北総合病院 木綿季の病室

「ん…んん…ふわ…今…何時だ…？」

瞼をこすりながら和人は電波の出ない機内モードにしてあるスマ

ホを取り出し時刻を確認した。

「16時前か…結構がつつり寝たんだな…」

和人は思いつきり伸びをすると、肩と腰をくいつくいつと回し関節をぼきぼき鳴らす。

いつものおやじ臭い行動だ。

腰を回したときに、木綿季の寝ている姿が目に入った。先ほどと全く同じ寝相だった。

「木綿季…まだ…寝てるのか…？」

ちよつとだけ嫌な予感がした和人は自分の顔を木綿季に近付け、耳を澄ました。

スウ…スウ…と細い寝息が聞こえた。少し安心した。

今までが今までだっただけに…ちよつと想像したくないことを想像してしまった。

もうそんなことはないはずなのに…なかなかないものである。

その時だった、病室のドアがコンコンとノックされた。誰かが来たようだ。

ここの病室の主は寝てしまっているので付き添いの俺が代わりに返事をした。

「どうぞー」

「失礼します…」

ガラガラと音を立ててドアをスライドさせ部屋を訪ねてきたのは木綿季の主治医の倉橋だった。

それと…あと一人…いる…誰だ？ 初めて見る顔だ…ここの病院の人か…？

「木綿季君は寝てしまっていましたか」

「ええ…俺もさつきまで寝てて…今起きたところです」

「それは…和人君随分お疲れだったのですね…」

「ええ…あれから…明日奈たちにいろいろやらかされてまして…」

倉橋はその話を聞きくすくすと笑うと「難儀でしたね」と短いコメントだけ残した。

まさかあの時おっさんって言ったことを根に持つてるんじゃないだろうな…？ ははは、まさかな…。

「紹介が遅れました、こちら…木綿季君の食事を担当してくださる栄養士の方です」

「あ…え…あつハイ！ 初めまして！ 木綿季の恋人の…桐ヶ谷和人です！ よろしくおねがいします！」

和人はパイプ椅子から体を立たせると姿勢を正して、行儀よく挨拶をした。

「初めまして、栄養士の高橋香里です。今後…紺野さんが退院するまで彼女の食事の担当をさせていただきます。よろしくお願ひします」

高橋と名乗った女性は清楚な感じのイメージのお姉さんといった栄養士だった。

こちらも行儀よく和人に対して挨拶をした。

しかし妙だな、何で木綿季の食事を担当するだけなのにわざわざこの病室まで来るんだ…？

「あれ…倉橋先生…わざわざここまで高橋さんを連れてきたってことは…もしかして…」

倉橋はニツコリ笑って和人の質問に答えた。

「ええ…毎回…というわけにはいきませんが、忙しくない時には和人君が木綿季君の食事を作ってもよいという許可をいただきました。しかし、必ず毎回彼女の立ち合いのもと調理を行うという条件つきです」

「え…ほ…本当ですか!？」

「はい、あと…必ず私の調理法に従って調理をしてください。守れない場合は…それ以降はお断りさせていただきます。…それでもよろしいですか?」

「はい…こんな俺の我儘を聞いてくれて…ありがとうございます!!」

和人は感謝の気持ちを込めて、高橋に向かい深々と頭を下げた。

「…そんなに彼女が…大事なんですね…」

「ええ…木綿季は…俺の生き甲斐です…」

「くすっ、頑張りなさいよ…? ”王子さま!”」

和人の顔が引きつった、大切な木綿季がいるこの病院でも…この通り名で呼ばれるのだけはいやだった。

可能ならこのまま木綿季を抱きかかえてこの場から逃げ出したいぐらいだった。

「……一っだけ聞きたいんですけど……そのウワサどこまで広まってるんですか……?」

「え、何言ってるの……少なくともこの病院関係者は全員知ってるわよ? 他の患者さんも」

和人はフリーズしてしまった、額から嫌な汗が出て両手は変なポーズをとってプルプル震えていた。

：何が何でも早く木綿季を元通りにして退院してもらおう、そう心に強く思った。

決して俺がここから逃げ出したいからというワケではない、木綿季に早く退院してもらいたいからだ。

断じて俺都合ではない。

「……そ……そう……ですか……」

倉橋は和人に見えない角度で顔を隠してふるふる震えながら笑いを堪えていた。

おのれ……やはりおっさんって言ったこと根に持ってるな……。

「まあまあ、んじゃあそうと決まったなら早速今から調理に取り掛かります。病院は他の患者さんたちの食事も作っているから調理室を使える時間は限られています。なので迅速に行動しましょう」

「え……あ……はい!」

和人は高橋についていった。これから作る食事を木綿季に食べてもらう……そう考えるとより一層気合が入った。

「ハイツでは和人君、今から紺野さんの食事…治療食を作っていると思います。準備はいいですか？」

和人は普段来ている服からは想像も出来ない全身真っ白な割烹着に白いマスクにコック帽といった出で立ちになっていた。

常日頃の和人のコーディネートから考えると絶望的に似合っていないかった。

きつとクラインヤリズ、シノンたちがその場にいたら一生の爆笑ものだろう。

「これを着て作るんですか…」

「当たり前でしょ、ここは病院なんだから…」

和人は少し元気がなくなっていた、今から木綿季のために食事を作るというのに…出鼻をくじかれた感じがした。そんな和人などお構いなしに高橋はすたこらさつさと調理の準備を始めた。

「えっと、今回の紺野さんの場合、三年間も食事を取っていなかったことを考慮するとまずいきなりお肉とか白米とかの形がしっかりしている食べ物はず無理なことは分かるわよね？」

「はあ…それは勿論…というより俺もお粥とかを作るもんかと思っただんですけど…」

「正解！　そうです！　今日はお粥を作ります！　それよりさらに軽い重湯とかもあるんだけど…あんなの食べても嬉しくないしね…」

「はあ…そう…なんですか…」

「あのね、和人君。食事ってね…人間が普段過ごしている日常で…一番大事な要素だと私は思ってるの」

「え…？」

高橋はそう言うのと、自分の過去を話し始めた。

「私ね…妹がいたの、7歳年下のね」

「へえ…高橋さん、妹さんがいたんですか…」

「うん…人懐っこくて…可愛い妹だったのよ…でもね…、私が中学の時に…病気で死んじゃったの」

「え…」

和人はこんな話を切り出されるとは思っていなくて内心動揺してしまっていた。

何で高橋さんはこんなことを俺に切り出してきているんだろうと思いはじめた。

「びっくりしたでしょ…ごめんねいきなりこんなこと言って。でもね…和人君には話しておくべきかなって思ったんだ」

「俺にはって…？」

「妹は…病気だったの。私の家は貧しくて…毎日食べられるものも…
少なかったの」

「……………」

「私が中学に上がったばかりのころね…お父さんが事故で死んじゃったの。その後はお母さんが女手一人で育ててくれたんだ。当然…まともに収入はなくて…当時幼稚園児だった妹に…ちゃんとした食事を与えてあげられなかったんだ」

高橋は淡々と過去を語り続けた。

「一日一回食べればいいってぐらいに貧しかった…、それでも必要な栄養が足りない妹はどんどん痩せていってしまったの。自然と抵抗力も弱ってきて…ある日病院に連れて行ったら…」

「病気になっていたってわけですか…」

「うん…」

高橋は浮かんだ涙を拭い、話を続けた。

「病気は…単なる肺炎だったの。でも…十分に体が出来てない妹に…その病気は重すぎたの…」

「高橋さん…」

「ほどなくして…妹は死んでしまったわ…、その時思ったの…もつと妹にちゃんと食事をさせられてあげれば…もつと美味しいものを作ってあげられてれば…死なずに済んだのに…って」

「…まさか…高橋さんが栄養士になったのって…」

「うん…和人君の想像通りかな？ 自分の知識と経験で…食事に関して困ってる人たちがいたら…助けられないかなって思ったからなんだ…。妹みたいな人を…二度と出さないために」

「そう…だったんですか…」

重い空気が流れた、楽しく食事を作るはずの時間は…どんよりとした雰囲気にもまれてしまった。

「なんか…ごめんね…変な空気にしちゃって…」

「あ…いえ…別にそんなことは…」

「そうゆうことがあったから…私は…食事という行動に…特別な想いを持つてるんだ…。これから作る紺野さんの食事…栄養管理もそうなんだけど…ちゃんと気持ちを込めて作ってあげないと…私は思うの」

「…俺もそう思います…」

「うん…、だから…紺野さんのために…美味しい食事を作りましょう！」

「はい…ご指導よろしくお願いします！ 高橋さん！」

「よろしく願いされました！ あと…私のことは香里でいいわよ？」

「あ…はい…分かりました…香里さん」

「うむ……さーてと…時間が無くなってきちゃったから…ちよつぱやで作るわよー!」

「ちよ…ちよつぱやって…確実にいいものを作れるようにお願いしますよ…」

同日17:15 横浜港北総合病院 木綿季の病室

和人は香里の指導の下、木綿季の食事を完成させた。

完成させたと言えば聞こえはいいが、実際の調理現場はほとんどが煮込むだけであった。

火加減を調整しながらであったが今の木綿季に食べられるといったら恐らくこれだろう。

そんな和人が作ったものは食べやすさ、胃への優しさ、味の調整のしやすさを考えての五割粥だった。

タンパク質を取って筋力をつけてもらいたいところだが…お肉とかの重たいものなどいきなり食べられるはずもないので、それ以外に胃に優しいタンパク質を取れるものということでお粥が選ばれた。

ぶつちやけ和人が考えていたことと同じであった。

わざわざ栄養士が考える必要があったのか?と思う和人であったが向こうはプロなので逆らわないことにした。

和人が押すカートには直径15cmほどの小さい土鍋が置かれている。
お盆の上には蓮華と取り皿が別に備え付けられていた。それを木

綿季のいる病室へと自ら運んでいた。

病み上がりの木綿季には少し量が多い気もしたが…足りないよりは余った方がいいので少し多めに作った。

木綿季は…食べてくれるだろうか…？ 何しろ三年ぶりの食事だ、胃が拒否する可能性も高い。

本当は温かいスープか何かから始めた方がよかつたんじゃないか？とも思う和人であった。

だがもう既に作ってしまったものはしょうがない。

何しろ栄養士の指示で作ったのだ、俺が悪いわけではない。断じて俺が悪いわけでは…。

そんなことを考えてるうちに木綿季の病室に辿り着いた。和人はカートを扉の脇に止めてコンコンとノックをした。

木綿季の反応はない、まだ寝ているのだろうか？ ゆっくりと扉をスライドさせて、カートを押しして中に入る。

「木綿季…入るぞ…？」

和人が中に入ると、窓の外を眺めている木綿季の姿があった。

「なんだ…起きてたのか…返事ぐらいしてくれよな」

和人に気付いた木綿季はゆっくりと首を和人の方に向けると嬉しそうな表情をした。

「かずと…いな…かつた…から…びっくり…した…」

木綿季は途切れ途切れに声を出し、和人に言葉を伝えた。

しかし今朝方に現実世界に帰還したばかりの頃と比べると、声もハキキとしてきていた。

まだおぼつかないが随分と会話らしい会話が出来るまでになっていた。喜ばしいことだ。

「声が…今朝より出るようになってるじゃないか…よかつたな」

「う…ん…まだ…ちゃんと…はなせ…ないけど…」

「なに…少しずつゆっくりやっていこうぜ、時間はあるんだ…」

「そう…だね…」

何気ない会話を交わしていると、木綿季が何かを感じ取っていた。ゆっくりとした動作だが首をあちらこちらに動かしてその何かの正体を探していた。

「いい…に…おい…なん…の…におい…だろ…」

「木綿季…嗅覚も大丈夫なんだな…、ああ…いい匂いだろ。さつき栄養士さんに指導してもらって作ってきたんだ」

和人は木綿季のベッドに備え付けられている簡易テーブルを木綿季の前に起こした。

次にカートに乗っかってるお盆をそのテーブルに置き、木綿季の目の前で土鍋の蓋を開けた。

蓋が開けられた土鍋からは白色のお粥がつやつやと光り輝きながら湯気を登らせていた。真ん中には梅干しも乗っかっていた。

「わあ……はん…だ…」

木綿季の目はキラキラしていた、仮想世界ではない現実世界の食事にその眼を輝かせていた。

決して仮想世界ほど豪華ではないかもしれないが…和人が精一杯木綿季のために作った食事を見つめていた。

「これ…かず…とが…つく…つたの…?」

「ああ…ちゃんとお前の体のこと考えて作ってきた、最初はこういった軽いものから始めようってことだな」

和人は木綿季に返事をしながら取り皿に木綿季が食べきれそうなぐらいの量を勘で盛りつけた。

「おいし…そう…」

「ああ…お上がりよ！」

「…え…?」

「あ…いや…何でもない、試してみてください」

和人は蓮華に木綿季の口に入り切りそうなぐらいの量の粥をすくって、フーフーフーと息を吹き掛けてある程度冷まし、木綿季の口に近付けた。

「いた…だき…ます…」

「召し上がれ、木綿季」

和人は木綿季に無理をさせないように蓮華を傾け、木綿季の吸引力だけで食べられるように角度を調整していた。下手に傾けすぎて木綿季がむせてしまわないように気を使っていた。

木綿季は少しずつ…少しずつだが舌と顎を使い、蓮華に乗っかっているお粥を口に吸い込んでいった。

蓮華のお粥が全部なくなるとゆっくりと口をもごもごとさせて十

分に噛んだところでゴクリと飲み込んだ。

「どう…だ…？ 味の方は…」

和人が感想を求めると突然、木綿季が涙を流し始めた。

あまりにも突然の事だったので和人は内心かなり焦った。泣くほど不味かったのか？

異物が混入でもしてしまっていたのか？とマイナスの方向にばかり考えが向かっていた。

「あ…木綿季すまん！ 口に合わなかったか？ やっぱり俺が作るより…香里さんが作った方がよかったのかな…、ごめんな木綿季…変なもん食べさせちまって…」

「……がう…」

「え…？」

木綿季が口を手で押さえて何かを和人に訴えていた。

「ち……がう…」

「木綿季…？」

「まず…くなん…か…ない…よ…」

「え…」

「おい…おいしい…よ…かず…と…」

木綿季の口から「おいしい」という言葉を聞いた瞬間、和人は胸が
いっぱいになった。

作ってよかった…木綿季の口にあつてよかった…思いが届いてよ
かった…、そんなことが頭を巡っていた。

うつかり出てしまった涙を拭きながら和人は嬉しそうな表情を見
せた。

「ほ…ホントか!? よかった…失敗したものかと思って焦っちゃった
よ…アハハ…」

「んーん…あた…たかく…て…すぐく…おい…しいよ…」

「ああ…ありがとな…作ってきて良かった…」

「ね…もつと…たべ…させて…」

和人は「ああ」と頷くと今度は乗っかっていた梅干しを砕き、とろ
とろになるまでほぐすとそれを混ぜて、先ほどと同じぐらいの量を蓮
華によそつて木綿季の口へと運んだ。

「…どうだ…? 美味しいか…?」

「う…ん…すつ…ぱいけど…おい…しい…」

「良かった…足りなかったらまだいっぱいあるからな。足りなくなる
よりはいいやって思っただけ…ぱい作ってきちまったからさ」

「だい…じよ…ぶ…ボク…むかし…から…けつ…こう…たべる…から
…」

「へえ…意外だな…。それなら案外早く体力が戻ってくるかもな」

和人は木綿季のペースに合わせて、お粥をよそって口に運ぶといった行動を繰り返した。

木綿季は和人の愛情のこもったお粥を一口一口噛みしめて食べ続けた。

現実世界に帰還して初めての食事は和人が作ってくれた食べ物がいい。

木綿季の夢が早速一つ、叶ったのだ。

30分ほどの時間をかけて、木綿季はすっかり和人が作った分を完食した。

お粥の入っていた土鍋には梅干しの種だけが残されていた。

「ごち…そう…さ…ま…かず…」

「ああ…お粗末様」

「おいし…かった…また…たべ…たいな…」

「そう言ってくれると俺も嬉しいな…香里さんに相談して出来るだけ俺が作れるように頼んでみるよ」

「やつ…たあ…」

木綿季は満腹だった、三年間食事をしていなかった胃は意外にも和人が作ったお粥を全て受け止めていた。

和人の愛情のこもったお粥にお腹も心もいっぱいになった木綿季は幸せそうな表情をしていた。

「ボク…しあ…わせ…」

「ああ…俺も木綿季の傍にいられて…幸せだ」

「あり…がとね…かずと…だい…すき…」

「俺も…木綿季のことが大好きだ」

食器をお盆の上に綺麗に片付けた和人は、木綿季に近付くと木綿季の体に負担が来ない程度の力で優しく抱き締めた。

「かず…と…？」

「本当に良かった…木綿季が…こっちに帰ってこれて…病気が治って…本当に良かった…ッ」

「また…ないて…る…」

「…俺が泣き虫なのは…今に始まったことじゃないだろ…」

「しっ…てる…」

その後もしばらく二人は抱き合った。

現実世界で一緒にいれることの幸せを踏みしめながらひたすらにお互いを感じあった。

木綿季はこれから長い時間を掛けて日常への復帰を果たすために頑張るだろう。

和人はそれをすぐ傍で全力で支えていくだろう。

小さな一歩だが…確実に二人は前へ前へと歩んでいった。

二人の本当の闘いは、まだ始まったばかりであった。

第38話〈誕生日〉

西暦2026年5月26日午後17:45 木綿季の病室

木綿季は三年ぶりに食事を楽しんだ。

現実世界に戻って最初の食事は、愛する和人の作ってくれた手作りの料理だった。

木綿季の体調を考慮してということとで栄養士の高橋がお粥をチョイスした。こんぶとかつおで出汁を取り、弱火でじっくり煮込み、歯がない人でも食べられるぐらいにまで柔らかく仕上げた。

試しに一口：うん、いける。薄めの味付けだがいい味が出ている。木綿季も多分：喜んでくれる。

和人は考えていたより上手くできたと思い、木綿季の喜ぶ顔を思い浮かべながら期待に胸を膨らませ土鍋に蓋をして、木綿季のもとまで持っていた。

木綿季は俺が来るまでに既に眠りから目を覚ましていた。

現実世界に戻ってからの初めての風景を窓から眺めていた。その瞳は感慨深そうに思いを巡らせて風景を見つめていた。

声を掛けると木綿季は俺に気付き、嬉しそうに話しかけてくれた。今朝よりも声が出せていたので俺まで嬉しくなった。

そして木綿季は俺の作ったお粥の匂いに気付き、鼻をひくひくとさせていた。

目の前で土鍋の蓋を開け、ツヤツヤに輝く白いお粥を目にした木綿季は表情を輝かせていた。

三年ぶりの：現実世界での食べ物に：心を躍らせていた。

俺は木綿季が食べやすいような量に調節して、口に運んであげた。舌と顎を上手に使い、少しずつお粥を食べてくれた。

そして一口目を飲み込むといきなり泣き出してしまったので俺は焦ってしまった。

酷いものを食べさせてしまったかと思ってしまった。しかしそうではなかった。

和人の想いがこもったお粥を口にし、胸からあふれてくるものがいっぱいすぎて、涙を流してしまったのだ。

決して俺の作ったお粥がまずかったとかいうワケではなかったらしい。

嬉し涙を流しながら俺の料理を美味しいと言ってくれた。俺は嬉しかった。

美味しくできた自信がなかったわけじゃないが…目の前で美味しいと言われると…やっぱり嬉しかった。

そうなる自然と木綿季の口にお粥を運ぶ手に力も入る。

木綿季は次から次へとお粥を口にして、満足そうな顔をしてくれた。

気が付くと多く作ってしまったと残すと思われたお粥は全部木綿季の胃袋へと収められていた。

三年ぶりの食事はきっかり全部完食してくれた。俺は安心した。

全部平らげた木綿季は幸せそうな表情をしていた。その表情を見て俺も…心の底から嬉しくなった。

毎回こんな顔をしてくれるなら…次も何か作ってあげたくなった。

傍に木綿季がいてくれて…俺も…幸せだった。

「けぽっ…」

木綿季が可愛らしいげっぷをした、部屋には俺しかいないので聞かれたと思った木綿季は恥ずかしそうに口元を押さえていた。可愛い。

「…聞いて…た？」

「うん、ばっちり」

「あ…う…」

恥ずかしがるほどのことではないと思ったが下を向いて顔を赤くしてしまった。

顔が赤くなってるのは多分あつあつのお粥を食べたせいもあるだろうが、とにかく耳まで真っ赤にしていた。

そんなに恥ずかしかったのだろうか、あれよりでかいげっぷなら俺だってもつとでる。

「食べたら出るさ、気にするな」

「でも…恥ず…かしいのは…恥ずか…しい…から…」

木綿季はひたすらもじもじと先ほどの行為を恥ずかしがっていた。ああもう可愛い。

「でもそれだけ満足してくれたんだろ？俺は…食べてくれて本当に嬉しかったぞ」

「あ…う…ん…おいし…かった」

その言葉を聞いて改めて俺は嬉しくなった。こんなことぐらいしか出来ないが…それで木綿季を元気づけてあげられるなら…もつと頑張ろうと思った。

「ありがとな」

食器をお盆ごとカートに戻して、簡易テーブルも下げて、先ほどのベッドの形と同じ形に戻す。

「んじゃあ俺はこれを片付けてくるよ、飲み物…何か買ってこようか？」

「あ…んと…かずとに…まか…せるよ」

「そうか…んじやあ温かいお茶でも買ってくるよ」

「うん…ありが…と…」

心なしか先ほどより声が出ている気がする。日常の動作をすればするほど体にいい刺激が来るに違いない。

このまま元通りの体に戻ってくれば…御の字だ。

「んじやあ、ちよつと行ってくるよ」

「うん…まっ…てるね」

和人は病室のドアをスライドさせ、後ろ向きでカートを引きながら部屋からでた。

出る直前に見た木綿季の表情はとてもいい表情をしていた。でもちよこつとだけ寂しそうだった。

「片付けて…早く戻ってあげないとな…、いっぱい話したいこともあるし…」

そう考えた和人の足は自然と早くなっていた。時間はたくさんあるが…これからリハビリやらなんやらでゆっくり出来る時間は限られてくる。

なら今のうちにたくさん話しておきたい、木綿季の…昔の話とかも聞きたいしな…。

「おや？ 和人君じゃないですか、こんばんは」

カートを押ししていると向こう側から倉橋が書類を持って歩いてきた。

木綿季の病気という肩に重いものを背負っていた倉橋だったが、木綿季の病気が治ってからは自然と張りつめた顔をしなくなっていた。最近はずごく晴れやかだ。

「こんばんは先生、今…木綿季の食事の後片付けをしようとしてまして」

和人はそう言いながら、土鍋の蓋を取って中身を倉橋に見せた。

「おや…からっぽ…ということは…木綿季君食べられたんですね…よかったです」

「ええ…結構多めに作ってしまったんですが…全部平らげてくれました。美味しかったと…言ってくれました」

「………そうですか…それは…本当によかったですね…」

倉橋は本当に嬉しそうな顔をした。このまま経過良くいけば…早い段階で木綿季は退院出来ると感じていた。

しかし…その表情はどことなく少しだけ寂しそうにしているようにも思えた。

「はい…胃が受け付けないかとも思ったんですが…しっかり食べてくれたので安心しました」

「良かったです…、しかし木綿季君も嬉しかったでしょう…ちよつと遅かったですがいい誕生日プレゼントになったんじゃないでしょうか…」

「え？」

今、先生とんでもないことを口走らなかつたか？…ちよつと遅かつたが…誕生日プレゼント…？

ちよつとまで、誕生日つて…どういふことだ…？

「せ…先生…木綿季の誕生日つて…いつなんですか…？」

気まずそうに汗をかきながら和人は倉橋に聞いた。倉橋は知らなかつたのですか？…といった表情をしながらその質問に答えた。

「いつつて…3日前の5月23日ですけど…和人君…知らなかつたんですか…？」

「……………」

知らなかつたとか言えない、というより俺は木綿季の病気のこと以外過去のことを何にも知らなかつた。

横浜に住んできたことも本人から教えてもらうまでは知らなかつたし…考えてみたらほとんど木綿季のこと知らないじゃないか。

それにしても恋人のくせに相手の誕生日も知らないとは…情けない限りである、と和人は思っていた。

「…先生…ごめんなさい！…ちよつとこれ調理室まで運んでもらつていいですか！…俺…ちよつと急用が出来てしまいました！」

「え…あ…別に調理室は私が行く先の途中にあるので構いませんが…どこか行くのですか？」

和人はそう言うのと時間を確認しながら慌てて病院の出口へ足を

運んだ。

「はい！ ちょっと時間ないんであとで説明します！ 木綿季には… 1時間か2時間で戻ると伝えてください！」

倉橋は呆気にとられていたがすぐに状況を理解した。和人君は木綿季君の誕生日を知らなかったんだ…と。

だから今慌ててプレゼントを買いに走っていった。そういうことか…と思っていた。

「そういうえば教えていませんでしたね…木綿季君も話していなかったんでしようか…。ちょっと悪いことをしてしまいましたね…」

倉橋は申し訳なさそうな表情を作りながら頭をぼりぼりとかいていた。あとで謝らなければと思いつながらカートを調理室に運んでいた。この後は非番だから洗い物もしてあげますか…と思いつながら。

同日17:50 横浜港北総合病院 駐輪場

和人は慌ててシートからヘルメットを取り出し、キーを差し込みエンジンンを起動させるとサイドスタンドを蹴り、バイクを発進させた。

しまった…木綿季の誕生日を知らないだなんて…恋人失格だ…。

さんざん木綿季が大切だ言っても肝心なときにこれなんだもんな…。

今更買ってきたところで木綿季が喜んでくれるかどうかは分からないが…せめて何か贈りたい。

病気が治ったお祝いも込めて：何か買ってきてあげないと…。
しかし何がいいだろうか：何を買えば喜んでくれるだろうか：、木綿季が喜びそうなもの…。

和人はいろいろ考えてはいるが、木綿季なら和人のくれたものなら何でも喜んで受け取ってくれるだろう。

しかし：贈るならとびつきり木綿季の喜ぶものもいい、和人はそう考えていた。

(女の子だから：やっぱり宝石とか：おしやれするものに：喜んでくれるのかもしれないな：よしっ)

和人は道路の路肩にオートバイを一時停車させて、ポケットからスマホを取り出し、付近の店を検索した。

アクセサリーショップやファッションを扱っている店がいくつかヒットした。

現在位置から一番近い店へと和人はバイクを走らせた。

同日 18:00

和人は横浜市金沢区能見台にあるとあるショッピングモールのファッション売り場に足を運んでいた。

まず和人が木綿季に贈りたいと思ったものはファッション関係のものだった。

(でも俺：木綿季のスリーサイズとか知らないしな：第一今は痩せてるから買ってきても肉付きがよくなつてくるとまたサイズが合わな

くなりそうだ…どうしたもんか…」

「何かお探しですか？」

突如和人は女性店員から声を掛けられた。和人が足を運んでいたのはレディース売り場であった。

挙動不審な和人の佇まいに、女性物を選び慣れてないんだなと悟った店員が気を使って声を掛けに来てくれたのだ。

「あ…はい…ちよつと恋人の…誕生日プレゼントに…」

「あら…それはそれは…」

店員はニヤニヤして和人を見つめていた。この手の女性は和人は非常に苦手だ。

それはもう思う存分横浜港北総合病院で嫌というほど味わっている。これ以上からかわれる前に和人は目的を伝える。

「えつと…実は今入院してまして…リハビリの最中なんです。だから…洋服を買ってやっても多分すぐサイズが合わなくなると思うんですよ。だから…それ以外で何かないかなと思ひまして…」

それだけ聞くと店員はふんふんと言いながら考え込んでいた。この道何年のプロなんだろうか…？

女性のお洒落にかんしてはティーンズからセレブまで御用達といった風貌を感じさせるベテラン店員だ。

きつといいものを紹介してくれるに違いない、俺が選んでもヘンテコなものになっちまうだろうからな。

「となると…身に着けるものですね…リストバンドや…帽子等の小物ぐらいの大きさのファッションアイテムでしたらよいかと思われま

す」

なるほどいい案じゃないか。確かにそれなら体のサイズの影響を受けることは少ないし管理もしやすい。

嵩張ることもないし木綿季は喜んでくれるかもしれない。

和人は早速そのレディース小物売り場に案内をしてもらった。

「帽子は…実に120種類ほどのものを取り揃えております。形とサイズごとに並んでおりまして色なども様々です。彼女さんは…どんな方なんでしょうか？」

「あ…えつと…俺より二つ年下なんですけど…すごく元気で活発で明るい子です」

「なるほど…なら…これでしようか…？」

店員はそういうと明るい赤のベレー帽とキャスケット帽を陳列棚から取り出した。

ベレー帽とキャスケット帽…確かに木綿季には似合うかもしれない。しかし生地が少し厚いな…。

これから夏が来るといふのにこんなものを被ってしまったら頭が蒸れてしまわないか心配だ。

「そうですね…ちよつと生地が厚い気がしますね…、これから夏が来るのでこれはちよつと…」

店員はそうですか…と少しだけがっかりしながら帽子を棚に戻した。ごめんなさい店員さん、秋ごろになったらまたここに買いに来ますから…その時またその帽子を売ってください。

とは言ったものの…あとはもうセレブ御用達のようなデザインの

帽子しか見当たらない。

いかにも上品な大人の女性が被るような高級感溢れるものばかりだ、値段も勿論高級。

和人に払えない金額でもないが気軽に出来るような金額でもなかった。

「どうしたもんかな…何か…木綿季に似合うものは…あ…？」

和人は帽子売り場の端っこにある売り場に目を止めた。

そこに陳列されている商品は決して他の商品ほど上品さはなく、気軽に誰でも買って身につけられるようなラインナップのものが並べられていた。和人はそこに何か感じるものがあり、そそくさとその売り場に足を運んだ。

そこにはヘアバンドが並べられていた。色、模様、柄、様々なヘアバンドがずらりと並んでいた。

和人は一つ一つまじまじと見つめながらヘアバンドを見ていた。どれもいい生地を使用しているもので、それなりの値段をしていた。

「あ…これ…」

和人はとあるヘアバンドに目を止めた。それを棚から取り出してまじまじと見つめた。

その手にとったヘアバンドは、ALOでユウキが身に着けているヘアバンドとそっくりなデザインをしていた。

「…偶然…なのかもしれないが…妙な運命を感じるな…これにしよう…すみません！これをください！」

店員に渡してプレゼント包装をしてもらい、レジで会計を済ますと

和人はすぐさま店を出た。ここでの目的は達成した。

「あと一つ…何か…受け取ってもらいたいな…」

欲深い和人はもう一つ木綿季へのプレゼントを買おうと思っ
た。

本人の自己満足でもあるのだが何かもう一つ、木綿季に贈り物
をしたかった。

「よし…宝石でも見てみるか…」

和人は同じアウトレットに開店しているジュエリーショップに
足を運んだ。

和人が入店すると店内のとあちらこちらから「いらっしやいま
せー」という入店の挨拶がこだました。

こういう機会でもないと一生足を運びそうにない店内の雰囲気
に和人は完全にのまれていた。

何せあちらこちらキラキラと光り輝くものがたくさん並んでい
るのだ。

ネックレス、指輪、イヤリング、ピアス、ブレスレットなど…。
あまりにもあたりがキラキラしているので若干頭もクラクラして
きた和人であった。

「お客様、何をお探しですか？」

「あ…えつと…ちよつと恋人への…贈り物をと…」

「あらあら…それはようございませうね！」

なんだかデジヤブを感じた。俺に近寄ってくる女性は何故みなこ

うなのだ。

赤の他人ですらこうもニヤニヤしてくるとは…絶対に俺の前世は女事で嫌なことがあったに違いない。

いろいろツッコまれる前にさっさと用件を済ませるとしよう、あまり木綿季も待たせられないしな。

「んと…そうですね…あの…紫と黒がまざったアクセサリーとかありますか…？」

「黒と紫がまざったものですか…難しいご注文ですね…」

和人がイメージしてたのは過去に二人で新生アインクラッド第29層のボスを倒したときにドロップした「ブラックアメジストネックレス」と似たネックレスだった。

しかしそんな宝石な自然界に存在しない。黒真珠やアメジストなど、黒と紫を基調とした宝石は存在するが、それらが混ざり合った宝石など聞いたことがない。

色が混ざり合い違う光を放つ宝石などせいぜいアレキサンドライトぐらいだろう。

「そう…ですよね…、んじゃあ黒と紫…それぞれで構いませんのでネックレスかペンダント的な物をいただけませんか？」

店員は「畏まりました」と返して和人をネックレス売り場に案内した。

そこにはガラスケースに保管されているネックレスがずらりと並んでいた。

とんでもなく値段の高いものもあれば和人でも十分に買うことのできる値段設定のアクセサリーまで様々な品揃えだった。

「すごい…こんなにあるんですか…」

「これでもほんの一部です、本店になれば…ネックレスだけでこの三倍近くの品揃えになります」

和人が呆気に取られていると店員がケースのカギを外し、和人の所望する見た目のペンダントを二つ取り出した。

「黒と紫と言いますと…こちらですね。黒真珠とアメジストのペンダントです。こちらを選ばれるお客様はなかなかおりませんが」

遠まわしに俺の美的センスに包丁を刺すようなことを言われた気がするがここは気にしないことにしよう。

「…そんなに高くないんですね…」

「はい、皆様やっぱりエメラルドやルビーといったポピュラーなアクセサリーを選ばれることが多いので、こういった淡い色合いのアクセサリーはなかなか選べないものでして…」

「…これ、ください」

「…こちらでよろしいですか?」

「はい、包装もお願いします」

店員は「畏まりました」と言うたガラスケースの鍵を閉め、そのまま商品をカウンターに持ち出した。

和人は財布を片手に店員の後を追った。

先に会計を済ました和人はカウンターの奥で包装する様子を見ていた。

奥では手慣れた様子で店員がラッピングをしていた。黒のペンダ

ントには黒の包装用紙を、紫のペンダントには紫の包装用紙でくるみ、平べったいプレゼント箱に形を整えて入れ、最後に専用のリボンを使って封をした。

ラッピングが終わると店員は小さい紙袋に包装されたペンダントをいれ、嚴重に衝撃吸収材を入れてこちらに持ってきた。

「お待たせしました、お気をつけてお帰りください」

「どうも、お世話になりました」

店員が「ありがとうございます！」と頭を下げているうちに和人は踵を返して店を後にした。

「さて、こんなもんか…一応考えて買ったけど…木綿季…喜んでくれるかな…」

行きの時にも思ったことだが和人は木綿季が喜ぶか不安だった。多分快く受け取ってくれるとは思うが…木綿季に想いがちゃんと伝わるかどうか心配していた。

「まあ…買っちゃったもんはもう仕方ないよな、帰るか…」

和人は自分のオートバイのシートを開くと、買ったものに負担を賭けないような配置にしてシートを閉めた。

ヘルメットをかぶり、エンジンを吹かしてサイドスタンドを蹴り、慣れた手つきで再び病院への道のりを戻っていった。

同日午後18:35 横浜港北総合病院駐輪場

ちよつとばかり遅くなつてしまった。

陽は既に傾いており、夕方と夜の中間の色合いの空となっていた。和人が好きな時間帯の空模様だった。

「木綿季…待ちくたびれて寝ちまつてたりしないかな…」

いそいそと移動する和人は途中で自販機を見つけた。そういえばお茶を買っていく約束もしていたなと思い出した和人は小銭を入れて「わくわくお茶」の温かい方を購入した。

病院の自販機なので少しだけ割高であるが先ほどこれより遥かに高い宝石を購入したこともあり気にかけることなくお茶を買った。

「これでよし、さあ木綿季のところに急ごう」

木綿季の病室は三階にある。体を鍛えている和人はエレベーターではなく階段を使って三階まで登った。

せかせかと移動してきたために少しだけ息が切れていた。

「ふう…すっかり遅くなつちまつたな…」

木綿季の病室までたどり着いた和人は、病室の扉をコンコンとノックして扉を横にスライドさせた。

「木綿季…入るぞ…」

和人は扉を開けると同時に声を掛け、部屋に入った。

そこには先ほどと同じような姿勢で窓の外を眺めている木綿季の姿があった。

上半身だけベッドから体を出し、吸い込まれるような瞳で夜と夕陽が混ざったような空を眺めていた。

「かずと…おかえり…」

和人に気付いた木綿季は嬉しそうな笑顔を見せて和人に挨拶をした。

声はまだ細いが…途切れることなく言葉を発することが出来ていた。

「ただいま…、木綿季…大分声が出るようになってるじゃないか」

「うん…セブンにやつてもらった…ボイストレーニングを意識して…喉をならしてみたの…」

「そうだったのか…それにしても回復が早いな、いいことだ」

「うん…」

木綿季はそう言うと、和人の後ろに何かあることに気付いた。

「和人…どこに…いつてたの…？」

「あ…ああ…ちよつとな…これを買に行ってきたんだ」

「んと…何だろ…それ」

和人は少しだけ深呼吸をすると、ベッドの簡易テーブルを起こし先ほど買ってきたものを木綿季の前に並べた。

「…和人…これ…は…？」

「遅くなっちゃまったけど…誕生日おめでとう…木綿季…」

「え…？」

木綿季はキョトンとした顔で目の前に並べられた包装箱を見つめていた。

一体何でこうなっているのかが少しだけ理解できていなかった。

「5月23日…お前の…16歳の誕生日だろ？ 3日ほど過ぎちゃまって…遅かったかもしれないが…プレゼントだ」

「え…ボク…の…？」

木綿季は自分の誕生日のことをすっかり忘れていた。

HIVに感染し、AIDSを発症して入院生活が始まってからは誕生日パーティなどの類は、一回もやってきてなかった。ましてやプレゼントなど贈られたこともなかった。

「…いいの…？ 和人…？」

「ああ…そのためにひとつ走り行ってきたんだ…お前の喜びそうなのを探してきた」

「……………ッ」

木綿季の瞳には涙が浮かび上がっていた。嬉しさのあまりに言葉を失っていた。

口元を押さえ、本当に受け取っているのかという表情を浮かべていた。

「ほら…遠慮なんかすんなよ…俺が開けちまうぞ？」

「あ…えつと…ボクが…開けたいな…、開けて…いい？」

「ああ…いいぞ…」

そういうと木綿季はおぼつかない手先で苦戦しながらも、少しずつゆっくり丁寧に包装を解いていった。

手先がプルプル震えていたが、これもリハビリだと思って温かく木綿季を見守った。

一つの箱を開けるのに2分ほど費やして、木綿季は一つ目の箱を、ヘアバンドが入っている箱を開けた。

「わあ…これ…ボクが…ALOでつけてるのと…同じやつだ…」

木綿季は目を丸くしてヘアバンドを見つめていた。嬉しそうで、懐かしそうで、そんな目をしていた。

「ああ…偶然…だけだな…これしかないと思って買ったんだ」

木綿季はヘアバンドを両手で持って自分の胸に当てると嬉しそうに和人に礼を言った。

「和人…ありがとう…すっごく嬉しいな…」

「礼なんていいよ…それより…つけてみてくれないか？」

木綿季は「ウン」とだけ言うのと慣れている…とは決して言えない手つきで、ヘアバンドを頑張って自分の頭につけようとしていた。

一生懸命手を動かして、「んしょっんしょっ」と声を出しながら首元

まで一度ヘアバンドを通過させ、そのまま額の上までヘアバンドを戻すといつもALLOで見慣れている姿をした木綿季がそこにいた。

「えっと…どう…かな…」

木綿季は少し顔を斜めにしながら恥ずかしそうにこちらを見ていた。

やっぱり木綿季にはヘアバンドがよく似合う。

「ああ…やっぱりよく似合ってるよ…すごく可愛い…」

「うえ…あ…うん…、あり…がと…」

木綿季はさらに顔を赤くしてもじもじとしながら下を向いてしまった。

「和人…こっちも…あけてみて…いい？」

「ああ、もちろんだ」

木綿季はその言葉を聞くと嬉しそうにペンダントの入った包装箱に手を掛けた。

こちらはリボンがひっぱるだけでしゆるしゆるとほどけ、すぐに包装紙を開けられるような構造になっていた。

出てきた箱の蓋に木綿季が手を掛け、開けてみるとそこには先ほど買ったアメジストのペンダントが姿を現した。

「わあ…すごい…」

木綿季はペンダントを取り出すと目をキラキラさせながら見つめ

ていた。

恐らくというか宝石なんて贈られるのは初めてだろう、この年で贈ってもらう女の子もそうそういないだろうが。

「いいの…？ ホントに…」

「当たり前だろ？ お前のために買ってきたんだから…」

木綿季は本当に自分がこんなものを贈ってもらっていいのだろうか？と思っていた。

決して安くない買い物だろうに、和人は自分のためにわざわざ買いに走っていつてくれた。

そう思うとまた心がいっぱいになり、自然と涙が出てきてしまった。

「ありがと…和人…ホントに…ありがと…」

「どういたしまして…んで…実はこっちの箱なんだが…」

和人はもう片方の黒い包装箱に手を伸ばし、自分で封を解いた。中からは黒を基調とした黒真珠のペンダントが出てきた。

「この…もらった…ペンダントと…同じ形だ…」

「あ、ああ…その…同じ形で黒と紫とあったから…お揃いに出来ないかと思って…な…」

「え…和人と…お揃い…？」

お揃いという言葉が発した瞬間、和人も恥ずかしくなり下を向いてしまった。

流石に常日頃からこれをつけて回ることはないだろうがお出かけ

の時とかにはつけるのだろう。

「ああ…いや…だったか…？」

「ううん…いやじゃ…ないよ…むしろ…嬉しい…かな…」

二人は視線を合わせると「つけようか」と言い、和人は木綿季のペンダントを首元につけてあげた。

自分の黒いペンダントは自分で自分の首につけた。

「…なんか…妙な…感じだね…」

「あ…ああ…パールツクなんて…明日奈とやったこともなかったな…」

「ホント？ んじゃあ…ボクが…初めて…なんだ」

「そ…そう…なるな…あはは…」

二人は黙りこくってしまった。嬉しいやら恥ずかしいやら照れくさいやらといろんな感情が頭の中を巡っていた。しかしほろ苦くとも甘酸っぱいこの感覚は嫌いではなかった。

「和人…ありがと…、ボク…ホントに…嬉しい…」

「いいんだよ、むしろ遅くなっちゃって…ゴメンな…」

「ううん…そんなこと…」

木綿季は大切な贈り物に手を当てて、本当に幸せそうな顔をしていった。

「リハビリ：明日からなんだっけか？」

「うん：まずは：手とか腕とか：上半身から：始めるんだって…」

「そうなのか：俺に手伝えることがあったら何でもいつてくれよ？」

「うん：ありがと…」

木綿季は連日自分のためにここまでしてくれる和人に本当に感謝の気持ちしかなかった。

和人は病気を治す前から数えきれないほどの暖かいものをいっぱいくれた。

今はまだ何もやってあげられないけど：退院したら：たくさん恩返ししよう…。

何してあげれば：喜ぶかな：和人…。ボクに何が：出来るかな：？

いつかその日が来たら：たくさんお返ししてあげるね：和人…。

第39話 く小さくて大きな一歩く

西暦2026年5月27日(水) 午前7:45 神奈川県横浜市金

沢区 横浜港北総合病院 木綿季の病室

昨日は木綿季にとって最高の一日だった。現実世界に完全帰還し、帰還してから初めての食事を和人の食事で始めることが出来たのだ。愛情こもった和人の手料理を存分に味わい、木綿季は幸せを感じていた。

それだけでは飽き足らず、和人は遅れたとは言え本人も忘れていた誕生日プレゼントを買ってきてくれた。

入院生活が始まってからは木綿季にとって誕生日などどうでもよくなっていた。

どうせ祝ってくれる人なんていない、プレゼントだって誰もくれない、ただ……死に一步近づいただけ。

今年もそれは変わらないと思っていた。しかし、とある男の子との出会いが木綿季の命を救ってくれた。

木綿季にとって初めての恋人であり、更に不治と呼ばれていたAID Sを本当に治してしまったのだ。決して楽ではない茨の道であったが和人は約束を守ってくれた。

そんな大切な人からのプレゼント。木綿季は大いに胸がいっぱいになった。もらってばかりで何も出来ないのにと少しばかり自己嫌悪にも陥った。

退院したら絶対恩返ししよう、何をすれば喜んでもらえるか分からないけど、何か絶対してあげよう。そう心に誓った木綿季であった。

……そして本日は、そんな木綿季のリハビリがスタートする日でもある。

「ねー和人ー、起きてよー!」

「スカー……」

「和人ってばー」

「スピー」

「むうー……」

木綿季は顔をぶくーつと膨らませ、朝から不機嫌であった。

和人はパイプ椅子に腰かけながら眠っている、よくこんな不安定な体勢で椅子から落ちずに眠れるというものだ。

器用なのかはたまた単純なのか。とにかく気持ちよさそうに座りながら熟睡していた。

そして木綿季のベッドのテーブルには朝ごはんが置かれている。

担当栄養士の高橋の同伴のもと、和人の調理が許されていたのだが、今朝の和人はこのザマだ。

他の患者の朝食の用意にも影響が出るので高橋は待ちきれず、木綿季の朝ごはんを先に調理して看護師に運ばせた。自分の手では震えて食器が持てないので誰かの助けがないと食事が出来ない木綿季。

看護師が食べさせようとしてくれたのだがそれを頑なに断り、和人に食べさせてもらおうと思ってたのだが、本人はご覧のあり様なので不機嫌だったというわけだ。

木綿季はどうやれば和人が起きるかを考えていた。

しばらくするといいな案が浮かんだようで、とつても悪い小悪魔のよきな笑みを浮かべていた。

「あつー！ エクスキャリバーよりレア度の高い片手直剣のドロップ情報だ!!」

「何だど!? ……オボアツ!?」

「か、和人!」

木綿季が嘘情報を叫ぶとほぼ同時に、和人は慌てて目を覚まし、いきなり立ち上がったためバランスを崩し、そのまま椅子ごとガシャーンというものすごい音とともに、盛大に転がり落ちた。

すぐ横に立てかけてあったパイプ椅子を巻き込んで大変な状態になつていた。ありもしないレア片手直剣の嘘情報に釣られて目を覚ましたのだ。

「か、かずと……大丈夫?」

「だ、大丈夫じゃ……ない……」

「あ……えっと、ごめんね……?」

木綿季は悪いことをしたと思い、和人に頭を下げて謝った。しかし和人はそれを気にすることはなく、苦笑いを浮かべながらゆつくりと立ち上がった。

着ている衣服を手でパンパンと払い、和人はようやくパイプ椅子地帯から脱出して、散らかったパイプ椅子の後片付けを始めた。

「いやはや、俺とすることが慌てちまった、アハハ……」

「うう、ホントにごめんなさい……」

「そんな顔するなよ、寝坊した俺が悪かったんだ」

そう木綿季にフォローを入れながら、和人は木綿季の頭にポンと手を当てて、優しく撫で、暖かい笑顔で見つめていた。

「おはよう、木綿季」

「うん……おはよ、和人」

少し落ち着くと和人は大きい伸びをして、いつもの関節を鳴らす仕草で体をほぐした。

木綿季は上体を起こし、真っ白いベッドの上でその様子を物珍しそうに見つめている。

仮想世界で毎度見ていた仕草を、現実世界でも目にすると、なんだかちよつとおかしな気分になってくる。

「ん……、いい匂いがするな? 朝食か?」

「うん、和人が起きなかつたから高橋さんが作ってくれたの。今日は……とろとろのポタージュだった」

和人は木綿季からメニューを聞くと、簡易テーブルに置かれている小さいスープ皿の蓋に手を掛けた。

白い湯気が立ち上っているカップの中には、黄色いトウモロコシの色に染まったポタージュスープが入っていた。

具はとろとろになるまで煮込まれたブレッドが何切れか一緒に入っている。昨日に引き続き、胃にやさしそうな献立だということを知ると、和人は安心していった。

「おお、美味そうじゃないか。むしろ俺が食べたいぐらいだぞ」

「だ、だめー！ ボクの朝ごはんだもん！」

「冗談だよ、あはは」

木綿季が猛抗議すると和人はやれやれといった表情を見せ、スプーンに手を取りほかほかのコーンスープをすくって、ゆつくりと木綿季の口に運んだ。

「わーい！」

「こぼすなよ？」

「わかつてるよー！」

現実世界に帰ってきてから二度目の食事に笑顔を振りまいている木綿季は、昨日よりも大変元気な様子だ。

上半身をうきうきさせリズミカルに揺らし、とても三年間寝たきりの身とは思えないほどの活発っぷりだった。

一日でほとんど声も出せるようになり、寝ている体勢から上半身を起こすことだけなら自分だけで出来る。

手先は少しおぼつかないが、大雑把に物をつかむことは一応出来る。

しかし持ち続けることはまだ難しいらしく、箸やスプーンなどといった細かいはすぐ落としてしまう。なので第三者に食事を手伝ってもらう必要があったのだ。

木綿季は和人にスープを運んでもらうと口を少し開けてスプーンを待ちかまえ、スープが口に入ってくるのを待った。

和人は木綿季がむせないように角度を調整して少しずつ木綿季の口にスープを流し込んだ。

濃厚なコーンスープの味が口全体に広がり、そこに細かく刻まれたパセリの独特の苦味が、いいアクセントを醸し出している。

「んー……、美味しい！」

「そうか、よかったな」

「ねねね、今度はそのパンが食べたい！」

「あいよ、ちよつとまってるな」

和人は木綿季のリクエスト通り、ポタージュがしみ込んでひたひたのところところになってるブレッドを、スプーンで一口サイズにちぎるとそれをスプーンですくい、木綿季の口へを運んだ。

木綿季はそれを一口でかぶりつき、ひと噛みひと噛みじつくりと味わい、スープとブレッドの感触を楽しむ。

「ほわ……すつごく美味しい……！」

「ふふ、よかつたな」

木綿季はすこぶるご機嫌だ。こここの所、HIVを克服したこともあり、体の調子が非常に良いからだ。

昨夜のお粥で木綿季の内臓が活性化されてきたのもあるかもしれない。それを表すかのように、実際朝起きた木綿季は腹ペコだった。

「和人も食べる？」

「んー……ちよつと興味あるけど、それはお前の食事だろ？ 少しでも栄養が必要なんだからお前が全部食べた方がいいんじゃないか？」

「あ……それもそっか。うん、わかつたよ」

ちよつとだけ木綿季は残念そうにしている。

しかしこの先、木綿季には大変なりハビリが待っている。そのためには少しでも多く食事を取り、身体中にエネルギーを行き渡らせて、しっかりと体を作らないとこれからの運動に耐えられないだろう。

「ほら、口あけて」

「あーん……、んむんむ……、うん！ やっぱり美味しい！」

和人からスープをもらう度に、木綿季は幸せそうだった。

これからずっと和人が傍にいて一緒に毎日を過ごせることに幸せを感じ、非常にイキイキとしている。

つい最近まで絶望の淵に叩き落されていたのが嘘のようだ。

「ね……和人……？」

「ん……何だ？」

「あのね……ボク、ちゃんとお礼を言ってなかったよね……？」

「ん？ 何をだ？」

「えつとき、ボクの病気を治してくれたこと……」

「ああ、そんなことか」

決して「そんなこと」で済まされる事案ではない。AIDSが治るなど前例が三件しかないレアケースにも近い案件だ。

それを一人の少年が計画して、周りの協力があつたとはいえ見事成し遂げてしまっているのだ。

患っていた木綿季本人も死を覚悟してた身として、まさかの完治を果たすという奇跡に最初は治つたという実感がなかつたぐらいだ。

「桐ヶ谷和人さん、ボクを助けてくれて、本当に……ありがとうございました……」

丁寧な口調でお礼の言葉を捧げると、木綿季はペコリと可愛らしく頭を下げた。その様子をみた和人は照れくさそうにしながらも、笑顔で木綿季を撫でて返事をした。

「俺は自分のやりたいことをやっただけさ。それに俺だけじゃない、明日奈や倉橋先生、SAOやALOのみんな、そして世界中の人たちのおかげだよ。俺はきっかけに過ぎないさ」

「それでも、ボクを助けてくれるって言ったのは和人だもん。ボクにとって和人は……ヒーローなんだもん……」

「……そうか、なら……俺はこれからお前を守り続けるからな」

「あ……うん、よろしくお願いします……」

恥ずかしいセリフをさらりと言う和人に、木綿季はたじたじになつてしまった。

今の今まで色恋話がなかつただけに、こういつた歯の浮くようなセリフを言われると、よくわからないドキドキしたものが、体のそこから浮き出てくるのを感じていた。

「ほら、冷めちまう前に全部食べちまおうぜ」

「あ……う、うん！」

木綿季は引き続き、和人にスープを食べさせてもらい、この日の朝食を無事完食した。

食べ終わる頃には身体はすっかりほかほかになり、幸せな気分と暖

かな気持ちで満たされていた。

「ふうー……ご馳走様ッ」

「お粗末！」

「……和人が作ったんじゃないでしょ？」

「あ……うん、そ、そうだな」

和人はこう言っただけではいるが、ちなみに調理者以外が「お粗末」と言うのは大変に無礼なので絶対に言わないようにしよう。

食事を終えると、和人は部屋に備え付けられている時計を見ながら時間を確認する。

「さてと、リハビリって何時からだ？」

「えっとね、確か9時からって聞いている」

「9時からか……、どんな内容なんだろう？」

「倉橋先生がボクの身体機能の現状を調べてそれを伝えてるはずだから、それに合わせてやってく感じかな？」

「そういえばお前、三年間寝たきりのわりにはすごい動けてる方だな？」

「そう……だね。力はあんまし入れられないけど」

「うーん、そういや俺もSAOから帰還した直後は一応歩くことは出来たな……」

和人を含むSAO事件の被害者は、ゆうに二年間以上も仮想世界に意識を囚われていた。

当然現実の体は動かせないので病院のベッドに寝たきりという状態に置かれていたのだ。

現在、和人は五体満足で日常生活を送っているが、目覚めた当初はリハビリなどで大変な思いをしたという。

しかし、全身の筋肉が弱り切っていたのにもかかわらず、たった一ヶ月で社会復帰を果たしたのだ。

普通なら考えられない日数だ。

「もしかしたら、フルダイブが関係してるのかもしれない……」

「え、フルダイブが？」

「ほら、普通寝たきりの人って文字通り寝たきりで意識がないか植物人間とかだろ？」

「う、うん」

「でも俺たちの場合はちよつと違う。体は確かに寝たきりだが、意識は別の世界と言えどはつきりあつたんだ」

「え、つまりそれって……どゆこと……？」

和人の言いたいことはつまりこうだ。

寝たきり、所謂植物人間と呼ばれる人たちは、身体を動かすことが出来ない。

考えられなくなったり、神経が死んでいたり、筋肉等の重要な部分が損傷、ないしは壊死してたりすると、動かせなくなる。

初めは諦めずに必死に身体を動かそうと頑張るが、無駄だと察してしまつと、それ以降一切諦めて体を動かそうとすることをやめてしまふ。

しかし、和人や木綿季といったフルダイブ経験者は少し違ふ。

身体を動かしていないことには相違ないが、脳からの信号は絶えず発信されている。

現実の身体を動かすか、仮想世界の身体を動かすかの違いでしかない。

だが、それこそが命綱になつたのだ。

脳から指令を発信し続けていたことにより、普通は動かせないぐらい弱っている手足も、これだけ動かすことが出来ていた、というわけである。

「……えつと、よくわからないけど……わかつたよ」

「……だめだこりゃ……」

「あはは♪」

それからは他愛のない会話が続いた。

二人の間には絶えず笑顔が交わされ、希望に満ち溢れたやりとりが続いていた。

しかし楽しい時間ほど過ぎるのはあつという間というもので、やがてすぐに木綿季のリハビリの時間が来てしまった。

コンコンという病室の扉をノックする音が聞こえる。恐らく倉橋先生と作業療法士の人が訪ねてきたのだろう。

木綿季が「はい！ どうぞー！」と元気な返事をする、病室のドアがスライドされ二人の人物が木綿季のもとに訪れた。

現れたのは主治医の倉橋と、もう一人、女性の医療スタッフだった。

「おはようございます木綿季君、朝食は食べられましたか？」

「おはようございます先生！ はい！ 和人が全部食べさせてくれたのでお腹一杯になりました！」

元気な木綿季の姿をみて倉橋に笑顔が零れた。やっぱり木綿季の元気な姿は見る人全てを元気にする不思議な力があつた。

「それはよかったです、この調子で続けていきましょー」

木綿季は「ハイ！」と元気に返事をした。

この先この笑顔が毎日近くで見られるとなると、心が晴れやかな気分になる。

まるでこちらまで元気をもらっているようだ。

「木綿季君、紹介します。木綿季君のリハビリテーションをサポートしてくれる、作業療法士の方です」

「や、和人君に紺野さん！ また会えましたね！」

「え……？」

「ちよ、高橋さん!? 何で!？」

二人は大いに驚いていた。

なんと木綿季のリハビリを手伝ってくれる作業療法士とは木綿季の栄養士でもある、高橋香里その人だったからである。

茶葉のウェーブに白衣といったコーディネートは変わらないが、右手にファイルらしきものを抱えている。

おそらく木綿季のリハビリのメニューが何かが印刷されているものなのだろう。

「あれ、あたし言わなかったっけ？ 栄養士と作業療法士の資格両方持ってるって」

「言っていないです」

「ボクも聞いてません」

「……あれ？」

高橋のあまりの天然ぶりに、木綿季と和人は呆れた表情を浮かべていた。

倉橋は倉橋で、頭を抱えてやれやれといった苦笑いを浮かべている。

「高橋君、ちゃんと通達はしないとだめですよ……、仕事の基本ではないですか……」

「う、うう……すみません……」

倉橋に怒られた高橋は口をおちよぼ口にし、眉を八の字にし、目からは涙が垂れ下がらせて反省モードになっていた。

二十代後半に差し掛かり、ベテランと呼ばれていてもおかしくない彼女のミスは、それはそれはらしくないものではある。

しかし、彼女はこれでいいのかもしれない。

完璧に全ての仕事をこなすことより、どこか一つ抜けている方が、愛嬌があつていいというものも一理あるというものだ。

「と、とにかく、木綿季君のリハビリも高橋君が担当しますので、お二人共よろしく願います」

「よ、よろしく願います！ 紺野さん！」

「ハイ！ よろしく願います！ あ、あと……ボクのごことは木綿季でいいですよ！」

香里が丁寧に頭を下げると、木綿季もそれに応えるかのように明るく元気な返事を返す。

「よろしくね、木綿季ちゃん！ あたしのことも香里って呼んでくれて構わないわ」

「あ……は、ハイ！ 香里さん！」

互いに挨拶を済ませると、早速木綿季のリハビリがスタートされた。

リハビリといっても、今の状態の木綿季をいきなり歩かせるという無茶なものではなく、彼女の身体の現状に合わせたメニューを、少しずつこなしていく、といった内容だ。

「ほい、そいじゃあ早速リハビリを始めます。木綿季ちゃん、先生から

ある程度はお話聞かせてもらってるんだけど、今……身体はどれぐらい動かせるかな？」

木綿季は高橋に聞かれると、今動かすことの出来る体を精一杯動かした。

寝ている体勢からの上体起こし、首を回す、上半身をひねる、腕を回す、指で物を掴むなどなど。

とても昨今まで重病患者とは思えない活発さだった。

「す、すごいわね……」

「そうでしょう……？」

呆気にとられている高橋を尻目に倉橋はのほほんと笑顔をこぼしていた。

どうです？　うちの娘はなかなかやるでしょう？　とでも言いたげな顔だった。

「でも、やっぱり長くは動かせないです、一回動かすともうすっごいどっと疲れちゃって……」

「まあそうでしょうね。これで持続出来たらもう凄すぎてあたしの出番なくなっちゃうかももしれないもん」

和人は苦笑いを浮かべながらその模様を見守っていた。

それと同時にこのプロにまかせても大丈夫なのか？　とも思っていた。

何でも噂では香里は栄養士であるにもかかわらず、独断で患者さんの治療食の味付けを濃くした前科があるらしい。

塩分過多の患者さんに作った食事だったのだが「これじゃあ美味しくない！」と言いなながら出汁と醤油を濃くしてしまったのだ。

栄養士にあるまじき行為だ。

その患者の翌朝の検査で異常な血圧の上昇を見せたことから発覚し、香里は院長に嚴重注意されることとなった。よく嚴重注意で済んだものである。

以上の噂を耳に挟んだこともあり、和人は少しだけ……というより、かなり不安だった。

「か、香里さん……本当に大丈夫なんですか？」

「何言ってるのよ！ あたしはプロよ？　すぐ木綿季ちゃんが動けるようにしてあげるから見てなさいって！」

(ふ、不安だ……)

「ま、まあ……彼女はぶつとんだ性格をしていますが、少なからず実績はあるので任せても大丈夫だと思いますよ、多分……」

「た、多分て……」

倉橋は「あ……」とうっかり口を滑らしたとでも言いたそうな顔をしながら「で、では仕事がありますので」と言い訳を残し、そそくさと病室を去っていった。

どうやら香里の奇想天外っぷりは、有能な倉橋でも匙を投げたくなってしまうほどらしい。

そして部屋に残った香里は仕切り直すべく、わざとらしい咳払いをして、改めてこれからのことについて、二人に説明を始めた。

「えー、オホン。では木綿季ちゃん、将来的にはちゃんと二足歩行で五体満足に歩けるような状態を目指して、これから頑張っていきましょうー！」

「はーいー！」

こちらはこちらで相性が大変よろしいようで元気な挨拶を交わしていた、挨拶だけでなくさっさと実践に移った方がいいと思うのだが…。

「聞いてると思いますけど、まずは上半身の筋肉を鍛えていきます」

「筋肉……？」

「ええ。背筋や腹筋、上腕二頭筋、上腕三頭筋など、上半身を維持するのに重要な筋肉を中心にまず鍛えましょう」

「えっと、ボク……ムキムキになっちゃうの？」

「ブフツ」

和人が盛大に噴出した。ムキムキマッチョな木綿季を想像して思わず吹き出してしまったようだ。

その様子をばっちり見られていたようで、木綿季は不機嫌オーラを全開にして、異様な視線を和人に送っていた。

「和人……あとで覚えておいてね」

「あ、は……はい、すみませんでした……」

このやりとりをすぐそばで見ている香里は、こりやあ和人君は尻に敷かれるなど感じてう。

微笑ましい、実に微笑ましいが、いつまで経つてもリハビリが始まらないので、ここで高橋が口を割って入る。

「いいですか？ それじゃあ気を取り直して始めていきましよう。先ほど言った通りに上半身を鍛えます。上半身を鍛えれば歩行器を使用して下半身のリハビリを始めることができます。なので……頑張らしましょう！」

「はい、よろしくお願いします！」

その後、木綿季は順調に、必死にリハビリを重ねていった。

両手を組んで左右に動かしたり、手のひらを握って開いてといった単純な動作を繰り返したり。

ベッドの手すりを使って腕だけの力で上体を起こしたりと。様々な方法で上半身を鍛えていった。

最初は体力がつかず、小刻みに休憩を挟みながらリハビリを続けていった。

すぐに息切れもしていたし、たまに腕や背中に痛みを訴えていたこともあった。

しかし毎日、毎時欠かさず繰り返していたことで少しずつ、少しずつではあるが、木綿季の動きは目覚ましいものとなっていった。

ちなみに下半身のリハビリも既にメニューに取り入れられていた。ベッドから降りて歩くというわけではなく、ベッドの上で横になりながら脚を動かしていくといった内容だった。

最初は香里が直接木綿季の脚に触れて動かしていき、徐々に徐々に木綿季も少しずつ動かせるようになっていった。

これを今のうちにやっていると言っていないとではだいぶ違うらし

い。

食事もりハビリが続き、身体が少しずつしつかりしていくと、お粥などの非固形物気味なものからはつきり形をしたご飯などに変わっていき、内臓の調子も非常によくなっていた。

今ではすっかりお肉も食べられる。

数年ぶりにお肉を食べた木綿季の顔は実に幸せそうで「すつごく美味しい！」と連呼していた。

日に日に元気になっていく木綿季の姿を間近で見てきた和人にはこれ以上の幸せはなかった。

西暦2026年7月25日(土) 午後17:25 神奈川県横浜市

金沢区 横浜港北総合病院 木綿季の病室

木綿季がリハビリを開始してから二ヶ月が経過し、世間では季節が変わり夏になっていた。

明日奈たち学生は夏休みに入っており病棟の外では暑苦しくセミが鳴き声を響かせている。

和人が最も嫌う季節であった。

そしてこの日は、木綿季のリハビリの経過を観察する日でもあった。この上半身の検査をクリアすれば、病院敷地内限定ではあるが車椅子での外出が許されるのだ。

その為にも木綿季はこの日のリハビリに、より一層の気合をいれて挑んでいた。

「では木綿季ちゃん、今から昨日伝えてあった項目の全ての動作を試してみてください」

「は、はいー」

木綿季はまず、寝ている状態から上半身の力だけで上体を起こした。身体を起こすとまた上体を寝かせ、右腕の力で起こす。今度は左腕

で同じ動作をする。

その次は上体を左右にひねる。映画マトリックスのように背中を反らす。上体を前に倒し、腕を伸ばす。

それが終わると今度は女の子でも持てるぐらいの重りを取り出し、腕の動作を始めた。

腕をひねったり、肘を曲げる動作をしたり、肩を回転させたり、手を動かしたり。

同じ動作を反対の手でもやってみせた。

「うん……上体、腕は完璧ね。次は手先をやって見せて頂戴」

「は、はいっ」

香里は木綿季の目の前にいろいろな結ばれ方をした紐を何個か置いた。指先がちゃんと機能しているかの確認だ。

木綿季は紐を掴むと、一つ一つ丁寧にほどこいていき、目の前に並べられた紐を全てほどこいて見せた。

以前プレゼント箱の包装リボンを解いた時のようなおぼつきは全く見られず、スラスラと解いていけていた。

次に高橋が置いたのは小麦で出来た粘土だ。サンプルを隣に置き、これと同じ形に仕上げるという。

形は円、四角、三角といったシンプルなものだ。

「んしょ……んしょ……」

木綿季は粘土で手を汚しながらも一生懸命に、サンプル通りの形に粘土の形を整えようとしていた。

元々図工などといったものは苦手だったらしく、表面は凸凹で時間もかかったが、なんとかそれらしい形になった。

「ふう……出来ました」

出来上がった粘土を、香里が右手でヒョイと掴みあげ、様々な角度から確認する。

三つとも真剣な眼差しで見つめ続け、全てを見終わるとそれを元の位置に戻した。

「……うん、ちょっといびつだけどOKね。それじゃあ次はこれ」

「え……？　こ、これで終わりじゃ……？」

木綿季は目を丸くして驚いていた。

検査する項目は粘土まででお終いと、香里から聞かされていたからだ。

しかし、なんと抜き打ちでもう一つ、握力を確認するための検査が控えられていたではないか。

困惑している木綿季の目の前には、握力を鍛えるときに使用されるハンドクリップが置かれていた。

「これを左右三回ずつ、めいっばいまで握ってみせてください」

ハンドクリップは成人男性でもそう簡単にいっばいまで握れるようなものではない。

か弱い女の子、ましてやりハビリ中の木綿季には難易度が高すぎる代物だ。

「木綿季……出来るか？」

「う……うん、ボク頑張ってみる……」

木綿季は大きく息を吸い、また大きく吐き出し気持ちの準備を整えると、右手に渾身の力を込めてハンドクリップを握った。

力を込めていく度、ギギギという金属音が響き、少しずつハンドクリップが閉まっていった。

「んん……うんん……！」

「木綿季……頑張れ！」

木綿季は顔を真っ赤にしてハンドクリップを握りしめており、額からは汗が出ていた。

握っている右手は二の腕から手先までプルプルと震えきってしまっている。

しかし、やはり女の子には厳しかったのか、予定の半分の位置まで握られたところで、木綿季の右手は限界を迎えてしまった。

「あうっ、あ……」

「ふむ……、それじゃあ今度は左手よら木綿季ちゃん。行っておくけど右がだめだからって、手を抜いちやだめよ？」

「あ……はい、分かりました……」

木綿季の顔は悲しそうな表情を浮かべていた。

あと一歩で病室から出られるかもしれないのに、その可能性を潰されてしまったことでテンションが下がってしまった。

もう半分どうにでもなあれといった気持ちで、若干ヤケクソ気味に左手でハンドクリップを握りしめた。

「う……………ん、くう……………」

左手にも力を込めてハンドクリップを握りしめる。

しかし彼女の利き手は右手だ。先ほどよりも浅い位置までしか握られていなかった。木綿季の体力の方もそろそろ限界に来ているようで、上半身は汗でびしょびしょになっていた。

「あ……………う、うう……………」

左手に力が入らなくなってしまった。

その手からハンドグリップがポロツと、ベッドに備え付けられたテールに音を立てて落ちた。

その厳しい現実を見てしまった木綿季は、すっかり萎縮し、暗い表情になってしまっていた。

「木綿季……………」

和人は心配そうに声を掛けるも木綿季は今にも泣きだしそうな表情で和人を見返していた。

「和人ごめん、ボク……………だめだった……………」

今にでも泣き出してしまいそうな木綿季をはげますべく、和人は彼女の目線と合うように腰をおらし、優しく声を掛けた。

「また次があるさ、それまでまた……………鍛えなおそうな？　俺も傍にいるからさ」

「う、うん……………」

木綿季の目には涙が浮かんでいた。折角ここまで頑張ったのに結果に結びつかなかった。

次の検査はいつなんだろう、ボクはいつここを出られるんだろうと、そんなことを思い浮かべていた。

しかし、そんなどんよりとした空気は、香里の次の一言でぬぐい去れることとなった。

「うん、合格よ。木綿季ちゃん」

「……へ？」

和人と木綿季の頭には？マークが浮かんでいた。

どうして合格なの？ 今誰がどうみても結果はダメだったと思う。そんな混乱する二人に対して倉橋が代わりに説明に入る。

「すみません木綿季君、和人くん。お二人をだますようなことをしてしまいました。先ほどのハンドクリップ試験は……言わば試験外の項目だったのです」

「え、それは……どういうことですか……？」

「騙すだなんて……先生、失礼です。私は別に嘘はついてません。通達通り粘土の項目で検査はお終いですし最後のハンドクリップは私個人が、木綿季ちゃんの握力を観ただけなんですからね」

内情を知っている二人を尻目に、すっかり置いてけぼりを食らってしまったっている和人と木綿季は、きよんとした表情を浮かべたまま、まだ現在の状況が掴めないままだった。

「え……えと、つまりどういうことですか……？」

「えっと、つまり粘土の時点で検査は既に終わってまして、その後の握力チェックはいわばオマケということですね」

「お、オマケエ……!？」

「ええ、そこまで強く上半身、腕、手に力が入るのなら下半身のリハビリも円滑に進められると思います」

「さっきも言ったけど合格よ、木綿季ちゃん。おめでとう」

合格を告げられたにも関わらず、木綿季は顔をぼかーんとして口を開けたまま、すっかり固まってしまっている。

拍子抜けというか、現実味がないというか、今の自分の置かれた状況がイマイチ理解出来ないでいた。

「木綿季？」

「え……、……あ、うん。大丈夫……」

「香里さん、合格ってことは、もう車椅子で病室の外に出ても大丈夫なんですか？」

「もちろんOKよ、必ず誰かが同伴していれば……だけどね。まあでも、そこは君がついてくれるし、大丈夫でしょ？」

病室の外に出れる。その言葉を聞いた木綿季はぱあつと明るくなり、目をきらきらさせながら和人に喜びの笑顔を贈った。

「和人！ 聞いた!? お外出てもいいって！ やったあー！」

木綿季は満面の笑みをまわりに振りまきながら、手を思いつきり上にあげて飛び跳ねるように喜んだ。

まるでもう退院を許可されたかのような喜びっぷりだった。

しかしあながち間違いでもない。

このままいけば下半身もすぐに鍛えられ、歩行器なしでも歩ける日が来るだろう。その時こそが、本当に木綿季が退院出来るときだ。

「和人君がいるときは、和人君が見てあげてください」

「はい、もちろんです。無茶して木綿季に怪我させたりなんか絶対にしませんよ」

「ふふ、君がそう言うってくれるなら……安心ですね」

倉橋は車椅子で立ち入っていい場所とダメな場所の説明と、院内の地図にマーカーを引き、それを手渡すと改めて「おめでとう」と言い残し、仕事を終えて退室していった。

「それじゃあ木綿季ちゃん、明日からは下半身のリハビリに移ります。

ベッドの上でやってたことを、よく……思い出してね？」

「は、はい！ ありがとうございます！ 香里さん！」

香里も書類をまとめると笑顔で木綿季の礼に応え、病室を後にした。

香里が退室すると、木綿季の病室には和人と木綿季の二人だけになった。

少しの間、静寂が流れた。

ここ数年、病室の外に出ることを許されなかった木綿季が、外に出ることが出来る。

それを考えただけでも感慨深いものがある。

「やったな……木綿季」

「うん、ありがとう……和人」

和人はそう言いながら、優しく木綿季を抱きしめた。

現実世界に帰ってきたばかりの時と違い、力強く抱きしめた。

抱擁した木綿季の上半身は、以前よりしつかりしていた。目覚めたばかりの頃のひよろひよるとした面影はもうどこにも見られなかった。

「……で、どうする？　もう外に行ってみるか？」

「あ……そうだね、うん！　和人お願い！」

和人は病室の隅に置かれている車椅子を慣れない手つきで開いていった。

安全装置を外して車輪が回るようになると、それをそのまま押して木綿季のベッドの隣まで持ってきた。

「えっと……木綿季、移れるか？」

「え……う？　んー、ちよつとやってみるね」

木綿季はそう言うのと、腕の力でベッドから身体をずりずりと動かし

よく見てみると、リハビリの成果がでているのか、脚の筋肉、それも太ももの辺りが以前より張ってきていてふつくらとしていた。

頑張つて身体を動かしていくと、やがて木綿季は足だけベッドから出ている状態になった。

「えっと、ここから……どうしよう……」

ベッドに座りながら木綿季は考えていた。

距離が近いとはいえ、車椅子に移る為には一度完全に「立たないと」いけなくなる。

少しだけ足が動くとはいっても、とても今の筋力では木綿季の体重を支えるだけの力はなかった。

おろおろしながら木綿季が困っていると和人が助け船を出した。

「仕方ないな、木綿季……ちよつと失礼するぞ？」

「え……何？　つてうわあっ!？」

「えと……そ、その……和人……？」

「ふふやっぱり軽いな……木綿季は」

「あ……う……」

両肩を支えたり、両手を持って手伝ってあげたりと、他にやり方はいくらでもありそうだというのに、和人はあろうことか女の子の憧れでもある、お姫様抱っこで木綿季を優しく持ち上げていた。

木綿季もこんなことされると思っていなかったようで、すっかり顔を真っ赤にしていた。

和人が手を貸してくれるにしてもせいぜい両手を持ってくれるか、若しくはおんぶかだっこだらうと想像していたのだ。

まさか迷いもせずにお姫様だっこされるとは微塵にも思わなかった。

和人はやさしくゆっくりと木綿季をベッドから持ち上げると、そのままゆっくりと車椅子に木綿季を優しくおろしてあげた。

「よし、いこうか」

「う、うん……ありがと……」

木綿季の心臓は鼓動が早くなりすぎて張り裂けそうになっていた。心の準備をしていなかったこともあり、ドキドキしすぎて、もうわけがわからなくなっていた。

「なあ、どこかいてみたいところとかあるか？」

「……………」

「……………木綿季？」

ドキドキしすぎて周りが見えてない木綿季の視界を遮るかのよう
に、和人が木綿季の目の前にまで顔を近づけた。

「わあっ!？」

「のわっ! ど、どうしたんだ……」

「な……なんでもないよ! なんでも! と、とりあえず外移動しながら考えよ! そうしよ!」

「え……? ま、まあ木綿季がいいなら俺もいいけど……」

和人は木綿季が乗っている車椅子を押し、部屋の扉を開いて後ろ向きに出た。

廊下を通過するものが木綿季に当たらないよう気を使っていたのだ。

木綿季の心臓の鼓動はしばらく勢いを止めることがなかった。

木綿季は実に三年ぶりに自分の病室以外を出歩いていた。

出歩いてるといつても和人に車椅子を押してもらいながらであるが、とにかく久しぶりに見る外の様子に興奮を抑えられないでいた。

「ねえ和人！ 人が！ 人がいっぱい歩いてるよ！」

「ほとんど他の患者さんと看護師さんだろ？ ここは病院なんだから」

「ぶー……知ってるもん。和人は見慣れてるだろうけど、ボクは……」

「あ……そ、そうだったな……すまん」

「んーん、別にいーよ」

和人が謝ると木綿季の視線は再び車椅子の外に向けられていた。

病院内だが木綿季には大変に新鮮であった。現実の外の模様など忘れかけていた。

VR空間での光景が、木綿季の全てだったからだ。

「楽しいか？」

「うん、すつごく楽しい！」

「……そうか」

木綿季を乗せた車椅子は病院の一階ロビーのエントランスに差し掛かっていた。

何気なく受付の方向に目をやると、和人の知っている顔が仕事に身を入れている。

「あ、あの人は……」

「ん？ どうしたの？」

「ああ、ちよつと知ってる人がいるんだ。挨拶しに行くぞ」

「はーい！」

木綿季が元気よく右手を上げて返事をする、和人は受付に向かい車椅子を押し始めた。

やがて受付に近付いてくるとスタッフの方から和人達に気付いたようだ。

その人は和人が木綿季への面会に来た時に、受付をしてくれたお姉さんだった。

「あら、和人君じゃないの。珍しいわね？　受付に顔を見せるなんて……」

「どうも、病院内にいるのに随分ご無沙汰してしまつて」

「わざわざ顔を見せに来てくれたの？　……あら、そちらの女の子はもしかして……？」

お姉さんは木綿季の姿をみてひよつとしてという顔をした。

普段一人で院内を出歩いている和人が、寝巻に車椅子の女の子を連れて歩いているという事で察したようだ。

「ハイ！　紺野木綿季です！　ボクの病気を治してくれて、本当にありがとうございます！」

「ま、まあ……紺野さん！　すっかり体が元に戻つて……」

お姉さんは感慨深そうに木綿季のことを見つめていた。

直接は木綿季に関わっていたわけではないがここの病院に勤める者として、木綿季にはやはり特別な気持ちがあつたようだ。

「はい！　今日から車椅子での外出を許可してもらつたんです！　敷地内だけですけどね♪」

「それはそれは……よかつたじゃない。おめでどうね……紺野さん」「ハイ！　ありがとうございます！」

木綿季はエントランス内に響き渡るぐらいの活発で明るい元気なお礼をした。

様々な病氣や怪我を抱えている人たちにとつても、元気を分けてもらっているような感じがした。

「でも、二人きりで出かけているってことは……これは"デート"ってことになるんじゃないかしら？」

「ブフツ！」

「デデデデデ……デート!？」

この瞬間。和人は思い出した。

そうだ、俺はここの病院の人たちの、ちよつとした噂の標的となつていたので。

こんな人通りの多いところにいたら、あちらこちらから女性スタッフ
が舞い降りてきて、格好の餌にされてしまう。

それだけは断じて御免だ、俺のこともそうだが木綿季とのんびりで
きなくなってしまう。

「そ、それじゃあ失礼します！ 行くぞ木綿季！」

「え？ わわわっ、おねえさーん！ またねー！」

和人に急に車椅子を方向転換されて驚くも、木綿季はお姉さんに
しっかりと別れの挨拶をしたのだった。

お姉さんはにこやかに、微笑ましそうに笑顔で手を振ってくれてい
た。

慌ててエントランスから脱出した和人は、とりあえず人通りの少な
いところを目指し、廊下を進んでいた。

もういじられるのはいやだ、あんなこっぴどい目にあうのは御
免だと、そう思いながらひたすら突き進んでいた。

「はあ……はあ……、結構進んできたな」

「う、うん。多分だけど病院のはじつこまできてるんじゃないかな？」

「うーん、ちよつと道が分からなくなっちゃったぞ……」

「……もう、適当に進んできたからだよ……」

木綿季は和人の無計画さに若干呆れ顔になりつつも、なんだかんだ
でこの状況を楽しんでいた。

ずっと病室にこもりきりだった身としては、体験すること全部が新
鮮で楽しかった。

このぐらい刺激的で先がわからない方が楽しい。隣に大好きな和
人がいるならば、なおのことだ。

「ねえ和人、あそこ……大きいエレベーターがあるよ」

「本当だ、マンションやデパートとかで見るエレベーターよりはるか
にでつかいな……」

二人が見ていたのは、患者をベッドごと運べるように設計されてい
るエレベーターだった。

病院のエレベーターではこういった、大きく面積をとったエレベ
ーターがよく設置されている。

緊急搬送された患者を運ぶときにも重宝している。もちろん普段通り乗ることも可能だ。

「ね、和人……」

「ん……何だ？」

「ボク、屋上……行ってみたいな」

「屋上……？」

「だめ……かな……」

「……いいぜ、行こう」

この時、和人は木綿季との約束を思い出していた。

アルンの街でユウキに告白した時に、現実世界での夕陽を見せてやると約束した時のことを。

現在の時刻は18時過ぎ、今なら陽も傾きいい感じに涼しくなっているかもしれない。

そして何より木綿季との約束を守ってあげたかった。

和人はエレベーターのスイッチを押し、エレベーターが和人達がいる階層まで降りてくるのを待った。

上から駆動音が聞こえてくると、徐々に音が大きくなってきた。

しばらくしてエレベーターが到着し、金属の扉が開くと、そのまま車椅子を押しして乗り込み、パネルのRと書かれたボタンを押しした。

「すっごい広いねー！」

「ああ……一人暮らししている人のワンルームぐらいあるな」

「和人の部屋とどっちが広い？」

「そりゃ俺の部屋だよ。俺ん家自体それなりに広いからな」

「へえー……そうなんだ♪」

なんてことない会話をしているうちに、エレベーターは段々と階層を上に登っていき、やがて屋上までたどり着いた。

エレベーターがチンという音を立て、着いたことを知らせる。分厚い扉が開くと目の前に今度は重苦しい鉄製の扉があった。

和人は車いすから片手を離してその鉄製の扉のドアノブに手を掛けて扉を開いた。

ギィ……という音とともに扉が開くと、外からは風が吹き込むと同

時に、都会によくある雑音が聞こえてきた。

遠くや近くを走っている車の走行音、屋上に吹く風の音、川の流れのせせらぎの音など、様々な音が流れてきた。

「うわあ……外だ……」

木綿季は実に数年ぶりに建物の外に出た。

病院敷地内の屋上とはいえ、真上にオレンジ色に染まった夕空をとらえていた。

西の空にある沈みかけた太陽には、適度な形の雲が覆いかぶさっており、見事な夕焼け模様を描いている。

そのオレンジ色の美しく輝く夕陽を、木綿季は自身の瞳に焼き付けていた。

「……キレイ……」

「ああ、そうだな……」

二人はすっかり現実世界の夕陽に魅入っていた。

かつてSAOで決闘デュエルした時、ALOでキリトが告白した時。

そして現実世界で夕陽をまた見せてやると約束した時。

その時と同じ光景……いや、それ以上に美しい夕焼け空だった。

「約束、守れたな……」

「うん、すつごくキレイだよ……」

木綿季の目にはうつつすらとだが涙が浮かんでいた。まさか自分が再び現実の夕陽を見れるなんて思っていた。

それと同時に、また約束を守ってくれた和人に感謝の気持ちでいっぱいだった。

木綿季は自身の胸に両手を当てて、何やら物思いにふけていた。

しばらくすると顔を上げて、和人の方を見ると、感謝の気持ちを伝えるべく、ゆっくりと口を開いた。

「和人、ありがとう……」

「ん……、気にするな……」

「それでも、ありがとう……」

「……ああ、どういたしまして」

この後二人は完全に陽が沈むまで、ひたすら夕暮れを楽しんでい

た。

二人がいる金沢区全体を夕陽がオレンジ色に染め上げており、この世界に浸っていた。

やがて時間だ経ち、気が付くとすっかり夕食の時間を過ぎてしまっていた。

しかしその頃、病院は少し慌ただしくなっていた。夕食の間になっても戻らない木綿季たちを、倉橋が必死に探していたのだ。

遅い時間になってからひよっこり姿を現した二人が、倉橋や香里にこつぴどく怒られたことは言うまでもない。

木綿季のリハビリの方も順調に進み、残すは下半身のみとなった。いよいよ退院の日が、目の前まで迫ってきている。

しかしそれは倉橋にとって、最愛の娘との別れを同時に意味するものとなっていた。

次回、ソードアート・オンライン マザーズ・ロザリオ ボクの生きる意味 闘病編 最終回「門出」

第40話く門出く

こんにちは！ ボクの名前は紺野木綿季！ パパとママと姉ちゃんの四人家族で暮らしてるんだ！ パパたちはとつてもやさしくて毎日が本当に楽しいの！

姉ちゃんはたまに怒るけど、でもボクのことを誰よりも近くで可愛がってくれる。いつつも手をつないで近くで守ってくれて、ボクが誰よりも大好きな姉ちゃん。

こんな素敵な家族に囲まれて毎日を過ごしてきた。でもね、パパ達は時々悲しそうな目でボクを見るんだ。何でなんだろう……？

姉ちゃんも泣きそうな目で見るときがある、でもそれが何でかは、ボクにはわさっぱりわからなかった。

ある日、病院につれてかれた。先生にボクはAIDSだって言われた。

ボクの体は……めんえきりよく？ つてのが弱ってていろんな病気にかかりやすい体になってしまったんだって。

正直お医者さんが何を言ってるのかよくわからなかったけど、姉ちゃんたちは泣いてた。

多分、ボクの体に良くないことが起きてしまってることだけは……理解できた。

以前からボクの体にはHIVって悪いのが潜んでいたんだって。いつからかそれがクラスの皆に知られた時、周りの友達は全員ボクを敵視した。

ぶたれたり蹴られたり、物を隠されたり机を離されたり。ひどいじめにあつた。先生も味方してくれなかった。近所の人もお家に嫌がらせをするようになったよ。

それからは病院がボクのお家になった。ボクの面倒を見てくれる倉橋って人がボクの先生になってくれるんだって。

パパとママはすつごく泣いていた。やっぱりボクに、よくないことが起こってるんだ。

入院してしばらくして、ボクの体がだんだんおかしくなっていた。全身が寒いのか熱いのかよくわからない。一体ボクの体はどうなっちゃったんだろう。

それからボクは、むきんしつってという部屋に連れていかれた。ボクはそこから出られない体になってしまったんだって。

それでも、それでもボクの傍にはいつも姉ちゃんがいたから、寂しくなかった。

先生は元気を出してくださいって言うてくれた。ボクはいつも元気だから大丈夫ですって返した。

それから何日かすると、倉橋先生がボクにメイキキュボイド？　っていう大きい機械を使ってみないかって提案をしてきた。

感染症っていうのを治すために薬を使うんだって。でもそれを使うと副作用でいろんな苦しみが襲ってくるんだって。

でもこの機械を使えばそれらが全く感じなくなるらしい。

それどころかぶいあーる？　とかいう仮想の世界で思う存分体を動かせるという。

そしてボクがその機械を使うことによって同じ病気で苦しんでる人たちの助けになるって言うてた。

パパとママは反対したけど、ボクはその機械で仮想の世界に行ってみたかった。

ボクの体は弱り切ってまともな運動が出来なくなっていた。普通に歩いたり出来るけど、ボールを蹴ったり、追いかけてこしたりはもう……出来なくなっていたんだ。

ボクはその機械を使うことにした。最初は怖かったよ？　変なヘルメットみたいなものをかぶされて目の前が真っ暗になった。

ここはどこなんだろう？　って思ったら……すごいの！

目の前にSF映画とかで見たようなものがいっぱい！　ボクはその光景に感動した。ここが仮想世界ってやつなんだ！　って。

それからボクはその仮想世界に夢中になった。いろんな世界にいった。病気で入院してるといふ友達も出来た。その友達といろんな世界に遊びに行つて、様々な冒険をしたよ！　全てが初体験で何も

かもが楽しかったんだ。

でも、起こるのは楽しいことばかりじゃなかった。

二年前、パパとママが死んじゃった。

ボクと姉ちゃんは泣いた。悲しかった。あんなに優しいパパとママが死んじゃうなんて信じられなかった。

二度と会えないって思うと涙が止まらなかった、でも姉ちゃんはボクを抱き締めて元気づけてくれた。

姉ちゃんだってボクと同じぐらい……いや、それ以上に悲しいはずなのに。

そして友達も……一人ずつ、ボクたちの前からいなくなっていた。

最初にクロービス、次にメリダ。そして一年前、ボクの姉ちゃん、ラシこと……紺野藍子も。

みんなボクの傍からいなくなってしまった。

それから先生から聞かされた。ボクの余命はもう三ヶ月もないって。我々の医学が足りないばかりに申し訳ないって言ってた。

でもね……ボクは不思議と死ぬのは怖くなかった。いつ死んでもいいけど、最後にとびっきりの思い出を残したいっていう気持ちの方が強かった。

そうすればさ、死んじゃって別の世界に旅立っても、その思い出と一緒にに行ける気がしたんだ。

だから……残りのメンバーと一緒に助っ人を探したんだ。ボクと同じくらい強いか、それ以上の強さの人を探そうとしたの。

それから色んな人と手合わせしたけど……てんでダメ。ボクはおろかスリーピング・ナイツのメンバーの誰にも勝てないような人たちばかりだった。

でもある日、すつごく強い人が現れた。ウンディーネの女の子とスプリガンの男の子。

ボクはそのスプリガンの男の子を知っていた。ずっと前に偶然迷い込んでしまったあの「SAO」で出会ったんだ。

キリトって名前でその時戦ったけどとっても強かった。HPがゼ

口になったら本当に死んじゃうから、お互い手加減してたけどそれでも強かった。

ウンディーネの女の子はアスナって言うんだって。細剣を使うとっても強いお姉さんだった。決闘は途中^{デュエル}でやめてしまったけど、その強さにボクは大興奮！

キリトとアスナと一緒にスヴァルトアールヴヘイムを冒険して、イベントボスを討伐しよう！ってお願いをしたんだ。

二人は快く承諾してくれた！ 嬉しかったなー！

あ、決闘は途中でやめちゃったけどほとんどボクの勝ちみたいなもんだったからね？

道中邪魔もいたけど、なんとかみんなで頑張ってイベントボスを倒すことが出来た。

キリトはボクたちの名前を黒鉄宮の戦士の碑に残すために、ボスへのトドメの直前にわざと転移結晶で離脱しちゃった。そしてそのあとすぐにボスにトドメを刺せた。

二人のお陰だ、二人のお陰で……ボクたちは最高の思い出を残すことが出来た。

これでもう、思い残すことはない……。

ボクは嬉しさのあまりアスナに飛びついた。そして、何故かアスナのことを「姉ちゃん」って呼んでしまったんだ。

その時ボクは気付いた、アスナと……一線を越えた関係になってしまっていたことに。

それから、ボクはアスナの前から姿を消した。これ以上関わらないために。これ以上悲しませないために。

そしてALLOの最後の光景を見たくてこっそりログインしたんだ。そしたらさ、キリトに見つかっちゃった。

でもキリトはアスナに言いつけるようなことはしなかった。ただ、もう一度君と戦いたいって、それだけ言ってくれた。

ゴメンねキリト、それは多分もう無理なんだ。ボクはもうALLOにログインするつもりはないからさ……。

それからボクはALLOから姿を消した。仮想空間のボクの部屋に

引きこもった。そしたらさ、ボクを直接訪ねてきた人が現れた。キリトとアスナだった。

何にも教えてなかったのに、二人はボクのところに来てくれた。倉橋先生はボクの体のことを、全部二人に教えちゃったみたい。

それを聞いたアスナは大粒の涙を流して泣いていた。

あーあ……悲しませるから、言いたくなかったのにな……。

ボクは直接自分の口で伝えたくて、隣の部屋のアミスファイアを使ってログインするように伝えた。キリトは自分のアミスファイアでログインしてたよ。いつも持ち歩いてるのかな……キリトは？

ログインしたボクは二人に直接ボクの体のことを伝えた。そして、もう二度と会わないようにしようって言った。

これだけ言えば大人しく諦めてくれるかなって思ったんだ。そしたらさ、アスナはボクに決闘デュエルを申し込んできた。

ぶつからなければ伝わらないことがある。以前ボクがアスナに言ったセリフをそのまま返してきたんだ。

アスナはボクに伝えたいことがあるんだって。だから、闘おうって言うてきた。ボクはボクの信念を曲げるつもりはなかったから、その決闘デュエルを承諾した。

勿論負けるつもりはなかったよ？ きちんと勝って諦めてもらうつもりだった。

でも、その時のアスナの強さは本物だった。

ボクは姉ちゃん以外で決闘デュエルに初めて負けちゃった。技術とかもそうだけど、アスナから勝ちたいっていう信念が感じられた。

それと同時に、アスナの気持ち……伝わってきた。

最後の瞬間までボクと一緒にいたい、もっといっぱい一緒に思い出を作ろうって。

キリトも歩み寄ってくれた。スヴァルトアールヴ Heim にはまだたくさん行ってない場所がある。だからみんなで冒険しようって。

ボクは嬉しかった。ホントに……ホントに嬉しかった。

こんなボクのために、ここまで追いかけて、全力でぶつかってきてくれた。この時、ボクに初めて「友達」が出来たんだ。

それから……余命三ヶ月と言われたボクの体は、調子がよくなってきた。

理由はよくわからないけど、H I Vの活動が弱まってきたんだって。

これからまだまだ生きれそうだった。いつ死ぬかは分からないけど、まだしばらくまだアスナたちといっぱい遊べそうだった。

その楽しい毎日はずっと続くと思ってた。

でもね、ボクの余命とは関係なしに、アスナはボクの前からいなくなってしまった。

ボクが余計なことを言ってしまったばかりに、アスナはお母さんと仲違いをしてしまった。そしてその関係でキリトと別れることになってしまったと。

ボクがみんなの関係を壊してしまった。

ボクの所為だ、ボクが……ボクが余計なことを言ってしまったばかりに、全て台無しにしてしまった。

そしてアスナは別れる前に、最後にボクにお願いごとをしてきた。

「私が不甲斐なかったばかりに悲しませてしまったキリト君のことを元気づけてあげてほしい。こんなことユウキにしか頼めないから」って。

違う、違うんだアスナ。アスナの所為じゃない、ボクが……ボクがいけなかったんだ。

ボクの心は罪悪感と後悔の念でいっぱいだった。押しつぶされてどうにかなくなってしまいそうだった。

でもアスナの最後のお願いを、約束を守るために……ボクはキリトに近付いた。

キリトと色々な事をした。^{デュエル}決闘もしたし、キリトの泣いてる顔も見れたよ。

たくさん食事も出来て、キリトのお家にもお邪魔したし、二人で冒険にも出掛けたよ！

迷宮区は二人で突破できたし、いろいろあったけど29層のボスも二人だけで倒すことが出来た。

最初はアスナとの約束を守るために、キリトと一緒に遊んでた。でも途中でボクからの、キリトへの感情が今までと違うってことに、少しずつ気付いていった。

そしてボスにやられそうになってるキリトを助けることが出来て、ほつとしたときにボクは、キリトのことを好きになってしまっていたことに気が付いた。気が付いてしまった。

ボクはまた逃げ出した。

かつてアスナの目の前から姿を消したように、キリトの前からも姿をくりました。

おこがましかった、ボクに誰かを好きになる資格なんてないと思っ
ていた。

すぐ死ぬと分かっている恋人と付き合うなんてどうかしてる、悲しま
せてしまうだけだ。

ボクももうこんなことはいやだった。ボクの我儘で周りを不幸に
するくらいなら、もう誰ともかからわない。

一番理解してくれている倉橋先生だけいればいいと思った。

そしたらね、キリトもボクを追いかけて来てくれた。場所は知って
るから来るとは思ってたけど。

キリトは一生懸命ボクに訴えてた、話したいことがある、伝えたい
ことがあるって。

でもボクは無視した、拒絶した。

もう誰も悲しませなくなかったから。ずっと無視していたら、キリ
トがすつごく悲しそうな顔をしていた。

それでもキリトは訴え続けてくれた。聞いてくれるだけで構わな
い、聞きたくないなら無視してくれて構わない。

そして、これ以上お前を悲しませたりするぐらいなら、俺はもうお
前と会わないと言った。

その言葉を聞いた瞬間、ボクの心の底が抉られる思いがした。大切
な何かを失ってしまう感じがした。

その場から去ろうとするキリトを、思わず呼び止めてしまった。な
んだかよくわからないけど、呼び止めて話をしないといけないような

気がしたからだ。

ボクはキリトとALLOで顔を合わせて話そうと伝えた。キリトと決闘したあの緑の丘で話そうって。

ボクは先にその場所について、キリトを待った。それからすぐにキリトはやってきた。

ボクはキリトに何を言われても構わないと決めていた。

どんなに責められてもいい、罵られてもいい。ありのままの言葉を受け入れようって思っていた。

でもキリトは……ボクが、唯一受け入れられないことを口走った。

ボクのことが好きだって……。

ボクは訳が分からなかった。何でボクのことを好きになったの？絶対に先に死んじやうのに、悲しませちやうのに。だからキリトから逃げたのに……。

ボクは涙を流しながら説得した。また拒絶しようとした。

二度と会わないようにしようって伝えた。ほぼ一方的にボクの意見を並べた。

これだけ言えば、もう身を引いてくれるかなって思ったよ。だって、自分の体のコトは、自分がよくわかってるから。

そしたらキリトはボクを抱き締めてきた。

勝手なことを言うな、死ぬだなんて許さない。俺が生きてる間は絶対に死なせない、だから諦めるなど。こう言ってくれた。

何で……？ 何でキリトはそんなに優しいの？

こんな……先がないボクのために、どうしてそこまでしてくれるの？

ボクは涙が止まらなかった、ここまでボクに近付いてきてくれた人はいなかった。男の子から好きだなんて言われたのも初めてだった。でもそれ以上にキリトの言葉に安心出来た。キリトなら、ボクの病気を治してくれるような気がしたからだ。

だからボクは、キリトを信じた。絶対にキリトならボクを助けてくれる。

ボクもキリトに告白した。キリトのことが好き、そう伝えた。

その後ボクらは口づけをした。男の子とキスをするなんて初めてだった。温かかった、安心できた、そして何より嬉しかった……。それからキリトは現実の世界で、ボクを助けるためにいろんなことをしてくれた。

骨髄移植のこと、ドナーを集めるためのライブの計画、そして、手術本番の時もずっと一緒にいてくれた。

退院後は学校にも一緒に通う約束もしてくれた。アスナたちが通っているあの学校に行けるというのだ。

家族も出来たよ。キリト……いや、和人のお母さん、翠さんと妹のリーファこと直葉もボクに会いに来てくれた。

そして退院後、桐ヶ谷家にいらつしやいつて言ってくれた。退院後のボクを養子として迎え入れてくれるというのだ。

ボクは嬉しかった。何もかも全て失ったボクだったけど、この短い期間で失ったものを再び手にすることが出来た。

全部和人のお陰だ。和人がボクのために動いてくれたから、ボクはまた新しい希望に向かって歩くことが出来た。

そして、とうとう和人はボクの病気を本当に治してくれた。治してくれたっていえば簡単に終わったように思えるけど、ここま

でくるのに和人がどれだけ裏で頑張ってくれたことか。周りの協力があつたとはいえ、並大抵の苦労じゃないってことだけは確かだった。

本当に和人には感謝の気持ちでいっぱいだ。一生捧げても感謝しきれないぐらいだった。

病気が治ってからも学校を休んでずっと傍にいてくれた。気が付いたら和人は、ボクにとっかかりがえのない存在になっていた。

和人はボクの生き甲斐だった。病気が治った後は和人が食事を作ってくれた。現実世界に戻ってからの最初の食事は和人の手料理だった。

温かくて、とても美味しかった。嬉しすぎて思わず泣いてしまっ

た。そしてさらに和人はボクの誕生日プレゼントも買ってきてくれた。

もう、一方的に何でもしてくれて、ボクはどうやって恩返しをしていったらいいか分からなかった。

それから僕は懸命にリハビリを重ねた。和人も傍で応援してくれた。

そして頑張った甲斐があつて、たった二ヶ月で上半身が完璧に動くようになった。病院内だけだけど、車椅子での外出を許可してもらった。

ボクは早速和人に車椅子を押ししてもらって現実世界の冒険に出掛けた。冒険と呼ぶにはスケールが小さかったかもしれないけど、僕にとっては大冒険だった。

見るものすべてが新鮮だったよ。何をしても楽しかった。そしてボクは病院の屋上につれてってもらった。

ALOで約束したことを和人は覚えててくれた。「いつか現実の夕陽を見せてやる」その約束も守ってくれた。

ボクは、和人にやってもらってばかりだった。でも、それももう終わる。

この下半身のリハビリが終われば退院出来る。そうすれば和人に恩返しができる。

そしたら……何をしてあげようかな、今から考えるのがとっても楽しみだ。

絶対に和人が喜ぶことをしてあげよう。そのためにも今はこのリハビリを頑張る。

待っててね、和人……。

西暦2026年9月23日(水) 午前9:55 神奈川県横浜市金沢区 横浜港北総合病院 リハビリテーションルーム

「うんしょ、うんしょ……」

「いいぞ木綿季、大分歩けるようになってきてるぞ」

「う、うん……！」

車椅子での外出が許可されてから二ヶ月、木綿季は毎日毎時一回も欠かさず下半身のリハビリを重ねていった。

今日は香里が非番の日なので自主的に下半身のトレーニングにいそしんでいる。

正直頑張りすぎな面もあったが手すりに手をつきながらではあるが、ゆっくりと歩けるようになっていた。

「木綿季、ちよつと休憩しよう」

「あ、はいー！」

和人は木綿季に両手を貸しながら、リハビリテーションルームのベンチまで誘導した。

下半身はまだプルプルしているが、寝たきりの今までのことを考えるならば、目覚ましい成果を上げているとあっていいだろう。

「ふう、疲れたあ……」

「お疲れ様、はいこれ」

「ん、ありがとう和人、いただきまーす！」

和人から350mのアルミ缶を受け取ると、木綿季はカシユツツという音を立てて蓋を開け、ゴキユゴキユといいのど越しの音を響かせながら、スポーツドリンクを胃に流し込んだ。

「ぷはーっ！」

「しかし結構鍛えられてきたな、確か一般的なリハビリスケジューリングって基本的に半年ぐらいなんだろう？」

「うん、治る見込みとして設けてる期間が半年ぐらいなんだって。ボクは四ヶ月でここまでこれたから、多分行けると思うよ！」

「あはは、フルダイブ様様だな」

「でも階段とかの段差があるところとかは、まだ無理だな……」

「段差はまだ仕方ないさ、平地をまず確実に歩けるようにならないと」「うん、でももう少しって考えたらさ、いてもたってもいられなくて」

「お、おいおい……気持ちわかるけど焦るなよ？ 早まって怪我でもしたらどうするんだ？ 打ち所が悪かったら命だつて落とすかも」

しれないんだぞ？」

「大丈夫だつて！ ほら……和人みて！」

木綿季はそう言うと言っているアルミ缶を傍らに置き、ゆっくりとベンチから立ち上がり、両手を左右に広げてバランスを取りながら歩き始めた。

その様子は鼻肩目に見なくても、満足に歩いているとは言い難く、ちよつと指先で軽くつついただけでも転倒してしまいそうな印象を受ける。

「おい木綿季！ 危ないぞ！ こつちに戻つてこい！」

「大丈夫！ 心配しすぎだよ和人は……あッ」

木綿季の視界が、一気に天井の方を向いていた。何が起こったのかと確認する暇もなく、木綿季はそのまま足の力が抜けてしまい、床に崩れ落ちそうになってしまった。

「木綿季ー！」

必死に叫びとともに、和人が床を蹴つてベンチから駆け出し、木綿季の身体が床に叩きつけられるよりも早く、滑り込むようにして彼女の upper bodyを支え、間髪大怪我を回避することに成功していた。

「あ、危ない……ぎりぎりセーフだ……」

「あ……ありがと……和人……」

木綿季から感謝の言葉を受け取ると、和人は彼女に肩を貸して、ゆっくりベンチまで歩いて先導していった。

そして彼女を座らせると、再び大きい息を吐き、何事もなかったことにホッと胸をなでおろしていた。

「まったく……もうこれつきりにしてくれよ？ 神経がすり減ってかなわんぞ……」

「うう、ごめんなさい……」

和人に迷惑をかけてしまったと思つた木綿季はシユンとなつてしまった。自分でも5メートルほどなら足だけで歩けると思つていただけに、落胆の気持ちも相まって、すっかり落ち込んでいた。

しかし実際にはまだ満足に歩けるとは程遠い状態にある。これからも地道に繰り返し、下半身を鍛える必要があるということだ。

「よし今日はお終いだ、部屋に帰るぞ。おぶってやろうか？」

「んーん、手すりにつかまって歩いてく」

「……そうか、気をつけるよ？」

木綿季が歩けるようになるためには、ひたすらに下半身に意図的に負荷をかけ続け、地道に鍛えていくしか方法はない。

ベッドから降りる動作、寝ながら膝を曲げる運動。手すりや歩行器、誰かの肩や手を借りての歩行訓練など、課せられた訓練メニューはたくさんある。

自ら進んでやっている、リハビリテーションルームと自分の病室間の往復の歩行も、訓練のうちの一つだ。

「ふう……」

「お疲れ様、木綿季」

手すりにつかまりながら、無事に自分の病室までたどり着いた木綿季は、今度は和人の手を借りながらベッドまで歩み寄り、ゆっくり腰を下ろした。

和人も彼女が無事に座つたことを確認すると、すぐ隣に腰かけ、二人でベッドに並んで座っている状態となった。

「ボクね、下半身が鍛えられてから、こうやって隣に座れるようになったのが一番嬉しいな！」

「そうだな、俺も木綿季がどんどん元気になってくれて、すごく嬉しい」

木綿季は自分の体がまだ元気な頃に、AIDSを発症する前に戻ってきてるのを感じて、心から嬉しくなっていた。

まだまだ鍛える必要があるが、日常生活に戻る一歩手前まで来ていたのだ。

しかし、だからといって焦ってはいけない。焦ってもいい結果など生まれてこない。確実に、少しずつ鍛えていかなくては。

「ふあ……、ボクちよつと眠くなってきたちやっつた」

木綿季眠たそうに大きく欠伸をすると、和人はその動作を微笑ましく見守っていた。

近頃はかなり熱心にリハビリに取り組んでいることもあり、木綿季

の身体には相当な疲労がたまっていたのだ。

元々頑張り屋な性格も相まって、自分のスタミナ以上に出張って運動を続けたこともあったこともあり、今はそういった疲労がたまっているはずなのである。

「そうか、少し寝るか？」

「うん、そうだね……そしたらちよつとだけ、眠るね？」

その言葉を聞くと和人は木綿季が眠れるように、ベッドから腰を上げ、就寝の邪魔にならないようパイプ椅子をベッドから離れた位置に設置して、改めてそこに腰を落ち着けた。

「早く退院したいなあ……」

「俺も早く木綿季と一緒に暮らしたいさ。でもここで焦ったってしょうがないだろう？」

「うん……そうなんだけど、もうちよつとな気がするんだよねえ……」

「気持ちわかるが、とりあえず今は休むんだ」

「はあーい」

「おやすみ、木綿季」

「うん、おやすみ……和人」

木綿季はもうすっかり手馴れた様子で、白いカバーに包まれた掛け布団を自分で持ち上げ、そこに下半身を滑り込ませ、そのまま被り、首から上だけを覗かせて、静かに寝息を立てて、夢の世界へと旅立っていった。

「……………」

「すう……すう……」

(なあに、焦る必要なんかないさ。今はゆつくりでいいんだ……)

女の子らしい可愛い寝息を立てて、気持ちよさそうに眠っている木綿季の顔を見ていると、和人も自分が眠気に襲われていることに気付いていた。

常日頃から彼女のリハビリ、そして入院生活につきっきりで同伴している彼も、かなりの疲労がたまっていたのだ。

「俺も……少し寝よう」

和人はいつものようにパイプ椅子に体重を預け、ズボンのポケットに手を突っ込み、首を前方に俯かせて、深い眠りに入っていた。贅沢を言ってしまうえばふかふかのベッドで寝たいところだが、そうはいかない。今は木綿季の体のことが最優先だし、退院して一緒に住めば、いくらでもその願いは叶う。

となりには大好きな木綿季もいる。その願いが実現出来るまであと少しだ。それを成し遂げるためにも、今はこの環境で休もう。休んで、次に備えよう……。

同日午前11:45 横浜港北総合病院 木綿季の病室

「ん……」

先に深い眠りから先に目を覚ましたのは木綿季だった。

眠たそうな両目を手でゴシゴシとこすりながら、大きく欠伸をし、今は何時かと病室に備え付けられた時計を見て確認する。

「お昼前か……、んー、それまで何してようかな」

基本的に暇つぶしの道具を何一つ持ってきていない木綿季が、お昼ご飯の時間まで何をして暇を潰そうかと考えている。

本音を言ってしまうえばこの病室から外へ出て、お散歩でもしたいがそうもいかない。

無菌室から出たばかりの頃と比べるとかなり体力はついてきたが、やはり常人と比べると遥かに劣る。

一般人なら呼吸を乱さないような運動でも木綿季には結構な負担になる。

負担をかけていけないと体は鍛えられないのだが、女の子ということもあってすぐにスタミナが尽きてしまうのだ。

「和人はまだ寝てるし……退屈だなあ……」

木綿季は寝ぼけ眼をゴシゴシ擦りながら、パイプ椅子に座って寝ている和人を見ていた。和人は木綿季のベッドから2メートルほど離れたところで眠っている。

「器用な寝方するなあ……」

木綿季はきつと和人は普段から寝相が良いのだろうなと考えていた。一緒のベッドで寝ても、これなら安心かもしれないなどとも思っていた。

その光景を思い浮かべると恥ずかしい気持ちがかき消されてくるが、同時に嬉しいといった気持ちも感じていた。

「あ……ここからなら、もしかしていけるかな……？」

何を思ったのか、木綿季は掛け布団をまくり、自分の体をベッドの外にだし、スリッパを履くとゆつくりと、支え無しで和人の座っているパイプ椅子へと足を運び始めた。

置きたばかりともあって、その脚はリハビリを行っていた時よりもおぼつかなかった。細かく震え、膝が笑ってしまっている。

このままではいつ転んでしまってもおかしくない、そんな印象を与えるような不安になる歩き方だった。

「よいしょ、んしょ……つと……」

「ん……、ふあ……あ？」

木綿季が和人のいるパイプ椅子まで残り1メートル、といった地点までたどり着いたところで、眠りについていて和人の意識が戻ってきた。

目の前にある何者かの気配、それを無意識に感じ取り、うとうとしながらも目の前の光景を確認しようと、視界の焦点を合わせようと目をこする。

「え……なつ、ゆ、木綿季……!?!」

「あ、和人……起きちゃった」

和人が驚きの表情を見せたその瞬間、おぼついていた木綿季の脚から急に力が失われた。

自分の体重を支え切れるだけの持続力がないうえに、先ほどまで寝ていた状態だったために、2メートルの距離すらも歩けなかった。

木綿季はそのままバランスを崩し、前方の和人の座っているパイプ椅子目掛けて倒れこんでしまった。

「ゆ、木綿季ッ!!」

和人は咄嗟に木綿季に怪我をさせまいと、倒れてきた受け止めようとしたが、一瞬反応が遅れてしまった所為で、木綿季を庇う形で座っていたパイプ椅子ごと一緒に床に倒れてしまった。

その際、壁に立てかけられていたパイプ椅子を派手に巻き込んでしまい、派手な金属音が部屋中に鳴り響き、それはそれは阿鼻叫喚な絵図となった。

「あ……いつ、てて……」

「か、かすと大丈夫!？」

幸い和人も木綿季も怪我はなかったようだ。あんなに派手に倒れて怪我をしないのは運がいいと言うべきだろうか。木綿季は和人が庇ってくれたおかげで擦り傷一つ負ってなかった。

木綿季は自分を庇って倒れた和人のことを心配していたが、和人は無言で木綿季を抱きかかえてベッドに戻すと、そそくさとパイプ椅子を片付け始めた。

その表情は決して穏やかとは言えるものではなかった。

「かすと……?」

木綿季が和人の名前を呼んだ瞬間、和人は鬼の形相で振り向き木綿季に向かって声を荒げた。そして右手で木綿季の顔をはたいていた。

「この……ッ馬鹿野郎ッ!」

罵声を浴びせられ、はたかれるとは思わなかった木綿季はびっくりしてしまい、はたかれた場所を手で押さえながら目を丸くしていた。

和人は興奮したまま鋭く睨みつけながら、木綿季に向かって声を荒げ続けた。

「お前、俺がさつき言った事……ちつともわかってないじゃないか!

言っただろう! 打ち所が悪かったら命を落とす可能性だってあるって! だから俺は無茶をするなど言ったんだ! わかるか!？」

「あ……え、えつと……」

木綿季は既に泣きそうになっていた。和人が木綿季に対して初めて怒った瞬間だった。

誰にでも優しく接している和人が、この時ばかりは珍しく高ぶった感情をあらわにしていた。それも一番愛している木綿季に対してだ。

「だ、だってボク、和人をびつくりさせたかったから……」
「び、びつくりだと……、ふざけてるのかッ！」

反省するそぶりを見せなかった木綿季に対して、和人は更に声を荒げた。木綿季の目からは涙が流れ続け、細くちぎれてしまいそうな声でひたすら謝っていた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……、ごめん……なさいッ」

少しだけ時間が流れ、涙を流し続ける木綿季を見て和人はハッとなった。

そして冷静に、今自分が木綿季に対してしでかした行為について、罪悪感を覚えてしまっていた。

今俺は何をした？ 木綿季を殴った……？ 男である俺が、か弱い女の子を、まだ体が上手く動かない木綿季を、殴ったつてののか？

和人は自分のしたことが信じられなかった。それぐらい自分は怒ったつていうのか、冷静でいられなくなっていたのか。

「あ……、お、俺……」

和人は木綿季をはたいてしまった右手と頬を押さえながら泣いている木綿季を交互に見ていた。

やってしまった、木綿季に、女の子に手を上げてしまった。

恋人として、いや……男として最低だ。そう考えた和人は更に自己嫌悪に陥っていた。

「ごめんなさい……ごめん、なさい……！」

木綿季も泣き止む気配はなかった。和人はこの状況をどうしたらいいのかわからなかった。

木綿季はひたすらに謝りながら泣き続け、その細い声を聞いたたびに、和人の心が潰れそうになっていった。

どうしたらいいんだ、俺は今泣いている木綿季に対して何をすべきなんだ。

い、いや……何も出来ない、しちやいけない。木綿季を殴った俺に、そんな資格が……あるわけがない……。

「……ごめん、俺ちよつと……頭冷やしてくる……」

和人はその場から逃げ出すように木綿季の病室を後にした。

病室のドアを乱暴に開け、部屋を出るとそのまま勢いに任せてバタンという音を立てて乱暴に閉めた。

早歩きで床を蹴りながら廊下を進みエレベーターに乗り、一人だけで屋上へと向かった。

「あれは……和人君？　木綿季君は一緒じゃないみたいですね……」

その場を偶然通りかかった倉橋が、その時遠目に和人の姿を目視していた。木綿季がいないのが少し気になったが、飲み物でも買いに行っただのかぐらいに思っていた。

「ごめんなさい……ごめんなさい、ごめん……なさい！」

一方で、木綿季は和人が病室を出ていった後も、ひたすら謝り続けていた。その姿ははたから見ていると、大変にいたたまれなくなる光景であった。

それからもしばらく木綿季は謝り続け、涙を流し続けて少し落ち着いてきたのか、和人がいないことに気付き、謝るのをやめていた。

木綿季の涙はすっかり止まっていて、はたかれた場所も痛みがひき、赤くなっていた肌も元の色に戻っていた。

「……………」

綿季は自分のやってしまった行為を反省していた。

あれだけ和人がボクのことを心配していたのに、ボクは全然話を聞いていなかった。

もし、打ち所が悪かったら……その時は本当に命を落としていたかもしれない。

和人はただボクのことを大事に思ってくれていただけなんだ。ボクはその気持ちを全然考えてなかった。

「和人に……謝らないと」

一度気持ちを整理した木綿季であったが、この時の彼女は冷静でなかった。頭の中は、とにかく和人に謝りたい思いでいっぱいであり、是が非でも和人に会いたい、それだけであった。

「頭冷やすつて言ってたから、屋上とかかな……」

木綿季はベッドの脇に置かれていた車椅子に手を伸ばし、自分自身で開いていく。

色々と正しい手順を踏まないと開くことが出来ない車椅子だが、今ではすっかり自分だけで使用できるようになっていた。

外出も病棟内限定で予め倉橋に連絡を入れることで一人で出掛けることを許可されていた。

車椅子に自分の体を移し終わると方向転換をして車輪を回し、自分の病室を後にして木綿季は和人を探し始めた。

『木綿季君、いますか？』

病室の扉をコンコンと叩き、倉橋が木綿季の病室を訪ねてきていた。

先ほどの和人の様子がどうにも引つかかっていたため、念のため木綿季の様子を見に来ていたのだ。

訪ねていつもどおりならば、ただの思い過ごしですむ。ちよつと心配しすぎなだけだろう。そう思いながら倉橋は扉の取っ手を掴み、横にスライドさせていった。

『木綿季君……？』

倉橋は木綿季の病室のドアを開けて、中の様子を確認した。しかし病室の中は蛻の殻だった。

木綿季が一人で外出するときには自分まで必ず連絡が来るはず、のみに来ないということは、連絡を忘れるほど大変なことが起きたのかもしれない。と倉橋は考えた。

先ほどの和人君の様子も、よく思い返してみたら少しばかり変だった。そのタイミングで木綿季君がいなくなった。

「こ、これは……まずいことになったかもしれない！」

「……はあ……」

一方で和人は屋上に来ていた。

八階建ての横浜港北総合病院の屋上から見る風景はなかなか絶景であった。ここから見る夕暮れは最高だ。天候の良い日は夜空も大変にきれいな空模様を描くことだろう。

そんな快晴の昼間の青空の下で、和人は一人で自己嫌悪に陥っていた。女の子に手を上げるとは初めてであった。

仮想世界で決闘デュエルをしたことはあるが、現実世界で女の子に直接暴力を振るってしまったことで、罪悪感に見舞われていた。

「俺、最低だ……」

どうしよう、木綿季に合わせる顔がない。顔を合わせて謝ってすむものなのだろうか。思い返してみろ、木綿季はあんなにも泣いていた。ごめんの一言で済むような問題じゃない。

初めての事態にこれからどうやって木綿季と接していけばいいか、和人はわからなかった。

和人は青空を眺めていた。眺めているだけで今のこの自分の中の突っかかっているものが取れるような気がしていた。

時々大きなため息を吐きながら和人はこれからどうすればいいかを考えていた。

「……やっぱり、ちゃんと正面から謝るしかないよな……」

正直言つて、顔を合わせづらい。どんな顔をして木綿季の前に立てばいいのか。謝つても許してくれるだろうか、木綿季は一回機嫌を悪くしたらなかなか直らないから、苦労するかもしれないな。

そんな考えを巡らせていると、突如和人のスマートフォンがピロピロとサウンドを響かせて、着信が入った。

そもそも病院で携帯を使うのはご法度なのだが、和人はうっかり電源を切るのを忘れていたようだった。

「ん、携帯の電源切るの忘れてたか……誰だ？」

和人はポケットからスマホを取り出すと、ディスプレイの発信者の名前に目をやった。目線の先には「倉橋先生」とかかれた文字が表示

されており、彼からの着信だということを表していた。

何だ？ 何かよくない感じがする。妙な胸騒ぎがして仕方ない。

「はい、桐ヶ谷です！」

『和人君ですか!? 今、どこにいますか!?』

「ど、どこって……今は病院の屋上ですけど……」

和人が電話に出ると、倉橋はいきなり声を荒げて和人に尋ねてきた。やっぱり何か嫌な予感がする。

和人の心臓の鼓動が早くなっていた。倉橋の口から良くないことを聞かされる気がして仕方がない。

次に倉橋から聞かされる事実が怖くて仕方ない。しかし、聞かなくてはいけない。この不自然なタイミングでの倉橋からの電話。

それを物語っている意味とは。それを確かめるためにも和人は黙って話を聞き続けた。

『落ち着いて聞いてください。木綿季君が……病室からいなくなりました!』

……は？ 今何て言った……? 先生は何て言ったんだ……?

「いなくなったって……ど、どういうことなんですか!?!」

『言葉通りです! 彼女の病室が蛻の殻になっていて、木綿季君がどこにもいないんです!!』

和人は背中に氷柱を突っ込まれたような気分になった。全身の血が引いていく感覚に襲われた。

こうしてはいられない、木綿季を、木綿季を探さなくては。

『和人君! 心当たりはありませんか!?!』

「あ、えと……実はさっき木綿季と喧嘩をしまして、外の空気を吸ってくるって言い残して、俺は屋上に来てたんですけど……」

『……最悪だ……!』

「え……最悪って……?」

『恐らく木綿季君は和人君を探しています。和人君の言ったことを頼りに……、上に向かってるんだと思います』

「え……、でもそれだとしたら……エレベーターを使ってるんじゃない？」
『いいですか……今、エレベーターは点検中なんです、つまり木綿季君は……階段を登っていることになる！』

「な……ッ」

『和人君急いでください！ 私もすぐにそちらに向かいます！』

「わ……わかりました!!」

和人は通話を切るとすぐさまポケットにスマホを仕舞い、走り出していた。倉橋が言っていることが事実だとすると、早く木綿季を探し出さないととりかえしのつかないことになる。

今の木綿季に階段を登る力はない、上れたとしても途中で体が限界を迎える。

も、もしそうなたら……!!

「間に合ってくれ……!!」

「はあ……はあ……」

一方その頃、木綿季はおぼつかない足取りで手すりにつかまりながら一人で階段を昇っていた。

一段一段確実に踏みしめるように、手すりを掴む手の力を緩めないように昇り続けていた。

エレベーターで車椅子ごと屋上に行けると思っていた。しかしこんな時に限って点検中だった。一刻も早く和人と顔を合わせて、謝りたいと思っていた木綿季は、気持ちの高ぶりを抑えられず、危険を承知で階段を昇っていたのだ……。

「これなら、いけるかも……」

木綿季は息を切らしながら、ゆっくりとした速度で階段を登っていた。本人はこの調子なら辿り着けると思っていた。

しかし全身を震わせながら昇っているその様子は誰が見ても、非常に危なっかしいものだった。

「和人に……謝らないと……」

和人と同じよう、木綿季も彼に謝ろうとしていた。

ボクの無茶であんなことになってしまった。おとなしく和人の言うことを守ってれば、自分の体を軽率に扱わなければ。慢心の気持ちが必要ならば、こんなことにはならなかった。

とにかく和人に謝りたかった。木綿季はただひたすらそれだけしか考えていなかった。

全部ボクが、ボクが悪かったんだ。これ以上和人に迷惑をかけたくない、自分の力で……謝らないと。

調子よく登っているように見えていた木綿季であったが、本人に自覚がないだけで、既に彼女の体力は限界に近づいていた。

和人に謝りたいという気力だけで昇り続けていた木綿季の脚には、もう力が入らなかった。

階段の一番上の段に足を掛けようとした瞬間、木綿季の体が引っ張られるように後ろに傾いた。

踏み込んだ足がもつれ、バランスを崩し、重力に引っ張られて後ろに体が浮いてしまっていた。

あれ……？　ボク、どうしちゃったんだろ……？

体が浮いてる……？　ボク、落ちてる……？

ボク、ボク……階段から落っこちてる……!?

あ……だ、だめ……だ……手すりに手が届かない……。

ボク、このまま死んじゃうの……かな。

折角和人に病気を治してもらったのに……受け身も取れずに死んじゃうのかな……。

い、いやだ……死にたくない……。

でも……今回ばかりは、だめ……みたい……。

ごめんね和人……折角助けてもらったのに、こんなつまらない形でお別れしちゃうなんて……。

結局……仲直り、出来ないままだったな……。

時間がゆっくりに感じる……、これが走馬燈ってやつなのかな……。

ああ……もう床が見える……、ボク……死んじゃうんだ。

せめて最後に……和人に抱きしめてもらいたかったな……。

和菓子を作つてあげるつて約束も、守れなかったな……。

ごめんね和人……バイバイ……。

……え？ かず、と……？

木綿季は生きていた。階段を踏み外した刹那に現れた和人が助けに入り、間に合ったのだ。

和人は木綿季の姿を見るなり、考えるよりも先に体が動き、木綿季を抱き留めて、自分を下敷きにしてそのまま床に叩きつけられた。

「ぐうっ!!」

床に叩きつけられた和人は慣性でそのまま壁にも激突した。

右肩と背中を激しく打ち付け、痛みが走る。その痛みで思わず悲鳴が口からこぼれた。

「ぐ、あ……ああ……」

「和人!!」

幸いにも木綿季に怪我はなかった。和人は木綿季を抱き留めた後、木綿季の体を包み込むようにして守っていたのだ。つまり、木綿季の体重も和人に合わさる形で和人に衝撃が走っていた。

「和人！ 和人！ しっかりして!!」

「があ……ゆ、ゆうき……無事か？」

「ボクは大丈夫！ でも和人が……和人が!!」

「俺なら大丈夫だ……、それより木綿季が無事でよかった……」

和人に先ほどまで激昂していた様子はどこにもなく、ひたすら木綿季の身を案じていた。いつもの心優しい、和人らしい顔をしていた。

「和人……ごめんなさい、ごめんなさい！ ボク……ボク！」

木綿季は大粒の涙を流し、和人の手を取り和人に謝罪をしていた。

思いあがってごめんなさい、天狗になってごめんなさい、和人に心配をかけてごめんなさい。

しかし和人は右手で木綿季の涙を手で拭い、叩いてしまった頬をさすっていた。もういいんだ、木綿季が無事ならそれでいいと、和人の笑顔そう訴えているようだった。

「ごめんな……叩いちまって、痛かったよな……」

「そ、そんな……そんなことツ、か、和人のほうが……!」

「いいんだ……俺も早く歩けるようになりたいっていう、木綿季の気持ち……汲んでやるのが出来なかった……」

自分が床に叩きつけられても尚、木綿季の体の心配と、自分がいたらないばかりにごめんと、謝ってきた和人の態度に、木綿季はいてもたってもいられなくなっていた。

そもそもボクの所為なのに、なんで和人はここまでして、ボクのためにしてくれるの、じ、自分の身を犠牲にしてまで……!」

「もう歩けなくてもいい!」

和人が傍にいてくれればそれだけでいい! もう我儘言わないから……謝るから……死なないで! 和人オ!

「だ、大丈夫だよ……、ちよつと肩と背中を打ち付けただけだ……そ、

それに多分すぐに先生が来てくれる……」

それを言うと、和人の意識は暗闇に飲まれていき、木綿季の顔に添えていた手も力を失い、重力に引っ張られて床に落ちていった。

「かずと……？ や……やだ！ 和人！ かずとおおおっ!!」

それから騒ぎを知った医療スタッフが和人らを見つけ、和人は集中治療室に運ばれていった。

不幸中の幸いか頭を打ち付けていなかったものの、背中を激しく打ち付けていたことよって、軽い呼吸困難に陥っていた。

最悪の場合、もしかすると骨にまで影響が出ているかもしれない。

木綿季は車椅子に座ったまま、和人が集中治療室から出てくるのを待った。

「……………」

木綿季は両手を組み、俯き、目を閉じて神に祈りながら、治療中の和人の身を案じていた。

(和人……お願い、無事でいて……!!)

木綿季は自分はどこまでも身勝手な人間なんだろうと思っていた。自分の思い上がりで和人に怪我を負わせてしまった。

何回目だ？ 自分の所為で和人が倒れるのは。いい加減にしろ、何で和人にばかり負担をかけてしまうんだ。

木綿季はひたすら自分で自分を責め立てていた。

ひたすらに沈黙が流れ続けた。

そして20分ほど経過すると、集中治療室のランプの灯りが消え、扉が開くと中から倉橋と医療スタッフが何名か出てきた。

途端に木綿季は車椅子の車輪を回し、倉橋に近寄り、和人の容態について必死に尋ねていた。

「倉橋先生！ 和人は……和人は無事なんですか!!」

自分の白衣の裾を必死に涙目で掴んでくる木綿季を、倉橋は彼らしい優しい笑顔で答えた。自分の娘を安心させるように、心配かけ内容

に、笑いながら丁寧に説明を始めた。

「木綿季君、安心してください。命に別状はありません」

「命に別状はありません」その言葉を聞いた瞬間、木綿季は全身から力が抜け、車椅子の背もたれにもたれかかってしまった。

自分の最愛の人の命が助かったことに、心から安心していた。しかしその手は小刻みに震えたままであった。

「和人……よかった……ッ」

「和人君の怪我は打撲です。骨に異常は見られません。肩と背中の中の筋肉を激しく打ち付けています。不幸中の幸いだったのは、頭を打たなかったことですね……」

「は、はい……ッ」

木綿季の目には涙が浮かんでいた。和人が助かってよかったと感じる嬉しさと、自分の所為でこんなことになってしまったことに対する反省の涙だった。

溢れ出る涙は止まることを知らず、彼女の頬をつたい、自身の患者着の袖を濡らし続けた。

何がどうしてこうなってしまったのかということ、大体察している倉橋は、身をかがめて木綿季の目線の高さにまで腰を落とし、少し険しい顔になりながら、彼女を問いただしていった。

「木綿季君、どうしてこんなことになったか分かりますか？」

「はい……ボクの思い上がりの所為です……」

「……いいですか木綿季君。キミの体はもうキミだけのものではないんです」

「……はい」

「君を助けてくれた和人君はもちろん、君を好きでいてくれるみんなのものなんです」

「はい……はい……ッ」

「だから、もう二度とこんな馬鹿な真似はやめてくださいね？ みんな木綿季君に何かあったら……悲しみますから」

「はい……ごめんなさい……ごめんなさい……ッ」

木綿季は顔を両手で覆い隠し、先程よりも多く涙を流していた。倉

倉橋は涙を流して反省している木綿季の様子を見ると「しょうがない娘だな」といった優しい表情を浮かべ、そつと彼女の頭に手を優しく乗せ、そのまま撫ではじめた。

「その様子だと、もう大丈夫そうですね。和人君、出てきてもいいですよ」

「……………え……………え？」

倉橋がそう言うと、木綿季は目を点にして集中治療室の方に視線をやった。しばらく見つめていると、そこに自分の愛する少年が、おぼつかない足取りで姿を現した。

「……………やあ、木綿季」

「……………かず、と……………？」

「和人君は10分ほど前に目を覚ましました。問題なく歩行も出来ませんが、一応念には念を入れて、経過観察として一日か二日は安静にしてもらいます」

倉橋が現在の容態について説明をし終わると、和人は上半身を小刻みに震わせながら、優しく微笑みながら、木綿季に言葉を投げかけた。

「木綿季、ごめんな……………心配かけて……………」

「そんな……………だって、だってボク！」

「もういいんだ、もういいんだよ……………木綿季……………」

和人は木綿季にゆっくり近づく、優しく抱き締めた。一歩ずつ足を動かすたびに少し背中と肩が痛むが、我慢できないほどではなかった。

「和人……………ごめんなさい……………本当にごめんなさい、ボク……………また和人に迷惑を掛けて……………」

「ううん、もう大丈夫だ。俺の方こそ……………ごめんな……………」

「ボク……………もう我儘言わない、言うことも聞くから……………どこにもいかないで……………」

「ああ、俺だって……………もう二度と、お前の傍から離れないから……………」
固く抱き合った二人のやり取りを、倉橋は微笑ましく見守っていた。

この二人なら退院後も安心だなと感じていた。事実、木綿季の脚の

回復は順調だ。このままいけばあと一ヶ月ほど経てば歩けるようになるだろう。

木綿季君が病院からいなくなつて、少しだけ寂しい気もするが、仕方のないことだ。

(私は木綿季君が幸せならそれで構わない。和人君になら木綿季君をまかせても安心だ)

それから木綿季の様子は変わり、今まで以上に真剣にリハビリに取り組むようになっていた。

そして以前のような無茶はしなくなり、どうやれば効果的に足を鍛えられるか？ どのようになればバランスを保ちやすくなるかなど、自分自身で考えて研究も重ねていった。

一方、和人の怪我は思つてたほど大したことなく、背中と肩が腫れあがつていたがほどなくして回復していった。

二人の間はと言うと仲直りした直後は少しだけ気まずかつたらしいが、それも時間の問題で程なくして二人とも以前の仲睦まじい関係に戻つていった。

西暦2026年10月23日(金) 午後17:00 横浜港北総合病院 リハビリテーションルーム

「……………」

この日、木綿季はリハビリテーションルームにて足を動かしていた。その場には、主治医の倉橋と、作業療法士の香里も同伴していた。そう、この二人が同伴しているということは、今日は木綿季のリハビリの最終確認の日であることを意味していた。

つまり、これをクリアすれば、木綿季は晴れて退院となるのだ。

HIVが治つてから実に五ヶ月、ほぼ半年間にも及ぶ木綿季の努力が、実ろうとしていたのだ。

「木綿季……頑張れ！」

和人が声援を木綿季に送る。応援には和人の母親の翠と妹の直葉。そして親友の明日奈とこの病院のお見舞いに来る馴染みのメンバーが集まっていた。

「木綿季！ あとちよつとだよ！ 頑張ろう！」

明日奈も和人に続いて声援を送る。木綿季はその声援に答えるように一瞬視線を合わせ、アイコンタクトを送り、再び視線を目の前に戻すと、自身の足を動かし続けた。

「……ッ！ ……ッ！」

木綿季の足取りは以前のような危なげを感じさせなかった。常人と同じ……いや、常人よりも鋭く足を踏み込ませることが出来ていた。

上半身に二ヶ月、下半身に三ヶ月の期間を掛けて、木綿季は着実に自分の体を鍛え続けていた。しかし、大変なのは何も身体のトレーニングだけではなかった。

木綿季は小学生のころから病院生活を送っている。病気にならないければ本来なら既に高校生になっている年齢だ。

当然、小学校六年生から中学三年生までの間、勉強は全くしていない。しかし、来年度から木綿季はS A O被害者の通っている学校の生徒になる手筈となっているのだ。

その学校を卒業すれば高校卒業の資格がもらえ、その後の進路の幅が広がるのだ。

しかし、木綿季は長い間勉強というものから離れ過ぎていた。プローブを使って、授業に参加などはしていたが、本格的な授業ともなるとこれまで以上に頭の方も鍛えねばならない。

そこで明日奈や誌乃といった優等生に、勉強を見てもらっていたのだ。

中でも一人からは、特に苦手な数学を教えてもらっていた。入院前まで数学ではなく、算数を習っていた木綿季にとっては、それはそれはあまりにもハードルが高かった。

逆に得意なのは国語だと豪語している。これでも木綿季は読書家

……らしい。

「……これで……お終いだよっ！」

気合の入った声とともに、木綿季は香里から課せられたノルマを全てクリアした。

今回は前回のような意地悪はなく、真つ向勝負の試験内容だった。木綿季が試験の直前に念を入れまくって聞いていたのだ。

今回は意地悪な項目はないですよね？ 今言ってくれた内容で全部ですよね？ 裏はないですよね？ と、何回も何回も……。

「……うん、文句なし！ スタミナも持ってるし合格よ！ 木綿季ちゃん！」

「(う)……かく？」

「合格」そう告げられると、木綿季はその言葉が信じられなかったのか、一瞬言葉を喉でつまらせたが、そんな木綿季を見守る周りからの視線に気付くと、改めて今、自分が全てを成し遂げたことを実感していた。

「やったあー！ 合格だって！ 和人！ 明日奈！ ボクやったよー！」

木綿季はそう言うと、走って和人に近付いてそのままジャンプして飛びつき、喜びを表した。

過去にALOでよくやっていた行動に、和人は一瞬ぐらいついたが、しっかりと木綿季を受け止め、ともに喜んでいった。

「ああ……やったな！ とうとうやったんだ！」

「おめでとう！ 木綿季！」

「これで一緒に暮らせるね！」

和人に続いて明日奈、直葉も合格した木綿季を祝福した。翠は倉橋に感謝の気持ちを述べていた。

しかしこれから木綿季と暮らせるという喜びで気持ちが昂り、うまく言葉を伝えられないでいた。

立派な大人の翠でさえ、心が躍るほど嬉しくなる出来事だったからだ。

「先生、その……なんと言葉を述べていいか……」

「いえ、お好きなよう構いませんよ、私たち病院側はちよつと手伝っただけですから。ほとんど全ては……木綿季君本人の頑張りのたまものですよ」

「……ええ、本当にあの子はよく頑張りました……」

倉橋と翠は、微笑ましそうに四人のやり取りを見ていた。そして、倉橋が寂しそうな目で木綿季を見つめていることにも気づいていた。「やっぱり寂しいですか？　木綿季ちゃんと別れるのは……」

寂しくないわけがない。

倉橋にとって木綿季は今まで診てきた患者の中でも一番付き合いが長い患者だ。

当然、特別な感情も持っていた。しかし医師としては全ての患者に平等でいなければならぬ。

一人の患者だけを鼻負したりするのは本来許されないことだ。

その木綿季が、長いこと一緒にいた木綿季が、この病院を離れていく。新しいステージで新しい生活をスタートさせていく。

それはとても喜ばしいことだ、倉橋にとっても嬉しいことに違いない。だが、心にぽっかりと穴が開きそうになることを、倉橋は感じていた。

「そうですね……寂しくないと言えば嘘になってしまいます。木綿季君とは付き合いが長いですから……」

「……そうですか」

「でも、桐ヶ谷さんのところなら、私も安心です。桐ヶ谷さんも直葉さんも、和人君もみんないい人ばかりだ。きっと木綿季君は素晴らしい将来を見つけてくれると思います」

「……倉橋先生……」

倉橋は翠と香里から見えない角度で涙を拭くと、メガネの位置を直して翠に改めて挨拶をした。

「桐ヶ谷さん……いえ、翠さん。木綿季君を……娘を、どうかよろしく願います」

倉橋は深々と頭を下げた。これ以上なく丁寧に、これ以上ない誠意を込めて。木綿季君とどうか幸せにしてあげてくださいと、それだけ

の想いを込めて。

「あたしからもお願いします、あの子は……もうあたしの妹みたいなものですから……」

香里も倉橋に続き、頭を下げた。かつて亡くしてしまった妹の姿を木綿季に重ねていた香里にとって、木綿季の今後が、他人事のように思えなかったからだ。

「はい、任せてください。必ず……私たちが幸せにいたしますわ……！」

力強い翠からの返事を聞いて、倉橋と香里に笑顔が零れる。

二度と会えなくなるわけじゃあない。その気になれば様子を見に会いに行けるし、木綿季の方から遊びに来てくれるかもしれない。

そうだ、全然寂しくなんかない。いつでも会えるんだから。

「翠さん、一つお願いがあるのですが……」

「はい、何でしょうか？」

「木綿季君を……桐ヶ谷家の養子縁組に迎えるとき、私を証人にしていただけませんか？」

「そ、それは……、むしろこちらからお願いしたいぐらいです！ 是非

……お願いします」

「は……はい、ありがとうございます……！」

「倉橋先生、桐ヶ谷さん。あたしも……証人にさせていただきますい！」

養子縁組。

親や身寄りのない子供を、子供を産むことが出来ない夫婦などが手続きを踏み、本当の子供として迎え入れ、育てることが出来る権利を得ることである。

養子側は十五歳以上であれば、養子縁組を頼まれた場合拒否することが出来る。

今回の木綿季の場合、両親姉共に家族は全て他界。一応親戚はいるが木綿季に対して辛辣な態度を取っていたため、木綿季はあちらから頼まれた場合でも断るだろう。既に木綿季も桐ヶ谷家に行くつもりだ。

養子縁組を組むためには、手順を踏む必要がある。

義親、養子が共に役所などで養子縁組届に必要な項目を書き込み、捺印を押して提出する。これだけである。

ただし当人たちの署名だけではなく、成人している人間二人が証人となる必要がある。

今回の場合は倉橋と香里がそれに名乗りを上げたというわけだ。

証人となる者は上記の養子縁組届の証人記入欄に必要な項目を書き込み、押印をするだけである。

成人していれば誰であろうと構わないが、倉橋と香里ほど今回の証人にふさわしい人物はいないだろう。

ちなみに木綿季はまだ未成年なのでこれらの養子縁組届を提出する前に家庭裁判所に養子縁組許可をもらわなければならない。申請をだし、家庭裁判所が養子の生活先となるところの経済力等を調査する。

問題なしと判断されれば許可が下されるというわけである。

まあ余程のことがなければ普通は許可が下りるものだと思ってもらつていいだろう。

なのでその許可が下りて、届出が受理されるまでは木綿季は家族というよりも「居候」ということになる。

そして養子になったあと、元の苗字の名乗るか新しい苗字を名乗るかはその養子本人の自由となっている。

「そうだ、木綿季の着るお洋服を買わなくちゃ！」

「へ……お洋服……？」

明日奈の口から放たれたお洋服という単語を聞いて、木綿季はキョトンとなる。入院前に着ていた服はもう入らない。着ていた服と言えば患者着と和人に買ってきてもらったダボダボの寝巻ぐらいだった。

当然このまま病院を出るわけにはいかない。表を歩いても恥ずかしくないよう、衣服はこしらえる必要がある。

「うん！ 女の子なんだからお洒落しなくちゃ！」

「えつと……でもボク、お洒落なんてしたことないよ……」

「大丈夫！ 私が木綿季に似合うとびっきりのを買ってきてあげる

！」

「しまったな、それなら例のプローブ持ってきておくんだつたな。それなら遠隔でどんな服か確認出来たのに……」

「そしたらキリト君のスマホでテレビ通話しながらでいいんじゃないかしら？」

「……なるほどそうだな……！ 流石学年成績トップ！ 応用力が違いますなっ」

「アハハ！ そうだね、ボクこの患者着とパジャマしかもってないから、どの道外出許可もらっても恥ずかしくて外歩けないや」

「よし！ んじゃあそうと決まれば早速買いに行きましよう！ 直葉ちゃん！ 付き合ってもらっていいかしらー！」

「はい！ むしろ喜んで！」

明日奈と直葉はそう言うのと、ノリノリでリハビリテーションルームを後にした。

あの二人はどんな服をチョイスするんだろう。女の子らしい可愛い服だろうか、それとも木綿季の元気なイメージにあう服なんだろうか、どちらにせよ大変楽しみである。

「木綿季君、ちよつといいですか？」

木綿季たちとは離れた場所で話をしていた倉橋が、翠を連れてこちら側に歩いてきた。

「あ、はいっ」

「まずはリハビリの合格、改めておめでとうございます」

「あ、ありがとうございます……！」

「それで……退院日なのですが、色々手続きがありますので……明後日の日曜日にしようと思います」

「明後日……、わかりました！」

「了解です、こちらでそのように進めておきます。それで、それとは別件で、木綿季君に対して政府から報奨が出ているのですが……」

「……へ？ ほうしよう……？」

「ええ、木綿季君はメデイキュボイドの被験者となっていました。あの臨床試験は、医学界に大変な貢献をもたらしてくれたのです。です

から、木綿季君が報奨を受け取るのは当然の権利なのですよ」

「は……はあ……う？」

いきなり現実味のない話を持ち掛けられて木綿季の頭の上には？マークが浮かんでいた。

先生の言っていることは分からないこともないが実感が無い。むしろボクはメデイキュボイドのお陰で、ここまで生きてこれたのだ。

そのお陰で明日奈に会うことが出来たし、和人という恋人も出来たし家族も出来た。

むしろ報奨は既にもらっている。これ以上何をくれるというのだろうか。

「これを……受け取ってください」

倉橋はそう言いながら、懐から何やら通帳のようなものを取り出し、木綿季に両手で手渡した。

木綿季はその通帳を首をかしげながら覗き込む。しかし覗き込んだ途端に、たちまち木綿季は顔面蒼白となっていた。

何故なら、通帳の最後の履歴に、木綿季の口座に多額のお金が振り込まれているのが確認出来たからだ。

倉橋が木綿季のHIVが治ったときから、予め国に報奨金の申請を出していたものの数字だ。

「……これ、ぼぼぼボクが受け取っても、いいいいんですか!?」

「ええ、当然の権利です。まあ……これだけあるとちよつとした家が建ってしまいますね……」

「え……そんなにすごい金額なのか……?」

通帳の中身が気になる和人が通帳を覗き込む、それに釣られるように翠も覗き込む。そして、やはり覗き込んだ瞬間に和人と翠も顔面蒼白となった。

ぽつとで手に入ることがない巨額のお金の数字を見て、口は空いたままになり、本当に驚いているといった様子が見て取れる。

「ゆ、木綿季……まさかこれいきなり全額使ったりとかしないよな!」

「なななな、ナニいってんの!? ボクお金の使い道なんて全然わからないよ! お小遣いだって月500円だったんだから!」

「そ、それなら……これは私が預かっておいた方がよさそうね……」
「それがよろしいでしょう、木綿季君が本当にそのお金が必要になったときに、渡してあげてください」

「えっと、みどりさ……じゃない、お母さん……よろしくお願いします」

木綿季は頭を下げ、両手で翠に通帳を手渡した。翠は笑顔で軽く会釈をした後通帳を受け取った。流石にこんな巨額のお金を、十五歳の木綿季に使えとつても無理というものだ。

素直に親である翠が預かっていたほうが賢明だ。

「よろしくお願いされました」

倉橋はそれだけ伝えると「では、私たちはこれで」とだけ言い残し、香里と共にその場から退室していった。

その場には和人、木綿季、翠の、親子三人が残された。

「さてと、それじゃあ私も仕事に戻るわね」

「あ、ああ……わかったよ」

翠は上着と荷物をまとめると仕事に戻ろうとしていた。そして支度を済ませると木綿季の方を向き、これから家族になる娘に向かい、優しい笑顔で語りかける。

「木綿季ちゃん……、いえ、木綿季……本当におめでとう」

「あ……はい……… じゃない、うん! ありがとうお母さん!」

「それじゃあまた明後日、迎えに来るからね?」

「了解! 紺野木綿季、首を長くして待ってます!」

木綿季は右手で敬礼のポーズをとりながら、元気に翠に返事を返した。

本当に元H I Vキャリアとは思えない活発っぷりだ。翠はその様子を笑顔で見守った後、退室し仕事に戻っていった。

出来ることならもう少しここにいたいところだが、そうもいかない。翠は一家の母親であると同時に、社会に出て働いている身なのだ。

二人きりになったりハビリテーションシヨナルームのベンチから、ゆつくりと腰を上げると大きいのびをして、木綿季の方をみると「部屋に戻ろうぜ」と促し、優しく右手で木綿季の手をとった。

「あ……」

「ん？ どうした？」

「えっと、ううん……何でもない♪」

「そっか」

木綿季はALLOでキリトと手を繋いでいたときのことを思い出していた。

あの時は、現実で同じことが出来るだなんて考えたこともなかった。キリトを信じていなかったわけではなかったが、こうしていざ現実世界で一緒に手をつなげることを考えると、いろいろと感慨深いものがある。

絶対に長生きなんて出来ないと思ったのに、この男の子が自分の命を救ってくれた。それだけじゃない、そのあとの道もちゃんと指し示してくれた……。

「えへへ……♪」

「なんだかご機嫌だな？ 木綿季。まあ退院が決まったから……そら嬉しいよな」

「うん、退院はやっぱ嬉しいけど、今は……違う理由かな？」

「……ん？ 何か言ったか？」

「んーん！ なんでもない！」

相変わらず、肝心なところに鈍い和人であったが、木綿季はそんなことは気にしなかった。これから先、そのことで腹を立てる時もあるだろうが、それも含めて和人のことが好きだ。

いつもこうして仲良くくっついていてくれるだけ、とは限らないけど、一杯、和人の隣で一緒に今後は頑張って生きていこう。

だって、今のボクには……時間がたつくさんあるから。和人が、ボクの時間を作ってくれたから。

大好きだよ和人、ずっと……ずっと一緒にいようね……。

その後二人は病室のベッドに腰かけながら、これからのことを話し合っていた。

病気が治ってから何度も何度も話し合ってた内容だったが、毎度毎度心が躍っていたので、何度この話題を振られても飽きることはなかった。

むしろやりたいことが毎回増えていっていた。

行きたいところ、やってみたいこと、語っても語ってもキリがない。そんな明るい未来の話に、二人は暗くなるまで花を咲かせ続けた。

そして、倉橋の言った退院の日までの二日はあつという間に経過し、待ちに待った木綿季退院の当日が、とうとうやってきた。

西暦2026年10月25日（日）午前10:05 神奈川県横浜

市金沢区 横浜港北総合病院 木綿季の病室

「似合う！ すっごく似合うよ木綿季！」

「うう、ちょっと恥ずかしいよ明日奈……」

木綿季の退院日の朝から、明日奈は大変にご機嫌であった。

というのも、木綿季が明日奈を選んで買ってきてもらった服を着ていたからだ。

明日奈の見立てどおり、木綿季の活発で元気な性格を体現したような、ボーイッシュな服は、非常に彼女にあっている。

上は紺色のジャケットに白のブラウスを着こみ、下は紺色の短パンのジーンズに、ブラックのニーソックスというチョイスだ。

ALOの装備を除けば、三年間患者着と寝巻きしか着ていなかった木綿季からしたら、この普段着的な服装も、結構恥ずかしい思いがする。

「うん！ すっごく似合ってる！ いやあ……我が妹ながらお兄ちゃん嫁にもしたくないぐらい可愛いですなあ〜」

明日奈と直葉は可愛らしい服装になった木綿季に大変ご満悦の様

子だ。その眼差しは、言ってしまえば夏のビーチで水着の女性をじつと見つめるような、いやらしい視線のようなものだった。

「そ、そんなにジロジロみられると恥ずかしいよ……」

「えー、いいじゃない女の子同士なんだから」

「んじゃあさ、お兄ちゃんには見られたくないってわけ？」

和人にこの姿を見られる。そう考えただけで、木綿季の顔は徐々に赤くなっていった。いずれすぐに見せることになるのだろうか、心の準備が出来ていないのか、顔の温度はどんどん上昇する一方だ。

「あ……う、そ、そうじゃあ……ないんだけど……」

「へえーそうなんだ♪ ……キリトくん！ 木綿季がもう見ていってーっ！」

「ふえ!? ちょっとあすなあ！」

明日奈の不意打ちに、木綿季は両手を上下にぱたぱたさせながら焦り果てていた。

まだ心の準備が出来ていない、お願い明日奈、もう少しだけ待って！

そんな心境だったが、無慈悲にも病室の扉は横にスライドされていき、やがて半分ほど開かれると、黒い服を身にまとった少年がひよこつと姿を現した。

「わーわー！和人待つて！ ちょっとタンマだよー！」

「……もう遅いぞ……」

「いらっしやい、キリト君♪」

「おお、それこの前明日奈たちが買ってきたやつか？」

「うんうん、どうかな？ 木綿季のイメージにぴったりだと思っただけど」

「あ……う……」

和人は部屋に入るなり、木綿季の服装を上から下までなめるように見つめていた。端から見たらただの変質者のような視線で、じつくりと恋人の隅から隅までチェックを施していた。

「うん、すごくいいと思う。短パンが木綿季の活発で元気なイメージがぴったりというか、いや……しかしスカートもありだな……」

「お兄ちゃん、なんか気持ち悪いよ……?」

「むっ、失礼な」

過去こんなに褒めちぎられたことのない木綿季は、和人の感想にただただ頬を赤らめていた。

辻決闘デュエルをやるようになり、名が売れてきた時から、可愛い可愛いと言われることはあったが、その頃には感じなかった、羞恥心的なものが、ふつふつと心の底からこみ上げてきた。

その後しばらく、木綿季のコーディネートのことで話題は絶えず、次はあの服にしよう、いつそコスプレなんかもいいんじゃないと、脱線気味になりながらも、彼女のおしゃれについての話題には事欠かさなかった。

「木綿季、お金はいらなからね? 退院祝いってことで受け取って!」

「え……、えと、それは嬉しいけど……いいの?」

「うん! 私は木綿季が元気でいてくれるだけで、本当に嬉しいから!」

木綿季は明日奈の心の広さに頭が上がらなかった。

彼女からしてみれば、かつての恋人を取られたようなものだ。その相手が一番の親友だったとしても、その心は複雑なものに違いなかった。

だが、明日奈は木綿季を心から支え続ける覚悟があった。始めて剣を交えたあの日から、一緒に冒険をしたその日から、現実で会ったその日から、木綿季の力に鳴り続ける。

そう誓っていたのだ。

「……うん、ありがとう……明日奈……」

「気にしないでね、もし木綿季が何かお返ししたいって考えてるなら、またその時に考えてくれればいいから」

「うん……!」

ボクは……和人や明日奈にたくさんやってもらってばかりだ。

でも今は違う！ もう体も動く！ 走れる！ 色んなことが出来るようになった！

絶対に皆に恩返しする！ 何が出来るかはわからないけど、ボクに出来ることで精一杯気持ち返していききたい。

今すぐは無理かもしれない、でも、これからたくさんのお世話をやって、少しずついいから、明日奈や和人が、ううん、お世話になった人たちが喜んでくれるようなことを、していききたいな……！

これまで懸命に自分を支えてくれた人たちへの感謝の気持ちを忘れない、そしてその気持ちをいつか絶対形にして返す。

木綿季はそう固く心に誓った。

そして四人が仲良くやり取りをしていると、病室のドアが「コンコン」とノックされた。

木綿季が元気に「どうぞー！」と言うと「失礼します」という声と共に扉が開けられた。顔を出したのは翠と倉橋、そして香里だった。

「あー！ 倉橋先生ー！」

「おはようございます木綿季君、いよいよ……ですね……」

「はい！ 今まで本当にお世話になりました！」

木綿季が倉橋に対して深々と頭を下げる。

この元気な姿が見られるのも、また当分先になるのだろうなど、倉橋は思っていた。

「いいえ、退院出来たのは木綿季君の頑張りの成果です。私たちはちよつとだけ、お手伝いをしただけですから」

「……先生……」

「……………」

「母さん、スグ、明日奈、香里さん、俺たちは外で待ってしよう」

「え……？ あ……うん。木綿季、あたしたち、先に外で待ってるね？」

そう言うのと和人は、翠達四人を連れて先に病室を出ていき、部屋には倉橋と木綿季だけが残される形となった。

この木綿季と倉橋、一番付き合いが長い者同士、互いに想うこと伝えたいことがたくさんあるに違いない。

退院するこの日、今回を逃してしまえば、次はいつ会えるかわからない。だからたくさんお話したい。

しかし、いぎ二人きりの空間になってしまうと、倉橋は何から話していいかわからず、頭をぽりぽりとかきながら困り果てていた。

「……えっと、何から話しましょうか……」

「うんと……そうですね……、先生とはいっぱい思い出がありすぎて、ボクも何から話していいか……」

「そうですね……、私たちの付き合いも随分長かったですから……」

「……はい……」

お互い、言いたいことがなかなか言えないでいた。

何を話したらいいか分からなかった。今の気持ちをどう相手に伝えたらいいか分からなかった。

その模様はまるで、悩みを抱える年頃の娘と、そのお父さんのような光景だった。

しばらくお互いにクトを開くことができず、長い長い沈黙が続いたが、倉橋がようやくその重たい口を開いた。

「桐ヶ谷さんのお家では、うまくやれそうですか？」

「あ……えっと、まだわからないですけど、多分大丈夫だと思います。

和人も直葉も、お母さんも……みんないい人ですから」

「ははは、そうですか……」

一生懸命ひねり出して口を開いた会話は、すぐに終了してしまっただ。二人は再び黙りこくり、少しだけ気まづくなってしまった。

二度と会えなくなるわけではないとはいえ、中々会うことが出来ないのも事実、そのことを悟っていたからこそ、最後に色々話したかったのだが、いぎ改まると何を喋っていいかわからず、会話が中々発展しなかった。

「えっと……行きましようか、あまり和人たちを待たせちゃうと……」

特に気の利いた言葉が見つからない木綿季が、先に行こうと切り出してきた。倉橋は静かな口調で「そうですね、そうしましょう」とだけ返事を返した。

本当はもつと話したい、もつと伝えたい、そう思っているはずなの

に。しかし不器用な性格のせいか、中々切り出せない。

患者と医師として話すときはぺらぺら話せたのに、親子として接するととなると、倉橋は何もすることができなかった。

木綿季は明日奈達に買ってきてもらったカバンに少ない荷物をまとめて、忘れ物の確認をして、病室のドアに手を掛けた。

「あ……………」

その時、倉橋の目には木綿季の背中がとても小さく見えてしまった。

とても小さく、すぐに光の中に消えてしまいそうに見えていた。今話しかけなくては、今呼び止めなくては。

そう感じた倉橋はいてもたってもいられず、咄嗟に木綿季のことを呼び止めた。

「…………ツ、木綿季君！」

突如背後で大声を発した倉橋に驚いた木綿季は、両手で荷物を抱えたまま目を丸くして、彼の方向を見つめなおした。

先生は一体どうしたんだろう？ まだ何かあるのかなと、首をかしげ、倉橋の反応を待った。

「せ、先生……………」

「せ、せん…………せい……………」

倉橋の目には涙が浮かんでいた。大事な一人娘を嫁に出すような心境だ。

不器用な彼には木綿季を抱き締めることでしか、今の気持ちを表現することが出来なかった。もっと気の利いた言葉があったはずだ、もっと気持ちよく彼女を送り出せたはずだ。

しかし、これが彼の今の精一杯であった。

それからしばらく、倉橋は声を殺して、木綿季を抱き締めながら涙を流し続けた。

木綿季はそれを拒絶することなく受け入れて、倉橋のぬくもりを体全体で感じ取っていた。医師と患者としてではなく、父親と娘とし

て。

程なくして倉橋は感情が収まってくると、倉橋は抱擁を解いて、半歩分だけ後ろに距離を置いた。

右手でメガネを外すと、左手で白衣からハンカチを取り出し、自身の涙をぬぐい、精一杯の笑顔を作りながら、につこりと木綿季に語りかけた。

「気をつけて、元気で暮らすんですよ……」

倉橋は再び流れ出た涙を交じえ、父親らしい暖かい笑顔を見せながら、木綿季のこれからの新しい生活を応援するように背中を押した。

木綿季の目にも涙が浮かんでいた。そして、今まで注いでもらった愛情に応えるように、精一杯の返事を返した。

「……うん、行ってきます、お父さん」

「……はい、行ってらっしゃい、木綿季」

同日同時刻 横浜港北総合病院 一階受付ロビー

「あ、きた」

直葉が先に倉橋と木綿季に気付く。

和人もそれに気付き、木綿季に歩み寄り質問を投げかける。最後の親子のやりとりを交わした木綿季と倉橋は、二人で足並みをそろえて受付まで足を運んでいた。

「……もういいのか？」

「……うん、ありがとね、和人」

和人の意図に気付いていた木綿季は、彼に駆け寄り、微笑みながら感謝の気持ちを伝えた。

和人が爽やかな笑顔という形で返事を返すと、今度はその場にいる医療スタッフや看護師等、自分が入院している間お世話になっていた

人々全てに挨拶をして回る。

「えつと、みなさん……今日まで本当にお世話になりました。ボクを支えてくれて本当にありがとうございました」

木綿季が一階ロビーにいる人たち、全てに聞こえるように、はきはきと、礼儀正しく、きちつとした姿勢で声を発すると、自然と職員たちの手が止まり、木綿季に注目が集まりだした。

「ボクは今日から、新しい世界で新しいスタートを切ります。本当にありがとうございました！」

木綿季の真摯な態度に、職員たちは温かい笑顔で送り出そうと、優しい言葉を木綿季に向けた。

「頑張ってね」「寂しくなるな」「退院おめでとう」等と木綿季との別れを惜しむ返事もあれば、退院を祝福する声も聞こえた。

「和人君、翠さん、直葉さん、明日奈さん、木綿季君を……よろしくお願ひします」

倉橋が頭を下げ、改めて木綿季の今後をお願いする。

頼まれた四人は「頼まれましたっ！」と頼もしい返事を返した。まかせて大丈夫だと分かっている、やはり直接返事を聞けるとより安心するものだ。

「それじゃあ、いつまでもいるのもあれだし行くとするか」

和人がロビーを背中に回し、みんなに帰ろうと促す。それに続くように残りの四人も後を追う。

いよいよ木綿季が病院の外に出る。入口の自動ドアまで残り10メートル程。

この病院に来たときは、絶望の淵に立たされる思いだった。いつ死に襲われても不思議じゃない毎日だった。怯えたことも、生きるのを諦めたこともあった。

しかし、木綿季はその絶望から必死の思いで這い上がり、見事病気を克服した。非常に清々しい、晴れやかな気持ちで入口までの一歩一歩を進めていった。

自動ドアまで残り3メートルほどといったところで、ドアのセンサーが反応し「ガガガ」というスライド音を立てて、ゆっくりと開い

ていった。

外は快晴で、屋内と屋外の明度差で、イマイチ外の様子がみえづらい。そして、日光が眩しく照らしている外の風景に、何やら様子がおかしいことに気づく。

その光景を目にした木綿季は、目の前の光景が信じられなかった。「え……な、なんで……?」

そこには木綿季のよく知るA L Oの仲間たちと、百余人にも及ぶA L Oプレイヤーだと思われる人たちの集団の姿があった。

皆、必死で病氣と闘い続けた木綿季の退院と新たな門出を祝福するために、この場に集まってくれたのだ。

「す、すごい……人があんなにたくさん……」

「ごめんね? 木綿季は……嫌がるかもって思ったんだけど……」

「嫌だなんて、そんなコトないよ……。でも……何で? 何でこんなにたくさん……? 夢見てるのかな……?」

「だって……だって木綿季、アナタは……あの世界^{A L O}に現れた最強の剣士。あなたほどの剣士は……もう二度と現れない」

「明日……」

「そんな人を寂しく見送るなんて……出来ないよ……」

木綿季は嬉し涙を浮かべてアスナの話を聞いていた。木綿季の新たな第一歩を、素敵な一歩にしよう。そう考えていた明日奈のサプライズだったのだ。

自分は絶対泣かないと決めていたのにもかかわらず、明日奈の目には涙が浮かび上がっていた。

「みんな祈ってるんだよ。木綿季の新しい生活が、仮想世界^{あっち}と同じぐらい、素敵なものになりますように……」

「明日奈の言うとおりだ、お前のひたむきでまっすぐな行動に、みんな感動し、元気をもらっていたんだ。これは……皆からの、ほんのお返しなんだ」

「和人……」

和人はそう言うと、木綿季の手をぎゅつと握り締めた。お前の居場所はどこにあるんだ、みんなが応援してくれるところが、お前の居場所なんだと。

手の暖かさだけで安心できるように、優しく、そして力強く握り続けた。

「ボク嬉しい……すっごく嬉しいよ……。みんなありがとう、ホントにありがとう……！」

木綿季が笑顔を見せると、木綿季の退院祝いに駆け付けた百余人のプレイヤーは、全員一斉に祝福の言葉を捧げた。

——木綿季！ 退院おめでとう！——

その言葉をもらった木綿季は嬉しすぎて涙が止まらなかった。

ボクは今、世界一幸せなのかもしれない。こんなにみんなから想われてすっごい幸せ者だ。

あはは……困ったなあ……。また皆に恩返ししないといけないじゃないか……。一生かかっても出来るかわからないな……。

傍から見たらなんの集まりだと思われるに違いない。短時間だけ集まることを条件に、病院側から許可をもらっているとは言え、あまり居座り続けると第三者に迷惑がかかる。

程なくして四方八方から拍手が鳴り響き、木綿季に盛大に祝福を捧げると。駆け付けてきた人たちは周りへの迷惑のことを考慮して、台風一過の如く一斉にお開きとなった。

木綿季と親しいALOの仲間たちも、一人ずつ木綿季に祝福の言葉を贈ると、エギルの車に乗ってそそくさと帰路についていった。退院祝いなどはまた今度日程を決めてやるそうだ。

セブン一行は事務所の車で仕事に戻っていった。忙しいのに本当にありがたい。

超のつくほど大人数でがやがやしていた病院のロータリーは、あつという間に静かになり、近くを通る車の走行音、電線に止まっている小鳥のさえずり等の、雑音だけが耳に入っていた。

「さ、俺たちも帰るか、家に……」

「あ……うん、帰ろ……！」

「それじゃあ私たちはタクシーで帰るから、和人は木綿季と一緒に帰ってらっしゃい」

「木綿季、私たち先に帰ってるね！ またあとで！」

「うん！ えっと、また……お家で！」

木綿季とアイコンタクトを交わすと、翠と直葉はタクシーで帰宅していった。

一応桐ヶ谷家にはマイカーがあるのだが、父親の桐ヶ谷峰嵩が出張で乗り回しているため今は自宅にはなかった。

木綿季の養子縁組の話も峰嵩が戻ってきてから進むことになっている。

ちなみに峰嵩は木綿季の養子縁組に、肯定的な返事をくれていた。

本人曰く「今更子供が一人増えようが変わらないだろう」とのことだった。

更に木綿季が可愛い女の子だということを知ると、尚更内心ワクワクして出張を早く終わらせようと粋がってたぐらいだった。

まったく現金な父親である。

和人は木綿季を連れて駐輪場まで行くと、これまで何度もお世話になった愛車のシートから、ヘルメットを二つ取り出して木綿季に一つ手渡した。

「つけれるか？」

「うん、大丈夫」

木綿季がヘルメットを着けている間に、和人は愛車のタンクにもつをまとめ、シートにまたがってキーを差し込み、エンジンを起動した。

バイク特有のブオオンという音とともにバイクが息を吹き返す。和人の愛車は今日もご機嫌だ。

祖父の形見なので少しばかり古い型だが、現在でもばりばり現役のマシンだ。

「俺の後ろ、乗れるか？」

「あ……うん。ボク、和人のバイク初めて乗る」

「というより、バイク自体も初めてだろ？」

「あはは！ そうだね」

木綿季は笑顔を振りまきながら、小さい体を一生懸命動かしてバイクに乗ろうとしていた。

しかし和人より一回りも二回りも小さい木綿季には、中々一発でバイクのシートにまたがるのは難しい仕事のようだった。

それを見かねた和人は木綿季に向かって手を差し伸べる。

差し伸べられた手を木綿季はしっかりと掴み、和人に引張つてもらい、和人の背後につく形でなんとか乗り込むことができた。

「はふ……なんとか乗れたよ」

「よし、なら一応注意点だけ話しておくな？ 安全運転を心がけるけど、カーブで俺が重心を傾けても決して反対方向に重心を移動させないでくれ。それぞれ重心がバラバラになると事故につながる可能性があるからな」

「うん、わかった！」

「あとはひたすら俺にしがみついててくれ、両手を俺の背中から腹に回すようにして、何があっても絶対に手を離すなよ？」

「うん……頑張る！」

元気に返事を返すと、木綿季は和人の背中に身体を密着させて、言われたとおりに和人の背中からお腹に手が回るようにしがみつき、がっちり固定させた。

「OKだな。んじゃゆっくりいけど。徐々に速度上げていくからな？」

慣性が働くからしっかりと掴まってるよ？」

「ラジャー！ ううー……ちよつとドキドキするけど楽しみ！」

「ははは……、よし……出すぞ！」

右ハンドルにつけられたウインカーを点灯させ、周りに注意を促す。そして掛け声とともに和人はサイドスタンドを勢いよく蹴り、そのままアクセルを吹かして加速し始めた。

「わ……動いた！」

「大丈夫だ、すぐに慣れる。ゆっくりいくから安心しろ」

「う、うん！ わかった！」

二人の乗るオートバイは少しずつ速度を上げていき、やがて法定速度に達した。

木綿季は最初こそ必死に和人にしがみついていたが、慣れてくると周りの風景を横目で見る余裕が出てきた。

「わあ……！ みんなすごい速さで後ろに去っていくよ！」

「楽しいのはいいけど手は離すなよ？」

「あ……うん！」

木綿季の入院してた病院がある神奈川県横浜市から、和人たちが生
活している埼玉県川越市までは、車で片道二時間かかる。

今回は法定速度以下の安全運転で走っていたので多分その予定時
間よりもかかることだろう。

そして二輪というのは後部座席で乗っているだけでも疲れがたま
る。リハビリを終え、退院したばかりの木綿季には体力的な問題もあ
る為、和人はこまめに休憩を挟んでいた。

しかし、三年ぶりに見る外の世界は何もかもが新鮮だった。通り過
ぎる看板、道路標識、道行く人々、何もかもが見ているだけで楽しい。
首から上だけを動かし、様々なものを視界に入れて楽しんでいた木
綿季であったが、とあるものが目に入った途端に、そこに視線が止
まってしまった。

「あ……」

「……………ん？ どうした木綿季」

木綿季がヘルメット越しの籠った声を発すると、それが気になった
和人が声をかける。

木綿季の視線の先に写っていたのは、仲良さそうな一般家庭の四人
家族の、仲良くしている光景であった。

「えっと、あそこの家族、楽しそうだなって……」

ちようど信号待ちになり、バイクを停止させた和人も、木綿季の指

さした方向に視線をやる。するとそこには父親、母親、そして娘二人の四人家族が、楽しそうにレストランに入っていくやりとりが見て取れた。

「……………いいなって思ってた……………」

「……………」

「ボクも、あんなふうになれるかな……………」

「……………なれるよ、木綿季なら」

「……………ありがとう……………」

「信号変わった、出すぞ……………」

「……………うん♪」

地面についていた片足を上げ、和人はまたアクセルを蒸しだした。木綿季は先程よりもより力を込めて、和人にしがみつき、背中越しに和人の暖かさを感じとっていた。

やがて二人は一般道路と有料道路を経由し、道中休憩を何回も挟み、桐ヶ谷家の自宅がある川越市に近付いていた。時刻は既に13時。お昼どきを大きく過ぎていた。

「木綿季！ 腹減ってないか？」

バイクに固定されたスマホのナビの時計に目をやった和人が、木綿季の空腹状態を尋ねる。

「ペコペコだよー！ どこかでお昼にしようよー！」

「そうだな！ 何か食べたいものあるか？」

「そうだねー……………あ！ ボク、ハンバーガー食べたいー！」

「いきなりジャンクフードか……………OK、んじやあ俺のよく行つてたところに行くぞ」

「やったー！ わーい！」

同日13:25 埼玉県川越市アクドナルドハンバーガー川越店

二人はハンバーガーチェーン店アクドナルドに立ち寄っていた。

全国的にも世界的にもファストフード店で一番有名なハンバーガーチェーン店だ。

和人は敷地内の駐輪場にバイクを止め、先に自分がバイクから降りると、手を差し伸べて木綿季が安全に降りれるように配慮する。

木綿季はそんな彼の手を掴み、ぴよんと可愛らしく跳び、地に足を下ろす。そして二人で仲良く、アクドナルドの店内へと足を運んでいった。

お昼の時間を割と過ぎていたので店内の客足はそれほど多くはなかった。全体的に黄色とオレンジを基調とした内装は、見ているだけで食欲を掻き立てる見た目になっている。

それと同時に、わくわくするような、楽しくなるように配慮もなされていた。

久しぶりに外の世界の飲食店に足を運んだ木綿季はというと、目をきらきらとさせながら、カウンターに展示されているメニューの豪華さに大興奮していた。

ハンバーガーはもちろん、豊富な数多くのサイドメニューに感動を覚え、今のハンバーガーはこんなふうになっているのかと、軽くカルチャーショックを受けている様子だ。

とても来年度から高校生になるとは思えないリアクションであった。

「和人！　すごいよ！　今のハンバーガーってこんなに種類があるんだねー！」

「まあ、定番物から奇抜なものまでいろいろだ。俺はここだと辛い物がメニューにないから……少しだけ不満なだけだな」

「へー、和人って辛い食べ物が好きなんだ」

「ああ、でもスグたちは俺の味覚はおかしいっていうんだよ。辛い物の魅力がわからないとはな……勿体ない」

「あはは……、あ、ねね、とりあえず頼んじゃおうよ」

「そうだな……木綿季は何にする？」

「えつと……そうだねー……、んじゃあ和人と一緒のでもいい！」

「ふふ、あいよ、ちよつとまってるな」

和人は木綿季からメニューを聞き届けると、レジまで足を運び、てりやきバーガーのセットを二つ注文した。

バーガーとポテトとコーラセットの二人分だ。

注文を受けた店員が会計を済ませると、奥の方で調理が始まり、鉄板の上でパティがジュウジュウと焼かれる音、ポテトがいい音を立てて油で揚がる音、紙のカップに氷とコーラが注がれる音が鳴り響く。

三分ほど経過し、木綿季が目キラキラさせながら待っている程なくしてメニューがお盆に乗って運ばれてきた。

「おまたせ、はいこつち木綿季のな」

「やった！　ありがとう！」

「ふふ、折角だから窓際に座るか」

「うん！」

二人はお盆に載っているバーガーセットを運びながら窓際に一番近い席に陣取った。

外の風景がよく見える。海沿いや山沿いのいい景色とはいかないが、木綿季にとつては、ずっと憧れていた一般家屋が立ち並んだごく普通の景色だ。

「いただきますー！」

「いただきます」

木綿季はてりやきバーガーが包まれている紙を剥がして、大きな口でかぶりついた。あつあつのバンズとレタス、そして肉汁たっぷりのパティ、そして極めつけは秘伝のてりやきソースとマヨネーズの濃厚な味が、口全体に広がる。

しかし、そんなソースが他のバーガーよりも多く使われているので、バーガーからはみ出したソースが木綿季の手を汚してしまった。

「あ……木綿季、手が汚れてるぞ。ちよつと貸してみろ」

「うにゃ？」

「……よし、OKだ」

汚れてしまったことに気がつかない木綿季の手を、和人はテーブルに備え付けられている使い捨て濡れタオルで丁寧に拭う。

「ありがとう、和人！」

「そのバーガー、ソースが多いから気をつけろよ？　言うの遅かったけど」

「うん！　でもこれ美味しい！　病院の食事とはまた全然違う味だねー！」

「まあ、これがジャンクフードってやつだよ。自分たちで作った方が体にはいいが、たまーに食べたくなるんだよな」

「だね！　なんかちよつと癖になるかもしれないね、この味！」

何のことないごく普通の会話を二人は交わしていた。

ちよつと前まではこのような会話すら出来ない状態にあつたことを考えると、いろいろと思うことがある光景だった。

和人はこれからも毎日こうしていけるように、木綿季を守ってという、そう思っていた。

「えへへ……美味しいね、和人！」

「そうか……よかったな、木綿季」

「うん！」

木綿季はすごく楽しそうだった。病院から出て少し寂しい気がするかと思つたが、外の世界の何もかもが刺激的過ぎて、楽しいと感じてくれていた。

これからもつと色んなことを二人でやっていけると思うと、毎日が楽しくてしょうがないだろう。

他愛のない会話を続けてるうちに、二人はバーガーセットを完食していた。木綿季にいたってはカップに入っている氷も一つ残らずバリバリと噛み砕いて全部食べてしまっていた。

「美味しかったー！　ご馳走様！」

「ああ、ご馳走様」

食事を終えた二人は、少しだけそのまま休憩し、そろそろ行くかとお盆と紙ごみを片付けて、退店した。

実に数年ぶりにジャンクフードを口にした木綿季は、テリヤキバーガーとポテトの味が忘れられないのか、味の余韻がまだ口の中に残っているようだった。

「はあ……美味しかった♪」

外に出ると和人はスマホを取り出し、自宅にもうすぐ家に着くということを知らせた。

「もう、お家近いの?」

「ああ、多分あと十分ぐらいで着くぞ」

「そうなんだ、もうお家が……近いんだ」

木綿季はいよいよ辿り着く自分の家にワクワクを隠しきれなかった。AIDSを患ってからずっと病院暮らしだった木綿季が、ごく普通の家に帰れる。

横浜にある家ではないが、帰りを待ってくれる人がいる家に帰れるのだ。いよいよそのことが間近に迫ってきた木綿季は、気持ちが高ぶっているのを感じていた。

「よし、帰るぞ」

「……うん」

同日午後14:10 埼玉県川越市 桐ヶ谷邸

二人を乗せたバイクは片道三時間、休憩も含めると四時間を費やし、漸く桐ヶ谷邸へと辿り着いていた。

和人はいつも停めている自宅敷地内の位置にバイクを停車させて、エンジンを切り、サイドスタンドを立てて停車させる。

バイクを停めた和人は先にバイクから降りて、木綿季に手を差し伸べて降りられるように手を貸した。

「ん、ありがとー」

和人の手を借り、木綿季はシートからピョンと跳ねるようにして降りた。今日だけで何回も同じ動作を繰り返したおかげで、すっかりもう慣れた様子だ。

バイクから降りた木綿季は疲れた体をほぐすような伸びをして、これから自分が暮らす事になる桐ヶ谷邸を見上げていた。

「わあ……ここが和人の、ボクのお家なんだ……」

木綿季は桐ヶ谷邸の大きさに驚いているのもそうだが、ここがこれからボクの家になるんだという、少しだけ複雑な気持ちも抱いていた。

始めて訪れるこの家が、自分の家。そう考えるだけでいろいろなものがこみ上げてくる。

どうやって暮らしていけばいいか、新しい生活に慣れるかどうか。どう家族と付き合っていけばいいか。

いろいろ思うことはある。しかし、隣には和人がいてくれる。それだけで、なんだって出来る気がした。

桐ヶ谷家の人間としてだって、きつとうまくやっていけるはずだ。「ああ、今日から一緒に暮らすんだぞ」

「……うん」

木綿季は和人の手を握った。それに気付いた和人も木綿季の手を優しくぎゅつと握り返す。

お互いの体温を感じていると玄関の扉が横にスライドして開いていき、中から翠と直葉が待つてましたと言わんばかりに姿を現した。

「おーそーいー！ 片道二時間って言ったじゃない！」

直葉は顔を見せるなりいきなり和人に対してクレームを出してきいた。聞いてた時間と全然違うじゃない、一体どういうことなのよ、と顔から不機嫌さマツクスで和人に食ってかかる。

「しょうがないだろ……法定速度以下で走ってて休憩も小刻みに挟んでたんだから……」

「まあまあ直葉？ 木綿季に怪我させたら元も子もないのだから、仕方ないじゃない？」

お冠の直葉に翠が間に仲裁に入る。自分の母親に諭された直葉は「まあ……しょうがないなあ」と納得し、改めて木綿季が桐ヶ谷家の敷居を跨ぐことに、歓迎の姿勢を見せていた。

そして、家の中から二人が出てきたことよって、ここが本当にボクの家なんだなと木綿季は改めて実感し始めていた。

すると和人、直葉、翠の三人が玄関の前に横一直線に並ぶ形で整列し、一斉に木綿季の方を振り向き、温かい笑顔を見せた。

木綿季はその光景を不思議そうな顔をして眺めていた。頭の上には？マークが浮かんでいる。

何だろう？ 何が始まるんだろう？ と思っていた木綿季を出迎えたのは、彼女が予想していない言葉であった。

「おかえり、木綿季」

「おかえり、木綿季」

「おかえり、木綿季」

三人の口から同時にその言葉が放たれた。

木綿季はそれを耳にした瞬間、口を押さえて涙を流し、胸の奥からいろいろなものがこみ上げてきた。

しばらく感情の高ぶりを抑えることが出来なかったが、少しずつ落ち着いてくると涙を拭いながら、長い年月、現実世界で口にしていなかった、あの言葉を……口にした。

「ただいま……」

涙を拭いながら玄関に歩み寄ってきた木綿季を、和人、直葉、翠の三人は抱擁をして歓迎した。

ようこそ桐ヶ谷家に、よく帰ってきてくれたと、温かい言葉で木綿季を迎え入れてくれた。

来たばかりでまだ慣れないかもしれないが、やがて少しずつ馴染んでいき、完全に家族の一員になることだろう。

「ねね！ 記念写真撮ろうよ！ 木綿季が家族になった記念に！」

直葉がここで写真を撮ろうと提案を持ち出してきた。和人が「いい案だな」と言うと、すぐさま直葉が家の奥から三脚付きのデジカメを持ってきた。

「お、おい……これ父さんのじゃないか、勝手に使って大丈夫なのか？」

「へーきへーき、使ったらデータだけ吸い出しちゃえばわかんないっ

て！」

こういう時だけ悪知恵が働く直葉であった。父親のものを勝手に使ってしまったら、怒られるのは当然なのだが、今回ばかりは和人はしようがないなど考えていた。

なにせ、今日は特別だ。木綿季が自分たちの家族になるんだから、これくらいのことには許されるはずだ。

「え、えっと……お兄ちゃんこれどうやるのー？ スマホと全然違うよー！」

「……まったく、しようがないな……」

デジカメの操作方法がイマイチわからない直葉であったが和人に助けを求め、代わりに操作をしてもらう。

タイマー付きのシャツターをスタンバイさせて「みんな、カウント始まるから並ぶんだ」と言い放ち、全員がフレーム内に収まるのを確認して、シャツターボタンを押した。

押した和人はそそくさとフレームインする位置に並びカウントが終わるのを待った。

「もうシャツターが切られるぞ！ ……3！ 2！ 1！」

——カシャツ——

和人は撮影した画像データを早速父親のプリンターで取り込み、プリントアウトすると木綿季に手渡した。

木綿季にとって現実世界に帰還してからの、初めての家族の思い出の品であった。

「ありがとう……ボク、大事にする……！」

「うふふ、あとでラミネート加工してあげるからね」

写真を撮り終わった一行は玄関をくぐり、家の中へと上がった。

上がり框に腰を下ろし、履いてきた靴を脱ぎ、持ってきた荷物を手に取り、和人と木綿季は和人の部屋へ、直葉はデジカメを戻しに両親の寝室に、翠は既に夜ご飯の下ごしらえをしに、台所へと足を運んでいった。

玄関に上がって正面に見える階段を上り、木綿季は和人とともに彼の自室へと進んでいく。

部屋の前までたどり着くと、和人がドアノブに手を伸ばし、ひねって開き、先に入ると木綿季の方を向き、ハンドサインで「木綿季も入れよ」と合図する。

「えっと、お邪魔しまあ……す？」

「別にお邪魔しますってのは変じゃないか？　今はまだお前の部屋でもあるんだからな」

「あ……うん、そう……なんだけど……」

木綿季が緊張するのも無理もない。

初めて上がる家の、初めて入る他人の部屋が、自分の部屋でもあると聞かされて落ち着くわけがない。

落ち着かないが、でも不思議と安心出来ていた。見慣れないものが多いが、ここが和人の部屋だということが、彼女を安心させているのだろう。

「まあ、直に慣れるさ」

「あはは、そうだね……」

和人は持ち出していた荷物を床に降ろし、ベッドに腰を落ち着かせた。ぼーっとドア付近でいつまでも突っ立ってる木綿季に対し、自分の横をぱんぱんと手で叩き、無言でここに座れと合図を送っていた。「えと……んじゃ失礼して……」

木綿季はお言葉に甘えて和人のすぐ隣に腰を下ろした。するとベッドのマットが少しだけ上下に揺れると、優しく彼女を受け入れた。

それと同時に安心したのか心が落ち着いたのか、木綿季は大きく息を吸い、そして大きく吐き出した。

「疲れたな……」

「うん、ちよっとクタクタになっちゃった」

和人はそのまま上体を後ろに倒し、完全にリラックスモードになっていた。木綿季もその様子みると、同じように真似て上体を後ろに倒し、和人と川の字になって寝転んでいる形となった。

「……終わったんだな、全部」

「うん、終わったんだね……」

和人と木綿季はようやく終わったんだと、達成感を感じながら天井を見上げていた。今の今まで、激動の毎日が続き、こうやって静かに休まる余裕がなかった。

しばらくしてぼーっと佇んでいると、二人の顔の位置が非常に近くなっていた。少しだけ意識してしまうとお互いに顔を赤くしたまま固まってしまっていた。

やがて気まづくなつたのか、木綿季は視線を逸らして天井付近を見つめていた。

「あのね？ 和人……」

「……何だ？」

「ボクね、ずっとずっと考えてたことがあつたんだ」

「……考えてたこと？」

「うん……、あのね、ボク、何のために生まれてきたんだろうって、今までずっと考えてたの」

「何の……ために……？」

「うん……。死ぬために生まれたボクが、この世界に存在する意味は何だろうって。何も生み出すことも、与えることもせず、たくさんの薬や機械を無駄遣いして、周りの人達を困らせて……、自分も悩み……苦しんで……」

「……………」

「その果てにただ消えるだけなら、今この瞬間にいなくなった方がいい。何度も何度も……そう思った……」

木綿季は仰向けの状態で天井を見つめながら、その瞳に涙を浮かべていた。やがてあふれた涙は木綿季の頬を伝い、重力に引っ張られて和人のベッドを濡らした。

「何でボクは生きてるんだろうって……ずっと……」

「木綿季……」

「でも……でもね？ ようやく……答えが見つかった気がするよ……」

そう言うと木綿季はむくりと上半身を起こして、和人の方を向き言葉が続けた。

「和人と出会えたこと、それがボクの生きる意味だったんだ……」

その言葉を聞いた瞬間、和人は上体を起こし、力強く木綿季を抱き締めた。抱きしめずにはいられなかった。今抱きしめないと、またこの少女がどこか遠くへ行ってしまふような、そんな感覚を覚えた。

「和人と出会えて……いっぱい愛を注いでもらって、ボクに生きる意味をくれた和人が、ボクの人生そのものだったんだ。和人は……ボクだったんだ……」

「俺もな、木綿季と出会えて、色んなものを受け取った。これまでの人生で一番大切なものを贈ってもらった。木綿季も俺の人生そのものなんだ……」

互いのおかげで今の自分が、こうしてここにいる。いることができ。その想いを伝え合おうと、二人はまた、心の底からこみ上げてくるものを感じていた。

いろいろもつと伝えたいことはあるが、まず初めに伝えないといけないことがある。

二人は大きく息を吸い込むと、一旦気分を落ち着かせて、静かに口を開き、想っていることを、互いに伝えあつた。

「木綿季……生きててくれて、ありがとう……」

「和人……ボクを愛してくれて、ありがとう……」

第二章く日常編く 第41話く木綿季の過去く

西暦2026年10月25日 日曜日 午後15:20 桐ヶ谷邸
和人の部屋

今日は紺野木綿季を知る者にとって非常に喜ばしい日だ。およそ半年前に難病と呼ばれているHIVウイルスを、骨髄移植手術によって完全に駆逐することに成功した。それに伴い免疫細胞も活性化し、AIDSを克服したのだ。

病気が完治してからは、懸命にリハビリを重ねた。道中様々なアクシデントにも見舞われたが無事に上半身下半身ともに完璧な身体機能を取り戻したのだ。そして今日、木綿季は横浜港北総合病院を卒業し、受け入れ先となった桐ヶ谷邸へとやってきたのだ。桐ヶ谷邸の人は暖かく木綿季を迎え入れ、歓迎した。

義母の翠、義姉の直葉、そして…義兄でもあり恋人でもある桐ヶ谷和人。この三人の手によって招き入れられたのだ。出張で帰ってきていない義父の桐ヶ谷峰高も帰宅次第、改めて木綿季を歓迎してくれることだろう。

「あ……」

「……………」

和人と木綿季は、現実世界で初めての口づけを交わしていた。仮想世界での経験は何度かあったが、現実世界での口づけは初めてだった。温かい、唇独特の肌の感覚が直に伝わってくる。空気が乾燥していたので少しだけガサついていたが、そんなことは気にならなかった。

「……和人……」

「……木綿季……温かいな……」

お互い顔は真っ赤であった。もう互いに一生の契りを交わしているような間柄ではあるが、いざ事に走るとなると……やはり緊張というか照れくさいものがあったのだ。しばらくお互いに無言の時間が続いた。時々家の表を走る車や、散歩中の犬の鳴き声等がかすかに聞こえてくるだけであった。

「あ……えつと……和人……その……ありがとう……」

木綿季は視線を逸らしてもじもじとしながら自分の長い揉み上げをいじくっていた。その姿は16歳とは思えないなんとも言えない色っぽさというか大人っぽい雰囲気醸し出していた。それを間近で見えてしまっていた和人の煩惱と理性は揺さぶられていた。

「……木綿季!!」

「え……? わあっ!?!」

和人は煩惱に勝てず、木綿季を押し倒してしまっていた。自分を冷静でいさせることが出来なかった、理性より煩惱が勝ってしまった。

「木綿季……俺……」

「か……ずと……」

前にもこんなことがあったな、と木綿季は思い出していた。かつてメデイキュボイドの中で和人と日常を過ごしていた時、こうなる可能性があると警告されたことがあった。まさか家に帰った初日に、このようなことをされるとは思ってもみなかったが。

「う…」

和人は木綿季を押し倒してしまいながらも、まだ煩惱と戦い続けていた。ほんの少しわずかだけ、和人の理性が残っていたのだ。

「あの…かずと…、ボク…いいいよ？」

「え…」

「ボク…かずとなら…いいいよ…」

木綿季は耳まで真っ赤にしながらゆつくりと淡々と、和人に言葉を伝えていた。和人の手は震えていた、まだギリギリの地点で理性が堪えていた。木綿季はああ言ってくれてはいるが、ここで襲ってしまうのは恋人として如何なものかと思っていた。もつとお互いを知って…理解を深めて…絆を深めてから及ぶべきではないのか？…と。

「木綿季…俺…俺…ッ」

「いいよかずと…きて…」

しかし和人は煩惱に負けた。完璧に理性を跳ねのけされて、煩惱に競り負けてしまった。息を荒くしながら和人は木綿季の服のボタンを一つ一つ外していった。しかし自分の着ている服ならともかく、通常他人の服のボタンというものは存外に外しづらいものだった。ましてや和人の手はこれでもかというぐらいにプルプル震えてしまっていた。これではとても外すことなどできない。それどころか折角買ってもらったばかりの洋服の生地を傷めてしまいそうだった。

（…ボタンが…なかなか外れないな…落ち着けよ…俺…）

和人がボタンに苦戦している中、突如として和人の部屋のドアがコンッコンッとノックされた。

「——ッ!？」

「おにいちゃん？　木綿季のお洋服持ってきたよー？」

ドアをノックしたのは妹の直葉だった。明日奈と一緒に買いに行った木綿季の洋服の残りをリビングに置きっぱなしにしてたのを思い出して、和人と木綿季の部屋まで持ってきてくれていたのだ。

「…スグか…ちよつと待っていてくれ、今開けるから」

思わぬ邪魔が入ったが、和人は冷静さと理性を取り戻せていた。木綿季はと言うと、心臓はバクバクになり、全身を激しく血が廻っていた。呼吸も荒くなり、肌は全身隅々まで真っ赤っかだった。

和人は押し倒していた木綿季から体をどかし、一回深呼吸すると落ち着かない足取りで自室のドアまで歩み寄った。ドアノブに手を掛け、ガチャリという音と共にゆっくりとドアを開いていった。

「ハイこれ、4着ほどあるからちよつと重いよ？」

「あ…ああ…、ありがとな…スグ」

和人は直葉から木綿季の洋服を受け取った。直葉は受け渡したとき、和人に違和感を覚えていた。そして和人のベッドに座っている木綿季の姿がチラツツと見えると、何となく状況を察してしまった。

「ははあく、どうやら私はお邪魔だったみたいね」

直葉が悪魔の微笑みを見せながら口を押さえ、にやけたジト目で和人を見上げていた。その顔の内面には、これからどうやって和人をいじくってやろうか、奢らせるためのネタにしてやろうか？などと考えていた。

「あ…いや…違う！ スグ、これはだな…」

「またまたく、まあ…初日なんだからがつつかないようにね？」

全てを見透かされてしまっていた和人は開いた口がふさがらず、何も言い返すことが出来ずに慌てふためいていた。木綿季は木綿季でベッドに丸まるようにして「もう勘弁して」と言いたげな格好で蹲ってしまっていた。もちろん全身真っ赤つかである。

「アハハ！ 冗談よ冗談！ 今度何かおごつてね！」

そう言いながらそそくさと直葉は退散していった。和人はまた直葉に知られてほしくない、よりによって最悪なネタを掴まれてしまった。

「うう…スグめ…」

「あはは…なんだか大変なことになっちゃったね…」

「ああ…うん…なんか…ごめん…」

「んーん、気にすることないよ。それに機会は…いつでもあるだろうし…ね…」

「…ん？ 何か言ったか？」

「んーん、何でもない！」

そう言うと木綿季はぴよんと元気に跳ね上がるようにベッドから立ち上がり、大きく伸びをした。

「ん…それにしても…まだこれから本当の家族になるなんて…実感が湧かないな…」

「まあ…それは俺もだよ…、多分…養子縁組をする人たちはみんな同じ気持ちなんじゃないか？」

「うーん、そうなんだろうなあ…。でもボクはその話を持ち掛けられる前から、お母さんと直葉と仲良くなれたから、全然緊張とかはして

ないかな」

「そう…だな、母さん…一発で木綿季の事気に入っちゃったからな…」
「あはは、そうだったね!」

二人つきりの部屋で二人つきりの、何の変哲もない他愛ない会話が交わされ続けた。先ほどまでの緊張気味な空気は既になくなっていった。お互いにお互いのことを包み隠さず話していた。二人は時間が経つのも忘れて話し続けた。ALOでのこと、入院中のこと、和人と出会ってからのこと、いくらでも話のネタには困らなかつた。しかし和人には一つだけ、気になることがあつた。

「なあ…木綿季、一ついいか?」

「ん、なあに? かずと」

「お前の…過去のことを…教えてくれないか?」

「え…」

木綿季の表情が曇つた。木綿季の過去…即ち病院生活が始まる前のことを意味していた。その過去の出来事は…木綿季にとつてはほじくり返されたくない、出来れば永遠に自分の心の奥底に蓋を閉めていつまでも封印しておきたい出来事だつた。

「俺…入院してからの木綿季のことはたくさん教えてもらった。でも…木綿季が小さいころの話は…ほとんど知らないからさ…」

「あ…その…」

木綿季は先ほどまでの明るさがどこかにいつてしまったかのよう
に、表情を暗くしていた。いくら和人でもこれは話せない、話したくない。自分の表に出したくない過去を暴かれたくない。それが…大切な恋人の和人であつてもだつた。

「ダメなら…いいんだ。誰にでも知られたくないことの一つや二つあ

るからな…、変なこと聞いてごめん」

そう言うと和人は木綿季の頭をぽんぽんと優しく手を当てて、ゆっくりと撫で始めた。

「ごめんね…ごめんね和人…」

「……気にするな」

和人は泣きそうになっている木綿季を優しく抱き締めた。過去のことより、これからの未来の方を大事にしよう。そう思いながら木綿季を優しく抱き締めた。

「和人…」

二人のいる部屋がなんとも言えない空気が漂っている中、階段の下から直葉の声が聞こえてきた。

『おにいちゃーん！ ゆうきいー！ お風呂沸いたよー！ 先入っていいよー！』

「…だつてき木綿季、先入ってこいよ」

「あ…うん。んじゃあ…お言葉に甘えちゃおうかな…」

そう言うと木綿季はベッドから立ち上がり、直葉に届けてもらったカバンから自分の下着と寝巻を取り出した。和人はそれを見てはいけないものと認識し、即座に180度方向を変えて見ないようにした。

「あはは！ 何してんの和人、これ買ってきたばかりのやつだよ？」

「そ…そういう問題じゃない！」

「あははは！ 和人かわいいー！」

「…うるさいぞ！ 早く入ってこい！ 俺も入りたいたいんだから」

木綿季は笑いながら「はい」と返事をし、着替えを持ち部屋を後にした。和人は部屋に一人残る形となり、大きなため息を吐きながらほっと胸を撫でおろしていた。

「…これから…木綿季の部屋が出来るまで…毎日こんなかんじなのか…」

等と考えを巡らせていると、いきなりドアがガチャンという音と共に開かれた。

「オペツ!？」

奇怪な声を上げながら和人がドアの方に視線をやると、ドアの隙間から木綿季が顔の半分を覗かせていた。

「…覗かないでね？」

「…それは覗けということか？」

「えっ…あっ…うう…、か…かずとのばーかつ!!」

顔を真っ赤にして怒った木綿季はドアを勢いよくバタンツという音を立てて閉め、階段を下ってバスルームへと向かっていった。

「くす…やれやれだな。でも…こういう毎日も…悪くないな…」

和人は再びベッドに仰向けになり、これから毎日が今日のように楽しい毎日になるんだろうなと笑顔をこぼしていた。その時、和人のスマートフォンに誰かからの着信が入った。

「ん…誰だ…?」

和人はズボンのポケットからスマホを取り出して、ディスプレイの発信者の名前へと目をやった。

「…明日奈…？ 何の用だろう…」

発進の相手は明日奈だった。何でこのタイミングで電話をかけてくるんだろう？ 何か緊急の用事でもあるのだろうか？ と思いがながら和人は通話のアイコンをタップして明日奈からの通話に出た。

「もしもし…明日奈？」

『あ…キリト君？ 突然ごめんね、今…ちよつと話せるかな？』

「ああ…今自宅で寝転がっているとところだ。大丈夫だよ」

『そう…それならよかった、あのね…ちよつと誰にも聞かれないところまで…移動出来ないかな』

明日奈の様子がおかしかった。何で家の中なのに誰にも聞かれないのだろうか。俺以外の桐ヶ谷家の人間に聞かれたらマズいことでもあるのだろうか…？

「あ…ああ…別に構わないけど…何の用なんだ？」

『あのね…木綿季のこと…なんだけど…』

「木綿季のことだって…？」

『うん…出来れば自宅を出てもらって、誰にも聞かれないところまで移動してからで…いいかな…』

「…わかった、移動したらこちらから折り返し電話かけるよ、それでいいか？」

『ありがとう…ごめんね…、手間かけさせちゃって』

「構うことないさ、んじゃあ今から家を出るからまたすぐ後でな」

『うん…また後で』

通話を終わると和人は通話終了のアイコンをタップして、スマホを

スリープにして部屋を出ると、階段を下りながら大きめのポリウムで家族に外へ出る用事を伝えた。

「母さん！ スグ！ 俺ちよつとコンビニいって来る！ 10分ぐらいで戻るから！」

「はあーい！ 遅くならないでよー？」

玄関で靴を履き、扉を開けて家を出る。自宅から50メートルほど離れた人通りの少ない路地に出た和人はスマホのアドレス帳から結城明日奈のページを出して、明日奈に電話を掛けた。呼び出し音が通話のスピーカー越しに聞こえてくる、しばらくして明日奈が電話に出た。

『もしもし…キリト君？』

「やあ…明日奈。もう大丈夫だ、家から離れた路地まで来たから。ここなら通行人も滅多に通らない」

『ごめんね…手間かけさせちゃって…』

「気にするな、それより…木綿季に関わることで…一体何なんだ？」

電話越しに明日奈が深呼吸をする音が聞こえた。もしかしたらよくないことが明日奈の口から聞かされるのかもしれないと思って、和人は少しだけ身構えた。

『あのね…キリト君、今から話すことは実際に私が確認したわけじゃないから…憶測の域を出ないの。それを前提として…聞いてもらっていいかしら…？』

「…ああ…わかった。…で…何なんだ？」

『うん…実はね、この前買ってきた木綿季の服を…今日着てもらったでしょ？ その際、私と直葉ちゃんが着替えを手伝おうとしたんだけど…』

「ああ…」

『木綿季ね…私と直葉ちゃんの手伝いを頑なに拒否したの。それどころか一人で着替えるときも物陰に隠れながら着替えていたの…、女の子同士なのに…。ちよつと…変だと思わない?』

「…確かに変だな…、男の俺ならともかく…同じ女の子の明日奈たちにすら見せたくないってのはちよつとおかしい」

和人は明日奈の話聞き、木綿季の行動に対して違和感を感じていた。

『そうでしょ…? 変だよね…やっぱり…。リハビリをする前の介助が必要な時だって…体を拭くときは決して私達じゃなくて全部看護師さんにやってもらったの…』

「…それは本当の話か?」

『うん…少なくとも事実だよ。別に木綿季のことを詮索するわけじゃないんだけど…木綿季は…何か知られたくないことを…体に隠してるんじゃないかなって…思うの…』

「…そう…か…」

和人は考えていた。そういえば手術中も倉橋先生は木綿季の上着は脱がさず、腕を捲つて骨髄液を注入していた。もしかしたら倉橋先生なら何か知ってるんじゃないか…?

「…そうだな…、もしそうだとしても…俺たちが勝手に詮索していいことじゃないと思う…」

『…うん…そうだよ…ね…。こればかりは…木綿季本人の問題のような…気がするし…』

「だな…、明日奈…話はそれだけか?」

『あ…うん…それだけだよ、ごめんね…急に変なこと言つて』

「いや…木綿季のこと気にかけてくれて嬉しいよ、サンキューな…明日奈」

『ううん、平気だよ! 私にとってはキリト君も木綿季も大切な親友』

だから!』

親友か…、そうだな…俺たちが恋人同士だったのは…もう過去の話だ。今の俺には…木綿季が…大切な人がいる。掛け替えのない…大切な人が…。

「わざわざごめんな、今度何かご馳走させてくれ」

『え…いいの? それじゃあ…私のお気に入りのお店でお願いしちやおうかな〜?』

「おいおい…あまり高いところは勘弁してくれよ?」

『冗談だよ! それじゃあまたね! キリト君!』

「ああ…またな、明日奈」

通話を終えた和人は通話終了のアイコンをタップして、明日奈との通話を終えた。スマホをポケットに仕舞い、自宅に向かって歩きながら、木綿季のことについて考えていた。詮索してはいけないことぐらい和人は分かっている。しかし…一回耳にしてしまうと気になってしょうがなかった。別に木綿季の秘密を無理やりにも暴こうというつもりはないが…それでも気になるものは気になるのだった。

「…まあ…これに関しては…木綿季が自分から口を開いてくれるのを待つしかない…か」

うだうだ考えててもしょうがないので、和人はやや重たい足取りで自宅へと向かっていた。多分、木綿季と顔を合わせたら何かあったの?と聞かれるに違いない。木綿季には嘘がつけない、察しが良すぎるのだ。何か誤魔化す方法を考えなくては…。

「ただいま〜」

「お兄ちゃんおかえり〜、もうすぐ〜飯出来るからね〜」

「あいよー」

靴を脱いで家に上がった和人は妹に返事を返しながら二階にある自室へと向かっていた。木綿季への言い訳を考えながら階段を登っていた。

「…まあいつか…適当に嘘をつこう…、バレるかもしれないが…」

そう言いながら和人は自室のドアノブを捻り、ドアを開けた。開いたドアの先には、部屋の入口に背中を向け、下着だけ身に着けた木綿季の、今まさに着替えている最中の現場に出くわしてしまった。ラツキースケベである。

「なっ…木綿季…!?!」

「へっ!? か…かずと?!」

和人は顔を真っ赤にして焦っていた。何で木綿季がここに？ 風呂入ってたんじゃないのか？ いやそれにしてもこの状況はいろいろとマズい、周りの人間に誤解も生む。

噂はたちまち広まってALLOでもどんなあることないことが言いふらされるか分からない。即刻誤魔化してこの場を立ち去らなければ。

「違う！ これは違うんだ木綿季！」

「み…見ないでっ!!」

「ご…ごめん木綿季！ 今すぐでい…く…から…?」

和人の表情が変わった。和人の視線は木綿季の背中に刻まれたとある”模様”に向けられていた。タトゥーや入れ墨などではない、赤黒く、生々しく木綿季の背中に張り巡らされた細長い模様、それは…。

「木綿季…その背中…なんだ…？」

「い…いや…見ないで…かずと…」

和人は木綿季の言うことに耳を貸さず、早足で木綿季に近付き、その模様の正体を確かめた。

「これ…木綿季…ひよっとして…痣…か？」

「……………」

木綿季は声を殺して泣いていた。その様子を見て和人は先ほどの明日奈の言ったことを思い出していた。決して他人に着替えを手伝ってもらわず、知り合いではなく看護師に身体を拭かせていたことを。木綿季はこの背中に出来ている痣を見られなくなかったのだ。恐らく…木綿季の過去の闇と深く関わっているであろうこの生々しい痣を…。

「木綿季…この痣…どうしたんだ…。昨日今日でついた痣じゃないだろう…」

「……………」

木綿季の体は震えていた。見られてしまった、しかもよりによって一番見られたくない和人に見られてしまった。これを見られてしまったからにはもう…どんな言い訳を並べても誤魔化しきれないということも悟っていた。

「……俺は…木綿季の過去のことを詮索するつもりはない…、でも…これを見てしまったからには…もう…聞いておかずにはいられない

…」

「……………」

「頼む木綿季…話してくれ…、この痣と…お前の…過去のことを…」
「かず…と…」

木綿季が細く千切れそうな声で和人の名前を呼んだ。和人に見られてしまっとうしようという気持ちと、和人に助けてもらいたいという二つの気持ちを胸に抱きながら。

「…誰にも言わない…、だから…話してくれないか…？」

「……………うん……………わかった…」

木綿季は流れ落ちる涙を拭くと、震える声で自分の過去を…忌々しい過去を話し始めた…。

「和人…ボクが小学校の頃…HIVが原因でいじめられてたつて話…知ってるよね…？」

「…ああ…そんな簡単に感染するもんじゃないのに、一方的な偏見だけで…虐げられてたつて聞いている…」

「…この背中の痣はね…その時に…ついた…、いや…つけられたものなんだ…」
「なっ…」

和人の表情が強張った、この細長い痣。余程の強い衝撃でなければつかない。それも素手ではつかない形をしている。ましてや小学生の腕力は元より大人でもつかないと確信していた。それじゃあなんだ？ 木綿季の体に一生消えない傷を負わせたものの正体は…？腕力だけじゃ生まれないとすると…腕じゃないもので…殴られたのか…？

「ボクね…」バイ菌” って呼ばれて毎日…いじめられてた。殴られた

り…蹴られたり…。最初は小突かれる程度のもだったんだけど…、日に日にそのいじめはエスカレーターしていったの…」

「……………」

「でね…ボクが…ボクの家族が引越す一週間前…だったかな…。あの事件が起きたの…」

「事件…」

「ボクへのいじめはね…主犯の子が一人いたの。その子が先頭になっていじめてて、その周りの子は取り巻きというか…便乗していじめてるって感じだったの」

「……………」

「それでね…その事件のあった日ね…、ボク…一度死にかけたんだ…」
「なっ…」

和人が息をのんだ。木綿季の命を脅かしていたのはHIVだけではないと聞かされて、全身に戦慄が走った。

「ボクへの暴力は…その主犯の…神田君って子が…ほとんどだったの。お腹にめり込むぐらい殴られたこともあったし…顔を殴られて血が出たこともあった」

和人の表情が穏やかではなくなっていた。拳を震わせ、木綿季をいじめていたというその神田というやつに対して怒りの炎を燃やしていた。

「でも…それですら生ぬるって感じたのか…ある日ね…、神田君は…野球のバットを持ち出してきたの」

「な…バットだと…？」

和人の予想が的中した。木綿季の背中の痣はバットで殴られたものであると。痣の出来ている場所から背骨は外しているように見えるが、一歩間違えれば背骨が折れていたかもしれない。そう考えてし

まった和人はますます神田という男に対して怒りを燃やしていた。

「うん…今までだまって暴力に耐えてたボクだったんだけど…そのバットが構えられたときは…やめてって言ったの。そんなもので叩かれたら…死んじやうよって…」

木綿季は涙を流していた。自分の過去を和人に晒しながら涙を流していた。一生涯思い返したくなかった過去を話しながら…。

「でも…神田君はボクの言うことを聞かず殴りかかってきた。周りの子たちもその時は神田君のことを止めたんだけど…神田君は構わずボクに襲い掛かってきた」

「…神田…」

「神田君は…」 お前なんか死んだ方が世の中のためなんだよ、むしろ殺してくれる俺に感謝しろ” って言って…ボクを…ボクの背中を…殴ったの…」

和人は聞いてていたたまれなくなり、木綿季を抱き締めた。どうして俺はもつと前から木綿季の傍にいてやれなかったんだ。もつと早く出会っていれば、木綿季をつらい目に遭わせずに済んだかもしれない。もつと早く守ってあげられたかもしれない…とそう思っていた。

「そこからは意識がぼやけてたんだけど…、一発背中を殴られたボクは…呼吸困難になって…体を痙攣させてたらしいの…。そしたら担任の先生が駆け付けて、神田君を止めてくれたの」

「…その先生は…木綿季の味方じゃなかったんだろ？ それでもその神田ってやつを止めたってことは…」

「うん…多分ボクを助けようとしたんじゃないかって、問題を起こされたくなかったから止めたんだと思う。先生も内心じゃボクにいなくなつてほしいって思ってたはずだから」

「……………ッ」

「その後…神田君はボクの頭を狙おうとしてたらしいんだ…。だからあの時先生が止めてなかったら…」

和人は再び木綿季を力強く抱き締めた。己の無力さを痛感していた。決して和人が悪いわけではない、悪いのは木綿季をいじめていた連中だ。神田という男だ。にも関わらず和人は自分を責めていた。

「ごめん…ごめん木綿季…」

「どうして…和人が謝るの…？」

「俺が…俺がもつと…もつと早く…木綿季と出会ってれば…、木綿季のことを守ってあげられたかもしれない…それなのに…！」

「そんな…和人の所為じゃ…ないよ…」

「ごめん…ごめんな…ごめんな木綿季…」

「か…ず…と…」

和人も涙を流していた、木綿季の壮絶な過去の闇の悲しき。それから木綿季を守ることが出来なかった自分の無力さに対して悔しさの涙を流していた。

「木綿季…俺は…どんなことがあっても…お前を守る…。仮想世界だけじゃない…。この現実世界でも…絶対にお前を守り切って見せる…」

「う…ん…、ありがと…かずと…」

和人と木綿季は、お互いを力いっぱい抱きしめた。木綿季は決して表に出したくない過去を和人に話してしまった。話すことで和人からどう思われるか分からない、もしかしたら今まで通り接してくれるようになるかもしれない。そう思っていた。

しかし、それどころか和人は自分のことを一生守ってくれるという。嬉しい涙もあったが、それ以上にもつと和人のことを信用してい

ればよかったと、後悔の涙も少しばかり混じっていた。

二人はしばらく抱擁した後、体を離れた。木綿季は自分が下着姿だということ忘れて、自分の状態に気付くと慌てて体を隠して和人に「出てってー」と言い放ち、和人を追い出した。和人は若干の理不尽さを感じつつもまあ致し方ないかといった感じで部屋のドアの前で頭をポリポリかいていた。程なくして寝巻に着替えた木綿季が「入っいいいよ」とドア越しに声を掛けた。

「…入るぞ」

和人がドアを開けて中に入ると、木綿季はベッドに腰かけていた。いつものヘアバンドは外していて、パジャマ姿で和人を出迎えた。

「可愛いパジャマだな…明日奈の選んだやつか？」

「う…うん…ちよつと派手すぎるけど…」

木綿季の着ているパジャマは白地にピンクのチェック柄にデフォルトメされた動物のイラストがあちらこちらにプリントされている可愛らしいパジャマだった。実に女の子らしい外見だ。

「いいじゃないか、可愛いぞ？」

「あ…うん…ありがと…」

木綿季は照れくさかったが、褒められて悪い気はしなかった。満更でもないような顔をしていた。

「さてと…んじやあ俺も風呂入ってくるぞ」

「あ…うん、いってらっしゃい」

「退屈だったら棚に入ってるマンガとか読んでくれて構わないからな？ パソコンもロックかけてないから自由に使ってくれ。なんならアミュスフィアを使ってくれても構わない」

「うん！　ありがと！」

「ああでも…押入れのナーヴギアだけは…やめておいてくれ」

「え…あ…うん。わかった」

「別にSAOだけがおかしかったわけだから…ナーヴギアが悪いわけじゃない。悪いわけじゃないんだが…あまり良くない思い出もあるから…封印してるんだ」

「…そっか」

「アミユスファイア…もう一台買ってこないとな、今月分の予算…：オーバーしちまうか…：」

「和人、お風呂！」

「あ…：ああ、行ってくるよ」

和人はぶつぶつ独り言を言いながらバスルームへと向かった。木綿季は和人が完全に行つたのを確認すると、部屋にある押入れをガサ入れし始めた。

「…：ん…：これかな…」

木綿季が押入れから探し出したのは…過去に和人が使っていたナーヴギアだった。塗装はあちらこちら剥げておりひびが入っている箇所もある。ケーブル類も劣化している。とても今も動くとは思えない。

「これを使って…和人はSAOを生き延びてきたんだ…」

木綿季はSAOの世界でも和人と冒険してみたかったなという思いを胸に、再びナーヴギアを押入れに戻した。

程なくして15分ほど経過し、和人が風呂から上がってきた。和人

は先ほどの二の舞を演じないように自室であるにもかかわらずドアをコンツコンツとノックした。

「はぁーい！ どうぞー！」

木綿季の元気な声が返ってくる。病室でのやり取りと似た光景だった。

「ふう…さっぱりした」

「和人…髪の毛はまだ濡れてるよ？ ちゃんと拭かないと風邪ひいちゃうよ？」

「あ…ああ…これから拭くんだよ」

「あ、じゃあボクが拭いてあげる！ バスタオル借りるね！」

「あ……、まあ…いっか。頼んだ」

木綿季は和人から半ば強引にバスタオルを奪い取ると、和人の頭を樂しそうに拭った。

「ふんふんふーん♪」

「木綿季…頭がごわんごわんするんだが…」

「あ…ごめん…、楽しくてつい…」

「まあでもすすきりしたよ、サンキュな」

和人は木綿季からバスタオルを返してもらおうとそれを首にかけて、木綿季に向かって笑顔を見せた。

「ん……どういたしまして♪」

そういうと木綿季はベッドに腰かけている和人目掛けてダイブした。

「んほっ」

「てえーい！」

「いつも急だな…、まあもう慣れたけど…」

「えへへー♪ 和人の体…石鹸の匂いがする」

「お前の髪の毛もシャンプーのいい匂いがするぞ？」

「…和人、女の子の匂いのことというのはマナー違反だよ？」

「あ…そうなのか…すまん」

「まあ…ボクは気にしないけどね♪」

「なんじゃそりや…」

二人が仲睦まじくしていると、一階から直葉の呼ぶ声が聞こえてきた。

『おにいちゃん！ ゆうきー！ ご飯出来たよー！ 早く食べよー！』

「…だつてさ、いくか」

「うん！」

二人は仲良く部屋を出ると、足並みをそろえてリビングへと向かっていった。和人の着ている寝巻はぱつと見真つ黒なので寝巻なのか私服なのか分からない見た目であった。

「あ、きた」

「おう、おまたせ。…今日は鍋か」

「ええ、最近寒くなってきたし、木綿季がうちに来た記念の意味も込めて…豪華にすき焼きにしちやっただ！」

翠は楽しそうに色とりどりの野菜やお肉をテーブルに並べていった。赤色に染まった生の牛肉がキラキラ輝きを放っている。野菜も新鮮そうでどれも美味しそうだ。

「母さん…ちよつと奮発してこれ買っちゃったの」

翠は鍋の具にしたであろう牛肉のパックを取り出して和人に見せた。

「えつと…はっ!? これ…最高級松坂牛じゃないか!? これをすき焼きにしたのか母さん!？」

「すき焼きにしたのかって…そもそもすき焼き用の松坂牛よ?」

「あ…いやそういうことじゃなくてだな…、…100グラムいくらするんだこれ…」

「えつと…確か2000円だったかしら…」

和人と木綿季は開いた口がふさがらなかつた。本当にボクらがこれを食べてもいいんだろうか…そんなことを頭の中を巡っていた。

「あたしも最初こんな高いのをこんなに買っちゃうの? って思ったんだけど…木綿季のこと考えたら納得だなーって思ったんだよね」

直葉が若干の苦笑いを浮かべながらコメントを残した。流石に少しだけ気が引けるようだ。

「まあでも遠慮することないからね、むしろ食べてくれないと困るわ」

そういつて翠は野菜と松坂牛をどんどん鍋に入れ始めた。

「木綿季…覚悟を決めよう、潔く…お上がりよ!!」

「あ…う…うん! ボク、頑張る!」

何を頑張るんだという野暮なツツコミはさておき、木綿季は初めての松坂牛に目を輝かせていた。

「すごい…これが…まつぎかぎゅう…」

「俺も食べたことあるけど…ホントにうまいぞ…これ」

木綿季は唾を飲み込んだ。紺野家にいたときもフグなどの高級食材を食べてないわけではなかったが、松坂牛は食したことがなかった。若干緊張にも似た感覚に見舞われていたが、段々と火が通り色が変わっていく松坂牛を見ていくうちに食欲の方が増していった。

「はい木綿季、このお肉もう食べられるわよ？」

翠は火が通った松坂牛と白菜、白滝、豆腐を取り皿に入れて木綿季に差し出した。

「あ…ありがとうございます…お母さん」

木綿季は両手で取り皿を受け取り、自分の前に置くと箸を取り出しお行儀よく手を合わせた。

「…いただきます」

「はい…召し上がれ」

木綿季は取り皿からいきなり本命の松坂牛を箸でつまんだ。松坂牛からは程よい湯気が立ち上り、肉汁と一緒に焼きのたれが滴り降りて、何とも言えない食欲をそそる香りを放っていた。

木綿季はゆつくりと、最高級の松坂牛を口に運んだ。若干熱かったようだが口をほこほこさせながら熱さに耐え、じっくりじっくりと肉を噛み続けた。噛むごとにタレのコクと松坂牛の肉汁が口の中に広がっていった。チェーン店で食べるような牛丼の肉とは…一味も…ふた味も…違っていた。

「は…は…」

松坂牛を飲み込んだ木綿季は、放心状態となっていた。
こんな美味しいものがこの世の中にあるのか…そんな感覚になっ
ていた。

「どうだ…？ 木綿季」

和人が感想を訪ねると、木綿季の目から涙が流れ出ていた。その様
子に三人は驚きの表情を浮かべていた。

「ゆ…木綿季？ 大丈夫か？」

「あ…あれ…ボク…何で泣いてるんだろう…」

木綿季は自分が何で泣いてるか分からなかった。あまりにも松坂
牛のおいしさに感動したのだろうか？…いや違う…これは…素材の
おいしさとかじゃない。

家族の…温かさだ…。今日、木綿季が口にした夕食は…およそ数年
ぶりに味わう、家族で食卓を囲んで味わう夕食の味だった。松坂牛に
感動したのもそうであつたが…家族で食べるこの味が、何よりも嬉し
かった。

「おい…しい…、ボク…こんな美味しいの…食べたこと…ない…」

木綿季は涙が止まらなかつた、折角の美味しい夕食なのに…頑張ろ
うと思つても涙が止まらなかつた。

「…俺のお粥と…どつちが美味しい？」

「その質問は…ずるいよ…和人…」

「あはは…そうだな…」

笑顔で泣き続ける木綿季の涙の理由を悟つた三人に、思わず笑顔が

零れていた。

「ほら…他の肉が固くなっちゃまうぞ…野菜も煮えすぎたらとろとろに溶けちまう。早く食べようぜ」

「うん…うん…」

木綿季は途中まで泣き続けながら、家族での夕食を楽しんでいた。心から温かくて、嬉しくて、楽しくて、安心出来て…。程なくして涙が引つ込んだ木綿季は、他愛のない談笑を楽しみながらテーブルの上のお鍋に箸を進めていた。そして気が付くと、肉も野菜も食べつくしていて皿も鍋も空っぽになっていた。

「ご馳走…様…」

「お粗末様」

木綿季はお腹を押さえていた。本当に心から満足のいく夕食だった。これから毎日こんな夕食を楽しめるんだとしたら…ボクは感動しすぎてどうにかなくなってしまふんじゃないか？ そう考えていた。

「でも本当に美味しかったねー！ たまにはこういうのも…いいかもねー」

「たまには？…よ…直葉。毎回こんな高いの買ってたら家計が火の車だわ。今日は特別なんですから」

「分かってるよー！」

翠が買い込んだ松坂牛は1000g 2000円の肉を1kg。この日の夕食だけで20000円を軽く超える出費となっていた。しかし、買い物をしているときの翠は躊躇なく松坂牛を手にとっていった。それだけ…木綿季を桐ヶ谷家に迎えるということを特別だと思っていたからだろう。

「木綿季、今日から…よろしくね」

「あ…はい…じゃない、うん…よろしくお願いします！ お母さん！」

翠からは以前から家族となるからには他人行儀な話し方はやめて気さくに話しかけてねと言われていたのだ。しかしそう簡単に慣れるはずがない。つい半年前ほど前までは恋人のお母さんでしかなかったからだ。

でもいづれ…木綿季は完全に桐ヶ谷家の一員になるだろう。今は少し難しいかもしれないが、時間はたつぷりある。少しずつでいいのだ、少しずつ…この日常に馴染んでいけば…いいのだ…。

木綿季と和人は食事の食器を流しに片付けて、洗い物を済まして部屋へと戻っていた。両親共働きの桐ヶ谷家は仕事の都合もあつて夜になつても家に帰らないことが少なくない。なので家事に関しては子供たちでやらないといけない場面もあるのだ。木綿季もこの日、洗い物を進んで手伝っていた。

「ふは——」

木綿季は部屋に戻るなり、一直線に和人のベッドにダイビングしていた。心地よい弾力のあるベッドは木綿季を少しだけ上にはね上げた。その状況を木綿季は楽しんでいた。

「こらっ、埃が舞うだろー！」

「えへへ、ごめんなさーい♪」

木綿季はすっかり上機嫌だ。自分の居場所がここにあること、温かい家族がいてくれること。それを肌で感じ取り、嬉しくてたまらなく

なっていた。

「なあ木綿季、明日…暇か？」

「え…うん…暇っていうか…多分勉強するとき以外は…時間あると思うけど」

「そうか、ならちよつと生活必需品を買いにいかないか？」

「あ…そうか…ボク着替え以外何も持ってないんだった…」

「ああ、財布に雑貨に…買い込むものは色々あるだろ。ケータイも持たせてやりたいが…これは母さんか一緒じゃないと難しいから来週末になるけど…」

「けーたい…すまーとほん…だっけ。ボク…使い方さっぱりだよ…」

「安心しろ。仮想世界で触ってたタブレットみたいなもんだ、俺が教えてやる」

「わーい！ やたっ♪」

「んじやあそうと決まれば…今日はもう寝ちまうか、明日多分大荷物になるぞ。多分俺のバイクじゃ運べないから徒歩で行くことになる」
「場所近いの？」

「ここから1kmほど離れたところに朝早くから営業してるでつかいホームセンターがある。そこで多分全部そろえられるはずだ。混むと面倒だからオープン時間に合うように出るぞ」

「はあーいー！」

木綿季は元気よく返事を返す。やはりこういう何気ない日常の出来事一つ一つが楽しくてしょうがない。明日は買い出しだが和人と一緒に出掛けられる。デートとは呼べないかもしれないが楽しいに違いない。そう考えていた。

「んじやもう…電気消すぞ？」

「あ…うん」

和人はそう言うと、部屋の灯りのスイッチを切った。

真つ暗になった部屋を外から差し込む街灯の光だけが照らしていた。和人は木綿季が横たわっている自分のベッドに身体を潜り込ませた。広くも狭くもないベッドに、二人が体を揃えて寝ている状態になった。

「えへへ…なんか…ドキドキしちゃう…」

「俺もちよつと…、仮想世界では…何回も寝てたのにな…」

「やっぱり現実は…違うや。何もかもが…」

「…いつか仮想世界もそう変わらなく感じる時代が来るさ」

「そう…なのかな」

「ああ…時代はどんどん進んでるからな…」

「…そつか」

暗い部屋に男女が二人きり、お互い意識しないはずがなかった。和人は木綿季の手をぎゅつと握った、握られたことに気付いた木綿季もぎゅつと和人の手を握り返した。お互いに手のぬくもりを感じると顔を合わせて笑顔をこぼした。

「おやすみ和人…大好き」

「おやすみ木綿季…俺も大好きだ」

この日、二人は身を寄り添わせて夢の世界へ旅立っていった。木綿季は仮想世界にいたときよりも、病院の部屋で寝ていた時よりも、心から安心して眠りに入っていた。

翌朝、西暦2026年10月26日月曜日午前6:05

「和人っ！ 朝だよ！」

「ん…あと…1時間…」

「だめ！ 起きてー！ 今日一緒にお買い物に行くんでしょ！」

「んあ…そう…だったな…うう…」

和人は眠気に襲われながらも必死に体を起こした。上半身は起きたがまだ頭がぼーっとしていた。

「かずとつおはよっ!」

「ああ…おはよう…ゆうき…」

「お母さんが朝ごはんもう出来てるって言ってたよ? 早く顔洗って歯磨いて食べちゃおうよ!」

「ああ…うん…そう…だな…」

和人は半分寝ている状態でベッドから立ち上がり、木綿季に背中を押される状態で歩き出していた。木綿季が「ほらほら早く!」と言いながら和人を導いていた。病院でリハビリをしていた光景と真逆の立場になっていた。

和人と木綿季は洗面場で洗顔、歯磨きを済ませると寝巻から私服に着替え、朝食を済ませた。朝食はトーストだった。付け合わせにバターやソーセージ、ベーコン、スクランブルエッグ、目玉焼き、レタス、トマトなど朝から豪華なラインナップだった。

目をキラキラさせた木綿季は全ての付け合わせを試し、朝からトーストを3枚も食べてしまった。胃がいっぱいになると「おなか一杯…」とご満悦な表情を浮かべていた。病気が治り、退院してからの木綿季は大変に食欲旺盛であった。非常に喜ばしいことである。

そして二人は食器を片付け洗い物を済ませると、生活に必要なものを買い揃えるためにホームセンターへと足を運んでいた。時刻は午前6:55。早朝ともあつて出勤するサラリーマンや、遠くの学校に登校する学生や朝練に向かう運動部員の姿がちらほら見えていた。

「そういえば和人…お金は大丈夫なの? なんか…昨日はアミユスファイアがどうか…」

「ん…それに関しては大丈夫だ。一応無駄遣いはしてないし使うと決

めた所でしか使っていないからな。それに今回は母さんから軍資金も貰っている」

和人はそう言うと財布から福沢諭吉が描かれたお札を2枚ほど出した。はたから見ると成金の息子みたいでいやな光景であった。

「んじやあ…大丈夫そう？ だね！ ボク…こんなまとまった買い物したことないから…和人に任せるよ！」

「でも今回の買う物に関しては何れも領収書ちゃんと切らないといけないからな？ 無駄な買い物は出来ないぞ？」

「そこらへんは…和人の財布から…ね？」

「う…あまり高いものはダメだからな…？」

「わーい！ やったー！」

和人と木綿季はその日、朝6:30からオープンしている地元ホームセンター「ロワイヤル・プロ川越店」にて生活に必要な雑貨などを買い込んでいた。

「歯ブラシ…、財布…、筆記用具…、メモ帳…、まだ何か買い忘れてるものあるか？」

「ん…多分大丈夫だと思う。まあ買い忘れてたらまた来ればいいよ、近いんだし！」

「まあ…そうなんだけどな、出戻るのはちよつと面倒くさいぞ」

「まあまあ！ とりあえずこれでなんとかなるよ！ ありがとね！」

和人！

「ああ…気にするな。重たいものやでつかいものはあとで宅配で届けてくれるみたいだからな。ひとまずこんなもんか」

「んじやあ…帰りはちよつとゆつくり帰ろうよ！」

「そうだな…そこそこ広い公園があるから…そこに寄ってくか？」

「うん！」

木綿季は楽しそうにしていた。暗い過去の闇を背負ってるとは思わせない明るさを振舞っていた。それが心から楽しそうにしているのか、無理をして明るくしているのかは…和人にはわからなかった。でも：俺はこの笑顔を守る、守り続ける。和人は心にそう誓っていた。後遺症が残るかもしれないと言われた時から決心していたことだった。何があっても木綿季を一生傍で支え続ける。そう決めていた。

そんなことを考えてるうちに、二人は先ほど言っていた公園についていた。この公園は2つのスペースに分かれており運動スペースと遊具スペースがある大変に広い公園だった。運動スペースは団体も使用することが出来、社会人のスポーツチームや学生の部活動の練習にも使われる地元では大変に人気と需要のある公園だった。この日も朝練を終えた地元の野球部員が2、3人帰る様子が見えた。

「広いねー！ ボクこんな広い公園見たことないよ！」

「そうだな…東京とか横浜と比べるとこっちは土地は広い方だからな。こういう公園は珍しくないぞ」

「へえー！ そうなんだ！ ちよつと走ってきていいかな？」

木綿季は嬉しそうに目を輝かせながら和人に許可を求めてきた。この顔に勝てるはずもなく、和人はあっさり承諾した。

「はしやぎすぎて転ぶなよ？」

「分かってるよー！」

木綿季はそう言うのと両手を左右に目いっぱい広げて飛行機の真似をするかのように元気に走り回っていた。本当に来年度から高校生になるとは思えない無邪気さだ。

「木綿季ー！ 自販機で飲み物買うけど何がいいー？」
「えつとねー！ ボク！ ココアが飲みたーい！」

和人は「了解！」とだけ言うとう入口の近くにある自販機まで足を運んでいた。木綿季は引き続き楽しそうに広い公園を走り回っていた。AIDSを発症してから、外の世界をこんな風に走れるとは思ってなかっただけに、この広くて自由な世界を楽しんでいた。その無邪気で元気で楽しそうに走る木綿季は自然とその場にいる人間の視線を集めていた。そこに、木綿季に歩み寄る一人の男の姿があった。

「おい、バイ菌」

声を掛けられた木綿季はピタッと足を止め、声のした方を恐る恐る振り返った。振り返った先にいたその男の顔を…木綿季は知っていた。身長が伸びて大きく成長しているが…この男は…。

「もしかして…かんだ…くん…？」

「…お前…やっぱり紺野木綿季か…」

男の正体は、かつて小学生時代に木綿季をいじめていた主犯格の男、神田であった。神田は地元の中学を出た後、スポーツ推薦でこの川越の高校へと進学してきていたのだ。よりにもよって和人の地元この川越市にである。

木綿季は固まってしまっていた。何でここに神田君がいるの…。ボク…またいじめられるの…？ いやだ、やだ…逃げないと…。かざと…かざと…。

「自分のことを”ボク”なんて言うやつおめー以外にいるかよ。ていうか何で生きてんだよ、おめーAIDSだっただろうが」

木綿季は体を震わせながら細い声で言葉を発した。

「ボクのAIDSは…HIVは…治ったんだよ…神田君…」
「は？」

HIVが治ったと聞かされた神田の顔には驚きの表情が浮かんでいた。しかし神田はすぐその表情を変えた。

「嘘つくんじゃないよ、HIVが治るわけねーだろうが！ おめーまたそうやって人をだまして病原菌をまき散らしてるのかよ！」
「ち…ちがう…ボクの…病気は…本当に…治ったんだもん…」

木綿季の頭に、過去の光景がフラッシュバックしていた。殴られて、蹴られて、しまいにはバットでもって殺されかけた。この男に關してはいい思い出など何もない、むしろ…消し去りたい最悪の過去だった。

「うるせーよバイ菌、近づくんじゃねーよ。また殴られてーのか？」

そう言うと神田はスポーツバッグから自分の愛用してる金属バットを取り出した。

「あ…ああ…」

木綿季は恐怖で怯え、そこから足を動かすことも出来なかった。頭では逃げなきゃと思っけていても、怖くて足がすくんでしまっていた。

「やだ…やめて…やめてよ…そんなので殴られたら…」
「死んじゃうってか？気にすんなよ、おめーなんか死んでた方が世のためだからよ？」

「いや…やだやだ…たすけて…かずと…かずと…」

「でも病原菌をまき散らされたらかなわねーし…俺も退学になりたくないから、記憶が飛ぶ程度にしてやるよッ!!」

神田は右手でバットを上振りかざし、足がすくんで動けない木綿季に向かって金属バットを振り下ろした。

(いやだ…助けて…かずと…ッ!!)

(か…ず…と…)

「な…何だよてめえ!!」

和人は間一髪、殴られる寸前の木綿季を身を挺して守った。かつてSAOでクラディールからアスナを守ったときのように、自分の左手で最愛の人を守った。

和人は神田を睨みつけていた。木綿季に襲い掛かる男、バットを持っている、そしてこの木綿季の怯えよう…。すぐに和人は悟った。こいつが木綿季の言っていた”神田”だ…。

「お前…神田だな…?」

「だったら何だっつてんだよ…おめえは誰なんだよ!!」

「俺か…? 俺は…木綿季の…恋人だッ!!」

和人はそう名乗ると、バットを右手で掴み、腕かいなを返して神田の手首をひねった。ひねった痛みで思わず神田はバットから手を放し、後ず

さりをしながら痛みの走った手を押さえていた。

「木綿季……こいつが……昨日言ってた……神田……なんだな？」

木綿季は腰が抜けたまま茫然としていたが、和人が声を掛けてくれたことによつて、正気に戻ることが出来た。

「あ……う……うん……この子が……いや、こいつが……ボクを……いじめてた神田だよ……！」

その返事を聞いた和人は表情を強張らせた。その表情は……、S A O で二刀流を使う時の……キリトと全く同じ顔をしていた。

「そうか……わかった」

和人はその言葉だけ聞くと、ゆつくりと神田の方へ歩み寄つていった。過去にない殺気めいた表情をしながら、じりじりと歩を進めていった。

「お前みたいなやつが……お前らみたいなクズがいるから……木綿季は安心して……暮らせないんだ!!」

「し……知るかコラア!! てめえ……ぶつ殺してやる!!」

神田は和人に襲い掛かった、しかし和人は剣道経験者だ。直接剣道では使われることはないが、祖父から武器をもつていなくとも、武器を奪われたときの対処法などを教わっていた。逆に相手の武器を奪う方法、素手での攻撃のいなし方等、様々な護身術も学んでいたのだ。

そんな武道経験者の和人を、力しか能がない野球部員の神田が勝てるはずもなかった。闇雲に和人に襲い掛かる神田であったが、和人の右手が伸びてきて神田の喉を掴む形で迎撃されていた。相撲などでもよく見る、”喉輪”である。

和人は神田の手が自分に届かないよう腕を伸ばして喉輪をかけていた。次第に呼吸が出来なくなり苦しくなった神田は、たまらず力が抜けてしまい膝をついてしまった。

「苦しいか…？ 痛いか？」

和人はわずかながら呼吸が出来る程度の力加減で神田に喉輪を決めていた。その顔からは怒り、恨み、殺意などなど様々な感情がこみ上げていた。神田は息を荒げて和人の手を振りほどこうとしていたが、和人の握力と腕力は凄まじく、いくら暴れても振りほどけなかった。

「お前が木綿季に与えた苦しみや痛みは…こんなもんじゃないだろうがッ!!」

右手をぱつと離れた和人は神田の顔に膝蹴りを入れていた。鼻の頭からまともに和人の膝をもらった神田は、1メートルほど吹き飛び、鼻から血を吹き出していた。仰向けに吹っ飛ばされた神田は和人にはかなわないと悟ったのかうつ伏せになり、その場で和人に土下座をした。

「お…俺が悪かった！ 昔のことも謝る！ あんたらにも近付かない！ 高校も転校する！ だから…許してくれ!!」

「……………」

和人は神田のとったその行動を、過去のクライデールに重ねてみていた。クライデールがアスナたちに命乞いをしたとき、クライデールは卑怯にも隙についてアスナを殺そうとしたのだ。和人はその光景を思い出していた。

「た…頼むよ!! ゆるしてくれえ…!!」

和人の足元には金属バットが転がっていた。かつて木綿季を殴ったのもこのバットなのだろうか？と考えを巡らせていた。しかし、今の和人にとってはそんなことはどうでもよかった。

「なあお前…野球部員なんだよな？」

「え…あ…はい…そうです…」

「んじゃあ…その右手を自分でぶち折ったら許してやる」

その返答を聞いた瞬間、神田は顔面蒼白となった。

「え…な…そんな…そ…それだけは…!!」

神田が返事を返したその瞬間、和人はもう一度膝を顔に入れていた。

「何がそれだけは…だ？骨折したってせいぜい3ヶ月も入院すれば済む話だろうが。それに比べたら…木綿季は16年だ…。16年も…病気で苦しんできたんだ…」

和人はそう言いながら、足元に転がっているバットを手に取った。

「その16年に比べたら…安いもんだろうがッ!!」

和人はバットを握りしめ、神田の右腕目掛けて骨ごと、神経ごと破壊するつもりで振りかぶった。

「和人!! もうやめて!!」

木綿季が大声を上げて、和人を制止した。その声が聞こえた和人の右腕はピタッと動きを止めた。木綿季は涙目になりながら和人に近

付き、後ろから抱き着いた。

「もういい…もういいよ…和人…」

「木綿季…」

「これ以上やったら…和人も同じになっちゃうよ…、今日の和人…なんか怖いよ…。いつもの優しい和人に戻ってよ…」

「あ…あ、お…俺…」

木綿季の泣き顔をみた和人は冷静さを取り戻していた。目の前に突っ伏している神田は失禁してしまっていた。

「…そう…だな…。すまん…、ありがとな…木綿季…」

「かずと…！」

木綿季は背中から和人に抱き着き、涙を流していた。

「和人…来てくれてありがと…ボク…すっごく怖かった…」

和人は左手で木綿季を優しく撫で、木綿季を元気づけた。右手のバットを投げ捨て、ポケットからスマホを取り出すと警察に通報した。やがて警察が駆け付けるとその場で事情聴取が始まった。神田は俺の方が先に襲われた、悪いのはこいつらだと悪あがきをしていたが、一部始終を見ていた目撃者が名乗りを上げ、今回の事を証言してくれた。

神田は顔面蒼白となり、警察に連れていかれた。和人たちも調書を取るために任意同行を求められた。その後の事情聴取は7時間にも及んだ。警察の事情聴取は事を細かく聞いて書き上げなければならなかったため、様々な可能性を考察しながら進められる。実際の事件は短時間の出来事でもかなりの時間がとられてしまうのだ。和人達が解放される頃には既に午後の15時になろうとしていた。

結果だけ言うと神田は逮捕された。今回の事件は明確な悪意を

持つて行われたため、木綿季に対しての殺人未遂、和人に対しての傷害、暴行事件として埼玉県警に逮捕された。更に過去に万引きや恐喝まがいのことまでやったことが発覚し、余罪を追及されて、重くて少年犯罪としては珍しい実刑か、良くて少年院行きは免れないだろうといった結果になった。

当然問題を起こしたため、高校は退学、野球の道も捨てることになった。和人は過剰防衛も懸念されたが、木綿季が殺されかけてたことと、目撃者の人が和人のやったことをソフトに伝えてくれたため、正当防衛が認められた。

和人と木綿季は帰りはパトカーで送ってもらった。自宅まで届けてもよかったのと言っていたお巡りさんだったが、和人が少し離れたところで降ろしてほしいと願い出たのだ。ただ単純に、木綿季と歩いて帰りたいからであつたが。

「…木綿季、大丈夫か…？」

「うん…まだちよつと混乱してるけど…大丈夫…」

「ごめんな…一瞬とは言え…傍から離れちまって…」

「ううん、和人は悪くないよ…」

「でも…何とか…守りきれた…」

和人は笑顔で木綿季を見つめていた。大切な人を守れたことに安堵していた。

「あ…そういえば…腕…大丈夫…？」

「大丈夫だ、鍛え方が違うからな」

バットで打ち付けられた和人の左腕は、表面こそ打撲を負っていたが、骨には異常が見られなかった。つくづく運の強い男である。

「そつか…よかった…」

「…今回は無茶しないでって言わないんだな」

「…うん…だって…かつこよかったから…」

「え？」

「さつき…ボクを助けてくれた和人…すつごくかつこよかった…」

素直に褒められた和人は照れくさそうに顔をぽりぽりかいていた。

「やっぱり…和人はボクの…ヒーロー…なんだなって…思ったんだ」

「…ありがとな」

和人はそう言うと、右手で木綿季の頭を撫でた。

「えへへ…」

撫でられている木綿季は幸せそうな顔を浮かべていた。

「ねえ和人、手…繋ごっ♪」

「あ…ああ、いいぞ…」

和人は撫でていた右手をそのままおろして木綿季の左手をぎゅつと握りしめた。木綿季もその左手で和人の右手から伝わってくるぬくもりを感じ取っていた。

「えへへ…和人の手…あつたかいな…」

「木綿季の手は…ちよつとだけ冷たいな」

「女の子は冷え性なんだよ？」

「そうなのか…知らなかった」

「えへへ…♪」

自宅への距離は1kmもなかったが、敢えて二人はゆっくりと歩を進めていた。今この幸せな瞬間を、少しでも長く感じようとしていた。最愛の人が隣で一緒に歩いてくれている、この今の幸せを踏みし

めていた。

第42話く日溜りく

西暦2026年10月26日 月曜日 午後15:35

和人たちは公園での事件のあと、調書を取る為に市内の警察署に任意同行を求められていた。

神田は現行犯で逮捕され、余罪を追及されている。

かなりの罪が暴露されていき、未成年であつても実刑の可能性が浮上してきた。

情状酌量の余地が全くないため、法廷でもそう難しくなく裁判は進むことだろうと、担当の刑事さんが言っていた。

たとえ実刑でも、そうでなくてもシャバに出てきた後、二度と木綿季たちに近付くことはないだろう。

何故なら：和人が警察に連れていかれる神田に向かって、あることを耳打ちしたからだ。

『ああ刑事さん、ちよつとそいつ連れてくの待ってもらっていいですか?』

『ああ：何だろうか、早くしてくれたまえよ?』

和人は涙目になっている神田に向かって近寄ると、自分の顔を神田の耳に近付けて何やら呟いた。

『今度木綿季にちよつかい出したら…；殺すからな?』

『ッ!?!』

神田は恐怖の表情を浮かべながらも恐る恐る和人の顔を見る、冗談だよな?と思いつながら。

しかし和人の顔は本気だった。SAO時代にロザリアを牢獄送りにした時、ラフィン・コラフィン笑う棺桶を相手にしてた時、クラディールを殺した時、ヒースクリフを殺した時と同じぐらいの殺意に満ちた表情を見せていた。

『二度はないと思え、幸い俺にはこの界限にこの手のツテがいる。お前を殺したところですからムシヨから出られるからな』

これは半分嘘で半分本当だった。しかし何を勘違いしたのか神田は和人が…そっちの道の関係者だと思ったみたいだった。次関わったら取られてしまうのは命だけじゃないと思いつ込んでしまっていた。

『は…はひっ…』

『ま、がんばんな』

木綿季は和人が神田に何を吹き込んだかある程度想像がついていた。

神田から離れてきたあとの和人の表情は非常に晴れ晴れとしていた。いつもはドン引きするところだがこの時ばかりは和人に称賛を送っていた。

といったことがあり、現在二人は徒歩で自宅まで向かっていった。翠と直葉には午前中に既に連絡を入れてあり、二人は既にこちらに向かってきてくれると言う。

「それにしても…あの神田ってやつ…お前の事本気で殴ろうとしてたよな…」

和人が腕を後頭部の位置に回して機嫌悪そうに神田のことを言い放った。

「うん…実はアイツ、暴力を振るってたのはボクだけじゃなかったの。他のクラスの弱そうな子とかも…いじめてたの。相手が女の子だろうが下級生だろうが…関係なかったよ」

「…根っからのクズだったんだな…。よく野球部なんて続けられたもんだ」

「うん…正直…二度と関わりたくなかったな…」

「…大丈夫だ、もうあいつは俺たちには近寄ってこないさ」

「あ…そういえば…あの時和人はなんて言ってたの？」

木綿季に質問を投げられた和人が機嫌よさそうに「聞きたいか？」と聞き返す。

「あ…うん、大体察しはつくけど…ちよつと気になるし」

「ああ…、今度木綿季にちよつかいだしたら、”殺す”って脅しした」

「えっ…」

木綿季は若干引いていた、自分のことを守ってくれるのは嬉しいが…限度があるんじゃないか？と。

勿論本当に殺すことはないだろうが言い方というものがある。

「それは…言い過ぎなんじゃ…」

「何言ってるんだ。俺の木綿季に手を出しておいて、五体満足で済んでるだけで儲けモンだと思ってもらわないと困る」

「ああ…うん…、そう…なんだけど…」

「それに…ああなっちゃったら俺は止められないんだよ。言ったら？ぶち切れると周りが見えなくなるって…」

「そういえばそんなこと言ってたね…」

木綿季は若干呆れ顔であったが、内心はとても嬉しかった。ボクのために真剣に怒ってくれたこと。必死にボクを守ろうとしてくれたこと。そしてボクのことを何よりも大切にしてくれていることに。

「ねえ、和人。くつついていい？」

「ん…ああ…、別にいいんじゃないか？」

「やたっ♪」

そう言うと木綿季は和人の右腕に左腕を絡めて、これでもかというぐらい密着した。

和人は非常に歩きづらそうにしていた。それでも木綿季は大変に

ご機嫌な表情を浮かべて歩き続けた。

「あの…木綿季先生…歩きづらいです…」

「えゝ我慢我慢！ お家まであとちよつとなんだから文句言わないのー！」

「へえゝい…」

和人は諦め顔を浮かべていた。昔からこうなった木綿季は言ったことを曲げないからだった。

しかし悪い気はしなかった。こんな自分を頼りにしてくれているのが嬉しかった。

今日は怖い思いをさせてしまったが、結果的に過去との確執を少しは無くせたかなと思っていた。

「なあ…木綿季…」

「なあに？ かずと」

「…ふふつ、何でもないよ」

「なあにそれ！ 和人のいじわる！」

微笑ましいやり取りをしていると、突如和人のスマートフォンに着信が入った。

和人は楽しくやりとりしてる最中を邪魔されて若干不機嫌になっていた。

「悪い…ちよつと電話だ」

「うん、わかった」

和人は木綿季の腕をほどいて、ポケットからスマホを取り出して発信者の名前を確認した。

…発信者の名前は桐ヶ谷峰嵩、和人と直葉の父親からだった。

「父さんからだ…珍しいな…」

「え…お父さん？」

和人は木綿季に頷きながら峰嵩からの電話に出た。

「もしもし…父さん？」

『…和人が…私だ』

「珍しいな父さん…どうしたんだ？」

『どうしたもこうしたもあるか！ 聞いたぞ？ 母さんから、事件に巻き込まれたって』

「ああ…そのことか。うん、大丈夫だよ。ちよつと腕を打撲しただけで他に被害はないから」

『お前のことじゃない、木綿季のことを心配してるんだ。…そこにいるのか？』

自分のことを心配されてないことを知った和人は若干不機嫌になる。

もちろん峰嵩は心配してないわけじゃない、和人と同じでぶつきらぼうで不器用なだけなのだ。

それでも言われるとムカつくのは事実だが。

「ああ…いるよ、代わろうか?」

峰嵩が「頼む」と伝えると、和人はスマホを木綿季に手渡した。初めて触るスマートフォンに木綿季は若干戸惑いを見せていた。

「そのまま耳に当てれば話せるからな」

「え…あ…、うん」

木綿季は恐る恐るスマホを耳に当て、初めて話す父親との会話へと赴いた。

「えっと…初めまして、紺野木綿季…です！ お父さん…ですか?」

『…初めまして…紺野木綿季ちゃん、和人の父親の…桐ヶ谷峰嵩です。よろしく』

「ぶふっ」

和人は吹き出した。あの堅物な父親がちゃんづけで女の子を呼んでいることに笑いを抑えられなかった。

スピーカーから音漏れをしていたためにバツチリ聞こえていたのだった。

「あ…はい！ よろしく願います！ 昨日から…お世話になってますー！」

『そう畏まることはないよ、私たちはもう家族なんだから。もっと…こう…気さくに話しかけておくれ』

「あ…はい…じゃない、うん…わかった！」

『ははは、元氣の良い子だ。和人とは大違いだな』

「…全部聞こえてるぞ…父さん…」

峰嵩は和人に会話を聞かれていることを知るとワザとらしく咳き込んだ。

『先ほど…母さんから事件に巻き込まれたと連絡がきた。木綿季ちや…木綿季は…怪我はないかい？』

「あ…うん、和人が守ってくれたから…平気だよ」

『ほう…和人が…』

あの息子にそんな度胸があったとはと峰嵩は感心していた。

これは若干スパルタでも親父の剣道場に通わせていた甲斐があったというもんだと感じていた。

何を隠そう、この峰嵩も若いころは随分と和人の祖父から揉まれたものである。

『とにかく怪我がなくてよかった。私の出張も今週で終わりにさせてもらうことになったから、来週には…顔を合わせられると思うよ』

「え…つてことは…！」

『ああ、既に家庭裁判所から許可は出てるからね。来週…皆で一緒に役所へ養子縁組届を提出しに行こうと思う。…よろしいかな？』

「はい！ よろしくお願いします！」

『まあ…よく飛ばされる会社だから…また出張に出ることになるかもしれないがね』

「あはは！ お父さん…忙しいですね！」

和人は楽しそうに会話をしている木綿季を笑顔で見つめていた。本当に木綿季は誰とでも仲良くなれる。素晴らしいコミュニケーション能力の持ち主だ。

このコミュ力があったからこそ…木綿季は塞ぎこんでいる俺に…声を掛けてきてくれたんだな…。

『というワケだ…和人にも伝えておいてくれないか？ そろそろ仕事に戻るから』

「うん！ 頼まりました！」

『ああ…。これからよろしくな…木綿季』

「うん！ ボク、お父さんの帰りを待つてるからね！」

お互いにさよならの挨拶を済ませると、通話を終えた。

通話アプリの使い方がわからない木綿季はスマホをそのまま和人に返した。

「ふいい…ちよつと緊張した〜…」

「まあ…あんな親父だけど…見た目ほど堅物じゃないからな？ ちよつと掴みどころがない性格だけど…」

「へえ、そうなんだ…」

「じゃなきや…養子の俺をここまで真剣に育ててくれたりしてないさ…」

「あ…、うん…そう…だね…」

木綿季と和人は境遇がよく似ていた。

お互いに血のつながった家族を亡くし、長期間のフルタイム環境に囚われ、現在は同じ家庭にお世話になっている。些細な違いはあれど、非常によく似た環境でここまで育ってきたと言えよう。

「…帰るか、木綿季」

「うん…帰ろ！ 和人！」

二人はお互いの手を握ると、今度は足取り良く自宅へと向かった。

同日午後15:45 桐ヶ谷邸

「ただいま」

和人と木綿季は自宅へと戻っていた。

ドアにカギは掛けられていなかった。恐らく直葉か翠が既に帰宅していると思われた。

「和人…木綿季…無事だったのね…よかったわ…」

まずは翠が玄関に顔を出してきた。二人の身に何かあったら心配そうな表情を浮かべながら駆け寄ってきた。

直葉も二階から階段を降りてすぐに玄関まで駆け付けてきた。

「お兄ちゃん！ 木綿季！ 事件に巻き込まれたって聞いたよ！ 大丈夫だったの!？」

「ああ…大丈夫だ。ちょっと腕を打撲しただけで他に怪我はない。木綿季も無傷だ」

和人の背後から、五体満足の木綿季がひよこつと姿を現した。

「和人が…守ってくれたの…」

木綿季が和人の手を握ると翠が「玄関で立ち話もあれだからリビングに行きましょう」と言い、全員リビングへと足を運んだ。

木綿季と和人は買ってきた雑貨などをソファに置き、いつも食事をしているテーブルの椅子に腰を落ち着けた。

翠は落ち着かない表情で和人たちに事の一件の説明を求めた。

無理もない、木綿季が我が家に来てから二日目でもう危険な目にあつてるといふのだ。

親として気にかけるのは当然のことだった。

「母さん…えつと…その…今回の件は…」

和人はバツが悪そうにしている。

今回の事件のことを話すということは、二人に木綿季の過去のことを話すことになるのと同義であったからだ。

あれだけ表沙汰にしたくなかった木綿季の闇を再び話すなど、和人

には出来なかった。

「和人…いいよ、お母さんと直葉になら…ボク…話しても…、全部知ってもらっても…いい」

木綿季は自ら自分の過去を明かそうとしていた。その表情にはもう全て話して楽になりたい、もうこれ以上ボクの所為で、みんなに迷惑をかけたくないといった気持ちが表れていた。

「木綿季…でも…」

「いいんだ…和人、多分…いつかはバレることだから…」

木綿季は大きく呼吸をすると、翠と直葉に子供の頃のことを全て包み隠さず話した。

いじめられていたこと、体に消えない傷を負わされたこと、そして今日その元凶に襲われたこと…。

そして…和人に助けてもらったこと。

全てを聞いた翠と直葉は何とも言えない、悲しそうな表情を浮かべていた。

いつも明るく接してくれてる木綿季にそんな凄惨な過去があったんて…と。

「…そう…だったんだ…。だから木綿季…あの時隠れて着替えてたんだね…」

「うん…ごめんね…騙すようなことしちやつて…」

木綿季は項垂れながら瞳に涙を浮かべていた。その様子を見て慌てて直葉がフオローに入る。

「何言ってるの！ 木綿季はちつとも悪くないよ！ むしろ悪いのはその神田ってやつだよ！ あたしの可愛い妹に手を出すなんて…許さん!!」

「ええ…まったくかわ… 私の健気な娘に手を出すなんて…これは落とし前をつけてもらわないとね…」

直葉は怒りの炎をゴゴゴゴという音を立てながら燃やしていた。

翠は翠で静かな殺気めいた怒りを放っていた。顔は笑っているが目が全く笑っていないかった。

今止めないと不味そうなのは直葉よりも翠だった。

暴走してしまいそうな二人を和人が慌てて落ち着ける。

「お…落ち着けて二人とも！ 俺らが手を下さずともヤツは逮捕されたよ。このままいけば実刑が下されるだろうって刑事さんが言ってた！」

「それは…検察側がやることでしょ？ 私たちは私たちがやらないと…ねえ？」

翠はそう言うのとニッコリ笑いながらヤツをどうしてくれようかという考えを巡らせていた。

いかん、これは非常にいかん。何とかして説得しなくては本当に堀の中に入り込んでまで報復しに行きそうだ。

「あの…ごめんねお母さん、直葉…、二人の気持ちは嬉しいんだけど…。ボクはもう…あいつと関わりたくないんだ。それに…二人があいつに接触して、傷つけられるかもって思うと…ボクもう…どうしたらいいか…」

木綿季は涙をぽろぽろと流していた。その姿をみた直葉と翠は大

変にいたたまれない気持ちになった。

私たちが動いても木綿季は喜ばないと気付かされた。

「ああ…、俺もあいつの姿は二度と見たくない。それに…今後金輪際近付かないことを約束させた。もし破った場合、まあ脅しだったんだが…、殺す” って言っておいたから大丈夫だろ」

その和人の言葉を聞いた瞬間、翠の顔が強張った。

「和人、それはだめよ。” 殺す” だなんて…そんな言葉冗談でも使っちゃだめよ。貴方まで神田ってやつと同じになるつもりなの？」

「う…あ…、うん…ごめん…母さん」

和人は言えなかった。SAOの中とはいえ、俺は人を4人殺している。

殺人ギルド、笑う棺桶ラフィン・コフィンの名前も知らぬメンバー2人と、クラディール。

そして…ヒースクリフこと茅場昌彦。仲間を守るためとはいえ、VRの世界で人を4人も殺めていたのだ。

だから先ほど神田を脅迫した時も、躊躇なく” 殺す” などと言えたのであった。

この時の和人の様子のおかしさに、木綿季だけが気付いていた。和人はまだ何か隠していることがある。ボクに秘密にしていることがある。そう見抜いてしまっていた。

「とりあえず…この件に関しては以上だよ。あとは…警察と検察が何とかしてくれるさ」

「そう…、とにかく二人に大した怪我もなくて安心したわ…」

「うん…お兄ちゃんと木綿季が襲われたって聞いたときは…あたしもう…いてもたってもいられなかったよ…」

「ごめんな…心配かけた」

「ボクからも…ごめんなさい…」

直葉と翠が「二人が無事だったのなら構わない」と返事を返し、この一件は一旦の終了と相成った。

翠今日は仕事に戻ることはなく、このまま家にいてくれるという。直葉も部活に戻る気分でもないのでこのまま家でのんびりするという。

和人と木綿季は買ってきたものを整理するために自室へと戻っていった。

「ふい〜…、す…すつごい疲れたあ…」

「ああ…まったくだ…濃すぎたぜ…」

和人と木綿季は大きいため息をこぼすと二人同時にベッドにダイブインした。

二人の体重を受け止めたベッドは弾力性で倒れてきた二人を少しだけ跳ね上げた。

バインバインと上下に揺さぶられている二人の体はやがて完全に仰向けでベッドに体重を預ける形になった

「ねえ…かずと…」

「ん…何だ？」

「ボク…やっぱりみんなに迷惑…掛けちゃってるよね…。今日だって偶然とは言えアイツと合っちゃって…軽傷とはいえ和人に怪我をさせちゃったし…」

「あまり気にするなよ…」

「気にするよ!!」

木綿季は突如声を荒げて仰向けの姿勢から起き上がった。

「ボク…もういやだ…、ボクの所為で…誰かが傷ついていくの…見たくない…」

「木綿季…」

「お母さんとお父さん…直葉にだって…心配かけちゃったし…、ボク…守られてばかりで…」

木綿季は顔を押しえて泣いていた。どうしてボクは静かに暮らせないんだろう。折角病気が治ってみんなと一緒に暮らせるのに。どうしてボクにだけ変な因縁がまとわりつくんだろう…。

その所為で…周りの人達を…不幸にしてしまう…。

木綿季は自己嫌悪に陥っていた。すっかり自分の生い立ちの所為で周りの大切な人たちに迷惑を掛けている。

傷つけてしまっていると思ひ込んでしまっていた。

しかし和人は元より、桐ヶ谷家の人間も明日奈たちもそんなことは微塵にも思っていないかった。

「木綿季、前にお前に言ってもらったことをそのまま返すぞ…。あまり…思いつめすぎるな」

「え…?」

和人はそう言うと、優しく木綿季を抱き締めた。

「かず…と…?」

「独りで抱え込むなって言ってるんだ…。考えて悩むのは別にいい…。ただ…、思いつめすぎて自分が潰れるのだけは…勘弁してくれ…」

「…かずと…」

「もつと俺を…周りの人を…頼ってくれ。俺たちは大人じゃないんだ。もつと周りに迷惑掛けても…いいはずなんだからな」

「…和人は…ボクのこと迷惑じゃないの…?」

木綿季の問いに、和人は笑顔で答えた。

「何言ってるんだよ、そんなこと思っちゃいけないさ。むしろ…もつと頼ってくれないと俺は困る」

「うう…」

「俺はお前が好きだ…。だから…お前の力になれるのなら何だってする…」

和人はより力強く、木綿季を抱き締めた。

放っておいたら勝手にどこかに消えてしまいそうな木綿季を、その場に留めておくかのように。

「うん…うん…あり…がと…」

木綿季は和人の胸を借りて、涙を流した。

和人と出会ってからというものの、木綿季も和人のことを馬鹿に出来ないぐらい、すっかり泣き虫になってしまっていた。

「全く…、お前もすっかり泣き虫だな…」

「…かずとにだけは…言われたくないもん…」

「あはは…ごもつともだ」

和人に元気づけてもらったおかげで木綿季はすっかり元の活発な木綿季に戻っていった。

今までの人生が凄惨な道のみだっただけに、周りへの迷惑に対して人一倍敏感になっていただけなのであった。

16歳である木綿季はもつと周りの人達を、大人たちの力を借りて成長していかねばならなかったのだ。

幸い今は家族に、親友に、そして恋人である和人に恵まれている。

木綿季はこれからも強く、逞しく成長していくことだろう。信頼できる人たちが傍で見守っていてくれる限り…どこまでも…。

同日午後16:00

心のモヤモヤがとれた木綿季は買ってきた雑貨類の設置場所など

を決めていた。

この和人の部屋をこれからしばらくは二人で暮らしていくことになったている。

その為使えるスペースは限られてくる。和人はそんなこと気にしないだろうが木綿季は別である。

幸いにも和人の部屋はシンプルな構造だったので、当日買ってきた物の設置には特別困ることはなかった。

勉強机も和人のPCデスクが無駄に横に広いためキーボードを片付ければ普通に机として使用できる。

というより桐ヶ谷家そのものがでつかいたため、和人の部屋も広がった。

七畳：八畳はあるだろうか？ とにかくそれぐらい広がった。

「ふう〜…とりあえずこんなところかなー？」

木綿季は一先ず和人のチェストとシエルフを借りて、買ってきたものを片付けた。

後々に木綿季のチェストとシエルフが届けられるのでそれまでのつなぎとして和人のものを借りていた。

片付けが終わった木綿季は和人のベッドに腰を落ち着けた。

「だな、お疲れ様」

和人はそう言って、買い物帰りの公園の自販機で買ったココアを木綿季にさしだした。

もう缶の熱さはなくなっていてすっかり冷めてしまっていたが。

「ん…ありがと、かずと」

「すっかり冷めちゃったけどな…」

木綿季はココアが冷めていることなど気にせず、カシユツといい音を立ててココアの缶を開けた。

「んーん、大丈夫だよ！ ココアは冷めても美味しいもん！」

そう言うと木綿季は笑顔でココアを飲み始めた。

甘いものが大好きな木綿季は幸せそうな表情を浮かべていた。和人に買ってきてもらったものなら尚更だった。

足をパタパタとさせて、ココアを飲みながら木綿季は和人とある質問を試してみた。

「ねえ和人…ちよつと聞いてみてもいいかな…」

「ん…何だ？」

「えつと…あのさ…」

木綿季は何やらもじもじしている。聞きづらい質問なのだろうか？

和人はその様子を不思議に見つめて可愛いと思いつつも木綿季の様子が気になっていた。

「何だよ…何か聞きたいんじゃないのか？」

「あ…う…その…」

木綿季は両手で抱えているココアの缶をくるくる回しながら視線を泳がせていた。

そして意を決して、和人に質問を投げかけてみる。

「えつと…、か…かずとは…ボクの…どこが…好きになったの…？」

「…え？」

その言葉を口にした瞬間、木綿季は缶に残っているココアを全て飲み干し、恥ずかしさを紛らわすようにして顔を伏せてしまった。言わずもがな顔は耳まで真っ赤っかに染まっていた。

「聞き…たいな…なんて…思ったりして…」

「…全部だ」

「…へ？」

和人の迷いのない即行の回答に木綿季はきよとんとした表情を浮かべていた。

「えと…」

「だから…全部だ。木綿季の全部が好きだ」

「あ…う…」

木綿季は更に顔を真っ赤にしていた。体中のあちらこちらが沸騰して水分が蒸発してしまっているようだった。

「木綿季の元気なところとか、明るいとこ、機嫌を損ねてぶーたれてるところも好きだ。すぐ俺に突撃してくるところも大好きだ。俺が何かしてやると喜んでくれるところも…笑ってくれるところも…、現実の木綿季も仮想世界のユウキも…全部全部大好きだ」

「あ…え…あ…う…」

恥ずかしいセリフを躊躇なくぶちまける和人に羞恥心はないのだろうか?と思う木綿季であった。

照れくさすぎてもうどうしたらいいか分からなくなっていた。でも…心は嬉しかった。

「えっと…あ…りが…と…」

「ああ、んじゃあ…次は木綿季の番な?」

「ふえあ!」

まさかの質問返しに木綿季は思わず後ずさりをした。そのお陰で和人のベッドのシーツが少し乱れた。

ちなみに壁を背にしているので物理的に逃げられなくなっていた。多分和人は木綿季が答えてくれるまでここから逃げさせてくれな
いだらう。

「教えてくれ、木綿季は俺の…どこを好きになっってくれたんだ?」

和人がジリジリと木綿季との距離を詰めていった。その距離は段々と近くなり、鼻と鼻がくつつきそうな位置にまで和人が迫ってきていた。

「えっと…その…」

「俺にだけ答えさせて、お前は答えない気か?」

木綿季はまたもや俯いてしまったが視界から外れないように和人が下から覗き込んだ。

それでようやく観念したのか木綿季が重たい口を開き始めた。

「ボク…も…かずとの…全部が…好き…」

その答えを聞いた和人に笑顔が浮かんだ。

「かずとの…かつこいいところとか…、優しいところとか…、ちよつと不器用なところとか…」

「うんうん、それで？」

「んと…、寝起きが悪いところとか…、ちよつと鈍感なところとか…、あと…ぼ…ボクを好きでいてくれるところとか…、VRMMOのキリトも…現実の和人も…ぜんぶ…好き…」

言いながら段々恥ずかしくなってきた木綿季は両手で顔を隠してしまった。

そんな恥ずかしがっている木綿季の顔を上に向かせて和人は木綿季の口に自分の口を近づけた。

「ん……………」

「……………」

和人は十数秒間、木綿季の唇を奪っていた。やがて少しずつ、木綿季との距離を離していった。

木綿季は放心状態となってしまうていた。

「ありがとな…木綿季」

「はう…、ずるいよ…かずと…」

「ははは、ずるくて結構」

木綿季は幸せいっぱいだった。本来ならとつくに死んでいたかもしれない自分を救ってくれた和人が、こうして一番近くにいてくれることに心からの幸せを感じていた。

パパ：ママ：姉ちゃん：クロービス：メリダ：見てるかな？

ごめんね、皆の後を追うには…まだかなり時間がかかっちゃうみたいなんだ。

でも…皆の分まで…ボク…生きるよ、生きて…もつと幸せになつて…年を取ってから…皆のところに行くね…。

だからそれまで…首を長くして…待ってもらっていいかな…。

ボク：精一杯…大切な人と…この人生を歩んでいくから…、見守つてて…ほしいな…。

第43話くこれからの日々をく

西暦2026年10月27日火曜日午前5:05

「ん…」

木綿季は早朝から目を覚ましていた。

昨日の神田事件から早くも一夜が明けた。幸いにも被害は和人の左腕の打撲という軽傷だけで事なきを得た。

木綿季は自分の所為だと塞ぎこむが、和人のもっと周りを頼れという支えの言葉によって、その心に再び温かさを取り戻せた。

和人のお陰で木綿季はある程度過去の悪夢を取り除くことが出来た。

そうしてくるとやはり「自分だけがやってもらいっぱなしはいやだ」と考えるようになってくる。

いや、既に以前から思っていた。以前はHIV末期とそれが治つてからも体のリハビリに追われてお礼どころの騒ぎではなかった。

しかし今現在木綿季は病気も克服し、リハビリのお陰で五体満足で日常を過ごせている。

今までと違い、何かしらの形でみんなに恩返しが出来るとののだ。

だが、今度はどうやってみんなにお返しをしようかと考えていた。

何か買ってプレゼントでもするか？

一応木綿季に預金はある。倉橋経由で政府から受け取った報奨金がある。

その額およそ5500万円。正確に言うると5505万3098円だ。

政府からのまるまるの収入から所得税やらなんやらで引かれたこの数値が、木綿季の受け取り分となっていた。

これとは別に更に木綿季には両親からの財産も流れ込んでくる。

こちらは木綿季のメデイキュボイドの被験者になる前の入院費と横浜月見台にある実家の維持費管理費にあてられてほとんど残って

いないが、実家の一軒家の権利は事実上木綿季が所有しているので、家という財産がある。

碎いて言うと、木綿季にみんなにお返しのパレゼントか何かを買うだけの余裕はある。

しかし、木綿季は買い物など満足にこなしたことはない。両親の生前と一緒に夕食の買い物などにいっただけであった。

こんな大金は勿論のこと、月にもらう予定のお小遣いの使い方すらままならない状態であった。

お金の使い方もわからない、何をパレゼントしたらいいかもわからない、そもそもどうやってお返しをしたらいいかというアイデアもない。八方塞がりであった。

そんな新たな悩みを抱えた木綿季はなかなか寝付けず、こんな早朝に就寝から目を覚ましてしまったというわけだ。

「ん…ね…むい…」

木綿季はいつも通り和人より先に起きた。しかし昨夜は恩返しのことを夜遅くまで考えていた為なかなか寝付けず、今朝も寝付きが悪かったのか熟睡できぬまま、陽も昇ってないこの早朝を向かえていた。

「今…なんじ…だろ…」

木綿季は枕元に置いてある和人の目覚まし時計で現在の時刻を確認した。

壁掛け時計の一つでもあれば体を起こさずとも確認出来るのに、と思いつながら。

「ん…5時…、ちよつと早かったかな…」

このまま二度寝してもいいが、それは流石に今後の生活習慣のこと

を考えたらだらしがない。

木綿季は今、復学するための勉強をしている。

小学6年生から中学3年生までの勉強をあと半年で頭に叩き込まなければならぬ。

その為には生活習慣がすっかりさされている毎日を送っていくのが望ましい。

いくら和人達の通っている学校が普通の高校と比べてゆるいとはいえ、勉強だけはしっかりやっておかないと授業についていけないのは変わらない。その為シリカ辺りは、実際に復学してからは随分と苦労をしたようである。

つまるところ、来年度から高校に入学することを考えたら、思っているほど木綿季にのんびりしている余裕はないということになる。

幸いにも木綿季の周りには、各教科の勉強に対してスペシャリストがいるので、教えてもらう環境については苦労しないだろう。数学科学物理などの理系は和人が、英語国語社会などの文系は明日奈、誌乃が教えてくれるという。

本人がちゃんと覚えられるかどうかはまた別の話であるが。

だがしかし…、木綿季はつい一昨日に退院したばかりなのだ。

少しぐらいはのんびりとした毎日を過ごしてもいいと思う。

何せ16年間も病気で苦しみ、長い病院生活を送っていたのだから。ちよつとぐらいこの何気ない毎日に身を浸しても、罰は当たらないだろう。

「ふああ…、ん…かずとは…寝てるよねそりや…」

木綿季は昨日自分を助けてくれたヒーローの寝顔を見つめていた。

こんな細身の女の子みたいな顔をした男の子が、いつもボクのピンチにかけて助けてくれる。

病気も治してくれたし、片時も傍を離れないでいてくれた。手術中も声を掛け続けてくれたし、病気が治ってから側で支えてくれた。階段から落ちて命を落としかけたときも間髪で助けてくれた。

そして昨日の神田事件でも…身を挺してボクを守ってくれた。
ボクは和人からいっぱいもらってばかりだ。

和人はボクが傍にいてくれるだけで元気をもらっているっていうけど…それじゃあボクが納得いかない。

何かお返ししないとな…、和人だけじゃない。

お母さんにも…直葉にも…明日奈や倉橋先生、ALOの皆にも…感謝の気持ちを表さないと…。

「ん…ゆう…き…すき…だ…」

和人は寢言でも木綿季のことを好きと口走っていた。

その様子に一瞬驚いた木綿季は顔が赤くなるが、寢言だと知るとすぐに冷静さを取り戻した。

そしてゆっくりと和人の顔に自分の顔を近づけて、和人の頬に接吻をした。

「ありがと…かずと…、ボクも…好きだよ…」

いつもなら寝起きの悪い和人を、揺さぶってでもたたき起こしていた木綿季だったが、今日だけはそつとしておいた。

いつも助けてもらってるしたまにはゆっくり自分の寝たい時間まで寝かせてあげてもいいんじゃないかなと思っていた。

いつもより早く目を覚ましてしまったということもあって、木綿季は和人をそのままにしておいた。

「んしよ…つと…」

木綿季は自分たちに掛けてあるタオルケットを捲ると、和人を起こさないようにベッドから体を動かした。

捲ったタオルケットをそつと元の位置に戻すと、ぐぐーつと伸びをしてこれからどうしようと考えていた。

「うーん…今日は…どうしよっかな…」

木綿季はこれからどうしようかと考えていた。

基本的に復学するまでは勉強と家事の手伝い以外にやることがないのだ。

物置部屋を先に片付けるという手もあるが、物置部屋は大半が峰嵩の私物で占められているため、和人や翠でさえも迂闊に手を出せないのであった。

峰嵩の趣味は多彩でスポーツ観戦、釣り、ゴルフ、登山、模型、カメラ、落語等様々にわたっていた。

それらに関わったであろうものが大量に物置部屋に仕舞い込まれていたのだ。

全部売り捌いたら…いくらになるのだろうか？

木綿季はそんな物置部屋のことを考えながらあることを思い浮かべていた。

「ボク…別にずっと和人と一緒に部屋でも…いいんだけどな…」

自分の部屋が出来るのは大変に嬉しい。しかし和人と離れてしまうことになる。

たかが数メートルの距離と言えど、木綿季は和人から離れたくなかった。

ならいつそ…和人が許してくれるのなら…ずっと和人の部屋で暮らしたい。そう考えていた。

そんなことを考えていると、木綿季は窓の外から何か聞こえていることに気が付いた。

犬の遠吠え？ カラスの鳴き声？ ランニングをしている運動部…？

気になってしょうがない木綿季は、寝ている和人を起こさないようにして、部屋の窓から外を覗いてみた。

「ん…何の音だろ…？」

温度差で曇っている窓ガラスを手でキュツキュツという音を立ててふき取り、その音を正体を確かめるべく、木綿季は窓からその音の発信源を探していた。

家の外ではない、だとしたらどこからだろうか？ 視界を家の敷地内に移し、隅々まで探してみるとその音の正体が判明した。

「あれ…直葉？ 何やってるんだろ…こんな朝早くから」

木綿季は直葉が庭で何かやっていることに気が付いた。顔以外が一階の屋根で隠れてしまっていたのでここからでは何をやっているかまで分からない。

気になった木綿季は和人の部屋を出て階段を下って一階に降りた。

「お母さんにおはようの挨拶しないと…」

一階に降りると既に朝ごはんの美味しい匂いが立ち込めていた。

この匂いは…魚かな？ 昨日はパン食だったから今日はきつとご飯食なのだろう、ということとは和食だ。

木綿季は洋食も好きだが当然和食も大好きだ。それどころか中華などのエスニック系の食事も勿論大好きだ。

嫌いなものはあるのだろうかというぐらい食に対しては貪欲だった。

木綿季は一階に降りた後、リビングへと続く扉を開けてキッチンで調理をしている翠に朝の挨拶をした。

「お母さん…おはよう」

「あら木綿季、おはよう。今日は随分といつもよりお早いお目覚めな

のね？」

可愛いパジャマを着て、寝ぼけ眼をごしごししながら挨拶をした娘に、翠は優しい笑顔で挨拶を返した。

この時間桐ヶ谷家の人間は直葉以外寝ていることが大概なのでまさかの訪問という嬉しい不意打ちに翠は自然と笑顔を零していた。

「うん…ちよつと…早く目が覚めちゃって…」

「だから眠そうなのね、まだ寝ててもいいのよ？」

「んと…二度寝すると…多分お昼ぐらいになつちやいそうだから…あはは…」

「あらそう、それはいけないわ。そうなるのはもう和人だけで十分なもの」

他愛のない親子の会話を交わしている二人だった。

翠にとつてはいつもの通りの、直葉や和人たちと交わしているやり取りだが、木綿季にとつてはこの些細なやりとりもとても楽しかった。

ボク…お母さんとお話ししてる、どこの家庭でもやっている…普通の会話が出来ている…。

そう考えると心からその当たり前が嬉しくなり、木綿季にも笑顔が零れだしていた。

「あら？ ご機嫌なのね、木綿季は」

「うん…お母さんとお話しできるのが…嬉しくて」

木綿季のその言葉を聞いた翠の顔付きが少しだけ変わった。

そうだ、この子は…長い間こんな些細な挨拶も出来ない環境にいたのだった…と。

そう考えた翠はコンロの火を一時的に止め、左手からフライパン、右手からターナーを離すと、ゆっくりと木綿季の方へ歩を進めて木綿季を抱き締めた。

「わっ…おかあ…さん…？」

「木綿季…、これから…たくさんお話し出来るのよ…。お話だけじゃないわ、一緒にどこかお出掛けも出来るし、木綿季に私の料理も覚えしてほしい。いくらでもこれからたくさんのが…出来るんだからね…」

木綿季は翠の温かさを体いっぱいを感じ取っていた。

お母さんの匂い…お母さんの肌の柔らかさ…お母さんの優しさ…、そして…お母さんの…ボクへの…愛…。

「う…ん…うん…、ありがと…おかあさん…」

翠から温かいものを受け取ると、木綿季の目には自然と涙が浮かんでいた。

翠は木綿季が泣き止むまで抱擁を続けた。世話のかかる娘だなど思っていたが、面倒の見甲斐がありそうだとも思っていた。

やがて心を落ち着かせた木綿季は、涙で真っ赤になった自分の目をゴシゴシと擦りながら、翠から距離を置いた。

「なんかね…毎日が幸せすぎて…毎回…泣いちゃうの…」

「幸せでいいじゃない…、木綿季が幸せになれるのなら…：私たちはな
んだってやってあげてるわ」

「うん…ありが…とう…」

翠から母親の愛をいっぱいを受け止めると心から安心したのか、木綿季は先ほど聞こえていた直葉の掛け声を思い出していた。直葉は一体朝から庭で何をしているのだろうか、ボクはそれを確かめに一階に降りてきたのだ…と。

「あの…お母さん、直葉は…何をしてるの？」

「ああ…あれね、もう…毎日の日課になってるのよ。見てきたら？」

頭の上に？マークを浮かべた木綿季は玄関に足を運び、ホームセンターで買ってきた自分用のサンダルを履き庭へと歩を進めた。

数歩進んだ先には、袴に身を包み、竹刀を両手で持ち、ひたすらに剣道の面を繰り返し振り下ろしている直葉の姿が見えた。

「せいっ！ せいっ！」

木綿季が部屋で聞いた声の正体は直葉の掛け声だった。自主的に始めた朝稽古はもうすっかり直葉の生活の一部となっていたのだ。

ひたすら真剣な表情で竹刀を振り続ける直葉の姿に、木綿季は目を奪われていた。

やがてキリがいい数字に到達したのか、木綿季が来てから何十回か素振りをした直葉は一呼吸を入れた。

呼吸を整えると周囲を見渡せる余裕が出来たのか、直葉は木綿季が見に来てすることに気が付いた。

「ふう…、…あれ？ 木綿季？」

「あ…おはよう…直葉…」

「やだなあ…見てたんだ…、いつから？」

「えつと…5分ぐらい前…かな」

「あはは…ごめんね、気付かなかったよ…。おはよう、木綿季」

直葉はちよつと遅れて朝の挨拶を交わした。

挨拶を済ますと家の縁側に腰を落ち着けて、そこに置いてある「あろはすみかん味」が入った500mlペットボトルに手を伸ばし、ゴキユゴキユといい音を立てながら飲み始めた。

「ぷはーっ！」

一気にボトルの半分近くを飲み干した直葉がたまらず息をこぼす。

喉が潤った！ 生き返った！ この運動後の一杯がたまらん！と
いった満足の行った表情を浮かべていた。

「お疲れ様直葉、毎日…やってるの？」

木綿季も直葉の隣に腰を落ち着ける。

「うん、お兄ちゃんが…剣道やめちゃってからは毎日やってるよ。あたし…お兄ちゃんの分まで頑張って強くなるからって約束したの。それから少しでも強くなるために…これを始めたの。そして気が付

いたら日課になっちゃってた」

「そう…なんだ」

直葉は自分の飲んでいたボトルを木綿季にも差し出した。その額には汗がにじみ出ていた。

首には手拭いを掛けて、長年この稽古を積み重ねてきたといった貫禄を感じさせていた。

「あ…、ありがとう。いただくね」

木綿季は直葉からボトルを受け取ると直葉ほどではないが残りの三分の一ほどの量の水を飲んだ。

「ぶはっ…」

「美味しいでしょ、それ」

「うん…ただの水かと思ったら…みかんの味がするんだね。でも…みかんジュースとはまた違った感じ」

「あたしのお気に入りなんだ、冷蔵庫にまだいっぱい入ってるから、飲みたかったら飲んでもいいよ？」

「いいの…？　ありがとう直葉！」

眩しい笑顔を浮かべた木綿季のお礼に対して、直葉も無邪気な笑顔で返す。

木綿季はやがて直葉に向けてた視線を、直葉が持っていた竹刀に移していた。

「それが…竹刀なんだね、ボク…実物は初めて見るなあ」

「あ、そうだったんだ」

「うん…ボクの学校生活は小学校6年生の途中までで終わっちゃって、クラブ活動とかでもボクの学校では剣道とかなかったから、竹刀とかは初めて見るんだ」

「あ…そう…なんだ…。…ねえ木綿季、持ってみる？」

「え…いいの？」

そう言っつて直葉は右手で木綿季に対して竹刀を差し出した。

随分と使い古されている竹刀なのか、表面には細かい傷などが見てとれた。

「大丈夫だよ、ただ…真竹だから…木綿季だとちよつと重たいかも…？」

「ん…んじやあちよつと…頑張ってみる…」

「あ…んじや持ち方教えるね」

直葉は立ち上がり自分の竹刀を手に持つと、木綿季を立ち上がらせて背後に回った。

木綿季と直葉が前後に密着しているといった状態になっていた。

「んとね…木綿季は利き手どっち？」

「えと…右手だね」

「OK、んじやちよつと後ろから失礼するね」

直葉は木綿季の背後から竹刀の持ち方の指南をした。どこをどうやって握ったらいいのか？

ALOで装備しているユウキの愛剣マクアフィテルとはまた全然勝手が違っていた。

「んと、まず利き手…、今回は右手の場合ね。右手は鏝のすぐ後ろ、左手は柄の端っこを握るの。こんな具合にね…、やってみて？」

「ん…こう…かな」

木綿季は直葉に少しずつ握り手をずらしてもらいながら、両手に竹刀を収めていた。

「そうそう、その位置を忘れないでね。強い人になると竹刀の握り方だけで実力を判断する人もいるから。昇段試験とか見られる場合は握り方一つで落とされたりするんだ」

「ええ…厳しい世界なんだね…」

「厳しいのは剣道だけじゃないけどね。柔道、空手、弓道、薙刀、相撲とか、武道はみんな厳しい世界ばかりだよ」

直葉は遠い目でこの世界の厳しさを語っていた。全国中学大会ベスト8の成績を残した直葉だからこそ、この厳しい世界のことを理解していた。

「すごいんだね…直葉は」

「別にそんなことないよ、あたしはがむしやらにやってきただけだから…」

「そんなことないよ、自信を持っていいと思うな、ボクは」

「ええつと…そうやって褒められると…照れくさいな…あはは…」

剣道だけにあらず、武道の世界は実力が全て。強いものだけが上に行ける世界。

弱いものはムシケラ以下といった精神がまかり通っているのだ。

時代の進みと共にそのような考えは廃れていったが直葉と和人の祖父のように、古い考えを持つている人間は少くない。

時代が移っているといっても昔からのならわしというものは現代もその形を残しているのだ。

慢心して稽古がおろそかになればすぐに周りの人間に抜かされていく。

この世界は才能も大事だが何より毎日の地道な稽古が実を結ぶのだ。

勿論直葉もこの厳しい世界に身を投じてる一人として、厳しく指導されてきた。

祖父から褒められたことなど数えるほどしかなかった。そもそもそれも褒めるといには言えないような言葉だった。

だから木綿季から言われたこの言葉が、なんだかくすぐったかった。

「えつと…それで…これからどうすればいいんだろ…？」

「ああ…ごめんね、ぼーつとしちゃって。んとね、握り加減なんだけど、左手は竹刀を支えて、右手でコントロールするイメージで持つね。左手は小指、薬指、中指の力は緩めずにしっかりと握る」

「左手の小指、薬指、中指はしっかり力をいれて支える…、右手でもつてコントロールする…」

「うんうん、右手はおちよこを持つような形で添える程度の力で握つてね。強く力が入り過ぎると手首が硬くなつてぎこちなくなつちやうから。それと右の一の腕は親指の位置から真つすぐにしてね」

「え…えつと…おちよこ…、腕は真つすぐ…、こ…これぐらいかな…」

直葉は木綿季の握っている手の力加減を目視で確かめていた。

木綿季の今の腕力、握力、体力、身長、腕の長さからどれぐらいの力で握れているのかを観察していた。

「そうだね…あたし用の重さに調整した竹刀だけど…多分大丈夫だと思う。それじゃあ…手を離すよ?」

「う…うん」

直葉はそう言うと、ゆつくりと一緒に握っている竹刀から両手を離し、木綿季からも距離を置いた。

木綿季は一瞬体が重心ごとぐらついたが、なんとか体勢を崩さず踏ん張っていた。

「わわ…、結構…重いんだね…竹刀って…」

「うん、その竹刀は高校生の男の子用、480g以上の重さにしてるから…木綿季じゃ重たいかも?」

「ううん…持てなくはないけど…振るとなると…ちよつと…」

「まあねえ、480gってだけだと軽く聞こえるけどね。理科の授業とかで使う重しとかがそのまま長さだけ伸びたらそうなる感じかな。物って長くなると結構バランスとるの大変になるからさ」

木綿季は両手をぶるぶるとさせながら竹刀を握っていた。ただ持つだけならここまで苦労はしないだろうが、剣道は竹刀の握り方が基本だ。この基本の姿勢を欠いてしまったら剣道は成り立たなくなる。

木綿季は竹刀の重さもそうだったがこの握り方を維持するのに精いっぱいになってしまい、大きく息を吐くと同時に、その姿勢を崩してしまった。

「もう無理！ 難しいねー…これ…」

「あはは！ 最初から出来る人はあまりいないよ、あたしもその体勢をキープするのに結構時間かったもん」

「へえー…そうなんだ…。ねね直葉！ もっかい素振り見せて！」

「え…いいけど…どれにしようか？」

「えっと…どれについて、確か面、胴、小手…の3つだけ…」

「あと突きだね、基本的に剣道の決まり手はその4つだよ」

「それじゃあ…全部みたい！」

「え…全部？」

直葉はちよつとだけ困り顔を浮かべていたが、木綿季が満面の笑顔で目をキラキラさせて見つめていたため、断ることが出来なかった。

直葉は改めて可愛い妹が出来たという実感と、この顔は反則だろう

という衝動に駆られていた。

「んじゃ…リクエストにお応えしますか…!」

「わーい！ 楽しみ！」

直葉は手拭いで額の顔を拭うとそれを縁側に置いて、木綿季から竹刀を返してもらおうといつも素振りをしている位置に戻った。

右手でゆつくりと竹刀の鐔の近くを握り、左手を柄の端で握らせる。右手は親指から一の腕までピンと真つすぐ伸ばしており、基本を忘れない剣道の構えを見せていた。

「……………」

「……………」

直葉は少しだけ緊張していた。

いつもやる日課の素振りとはちよつとだけ違う張りつめた空気を感じていた。

木綿季のリクエストで決まり手4つを一気に全部見せる。普段と違った朝の稽古と可愛い妹にカツコ悪いところは見せられないといった思いからその顔はいつも以上に真剣な眼差しを見せていた。

直葉はその姿勢のまま目を瞑り、コンセントレーションを高めた。

いつでも打ち込むことは出来るが、打ち込むためのそのきっかけを待っていた。

桐ヶ谷邸にある池には落ち葉がいくつも落ちていた。

池のすぐ傍にある木々からも葉っぱが舞い落ちていた。少しずつ、秋から冬の模様になろうとしている。

早朝の冷えた空気から段々と温かくなると木々についている葉っぱに水気が出てきていた。

その水気は段々と水の塊になり、葉っぱの先に溜まっていった。そして葉っぱがその水の重さに耐えきれなくなり、重力に負けて下へと落ちていった。

その滴が池に落ちてピチョンという音を立てた。その音が直葉の素振りの合図となった。

「——ッ!!」

直葉は合図とともに目を見開き、剣道の基本の構えから竹刀を上へ振り上げた。

振り上げと同時に右足を前方に踏み出し、そのまま振り上げた竹刀を一気に前へと振り下ろした。

直葉の鋭い面に空気が切り裂かれたように見えた。

「面ッ!!」

直葉は面を放ち終わるとすぐに次の胴を打つための体勢に入った。振り下ろした竹刀を素早く戻し、左斜め上から前方に対して鋭く胴を放つ。

面から胴への打ち込みはあまりの一瞬であったため、木綿季は目の前で何が起こっているか理解出来なかった。

「胴ッ!!」

胴を放った直葉はすぐさま次の小手の体勢に入る。

先ほどの面の踏み込みよりも深く右足を前方に踏み込み、やや斜め上から面を打つよりも低い位置に素早く竹刀を振り下ろした。

「小手ッ!!」

小手を打った直葉はそのまま姿勢を低くし、大きく前へ踏み込ん

だ。

そこに対戦相手がいるかのように眼光鋭く、試合に勝つつもりの動きで次の決まり手に移る。

右足で踏み込みの速度を殺し、身体を反転させ、右手に必要最低限の力を込め鋭い突きを放った。

体全体で右手に体重を、力を乗せるかのように、直葉にだけ見えてるであろう対戦相手に対して突きを放つ。

「突きイーツ!!」

踏み込みだけで2メートルほど素早く前進して突きを放った直葉は、慣性の法則を無視するかのように右足で踏み込みの速度を殺し、すぐさま一歩分後方に体を戻した。

「はあ…はあ…」

全ての決まり手を披露した直葉は、最初に素振りをしていた位置に体を戻し、そんきよをして腰に竹刀を落ち着けて、数歩後方に下がり、礼をしてその場を締めた。

木綿季は直葉の速すぎる動きに目を丸くして驚いていた。

今のは本当に人間の動きなの？ あれが直葉なの？ 今日の前で一体何が起こっていたの？

そんな考えが頭の中を巡っていた。

「…とまあ…こんな感じかな…、ちよつとだけ緊張しちやって動き硬くなつてたけど…アハハ…」

「……………」

「…木綿季？」

直葉はぼーっとしていている木綿季に数歩進み、目の前まで顔を近づけると声を掛けた。

急に目の前で声を掛けられた木綿季は肩をビクつかせて驚いて声を上げた。

「うわあ!？」

「うわ!?! びっくりした! どうしたの木綿季? 体…どつか悪い?」

「ううん、大丈夫。ただ…直葉の動きがすごかったから…」

「そ…そうかな…、あたしより速くて強い人はいっぱいいるから…別に大したことはしてないけど…」

「ほえー…そうなんだ…。でも…でも直葉、すつごくかつこよかつた!」

素直にかつこよかつたと褒められた直葉は照れくさいのか、顔を赤くして目線をそらして顔をぽりぽりとかいていた。

「あ…う…ありがと…」

木綿季は直葉の身のこなしに大興奮だった。

ついさつきまで眠たくて頭は起きていなかったが、今の直葉の見せた剣道の動きで完全に目が覚めていた。

「ねね、明日も見に来ていい?」

「あ…うん、いいよ! でも…あたし朝早いよ? いつも4時に起きてこれやってるし」

木綿季は直葉に起床時間を聞かされると表情を曇らさせた。ボクはその時間にちゃんと起きられるのだろうか…。起きられてもちゃんと直葉の稽古を見続けていられるだろうか？と。

「えっと…が…、がんばる…」

「あははは！ 頑張つてね！ 木綿季！」

二人の間には笑顔が零れていた。

他愛のない、ごく普通の仲睦まじい姉妹のやり取りのように見えた。養子縁組が組まれれば正式にこの二人は姉妹となる。今までやってきたことも生い立ちも違う二人だが、固い絆で結ばれた姉妹となるのだ。

今はまだ女の子の友達同士といった付き合い方かもしれないが、やがて喧嘩もするし恋の悩みの相談や、将来のことでの悩みなどもぶつけ合うだろう。

しかしそのやり取りも、家族ならではのやり取りと言えよう。

木綿季は少しずつではあるが、自分がだんだんと日常に戻ってきていることを実感していった。

新しい経験をする度にボクは感動して泣いてしまうかもしれないが、少しずつ慣れていこう。

皆がいる…ボクを好きでいてくれるこの桐ヶ谷邸で…少しずつ毎日を歩いていこう。

そして…ボクに出来る形で恩返ししていこう。何をしてあげたら皆喜んでくれるかな…？

どう思う？ パパ、ママ、姉ちゃん。みんなの意見も…聞いてみたかな…。

ううん大丈夫！ やっぱり自分で考えるよ！ 自分で考えて…皆に精一杯お返しをしていくよ！

だから見てね、ボクの…生きてるところ…。

第44話く悪戯しちやうぞ?く

西暦2026年10月30日金曜日 午後17:40 和人の部屋

「はろういん?」

和人のPCデスクで詩乃から歴史を教えてもらっている木綿季がきよとんとした顔を浮かべていた。

詩乃もそれに釣られるかのように木綿季と一緒に和人の顔を見た。

「ああ…、明日の31日19:30、アルンの街で受けられるクエストがあるみたいなんだ。NPCから受注して、ハロウィンモンスターとそのボスを倒すとアイテムをドロップするんだとか」

「…なんだかよく聞くような内容のクエストね…」

詩乃がやれやれといった顔でコメントを並べた。

確かにこの手のシーズイベントは内容がどのMMOも被ってしまいう傾向にある。

運営会社がそれぞれ差別化を図ろうと努力はしているものの、やはり根本的なところでゲームのシステムに合わせないといけないため、大概内容は被ってしまったているのだ。

「まあ…それはどこもかしこも似たようなもんだよ。んでそのクエストを達成すると、ハロウィン限定の衣装と特殊なお菓子が報酬としてもらえるらしいんだ」

和人の話を聞いていた木綿季と詩乃は「へえ」といった顔で話を聞き流していた。

そして木綿季は和人からの熱い視線を送られていることに気が付いた。

「木綿季、俺はお前のハロウィン姿が見たい」

和人のド直球な願望を言い伝えられた木綿季は途端に顔が真っ赤になってしまった。

今横に詩乃がいるのに何でそんなことを躊躇せずに言い放てるんだろうか？

やはりこの男の辞書に恥ずかしさという文字はないのだろうか、心から痛感していた。

「あ…う…えと、和人…見たいの…？　ボク…ハロウィン衣装…」

「ああ、去年見たデザインと一緒にならかなり可愛くなると俺は思ってるんだけど」

和人はそんな木綿季などお構いなしに一人で話をどんどん進めていた。

目的は木綿季と一緒にイベントを楽しむみたいのと、ユウキのハロウィン衣装姿をその眼に焼き付けたい。

ただそれだけであった。

「えと…、和人が見たいなら…ボクは…構わないよ…？」

木綿季は両手を真つすぐ伸ばし太ももに乗せながらもじもじと恥ずかしかっていた。

しかし、和人が望むならと満更でもない様子も見せていた。

詩乃はそのバカップルっぷりに呆れ果てて大きな溜め息をこぼしていた。

「…私、帰ろうか？」

突如帰宅宣言した詩乃に対して二人は慌てて止めに入る。
いきなりゲームの話になってしまったが今は木綿季の勉強中
なのだ。

詩乃も暇ではない放課後の時間を作ってこうして木綿季の勉強を
見てくれている。

「す…すまんシノン！ 今は勉強の途中だったよな…ついつい暇でA
LOの情報に走ってしまったよ…あはは…」

「ボクからもごめんねシノン…、忙しい中わざわざ来てもらったのに
…」

「ううん、別に大したことないわよ。忙しいって言っても一人暮らし
だから帰宅したって夜ご飯を作るぐらいしかやることないし」

「へ…、シノンって一人暮らしなんだ」

「え…、ええ…ちよつと家で色々あつて…母さんとは別居してるの…」

詩乃は表情を曇らせた。

木綿季はその様子を見て詩乃はただならぬ過去を抱えて今まで生
きてきているんだなと悟ってしまった。

何があつたのか聞いてみたかったが、とても他人の心にずかずかと
踏み入る勇氣はなかった。

これが和人なら迷わず聞いていただろうか。

「そう…なんだ…大変なんだね…」

「うん…まあ…ね…」

詩乃が表情を暗くして黙りこくってしまったばかりに、勉強の場は重たい空気に包まれてしまった。

和人と木綿季もどうしたらいいのか？という表情を浮かべながら困り果てていた。

教えてもらっている歴史も中途半端な進行度で止まってしまっていた。

中学の授業内容なので和人でもある程度は教えられるだろうが。

その後勉強は大して進まず、時刻も夕方18時を回ろうとしていた。

10月末に差し掛かっていることもあって、この時間は陽の沈みが早い。

女の子が一人で帰宅するには物騒な時間帯となってしまうていた。

「もうこんな時間か…シノン、帰りはどうするんだ？ 確かシノンの住んでる所って…都心だったよな？」

「そうなんだ…でもこんな暗くなっちゃったら女の子一人で帰るのは危ないんじゃない？」

木綿季は先日の神田事件のことを思い出し、詩乃に万が一のことがあつてはいけないと考えてた。

もしも神田じゃないにしろ、変質者に詩乃が襲われてしまったらどうしよう？と。

「そうだな…、そしたら俺がバイクで送り届けても構わないけど…、どうする？」

詩乃は若干困っていた。

別に一人でも問題なく帰れる。今まで変質者に出くわしたことなくないし。

あつても防犯グッズをいくつも持つてるので容易に撃退できるだろう。そう考えていた。

「大丈夫よ…、別にそんなにふらふらと怪しい人間がうろついているわけでもないし…」

「…いや、だめだ」

自分は大丈夫、もし襲われても撃退出来るから気にしなくていいと考えてる詩乃に対し、和人は否定的な意見を出した。

「シノン、やっぱり君は一人では帰らせられない。俺が送っていく」

「え…どうしてよ…、平気よ」

「駄目だ!!」

頑なに一人で帰ろうとする詩乃に対して、和人はうっかり声を荒げてしまった。

木綿季が襲われた神田事件のことがどうしても頭から離れなかったのだ。

「シノン…実はな…、木綿季が退院してこの家にやってきた翌日…、この近くの公園で木綿季が…襲われたんだ」

「え…?」

詩乃は目を点にして「?」でしょ…?」といった表情を浮かべていた。こんな非力な女の子が…この家の付近で襲われた…?

「犯人は木綿季の小学校時代の同級生だった。HIVが原因で木綿季

をいじめてた主犯格の人間だったんだ」

「……………」

木綿季はそのことを思い出して暗い表情になってしまっていた。出来ることならヤツのことは思い出したくもなかったのだ。それぐらい木綿季にとっては忌々しい出来事だった。

「…だから…もしシノンに万が一のことがあるって思ったら…俺はとも君を一人で帰すことなんて出来ない」

「…………でも…ここから私の家までバイクでも、多分1時間はかかるわよ？ 私を送って帰ってきたらアンタだって遅くなっちゃうじゃない。それに…木綿季が寂しがらんじやないかしら？」

「しかし…」

確かに木綿季と数時間とは言え離れ離れになってしまう。常に隣にいるのが当たり前になっていた二人だけに、少しでも離れてしまうと心にぽっかりと穴が空いてしまうことに気が付いていたのだ。

良く言えば絶大な絆で結ばれている間、悪く言えば依存してしまっているとも言えるが。

「えつと…じゃあさ…」

木綿季が改まったような態度で二人に提案を持ち掛けた。

非常に嬉しそうだがちよつと言いつらそうでもある顔色になりながら。

「そしたらさ…、シノンが…泊まっていけばいいんじゃないかな…？」

「へ…？」

「へ…？」

和人と詩乃がステレオでハモった。まさかまさかの木綿季から泊まっていけという提案が出るとは思わずおかしな声を上げてしまった。

「ほら…、それなら夜出歩いて襲われる心配もないし安心出来るし…、ボクたちもシノンがいてくれれば…楽しいし…」

木綿季はあくまでも親切心で言ったつもりだったのだが、本心はと言うと詩乃が一晩だけでも一緒にいてくれればきつと楽しくなると思っていた。

友達がお泊りにくるなんてことは今までなかったしきつと楽しくなる。

そう考えていた。

「でも…迷惑じゃないかしら…、ほら…キリトのお母さんとか…」

「うちなら多分大丈夫だと思うよ、スグも首を横に振るなんてことないだろ。それに明日は土曜日だし朝帰っても問題ないだろ」

和人はあくまでも桐ヶ谷家は歓迎ムードだという。

確かに詩乃にとつても食費や電気代は浮くし、夜出歩くリスクがなくなるし、このまま休めるということもあつてメリットだらけであった。

そして何より詩乃も友達の家にお泊りをしたことがない、そのチャンスにちよつとだけ心の中が躍っていた。

「…んじゃあ…ちよつと、お言葉に甘えちゃおう…かな…」

「ホント!? やったあ! シノンと一緒にだーっ!」

詩乃が一晩一緒にいてくれると決まった瞬間木綿季は飛び跳ねて喜んだ。

さきほどまで暗い雰囲気につつまれていた和人の部屋は、一転変わって楽しい雰囲気にも包まれていた。

「ちよつと…はしやぎすぎでしょ…、まあでも…一晩お世話になるわね」

「んじや、母さんが帰ってきたら挨拶しないとな、家の中も案内するよ」

「あ! それならボクが案内するよ! シノン! ついてきて!」

木綿季は勉強などそつちのけで一方的に詩乃の腕を掴んで引っ張っていった。

「ちよ…木綿季いきなり引っ張らないでっ! ちゃんとついてくから!」

「あ…、えへへ…ごめんごめん」

木綿季は首を横にかしげて舌を出し、自分の頭をコツンと叩いて「やっちゃった」といった表情を浮かべていた。

詩乃はその仕草をみてしまい、すっかり木綿季に心を奪われていた。

(か…かわいい…)

同じ女の子に心を奪われている詩乃を、木綿季は今度は優しく手を

掴んで桐ヶ谷家を案内した。

和人はその様子を微笑ましくベッドに腰かけながら見守っていた。

「楽しそうだな…木綿季…」

和人は退院後、桐ヶ谷家に来てからの木綿季の様子に安堵していた。

長いこと病院暮らしを過ごし、日常へなかなか溶け込めなかなとも思っていたのだ。

しかしその辺りは木綿季の持ち前の明るさと、なんにでも全力でぶつかっていく姿勢のお陰ですんなり…というわけにはいかないが日常に溶け込めていた。

木綿季にとっては現実世界のどんな些細な出来事も最高に楽しい。毎日が本当に刺激的だ。

でもそれもやがて慣れていくと感動も少しずつ薄れていくのだろう。

それでも、木綿季なら全力で楽しもうとするだろう。

何故なら、それが木綿季だからだ。

「…俺は木綿季の恋人で…兄貴になるのか…、ちよつと複雑だな…」

明後日の11月1日の日曜日、父親の峰嵩が帰宅することになって
いる。

日曜なので役所は休みなのだが、翌朝の月曜日に家族そろって川越
市役所に趣き、養子縁組届を提出する。

それが受理されれば、晴れて正式に木綿季は桐ヶ谷家の家族とな
る。

峰高は父親、翠は母親、直葉は姉、そして…恋人でもある和人は木
綿季の兄ということになる。

こんなに可愛くて元気な子が、自分の恋人でもあり妹でもあるとい
うのだから。

和人はあらゆる方面から恨みを買いたいようなシチュエーションに恵まれていた。

本人は決してその自覚がないだけだが。

「まあ…、妹で恋人でも…構わないけどな」

そう言いながら和人はベッドに体を横にした。

そして俺と木綿季の関係は今後どうなっていくのだろうかと考えていた。

周りの人間は結婚してしまえと囁し立てている。実際和人はその方面に対して否定的な答えは決して出していない。

むしろ本人との問題だ、木綿季と相談して決める、と表向きではあるが肯定的な返答を返しているのだ。

もちろん本人も将来木綿季と結婚の契りを交わすことはやぶさかではない。

「……俺が…木綿季と…結婚か…」

和人は仰向けの状態から横向きになり、再び木綿季との結婚について考えていた。

「…俺は…木綿季が望むなら一生隣にいてやりたい。むしろ…俺も死ぬまで木綿季の隣にいたいな…」

事実上の結婚宣言を呟きながら和人はそつと目を閉じて眠りに入ってしまった。

やがてほどなくして家の案内を終えた木綿季が詩乃を連れて部屋へと帰ってきた。

「ふいー…ただいまーかずとー！…つてあれ…？」

「……すう……すう……」

「……寝ちゃってるじゃない……。ALOでもそうだったけどよく寝てるわよね……コイツ……」

「まあ……ね……、でも和人……寝相はいいよ?」

「えっ!?」

木綿季のさりげない爆弾発言に詩乃は目を丸くして驚いた。

まさか木綿季は和人と一緒にの部屋で寝ているのか?と。

その事実は桐ヶ谷家の人間と明日奈以外知らされていなかった事実であった。

冷静に考えてみれば血のつながっていない年頃の男の子と女の子が一つ屋根の下で一緒にいるなど。

十中八九やましい考えて辿り着いてしまうのがほとんどだ。

実際、退院した初日に和人は木綿季を襲おうとしたわけなのだが。

「えつと……木綿季、アンタひよつとして……キリトと同じ部屋で……?」

「うん!……一緒に暮らしてるよ!……夜も一緒にベッドで寝てるんだ!……和人って可愛い寝顔するんだよねー!……」

天真爛漫な無邪気な笑顔に、詩乃は何も言い返すことが出来なかった。

この子は一体どれだけとんでもないことを口走っているのか分かっていいのか……と呆れ果てていた。

「木綿季、貴女は今日、私と一緒に寝なさい」

「え……でも……和人が……」

「いいから！ 今日はこの部屋で私と寝るの！」

「和人はどうするの…？」

「一階のソファにでも放り出しておけばいいじゃない」

「ええ…それは可哀そうだよ…」

ああ…哀れ和人也。

それからしばらくして、直葉が翠と同じタイミングで帰宅してきた。

駅前でたまたま顔を合わせて、そのまま晩御飯の買い物を買わせて帰ってきたのだという。

「ただいま〜」

「ただいまあ」

木綿季は階段を降りて帰ってきた二人を玄関まで出迎えに行った。詩乃もその後続くように階段を降りて玄関まで赴いた。

「お母さん、直葉、おかえりなさい！」

「うん、ただいま木綿季！…あれ？ シノンさん？」

「ただいま木綿季…、あら？ そちらは…確か…朝田さんだったかしら？」

木綿季の斜め後ろにいた詩乃が少しだけ前に出て礼儀正しく挨拶をした。

「今晚は、お邪魔してます。木綿季と和人の友達の朝田詩乃です。何回か…病院でお顔を合わせてると思いますけど…」

「ええ勿論覚えてるわ！ 初めのお見舞いの時も手術の時も、退院の時も来てくれていたわよね！ あの時は木綿季を元気づけてくれて本当にありがとうね、朝田さん」

母親らしい温かくて柔らかい表情でお礼を言われた詩乃は少し照れ臭そうにしてしまった。

「あ…いえ…別に私は…、大したことはしてませんから…」

「そんなに謙遜にすることじゃないと思うよ？ ボクはシノンが来てくれてすつごく嬉しかったな〜！」

木綿季はそう言いながら背中から詩乃にのしかかった。木綿季の体重は軽かったため、詩乃でも簡単に支えることが出来た。

「そういえば…和人はどうしたのかしら」

「寝てるよ」

「…ああそう…」

あのバカ息子は四六時中寝てばっかりいて…と思う翠であった。

まあいつもつきつきりで木綿季の面倒を見ているので疲れがたまっているのだろうと、勝手に結論付けていた。

「そういえば…シノンさん帰りはどうするの？ もうお外すっきり暗くなっちゃってるけど…」

「あ…えつと…そのことなだけ」

「そのことなだけどね！」

詩乃が説明をしようとした瞬間に木綿季が話に割って入った。

「えつと…お母さん、シノン…今日うちで泊めてあげることって出来ないかな…？」

和人から言われていたので大丈夫だとは思いますが、木綿季は恐る恐る翠に聞いてみた。

「別に構わないわよ？ 直葉もいい？」

「え…あ…うん、あたしも構わないよ？ むしろ…シノンさんが泊まってくれるなら楽しくなりそうだし！」

「寝るときは直葉か和人の部屋を使えばいいわ、和人はソファにでも寝かせておけば大丈夫だから」

「はい…ありがとうございます。一晚…お世話になります」

「いいのよ、か弱い女の子一人をこんな夜遅く外を出歩かせるなんて物騒よ。こちらこそよろしくね、朝田さん」

「よろしくお願いします。あ…それと私のことは…詩乃って呼んでください」

「…わかったわ、詩乃ちゃん。よろしくね」

翠と直葉、そして詩乃が互いに挨拶を済ますと翠は晩御飯の支度をしにリビングに、直葉は木綿季と詩乃と一緒に自分の部屋へと足を運

んだ。

階段を登り、和人の部屋の隣にある直葉の部屋のドアを開け、三人は直葉の部屋へと入っていった。

直葉の部屋に入ってまず飛び込んできたのが天井に貼ってあるAL0で直葉が動かしているキャラクター「リーファ」の特大POPだった。

「あれ？ これって…リーファだよな？」

「ああ…うん…やっぱり気付いちやうよね…」

POPに描かれているリーファの姿は、AL0の大空を気持ちよさそうに飛んでいる様子が描かれていた。

恐らくスクリーンショットを撮影してプリントアウトしたものを貼っているのだろう。

HD解像度か4K解像度か、それぐらい精細な解像度でプリントされたものだろう。

「貴女…、これ自分の部屋に貼って恥ずかしくないの…？」

「えっと…最初は恥ずかしかった…、お母さんにも見られて何これ？って聞かれたこともあったよ」

直葉は少しバツが悪そうにもじもじと自分の頬を人差し指でかいていた。

詩乃は呆れ顔で天井のPOPをまじまじと見つめ、木綿季は感心するような目で眺めていた。

「そういうえば…私ちよつとだけ…気になることがあるんだけど」

詩乃が改まったように話を切り出した。

直葉と木綿季は視線を詩乃に移し、引き続き詩乃が話し続けるのを待った。

「あの…、木綿季が退院した日のことなんだけど。今思えばちよつと不自然な所があったと思うの」

「不自然…？」

木綿季の退院した日、10月25日のことだ。

当日は日曜日とはいえ午前中から、100人余のALOプレイヤーが木綿季の病院前に駆け付けて、木綿季の退院を盛大に祝福したのだ。

これは明日奈やセブンたちが呼びかけた結果でもあった。

木綿季の記念すべき一日目の出発を盛大に祝って、素敵な門出ししよう。そう裏で計画していたのだ。

「でも…あれは明日奈さんやセブンちゃんが、集まれるプレイヤーに声を掛けたから実現したっていう認識だったんだけど…。そんなにおかしいのかな」

「うーん…そうじゃないのよ。私がおかしいって感じたのは」

「ほえ？…どゆこと？…シノン」

木綿季が首をかしげて頭に？マークを浮かべていた。

「あのね…、ALOプレイヤーが祝福に駆け付けてくれたのは全然不思議なことじゃないのよ。むしろ明日奈とセブンが声を掛けたんだからああなっただけだと思うのよ。ただ…私は別のところで違和感を覚えてたの」

「え…どうゆうことですか…それは…」

詩乃は一度息を飲み込んでから真剣に語り出した。

「変だと思わない…？ 木綿季が国内で初のAIDS完治者だつていうのに…、当日はこれっぽっちもマスクミがいなかったじゃない」

「あ…」

詩乃の言うことはもつともだった。

確かに国内初のAIDS完治者ともあれば、病院側が会見を行い、退院して病院の外へ出たあともマスクミ関係者が取材に殺到することは必至であった。

桐ヶ谷家に帰宅してからもドアの前でカメラマンが待ち構えている日常が容易に想像できた。

しかし現実は違っていた。木綿季や桐ヶ谷家を取材しようとするマスクミ関係者は一人としていなかったのだ。

新聞のニュース欄にも端っこに「国内初のAIDS完治者か!？」と非常に小さく報道されている程度のものだけだった。

三人は首をかしげてその理由を考えていた。

木綿季と詩乃は全く心当たりがなかったが、直葉は少しだけ思い当たることがあったようだった。

「もしかして…お兄ちゃんが前言った…政府の人が関係してるのかも…」

「え…それってもしかして…」クリスマスハイト”のこと？」

クリスマスハイト、和人らと同じようにALOにダイブしているプレイヤーのことだ。本名、菊岡誠二郎。

総務省総合通信基盤局高度通信網振興課第二分室（通信ネットワー

ク内仮想空間管理課：通称「仮想課」の職員だ。

S A O 事件の被害者の搬送や対応を整えたチームの中心的人物でもあった。

和人がS A O から目覚めた後真っ先に接触し、互いに様々な情報提供をしていた。

和人としても少なからず世話になった人物でもあることから、彼からの頼みを断り切れないことが数少なかった。勿論その度に和人はしっかりと報酬を受け取っていたのでお互い様なのだが。

そして、今回木綿季のA I D S 完治に関してマスコミが殺到しなかったのも、菊岡が政府を通して圧力を掛けたからであった。

和人はセブンが病院に見舞いに来てくれた時に、セブンに頼んで菊岡に今回のことを依頼していたのだ。

セブンとしては菊岡に借りを返させるためでもあったので、表向きとしてはセブンが菊岡に依頼したことになっている。

さしもの菊岡もセブンには頭が上がりないうらしく、渋々今回の件を承諾した。

「つてなこと…前にお兄ちゃんが言ってたんだ。あたしには何のことだかさっぱりだったんだけど…このことだったんだね…」

「そう…だったんだ…」

木綿季は和人の部屋がある方を見ながら、そんなところにまで和人は気を使ってくれてたんだなど感謝の気持ちを抱いていた。今もこうして静かに暮らしているのは和人のお陰なんだと。

（ありがとね…和人）

程なくして三人はガールズトークを展開していった。

普段家で何しているか、お洒落とかお食事とかおススメのお店はあるかなどなど。

和人では絶対に入り込めないようなきらびやかな会話に身を投じていた。

そしていい時間になると直葉がお風呂を沸かしに行った。部屋には詩乃と木綿季の二人だけが残されていた。

「ねえ…シノンってき、SAOサバイバー…なんだよね？」

木綿季が突如として質問を詩乃に投げかける。

「ええ…といっても、私は直葉と同じく76層の時点である世界に迷い込んだりしたんだけどね…偶然だったんだけど」

「え…そうだったの？」

「うん…実はね、私も…メデイキュボイドを使ったことがあるの…」

「…え…？」

そう、詩乃は過去にメデイキュボイドを使っていたことがある。

とある事件に巻き込まれ、精神を病んでしまった詩乃だったが、メデイキュボイドを使ったカウンセリングを受けてみないかという提案を持ち出されていた。それに承諾して、公にはされていない現存している2台目のメデイキュボイドを使っていたのだ。

そしてそのカウンセリング中に回線混雑に巻き込まれ、SAO世界へとダイブしてしまったということだった。

「そう…だったんだ…、ボクとシノンは…同じだったんだね…」

「同じなんて…そんなことないじゃない。木綿季が受けてきた苦しみなんて…私の過去に比べたら…」

「シノンの…過去…?」

その言葉を口にした瞬間、詩乃は「しまった」という顔を浮かべながら自分の口を押さえていた。

慌てて木綿季から視線を逸らすと、その場を誤魔化すように口を開いた。

「…何でもないわ…、今は…忘れて…」

「え…? う…うん…」

木綿季は感じていた、シノンはボクと同じか、もしくはそれ以上の大変な闇を抱えていると。

聞いてみたかったが…、その闇は木綿季の思っている以上に深そうだった。

そして何より「私の過去」と口ずさんだ瞬間にシノンの顔色が悪くなっていくことに気付いてしまっていた。

ボクじゃあその闇は取り除けないと悟っていた。

「シノン…、大丈夫…? 気分悪そうだよ…?」

「だ…大丈夫よ…でも、ちょっとだけ横になってもいいかしら…」

「あ…うん、直葉の部屋だけ…大丈夫だと思うよ?」

そういうと木綿季は詩乃に優しく肩を貸すとゆっくりと歩きだし、直葉のベッドに誘導した。

詩乃をそつと直葉のベッドに横たわらせた。

「ごめんなさい…世話を焼かせて…」

「んーん、気にすることないよ。ボク…シノンにもすっごい助けもらってきたから…、これぐらいのことさせてほしいな」

「……ありがと…木綿季…」

「うん…、少し眠る？」

「ええ…そうさせてもらおうね…」

「わかった、何かあったら呼んでね？　すぐに駆け付けるから」

「ありがとう…、おやすみなさい…」

「おやすみ、シノン」

木綿季はそういうと、直葉がいつも使っている布団をシノンに優しくかけてあげた。

シノンは心から安心したのか程なくして静かに寝息を立て始めた。

「スウ…スウ…」

「……………シノン…」

木綿季は考えていた。

シノンといい、和人といい、みんなボクには言えないような秘密を抱えている。

SAOに関わった人たちはみんなそうなのだろうか…？

だとしたら、なんだかボクだけが仲間外れにされているみたいでいやだな。

一体…みんなSAOでどんなことを経験してきたんだろう…。

HPがゼロになったら…現実でも本当に死んじゃうSAOで…皆

何をして生きてきたんだろう…。

「……………」

木綿季は眼鏡をかけたっぱなしで寝ているシノンの眼鏡を外して枕元に置いてあげた。

そしてゆっくりと立ち上がり、直葉の部屋を出て和人の部屋へと足を運んでいた。

ドアノブに手を掛けてドアを開くと、寝ている和人の姿が目に入った。

「和人…まだ寝てる…」

和人は仰向けの状態ですかーすかーと寝息を立てながら眠っていた。

木綿季はベッドの前に座り込み、和人の顔に自分の顔を近づけた。

「もし…もしも…、もしもボクが…SAOの世界に最初から迷い込んでいたとしたら…。和人は…ボクを守ってくれたのかな…。明日奈とボクが一緒にいたら…どっちを好きになっただろう…」

そう思った木綿季は、無意識に和人の頭を撫でていた。

和人の髪の毛はさらさらだった。触ってて心地が良かった。

頬つぺたも触って指でつんつんしてみた。肌はすべすべでぷにぷにしていた。

「本当に…女の子みたいなんだね…和人」

木綿季はALOで男の子も装備出来る女の子の衣装を着せてみたら、非常に可愛くなるのではないかと悪魔的な考えを思い浮かべていた。ハロウィンなんだからちよつとぐらいお茶目な悪戯があっても

…いいんじゃないかなと思っていた。

「かずと、起きないと悪戯しちゃうぞ?」

そう言いながら木綿季は、仰向けで寝ている和人に馬乗りの体勢になつた。

端から見たら非常にいかがわしい、いけない行為にみえる。勿論木綿季にそんな気はない。

しかし世間はハロウィンシーズン、トリックオアトリートなのだ。今までこういった行事に参加できなかった木綿季には、俗世間でのイベントにはどうしても興味が出てきてしまう。

少々の勘違いが混ざっているようではあるが…。

「かずと…」

木綿季は無抵抗のまま眠っている和人の顔に、自分の顔を近づけていった。

近付けるにつれ、目を細め、やがて瞑り、自分の唇を和人の唇に段々と近づけた。

あと10センチ、5センチ、3センチ、数ミリ…。木綿季の唇が一方的に和人の唇を奪おうとしていた。

ガチャツバタンツ

「おにいちゃん、お風呂沸いた…よ…う…?」

その時だった、直葉が和人の部屋のドアをバタンツと勢いよく開け、ベッドの上でナニをしている木綿季の行動をまともに視界に捉えてしまっていた。

その光景を見られてしまった木綿季は口をパクパクさせ、顔を真っ赤にしてこの状況をどう誤魔化そうと考えていた。

「えっと…、あたし…お邪魔だった…みたいね…？」

「あ…、ち…ちがつ、直葉！ 違うの！ これは…ボクは…！」

「お…お邪魔しましたー！ ごゆっくりー！」

それだけ言い放つと直葉はドアを素早く締めて、そそくさと逃げるようにその場から立ち去っていった。

「す…直葉あー！ 違うんだよオー！ これはハロウィンで…！ トリックオアトリートなんだってばあーっ!!」

木綿季はすぐに弁解すべく、意味不明な言葉を並べつつ、慌てて直葉のあとを追いかけていった。

肝心の和人はそんなことなどお構いなしに寝息を立て続け、夢の世界に酔いしれていた。

桐ヶ谷家は、今日も平和であった。

第45話く木綿季と詩乃く

西暦2026年10月30日金曜日 午後19:10 桐ヶ谷邸

「おほ…いい匂い…」

桐ヶ谷邸のリビングには出し汁のいい匂いが充満していた。寒い日にはこれが一番というワケで、桐ヶ谷家の今宵の食卓は鍋である。気温が低くなってくると飽きるほど鍋が出てくることが多いとは思うが…。

しかし鍋ほど経済的で合理的な温かい食べ物はないだろう。

具は好きなものを持ち込めるし調理法も簡単。味付けも自分の皿で好きに出来る。

美味しくて心も体もあつたまる、食べながら話も進むといいことづくめであった。

そんな中、今宵桐ヶ谷邸で行われた鍋パーティーは牡蠣と豚肉のキムチ鍋であった。

キムチ鍋と聞いて一番最初に喜んだのが言わずもがな和人であったが、翠の「辛さはマイルドにしてあるわよ」の一言で肩を落としていた。

辛いのが食べたければ自分の取り皿だけにしなさいと、和人は翠から豆板醤を受け取っていた。

…まさかその小さな一瓶丸々を小皿に入れるなんてバカな真似はしないだろうが…、和人ならやりかねない事案である。

「これは…お兄ちゃんが喜びそうなお鍋だね…」

直葉がキムチ鍋を見て真っ先に不安そうな表情を浮かべた。

木綿季も同じように苦笑いを浮かべながら鍋を見つめていた。

「…すでに辛そうなんだけど…、和人はこれでも足りないっていうの…?」

そう言いながら恐る恐る木綿季は和人の顔を窺う。一方、和人は実に楽しそうな顔をしていた。

「母さん曰く、マイルドな味付けだって言ってたから…木綿季たちでも食べられるんじゃないか?」

「…アンタ…すごい他人事のように流したわね…」

詩乃が呆れた表情で和人を見ていた。しかし詩乃の表情には呆れ顔の他にもほのかに笑顔が零れていた。

そう、詩乃も久々なのだ。大人数でテーブルを囲って食事をするという行為が。

「シノン…何か嬉しそうだね?」

木綿季に声を掛けられた詩乃がキョトンとした表情を浮かべた。

「え…私…そんな顔してたかしら…?」

「ああ、とても自然な笑顔だったよな?」

「シノンさん…笑うといつもより可愛いですよ! 普段はクールなイメージがありますけど…」

周りから笑顔が素敵と次々に囁し立てられ、詩乃は顔を真っ赤にしていた。

まだキムチ鍋は胃袋に入っていないはずなのに既に体温は上昇してしまっていた。

「ほらほら貴方たち、そこまでにしておきなさい」

翠が詩乃をからかう三人に向かって釘を刺した。三人は「ハーイ」とだけ言うのと各々椅子に腰を落ち着けた。

「詩乃ちゃん、急ごしらえ的なものになってしまったけど遠慮なく食べてね？ 何か嫌いなものとかアレルギー的なものとかある？」

「あ…いえ…、おかまいなく…。特に嫌いなものもアレルギーもないですから…」

「そう…ならよかったわ」

そう言いながら翠は皆の取り皿に次々にキムチ鍋の具を入れ始めた。

詩乃は「自分の分は自分で取ります」と言ったのだが翠は「いいからいいから」と豪勢に詩乃の取り皿に具を盛っていった。

「おお…シノンの皿に…牡蠣と豚が2つずつ…、豪華だな…」

「すごいよ、ぷりっぷりだよ…キラキラしてるよ…牡蠣が…」

偶然なのかもしれないがたっぷりの野菜と程よく煮えた柔らかい豚肉、そして何よりつやつやに輝いているぷりっぷりの牡蠣が、詩乃の小皿から魅力を放っていた。

程よく湯気も立ち、辛さと出汁の味が混ざったいい香りが食欲を引き立てる。

「すごい…美味しそう…」

「みんな回ったわね…？ それじゃあいadakimashiyouka」

桐ヶ谷家四人がお行儀よく手を合わせる。詩乃もその様子を見て続くように少し慌てて手を合わせる。

「いただきます」

「いただきますっ」

「いただきますあーす！」

「いただきます！」

「い…いただきます」

各々が自分の取り皿に箸を進めた。一方和人は翠からもらった豆板醤を取り皿に入れ、自分の辛さの好みに調整しながら口へと運んだ。

白菜もとろとろになるほど煮込まれた野菜は熱々になっており、各々口の中をはふっほふつとさせながら味を楽しんだ。

「あつっ…ほふっ……んまーい！」

木綿季が一足先に一口目を堪能した。見た目は真っ赤なキムチ鍋だが女の子でも十分に楽しめる程度の辛さと何より出汁が利いていた。直葉も同様満足そうな表情を浮かべていた。

「うむ…やはり豆板醤はいいものだ…」

和人だけは違う世界の味を楽しんでいた。既に小瓶の豆板醤は五分の一ほどなくなっていた。

「和人…、いつか内臓悪くするよ…？」

「大丈夫だ、俺の胃袋は宇宙だからな」

「…どっかで聞いたことあるようなフレーズだね…それ…」

木綿季と直葉は相変わらず呆れた表情で和人の食べっぷりを見ていた。

一方、詩乃はなかなか自分の取り皿に箸が進まない様子だった。

「あら？ 詩乃ちゃん…食欲…ないのかしら…？」

「あ…いえ…そういうわけではないんですが…」

翠の問いに少しだけ困ったような顔を浮かべた詩乃であった。そんな詩乃に木綿季が優しく声を掛ける。

「そういえばさつき体調悪そうだったけど…大丈夫？ シノン…」

「あ…うん、それはもう大丈夫…ありがとね…木綿季」

木綿季にお礼を言いながら詩乃もようやく箸を進めた。詩乃の一口目はぷりっぷりの牡蠣だった。

「それ…一番でっかいな…」

「何か…他の牡蠣と違って見えるよね…」

詩乃の小皿に盛られた牡蠣は、他に入っている牡蠣に比べてとびつきり大きく、ツヤのいい牡蠣であった。

多分生牡蠣で食べても、カキフライにしても絶品なことだろう。

詩乃はそんなぷりっぷりの牡蠣をゆっくりと口へ運び、一口で頬張るとじつくりと牡蠣を味わった。

「……………」

目を閉じながら牡蠣を味わう詩乃を、全員が固唾を飲んで見守っていた。

食べ物一つを味わう光景を見ているその様はなんだか異様な空気に包まれていた。

詩乃は十数回ほど噛むと大きな牡蠣を飲み込んだ。

そして全員身を乗り出して食い入るように、詩乃の口から出るであろう感想を待った。

「…美味しい…」

その一言が聞けた桐ヶ谷家の面々に笑みがこぼれる。

「よかったわ…お口に合ったみたいで…」

翠が安堵の表情を見せた。自分の子の友達に食事を振舞うなんていつぶりだろうか？

和人の影響でうちの家庭の食事が変な偏見を持たれてないかとも思っていたが、詩乃の「美味しい」という言葉にほっと胸を撫でおろした。

「そんなに辛くないよね、ボクたちでも全然食べられる辛さで！」

「うん、お兄ちゃんじゃないけどこれなら全然辛いのもありありだね！」

「！」

辛いのもありありというワードを聞いた瞬間和人の眼光が鋭く輝いた。

更に辛い物をご所望ならばこれをどうぞと言わんばかりに、無言でテーブルの中央に豆板醤の入った小瓶を掲げていた。

「……………」

「あ…いや…いらないよ…お兄ちゃん…」

いるはずもない、和人の使っている豆板醤は激辛だったからだ。

こんなものを食べてしまった日には舌がマヒして胃が痺れてしま
うだろう。

「ぐぬぬ…何故だ…解せぬ…」

「解せなくて結構だよ…、そんなもの食べられるの和人だけだつてば
…」

和人は自分の好みの味が理解されないことに対して頭を抱えてい
た。何故みんな理解してくれない、この辛さをいう文化の素晴らしさ
を。刺激と快楽を与えてくれるこの真っ赤な文化の素晴らしさをど
うして。

しかしこの場に賛同者は一人もいなかった。

「…いつもこんな感じなんですか…？」

「ええ、ほぼ毎日…ね。おかげで唐辛子やマスタード、キムチといった
辛いものの消費は…多分日本一なんじゃないかしらね…」

「そう…なんですか…、大変ですね…」

詩乃は和人の味覚に改めて呆れつつも、この温かい食事風景に酔いしれていた。

彼女もワケあつて、自分の家族と食事を長いことしていなかったからだ…。

木綿季が退院後、数年ぶりに味わった家族の温かさを感じるかのよう、詩乃もこの温かさを肌で感じ取っていた。

「でも…温かい…」

詩乃が見せた笑顔を見て、他の面子も釣られるように笑顔を見せた。

「詩乃ちゃんさえ良ければ、いつでも遊びにきていいからね？ またこうやって…一緒にお食事しましょう」

翠が詩乃に提案を出した。

恐らく翠も悟っていたのだろう、詩乃も母親の温もりを忘れかけていることに。

「え…でも…」迷惑じゃ…」

「ううん、そんなことないわ。連絡してくれば、詩乃ちゃんならいつでも歓迎するわ」

翠は母親らしい優しい柔らかな笑顔で詩乃を見つめた。

詩乃はその笑顔に引き寄せられるかのように、その誘いを快く受けた。

「えと…、それじゃあお言葉に…甘えちゃいます…」

そのことに喜んだのは何より木綿季であった。

今後もたまにはあるが、詩乃が遊びに来てくれる。勉強を教えてもらって一緒にいる時間も増える。

木綿季にとってはもう一人お姉ちゃんが出来たような感覚を覚え、大変に嬉しそうであった。

「やったーっ！ これでいつでもシノンと一緒にだー！」

「こら木綿季、あんまりはしゃぐとこぼすぞっ」

「へーきだもん、ボクを子供扱いしないでよねっ」

「…そんなにはしゃぐ16歳もなかないぞ…」

「何か言った？」

「いえいえ！ 何も！」

夫婦漫才を端から見ている詩乃もやれやれといった表情をしていた。夫婦漫才を端から見ている詩乃もやれやれといった表情をしていた。

最初の緊張感はどこかへと消えていて、詩乃も自然と鍋をつついていた。

私が母さんの優しさを忘れてからどれぐらい経っただろう…。

今まで誰の力も借りずに生きてきたけど…、こういうのも…悪くないかな…。

あの日の事件から…かなりの年数が経ったけど…、未だにあの時の恐ろしさを忘れたことなどない。

でも…何でなんだろうな…今は…少しも怖くない。

いや違う…、怖くないことはないけど…立ち向かって行ける気がする…。

何の根拠もないけど…、今なら…アレと向き合えることが出来るかもしれない…。

「シノン…大丈夫!？」

「え…?」

詩乃の目には大粒の涙が流れていた。無意識のうちに涙が滴り落ちていた。

本人も何故泣いているのかわからなかった、この涙の原因は何？
一体何なの？

詩乃は必死に自分の頬を伝う涙を拭っていた。

「だ…大丈夫…」

「シノン…」

木綿季はかつての自分に詩乃の姿を重ねていた。

そうか…多分シノンもボクと同じで、お母さんの温かさを…忘れていたんだね…と。

そう感じてしまった木綿季はいてもたってもいられなくなり、シノンの手を優しく握った。

「えっ…木綿季…?」

「シノン…、ボクは…ボクたちは…シノンの味方だからね…?」

木綿季は力強いまなざしで詩乃を見つめた。

周りのみんなもその意見に賛同するかのように真剣な表情で、尚且つ温かい笑顔で詩乃を見ていた。

「あ…その…うん…。えと…ありがと…」

「えへへ♪」

詩乃のありがとうという言葉に木綿季は笑顔という返事を返した。桐ヶ谷家の温かさが、血と鉄で冷え切つて凍つてしまった詩乃の心を、じわりじわりと温かく溶かしていった。

その心が暖かくなっていく感覚を詩乃は感じ取っていた。

「あの…和人のお母さん…、これから…ちよくちよく遊びにこさせていただきます…」

詩乃は礼儀正しく碧に対して深々と頭を下げた。そんな詩乃を翠は笑顔で返事を返す。

「翠でいいわよ…詩乃ちゃん。いつでも遊びに来てね？」

「はい…！ 翠さん…！」

それから五人は楽しく談笑しながらキムチ鍋をつついた。

余った汁でご飯と卵を鍋に入れておじやを作ると、それも仲良く美味しくいただいて晚餐はお開きとなった。

それから程なくして、晩御飯をいただいてお終いというわけにいかない詩乃は、洗い物を自分から進んでやりに行った。木綿季と詩乃が洗い物をしに台所へ、和人と直葉はそれぞれ自室に、翠は寝室に書類の整理をしに歩を進めていった。

しゃかしゃかガチャガチャという、スポンジで食器を洗う音と、食器同士がぶつかる音、そして蛇口から流れ出る水音がダイニングとキッチンに響いていた。洗い物独特の生活感ただよう心地よい雑音

だった。

「木綿季…あの…、ありがとね…」

「ふえ？ 何が？」

詩乃の突如とした感謝の言葉に木綿季がキョトンとした顔を浮かべた。

洗い物は詩乃がスポンジで食器を洗い、洗い終わった食器の泡を、木綿季が水で流して横の食器入れに置いていく流れで進んでいた。

「えつと…上手く言えないんだけど…、何だか…今日一日だけで…私の心が救われたような気がするの…」

「え…？」

「…あの…あのね…木綿季…」

洗い物の手を止めて、突如詩乃は改まったように体の向きと視線を木綿季に向ける。

木綿季は詩乃が何か重要なことを言おうとしているということを知って、同じタイミングで手の動作を止めた。

「私ね…人を殺したことがあるの…」

その一言を聞いた瞬間、木綿季は固まってしまった。

しかし詩乃がSAOサバイバーだということを思い出すと、VRM
MOの世界でプレイヤーキルをしてしまったのだなと思った。

「えっと…それは…SAOでプレイヤーをキルしたって…ことなのか
な…」

木綿季の返しに、詩乃は首を横に振った。

確かにSAOでプレイヤーアバターのHPがゼロになると、ナーヴ
ギアから発せられる高出力マイクロウェーブが脳を焼き切って、現実
世界のプレイヤー本体を死に至らしめる仕組みとなっていた。

それはモンスターからやられるだけではなく、プレイヤー同士のP
Kでも同様に適用されるものであった。

即ちPKやPVPでプレイヤーを倒してHPがゼロになっても、現
実の世界でプレイヤー本人が死んでしまうのだ。

木綿季はそれだと思ったのだ。しかし詩乃は首を横に振って否定
した。

その意味することはつまり…。

「SAOの話じゃないの…、私は…現実の世界で…人を…直接…殺し
たの…」

「…え…」

木綿季は凍り付いていた。

夕方の詩乃の様子のおかしさから過去に闇を抱えていることは察

していたが、その事実は木綿季の想像を大きく超えているものだった。シノン：朝田詩乃は：過去に現実で人を殺めたことがあったのだ…。

「多分…木綿季は知らないと思うのだけれど。7年前…私が11歳の時…ある事件があったの…」

「事件…？」

「うん…、私ね…もっと幼い頃にね…父さんが交通事故で他界してしまったの。その影響で母さんの精神が逆行してしまって…、それから私は母さんを守らなければって思いながら毎日を過ごしていたの…」

「……………うん…」

木綿季は静かに詩乃の話聞いていた。

スポンジが握られた詩乃の手には水と泡がついており、木綿季の手は洗い流した水の影響で少しふやけてしまっていた。この時期の水の冷たさも相まって二人の手が少しだけ震えていた。

「そんな毎日を過ごしていたある日…、立ち寄った郵便局に…中年男性ぐらいの強盗が現れたの。強盗は受付にいた母さんを撥ねのけて、持っていたカバンから拳銃を取り出して金を要求していたの。その後…局員の人撃たれて…」

「……………」

「興奮しすぎて危険な状態になった強盗は、その拳銃を今度は母さんに向けた。母さんの命が危ない、母さんは私が守る、それしか頭になかった私は…無謀にも強盗に立ち向かったの」

「え……」

「私は……強盗の手に噛みついた。母さんを守るために必死だった。でも大人の男の人に力でかなうはずもなく……私は壁に叩きつけられたの。でもその拍子に……奴の手から拳銃が落ちたの。それを私はすぐに拾って……銃口を奴に向けた」

「……………まさか……シノン……」

「……………私は……母さんを守る……ことしか考えてなかった。目の前のこの男がどうなるかなんて考えなかった。母さんの命を守るために私は……銃を取り返そうと押し倒してきたヤツの……胸を撃った」

「……………」

「胸を打たれたヤツは……大きく後ろにのけぞった。でもヤツは立ち上がって抵抗をしようとした。私はまた引き金を引いた。弾丸はやつの右肩を貫いた。もうお終いかなと思っただけ……まだヤツは立ち上がろうとしてきたの」

「……シノ……ン……」

「もう立ち上がってこないで……私……三度……引き金を引いた。三発目の弾丸は……奴の眉間を貫いていた。強盗は今度こそ……絶命した」

詩乃の手は震えていた。洗い物の水の冷たさではなく、自分の壮絶な過去の出来事を思い出したことによって震えていた。

「私……その時全て終わったと思ったの。よかった……母さんを守れた。」

母さん…見ててくれた？ そう思っただけで母さんの方に視線を寄せただけど…、母さんは…この世の物とは思えないような恐ろしいものを見たような目で…私を見ていたの…」

詩乃の体は震えており、自分で自分の体を抱くようにして震えていた。

「私もふと…自分の体を見てみたら…、奴の血しぶきが体中に飛び散って真っ赤になっていたの。私が撃ち込んだ三つの弾痕からも血が溢れ出ていて…郵便局の床を真っ赤に染めていた…」

詩乃は体を震わせたまま台所にしゃがみこんでしまった。

「…それから私は…銃…、ミリタリーの類のものを見たり触ったりすると…PTSDの症状が出るようになってしまったの。ヤツの恨みがこもったような…絶命する直前のあの悪魔のような顔が…頭に焼き付いて離れないの…」

「シノン…」

「私は…そのPTSDを克服するためにいろんな努力をしたの。モデルガンを購入したり友達に頼んで知識を教えてもらったり…、でも…頭では理解出来ても…そのカタチを感じると…どうしても駄目なの…」

詩乃の様子が変わっていた。呼吸が荒くなり、汗も異常にかき始めていた。

心臓の鼓動も早くなり、瞳から光がなくなつて、顔色も真っ青になつていた。

「はあ…はあ…、誰か…助けて…私を…助けて…誰か…っ」

「シノン！ しっかりして!!」

しゃがんだ状態から床に倒れそうになった詩乃を木綿季は抱き留めた。

今支えてあげないと詩乃は小さくなって消えてしまう。そう感じてしまっていた。

「誰か…助けて…たす…け…て…」

「シノン！ ボクが…ボクが傍にいるよ!!」

木綿季は詩乃の目を覚まさせるべく、力強く声を発して詩乃をこちら側に抱き寄せた。

「…ゆ…う…き…う…」

木綿季に抱かれている状態に気付いた詩乃は、木綿季から伝わってくる温もりを感じていた。

この温かさは…優しく包んでくれるものは何だろう…、よくわからないけど…ちよつとだけほつとするような…。

「シノンは…ボクにたくさん勇気をくれた…、だから…今度はボクの番！」

木綿季は詩乃の肩を支えながらゆっくりと立ち上がり、リビングのソファへと詩乃を誘導した。

ソファまでたどり着くと、詩乃を優しくソファへと座らせた。

「木綿季…ごめんなさい…」

「何言ってるの…当たり前だよ…」

「木綿季は…怖くないの…？」

「え…何が？」

ソファに体重を預けながら詩乃は体を震わせて木綿季に問い始めた。

「私…人を殺したんだよ…、大事な人を守るためとはいえ…人を…殺したんだよ…？」

「…うん。でも…シノンにはシノンだよ？」

「え…」

木綿季はそう言いながら、詩乃の胸に自分の顔を寄せた。

「シノン…辛かったんだよね…、背負うには重すぎるものを…その体に背負って今まで生きてきたんだよね。ボクは病気で苦しんで生きてきたけど…、シノンも…いっぱい苦しんで生きてきたんだ」

「ゆ…うき…」

「でも…もう苦しむ必要はないと思うよ…。多分…シノンの気持ちを全部理解出来るとは言えないけど…、ボクにだってシノンを支えてあげることは出来る…」

木綿季は詩乃の背中に手を回して、小さい体で優しく詩乃を抱き締

めた。

「だからもう…思いつめないで？ 自分の中だけで背負わないで…。ボクも…ボクたちも、シノンの悲しみを背負っていくから…。もつと頼ってほしいな…ボクたちを…」

木綿季の温かい励ましの言葉を聞いた詩乃は、その優しさに耐えることが出来ず、感情を爆発させ大粒の涙を流していた。

「う…あ…わた…わた…し…あ…」

「うん…泣いていいと思うよ…。悲しいときや苦しい時ぐらい…、素直に泣いていいと思うよ…？」

詩乃は木綿季の胸を借りながらひたすら泣いた。

自分は正しいことをしたはずだ、でも世間の目は自分に冷たく当たった。

何で？ 私は母さんを守るためにやったのに、何で周りの人達は私を責め立ててるの？

そうしてひっそりを生きてきた詩乃であったが、桐ヶ谷家と…木綿季と触れ合うことで、再び過去と見つめあうことが、少しだけ出来ていた。

もしも…もしも7年前のあの時、詩乃の母親が冷やかな目で詩乃を見ていなければ、郵便局員が犯人を取り押さえられていれば、世間の目が詩乃に冷たく当たらなければ、詩乃の運命はきつとまた違う展開を迎えていたことだろう。

しかし詩乃は今のこの状況に感謝の気持ちも抱いていた。

明日奈や和人等、自分に優しく接してくれる友達はたくさん出来た。

だが、木綿季のように自分の心の中まで歩み寄ってくれた人は中々いなかった。

詩乃は…本当の意味の「友達」を手に入れたのだった。掛け替えのない…心の友を…。

程なくしてほとぼりが冷めた詩乃は普段見せている冷静さを取り戻していた。

目と顔は真っ赤になってしまっているが、表情は明るかった。

「ごめんね…ありがと…、木綿季…」

「ううん…大丈夫だよ。…元気でた？」

「うん…お陰様で…少し…」

詩乃の顔には笑顔が零れていた。木綿季のお陰で心の底から笑顔を…7年ぶりに表に出せていた。

「良かった！ シノンの笑顔…本当に可愛いね！」

「え…あ…」

唐突に可愛いと言われた詩乃は今度は別の意味で顔を真っ赤にしていた。

木綿季が同じ女の子とはいえ、可愛いなどと言われるとこっぴड़ाかしいものがある。

言われて悪い気分などするはずがない、女の子にとって可愛いは最高の誉め言葉だ。

「あ……りが……と……」

「えへへー♪」

詩乃の笑顔を見れた木綿季はご機嫌になっていた。

詩乃も立ち上がれるぐらいにまで回復しており、洗い物を再開しようとしたが、木綿季が制止させた。

「ねねねシノン、お風呂入ろうよ！」

「え……ええっ!？」

「下着やパジャマはボクのを使えばいいよ！　ボク……シノンとお風呂……入りたいなあ……」

木綿季はお決まりの十八番、潤目十上目遣いのコンボで詩乃を墮とそうとした。

こうなったら最後、この状態の木綿季に勝てるはずもなかった。

「う……しようがないわね……」

「わーいやったー！　シノンとおっふるっ♪」

「でも洗い物はどうするのよ…」

「和人にやらせればいいよ!」

木綿季は舞い上がっていた。心からの友達と初めてのお風呂。

ALOでアスナとお風呂に入ったことはあるがそれとは全く違うのだろう。

詩乃の心からの笑顔が見れたことも相まって詩乃とのお風呂に胸を高鳴らせていた。

そして、木綿季は風呂場で詩乃に自分の過去も明かした。

一緒に風呂に入るといふ時点で、詩乃に対して背中の忌々しい傷跡を晒すことになるので、避けられない事態だったが。

不思議と木綿季は詩乃になら知られてもいい、むしろ自分の過去も知ってほしいといった感情を持ち合わせていた。詩乃が自分に対して過去を打ち明けてくれたことに応えるかのように、木綿季も躊躇なく詩乃に過去を打ち明けられたのだ。

詩乃も木綿季の凄惨な過去に眉をひそめたが、和人のお陰で向き合えたことを知るとほっと胸を撫でおろして、親友の今の幸せに安堵していた。

その後は和人の部屋を乗っ取って二人仲良くベッドで話し合い、ひとしきり話すことがなくなると瞼を閉じて深い眠りについた。

詩乃にとっては7年ぶりに安心して熟睡できる晩となった。

一方の和人は独り寂しく、リビングのソファで身を潜めていた。

「……不幸だ…」

第46話く落ち葉の季節く

詩乃が木綿季に過去の秘密を明かしてから一夜が経った。

それは幼少期に人を殺してしまったという壮絶な過去であった。

母親を守るためとはいえ人を一人殺めたという事実は、当時小学生だった詩乃にとって、心に大きな傷を負う出来事となった。

詩乃はどうして木綿季にこのことを打ち明けてしまったのか、未だにわからなかった。

木綿季ならどんな自分でも受け入れてくれると、心のどこかで無意識に思っていたからなのか？

何故だかわからないが詩乃は打ち明けずにはいられなかった。

打ち明けたことで、今までの関係が変わってしまいかもしれない。

しかし木綿季は詩乃を軽蔑するどころか温かく受け入れた。

過去にどんなことがあってもシノンにはシノン。そう声を掛けてくれた。

母親の温もりを忘れていた詩乃にとって、木綿季からの言葉は何よりも温かかった。

自分より年下の女の子の胸を借りて、詩乃は7年分の涙を流した。

木綿季は詩乃にとって数少ない心から信頼できる親友の関係になったのだ。

壮絶な過去を持つ詩乃を理解できる、数少ない親友と…。

西暦2026年10月31日土曜日 午前8:30 桐ヶ谷邸

そんな詩乃だったが昨日は桐ヶ谷家に一晩お世話になり、今朝は和人や木綿季たちと一緒に朝食をとっていた。

「あの…すみません朝食までいただいてしまつて…」

詩乃は桐ヶ谷家の食卓につきながら、申し訳なさそうな顔を浮かべていた。

今朝方の桐ヶ谷家の献立はパン食だ。今回の付け合わせはバター、イチゴジャム、シナモンシュガーにサラダといった内容だった。

「何言ってるのよ、気にすることないわ。たくさん食べてね、まだいっぱいあるから」

翠は遠慮しがちな詩乃に対して優しい表情をしながら言葉を掛けた。

詩乃はその言葉を聞いて笑顔が戻り、感謝の気持ちを胸に抱きながらトーストに手を付けていた。

詩乃の向かいに座っている木綿季は大きな口を開け、一口でイチゴジャムトーストの半分を頬張っていた。

この細身の体で大変に食欲旺盛だというのだから驚きだ。

一体この体のどこにそんな大量の食べ物収まるというのだろうか？

「んー！ 美味しいー！」

目玉焼きやスクランブルエッグ、ベーコンが乗ったトーストも悪くないが。

今回のような甘いトーストも木綿季にとっては大変に好物であった。というよりも木綿季に好き嫌いなどあるのかどうか？ それを感じさせないほど、木綿季は今まで出された食事全てに大満足していた。

「木綿季、頬つぺたにジャムがついてるぞ」

「ふえ？」

和人はそう言いながらテーブルに置いてある使い捨てナプキンで、木綿季の頬についてるジャムを拭きとってあげた。ふき取られている木綿季は実に幸せそうな表情を浮かべていた。

「えへへ、和人ありがとー！」

仲睦まじい二人のやり取りを見ながら詩乃は苦笑いを浮かべていた。

「…いつもこんな感じなの…？」

「えっと…毎回というわけじゃあないですけど…大概こうです…」

詩乃が直葉に質問を投げ掛けると、直葉は目を細めながら答えを返した。

その様子を微笑ましく見守っていた翠が食卓についた。

「仲がいいことは素晴らしいことよ？ 私も孫の顔が早く見れそうで安心だわ」

翠が期待の想いを膨らませながら椅子に座ると、和人と木綿季は満更でもないような表情を浮かべながら顔を真っ赤に染めていた。

「否定しないのね…アンタたち…」

「あの…その…えへへ…」

木綿季は「参ったなあ」という顔をしながら頭をポリポリかいていた。

和人は和人でコーヒーを飲みながら視線を逸らし、照れくささを誤魔化していた。

直葉と詩乃はその様子を見て大きなため息を吐いていた。

木綿季が退院し、桐ヶ谷家で暮らすようになってから早くも一週間が経とうとしている。

始めは少しだけ遠慮しがちな木綿季であったが、持ち前の明るさと活発さですぐに桐ヶ谷家に馴染んでいった。

退院する前から直葉や翠と仲良くなっていたのもあり、今ではすっかり桐ヶ谷家の一員だ。

五人はそれから仲良く談笑しながら朝食を済まし、翠は寝室でスケジュール張を開いて予定の確認。

直葉は剣道部の部活の準備。和人と木綿季と詩乃は朝食の後片付けをしていた。

「なあシノン、今日はもう帰るのか？」

食器をスポンジで洗いながら和人が詩乃に今日の予定を尋ねる。

「そうね…、今日…お昼頃に友達がこっちまで迎えに来てくれることになってるの、だからそれまでには帰らないと」

詩乃が帰ってしまうというを知ると木綿季が寂しそうな表情を浮かべていた。

昨日一晩だけということであったが、やっぱり帰ると聞かされると寂しい気持ちになる。

木綿季はテーブルを拭いていた手を止めると、小さいポリウムで詩乃に声を掛けた。

「シノン…帰っちゃうんだね…」

詩乃は寂しそうにしている木綿季の姿を見ると、洗い物の手を止め

て木綿季に歩み寄った。

木綿季の目の前まで来ると、頭の上にぽんと手を乗せ、優しく声を掛けた。

その姿はまるで、木綿季の本当のお姉さんのような雰囲気醸し出していた。

「木綿季…また遊びに来るから…ね？ ALOでもいつでも遊べるでしょ？」

「あ…うん…。絶対遊びに来てね…？ 絶対だよ？」

「ええ…、必ずまたお邪魔させていただくわね…」

「うん…！ ボク楽しみに待ってるね！」

木綿季に笑顔が戻った。

詩乃はその笑顔を見ると、自分に妹が出来たとしたらこんな感じなのだろうなと思っていた。

必ずまた遊びに来るという約束を取り付け、二人は再び食後の片付けへと戻っていった。

一通りの後片付けが終わると、三人はテーブルへとまた落ち着き、時間までどうしようかということ話を話し合っていた。

「シノンが友達と落ち合うのってお昼頃なんだろう？ それまでどうする？」

「あ…うん…どうしようかしら…、本当なら昨日帰ってたから何も考えてなかったわ…」

「それじゃそれじゃ！ 午前中はお出掛けしようよ！」

何をしようか悩んでいる詩乃と和人の間に、木綿季が口を割って入った。

目をキラキラとさせて、希望に満ち溢れた表情で二人を見つめていた。いつもの木綿季の常套手段だ。

「木綿季…、毎度毎度その顔を浮かべれば、望む通りになると思っているのか？」

「うん！ 和人なら聞いてくれるもん！」

「…はあ…仰る通りです…」

和人は諦めたような表情を浮かべつつも、やれやれといった様子で頭を抱えていた。

どうせ断つてもぶーたれて機嫌が悪くなるだけだ。

それに…二人きりではないかもしれないが、現実世界でお出掛けする約束もしてたこともあり、和人は承諾した。

「わーいやったー！」

木綿季は和人の許可を得ると両手を上げ、飛び跳ねて喜んだ。

詩乃はその様子を見ながら、こりやあ将来は尻に敷かれるなど確信していた。

「そういえば…二人はこの辺りのことよく知らないよな？ 折角だし俺が案内しようか？」

和人は、地元川越を二人に観光案内しようかと提案を投げかけた。

木綿季は元神奈川県横浜市在住、詩乃は東京都文京区在住なので、和人が住むここ埼玉県川越市のことについては何も知らなかった。そもそも埼玉県に観光出来るようなところなんてあるの？といった

認識だった。

「二人とも…、今埼玉に観る所なんてあるのか？って思っただろ…？」

和人が目を細めて木綿季と詩乃に疑いの視線を向けると、二人は首を横にふるふると勢いよく振り、否定の回答を返した。

「…ホントかよ…」

和人は若干疑いつつも、そそくさと外出の準備をした。

2階から1階の寝室にいる母、翠に出掛けることを伝え、ついでにほしいものはないかと聞いてみる。

「かあさーん！俺ちよつと木綿季とシノンと出掛けてくる！何か買ってきてほしいものあったら買ってくるけど、何がいいー？」

「そうねー！…そしたらお芋買ってきて頂戴ー！」

「あいよー了解ー！」

大声で会話を済ませると、和人と木綿季は出掛ける準備を、詩乃は帰る準備を進めていた。

詩乃は自分のつけていた下着と持ってきていた勉強道具を鞆に仕舞った。

Yシャツに母校のブレザー、更にその上にダツフルコートとマフラーを着込んで寒さ対策万全といった格好となっていた。どこからどうみても今時の女子高生だ。

木綿季は和人に買ってもらった少し厚めのジャケットに身を包み、頭にイヤーマフをつけていた。

ジャケットは木綿季のイメージジカラーにぴったりな紫色、イヤーマフは可愛らしいピンク色で、耳当ての部分はキュートなうさぎさんの

形をしていた。

一方和人は何着持つてるかわからない全身真っ黒の厚着で済ましていた。

本人曰くポケットの位置だとか使ってる生地が違うと言い張るのだが、当人以外から見てもわからないし、正直どうでもいいと思ったのか二人は冷めた反応を見せていた。

その反応を見て和人は二人から見えない角度で、少しだけ涙を流していじけていた。

「そうだ！ シノンの友達も誘ってみなよ！ 人数は多い方が楽しいよきつと！」

「ええ？…んゝまあ…こつちに来てくれることになってるから、多分大丈夫だと思うけど…」

詩乃はそう言うスマホを取り出して、友達だと思われるアドレスにメールを送信した。

返事は速攻で詩乃のアドレスへと返信され「すぐに行くよ！」とだけ書かれていた。

「…OKだって、今から来てくれるみたい」

「わーい！ 楽しみだなー！ どんな人なの？ シノンのお友達って」

「そうねえ…、将来はお医者さんを目指してるの。今も予備校とか通いながら猛勉強してるのよ」

「え…そんな人をほいほい遊びに呼び出して大丈夫なのか？」

「うーん…私も日頃から心配してるんだけど、本人が大丈夫って言うっ

てるんだから大丈夫なんじゃないかしら…?」

和人は苦笑いを浮かべていたが、友人の詩乃がああ言うんだから、多分大丈夫なんだろうと思つて納得していた。いや、大丈夫だということにしておいた。

「翠さん…お世話になりました」

一晩泊めてくれた桐ヶ谷家、そして出張で家を空けている峰嵩の代わりに留守を守っている翠に、詩乃は礼儀正しくペコリと頭を下げた。

「また…遊びに来てね。私も嬉しいし…、何より木綿季が喜ぶから…」

翠の言葉を聞いて詩乃は木綿季と視線を交わした。木綿季は満面の笑みで詩乃を見つめ返していた。

その笑顔をみた詩乃にも笑顔が零れる、絶対にまた遊びにこよう、そう心に誓いながら。

「はい…その時はまた…よろしくお願いします。今度は手土産でもお持ちします」

「あらあら…そんな気を使つてくれなくてもいいのよ…? でも…期待しちやおうかな?」

「他愛のない冗談を交わすと、詩乃は桐ヶ谷家を後にしようとした。

「それじゃあ…お邪魔しました。また遊びに来ます」

「元気でね？ 帰り道気を付けるのよ？」

詩乃は「ハイ」とだけ答えて笑顔を絶やさず玄関の扉を開き、桐ヶ谷邸を出た。

和人と木綿季は「暗くなる前には帰るから」とだけ告げて、詩乃に続いた。

外はすっかり冷え切っており、秋というよりは冬の光景に近いものだった。

視界に入る木々のほとんどは葉っぱが茶色に染まっているか、既に枝から落ちてしまっているものばかり目立っていた。

三人は詩乃の友人と落ち合う予定の川越駅へと進んでいった。

「もう…冬になろうとしてるんだねえ…」

木綿季が感慨深そうにこの風景を視界に映していた。

「そうだな…寒くなるけど…、温かい料理が美味くなる季節だ」

「もう…和人つてば食べ物の話ばかり…」

「ホント、ALOでも戦いか食べ物の話題ばかりだもの。よく飽きないわよね」

「む…いいだろ別に…。腹が減ってはなんとやらつてやつだよ」

説明になつてない説明をしながら、和人は地元が一番近い川越駅方面を目指して歩を進めていった。

道を歩いていると余計に視界に移る木々が、冬の到来を知らせているような景色を描いていた。

「…ねえ和人…シノン…」

木綿季が歩きながら二人に声を掛けた。その様子は少しだけ考え事をしているようだった。

声を掛けられた和人と詩乃は、同じ速度で歩を進めながら木綿季の方へ首だけ向けていた。

「…なんだ？」

「…あのさ…。その…ありがとう…」

突然お礼を言われた二人は頭に？マークを浮かべていた。

何で木綿季は急にお礼を言ってきたんだろう？ お礼をしてもらうほどのことを何かしてあげただろうか？…と。

「えつと…どういたしましてなんだけど…俺たち…何かやったっけ…？」

「うん…。勿論和人とシノンだけじゃないけど…ボク、こうして生きていられることが…嬉しくて…」

「…木綿季…？」

「えとね…昨日…、シノンが泊まってくれてさ…、ボクすつごく楽し

かったんだ。病院暮らししてる間は…ALOでみんなと遊んでたけど…、昨日みたいなやり取りはなかったし…」

感慨深そうに話を続ける木綿季を、二人は心配そうな顔を浮かべながら見つめていた。

急にこんなことを話し出してどうしたんだろう…と思いながら。

「えっと、和人には前話したと思うんだけど。ボク、骨髄が見つからなかったら…今年いっぱい生きられないって言ったこと…覚えてないかな…」

和人は神妙な顔をしながら思い出していた。

半年ほど前メデイキュボイドの仮想空間で一緒に過ごしていた時に話した内容の事だった。

「覚えているよ…、あの時も木綿季が急にあんなこと言うもんだからびっくりしたよ…」

「うん…ごめんね、突然変なこと言っちゃって」

和人は木綿季に歩み寄り、右手を木綿季の頭にポンと乗せて撫で始めた。

「和人が…皆が助けしてくれなかったら…ボク今頃は死んじやって、この世にいなかったのかもしれない。そう思ったら…色々感じちゃうことがあって…」

詩乃も木綿季に歩み寄り、小さくなって消えてしまいそうな木綿季の手をぎゅっと握った。

「今…こうしてボクが生きていられるのは、皆のお陰なんだなって実

感が湧いてきたんだ…。楽しく毎日を過ごしていくうちに…。これが今のボクの日常なんだって…」

「木綿季…」

「そう思ったら…。なんか…。嬉しくなっちゃって…」

和人は木綿季を抱き締めた。今でこそ木綿季は健康な体を取り戻し、ごく普通の毎日を過ごしている。

しかし…。半年ほど前まではHIVで死の境目を彷徨っていたのだ。そのことを考えると…。こうして普通にしていることが奇跡と言えるだろう。

同年代の子が当たり前にしていたことを、木綿季は何年も出来ていなかった。

しかし病気が治り、退院して、現実世界の日常を過ごしていくうちに、本当に自分は今「生きているんだな」と感じられるようになった。本当ならとつくに死んでいたかもしれない、そう思うと尚更だった。

「何だろね…。外の風景が寂しくなっていたからかな…。ボク…。ちよつと変だ…」

木綿季は泣き出してしまった。

和人は木綿季の流している涙の理由を何となく理解はしていた。

感謝の気持ちや嬉しい気持ち、色々なものが混ざり合った涙なのだろうと。

程なくして泣き止んだ木綿季は、目ゴシゴシと擦りながら冷静さを取り戻していた。

「…ごめんね突然こんな…。困らせちゃったよね…」

「そんなことない、泣きたいときは泣けばいいんだよ」

「そうよ木綿季…貴女が私に言ってくれたように…、泣きたいときは泣いていいのよ…」

「うん…うん…、ありがとう…和人…シノン…」

和人と詩乃は視線を合わせてニツコリと笑った。

共に木綿季を大切に想ってる身として、木綿季が安心して過ごせる日常があることに嬉しさを感じていた。

「そういえば…シノンの友達ってのは…いつ頃こつちに来るんだ？」

話題を切り替えるべく、和人が詩乃の友人の話へと路線を変えた。

「ああ…そうね…、私の住んでる所とそんなに離れてないから、電車で1時間ぐらいじゃないかしら？」

「そうか…んじやあ先に買い物済ましちまうか。その後でそのシノンの友達と落ち合おうぜ」

「そうね…、そうしましょうか」

三人は再び、川越駅がある方へと歩を進めていった。

「そいや和人、川越を観光って言っても…どこいくの？」

「そうだな、ここいらで観光出来る所っていったら一カ所しかないんだけど、きつと楽しいと思うぞ」

「へえー！ そうなんだ！ どんな所なんだろー！」

木綿季は楽しそうに笑顔を振りまきながら両手を前後にまっすぐ伸ばしながら歩いていった。

「でもその前に、木綿季のアミューズファイアを買っておこうぜ。俺の行きつけのゲームショップがあるから、まずそこに行こう」

「へえ…今時ゲームショップなんて珍しいじゃない…、みんな総合家電量販店とかに、お客を奪われてるってのに…」

「昔は全国的にあっただけどな、今じゃ関東近辺にちらほらあるだけになっちまったんだよ。店長がゲームに関して妥協しない姿勢を保持してるから、今でも強く地元のゲーム好きの子供や大人たちに支えられてるんだと」

「ほえく…、いい店長さんなんだね！」

「ああ…俺も昔から結構お世話になってさ、まあ顔なじみってやつだ」

和人達三人は、ゲームの話題で盛り上がりながら、和人行きつけのゲームショップへと足を運んで行った。

和人がまだVRの虜になる前から通っていたゲームショップへと。

「あれ…おかしいな…10時の開店までまだ30分ほどあるのに…もう開いてるぞ?」

「ほんとだ…ねえ和人、なんかお店のドアの脇にワゴンみたいなのがたくさん並んでるよ?」

木綿季の言われるがままの方向を見ると、確かにワゴンがたくさん並んでいた。

そしてそのワゴンに貼られているPOPには、和人の認めたくない文字が書かれていた。

「え…嘘…だろ…」

和人の向けた視線の先には「閉店セール」と書かれたPOPが物寂しそうに風に揺られていた。

そのPOPが貼られているワゴンには昔懐かしのレトロゲームから、最近出たばかりであろうVRMMOのソフト、テレビに映し出すタイプのコンシューマーゲームまでそろっていた。どれもこれも半額以下の値段で投げ売りされていた。

「え…和人…、こ…こ…閉まっちゃうの…?」

目の前の現実が信じられない和人に、木綿季が心配そうに声を掛ける。

そう…、和人が昔から足を運び続けていたゲームソフト専門店「トップキッズ鶴ヶ島店」は随分と前から閉店の危機を迎えていた。

時代の進歩に従って、ゲームショップ以外でも普通にゲームソフト

を扱うようになり、品揃えもより豊富なこともあって、総合家電量販店に客を奪われている店舗は全国に数多く存在していた。

このトップキッズも歴史の深いゲームショップであったが、その煽りを受けていた。

しかし会社全体で幅広いジャンル、レトロゲームや最新ゲームまでカバーしている姿勢が、多くの人の根強い人気を得ていたのだが、それももう限界に来ていたのだ…。

和人達が訪れたこの鶴ヶ島店も、この週末で閉店を迎えるとのことであった。

その事実が信じられず、和人は絶句していた。いくら時代の波がこようとも、この店だけは未来永劫ずっと存在し続けると信じて疑わなかったからだ。

そうして突きつけられた悲しい現実には、和人はショックを隠せないでいた。

「……和人……大丈夫……？」

木綿季に手を握られて、和人はハッと我に返った。うつすらと瞳に涙を浮かべながら…。

「あ……ああ……大丈夫だ。ただちよつと……ここが閉店するのが信じられなくて……」

トップキッズの外観は白を基調としており、ところどころ何回もペンキを塗り替えたであろう形跡が見受けられた。壁が劣化している部分も見られたが、逆にそれが今までここで足を張り続けていたという事実を物語っていた。

のぼり旗も太陽光で変色してしまっており、自動ドアの真上にある横長ポスターもところどころ破けて色あせており、長い歴史を感じさせていた。

「だから…通常の開店時間より早く開いてたのね…」

詩乃は煮え切らない表情を浮かべつつも納得していた。

和人の紹介のゲームショップということもあって、地元の子供たちが開店を待ちわびている光景などを想像していたのだ。

しかし現実とは違った。

今の時代、こうして閉店を迎えるゲームショップが全国各地で頻発している。

お客を取られているのもそうであったが、メーカーからの無理な発注を強いられたり、採算が取れない売り上げをなんとか創意工夫して利益を出し、店を存続させていたのだったが、ほぼ個人経営に近い体制ではどうしようもない段階まで来ていた。

「和人…入る…?…」

「…ああ…入ろう…、店長の顔も見ておきたい」

和人はそう言うと、ゆっくりとした足取りで開けっぱなしの自動ドアをくぐっていった。

木綿季と詩乃もその後続くようにトップキッズのドアをくぐった。

「…嘘だろ…」

和人は入店するなり、再び目を丸くしてショックを受けていた。

店内の棚はほとんど空っぽになっており、僅かな商品がカウンター周りのワゴンに陳列されているだけであった。

かつては1980年代から活躍していたレトロカセットゲーム機や初の光DISCを採用したゲーム機。

メジャーどころやマイナーどころまで、幅広い品ぞろえを誇っていたこの自慢の店の棚が、蛻の殻となっていた。

「……本当に閉まつちやうんだね……」

木綿季が悲しそうな表情を浮かべると、店の奥から店長と思われる老人が姿を現した。

「いらっしやい……もう残ってる商品は少ないが……良ければ見てっておくれ……」

「じつちゃん……俺だよ……和人だよ……、わかるか……?」

和人が店長に歩み寄って声を掛ける。店長は最初は和人のことがわからなかったが、昔見た面影があることに気付き、目の前の少年が幼い頃から通ってくれた和人だということを感じ出した。

「もしやお前さん……カズ坊か……?」

「ああ……俺だよ……。なあじつちゃん……本当に……閉めちゃうのか……?」

和人からの問いに、店長は寂しそうな顔を浮かべながら胸ポケットから煙草を取り出し、ライターで火をつけて吸い始めた。

「ふう……、まあな……。昔からいろいろやりくりしてきたけどよ……、もう限界だ……」

「何でだよ……じつちゃんのゲームに対する愛情は半端じゃなかった! それなのに何で!」

「……そうだな……俺も年を取って、体が昔のように動かなくなっちゃまってよ。まあそれだけなら気力でなんとかしていくだけの自信はある

「ただけだな…」

「…じゃあ…なんで…」

和人が一歩踏み込み、店長に質問を投げる。

店長は一瞬和人の表情を見ると視線を下に落とし、煙草の煙を吐きながら語り始めた。

「…ただのゲーム屋じゃ…もうやってけねえんだ…。赤字を抑えるのがやっとだ。あらゆる面で工夫を重ねたけど…もう限界なんだ…」

「そんな…」

店長が一本目の煙草を思いっきり吸い込んだ。

煙草は酸素をどんどん吸引していき、火が一気に燃え渡っていった。

吸い込んだ煙を一気に吐き出すと、傍らに置いている灰皿に押し付けて煙草を消した。

「悪いな…、ここはお前さんの大事な遊び場でもあったのにな…。本当にすまん…」

店長はそう言うと、深々と和人に向かって頭を下げた。

「そんな…やめてくれよじっちゃん…、まだやれるさ…今やゲーム界隈はVRで大きく盛り上がっている！ ラインナップを揃えればきつと…！」

店長に諦めるなど歩み寄る和人の左肩を、詩乃が右手で掴み制止させた。

掴まれた和人は振り返るが、詩乃が静かに首を横に振った。店長が

店を閉めた後、経営のことを気にすることなくゆつくりと過ごさせてあげようと、詩乃の瞳がそう訴えていた。

「シノン…」

「キリト…店長の気持ちを汲んであげなさい…」

「……………」

和人はまだ納得のいつていない顔をしていた。

閉める理由も、閉めなければいけない現実が迫っていることも理解していた。

しかし、それだけ突きつけられて納得がいくわけがない。だが現実
は現実だ…、悲しくとも受け入れなければならない…。

「ねえおじいちゃん、ここのお店のおススメって…何かな？」

木綿季が両手を後ろで組ませながら和人より一歩前に出て、店長におススメを尋ねていた。

もうほとんど目ぼしいものは閉店セールで持っていていかれてしまっていて、売れ残りばかりが目立っていたが。

それでも木綿季は何か買おうと店長におススメを聞いていた。

「お嬢ちゃん…カズ坊の彼女かい？」

いきなり聞かれるとは思わなかった木綿季は顔を赤くして、恥ずかしそうにしながら返事を返した。

「あ…えと…はい…」

「がっはっは！ あのゲームにしか興味がないカズ坊に、こんな可愛

い彼女が出来たつてのか！ こいつは傑作だぜ！ わっはっはっはっ！」

店長は木綿季からの返答を聞くと、腹の底から笑い声を狭い店内に響かせていた。

声はガラガラで聞いてて少しだけ痛々しかったが、それと同時に周囲を安心させるような温かみのある声をしていた。

「じっちゃん…からかうなよ…」

「がははは…ああ…すまん。…大事にしろよ？ カズ坊…」

「言われなくてもわかってるさ」

和人は木綿季の手をぎゅっと握りしめた。その様子を後ろから見ていた詩乃がわざとらしく大きい咳ばらいをしていた。

「オッホンッ！」

その咳ばらいを聞いた和人は本来の目的を思い出した。いつまでも感傷に浸っている場合ではない。

非常に名残惜しいが要件を済ませなくては。といってもこここの今の品揃えじゃとてもアミュスファイアがあるとは思えなかった。

「なあじっちゃん…、アミュスファイア…置いてないか？」

「ああ…？ アミュスファイアだあ？ それならお前さんならもう持つとるだろうに」

「いや…俺のじゃない…木綿季の…彼女のを探してるんだ」

店長は和人の目的を聞くと、視線を木綿季へと移した。
この子がゲームをやるようには見えない…といった視線で木綿季を見つめていた。

「お嬢ちゃん…ゲームやるのかい？」

「あ…はい…。和人と同じゲームをやってたんですけど…ハードを手放してしまったので…」

木綿季の言うハードの事とは言わずもがなメデイキュボイドのことである。

木綿季の個人的に保存していたローカルデータは、外部ストレージに保存して持ち帰っていたのだが、流石にあの巨大なメデイキュボイドを持ち出すわけにもいかなかった。

「…すまんなお嬢ちゃん…、生憎目ぼしい品物は…もう買われちゃってな…、VR関連のものもほとんど売り切れちゃってんだ」

「あ…そう…なんですか…」

店長が申し訳なさそうに答えると、木綿季は肩を落として落ち込んでいた。

別にここじゃなくてもアミューズファイアは買えるのだが、和人が紹介してくれたお店だ。折角なのでここで買ったかったところだったのだが…生憎売り切れてしまったという。

「まあ…そう肩を落としなさんな、ちよつとそこで待つとれ」

店長はそう言うとう重い腰を上げて、店の奥へと消えていった。3分ほど時間が経過すると、何やらミカン箱ぐらいの大きさの段ボール箱を抱えて店頭へと戻ってきた。

「ふい…、年を取るとこの程度の大きさでも…一苦労だ…」

カウンターの卓上にミカン箱を置くと、店長は今ので痛くしたのか腰を支えていた。

在庫一つ運ぶのにも一苦労している今の肉体を考えたら、やはり閉店して正解だったのかもしれない。

「じつちゃん…何だこれ？」

「…まあ…開けてみな…」

和人と木綿季は頭に？マークを浮かべながら、店長が運んできた段ボールを開け始めた。

引っ張るだけできれいに切れるガムテープを剥がし、四方からたたまれている蓋を開けると、中には驚きのアイテムが入られていた。

「え…じつちゃん…これって…」

「すごい…こんなのあるんだ…」

木綿季が段ボールから取り出したのはアミユスファイアだった。

しかもただのアミユスファイアではない。メーカーが店舗贈呈用に限定生産したオリジナルカラーリングが施されたアミユスファイアであった。色は偶然か必然か、木綿季のイメージカラーの紫を基調としたカラーリングとなっていた。

「…それやるよ、お嬢ちゃん」

「え…でも…」

「いいから…やるって言ってるんだ…」

「いいのか…じつちゃん…」

「…もともと売りモンじゃねえからな、メーカーから贈呈されたもんだ。俺が持つてもしょうがないからな、お嬢ちゃんに使ってもらうことにするよ」

保存状態がよかったのか、店舗贈呈用のアミユスファイアは外箱すら全く劣化してない超美品の状態だった。

木綿季は嬉しい反面、ホントにもらっていいのだろうかという困惑の表情を浮かべていた。

「いいよじつちゃん…金払うよ、いくらだ？」

「うるせえ！ やるつつつてんだろが！ 黙って持っていけ！」

店長は声を荒げると、カウンターをバンと叩いた。

叩いた影響ですぐ横にあったレジと、それに貼られていたPOPが少しだけ揺れた。

「わ…わかったよ…、まったく…頑固なところは昔っから変わんねーんだから…」

「…何か言ったか？」

「何も言ってますせん！」

まるで木綿季と和人と似たやり取りを交わしていた。

そのやり取りを見た木綿季と詩乃はくすくすと笑みをこぼしていた。

「おじいちゃん…ありがとうございます…。これ…大切に使用してもらいます」

木綿季がアミユスファイアの入った外箱を胸で抱えながら礼儀正しく頭を下げると、店長の顔にも笑顔が零れていた。

「ああ…大事に使ってやってくれ…」

店長はそれだけ言うと、二本目の煙草に手を伸ばした。

「それじゃじっちゃん、俺たち…行くよ。この後約束してるから…」

「お…あ…ああ…、わかった。目ぼしい商品が残ってなくてすまなかつたな…」

「何言ってるんだよ…、俺…昔からここでたくさん楽しい思いをさせてもらったんだ。むしろ…何も買ってやれなくてごめんよ…」

「けっ、今更いい子ぶってんじゃねえぞ。しつこく値下げを迫ってきたヤツは何処のどいつだよまったく…」

「あはは…でも文句言いつつも…じっちゃんは負けてくれたじゃないか。子供の小遣いが少ないってことを知ってたから…融通利かせてくれたんだろ？」

木綿季と詩乃は、この店が長年愛されている理由がわかった。

妥協しない姿勢やゲームに対する愛情だけではない、何よりそれを支えてくれたゲーム好きのお客さんへの心遣いがあったからこそ、このお店が今まで続いていったんだなと理解した。

店長は和人からそのことを聞くと、しわくちやの顔に似合わないくらい照れくさい表情を浮かべていた。

「う…うるせえ！ このクソガキどもが！ 用が済んだならとつと消えやがれ！」

「わーっ！ 因業ジジイがお冠だ！ 木綿季！ シノン！ 逃げろー！」

店長が怒鳴ると和人は一目散に入口目指して駆け出していった。しかし、驚いたり怖がっている様子はなく、この状況を楽しんで駆け出していった。

木綿季と詩乃は店長の声に驚きつつも和人に置いていかれないように、和人の後を追っかけた。

そして走っていた和人は入口の地点に辿り着くと速度を落とし、やがて足を止めて再び店内へと体の向きを変えた。

「…………？」

「あの…じっちゃん…、今までありがとうな…。今度また遊びに来るから…それまで元気しててくれよ！」

木綿季も振り向いて、改めてアミユスフィアのお礼を店長に向けて贈った。

「おじいちゃん…、これ…本当にありがとうございました！ 絶対にまた遊びに来ます！」

木綿季はペコリと丁寧に頭を下げた。詩乃は軽く店長に向かって会釈をした。

その様子をカウンターから見ていた店長の目には、そのいかつい顔からは想像出来ない涙が浮かんでいた。

「…………おう…………ちこそ…今まで…ありがとな…、カズ坊…」

店長のその言葉を聞き届けると、和人たち店長に笑顔を見せた後再び店に背を向けて、川越駅へと歩を進めていった。

およそ30年以上続いたゲームショップ企業「トップキッズグループ」はここ川越市鶴ヶ島店を最後に、完全撤退した。

一つの長い歴史を持つ、多くの人に愛された場所が、一つ…失われた。

第47話 く木枯らしの吹く頃に

和人、木綿季、詩乃の三人は和人の思い出の場所でもある「トップキッズ川越鶴ヶ島店」を後にして川越駅方面へと足を運んでいた。

和人が幼少の頃から通い詰めていたこの思い出のお店が、明日の営業を最後に閉店を迎えることになった。

じつちゃんと呼び親しい仲間となっていた店主の年齢的にも肉体的にも、また経営状況的にも続けるのは困難となり、閉店せざるを得なくなってしまうていた。

和人一行は何か買うものはないかと探したものの、特に目ぼしいものはなく。

目的のアミユスフィアも売り切れていたため、名残惜しいが詩乃の友達との約束もあるため、諦めて店を出ようとした。

そこで店主は何を思ったのか店の奥へと姿を消し、しばらくすると箱のようなものを持ち出してきた。

和人と木綿季は何が入ってるんだと思いつつながら中身を確認するために箱を開けてみた。

驚いたことに箱の中身は店舗贈呈用に限定生産されたパープルカラーのアミユスフィアであった。

太っ腹にも店主のじつちゃんはこれを木綿季にくれるという。

木綿季は最初は驚き戸惑ったが、店主も頑なにあげると言っているため、木綿季は受け取ることにした。

タダで受け取るのは申し訳ないと思いつつも、本当は心の底から嬉しく思っていた木綿季であった。

和人はいつかまたじつちゃんのとこに遊びにくるという約束をして、店を後にした。

家族のいないじつちゃんにとって、和人は孫のような存在だったに違いない。

今後は静かに…余生を過ごすことだろう、たまに遊びに来る孫を相手に、レトロゲームで大人げない勝ち方をして…。

西暦2026年10月31日土曜日 午前10:10 川越市内

木綿季は和人と詩乃と共に、川越駅方面へと歩いていった。

自分の鞆に入っている限定生産のアミユスフィアを、目をキラキラさせながら見つめている。

「嬉しそうだな？ 木綿季」

「うん！ だって…ボクゲーム機受け取るのなんて初めてだもん！」

「え…でもメデイキュボイド使ってただろ？」

「んー、あれは貰ったわけじゃないもん。臨床試験で使ってただけだから…貰ったっていうのとは違うと思うよ？」

「そうか…。そういえば…最近全然ダイブしてないな…」

「あ…ボクもだ…。病気が治ってから一回もダイブしてない…、スリーピング・ナイトのみんなどうしてるかなー…」

「…そういえばアンタたち、ALOでとんでもないコトしてくれたわよね…」

詩乃が突如として口を割って入った。和人と木綿季は心当たりがないのかキョトンとした表情を浮かべていた。

「え…？ とんでもないことって…？」

「ボクたち…何かやらかしたかな…」

和人と木綿季は自分たちが罪深いことをしてしまったのではないか？と慌てふためいていた。

これがリズやクラインの口から聞かされたのなら、ハイハイと流すところだったが、詩乃の口から聞かされた為、深刻な話が始まるのだろうと勝手に想像してしまっていた。

「えっと…シノンさん…。俺たち…何かやらかしましたでしょうか？」

和人は両手を前で組み、もじもじとした動作で詩乃に事のあらましを尋ねた。

男のくせにあざとい、実にあざとい仕草であった。後ろでその様子を見ていた木綿季は和人に萌えていた。

「え…本当に覚えがないの…？」

「ああ…、やらかしたっていえば…ライブぐらいしか思いつかないけど…」

「…ねえ和人、もしかして…アレのことじゃ…ないかな…ホラ…」

木綿季のアレという言葉で、和人はここ最近でALLOでやったことを振り返っていた。

周りにとんでもないことと騒がれるぐらいのことと言ったら…、やはりライブの事しか思い浮かばない。

そうだとすると…それより前の出来事か…。明日奈と別れてからは特に何もしてなかったから…、木綿季と付き合い始めてからのことになるな。

木綿季と行動し始めてからやったこと…、二刀流でユウキと決闘して…、一緒に迷宮区に挑んで…、その場の勢いでフロアボスに挑んで…倒したんだよな…。たった二人で29層のボスを…。

あれ？確かになんかとんでもないことしてないか？ 俺たち。

「…もしかしなくても…アレだよな…、29層の…」

「…だよね…ボクたちが成し遂げたすごいことって言ったら、ライブ以外だとそれしか思い浮かばないよ…」

「漸く思い出した？ アンタたちが、たった二人でフロアボスを倒しちゃったもんだから…あれから大変だったのよ？」

「え…？」

「…まず当然のようにMMOトウモローに記事が掲載されたわ。ALOの新生アインクラッド第29層のボスが、たった二人のプレイヤーによって討伐された！ってね…」

「…そうだったのか…」

「あの後それどころじゃなかったから…その時は気にもとめてなかったよ…あはは…」

詩乃は引き続き、呆れた表情で話を続けた。

「んで…その事実は運営の耳にもしつかりと届いたの。そしてその後…、ALOは大規模な臨時メンテナンスに入ったのよ。そしたらもう

…呆れたことに迷宮区とフロアボスが理不尽なぐらいに強化されちゃったのよ」

「え…」

「え…」

「運営からしたら攻略を早く、それも簡単に進められちゃったらコンテナツの寿命が縮むから必死だったみたいよ。まあ…あれからユーザーから無数のクレームが来て、今はある程度バランスが調整されたけど」

そう、木綿季の病気が治る前のこと。

キリトとユウキはたった二人で新生アインクラッドの第29層のフロアボスを倒してしまっていた。

倒してしまっただけといえば簡単に聞こえるが、二人とも死に物狂いで戦った結果であった。

あの時の判断が一つでも間違っていたならば、二人ともやられてりメインライト化してたであろう。

「そんなことがあったんだ…」

「そういえば俺たち…一緒に狩りしたりすることはあっても、迷宮区には足を運んでなかったな…」

「いつ移植手術が始まるかわからなかったからね…、フィールドモンスターを狩ったり、ご飯食べたり釣りしたりしてたよね」

現実の和人と木綿季のやりとりを見ると、とても29層のフロアボスを倒した勇者には見えないほどの、のほほんとしていた。こんなふわふわした二人が本当に”黒の剣士”と”絶剣”なのか…？と。

詩乃はその姿に「ダメだこりゃ」と大きくため息を吐いた。

「はあ…なんかもうどうでもよくなってきちやったわ…、アンタらみてると…」

詩乃が頭を抱えてると、詩乃のスマホに着信が入った。

ポケットからスマホを取り出してディスプレイを確認してみると、そこには詩乃のよく知っている名前が表示されていた。

「あ…朝話した友達からだわ…」

詩乃はスマホの通話アイコンをタップした。するとスピーカーから男と思える声が聞こえてきた。

『もしもし？ 朝田さん？』

「新川君！ 電話くれたってことは…もうついたの？」

詩乃の表情が明るくなった。

その嬉しそうな表情をみて、和人と木綿季は目を丸くしていた。

何せ詩乃がすぐく自然な笑顔を見せていたからだ。こんな柔らかい笑顔も出来るんだなと感じていた。

和人と木綿季は互いに視線を合わせると揃ってにやけ顔をして、その視線を再び詩乃へと向けていた。

ああ…これは間違いない…、二人とも…悪魔の笑みをしていらっしやる…。

『うん…さっきついたとこ。朝田さんは今どこらへんにいるの？ 僕…川越は初めてだから…どこいったらいいか…』

「あ…うん、今駅に向かってるとこ。多分あと5分ぐらいで着くと思うから…改札の所で待っててくれる？」

『わかった！ 待ってるね。…それで…朝田さん…、最近体調の方は…どう？』

「うん…、最近はずいぶんいいことがあって…」

『…そうか、それならよかった。でもあまり無理はしないでね？ 僕もなるべく力になるから…』

「うん…うん…、ありがとう…新川君…」

『それじゃ…待ってるね、また…後で』

「うん！ また…後で…！」

通話を終えた詩乃は通話終了のアイコンをタップすると、「ふう…」と大きく息を吐いた。

そして、心から安心したようなほっこりとした表情を見せていた。しばらくして詩乃は、そんな自分をニヤニヤと見つめる二つの視線に気付いた。

「ほう…なるほどなるほど…」

「へえ、シノンも隅に置けないねえ…」

視線の正体は言わずもがな、和人と木綿季であった。

和人は自分への好意には疎いくせに、周りのコレに対するアレには大変に敏感なのであった。

その顔には、普段いじくられてるお返しに今日はどんなことをしてやろうか、と書かれていた。

「や…ちがつ…違うの！ 新川君とは…そういうのじゃ…。そ…そりゃ…何かあるとすぐ力になってくれて…、いつも私を…支えてくれて…頼りにしてるけど…」

「ほうほうほうほう」

「いや〜…、青春してますなあ…」

「んもう！ 変なこと言ってからかわないで!!」

詩乃は顔を真っ赤にしながら持つてる鞆をブンブンと振りまわした。

和人と木綿季はそれを楽しそうに避けていた。その表情はいい玩具をみつけてしまった。そんな表情をしていた。

「まあまあ…幸せになりなよ？ シノン？」

「だから…違うってのにっ!!」

三人は同じようなやりとりを飽きもせず繰り返しながら、川越駅へと向かっていった。

目的地に近付くにつれて、詩乃は体力を使い過ぎたのか息が上がってしまっていた。

和人達の住んでいる川越にある川越駅は日本の鉄道史上では比較的歴史が浅い。

大正4年に川越町に川越西町駅として開業、当時は川越の市街地からはずれた位置にあった。

そして後々の川越線の開業に伴う駅名改称と、市街地の南下により市を代表する駅となった。

現在は全国的に有名な観光名所の横丁もあることから、大勢の人達が利用している駅となっている。

そんな地元の川越駅に、和人たちは漸く到着していた。

真つすぐ進んでいればこんなに時間はかからなかったろうに、途中で余計なことをしていたばかりに、少しだけ遅れての到着となった。

駅構内に入るなり、詩乃は恭二の姿を探していた。改札で待つてと伝えたので、大人しく改札で待つているはずだ。少しずつ歩いてくと切符売り場が目に入り、近くに改札口も見受けられた。

その近くに詩乃のよく知る人物がスマホを片手に佇んでいた。

「新川君！」

「あ…、朝田さん！」

恭二の姿を視認するなり、詩乃は駆け足で恭二のもとへと足を急がせた。

その嬉しそうな姿を見ると、和人たちは「やっぱりそういう関係なんじゃん」と思っていた。

「ごめんね…待たせちゃって…」

「ううん、僕は平気だよ。…それで…あの人たちが…朝田さんのお友達？」

恭二の視線の先には和人と木綿季の姿があった。

二人とも何をやっているのかたった二人でエグザ〇ルをやっていた。付近を通る通行人や電車の利用客の視線が非常に痛かった。詩乃は今この瞬間だけは赤の他人でいたい、そう思っていた。

「…うん…認めたくないけど…」

「あはは…か、かわった人たちだね…」

詩乃は恥ずかしさを振り切って和人たちに歩み寄っていった。恭二もそれに続くように詩乃のあとを追って歩く。

「アンタたち、さっさとそれやめないと、鼻の穴にアルコールつけた綿棒突っ込むわよ？」

そのセリフを聞いた瞬間、和人と木綿季は動作をやめた。

そんなものをぶち込まれたら鼻がスースーしすぎて頭が痛くなってしまう。そうなるのはゴメンとばかりに二人はピタツと姿勢を正して立った。

「えつと…紹介するね、私のお友達の…新川恭二君…。お医者様を指して勉強してるの」

「初めまして、新川恭二です。朝田さんとは昔同じクラスで…。よろしくお願いします」

恭二は丁寧に話すとペコリと礼儀正しく頭を下げた。

医者を目指しているだけあって、仕草と所作は大変に丁寧なものであった。

「桐ヶ谷和人…、和人でいいよ。よろしくな」

「ボクは…紺野木綿季だよ！ よろしくね！」

挨拶を済ませると木綿季と和人は恭二と握手を交わした。

「なあ…多分俺たち年近いよな？ だったら敬語はやめにしようぜ？
俺も君の事名前呼びたいし」

「ボクも！ 木綿季って呼んでいいからボクも恭二の事名前呼びばせてもらうねー！」

「あ…うん…。君たちがいいなら…僕も構わないけど…」

「よし、じゃあ決まりだ。よろしくな、恭二」

「よろしくね！ 恭二！」

恭二は照れくさそうに笑みを見せながら頭をぼりぼりかいていた。
今まで付き合ったことのないタイプの人達だったからだ。詩乃はその様子をちよつとだけ不機嫌そうに見ていた。私達でさえ苗字で呼び合っているのに…何で木綿季たちが…と。

「ねねね、そういえばずっと気になってたんだけど…」

木綿季は身を乗り出して恭二と詩乃に質問を投げかけた。

「恭二とシノンって付き合ってるの？」

木綿季が爆弾を投下した。

おそらく純粋な興味本位で聞いてみたのだろうが、常人にはなかな

か聞けないようなことをホイホイと聞いてきた質問に、恭二と詩乃は固まってしまっていた。和人は腹を押さえて笑いをこらえていた。

自分がいじくられるのは心底嫌だが、他人がいじくられるのには大変に上機嫌な様子だった。それが普段からかかってくる詩乃となれば尚更だった。後からの報復が怖いと笑わずにはいられない。

「え……や……だから……その……！」

「あはは……いきなりすごいことを聞くね……木綿季ちゃんは……」

詩乃は顔を真っ赤にしていた。詩乃自体も決して恭二との関係がこれ以上進展することにやぶさかではない。

しかし若さというものか、なかなかその先の一步を踏み込めないでいたのだ。

恭二はと言うと照れくさそうな表情を浮かべつつも、参ったなあといった顔になりながらも顔をぽりぽりとかいていた。

「だって……二人ともすっごい仲良さそうだし。シノンなんか恭二からの電話に出たときなんかすっごい嬉しそうな顔してたよ？」

「え……あ……うう……。木綿季……もうお願いだからそれ以上何もしやべらないで……！」

「あははは！ シノン顔真っ赤ー！ 可愛いー！」

詩乃は真っ赤になった顔を隠すかのように両手で覆ってしまった。本人もこんな形でいじくられるのは初めてなので、どうやって対応したらいいかわからないように困り果てていた。

恭二は見ていたたまれなくなったのか、これ以上からかうと可哀そうだよと木綿季を制止させた。

「あははは…、それじゃあそろそろ移動しようか？ どこを見て回るんだい？」

「その辺はこの地元民の俺に任せてくれ」

和人が胸に手を当てて、自信満々に答えた。

川越の観光名所と言えばあそこしかないのだが、この人数でゆっくり食べ歩きながら楽しむには十分なスポットだ。

「んじゃあお願いしようかな、和人」

「ボクもいったことないから楽しみだなー！」

「……………」

詩乃は変わらず下を向いて顔を両手で押さえていた。

「朝田さん大丈夫？」

「あ…うん…だい…じよぶ…」

恭二は動けそうにない詩乃に対して優しくエスコートするかのよう
うに、右手を差し伸べた。

「行く、朝田さん」

「え…、あ…う…うん…」

詩乃は導かれるまま恭二の手を握った。

少しだけ平静を取り戻したかのように見えたが、心臓はバツクバツクであった。

木綿季にあのようなことを言われて、自分は恭二に対してこんな感情を持っていたの？といった気持ちになっていた。

勿論、詩乃にとって恭二は初めて心から信頼できる友人であった。自分の壮絶な過去を最初に受け入れ、軽蔑することなく理解してくれていた。

恭二は詩乃にとって初めての心の寄りどころでもあったのだ。

私生活に少しだけだらしない所があるが、性格は優しいし爽やか。頭もいいし気が利く、顔は童顔で可愛い系の男子に分類されるだろう。

そんなことを考えてしまったら詩乃はまた恥ずかしくなってきた。しまい、恭二にエスコートされながらも俯いて顔を真っ赤にしていた。完全に今、恭二のことを親友ではなく、異性として意識してしまっていたのだ。

「ねね！・クレープ食べようよ！・クレープ！」

目的地にいく途中のクレープ屋が目に入ってしまった木綿季が、クレープが食べたいと言い始めた。

つい2時間前にトーストを4枚も完食しておいて、まだ食べるというのだ。

病気だったことを考えると喜ばしいことなのだが、回復しすぎて逆に心配になってくる。

オーバークライフ気味にならないといけないのだが。

「ねーかずとー、いいでしょー…？」

「う……わかったよ……仕方ないな…」

「わーいやったー！」

和人は抵抗しても無駄だとわかっていたのか、今回もあっさりとは折

れた。和人が木綿季のお願いを断れる日は来るのだろうか？ 否、未
来永劫来ないであろう。

「朝田さんも食べたい？」

恭二が詩乃に尋ねてみる。しかし詩乃は俯いて顔を赤くしたまま
で恭二の声は聞こえていないようだった。恭二は顔を覗き込んで詩
乃に意識があるかどうか確認する。

「朝田さん？」

急に恭二が視界に入ってきたので詩乃は驚き、後方に大きくのけ
ぞった。

「ひゃあっ!？」

「うわっ、びっくりした…」

「あ…ご…ごめん…新川くん…。えっと…なんだろう…」

再び心臓の鼓動が早くなる。今日の私はどうしたのだろうか？

7年前…、強盗を銃で撃ち殺した時よりも心臓がバクバクいつてい
る…。今日の私は変だ…。

帰ってすぐベッドで寝たい…休みたい…、そう思っていた。

「クレープだって、木綿季ちゃんが食べたいから和人が買いに行くみ
たい。朝田さんも食べる？」

「あ…うん。じゃあ…いただこうかな…」

「了解、んじゃあ僕も買ってくるよ」

そう言いながら恭二は握っていた詩乃の手を離し、和人と共にクレープ屋へと足を運んでいった。

離された手を見て、詩乃は男の子の友達と手を繋いでいたことを初めて認識していた。

「……………」

「シノン？　大丈夫？」

「あ…木綿季…、うん…」

「今…、一瞬ボクのこと見失ってたでしょ？」

木綿季はにやつきながら詩乃に歩み寄っていった。普段は笑顔が眩しい天使のような木綿季だが、今日だけは小悪魔に見えていた。背中から羽が、お尻から尻尾が生えているように見えてしまう。

「え……そ……そうだったかしら…」

「…恭二の事しか見てなかったでしょ？」

「え……いや……その…」

「まあまあ、わかってるって。ボクも和人のこと好きになったときは、中々素直になれなかったから…」

木綿季の場合、好きになったことに気付いた時は素直になれないどころか、和人を拒絶していた。

当時AIDS末期だった木綿季は付き合い合って早々に自分が死んでしまったら、相手を悲しませてしまうだけだと思っていた。そのため

和人を拒絶したのだ。

「好き…なんだよね？ 恭二のコト」

「……………」

詩乃は顔を赤くしたまま、ゆっくりと頷いた。

「やっぱり！」

木綿季はその答えを聞けると、詩乃の両手を握り、元気づけるように声を掛けた。

「大丈夫だよシノン！ 多分…恭二もシノンのコト好きだから！」

「え…」

「だって恭二がシノンに向けている視線、普通じゃないよ？ 普通の友達を見る視線とは違うと思うの。だ・か・ら…」

木綿季は両手を握る手により強く力を込めて、更に元気づけるように詩乃を激励した。

「恭二なら大丈夫！ 多分シノンにゾツコンだよ！」

「あ…うう…」

「がんばろ？シノン。ボク応援するからさ！」

「うう…、…が…頑張る…」

「よし決まり！ ようし、ボクも頑張るぞー！」

正直木綿季に頑張られると余計なことになりかねないので、このことに関しては勘弁願いたい詩乃であった。

一方クレープ購入組は…。

「ねえ和人、その…木綿季ちゃんって…和人の…彼女なの？」

「ん？ ああ…そうだよ」

「速攻肯定するんだね…、朝田さんとは正反対の反応だ」

「そつちこそどうなんだ？ シノンのこと」

初対面にも関わらずズイズイいく和人であった。

木綿季のお陰でコミュ力が以前よりもついてきた様子だった。単に恭二が話しかけやすそうな感じだったのもあったが。

「え…えつと…まあ、僕としては…そういう関係になれたらいいかなあとは…思ってるけど…」

恭二は後頭部をかきながら照れくさそうに笑顔をこぼしていた。しかし、その表情は少しだけ寂しそうで切なそうな顔でもあった。

「でも…多分僕は…彼女と親しくする資格はないと思うんだ…」

「え…？？」

恭二の突如とした切り返しに、和人は表情を曇らせた。

「和人…僕さ、朝田さんの元同級生って言ったけど…、初めてあったの

はその時じゃなかったんだよ」

「どういうことだ…？」

「…僕さ、自分から朝田さんに接触したんだ。朝田さんの過去に興味があつて…それがきっかけで朝田さんに近付いた。当時の朝田さん…いや今もそうかもしれない。朝田さんは心に深い傷を負っていたんだ。そのことを考えずに僕は自分の興味本位だけで…朝田さんに近付いたんだ」

「……………」

「僕は…外見だけ見れば勉強熱心に見えるかもしれないけど、中身は自分勝手にドス黒いやつなんだよ…。こんなだから過去にいじめにあったこともあった。高校も中退しちゃって、今でこそ予備校に通って勉強してるけど…うしろめたさとかがあつたからなんだ…。自分から進んでこの道を歩いてるわけじゃない…」

和人は神妙そうな顔で恭二の話を聞いていた。

「あ…ごめん…、初対面の人に対してこんなことぺらぺらと…。何で…君にこのことを話したんだろうな…。自分でもよくわからないや…あはは…」

恭二はバツが悪そうに笑ってごまかし、その場をうやむやにしようとした。

この話はなかったことにしよう、恭二の顔がそう言っていたように見えた。

「本当に自分勝手だったら、恭二の方からそんなこと切り出さないし、シノンのこともそんな風に思っていないだろう？」

「え…?」

「恭二の言う通り、シノンとの出会いが下心だったとしてもだ。彼女のことを大切に想ってるってことは変わらないんじゃないか?」

「…和人…」

「初対面で俺もこんな偉そうなこと言ってるけどさ…、多分恋って…そんなんだと思うぜ?」

「……………」

恭二は考え込むようにして俯いてしまっていた。和人の言うことはぐもつともだ。

確かにきつかけは詩乃に対する下心からであることは事実だった。しかし…、その下心こそが恭二にとっては問題だった。

「ありがとう…和人、でも…和人の言ったことは半分あってるけど…半分外れてるな…」

「え…どういうことだ…?」

「…ごめんね、今は話すべきじゃないと思う。このことに関しては…朝田さん本人から言い出さないと…意味がないから…」

「…そうか…。んじや…これ以上聞かないことにするよ…」

「…なんか…ごめんね…」

「気にするな、好きなんだろう? シノンのこと」

「…うん…まあ…ね…」

恭二はクレープ屋の行列に並びながら、遠くにいる詩乃の姿を見ていた。

想い人を見る視線を送りながら、そして…保護者のような視線でも詩乃を見つめていた。

「頑張ろうぜ？」

「うん…ありがと…」

二人が話していると、やがて列の先頭まで順番が回ってきた。

和人はメイプルバターシナモン、木綿季にはチョコバナナホイップクリーム。

恭二は塩キャラメルバター、詩乃にはガトーショコラ生クリームを購入した。

「よっ、お待たせ」

「おそーいー！」

「仕方ないだろ、行列が出来てたんだから」

「お待たせ、朝田さん。はいこれ朝田さんの分」

「あ…ありがと…新川君…」

詩乃は恭二からクレープを受け取ると、恥ずかしさを誤魔化すようにクレープにかぶりついた。

恭二はその様子を微笑ましく見つめていた。

「な…何…？ 新川君…」

「あ…いや…何でもないよ…美味しいね…これ」

「あ…うん…そ、そうだね…」

二人はお互いに照れくさそうにしながらクレープにかぶりついていた。

少しだけだが以前の親友の関係から進展はあったみたいだ。その様子を少し離れたところから木綿季と和人が見守っていた。

「ね…和人…、恭二と何話してたの…？」

「ああ…ちよつとな…。シノンのこととか…」

「そうなんだ。ねね、やっぱり恭二って…」

「ああ、シノンのコトが好きなんだと」

「やっぱり…！ シノンもね、恭二のコト好きなんだって！」

和人は知ってる風な表情を見せながらも「そうなんだ」と返事を返した。

そう、詩乃は恭二に好意を抱き、同じように恭二も詩乃に対して好意を持っていた。

しかし、恭二の詩乃に会おうと思ったきっかけが問題であった。

恭二は元々ミリタリーに興味があり、銃、兵器などといった油と埃

に塗れた武器が大好きであった。

そこで耳にしたのが詩乃の、過去に現実で銃を使って人を殺したという事件のことだ。

自分と同一年の女の子が銃で直接人を殺した。

そのことに恭二は大変に興味を持ち、自ら詩乃のことを調べて、直接接触した。

はたから見たら偶然の出会いのようにも見えるが、実は恭二自ら計画したことであった。

最初は詩乃に出会えたことが大変うれしい恭二であったが、例の事件について詩乃が激しく心に傷を負っていることを知ると、途端に罪悪感と後ろめたさに襲われていた。

自分はなんて自己中心的なんだ。いたいけな少女の心の際に付け込んで、自分の願望を満たすためだけに近付いた。

恭二はそんな自分の罪悪感を消し去るために、詩乃を心の底から支えることを決心した。

心にトラウマを抱えてしまったこの少女を助け出そうという使命感の導くまま、詩乃を支え続けた。

しかしその感情は使命感から、時間が経つにつれ次第に恋心へと変化していった。

詩乃もこんなに優しく接してくれる恭二に対し、最初はいい人だなぐらいにしか思ってたなかった。

しかし詩乃自体も男の子とここまで近い関係を持つのは初めてで、それも次第に恭二への恋心へと変わっていったのだ。

端的に言ってしまうえば二人は両想いであった。

しかし、恭二の詩乃への出会いのきっかけがつかえ棒になり、二人の恋路の邪魔をしていた。

真実を話してしまえば詩乃に拒まれるかもしれない、そう考えてしまった。

気持ちを伝えて拒まれるぐらいなら、今のこの微妙な距離感を維持したまま、彼女の傍に続けられる方がいいやと、そう考えていた。

「和人…、ボクね…知ってるんだ…。シノンの…秘密」

「え…?」

「でもね…これはボクが話していることじゃないんだ。こればかりは…シノンが…詩乃が直接話さないといけないことだと思うから…」

「…恭二も同じこと言ってたな…」

「へ…そうなんだ…」

「…でも…それなら仕方ないことだ。シノンが俺に…俺たちにすべてを伝える勇気と決心があったのなら、その時に話してもらえばいいさ。どんなに時間がかかっても…な」

「うん…そうだね…」

「…食べないのか? クレープ」

「あ…うん! 食べるよ! いただきますあーす!」

そう言うと木綿季は、今朝トーストを食べたときのように大きな口を開き、一口でクレープの四分の一を頬張っていた。美味しいものを食べたときの木綿季は、非常に幸せそうな表情を浮かべていた。

「美味しいか?」

「うん! とっても美味しいよ!」

「そうか」

幸せそうな木綿季を傍で見守っている和人も、自分の分のクレープに口をつけた。

そして遠目に無言でひたすらクレープをかじり続ける二人に対して声を掛けた。

「おいシノンに恭二！ そろそろ行くぞー！ 食べながらでいいから歩こう！」

「…だつてさ、朝田さん。行こう」

恭二はそう言うと、再び詩乃に対して手を差し伸べた。

詩乃はそれを拒否することなく恭二の手を握り返した。恥ずかしそうにしていたが、同時に嬉しそうな表情をしていた。

その笑顔を見た恭二の表情は複雑だった。

詩乃が自分を好きでいてくれることは大変に嬉しい。しかし…それは詩乃を騙してしまっているからだった。

彼女の心を利用して彼女に近付いた。多分今のこの関係は…それがばれたときには…終わってしまうだろう。

そう考えてしまったがために、恭二の顔は複雑な表情を浮かべていたのだ。

その表情の変化に、詩乃も気付いていた。

「新川君…？」

「…あ…、ああ…ごめん。ちょっとぼーっとしてた…」

「…くすっ、変な新川君…」

「あはは…ごめんね…。行こうか、朝田さん」

「うん…」

二人は手を繋ぎながら和人達の後を追いかけた。歩を進めながらも恭二は思っていた。

今はこの関係でいい、この…微妙な距離感があるけど、お互いに意識しているという感覚がある距離で…。

僕と朝田さんは…この距離感でいいんだ…。これ以上、僕に朝田さんとの距離を詰める資格はないのだから…。

いや、そもそもにして僕が朝田さんの近くにいることすらおこがましい…。

でも…彼女が望むなら、傷つけない範囲で…出来るだけ傍にしよう…。

関係が崩れてしまったら…その時はその時だ。

その時が来たら…大人しく距離を置いて…、元の他人同士の関係になれればいい。

本来なら…会うべきではなかったのだから…僕たちは…。

これで…いいんだ…。

第48話く想いよ届けく

西暦2026年10月31日土曜日 午前11:05 川越市内

木綿季、詩乃、恭二の三人はここ、埼玉県は川越にて和人の案内のもと、観光することにした。

詩乃は元々昼には帰るつもりだったが、友人の恭二がわざわざ川越まで来てくれたこともあり、折角なのでこのまま川越観光を楽しむことにした。

木綿季は和人と、詩乃は恭二とそれぞれ手を繋いで歩いていた。和人達は慣れた様子で仲良く歩いていたが、詩乃と恭二は顔を赤くして歩いていた。特に詩乃の様子はおかしかった。恭二を異性と意識しだしてからというものの、口数も少なくなってきた。

「朝田さん…体調平気？ さっきから顔色悪いように見えるけど…」

恭二が心配そうに詩乃の顔色を伺う。

別に体調が悪いわけではない。生まれて初めてのデートに心臓が張り裂けそうになっていただけである。

「え…？ あ…うん…だ…大丈夫…」

「……うくん…それならいいんだけど…無理はしないでね？」

「…う…うん…、ありがとう…新川君…」

恭二も平静を保ってはいるがいつもより緊張していた。

ナチュラルに手を繋いでいるが、今の彼にはこれが精一杯であった。

互いに今日の自分がいつもより変だということに気が付いていた。

「ね…和人…あの二人…どうなるかな…？」

木綿季が楽しそうに和人に尋ねる。その姿はまるで噂好きの近所のおばさんみたいだった。

「さあな…、こればかりはあの二人次第だろ」

「なーにそれ…つまんない答え…」

「悪かったな…」

「和人はもつとロマンを持とうよ、食べ物や戦いだけじゃなくてさー」

「ロマンねえ…、ロマンじゃ腹は膨れないからなあ…」

その回答を聞いて木綿季は大変にご立腹になってしまった。

「もうー！ 和人のバカ！ 何で君はもつと気の利いたセリフが言えないんだよー！」

「ええ…そんなコト言われても…」

詩乃と恭二の数メートル先で、和人と木綿季が他愛のないやり取りを交わっていた。

その様子と恭二と詩乃は微笑ましいように見えていた。

「仲いいね…あの二人…」

「うん、自他ともに認めてるバカップルだもの…」

「そうなんだ…」

「木綿季にとっては…キリトは…、和人は命の恩人だから。多分それも含めてだと思っただけだね…」

「命の恩人…？　もしかして…あの二人はALOのライブの…？」

「うん、マスコミが報道してないからその後の話は公にされてないけど…、木綿季はALOのユウキなの。AIDSもキリトのお陰で無事に治ったのよ。今はキリトの家で一緒に暮らしてるの」

恭二は「へえ〜」と感心そうな顔で和人を見ていた。

和人は木綿季ちゃんにとってヒーローなんだ…。僕も朝田さんのヒーローになれるのかな…と思っていた。

「ねえ…朝田さん…」

「…何？　新川君」

「僕はさ…朝田さんにとって…何なんだろ…」

「え…？」

恭二が詩乃に話を持ち掛けると、二人は歩いていた足を止めた。

詩乃は恭二の問いに対して返答に困っている様子だった。想いはあるのだが、それを表に出すのにはやはり抵抗があった。

「えっと…新川君は…その…、お…お友達…か…な…」

「……そっか…」

その返答を聞いた恭二は、残念そうにしていたが、少しだけ安心したような表情も見せていた。

やはり、今のこの関係が壊れてしまうのを一番恐れている様子だった。

「行こうか…、和人たちに置いてかれちゃう」

「あ…ええ…、行きましょ…」

二人は再び歩を進めていった。しかし先ほどと違って、終始無言のまま歩いていった。

気まずいのか、それともなんと声を掛けたいのかわからないのか、二人とも気の利いた言葉が見つからないでいた。

しばらく歩くと街並みが変わっていった。

住宅街から商店街風な街並みに変わったかと思えば、目の前の風景は江戸時代を思わせるような、風情溢れる建物が軒を連ねていた。地元川越が誇る「小江戸川越 菓子屋横丁」であった。

埼玉県といえど深谷の葱が有名だが、ここ川越は何よりも芋の生産地として大変に有名な土地であった。

ここ小江戸川越菓子屋横丁ではその芋をふんだんに使った料理や土産、お菓子などがあちらこちらにある。

芋ではないがここにしか存在しない有名なお菓子も売られているのだ。

「うわあー！　すごい！　日本みたいだー！」

「日本だろ…」

木綿季は初めて見る江戸風の街並みに大興奮していた。

テレビの時代劇でしか見たことないような風景が広がっていたか

らだ。そしてあちらこちらから漂ってくる芋のお菓子のいい匂いが、更に木綿季の期待を膨らませていた。

「和人！ 早くお店見て回ろうよー！」

「まあ待て、見て回るっていつでも菓子屋は無数にあるからなの？ 俺のおススメの店が何軒かあるからそこに行こう」

「でもでも！ 気になったお店があつたら入ってみたい！」

「あいよ、恭二達もそれでいいか？」

「ああ…うん、僕は構わないよ。和人に任せておいた方が安心だろうし…、朝田さんもそれでいい？」

「ええ…、恭二君がそう言うなら…」

「え…？」

詩乃からの返答に恭二は一瞬ハツとなった。自分のことを下の名前と呼んだ。

いつもの「新川君」ではなく「恭二君」と。肝心の呼んだ本人は無意識だったのか、恭二を下の名前で呼んだ自覚がなかった。

「え…どうしたの…？」

「あ…いや…、今…僕のコト…名前前で呼んでくれたなって…思ってる…」

「え…!？」

「あ…いや…別に…僕は構わないよ…、むしろ…嬉しいかな…ははは

…」

恭二は嬉しそうに鼻の下をぐしぐしと指でこすっていた。

この時ばかりは恭二にも思わず心からの笑顔が零れていた。一方詩乃は詩乃で固まってしまっていた。

私…今恭二君って…呼んだの…？ 全然意識してなかった…と思
いながら。

「あ…その…」

「ほ…ほら行こう朝田さん、また置いていかれちゃう」

「……………」

恭二は詩乃の手を引っ張り、和人たちに置いていかれないよう詩乃をエスコートした。

「あのね…、私のことも…名前で呼んで…いいよ…？」

「え…？」

詩乃は再び、顔が真っ赤になっていた。この発言は本人にとって大変に勇気がいる行動であった。

たかが苗字でなく、名前で呼んで構わないと言うだけなのに、まるで受験の面接で面接会場に入る時のような感覚だった。

恭二は恭二で、もじもじとしながら困ったように頭をぽりぽりとかいていた。

本当に呼んでも構わないのだろうかと思いつつ、しかし…本人が言うのだから…呼んでみよう、少しだけ勇気を振り絞った。

「え…えつと…し…、詩…乃…さん…」

「…さん付けはやめて…」

「あ…う…うん…。…んと…詩…乃…」

「…うん、ありがと…。いこ？ 恭二君…」

「…うん、行こう…詩乃…」

ぎこちないやりとりだが、二人はまたその関係を深めていった。詩乃は恥ずかしながらも、幸せいっぱいといった表情をしていた。人を殺して、世間から責め立てられ、母親からも冷ややかな視線で突き放されて、生きていても楽しくないと思った矢先に、この恭二が声を掛けてくれた。

確かにそれは恭二にとっては下心があったに違いない。

しかし、詩乃にとっては救世主のような存在であることにも違いはなかった。

実際、恭二のミリタリー知識によって、詩乃の銃に関する偏見はほとんどなくなっていたし、理解も深めていけた。モデルガンに触ったりするといまだに拒絶反応が出るが、それでも嘔吐などをしていた以前よりマシになっていた。

和人が木綿季にとってヒーローならば、恭二は既に、詩乃にとってヒーローだったのだ。

本人は大したこととしてないと思っではいるが、恭二は既に詩乃にとって憧れの存在となっていた。

「…大丈夫そうだね、あの二人」

「…だな、俺たちが心配する必要はなかったってことだ」

和人と木綿季はほつとしたような表情で後方にいる二人を見守つ

ていた。

過去になんらかの闇を抱えていた二人であったが、このままなら大丈夫そうだと、安堵の表情を浮かべていた。

「おーい！ 置いていくぞ二人ともー！」

「はやくきなよー！」

「あはは…、流石にこれ以上遅れちゃまずいね。行こう…詩乃」

「うん…恭二君…」

そう言うと恭二は和人に追いつくために走り出した、走ると思わなかった詩乃は恭二に引つ張られて慌てていたが、なんとか恭二の走る速度についていった。恋愛経験がほとんどない詩乃にとっては、何もかもがドキドキであった。

一行はそれから小江戸川越菓子屋横丁を隅々まで堪能した。

今朝方から食べてばかりであったが、甘いものは別腹とでも言うのか、一行は様々な芋の菓子に夢中になっていた。

普段暮らしているところから少し歩くだけで、まるで300年前の江戸時代にタイムスリップしたような感覚だった。近くにこんな楽しいところがあるなんてと、木綿季は心から楽しんでいた。

詩乃と恭二は事実上、初めてのデートとも言える今日の観光を堪能していた。

今度は二人きりでどこか出掛けたいな、心の中でそう思いながら。

同日午後15:05 埼玉県川越市小江戸川越菓子屋横丁

小江戸川越に足を運んでから3時間ほどが経過していた。

和人の両手には木綿季におねだりされて買わされた、大量のお土産がぶら下がっていた。

中でもとくに目立っているのが日本一の長さを誇るといふ麩菓子であった。

一番長いのが400円、二番目に長いのが300円で売られていた。

和人は二番目のでいいんじゃないかと言っていたが、木綿季が一番がいい！と聞かなかつたためにこちらを買う羽目になった。持つて帰るのが非常に面倒なこの日本一長い麩菓子を3本も買わされたのだ。

詩乃と恭二もそれなりにお土産をこしらえて、すっかりこの小江戸川越を堪能していた。

初めてのデートは成功と言ってもいいだろう、地元にはこんな風情ある場所はないが、たまにはこういう場所もいいなと思っていた。

「母さんから頼まれていた芋も買ったし、結構ここも見尽した感じだな。これからどうする？」

「随分大荷物になっちゃったね、流石にこれを持ってあちこち歩くのは億劫じゃないかな？」

「…誰の所為だ誰の…」

和人は呆れた表情で木綿季を見ていた。木綿季はその視線から目を逸らして誤魔化すように口笛を吹いていた。

その様子を見た詩乃と恭二に笑顔が浮かんだ。普段は勉強に追わ

れている二人に、この楽しい空間が非常に心地よく感じていた。

「二人とも、今日はもう帰るのか？」

「あ…：どうしようかしら…：私は昨日と同じで帰ってご飯作るだけだから…：遅くなっても大丈夫だけど…：。恭二君は？」

「僕はまだ大丈夫だよ、今日は予備校もないし…：。でも夜勉強しないとだからあまり遅くなると…：」

「なるほど、まだちよつと時間はあるんだな。そうしたらどうしようか…：」

これから何をしようかと考えてる和人の持っている手提げ袋を見て、木綿季が何か閃いたようだった。

「ねねね！ そしたらさ、今から焼き芋しようよ！ 焼き芋！」

「え…：焼き芋…：？」

「うん！ 今日お母さん家にいると思うし…：、お家の庭の落ち葉とか使って買ったお芋焼いて食べようよ！」

木綿季が目をキラキラさせながら皆に焼き芋をしようと言案を持ち掛けた。

確かに悪くない案だ。自宅に戻れば母親がいるし、火を燃やすための落ち葉や朽ち木もある。

何より焚火をするためのスペースも十二分に確保できる。

季節と時間帯も相まっていい雰囲気です焼き芋を楽しめそうだった。

「いいなそれ…：、やるか！ 焼き芋！」

「ホント!? わーい! やっきいもやっきいも!」

「あ…アンタたち…まだ食べる気なの…?」

「すごいね…君たちのお腹…」

「まあ…な、ここらで売ってる芋の菓子も美味しいけど、自分たちで焼いた芋も格別だぞ? 俺が保証する」

詩乃と恭二は既にお腹いっぱいであったが、和人の自信に満ち溢れた表情をみて、もう少しだけ付き合ってもいいかなと思つた。今からまた食べてしまうと夕飯が食べられなくなりそうだが、焼き芋一つぐらいなら多分入るだろう。

「そしたら…今から和人の家に戻るのかしら?」

「そうなるな、詩乃にとってはちよつと出戻り気味になつちやうな」

「構わないわよ、歩いてこれる距離だもの。恭二君もそれでいい?」

「僕もいいよ、焼き芋なんて初めてだ…ちよつと楽しみ」

「よーし! 満場一致になったところで、お家に帰ろーう!」

木綿季は一足先に元気に駆け出していった。よほど焼き芋が楽しみなのだろう。

和人達は木綿季に置いていかれないように、そそくさと駆け足で木綿季の後を追いかけていった。

同日15:30 埼玉県川越市桐ヶ谷邸

「うわ…でつかい…」

一行は20分ほど歩き、和人と木綿季の住む桐ヶ谷邸へと辿り着いていた。

恭二はその敷地の広さ、家のでかき、そして道場に目を奪われていた。

「じいさんが昔から剣道場を営んでな…結構羽振りがよかつたみたいでこんなでつかい敷地になつちまつたんだ。まあ…そのお陰で今日はこうやって芋が焼けるわけなんだけど」

「へえ…、和人…剣道やるんだ」

「今はもうやってないよ、少しだけ護身術が使えるぐらいさ」

和人はそう言いながら玄関の扉に手を掛けた。
横にスライドさせるとガラガラガラという音を立てながら扉が開いた。

「ただいまー」

「ただいまー!」

「お邪魔します…」

「お…お邪魔します…」

「あ…お兄ちゃんおかえりー!」

部活から帰っていた直葉が出迎えに玄関まで足を運んできた。

先ほど帰ってきたばかりなのか、恰好は私服ではなくまだ制服のままだった。

「あれ…シノンさん？ 帰ったんじゃないかな。それに…そつちの人は…初めましてかな…？」

「えつと…ちよつといろいろあつて…夕方までまだいさせてもらうことになったのよ…」

「紹介するよ、シノンの元同級生の新川恭二だ」

和人から紹介されると、恭二はペコリと頭を下げた。

「初めまして、新川恭二です。今日は和人に川越を色々案内させてもらつて…」

「あ…初めまして。お兄ちゃんの妹の…桐ヶ谷直葉です」

直葉も同じように礼儀正しく頭を下げた。

「可愛い妹さんだね、和人」

「えつ…、か…可愛いだなんて…そんな…」

素直に褒められた直葉は顔を赤くして苦笑いを浮かべていた。

満更でもなさそうに頭をかきながら。詩乃はその様子を見て少し

ばかり不機嫌になっていた。

「もう…恭二君てば…」

「あ…ご、ごめん…別にそんな変な下心とかがあつたわけじゃないよ、あはは…」

その様子を見て直葉は、詩乃と恭二がそういう関係なのだと悟つた。

まだそこまでの関係まではいっていないのだが、手を繋いでる様子を見ると、誰がどう見てもそう思ってしまうだろう。

「はは…なるほど…。シノンさんもそうだったんだね…」

直葉は悪魔の微笑みを見せていた、年頃の女子高生ともあれば、こういったコイバナに大変に敏感な時期だ。

それが身内での出来事ならば、尚更その進展に興味がいってしまう。

直葉は木綿季と同じように、詩乃にとって今もつとも関わってほしくない存在へと変わっていた。

「ちよ…ちよつと直葉…！ 別に恭二君はそんなんじゃない…」

「またまた、手を繋ぎながら言つたつて説得力ないですよ？」

「う…、これは…その…」

「あはは…参ったねこりや…」

先ほどと似たようないじくられ方をしながら、詩乃と恭二は困り果てていた。

毎度毎度疲れるやり取りだが、不思議と悪い気分はしなかった。和人は流石にこれ以上いじくるのは可哀そうだと思い、話題を切り替えるべく、直葉に焼き芋の話を持ち出した。

「なあスグ、母さんいるか？」

「え…？ うん、いるけど…どうしたの？」

「実は母さんから芋買ってくるように頼まれたんだけど、折角みんながいるんだから、庭で焼き芋でもしようと思ってさ」

「焼き芋！ いいねー！ それじゃあたし、お母さんに声かけてくるよー」

直葉はそう言うのと、両手を広げながら駆け足で母親のいるリビングへと姿を消していった。

漸くこの空気から解放された詩乃は大きいため息を吐いた。

「な…なんか…疲れちゃった…」

「あはは…僕も少し…」

「そうだな、今日はずっと歩きっぱなしだったし、ちよつと部屋にいて休もうぜ」

「さんせー！ ボクもちよつと疲れちゃった」

木綿季と和人は靴を脱いで家に上がった。木綿季は脱ぎ散らかしたまま家へと上がった。

和人は丁寧に自分の靴と木綿季の靴の向きを揃えた。

「こら木綿季、靴ぐらい揃えろっ」

「あつ、ごめーん。家に帰ると嬉しくなっちゃってつい…」

「全く…。ほら、二人とも遠慮しないであがつてくれよ」

「…それじゃあお言葉に甘えて…」

恭二も靴を脱いで玄関から上がった。恭二にとって友人の家にお邪魔するのは本当に久しぶりだった。

いつ以来だろうか、小学生？ 中学生？ それぐらい友達との交友関係が今まで皆無だった。

一行は土産を持ちながら階段を登り、和人の部屋へと足を運んでいった。

人数が多いが和人の部屋は広いので問題なく全員腰を落ち着けられていた。

「何もないけど…くつろいでくれ」

和人は買ってきたお土産をベッドの脇に置いてPCデスクの椅子に腰を落ち着けた。

木綿季は部屋に入るなりベッドにダイブインしていた。

「こら！ だから埃が舞うというのがわからんのかお前は！」

「えー、いいじゃーん！ だってふかふかで気持ちいいんだもん」

「…掃除する俺の身にもなってくれよ全く…」

恭二は和人のもう一つのPCデスクの椅子を借り、詩乃は木綿季の横たわる隣にそれぞれ腰を落ち着けた。

長時間歩きっぱなしだったのですっかり疲れがたまってしまった。
いた。

「ふう…あんまり気にしてなかったけど足がぱんぱんだよ…、やっぱりもうちよつと運動した方がいいかな…」

「あ…そっか…。恭二君普段は勉強ばかりなんだもんね…」

「あはは…明日は筋肉痛かなこりや…」

「なあ…医者勉強って…やっぱり大変なのか？」

「そう…だね…、カルテとか全部ドイツ語だから…医学と一緒にドイツ語も勉強してるんだ。今は英語とかもあるけど…、父さんが医者になるならドイツ語は必須だって言ってるからさ…」

「へえ…大変なんだ…。ボクなんか三年間寝たきりだったから…中学の勉強だけで手一杯だよ…」

「でも木綿季は覚えが早くて助かるわよ？ 教えてるこつちも楽だもの」

「でも数学は苦手だよな？」

「う…だって…ボク、算数で止まっちゃってるもん…。関数とか方程式とか…まだよくわかんないよう…」

「大丈夫だ、俺が手取り足取り教えてやるから」

「うう…ボク…数字だけは苦手なんだよ…」

「何言ってるんだよ、来月明日奈からテスト出されるんだからな？
ちゃんと勉強してもらわないと困るぞ？」

「分かってるよー！でも難しいものは難しいんだもん！」

四人は他愛のない会話に身を投じていた。

恭二には最初に出会った頃の緊張はすっかりなくなっており、この関係にすっかり馴染んでいた。

「そういえば…皆はもう…進路とか決まってるのかな」

恭二が進路についてこの場にいるみんなに尋ねてみた。

「俺は…そうだな…今勉強しているVR技術を活かした仕事をしてみたいと思っている」

「ボクはまだ考えてないかなー…、ついこの前まで入院してたから…まだそういうのよくわからないや」

「私も…、一応大学に進学はするけど…その先のことについては…まだ何も考えてないわね…」

「そう…なんだ…」

恭二は複雑そうな表情を浮かべていた。何か悩みを抱えているかのようにも見えた。

「恭二は…医者になるんだろ？」

「…え？…ああ…うん…」

恭二はバツが悪そうに返事を返した。その表情から察しがいい木綿季は何かあるんだなと思い、気になったことを聞いてみた。

「恭二は…医者その他にやりたいことがあるんじゃないの？」

「え…？」

いきなりの射つた質問を投げつけられ、恭二は目を丸くして驚いた。

何も言っていないのに何でこの子は僕の考えがわかったんだろうと思っていた。

「よく…わかったね…すごいな…木綿季ちゃんは…」

「…コイツは昔から察しが良すぎるんだよ。おかげでコイツの前では嘘はつけないんだ…」

和人がそう言うと、木綿季はえっへんといったポーズで自慢げな表情をしていた。

別に褒めているわけではないのだが、何故か偉そうだった。

「参ったな…うん。そうだね…、僕の父さんは…自分の病院を本当は兄貴に継がせたかったんだ。でも…兄貴は昔から体が弱くて。それだけならまだ良かったんだけど…2年前の…SAO事件に巻き込まれてから…完全に父さんは兄貴のことを切り捨てたんだ」

「えっ…」

「SAO事件だって…!? 恭二の兄さん、SAOサバイバーだったのか!?!」

「あ……うん……そうだけど……、もしかして君たちも……？」

「木綿季は違うけど……俺とシノンはそうだ。俺は第1層から、シノンは76層からあのデスゲームを戦い抜いてきた」

「えー、ボクだって最後の最後、ちよこつとだけいたじゃん！ 和人と決闘したじゃんかー！」

「あれは本当に最後の最後だったろ！ 決闘したって言ってもお互い手加減してたんだから、本当の決闘じゃなかったろ？」

「ぶー、そうだけどさー……」

木綿季は頬を膨らませて機嫌を損ねていた。

確かにほんの少しの間だけだったかもしれないが、ボクだってあのSAOにいたんだ。

仲間外れにされている気がして少しだけむすつとしてしまった。

「驚いたな……まさか僕以外の皆が……あのSAOの世界にいたなんて……」

「恭二の兄さん……どんなキャラだったんだ？」

和人から兄のことを聞かれると、恭二は表情を曇らせて目を細めてしまった。

「……あまり褒められたことはしてなかったな……、うちの兄貴は……」

「え……それって……どういう……」

恭二が神妙そうな表情を浮かべると、他の三人の表情にも緊張が

走った。

あのデスゲームが繰り広げられたSAOにおいて褒められることではない行動、それが意味することはつまり…。

「うちの兄貴は…殺人ギルドに所属して幹部をやっていたらしい。武器はエストックを使っていて…しよっちゆうプレイヤーを殺してたらしいよ…。仮にも命を救うはずの…医者の子だっというのに…」

殺人ギルドというワードを聞いた瞬間、和人と詩乃の表情が強張った。

額から冷や汗が垂れて、首筋を伝って濡れた個所から体温を少しだけ奪っていった。

「さ…殺人ギルド…、ま…まさか…恭二の兄さんの所属してたギルド、…それにエストックってことは…。まさか…君の兄さんって…」

「殺人ギルドラフィン・コフィン笑う棺桶の幹部、赤眼のザザ。兄貴は自分のことをそう言ってたよ…」

「あ…赤眼の…ザザ…!? 俺が…ラフィン・コフィン笑う棺桶掃討に赴いたときに…牢獄送りにしたレッドプレイヤーの名前だ…！」

「え…!？」

和人がSAO時代でデスゲームに身を投じてた時、殺人ギルドラフィン・コフィン笑う棺桶はSAO全プレイヤーにとって大きな脅威となっていた。

攻略組、生産組お構いなしに襲い掛かってはPKをし、その殺戮を楽しんでいたのだ。

そこで攻略組が強いプレイヤーを集め、ラフィン・コフィン笑う棺桶掃討作戦を決行

したのだ。

その場にはクラインやアスナ、和人ことキリトも勿論含まれて
いた。

レベルも装備も圧倒的に攻略組の方が勝っていたが、笑う棺桶の
急な不意打ちにより、攻略組は不覚を取った。

途中なんとか態勢を立て直したものの、その戦場は血みどろの地獄
となり、攻略組は10人余、笑う棺桶からは20人余の死者を出す凄
惨な結果となった。

生き残った笑う棺桶メンバーは逃げたギルドリーダーの「Poh」
を除き、全員拘束され牢獄送りの刑となった。赤眼のザザも、その中
の一人だった。

「そう…だったんだ…」

「あの時の地獄は…忘れられない…、そこで…俺は…」

「か…和人…?」

木綿季が和人の様子がおかしいことに気が付いていた、よく見ると
手が細かく震え、額からは無数の冷や汗が流れ落ちていた。

「か…和人！ 大丈夫…!?!」

木綿季は和人の手をぎゅっと握りしめた。

その手から温もりが伝わってくると和人は正気に戻り、少しずつ心
を落ち着かせていった。

「あ…、う…ごめん…ちょっと…その時のことを思い出して…」

「…その時のコト…?」

「……あれから……もう何年も経ってるしな……話しても……いいか……」

和人は表情を変え、姿勢を正してSAO時代のことを話し始めた。当事者以外に話していない、和人の背負ってきた「罪」のことを……

「木綿季……シノン……恭二……。俺はSAOで……あのデスゲームが行われた世界で……プレイヤーを……人を四人殺したんだ……」

「えっ……」

木綿季を含め、詩乃と恭二も信じられないような顔を浮かべていた。

「こんな優しい和人が、ゲームの中とは言えプレイヤーを……人を……殺した……?」

「……最初は……さつき話した笑う棺桶討伐の時の……名前さえ知らないメンバー二人に手を掛けた。目の前で……攻略組のメンバーがやられそうになってるのを見ちまって……、たまらず俺は剣を振るつたんだ……」

「……………」

「次は……笑う棺桶ラフィン・コラインのスパイでもある、血盟騎士団のメンバーだった。訓練と称して俺を殺そうとしたんだ。幸い俺は駆け付けたアスナによって命を救われたんだが、そのメンバーは命乞いをした。でもその命乞いは演技だったんだ。騙されてしまったアスナは武器を吹き飛ばされて絶体絶命になった。俺は……そこでアスナの命を守るために……その男の命を……奪った」

「かずと……」

木綿季が心配そうな表情で和人を見つめていた。そして確信した、和人がボクに隠していたことはこれだったんだと。

「…最後は…血盟騎士団の団長…ヒースクリフこと…SAOを作った張本人、茅場昌彦だった…。75層のフロアボスを倒した後、俺は茅場の正体を見破った。そこで…俺は茅場と決闘デュエルを行い、勝利した。あの世界では…決闘で勝利しても…HPがゼロになるから、茅場は…あの時…死んだ。俺が…この手で…殺したんだ…」

和人の話を聞いた三人は、すっかり黙り込んでしまった。

これから楽しく焼き芋を楽しむはずだったのだが、とてもそんなことをする空気ではなかった。

「…これが…俺が…、あのデスゲームが行われた世界で犯した…拭いようのない…罪だ…」

「私が…あの世界に迷い込む前に…そんなことがあったのね…」

「黙ってて…ゴメン。でもこれで分かっただろ…、俺は人殺しなんだ…。たとえゲームの世界であったとしても、俺は…人を殺してしまったんだ！ 法的に裁かれなくても…俺は…四人の人間の命を奪った…人殺しなんだよ!!」

涙を流しながら自分の過去の罪を暴露した和人を、木綿季が抱き締めた。抱き締めた和人の体は震えていた。

「ゆ…うき…。」

「やっと…話してくれたね…和人の…秘密…」

「え…」

「ボク…知ってたよ？ 和人が…何か重要なことを胸の中に仕舞ってるコト。それが…ボクの方からは探っちゃいけない闇だっ…ても…でも漸く…打ち明けてくれた…」

「…木綿季は…俺が怖くないのか…？ 俺は…人殺しなんだぞ…」

「…何言ってるのさ、和人は僕の世界で一番大好きな人だよ？ 怖くなんかないよ。それにさ、和人がその人たちを倒さなかったら…アスナや…他の皆が…死んじゃってたかもしれないでしょ？ だったら…仕方がなかったんだと思うよ？」

「でも…でも…俺は…俺は…！」

「だめだよ和人、思いつめすぎたら…和人の…悪い癖だよ…」

「う…ぐっ…お…、お…れ…は…」

和人は大粒の涙を流していた。

いつだったか、ALOで初めてユウキと二刀流で本気の決闘デュエルをしたとき以来、再び木綿季の胸を借りて和人は泣いていた。

その泣いている姿を見た詩乃も、心に決めたことがあった。

和人はこうして、過去の自分の罪をあらわにした。なら…私も…自分のことを…話さずにはいられない…。

「キリト…、私も…過去に拭いきれない『罪』があるの…」

その決意の表情をした詩乃を見て、恭二が止めに入る。

「し…詩乃！ それは話したら駄目だ！ そんなことをしたら君が…」

！」

椅子から立ち上がった必死に説得に入る恭二を、詩乃は首を横に振って制止させた。

「いいの…恭二君、既に…木綿季にはもう…話したことだから…」

「え…そう…なんだ…」

「第一…不公平だわ…、キリトだけが…自分の罪を話したっていうのに…私だけ秘密にしたままなんて…」

「……わかった。詩乃がそう言うのなら…僕も…止めない…」

「ごめんね…ありがと…恭二君…」

恭二に笑顔でお礼を言うと、詩乃は7年前の強盗事件のことを語り出した。

たまたま寄った郵便局に強盗が押し掛けてきたこと、自分の母親が殺されそうになっていたこと、母親を助けようと必死に抵抗したと、強盗の落とした銃を使って犯人を殺してしまったこと。そして…その後抱えてしまったトラウマの事もすべて…。

「……以上よ…、私もキリトと同じ…。過去に人を殺したことがあるの…、VRの世界じゃなくて…現実で…」

「……」

和人の部屋は重苦しい空気に包まれていた。

その重たい雰囲気を読み去るかのように、恭二が口を開いた。

「でも…それは詩乃の所為じゃない…。悪いのは…押しかけてきた強盗だ…。和人の方だって…悪いのはレッドプレイヤーじゃないか。二人に…罪はないと…僕は思う」

「ボクも…少なくとも和人とシノンのお陰で…救われた命があるのは確かだよ？ ボクは…そっちの方を喜ぶべきだと…思うな…」

「……………」

詩乃と和人の表情が少しだけ明るくなった。

二人は罪を背負い過ぎていたのだ、当人以外から見ればあの状況は仕方なかったと言える。

実際に手を掛けていなければ被害はもつと甚大になっていたろうし、自分自身の命すらも奪われていたかもしれない。

「…そう…だな…、サンキユな…二人とも…」

「…大した気休めにもなっていないと思うけど…少しでも気が楽になったのなら…よかったよ」

「うんうん、自分の中に溜め込んだじゃ…ダメだと思ふな。吐き出して楽になるなら…吐き出したほうがいいと思う」

「…そうね…私も…前よりちよつとだけ…肩の荷が下りた気がする…」

木綿季と恭二のフオローもあり、二人の重苦しい感じはなくなっていた。

時刻は夕方の16時を回っており、既に外は夕焼けで真っ赤に染まっていた。

「あ…そうだ…、焼き芋…やるんだったよな…」

「あ！ すっかり忘れてたね！ やろうよ！ 美味しいもの食べれば悲しいことなんて忘れちゃうよ！」

「そう…ね、景気づけに…とびつきり美味しいの、焼いちやいましょうか」

「賛成、僕…焚火も焼き芋も初めてだ…ちよつとわくわくする」

先ほどまで和人の部屋を包んでいた重苦しい空気はすっかりなくなり、これから楽しい焼き芋が始まるや否や、すっかり明るい空気へと包まれていた。

和人と詩乃は互いに、過去に人を殺したという罪を暴露した。

しかしその場にいる全員、誰も二人を責めようとはしなかった。

表に吐き出したことよって少しだけ楽になったのは事実だが、やはり完全にその罪を乗り越えていくためには、たくさんの時間と当人たちの心の成長が必要になるだろう。

しかし二人は幸いにも、時間にも周りを取り囲む環境にも恵まれていた。

支えてくれる友が、仲間がいる限り、どんな壁も乗り越えられる。

一時的に阻まれて、立ち止まってしまったりすることはあるかもしれない。

しかしどんなに時間を掛けても、确实その壁を乗り越え…いや、壊して進むだろう。

この先…どんなことが…あろうとも……。

第49話く詩乃の気持ちく

西暦2026年10月31日土曜日 午後16:15 埼玉県川越市桐ヶ谷邸

和人を含む、木綿季、詩乃、恭二、直葉の五人は和人の母親、翠の監督の下、庭で焼き芋をすることを許可してもらった。和人と直葉は実に数年ぶり、木綿季、詩乃、恭二は初の焼き芋体験となった。桐ヶ谷邸の庭には、過去にキャンプに行ったときに使った焚き木の余りとそこらに落ちてる朽ち木と落ち葉がかき集められ、焚火の準備が黙々と進められていた。

桐ヶ谷邸の庭は結構広く、木々が何本か植えられ、池もそれなりに大きいものが拵えられており、剣道場も敷地内にあることもありかなり風流漂う和の雰囲気を感じさせていた。適度に落ち葉が舞い降り、夕陽が差し掛かってたこともあり、如何にも今の季節が秋真っ盛りといったものを感じさせる。

「なんかわくわくするねー!」

「そう思うなら、お前も少しは手伝わんかいっ」

木綿季が期待に胸を躍らせ、腕を体の後ろに回して組みながら準備している和人たちを見ていた。和人は木綿季に見てないで手伝えとよう促して軍手とトングを差し出した。差し出された軍手もトングも長年使い込まれて、煤だらけになっているものだった。

「えー、でもボク…やり方わかんないもん」

「なら俺が教えてやるから手伝え」

「えく…」

「それなら僕にやらせてもらっていいかな、こういうの…一度やって

みたかったんだ」

木綿季が手伝いを渋っていると、恭二が間に入って助け舟を出した。自分から手伝いを名乗り出た恭二は、軍手を両手にはめて、トングで火の燃料となる薪を焚火をする地点にくべ始めた。

「あ、恭二ちよつとまっつけてくれ。火を効率よく燃え広がらせるための裏技があるんだ」

全員が裏技？と首をかしげると、和人はビニール袋の中からガムテープらしきものをこれ見よがしに取り出した。取り出したガムテープをビビーツと伸ばすとその形を円の形にこしらえた。一体何をすると言うのだろうか。

「へへ、まあ…見ててくれ」

直径20センチほどの大きさの、円状の形をしたガムテープを地面に置くと、和人はそこにチャツカマンで火を点けた。灯された火は少しずつじわじわと、ガムテープ全体に燃え広がっていった。

「今だ恭二、細い薪をくべてくれ」

「わ…わかったっ」

そう言われた恭二は和人の指示通り、細め、普通、太めの薪の中から細身のものを取り出して、燃え続けるガムテープのある場所にくべ始めた。炎は薪に燃え移り、白い煙を上げながら薪全体に燃え広がっていった。いかにも焚火といった感じになっていった。

「おー！…すごいー！」

「へえ…慣れたものね…」

木綿季と詩乃は感心していた。和人は食べ物のこととなると、どん

なスキルでも身に着けるのだなと感心していた。そして、そんなことならVRMMOでも料理スキルを取ればいいのにも思っていた。

「あとは…火が広がるにつれて…落ち葉を乗せる…。よく勘違いされがちなんだけど、芋そのものを火に突っ込むと周りが焦げるだけで中は生になっちまう。木や落ち葉が燃え尽きて出来た灰を使うのが焼き芋のコツさ」

和人は恭二がくべた薪に、落ち葉をビニール袋2袋分を投下した。投下した落ち葉を空気がしっかり通過するようにトングで積み方を、慣れた手つきで調節していった。

「和人…すごいね…」

「俺だってゲームばかりしてるわけじゃないんだぜ？アウトドア経験はこれでもある方なんだからな」

自信満々で落ち葉を掻きわけける和人を尻目に、恭二は感心しながらその様子を見ていた。女性陣が遠くで見守り、男性陣が炎の近くで作業をしている。どこのキャンプでも見るような光景が広がっていた。

「おし、薪や落ち葉が灰になるまで少し時間がかかる。木綿季、シン、スグ！悪いけどこの芋を水でキレイに洗ってきてくれ！」

「お芋洗うの？」

「ああ、直接口をつけるんだから泥が付いたままなわけにもいかないだろう？間違っても洗剤なんか使うなよ？」

「つ…使わないよ！和人ボクを馬鹿にしすぎでしょ！」

「お前ならやりかねんからな」

「ぶー、和人のいじわる…」

直葉がまあまあとなだめると、不機嫌そうに木綿季達3人は両手に芋を持ちながら、台所へと姿を消していった。外の蛇口を使ってもよ

かったのだが衛生上、台所の水道を使うことにした。和人と恭二は引き続き、焚火の灰を育てていった。翠は和人と恭二が仲良さそうに作業をしている様子を、微笑ましそうに庭の縁側に腰を落ち着けて見ていた。

「それにしても…和人が同年代の男の子を連れてくるなんて…意外だわ」

「え…そうなんですか…？」

のほほんとした顔をしながら口を開いた翠に、恭二は首を傾げた。和人のコミユ力なら結構気の合う友達とか結構いそうなものなのになと思っていたようだ。

「ええ…何でかはよくわからないけど、和人の連れてくるお友達は女の子ばかりなのよ。男の人の友達っていったら、和人よりもかなり年上の人ばかりだったものねえ…」

その事実を聞かされた恭二は、疑いの眼で和人を見つめた。この世にそんなに女の子の友達ばかりいるような、ゲームの世界でしかありえないようなシチュエーションを持った男がいるなんて…と思っていた。彼女がいるのに羨ましい、いやけしからん。この時ばかりは恭二は和人に軽蔑の眼差しを送っていた。

「和人…君ってやつは…」

「いや待て、ちよつと待て。確かに母さんの言った通り俺は女子の友達が多い、それは否定しない。だが…恭二…、今俺のこと絶対に”タラシ”だとかなんと思っただろ」

恭二は和人にそう言い返されると、視線を逸らし、口笛を吹きながら焚火をトングでつつき始めた。微妙な空気が辺りに流れると、恭二の顔が次第に苦笑いへと変わっていき、やがて少しずつ切なさを感じ

させていった。そして視線を和人の方に移し、ゆっくりと自分の心情を語り始めた。

「あはは…でも友達が多いのは…正直羨ましいよ。僕なんか…友達つて言えるのは詩乃一人だけだった。それも…きつかけがなければ…声を掛けることすらもなかった。だから…友達がたくさんいる和人が羨ましいよ」

そんな恭二を見て、和人も切ない顔になってしまった。和人も、自分が桐ヶ谷家の養子と知ったときに塞ぎこみ、友達がいない時期があった。その時の幼少時代を思い出していた。当時の自分の姿を、少しだけ恭二に重ねてみていた。しかし今は違う、友達に…仲間に、恋人に、家族に恵まれている。それは…目の前にいる恭二も同じことだ。

「…なあ恭二、俺たちはさ…もう”友達”なんじゃないか？」

「え…？」

同じように落ち葉を掻き分けながら口を開いた和人の言葉に、恭二は目を丸くしていた。こんなことを言われたのは初めてだった。この時恭二が感じた感覚は、背中がむずかくなるような、こっぴടുかしい感じがした。でも…嫌いじゃなかった。

「まだ会って半日しか経ってないけどさ…、俺たちもう…”友達”だよな…？」

「え…、えっと…そう…なのかな…」

「ああ…、少なくとも今日、俺は恭二達と川越を見て回って、楽しかったと感じた。一緒にいて楽しいと想える関係なら…それはもう友達だと思っけどな…」

和人がほっこりした表情で焚火をつついていると、恭二の瞳が潤み

はじめていた。僕に…友達、僕と一緒にいて…楽しいと言ってくれた…友達。心の中でそう思うと、自然と目から涙があふれてきた。

「恭二…？」

「あ…ううん、何でもない…大丈夫…」

恭二は泣いてる顔を見られないように和人からも、翠からも見えないうい角度で服の袖で顔をこすり、涙を拭いた。恭二にとっても、男の子の友達が出来たのは小学生以来だろうか。気の合う友達などいなかった。むしろ…内気な性格が災いしていじめにも遭った。そんな幼少時代を過ごしていた。

「…俺も久しぶりだよ…、同年代の男の子の友達なんてな…。これからもよろしくな…恭二」

そう言うと和人は右手を恭二の前に差し出した。恭二は差し出された手を見ながら、照れくさそうに、そして少しばかり困ったような表情を浮かべながら、ゆっくりと和人の手を握り返した。

「うん…よろしく…、和人…」

「今度…泊まりに来いよ、恭二なら…いつでも歓迎するからさ」

「…わかった、その時は…是非お邪魔させてもらうね」

二人は夕陽をバツクに硬い握手を交わした。男同士の、友情の握手を。翠はその様子をほっこりとした笑顔で温かく見守っていた。それと同時に芋を洗い終えた木綿季たちがいいタイミングで戻ってきた。

「かーずとー！ お芋全部洗ったよー！ 紫色でピカピカだよー！」

木綿季が芋の乗ったザルを頭の上に掲げて上機嫌になっていた。

芋はこのまま生でも食べられそうならキレイに洗われて、ピカピカツツヤになっていた。

「ボクがほとんど洗ったんだよー！ エツヘン！」

木綿季はどんなもんだいと洗った芋を目の前に差し出した。和人はその中から一つだけ掴み取ると、まじまじと芋を見つめた。少しの土もついていない、この洗いつぶりなら文句はないだろう。

「うん、隅々までピカピカだ。これなら美味しく焼けると思うぞ。いい仕事をしたな、木綿季」

「ホント？ やったー！」

和人に褒められた木綿季は嬉しそうに喜んだ。自分も何かしら貢献出来たことが嬉しかったようだ。焚火の方も落ち葉と朽ち木がいい感じに灰化してきて、いよいよ本格的に芋投入といった時間になっていた。

「ようし、焚火の方も準備完了だ。そしたら…各々好きな形の芋をとってくださーい」

和人の指示通り、この場にいる全員が自分好みの芋を手にとった。木綿季が一番大きいものを、詩乃は食べやすそうな形をしたものを、恭二は芋らしい形をした芋を、直葉は少し奇抜な形をしたものを手に握っていた。

「取ったな…？ そしたらその芋に、この…濡らした新聞紙をぐるぐる巻きつけてくださーい」

次々に自分のとった芋に、濡れた新聞紙をぐるぐる巻きつける。濡れた新聞紙が冷たかったのか、女性陣は手先をふるふる震わせながら

巻き付けていた。

「つめたーい！ 手がかじかんじやうよー！」

「もう少しだから我慢する！ よし、さて次は…このアルミホイルで芋全体を包んでください。2回分の面積で包むと丁度良くなりまーす」

皆言われるがまま、和人の指示通りに銀色のアルミホイルで芋を包んでいった。詩乃、恭二、直葉、翠は手際よくアルミを包んでいったが、木綿季だけ若干苦戦していた。よくみると手持ちのアルミホイルをかなり余分に切り取っていたようだ。まああのままでも熱は伝わるから問題ないのだが。

「よし、あとはこのトングで…、自分の好きな場所に芋を突っ込んで下さい。出来るだけ風通しがいいところに置いた方がよく熱されて仕上がりがよくなるぞ」

「それじゃあ…ボクはここー！」

「私は…ここにするわ」

「あたしは…ここにしようかな」

「僕は…ここにしよう」

「私は…ここにしようかしら…」

和人以外の五人が次々に焚火の中へと芋を入れた。それを確認すると和人も自分のこしらえた芋を木綿季の芋の隣に入れ、残った芋も開いているであろう場所に突っ込むだけ突っ込んだ。そして熱された灰をかぶせてその上から更に落ち葉を掛けて、火力が落ちないように施した。このまま30〜50分ほどかけて、じっくりゆっくり…芋に熱を加えていく。

「よし…あとは…30〜50分ほどこのまま熱を加え続ける」

「結構かかるんだねー」

「ああ、焦って強火なんかにしたら焦げちゃうからな。火そのもので焼くと言うより、この焚火全体の熱で焼いていくって感じだと思ってもらえればいい。60℃ぐらいがベストだ」
「ほえー…」

翠と直葉以外の全員が和人を尊敬の眼差しで見つめていた。和人にこんなサバイバルスキルがあるなんてと。とうの和人本人は俺でもこれぐらいは出来るんだぞと、自慢げな表情を浮かべていた。

「お兄ちゃん…誇らしげに話してるけど…、昔キャンプファイヤーでカレー失敗した事…忘れてるでしょ…」

直葉は呆れた表情で兄を見つめていた。和人にはその昔、泊まりのキャンプで晩御飯のカレーをこしらえたときに水の量を盛大に間違えて、ゆるゆるどころか”カレーっぽい水スープ”が出来上がった黒歴史があった。

「…何でそういう昔のことをほじくり出すんだお前は…」

「へえー、和人って昔は料理出来なかつたんだ」

「あ…あくまでも小学校の時の話だぞ?! 今は…簡単な料理ぐらいなら出来る!」

「ボクにお粥も作ってくれたしね、あれは嬉しかったな〜♪」

「また食べたいなら作るぞ?」

「ホント!? んじゃあ今度はもつと味が濃いのがいいな!」

「…塩分取り過ぎない程度なら…別に構わないぞ」

「やった! 楽しみにしてるね!」

楽しそうに談笑する和人達を見ながら、恭二と詩乃は近くにあった切り株に腰を落ち着けていた。時刻は16:30に差し掛かり、キレイな夕陽が焚火をしている桐ヶ谷邸の庭を真っ赤に染め、優しく照らしていた。照らされた和人達の影が長く伸びていて、すっかり秋の夕

暮れ時の、なんともいえない懐かしさを感じさせる時間帯となっていた。

「何か…賑やか…だね…」

「…うん…そうね…」

「僕…こういう感じに慣れてないけど、なんか…嫌いじゃないな…」

「私も…、あの事件が起きてから…全く笑えなくなってしまったけど…、今なら…心の底から笑える…」

詩乃はそう言いながら、恭二の手に自分の手を伸ばしていた。そして探るように指に辿り着き、恭二の手を握った。それに気付いた恭二も少しだけたじろいたが、詩乃の手を握り返した。二人が握り合った手からは、互いの温かさが伝わってきた。

「…ありがと…」

「…うん…」

「恭二君の手…温かい…」

「…詩乃の手も…その…温かいよ…」

「…うん…ありがと…」

詩乃は好きな人の温もりを感じながら、今の幸せを噛みしめていた。そして心から安心したのか、自然と恭二のいる方向へと自分の体重を預けていった。

「し…詩乃…?…」

「…お願い…、このままで…いさせて…」

「………うん…」

恭二は顔が真っ赤になっていた。非常に嬉しい気持ちでいっぱいになっていた。憧れていた少女から好意を寄せられていることに。それは確かに嬉しい、しかし…やはり心のモヤモヤがとれないでい

た。

(…このまま詩乃をだまし続けてて…いいのか…僕は…)

恭二は薄々と感じていた。遠くないうちに今のこの関係が、変わってしまうことになるかもしれないこと。詩乃に…真実を告げるときが来ようとしていること。そして…自分と詩乃の運命が大きく変わろうとしていることを…。

(…僕は…どうしたらいいんだ…)

程なくして時間が経ち、いい感じに芋が焼きあがる頃合いとなっていた。和人が軍手をはめて「そろそろだな」と言うと、全員の視線が焚火にトングを突っ込む和人へと集まった。

トングはまず和人が入れたであろう位置に突っ込まれ、焼き芋を探していた。そして何かの手ごたえを感じると、位置を調整してその手ごたえのしたところを掴んで一気に引き抜いた。銀色のアルミに包まれた物が姿を現した。

「よし、いい具合だ」

和人が軍手越しに熱々の焼き芋を手を取っていた。その様子を見た面子も、次々にトングを手に取り、自分の入れたであろう場所を探って芋を掘り出した。

「わ…あちやちやちや…」

「すごい熱いわね…」

「軍手は外すなよー？ 60℃の熱でずっと焼かれてたんだからな。素手で触ろうものなら火傷するぞ？」

和人は全員芋を取り出して、アルミと新聞紙を剥がしたところまで確認すると、芋を片手で掲げた。芋の表面は最初に含ませた水分は全てとび、ガサガサになっていた。如何にもどこでも見かける焼き芋といった感じの見た目となっていた。

「えーでは、焼きあがったこの芋を…、皆さんで一緒に食べようと思えます。両手で端っこをもつてくださーい」

みんなは和人に言われるがまま、各々芋の端と端をそれぞれ両手で握っていった。手首にほんの少し力を加えるだけで、持つてる芋が真っ二つに割れる、その寸前まで持つていった。

「…よろしいですねー、それじゃあ…行きます。…せーのっ！」

和人の合図と共に、全員一斉に手持ちの芋を真っ二つに割った。割れた場所からツヤツヤした黄色い中身が姿を現した。ほかほかと湯気が立ち上り、芋独特のほのかな何とも言えない甘い香りが広がっていった。

「うわー！ すごーい！ 中が真っ黄色だよー！ 光ってるよー！」

「美味しそうね…」

「いい香りがするね…、あれだけ食べたけど…ちよつとお腹すいてきちゃった」

「お兄ちゃん！ 早く食べようよー！」

「いつ嗅いでもいい香りだわ…」

その場にいる全員が、焼きあがった焼き芋に心を躍らせていた。じっくりと時間をかけて焼き上げ、芋の成分のでんぷんが、60℃の熱でじっくりと糖分へと変化して、甘さを出していたのだ。その甘さが湯気と共に立ち上り、全員の食欲をそそっていた。

木綿季と直葉は「早く食べようよ！」と和人を急かしていた。直葉はともかく、木綿季は先ほどまで和菓子を食べまくっていたのでそんなに腹が減っているはずがないのだが、しかしここまできて食べないという選択肢はないので、和人は再び皆に合図を送った。

「わかってるよ、それじゃあ皆様、お行儀よく行きましょう：せーのっ」

「いただきますーす」

「いただきますーすー！」

「いただきますーすー！」

「いただきます…」

「いただきます」

「いただきますすっ」

和人の合図で全員一斉にいただきますを済ませ、焼き芋にかぶりついた。予想以上に熱かったのか木綿季は口をつけるなり「あちやちや」と声を上げて熱がっていた。他の面々はフーフーフーと息を吹きかけてある程度冷ましてから口へと運んだ。

「木綿季、熱いからよくフーフーしてからにしろよ？」

「あ、うん。わかった」

和人はそういいながら自分の持っている焼き芋に口をつけた。木綿季はその様子を少し疑問を持って見ていた。あれ？ 和人そういうばフーフーしてないような…？ その記憶は正しく、和人は60℃の熱で焼かれた芋の熱をもろに舌に喰らい、派手にダメージを喰らってしまっていた。

「あつつううああっ!？」

「あはははは！ 自分で言った和人がやらかした！ あはははは！」

「アンタ…、バカでしょ…」

木綿季は和人の反応を見て面白がり、詩乃は呆れた表情を浮かべていた。その他の面々も苦笑いを浮かべながらも、辺りはほっこりとした空気に包まれた。やがて和人は何事も無かったかのように「いや、何もなかったことにして仕切り直し、再びいただきますと言いなながら芋に口をつけた。

「おお…中々…というかすごい美味しいぞ！ これ！」

「ホント！ 熱々すぎだけど…甘くて美味しいー！」

「これは…定期的に食べたくなるわね…」

「ホントだね…甘くて…温かいや…」

「久しぶりに食べたけどやっぱり美味しいね！ 自分たちで焼くと！」

「ほんと…懐かしい味だわ…」

ほくほく甘々な芋に、面々はご満悦だった。夕刻の時間に合わせて味わったため、これから夕飯をいただくには少しだけ抵抗があったが、この最高の夕陽と和風の庭、一緒にいて楽しい面子で食べれたことを考えると、非常に有意義な時間を過ごしたと言えるだろう。

恭二、詩乃、直葉、翠は最初に入れた芋一つを味わった。一方、和人と木綿季はこれから夕飯があるというのに、芋を二つも食べてしまった。この日胃の中に納まった食べ物の量は一般人が一日に食べていい量をはるかに超えていた。しかし、夕飯は夕飯で全然食べられるという。よく太らないものだ。

詩乃と恭二はお土産に何個か焼いた芋をもらい、来た時と比べて随分と大荷物になっていた。流石にいい時間なのでそろそろ帰ることにしたようだ。詩乃にいたっては二日連続でお世話になるわけにもいかず、恭二は夜には勉強をしないといけないので、なんやかんやで忙しいのである。恭二と詩乃は帰り支度を始め、桐ヶ谷邸を後にしようとしていた。

「それじゃあ…僕らはそろそろおいとまさせてもらいます」
「昨日の晩から…何から何までお世話になりました」

恭二と詩乃は翠たちに対して丁寧に頭を下げた。二人にとって、この日は大変に充実した一日であった。温かいものをたくさん受け取り、桐ヶ谷家に心から感謝をしていた。

「また…遊びにこいよ」

「詩乃と恭二ならいつでも大歓迎だよ！」

いつでも歓迎といった桐ヶ谷家の態度に、二人にまた笑顔が零れていた。恭二と詩乃は、家族つていいものなのだなとしみじみ感じていた。一人暮らしの二人には、今日の出来事は本当に心から温かさを感じさせてくれていた。

「うん…またね…和人」

「また来るわね…、それじゃあ…」

二人は再び軽く会釈をすると、桐ヶ谷邸を後にした。恭二は菓子屋横丁で買った土産ともらった芋を紙袋にぶら下げて、詩乃は学校で使っている勉強鞆の中をパンパンに膨らませていた。詩乃達が暮らす東京都文京区へは歩きと電車を含めて1時間弱。ゆっくり帰っても到着は19時頃、一緒に約束していたハロウィンイベントまで十分に間に合う帰宅時間だ。

二人は夕焼けに照らされながら、秋の夕方の歩道を手を繋ぎながら歩いていた。二人とも終始無言であったが、時折視線を合わせると、一瞬照れくさくなり、そしてすぐに互いに笑顔を見せあっていた。

「ね…恭二君、今日は…来てくれてありがとう…」

「ん…、平気だよ。むしろ…僕も楽しい時間を過ごせたし…お礼を言うのは…むしろ僕の方かな…」

恭二はゆつくりと詩乃の方を向き、まじまじと視線を合わせて、笑顔でお礼の言葉を送った。

「ありがとう…詩乃、今日は…とっても楽しかったよ」

面と向かってお礼を言われた詩乃は、恭二の顔を直視できずに視線を逸らしてしまった。そして次第に顔が耳まで真っ赤に染まっていった。恭二を異性として認識してから、その一つ一つの行動が詩乃にとっては何もかもドキドキしてしまい、非常に心臓に悪くなっていた。

「え…と…、わ…私も…楽しかった…よ…？」

「…ならよかった…かな…」

互いの気持ちを伝えた二人は、再び自宅への道を歩いていった。この時の詩乃は、何やら考え事をしている様子だった。そしてしばらく時間が経つと表情を変え、歩いていた足を止めて、意を決したように恭二の方を向いた。手を繋いでいた恭二は自分の腕が急に後ろに引っ張られたので、不思議に思い振り返って何事かと確認する。詩乃が目を瞑って何やら小さい声で呟いていた。

「……詩乃？」

恭二が首をかしげながら詩乃の様子をうかがっていた。一体何をしているんだろう？ 何を呟いているんだろう？ 詩乃は自分に何かを言い聞かせるように、ひたすら小さい声で呟き続けた。そして…やがて眼を大きく開けた。

「あ…あの…、恭二…君！」

「は…はい！ 何でしょうか…！」

詩乃の改まった態度に、恭二は思わず畏まってしまった。詩乃の表情があまりにも真剣だったからだ。これから何か重要なことを言われるということを知っていた。何を言われるんだろう、こっさりお土産の芋を取り出すときに大きいのとすり替えたのがばれたのだろうか…？

「あ…あのね…私…」

「う…うん…」

詩乃の体がふるふると震える、一世一代の大勝負と言わんばかりに、心の底から叫びたい言葉を口から出そうとしていた。あと一歩…あと一歩…！

「わ…私…、その…恭二君のことが…！」

恭二の心臓もバクバクになっていった。芋のことなんかじゃない、詩乃は…何か自分に大事なことを伝えようとしている。それが何かどうかは…恭二も悟っていた。もしそうだとしたら…女の子の口から言わせていいものなのだろうかとも思っていた。しかし恭二には自分の口から言い出す勇気がなかった。

「きょうじ…くんの…ことが…」

詩乃は勇気を振り絞って、その先の言葉を出そうとした。

次の一言だ、その一言を伝える。ただ一言「好き」と伝える。ほんの少しだけ勇気をだせ、詩乃！恭二君は待っていてくれてる！ 勇気を…勇気を…出すんだ！

「僕の…ことが…？」

「きよ…きょうじ…くんと…と…！」

恭二はただひたすらに、詩乃の口から出てくる言葉を待った。

「恭二君と…ALOで…一緒に遊びたいな…って…」
「…え？」

詩乃は告白に失敗した。ただ一言「好き」と伝えるだけなのであったが、その一言を言い出すだけの勇気がなかった。詩乃は恭二が自分に対してどんな感情を持ってきているかを、ある程度感じ取っていた。しかしやはり言葉にして伝えないと伝わらない部分があるのも事実だ。だから勇気を振り絞って伝えようとしたのだが…、最終的に妥協した答えに辿り着いてしまっていた。

「僕と…ALOで…？」

「え…あ…う…、うん…。恭二君最近GGOやってないみたいだし、コンバートしてALOにキャラを引き継ぎすれば…、課金切れでキャラ削除されることも無いし、ALOはGGOほど殺伐としてないから、二人でのんびり遊べるかなって…思ったの…」

詩乃からのまさかの回答に恭二は言葉を詰まらせていた。一瞬思考が停止したが、詩乃が何故ALOに誘っているかという理由を聞いているうちに、平静さを取り戻し、話を聞き続けた。

「そ…そうだね…。GGOは前とほとんど仕様が変わっちゃったし。AGI特化型じゃ限界が来てもうほとんどやってないから、これを機会に…ALOに行くのも…ありかな…」

「ほんと?! ALOはGGOより月額も安いし…自由度も高いし…、あとプレイヤースキル次第だからステ振りがそのまま勝率に繋がるわけじゃないの。だから恭二君の戦闘スタイルの確立次第では独自

の戦い方を編み出せるかもしれないよ！　あと…やっぱり空を飛べるのが気持ちいいよ！」

恭二から肯定的な回答をもらった詩乃はペアつと笑顔になった。

本当は好きと言いつけなかつた気まずさを誤魔化すための話だったが、結果的に恭二と遊べるきつかけとなったため、別の意味で嬉しい結果となった。柵から牡丹餅とはまさにこのことである。

「そう…だね…、武器はどんなのがあるの？」

「んと…私は弓を使ってるかな…。種類は…片手剣、細剣、両手剣、太刀、ダガー、ナックル、槍、斧、鈍器…杖。確かこれだけだったはずよ」

「…随分と多いね…」

「GGOほどじゃないと思うわよ？　あつちは同じカテゴリの武器でも…弾数とか射程とか連射速度とかブレとかいろいろあるから…、まあ…ALOも細かい数値を気にし始めたらきりがないけど…」

「僕の場合…キャラをコンバートするから…GGOでのステータスが影響されるのかな…」

「そう…だね…、恭二君は…AGI特化型だから…ALOでも速さを売りにした武器が相性いいかもしれない。例えば…ダガーとか…？」
「ダガーか…、確かに速そうだけど…ライフルと同じ感覚ってわけには…いかないよなあ…。一応コンバットナイフも使ったことはあるけど…」

「まあ…その辺に関しては…周りに優秀な先生たちがいるから…多分大丈夫じゃないかしら…？」

「…それはもしかして…和人達のことかな…」

詩乃が笑顔で「ご明察♪」と言うと恭二は俯いてしまった。中距離銃を得意としていた彼が、今度はリーチの短いダガーを片手に戦場を駆け回ると言うのだ。GGOは重火器がメインのゲームな為、わざわざリスクを冒してまで近接戦闘を仕掛ける変わり者はまずいない。

そんなテクニクがあるならGGOではなく他のゲームをやるべきだ、とまで言われる始末である。

仮にダガーが自分のスタイルと馴染んでいくとしても、元SAOPレイヤーの和人たちが先生になるとあつては、非常に厳しい訓練が待ち受けているに違いない。何しろSAOを生き延びた連中だ。訓練にも熱が入るだろう。勉強ばかりしてる自分にそれが耐えられるのかが心配になっていた。

「厳しそうだね…和人の訓練…」

「私も当時一緒に付き合ってもらったけど…、スパルタに近かったわよ…」

詩乃が遠い目で夕陽を眺めていた。気のせいかその眼に光が宿っているようには見えなかった。その様子から察するに、骨の髄まで戦闘訓練を叩き込まれるのであろう。しかし、恭二はそれでもGGOで地道過ぎる作業を繰り返し返しているときと比べたら、幾分か楽しくなるのだろうかと感じていた。

今度は友達がいてくれる、GGOにいたときは毎月の月額を払うため、自分が最強を目指すため、必死にゲーム内マネーをリアルマネーにペイバックする毎日であった。でも…ALOなら…本当の意味でゲームを楽しめるかもしれない。そう感じていた。

「…でも楽しそうだし…今夜帰ったら、シユピーゲルをコンバートするよ。あ…その前にソフトを買わないと…」

「なら…駅前の適当な店で買いましょ、今回は特別に…私がプレゼントとしてあげる！」

「え…？ いやいや…そんな悪いよ…、僕だつてソフト買うお金と、月額をしばらく払い続けるぐらいの蓄えはあるし…」

「んーん、いいの！ 今回は私に見栄を張らせて？」

そう言いながら詩乃は恭二の腕に抱き着いた。体が密着している

状態となり、抱き着かれた恭二は急なことに驚きを隠せなかった。詩乃の柔らかいモノが腕に当たっていることに、詩乃は気付かないでいた。

「し…詩乃？」

「ん…？　どうかした…？　恭二君…」

「い…いや…何でも…ない…。えっと…そしたら…お言葉に甘えちゃおうかな…」

「はい、お言葉に甘えられちゃいます♪」

恭二は何回ドキドキすればいいんだろうと思っていた。確かに僕は詩乃の事が好きだ、しかし今日の詩乃は何か変だ。今までこんなに感情豊かに自分に話しかけてくれることはなかったし、ここまで積極的にスキンシップを取ってくることも無かった。

多分…和人や木綿季ちゃんが…詩乃の背中を押したんだろうな…。余計なことをしてと怒ればいいのか、切欠を作ってくれてありがとうと言えいいのか…、素直に喜んでいいのか…ちよつとわからない…。

「恭二君？　どうしたの？　ぼーっとしちやって…」

「あ…うん大丈夫、何でもないよ。…さ…帰ろうか…」

「…うん…、帰りましょ…」

二人は夕日に染まる川越の街を、三度歩いていった。途中駅前の店でALLOを購入し、電車を何本か乗り継いで、自宅のある東京都文京区へと戻ってきた。恭二は詩乃を自宅まで送り届けてから自分も家路についた。詩乃に買ってもらったALLOのパッケージを見つめながら、一歩ずつ足を自宅に向かい動かしていった。

西暦2026年10月31日土曜日　午後18:55　東京都文京

区　恭二の自宅前

しばらく歩き続けると、自宅の扉の前へと辿り着いていた。カードキーを差し込み、パスコードを入力。ピーガシャンという機械の音がすると、ゆっくりと恭二の家のドアが開いた。家の中は少しだけ散らかっていた。和人の整頓された部屋を見た後だと尚更汚く見えてしまう。

「明日…片付けないとな…」

恭二は川越から持ち帰ったお土産をデスクに置くとベッドに横たわった。顔の横にはALOのパッケージが見えた。そのパッケージを手に取ると、しばらく物思いにふけていた。

「GGO以外のVRMMOをやることになるとは思わなかったな…。ファンタジーの世界か…どんな所なんだろ…」

一呼吸置くと、恭二はアミスフィアを手に取り電源を入れ、ALOのディスクをパッケージから取り出してアミスフィアに挿入した。しばらくしてインストールが終わると、今度はそれを頭からかぶり、体をリラックスさせた。しばらくしてALOのランチャーが起動して、いつでも恭二を仮想世界に誘う準備が終了した。あとは、恭二のあの一言を待つだけである。

「よし…、リンク・スタート！」

第50話くTrick or Treat 前編く

西暦2026年10月31日土曜日 午後19:00

恭二は自宅のベッドに体を横にし、リラックスさせてゆつくりと目を閉じた。そしていつもやっているゲームにログインするときのセリフを、今度は違うゲームにログインするために口にしようとしていた。

そう、今夜彼がやるゲームはGGO:、いつもプレイしている「ガングイル・オンライン」ではない。VRMMOソフト「アルヴヘイム・オンライン」通称ALOである。詩乃が恭二と一緒にやりたいと言いだし、川越からの帰りに寄った駅前の総合家電量販店で詩乃にALOのパッケージを買ってもらい、今に至る。

元々は詩乃が恭二に告白をしようとしたのだが、あと一步の勇気が足りずに言いそびれてしまい、その恥ずかしさと気まづさを誤魔化すためにALOをやりたいと言ったのが事の始まりだった。結果的に一緒にゲームで遊べることになったので、詩乃にとっては美味しい結果となった。恭二自身も詩乃と一緒に遊べるのはやはり嬉しいし、GGOもいよいよ引退かなと思いはじめていたこともあり、いい機会となっていた。

恭二の戦闘スタイルはAGI:スピードに特化して中距離のアサルトライフルを乱射するアジリティスタイル。しかしGGOでSTR型、VIT型有利の仕様に少しずつ変わっていくにあたって、AGI型で立ち回るのがだんだん厳しくなり、フレンドもない彼にとってはソロでのMOB狩りがきつくなっていった。高い月額を払い続けるのもバカバカしくなってきたおり、近頃はログインすらしていなかった。

詩乃の口から直接「好き」と言われなかったのは残念だったが、今までよりも長い時間詩乃と一緒にいられることを考えると、これはこれでいいかなとも思っていた。実際恭二は詩乃の気持ちに気付いているし、彼もまた詩乃に対して好意を抱いている。あとは:そう、

きっかけだけであった。

(…うだうだ考えててもしょうがないか…。折角詩乃がプレゼントしてくれたんだ。今はこのゲームを楽しもう)

迷いを無理やり吹っ切るように恭二は目の前のアミュスファイアへと意識を集中させていった。今現実世界にある自分の意識を仮想空間へとゆだねる、そしていつも言っているあのセリフを口ずさむ。

「リンク・スタート!」

恭二が仮想世界に意識をゆだねると、彼の視界に真っ白な空間が現れた。アミュスファイアが自動で一つずつ表示されていくチェック項目をクリアしていき、言語設定を日本語に設定し終わると視界の中央には《Welcome to ALFheim Online!》の横文字が表示されていた。

恭二はALOのキャラクター作成空間に足をついていた。キャラリレーションをした自分の仮想空間のアバターで目の前の光景を見つめていた。しばらくこの空間を見渡していると聞き取りやすい女性の声が、恭二をALOの世界へ誘うための音声ガイドダンスを始めた。恭二はその声に気付くとガイドダンスの言うことに従っていった。

『アルヴヘイム・オンラインへようこそ。最初に性別とキャラクターの名前を入力してください』

「…()…ここら辺は…GGOとあまり変わらないか…。…えつと…」

恭二は目の前に表示された仮想キーボードを操作しキャラクターの作成を始めた。利き手である右手でキーボードを入力する。キャラ名は「Spiegel」性別は男を選択し、決定キーである◎のA

アイコンをタップした。すると次は種族の選択画面が目の前に大きく表示されてきた。全九つの種族が存在するALOでは、この中からどれか一つを選択しなければならぬ。

『それでは、種族を決めましょう。九つの種族の中から一つ、選択してください』

「え……この中から……選ぶの……？」

しまった、完全に不勉強だった、もつと詩乃からいろいろ聞いておけばよかったと思つた恭二はここで早速キャラ作成に躓いていた。しかし今更ここでログアウトして詩乃に連絡をとつて聞き出すのもなんだかカツコ悪いし、だからといって見当違いな種族を選んだら絶対に後悔する。恐らくこういうのは後々で絶対に途中変更出来ない仕様だ。慎重に選ばなくては。

額に冷や汗をかきながら、恭二は表示された九つの種族の一つずつをじっくりと観察していった。歌で仲間を支援することを得意とするプーカ。炎魔法を得意とし、好戦的な種族のサラマンダー。風魔法と治癒を得意とし、空中飛行最速を誇るシルフ。耐久力と金属の採掘、土魔法に長けたノーム。トレジャーハントと幻惑を得意とするスプリガン。闇の中での行動に一番長けたインプ。水中活動と水魔法、そして全種族で一番の治癒魔法を使いこなせるウンディーネ。鍛冶や細工等、生産スキルに特化した能力を持つレプラコーン。敏捷性、敵MOBを操るテイミングを得意とするケットシー。

以上九つの種族とその特徴を見終えた恭二は、顎に指を当ててどの種族にするかを考えていた。戦闘特化スタイルだったことを考えるとウンディーネやレプラコーン、プーカは除外。何の特徴もなさそうなスプリガンとインプもちよつと違う。となるとあとは戦闘に有利な特徴を持ったノームかサラマンダー、シルフかケットシー……。この中から恭二の戦闘スタイルにあった種族が絞られた。

(サラマンダーは攻撃特化だったな……となると他のステータスを犠牲

にしてまで攻撃にまわしてるような気がするな…これは除外つと。ノームは耐久力重視：僕の戦闘スタイルと合わないから除外…。シルフは速いは速いが飛行時だけか…、地上で足が速くないとちよつと僕的には困るな…惜しいけど除外。となると残るは…)

恭二の選択肢に最後まで残った種族は、全種族の中で最速の敏捷性を誇る「ケットシー」だった。AGI特化型だった恭二の戦闘スタイルを考えるとまさにぴったりの種族と言えよう。ただし、恭二には少しばかり気になるポイントがあった。ケットシーの能力というよりも、その外見的特徴の方に目が行ってしまっていた。

「…これ…外せないのかな…」

その視線の先にはその種族を選ぶことで絶対に避けて通れないものが写っていた。そう…ケットシーの最大の特徴である猫耳と尻尾だった。つい最近まで油と埃まみれの炎の匂いがしみついた世界で、銃撃を繰り返していた彼のイメージとは程遠い、可愛らしいオプシヨンがその種族にはついていていた。仮にこの見た目でGGOの世界に降り立ってみるとしようか。…うん、絶対に浮いてしまっている。絶望的にあの世界とは相いれない見た目だった。

「…僕が…猫耳に…尻尾…」

恭二は深いため息を吐きだしながら頭を抱えていた。決してコスプレしにきたわけじゃない、僕はゲームを楽しみに来たんだ。いきなり目的を踏み外しそうになった恭二はステータスを選ぶか外見を選ぶか悩んでいた。外見的にGGOのシユピーゲルと似そうなのはシルフであった。特徴も空を飛んでいるとき限定だが早く移動が出来る。AGI特化の恭二とも相性がいいと言えなくもない。だが恭二は悩みに悩んだ結果、再び種族アイコンをケットシーの場所に戻していた。

「…見た目は多分装備でどうにでも出来る…特徴だけは…裏切れないからな…あはは…」

恭二は半ば投げやり気味に、諦めたようにケットシーのアイコンをタップした。タップされたケットシーの3Dイメージポリゴンがざといポーズを恭二に見せつけた。恭二はその様子を複雑な心意気で苦笑いを浮かべながら見つめていた。もうどうにでもなってしまう、そんな心境だった。

『ケットシー、ですね？ キャラクターの見た目はランダムで生成されます。よろしいですか？』

「よろしいも何も…消去法でもうこれしかないっての…」

悪態を吐きながらも恭二はYESである◎アイコンをタップした。すると最後のメッセージらしきものが表示されていた。内容は「コンバートできるキャラクターがいます。他のゲームからキャラクターをコンバートしますか」といった内容だった。もうGGOに戻るつもりはない彼は迷わず◎アイコンをタップした。

『それでは、ケットシー領のホームタウンに転送します。幸運を祈ります』

「…いよいよか…」

音声ガイドダンスから最後のメッセージが聞かされると、恭二のAvatarは青白く光り輝き、キャラクター作成空間からどこかへと転送された。恭二の意識もこの空間から切り離され、一時的に目の前が真っ白になった。

真っ白になった恭二…いや、シュピーゲルの意識は空高い空間へと投げ出されていた。頭から地上に向かって自由落下運動を行っているシュピーゲルがゆつくりと目を開けると、しばらくして自分の置か

れている状況を理解した。

「…これ…非常に不味くない!?!」

彼の目の前にはケットシー領である島全体が写っていた。他の種族の領地が存在する大陸とは離れた場所に、ケットシー領の首都である「フリーリア」は存在する。鋭角な形をした塔がそびえたっており、どこことなくアラビア風な建物が目立っている様子に見える。他種族が暮らす大陸とは巨大な橋一本でつながっており、ここから交流をしている模様だ。

しかし今のシュピーゲルにとってそんなことはどうでもよかった。今はまずこの落っこちている現状をなんとか打破しなくては。恐らく…いや確実にこのまま地面に激突でもしたら大ダメージを受けてしまうだろう。いや、下手したらゲーム開始早々即死なんて笑えない事態にもなりかねない。それだけは避けなくては、しかし人間は本来空を飛べない、いくらALOでアバターが空を飛べると言ってもいきなりログインして飛べるものではない。シュピーゲルは早々に抗うことを諦め、今の自分の状況を受け入れていた。

「ログインして早々にデスペナルティか…初心者に厳しいゲームだ…トホホ…」

デスペナルティ、自分のキャラクターのHPが全損すると死亡扱いとなり、お金やアイテム、スキル熟練度の一定量の減少などのペナルティが科せられる。GGOにもデスペナルティは存在し、こちらは装備を落とすだけの仕様となっている。しかしどんな形であれ出来れば喰らいたくない、死なないに越したことはないのだ。かつてのSAOであれば特に。しかしコンバートしたとはいえシュピーゲルは初心者、装備はニュービー用の初期服に初期の剣、お金も1000ユルドと初期金額値。普通なら何も失うものはない…はずだった。

「さてよ…失う装備もお金もないけど…スキルは…不味いんじゃないか!？」

そう、他のゲームからキャラデータをコンバートしたシュピーゲルはGGOで上げたステータスが何らかの形でALOに反映されると判断したのである。おそらく彼のAGIを最大限に活かしたステータスが、何らかのスキルに影響を与えているはずなのである。

となると話は変わってくる。これからそのスタイル一本で戦っていかなくてはならない、いきなりそれをデスペナルティという形である程度失うという事態はなんとしても避けたかった。のんびりしている余裕はない、どうにかしてこの落下運動を止めなくては…!

「でも…どうやってええええええええ!？」

飛び方がわからないシュピーゲルにはこの状況を打開するすべがなかった。ああ、せめてパッケージに同梱されている簡易マニュアルか、電子マニュアルぐらいは目を通しておくんだった。マニュアルなんて読まなくて手探りでどうにかなると思いだんだのが間違이었다。まさかいきなりこんな方法で出鼻を挫かれるとは。

その時だった。どうにか落下ダメージを防ごうとあがいているシュピーゲルに近づくプレイヤーの姿があった。水色の髪の毛に見えるのある左右のお下げと猫耳に長い尻尾、そして銀色の胸当てに緑色のコートを羽織ったケットシー族の少女が、落下し続けているシュピーゲルに向かって飛行をしていた。

「シュピーゲル!!」

ケットシーの少女はシュピーゲルの名前を呼びながら彼に近付き手を伸ばした。その少女の存在に気付いたシュピーゲルも藁をもつかむ思いで声のした方向にと手を伸ばした。とにかく今は助かるために必死だった。手の伸ばした方向をよく見ると、その女の子の姿は

どこことなく、現実の世界での友人に似ている気がした。

「キミ…まさか…シノン…なのかい…?」

「うん……って挨拶は後！ もっと手を伸ばして！」

「あ…う…うん！」

シュピーゲルは必死にシノンの手を握ろうと手を伸ばした。シノンも必死に手を伸ばした。急降下しながらなんとか体をシュピーゲルに寄せて少しずつ距離を縮め、ようやく二人の手と手が触れた。触れた手は指を絡め合い、がっちりと掴むとシノンが羽をピンと伸ばし、グライダーのように滑空をした。

それまで急降下していたシュピーゲルはシノンのお陰で垂直落下から脱出することに成功した。かなり鋭角な曲線を描きながら今度は地面と平行に滑空していた。シノンがシュピーゲルを助け出した高度は現実世界の距離において地上との距離30メートルほどの地点であった。あと1秒でもシノンの助けが遅かったらシュピーゲルは地面と激突していたことだろう。女の子に抱えられているという実に男らしくない光景ではあるが初心者によくみられる姿だった。間一髪で地面との激突を避けられたシュピーゲルは安堵の息を漏らしていた。

「ありがとうシノン…おかげで助かったよ…」

「本当に間一髪だったわね…、まあ…自種族領地じゃあ…何があつてもダメージはないんだけどね」

「…先に言ってくれませんか…シノンさん…」

「だって…シュピーゲルが聞かなかつたからじゃない…」

互いに不満を漏らしている二人だったが、内心は嬉しかった。シュピーゲルとしてはログインして早々シノンに会うことが出来たし、シノンに至ってはシュピーゲルと同じ種族だということが嬉しかった。シュピーゲルを抱えながら滑空を続けているシノンは、徐々に地面と

の距離を縮めていき、やがてゆつくりホバリングしたあと、地面に足を降ろしていた。シュピーゲルはというと、いきなり地面に突っ伏してグロッキー状態になっていた。

「…地面だ…地面がある…！」

「…大丈夫…？ シュピーゲル…」

シノンからの心配の声をよそに、シュピーゲルは地面に立てていることに感激していた。おそらくシノンがいなかったらきつと彼は高所恐怖症に陥っていたに違いない。しかしそれよりもシュピーゲルの頭にはとある疑問が浮かんでいた。どうしてシノンはこんなにも早く僕のもとへ辿り着けたのだろうか。

「そうだシノン…そういうえば何で僕のもとにこんなにも早く辿り着けたんだい？ 何にも事前に連絡とか…してなかったけど…」

「それについては…歩きながら話しましょ」

そういうとシノンは夜のケットシー領の首都、フリーリアの街中を歩いていった。シュピーゲルも解せない顔を浮かべたまま、シノンの後を追いかけるように歩を進めていった。フリーリアの街並みは彼が子供の頃に読んだシンドバッドやアラジンで見た古き良きアラビア風の建物が軒を連ねる、独特の怪しさを醸し出していた。

しかしその町並みには白いターバンを巻いた男性や、ケープを被った女性、縦笛でツボからコブラを操るような人の姿は見え、360度猫耳に尻尾を生やしたケットシー族のプレイヤーばかりであった。一見現実世界の過去のアラビア風と思わせておいて、ここはしっかりとファンタジーゲームの世界なんだなというのを痛感させられる。

「…やっぱりみんなケットシーなんだね…」

「当たり前よ、ここはケットシー領なんだから」

「まあ…そうなんだけど…」

現実世界ではシュピーゲルこと、恭二にデレデレのシノンこと詩乃であったが、ここALOではクールなキャラを売りに行っているのか、シュピーゲルに対しても若干ドライな対応だった。確かにシノンの方がALOでは先輩にあたるので、こうした態度をとられてもうなずくしかないシュピーゲルであった。しかしやはりどこか解せなかった。

「それで…何でシノンは…僕の種族がわかったんだい？」

「あ…えつとね…半分は…勘…かな…」

「か…勘？」

「うん…、シュピーゲルのステータスなら…ケットシーを選ぶかなって思ったの。脚も速いし視力も全種族で一番いいからね。私は弓で狙撃するためにこの種族にしたけど、シュピーゲルなら…脚と眼の良さを活かしたスタイルをそのままALOで活かすかなって」

勘など簡単にくくってはいるが、シノンなりの根拠があつてのことだった。昨晚しようと思えば打ち合わせは出来たはずだった。それをし忘れたことに後から気が付いたシノンであつたが、不思議とシュピーゲルならきつとケットシーを選ぶ、そう思っていた。戦闘スタイルもそうであつたが、きつとその心のどこかにシュピーゲルなら私と同じ種族を選ぶかもしれない、選んでくれたらいいなあと、思っていたのだ。

実際シュピーゲルは彼なりに考察して、見た目などの抵抗はありつつも、シノンの思惑通りケットシーを選択した。だからフリーリアの街の上空でシュピーゲルを迎えることが出来たのだ。最も、ちゃんと事前に打ち合わせとマニュアルを熟読しておけば、このような事態は避けられただろうが。

「あ…でもまだわからないことがあるんだ。このゲーム…アバターの見た目はGGOと同じでランダムなのに…何で僕だつてわかったの

？」

「え…その見た目ですんなこと言うつもりなの…？」

シノンには若干呆れ顔でシュピーゲルを見つつも、左手を縦にスライドし、メニューを表示させストレージから手鏡のようなアイテムを取り出すと、シュピーゲルに自分の顔が見えるように手に持たせた。その手鏡に向かってシュピーゲルは身を乗り出すようにして自分の写されているであろうアバターの姿を確認した。

「な…なんじゃこりやあああ!？」

「うふふ…可愛いわよ? シュピーゲル♪」

シュピーゲルはGGOのアバターや現実の恭二と同じく、スラっと長身で一見優男風の見た目をしていた。体は太くなくむしろ細めでそれなりの装備を整えれば女性プレイヤーから積極的に声を掛けられそうな外見をしていた。ここまではVRMMOあるあるな話なのだが…。

シュピーゲルのアバターは一見優男風であるが、見方を間違えると細身の女性の顔にも見える外見をしていた。薄緑の肩まで伸びたセミロングヘア、整った中性的な顔立ちと男キャラでも着ることの出来る女性用装備をつけて、それなりの仕草と所作をしていけば、男性プレイヤーが勘違いして寄ってきそうな清楚なイメージが感じられた。さらにそこに猫耳に尻尾が生えているもんだから余計に女性らしさに磨きをかけていた。シノンはそんなシュピーゲルの見た目を視界に入れて、笑いを抑えられなかった。

「いいじゃない、別に損する見た目でもないんだし。自分好みの見た目にするためにGGOみたく廃課金する人もいるって話よ? どちらかというと得する見た目だと思うから、どうせならロールプレイでも楽しんでみればいいんじゃないかしら?」

「…うう…なんかコレジャナイ感が…」

「ちなみに一回アバターを変える課金でまるまる三ヶ月はALLOが遊べるわよ?」

「…このままでもいいです…」

シュピーゲルはログイン早々疲労困憊となっていた。キャラ作成直後に異界の上空に放り込まれ、即座に垂直落下を味わったかと思えば、しなくてもいい苦勞をし、さらには自分にとっては解せない見た目をしたアバターときたもんだ。HPは減っていないなくてもメンタルのHPがもうすぐ全損しそうになっていた。

そんな様子をシノンもは超ご機嫌で楽しんでた。現実世界の詩乃が見せる笑顔とはまた違った笑顔だった。その表情の違いにシュピーゲルは気付いたのか、奇妙な視線をシノンに送っていた。その視線に気付いたシノンも、シュピーゲルの事を見つめ返していた。

「え…えつと…何? 私の顔に…なんかついてる…?」

「あ…いや…シノン、現実じゃそんな笑い方しないな…って思ったから…ちよつと珍しくて」

「え…?」

シノンはハツとなり、自分の口元を右手で押さえていた。そんなに驚くほど変な笑い方でもしていたかしらと思っていた。シノンは咄嗟にシュピーゲルから半ば強引に手鏡を取り返すと自分の顔をまじまじと見つめていた。

「べ…別に変な意味はないからね? そんな表情をするシノンも…なんだか可愛いなって…思っただけだから…」

「え…か…かわいい…?」

シノンはシュピーゲルに「かわいい」と言われた瞬間に、次第に顔を赤く染めていった。猫耳はピンと真つすぐ立ち、尻尾は恥ずかしさから隠れるように、シノンの体にベルトを巻くような形で巻き付いて

いた。その恥ずかしがっている姿は、夕方に見せた現実の詩乃とன்றら変わりがなかった。クールな立ち位置を確立しようとしているシノンのキャラクターが、早速音を立てて崩壊しそうになっていた。

「か…からかわないですよ！ そんな人にはもう装備とかあげないんだからね！」

「え…装備って…僕の…？」

シユピーゲルがそう言うと、シノンはさつとストレージを開いてシユピーゲルのために用意したと思われる装備をオブジェクト化してシユピーゲルに投げつけた。一気に装備を渡されたシユピーゲルは慌てたがなんとか全部を自分のストレージに納めると、やったことがないゲームにもかかわらず、慣れたような手つきで早速装備フィギュアで見た目の確認をしていた。

元々GGOもSAOやALOと同じエンジンを使って作られているため、大体のメニューやシステムのものはほとんど同じ動作で出来る。その為シユピーゲルはある程度ALOのシステムを動かさせていたというわけだ。そして装備の見た目を確認すると「これを装備すればいいの？」を聞くとシノンはニツコリと頷き、微笑み返していた。シノンの思惑通りになりながらも装備フィギュアを操作して、シユピーゲルはシノンから手渡された武器や防具を装備していった。両手両足、胴、頭等様々な部位に分けて一つずつつけていく。一通り装備し終えるとシユピーゲルは「どうかな？」とシノンに披露し、感想を聞いた。

「うん…すごく似合ってる。シユピーゲルらしい装備だわ」

シユピーゲルに手渡された装備は、シノンがステータスとの相性や見た目をちゃんと考えた装備であった。全てAGIに補正がかかるのはもとより、一見ミリタリー風な雰囲気醸し出しながらも、ファンタジーの世界に存在しても違和感がないデザインとなっていた。

全体的にミリタリー調の色合いを彷彿とさせるカーキグリーンを基調とした衣服に、シノンが装備しているものと同じようなデザイングレーの胸当て。右肩からは白い布地の肩掛け。左右の手にはダガーをしっかりと握れる滑りにくい素材で出来たカーキ色のオーブンフィンガー。下半身は黒のベルトから赤の布地の下がりだが、その内側には白地のズボンがちらちら見え隠れしていた。

「…見た目より全然動きやすいね、これでアサルトライフルがあれば最高なんだけどな…」

「…お願いだからこのファンタジーの世界にミリタリーなものを持ち込まないでね…」

「分かってるよ…僕はこれから…こいつ一本で戦っていかないといけないんだよね…」

そう言いながらシュピーゲルは右の腰の鞘に納められている黒とカーキ色の色合いでデザインされたやや長めのダガーを手に取っていた。重さはほとんど感じられず、ちよつと手首をひねるだけで素早く振れた。逆にしっかりと持っていないとそのまま空に放り投げてしまいかねない勢いだった。

このダガーはリズがシノンに頼まれて、わざわざ一から作ったオーダメイド品であった。通常のダガーよりもはるかに軽く、攻撃回数も多く、特殊効果としてソードスキルの隙を30%カットするとう、まさに攻撃回数と素早く行動するためだけに特化した、シュピーゲルの戦闘スタイルのために作られたような武器だった。

「…ダガーか…上手く戦えるかな…」

「シュピーゲルなら大丈夫よ、何なら私が教えよつか？　ダガーの使

い方」

「え…シノンって…ダガーも使えるの？」

「使えるわよ、S A O 時代は弓を手に入れるまではずっとダガーを使ってたんですもの。弓の方が長く触ってるけど…距離を詰められたときの為に一応ダガーも仕込んでるの」

そう、シノンはかつてS A O にいたときに、ダガーを使っていた時期があつた。今でこそ相棒は弓であるが、一撃離脱を得意とし、華麗に戦場を駆け巡っていたのだ。他にダガー使いというと同じケットシー族であるシリカがいるのだが、生憎今日は都合がつかず、先生役を頼めないでいた。本格的にしごいてくれるキリト達はまだログインしていないため、今シユピーゲルに戦闘のいろはを教えてくれるのは、今日の前にいるこのシノンだけであつた。

「そうだね…そしたらお願いしようかな…僕まだ飛び方もわからないし」

「うん…そしたら私が手取り足取り教えてあげるね」

シノンが優しい声でシユピーゲルに声を掛けると、シユピーゲルの顔に笑顔が戻り、ミリタリーに関わっていた人間らしく右手で直角に腕を曲げて、自分のおでこあたりに手を当てて、敬礼のポーズをとってその声掛けに応えた。

「はい…お願いいたします。教官殿」

「うむ…よろしい！」

同日19:25 埼玉県川越市 桐ヶ谷邸 和人の部屋

一方、焼き芋パーティーを終え焚火の後片付けを済ませた和人と木綿

季は、その後そのままの勢いで翠が作った晩御飯もぺろりと平らげ、洗い物を済ませるとそそくさと二階にある和人の部屋へ戻っていた。その勢いの衰えを全く見せない二人の食べっぷりを、同じ食卓にしていた直葉は若干引きながら見守っていた。本当にこの二人の胃袋は底なしである。この細い体のどこにそんなに大量の食べ物が収まると言うのだろうか。

洗い物と後片付けを済ました二人は部屋に入るなり、仲良く同じタ イミングで和人のベッドにダイブインしていた。以前、埃が舞うからやめなさいと木綿季に注意していた和人であったが、この日あちこち いろいろ見て回って疲労がたまつたのと、朝からお腹いっぱい食べ 続けていたことで流石に疲れを隠せないでいた。うつ伏せの体勢で ベッドから足だけをはみ出させ、両手は万歳の姿勢で顔をベッドに埋 めて、フカフカベッドの柔らかさに癒されていた。

「はあ…今日はいろいろあつたねえ…」

「全くだ…流石にちよつと疲れたな…このまま眠りたい」

「えーだめだよ和人！ 今日これからハロウィンイベント一緒にやる んでしょ？ 寝ちゃだめだかねー！」

「わかつてるつてば…」

木綿季が首だけ和人の方だけ向き、一緒にイベントをやる約束のこ とを言うと和人はむくつと起き上がり、大きく伸びをした後に、シエ ルフに置いてある自分の白いアミユスフィアと、木綿季がトップキツ ズのじつちゃんから譲り受けたメタルパープルの色をしたアミユス フィアを手を取った。デスクからALOのパッケージを二つ取り出 し、一つを自分のアミユスフィアに、もう一つを木綿季のアミユス フィアに差し込み、デスクの脇にあるLANケーブルのHUBからL ANケーブルを伸ばし、アミユスフィアに差し込み、そのまま木綿季 に手渡した。

「ありがと、和人」

木綿季はそう言いながらメタルパールのアミュスフィアを両手で受け取った。既に初期設定とキャラブレーションは済ませていたため、あとは起動し、ログインするだけの状態となっていた。木綿季はおよそ半年ぶりの仮想世界に胸を躍らせていた。

骨髄移植手術が終わってからというものの、リハビリを毎日こなして、現実世界に復帰するために木綿季は努力を重ねていった。別にもの間にも倉橋のアミュスフィアを借りるなりしてALOはプレイ出来たのだが、一日でも早く現実の日常生活に復帰したかった木綿季はそれらを我慢し、毎日毎日体を動かし続けていた。

桐ヶ谷邸で腰を落ち着けてからも、自分自身の生活の準備やら来年度から通う学校生活に備えての勉強やらで、ゲームのことなどこれっぽっちも考えてなかった。しかし今日、やっとALOに戻れる。半年前までは現実世界に戻るために必死だったのに、今となってはもう一回あの仮想世界に再び足を踏み込みたくて仕方ない。

しかしこれも、木綿季がすっかり現実の世界での生活に馴染んできていた証拠ともいえるだろう。毎朝直葉の次に早く起きて朝稽古を見守り、起きていなかったら和人を叩き起こして一緒に飯を食べ、こなせる範囲の家事は全て手伝い、空いた時間を和人とお出掛けや勉強に費やす。こんな毎日を過ごしていた。

そしてそんな木綿季の日常の一部に、VRMMOが新たにまた加わることになった。アミュスフィアが手に入ったのは偶然でもあるが、自分のイメージカラーにも合ったアミュスフィアを贈られたことにより、木綿季は再び仮想世界に戻りたくて仕方がなかった。

「和人！早くログインしようよ！」

「まあ待て、今準備するから…」

そう言いながら和人はベッドに腰を下ろし、アミュスフィアを被り体を横に倒してリラックスさせた。木綿季も和人がベッドに寝られるように窓際に体をずらして、同じようにアミュスフィアを装着する

と横になり、体の無駄な力を抜いていった。

同じ仰向けの体勢で横になっている和人と木綿季、ふとお互いの視線が合うと、自然と笑顔が零れていた。こうして木綿季と普通に遊べる時がくるとはと、和人は感慨深そうに思っていた。木綿季がログインするのはあの巨大なメデイキュボイドではない、誰でも気軽に遊ぶことのできるアミუსファイアだ。それを使って入れる事実から安心していった。そんなアミウスファイア越しからも感じる温かい視線に木綿季は気付いたのか、和人に聞いてみた。

「なあに…かずと…じつとボクを見つめて…」

「いや…こうしてお前と…またゲームで遊べるのが…嬉しくてな…」

「…ボクもだよ。以前はみんな…ボクが遊んでる姿を見るたびに、体のコト心配してくれたけど…、今度は堂々と遊べるんだね…」

「…そうだな…」

「えへへ…なんか…嬉しいな…」

「俺も…木綿季と一緒に遊べて…本当に嬉しい…」

互いが今ここにいる幸せを噛みしめながら、二人は今を生きていられるように支えてくれたみんなに感謝の気持ちを抱いていた。まだ木綿季はスリーピング・ナイトを含むALOでしか会えない人たちにお礼を言えていない。ハロウィンイベントも大事だけど…まずは口グインしているフレンドのみんなにちゃんとお礼を言わなきゃ。

「さてと…そろそろ行くか…仮想世界に…」

「…うん！」

「わかっているとは思いますが俺のこと本名で呼ぶなよ？ 向こうでは俺は”キリト”なんだからな？」

「あ…うん…間違えないように頑張る…。ってそんなこといったらボクは一体どうなるのさ…」

「本名をキャラネームにしたりするからだ。…ほら、イベントの時間来ちまうぞっ…」

自分の責任とはいえ妙な悔しさを覚えた木綿季は少しだけ機嫌を悪くしてぶーたれていたが、イベントの時間が迫っていることを知ると、慌てて再び体をリラックサさせていた。違和感なく快適にログインするため、しっかりと体を休めて意識を仮想世界に集中させる。

「和人…：仮想世界^{むこ}にいったら…：いっぱい遊ぼうね…」

「ああ…：寝落ちするぐらい遊びきつちまおう…」

「…うん！」

「よし…：行くぞ…」

ALOのランチャーが立ち上がり、色の違う二つのアミユスファイアはそれぞれ、和人と木綿季のあのセリフの一言を待っただけの状態となっていた。二人は互いに笑顔で視線を交わすと、天井に視線を戻し、互いの手をぎゅつと握りしめながら二人同時に、お決まりのあのセリフを口にした。

「リンク・スタート！」

「リンク・スタート！」

第51話くTrick or Treat 中編く

西暦2026年10月31日土曜日午後19:30ALO新生アイ
ンクラッド22層 キリトのホーム

和人と木綿季はアミユスフィアを被り意識を仮想世界へと委ね、桐ヶ谷和人からキリトへ、紺野木綿季からユウキへと意識を引き継いでいった。ここは半年前に二人が最後にログアウトしたキリトのホームのリビングであった。内装は1ヶ月前に初めてユウキが足を運んだ時と変わらずそのままである。

独特のビンテージさを感じさせる全体的に古ぼけた木材で出来た壁や床と天井、モダンテイストな雰囲気なジャズミュージックが似合いそうな家具が並べられた、まるで年配の夫婦が隠遁して余生を過ごしていそうな空間だった。以前と変わった所といえば暖炉の上に飾ってあったSAO時代のアスナ達との家族写真が、ユウキと一緒に新生アインクラッドの第29層を攻略したときに記念撮影した写真に差し替えられているぐらいだった。

そんな狭くも広くもないキリトのホームの何もない空間に青白く光るものが現れ、段々と人の形を形成していき、やがてそれは一人の女の子と男の子の形となり、光が徐々に弱くなっていった。

光が完全になくなると、そこには全身を黒ずくめの服装で固めた黒髪スプリガンの少年キリトと、紫のレオタードに黒紫の胸当て、腰に二本の赤色のベルトを巻き、太ももの位置から履いているスリットの入った紫の布地に赤の装飾の入ったセクシーなロングスカートに身を包んだインプの少女ユウキが姿を現した。

二人は隣り合う形で手を繋ぎながらALOに降り立っていた。半年前にログアウトしたそのままの体勢でログインしてきたのだ。同じタイミングでゆっくりと目を開けると、目の前には懐かしささえ感じる半年ぶりの仮想世界の我が家のリビングが視界に写っていた。最後に見た光景となんら変わらない住み慣れたマイホームだった。

「わあ…なんか懐かしい気がする…」

久しぶりにALOに降り立ったユウキは目の前に広がる馴染みのある空間に目を輝かせていた。天井の灯り、赤色のソファ、古ぼけた暖炉等、一つ一つが何もかも懐かしい。ここには色々な思い出があった。お互いを好きになったきつかけを作ってくれた場所、いざこざもあつたけどライブの打ち合わせもやった。その後も数え切れないくらいキリトとの思い出がある。また、この世界にやってこられて嬉しい。そう思いながらユウキは胸に手をあてて、その喜びを感じていた。

「本当だな…、懐かしいな…。あれからもう半年も経つんだな…」

キリトも同じように目の前の光景に懐かしさを感じていた。半年間手付かずであったが埃がたまらず、掃除の必要性がないのは仮想世界様様だなど、やや現実的な考えを頭に浮かべていた。

「……と、あんまりうかうかしてられないな。確かクエストが受注出来るのは21時までだったよな？」

「そうだった気がするよ？ クエストの内容の詳細までは未公開なんだよね、クリアまでどれくらいかかるかわからないけどチャンスは一回だけと思ってもいいかもだね〜」

二人が受けようとしている今年のハロウィンイベントはモンスター討伐タイプのクエストだった。世界樹がそびえ立つアルンの街の中央部でNPCから受注し、イベント専用エリアへと転送され、クエスト攻略開始となる。内容的に90分で回し切れそうなマラソン向けなクエストではなさそうだった。

「とりあえず時間もあんまり無いし早速アルンに向かうぞ、ユウキ」

「あ、うん。わかった！ 和人！」

「……………おいおい……………」

ユウキはキリトに声を掛けられると、自分が今間違っただけで口走ってしまっただけで恋人の名前に気付いた。仮想世界のキリトのことをうっかり現実同様和人と呼んでしまったユウキは、それを誤魔化すかのようににつこり笑顔になり、首を斜めに傾かせ自分の頭を握り拳でコツンと叩き、舌をペろんと出して「いっけなくい」とでも言いたそうなあざとい表情でその場を取り繕うとしていた。キリトはその様子を呆れ顔でじーつと見ていた。

「あはは…ごめんね…、現実世界での癖がつい出ちゃった…」

「頼むぞ本当に…」

「ぶー、逆にキリトは楽チンじゃんか！ 木綿季がユウキに…漢字じゃなくなっただけなんだからさ！」

ユウキはまたもやキャラネームに対してクレームを付けていた。本名をそのまま使った本人に責任はあるのだが、やはりちよつとだけ納得がいかない様子だった。まあキャラネームに関してはアスナやシノン、セブンも安直なネームだが。無論キリトもであった。

「まあ…、キャラネームに関しては俺も割りかし安直だけだな。苗字と名前から取っただけだし」

「だよね〜！ キ・リ・トく〜ん？」

キリトがほんのちよつと弱みを見せると、すかさずユウキが重箱の隅を突くように、意味ありげにキリトの名前を強調するかのようになり、嫌味つたらしい表情を見せながらキリトに顔を近づけて口ずさんだ。キリトはそんな顔を見せたユウキにほんのちよつとだけ腹が立ち、目の前にユウキの顔が迫ったこともあり、思わず両手でユウキの両頬を親指と人差し指で掴み、両サイドに向かって引っ張った。

「ニギヤツ!」

「人のネームにケチをつけるのは…この口か?」

キリトは掴んだユウキの頬つぺたを、上に引つ張ったり下に引つ張ったり、円を描くようにぐりぐりしたりして制裁を加えていた。頬を引つ張られているユウキは大袈裟なりアクションをしながら抵抗していた。別に痛感を発生させるペインアブソーバーの設定はしっかり作動しているし、ここはPK圏外でHPが減る心配もないのだが、ユウキは痛みがキリトの手を引つぺがそうとしていた。

「いひやい! いひやい! あにすんのさ! ひいとほぼは!」

「はっはっはっ! どうだ思い知ったか!」

ユウキのリアクションをたっぷりと楽しんだキリトは流石に可哀想になってきたのか、パツと両手をユウキの頬から離し、ユウキを解放した。ユウキのつねられてた両頬にあたる部分は真っ赤になっており、痛そうに頬を手で押さえていた。それと同時にキリトに向かつて恨めしそうな視線を送っていた。

「大袈裟だなあ…痛いわけじゃないだろうに」

「痛くなくても気持ちの問題なの! 女の子の頬つぺをつねるなんてく、うう〜!」

ユウキはまた機嫌を損ねたのか、まるで獣のように両手両指をワキワキとうねらせ、キリトに飛びかかろうとしていた。そしてキリトに迎え撃つ体勢を整わせるよりも早く、AGIを活かして床を蹴り、キリトに頭から突撃していった。ユウキの頭がキリトのみぞおちにクリーンヒットし「ぬごっ!」と言う面白い悲鳴と共にキリトはソファに仰向けの体勢で押し倒され、ユウキがその上から覆いかぶさる形で有利な体位を得ていた。

自分に有利な体勢を獲得したユウキは今目の前にいる無防備なス

プリガンの少年を一体どうしてくれようかと悪魔の笑みを見せながら、両手をワキワキとさせていた。キリトはそんなユウキを若干怯え気味の苦笑いを浮かばせながら冷や汗をかいていた。

「えと…ユウキ先生…一体何をやるおつもりで…?」

「えっへっへっへ！　ボクに辱めを受けさせた報いは…こうだ！」

ユウキは威勢良くそう言い放つと仰向けのまま無抵抗なキリトの胸板に顔を埋めていた。予想外の行動に出たユウキの様子にキリトは頭に？マークを浮かべながら、事の成り行きを見守っていた。ユウキはというとそのままの体勢のまま動かなくなっていた。

「ユウキ…?」

「…キリト…、頭…撫でて…?」

「え…?」

意外だった。悪戯好きなユウキのことだからてつきり服の間に手を突っ込んで擦ぐったり、髪の毛をしっちゃんかめっちゃかに掻き回したり、同じように頬を抓って仕返しでもしてくるものだと思っていた。なので急に甘えてきたユウキの態度をキリトは不思議に思っていた。

「なんだ急に？　撫でたり抱きしめたりは現実でいつもやってるだろ？」

「…いーから…撫でてッ」

「…全く…」

キリトは文句を言いつつもユウキの要求を飲み、現実世界でいつもやってるように右手で優しくユウキの頭を撫で回した。ユウキはその掌の感触を幸せそうにキリトの胸板に頭を埋めながら感じ取っていた。ユウキの表情は満面の笑顔になり、その笑顔を見たキリトも自

然と笑顔になり、留守になつてた左手でユウキを更に自分の方へと抱き寄せ、ユウキの温かさを感じ取っていた。

「えへへ…、嬉しいな…」

「相変わらず甘えん坊だな…ユウキは…」

「キリトにだけだもんツ」

「はいはい…」

二人が仮想世界でもお互いの温かさを感じていると、突如キリトの視界の右下にあたる位置に、手紙の形をしたメールアイコンが表示された。キリトのフレンドの誰かがキリトに向かつてメッセージをとばしてきたのだ。半年ぶりのキリトのログインに気付いた友人が早速メッセージを飛ばしてきてくれたのだろう。

「すまんユウキ、ちよつとメッセージが入った…」

「ん…あれ、ボクにも来てる。誰からだろう？」

キリトが左手を縦にスライドさせ、フレンドリストからメール欄を表示させ内容を一つ一つ確認していくと、SAO時代からの付き合いのフレンド何人からか久しぶり！といったメッセージが何通か届いていた。ユウキの方も同じでスリーピング・ナイトの何人からかメッセージが飛ばされてきていた。懐かしさを感じると同時に、その中には嬉しい知らせの内容のメッセージも含まれていた。そのメッセージに目を通した瞬間にユウキの表情が明るくなった。

「キリト！」

「ん？なんだ？ 誰からかメッセージ来てたか？」

「うん、その事なんだけど…、ちよつと一緒に来て！」

ユウキはそう言うのとピョンと立ち上がり、キリトを両手で引っ張り上げて自分のストレージから転移結晶を取り出し、オブジェクト化し

た。それを右手に握りしめると左手でキリトの右手を掴み、含みのある笑みを見せて転移結晶を高々と上に掲げた。キリトはユウキその行動に対して？マークを浮かべながらも、黙ってユウキの言うことに従っていった。

「転移！・アルン！」

ユウキが転移先を口ずさむと、ユウキとキリトのアバターが青白い光に包まれ、キリトのホームから光り輝きながら姿を消した。

同日19:33 ALO アルンの街 転移門広場前

様々な種族のプレイヤーで賑わう世界樹がそびえ立つこのアルンの街の転移門前に、先ほど転移結晶を使用したユウキとキリトが青白い光と共に姿を現した。別にキリトのホームから出て5分ばかり歩けば22層の転移門からすぐここまで来られるのだが、その数分の待ち時間すらも惜しいユウキは値段の張る転移結晶を使つてまでここに来たかった。それぐらい急ぎたかった理由が、ここアルンの街にあるというのだ。

「久しぶりだな…この街も、…ん？ ユウキどうした？」

ユウキはアルンの地に足を着くなり、おでこに手を当てて周りをキョロキョロと見渡し始めた。何か探しているものでもあるのだろうか？ それとも誰かを探しているのだろうか？ 東西南北様々な角度で首や上半身を回して、落ち着きのない様子を見せていた。

「何か探してるのか？」

「あ…うん…、ちよつと…人がここに来てるはずなんだ。それを探し

てるんだけど…」

「そうなのか、んじやあ空を飛んで探したほうが早いんじゃないの？」

「あ…そうだね！」

ALOが空を飛べるゲームだということをすっかり忘れていたユウキは意識を背中に集中し、インプ族特有の小悪魔風な見た目の翅を背中から出現させた。飛べることは忘れても翅の羽ばたかせ方などは感覚がしつかりと記憶していたようである。ユウキは地面を蹴って勢いよく空高く飛び上がると、遙か上空から目的の人物を探し始めた。

キリトがその様子を遥か下の地上から見守っているとユウキは目的の人物を発見したようでその人物がいるであろう方角に向かって「お〜い〜い〜」と声を上げながら両手を元気に左右にぶんぶん振っていた。その目立つ行動に周辺にいたプレイヤーの視線が一斉にユウキに集まった。

「な…おい…あれ…、もしかして絶剣のユウキちゃん…じゃないか？」

「ホントだぜ…ALOに復帰したんだな…」

「てことは病気が治ったってことだよな？ そりやめでたい！」

ユウキの存在に気付いた転移門広場の周辺にいるALOプレイヤーが、ユウキの元気な姿を見て安堵の表情を浮かべていた。ユウキはすっかりセブン同様、剣の腕以外でも有名人になっていたのだ。あれからなんの報道もなかったのでALO内では死亡説などということんでもない噂も流れていたが、こうして実際に姿を見せてくれたことにより、病気が治ったんだと認識してくれたようだ。そんなプレイヤー達の反応を見て、キリトも思わず笑顔を見せていた。

ユウキは一旦キリトのいる地上に降りてきてキリトと合流した。このままキリトと一緒に見つけた知り合いのもとへと行くつもりのようなだった。ユウキがキリトの腕を掴み「キリトあっちだよ！行こう！」と言い放ち、右手で半ば強引にキリトの腕を引っ張って誘導して

いった。そんな走り去っていくユウキを見送るかのように、周りのプレイヤーが病氣完治と退院のお祝いの言葉をユウキに送っていた。

「おーいユウキちゃん！ 退院おめでとうー！」

「病氣治ってよかったよ！ 本当におめでとうなー！」

「また俺と決闘デュエルしてくれー！ 今度は簡単には負けないからなー！」

「歌も聞きたいぞー！ また歌ってくれよなー！」

数々のプレイヤーからの声援に気付いたユウキはキリトを引つ張りながらも後方を振り向いて空いている左手を大きく降つてみんなからの声援に笑顔で応えた。

「みんなありがとー！ お陰でボクはすっかり元気になったよー！」

「ちゃんとお礼言いたいけど…急いでるからまたねー！」

「おうよー！ 元気だなー！」

「ブラツキー先生！ 幸せにしてやれよー！」

ユウキがお礼の言葉を送ると、プレイヤー達からは祝福の大声援が巻き起こった。ユウキのALOでのイメージは絶剣であると同時に華麗に元気に歌う絶歌としての二つ名もすっかりと定着しているようだった。そしてやはり野次の矛先はキリトへも向かっていたのであった。キリトは苦笑いを浮かべていたが悪い気はしなかった。もうALO全体がキリト達を認めてしまっているようなものだったからだ。一方ユウキは笑顔で照れくさそうに頭をぽりぽりとかいていた。

「…みんな…いい人たちだね…」

「…ああ…本当にな…、だからALOが続いているのかもな…」

「…そうかもね…」

ALOプレイヤーの温かい声援を受け取った二人が現実世界で2

00メートルほどの距離を駆け抜けると、その向かっている前方に数人のプレイヤーがいることに気が付いた。そこにいるプレイヤーは、全員キリト達の知っている顔だった。キリト達が駆け寄ってくると、その姿を視認したプレイヤーが全員視線をこちら側に向け、先ほどの大勢のプレイヤー達と同様に温かい声援をユウキ達に向けて送った。

「ユウキ！」

「ユウキ…」

「ユウキツ！」

「よっ！ リーダー！」

ユウキ達を温かく出迎えてくれたのはウンディーネの少女が二人、スプリガンの少女が一人と、サラマンダーの少年が一人の構成のプレイヤー達だった。その姿を見れたユウキに次第に笑顔が零れ、地面を蹴ってそのプレイヤーの集団に元気いっぱい突っ込んでいった。キリトはその光景を後ろで微笑ましくほっこりとした表情で見守っていた。

「みんなー！ 久しぶりだよー！ 元気だったー？」

「元気も何も…ご覧の通りだよ！ ユウキ！」

まず最初にユウキに駆け寄ってきたのはキリトの元恋人で、ユウキの一番の親友でもあるアスナだった。ウンディーネの特徴である青くてさらつとしたロングヘア、白くて清楚なイメージを感じさせるクロークに身を包んで、ユウキを出迎えていた。

ユウキとは現実世界でもちよくちよく会っていたのだが、同じゲームを遊んでいた身としては、こちらの世界に戻ってきてくれたことがやっぱり嬉しかったのだ。キリトから今日ALOに復帰するということメールで知らされ、今日集められるだけのスリーピング・ナイツのメンバーに声を掛けて、ここに集まってくれたというわけだ。

「ユウキ…元気になったみたいで…よかったわ…」

「シウネー……！」

次に駆け寄ってきたのは、ユウキがリーダーを務めていたギルド「スリーピング・ナイツ」のメンバーで一番仲が良かったウンディーネのシウネーだった。アスナより長い腰まで伸びた青いロングヘア、昔ながらのRPGによくいる賢者を彷彿とさせるような水色と白を基調とした清楚なイメージのウィッチクロークに身を包んでいた。おっとりとした喋り方がその清楚さにより拍車をかけていた。実際は清楚というよりもどこか抜けているところがある彼女であったが、今はその話は置いておくとしよう。

「ユウキ……この前は言えなかったけど……退院おめでとう……。本当に治ってよかったわ……」

シウネーはそう言うとその瞳に涙を浮かべ、ユウキを抱き締めていた。ユウキもその抱擁に応えるようにシウネーの胸に顔を埋めて、彼女の背中に両手を回してシウネーを抱き締めていた。アスナとは違った暖かい匂いがした、シウネーの優しい匂いだ、懐かしいなあ……。

しばらくの間二人が抱擁を交わしていると、シウネーの方から距離を置き、ニツコリとユウキに笑顔を見せた。その笑顔を見て心から嬉しくなったユウキであったが、一つだけ気になることがあった。いや一つどころか……気になることがたくさんあった。どうしてもシウネー達に聞いておかなければいけないことがある、それを聞かなくては……。

「そういえばシウネー……、シウネー達と……他のスリーピング・ナイツの皆は……大丈夫なの……？」

ユウキは中々聞きにくい質問をシウネー達に投げかけた。元々ギルド「スリーピング・ナイツ」は病気を抱えたメンバーだけで構成されたギルドだった。ALO以前からも様々なVRMMOの世界を一緒に旅し、苦楽を共にしてきた掛け替えのない絆で結ばれた仲間たち

なのだ。既に今いるメンバーを除くと初代リーダー、ユウキの実の姉の紺野藍子ことランはHIVで他界。同じギルドのメンバーであるクロービス、メリダも続いてこの世を去った。ボクはキリトのお陰で病気が無事治ったからまだいい、でも…他のギルドの皆の体は…一体どうなってるの…？

かつてボクに声を掛けてくれたアスナやキリトも、こんな心境だったのかな。目の前の大切な人が消えてしまふんじゃないかっていうこの感覚を、病気が治る以前のボクに向かって感じてくれたのかな。だとしたら…ボクはやっぱりものすつごく皆に心配かけさせてしまっていたんだね…。

ユウキはそう思いながら心配そうな視線をスリーピング・ナイトの皆に送っていたが、そんな心配そうなユウキを尻目にシウネーを始め、ここにいるギルドのメンバーは笑顔でユウキに返事を返した。

「ユウキ…大丈夫よ、ここにいないメンバーも含めて…みんな身体が良い傾向に向かっているの…」

「…え…？」

ユウキは目を丸くして驚いた。シウネーの口から放たれた言葉が信じられなかった。少なくともユウキがHIVウィルスの活動が控えめになる以前倉橋から自身の余命を宣告されたとき、自分の他にも余命僅かと宣告されているメンバーがいたのだ。そもそも連絡を長い期間取れていなかったとはいえ、二度と会えなくなるメンバーが出てしまうと覚悟していたこともあった。しかし現実とは違っていた。実際目の前にいるシウネーを始めとするスリーピング・ナイトのメンバーはアバターだけでなく、その現実の世界でも元気にやっているよとでも言いたげな立ち居振る舞いだった。

「リーダー…アタシたちもね…、回復傾向にあるんだってさ…」

「オレもだ、新薬の投与がかなり効果的みたいでさ、このままいけば完治も夢じゃないって言われたんだ」

そう言いながらユウキの前に歩を進めてきたのは、同じくスリーピング・ナイツのメンバーであるスプリガンの女性のノリ、サラマンダーの少年ジユンであった。ノリは患者であるにもかかわらず、妄想世界とは言えお酒を飲んだくつており、打ち上げの度にユウキたちに絡むほど酒癖が悪いのんべえプレイヤーだ。だが素面になると面倒見がよく、ユウキにとっても頼りになるご近所のお姉さんといった認識だった。

ジユンは一時期アスナからいい感じじゃないと言われたこともあったが、ユウキにジユンへの恋愛感情は当初から毛頭なく、むしろ煩くて世話するのが大変な弟分といった感じだった。だが実際、アスナ経由でユウキの病気が完治し、無事に退院したと聞かされた時に、一番涙を流したのは何を隠そうこのジユンだったという。なんだかんだ普段から文句を垂れながらも一番ユウキのことを心配していたのである。

「そう…なんだ…。よかった…みんな大丈夫そうなんだ…」

三人の口から自分たちは大丈夫と聞かされてユウキはほつと胸を撫でおろした。しかしそれでもユウキにはまだ気になることがあった。そう、目の前のシウネーのことである。自分と同様、不治の病と聞かされていたからである。ユウキの場合は骨髄移植によって奇跡の完治を果たしたが、そんな都合のいいことがそうそう起こるはずがない。ユウキの場合は何万何十万と届けられた白人ドナーの中から倉橋が一ヶ月を費やし必死に探した結果、なんとか見つけ出し、手術までこぎつけ、無事に拒絶反応も起こることなく完治にまで至ったのだ。

それが奇跡中の奇跡だということとは重々承知していた。身をもつてわかっていて。だから「急性白血病」を患っているこの目の前のシウネーだって、今もこうしてALLOをやっているのが不思議なくらいなのだ。ユウキが心配するのは当然のことであった。だからこ

そ気になったのである。どうして今、シウネーはここにいられるんだろうと？

「シウネー、こんなことを聞くのは…すっごい不躰過ぎるかもしれないんだけど…聞くね。シウネーは…どうしてまだ生きてられるの…？」

ユウキは意を決してシウネーに今の身体について問うてみた。その聞き方は普通なら君は死んでしまってもうこの世にいないはずだと言っているようにも聞こえた。普通なら失礼極まりない発言だが、同じ生と死の境目を経験したユウキだからこそ聞ける質問であった。シウネーはユウキからの質問に、怒るところか優しくニッコリと微笑んで答えを返した。

「ユウキ、私の命はね…貴方が救ってくれたのよ…？」

「え、ボ…ボクが…？」

ユウキは目を丸くして驚いていた。ボクがいつシウネーの病気を治したというのだ？ 医者でも…そもそも学生ですらないボクが。それどころかボクだつてついこの前までHIVと…AIDSと必死に闘っていた。そのボクがいつ…シウネーを助けたつていうんだらう…？

ユウキは深刻な表情を浮かべながらシウネーとのここ最近の接点を探していた、しかしやはりALOで一緒に遊んだこと以外思い浮かばなかった。ユウキが頭を抱えて悩んでいると、そんなユウキに助け舟を出すようにキリトが前へ出てきて、ユウキの肩をポンと掴みシウネーに向かって声を掛けた。その顔は何か心当たりがあるようにも見えた。

「シウネーさん、ユウキがシウネーさんのことを助けたつていうのは…もしかして骨髄移植のことじゃないか？」

「え…骨髄移植って…ボクと同じ…？」

キリトからの回答に信じられないような表情を見せたユウキが慌ててシウネーに視線を合わせると、またシウネーがニコッと笑顔を見せた。おそらく肯定の意味を込めた笑顔なのだろう。シウネーは笑顔を見せると表情を変え、ここ最近自分に起きたことをゆっくりと語り出した。

「実はねユウキ…、貴方たちがライブを行ったあの日から…日本中の骨髄バンクに世界中から骨髄ドナーの提供が集まったの。HIVだけじゃなくて、骨髄移植によって治る可能性がある病気を患っているすべての人達のために…」

「HIVだけじゃなく…？」

「ええ…、その集まった骨髄ドナーの中にね…、私の体の細胞に合う骨髄が見つかったの。でも私の場合…抗がん剤の量が多くて…途中副作用に耐えきれなくて何度も死にたいって思ったことがあったの。でもHIVで苦しんでいるユウキの事を考えたら…私も負けられないぞって思っ…、いろいろな副作用が襲ってきたけど…なんとか…頑張れたの…」

「シウネー…」

「その骨髄ドナーが提供されたきっかけを作ってくれたのが…ユウキ、アナタのライブだったのよ…」

「え…ボクの…？」

自分の病気が治った経緯を全て話したシウネーは再びユウキを抱き締めた。命の恩人でもあるユウキを温かく精一杯自分の胸の中に抱き寄せた。瞳に涙を浮かべ、ユウキに心からの感謝の気持ちを込めて…。ユウキも信じられないような表情を浮かべたままにしていたが、以前キリトと一緒に読んだことのある記事の事を思い出していた。あの時読んだ記事にはこう書かれていた「国内で骨髄移植によって白血病が完治の傾向にある患者が続出」とこう書かれていた。そ

う、シウネーはこの記事に書かれていた患者の一人だったのだ。

「…あの時の白血病患者って…シウネーの…こと…だったんだね…」
「ええ…、ユウキが…私を救ってくれたの…。本当に…ありがとう…
ユウキ…。私を…救ってくれて…ありが…とう…」

シウネーは大粒の涙を流していた、自分の命が助かったことの喜びの涙と、その道筋を照らしてくれた我らがギルドリーダー、ユウキに対して感謝の気持ちの涙を流し続けた。ユウキも自分のやったことが、自分の大切な人の命を救えたことを実感すると、途端に涙が溢れ出てきた。

「シウネー…シウネー…！ よかった…よかったよう…」

「ええ…ユウキも…治って本当に…よかった…ユウキ…」

何という奇妙な縁だろうか、キリトの行ったユウキを助けるための計画は、あろうことか日本中、世界中を巻き込んで、重病患者を救っていたのだ。この目の前のウンディーネの少女も、その中の一人だった。キリトのユウキへの熱い想いが、その大切な友人の命をも救ったのだ。かつてSAOで人の命を奪ったキリトであったが、その穴埋めをするかのように、現実の世界で人の命を救った。そのことを意識したキリトにも、少しだけ涙が浮かんでいた。その様子に気付いたアスナが心配そうにキリトに声を掛けた。

「キリト君…大丈夫…？」

「アスナ…、大丈夫だ。ちよつと…よかったなって思っただけだから…」

「…そう…」

共にSAOでデスゲームを生き延びたアスナには、キリトの涙の理由が何となくわかっていた。キリトがプレイヤーを殺した理由に、ま

さに自分が直接関わったことがあったからだ。確かにあの時、キリトが居なかつたらアスナは殺されていただろう。そのことには非常に感謝していた。しかし同時にキリトに背負わなくてもよい業を背負わせてしまったことに、後悔の念を抱いていたのも確かだった。だから、今キリトが間接的にはあるが人の命を救ったことに安堵していた。

ユウキとシウネーは互いを精一杯抱き締めた後、お互いに生きていく喜びを分かち合っていた。そしてテッチとタルケンも今は社会復帰に向かつてリハビリを行っていることを聞かされると、更に笑顔になり、ユウキのテンションは最高潮になっていた。そして、ユウキはまたとあることに気付いてしまった。

「つてことはさ、もう…スリーピング・ナイツの本来の目的って…なくなつたつてこと…なのかな…?」

ユウキの発言に、アスナ、ノリ、ジュン、シウネーの四人が目丸くしていた。確かにそうだ、そもそもスリーピング・ナイツは病人だけで結成されたギルドだ。お互いの運命に共感が持てたからこそ、死ぬ前に思い出を残す目的で集まったんだ。しかし、現存するメンバー全員の病気が治るということは、スリーピング・ナイツの本来の目的を見失ってしまうことになる。

「えつと…そう…なるわね…」

「確かに…そしたらどうすればいいんだ？ オレたち？」

ノリとジュンが困ったような表情を浮かべながら顎に手を当てて考えていた。この先スリーピング・ナイツはどうなるのだろうか？ 解散？ 継続？ それとも再結成？ 様々な選択肢が頭に浮かんできた中、ユウキがとある提案をこの場にいる全員に向かつて切り出した。

「ねねね、そしたらさ…アスナとキリトを迎えて、新生スリーピング・ナイツ再結成！つていうのはどうかな？」

「え…？」

「お…俺たちも…？」

ユウキの突拍子もない提案にキリトとアスナは驚愕の表情を浮かべていた。元々スリーピング・ナイツに入りたがってたアスナはともかく、何でソロプレイヤーの俺にまでギルドのお誘いの声上がるんだろうと。個人的にキリトにはギルドに対してあまりいい思い出はなかった。SAO時代、初めに入れてもらったギルド「月夜の黒猫団」は自分を残して全滅。二つ目に半ば無理やり入団させられた「血盟騎士団」は団長が事件の黒幕茅場昌彦だったということと、ギルドメンバーを装った笑う棺桶ラフィン・コフィンのスパイに殺されかけたりと、ギルドが関わるとロクな目に遭ってこなかったのだ。

以上のトラウマにもなりかねないギルドに関わった事件のことを考えると、やはり違うゲームとはいえ、ギルドに入るのには少しばかりの抵抗があるキリトであった。正直、誘いは嬉しい。スリーピング・ナイツのメンバーなら全員顔見知りだし、ゲームを遊ぶための本来の目的も全員理解している。SAOの時みたいな殺伐とした空気には決してならないはずだ。全員元病人ともあつて命の大切さだつて理解している。そう考えるとキリトはスリーピング・ナイツなら入ってもいいかなという結論に辿り着こうとしていた。

「ボクは二人が入ってくれたら嬉しいなー！ みんなはどう思う？」

ユウキが胸の内に思った正直な想いを表に出しながら、メンバーのいる三人の方へと視線をやった。新たにメンバーを迎え入れるといったとんでもない思い付きともいえる考えに、ノリたちも最初は度肝を抜かれたが、自分たちのために協力を惜しまずに手を貸してくれたキリトたちのことを考えるとすれば、自然とYESとしか答えが出てこなかった。それにあの時と今とでは事情も違う。今後は普通に

ゲームを誰一人欠けることなく楽しめるはずだ。となるともう答えは一つしかなかった。

「えっと……どうする……アスナ、ああ言ってくれてるみたいだけど……」
「えっとそうだね……正直言う前に断られたことがあったから……、事情が違うってなってもその……本当に入っていいのかなってのがあって……」

「うーん、俺も……違うゲームとはいええ、ちよつとだけギルドには抵抗があつたからな……」

違う悩みで入団することに頭を抱えている二人に、ユウキは二人の顔を下から覗き込み、必殺の「潤目＋上目遣い」のガード不能回避不能のスキルを使つてきた。これが出たら最後、もうキリトとアスナは白旗を揚げるしかなくなっていた。二人は大きく溜息を吐き出すと、お互いに視線を合わせ、観念したかのように口を揃え入団の意思をユウキに伝えた。

「……入らせていただきます……」

「私も……ユウキのその顔は……反則だよ……」

二人の口から肯定的な返事をもらったユウキは飛び跳ねて喜んだ。別にスリーピング・ナイトに入らなくてもキリトは毎日現実で会えるし、アスナも会おうと思えばいつでも会えるのだ。しかしギルドとなればまた別格のようで、同じ志をもった者同士で集まって目的を達成するという一体感が生まれてくる。喜びも悲しみも、その時その時分かち合えるのだ。それはその中の仲間同士でしか味わえないことだろう。だからユウキは二人をスリーピング・ナイトに誘つたに違いない。

「やったー！ ギルドの仲間が増えたー！ わーい！」

「おいおいユウキ、アタシらの意見は無視なのかよ！」

「そうだけ、何もオレたちはまだ何も返事を返してないぜ？」
「え…？」

喜んでいるユウキの間に割って入るように、ノリとジュンが口を挟んだ。二人が否定的な態度をとったと思ってしまったユウキは、また自分の思い込みや暴走で周りを巻き込んで迷惑をかけてしまったのかと感じていた。一体どうしたらいいんだろうと困った表情を浮かべておろおろしていたユウキを見て、一見厳しい表情を浮かべていたノリたちであつたが、すぐに柔らかい表情へと変わっていった。そしてユウキに歩みより、ユウキの肩をポンと掴むと安心させるように胸のうちの言葉を口にした。

「そう心配そうな顔をするなよリーダー！ 大丈夫だよ！ アタシもジュンもシウネーも二人の入団には大歓迎だって！ あの時と事情が違うしき！ テッチとタルケンだってきつと同じ思いさ！」
「そうだよ！ むしろあいつらが納得しなくなつて無理にでも納得させるさ！ なんせアスナさんとキリトさんなんだからな！」

ユウキの心配をよそに、ノリとジュンはキリトとアスナの入団に歓迎の態度を示していた。一瞬断られると思つたユウキの表情もその答えを聞いた瞬間に次第に明るくなっていき、改めて二人の入団を喜んだ。喜んでいるユウキにシウネーが近寄り「よかつたわね、ユウキ」と声を掛けると「うん！ ありがとうみんな！」と満面の笑みで返事を返した。

かつて重い病気を抱えていたスリーピング・ナイツだったが、今ここにアスナとキリトを新メンバーとして迎え入れたことで、文字通り新たな門出を迎えることが出来た。今日は都合でテッチとタルケンがいなのが残念だが、それでも喜ばしいことに違いはなかった。二人の正式な歓迎会はスリーピング・ナイツ全員が、キリト、アスナ、シウネー、ノリ、ジュン、テッチ、タルケン、そしてユウキを含む八人がそろつた時に盛大にやろうと、約束を交わした。

そして新生スリーピング・ナイトの最初の仕事も決まっていた。今日一日限定で行われるハロウィンイベントを達成すること。スリーピング・ナイトの新たな門出に相応しい最高の思い出を早速ここに残そうということ、満場一致で意見がまとまった。そしてアスナとキリトの正式な入団と、今後の最初の目的が固まったところで、ユウキは二人にギルド入団申請をするよう促した。

キリトとアスナは左手でメニューを操作し、ギルド入団申請のコマンドを開くと、スリーピング・ナイトのギルドリーダーでもあるユウキに向かってギルド入団の申請を送り付けた。ユウキの方もすぐに申請の受信を確認した。二人から送られてきた入団申請はユウキの視界にそれぞれ上下二つずつ表示されていた。

K i r i t o が S l e e p i n g K n i g h t s への入団を希望しています。許可しますか？

A s u n a が S l e e p i n g K n i g h t s への入団を希望しています。許可しますか？

結成以来の入団希望者の表示に思わず笑みをこぼしたユウキは嬉しそうに二人から送られてきた申請に対し、YESのアイコンを左手の指でタップし、入団の申請を許可した。この瞬間、晴れてキリトとアスナは正式にスリーピング・ナイトの新メンバーとして迎え入れられたのである。

ユウキが許可をすると、キリトとアスナのHPバーの横に、スリーピング・ナイトのメンバーの証でもある、ギルドアイコンが表示されていた。キリトとアスナは、久しぶりに自分のステータスにギルド所属を証明するアイコンの表示を見ると、嬉しいような背中がむずかゆいような感覚に陥っていた。本当は心から嬉しいはずなのである。

「これで…二人は晴れて正式なメンバーだよ！ これからよろしくね！」

「ああ…よろしくな…！」

「よろしくね…みんな！」

キリトとアスナが入団の挨拶を済ませると、メンバーと順番に固い握手を交わした。キリトはシウネー、ノリ、ジュンの順番で握手を交わし、アスナはユウキ、シウネー、ジュン、ノリと握手を交わしていった。キリトが握手を交わしていないのはユウキだけとなっていたのだが、ユウキは腕を後ろに組み、にっこりと笑顔でキリトを待ち構えていた。キリトが？マークを頭に浮かべていると、ユウキは地面を思いつき蹴ってキリトに向かって飛びついていった。

若干ログインしたばかりの頃のデジヤブを感じたキリトであったが、何となくユウキが飛びついてきそうな予感がして咄嗟に身構えたので、今度は倒されずにユウキを受け止めることに成功していた。今まで何度も同じことを繰り返していたこともあり、自然と体が動いていたようだ。キリトに抱き着いたユウキは嬉しそうに明るい笑顔を見せ「こっちでもよろしくね！ キリト！」と密着したまま入団の抱擁を交わしていた。他のメンバーはその仲睦まじい間柄に苦笑いを浮かべつつも、ほっこりとした笑顔を見せていた。

そして今いるメンバーの挨拶が済むと、ユウキはキリットとした顔つきになり雰囲気が変わった。先ほどまではキリトにデレデレな恋人の顔だったが、今度はギルド、スリーピング・ナイツを束ねるギルドリーダーの顔らしく勇ましい表情を見せていた。これからおっぱじめる最初のギルドとしての仕事、それを達成せしめんがために、今いるこのメンバーに向かって、真剣なまなざしで激を入れた。

「みんな、ボクたちは今日、キリトとアスナを迎えたことによって、新しいスタートを切ることが出来た。今までとやり方は違ってくるかもしれないけど、それでも楽しい思い出を残すっていう目的は曲げないようにやっつていこうと思うの」

ギルドリーダーであるユウキの演説にも近い言葉に、メンバーは心静かに耳を澄ませていた。その姿はかつてスリーピング・ナイツをま

とめ上げていたユウキの実の姉、紺野藍子ことランの精神が宿っているかのように見えた。種族も見た目も違うユウキであったが、この時の表情は非常にランによく似ているようだった。

「残念ながら今日はテッチとタルケンはいないけど…、まずは今日一日限定のイベントクエスト、ハロウィンクエストを絶対に成功させよう！ みんな！ 準備はいいかな？」

ユウキからの問いかけに、メンバーは次々と視線を合わせると、全員意見が一致したのか、次々と首を縦に振っていった。その様子を見届けたユウキもメンバーと同じく、首を縦に振る形でみんなをまとめ上げた。そしてリーダーらしく、出撃前にメのセリフを言い、ギルドの新たなスタートを切った。

「新生スリーピング・ナイツ！ 出撃だよ！」

「おう！」

「ええ！」

「はい！」

「おう！」

「よっしやあッ！」

第52話くTrick or Treat 後編く

西暦2026年10月31日土曜日午後20:05 ケットシー領
近郊フィールドエリア

キリト達がスリーピング・ナイトに入団した一方で、初めてALOに降り立ったシュピーゲルはシノンの指導の下、この辺りの草原エリアに沸くMOBを相手に戦闘の手ほどきを受けていた。飛行のやり方、戦闘時の基礎知識、立ち回り、短剣の基本的な使い方から応用方法、ソードスキルの発動方法、魔法の詠唱やら何やらまで骨の髄まで叩き込まれていた。そのシノンからの手ほどきはかなり厳しいものでシュピーゲルもここまでとは思わなかったらしく、そのアバターの顔からは疲労の色がとって窺えた。

しかしその厳しい手ほどきあったか、シュピーゲルはスイッチやソードスキルの使い方を始め、様々な仕様をその体に染み込ませていった。元々医学界に進む身として勉強が得意なのもあり、シノンの話をよく聞きよく解釈して実践していった。結果、シュピーゲルはたった1時間余りの短い間で目覚ましい成長を見せつけていた。未だに相手との距離を空けるなど、GGO時代の癖が出てしまっている時もあったが、自分が握っている得物がアサルトライフルではなく短剣だということを思い出すと、すぐに近距離戦闘へと思考を切り替えて自慢のAGIを活かし、超スピードで立ち回り敵を翻弄していた。

この辺りの判断力の良さは、一瞬の判断ミスがスコードロン、即ちRPGでいうパーティを全滅に導いてしまうGGOで培われた経験が大いに影響を及ぼしていた。冷静に戦場の状況を見極め、今自分が何をすべきなのか、味方の位置関係と作戦の進行に問題はないか、その経験が体に染み込んだシュピーゲルならではのALOでの立ち回りであった。

本来ならばそういった冷静な判断力はパーティでの後方で支援や回復を行う役割のメイジや、回復魔法を得意とする種族のウンディー

ネ向けなのである。であるのにもかかわらず、シュピーゲルは種族の特徴とステータスの速さを活かした最前線での近距離戦を自分のスタイルとしていた。まあ必ずしも定石に囚われる必要はない。遊び方は人それぞれだしその定石がそのプレイヤーに合うかどうかは試してみないとわからない。

実際にシュピーゲルは最初こそ戸惑っていたがALLOでの戦闘に慣れてき始めると、領地周辺のあまり強くないMOBとはいえ、訓練中盤からはただの一回もダメージを受けることなく敵を右手に握られた短剣で斬り刻み、全て自力で倒していった。そしてシノンには訓練の最後にと、ケットシー領地近郊から少し外れた強めのMOBが湧く平原エリアにて、シュピーゲルの戦闘訓練を続けていた。

「シュピーゲル！ スイッチよ！」
「イエッサー！」

シノンとシュピーゲルはこの緑豊かな平原の雰囲気にはあまり似付かわしくない、全身を鉄の鉱石で組み立てた形で構成されたゴーレムのようなMOBと戦闘を繰り返していた。ゴーレムの頭部にはモノアイのようなものがついており、古代魔法科学の結晶だとも言いながら重々しい見えてくれをしていた。しかしその動作からは外見程の重たさを感じさせなかった。手脚や胴体の関節にあたる部分が魔法力の磁力の様なもので接着されており、このお陰で重たさと機敏さを両立させられていたのである。このMOBはケットシー族でスタートしたプレイヤーの最初に越えるべき壁として認知され、こいつを倒せるようになれば一人前とみなされていた。シノンはこのアイアンゴーレムにシュピーゲルをぶつける事で、彼の訓練の最後の仕上げへと赴いていた。

シュピーゲルは機敏な足捌きを武器に颯爽と戦場を駆け回っていた。ただ単に速く動くだけでなく、その戦場にあるものは全て利用して立ち回っていた。身近にある木々や岩などを壁がわりにしたり足場にしたりと、地の利を最大限に活かして戦っていた。たまにGGO

時代の癖が出てしまっているが、それすらも問題にしていなかった。しかし遠くないうちにその癖もなくなり、よりシュピーゲルらしい戦闘スタイルに磨きがかけられていく事だろう。

「でやああっ!!」

シノンからスイッチの要請を受けたシュピーゲルは素早くシノンと位置を入れ替えると、ゴーレムの懐に反時計回りに自分の体を回転させながら斬りつけ深い一撃を加えた。するとゴーレムのヘイトがシュピーゲルに向かい擬似タイマンのような体勢となった。スイッチを終えたシノンは一旦距離を置いて武器を弓に持ち替えて、ゴーレムと一対一で戦っているシュピーゲルの戦闘模様を見守っていた。弓を構えているのは、シュピーゲルに万が一のことがあった時にいつでも矢を撃ち込んで援護を出来るようにする為である。

「シュピーゲル! あとは任せたわよ! タイマンで……そいつを打ち負かしてみなさい!」

「ルーキーに随分とハードルの高い試験を設けるもんだね……シノンは」

「そう言う割には随分と余裕ありそうだけど?」

「そんなことないよ、ただ……短剣での戦闘が楽しくなってきただけさ」

そう言い放ちながらシュピーゲルは地面を蹴り、素早く反時計回りに二度ステップをしてゴーレムの背後をとり、そのままゴーレムの背中に短剣の連撃を浴びせた。そのダガー捌きはあまりにも速く、SAO時代のアスナの細剣を目の当たりにしているような光景だった。

連撃を浴びせたシュピーゲルは一旦バックステップをして距離を置きゴーレムの様子を窺っていた。初見のMOB故に行動一つ一つをよく観察してパターンを見極める。これもシノンから厳しく教えられた教訓であった。シュピーゲルが攻撃を加えた部位にはヒビが

入り、カラカラという音を立てて外殻にあたる部分から崩れ落ちていった。ゴーレムはシュピーゲルの方を向き、見た目とは裏腹な素早い歩行でズシズシンと重量感のある足音を立てながらシュピーゲルとの距離を詰めていった。

「気を付けて！ そいつ、攻撃も速いわよ！」

シノンがそう警告した瞬間、ゴーレムはシュピーゲルの2メートルほど手前まで距離を詰めると、右腕にあたる部位を上から振りかぶり、一気にシュピーゲル目掛けて振り下ろしていた。早くて重たい攻撃はズシンという鈍い轟音を辺りにひびかせて地面を抉ると共に、激しい土煙を舞い上げていた。

「シュピーゲル!!」

シノンが彼の名前を叫んでいた。先ほどまで彼のいた場所目掛けて振り下ろされた拳の先に、シュピーゲルが居なかったからだ。しまった、流石に彼にはまだ早かったか、余りにもスパルタが過ぎたかといった思考を巡らせていた。しかし冷静にパーテイメンバー一覧のHP表示を見ると、シュピーゲルのHPはグリーン表示のまま変動していなかった。かと言って死に戻りをしたわけでもなさそうだった。つまり彼は攻撃をもらっていないことになる。ならばどこに行っただろうか。

「シュピー……ゲル？」

シノンはシュピーゲルの行方を探していた。ゴーレムも同様にヘイトを向けているシュピーゲルを視界に捉えようとしていた。しかし彼はどこにも見当たらない。絶対に近くに居るはずなのだ。シノンがあちこちキョロキョロ見回し、索敵スキルを全開にすると、何者が上空にいることに気が付いた。視力も全開にして澄ませて見て

みると、そこには彼女のよく知るケットシーの少年が、右手に短剣を構え、翅を広げてゴーレム目掛けて急降下をしていた。

「シュピーゲル……！」

「シノン！ もつと離れて！」

「え……？」

シュピーゲルの無事を確認したシノンであったが、彼から離れるよう促されると言われた通りにバックステップでゴーレムからまた距離を置いた。上空から急降下しているシュピーゲルは、目を閉じて左手を体の前方に掲げると何やら魔法の詠唱を始めたようだった。シノンは地上からその様子を固唾を飲んで見守っていた。

「エック・フレイギユア・スリール・ゲイール・ムスピーリ……」

「あれは……炎属性魔法……？」

シュピーゲルが詠唱を終えると彼の左手が赤いエフェクトに包まれ、手の周りに炎が形成されていった。やがてそれが完全な火球の形になるとシュピーゲルは目を見開いて急降下を続けながら炎属性魔法を遥か地上にいるゴーレム目掛け、狙いを定めて解き放った。

「鉄には……炎が一番だろ!？」

急降下をしながら重力にまかせて解き放たれた火球は地面に引つ張られるように速度を上げながらゴーレム目掛けて落ちてきていた。火球の大きさはバランスボール程の大きさとなっており、ゴーレムが上空からの気配に気付いたときには既に遅く、その大きい凶体に火球の直撃をもらっていた。

ドゴオンという激しい爆音と共に爆発が起き、二本あるゴーレムのHPバーは一気に一本分減っており、ゴーレムの体を大きく抉っていた。弱点属性をお見舞いした時に発生する”部位破壊”である。炎

魔法をお見舞いしたシュピーゲルは魔法を放った左手を右手に重ねて、全体重を右手に握っている短剣に乗せると更に急降下の速度を上げ、ゴーレム目掛けて突っ込んでいった。

部位破壊を受けたゴーレムは上手く動くことが出来ず、胴体の外殻を破壊されていた為弱点である赤いコアが、人間でいうところの胸のみぞおちにあたるであろう部分から露出していった。シュピーゲルは上空からそれを視認するとその弱点目掛けてダガーを突き出していた。視力が良いケットシー族だからこそ出来る芸当であった。

「でいやあああーッ!!」

弱点を見極めたシュピーゲルは更に落下速度を上げ、全体重を乗せた右手のダガーをゴーレムのコアへ突き刺した。急降下していたシュピーゲルの体は短剣を突き刺した際に衝撃が返り、少しばかりの反動で微量のダメージを受けた。しかしシュピーゲルはコアに食い込ませた短剣を握る手の力を緩めるようなことはしなかった。ひたすらに力を込め続け、ゴーレムに持続ダメージを与えていった。ゴーレムの二本目のHPバーはイエローゾーンへと変わっていった。

(いける……! このままダメージを与え続ければ……!)

その時だった、HPバーがイエローになった瞬間にゴーレムの頭部にあるモノアイが不気味な赤色に怪しく光り輝き、部位破壊の影響で先ほどまで鈍かった動きをしていたゴーレムの敏捷性が上がったのだ。そのただならぬ様子に気付いたシュピーゲルはすぐさまステツプをして距離を置こうとしたのだが、突き刺していた短剣がコアから抜き取れず、立往生してしまっていた。

「シュピーゲル離れて! 奴の攻撃が来るわよ!」

「わかってる! でも武器が……外れなくて……!」

シュピーゲルが渾身の力を込めて突き刺した短剣はかなり深い所まで刺しこまれており、早く抜かなきゃと焦りの気持ちを抱いていたこともあり、簡単に抜けなかった。相手をこの一撃で倒すことしか考えていなかった思考が、シュピーゲルの危険予測能力を削いでしまっていたのだ。そうこうしてる間にゴーレムの太い右腕が空に掲げられ、今にもシュピーゲルへと振り下ろされようとしていた。別に武器から手を離して後退すれば助かるのだが、彼は決してそれをしようとはしなかった。それには彼なりの理由があったからだ。

(この短剣は……シノンが僕のためにわざわざ用意してくれた大事な武器だ！ これ一本で戦っていくと決めた相棒を……保身の為だけにそう簡単に離すわけにはいかない！)

彼には彼なりの武器への愛着と拘りがあった。GGOでの戦場は自分がベストだと判断した武器を相棒に駆け抜ける。文字通り命を預けているのだ、それはたとえ違うゲームであっても決して変わりはしなかった。シノンから貰い受けたこの相棒を絶対に手放さない、そう心に固く決めていたシュピーゲルであったが、このまま立往生していてもやられてしまうのも時間の問題だった。AGIに特化したスキルと装備で身を固めた彼には、このゴーレムからの攻撃を耐えられるかわからない。もしかしたら即死の可能性も考えられる。武器を諦めて手放すしかないのか……そう諦めかけたその時だった。

「シュピーゲル伏せて！」

シノンが声を荒げると共に弓を構えていた。そして素早く何かを呟いたと思えば弓の弦にかかっている矢が真つ赤な炎に包まれていた。炎属性を付与させた弓のソードスキル「スパークル・シユート」を発動させていた。ソードスキルの構えが完了するとシノンは狙いをゴーレムの右腕に定め、矢を解き放った。

解き放たれた矢はゴーレムの右腕に吸い込まれるように綺麗な紅

蓮の軌道を描きながら、激しい爆発を巻き起こして着弾した。矢が命中した腕は先端から吹き飛び部位破壊状態となっていた。右腕を失ったことで大きくバランスを失ったゴーレムは体を上手く動かせないでいた。ギギツという機械音と共に体を小刻みに震わせて火花を散らしていた。

それがシュピーゲルにとって絶好の攻撃チャンスとなった。シノンの放った炎の矢の着弾時の衝撃で短剣がコアから外れ、身動きが取れるようになっていたのだ。MOBの部位破壊は一定時間で元通りになってしまふ。そうなる前に決着をつける。シュピーゲルは少し距離を置き、四連撃短剣ソードスキル「ファッドエッジ」の構えを見せた。モーシヨンを起こすと右手に握られた相棒の短剣が白く光り輝き、ソードスキルが発動した。短剣の切っ先は目にも留まらぬ速さでゴーレムのコアを斬り刻んだ。しかしまだゴーレムを爆散させるにはあと一息足りなかったようで、ゴーレムのHPはレッドに突入しつつも、まだ一撃耐えられるぐらい残っていた。

「ぐっ……ま、まだ生きてるっていうのか……!？」

「いけるわシュピーゲル！ 貴方の覚えているソードスキルならトドメを刺せる！ その武器の特徴を思い出して！ 貴方ならすぐに次のソードスキルを撃てるはずよ！ 急いで！」

「……!!」

シノンからの助言を受けたシュピーゲルはその言葉を信じ、もう一度、今度は別のソードスキルを発動させようと体を動かした。普通ならここでソードスキルの硬直が発生する筈のだが、彼の装備している短剣のソードスキルの硬直を30%カットする特殊効果と短剣のソードスキルそのものの硬直の短さも相まって、ほぼクールタイム無しで次のソードスキルを発動出来るようになっていたのである。

「これで……倒れてくれッ!!」

シュピーゲルはバックステップで大きくゴーレムから距離を置く
と先程とは違うソードスキルのモーシヨンを見せていた。突進型短
剣ソードスキル「ラピッド・バイト」である。深く腰を落とし、後方
に短剣を構えるモーシヨンが完了すると右手の短剣が光り輝き、シュ
ピーゲルは右手を前方に突き出して猛スピードで突進していった。
自慢のAGIも最大に乗り、猛烈な速さでゴーレムとの距離を縮めて
いった。

やがて短剣の切っ先はゴーレムのコアを下から上へと削ぎ落とす
ようにすれ違いざまに斬り裂いていった。ゴーレムにソードスキル
をお見舞いしたシュピーゲルは慣性を残したまま放物線を描いて、体
操選手のような綺麗な回転を決めながら華麗に着地した。コアを斬
り裂かれたゴーレムは残りのHPバーがゼロになり、青白い光を放ち
ながらポリゴン片となって爆散した。シュピーゲルは辛くもこの
ゴーレムに勝利したのである。ゴーレムが倒されたことを確認した
シュピーゲルは緊張が解けたのか、ほっと胸をなでおろして地面に腰
を落ち着けていた。

「やった……倒せた……」

「お疲れ様、シュピーゲル！」

「シノン……、ありがとう」

初見でナイスファイトを見せたシュピーゲルに、シノンは駆け寄り
ながら労いの言葉を掛けた。その時のシノンの見せた表情は非常に
穏やかなものであった。その様子を地面に座りながら見上げている
シュピーゲルの顔も同じように穏やかな表情となっていた。シノンは
労いの言葉を掛けると弓をストレージに仕舞い、彼の隣に並ぶ形で
体育座りで腰を落ち着けた。

腰を下ろしたシノンは意味ありげにシュピーゲルの顔をじーっと
見つめると自分のお下げを指でいじくり「うくん」と小さい声で呟き
ながら何やら考え込んでいた。シュピーゲルはそんな何気無いシノ
ンの仕草に一瞬ドキツとした。現実世界じゃお目にかかることはな

い、生き生きとしてるシノンの一つ一つの仕草に心臓の鼓動を高鳴らせていた。シノンはシュピーゲルから熱い視線が送られていることに気付くと途端に顔を赤くして、すぐさま視線を逸らしてしまった。

「えつと……何？ シュピーゲル……」

「え……！ あ……いやその、ひよつ評価はどうだったのかなあつて……思ったもんだから……」

「あ……えと……う、うん。そうよね……、そうだったものね……」

シノンからそう言われると、シュピーゲルも自分自身の向けた視線に気付き、恥ずかしがって視線を空へと移してしまった。仮想世界のシノンではなく、現実世界の朝田詩乃として意識してしまっていた。それと同時に、今日の前に写っているシノンの立ち振る舞いが、詩乃本来の素の姿、本当の詩乃なんだと認識していた。あんな事件が起これなければ、彼女は現実でもこうやって笑ったり怒ったり、感情豊かに過ごしていたんだろうかと、そう感じていた。

（でも、あの事件があったらこそ……僕は詩乃と出会うことが出来た。……いや、自分から会いに行つたんだ、意地汚い身勝手な理由で……、彼女の胸の内も知らないで……）

シュピーゲルは再び、心にシノンに対する罪悪感と葛藤感を抱いていた。僕がシノンに近付いた理由を彼女が知ったらどう思うだろうか？ 嫌われる？ 幻滅される？ 軽蔑の眼差しを向けられる？ ……いずれにしても彼女が僕から離れていくのは確実だ。それが彼女を騙し続けているボクに対する罪なのだから……。

（……いつか話そう、その時までには心の準備だけは……済ませておかなきゃ……）

「シュピーゲル？」

目を細めて上の空になっていたシュピーゲルに、シノンも首を傾げながら彼の視界に入り込むようにして声を掛けた。シュピーゲルは急に視界に写り込んだシノンに驚き、上体を後方に反らして驚きの声を上げていた。

「わっ！ シ、シノン……な、何だい……？」

「何だはこっちの台詞よ、どうしたのよ……ぼーっとしちゃって……」
「あ、いや……その、それで訓練の評価は……どうだったのかなあって思ってたさ」

「……知りたい？」

シュピーゲルが考えてる事を悟られぬよう話を逸らそうと、訓練の評価の話へと話題を移した。するとこれまでシュピーゲルの訓練に付き添っていたシノンの顔が意味ありげな笑みを浮かべ、話そうか話すまいかと答えを濁すそぶりを見せた。

シュピーゲルが「え、教えてくれないの？」と困った表情になるとシノンはその反応を面白がり「冗談よ冗談！」と楽しそうに笑っていた。そんな楽しげに笑うシノンの無邪気な笑顔を見たシュピーゲルは、そんな彼女に心を奪われていた。

(ダメだ……、罪の意識とか彼女への償いとかが……もう関係ない。僕は……やっぱりシノンの……詩乃のことが……！)

シュピーゲルはもう、自分の心の奥に閉じ込めておいた気持ちに嘘をつくことが出来なくなっていた。この心のモヤモヤが晴れるかなんてわからない、でも……もうダメだ、もう我慢することが出来ない。そう思ったシュピーゲルは気持ちの高ぶりを抑えることが出来ずに、隣で座りながら笑っているシノンの右手を、自分の両手でガッチリと握り締めていた。

「ひゃっ!?! ……な、何……? シュピーゲル……」

「シ……シノン……」

シュピーゲルに右手を握られたシノンは顔を真っ赤にしていた。シュピーゲルもまた、顔を真っ赤に染めながら真剣な眼差しでシノンを真っ直ぐ見つめていた。シノンは彼の視線から目を逸らすことが出来ずに、心臓の鼓動を高鳴らせながらシュピーゲルの言葉を待った。

「シノン……聞いてほしい。僕は君に……言っていないことがある、いや……言わなければいけないことがあるんだ」

「わ、私に……言わなければいけないこと……？」

シノンは緊張のあまり思わず息を飲み込んだ。シュピーゲルが……恭二君が私に言わなければいけないことって一体何だろう……？ ……ひよ、ひよっとしてまさか……！ この状況で言わないといけないこと……っ。

そんな考えを頭の中を巡らせていると心臓の鼓動がまた一層早くなっていったのがわかった。今私は、過去にないぐらいドキドキしてしまっている。身体中の血が激しく勢いよく全身を流れていってる。呼吸も荒くなってきた。仮想世界の体なのに、本物の身体のように隅々まで熱くなっている。シュピーゲルの口から次に出る言葉が、早く聴きたくてしようがない。お願いシュピーゲル……早く話の続きを……聞かせて頂戴……。

「シノン……僕は……、僕は君が……君のことが……ッ!!」

「わ……わたしの……ことが……？」

シュピーゲルとシノンは鼻と鼻が密着してしまいそうな距離まで近付いていた。互いの眼の色、瞳の形、些細な視線の動きまでわかる。小さな呼吸の音まで事細かにわかってしまう距離。ここまできたら行くしかない、引き下がれない。覚悟を決めろ、勇気を出せ、男を見

せろシュピーゲル、いや……新川恭二……!!

「シノン……僕、僕は……、き……君……、君は……ツ!!」

「わ……わたし……は……?」

「……………安産型だね、シノンは」

「……………は?」

シュピーゲルがその言葉を口にした瞬間、シノンの表情が真顔に変わった。シュピーゲルも真顔で平静を装ってはいるが、内心は「しまった……」と焦りの気持ちを抱いていた。

……今僕は何て言った? 女の子であるシノンに向かって「安産型」だ? 何を言ってるんだ! 他に言うべきこと伝えないといけな
いことがあるだろう! や、だが確かにシノンのアバターは現実の詩
乃と比べて豊かな体つきをしている。魅力的なフォルムをしている
と言っている。

もつと言ってしまったはこのアバターぐらい詩乃の身体もふっくら
していればかなり僕好みになるのにな……。……あれ? 気の所為
かな、何だか寒気がする。風邪でも引いたかな、そういえば今日行っ
た川越は結構寒かったし、その所為かもしれない……。ねえシノ
ン、君は寒くないかい? ……あれ……シノン……?

「えつと……シノン……さん?」

シノンは真顔から段々と顔が引きついていき、顔をうつむかせて前髪
で表情が読み取れなくなるまで前かがみになってしまった。更
によく見ると上半身、特に顔の辺りと拳が小刻みに震えていた。あれ
? もしかして僕、シノンを怒らせてしまった? そう思いながら
シュピーゲルは恐る恐る、下からシノンの顔を覗き込もうと腰を少し
落として彼女の顔が見える位置まで体を動かそうとした。

しかしシュピーゲルがシノンの顔を覗き込もうとするよりも前に、

シノンには上体を垂直に戻し、姿勢正しい直立の体勢となっていた。その表情には満面の笑みが浮かんでいた。よかった、怒ってないみたいだ。てつきり彼女の逆鱗に触れてしまったかもしれないと思ったがそんなことはなかったみたいで安心した。

……しかし安心したのにもかかわらず、この全身を襲う寒気が引つ込まないのは何でなんだ？ やっぱり風邪でもひいてしまったかな？ 参ったな……この後勉強しないとイケないのに……。そういえばシノンも体調崩してないか心配だ。ちよつと聞いてみるとしようかな。

「ねえシノン大丈夫かい？ 無理してない？ 今日は10月にしては真冬並みの寒さだったから、シノンも体調崩してないか……僕は心配………なんだけど………？」

シノンは満面の笑顔をシュピーゲルに見せながら、利き手である右手に力を込めてモーシオンを起こし、格闘ソードスキルを発動させようとしていた。構えを見せたシノンの右手は白く光り輝き、シノン自身からも爽やかでドス黒い殺気がシュピーゲルに向かって放たれていた。

シュピーゲルは只ならぬ雰囲気を目の前のシノンから感じ取り、今この瞬間だけはシノンから逃げたかったが、そのシノンから放たれている物凄いプレッシャーに圧倒され、その場から逃げる事が出来なかった。やがてシノンの右拳は、空気が読めないシュピーゲルの顎目掛けて放たれていた。

「シュピーゲルの……、馬鹿あああああッ!!」

「のこわああッ!」

シノンの放った格闘ソードスキル「ビート・アッパー」は吸い込まれるようにシュピーゲルの下顎にゴツンという鈍い音を立ててクリーンヒットしていた。ケットシー領から離れたこのフィールド

エリアはPK保護圏外なので、シュピーゲルのHPはしつかりとイエローゾーンまで減っていた。シノンが格闘系ソードスキルの熟練度を上げていたら、一発ノックアウトされていたことだろう。

シノンの拳の餌食になったシュピーゲルは状態異常「気絶」に陥りながら、美しい放物線を描いて地上から5メートルほどの高さまで吹っ飛ぶと、そのまま運動エネルギーに身を任せたままゴシヤツという落下音と共に地面に叩きつけられていた。その姿を見届けたシノンは腕を組みそっぽを向き、機嫌を悪くし「フンッ！」と言いながら顔を膨らませていた。シュピーゲルはというと地面に仰向けの体勢でぶっ倒れており、手足をピクピクとさせながら悶絶していた。

「フンッ！ もうシュピーゲルなんて知らないんだからッ！」

「あが……あがが……」

それからしばらくしてシュピーゲルは状態異常が解け、ポーションを飲んでシノンに減らされた自分のHPを回復させていた。肝心のシノンはと言うと、先の件もありかつてない程、超が付くぐらい不機嫌になってしまっていた。

近くの岩場に腰を下ろし、足を交差させ、腕を組み、シュピーゲルからそっぽを向き、頬を膨らませてムスツとしていた。そんな彼女にどうやって声を掛けたらいいかわからないシュピーゲルは心底困り果てていた。

「えっと……シノン……？」

「……………」

「怒ってる……よね……？」

「別に……怒ってないわよ」

「……………そう……なんだ……」

シュピーゲルはシノンに対して恐る恐る声を掛けた。長年勉強とミリタリー漬けだった彼に乙女心がわかるはずもなく、なんとかシノンに機嫌を直してもらおうと四苦八苦していた。一方シノンはシノンで一見一触即発寸前のように思えるが、内心では思わずソードスキルでぶっ飛ばしてしまった彼に対してやり過ぎたかなとも感じていた。しかし、先程のシュピーゲルの発言に問題があったのも事実であった。シュピーゲルはどうしたらいいかわからず、弱々しい態度でシノンにどうすれば機嫌が直るか直接尋ねてみた。

「ごめんよシノン……さつきはデリカシーがなさ過ぎたよ……、ホントにごめん……」

「……………」

「えっと……どうしたら……機嫌直つてくれるのかな……」

「…………知らないわよ」

シュピーゲルはその後もひたすら謝り続けたがなかなかシノンの機嫌は直らなかつた。そんなしおらしくなってしまったシュピーゲルを見て、シノンは肝心なところは昔と変わらないんだなと、しみじみ感じていた。そしてシノンは深く溜息を吐き出すとやれやれと言った表情を見せながら語り始めた。

「シュピーゲル……、恭二君ってさ、昔からそゆとこ変わらないよね……………」

「え…………？」

「恭二君さ、学校辞める前から色んなとこ連れてってくれたけど、女の子が通うような小洒落たところか、可愛いお店とか、一緒に入ったこと……なかつたよね」

「あ…………えっと、そう…………だったかな…………」

「そうだったわよ、ガンシヨップとか模型店ばかり連れてつてもらった記憶しかないもの。飲み食いしたっていえばファミレスとかファストフードばかりだったわよ？」

「うう……ごめんなさい……」

シュピーゲルはシノンからの追い打ちにさらに肩を落として酷く項垂れてしまっていた。しかしシノンの怒りは既におさまっていた。確かにあまりの空気の読めなさに腹を立てたのは事実だし、とんでもないことを言われたのも確かだ。しかしシュピーゲルが真摯に謝ってきたのもあり、許してあげようかなとも思っていた。

「……もういいわよ……もう怒ってないから……」

「え……ほ、ホントに……？」

「なんだかんだで……優しいよね、恭二君って……」

「……そんなことないよ、ただ……シノンのことが、ほっとけないだけって言うか……」

「……うふふっ」

私が怒って機嫌を損ねて、酷いことをして罵っても、シュピーゲルは……恭二君は私のことを考えてくれてるんだ。……そしたら……何だか悪い気はしないかな、むしろ嬉しいかな……。

「ほら、そんなに暗い顔しないでよ。ホントに怒ってないから……」

「……うん……ごめんね……」

「ほらまたそうやって謝る……」

「あ、うっうん……そうだね、あはは……」

シュピーゲルが困ったように苦笑いを浮かべて頭をかくと、それまで強張っていたシノンの表情にようやく綻びの様子が見えた。イマイチ度胸が足りなかったり、押しが弱かったり、優柔不断な面も含めて、全部恭二君なんだよなあとしみじみ感じ取っていた。そんな彼のことを私は好きになってしまった、ならその弱々しい部分も含めて全部彼なのだから、みんな受け入れるべきなんだ。……その時だけは腹が立つかもしれないけど。

「えつと……んじやあ許してあげるかわりに、一つだけ付き合っしてほしいことがあるんだけど、いいかしら？」

「付き合っつてほしいこと……？　なんだい？」

「一緒にハロウインクエストに行きましょう、シュピーゲル」

「え……それって今日限定でやってるっていうイベント……だったっけ……」

「ええそうよ、私を不機嫌にさせたお詫びに付き合いなさい。そしてらチャラにしてあげる」

普段の現実の彼女からはとても想像出来ないようなツンツンな態度にたじろいでいたシュピーゲルであったが、既に彼に拒否権は無く、問答無用で有無を言わずシノンに付き合い合うこととなってしまった。シュピーゲルには彼女の顔に「貴方に拒否権は無い」と書かれているかのように見えていた。

しかしシノンの機嫌を損ねたのは自分の所為であることに間違いないし、何より彼女はそんな僕の特訓に付き合い合ってくれた。ルーキーの僕をこの短時間でここまで成長させてくれたのは紛れもなくシノンだ。装備も用意してくれたし、そもそもこのソフトを……ALOをプレゼントしてくれたのは彼女じゃないか。

ならここで彼女のお願いに付き合うというものが筋と言えるだろう。お礼もしたいし僕の実力がどこまで通用するかも確かめたい。ハロウインクエストがどんなものなのかも気になるし、ログイン初日にいきなり期間限定イベントに参加出来るというのは運がいいのではないだろうか。シノンと一緒に参加出来るなら尚更楽しめるだろう。つまり選択肢はイエスしかなかった。

「わかったよシノン、そのイベントクエスト……付き合いよう。僕も気になってたし、シノンと遊べるなら是非やってみたいな」

「え……あ、うん。そ……そしたら早速現地まで行きましょッ」

喋ってる途中から爽やかな笑顔になっていったシュピーゲルの表情の変化を、すぐ近くで見えてしまったシノンには顔を赤くしていた。もっと洩られると思ってたのに割とあっさりOKをもらったことに少し驚いたと同時に、自分と遊びたいと言ってくれたことに、嬉しさを隠せなかった。

その様子をシュピーゲルに見られたくなかったのか、シノンは慌てて自分の顔がシュピーゲルから見えないように角度を変え、左手のメニューからストレージを開き、転移結晶を選択しオブジェクト化して取り出し、左手をシュピーゲルに差し出した。

「ほら、転移するから……手繋いで」

「え？ ……ああ、う……うん。わかった」

シノンが照れ臭そうに要求すると、シュピーゲルも顔を赤らめながらそれに応え、差し出された左手を自分の右手でしっかりと握り締めた。別にこの日に遊びに行った川越でさんざ手を握って歩いていたのだが、この仮想世界では現実世界とはまた違った小っ恥ずかしさがあった。シノンは手を握られた事を確認すると右手に持った転移結晶を空高く掲げて、目的地の名前を口ずさんだ。

「転移！ アルン！」

シノンが転移の為の言葉を言い放つと、彼女たちのアバターは青白い光に包まれ、眩しいエフェクトが光り輝くと共に、草原フィールドから姿を消していた。

同日午後20:25 世界樹の街アルン中央広場

その一方、キリトとアスナを新たなるメンバーとして加えた新生ス

リーピング・ナイトの面々は、クエスト挑戦の為に各々消耗品アイテムの補充、装備の耐久度のメンテナンス、スキルセットの確認など、準備を着々と進めていた。本日集結した新生スリーピング・ナイトのメンバー構成は次のようになっている。

まず二代目ギルドリーダーで「絶剣」の二つ名を持つユウキ。AG I重視の極細の片手直剣を武器に立ち回るスピードタイプ。大抵のMOBはタイマンなら攻撃を見てから全て避け一対一で大体倒せてしまうプレイヤースキルの持ち主である。スリーピング・ナイトのメインアタッカーだ。その実力はフルダイブマシンがメデイキュボイドからアミユスフィアに変わっても劣ることはないだろう。

そして、そのユウキの恋人であり「黒の剣士」の二つ名を持つ相棒キリト。何と言っても特徴は両手に握られた二刀流。ALOは一応両手に一本ずつ武器を装備出来るものの、本来二刀流スキルは存在せず扱いも大変難しい為、使いこなせるのはSAO 時代から二刀流を使い続けていたキリトぐらいだった。戦闘面も火力が単純に倍になり、手数も増える為ヘイトの変動の調整もしやすく、スイッチに大きく貢献出来たりトリターンはかなりいい。短期決戦でならシステム外スキル「スキル・コネクト」による高火力ダメージも叩き出せたりと、反則級の実力を持ったプレイヤーだ。そして新たについた二つ名は皮肉の意味も込めて「ブラツキー先生」となっていた。

そしてそのキリトの元恋人で、ユウキの一番の親友であるアスナ。種族であるウンディーネの特徴を活かした回復魔法を得意としている……筈なのだが、剣の腕前もSAO 時代から培っていた技術が相まって、ヒーラーであるにもかかわらず最前線で敵をなぎ倒してしまいうので、ついた二つ名が「バーサクヒーラー」という大変不名誉なものであった。本人はどうせ呼ぶなら昔呼ばれた「閃光」の方で呼んでほしかったのだが、世間は前者の二つ名を大層気に入ってしまった。良い子のみんなは彼女の前では前者の二つ名で呼ばないようにしよう、決してリメインライト化したくないのなら。

次はスリーピング・ナイト初期メンバーの一人で、キリトと同じく珍しいスプリガンの女性プレイヤー、ノリ。酒を飲まなければ大変に

面倒見が良い、みんなの姉さん女房的な存在の頼れる大人のお姉さんだ。戦闘の腕前もかなりのもので、その細身のアバターからは想像出来ない自身の身の丈ほどある長い鈍器を手に握り、戦場を駆け回る。ついた二つ名は「飛燕の眠り子」

おっとりとした性格のウンディーネの少女、シウネー。ギルドの中ではユウキと一番仲が良く、よく二人でALOで食事なども行っていた。最近まで急性白血病を患っていたが、8ヶ月前に行ったユウキのライブで集まった骨髄を移植手術したことにより、奇跡の完治を成し遂げた。ALOでは前線に出ずに、後方で回復魔法や氷属性魔法などでパーティの支援に徹する。彼女の支援がなければスリーピング・ナイツはポーシヨン代がかさみまくっていることだろう。本人のおっとりとした性格もあり、ついた二つ名は「癒合の眠り子」

そして、スリーピング・ナイツで最年少だと思われるサラマンダーの少年、ジユン。その見た目通り明るく活発な男の子で、密かにユウキのことが気になっていた様子だ。全身を真っ赤な装備でガツチガチに固め、剣と炎属性魔法を巧みに使い分け戦場を駆け回る魔法戦士型のプレイヤーだ。その真っ赤な見た目と戦闘スタイル、そして本人の真っ直ぐな性格からつけられた二つ名は「情熱の眠り子」

欠席のタルケン、テツチを除いて以上六人の新生スリーピング・ナイツのメンバーが、ここ世界樹の街アルンの中央広場へと足を降ろしていた。新生スリーピング・ナイツの最初の仕事、ハロウインクエストを攻略する為に。新たに加入したキリトとアスナは元より、ユウキが半年ぶりに帰ってきてくれたことに、既存メンバーは何より喜んでいった。また自分たちのスリーピング・ナイツが動き始めた。結成した当初とは随分メンバーも違うが、これからも限りない思い出をたくさん作るべく、再びこうして馳せ参じた。

「うわあ、普段と大分違う雰囲気だねえ」

ユウキはハロウインの装飾が施されたアルンの街並みを興味津々といった様子で見渡していた。現実世界でも、和人と一緒に駅前を買

い物に行つたときに目にしているのだが、それとは違つた仮想世界ならではの装飾に胸を躍らせていた。

ハロウィンの装飾が施されたアルンの中央広場は辺り一面ハロウィンらしい飾り付けがなされていた。中身をくり抜かれて松明が入れ込まれ、怪しく光り輝くパンプキンヘッドの置物や、地面から生えている不気味な黒い霧を漂わせている蝙蝠のフラッグ、ALOゲーム内に存在するゾンビ、マミー、フランケンシュタイン、ゴーストなどといったアンデッド系のMOBの3Dモデルが佇んでいたりと、如何にもハロウィンといった雰囲気にも包まれていた。特に目を引くのが中央広場のど真ん中にあるイベントNPCの背後にある巨大なパンプキンヘッドの像だった。

周辺にあるどのパンプキンヘッドよりも禍々しい雰囲気も漂わせており目付きも悪く、この場にいる全プレイヤーに対して殺気にも近い威圧感を放っているようにも見えた。何かきつかけでもあればこの像そのものが動き出しそうな空気をも漂わせていた。そんな巨大な像の前に、ボロボロの真つ黒なシルクハットとタキシード服に身を包み、左手で杖をつき、右手で腰を押さえ、猫背になつてしまつている浮浪者風の爺さんのNPCが、独特の怪しい雰囲気も放ちながらプレイヤーが話しかけてくるのを待っていた。

「ねねっキリト、あのボロボロのお爺さんに話し掛ければクエストが始まるのかな？」

「そうだろうな、今まで見たことがないし、あのパンプキンヘッドの真ん前に陣取つてるところを見ると、多分イベントNPCで間違いないだろう」

「……オレ、あーゆー爺さんちよつと苦手なんだよな……馴れ馴れしくてさ」

「アタシも、なんかセクハラしてきそう」

メンバーからの爺さんの評価は、一部を除いて散々なものであつた。特に女性陣からのセクハラしそうという評価については、ユウキ

を除いて全員が首を縦に振って同意していた。しかしNPCはNPC、話し掛けないとクエストは始まらないし、運営がプレイヤーに向かって直接的な嫌がらせをするなどといったことは無い筈だ。

しかしアスナ、シウネー、ノリの三人は頑なに話し掛けたくないらしく、しようがないのでキリトを先頭にユウキ、ジュンの三人でNPCに話し掛けに行くこととなった。キリトたちとNPCとの距離は30メートル程、その距離を歩いて移動をしていると、キリトはその途中によく知った顔がいることに気が付いた。

「ん……あれ？ シノンじゃないか。どうしたんだこんな所で」

「ホントだシノンだ！ おーいシノンー！」

キリトがその知った顔の正体がシノンだということに気が付くと、連鎖反応でシノンに気付いたユウキが嬉しそうに両手を大きくぶんぶん振り、シノンを呼び止めた。その様子にあちら側も気付いたようにで元気に挨拶をするユウキ達へのもとに歩み寄ってきた。

「やあ、こんばんはシノン」

「こんばんは、ユウキにキリト。偶然ね、アンタ達もハロウィンクエストト？」

「アンタ達もってことは、シノンもこれからハロウィンクエストを？」

「え、ええ……。彼と一緒に受けるつもりだったのよ」

「彼って……、シノンの隣にいる猫耳の……？」

キリトの言うシノンの隣にいる人物とは言わずもがな、今日……それも今しがたALOに降り立ったばかりのケットシー族の少年、新川恭二ことシユピーゲルのことだ。シユピーゲルはキリトと視線を合わせるとマジマジとキリトのことを見つめていた。キリトは何故自分がそんなに真剣な眼差しを送られているかわからず、シノンはその様子を横から楽しそうに眺めていた。

「すごいね……一度ライブの映像で見たけど、現実世界とそっくりなんだね……、和人も木綿季ちゃんも」

「え……、俺の名前を知ってるって……、それにその聞き覚えのある声……まさか君は……」

「ええそうよ、彼は恭二君よ。こつちの世界ではシユピーゲルっていうの。つい今しがた、GGOからキャラをコンバートしてきたのよ」
「こんばんは、先程ぶりかな？ 二人とも」

「……………」

「……………あれ？ キリトにユウキちゃん？ 固まっちゃって……だ、大丈夫かな……」

キリトとユウキは恭二……、シユピーゲルのアバターを見るなり固まってしまった。それもそのはず、今までALOで男性キャラでケツトシーを選ぶプレイヤーは全くと言っていい程いなかったからだ。何故かという理由はやはりその見た目にあった。キャラクタのアバターがランダムで形成されるALOでは本人の意思とは関係なく、外見がCPUに選ばれる。

その外見は種族によってランダム性に偏りがあり、シユピーゲルが選んだケツトシー族は男性キャラの場合、かなりの確率で残念な見た目のアバターになってしまふのがほとんどだった。他のゲームからキャラをコンバートしても、課金して再びアバターの外見を変更しても、中々猫耳が似合う見た目とはならなかったのだ。多くの人が筋骨隆々なガツシリ体型に猫耳に尻尾なぞという、グロテスクな見た目のアバターとなるのが関の山であり、シユピーゲルのように女性とも男性とも取れる、中性的な見た目をしたケツトシーは大変に珍しいものだった。というより初めてではないだろうか？

「えと……恭二、なんだよな？」

「う、うん。そうだけど……」

「……男キャラ、なんだよな？」

「そ、そうだよ？」

「……その見た目でか……」

「頼むからそのことについては触れないでくれ……、僕もこんな風になるなんて思わなかったんだよ……」

あまり触れられたくないアバターの話を無理矢理逸らそうとしているシュピーゲルを尻目に、キリトの近くにいたユウキとジュン、そしてそれを少し離れた位置で眺めていた残りのメンバー、特にアスナが興味津々にとシュピーゲルに駆け寄ってきた。その光景は自分のアバターの外見に触れてほしくないシュピーゲルにとっては、それはまさに悪魔の集会に見えていたという。

「可愛いー！ ホントに恭二なの!? すっごく可愛いよー！ アスナーー！ シウネー！ みんなも来てごらんよー！」

「ホントだぜ、男のケツトシーでここまでのアバターはなかなかかとうか初めて見たぞ、オレ」

まずはジュンとユウキが率直な感想を述べると、シュピーゲルは肩を落として大きく溜め息を吐き出した。だいぶメンタルがすり減っている様子だ。そしてさらにユウキがアスナたちにこつちに来るよう声を掛けたもんだからたまったものではなかった。その光景を見て、更にシュピーゲルは大きく肩を落としていた。

「え？ なになに？ しののんのお友達？」

「あの方……、ずっと前のイベントの時にシャムロックの足止めをしていたいただいた、シノンさん……でしたよね？」

「おー！ 確かに！ そいやあちゃんとしたお礼出来てなかったよな？ 一緒にイベント誘ってみるか？」

あ……ああ……シノンのお友達かな……、興味津々とした顔で僕に近寄ってくる……、あの子たち絶対に僕のこと女の子だと思ってる。これ以上僕の精神を削り取らないでくれ……、お願いだからそんな満

面の笑みでこつちを見ないでくれえっ!!

その後シュピーゲルはキリト以外の全員にその外見についてさんざいじくられ、精神を擦り減らされ、弄ばれていた。そして彼が男だということがわかると、今度はその矛先がシノンへと向かい、シュピーゲルとはどういう関係なのかという話題にまで発展していった。中でも特にアスナは目をキラキラさせてシノンに詰め寄り、実に楽しそうにその話題に花を咲かせていた。

無理もない、元SAO サバイバーの中で表向きではクールな狙撃手としてキャラクターが立っていたシノンに、キリト以外の男の子の親しい友達がいるなんて驚愕の事実だ。アスナが食いつかないはずがない、それどころかそんな楽しそうな話題、シリカやリズベット、さしてはフィリアやストレアたちの耳に入ったらどうなるだろうか？

十中八九彼女たちのいい玩具になってしまおうだろう。

「ねえしののん！ 彼とはどういう関係なの？」

「ベ……、別にただのクラスメイトよ……」

「あはは……、まあ今は学校は辞めちゃって予備校に通ってるけどね……」

「へえー……そうなんだ。ねえしののん、本当に彼とはただのクラスメイトなの？ 実は付き合っちゃったりなんかして！」

「ばっ……なっ……ちっ、違うわよ！ シュピーゲルとは本当にただクラスが同じってだけで……付き合ってるとかそんなんじゃない……！」

アスナからの尋問に真っ向から否定の態度を示していたシノンであつたが、顔を真っ赤にし、慌てふためいた仕草でそんな態度を取られても全く説得力が感じられなかった。そんな彼女の本当の気持ちを知っているユウキだけは、顔に手を当てて笑って喜んでいた。しかしユウキはそのことを周りに教えるようなことはしない。こういうことは本人の口から言うのが一番だということを知っているからである。

「あくあく……まさかしののんにも大事な人がいたなんてなあ……今の私にとつては羨ましいな」

「あはは、えつと……困ったねこりや……」

「だからあく！ ホントにそんなんじや……うう……」

普段いじくられることがあまりないシノンには、アスナからの執拗な問い詰めに猫耳の先端まで真っ赤にし、うつすらと涙を浮かべ声を裏返してしまっていた。シュピーゲルは話の矛先がシノンに向かうと途端に元気になり、満更でもなさそうな表情で頬を人差し指でポリポリとかいていた。そんなシノンを見ていたユウキは流石に可哀想になつてきたのか、自ら彼女に助け舟を差し出した。

「アスナあ、もうその辺にしておいてあげようよ。シノンが可哀想だよ」

「そうだね、またいつでも出来るしね、うふふふっ」

「アスナあ……アンタあ……覚えときなさいよ……」

シノンは両手で猫のポーズを取り、激しい飢えた獣のように唸り、猫耳と尻尾を逆立てて、激しくアスナを威嚇していた。ほつといたらアスナに跳びかかりそうな勢いだったが、ユウキとシュピーゲルが後ろから肩を掴んでなだめていたため、それは叶わなかった。そんな微笑ましいやり取りを見ていたシウネー、ノリ、ジュンらのスリーピング・ナイツのメンバーにもほっこりとした笑顔が浮かんでいた。

「なんだけいいですね……とても賑やかで」

「打ち上げの時の酒飲んだノリみたいだよな！」

「一番うるさいアンタにだけは言われたくないっての！」

ノリは年下の分際でと言わんばかりにジュンの頭に拳骨をお見舞いしていた。どつかれたジュンは涙目になりながらも恨めしそうな

目でノリに視線をとばしていた。口答えすればまた拳骨が飛んできかねない、ここは納得いかないが我慢する場だと、子供ながらに悟っていた。しかし痛覚があるわけでもなし、PK保護圏内でHPが減るわけでもなしに痛い気がするのとは一体何故なんだろうか？ 衝撃があるから？ エフエクトが派手だから？ VRMMO界七不思議の一つである。

「アハハ……、んでどうするシノン？ 俺たちもハロウインククエスト挑戦しようと思ってるんだけど、よかつたらシノン達も一緒にどうだ？」

「え……一緒に言っても……」

キリトからパーティーのお誘いを受けたシノンであったが、冷静に今いる人数を確認してみる。まずキリト、ユウキ、アスナ、シウネー、ノリ、ジュンの六人にシノン、シュピーゲルの二人を合わせて八人。そう八人いる。しかしALOのパーティー人数上限は七人、このままでは一人あぶれてしまう。どうあがいてもこの中の誰かがハブられてしまう。しかしキリトの表情は笑みを浮かべたまままだ、何か策でもあるのだろうか？

「ねえキリト、パーティーの上限って七人だったよね？ だとしたらシノンかシュピーゲルどっちかしか入れないんじゃない？」

「大丈夫だ、今回のこのイベントクエスト限定でパーティー上限が八人まで解放されているんだ。シノンもシュピーゲルも一緒に挑戦出来るよ」

「え……そうなの？」

そう、SAO やALO、GGOといったザ・シードを基盤としたVRMMOのパーティー人数の上限は、基本的に七人までとされている。システム上は一人分の空きが存在するのだが、クエストの途中NPCが仲間としてパーティーに加わり、クエストクリアまで共に戦って

くれるものがある。本来はその為の空き枠だったのだ。

しかし近頃になって七人パーティじゃ中途半端過ぎる、NPCはNPCで専用枠を作ればいいじゃないかといった要望が大多数のプレイヤーから運営に対して前々から寄せられていたのだ。運営も表向きはバランス維持のためと公言してはいるが、実際のところはザ・シードのシステム通りにプログラムを走らせた方が問題が少ない為、現状を維持していた、というわけである。

だが昨今になって漸く運営が重い腰を上げプログラムを修正し、今回のこのハロウィンイベントに試験的に被せてきたのだ。ここで目立った不具合がなかったり、サーバーやマシンに負荷がかかり過ぎるなんてことにならなければ、早いうちに正式に実装されるとのことだ。人数が七人から八人になればそれだけで戦術の幅が広がる。アタッカーを増やして殲滅力をあげるもよし、タンクやヒーラーを増員し、不滅の鉄壁の布陣を敷いてもよしと、かなり戦闘の面白みに磨きがかかるにちがいない。

「つてことは……ここにいる全員でクエストに臨めるつてことなのね？」

「ご明察、つてなわけでシウネーさんたちも……いいかな？ 勝手に話進めちゃったけど」

「私たちは大丈夫です、寧ろ大歓迎ですよ！ シノンさんにはあの時のお礼もまだですし、みんなでやりましょうよ！」

「そうだぜ！ キリトさんも今度は最後までいてくれよな！」

「よっしゃあ！ そしたら早いところ受注しにしよう！ アタシら八人なら楽勝だつて！」

「ようし！ そしたらキリト！ パーティリーダーお願いね！」

「え……なんで俺が……」

「いいからいいから！ こういうのはキリト君向けだから！ ほらほら早く！ クエスト受けられなくなっちゃうよ？」

ユウキとアスナに背中を押されたとなると、流石にキリトも断るに

断れず渋々パーティーリーダーを承諾した。どうせならギルドリーダーであるユウキがやった方が締まるのではと思っていたが、折角久しぶりのALOだ、しかも大人数でパーティを組むんだ。たまには俺が締めるのも悪くないと、キリトは心を決めると「オホン」とわざとらしく咳払いをして、愛剣のユナイティウオークスを鞘から抜き、地面に突き刺すと柄の先端に両手を当てて、演説気味に出発の音頭を取った。

「みんな、今日は俺とユウキが復帰したばかりだというのに、こういう機会を設けてくれてありがとう。このお礼は、いつかきつと、精神的に……！」

キリトが利き手の右手でガッツポーズを取ると、それに続くように残りのメンバーも笑みを浮かべながら、ユウキ、アスナ、シウネー、ノリ、ジュン、シノン、シユピーゲルの順にガッツポーズを返し、互いの拳をぶつけ合った。全員の息が揃ったところでキリトが地面に突き刺していた剣を抜いて鞘に戻し、NPCのいる方角へ向けて歩き始めた。

「よし行くぞー！ 絶対にクエストを成功させて帰るぞー！」

「おうー！」

「うん！」

「はいっ！」

「あいよ！」

「おうよ！」

「ええっ！」

「お、おー！」

第53話く小さな出会い

西暦2026年10月31日 土曜日 午後20:43 世界樹の街
アルン中央広場

シノンとシュピーゲルをパーティに加え、総勢八名の大人数となったスリーピング・ナイトのメンバー一行は、キリトを先頭にいざハロウインクエストに挑戦するべく、老紳士風のNPCに話し掛けていた。NPCの服は全身ボロボロなので、老紳士というよりは浮浪者風の見え目であったが、話し掛けなければクエストが始められないのでしようがなく、キリトはそれっぽいワードで話しかけてみた。

「えっと、お爺さん……何か困ってることあったりしませんか？」

キリトはこちらにクエストをよこしてくれるよう、困りごとがないかどうか発言してもらおうような話し方でNPCに声を掛けた。妙に不自然な会話風景に見えるが、相手はあくまでもNPCなのでキートなるワードを用いて話し掛けないと、ただ単に世間話で終わったり、下手すると会話すら発生しないこともある。いくらNPCとは言え、外見が人の姿をしたものに話しかけて無視されるとなると、結構心にくるものがある。

キリトに声を掛けられたNPCはギュルンと勢いよく首をキリトの方に曲げ、甲高い声でキリトにプログラムで組まれている返事を返した。その語り方を見る限りは本当に困っているのかどうか疑問だが、それを言ってしまうえば元も子もないのでここは黙っておこう。

「若者よ……、このワシの悩みを聞いてくれるというのかい？ ケケケ……」

「え……ええ……、何かお悩みならご相談に乗りますよ」

「そうかそうか……感心な若者じゃ……、では……聞いてくれるかのう……ヒヒヒ……」

老人はいかにも、といった口調でニヤケ顔で所々奇妙な笑いを挟みながら事のあらましを話し始めた。ただでさえ近付くのが嫌なアスナ、シウネー、ノリは想像通りの話し方に更に距離を置いて引いていた。どうやら女の子にとつて、この爺さんの風貌は生理的に無理なものがあるらしい。何故ユウキは平気なのが気になるところだ。

「実はのう……、わしはこう見えてもこの地に屋敷を持つ大金持ちの伯爵でな……、今は隠遁している身で、余生をのんびりと過ごしておったのじゃよ。……しかしじゃな……」

「……しかし……なんですか?」

「数週間前から化け物が住みこんでしまったのう……、家中荒らされ、大事な物は盗られてしまい、すっかり荒れ果ててしまった……、そこでなんじゃが……」

老人が一区切り話し終えると一旦会話イベントが終わり、老人の頭の上に電球のようなマークのアイコンが光り輝いていた、どうやらもう一度話しかけてフラグを立てないといけないようだった。

「……イベントNPCの割には微妙に面倒くさいな……、もう一回話し掛けろってか……」

「まあまあ、そう言わずにもう一回話し掛けてみなってば」

ユウキにそう言われるとキリトは渋りながら引き続き老人NPCとの会話を再開した。普通この手のイベントNPCは一回話し掛ければそのままストレートにイベントまで突入するのがデフォルトなのだが、何故か今回は一旦会話イベントが終了し、もう一度話し掛けなければならぬという地味に面倒くさい仕様となっていた。このNPCの見た目といい一々面倒だったり、まるでプレイヤーをイラつかせるようなイベントである。

その後も一々セリフに「キキキ」だとか「イヒヒ」という不気味な

笑い声を挟みつつ、老人はキリト達に長くて一々くどいクエストの説明を続けた。要約するところということだ。

老人の住んでいる屋敷が化け物に占拠され、好き放題荒れ放題にされてしまっている。だがわしに奴らを追い出す力はない、そこに君たち若い妖精の冒険者が現れた。これはきつと運命的なものに違いはない、報酬も出すから是非君たちの力で化け物を屋敷から追い出してほしい。

とまあどこでも聞いたことのあるようなシンプルな・内容のクエストだ。まあイベント専用なのであまりにも複雑にしてもクリア出来なかつたりそもそも受注する気が失せたりするのでこれぐらいのシンプルさと理解しやすさが丁度いいというものだ。しかしそれなら一々二度話し掛けないといけなくしたりなんて面倒くさい仕様になければいいのにと、キリトは若干の憤慨を感じていた。

「……以上じゃ、何か質問があれば受け付けるが……ククク……」

「いえ、大丈夫です。待っててください、すぐに退治してきますから」

キリトが一しきりの会話イベントを終えると、目の前にクエストウィンドウが表示された。内容は《QUEST: Halloween Quest》が開始されました。これでようやくハロウィンクエストが始まったようだ。キリトはようやく受注したことを確認すると、疲れたように溜め息を吐き出していた。

「……まだクエストが始まってもないのに疲れたぞ……」

「お……お疲れ様……キリト……」

「あのお爺さん……話が長いってどうか……一々笑うからテンポ悪くて話が中々前に進まないって感じだったね……」

ユウキとアスナがキリトに対して労いの言葉を掛けていた。それぐらい爺さんの話は遠目に聞いていても疲れるものだった。何もここまで現実の爺さんみたいに話を長引かせなくてもよかつたのにと、

キリトは思っていた。しかしこれでようやくクエストに進めるというものだ。キリトは爺さんから渡されたイベント専用転移結晶をスレージから取り出し、早速イベント用の屋敷に転移しようと手を掲げた、しかしそこで老人が突如キリトに向かって声を掛けた。

「気を付けなされよ、奴らは一筋縄でも二筋縄でもいかんぞ……ケツケツケ、幸運を祈る……」

「……意味深なことを言う爺さんだな……、会話イベント終了後だつてのに……変なNPCだな……」

「……気にかんないぜキリトさん、さつさといこうぜ」

「あ、ああ……そうだな……時間もなくなっちゃうし……いくか」

爺さんの最後の意味深な一言が気になった一行だが、さつさとクエスト受注時間までにクエストフィールドにいかないと転移が出来なくなってしまうので、そそくさと移動を開始した。爺さんの一言は確かに気になるが、まあクエストを受けてみれば自ずとわかるだろう。キリトは全員が一カ所に集まっていることを確認すると今度こそ転移結晶を空高く掲げた。

「転移！ ハロウインダンジョン！」

キリトが転移の言葉を口にすると、八人の体は青白い光に包まれ眩しい光と共にアルンの街から姿を消した。その光景を見ている風に佇んでいる爺さんNPCは、相変わらずひたすらに不気味な笑みを浮かべていた。まるでこのクエストには裏があるような、そんな可能性をも窺わせる仕草だった。

同日同時刻 ハロウインイベント専用ダンジョン 伯爵の屋敷

「おわ……、これはいかにもな場所だな……」
「……ボ……ボク……帰っていいかな……」

一行が目のお当たりにしたのは、とてもお金持ちの爺さんが現在進行形で暮らしている……、いや荒らされたという設定だから一応過去形なのだろう。お金持ちがついこの前まで住んでいたとは思えないように荒れ果てていた。どうみても家主が屋敷を去ってから何年かは経っているような朽ち果てっぷりだった。周りの時間が夜の闇に変わっていることもあり、屋敷の気持ち悪さに拍車がかかっていた。

屋敷は18世紀頃の欧州の貴族が住んでいるような立派な屋敷ではあったが、化け物が住んでいるという設定に相応しく、木材で出来た箇所は所々ボロボロになっており、いたるところに穴が空いていた。窓ガラスも全て割れたりひびが入っていたり、完全に埃で中が見えなくなっている箇所も見受けられた。この屋敷の先祖のものか定かではないが、屋敷の左右には石で出来た苔だらけの墓が立てられており、その周辺に生えている草木も枯れ果てていた。更にその枝にはカラスがカアカアと不気味な鳴き声をあげながら、パーティー一行に視線を送っていた。

結構こういったハロウィンイベントにありがちな勘違いなのだが、そもそもハロウィンというのはかつて古代ケルト人が毎年10月31日に秋の収穫を祝い、悪霊を追い出す為の宗教的な意味合いが強い行事であった。しかし近年になり主にアメリカで民間のお祭りとして定着し、子供がお化けやモンスターの仮想をして近所を回り、お菓子をもらう風習として世界的に有名になっていった。

そしてこのオンラインゲームが充実しているこの現代、この時期になると必ずと言っていいほどハロウィンイベントが用意されている。ゴーストやゾンビなどのアンデッド系のモンスターと戦ったり、幽霊の悪戯を掻い潜ってクリアするといった内容で、ハロウィンはゲーム業界にもすっかり定着していた。そこにかつての豊作を祝うための面影はどこにもなく、かろうじてパンプキンに農作の要素が少しだけ窺えるだけ、といった具合になっている。従来の悪霊を追い

払ったり、退治するという意味合いでは、アンデッドモンスターを倒すことに相違はないのだが。

一行は屋敷の外の不気味な雰囲気にな若干の不快感を覚えつつも、少しずつ歩を進め、屋敷の扉に手を掛けた。屋敷の扉は両開きになっており、淡い色のマホガニー調の木材で出来ていた。しかし全体的によく見ないと分からないぐらいに朽ちており、金で出来たドアノブには嫌がらせのように蜘蛛の巣が張っていた。握れば絶対に蜘蛛の巣ごと触ってしまう。キリトは微妙な表情をしながらドアノブに手を掛けて、金属が錆び付いているような抵抗感を覚えながらも捻り、ゆっくりとドアを開けた。

キリトが一度ドアを開くと、キキイという耳に不快感を与えるようなSEを響かせながら、手を掛けてなかった方のドアも一緒にゆっくりと開いていった。その発せられた音に不快感を覚えたユウキはとっさにキリトの背後に隠れた。その様子を、ここにいるメンバー全員が見逃さなかった。あの絶対無敵を誇る絶剣が、大衆の面前で華麗に儂く元気に歌う絶歌が、扉の物音ひとつでたじろき、恋人であるキリトの背後に逃げるようにして隠れたのである。異常にべつたりとくつつかれているキリトはそれが気になり、背中にいるユウキに対して質問を投げかけてみた。

「……ユウキ、もしかして怖いのか？」

キリトが直球的なまでの質問をすると、ユウキは途端に目を丸くし、視線を泳がせ、手をパタパタとさせて「そそそそそんなことなかなかないよ!!」と必死に誤魔化そうとしていたが、誰が見ても嘘であることはバレバレであった。そう、ユウキは昔から幽霊やお化けといったものが大の苦手であった。アンデッド系のMOBは平気で容赦なく斬り捨てていくというのに、普通の幽霊やお化け、都市伝説といった要素に対しては恐怖を覚えていたのである。

そんな怖がっているユウキに対する反応は様々なものであった。アスナとジユンとノリは愉快そうに駆け寄ってユウキの反応を面白

がり、シウネーとシユピーゲルは怖がるユウキを心配そうに見ており、シノンはその賑やかなやりとりをやれやれといった様子で見守っていた。

ユウキ本人もイベントダンジョンがこんなにもおどろおどろしい場所とは思わなかったらしく、委縮してしまっていた。去年のハロウィンイベントはもつとコミカルでファンタジーなイベントだったので、今年もその類のものだと思っていたのだろう。ところがどっこい、今年のイベントはこれでもかというぐらいにホラー要素満載の泣く子がさらに泣いて帰る仕様となっていた。

「ボ……ボク帰るうううッ!!」

メニユーを必死に捜査してログアウトしようとしているユウキの左手を、アスナが満面の笑みでムンズと驚掴みにしてログアウトを阻止した。どのみちアスナが阻止しなくてもダンジョン扱いなのですぐにはアバターがログアウト出来ない仕様となっている。いやしかしプレイヤーの意識は現実へと戻るのであるからして、実は正解だったのかもしれない。

アスナの笑顔には「帰さないわよ?」と書かれており、絶対にユウキをここから逃がさないといった強い意思が見て取れた。するとノリがアスナの援護に入り、ユウキを羽交い絞めにしてしまっていた。そこには絶剣、絶歌、ギルドリーダーとしての威厳は全く感じられず、ただのか弱い女の子としてのユウキがいた。実際、現実世界に帰ればか弱い女の子なのだが。

「やだああああ!! 離してえええええ!! ログアウトさせてええええッ!!」

「ダメに決まってるんだろ!? クエスト始める前にあんなに粹がって絶対に成功させようとか言ってたじゃないのよー!」

「全くだぜ! ギルドリーダーが一目散に逃げ出そうとしてるんじゃないよ全く!」

ユウキはアスナ、ノリ、ジユンの三人に包囲され、完全に逃げ場を失っていた。そこまでになるほど嫌だというのだろうか。羽交い絞めになっているノリの方がユウキよりSTRが高いためか、どんなにユウキが暴れてもノリの腕を振り払うことが出来ないういた。暴れていたユウキも次第に諦めたのか、徐々に大人しく……というよりはしおらしくなってしまう、大きく肩を落として地面に膝をつき瞳に涙を浮かべていた。そんなユウキにキリトは駆け寄って、ユウキと目線の高さを合わせるぐらいまでかがみこんで、優しく声を掛けた。

「ユウキ、大丈夫か？」

「キリトお……うう……」

「幽霊とかお化けとか、苦手なのか？」

ユウキはキリトの声掛けに対して、無言でウンと頷いた。その様子からは本当に心から怖い、苦手だという気持ちが見て取れ、他のパーテイメンバーもちよつとだけいたたまれない気持ちになっていた。その中でもシノンには特に複雑な表情を浮かべていた。誰にでも苦手なものがあるということ、この中で一番よく知っているからだ。ユウキはノリの羽交い絞めから解放されており、力なく女の子座りでペタンと地面に座り込んでしまっていた。

「誰にでも苦手なものはあるさ、ユウキが苦手だつていうのなら俺が全力でフォローするよ」

「……でも……怖いものは……怖いんだもん……」

一向に屋敷の中に入りたがらないユウキを見て、キリトはユウキの肩を掴んで、ゆっくりと立ち上がらせてあげた。ユウキは最初はフラットしたが、すぐに自分の力だけで立っていた。両手を自分の胸に当て、本当に困ったといった表情でキリトに視線を送っていた。そんなユウキの頭をキリトは優しく撫でて励ました。

「でも俺はユウキと一緒にこのクエストをクリアしたいな」

「……でも……無理だよ……」

「……そうだな、ん〜……それじゃあこうしよう」

キリトはもう一度ユウキの両肩に両手をポンとあて、力強くユウキに元気を注入するかのようように、頼れる言葉を投げかけた。

「ユウキは戦わなくていい、俺の後ろで付いてきてくれればいい。それなら……いいか？」

「え？……えつと……でもそれじゃあボクだけサボってることになっちゃおう……」

「しよがないさ、どうしてもユウキの力が必要な場面になったら……その時に要請するよ。とりあえず当面は戦わないで後ろで付いてきてくれ。みんなもそれで構わないか？」

キリトがユウキ以外のメンバーに話を振ると、メンバー同士の視線が一瞬「どうする?」といった感じになったが、本気で怖がってるユウキの姿が再度視界に入ると、全員揃って「やれやれ」といった表情になり、キリトからの提案を承諾した。その中からシノンが一步出てきてユウキに歩み寄り、頭にポンと手を当てて優しい表情で声を掛けた。そのやり取りはまるで、お姉ちゃんが可愛い妹を励ますかのような微笑ましい光景に見えていた。

「ユウキ大丈夫よ、私達全員が全力でサポートするから……安心して後方にいてちょうだい?」

「シノン……」

「……まーったく、しよがないヤツだぜ、うちのリーダーは……。せいぜい安全圏にいてくれよ? リーダー」

「しかし意外ね、ユウキがお化けとか苦手だなんて……ウフフ♪」

「うう……ごめんね……」

ユウキの意外な弱点にスリーピング・ナイツのメンバーは意外そうな表情を浮かべていた、しかし驚きながらもその顔には微笑ましさも見て伺えた。絶剣と呼ばれていても、やっぱりユウキは普通の女の子なんだなど。普通に恋して、普通に笑って、普通に怖がって、ALOに知れ渡っているイメージとは程遠いが、実にユウキといえばユウキらしい可愛らしいものだ。

とりあえずの話はまとまり、一行のフォーメーションはこうなつた。先陣をアスナとノリ、次陣目にジユン、シウネー、参陣目にシユピーゲルとシノン、最後尾にキリトとユウキという陣形となった。

本当はバランスを考えたらシウネーとシノンが最後尾なのが好ましいのだが、シユピーゲルはルーキーなのでシノンが付き添い、ユウキは怖いので最後尾でキリトにくつついて進んでいくことになった。まあこの中でも反応速度が速い部類に入るアスナとトレジャーハン トが得意なスプリガンであるノリが先陣を切っていけば、MOBの強襲もトラップも難なく突破できるだろう。

「オース・ナーザ・ノート・ライサ・アウガ」

キリトは暗闇でも視界がクリアになる闇属性の暗視魔法をパーティ全体に掛けた。本来なら光源の少ない洞窟や迷宮区で活躍する魔法である。全種族でもスプリガンしか使えないため、存在を忘れられている魔法の一つである。

「これで少しだけ見えるようになったぞ」

「ありがとうキリト君、それじゃあ……入るわよ……」

「あれ？　そういえばアスナ……、アスナもアストラル系の敵とか苦手じゃなかったっけか？」

「あ……うん、確かに苦手だったんだけど……ユウキの怖がりようを見てたら……なんか平気になったみたい」

「ちよつ……ちよつとアスナあく!!」

「あはは！ ユウキゴメン、ゴメンって！ 冗談だから！ 冗談！」
「……………」

アスナがユウキに冗談をかましながら屋敷の扉をくぐった。中の様子を警戒し窺いながら慎重に歩を進めると、天井からぶら下がっていた蝙蝠がキキキイという鳴き声を上げながら翼を羽ばたかせて屋敷の入り口から屋外へと飛び去っていった。そのうちの一匹がユウキの顔の真横を通り抜けていき、ユウキは咄嗟に悲鳴を上げてキリトの腕にしがみついた。

「ひっ……………」

ユウキは目を瞑り、両手を使ってがちりとキリトの腕にしがみついていた。体全体が震えてしまっており、腰が抜ける寸前になってしまっていた。蝙蝠一匹でこれならば、一体全体この先どうなってしまうのだろうか？

「ユウキ、大丈夫か？」

「……………うう、キリトお……………」

ユウキは涙目＋上目遣いでキリトの顔を見つめていた。ユウキにしっかりと腕を掴まれているために、キリトの方も思うように体を動かせないでいたが、キリトは迷惑そうな顔一つせずに、恋人の状態を心配していた。流石キリトである。

「んじゃあ……………私とノリが危険を確認しながら進むから、みんなはその後についてきて」

アスナがパーティに指示を送ると、一行は頷いて、アスナ達の後に続いて歩いていった。今アスナ達がいるエントランスは吹き抜けになつており、天井には豪華なシャンデリアが吊るされていた。しかし

このオンボロ屋敷に相応しく、装飾はほぼ全て割れてしまい、埃と蜘蛛の巣がくつついており、その蜘蛛の巣には現実世界では見掛けないような外見の蜘蛛が這っていた。

一階部分は小さい扉が四つと中央に巨大な木製の両開きの扉。二階にも小さな扉が四つあるが、そのうちの一つは破壊不能オブジェクトの瓦礫で塞がれており、実質三つという構成となっていた。どこの床も所々穴が空いており、踏んだだけで突き抜けてしまいそうな箇所も見受けられた。テッチやエギルなら歩くだけで全ての床が抜けてしまいそうだ。

一行はまず、一階部分の部屋から探索を行うことにした。何が起るかわからないため分担などはせずに、一つ一つの部屋を全員で片っ端から風潰しに調べることにした。というのは建前で、一人でも誰かがいなくなるとユウキが更に怖がるため、全員一緒に行動するということでまとまった。アスナは先陣を切ってまず一番左側にある扉から調べ始め、ドアノブに手を掛けた。

「……あれ、このドア開かないわ。……鍵がかかっているのかしら……？」

「鍵……か、もしくは絶対開かない設定になってるってことも考えられるわね」

「……確かにそうだね、だとしたら何かどこかでフラグを立てないといけないのかな」

アスナ、シノン、シュピーゲルの頭いい三人組がこの屋敷がどういう仕掛けなのかと思考を巡らせていた。アスナの言う通り鍵をゲツトして開けないと入れないのか、はたまた見てくれだけで本当に開かないのか、イベントをこなさないといけないのかと、一通り考えられる可能性を挙げた。しかしまだ手がかりが少なすぎるため、一行が隣の部屋の扉を調べようとした、その時である。

「!! アスナ！ 真上だ！ 何かが潜んでいるぞ!!」

索敵スキルを全開にしていたキリトが、アスナの真上にエネミーの気配を察知していた。敵が迫っていることを周りに知らせると全員一斉に武器を構え、天井にいるであろう敵に備え、臨戦態勢を取っていた。ただ一人ユウキを除いて。

「ユウキ！ 俺の傍を離れるなよ！」

「う……うん……」

流石に手が使えないとまずいのか、ユウキはキリトの腕から手を放し、代わりにキリトの背中に身を潜めていた。このままでも十分にキリトは動きづらそうにしていたが、ユウキを守れるように二刀を構え、360度どの方向から襲撃されても対応出来るように態勢を整えていた。

「……暗視魔法を掛けているのに……暗くて全然見えないな……何が潜んでいるんだ……？」

謎のエネミーはキリトの暗視魔法のバフが掛かっているとしても、その姿かたちを確認するのは難しかった。黒いシルエットの様なものが天井と壁の隅っこでもぞもぞと動いているのだけが辛うじて視認出来る程度のものであった。そこでそれならばと、サラマンダーであるジュンがアスナの一步前へと身を乗り出し、両手剣を左手に持ち替え、右手を前方に掲げて何やら魔法の詠唱を始めた。

「エック・フレイギユア・スリール・ゲイール・ムスピーリ ……喰らいなあッ!!」

ジュンが魔法の詠唱を完了すると、右の掌からドツジボール程の大きさの火球が3つ現れ、そのままエネミーがいる天井へと放たれた。炎魔法の接近に気付いた天井のエネミーは真つすぐ飛んできた火球

をすばしっこい動きで簡単に避けた。ターゲットを失った火球は天井にドゴオンという爆音を轟かせながら着弾し、派手な爆発エフェクトを巻き起こした。その際起こった爆発の光源により、ほんの数秒ではあるが一行はうごめいていたエネミーの姿を肉眼でとらえることに成功した。

「姿が見えたぞ！……え……あ、あれが敵……？」

『ケケーツ!!』

火球を避けたエネミーは驚異的な跳躍力と身体能力でエントランスの中央部分へと飛躍して、そのまま綺麗に着地した。その姿を見た一行はそのままかというか、ぴったりというか、その今回のイベントに相応しい見てくれをしたエネミーの正体に目を丸くしていた。

『おめーらか、侵入者は。ケケケケ、ガキと女しかいねーじゃねーかよ』

「ガキだあ？ テメエ……オレたちをガキだと思ってなめてんじゃねえぞ……」

「いや、アンタが言っても説得力ないから……」

パーティの中で一番の最年少であるジユンが目の前のエネミーに向かつて悪態を吐くと、ノリから鋭いツツコミが入った。しかしジユンが腹を立てるのも無理はなかった。エネミーはそんな最年少のジユンよりも遥かに小さくてパツと見、ぬいぐるみなのではないかというぐらいの可愛らしい見た目をしていたからだ。

全身を白タイツに包み、首から上はパンプキンヘッドの被り物を装着し、そのくりぬかれた目に当たる部分からは赤い点のような目が不気味に光っており、背中には緑色のマントをなびかせていた。そして何より、そのパンプキンヘッドのドタマに食い込んでいる薪割り斧

が、このエネミーの圧倒的存在感を放っていた。

「お、思ってたより可愛いじゃない……」

「……見た目に騙されるなよ。そいつ、かなり素早いぞ……」

禍々しい雰囲気、屋敷の怖いイメージとは裏腹に、思いのほか可愛らしい見た目をしたエネミーに、アスナは少しだけ心を奪われていた。しかしどんなに見た目が可愛くても敵は敵、それにサラマンダーであるジュンの炎属性魔法を難なく避けるほどの素早さを持つ。あの一瞬でキリトはこのエネミーの手強さを見抜いていた。

キリトがメンバーに警戒するよう呼びかけると、再び各々持っている武器の切っ先をパンプキンに向け、臨戦態勢へと入っていた。広いエントランス内に殺伐とした空気が流れ、その雰囲気は流されるようにパンプキンも警戒態勢を取っていたが、しばらくの沈黙が流れた後、その張りつめた空気はパンプキンの次の一言で破られることとなった。

『はあ……、やーめた。なーんかつまんないや』

「……は？」

『ねえ！ ゲームして遊ぼうよ！ 近頃お客なんていなかったから才イラつまんなかったんだ！ こんなにたくさん人がいるなら絶対楽しくなるって！』

「……こいつ何言ってるんだ？」

パンクピンの遊ぼうという提案に一行は驚きの表情を隠せなかった。てつきりこのまま戦闘に突入するものだと思ってたばかりに、この展開は予想していなかった。いやしかしまだわからない、あくまでも今回はハロウィンイベント。この提案が悪戯……もとい、罠である可能性も充分に考えられる。一行はパンプキンの言うことに耳を貸さずに引き続き武器を構えて警戒態勢を解かなかった。

『ねえ！ その長い黒髪のおねーさん！』

「……………え？ も、もしかしてボク……………？」

パンプキンはパーティーメンバーの中で唯一武器を構えてないユウキに声を掛けた。ユウキも先ほどまではキリトの後ろに隠れておびえていたのだが、このコミカルな外見をしたパンプキンが現れたことにより、全く怖くないというわけではないが少しだけ恐怖が紛れていた。ユウキはパンプキンからの指名を受けるとゆつくりと前へと歩を進めていった。

「ボクに……………用があるの？」

『うんうん！ おねーさんオイラと遊ぼうよ！』

「ユウキ危ない！ 迂闊に近づくな！」

「……………うんキリト、多分大丈夫だよ……………この子は」

ユウキはパンプキンの顔をまっすぐ見つめながら、一歩ずつ歩み寄っていった。パンプキンは実に楽しそうに、くりぬかれた目の部分から覗かせている赤い瞳をキラキラと輝かせて、ユウキがこちらに来るのを待っていた。その様子は邪悪さや悪意というよりは、無邪気さを感じさせる雰囲気を漂わせていた。ユウキはパンプキンの1メートル手前まで近づくと、腰を下ろしてパンプキンの目線の高さまで自分の顔の位置を合わせた。

「君……………名前は？」

『オイラ？ オイラはパンプだよ！』

「パンプ……………、パンプ君……………だね？」

『うん！ おねーさん！ 遊ぼうよ！』

どうやら本当にこのパンプキンにパーティー一行を罫にはめようとする悪意とかはないようだ。そう判断したキリトは両手に持っていた剣を鞘へと納め、他のメンバーもキリトに続くようにしてそれぞれ

武器を仕舞った。しかし索敵スキルと罠探知スキルだけは全開にしたまま、警戒態勢を解除しようとはしなかった。この目の前のパンプ以外にも、襲い掛かったり罠を張っていたりする可能性も否定できないからだ。

「えつと……遊ぶっていつても、どうすればいいのかな……？」

『あ……、そうだねえ……どうしようか？』

「考えてなかったのかよ……」

「……呆れたものね……」

自分で遊ぼうと言っておきながら、何して遊ぶか考えていなかったパンプに対し、シノンを筆頭としてメンバーは呆れた表情を浮かべていた。どうもこのパンプと話していると調子を狂わされる、モンスター討伐タイプのクエストと聞いていたのに、敵であるはずのこの目の前のパンプキンは戦闘をしないというではないか。では、一体何と戦えばいいのだろうか？ メンバーが頭を抱えて悩んでいるとパンプの頭上部分に黄色いアイコンが表示されていた。

「なっ……これって……」

「クエスト……!? こいつ、クエストNPCなのか!?!」

パンプの頭上に現れたのはクエスト受注のフラグを立てると表示されるクエストNPCであることを示すアイコンだった。つまりこの目の前のパンプキンは敵ではあり得ないということだ。恐らくこのパンプからの依頼をクリアすることで、ハロウィンイベントが達成されるのだろう。一行が驚いていると、ユウキの目の前に新規クエスト概要ウインドウが表示された。

「ユウキ、なんて書いてあるんだ？」

「えつと、ちよつと待ってね……ふむふむ。クエスト名は《パンプと夜遊び!》 内容は……『パンプの遊びに付き合え!』 ……だって

「や……」

「そ……そのまんまね……」

クエスト名もクエスト内容も本人から聞いたまんまの手抜き設定に、一行は呆れ顔を浮かべて頭を抱えていた。そもそも戦うつもりできたのに何故か遊ぶ羽目になり、それも何をして遊べばいいかも決まっておらずにいきなり出鼻を挫かれてしまっていた。ジユンはそのどうしたらいいかわからないこの状況にかなりイライラの気持ちで募らせていた。一方で腕を組んで「うくん」と言葉を漏らしながら、何で遊ぼうか考え込んでいた。パンプは自分の右掌を左手でポンと叩き、何かを思いついたような仕草を見せた。

『よし！ んじゃあ宝探しゲームしようよ！』

「た、だからあ〜？」

「さがしいだと…？」

「お宝!？」

お宝と聞いて、ノリが目をキラキラを輝かせていた。彼女もフィリアと同じくレアアイテムなどのお宝に目がない性格をしていた。だからあまりユーザーから選ばれない、トレジャーハントに長けたスプリガンを選んだのだ。しかし今まで手に入れたレアアイテムで稼いだお金も、全てメンバーの食費と酒代に消えてしまっていて稼いだ稼ぎもすごいが浪費も半端ないトレジャーハンターだった。

『うん！ 今ね、おやびんが屋敷を留守にしているんだ。おやびん、屋敷のどこかにもものすごいお宝を隠しているみたいなんだよ。それを探し出そうっていう遊びさ！』

「お……おやびんって……貴方のボスってことよね？」

『そうだよ？』

「そんなことしたらアナタ怒られるんじゃない？……？」

『大丈夫だよ！ おやびんは当分帰ってこないし、お宝だって何種類

もあるんだから少しぐらいもらってもバレないって!』

「……子分としてやっていいのかそれは……」

『いいのいいの! それじゃあお宝探しにしゅっぱーっ!』

パンプが問題発言をしながらも片手を大きく掲げるとユウキだけがノリノリで「おー!」と元気よく返事を返した。他のメンバーはそのコミカルなノリにイマイチついていけずに、調子を狂わせていた。とくにジユンは機嫌を悪くしたままだった。

「ねえパンプ、そのお宝っていうのは……どこにあるのかな?」

『よくぞ聞いてくれました!』

ユウキがパンプにお宝について尋ねると、パンプはぴよんとジャンプして、エントランスの中央部分にあるボロ階段の手すり部分に陣取って、この屋敷の説明を始めた。

『んとね、このフロアのどこかに屋敷の奥へと続く扉を開けるための鍵が隠されているんだ。まずはその鍵を見つけよう!』

「おー!」

「……ユウキ楽しそうだな……」

パンプの登場とその明るい性格により、ユウキの幽霊屋敷に対する恐怖はほとんどなくなっていた。キリトは調子を狂わせながらも、ユウキから恐怖を取り除いてくれたことについてはパンプに感謝の念を抱いていた。クエストもこのままパンプの指示に従っていけば多分クリア出来るだろう。完全に信用こそしていなかったが、当面の間は警戒の必要はないだろうと判断を下していた。そう思っていたキリトの目の前に、パーティ加入申請のウィンドウが表示され、そこには《Pumpがパーティ加入を申請しています。許可しますか?》と書かれていた。

「な……、一緒に戦うつてのか……。じゃあやっぱりこいつは敵じゃなくて味方なのか……」

パンプは味方としてキリト達のパーティに加わった。キリトがその申請を許可すると、パーティ一覧の9番目に《Pump》の文字が表示されていた。前代未聞のNPCも含めた9人パーティである。しかし彼がパーティに加わったということは、この先に戦闘があるということの意味していた。

「パンプ君が……仲間に……」

「つまり彼は味方で、このさきにやっぱり戦う敵がいるってことなんだね……」

「……そうなるな。みんな、彼は信用していいと思うが警戒は怠るなよ？ この先どんな罠が仕掛けられているかわからん」

『その件については大丈夫だよ！ オイラが罠とかの場所全部知っているからさ！』

「へえー！ すごいねパンプ君！」

「……てめーん家の敷地なんだから知ってて当たり前だろうがよ……」

ジュンは相変わらず不機嫌さを表に出していた。どうも彼はパンプとは相性が悪いらしく、パンプの行動一つ一つに腹を立てていた。まるで自分の家に遊びに来た親戚の甥っ子や姪っ子に、勝手に自分の部屋に入られ好き放題されてしまっている、そんな感覚を覚えている。そんな不機嫌そうにしているジュンに、ノリが気になり声を掛けた。

「なんだよジュン、さっきっから機嫌悪いな？ さては自慢の炎魔法を華麗に避けられたことを根に持っていたりして？」

「……別にそんなんじゃないけど、なんかあいつのことが気に入らないんだよ……」

「……まあ何でもいいけどさ、パンプはあくまでも“NPC”だからな？　一々腹を立ててたらキリがないぞ？　あーゆるー設定なんだからさ」

「わかってるよ……、ちえっ……」

一行はそれからパンプ先導の下、屋敷に設置された罠を回避し、現れたアンデッド系のMOBも出てきた端から仕留め、順調に屋敷内を攻略していった。途中、罠の存在を忘れていたパンプの所為でキリトが罠にかかりそうになったが、ユウキの咄嗟の判断により事なきを得た。キリトはうっかり踏んづけたスイッチの罠で、危うくボロシヤンデリアの下敷きになってしまうところだったのだ。

その件についてパンプは申し訳ないと思いつつも、自分の見た目がマスコット風なのをいいことに、あざといポーズをとってその場を取り繕おうとしていた。その事に対してキリトが浮かべた表情は非常に複雑そうなものであったという。そしてやがて屋敷の攻略も後半に差し掛かったであろうところで、キリトが気になったことを話した。

「なあアスナ、ちよつと気にならないか？」

「え……何が？」

「パンプのことだよ、会話というか……俺らの語り掛けに対する対応が、あまりにも自然過ぎる気がするんだ」

「……そういえばそうだよね、ということはパンプ君はただのNPCじゃないってことなのかな？」

「……AI、なのかもしれないわね……」

「……シノンもそう思ったか……」

そうシノンの言った通り、パンプはただのNPCではなかった。固定ルーチンに囚われず、独自で学び、独自で発言する、自ら学習能力機能を持ち合わせたAIを搭載していたのだ。つまりは、姿かたちこそ違うがユイやストレアといったMHCPと同じような思考ルーチ

ンを持ち合わせているのだ。つまり、今パンプはこのキリト一行の行動パターンや発言から、吸収し学習して自らの行動の元にしようとしていたのだ。

パンプはユウキと肩を並べて楽しそうに屋敷内を元気に歩いていた。ユウキとは相性がいいのか、二人とも実に楽しそうである。ユウキはユウキでまるで自分に弟が出来たかのようにパンプと接していた。そんなユウキをパンプはAIながら心から信頼を寄せているように、そのやり取りは実に楽しそうで、微笑ましい光景に見えた。

「へえー！ そうなんだー！」

『うんうん！ それでねそれでね……！』

「……仲いいわね、あの二人……」

「キリト君いいの？ ユウキ、取られちゃってるけど……」

「ん……まあ、イベント限定のNPCだろうし、ユウキも楽しそうにしてるから、別にいいかなって」

「とかなんとか言いながら、本当は悔しいんじゃないの？ 本来ならキリトがユウキを守るシチュエーションよね？」

シノンの言う通り、キリトは少しだけ、あくまでも少しだけだがパンプに嫉妬していた。自分がユウキをクエスト終了まで守って頼れるところを見せようと思っただけに、少しだけ今の状況に解せない様子を見せていた。普段はふわふわとしているがやはりキリトも男の子だ、恋人の前で格好いいところを見せたいという下心がわずかながらにあったのだ。

パンプと楽し気に明るく会話している様子を少し離れたところから眺めていたキリトの視線は、どこことなく寂しさを感じさせていた。別にクエストが終わればパンプとはお別れだし、ログアウトすれば現実世界でいつもユウキと一緒にいられる。しかしユウキが自分に見せたことのない笑顔のパンプに見せているところを見てしまったキリトは、ちよつとだけ悔しさの気持ちも胸に抱いていた。

「まあ……悔しいは悔しいな、ユウキはいつも俺と一緒にいたし……」
「あはは！ やっぱりキリト君も男の子なんだねー！」

キリトが珍しくムスツとした感情を見せると、その様子を見た他のメンバーの表情もほころんでいた。おどろおどろしい雰囲気にも包まれているはずの幽霊屋敷は、どことなく明るい空気へと変わっていった。旧SAOで安全を優先させて攻略に勤しんでいたときとは違い、このクエストをしっかりと楽しんでいるといった様子だった。本来ゲームとはそうやって楽しむものだ、しかしキリトやアスナ、シノンらといったSAOサバイバーは、いつからかその感覚を忘れてしまっていた。

しかしスリーピング・ナイトのメンバーとの出会いが、キリト達の感性を変えた。安全マージンや定石に囚われることなく、今できる範囲で挑戦して最大限楽しむということを、スリーピング・ナイトから学んだのだ。彼らは元々は全員が生と死の境目を彷徨っていた元病人、命が短いからこそ、何もかもを全力で楽しもうとしていたのだ。そんな姿にキリト達は大きく感化された。いや、思い出させてもらったのだ、ゲーム本来の目的を。

今だって機嫌を損ねているキリトとジュンはいざ知らず、他のメンバーはこの状況を楽しんでいる。パンプの存在を、ハロウィーンイベントを心から楽しんでいる。ならそれでいいのではないだろうか、効率なんぞ求めても単なる作業になるだけだ。スリーピング・ナイトのメンバーとなったことで、キリトたちはよりこのゲームを楽しんでいけることだろう。

「……ねえ、シュピーゲル……」

「ん、何だい？ シノン」

「えつと……あのね……？」

シノンはシュピーゲルに声を掛けるなり、顔を赤くしてもじもじしてしまっていた。自分から話を振っておいて、なかなかその先を切り

出せないでいた。

「もし……もしも私が危機に陥ったら、シユピーゲルは……その、私のこと……助けてくれる?」

「え……」

突如として大胆な話を振ってきたシノンにシユピーゲルは一瞬だけ動揺した。しかし彼の気持ちは明らかだった、一人の男として、シノンを想う身として答えは一つしかなかった。シユピーゲルは優しい笑顔をシノンに見せながら、その質問に対して回答を返した。

「大丈夫だよ、シノンが危ない目にあっても必ず僕が駆け付けるからさ。だから……安心して?」

「……うん、ありがと……」

パーティの先頭が楽しいやり取りをしている一方で、後衛は後衛で甘ったるい空間を生成していた。その空気に毒されたのかアスナ、ジユン、ノリ、シウネーの四人は複雑な表情を浮かべていた。なんだかよくわからない敗北感的なものを味わっていた。アスナに至っては去年までキリトと付き合っていただけに余計に心にダメージが来ていた。

屋敷攻略も終盤という段階に差し掛かり、一行は談笑をしながら残された部屋を一つ一つ調べ続けていた。やがてしらみつぶしに調べていくうちに、とうとう手つかずの部屋は一つだけとなった。ここまでする道中にも、食堂のような部屋には落とし穴やギロチン、寝室にトラバサミや毒矢、客間にビックリ箱などといった罠が無数に仕掛けられていたが、パンプが教えてくれたのと、ノリのトラップ解除スキルによってなんとか回避していった。そして最後に残された書斎風

の部屋を調べていると、一行が探し求めていたあるものが、意味深な宝箱から発見された。

「あった！　ねえパンプ、鍵ってこれじゃないかな？」

ユウキが書斎の朽ち果てたデスクに置かれている、埃まみれになった小さい茶色の宝箱から鍵のようなアイテムを取り出すと、それをパンプに見えるように手を上に掲げていた。ユウキから声を掛けられたパンプは自分の探していた場所の探索をやめ、ユウキのいる方へとぴよんと華麗なステップで駆け寄っていった。

「えつとどれどれ……、あ！　それだ！　二階の奥へと続く扉を開ける鍵に間違いないよ！」

「やったねー！　これで漸く奥へ進めるよー！」

「やれやれ……やつとこここまでこぎつけられたな……！」

漸く鍵を見つけた一行は疲れた様子で肩を落としていた。何せ時刻は既に21:55を差しており、一行はクエスト開始からゆうに1時間半近くもこの暗い屋敷内を彷徨っていたのだ。いくらパンプの明るい性格に助けられているとはいえ、こんな陰気臭い場所に長時間もいれば精神が参ってきてしまう。そこにきてようやくクエストが進行したことを示す鍵が見つかったことで、一行は安心感……というよりも徒労感に包まれていた。

しかしこれでようやくゴールまで行ける、そしてそれは同時にボスとの戦闘が待っていることを意味していた。正直あちらこちらうろついて疲れてはいるが、ここまでできてボスにやられてしまいましたとなるわけにはいかない。クエスト受注時間もとうに過ぎているため、今回が最初で最後のボスチャレンジチャンスとなっていた。一行は書斎の部屋を出ると、やや重たい足取りでエントランスの階段を登り、二階の両開きの大きい扉の前へと足を運んでいた。

「ここで鍵を使えばいいんだね？」

『そうだよ！ おやびんの部屋はもう目の前さ！』

ユウキはこの扉の奥にゴール地点があることを知ると、右手に持っていた茶色い小さな鍵を、目の前の扉の鍵穴に差し込み、ゆつくりと時計回りに一回転させた。すると扉からガチャンという音が鳴り、ロックが外された。するとユウキが手に持っていた鍵が青白い光を放ちながら砕け散ってしまった。どうやらここでの役目を終えたようだ。

キリトが巨大な両開きの埃だらけの木製の扉を見上げていた。ここから先はアインクラッド迷宮区で言う「ボス部屋」にあたるエリアとなる。当然本家SAOのような仕様や罠がある可能性も考えられる。キリトは一度パーティをまとめ直す為、クエスト受注前にやった時と同じように扉の前に仁王立ちをするように陣取り、今度は聖剣エクスキャリバーを手にし、地面に突き刺してボス戦前の音頭を取った。

「みんな、とりあえず言いたいことは色々あるとは思う。あるとは思う……が、今はとりあえず目の前のボス戦に集中してほしい、何にせよイベント限定のボスだ。初見の敵である可能性が十分に高い、いや……確実にそうであると思ってもらっている」

屋敷探索をしていた時のふわふわとしていた雰囲気とはガラリと変わったキリトの様子を、パンプは目を丸くして見つめていた。戦う男の顔をしていたキリトの目に、男の子として少しだけ憧れの気持ちを抱いていた。あんな罠に引っかけかかっていたカツコ悪いやつが、こんなにカッコいい顔をするんだと、そう思っていた。

「いいか、チャンスはこの一度だけだ。もし失敗してしまったら二度と挑戦出来ない。だから……皆心してかかってほしい！」

「……………」

キリトの緊張感を煽る演説に、パーティメンバーは真剣な表情で耳を傾けていた。勿論キリトが言わなくても、これだけ手練れのメンバーが集まっているパーティだ。数多くの修羅場をくぐっているだけあって、決して油断や慢心などと言った気持ちは抱いていなかった。キリトもそれは理解している。あくまでも気合を入れなおすといった意味合いでの音頭だった。

「みんな……、準備はいいか？」

キリトからの問いかけに、メンバーは無言で頷いて返事を返した。その中でパンプだけが今この状況を理解出来ないようであった。

「よし、行くぞ!!」

キリトは気合のこもった合図を送ると同時にボス部屋へと続く巨大な扉のドアノブに手を掛け、ひねると同時に勢いよくボタンという音を立てて派手に開けた。そして休む間もなく勢いに身を任せてそのままボス部屋へと駆け込んでいった。そのキリトの後にアスナ、ジユン、ノリ、シユピーゲル、シウネー、シノンと続いてボス部屋へと入っていった。

一方でユウキだけはボス部屋に入ろうとしなかった、扉の前で佇んでいるパンプの様子がおかしいことに気付き、そちらの方が気になっ
てしまっていた。ユウキは困った様子で突っ立っているパンプに近寄り、優しく声を掛けてみた。

「パンプ、どうしたの？」

『え……、えっと……みんなもしかして、おやびんと戦おうとしてるの？』

「……うん、そうだよ」

『え、でもおやびんは出掛けてるから……会えないと思うんだけど』

……』

「えつと、その辺は……何て説明したらいいのかな……」

今はいなくてもボス部屋に侵入すればボスとして登場する。そのことをAIであるパンプに説明をしたところで理解出来るのだろうか？ ユイやストレアのような、ゲームを裏からシステム面でサポートするMHCPと違って、パンプはゲーム上に正式に存在するAI搭載NPCだ。システムのなことを説明しても、到底理解など出来ないだろう。

それに彼はこの屋敷のボスの子分でもある。親分がいるとわかれば逆らうことは出来ないだろう。パーティメンバーとして、ボス部屋に連れて行ったら、恐らくパンプもそのまま戦闘になる。AIを搭載しているパンプはまともに親分に攻撃なんて出来ないだろうし、ユウキも自分が親分と戦っている光景を、パンプに見せたくはなかった。

「ねえパンプ、ここでお別れしよう？」

『え……どうして……？』

「多分ボクたちがこの部屋に入るとね、君の親分がボクたちの前に立ちほだかることになると思うの。君も親分と戦うのは嫌だろうし、ボクたちも君の親分とボクたちが戦っているところを見せたくないんだ」

『……おねーさん……』

「ボクの言ってるコトがうまく伝わってるかどうかはわからないけど、親分のことを考えてるなら……ここにいてもらっいいいかな？」

パンプはユウキの言うことを理解出来ていなかったが、何か大事なことを自分に伝えようとしている気持ちだけは、理解出来ていたようだった。おねーさんはきつとオイラを悲しませないためにここに残れって言ってるんだ。理由はよくはわからないけど、きつとそうなんだ。オイラも親分と戦いたくないし、それなら……おねーさんの言うことに従った方がいい……のかな……。

『……わかった……オイラ、ここで待ってるね』

「……ウン、んじゃあ……ボクも行ってくるね」

『……いつてらっしやい……』

パンプは「負けないでね」とも「親分を殺さないで」とも言えなかった。長年親分に仕えていた身としては、自分が親分の敵になるなんて考えたこともなかったし、かといって自分に優しくしてくれたユウキたちの前に立ちふさがるなんてことも出来なかった。AIとしてユウキたちから「優しさ」という感情を学習したパンプは、どうしたらいいか悩みを抱えていた。

『……オイラは……』

一方ボス部屋ではまだ戦闘は始まっていなかった。どうやらNP Cを除くプレイヤー全員が揃わないと戦闘が始まらない仕様だったようだ。後からボス部屋に入ってきたユウキは「遅れてゴメン！」と言いながら腰から剣を抜いてキリト達のもとへと合流を果たした。ボス部屋は縦方向に長い構造となっており、部屋の奥まで真っ赤なくすみのある絨毯が敷き詰められており、その一番奥には古ぼけた棺桶の様なものが見受けられた。その棺桶を怪しく照らすように部屋の左右の壁には、青白いランタンがぶら下げられていた。

「遅いぞユウキ、何してたんだ……ってあれ？ パンプはどうした？」

「……パンプは……置いてきたよ」

「え……？」

ユウキはそう言い放ちながら、吹っ切れたようにボスがいるであろう部屋の奥へと剣の切っ先を向けた。キリト達はあんなに仲が良

かったパンプを、ユウキが外に置いてくるなんて思っていた。しかしパンプの本来の立ち位置の事を思い出すと、その理由に納得していた様子だった。

「そう……だったよな、パンプは元々立場的には……ここのボスの味方っていう……設定だったんだもん……」

「……うん、だから……置いてきちゃった」

「……そうなの……」

キリトとアスナは複雑な表情を浮かべながら、ユウキの事を見つめていた。ここのボスを倒すということは、パンプの身内を倒すことと同義だからだ。そうなったらパンプはどうなるのだろうか？ イベントNPCだからこのまま消える？ それともボスが倒されたらそのまま消えてしまう？ いずれにせよパンプとのお別れが近くなっていることには変わりなかった。

「感傷に浸っていると悪いんだけど……敵さんがお出ましのようよ？」

シノンが索敵スキルを全開にして、全員に前方に対しての警戒を促していた。その言葉にハツとなったキリトとアスナは、素早く戦闘態勢を整えなおした。全員が前方を警戒していると、何やら怪しい黒い霧と共に、棺桶の前に人の形をしたようなものが現れた。やがて黒い霧が晴れてくると、少しずつその姿かたちが明らかとなっていった。その姿に、メンバーは大変に驚きを隠せない様子だった。

「なっ……アンタは……」

「え……ウソ……？」

「あいつ、あの時の……爺さんじゃねえかよ……！」

ボス部屋の奥深いところにある棺桶の前に姿を現したのは、キリト

達がハロウインククエストを受注するために話しかけたクエストNP
Cと瓜二つであった。見間違いないオンボロなタキシードに
シルクハット、そして不衛生に伸ばした白い髭に曲がり切ってしまっ
た腰にそれを支えている杖。どうみてもあの時の爺さんであった。

『ホッホッホ……、ようこそまでたどり着いたものよのう……ケケケ
ケ……』

「……全部アンタの掌の上で踊らされていたっていうわけか？」

『キキキ……左様、ワシはこう見えても人間ではなくてな、まあ……聞
いたことがあるとは思うが、人の血を好んで喰らう、人の形をしながら
人ではない種……それがワシじゃよ、ククク……』

「俗にいう吸血鬼ってわけね……さしずめ、若い妖精の血欲しさに報
酬で釣って屋敷に迷い込ませて、その獲物の血をいただくって算段か
しらっ。」

シノンが弓の照準を爺さんに合わせながら、おおよそのシナリオを
推察した。その答えはどうかやら正解だったようで爺さんの口元が不
気味にぐにやりと歪んだように笑みを浮かべていた。

『そこまで見抜かれておったとはな……ならば褒美をやらねばなるま
いで……イヒヒヒ……』

「ああそうかよ、ならこのクエストの報酬だけよこしてとつとこの
まま立ち去ってほしいもんだぜ！」

ジユンが先ほどより更に不機嫌になりながらも、自慢の大剣の切っ
先を爺さんへと向けていた。剣の柄を握る手に力が入り過ぎてし
まっついて、手元からギリギリといった金属音が聞こえていた。それ
ぐらい苛立っているのだろう、睨みつけているかのように視線も爺さ
んへと向けられていた。

『何……それよりも素晴らしいものをよこしてしんぜよう。……この

ワシから……血を吸われる権利をなッ!!』

爺さんはセリフの途中からドスの利いた声となり、雰囲気が一変した。曲がり切っていた腰は伸び、派手な赤い稲妻のエフェクトを辺りに散らしていた。目つきも鋭いものとなり、いよいよ本性を現すといった感じになっていた。

「正体を現す気だな……、みんな！ 迎撃準備だ!!」

キリトの呼びかけに全員が答えるように持っている武器を、再度爺さんに向けなおした。ヤツが変な動きを見せればすぐにでも攻撃が開始されるだろう。今はイベント中、変身が完了するまでは破壊不能オブジェクトとなっているから攻撃しても無駄だ。変身が完了してセリフを喋り終わった後が、戦闘開始の合図となる。

爺さんを取り纏っている赤い稲妻がだんだんと禍々しさを増していった、次第にその稲妻は黒くなり、爺さん本体にも赤黒い禍々しいオーラが漂っていた。そのオーラはやがて臨界点に達したのか激しい轟音をまき散らしながら一気に辺りへと広がった。激しい風と禍々しい光に部屋が包まれ、キリトたちは思わず防衛姿勢をとって目を瞑った。しばらくしてそのエフェクトの余韻がなくなり、恐る恐る目を開けてみると、そこには先ほどの爺さんの面影はどこにもなく、現実世界の伝説にもある吸血鬼、ドラキュラの姿をしたボスモンスターが姿を現した。

ボスは身長2.5メートルほどの長身でキリトたちより遙かに背が高かった。胴体こそ細いものの手足が異常に長く、手は膝のあたりまで伸びており、下半身も床から2メートルほどの高さから床へと伸びていた。全身を黒に近い紺色のドラキュラさながらのスーツを身に纏い、胸の真ん中には血の色をしたような宝石がついており、背中には赤と黒のリバーシブルマントを翻していた。しかし何よりキリトたちが気になったのは、顔につけている仮面のようなものであった。

「な……赤眼の……ザザ……!?!」

「ま……まさか! コイツはただのイベントボスよ! ザザがこんなところにいるはずがないわ!」

「うん……、アスナちゃんの言う通りだよ。まずヤツはプレイヤーじゃないし、兄貴と同じ仮面をつけていることだって偶然だと思う」
「……だとしたら……、かなり悪い趣味をしてやがるぜ……ALLOの運営は……!!」

キリトたちが悪態を吐いている間に変身を完了させたボスは、ゆつくりと猫背の体勢から垂直立ちへと姿勢を整えると、不気味な笑みを浮かべながらキリトたちへ宣戦を布告した。それと同時にボスの頭上に四本のHPバーと固有名が表示された。

《The | Dracula | Earl》 和訳でドラキユラ伯爵という意味だった。

『こい、妖精ども。貴様らの澄み切った紅い血を、一滴も残らず吸い尽くしてくれ——』

「——せやああああッ!!」

ドラキユラが戦闘開始のセリフを言い終わるよりも前にキリトがドラキユラ目掛け、エクスキャリバーで斬り込んでいた。派手な衝撃音と共に斬り込まれたエクスキャリバーを、ドラキユラ伯爵はマントを纏った片手で難なくガードしていた。不意打ちとはいえキリトのSTRを全開で乗せた一撃があつさりと防がれてしまっていた。

「キリト!?!」

「あいつ……キリトの斬撃を片手で防いだ……!?!」

「……みんな! 心してかかるわよ!!」

アスナの合図で後衛のシウネーとシノンを除いた全員がドラキュラを取り囲むようにして陣形を整えた。攻撃を防がれたキリトは一旦バックステップで距離を置き、ドラキュラから見て6時の方向に陣取った。そこからドラキュラを円の中心に見て8時の方向にユウキ、10時にアスナ、1時にシユピーゲル、3時にジユン、5時にノリが位置取りをしていた。つまり、ドラキュラは完全に包囲網を敷かれている状態にあった。

しかし一行は迂闊に攻撃を仕掛けなかった、最初のキリトの一撃は不意打ちであったから先制攻撃を仕掛けられたのだ。相手が臨戦態勢を整えたとあっては、これまでのセオリー通り攻撃パターンを見極めなければならぬ。ボス部屋の怪しい雰囲気もあり、通常のフロアボスとはまた別に張りつめた緊張感が辺りを包んでいた。

「あいつの防御……硬すぎだぜ……、エクスカリバーの一撃をガードするなんて……」

「全くだよ……、少しは削りダメージが通ると思ったけど、全然そんなことなかったよね……」

「ならば魔法を試してみる価値はある！ シウネーさん！ 俺の合図がしたら水属性魔法を放ってくれ！」

「了解しました！」

シウネーはキリトにそう指示されると、杖を掲げて水属性魔法の詠唱を始めた。キリトはその様子を見届けるとすぐに視線をドラキュラへと戻した。ドラキュラはゆっくりと周りを見渡すと、懐から赤い鞭のようなものを取り出した。いよいよ攻撃を仕掛けようとしていた。

「何か取り出したぞ……、あれは……鞭か!? やばい！」

ドラキュラの手握られているものが鞭だと判断したキリトは

バックステップをすると同時にメンバーへ攻撃を回避するように促した。

「範囲攻撃がくる！ みんな全力で後ろへ飛べ!!」

キリトからの指示が聞こえたメンバーはすぐに反応し、素早く自身の後方へとバックステップをして、ドラキュラの攻撃を回避することに成功した。ドラキュラの鞭攻撃は振りかぶったと思っただら目にもとまらぬ速さで円の形を描き、ドラキュラの半径5メートルほどの周囲を攻撃範囲として捉えていた。

ドラキュラの攻撃した箇所は赤い稲妻のエフェクトが残っており、床部分がカーペットと共に抉れていた。もし被弾していたらかなりのダメージをもらっていたであろうことを、その床が攻撃力の凄まじさを物語っていた。

「ちい……29層のボスといい、今回のドラキュラといい、ここのところやたら攻撃力の高いボスマンスターに好まれているみたいだな……俺たちは……」

「つてことは……防御力は低かったりするんじゃないかな、さつきダメージ通らなかつたけど……」

「……そうね、それが不思議なのよ。片手剣熟練度がカンストしてるキリト君のエクスキャリバーの一撃を片手だけで防ぐなんて異常よ、それも少しもHPが削れないなんておかしいわよ!」

「……何か秘密があるね、あのドラキュラ……」

そう言うとシュピーゲルは何か考えがあるのか、単身一人でドラキュラの前へと歩み寄り、ドラキュラとサシで戦闘をしようとしていた。

「シュピーゲル、何を!？」

「ボクに考えがある! シノン! 僕の合図がしたらコイツの顔に向

かってけん制でも何でもいい！ 矢をお見舞いしてくれ！ 矢が当たったらシウネーさんはそれに続くようにそのまま詠唱した魔法を僕の指示した場所に放ってくださいー！」

「わ……わかったわー！」

「了解です!!」

シュピーゲルは二人に指示を飛ばすと、自慢のA G Iを活かして素早い動きを繰り返し、ドラキュラを翻弄しようとした。ドラキュラはシュピーゲルを視界に捉えようとしていたが、A G Iに特化した彼の速さは凄まじく、CPUでシステム的に演算処理されているドラキュラでもその動きをとらえることが出来なかった。

シュピーゲルはやがてその足さばきのパターンを変えて、素早く動いては止まってという動作を繰り返していた。わざと一瞬隙を見せることによって、ドラキュラに無駄な攻撃を誘発させようとしていたのだ。格闘ゲームという待ち戦法といった戦い方であった。その作戦にまんまと引つかかったドラキュラはわざと足の動きを止めたシュピーゲル目掛けて右手の一撃をシュピーゲルの上方から繰り出した。

しかしシュピーゲルは難なくこれを避け、ドラキュラの攻撃を空振りさせることに成功した。ドラキュラの拳はボス部屋の床を大きく貫通し、突き刺さり身動きが取れなくなってしまっていた。

「へへへ、力の入り過ぎた攻撃はね……外れたときのリスクが大きいんだよ!!」

ドラキュラは自由に動く左手ですぐにシュピーゲルを攻撃しようとしたが、右手が床に突き刺さっている影響でうまく攻撃の体勢に移れないでいた。そのチャンスシュピーゲルが見逃すはずがなく、右手に握っている短剣をドラキュラの懐目掛けて下方から斜め上に突き上げるような形で深く突き刺した。

『ヌグウ!!』

シュピーゲルが素早く一撃をお見舞いすると、悲鳴と共にドラキュラの一本目のHPバーが0.5割ほど減った。キリトのエクスキャリバーの攻撃を防いだドラキュラにシュピーゲルがダメージを負わせたのである。

「思った通りだ！ シノン！ 遠距離攻撃頼む！ シウネーさんはこいつの左手に魔法を思いつきりぶちかまして！」

「了解!!」

「了解です!!」

(僕の読みが正しければ……きつとこの戦い勝てる！)

シュピーゲルの攻撃の後に続くように、シノンは弓系ソードスキルの中で最速の矢を放つ「スパークル・シュート」を放ち、シウネーがそれに続いて氷の弾を熟練度の成長に応じて何発か撃ちだす「アイス・バレット」を放った。放たれた矢と魔法はドラキュラ目掛けて一直線に飛んでいった。

「キリト！ シウネーさんの攻撃が当たったら僕の反対方向に回り込んでこいつの懐目掛けて剣を振るってくれ！ なるべく重い一撃のやつを頼む！」

「わ……わかった！」

シノンの放った矢はドラキュラの顔面目掛けて吸い込まれるように飛んでいった、ドラキュラは動かせる左手にマントを纏わせながら顔を覆って飛んできた矢を防いだ。そして防いだのも束の間、今度はシウネーの放った氷魔法がドラキュラの左腕目掛けて飛んできたのである。シウネーのアイス・バレットの熟練度は1000だ。熟練度が100あがることに飛んでいく魔法の数が一つ増えるアイス・バレットは合計10個もの氷の塊となってドラキュラに襲い掛かって

いた。

『な……なにい!?!』

魔法が命中したドラキュラの左腕は、アイス・バレットの一定確率で発生する状態異常「凍結」によって動きを奪われていた。

「今だキリト!!」

「ウオオオオオツ!!」

キリトはシュピーゲルの合図で反対側にステップで回り込むと、右手に握られたエクスキャリバーで突進系ソードスキル「ヴォーパル・ストライク」を発動させていた。アインクラッド29層でユウキがフロアボスに対してトドメを刺したソードスキルである。自慢のSTRを全て右腕のエクスキャリバーに込めて、渾身のソードスキルをドラキュラ目掛けて解き放っていた。

ドラキュラがキリトの姿を視認した時にはすでに遅く、エクスキャリバーの切っ先はドラキュラの左胸、人間でいう心臓のある部分に命中していた。キリトの一撃によりドラキュラは「グヌウ!!」という悲鳴を上げるとともに一本目のHPバーを三分の一ほど消失させていた。その衝撃で床に突き刺していた右手は抜け、左手を凍結させていた氷の塊も砕け散った。

キリトはソードスキルによる硬直をなくすために、左手に握られたユニイティウオークスで短距離突進系ソードスキル「レイジスパイク」を発動させて、ドラキュラの攻撃の射程へと身を避難させた。スキル・コネクトを使い、レイジスパイクの突進距離を利用してドラキュラから距離を置いたのである。

HPバーを減少させたドラキュラはソードスキルが当たった箇所を手で押さえて、息を荒くして佇んでいた。そして先ほどのドラキュラの防御パターンを観察していたシュピーゲルはとある結論へと辿り着いた。

「やっぱりそうだった！ みんな聞いてくれ！ こいつの弱点はマントの下の本体そのものだ！ 逆にマントを広げられるとどんな攻撃も通らない！ スイツチとけん制を巧みに使い分けてこいつの化けの皮を剥いでやるんだ！」

「な……なるほど、そういうことね……。そうとわかればこっちのものよ！」

シユピーゲルの分析結果を聞いたフオワードの面々は弱点が判明すると、手に握っている武器を構えなおし、改めて戦闘態勢を取った。AGIの高いメンバーがまず囷となり、ドラキュラにわざと隙を見せて攻撃を誘発、マントが翻ったところにもう一人がスイツチ代わりに一撃をお見舞いするといったパターンだった。あまり固まり過ぎると最初の時のように範囲攻撃が来るので、あくまでも二人一組遊撃隊のような役割で迎撃し、慎重にダメージを与え続けていった。

キリト達がドラキュラにダメージを与えてから30分ほどが経過していた。最初は順調にダメージを与えていたキリト達であったが、ドラキュラのHPバーが三本目に突入すると少しパターンが変わってきていることに気付いた。先ほどのような隙をあまり見せないようになり、最初に放っていた赤い鞭での攻撃を主体とした戦法にシフトしていたのだ。

こうなると長い射程も相まって非常に厄介となっていた。近付こうにも超高速で振り回されている鞭の懐に入るのは相当な技術と速さがあるし、かといって弓や魔法で遠距離攻撃をしても、鞭の薙ぎ払いで払い落されてしまうのだ。かといってドラキュラにスタミナの問題があるわけでもなく、攻撃はやむことなくしきりに続けられ、戦況は膠着状態とっていい状況になっていた。

そんな戦闘模様を、半開きになったボス部屋の扉の隙間から見守つ

ている小さな影が見受けられた。そう、パンプであった。ユウキから部屋の外で大人しく待っていると言われてたパンプであったが、中の戦闘が気になり顔を覗かせて戦況を見守っていたのだ。正直、パンプはどっちを応援することも出来なかった。ユウキ達が勝てばドラキュラは消滅し、その子分である自分も消えてしまい、ユウキ達と二度と会うことが出来ない。

かといってドラキュラが勝てばユウキ達は敗北、全滅となつてこの場から外へと放り出されてしまい、二度と会えなくなる。どちらが勝つても彼はユウキ達と二度と会えなくなってしまうのだ。それ以前に親分であるドラキュラに歯向かったらどんな目に遭わされるかわかつたもんじゃない。

「……オイラ……どうしたらいいんだろ……」

パンプは色々思考を巡らせた挙句、結局どちら側の戦闘に加勢するわけでもなく、ただひたすらにボス部屋の戦闘を見守っていた。しかし、パンプの頭の中にはドラキュラに仕えていた記憶よりも、ユウキ達と楽しく屋敷の中を冒険した記憶の方が強く鮮明に残っていた。そしてAIながらもその楽しかった思い出の温かさを感じていた。

「おねーさん……!」

一方戦況は相変わらず膠着状態が続いており、キリト達はじわじわとHPを減らされていった。いずれこのままいつてしまうとジリ貧になり、こちら側が先に参ってしまう。だとしたら多少のリスクはあるが仕方がない、ダメージ覚悟でドラキュラに突っ込んで一気に体力を奪って畳み掛けるしかない。頭の中で作戦を組み立てたキリトは全員に大声で作戦を伝えた。

「みんな! このままだとジリ貧だ! そうなると俺たちの方がさきに倒れちゃう!」

「じゃ…じゃあどうするのさキリト！」

「……多少のリスクはあるが……、A G Iの高いフオワード、つまり俺、ユウキ、シユピーゲルの三人で、あいつの攻撃をいなしながら突っ込んで至近距離から畳み掛ける！」

「キ……キリト君本気?! 私たちの耐久力じゃアイツの攻撃に耐えられないかもしれないよ!？」

「だからだ、アスナ……君も後衛にまわってくれ、シウネーさんと一緒に回復に専念してほしい」

キリトの立てた作戦の具体案はこうだ。まず、キリト、ユウキ、シユピーゲルの三人が先陣を切ってドラキュラに突っ込む、鞭による攻撃をいなしながら被害を最小限に抑えながら距離を詰めていく。被ダメージが大きくなってきたら後衛にまわっているアスナとシウネーが、高位の回復魔法で前衛のHPを回復。シノンにはドラキュラの攻撃のダメージを少しでも減らす為に範囲系弓ソードスキルで鞭攻撃を相殺する。

ドラキュラまで距離を詰めることに成功したらすかさず重い一撃を叩き込む。その時の攻撃の硬直は次に二番手であるジュンとノリがスイツチしカバーする、というものだった。攻撃を当ててひるませて動きを止められれば、遠距離からの攻撃も通るようになり、よりダメージを与えられる。そして更にキリトにはドラキュラを短期決戦で仕留めるための切り札があった。

「ユウキ、お前には俺とシユピーゲルと一緒にヤツに突っ込んでもらうが……ちよつと頼みたいことがある。これが成功すれば……多分ヤツをそのまま倒せる」

「……うん、わかった……聞かせて、キリト」

キリトはユウキに近寄ると耳打ちをして、今回ユウキにしか出来ないであろう作戦を口頭で伝えた。それを聞いたユウキの顔は一瞬信じられないような表情になったが、すぐに意味ありげな笑みを浮かべ

てキリトからの作戦を承諾した。

「アハハ！ キリトらしいや！ 大胆だけどすつごく効果的な作戦だね！」

「お褒めに預かり光栄です、絶剣殿！」

「……その代わり、ボクのこと……守ってね？」

「……ああ、まかせろ」

そういうとキリト達はアスナを後方に下がらせて、かけられる限りのバフ魔法を前衛の三人に掛けさせた。そしていつでも回復魔法を発動できるように詠唱を待機させ、シノンに弓のソードスキルの準備も進めさせた。全ての下準備が完了するとキリトは先陣を切って、時間稼ぎをしてきているジユンに向かって作戦の決行の合図を送った。

「よしいいぞ！ さがれジユン！」

「待ちくたびれたぜ！ キリトさん！」

「スイツチツツ!!」

キリトからのスイツチの合図と共に、ジユンは位置を前衛組と入れ替え、素早く後方に下がった。このフォワード勢の中で唯一重鎧を装備しているジユンだからこそ出来た時間稼ぎであった。前衛と入れ替わったジユンはストレージからポーシオンを取り出して使用し、次の作戦の決行に備えた。

ジユンと入れ替わった前衛陣はキリトを先頭にA G Iを活かしてドラキュラに突っ込んでいった。走りながら避けられる攻撃だけは避け、いなせる攻撃は武器でいなしてヤツとの距離を詰めていく。キリトは二刀流の手数を最大限に活かして、ユウキは自慢の反応速度と攻撃速度を活かして、シュピーゲルはその驚異の身のこなしとパーティの中で一番高いA G Iを活かして、それぞれドラキュラからの攻撃の被害を最小限にとどめていった。

ドラキュラの鞭による攻撃を剣で相殺する金属音、そして鞭が空を切るとき音、矢が上から降り注ぐ音、そしてたまに鞭が被弾したときの生々しい音がボス部屋全域に響き渡っていった。そしてその音が何回か繰り返された後、キリト達はどうとうドラキュラの目と鼻の先まで近寄ることに成功したのである。キリトはドラキュラに近付くと、聖剣エクスカリバーで鞭攻撃を止めるためにドラキュラの右手を攻撃した。だがヤツに近寄れば近寄るほど攻撃が激しくなってくる、それに従ってキリトのHPの減少速度も早くなっていた。

「ぐっ……!!」

「スー・フィツラ・ヘイラグルル・アウストル・ブロット・スバール・バーニ！」

「スー・フィツラ・ヘイラグルル・アウストル・ブロット・スバール・バーニ！」

「……!!」

キリトのHPがレッドゾーンに陥いり、リメインライト化してしまう直前に、アスナとシウネーの回復魔法が間に合った。キリトのHPはグリーンまで一気に回復し、ドラキュラに攻撃を浴びせるまでの時間的余裕が出来た。キリトはこのチャンスと逃さまいと、右手のエクスカリバーに渾身の力を込めてドラキュラの右腕目掛けて下から上へ目掛けて斬り上げた。

「ウオオオオオツ!!」

『ヌガアアアアツ!!』

キリトが攻撃をした瞬間に、ドラキュラによる鞭の攻撃が止んでいた。キリトの右手に握られたエクスカリバーによる一撃はドラキュラの手首を吹っ飛ばしていた。キリトがSAO時代から攻撃の応用として使っていた武器破壊テクニク「アームブラスト」をALOの部位破壊に流用したのである。

武器の部位のどこが脆いかというのを瞬時に見抜いて切断、破壊するように、今回ドラキユラの腕を武器の部位に見立て、腕のどこの部位が柔らかいかというのを目視で判断して斬り捨てた、というわけだった。結果はキリトの目論見通りにドラキユラの利き手である右手首を吹き飛ばすことに成功していた。そしてキリトは間髪容れずに次の段階に移り、自分のすぐ後方に続いていたユウキに素早く指示を送った。

「ユウキ！ ヤツの攻撃が止まった！ お前の剣技でヤツのマントを内側からぶった斬ってやれ!!」

キリトからの指示を受けたユウキは、小さい体を活かして上手くドラキユラの懐に潜ってそのまま背中側に回り込むと、対空攻撃にもなる片手剣ソードスキル「レディアント・アーク」を発動させ、マント目掛けて剣の切っ先を向けていた。

「いけええええ!! ユウキイイーツ!!」

「せえやあああああーツ!!」

ユウキがレディアント・アークを発動させると、ユウキの剣はそのままドラキユラのマントを内側から斬り裂いていき、マントの全体の三分の二ほどを斬り落としていった。まだ少しマントが残ってしまっているが、ドラキユラの本体はほとんどが表に晒される事態となり、文字通り化けの皮が剥がれた状態となっていた。ドラキユラはその特性に相応しい再生能力を発動させ、吹っ飛んだ手首とマントを修復させようとしたが、次に迫っていたシユピーゲルがそれを許さなかった。

「させないよー！ 悪いけどこのままいかせてもらおうー！」

シユピーゲルは一気にドラキユラとの距離を詰めると、六連撃短剣

ソードスキル「ミラーージュ・フアング」を発動させてドラキュラの胴体に素早い連撃を浴びせていった。MOBの部位再生能力、体力回復能力はダメージを負っている間は効果が働かないといった特徴があるため、手数が多いシユピーゲルの短剣は今まさにうってつけの武器であった。

「今だジユン！ ノリ！ 前衛に続いて攻撃を浴びせてくれ！ アスナたちもドラキュラにありったけをぶち込んでくれ!!」

「その指示を待ってたわよキリト君！」

「派手にぶちかますぜ！」

キリトの合図を待ってましたと言わんばかりにジユン、ノリは勿論、後衛のシウネーとアスナも総攻撃に参加した。マントによる鉄壁の防御がなくなったため、外からでも容易に攻撃が通るようになり、順調にドラキュラのHPが減少していった。ドラキュラも態勢を整えようとするが、その前にダメージ蓄積による怯みが発生してしまっている。部位再生はおろか反撃の隙すらままたまなかったのである。

全員のソードスキル、そして高位攻撃魔法が炸裂し、ドラキュラのHPは最後の一本に突入していた。そしてその最後の一本も勢いよく減っていき、パターンを変える余裕すら与えないままレッドゾーンに突入していった。あと少しだ、あと少しでドラキュラを倒せる、メンバー全員がそう思ったその時であった。

突如ドラキュラの真っ赤な目が不気味に光り輝きキリト達の攻撃などお構いなしに強制的に動くことのできる「スーパァーマー」を発動させながら体の内側のエネルギーを解放させるようなモーシヨンを取ったのだ。その奇妙な様子に遠距離から攻撃をしていたシノンが真っ先に気付いた。

「み……みんな！ ヤツの様子が変よ！ 一旦距離をおい——」

遅かった、シノンの警告むなしくドラキュラは両腕を空高く掲げ、変身時に見せたような赤黒く輝くオーラを、ボス部屋全域に渡り爆発させていった。MOBの中には自分がピンチになると自爆をしてプレイヤーを巻き込もうとするタイプの敵が存在する。今回ドラキュラが行ったオーラ爆発も、それと似たような攻撃方法であった。キリト達前衛はその爆発を避けることが出来ずに、攻撃の直撃をもらってしまった。その爆発の規模は凄まじく、ボス部屋全域に届こうとしていた。あまりの規模の爆発で、その轟音が屋敷の外にまで鳴り響き、地面を揺らしていた程だった。

ドラキュラが爆発を放って少しの時間が経ち、次第にボス部屋を覆っていた爆発によるエフェクトが薄くなっていくと、爆発があった地点から紺色のスーツ、マント、仮面等すべてがボロボロになってしまったドラキュラが満身創痍で姿を現した。オーラの爆発を喰らったキリト達は派手に爆心地から吹っ飛ばされ、HPを大きく減らされていた。攻撃はボス部屋全域に渡り範囲が広がっていたため、後衛にいたシウネーやシノンたちも大きくダメージを負ってしまった。

「な……なんだ……何が起こったんだ……?」

攻撃を受けたキリトたちは今一体何が起こったのか? どうしていきなり目の前が光ったのか? 何で自分たちは大ダメージを受けて吹っ飛ばされてしまったのかと、今の状況を確認するために体を起こそうとした――が、身体が全く言うことを聞かなかった。

「うっ……キリト……」

「ユ、ユウキ! 無事か!」

「うん……HPはまだ残ってるけど……体が動かない……」

「な……ユウキも……、ま……まさか!」

キリトはこの身体の状況に身に覚えがあった。そして慌てて自分の視界の左上にあるパーティメンバーリストに表示されている自分のHPバーを見てみた。するとその視線の先にはかつてキリトとユウキが体験した反則級の状態異常終焉エンドカーズの呪いのアイコンが表示されていた。どうやら先程のドラキュラの攻撃で状態異常に陥ってしまったようだ。

「…………マジかよ…………ここまでできてコイツにかかっちゃうのかよ……!!」

「キ…………キリト…………くん…………!」

キリトが首だけ動かして周りの状況を確認してみると、キリトとユウキだけでなく、アスナやシノンといったパーティ全員が終焉エンドカーズの状態異常に陥ってしまった。部屋全域に渡るほぼ回避不可能な攻撃範囲と大ダメージ、そして回復無効＋麻痺＋ステータス一時低下の終焉エンドカーズの呪い。いくらHPバーが最後のレッドゾーンに突入したからと言って、ここまでする必要はあったのだろうか？ 強く設定されているボスとはいえ流石に理不尽すぎる反撃方法だ。これではわかっていても回避なんか出来っこない、必中必至だ。

『私をここまで追いつめたのは貴様らが初めてだぞ……、しかしそれもこれまでだ。私をここまで追い詰めた褒美に、貴様らには最も残酷な死を贈ろう……』

ドラキュラはそう言う息を切らしながら左手から赤黒く輝く不気味な色合いを放っている、血の塊のような剣を取り出し、ドラキュラに一番近い所で倒れているユウキへとターゲットを絞り、歩み寄っていった。

『まずは…………この娘からだ』

「や……やめろ！ ユウキに手を出すな！」

「キ……キリ……ト……」

ユウキのHPもレッドゾーンに突入しており、ドラキュラの通常攻撃一発でリメインライト化してしまう危険域となっていた。そのユウキに一步一步、ドラキュラは足を進め、やがて剣の間合いまでたどり着くと、ゆつくりと上へ剣を振り上げ、ニヤリと笑みを浮かべた後、その剣先をユウキへと振り下ろした。

「ユウキィーッ!!!」

「……………え……………?」

突如としてユウキの前に体を割り込ませ、ドラキュラの攻撃からユウキを庇った者がいた。ユウキ以外の七人のパーティメンバーでないことは明らかだった。全員終焉エンドケースの呪いで身動きが取れないのだから。そう……ユウキを庇った者の正体、それはこの屋敷で知り合い、ユウキと仲良くなったAI搭載NPCの、パンプであった……。

パンプはユウキをドラキュラの攻撃から庇うと、ユウキの目の前でその場に崩れ落ちるようにして倒れてしまった。ユウキは力なく崩れ落ちるパンプを目を見開いて見つめていた。

え？ どうして？ どうしてパンプがここにいるの？ 表で待っててって言ったのに、どうしてここに来ちゃったの？ どうしてボクを庇ったの？ どうして……? どうしてどうして!?

「パ、パン……プ……?」

ユウキは横たわりながらも目の前で自分を庇ったパンプに心配そうに声を掛けた。パンプの頭上にあるHPバーはみるみるうちに減

少していき、グリーンからイエローへ、そしてついにイエローからレッドに突入した。しかしそのHPの減少は止まろうとはせず、無慈悲にも減少を続けていった。

『おねーさん……ぶじ……？』

「ボ……ボクは大丈夫……、って……パンプのが無事じゃないよ！

だめだよ逃げて！ 今すぐこの部屋から逃げて！」

『えへへ……それがだめみたい、ちつともからだがうごかないや……』

ユウキが涙目になりながら横たわるパンプの手に自分の右手を当てた、終焉エンドカースの呪いで動かせないはずなのだが、不思議と右手だけ動かすことが出来た。胸のあたりを袈裟懸け状に斬り裂かれたパンプの体からは綿のようなものが飛び出ており、非常に痛々しい見た目になっていた。それを間近で見ってしまったユウキの眼には大粒の涙が浮かんでいた。

「だめだよパンプ！ 死んじやだめだよ！」

ユウキの必死の声掛けもむなしく、パンプのHPは減少を続ける一方であった。既にレッドゾーンに突入していたパンプのHPは残り2割程となり、それでも減少が止まることはなかった。パンプは動かない自分の体を必死に動かして、ユウキの最後の気持ちを伝えようとしていた。

『おねーさん、ありがとね……。オイラ、おねーさんとここをぼうげんできて……すつごく……たのしかったよ……』

「だめ……だめだよパンプ……、逝っちゃだめだよ……」

『なかないでおねーさん……、おねーさん……わらってたほうがかわいいから……ないちゃだめだよ……』

「パンプ……！」

ユウキは泣きながらパンプを助け出そうと、自分の体を動かそうとしたが終焉エンドカースの呪いの状態異常の所為で全く動かすことが出来ずに、自分の無力さを感じていた。そうこうしているうちにパンプのHPは残り数ドットというところまで減少していた。もう、パンプがその命を散らすまであと僅かとなってしまっていた。

「だめ!! 死んじゃだめえ!! だめだよパンプウ!!」

『…………ごめんねおねーさん…………、でもだいじょうぶ。オイラが…………ひかりとなつて、おねーさんをまもつてあげるから…………』

「パン…………プ…………?」

そう言い残したパンプは、残り数ドットだったHPを全て失くし、《DEAD》の表記と共に青白く光り、瞬く間にポリゴン片となつて爆散した。こういったクエスト中に仲間になるNPCは、プレイヤーと違い基本的には復活しない。クエストを受注しなおせば復活するのだが、今回一行が受けているクエストは“期間限定”のイベント専用クエスト。つまり、それはパンプが二度と復活しないことを意味していた。AIを搭載し、人の温かみを知ったNPCパンプは、ユウキ達の前から永遠に姿を消してしまったのである。

ユウキの眼の前には爆散してしまったパンプの…………いや、パンプだったものの青白いポリゴン片が風になびくように空中を舞い上がっていた。ユウキはそのポリゴン片を絶望の表情を浮かべながら見上げていた。パンプが死んだ、ボクの目の前で。ボクの所為で死んだ、もう二度と会えない。ボクがもつとしっかりしていれば、ドラキュラの攻撃にもつと早く気付いていれば、ボクがもつと、もつと強ければ、パンプは死なずに済んだ…………!!

『ようやく死んだか…………、全く…………貴様が一番賢い癖に一番愚かで、一番の大馬鹿ものだったぞ…………パンプよ』

「…………!!」

『この私に盾つこうとしたのだからな、ククク…………当然の末路と言え』

るだろうさ。フフフ……、しかし出来損ないにしては見事な散り際だったぞ!!』

「……………るな……………」

『……………む?』

ユウキは周りに聞こえるか聞こえないかぐらいの音量で、涙を流して体を震わせながら何かを呟いていた。

『……………何だ小娘、遺言なら聞き届けてやるぞ?』

「く……………するな……………!」

『なんだ聞こえんぞ? 殺される恐怖でどこがおかしくなったか?』

ククク……………」

「……………パンプを、侮辱するなアアアーツ!!」

ユウキが叫んだその時だった。ドラキュラがユウキを上から見下し罵っている、突然ユウキの状態異常が解除され、その瞬間にユウキが勢いよく起き上がり、そのまま下から上へとドラキュラを剣で斬りつけたのである。パーティメンバーであるキリトたちは勿論、ドラキュラに搭載されているAIも何故ユウキの状態異常がこんなにも早く解除されているのか理解出来なかった。

実際ユウキ以外のパーティメンバーは全員終焉の呪いに陥ったままだった。にもかかわらずユウキは誰よりも早く先に状態異常が解除されており、ドラキュラに鋭い攻撃を浴びせ反撃の狼煙を上げていた。ドラキュラは突如斬り付けられたことに動揺し、AIエラーを起こしたかのような挙動を見せていた。

『グアアア……………、なっ何故だ、理解出来ぬ! 何故動ける……………!』

ユウキは悲しみと怒りが混ざったような表情を浮かべ、瞳に涙を溢れさせながらドラキュラへ攻撃を続けていった。左手がまだ自由に使えるドラキュラは血の剣で反撃に転じたのだが、ユウキへ攻撃が当

たる瞬間に、見えない何かに弾かれてユウキにダメージを与えることが出来なかった。

『な……何だこれは!? 何が起こっている!』

「……心を持たないキミには……一生わからないよ」

目を済ませてよく見ると、ユウキの周りにキラキラした粒子のようなエフェクトが舞っている様子が伺えた。先ほどドラキキュラの攻撃を弾いていたのはこの光の粒子だったのである。この光の粒子こそ、パンプが死に際に言い残したユウキを守るための光だったので。ユウキはこの光が、パンプの温かさだということを感ずると、胸に手を当てて物思いにふけていた。

パンプとの思い出はほんの短い出来事の中だけだったかもしれない、しかし……どんなに短くても、ユウキたちの掛け替えのない友達であったことに、間違いはなかったのである。それが例え……プログラムで組まれたAIであったとしてもだ……。

「ボクはキミを許さない」

「ユ……ユウキ……?」

普段のユウキからはとても感じられない明確な怒り、殺意といった感情を感じ取ったキリトは、そこにいるユウキがまるで自分の知らない、まるでユウキの姿をした別人なのではないかという感覚に襲われていた。そのぐらい今のユウキはドラキキュラに向けて激しい怒りの炎を燃やしていた。

「待っててキリト、今……終わらせるから……」

「……あ、ああ……」

そうキリトに言い放ったユウキは左手で突進系ナツクルスキル「スマッシュ・ナツクル」を発動させて、一気にドラキキュラとの距離を詰

め、ドラキュラのみぞおちにズドンという鈍い音と共に、重く、鋭い一撃を加えていた。攻撃をもらったドラキュラは声にならない悲鳴を上げ、胸を押さえて悶えていた。

ユウキはそんなドラキュラに休む暇を与えずスキル・コネクトを使い今度は右手の剣で四連撃片手剣ソードスキル「ホリゾンタル・スクウェア」を発動し、ドラキュラの体の周りを反時計回りに鋭く四角の形に舞いながら、ドラキュラを斬り裂いていった。この時点でドラキュラの残りHPはレッドゾーンの半分ほどまで減っていた。

まだまだユウキの攻撃は止まらない、引き続きスキル・コネクトで左手でナツクル系ソードスキルで最高威力の「デツドリ・ブロウ」を発動させた。ユウキのSTRが全て左手に乗り、先ほど放ったスマツシユ・ナツクルよりも重い、ひたすらに重い一撃が、ドラキュラのとてつ腹にゴスンという物凄い音を響かせながら決まっていた。ドラキュラのHPは残りわずかとなり、もう虫の息となっていた。

ユウキはあとソードスキル一発で全損するHPのドラキュラにトドメを刺すべく、最後のスキル・コネクトで左手でソード・スキルのモーシヨンを取った。

(ねえ！ その長い黒髪のおねーさん！)

「パンプ……」

(うん！ おねーさん！ 遊ぼうよ！)

「パン……プ……！」

(それじゃあお宝探しにしゅっぱーっ！)

「パンプ……ッ！」

(おねーさんをまもってあげるから……)

「パンプウウウーッ!!」

ユウキが泣き叫びながらとったソードスキルのモーシヨンは、この世でアスナとユウキだけしか使えないオリジナルソードスキル「マザーズ・ロザリオ」のモーシヨンであった。十字架を苦手とする吸血

鬼であるドラキュラに引導を渡すのに、このソードスキル程相應しいものはないだろう。

「せやアアアアーーツ!!」

マザーズ・ロザリオのモーションに入ったユウキは瞬く間に一撃目をドラキュラの懐に浴びせると、すぐさまに二撃、三撃、四撃、五撃、六撃、七撃、八撃、九撃、十撃目と続き、最後のトドメの十一連撃目に全ての力と想いを込めて、ドラキュラの体へと叩き込んだ。

ユウキから四種類の連続ソードスキルを立て続けに喰らったドラキュラはHPをレッドゾーンからゼロへと全損させると、目の前の光景が信じられないような表情を浮かべながら、耳をつんざくような断末魔の悲鳴をあげたのちに青白いポリゴン片となって爆散した。

キリト達一行は、シユピーゲルの弱点分析、キリトの立てた緻密な作戦、仲間同士の連携、そして何よりユウキのパンプへの想い等、様々なことが重なって、辛くも勝利することが出来た。ユウキがドラキュラを仕留めると、ボス部屋の中央に《C o n g r a t u l a t i o n s !!》のシステム表記がクエストのクリアを知らせていた。

その表記を、パーティ全員が複雑な表情で見上げていた。一行は確かに戦いには勝利したが、その心にやや複雑な想いを抱いていた。楽しくクリアするはずのハロウィンクエストは、AI搭載のNPCパンプの登場により、楽しくも悲しい思い出となって新生スリーピング・ナイトの最初のアルバムに残ったのだった。

「キリト……パンプが……パンプが……死んじゃったよう……」

「ユウキ……」

その中でも特にユウキはドラキュラを倒した後ガツクリと肩を落としてしまっていた。その場にペタンと座り込んでしまい、キリトの胸を借りながら気の済むまで泣いていた。キリトはそんなユウキを優しく抱き締め、泣き止むまで側でずっとユウキを支え続けていた。

西暦2026年10月31日土曜日 午後22:40 世界樹の街
アルン中央広場

キリト達一行はハロウィンクエストをクリアするとリザルトを済まして、アルンの街へと帰ってきていた。めでたくクエストをクリアしたのにもかかわらず、各々が切ない表情を浮かべていた。シウネーやアスナはひたすらに悲しい表情を浮かべ、ジュンとノリ、キリトはやり場のない怒りをぶつける場所に困っていた。シユピーゲルとシノンはどうしたらいいかわからず複雑な気持ちを胸に抱いていた。

アルンの街並みは既にクエスト受注可能時間を過ぎていたためか、ハロウインの装飾がどこにも見受けられず、いつも通りのアルンの街並みの見た目となっていた。その光景を見ていたユウキは、もうどこにもパンプは居ないんだという気持ちを抱いてしまっていた。

—— ピピツ。

「…………あれ…………メッセージ…………誰からだろ…………」

放心状態となってしまうていたユウキのもとに、何者からかメッセージが届けられていた。気分的にどうでもよくなっていたユウキであったが、ついついそのメッセージに釣られるように左手を操作して、内容を表示させていた。そしてその差出人の欄に表記されている名前を見て、ユウキは目を丸くして驚いていた。

「キ…………キリトツ、パ…………パンプからメッセージが…………!」

「な…………何だって!」

ユウキからパンプからメッセージが届けられている事実を聞かさ

れると、キリトを含むパーティメンバーがユウキの周りへとぞろぞろと集まり始めた。差出人の欄には確かに「Pump」と表示されていた。勿論同名のプレイヤーから送られてきたという可能性もあるが、ユウキはそんなことお構いなしに本文を読むために、左手で操作を続けてメツセージの内容を表示させた。

（おねーさん、トリックオアトリートだよ！　また来年あおうね！
パンプ）

メツセージの内容は、自分と遊んでくれたユウキにまた来年も遊ぼうねといったニュアンスが見て取れる、ユウキへと当てられたメツセージだった。このメツセージを見たユウキは、この世界のどこかでパンプがまだ生きている、死んでいないということを感じ取っていた。

確かにパンプはシステム上HPが全損して、現実世界でいうところの「死」を迎えてしまったことだとは思う。しかしあの悪戯好きでお茶目なパンプのことだ。また来年……このハロウインの季節にひよっこり顔を出して、ボクたちを驚かしてくれるに違いない。だってそうじゃないか、今年のハロウインだって……ボクたちはパンプに驚かされてばかりだった。

きっと来年もパンプはボクたちの前に現れて、ボクたちをきつと楽しませてくれる。だから……寂しくないよ？　また一年経てばパンプに会えるんだから。むしろ逆に来年はボクたちがパンプを驚かせてやろうかな、いしし……どんな悪戯を仕掛けてやろうかな。むこうは脅かしのプロだから……生半可な脅かしじゃ絶対動じないに決まってる。……皆と一緒に考えてみようか、来年も……楽しいハロウインになるように……。

また会おうね、パンプ。

第54話く和人と木綿季く

西暦2026年10月31日 土曜日 午後22:50 アルンの街
転移門広場

前回、キリトとアスナを新メンバーとして迎えた新生スリーピング・ナイツとシノン、そしてシユピーゲルら八人のパーティは期間限定のハロウィンイベントに身を投じていた。ホラーテイストな雰囲気、漂う暗い不気味な洋館風の建物の中で、一行はパンプというAIを搭載したコミカルな可愛らしいパンプキンのNPCと出会った。

パンプを仲間に加えた一行は屋敷の罠を何度も切り抜け、長い道のりを経てボス部屋へと辿り着いた。ボスと激しい戦闘を繰り広げ、厳しい激闘の末辛くも勝利を得た一行であったが、終わってみればパンプを死なせてしまうという悲しい結果に終わり、全員が哀しさと虚しさを胸に抱えていた。

パンプと一番仲が良かったユウキは泣き崩れてしまい、キリトの胸を借りて気持ちが落ち着くまで涙を流し続けた。だがいつまでもボス部屋にいるわけにもいかず、一行はクエストを完了させてアルンの街へと戻っていった。

しかし誰もクエストの成功を喜ぶ様子は見せなかった。喜びよりも悲しさの方が勝ってしまった。しかしそんな悲しい空気を一蹴するようなことが起こった。ユウキ宛てにメッセージが送信されてきたのだ。その差出人を見てユウキは大変に驚いた、何故なら差出人がパンプだったからだ。急いで中身を確認してみると、また来年会おうといった意味合いが取れる内容だった。そう、パンプは死んでいなかったのだ。HPが全損して、このALOの世界から抹消されたかに思えたが、それこそが悪戯だったのかと思わせるかのような結果に、ユウキ達は「パンプらしいや」と胸に抱いていた。

また一年経てばハロウィンの季節に会える。来年のイベントも今年みたいな形式になるかは定かではないが、きつとまた再会出来る。

ユウキたちはそう信じていた。暗い雰囲気はパンプからのメッセー
ジでほっこりとした空気になり、一行は漸く落ち着きの様子を見せて
いた。

「ふう……疲れたあ……」

「全くだ、最初から最後までパンプのやつに振り回されっぱなしだっ
たな……」

「ま、アイツらしいよな。ハロウィンらしく、トリックオアトリートつ
てか？」

「うふふ、その通りですね……」

キリトラ一行の表情には安堵もそうだったが、疲労感が浮かんでい
た。なんだかんだでクエスト自体は大変に疲れるものであった為
だった。クエスト完了後は完了後らしく「お疲れ様」「大変だった
ねー」と言いたくなるような雰囲気に含まれていた。

キリト、ユウキ、ジュン、ノリは大の字になって横たわり、アスナ
とシウネーは並んで芝生の上に腰を下ろし、シノンとシュピーゲルは
近くの街灯に背中を預けていた。

「あ……ごめん、僕そろそろ落ちるよ。この後勉強しなきゃ……」

シュピーゲルがメニューから現在の時刻を確認しながら、ログアウ
トすることを告げた。大検の資格を取ろうとしている彼にとって、毎
日の勉強は欠かせない。むしろ彼にとっての本当の闘いはここから
なのかもしれない。シュピーゲルが落ちることを周りに伝えると、い
い時間のせいもあって、次々に芽づる式にログアウトしようという流
れになっていった。

「そうか……こんな遅くからさらに勉強とか大変だな……。って言っ
てもオレも今のうちに勉強しておかないと後から大変なんだけどな
……」

「へ？ ジュンも勉強してるの？」

「ああ……うん。オレも新薬のお陰で完治の見込みが出てきたから……復学するために勉強してるんだよ。元々勉強苦手だから、ちよつとかつたるいけどな」

「あ……わかるよ！ ボクも小六で勉強止まっちゃつてたから……今大変だよ！」

「特に……お前の場合数学だよな？」

この中で一番勉強が遅れているであろうユウキにキリトが横やりを入れた。様々な事情を抱えて復学に向けて勉強を頑張っている三人は勉強の話題に花を咲かせていたが、流石にいい時間になってきたため、いい加減にログアウトしようということになった。そもそもにして完治の方向に向かっているとはいえ、ジュン、ノリ、シウネーの三人はまだ入院中なので、とつくに病院の消灯時間を過ぎてはまずなのである。このままいけば先生や看護師に怒られるのは必至であった。

「それじゃあ今日は解散にするか、実は俺の視界にさつきから警告が表示されててな……、多分リーファが風呂入れて体を揺さぶってるっぽい……」

「リーファさんって、確かキリトさんの妹さん……でしたよね？」

「ああ……そうだよ？」

「……ボクの方も出てるや。ねえキリト、お風呂ボクが先に入っている？」

「ああ、別にかまわないぞ？」

「……え？」

「……え？」

「……え？」

ユウキとキリトの今のやり取りに、シウネーらスリーピング・ナイ

ツの面々が表情を凍り付かせていた。先に風呂に入ってもいいかという今のやり取り、それは即ちこの二人が一つ屋根の下で暮らしていることを意味している。今日直接キリトらの自宅に遊びにいったシンノンとシユピーゲルはそれまでの経緯や内情を知っていたが、H I V完治後のユウキの経過を全く知らないシウネー、ジュン、ノリの三人はその事実を知らされていなかった為に、驚きの表情を隠せなかった。

「ユ……ユウキつてひよつとして……キリトさんの家に……？」

「うん！ ボクはキリトの家と一緒に暮らしてるよ！」

ユウキの曇りの全くない返しに、ジュン達は開いた口がふさがらなかった。ユウキとキリトが恋人同士だということは聞かされていたが、ここまで関係が進んでいるとは思わなかったのである。まあユウキからしたら半年ぶりに仮想世界にログインしたこともあり、皆に現状を知らせる機会がなかったのだから仕方なかったが。

それにしても自分たちが一緒に住んでいるという衝撃的な事実を惜しげもなくオープンにしているユウキはもう少し嗜みというものを覚える必要があるかもしれない。事実シユピーゲルは苦笑いを浮かべ、シンノンとアスナは呆れて顔に手を当てて溜め息を吐いてしまっていた。

「ユウキ……それにキリト君も、私達だからいいけどそういう情報はあんまりオープンにしない方がいいと思うよ？ リアルの事情なんだし……」

「あ……ああ、そういうえばそうだったな……。結構ALLOの友達もリアルで会うことが少なくなからあんまり気にしなくなってたよ」「そう……だよ、ボクも気をつけなきゃ……」

基本的にこういったオンラインゲームに各々のリアルの事情を持ち込むことはタブーとされている。中にはそのようなことを気にし

ない人もいるが、個人情報などもあるために、原則的にはこういったリアルな事情はオープンにしない方が身の為なのである。いつでもどこで誰に悪用されるかわからないからだ。ユウキはアスナに諭されると、反省の表情を浮かべながら頭をかいていた。

「キリトさん!!」

「なっ……何だい?」

ジユンが突如、キリトの両手を握りしめ、真つすぐにキリトの目を真剣な眼差しで見つめていた。急に詰め寄られたキリトは驚いていたが、ジユンのこれでもかという真剣な表情から何かしら大切なことを伝えたいんだなという気持ちを汲み取り、ジユンの口から聞かされる言葉を待っていた。

「うちのリーダーを、ユウキを……よろしくお願いします」

「私からも、ユウキのこと……頼みます」

「アタシからも……お願いします。キリトさん」

元祖スリーピング・ナイツのメンバーであるジユンがそう言いながら頭を下げると、それに続くようにシウネーとノリも頭を下げ、ユウキのこれからのことをキリトに託した。ジユン達にとっても、ユウキの幸せは自分たちの幸せと同意義ぐらいに思ってくれていたのである。キリトは三人に「頭を上げてくれ」と言った後、優しく、そして真剣な表情を浮かべながら自分の覚悟を表に現した。

「言われずとも、ユウキは俺が必ず幸せにする。もしユウキが不幸になるようなことがあったら、その時は君たちに斬られてもかまわない」

「キ……キリト……」

相も変わらず恥ずかしいセリフを少しも照れることなく言い放つ

キリトに対し、ユウキは顔を赤くしてしまっていた。しかし心に嘘はつけないのか、嬉しさのあまり自然とキリトの手をぎゅつと握り締めていた。キリトもそれに気付くと、ユウキの手を握り返していた。ジユンたちはキリトの覚悟を聞き届けると、安堵の表情を浮かべていた。キリトさんなら大丈夫だ、どんなことがあっても絶対にうちのリーダーを幸せにしてくれる。そう胸に抱きながら。

「お願いします。もしも……不幸なんかしたら、容赦なく斬り捨てますからね……！」

「ああ、その時は遠慮なくやってくれ。……尤も、俺は斬られるつもりはないけどな」

「……それなら安心です……！」

「うふふ、よかったわね、ユウキ！」

キリトと手を繋ぎながら顔を赤くして俯いているユウキの背後から、アスナが上から覆いかぶさるようにしてユウキの肩に手を回してもたれかかった。ユウキは恥ずかしそうにしながらも「う……うん、ありがと……」と照れくさそうに返事を返した。そして時間の方も流石に限界に近付いており、一行はそそくさとログアウトの準備に取り掛かっていた。

「みんな、今日は本当にありがとう。色々あったけど俺は楽しかった。……また……遊ぼうな！」

キリトが左手でメニューを操作しながら、メの言葉を皆に送った。久方ぶりのVRMMOは、文字通り色々あったが濃厚で充実した時間であったと言える。毎日がこうとは限らないが、このメンバーがいる限りはこれからもずっとゲームを楽しめていけるだろう。

「それじゃあみんなお疲れ！ ……オレは多分先生から怒られるな……！」

「くす、それは私たちもよ、ジユン」

「あははは！ 違くないな！」

「そうだね！ まあ次から気を付ければいいよ！」

よく消灯時間をオーバーしてまでALOで遊んで倉橋に怒られたことがあるユウキが「多分大丈夫だよ」と自信ありげにジユン達に言い放った。前科がある者の意見として妙な説得力があった。こんなことなら倉橋はもう少しユウキに厳しくしてもよかったのかもしれない。

入院組であるスリーピング・ナイトのメンバーはユウキ達に「また今度遊ぼうね」と言い残し、左手でログアウトメニューを開いてタップし、アバターを光らせながらALOから現実世界へと帰還していった。シウネーら三人がログアウトした転移門前には、キリトラ五人が残される形となった。

「それじゃ、僕も落ちるよ。これから深夜あたりまで勉強しないとだ」
「私も落ちるわね、今日は誘ってくれてありがとね、キリト」

「いや、シノンたちこそ参加してくれてサンキュな。シュピーゲルも……また一緒に遊ぼうぜ」

「……うん是非お願いするよ。今度は……君から剣術を教えてくださいな」

「いいのか？ 俺の訓練はシノンよりハードだぞ？」

「大丈夫だよ、ある意味……シノンより厳しくないだろうし……ね？」

キリト達がお互いに笑顔で軽いジョークを交わしていると、傍らで見ているシノンが「……どういう意味よ……」と言葉を漏らしながら若干不機嫌になっていた。シュピーゲルが慌てて「冗談、冗談だから！」とシノンをなだめると、一行の間に笑い声が飛び交った。

やがてシュピーゲルとシノンも右手でバイバイの仕草をしながら左手でメニューを操作して、二人同時にログアウトしていった。シュピーゲルにとっても、今日初めて降り立ったALOは非常に充実した

初日であった。コンバートしたキャラとはいえ、たった一日でここまで戦えるようになっていたのだから。まだまだ粗はあるが、キリト達と戦っていくうちに、もつと技術に磨きがかけられていくに違いない。

「…………ふう、それじゃあ私も落ちるね」

「あ…………うん、今日はありがとね、アスナ！」

「ううん、久しぶりにユウキと遊べて楽しかったよ！ それに…………念願かなってスリーピング・ナイトにも入れてもらったし…………！」

「えへへ…………、そうだね！」

以前は諸事情で入れなかったスリーピング・ナイトに入れてもらったアスナは心から嬉しそうな表情を浮かべていた。そのアスナをみて、ユウキも嬉しそうな照れくさそうに鼻の頭を右手の人差し指で擦りつけていた。

「今度は現実でも遊びましょうね、ユウキ！」

「うん！ 今度お出掛けしよう！ バイバイ！ アスナ！」

アスナも同じように左手でメニューを操作し、ユウキとキリトに笑顔を残しながら、ログアウトボタンをタップして、アバターを光らせながらログアウトしていった。以前までのユウキは、アスナがログアウトするたびに、独りぼっちになってしまい寂しい思いをしていたが、今は違う。もう命の危機に脅かされることはないし、現実でも会える。HIVに体を侵されていた頃は、こんな明るい未来が来るなんて露程にも思っていなかった。

本当に…………本当にキリトには感謝してもしきれないな。本来ならばボクは今頃死んでいたかもしれないのに、こんなボクを愛してくれて、明るい未来を残してくれた。普通の暮らしを…………ボクにもたらししてくれた。もう今まで数えきれないほどの感謝の気持ちをキリトに送っているが、これからの日常の感動を覚えるたびに、ボクは一生キ

リトに……和人に感謝し続けるだろう……。

「ねえ、キリト……」

「ん、何だ？」

両手を後頭部に回して組んでいるキリトに向かって、ユウキはぴよんとステップしてその胸に飛び込んだ。キリトは慣れた手つきで自分の胸に飛び込み、背中に手を回してきたユウキを優しく抱きかかえた。こういう時にユウキが自分の胸に飛び込んでくるときは、ただ単に甘えたいときか、寂しいときか、感謝の気持ちを伝えたいときだけだ。そして今回抱き着いてきた理由も、なんとなく察していた。

「どうした？」

「えとね、ありがとう……」

「……ああ、どういたしまして……」

互いに多くを語る必要はない。もうこの二人は恋人同士という肩書以上に固い絆で結ばれた、掛け替えのない関係となっていた。出会ってまだ一年も経っていないが、互いのことを理解し尽くすまでに濃い毎日を過ごしてきたのだ。まだ内緒にしていることはあるが、ちよつとした仕草や表情で何を考えているかまでわかるぐらいにまで、この二人の仲は進展していた。

「えへへ……」

「んじゃあ……俺たちも落ちるか……」

「……うん」

最後に残ったキリトとユウキは、抱き合っていた互いの体を少しだけ離し、笑顔で見つめあいながら左手を操作し、同じタイミングでメニューを開き、抱き合いながらログアウトをしていった。二人が初めて一緒に仮想空間から現実世界へと帰還する瞬間であった。二人の

アバターは白い光に包まれ、透き通りながら仮想空間から消えていった。現実世界へとログアウトしていったのだ。今度はメデイキュボイドの仮想空間ではない、現実の和人の部屋へと……。

西暦2026年10月31日土曜日 午後23:15 埼玉県川越

市 桐ヶ谷邸 和人と木綿季の部屋

「う……戻ったか……」

「ふあ……そうみたい」

和人と木綿季は仮想空間から現実世界へと意識を戻していた。現実の二人は互いの手を握ったまま、ベッドに横たわってアミュスフィア越しに、自分の部屋の白い天井を見上げていた。まだ頭が少しぼーつとする、脳がまだ現実世界だと完全に認識してないみたいだ。まるで長い睡眠から目覚めたばかりのような感覚だ。

和人は自分の頭からアミュスフィアを取り外し、傍らに置くと上半身をゆっくりと起こして大きく伸びをした。首と肩をほきほきとならし、腰をぐりんぐりとさせ、体を慣らした。ふと隣に目をやると、恋人である木綿季がアミュスフィア越しに天井をぼーつとまだ眺めていた。一体どうしたのだろうかと思い、和人は木綿季の視界の前に手を覆って「どうした？」と声を掛けた。それでようやく木綿季はハツとなったのか、漸く上体を起こして両手で頭からアミュスフィアを外した。

「えつとね……いつもはさ、ALOからログアウトすると……メデイキュボイドの仮想空間の中だったから、ちよつと違和感っていうか……不思議だなんて思って……」

「……そうか……」

「でも今日は違った。目を覚ましたら違う場所で、ちゃんと現実世界

で、横に……ちゃんと和人がいて……」

木綿季はそう言うと、安堵の表情を浮かべながら和人によりかかって、胸に顔を当て擦った。和人もそれが当たり前のように木綿季の背中に手を廻し、やさしくポンポンと背中を叩き、木綿季を受け入れた。

「なんかね、嬉しい……」

「そっか、俺も……木綿季が生きててくれて嬉しい」

二人のやり取りは、八ヶ月前に付き合い始めた頃となんら変化がなかった。積極的なスキンシップ、互いへの大好きだという気持ち、ちよつとした悪戯など、非常に仲睦まじい微笑ましい光景だった。何回やつても飽きない、むしろ回数を重ねるたびに幸せが増していく気がした。

それもやはり、木綿季がHIV完全駆逐という大変に高く聳え立った壁を乗り越えたということが、大きく影響していたといえるだろう。互いに生死の境目を必死に歩いてきたからこそ、今こうしてられることの幸せを噛みしめられていたのだ。退院してからまだ一週間も経っていないが、木綿季は毎日が楽しくてしょうがなかった。もう仮想空間の狭い部屋で独りぼっちではない。和人が、翠が、直葉が、明日奈が木綿季の傍にいてくれる。

高い洋服も豪華な食事も必要ない、大切な人が一緒にいてくれることが、木綿季の何よりの幸せだった。普通に朝起きて、普通にご飯を食べて、普通に勉強して、普通に遊んで、そんな毎日が幸せの連続だった。

「……なんか、毎日同じことばかりしてるな、俺たち……」

「うん、だけどボクはすつごく幸せだよ？ 和人と入れて……」

「……ああ、ありがとな」

和人と木綿季が幸せを感じていると、突如和人の部屋のドアからコ

ンコンツとノックされる音が聞こえた。恐らく直葉だろう、二人がAL0にいる間にも定期的に風呂に入るよう部屋を訪ねて来てくれたのだ。何度目かのノックかはわからないが早く入ってしまったわないと直葉にも悪い。

和人は木綿季との抱擁をどくと、ドアの向こうにいる直葉に対してやや大きめの声で「開けていいぞー」と声を掛けた。するとドア越しに「はあーい」と返事が聞こえ、ガチャツという音とともにドアが開かれると、寒くなってきたにもかかわらず、短パン半袖という薄着に身を包んでいる直葉が姿を現した。

「もうやっど起きたー二人ともー!」

「ようスグ、なんかずつと声を掛けてくれてたみたいでごめんな」

「ボクからも気付いてただけど、挨拶とかしてたから遅くなっちゃった……」

「ハロウィンクエストだっけ? いいなく……あたしもやりたかった」

本来なら直葉も今夜のハロウィンイベントに参加したかったのだが、今は10月末。そう……学生は二学期の期末試験を控えている時期だ。高校へはスポーツ推薦で進学した直葉であったが、自分の将来のことを考えると運動以外の学力でも成績を落とすわけにはいかなかったため、高校からは中学の時以上に勉強するようになっていた。本人は県内の大学に進学することを進路として定めていた為、尚更だった。ハロウィンのこの日も、直葉は一生懸命試験勉強に身を入れた。

「あ……そうだよな、もうすぐ期末だもんな……」

「期末って……、二学期の期末試験?」

「確かにそんな時期だな。まあ学校によつては12月に入ってから始まるところもあるが」

「そっかあ……、大変だね……直葉……」

「おいおい、木綿季も他人事じゃないだろ？ 来月明日奈から試験出されるんだから……」

「う……わ、わかってるよう……」

そう、木綿季も講師である明日奈から試験を出されることになっている。来月の第二土曜日の午前9時から、明日奈の家で、英数国理社の五科目の試験に臨むことになっていた。出題範囲は中一の全学期分だ。退院前からリハビリと一緒に勉強もこなしていたので、恐らく大丈夫だとは思うが久方ぶりの試験に、木綿季は不安を募らせていた。

元々小学校時代は成績トップを保っていたが、やはり三年間勉強をしていなかったブランクは大きく、すっかり机の上でのやりとりには苦手意識を持ってしまっていた。しかしそれでは困る、来春一緒に同じ学校に通う和人にとってもそうだが、遅れているとはいえちゃんとそれ相応の学力を持っておかないと世間的にマズい。忙しい身ではあるが、しっかりと勉強もしておかないと楽しい学校生活どころではなくなってしまうのだ。

「頑張れよ？ 来年の春から一緒に学校行くんだからな？」

「……！」

そうだ、退院してから普通の生活に感動しっぱなしの毎日だったけど、ボクは来年の四月から学校に通うんだ。通信プローブ越しじゃない、自分の足で歩いて、直接学校まで行けるんだ。筆記用具持って、学校鞆持って、可愛い制服着て……、ずっと憧れていた学校に……行けるんだ……。

「そう……だね、うん……ボク、学校に行けるんだ……！」

「ああそうだ！ 手術の時にも言ったろ？ だから勉強も頑張らないとだ」

「うん！ よーし！ やるぞー！」

来年から学生になれるという明確な自分のビジョンが浮かび上がってきた木綿季は、期待に胸を膨らませてやる気に満ち溢れていた。そのためにもまずは来月の明日奈からの試験で結果を出さなくては、優等生と言われていたボクの本当の実力を皆に見せつけてやる、そしていい結果が出たら和人に褒めてもらおう、そしてあわよくば何かご褒美をもらおう、そんな野望も企んでいた。

「えつと……なんでもいいけどお風呂はいつちやいなよ、お湯が冷めちゃうよ?」

「え、ああ……そうだったな、木綿季、先入ってこいよ」

「あ……、ボクも忘れてた。アハハハ……」

直葉に早くお風呂に入れと言われた木綿季は苦笑いを浮かべてベッドから体を降ろし、自分のチェストから下着と寝巻を取り出してきれいに手で整えると、和人に向かって「お言葉に甘えて先に入ってくるね!」と言い残して和人の部屋を後にした。和人は出しっぱなしにしていた木綿季のアミューシアをやれやれといった様子で片付けていた。

木綿季は元気いっぱいなのはいいのだが、こういう所で少しだけだらしがないところがある。これからちゃんと注意していかないといけない。彼女は恋人には違いないがこれとそれとは話が別、私生活面もちゃんと正していかないといけない。

「ねえお兄ちゃん、あたしも試験が終わったらALO戻るからさ、そしてまた一緒に遊ぼうよ!」

「そうだな、したら木綿季にも声かけて……三人で兄妹水入らずでプレイするのもありかもだな」

「あ、そうだね! それいいかも!」

「よし、それならどこ行くか考えとかないな……」

「そこはまかせるよ! クエストでもダンジョンでも!」

「あいよ、三人で遊べるところ探しておくよ」

ALOで兄妹水入らずで遊ぶこ約束を取り付けると直葉は「絶対だよ！」と両手を上げて喜んで、試験後の楽しみを得たようだった。木綿季とは退院前に大人数パーティーで一緒に冒険した時と、数回か決闘デュエルで剣を交えた程度でしか遊んだことがなかったのだ。木綿季が退院してからもまだ一度も姉妹としては遊んだことがなかった為、今度の約束は大変に楽しみにしている様子だった。

「あ……そういえば兄妹水入らずと言えはさ……」

喜んでいた直葉が急に動作をピタッと止めて改まると、和人が「どうしたんだ？」と尋ねた。直葉は和人のPCデスクの椅子の背もたれを体の前にして座り、肘と顔を背もたれに預けて話し始めた。

「お父さん帰ってくるの明日だね？ 朝一番でこっちに向かってお昼ぐらいに着くみたいなこと言ってたよ？」

「ああ……そういえばそうだったな、んでその翌日に、いよいよ木綿季の養子縁組届を……役所に届け出にいくんだよね……」

「うん……いよいよ、なんだね……。あたしたちが本当の家族になるの……」

「そう……だな」

今まで気の合う友人だと思っていた女の子が、様々な運命が絡み合っていることに、和人はもとより直葉も実感が無い、といった表情を浮かべていた。和人が桐ヶ谷家に養子として迎えられた当時は、まだ直葉も幼かった為、兄と言われてもそれほど抵抗も違和感もなかったという。和人も和人で事故のショックで過去の記憶がほとんどぼやけてた時期もあり、直葉が妹だと言われてもそれほど不思議に思っていなかった。

しかし今度の木綿季は違う。二人とも成長し大きくなり、はつきり

と自分の意思を持っている。そんな中、新しい家族……、それも可愛い妹が出来るということに、喜び以上に不思議な感覚を覚えていた。嬉しいは嬉しいのだが、背中が痒いと言うか、常にくすぐられているというか、そんな感じだった。

「なんかさ……不思議だよ……」

直葉が椅子をぐらぐらと前後に揺らしながら今思っている心境を述べていた。揺らされた椅子がギシツギシツと独特の金属音を鳴らせ、直葉の動きに合わせて前後に動いていた。

「そうだよな……俺も、なんだか不思議だよ。ついこの前まで元恋人の友人だったのに、今じゃそれが恋人になって、そしてもうすぐ妹になるんだもんな……。全く、運命ってのはよくわからないもんだ……」

「でも、あたしは……木綿季が家族になるのはやっぱり嬉しいかな」

「それは俺もだよ、ずっと一緒にいられるってのも……嬉しいな……」

「あははは！ でも絶対に楽しくなるって、木綿季が一緒ならね！」

「……そうだな、きつとそうに違いないな」

和人と直葉は、これからの木綿季との生活が楽しくなるものと信じて疑わなかった。一緒に旅行だって行く機会もあるだろうし、毎日パジャマパーティーだって出来る。悩み事があればすぐに相談しあえるし、仮想世界でだっていつでも遊べる。

そりゃ楽しいことばかりではなく、時には兄妹喧嘩、姉妹喧嘩もおっぱじめるときもくるだろう。しかし、それも木綿季が木綿季らしく、この現実世界で生きているという証に違いなかった。どういう未来になるかは正直わからないが、この家族なら絶対に明るい未来を築いていけることだろう。

「……さてと、それじゃあお兄ちゃん、あたしは勉強に戻るね」

「あ、ああわかった。頑張れよ？ 期末試験」

「勿論だよ！ いい点取れたら、何か奢ってね？」

「お……おう、まかせとけ」

「……木綿季にもね？」

「ま……、まかせとけ……」

何かと直葉が頑張る時期になると決まっただけで、剣道の大会で結果を残せたら何か奢って、いい点取れたら何か奢ってと何かしら和人に対してせびってきっていた。まあ兄貴として頼られているのは悪い気はしないし、頑張っている妹に対してご褒美を上げるのも兄貴の役目だと思っている和人は、今回もしっかりとご褒美の約束を取り付けた。いや、取り付けられた。

「わーい！ 約束だからね！」

「わかってるよ、その代わりに頑張るんだぞ？」

「がってん！」

俄然やる気を出した直葉は元気に椅子から飛び出すと、駆け足で和人の部屋を後にして、ご機嫌な様子で自室へと戻っていった。和人はその光景をベッドに腰かけ、微妙な苦笑いを浮かべながら見送っていた。だが毎度たかられる和人といっても、金銭面に関しては菊岡から受け取った報酬のおかげで、高校生とは思えないぐらいの蓄えがある。別に直葉や木綿季に奢るぐらいは問題ないのだ。むしろ妹からの好感度があがるのならそれでいいのではないだろうか？ 全く役得な兄貴である。

「さてと、木綿季が戻ってくるまで……テキトーに時間潰すか」

そう言いながら和人はデスクの上に置いてある自分のスマホを手にとると、ベッドに大の字になって寝ころび、ネットサーフィンをはじめた。SNSもブログもやってない彼は特に何を調べるわけでもな

く、ふと頭に浮かんだキーワードでかたっぱしから気分の導くままにページを閲覧していった。

しばらくしてVRMMO関係のワードで適当にネットをしていると、和人はふと気になる記事に目を止めた。記事といっても企業が掲載しているネットニュースではない。動画サイトなどでユーザーが登録、書き上げているブロマガと呼ばれているものだ。和人はそこに書かれているとある記事に注目していた。

「何だこれ……死銃事件……？」

和人が読んでいる記事のタイトルには「死銃」と書かれており、先刻とあるVRMMOの中で起きた事件についての記事だった。内容はVRMMOの情報を取り扱うネット配信コンテンツ「MMOストリーム」での生放送中に起こった事件について記されていた。この番組にゲストとして参加していたGGOプレイヤーの「ゼクシード」というプレイヤーが番組中に不可思議な回線切断に見舞われたという出来事だ。

一方その時刻と同時にGGOのゲームの中で、不気味なプレイヤーアバターが街中の酒場に出現したとの目撃情報も寄せられていた。そのアバターを目撃した証人の証言によれば、そのプレイヤーは自らを「死銃」と名乗り、ゲーム内の仮想ディスプレイで中継されているMMOストリームの画面の中のゼクシード目掛けて拳銃の弾丸を放ったという。当然街中なのでPKは出来ないし仮想ディスプレイもオブジェクトなので壊れても復元する。はたから見たら何の意味もないイカれた野郎のイカれた行動としか見えないものだった。

だが話は時間が進むに連れてやがて怪しい方向へと一変していった。その死銃騒動から数日後、都内のあるアパートの一室から、異臭を放った成人男性の遺体が発見されたのだ。この男性はベッドに横たわったまま亡くなっており、頭にはアミュスフィアが装着されていたという。

しかし襲われた形跡も争った形跡も、物を盗られたという形跡も全

く見受けられなかったことから、フルダイブ中の変死という扱いになり、死因も心不全と診断され、事件性なしとして警察に処理され、一旦は幕を閉じた。ちなみにこの男性の装着しているアミユスファイアには、GGOのゲームカートリッジが差し込まれていたという。

この変死者がGGOプレイヤーのゼクシードだということは公にはされていないが、あの死銃騒動デスガンからゼクシードがログインしていないこと、それと同時期にGGOプレイヤーが変死を遂げていることから、このプレイヤーこそがゼクシードで、彼は本当に死銃デスガンに銃で撃たれて死んだのではないか？ などという噂がGGO内だけではなく、VRMMO界限全域に渡って流れていたのだ。

だがこの記事の筆者も初めは根も葉もない噂、偶然だと思っていたみたいで死銃デスガンの存在などもっぱら信じていなかった。しかし、筆者もその意見をも変えざるを得ない第二の死銃騒動デスガンが起こったという。第一の死銃騒動デスガンから数日後、今度は埼玉県内のあるアパートからまたもや男性の遺体が発見された。こちらの状況も先の変死事件と同様、部屋は荒らされておらず、争った形跡も全くなし、そして遺体の状況も全く同じであることまでわかっていった。アミユスファイアを被り、GGOのカートリッジが挿入されている所まで……。

「……奇妙だな、偶然にしては……」

和人はさらにスマホのディスプレイを下へスワイプさせて、記事の続きを読み続けた。記事も終盤に差し掛かっていたが今回の件を偶然の一言で片付けるにはあまりにも不可解なほど共通点があることに和人は気付いた。この埼玉県内で男性が遺体として発見される二日ほど前に、なんと再びとあるGGOプレイヤーが音信不通になっっているという事実が浮上してきたのだ。アバター名は「薄塩たらこ」というそうだ。

GGOのゲーム内で仲間のスコードロンの集会に足を運んでいたところ、突如謎のプレイヤーに集会現場を襲撃されたという。突然の乱入者にメンバーは驚いたそうだがその混乱に乗じて乱入者は薄塩

たらこに向かつて拳銃の弾を放ったそうさ。

街中なのでダメージはなかったそうだが、薄塩たらこはそのまま回線切断され、それ以降全くGGOに姿を見せたいと言っているのではないか。そして彼を銃撃した謎の乱入者のアバターは、先の件の死銃デスガンと名乗ったプレイヤーとそっくりだったという。してその数日後にGGOプレイヤーがまた現実世界で遺体となって発見された。偶然にしては出来過ぎである。

「……本当に偶然なのか？ この死銃デスガンつての……」

和人は記事を読み終え、上体を起こして窓際の方に体を向かせ、顎に手を当ててこの事件の可能性について考えていた。今回の騒動をまとめるところだ。まず、死銃デスガンと名乗るプレイヤーが二人のプレイヤー「ゼクシード」そして「薄塩たらこ」に向かつて拳銃の弾を放った。その事件から数日後、二人のGGOプレイヤーが自宅で遺体となって発見された。そして銃撃されたプレイヤーはそれ以降GGOに姿を現していない。つまりこの変死体の正体はゼクシードと薄塩たらこその人なのではないか……とこういうことだ。

しかし先の件が偶然じゃないにしても不可解なことがある。仮に彼らがその死銃デスガンとやりに殺されたと仮定しよう。ならばその死銃デスガンとやらは、どうやって彼らを殺したんだ？

そもそもゲーム内から現実の世界の人間を殺すなんて不可能だ。二年前のSAO事件ならともかくあの時はナーヴギアを被っていたからこそ出来たことだ。アミュスフィアはセキュリティが厳しく、違法改造なども容易に出来ない構造になっているしそもそもこの変死者が装着していたアミュスフィアにはそんな形跡もなかったという。そう、高出力マイクロウエーブなど飛ばせるはずがない。

だとすれば何故彼らは死んだ？ 本当に死銃デスガンがゲーム内から現実のプレイヤーを殺すための能力を……手段を持っているとでも言うのだろうか？ それともアミュスフィアや仮想世界の穴を突く何かしらの方法を持っているとでもいうのだろうか？ 和人は考えられ

るあらゆる可能性を浮かびあげていたが、どう考えても最終的に辿り着いた答えは「アミュスファイアによる殺人は不可能」という結論だった。

「無理だ……、ナーヴギアならともかくアミュスファイアで人を殺すなんて……」

先ほど言った通り、SAO事件の反省から再び開発されたアミュスファイアはそれほど高出力のマイクロウエーブは出せない設計となっており、何重にもかけられたプロテクトによって違法改造も出来なくなっている。セキュリティ面や安全面に関しても万全で、ダイブ中のプレイヤーの体に異常が見られた場合、アミュスファイア自体が強制ログアウトさせるというセーフティ機能まで付けられている。まさに現在のVRMMO界の救世主的マシンハードといっても過言ではないだろう。

「やっぱり……この二人の変死は偶然なのか……?」

「何が偶然なの? かずと」

「うわあっ!?!」

突如として背後から和人のスマホを覗き込むようにして、木綿季がにゅつと顔を割り込ませてきた。その様子にびっくりした和人は慌ててスマホを傍らに放り投げてしまい、後方に大きく仰け反りながらベッドから床へと「ドシン」という音を立てて転げ落ちてしまった。仰向けの体勢で床に倒れている和人に向かってパジャマ姿の木綿季が駆け寄って心配そうに声を掛けた。

「か……和人大丈夫!?!」

和人は首の付け根から肩甲骨の辺りまでの背中を打ち付けていたようで、痛そうに片手で背中をさすっていた。木綿季はそんな和人の

腰に手を当てて優しく起こすと、肩を貸しながら一緒にベッドに腰をおろした。

「いやあ……俺としたことが驚きすぎちゃったよ、あはは……」

「ご、ごめんね……驚かすつもりはなかったんだけど……和人が何してるのかなって思って。何回かノックしたんだけど和人氣付かなかったから……」

「いやいや、木綿季は悪くないぞ。反応しなかった俺が悪い」

「かすと大丈夫？ ぶつけたとこ平気……？」

「大丈夫だ、こうすれば治る」

「あ……」

和人はそう言いながら、木綿季を自分の方へと抱き寄せ、そのまま抱き締めた。抱かれた木綿季からは風呂上りのせいかわかるとシャープのいい匂いが漂っていた。身体は湯船につかっていたおかげはまだ温かかったが、まだわずかに髪の毛が濡れていた。ちゃんと拭かないと風邪をひいてしまいそうだ。10秒ほど木綿季を抱き締めた和人はゆつくりと木綿季から体を離し、にっこりと笑ってみせた。

「元気ももらったからもう大丈夫だ」

「あ……う、うん……」

急に抱き締められた木綿季は顔が真っ赤になっていた。そのことについて和人に言及されると「お風呂上がりだからだよ！」と誤魔化しきれないような言い訳を並べていた。その反応を楽しんだ和人は自分のチェストから下着と真っ黒な寝巻を取り出して、木綿季に「ちゃんと髪の毛拭けよ？」と言い残し、自分も風呂へと足を運んでいった。

自室を出て階段を降り、脱衣所に辿り着いた和人は、まず洗濯機の上に乱雑に置かれた女の子もの下着が真っ先に視界に入ってしまった。恐らく木綿季のものだろうが、非常にだらしがなく、置

かかっているというよりは脱ぎ散らかされていると言った方が正しかった。ちゃんと洗濯機の中か、せめて洗濯カゴの中にきちんと入れてほしいものだ。

和人は女の子の下着を手に取るといった行動は物凄くいかげわしいことだとは思いつつも、このままにしておくわけにもいかなかった。ので、仕方なく誰かに……特に直葉に見つかる前に、木綿季の脱ぎ散らかした下着をさっと手に取り、洗濯機の中へと放り込んだ。幸いにも誰にも目撃はされなかったようで、いらぬ誤解を生む前にことを片付けられた和人はほっと胸を撫でおろして、自身も風呂に入るために上着と下着を脱ぎ、浴場へと足を運んでいった。

シャワーを浴びながら、和人は先ほどの死銃デスガンの事について考えていた。彼の頭の中では殺害は不可能と結論付けたのにもかかわらず、まだ心のどこかで引つかかっていたようであった。確かに奇妙な点はいくつもある、変死者は同じGGOPレイヤー、そして死因も同じ、更に先の死銃デスガンとの関連性。偶然の一言で片付けるにしてはあまりにも奇妙過ぎた。

だが殺害方法がわからないことには、これらの点と点を線で結びつけるには程遠かった。それに自分は探偵でも警察でもない、これらを調べ上げて真実に辿り着いたとしても、自分にそれを証明できるか怪しいもんだ。これ以上関わることも無いだろうし、自分には関係ないだろう。ちよつとだけ気になっていただけだ。もうこの件はお終いにしよう、そうしよう……。

程なくして15分ほど入浴を楽しんだ和人は寝巻に着替え、首にバスタオルを掛けたまま、自分の部屋へと戻っていった。脱衣所を出て階段を上がると、自分の部屋であるのにもかかわらず中にいる木綿季に気を使いドアをノックする。すると中から「はい！ いいよー！」と木綿季の元気な声が返ってきた。その声を聞き届けてからドアを開けて中に入ると、木綿季がベッドにうつ伏せになりながら、足を

パタパタとさせながらマンガを読んでいる姿が目に入ってきた。

「かずとおかえり！ いいお湯だった？」

「ただいま木綿季、ああ……心行くまで温まれたよ」

「でも髪の毛まだ濡れてるよ？ また適当に拭いてきたでしょ？」

「んじゃあ……木綿季が拭いてくれるか？」

「うん、いいよ！」

そう言うとき木綿季は和人からバスタオルを受け取り、和人の背後にまわって嬉しそうに髪の毛をゴシゴシと拭き始めた。前回は力任せにごわんごわんと首ごと振り回してしまったので、今回はそうならないうようにほどほどに腕に力を込め、尚且つ指先にはしっかりと力を入れて確実に和人の髪の毛から水分を拭きとっていった。拭いてもらっている和人は目を閉じて適度な頭への刺激が気持ちよいのか顔をうつとりとさせていた。

「ほいつ大体拭けたよ！」

「ん……サンキュな、木綿季」

「えっへん！」

「ところで……何の本読んでたんだ？」

「あ、えつとね、これ！」

和人に読んでいた本について尋ねられると、木綿季は和人にバスタオルを返し、傍に置いてある本を手にとると、和人から見て表表紙が見えるように両手で掲げてみせた。木綿季の読んでいた本のタイトルには「独りのグルメ」と書かれており、独身サラリーマンのおっさんが仕事の合間に外食を楽しむといった、若者に受けそうにない内容のグルメマンガだった。作中もただひたすらにおっさんが飯を食べ続けるといった模様が描かれており、とても女の子が楽しんで読めるような構成ではないように見えた。しかし木綿季はそんな世界にどっぷりとハマってしまったのか、和人が風呂に入っている間にもく

もくとページをめくっていたようだった。

「な、中々渋いセンスをしているな……木綿季。俺もエギルに勧められてその本買ったんだよ。なんか妙な中毒性があつて面白いと思うんだけど明日奈やスグとかは全然賛同してくれなかつたんだよな」

「んー、何だろうね。確かにバトルマンガや恋愛マンガみたいな見せ場的なシーンはないんだけど、なんかこのおじさんが食べてる場面と、この独特の仕草が癖になるっていうか……」

「あははは、そうなんだよな！ 頼んだメニユーの材料がダブったときとかの反応とか面白いんだよ」

「うんうん！ でもメニユーを頼みすぎて残すのはちよつと勿体ないって思つたかなー？」

「お前ならどれだけ頼んでも全部食べちまうもんな」

「まあねー！」

時刻は深夜の0時に差し掛かりそうになつており、日が変わろうとしていた。なのにもかかわらず和人と木綿季の二人は楽しそうに一つのマンガの魅力についての話に花を咲かせていた。何の変哲もないごく普通の会話だ。学校で友達同士が昨日のテレビ見た？ と言いつつ合うような他愛のない会話だった。しかしそんなごく普通の日常のやり取りも、木綿季にとっては心の底から楽しいと感ぜられることだった。

「さてと、楽しく読んでいるとこ申し訳ないんだが、そろそろ寝る時間だぞ？」

「えー、まだ半分しか読んでないー！」

「マンガなんかいつでも読めるだろうに！ それに明日は父さんが帰ってくるんだから寝坊なんか出来ないぞ？」

「あ……そっか……」

「そういうことだ、ほら……マンガを本棚に戻しなさい」

「はあーい……」

和人にそう言われると、木綿季は口をとがらせながら解せない表情を浮かべて、渋々読んでいたマンガを元の場所の本棚に戻した。確かに一度読み始めたならその一冊を丸々一気に読破したくなるものだ。しかし今日は朝から晩まで一日中遊び通していたし、明日は父親の峰嵩も帰ってくる。寝ぼけてだらしが無い姿を第一印象として見せるわけにもいかず、木綿季は和人の言うことに従い、ベッドに足を運んで体を横にした。

「電気消すぞ」

「うん……」

和人がスマホのアプリで室内灯に電源OFFの信号を送って部屋の照明を切ると、二人のいる部屋は窓の外から差し込む僅かな街灯の光だけに照らされている状態となった。和人はスマホを枕元に置き、毛布と布団を足元から自分と木綿季に掛かるように寄せて引っ張った。元々一人用の掛け布団だったのだが、二人共体が細いこともあり、しっかりと二人の体を包むことが出来ていた。

「今日は冷えるな……」

「そうだね……、でもこやってくつついてると温かいよ?」

「ああ……風呂上りだからな」

「もう、そういう意味じゃないよー!」

「あははは! すまんすまん」

木綿季と和人は布団と毛布に身をくるみ、体をぬくぬくとさせながら他愛もない会話に身を投じていた。そう、布団に入ったからといって誰しもすぐに夢の世界へ旅立てるわけではない。疲れてたり睡眠が足りていない時はともかく興奮しテンションが上がってしまったら、なかなか寝付けないものである。今の木綿季がまさにその状態であった。そこで木綿季は目を閉じながら寝付けるまで和人と話

をすることにした。

「あのねかすと、聞いてもらっていい？」

「……なんだ？」

「あのさ、お父さんが帰ってきたらさ、二階の倉庫……、片付けるんだよね？」

「……そういうことになってるな」

「そっか……」

「どうしたんだ？ 改まって」

「んと……えつとね、ボク……お部屋このままでもいいかなって思ってるの。いやむしろこのままの方がいいなって……」

木綿季の大胆な発言を聞くと、和人は少しだけ首を動かして木綿季の顔に視線を移した。以前もメデイキュボイドの中で似たような話をしたことがあった。峰嵩の私物で溢れかえっている倉庫を片付けて木綿季の部屋にして、新たな倉庫を建ててそこに移すというものだった。木綿季も最初は自分の部屋が出来ると喜んでいたが、いざ桐ヶ谷邸で一緒に暮らしているうちに、やっぱりずっと和人と一緒にいたいと思うようになり、自分の部屋がなくてもいいかなと感じるようになっていた。

一方、恋人の和人も恥ずかしがっていたが、やはり内心木綿季とずっと一緒にいたいという結論に辿り着いていた。もしもこの先木綿季が別の部屋に移つたらということ想像した時、確かにお互いのプライベートは守られるのだが、それと同時にちよつとだけ心にぽっかり穴が空いたような感覚を覚えていたのだ。それに和人の部屋は元々一人で過ごすには少し広い方だ。部屋自体もスッキリとした使い方をしていたおかげもあって、木綿季が必要なものを揃えてもまだスペースに余裕があるほどだった。

つまるところ、二人とも同じ部屋でいつまでも暮らしたい、そして現実的な視点から見ても二人で暮らしていくのに問題はないということになる。まあ流石に着替え等の時は部屋から出たりしないとい

けないだろうが、これはその時に我慢すればいいだけの話だ。なのであとは新たに木綿季の部屋と倉庫を作る気満々の両親に事情を説明するだけとなっていた。

「だめかな……、ボク……和人とずっと一緒がいいな……」

「俺は構わないぞ」

「……そうだよね、やっぱりだめだよねって……ええ!? いいの!？」

和人からのまさかの肯定の返事に、木綿季は思わず上体をガバツと起こし、目を丸くして驚きの表情を浮かべて和人の顔を見つめていた。木綿季が起き上がったことにより、布団と毛布が一気にまくられたので、和人は少しだけ身に寒気を覚えていた。

「ゆ……木綿季寒いぞ、布団と毛布を戻してくれ……」

「あ……ぐ、ぐめんね……」

木綿季は和人にそう言われると、再び身体を横たわせながら毛布と布団と一緒に自分たちの身体へと包み込んだ。

「えつと……それで和人はいいの……？ ボクがずっとこの部屋にいて……」

「さつきも言ったろ？ 俺は構わない。……むしろ、お……俺も木綿季とこの部屋でずっと一緒にいたい……っていうか……」

「え……う？」

和人は途中からしどろもどろになりながらも、心の中で思っていることを木綿季に言って聞かせた。恥ずかしいのかほつぺを人差し指でぽりぽりかきながら、木綿季から視線を逸らして窓際を向きながら照れくささを隠していた。

一方で和人から一緒の部屋にいたいと言われた木綿季は、嬉しさで思わず笑みがこぼれていた。毎日の生活は正直この部屋だけで事足

りるし、何より大好きな和人といつでも一緒にいられるということが嬉しかった。そしてそれを和人の方も望んでくれたことに喜びを隠せなかった。

「えへへ……嬉しいな……♪」

「ああ……そうだな」

木綿季は喜ぶあまり、両腕を後頭部に当てて仰向けになっている和人に抱き着いた。正直和人にとっては毛布と布団をかぶり、さらに真横から木綿季に抱き着かれると、温かいと言うよりは暑苦しくなってきたしまっているのだが、口が裂けてもそんなことが言えるはずもなかった。ただただ無言で抱き着いてきた木綿季の肩に手を回して、やさしく抱き寄せた。

「さ、もう寝ようぜ」

「……うん♪」

「おやすみ、木綿季……」

「おやすみ、かずと……」

窓の外の街灯の光に照らされながら、二人は夜の闇の中で互いの温もりを感じあい、深い眠りの中へと旅立っていった。

第55話く初めてののおつかい

西暦2026年11月1日 日曜日 午前8:05 埼玉県川越市
桐ヶ谷邸

世間はハロウインの季節を終えて11月に入っていた。赤く染まっていた紅葉もピークを去り、木々という木々の葉っぱはほとんどが枝から抜け落ちていつている。秋から冬になろうと本格的に寒さが到来する季節となっていた。

特に今年の秋は半ばあたりから急に冷え込んでおり、それなりに厚着を着込まないとかなりの寒さを感じるほどだ。和人達の暮らす埼玉県川越市も例外ではなく、今朝から秋らしからぬ寒さに襲われていた。このままでは12月を待たずして雪を見る機会がやって来そうである。

そんな肌寒い川越にある桐ヶ谷家の食卓では、テレビを見ながら和人、木綿季、直葉、翠が朝御飯に箸をつついていた。普段はパン食が多い桐ヶ谷家の朝御飯は、今日は久々の和食であった。卵焼きに鮭の切り身、大根おろしと昆布の佃煮に、葱と油揚げと大根が入った味噌汁といった献立だ。

「うわあ、埼玉県今日の最低気温5度だつてさ」

「マジかあ、昨日より冷え込むのか、外……」

朝御飯の味噌汁をズズツという音を立てて飲みながら天気予報を見ていた木綿季が今日の最低気温に驚くと、隣に座っている和人が寒さに対してげんなりとした様子を見せていた。桐ヶ谷家の長兄でもある和人は今年で18歳になり、段々と大人の苦勞を肌で感じ、社会や世間の厳しさを生きていくことの大変さを少しずつ理解し始める年齢となっていた。そして暑さや寒さといった季節さながらの気候変動も勿論その例外ではなかった。

「和人寒いのが苦手なの？」

「寒さだけじゃなく暑いのも苦手だよ、エアコンや暖房がない暮らしなど考えられん」

「現代っ子だなあ〜……」

「お前が言うか！」

自分より二つ年下の木綿季に情けないなあと言われんばかりの悪態を吐かれた和人が思わずツツコミを入れた。木綿季は他の同年代の子と比べても寒さなどには滅法強いらしく、朝方の寒い時間にもかかわらず直葉の剣道の稽古を厚着をしないまま平然と見ていられる程であった。

「ほらほら、はしゃいでないでさっさと御飯食べちゃいなさい。今日は忙しくなるんだから」

「はあ〜い」

話に夢中で箸がなかなか進まない子供達に翠が注意を促した。そう、今日は桐ヶ谷家の大黒柱である峰嵩が久方ぶりに我が家へと帰ってくる日だ。普段は出張で家を留守にしていることの方が多いが、桐ヶ谷家の家計を一番に支えている力強い父親だ。

その峰嵩が帰るとあって、桐ヶ谷家は騒々しい様子となっていた。長期の出張を労うために峰嵩の好物を買い出しに行ったり、二階の倉庫をほったらかしにしたのがバレないように緊急の掃除をしたり。何より更に今回は木綿季が新しい家族として迎えられている。明日には家族全員で役所に養子縁組届を提出する手はずになっていることもあり、今日明日だけで桐ヶ谷家は大忙しとなっているのだ。

「和人と木綿季は朝御飯食べ終わったら、駅前のデパートにこのメモに書かれたものを買ってきてちょうだいね」

翠はそう言いながら、和人に買ってきてほしいものが書かれたメモと、福沢諭吉が描かれているお札を三枚重ねて手渡した。和人はそれを片手で受け取って、まじまじと買い物リストに目をやっていた。リストに書かれているのはほとんどがお肉、野菜といった食料品であり、そのラインナップから今夜の食卓は鍋にしようであろうことが窺えた。豚肉を大量に買い込むよう指示が書かれてることから、おそらくしゃぶしゃぶにでもするつもりなのだろう。

「OK、任せられたよ」

「お酒は取り寄せたのが今日届くからそれで大丈夫ね」

「げっ、父さんやっぱり飲むのか……」

「うふふ、そゆことよ。お付き合いよろしくね？ 和人」

和人は肩と表情を落としながらも渋々翠からのお願いを承諾した。酔っ払いの相手はクラインの時で経験済みなのだが、父親である峰嵩はかなり酒癖が悪く、飲むたびに毎度しつこく和人に絡んでいたのだ。またあの厄介な酔っ払いの相手をしなければならぬのかと思った和人は、今夜は眠れないと溜め息をこぼしていた。

「お父さんってお酒飲むの？」

「ああ、そりやもう浴びるほど飲むぞ。それでいて未成年の俺に絡んでくるんだからたまらないぜまったく……」

「まあまあ、お父さんもお兄ちゃんじゃないと話せないようなことがあるんだよ。そう言わずに付き合っただけだよ」

「はあ、仕方ないか……」

和人は溜め息をこぼしながら渡されたメモと福沢諭吉を胸ポケットに仕舞い、朝食に再度箸を付けた。木綿季と直葉も和人につられるように続いて自分の分の朝食を胃に流し込んでいった。

今日のミッションは大きく分けて三つ。和人と木綿季の買い出し班は駅前のデパートに今夜の晚餐用の食料品を買い出しに、翠と直葉

の片付け班は家の中を、特に峰嵩の倉庫を徹底的に掃除して清潔にする。そして午後から晚餐の仕込みを始め、家族全員で鍋の準備を進める……と、こういった具合だ。準備が色々と大変だが、木綿季は家族総出で何かをやるうとしてこの前準備にわくわくし、期待に胸を躍らせていた。

「すごいなあ、なんかボクわくわくしてきたよ！」

「あら、そういうことならお買い物隊長は木綿季にお願いしようかしらね？」

「ホントに!? やったー!」

「……不安しかないんだが……」

「大丈夫だよ! 何とかなるって!」

木綿季はああ言ってはいるが、和人は正直不安の気持ちを隠せなかった。本人から聞いた話では過去に買い物に行ったのは幼かった頃に、生前の紺野一家全員で買い物に行った時以降買い物に行つてないという。それも買い出し自体は木綿季の両親がやっていたので肝心の木綿季は両親にくつついてただけで買い物のお手伝いをしたことはなかったのだ。せいぜい軽い荷物を持ったぐらいだ。

和人はそんな木綿季が買い物隊長をやることに不安でしかなかった。リスト通りの物を揃えられるのか、余計なものを買おうとしてしまわないだろうか、最悪……道中で迷子になってしまわないかどうか。あらゆる不安要素を頭の中に巡らせていた、この歳で迷子になったら器用なものだが。

「和人、あなたがしつかり見てあげなさいね?」

「あいよ、結局俺か……」

木綿季が隊長を務めると言いつつも、結局は和人が場を仕切る立場になるようだ。今回の買い物も実質的には木綿季の初めてのおつかい With 和人、といった具合だった。

「木綿季、先に言っておくが余計な物は買わないからな？ 今日は大荷物なんだから」

和人の先制攻撃に木綿季は眉をへの字に曲げて「え〜っ！」と不満の様子を見せていた。恐らくお菓子やら何やらを買ってもらおうと画策してたのだろう。先に釘を刺された木綿季は口を尖らせてぶーぶーと、可愛らしいクレームを和人に向けて飛ばしていた。和人はそんな木綿季をよそにわれ知らぬといった顔で味噌汁をすすっていた。

「くすっ、大丈夫よ。買い物には二階の倉庫にあるキャリーを使えばいいわ。デパートで空きダンボールを貰ってそれをキャリーに乗せて運べば大分余裕が生まれるもの」

翠が木綿季の援護をするような発言をすると和人が味噌汁の入った椀に口をつけながらジト目で「余計なことを……！」とでも言いたそうに翠に視線を送っていた。翠は和人からの視線に気付くと「まあまあいいじゃないの」と言いたそうに和人に向かって左目でウインクを返した。和人はその様子を見て再び溜め息をこぼしていた。

「全く……あまり荷物になるものはダメだからな？」

「やったあー！ 和人だーいすきっ！」

折れるのが早い和人と無邪気に喜ぶ木綿季の仲睦まじい微笑まじさに、翠はほっこりとした笑顔を浮かべていた。それからほどなくして四人とも朝食を平らげて食器を片付け、洗い物まで済ますと直葉と翠は早速掃除の準備に、和人と木綿季は自室に向かい買い出しに行くための支度を始めた。

今日の川越はいつもより寒いので和人は厚めの黒のコートにグレーのマフラーを手に取り、寒さ対策を取っていた。木綿季は和人に買ってもらった紫のデニムジャケットにウサギさんのイヤーマフ、手

先にはホームセンターで購入したピンクと水色の可愛らしいデザイン
のミトンを付け、女の子らしい服装に身を包んでいた。

和人は峰嵩の倉庫から銀色の折りたたみ式のコンパクトなキャ
リーを二つ持ち出した。何しろ家族五人分の晚餐の材料を買い込む
んだ、更には木綿季から色々な物をねだられる可能性が大きい。持ち
運ぶ手段は多いほうがいい。この車輪付きのキャリーなら引つ張る
だけなので女の子の木綿季でも簡単に持ち運びが出来る。決して彼
女に重たいものを持たせるなんてくなんてことにはならない筈だ。

木綿季が家の玄関に辿り着くと防寒具に身を包み、ブラウンの革靴
のような紐履を履き、出掛ける支度を済ますと和人も続いて上着を羽
織り、マフラーを首に巻き、真っ黒なスニーカーに足を通した。そし
て財布とスマホがズボンのポケットにあることを確認し、最後に買い
物リストに目を通すとそれを胸ポケットに仕舞い「よし、行くぞ」と
木綿季に声を掛け、下駄箱に二つ重ねて立てかけてあるキャリーを手
に取り自宅を後にした。木綿季も靴を履くと、とてとてと両手を広げ
て和人の後を追った。そして二人の首元には、半年前に和人が木綿季
とお揃いで買った宝石が埋め込まれたペンダントがぶら下がってい
た。

「うう、わかっちゃいだがやっぱり外は寒いな……」

和人が玄関の扉を開けて表に出ると、冷え切った空気が待つてまし
たと言わんばかりに和人の体に襲い掛かった。屋内との体感温度差
も相まって、和人はいきなり心が折れそうになっていた。息をするた
び話をするたびに口からは白い息が吐き出され、その日の肌寒さを物
語っていた。一方で木綿季は平気な顔をして玄関先に佇んでいた。

「うーん、そうかな？ 確かに寒いけど我慢出来なくはないよ
？」

「お前、凄いな……」

「えへへー！ ボク昔から寒さには強いんだ！ 風の子だからね！」

「んじやあ俺は火の子でいいや、外になんか出ずに炬燵に入つてぬくぬくとしてたい……」

「えっ、ちよ、ちよつと和人！ 玄関出てからまだ1分も経つてないよ！ 気持ち折れるの早すぎだよ！」

「そうは言つても寒いもんは寒いんだ！ うう……もつと厚い上着買つとくんだったな……」

和人は右手でカラカラと車輪の音がする銀色のキャリーを引つ張りながら左手で自分の体を抱き、寒さから身を守っていた。しかしそんなことで朝方の寒さが軽減するはずもなく、和人は11月の冷え込みに体を震わせていた。

「んじやあさ……こうすればいいよ！」

「え……？ おわっ」

木綿季はそう言いながら笑顔で自分の右腕を和人の胸に絡みつかせ、更にこれでもかと自分の身体を和人に密着させた。急に密着された和人は一瞬グラついて非常に歩きづらそうにしていた。更に片手でキャリーを引つ張っているため、余計に前に進みづらそうであった。

「こ、こら木綿季！ 離れろ！ 歩きづらいつての！」

「えー、いいじゃんかー！ この方があつたかいでしょー？」

「あ……歩いてくうちに体が温まるから！ くつつきすぎだ木綿季！」

「ぶー！ やだ！ デパートに着くまで絶対に離れないもん！」

その後も二人の不毛な攻防は駅前に着くまで続き、道中も「離れなさいー！」「やだー！」といった騒々しいやりとりが繰り返されていった。そのやかましくも見ていて楽しくなる二人のやりとりは自然と道行く人々からの視線を集めてしまっていた。しかしそれでも木綿

季は決して和人に抱きついたままの姿勢をやめようとはしなかった。

同日 午前10:05 埼玉県川越市 川越駅郊外

和人は自宅から通常片道徒歩30分で来れるここまでの距離を40分もかけてやっと川越駅前に辿り着いていた。ここまでやってくる間ずっと木綿季に密着されていた和人は、自分と木綿季のほぼ二人分の体重を支え続けてきたおかげで、すっかり息を切らして疲労の様子を見せていた。

一方で和人に抱きついていた木綿季は疲れている和人とは対照的に、疲労の様子を全く見せていなかった。むしろ和人にしがみついていた分だけ元気を吸い取っていたかのようだった。

「ぜえ……ぜえ……、やっと駅前に着いたぞ……」

「お疲れ様！ 和人！」

「木綿季、これ以上は勘弁してくれ……まだ何も買ってないのにもうくたくただ……」

「はぁーい、しょうがないなあ」

木綿季は和人に頼まれるとパツと密着していた身体を離して和人を解放した。長時間抱きついていたおかげで和人の上着がしわくちゃになってしまっていた。和人は大きく肩で溜め息を吐き出すと、近くにある白いベンチに腰を下ろしてくつろぎ始めた。木綿季もそれに続くように和人の隣に腰を落ち着け、川越駅の周辺を見回していた。

「うわあ……昨日までハロウィンだったのにもうクリスマスの飾りがいっぱいだよー！」

「……そうだな」

バスロータリーとタクシー乗り場、そして大きい駅によくある陸橋が交差する川越駅周辺の郊外では、クリスマスツリーやリース、夜になると光るであろうイルミネーションの電飾などの飾り付けがあちらこちらにされており、既にクリスマスムード一色となっていた。木綿季は近くにある成人男性の身長ほどの小さいクリスマスツリーを発見すると、ツリーをもっと間近で見るととてと歩いていった。

木綿季が見つけたツリーには小さく可愛らしいサイズの飾り付けがなされていた。金のベル、銀の星、柊の葉っぱ、赤と白の杖など、クリスマスさながらの楽しい見た目をしていった。木綿季はツリーに近づくと、装飾の一つ一つを目の前で見えて楽しんだり手で触ったりして感触を確かめていた。

木綿季にとって、クリスマスには特別な思い入れがあった。木綿季の以前の家族である紺野家は元々キリスト教を崇拝するクリスマスチャーンの一家だ。当然毎年のクリスマスにも盛大に楽しいパーティーを家で開いていた。木綿季も小さい頃から毎年非常に楽しみにしている行事だった。

しかし三年前にAIDSを発症し、病院生活を余儀なくされたことにより、その楽しみは碎け散ってしまった。無菌室に入れられ、外部との接触が出来なくなり、木綿季は長期間、クリスマスどころか現実の全てを奪われたのだ。仮想世界で季節のイベントは楽しんでいたが、やはりゲームは所詮ゲーム。いくらリアルでも現実世界のものでとはいかなかった。

だからこそだ。HIVウイルスを全て駆逐し、AIDSを完全に克服して現実世界で生きていける身体を取り戻した今なら、クリスマスも昔のように楽しむことが出来る。家の中にもツリーを飾り、クリスマスケーキにチキンにピザと美味しいものをたらふく食べて、終いにプレゼント交換。また楽しいクリスマスを過ごせるのだ。

それも木綿季の命を救うために走り続けてくれた和人の頑張りあつてのことだった。恋人になつてから何回彼に感謝の気持ちを伝

えたかわからないが、もう一回伝えよう。ボクを現実世界に帰してくれてありがとう……と。木綿季は和人に感謝の気持ちを伝えるべく、180度方向転換し、ベンチに腰掛けている和人に歩み寄っていった。しかし次第に距離が近くなるにつれ、木綿季は和人の様子がおかしくなっていることに気付いた。

「か……かずと……？」

「……………」

和人が何か変だ。上の空になってしまつてどこに視線を向けているわけでもなく、ただ何もない空間を見つめているようだった。瞳には光が宿つてなく、まるで魂の抜け殻みたいになつてしまつていた。何だ、どうしたんだ？ ボクの知らない和人がいる、和人に一体何が起こつたの？ 木綿季は恐る恐る和人に近づいて声を掛けてみた。

「かずと、大丈夫？」

「……………」

「え…………？」

木綿季は和人の口から出た言葉に目を見開いて驚愕した。絶対に見間違はずがない恋人の木綿季に向かい、違う人物の名を呼んだのだ。明らかに和人がおかしい、正気じゃない。木綿季は和人の肩に手を当ててこちら側に戻そうと和人の名前を叫びながら強く、激しく揺さぶつた。

「和人！ しっかりして！ 和人つてば！」

「……………」

「ち……違うよ！ ボクだよ！ 木綿季だよ！」

「ユ……………」

「うん……、君の恋人の……木綿季だよ！」

「あ……ああ……、ユウキ……、木綿季……！」

木綿季からの必死の声掛けに、やっと正気に戻った和人は瞳に涙を浮かべていた。何故急に和人が涙を浮かべ、上の空で知らない人の名前を呼んだのかは木綿季にはわからなかった。だが、過去にそのサチという人物と悲しい過去があつたことだけは、理解できていたようだった。

木綿季は和人を優しく包み込むように抱き締め、和人の気持ちがち着くのを待った。和人は息を殺して木綿季の胸を借りてただひたすら泣き続けた。その姿はまるで、過去に仮想世界でキリトがユウキの胸を借りて泣きじやくった光景とそっくりであつた。

和人のこうゆう顔は、和人にとって大切な人に何かあつたときに見せる顔だ。ボクの体に合うドナーが中々見つからないときにも見せていた顔だつた。つまり、サチという子は……多分和人にとって大切な人だつたんだ。そして今は和人の側にいないってことは……多分既にもう……。

「かずと……大丈夫……？」

「……ごめんな……もう大丈夫だ……」

「一体どうしたの……？」

「……………」

木綿季はゆっくりと和人への抱擁をといて心配そうに声を掛けた、しかし和人は何やら深く考え込んでしまい、涙の理由を木綿季に話す様子はなかった。よほど話したくないのか、ただただ沈黙を守るばかりであつた。

「大丈夫だ……何でもないから……」

「なっ何でもないって……嘘言わないでよ！ 何でもなかったら和人があんなに悲しい顔するわけないじゃない！」

「……………」

木綿季は和人に涙の理由を問い詰めようとしたが、木綿季の必死の訴えにも和人は口を割ろうとはしなかった。余程言いたくないのだろう。そう、和人の一生もののトラウマとも言えるあのSAO時代の忌まわしいあの事件のことだけは、恋人である木綿季にも話したくなかったのだ。

自分の所為で一つのギルドを「月夜の黒猫団」を壊滅に追いやってしまったこと、そのギルドメンバーの中に和人の初恋の女の子、サチがいたこと。そしてそのサチが和人の目の前でHPを全損させ、アバターを爆散させて死んでしまったこと。クリスマス限定ボスを倒して蘇生アイテムを手に入れて生き返らせようと試みたがダメだったこと。そして後にサチから直接「私が死ぬのは誰の所為でもない、私本人の問題だから」とキリト宛にメッセージが来てたこと。そして最後にサチからクリスマスソングを送られたこと。

そんな悲しいクリスマスの記憶を、和人は再び思い出してしまっていた。明日奈との別れが、大切だった人との別れが、そしてAIDSの末期を迎え、風前の灯火の命だった木綿季との出会いが、和人にあの頃のことをまた思い出させるようになってしまっていたのだ。

「ボクにも話せないことなの……?」

「……ごめんな、こればかりは木綿季にも話せない。これは……俺自身の問題だから……」

「……和人……」

和人が仮想世界で貫き通している信念「パーティーメンバーを誰一人死なせない」というのはSAO時代による影響が大きかった。中でも初めて所属した月夜の黒猫団を全滅させてしまったことが、彼の決心を固めるきっかけになっていたのだ。

その決心は今も強く残っており、ALOでも必死に守り通そうとしていた。ボス戦でユウキのことを死なせまいと必死で守っていたのも、SAOでの過去があったからであった。「仲間の命」「大切な人の命」を、和人は誰よりも重く背負っていたのだ。だからこそ、不治の

病だと言われていた木綿季のAIDSを何とかして必死に治そうと
していたのだ。

「ホントにごめんな……」

「……かずと……」

「……………」

「いつか、話してくれる……?」

「……………」

木綿季からの問い掛けに、和人は無言で解答を返した。和人は怖
かったのだ、この忌まわしい過去を木綿季に打ち明けたら、木綿季ま
で自分の目の前から消えていってしまうのではないかと、そう感じて
しまっていたのだ。もう彼女の命を脅かすHIVは消滅してるのに
もかわらずだ。それほど和人の心に傷を残した黒猫団の事件は深
く、あまりにも重たい事件であったのだ。サチのことを忘れたい訳で
はないが、消し去りたい和人の過去でもあった。

「……買い物、済ませちまおうぜ……」

「……………」

和人と木綿季は表情を暗くしたまま、足取り重く目的地である地元
のデパートへと向かっていった。とても買い物などする気分ではな
くなってしまったが、目的を忘れてはいけなかった。今日帰ってくる
父親を労うために、大好物を買って帰らねばならない。

和人達はあれから5分ほど歩き、地元のデパート「まるひろ円広百貨店」へ
と辿り着いていた。円広百貨店は昭和14年に創業を開始し、ここ川
越に本店を構える老舗の百貨店だ。百貨店の名に相応しく食料品は
勿論生活必需品や雑貨類、化粧品、ペット用品、玩具など幅広い豊富
な品揃えを誇っている。

さらに館内にはレストランもあり、おまけに七階屋上には昔さなが
らの遊戯コーナーがあり、昭和時代に製造されたレトロ感溢れるアナ

ログなゲーム筐体やスロットマシン等が並べられている。全部現役で稼働しているマシンだ。屋上中央にはゴーカートや小さい観覧車などのちよつとした遊園地施設もあり、ここが建物の屋上だということとを忘れるぐらい楽しい場所となっていた。子供から大人まで楽しめる地元の人気スポットとして客足が絶えない場所だ。

和人は入り口の自動ドアをくぐると一階のレイース雑貨売り場を通り過ぎエスカレーターで地下一階の食品売り場へと歩を進めていった。エスカレーターから降りるとその傍に置いてある一番大きいカートに手を伸ばし、持ってきた折りたたみ式のキャリーを収納させた。

買い物など出来る気分ではなかったが、ここまでできた目的を果たすために役割分担を決めた。和人は自分がカートを押し、木綿季にメモを見ながら品物をカートに入れてもらおうと、後ろにいる木綿季にメモを渡すために振り向いて声を掛けようとした。

「木綿季、俺がカートを押すからお前はこのメモを……あれ……？」

和人が後ろを振り向くと、そこにいる筈の木綿季の姿が何処にもなかった。和人は周りに木綿季がいないかキョロキョロと食品売り場を見回したが何処にも見当たらない。おかしい、つい先ほどまでちゃんと後ろをついてきていたはずだ。何でいなくなってしまったんだ。

「木綿季……？ ま、まさか……はぐれたのか!？」

木綿季は和人とここまできると途中でにはぐれてしまっていた。先の場合で二人とも考え事をしていたためか、別々の方向へと歩いてしまったことに気付かなかつたのだ。和人は木綿季に連絡を取るためにズボンのポケットから慌ててスマホを取り出し、木綿季に電話を掛けようとしたが、ここでとある重要なことを思い出した。

「しまった……！ あいつケータイ持ってないんだ……！」

今のこのご時世若者が一人一台は持っている携帯電話を、木綿季は所持していなかった。それもそのはず、携帯電話を持つような年齢になる前に木綿季は入院してしまっていたし、両親も入院中に亡くなっている携帯電話どころの騒ぎではなかった。

病気が治って退院した後も先に生活必需品を買い集めるのが優先されており、携帯電話を買う話も峰嵩が帰宅し、養子縁組を済ませた後に携帯会社と契約する筈だったのだ。木綿季がまだ携帯電話を持つてないのも無理はない話だった。しかしだからこそ余計に和人は悔しがっていた。携帯電話の操作がわからなくても持たせるだけ持たせて、GPS位置情報を共有出来るアプリをインストールしておけば、はぐれても互いの位置がわかるのにと悔しさの念を隠しきれなかった。

「マズい……どうする……！　もしも、もしも……木綿季の身に何かあつたら……！」

和人は最悪のケースに陥ってしまった場合のことを想像していた。年頃の女の子がたった一人で連絡手段も持たずに知らない土地でうろついたら一体どうなるだろうか？　ふざけた格好をした連中に絡まれてしまうかもしれない、チンピラに恐喝されるかもしれない。いや、もしかすると人のいないところに連れ込まれて、辱めを受けてしまうかもしれない。

「う……あ、ど……どうすれば……。俺の所為だ……俺の……」

先のサチの件のことを考えていた所為か思考がネガティブになっ
てしまっていた和人は、考えられる中から片っ端から木綿季に降りか
かる最悪の可能性を思い浮かべていた。そしてその事を考えるあま
りに冷静さを欠いてしまい、適切な判断が出来ずにいた。背中に氷柱
を突っ込まれたような感覚を覚え、額から嫌な汗が噴き出してきた。

呼吸も段々と荒くなってきて、心臓の鼓動も激しく早くなっているのを感じた。様々な思考を巡らせた結果、和人は手掛かりもなくがむしやらに百貨店のフロアの中で木綿季を探し始めた。

「木綿季ッ！ どこだッ!？」

一方で木綿季は和人と同じ円広百貨店の中にいたものの、やはり和人と同じく考え事をしていたためか、前方を歩いていた和人を完全に見失ってしまった。それだけならまだしも、たまたま木綿季の顔を和人と同じく黒い服に身を包んだ男性が歩いていて見間違えたものだから始末におえなかった。

（あれ……この人、和人……じゃない……。 え……じゃあ和人はどこ……？）

登りのエスカレーターを何度か乗り継いでいた途中で、木綿季は自分が和人とはぐれてしまったことに漸く気がついた。目の前の男性は背丈や服装こそ和人と似ていたが、髪型や服の細部が違っていた。乗っているエスカレーターを降りて、たまたま男性と目があつた木綿季は一瞬たじろいたが、すぐに視線を逸らして逃げるようにその場を後にした。

しばらく歩いていると木綿季はここにきて自分の置かれている状況に気がついていった。いつの間にか和人とはぐれてしまったこと、和人との連絡手段がないこと、そしてここがどこかわからないこと。それらを肌で理解した木綿季は、不安そうに周りに和人がいないかどうかキョロキョロと首をうごかしていた。

知らない土地にたった一人きりで女の子が取り残されて、不安にならない筈がない。いつも傍にいて自分を守ってくれる和人は今はいない。それだけで木綿季の冷静さを欠き、不安感を煽るには十分すぎた。現実世界の何もかもが新鮮であつた木綿季だったが、裏を返せば

その顔を何も知らないということになる。

和人と一緒に見て回っていた時は心から楽しいと感じられていたが今は違った。人混み、人の話し声、足音、雑音など、和人がいなくなった瞬間にそれら全てが恐ろしく感じてきてしまっていた。その恐怖感と不安感が木綿季の冷静さを欠き、適切な判断を出来なくさせてしまっていた。しかし木綿季は我慢して耐え、泣きそうになりながらもあてもなく和人を歩いて探し始めた。

「あ……か、かずと……どこいつちやつたの……？」

一方和人は、恐らく一番最初にはぐれてしまったであろう、一階のレディース雑貨フロアにて、木綿季の姿を探していた。だだっ広い円広百貨店のワンフロアをしらみつぶしにと自分の足で探していた。しかし売り場内は日曜日とも会ってこの日は大変に買い物客でごった返しており、和人一人の力だけで木綿季を見つけ出すのには困難を極めていた。事実、木綿季を探し始めてから30分ほど経過したがまだ一階の半分しか搜索出来ていなかった。人一人では限界というものがあつたのだ。

現在和人がいる一階フロアにはインフォメーションセンターがあり、迷子の案内などもここで受け付けてもらえるのだが、木綿季を見失い、焦るあまり冷静さを欠いていた和人にはその発想までたどり着かず、ただただ物理的に木綿季を探すだけであつた。やがて一向に進捗が見られない搜索に和人は大きく肩を落とし、店の床に膝をついて項垂れてしまっていた。売り場のど真ん中で項垂れているあまり、周囲の買い物客からの視線を集めてしまっていた和人であつたが、そんなことは今はどうでもよかつた。

今とはとにかく木綿季が心配だ、早く木綿季を見つけてやらないといけない。何かあつてからでは遅すぎる、しかしどうやって見つけたらいい、俺一人の力では無理だ。そう考えを詰まらせてしまった和人に

気になる視線を向ける人間が三人見受けられた。どうやら和人の知り合いのようだった。

一人は175cmほどの身長に赤いバンドナを巻き、燃えるようなデザインのライダーズジャケットに身を包んだ成人男性。次に身長160cmほどで首元まで伸びたショート茶髪にピンクのダウンジャケットを着込み、こげ茶色のジーパンを履いた女の子。そして最後に身長155cmほどでオレンジのデニムジャケットの下に薄ピンクのブラウスを着こなし、寒い季節に似つかわしくない真っ赤なミニスカートと真っ黒なニーソックスを履いた茶髪のツインテールの女の子だ。

周囲の買い物客の視線を集めてしまっていた和人に気付いたその三人は競歩ほどの早さで項垂れている和人に駆け寄り、声を掛けた。その人物とは和人にとって掛け替えのないSAO時代に生死を共にした仲間である、クラインこと壺井遼太郎、リズベットこと篠崎里香、シリカこと綾野佳子であった。三人はただごとではない和人のおかしな様子に心配そうな表情を見せていた。

「ようー。キリの字じゃねえか、奇遇だな！ お前さん何してんだ？
こんな場所でしょう」

「ク……クラインか……？」

「あたしたちもいるわよ？ キリト」

「ハイ！ お久しぶりです、キリトさん！」

「リズに……シリカか!? どうしてここにいるんだ……」

「どうしてって……そりゃ昨日から埼玉に旅行しに来てるからよ。
クラインの運転でね」

「……………」

何という神の気まぐれだろうか。かつての和人の仲間であるこの三人は、偶然にもこの週末から埼玉県に観光しに来ると言うのだ。女の子二人だけでは防犯も移動も何かと不安だろうということだけで独り身で基本暇なクラインを足兼ボデイガードとしてとっ捕まえて昨

日は秩父、今日は川越へと遊びに来ていたのだ。そしてこの百貨店のレストランで少し遅めの朝食を済まそうと立ち寄ったところ、たまたま一階で項垂れている和人を目撃、声を掛けたというわけだ。地元が川越の和人と偶然どこかで会えたらいいなあと思った矢先の事であった。

しかし和人にとってはこれはまたとない好機だった。一人で木綿季を探すのには限界がある。ならもう偶然居合わせたこの三人に助けを求めるしかない。クライン達を含めたこの四人でなら、木綿季を見つけれられる確率がぐつとあがる。全十階建ての大きい円広百貨店だが、必ず見つけられるはずだ。スマホでお互い随時連絡を取り合えるし搜索の範囲も効率も段違いだろう。和人は勢いよく立ち上がり、挨拶そつちのけでクラインの両肩を掴み、木綿季と一緒に探してくれるよう頼んだ。

「三人ともすまない……いきなりだけど手を貸してほしい!!」

「な、どうしたってんだ……キリの字……」

「そんなに慌てて……キリトラしくないじゃないのよ」

「何かあったんですか？ キリトさん」

遼太郎の肩を力強く握り過ぎてしまっていた和人は三人からの問いかけで少しだけ正気を取り戻すと、遼太郎の肩から手をどけて、一旦深呼吸をして心を落ち着かせ、今現在の状況を一から説明した。木綿季と一緒に買い物に来たがその木綿季とはぐれてしまったこと、木綿季が携帯電話も何も連絡手段を持っていないこと等、わかりやすいように丁寧な口で三人に説明した。和人から話を伺った遼太郎は、先ほどまでおちやらけていた表情を一変させ、真剣な顔つきになりもう一度念を押して和人に現在の状況を問いただした。

「キリの字、それで木綿季ちゃんが居なくなっただってのはどれぐらい前だ？」

「あ……えっと、確か30分ぐらい前だ……。多分、そのエスカレー

ターではぐれたんだと思う。俺は地下に、木綿季は恐らく上のフロアに……」

「……なるほど、インフォメーションセンターには行ったか？」

「え……う？」

「だから、インフォメーションセンターだよ！ よく迷子の受付とかやってんだろが！ そこには行ったかって聞いてるんだよ！」

「あ……いや、まだ行ってない……」

こういうデパートなどの大きい施設はよく親子連れが迷子に陥ることがある。その為にインフォメーションセンターは必ずと言っていいほど存在する。迷子の案内もそうだがクレーム対応、商品返品、その他お店に関わる相談事等様々な対応を一括で承っているサービスカウンターだ。和人はそのインフォメーションのことを焦るあまりにすっかり頭から抜け落ちてしまっていたが、遼太郎のおかげでその存在を思い出せていた。やはり普段ふわふわとした性格の遼太郎であったが曲がりなりにも社会に出て働いているだけのことはある。有事に面した時の判断力は大人さながらといった感じだった。

「ならお前さんはまずそこに行ってこい、んでもって木綿季ちゃんのことを伝えるんだ。連絡が取れない以上そうやってアナウンスか何かで誘導するしかないだろうしな」

「ならあたしたちはフロアを直接見回って探しましょ。キリト、木綿季の服装は？」

「えつと……、いつもつけてるヘアバンド、紫のデニムジャケットに、黒の短パンにニーソックスを履いてる。あとピンク色のウサギの形をしたイヤーマフを着けてるから目立つはずだ……」

「ヘアバンドに紫デニムに黒パンツとうさぎさんのイヤーマフですわ……？ わかりました！ 私とリスさんは二階から探します！ クラインさんは三階からお願いしていいですか？」

「あいよ、まかされたぜ！」

「よし、んじや一旦緊急用にLINEのグループを作るわよ、参加要請

飛ばすから入ってちょうだい」

里香はポケットからピンク色のスマホを取り出すとLINEアプリを起動して木綿季搜索連絡用のグループを作り、和人、遼太郎、珪子に参加要請を送信した。三人とも通知を確認すると承諾し、全員グループに参加が完了した。そして手筈通りに和人は一階のインフォメーションセンターへ、里香と桂子は二階フロアの婦人服売り場から搜索を始め、遼太郎は三階フロアのアクセサリー売り場から木綿季の搜索を始めた。

「みんなすまない！ 俺もインフォメーションセンターに寄ったらもう一回探してみる！ 頼んだ！」

「わかってらあ！ それぞれ何かわかったら随時LINEで連絡寄越せよ！ スマホはポケットから出しっぱなしにしとけ！ ただし他の客に迷惑はかけんなよ！」

「わかってるわよ！ それじゃあいくわよ！ シリカ！」

「はい！」

和人は表から入ってきた入口とは別の反対側にあるインフォメーションセンターに駆け足で辿り着き、受付のお姉さんに歩み寄り木綿季が館内で迷子になっていることを、息を切らしながら話して説明した。しかし肩で息をしている和人の言葉は途切れ途切れであり、ちゃんとお姉さんに伝わっていないかったようだ。受付のお姉さんは席から立ち上がり「お客様、一旦落ち着いてください」と優しい口調で和人に声を掛けてくれた。和人はそう言われ、はやる気持ちを抑えながら冷静に呼吸を整えて、お姉さんにここまでできた目的を伝えた。

「すみません……迷子を探してほしいんですが……」

「畏まりました、女の子ですか？ 男の子ですか？」

「女の子です……」

「女の子……つと、その子のご年齢と服装などの特徴はございますか？」

「えと……腰まで伸びた黒いロングの髪で、服装は紫のデニムジャケットに黒い短いパンツにニーソックスを履いてます。頭に赤いヘアバンドとピンクのウサギの形をしたイヤーマフを着けています。それで年齢は……16歳です」

「じゅ……16歳ですか……!?!」

受付のお姉さんは木綿季の年齢に驚いた表情を見せていた。通常迷子というのは右も左も表の世界がわからない幼稚園、よくて小学生低学年ぐらいまでがなるものだ。16歳と言えば普通は高校生でどう頑張っても迷子にはなりえない年齢だ。しかし木綿季の場合は普通とは違う。長い入院生活を経て俗世間から遠い場所で長年暮らし、学問からも離れていた影響で、あまり世の中の渡り方をまだよくわかっていなかったのだ。

今年に入ってから和人に頼りっぱなしということもあり、自己で判断する能力が低下してしまって、今回の迷子に繋がってしまった。しかし和人が思ったように携帯電話を持っていたり、考え事をせずにちゃんと見ていてあげていければ、しっかり防げていた事例でもあった。

「はい……、彼女は長い間病院で入院生活を送っていたんです。半年前やっと病気が治って先週漸く退院出来たんです。だから、もしも……もしも彼女の身に何かあったら……!?!」

「わっ、わかりました。手の空いている従業員全員でお探ししますのでどうか泣かないでくださいー!」

和人はお姉さんになだめられると、上着の長袖で流れた涙を拭い「すみません」とお姉さんに頭を下げた。和人は木綿季と付き合いだしてから、木綿季のことになるといつい感情的になり、周りが見え

なくなってしまうている傾向にあった。完全に木綿季に依存してしまっている証拠だ。今回も木綿季のことが心配しすぎるあまり、インフォメーションセンターの存在を忘れてたりがむしやりにフロアを探したりと、普段の和人からは想像も出来ないような醜態をさらしてしまっていた。

「いえ……、それではお客様の名前とお連れ様のお名前をお聞かせください」

「はい、俺は桐ヶ谷、桐ヶ谷和人です。彼女の名前は……木綿季、紺野……木綿季です。俺の大切な……家族です」

「畏まりました。従業員全員に通達いたしますので少々お待ちください」

お姉さんは苗字が違うのに家族だということを不思議に思いつつも和人に返事を返すと、頭に装着しているインカムのマイク部分を口に近付けて、マイクのスイッチをONにして館内全域の従業員に向けて業務連絡を始めた。

「お客様対応している以外の従業員に業務連絡です。次の条件に当てはまるお客様の館内捜索をお願いします。お名前……紺野木綿季様、外見的特徴……黒のロングの髪の毛、赤のヘアバンドにピンクのウサギのイヤーマフ。紫色のデニムジャケットに黒いパンツにニーソックスとなっておりませう。お連れ様のお名前は桐ヶ谷和人様。発見次第大至急インフォメーションセンターへ連絡、並びに誘導をお願いします」

お姉さんは業務連絡を済ませるとマイクのスイッチをOFFにして、和人を安心させるように笑顔を振るまいながら優しく「大丈夫です、すぐに見つかりますから」と語り掛けた。その一言を聞いた和人には漸く安心といった気持ちが生まれてきたが、同時に他人に任せっぱなしにははいられない、恋人である俺がただ待っているだけなん

て出来ないと先ほどの情けない表情を一変させ、頼れる男の顔つきになり受付のお姉さんに自分も木綿季を探しに行くことを伝えた。

「すみませんお姉さん、俺も……探してきます」

「畏まりました。お連れ様が見つかりましたら館内アナウンスでご案内しますので、聞こえましたらばまたここにお戻りくださいませ」

「……わかりました」

和人はそう言うのとポケットからスマホを取り出し、LINEで全員に現在の状況の確認を取った。

「センターに搜索をお願いしてきた。そつちはどうだ？」

「おう、三階から調べているがまだ見つかってねえ」

「今リズさんと二階を探し終わりましたけどここにはいないみたいですよ。四階を探してみます」

「……まだ木綿季は見つからないか……、なら俺は……」

「わかった、俺は五階からクラインと合流するように探してみる」

和人は自分の搜索範囲を皆に送信すると、通知がわかるように右手にスマホを握ったまま、丁度和人のいるフロアに降りてきたエレベーターに乗り込み、リビングやキッチン用品が置いてある家具売り場の五階のボタンを押し、エレベーターの到達を待った。かつてこれほど落ち着かない気持ちでエレベーターに乗り込んだことがかつてあっただろうか、いや……ない。和人の乗り込んだエレベーターの扉がゆっくりと閉まり、ゆっくりと上昇を続けていった。その間も和人は気持ちを落ち着かせることが出来ず、木綿季の無事をただただ祈るばかりであった。

(頼む木綿季……無事でいてくれ……!)

同日 午前10:50 円広百貨店 七階屋上 わんぱく広場

和人達が百貨店館内で必死に木綿季を捜索している中、肝心の行方不明になつている木綿季は、一人でデパートの七階の屋上部分のベンチに座り、空を見上げて佇んでいた。屋上の遊園地では木綿季より小さい子供たちが親同伴のもと楽しく観覧車やゴーカート、コーヒーカップ等で遊んでいる様子が見受けられた。その光景を見て、木綿季も昔小さい頃に両親と姉と一緒に遊園地に連れて行つてもらつたことを思い出していた。よく姉ちゃんとメリーゴーランドで遊んだなあ……、よく二人そろつて迷子になつてパパとママにめいっばい怒られたつけ……懐かしいなあ……。

「……ボク、大きくなつても昔とちつとも変わつてないんだな……」

木綿季もあれから和人を探してあちらこちらのフロアをうろろしていたのだが、一向にその姿が見つからずに、下手に動くよりはどこか一カ所でじつとしていた方がいいだろうと判断し、子供がよく立ち寄るこのわんぱくランドへと足を運んでいた。ここは子連れ客が多いためにそれに比例して迷子の確率も高い場所だ。また、この存在を知っている子供が親元を離れて勝手にここに来てしまうこともあつた為、あながち木綿季の選択は間違つていなかったのである。

しかし最初に下手に動いてしまったことが災いして、うまい具合にここまで木綿季を探しに来た従業員とすれ違いにあつてしまつていた。木綿季は和人が自分を探しに来てくれるのを待った。どれだけの時間が経過しても和人なら自分を探し出しに来てくれると信じて、ベンチから頑なに動こうとしなかった。しかし最初のうちはじつと我慢出来た木綿季であつたが、時間が経つにつれて寂しさが増していき、視線の先の親子が遊園地で楽しく遊んでいる光景を見ると、心が空っぽになつていく感覚を覚えてしまつていた。

考えてみれば現実世界に戻つてからはずつと隣に和人がいた。い

つも傍で支えてくれていた、だからつい甘えてしまっていた。そして気が付いたらボクは和人なしじゃ何も出来ない人間になっていた。いくら病気で今まで何も出来ていなかったとは言え、ボクはただ単に和人に甘えていただけなのではないか、いや……依存してしまっているだけなのではないか。木綿季はそんな考えを巡らせていた。しかしそれを自覚したからといって、心に生まれた寂しさが紛れるはずもなかった。逆に和人のことを考えれば考えるほどに心の穴は広がっていき、木綿季自身を苦しめる要因となっていた。

どうしてだろう、HIVが治って五体満足な体を取り戻したというのに、どうしてまた胸が苦しくなる思いをしなければならぬのだろう。神様はまだボクに試練をお与えになるつもりなのだろうか、ボクはあとどれだけつらい経験をすればいいんだろう……。もうわからないよ……。どうやって生きていけばいいかわからないよ……。ボクはどうしたらいいの……。？ 和人……。教えてよ……。ボクを……。ボクを助けてよ……。和人……！

(助けて……。かずと……)

同日午前11:25 円広百貨店 一階インフォメーションセンター前

和人を含む四人の木綿季捜索隊は一階から七階へ渡るフロアの探索を終え、一度状況を整理するために再び一階へと戻ってきていた。百貨店側が手配してくれた従業員のほとんどが平日より多い他の客の相手に人手を割かれていることもあり、中々に進捗が見られなかった。合流を果たした四人はこれからどうするかを話し合っていた。

「参ったぜ……。これだけの人数で探して見つからないなんて……」

「ねえ、もしかしたら店の外に出てしまったってことは考えられないかしら……」

「えっ……」

里香がそのことを口走ると和人の表情が凍り付いた。もし里香の言うことが本当だった場合、本当にマズいことになる。それこそ建物の外に出られでもしたらアウトだ。たった四人でどうこう出来る範囲ではなくなるし警察に通報しなければならぬ事案となりえる。一人でうろついていれば何かしらの事件に巻き込まれてしまう可能性だって高くなる。崖っぷちに立たされた和人は体を震わせて、本当に最悪の状況を脳裏に描いてしまっていた。

「外に出ちまったらそれこそアウトじゃないか……。どうしようもなくなつちまう……。ゆ、木綿季は俺がついててやらないとダメなんだ。俺がずっと傍にいてやらないとダメなんだよ！ さ……。探しに行つてやらないと……」

「お、おい……。落ち着けキリの字！ お前が取り乱したつてどうにもならないだろうがよ！」

「落ち着いてなんかいられるか！ 木綿季は先週退院したばかりなんだ！ 俺が守つてやらないとダメなんだよ！ 第一お前に何がわかるんだ！ 木綿季は……。木綿季はな……。！」

その時だった。木綿季のことを考えるあまりに興奮し取り乱した和人を、見るに堪えなくなった里香が目を覚まさせるために和人の左頬を右手で思いつきリビンを放っていた。頬をはたかれた和人は突然の衝撃に一瞬何が起きたか理解できずに、痛みが走った自分の頬を左手で押さえてぼーっと放心していた。里香の突然の行動に遼太郎と瑠子は呆気に取られ、ただその光景を見つめていた。

「目を覚ましなさい、キリト」

「リ、リズ……」

「アンタが取り乱して何になるつてのよ。……。木綿季の恋人なんですよ？ だったら……。一番胸を張つてしっかりしてなさいよ!!」

「……………」

「キリトさん……………」

里香にはたかれたことよって、ようやく自分が冷静でなかったことを知った和人は叩かれた頬を手で押さえて、物思いにふけっていた。そういえば前にも木綿季にALOで思いつきりビンタをされたことがあったけな。あの時は仮想世界だったから痛みはなかったけど、今回は現実世界で叩かれたからかしっかりと痛いや、ははは……………」

和人は自分が追い詰められたときには、周りの仲間がちゃんと支えてくれることをすっかり忘れていた。明日奈と別れて不貞腐れているときは木綿季が、そして木綿季の病気を治そうとしたときには周りの仲間が力を貸してくれた。今回も行方不明になった木綿季を探し出すために、そして和人自身をも助けようと里香たちが力を貸してくれていた。

「……………すまない、少し……………取り乱した……………」

「……………ううん、あたしも叩いたりしてごめんなさい……………」

里香は叩いてしまったことを謝ると、ずっと和人の肩に手を回して体重を預け「元気出さないよ!」と先ほどまでの気まづくなっていた空気が嘘のように明るく振舞っていた。その気さくな性格の里香の声掛けもあつてか、和人にも自然と笑顔が戻っていた。その和人の笑顔に釣られるように、遼太郎と瑠子の顔にも、思わず笑顔がこぼれていた。

「しっかしよう……………もう大体探し尽したはずだぜ……………。木綿季ちゃん……………いってえどこへ消えちまったってんだ……………」

「……………わからない、まだひよつとしたら探していない場所があるのかもしれない……………」

「あ……………! そういえば私、ここに最初に入ったときに入口でこんなものもらいました!」

珪子は両手をパンツと自分の胸の前で一本締めのように叩くと、自分の鞆から何やらパンフレットのようなものを取り出して、皆に見えるように広げてみせた。どうやらこの円広百貨店の案内図のようだった。フロアガイドの欄を指さしながら、どこか探し漏れがないかどうか考えていた。地下一階と地上一階は和人が搜索済み。二、四階は里香と珪子が探し終わっている。三階は遼太郎が一人で、七、六、五階は遼太郎と和人が既に見て回っている。八階から十階にわたるフロアは宴会場となっており予約した団体客しか使えないようになっており、木綿季が立ち入れるはずはない。

そしてこの百貨店から外に出てしまっているというのも考えづらい。自分が迷子と自覚しておきながらわざわざ建物の外に出るなんて考えられないし、例え出ていたとしてもインフォメーションセンターのお姉さんが目撃しているはずだ。よって退店の可能性はゼロも同然だ。となると残された答えはまだこの百貨店内のどこかにいる可能性が非常に高い。つまり、どこかですれ違ったかまだ探していない場所があることを意味していた。

「きつとまだ探していない場所があるんだ、するとどこだ……」

和人は珪子からパンフレットを見せてもらうと、各フロアで売っているもののガイドを眺めていた。地下一階は食料品、地上一階は化粧品などのレディース雑貨、二階は婦人服、三階は宝石や時計などのアクセサリー類。四階はメンズ系の紳士服やスポーツ用品。五階は家具売り場。六階は子供用品や玩具、そしてファミレス。七階はペット用品と屋上遊園地のわんぱく広場。それから上の階層は全て団体客専用の宴会場となっている。この中で木綿季が立ち寄りそうなどころといったら……。

「うん？ わんぱく広場……、わんぱく広場だと……？」

「わんぱく広場って……七階の屋上遊園地のことだろ？ そこなら従

業員が調べたぜ？ でも木綿季ちゃんはいなかったみたいだぞ？」
「……………」

和人はパンフレットに書かれた「わんぱく広場」の文字を見ると、何故かそこに木綿季がいるような気がしていた。自分がまだ幼い頃、おぼろげだが覚えていた。今の両親に引き取られた後、初めてここに連れてきてもらった時だ。妹の直葉と一緒に迷子になり、誘い込まれるようにこのわんぱく広場へと足を踏み込んだ時のことを……。その後、両親からこつぴどく叱られたことも覚えていた。

「わんぱく広場だ……………」

「……………」

「木綿季はここにいる！ 七階のわんぱく広場に……………絶対に行ってる！」

「で、でもキリの字……………そこは従業員が調べたってさつき……………」

「そんなのただのすれ違いかもしれないだろ!? とにかく行ってみよう！ 俺はそこに……………木綿季がいる気がするんだ！」

和人はそう言い放つとパンフレットを瑛子に返し、我先にと近くのエレベーターに駆け寄り、上行きのボタンを強く押し込んだ。ボタンはランプを灯し、オレンジ色に光ると和人たちのいるフロアより上にあるエレベーターが、下へ下へと移動してきた。和人がエレベーターの到着を待っている間に里香たちも和人に追いつき、四人で屋上のわんぱく広場へとエレベーターの扉の前で仁王立ちをするように待ち構えていた。

「キリの字よう、お前さんが言うなら黙ってついてくけどよ……………何でまた調べたはずの遊園地に木綿季ちゃんがいるって思ったんだ？」

遼太郎は真っ赤なジャケットのポケットに両手をつっ込みながら和人の考えが解せない様子を見せ、エレベーターの階層ランプの点灯

を目で追っていた。七階から動き始めた階層ランプは六階、五階へと
少しずつ和人達のいる一階へと近づいていった。

「いや……実際根拠はないんだ。ただ……俺も昔、ここでスグと一緒に
迷子になったことがあったんだよ。その時……ふらつと七階のわ
んぱく広場に迷い込んだんだ。だからか……な」

「なるほどね、自分と同じところに木綿季も行ってるかもしれないっ
て思ったわけか……」

「あ、でもそれ……わかる気がします。私もよく遊園地とか動物園で
迷子になったことがあります。それでお父さんやお母さんにもものす
ごく叱られました!」

珪子が両手を背中に回し、首をかしげて可愛らしいツインテールを
揺らして微笑ましそうに自分の迷子談を語ると、緊張感に包まれてい
た場の雰囲気や和み、捜索隊一行の肩に入っていた無駄な力も抜けて
いった。それから程なくしてエレベーターが一階フロアに降りてく
ると、ゆつくりと扉が開き、中にいた買い物がエレベーターから外
に出るのを見守り、入れ替わるように和人ら四人は一斉にエレベ
ーターに乗り込んで、七階のボタンを押して扉が閉じるのを待った。

エレベーターが一階から七階へ移動してる間、しばし無言の空気が
流れ続けた。どうもエレベーターの中というのは不思議でどんなに
おしゃべりな間柄の友達同士でも、この狭い閉鎖空間にいる間は口を
閉じてしまうのだ。そんな経験ないだろうか？ 明るい性格の遼太
郎や里香や珪子も例外なく、この狭い箱の中にいる間は無言で階層ラ
ンプの移動を見守り続けているばかりであった。そんな無言の空気
が流れ続け、一行が乗っているエレベーターは着々と階層を登り続
け、一分ほどの時間を掛けて、木綿季がいると踏んでいた七階、わん
ぱく広場がある階層に辿り着いた。

ガコンという音と共に金属でできたエレベーターの何重にもなっ
ている扉が重々しくゆつくりと開くと、目の前にペット用品売り場が
広がっていた。どうやらペット用品だけでなく、生体も扱っているよ

うで、フロアのいたるところからワンワン、ニャーニャーといった動物たちの鳴き声が元気に聞こえてきた。ペット用品売り場を早足で通り抜けていくとその奥に古いものから新しいものまでのゲーム機筐体が彩り豊かに並んでおり、四方八方から小うるさいゲームの音が鳴り響いていた。その光景は見ているだけで楽しい雰囲気伝わってきた。

和人はこの遊戯コーナーの空気を懐かしく思いつつも、木綿季を探すためにゲーム機筐体の横を通り過ぎ、屋上へと続くガラス扉の前に足を運んでいた。そこから見える外の様子はゲーム機がある遊戯コーナーとはまた別の楽しさを醸しだしていた。和人がガラス扉を開けて屋上に足を踏み入れると、子供たちがコーヒーカップやメリーゴーランド、ゴーカート、観覧車等で遊んでいる光景が飛び込んだ。見渡す限りどこもかしこも楽しそうであちらこちらから笑顔と笑い声が飛び交っていた。

和人はよく自分も昔ここで直葉と遊んだなと思いつつも、ここにきた目的を忘れぬように、遊具の影等に目をやり、木綿季がいないか探していた。そして屋上の入り口から一番離れた観覧車の、さらに奥の方にある自動販売機とベンチが置かれている方向に目をやると、その端っこの、さらに一番隅の位置にある白いベンチに、自分の愛する女の子が小さくなって座っている姿が飛び込んできた。

「——ッ!!」

木綿季だ、見間違はずがない。あの髪型、あのヘアバンド、あの顔、あの服装、そして俺がプレゼントした……アメジストのペンダント……!!

和人は駆け出していた。考えるよりも早く、本能で頭より脚の方が先に動き出していた。早く木綿季の元に行きたい、行ってあの細い体をめいっぱい抱き締めて、木綿季を感じたい。木綿季……木綿季

……ッ! 木綿季——ッ!!

「木綿季ッ!!」

「——ッ!!」

和人は精一杯腹の底から木綿季の名前を叫び、愛する彼女のもとへと走り続けた。和人の大きな叫び声に周囲にいる子連れ客は驚いていたが、和人はそんなもの気にも留めずに、無我夢中で木綿季のもとへと急いでいた。自分の名前を呼ばれた木綿季はずっと会いたかった大好きな和人の姿を目に映すと、心の底からどうしていいかわからない感情が一斉にこみ上げてきて、顔をゆがめていた。

かずと……かずとだ、ボクのお好きなかずとだ……。ああ、かずと……ずつと、ずつと会いたかった。ずつと君の声を聞きたかった……。ずつと……。ずつと傍にいてほしかった!

木綿季はずつと立ち上がり、ゆっくりとした足取りで、涙を流しながら走ってくる和人に向かって歩き出していた。和人も全速力で木綿季に駆け寄っていき、そして次第にお互い距離を詰め、やがて密着すると互いを力の限り抱き締めあった。はぐれたのはつい先ほどのことだったが、もう何年もの間会っていなかったのような感覚だった。

「か、ずと……ッ!」

「木綿……季ッ!!」

「かずと……! かずと……ッ!」

「木綿季……! 木綿季……ッ!」

「会いたかった……、会いたかったよ……、かずと……」

「俺もだ……。もう絶対お前を離さない。離すもんか……!」

第56話く桐ヶ谷親子く

「木綿季……！ 木綿季！ もう絶対に離さない……！」

「かずと……かずと……！ ボク……寂しかった……怖かったよお……」

「ごめんな、俺がすっかりしてないばかりに……木綿季につらい思いをさせちまったよな……」

「ううん、ボクも……和人にすつごく迷惑かけちゃった……ホントにごめんなさい……」

「迷惑だなんて……もういいんだ。木綿季が無事ならそれでいいんだよ……」

「かず……と……」

「木綿季……」

和人と木綿季は一層抱く手に力を込め、お互いを近くに感じあっていた。今まで抱き合ったどの時よりも、手に力を込めて愛する人を離さなかった。和人が大声で叫んで走ってそのまま木綿季を抱き締めにいったので、近くにいた子連れ客がなんだなんだと和人達を凝視していた。

十数秒ほど遅れて里香達も和人に追い付き、和人が木綿季を抱き締めている光景が視界に飛び込んでくると、安堵感にも似た深い息を吐き出しながら腰に手を当てて、やれやれといった表情でほっこりしながら事の成り行きを見守っていた。

「……どうやら、解決したみたいね……」

「そうみたいですわね……よかったです……」

「しっかしそいつはいいけどよう、見せつけてくれるぜ全く……」

木綿季が無事に見つかるのと、安堵感もさながら同時にあの二人の關係が羨ましいと思ひ始めた三人であった。中でも二十代後半に差し

掛かっているのにもかかわらず、未だに彼女がいらない遼太郎はあからさまに肩を落として大きな溜め息を吐き出していた。

「はあ……キリの字が羨ましいぜ……。あんなに可愛い彼女がいてよ。ただでさえあいつ女の子にモテるつつーのによ……」

「まあまあ、キリトだからしょうがないわよ。それに木綿季とは共に大変な道を歩んできたんですもの。あの二人の絆はちよつとやそつとじゃビクともしないわよ」

「大丈夫ですよ！ クラインさんにも素敵の人が現れますつて！
だって……クラインさんいい人ですから！」

「ありがとよシリカちゃん。それじゃあ俺様と付き合ってくれるか？」

「えつと……それはごめんなさい……」

瑠子が遼太郎からの誘いを光の速さで首を横に降ると、真横でそのやりとりを見ていた里香が腹を抱えて笑い転げていた。この二人が仮に付き合うとしたら何やら犯罪臭がプンプン漂いそうなので、むしろ断った方が互いの為だったのかもしれない。

「安心しなさい、アンタがシリカと付き合いおうもんならあたしが警察に通報しといてあげるから」

「なっ、うう……辛辣だぜ……」

「ごめんなさいクラインさん……」

「畜生……、来年こそ絶対に彼女作つてやるからなあ！」

二十代後半に差し掛かりつつも来年こそ彼女を作ると意気込んでいるクラインであつたが、確かにそろそろ真剣に交際を始めなくてはマズイ年齢だ。何故ならクラインと同じぐらいの歳で既に結婚し、子供もいる人も決して少なくはないからだ。結婚期やモテ期は人それぞれであるが、クラインに一向にその気配がないことから、もうここまできたら手遅れなのではないかとも思わせてしまう。しかし本人

がひたすらポジティブなのでまあきつとなんとかなるだろう。

「でもあたし達も欲しいわよね……一生のパートナー……」
「……そうですよね……」

基本的に自分の周りが女の子しかいない和人と共通の女友達とばかりつるんでいる所為で、中々男の子との出会いがない珪子と里香はお互いに視線を合わせると、大きな溜め息を吐いていた。里香はその視線をやたらと来年の野望に暑苦しい炎を燃え上がらせているクラインに移すと「コイツだけは無いわね……」という思いを胸に抱き、更に項垂れてもつと深い溜め息を吐いていた。

「あたし達にも来ないかしらね……春……」
「そう……ですねえ……ははは……」

長年異性と交際経験がない三人がそれぞれ色々な想いを胸に抱いている一方で、和人と木綿季は漸く抱擁を解いていた。二人の顔は涙の跡が残っており、顔中を真っ赤に染めていた。しかし、お互いを見つめる眼差しは非常に温かいものであった。

「木綿季、リズ達も一緒にお前を探してくれてたんだぞ」
「……そうだったんだ……皆に心配かけちゃったんだね……」
「皆にお礼、言わないとな」
「う、うん……」

和人が里香達のいる方に目をやると、それに続くように木綿季も視線を向けた。そこには誇らしげな表情をしながら勝利のVサインを木綿季達に向けている里香、珪子、遼太郎の姿があった。その光景を見た木綿季はたまらず嬉しくなり、思わず満面の笑みが溢れ出し、同じようにVサインを見せていた。

Vサインが終わると、木綿季は和人より先に里香達に向かってとこ

とこ歩み寄り、残り1メートルほどの距離まで近寄ると畏まったような表情をしながら丁寧に里香達に頭を下げた。和人も木綿季に続き頭を下げ、感謝の気持ちを表した。

「リズ……シリカ……、それにクラインさん。心配掛けて……本当にごめんなさい……」

「え、あ……頭あげてちょうだいよ！ 二人共っ」

「そ、そうですよ！ 木綿季さんが無事で何よりなんですから！」

「そうだぜ？ 俺たちはダチなんだからよ、助け合うのは当たり前だ」
「……お前ら……」

和人は再び仲間のありがたさを感じていた。こんなに迷惑かけたのに、こんなに掻き回したのにもかかわらず、気にするな、助け合うのは当たり前だ、そんな事をさも当然のように言ってくれる仲間達に頭が上がらなかった。さんざ木綿季と抱き合い泣いた後だというのに、また胸の奥から込み上げてくるものを感じていた。

「サンキュな、本当に……」

「ボクからも……ありがとうございます……」

またもや頭を下げてしまっている二人の態度に、里香達はしようがないなと苦笑いを浮かべていた。皆がいる場合は、迷子になっていた木綿季が何事もなく無事に見つかったこともあり、すっかり緊張感がなくなり漸く一息つけるといった雰囲気となっていた。全員がなんとも言えない表情で話しづらそうにしていると、突然「ぐくぐ」とお腹の虫の音が鳴り響いた。遊園地の施設の騒音越しても全員がバツチリと聞いてしまった。

「……………」

「……………今の誰だ？」

「ボ、ボクじゃないよ!？」

「俺様でもないぞ?」

「あたしでもないわよ!」

「……わ、私です……」

音の主の正体は珪子であった。珪子を含む里香、遼太郎の三人は今朝方8時に秩父の宿場を朝飯抜きでチエックアウト、そしてそのまま川越までノンストップで来たおかげで、すっかり胃袋が空っぽになってしまっていたのだ。腹の虫を鳴らした珪子は顔を真っ赤に染め上げて恥ずかしそうに俯いてしまっていた。その様子を里香と木綿季はクスクスと楽しそうに笑っていた。

「そういえばあたし達、朝食まだ食べてなかったのよね……」

「そういやここに来たのも飯食う為だっもんなあ」

木綿季の搜索ですっかり忘れ去られていたが、珪子の腹の虫に釣られるように自分のお腹をさすっていた里香と遼太郎は自分達が空腹であることと、この百貨店に来た本来の目的を思い出していた。気が付くと時刻は昼近くに差し掛かり、時計の針は11時過ぎを指していた。朝食をとるにしても中途半端なタイミングだ。

「あら、もうこんな時間よ。これじゃあ朝飯じゃなくてお昼ご飯になっちやうわよ」

「あ……っ、ごめんねみんな……ボクの所為で……」

「だから気にすんなって木綿季ちゃんよう、むしろ朝昼兼用って考えれば一食分食費が浮くってモンよ!」

「で、でも……」

「……………」

和人は顎に手を当てて何やら考え込み、しばらくすると何を思い立ったのか徐にスマホを取り出して何処かへと電話をかけた。始めた。一体何処へ電話をかけてるんだろうと思っっている木綿季達を尻目に

和人は「俺にまかせろ」と言いたげに自信に満ち溢れた表情でスピーカーに耳を当てていた。何回かプルルというコール音が鳴り続け、やがてガチャツという受話器を取る音が聞こえたとすぐに和人に馴染みのある声がスピーカーから聞こえてきた。

『はい、桐ヶ谷です』

「あ、スグか？ 俺だ」

『あれ、お兄ちゃん……どうしたの？ お買い物は？』

「ああ、そのことなんだが……母さんに代わってもらっていいか？」

『あ……うん、ちよつと待ってね？ ……おかしーん！ おにーちゃんからでんわー！』

電話越しに直葉が母親の翠を呼ぶ声が聞こえると、何やら慌ただしそうな足音が段々と大きくなって聞こえてきた。やがて足音が止まると今度も和人に馴染みのある優しい声が聞こえてきた。

『もしもし和人？ ……一体どうしたの？ お買い物は終わったの？』

「あ、母さんごめん……そのことなんだけど、父さんはまだ帰ってきてない？」

『あの人ならさつき渋滞に巻き込まれてるって連絡があったわ。夕方予定だったのが夜になりそうだって。……でもそれがどうかしたの？』

「えつと、実は……」

和人は翠に今日、先ほど百貨店で起こったことを事細かに口で説明した。木綿季が中で迷子になってしまったこと、その場に友達が偶然居合わせて手を貸してくれたこと、そして肝心の買い物はまだ終わっていないことまで、隅々まで事細かに言いつて聞かせていた。

『……和人、木綿季は無事なの？』

「え？ あ、ああ……無事だよ。擦り傷一つ負ってないよ」

『……貴方に言ったわよね？ 木綿季のこと見てあげてつて』

「え……あ……うん、ごめん……」

『それと悪いんだけど、ちよつと木綿季と代わってくれないかしら』

穏和な口調で話している翠の声色が普段と変わっていた。明らかにいつものふわふわした翠の雰囲気ではなくなっていた。そのただならぬ空気の違いに、和人は一瞬呆気に取りられて、木綿季へ電話を代わったのだった。間違いなく翠は怒っていた。

「えつ、あ……わ、わかった。……ほら木綿季、母さんが電話代われだつて」

「え、ボク？ ……わ、わかった！ ……えつと、もしもし……お母さん……？」

『もしもし木綿季？ 迷子になつたつて聞いたけど大丈夫？ 何処も怪我したりしてない？』

「……うん！ 大丈夫だよ！ ちよつと心細かったけど、和人がちやんと見つけてくれたから……」

最初に木綿季が迷子になつたと聞かされた時には肝が冷える思いに見舞われたが、木綿季の元気一杯な声が聞こえた瞬間に、翠はほつと胸を撫で下ろしていた。しかし安心してばかりではダメだ、親としての役割を果たさなくてはいけない。心配をかけさせた娘をちやんと叱らなくてはいけない。翠はあくまでも一人の母親として、木綿季の母親として娘を叱るため、静かに口を開き始めた。

『……それならよかつたわ。……あのね木綿季、お願いだからあんまりお母さんに心配かけないでちょうだい。貴方にもしものことがあつたら、母さんは一体どうしたらいいの？』

「あ、う……はい……ごめんなさいお母さん、心配かけちゃつて……」
『何回も言うけど木綿季はもう桐ヶ谷家の……私達の家族なの。あん

まり心配かけられたら……お母さん心配し過ぎてどうにかなってしまいそうよ……。自分の周りの人達の気持ちも少しは考えなさい』

和人のスマホのスピーカーの向こうからは、本気で木綿季のことを心配する翠の様子が伺えた。怒ってはいるのだが、気のせいでなければ少しだけ泣いているような話し声にも聞こえなくなかった。木綿季に何もなくてよかった、無事でホッとした。そんな様子も感じられた。

木綿季は電話越しにひたすら翠に心配かけてごめんなさいと謝っていた。木綿季にとっては翠から初めて娘として怒られた瞬間だった。キツめの言い方をする翠の話し方は木綿季にとっては正直少し怖かったが、同時にこんな自分をちゃんと叱ってくれる親がいるということのありがたさも感じ取っていた。

お母さん……本気でボクのこと心配してくれてるんだ。嬉しいな……。誰かに本気で怒られたことなんて、和人以外いなかったからなんか嬉しい。パパとママ、姉ちゃんにも思いつきり叱られたことがあったな……。あの時も怖かったけど、ボクのことを心から想っていたから叱ってくれてたんだよね、この歳になって漸く気が付いた……。ボクって親不孝者だったんだな、ごめんね、パパ、ママ、姉ちゃん……。

『……木綿季、聞いているの?』

「え、あ……はい……ご、ごめんなさいお母さん……」

『……とにかく木綿季が無事でよかったわ……もう心配かけないでね……?』

「はい……気を付けます……」

『よろしい、……それじゃあ和人と代わってもらえるかしら?』

「あ……うん!」

木綿季は翠に返事を返すと笑顔になりながらも悲しそうに涙を流して、和人にスマホを手渡した。近年の若い子供からすれば、親から

叱ってもらえることのありがたさをわかっている時点で、木綿季は大変に立派な子供だと言えるだろう。自分を心配してくれてる人の気持ちはちゃんと汲み取っているのだから、決して親不孝ものではない筈だ。和人はそんな複雑な表情を作っている木綿季の様子が気になりながらも手渡されたスマホを首を傾げながら自分の耳に当てた。

「もしもし、代わったよ」

『……和人、木綿季は……大丈夫かしら?』

「へ?」

『ちよつとだけきつめに言いつけてしまったから……その、シユンとしたりしてないかしら……』

「……大丈夫だよ、ちよつと泣いてるけど笑顔だよ。多分母さんに叱ってもらったのが嬉しかったんじゃないか?」

『え、私に……?』

「ああ、木綿季の本当の家族は……もう皆亡くなってるから、木綿季をちゃんと叱れる人なんてもう随分と長い間いなかったんだと思う。だからじゃないかな」

和人が電話越しにフオローを入れると、翠は何やら考え込んでしまった。自分にとって血の繋がった子供は長女の直葉だけだ。けど義理の息子の和人にだって同じぐらいの愛情を注いできたつもりだ。しかしもしかしてそれは自分が勝手にそうやってきたつもりで、単なる思い込みだったのではないかという考えも頭をよぎっていた。

『……ねえ和人、私は……あの子のお母さんになれるかしら……』

「なれるさ。だって……この俺のことだってここまで育ててくれたじゃないか……」

『和人……』

和人は翠なら立派な木綿季の母親になれると迷わず言い切った。木綿季と同じく養子として桐ヶ谷家の一員となった自分を立派に育

て上げてくれた翠の頑張りを、一番間近で見えてきたからだ。血の繋がりのない子供を、実の子供と同じように愛情を注ぐというのは並大抵のことではない。心のどこかで他人意識などをどうしてもしてしまふものだ。

しかしそれでも翠はたくましく和人を育て上げた。好きな女の子を守るぐらいの男にまで育て上げてたのだ。和人は自分の気持ちを伝えるなら今しかないと思い、少しだけ恥ずかしいと思いつつも、長年ずっと伝えたかった胸の内に秘めていた想いを翠に届けるべく、ゆっくりと口を開き、語り出した。

「……………あのな、あのな母さん……………普段中々言えなかったけど……………、俺を引き取ってここまで育ててくれて、ホントに……………ホントにありがとう。心から……………感謝してる」

『え……………?』

「悪いことしたらちゃんと叱ってくれたし、俺がSAOに囚われてた時だって、見捨てずに待っていてくれた。何にもしないでただ眠っているだけの俺のことを、ずっと待っていてくれた……………」

『……………』

「木綿季のことともそうだ。骨髄移植だって母さんが調べてくれなかったら絶対に気付けなかったし、受け入れ先のないあいつを養子にも迎え入れてくれた。みんな母さんのおかげなんだ。母さんは俺たちの命の恩人なんだよ。本当に感謝してもしきれない」

『……………』

「本当にありがとう母さん、俺、絶対に……………絶対に親孝行するから……………！」

『……………ッ』

翠は電話の向こう側で泣き崩れてしまっていた。床に膝をつき、片手で口元を押さえ、涙をポロポロ流し、言葉を殺して泣いていた。かつて和人に自分と距離を置かれてしまった時期もあった。桐ヶ谷家

の人間に対してよそよそしい態度をとっていた時期もあった。ずっと苗字が同じだけの他人なのかと思つてた。

だが和人はそんな薄情な人間ではなかった。しっかりと翠から、峰から親としての愛を受け取っていたのだ。そんな和人が自分に対して感謝の気持ちを抱いてくれていた。親孝行をすると言つてくれた。翠はそれだけで満足だった。三人の子の親として心からの幸せを感じていた。

「……母さん……？」

『……ッ、大丈夫、聞いてるわ……』

「……ああ……」

『あのね和人、後からでいいのよ……。まずは貴方たちが幸せになりなさい。私達への親孝行は……それからでも遅くはないんですから……』

「……母さん……」

『貴方たちが幸せに育ってくれば、それが母さんの幸せだから……。母さんだって貴方たちからたくさん幸せをもらってるんですからね……』

「……そんなこと……」

和人の目にもうっすらと涙が浮かんでいた。正直言つてまだまだ翠への感謝の気持ちは伝え切れないほどある。だがこれ以上言ってしまうと、また感情が爆発して顔が涙でくしゃくしゃになってしまう。そうだったので、和人は敢えて胸の内に留めておいた。これからはゆっくりと伝えていこう、そして親孝行していこう、そう思っていた。それから程なくして、翠も和人も高ぶった感情が少しずつ収まり、落ち着きを取り戻していた。確かに直接の血のつながりはないかもしれないが翠と和人、そして木綿季も、紛れもない本当の意味での親子なのだった。

『和人、木綿季を探すのに手伝ってもらったお友達に、ちゃんとお礼を

しなさい。お父さん遅くなるって言ってたから少しぐらいお買い物
が遅れても大丈夫よ。お昼時だし……お金は後で母さんが支払うか
ら どこかでご飯でもご馳走してあげなさい』

「いいよ、元々何かお礼しようと思ってたし。そのためにちよつと買
い物遅れるっていう電話をしようとしてたんだから」

『あらそう？ それならいいんだけど……』

「ああ、だけどもあー15時ぐらいまでには必ず帰るよ。仕込みとかも
あるしな」

『そうね……そうしてちょうだい』

「んじやあ……そろそろ電話切るよ」

『わかったわ。あ……それと和人……』

「……何だい？」

『……ありがとね、母さん元気出たわ……』

「……ああ、んじやあ……また後で……」

『ええ……また……』

和人は翠との通話を終わると、通話終了の赤いアイコンをタップし
て、スマホをポケットに仕舞い込んだ。直接ではなく電話越しでは
あったが、漸く翠に息子として感謝の気持ち伝えられたことに、安
堵感に似たものを得ていた。心の中のどこかにひっかかっていたも
のが取れたような気もした。

「……終わった？ キリト」

何となく空気を察して距離を置いていた里香が和人達に近付き、
そつと声を掛けた。遼太郎が家族だけで話があるんだろうと、気を
遣って瑛子と里香を連れて少しだけ離れた位置で待機していたのだ。
この対応力の良さはやはり大人さながらである。ここまで気遣いが
出来てモテないのが本当に不思議でならない。里香に続いて遼太郎
と瑛子もひよこつと姿を現した。

「ああごめんな、終わったよ」

「……そうか、さつきよりいい顔してるぜ？ キリの字よう」

「そういうお前はいつ見ても野武士面だな」

「けーっ！ なんだよおめーさんはよう！ 折角俺様が良いこと言っただつっーのにまったく……。そういう所はS A Oにいたときと全ツ然変わっちゃいねえ！」

「まあまあそう言うなって、木綿季を探してくれたお礼に昼飯、俺が奢るからさ」

「え……いいんですか？ キリトさん」

「俺一人じゃ絶対に見つけられなかった。みんながいてくれたからこそ冷静になれた。だから木綿季を見つけられたんだ」

「うん、ボクもリズ達には本当に感謝してる……」

「だから、ここは俺に見栄を張らせてくれないか？」

和人がお昼ご飯を奢ると言った瞬間、三人は本当にいいの？ そんなことして和人の財布は大丈夫なの？ といった表情を浮かべていた。別に恩着せがましく木綿季搜索を手伝ったわけではない。見返りを求めてやったわけではない。本当に木綿季が、和人が心配で手を貸しただけに過ぎなかった。しかし和人がいくら言っても引き下がらなそうだったので里香達も「本人がそう言うなら」ということのでそのままお言葉に甘えることにしたのだった。ここまで強く言われてたなら断ってしまうと逆に失礼だと感じたのだろう。

「それじゃあお言葉に甘えんとするかあ！ キリの字とはS A Oの時の約束もあることだしな！」

「S A Oの時の約束……？ そんなのしたか？」

「ちよ……てめっ忘れちまったのかよ！ この俺様との男同士のあの感動的な約束を！」

遼太郎の言う約束というのは二年前、まだ和人達がS A Oの中に囚われていた時のことだ。アインクラッド第75層をクリアした攻略

組の前に立ちふさがった、S A O事件の黒幕である茅場晶彦こと、ヒースクリフとキリトの一騎打ちの時に交わした約束のことであった。当時、GM権限で動けなくされていたクラインと確かに約束を交わしたのだ。文字通り命を賭けた戦いを始める前のキリトに死ぬのは許さないと言っただの。「現実世界で飯の一つでも奢ってからじゃないと絶対に許さない」と涙ながらに言い放ったのだ。

その男同士の約束を忘れた和人に憤慨した遼太郎は、たまらず自分より身長の小さい和人に対し、背後から自身の左足を和人の左足に重ね、和人の右腕を自分の左腕で上から封じ、首を挟んで反対側からも右腕を伸ばしてがっちり掴み、見事なコブラツイストを決めていた。この男は武士が命と言っておきながら、いつどこでこんな複雑なプロレス技を身に着けたというのだろうか、それも掛け方が実に手際よく鮮やかである。技を決められている和人は上手く入ったのか、痛そうに顔を引きつかせながらもがいていた。

「あだだだだだ!! 思い出した! 思い出したからやめてくれ! ギブギブギブ!!」

「く、クラインさんやめたげて! 和人が壊れちゃうよー!」

いたいけな木綿季に言われてしまつては遼太郎も従わざるを得なくなり、まだまだ技を決めていたいと思いつつも仕方なく和人をコブラツイストから解放した。遼太郎から解放された和人は関節をさすりながら何とも言えない表情で地面に尻もちをつきながら痛み之余韻に耐えていた。どうやら約束を忘れていた以外にも遼太郎は恨みがあったようだ。いや、恨みというよりも醜い男の妬みというべきか。

「和人大丈夫……?」

「ああ……大丈夫だ……」

まだ足の感覚がおかしい和人が、木綿季に肩を借りて仲良さそうに

立ち上がると、その様子を見ていた遼太郎を含む三人は渋い顔をして「ご馳走様」とでも言いたげにその場に佇んでいた。和人と木綿季は何で自分たちがそんな視線を向けられているのかは理解出来なかった。

するとその空気をぶち壊すかのように突如としてまた「グウ〜」とお腹の虫が鳴く音が鳴り響いた。先ほどと違って大きく、下手をすると周りの子連れ客にも聞かれてしまったのではないかというぐらいのポリウムだった。一行は一瞬何の騒音だと思い、周囲に異常が起きてないか辺りをきよろきよろと見回していたが、それが誰のものかはすぐに判明した。

「……………ご、ごめんね……………ボクのお腹の音……………」

「……………え？」

「……………ぷっ」

「あはははははははー！」

「ゆ……………木綿季……………アンタすごい音鳴らすわね……………あはははははー！」

音の正体が木綿季のお腹の虫と判明すると、一行は一斉に笑い出し、ぱつと場の空気が和んだ。和人も知らないほどの木綿季のお腹の虫の音だった。どうやら今朝食べた朝食は木綿季にとってはちよつとばかり足りなかったようだ。しかしそれでも白いご飯を茶碗で三杯胃に流し込み、鮭の切り身に関しては和人のをもらっていたのである。だということにもかかわらず、このすきつ腹だ。本当に今後の桐ヶ谷家のエンゲル係数が心配でならない。

「だって朝食少なかったんだもん!!」

「少なかったって……………お前俺の鮭の切り身で茶碗もう一膳食べてただらー! あれでもまだ足りなかったのかよー!」

「あれっぽっちじゃすぐお腹すいちゃうよー!」

木綿季が現実世界に帰還し活発に食事をとるぐらいにまで回復し

てからは、もつぱらほぼ毎日この食欲であった。内臓機能が問題なく健康に活動している何よりの証拠なのだが、あまりにも異常なぐらいに膨れ上がった木綿季の食欲に、和人は頭を抱えていた。そいや前に言ってたな……。「ボクをお嫁さんにするならたくさん稼いできてもらわないと！」確かにそう言っていた。まさかとは思ったがここまでの食欲とは思わなかった和人であった。

「あははは！ んじゃあ折角だしこの五人で昼食と行きますか！」

「キリトさん！ ご馳走になりますね！」

「はあ……ここで予想外の出費……とほほほ……」

「よーし！ 食べるぞー!!」

タイミング的にまさかとは思っていたが、里香ら三人に加え木綿季の昼食代まで負担する羽目にはった和人は半分涙目になりながらレストランに入ってしまったのであった。年齢と性別それ相応の量の物を注文した埼玉観光組に対し、木綿季は言わずもがな大量のメニューを注文し、里香たちを驚愕させながらも見事に全て完食したのであった。和人はALOのアルンの街のレストランで、ユウキにご馳走したとき光景と、今の光景にデジャヴを感じていた。

幸いだったのは、ぼつたくりなまでに高いアルンのレストランと違い、円広百貨店付属のレストランはかなり安めの良心的値段設定だったこともあり、なんとか和人の出費もそれほどいなくて済んだのであった。まあ現実世界で仲間がこうして集まれるというのはそう機会があるわけでもなし、たまにこうやって集まったときぐらい、派手に楽しくバカ騒ぎしてもいいのかもしれない。ちよつとぐらい財布が軽くなっても、楽しい思い出を作れるのであれば安く済んだのかもしいれない。

和人と木綿季は、また二人の思い出のページに楽しい記録を残せたのであった。

第57話 寒空の下で

西暦2026年11月1日 日曜日 午後12:07 円広百貨店

和人達五人は川越市内で一番の規模を誇る老舗の百貨店、円広百貨店内六階にあるレストランにてわいわいと楽しい食事に花を咲かせていた。オンラインゲームの中で出会った五人であったが、こうやってリアルでも集まり、何処でも同じように楽しめるのは素晴らしいことだと思う。

生まれた場所も時間も育ち方も違うのに、たまたま同じゲームをやっていたというだけでここまでの関係を持てるのは貴重だ。しかし彼らがここまで仲がいいのも、生死を共にしてきた仲間だということに他ならなかった。SAO生還者は文字通りゲームオーバー。現実世界での死を乗り越えたおかげで命の大切さ尊さを身に染みて感じている。

木綿季は自分も含め家族全員が不治と呼ばれていたHIVに感染し、家族を全て亡くし、自身も死の一步手前までいったことから命の重みを誰より知っている。だからこそスリーピング・ナイツを亡き姉の藍子と共に結成したのだ。

彼女はSAOにはほんのちよこつとしかいなかったが、必死に闘病を続けている間にも、明日奈や里香達は自分を支える為に当然のように力を貸してくれた。そのことから木綿季を含むSAO関係者は、もはや「仲間」という言葉以上の固い絆で結ばれた仲であった。

「ふうー食べた食べたー！」

円広百貨店内のレストランの出入り口から、木綿季がお腹をポンポンと叩きながら満足そうな顔をしてご機嫌で出てきた。その後、里香、珪子、遼太郎も満足のいく食事だったと言いたげに笑顔浮かべていた。その少し後から続き、和人が財布の中身とレシートに書かれ

てる数字を見ながらトホホといった表情を浮かべて退店してきた。

流石に安めの値段設定とはいえ、木綿季が調子に乗り次から次へとポンポン注文を繰り返した為、なんやかんや言って結構な代金に跳ね上がったのであった。和人はやっぱり見栄を張らずに翠のお言葉に甘えたほうがよかつたかなと感じ始めていた。蓄えがあるとはいえ、こうも短期間で出費が重なれば懐なんてすぐに寂しくなっていくってしまう。このままではまた菊岡からの依頼をこなさなければいけない羽目になると、和人は思い始めた。出来ればあの男とは関わりたくないとも。

「いやー、安いから味はアレなのかなと思ったがそうでもなかったな！ 普通に美味かつたぜ」

「全くだわ、かなりいい腕してるわよね。ここのシェフ」

「キリトさん！ ご馳走様でした！」

「あ、ああ……喜んでもらえたなら俺も何よりだよ……」

精一杯の爽やかな笑顔を作ろうとしていた和人であったが、やはり財布が軽くなってしまったことが結構こたえているらしく、若干引きつり気味なぎこちない笑顔を作ってしまった。無理して笑っているせいで瞼と頬がピクピクと震えてしまっていた。

「和人どうしたの？」

「あ、いや……何でもないよ」

木綿季に声を掛けられた和人は自分の財布の中身を見つめながら苦笑いを浮かべていた。確かに貯蓄は一応はある、学生にしては充分すぎるほどだ。しかしこれから木綿季と楽しい毎日を過ごしていくには何かとお金が必要になってくる。どこかに遊びに行くにしても、身の回りのものを買い直すにしても。貯金そのものは圧倒的に木綿季の方があるのだが、やはり男としては胸を張って堂々と好きな女の子の前では強がりたいたいものだ。

(こりや、また菊岡さんのお世話になるかもしれないな……)

正直言つて和人は菊岡とは金輪際一切関わりたくなかった。SAOから目覚めたばかりの和人に一番真つ先に接触してきた理由だつて仮想世界関連事件の情報を得るためだ。SAO被害者の心のケアとは建て前に過ぎない。現に菊岡と面識がある明日奈や詩乃、里香あたりは警戒こそしてないものの、彼のことを胡散臭く感じているほどだ。和人への依頼内容がそれほど難しくもないわりには、報酬が高めになっていったのも胡散臭さに拍車をかけていた。

和人はいつか菊岡からの依頼で、かつてのSAOほどではないものの、危ないことに首をつっこまされるのではと嫌な予感がしていた。木綿季へのマスコミ対策も表向きはセブンが依頼したことになつてはいるが、和人が間接的に依頼していたことにも薄々と勘付いてはいるはずだ。しかし木綿季に決して心配掛けたくないのと、出来るだけ一緒にいたいという気持ちだが、和人を菊岡から依頼を受ける一歩手前で踏みとどまらせていた。

「ちよつとキリト、きいてる？」

「え……あ、ご、ごめん……ちよつと考え事してた」

「なんだなんだ、おめさんやっぱ無理してたんじゃないか？」

遼太郎は自分より背が小さい和人の肩に片手をぐるんと回し、顔を近づけるとニヤケ顔をしながら自分の顎を和人の頬に当て擦った。無精髭がじよりじよりと頬に当たっている和人は迷惑顔をしながら遼太郎から視線を逸らして黙りこくってしまった。ズバリ凶星を突かれたからだ。

「そんなことないっての、……で何だ？」

「あ……はい、私たちこの後、川越を見て回ってから帰ろうかと思います！」

「そうゆうこった、本当なら地元民のお前さんに案内してほしいところなんだけどな」

「……すまん、俺もそうしたいんだが……今日は用事があるんだ」

「ごめんね……皆折角埼玉まで来てくれたのに……」

和人と木綿季がバツが悪そうにすると里香が咄嗟に「仕方ないわよ」とフォローに入った。詩乃達の時と同じように小江戸川越を案内でも出来ればよかったのだが、和人達には家の用事がある。里香達に申し訳ないと思いつつも時間が押していることもあり、このままお開きとなった。

「ほんじゃまキリの字よ、俺様達もそろそろ行くからな、飯……あんがとよ」

「ああ、今度また遊びに来いよ。次は俺ん家に招待するから」

「うん！ それいい！ リズ達もおいでよ！」

「え……気持ちありがたいけど、いいのかしら……？」

和人が家に遊びに来いと誘った瞬間に木綿季の顔がぱあつと明るくなった。出先で遊ぶのも楽しいが、やはり自分のホームまで足を運んでもらうとなると、また別の嬉しさというものがある。一昨日に詩乃が泊まってくれたときは、それはそれは木綿季にとっては楽しい時間だった。今度はリズたちがお泊りに来ないかな、そう思っていた。

「うちは構わないぞ、シノンは一昨日泊まっていったし、今度遊びに来いよ」

「し、シノンが……いつの間にそんなことを……」

「ボク一緒にお風呂に入ったんだよ！ 夜も一緒に寝たしね！」

「……俺は一人でソファで寝たけどな……」

役回りが災難な和人の扱いの悪さに一行の間に笑い声が交わされた。そして流石に時間がないこともあり、宴もたけなわながら一行は

これにて解散となった。里香達旅行組は引き続き埼玉を観光に、和人達買い出し組はここ円広百貨店で翠からのおつかいを済ませる為に、それぞれ足を運んでいった。

そして木綿季が見つかったことを百貨店側に知らせてないことを思い出した和人は慌ててまず一階フロア内にあるインフォメーションセンターに足を運び、迷子になっていた木綿季が何事もなく見つかったことを、受付のお姉さんに頭を下げながら知らせた。あくまでも黙って食事を取っていたことをふせながら。

「お騒がせしました、でもお陰様でこうして無事に木綿季が見つかりました。本当に何とお礼を言って良いやら……」

「……迷惑掛けてごめんなさい、お姉さん……」

「いえいえそんな……こちらこそすぐに探し出せずに申し訳ないです……」

和人達が頭を下げると、お姉さんも同じように礼儀正しく、深々と頭を垂れた。客商売らしく、一従業員としてお客様に誠心誠意を込めて丁寧に対応してくれた。別に店側に落ち度があるわけではないが、また次回気持ちよく利用していたたく為に、精一杯の接客をする。それが客商売というものだ。中にはその立場につけ込んで高圧的な態度に出る輩もいるが決してやらないようお願いしたい。

「あとこちらですね、別のお客様からお預かりしておりました」

「え……あ、それは……」

お姉さんはそう言いながらカウンターのの中から和人が地下一階フロアで放置した銀色のキャリーを取り出した。木綿季を探す為に思わず放り出したやつだ。和人はお姉さんからキャリーを受け取ると「ありがとうございます」と一言添えながら軽く会釈をした。

「見つかってよかったです。……あの、これよろしければお使いくだ

やい」

お姉さんはカウンターの引き出しから何やら水色の封筒のようなものを取り出して和人に手渡した。和人は不思議そうに片手で受け取って封を剥がして中身を取り出した。封筒の中に入っていたのはここ円広百貨店の食料品売場で使うことの出来る商品券であった。若干使用期限がギリギリなのが気になるが食料品3000円分にもなる商品券の存在は今の和人には大きかった。何しろ木綿季からお菓子やらなんやらをせびられることがわかっていたからだ。

「いいんですか……いただいてしまつて」

「ええ、期限もギリギリですし是非お使いください」

「……わかりました、ありがとうございます。使わせてもらいます」

「はい！是非お買い物をお楽しみくださいませ！」

「お姉さん……ありがとうございます！」

木綿季が元気よく笑顔でお礼を言うと受付のお姉さんにも思わず笑みがこぼれていた。和人たちは立ち去り際にお姉さんに頭を下げると、今度は離れ離れにならないようにな手を繋ぎながら再びエスカレーターに向かって足を運んでいった。お姉さんは手を振りながらほっこりとした視線を送り、二人を見送っていた。大切な家族と言っていたことから和人達のことを兄妹か何かだと思ったのだろう。この二人が恋人同士だと言うことも知らずに。

和人と木綿季はエスカレーターで地下フロアに降りると一番大きいショッピングカートにキャリーをコンパクトに畳んで収納し、翠から頼まれた買い出しを漸くスタートさせた。和人がカートを押し、木綿季がメモを見ながらカートで商品を持ってくるといった作戦だ。翠から渡された買い物リストには晚餐のメインであるしゃぶしゃぶ

の材料、酒の友である刺身や枝豆などのおつまみの類、その他常日頃から家庭で使う野菜やお肉などといった食料品を買うよう指示が書かれていた。

「ようし、やるぞー！」

木綿季は妙に気合が入っていた。両肘をガッツポーズのように曲げ、瞳の奥にはメラメラとやる気に満ち溢れた炎が燃え上がっていた。おそらく初めてのお使いと誰かの役に立てるということが、木綿季の背中を強く押ししているのだろう。木綿季は買い物リストのメモと店内フロアマップに視線を送りながら「和人、こっちだよー」とカートを押している和人を売場に誘導しては次々と指示にあつたものをカートにひよいひよいと入れていった。

「えーっと、次はね……」

「楽しそうだな、木綿季」

商品が山盛りに入れられたカートを力強く押しながら和人が木綿季に尋ねると、木綿季は一瞬顔をキョトンとさせ、すぐさま笑顔になると明るく木綿季らしく「うん！ 今すぐく楽しいよ！」と元気に振る舞った。和人はその様子を見届けると爽やかな笑顔で「そうか」と返事を返した。木綿季は本当に毎日が楽しくて仕方ないといった様子だ。

一方で退院して桐ヶ谷家で暮らすようになってから毎日が楽しいのは、何も木綿季だけではなかった。木綿季の恋人である和人も、木綿季が日常を楽しんでる姿を見て嬉しく思っていた。いや和人だけではない、親友の明日奈も、父親代わりだった倉橋も、スリーピング・ナイトのメンバーも、皆木綿季が普通の日常を過ごしていることに喜びを感じていた。

「な、何……？ かずと」

和人は気がつくのと真つ直ぐに木綿季を見つめてしまっていた。カートに商品を入れに来た木綿季が気づきぼーっと見つめ返すと、その視線に気づいた和人がはつと我に返り、照れ臭そうにこめかみをポリポリとかくとその場を誤魔化すように買い物を再開するように促した。

「何でもないよ……ほら、買い物続けるぞ」

「あ……、うん！　ねねね、お菓子買っていい？」

「構わないぞ、商品券もあることだしな」

「わーいやったー！　えへへ……どれにしようかな……」

木綿季はまるで親に好きなお菓子を買ってもらう小学生のように喜んで、お菓子売り場で好きなお菓子を物色していった。3000円分の手助けもあり、気になったお菓子、昔好きだった駄菓子等をかたっぱしから手にとってはぽいぽいとリズムよくカートに次から次へと放り投げていった。とても16歳とは思えない行動だった。和人は「おいおい……」と呆れ顔で木綿季の行動を見守っていた。

その後も品切れ等といったトラブルに見舞われることも無く順調に買い出しリストを埋めていった二人は、木綿季が和人に買ってくれるようせがんできたお菓子類等も含めて、大きいカートをカチ盛りにしてレジに進み、後続に長蛇の列を作りながらも会計を進めていった。周りの買い物客からの視線がちよつとだけ痛かったが、一つの家庭と同じぐらいの量の買った商品を見ると、まるで結婚後初めて晩御飯の買い物にきた若い一夫婦のような光景だった。

商品をレジに通し続け長かった会計をやつと済ませると、和人は買った商品をカートに乗せなおし「会計済み」の札を下げながら商品をレジ袋に包むために、一番近くのサッカー台へと足を運んでいった。サッカー台の周りには主に主婦や母子連れといった買い物客がせっせこせっせこと各々買った商品をレジ袋に詰め込んでいた。和人と木綿季も慣れない手つきでレジ袋にデッドスペースが出来ない

よう、しっかりと一つずつ商品を入れていった。

和人は野菜は野菜、パック詰め肉などは同じパック詰めグルー
プ等できちんと整理して入れていった。一方で木綿季は買い物その
ものが初めてだということもあり、四苦八苦しながら商品を詰めて
いった。和人のアドバイス通りに商品を入れていったが、どことなく
袋の中が乱雑というかぎこちない仕舞われ方に見えた。和人は複雑
そうな顔を浮かべながら木綿季の作業を見守っていたが別に壊れる
ものが入れられているわけでもないので「まあいっか」と無理やり納
得していた。

やがて全ての商品を詰め終わると和人は近くのサービスカウン
ターから手ごろなサイズの段ボールを何個か受け取り、段ボールの大
きさに合った袋を手際よく詰めていき、持ってきたキャリーを展開さ
せ、重心バランスに傾きがないよう丁寧に載せていき、全て乗せ終わ
るとキャリーについているゴム紐を使ってしっかりと固定し、あとは
引っ張って自宅へ帰るだけの状態となっていた。ここでさりげなく
自分の持つ方は重い荷物でまとめ、木綿季の持つ方を軽い荷物でま
めているところが中々に憎めない。

「よし、これで全部だ」

「結構大荷物だねー！」

「まあ……それだけ今夜の晚餐が豪勢だったことだよ。帰ったら俺た
ちも仕込み手伝わないとな」

「そうだね、よし……それじゃあ帰ろ、和人」

木綿季がそう言うと二人はそれぞれキャリーを手に持ち、カラカラ
という車輪が回る音を鳴らしながら帰路へとついていった。時刻は
午後13時、日曜日のこの時間帯は店側にとって一番のピークを迎え
る時間帯だ。気が付くと周りには午前中にここに来た時よりも買い
物客、中でも特に子連れ客と年配の夫婦客が目立ち、古くから地元の
住民に長く利用されてきているんだなということが感じられる。見
渡すとどのお客さんも笑顔で買い物をしており、木綿季はそのお客さ

んたちを見て、改めて自分はいい所に住んでるんだなと実感していた。

長く居座ってしまった円広百貨店を後にした二人は随分久しぶりかのような感覚で屋外へと足を運んでいた。太陽はもうすでに十分に上り、外の気温も今朝に家を出てきたときと比べて大分温かくなっていた。適度な気温となった川越の駅前郊外を、木綿季と和人は手を繋ぎながら歩いていった。まだ半日しか経っていないのに今日もいろいろとあったな、疲れたけど楽しかったなと感じていた。地面を見ながら、時折遠くの風景を見ながら、通り過ぎていく人々に視線をやりながら、ひたすらに一歩ずつ歩を進めていった。

やがて駅前から段々と離れていき、遠目に住宅街がちらほらと視界に入ってきた。ここからあと20分も歩けば自宅である桐ヶ谷家へと辿り着ける。同じ歩幅で歩いていた二人だったが、和人が繋いでいる手を後ろに引っ張られる感覚を覚え、ふとその方向に目をやると、木綿季が何やら真つすくな視線をどこかへと向けていた。一体何を見ているんだろうと和人が木綿季の視線の先に目をやると、何やらワゴン車の移動販売のような店が佇んでいた。その周辺には白いイスとテーブルが並べられており、ワゴン車の近くにあるのぼり旗には「ソフトクリーム」と書かれていた。木綿季はこの店を見つめていたのだ。

「何だ木綿季、食べたいのか？」

「え？……えっと、……うん」

「……わかった、俺が買ってくるよ。味は何がいい？」

「あ、えっと……そうだね、じゃあボクは……バニラ！」

「あいよ、買ってくるからちよつと待っていてくれな？」

和人はそう言うときゃリーの片方を木綿季に任せてソフトクリーム屋に向かって歩み寄っていった。どうやら開店時間直後らしく他にお客さんがいなかったため、特に待たされることもなくすんなりと購入することが出来た。和人は店主にバニラとむらさきいもソフト

の注文を伝え、支払いを済ませてソフトクリームが出来上がるのを待っていた。ワゴン車の中に設置されているソフトクリームサーバーからは白いクリームのバナラ、薄紫色をしたむらさきいもソフトがくるくるとどろろを巻いていき、コーンにその形を作っていた。形が完成すると、店主はすかさず両手で和人にソフトクリームを手渡した。

「あいよ、お待ちどうさん！」

「ええ、どうも」

「兄ちゃん、あちら彼女さん？」

「え？ ああ……まあ、そうです」

「若いねえ、大切にしなよ、兄ちゃん？」

「……勿論です」

ソフトクリームを扱っている甘いスイーツなイメージとは程遠い四十代程のおじさん店主が野次を飛ばすと、和人はほんのり爽やかな笑顔で返答を返した。そのおじさんからの野次は横浜港北総合病院で看護師たちから飛ばされた野次とは違い、気さくで温かく、不思議と嫌な気持ちはしなかった。やがてオープンしているのを見た通行人が次々へと店へと並んでいった。後々に結構地元では人気のお店だということが判明した。どうやらこのおじさんのキャラクターがこのソフトクリーム屋の人気の秘密のようだ。やがて集まってきたお客さんは次々と行列を作っていく、長蛇となっていた。一番に買えたのはかなりラッキーだったようだ。

「木綿季おまたせ。ほら……木綿季の分」

「うん、ありがとね。それにしてもすごいお客さんだねー」

「本当だな、かなり人気のお店みたいだ」

「だしたらラッキーだったね！ 一番に買えてさ」

「ああ、そういうことだな」

和人は少し離れたところにあるベンチに目をやり「あそこに座って食べようぜ」と木綿季に促すと片手にキャリー、もう片手にソフトクリームを持ってゆつくりと歩を進めていった。木綿季も「うん！」と返事を返し、それに続くようにととてと歩いていった。ベンチに辿り着くとそれぞれ脇にキャリーを立てかけ、腰を下ろして「いただきます」とお行儀よく先ほど買ったソフトクリームに口をつけていった。

「あむ……、んー！ 冷たくて美味しい！」

「ああ……これは美味しいな。地元こんな味があったのか」

「へえー、和人でも知らなかったんだ」

「自分から進んでソフトクリームなんてあんまり食べないからな」

「じゃあボクのおかげでもあるんだね！」

「ははは、そういうことだな」

「えへへ、ねね和人、そっちも食べさせてよ！」

「ん？ 別にいいぞ、ほれ」

木綿季が和人の食べているむらさきいもソフトをねだると、和人は気前よく木綿季の前に差し出した。木綿季は嬉しそうにむらさきいもソフトに大きな口でかぶりつくると一口でかなりの量のソフトクリームをこっそりと抉っていった。その物凄い食欲に和人は目を丸くして驚いていたが、木綿季らしいなと思わず笑みをこぼしていた。一方口を大きくしてソフトクリームを頬張っている木綿季は幸せそうな笑顔を見せながら和人のソフトクリームを味わっていた。

「おいしい味がする！ こっちも美味しいねー！」

「そうだろ？ 芋と言えば川越だからな」

「ボク、埼玉には葱しかないとはっかり思ってたよ」

「おいしい……葱は場所が違うぞ？ 同じ埼玉でも葱は深谷だ」

「へー、そうなんだ……」

木綿季が埼玉の意外な名産地に感心していると、和人が木綿季の頬つぺたに先ほどのむらさきいもソフトのクリームがくつついてい
ることに気付いた。肝心の当の本人はそのことに全く気付いている
様子はなく、次は自分の持つてるバナラのソフトクリームに口をつけ
ていた。しばらく様子を見ていても気付く様子がなかったので和人
は仕方なく木綿季にそのことを教えてあげることにした。

「木綿季、ほっぺにクリームついてるぞ」

「ふえ!? ど、どこ? 和人とつてー!」

女の子がソフトクリームを食べるときのべたべたなネタを披露し
ている木綿季であったが、自分のほっぺにうっかりクリームをくつつ
けてしまっている事態に、すっかり慌てふためいてしまっていた。周
りから見ると結構ドジで可愛らしい光景であるが、くつつけてしまっ
ている当人は大変に恥ずかしい思いをしていた。和人は顔を真っ赤
にしている困り果てている木綿季の頬に手を伸ばして指でくつつい
ているクリームをすくい取り、そのまま自分の口へと運び綺麗に舐め
とつていった。

「ほらよ、これでOKだ」

「あ……うん、あり……がと……」

今まで異性と交際経験がなかった木綿季は、当然こういったやり取
りも初めてであった。和人と散々抱き合ったりスキンシップを繰り
返してきたはいるが、今回の初めてのやり取りにどきまぎしてしまっ
ていた。

「なあ、木綿季のも少しくれよ」

「ふえ!? ……ああ、うん……いいいよ?」

木綿季は和人にバナラソフトをねだられると、先ほどの和人と同じ

ようにソフトクリームを和人の前に差し出した。和人は差し出されたソフトクリームにそれなりに口を開けて食らいつきもごもごトニラ独特の濃厚な味を堪能していた。しかしバナラソフトも美味しかったが和人は今のこのやりとりにとことなくデジャヴに似たような感覚を覚えていた。

「ああ……そうか思い出した。迷宮区で……」

「どうしたの……？ 和人」

「いや……似たようなことが前にもあったなーって……」

「……もしかしてあの時かな、ALLOのお団子……」

「ああ、そうだな。あのときの木綿季も慌てふためいて見てて面白かったぞ？」

くすくすと笑いながらこの状況を楽しんでいる和人に、木綿季は顔を赤くしてぷくーつと頬を膨らませ、若干不機嫌になっていた。和人は木綿季に機嫌を損ねられたら叶わないため「悪い悪い」と言いながらその場を取り繕っていた。木綿季も「しょうがないなあ……」と恥ずかしそうに頬を赤く染めながら再びソフトクリームへと口をつけていた。

川越の寒空の下で食べるソフトクリームは冷たかったが、和人と木綿季は心の中が温かくなっていくのを感じていた。二人は無言でソフトクリームを食べ続け、コーンの部分まで平らげると、残った紙屑を丸めて近くのごみ箱へ捨て、ベンチから立ち上がり、手を繋いで再び家路へとついていった。

「……帰るか、木綿季」

「うん、帰ろ、和人」

第58話く桐ヶ谷家 前編く

西暦2026年11月1日 日曜日 午後14:05 埼玉県川越市 桐ヶ谷邸

和人と木綿季は秋空の太陽がさんさんと照らす川越の街中を歩き続け、長い買い出しを終え漸く自宅へと戻ってきていた。本来ならば午前中に買い物を終え、円滑に進んでいればお昼頃には帰宅出来ていたはずだった。しかし木綿季の迷子というハプニングと、その木綿季を探すのに手伝ってくれた里香たちへお礼のとしてお昼をご馳走したり、帰りの道中にもソフトクリーム屋へ寄り道をしたりで、すっかり遅くなってしまっていた。

二人は様々な大きさの段ボールが積まれている銀色のキャリーを片手で引つ張りながら自宅敷地内へと足を踏み入れていた。なんだか今日もいろいろありすぎて、久しぶりに自分の家の敷居を跨いだよいうな感覚だった。視界には剣道場、風情溢れる古風な池と落ち葉が舞い散る木々が生えている庭の光景が映っており、何もかもが不思議と至極懐かしく思えてきた。そして安心出来る、やはりどこへ行っても結局は我が家が一番なのである。木綿季も桐ヶ谷邸の玄関口まで足を運び、心から安心したような表情を浮かべていた。

「ふいふ、なんかやつとこ帰ってきたーって気がするよ……」

「俺もだ……まだこれからが大変なのに既に物凄く疲れたぞ……」

「お母さんたちの手伝いする前に少し休もうよ……和人」

「……そうだな、そうしよう……」

和人と木綿季は手を繋ぎながら歩き疲れた脚を必死に動かして、我が家の玄関の扉へと手を掛けた。扉がガラガラという音を立てて横にスライドすると、いつも見る下駄箱、奥には固定電話、そして自分たちの部屋に通じている二階へ上がる階段が目に見え込んできた。

も直葉も、翠にこういう時は別室でこっぴどく怒られたことがあったからだ。しかし今回木綿季に悪気があったわけではない、むしろ世間になれてない木綿季をちゃんと傍らで見あげられなかった和人に落ち度あると言えるだろう。和人はこっぴどく怒られるなら自分だろうと思いつつも、荷物をダイニングに運び続けていた。

玄関とダイニングを何度も往復して、和人は重たい荷物を、直葉は軽い荷物を次々と運び、寝室のある方向を不安そうに眺めていた。翠は普段はふわふわとしているが、怒ると人が変わったように怖くなる。それは電話越しでも木綿季が感じていたほどだ。人から怒られる慣れていない木綿季が翠からの圧力に耐えられるだろうか？ そう和人は心配していたのだ。しかしそんな和人の心配をよそに、すぐ傍で荷物運びを手伝っていた直葉がすかさず和人に大丈夫だよとフォロ―に入った。

「大丈夫だよお兄ちゃん、多分……木綿季は怒られないと思うよ？」

「え……？」

「なんかよくわかんないけど、お兄ちゃんからの電話のあと、お母さんすっごくご機嫌だったんだから」

「……そうなのか……」

「お母さん泣いてたよ？ それぐらい嬉しいことがあったんだと思うけど、お兄ちゃんなんて言っただけなの？」

直葉の言う嬉しいこととは恐らく「親孝行する」といったときのことだろう。自分がSAOから解放されるまで両親に対しては閉鎖的な態度をとっていたから、これからは息子らしくここまで育ててくれた両親に精一杯のお返しをしようという気持ちを伝えたときだ。電話越しでわからなかったが……母さん泣いてたのか……。これはますます母さんたちに恩返ししていかないと、和人は再び想いを胸に秘めていた。

「ああ、ちょっと色々だな。スグもいずれきつとそういう気持ちにな

るときがくるよ」

「え……、ごめんお兄ちゃんが何いつてるかよくわかんない……」

「あははは、今はそれでいいんだよ。さ、早いとこ段ボールの中身も片付けちまおうぜ」

「あ……う、うん……」

何となくすべてを察しているであろう和人の顔を見て、直葉は解せない様子を見せていた。このあたりはやはり長兄である和人さながらであった。やがて桐ヶ谷家の大黒柱となるであろう貫禄が少しずつつき始めてきたというべきか。SAO事件で勉強が遅れていたとはいえ、和人は少しづつ逞しく成長していたのだった。血は繋がっていないが、気が付けば峰嵩と翠が誇りに思うほど自慢の息子になっていたのだ。

一方で寝室に連れてこられた木綿季は不安な表情を浮かべていた。母親にわざわざ別室に連れこまれて二人きりというこの状況、おそらく木綿季もこれから翠から何を言われるかは大体察しがついていた。人に怒られるなんてどれぐらいぶりだろう、最後に人に怒られたのは姉ちゃんがまだ生きてた頃だから……少なくとも二年以上なかったよね……。うう、お母さんやっぱり怒ってるよね……。あんだだけ心配かけちやつたんだし……。

翠は寝室に自分と木綿季が入ったのを確認すると扉をガチャンという音を立ててしっかりと閉め、木綿季を自分の前に立たせて話を聞かせようとした。寝室はシンプルな構造で白く明るい壁にブラウンの色をしたクローゼット、部屋の窓際には大きいサイズのダブルベッドが置かれていた。峰嵩と翠は普段ここで寝ているのだろう。

ベッドの横に立たされた木綿季は怒られるのかと不安そうにびくびくしていた。しかし翠はそんな木綿季に歩み寄ると無言で両手で包み込むように、優しくこちら側に寄せて木綿季の細い体を守るよう

に柔らかく抱き締めていた。何の前触れもなく抱かれた木綿季は驚いていた。怒るところか抱き締めてきた翠の行動に疑問の念を抱いていた。

「お、おかあ……さん……？」

「よかった……無事に帰ってきてくれて、本当によかった……木綿季……ッ」

「……おかあ……さん……」

「母さん、本気で心配したんだから……、もしも木綿季の身に何かあったらどうしようって、本気で……心配したんだからね……」

「おかあ……さん……ッ。ご、ごめん……なさい……ボク、ボク……」

翠と木綿季は涙を流しながら互いを力いっぱい抱き締めていた。翠は本当に木綿季が怪我一つなく帰ってきたことが嬉しかった。この子の親としてこれからちゃんと接していけるか不安だったが、今日の前の少女はちゃんと自分を母親として見てくれている。そのことが何より嬉しかった。木綿季も木綿季で外から来た身だということに、本当の我が子のように気を掛けてくれていて翠に感謝の気持ちと、心配かけてごめんなさいという謝罪の気持ちも相まって、複雑でごちゃごちゃになったよくわからない涙を流していた。

「もういいのよ、母さんは木綿季が無事に帰ってきてくれたことが何より嬉しいんだから……。でももう……こんなことはしないでね……？」

「うん……うん……ボク、約束する……。もう二度とお母さんに……心配かけない……」

「……ありがとう、そう言ってくれると母さんも安心だわ……」

「本当にごめんなさい……」

涙を流しながら母親の温もりを感じている木綿季に翠は優しく笑顔を送った。木綿季もそれに応えるように満面の笑みを翠に返した。

もうこの二人の間柄は紛れもなく、本当の親子そのものであった。しばらくの間抱き合い、ぬくもりを感じていた二人はほどなくして時間が経つと、互いの体を離して抱擁を解いていた。

「そうだわ……指切りしましょうか、木綿季」

「指切り……うん！　する！」

翠から指切りをしようと言われた木綿季はかつてメデイキュボイド越しに明日奈と交わした指切りのことを思い出していた。あの時は仮想世界の身体だったので直接は出来なかったが、退院した今なら現実の世界でちゃんと指切りを交わせられるのだ。木綿季と翠は右手の小指と小指をお互いにしつかりと絡ませ合い、嬉しそうに笑顔を見せあいリズムよく手を上下に振りながら、翠の音頭と共に指切りを交わしていた。

「ゆーびきーりげんまん」

「うーそついたらはーりせんぼんのーますっ」

「ゆーびきったっ！」

「ゆーびきったっ！」

最後の言葉と共に指を切った二人はにこやかになっていた。やり方は少し古かったかもしれないが、昔さながらの親子同士の約束とあった微笑ましい光景であった。指切りを済ませた木綿季と翠は絶えず笑顔で部屋のドアを開けて寝室を後にした。現在の時刻は14時過ぎ、一家の大黒柱である峰嵩は渋滞に巻き込まれ夜に帰ると言っていたので、今からでも仕込みは十分に間に合うはずだ。寝室を出た翠が扉をパタンと閉めると、先に部屋から出ていた木綿季が翠の方へくるりと体を回転させて振り返ると、両手を背中に回して上半身を傾けて翠に楽しそうに語り掛けた。

「お母さん、ボクね……お母さんのこと……大好き！」

愛する娘からのストレートな気持ちを受け取った翠は、心が温かくなつていくのを感じていた。純粹無垢、天真爛漫な木綿季から贈られた言葉は、それだけで翠の心を満たしていた。翠はうつかり涙が出そうになりながらも、胸に手を当てて娘からの愛を受け止め、自分を好きと言ってくれた木綿季に精一杯の気持ちを込めて言葉を返した。

「ありがとね……母さんも木綿季のこと、大好きよ……」

翠からの気持ちも受け取った木綿季は照れてるのか嬉しいのかわからないような表情になり「えへへー♪」と言葉を漏らしながら両手を左右に広げ、トントントンとリズムよくステップを踏みながらご機嫌で二階へと続く階段を登っていった。その姿を見守っていた翠はこの先の生活がもっと楽しくなるんだなと心を躍らせていた。三人目の自分の子供に心を一杯にしてもらった翠は、より気合を入れて今夜の晚餐の仕込みをするために、キッチンへと足を運んでいった。

「さてと、私も頑張らないとね……!」

同日午後14:15 桐ヶ谷邸和人と木綿季の部屋

一方で先に自室に戻っていた和人は一階の寝室で木綿季が翠に何を言われているか気になりながらも、自室のベッドに体を横たわせ、脚をほみ出させながらスマホの画面をいじくっていた。なにやらLINEアプリで誰かとメッセージのやり取りをしているようだった。

「そうか……でもよかったね、木綿季ちゃんが見つかった」

「本当だよ……、でも今母さんに叱られてるっばい」

「あはは、でも仕方ないんじゃないかな」

「あいつ……叱られ慣れてないから少しだけ心配だよ」

「……叱られるってのはいいことだと思うよ？　少なくとも僕はそう思う」

和人のメッセージのやり取りしていた相手は昨日自宅へ遊びに来ていた恭二だった。恭二からの返信は早く、メッセージを送った5秒後にはもう返信の通知が来ていたほどだった。よほど電子機器の扱いに慣れているのだろう。和人は今日起こった出来事を半ば愚痴を吐くようにして恭二にメッセージを飛ばしていた。スマホの画面越しなので恭二がどんな気持ちでメッセージを受け取っていたかはわからないがきつと苦笑いを浮かべながら見ていたのだろう。

「まあ……俺もそう思う。ところで……恭二のお父さんってどんな人なんだ？」

「……そうだね、一言で言えば褒めもしないし叱りもしない親……かな」

「どういうことだ？」

「あ……そうだね、そしたらちよつと通話いいかな……？」

恐らく文字同士のやり取りでは伝えづらいものがあつたのか、恭二は声で伝えたいのか和人に通話が出来ないかと提案してきた。特に和人に断る理由はなく、すんなりと恭二からの提案を承諾するところから側から恭二のアカウントに向かって直接話をするために、通話機能を立ち上げた。少しの間呼び出し音が鳴り響くと、ポツンというサウンドエフェクトと共に『もしもし』という恭二の声が聞こえてきた。

「よう恭二、なんだか久しぶりな感じがするな」

『やあ和人、何いってんのさ、昨日ALOで遊んだばかりじゃないか』

「ははは、そうだったな。しかし恭二のAvatarには驚かされたな。まさか女の子みたいな見た目をしているとは……」

『頼む和人、あのアバターの話はしないでくれ……』

ケットシーの可愛らしい見た目をしたシュピーゲルのアバターの話を振ると、恭二はすっぱりと話を切ってしまった。やはりあのアバターのことは大分引きずってしまっている様子だった。和人は「お、おう」とだけ返事を返すと、「つれないなあ」と思いつながら話題を切り替えるべく、先ほど恭二から聞こうとしていた件について聞くために、もう一度話を切り出した。

「それで……、さっきの親父さんのことなんだけど」

『あ、ああ……そうだったね』

恭二はスピーカー越しでも聞こえるような大きい溜め息を吐き出すと、ゆつくりと、淡々とした口調で自分の父親のことを和人に語り出した。自分がどういう教育を受けてきたか、どんな親子のやり取りを交わしてきたか、今までの父親との触れ合い全てを和人にぶちまけてた。

『父さんはね、僕ら兄弟が自分の後を継ぐのを当然と思ってるんだよ。それこそ自然現象のようにね、毎朝太陽が昇り、夜になると沈んでいくことと同じようにしか見てないんだ』

「……………」

『兄貴がS A Oに囚われてからはより淡泊な人間になってったよ。やがて兄貴を見限ると、その期待の矛先は僕へと向けられた。成績を上げるのは当然だ、大学も医学部も進学して当然だ……てね。幼い頃からそんな教育を受けてきた僕もそれが当たり前前だと思ってる生きてきた』

和人は無言で恭二のこれまでの生き様に耳を傾けていた。和人も今まで波乱万丈の人生を歩んできていたが、恭二も恭二で彼なりに険しい人生を歩んできたのだ。親がエリートというだけでその道歩

いていくのが当然というレールを敷かされて、その上を進んでいくしかない人生をひたすらに歩いてきたのだった。やりたいことがある恭二にとってはそれはそれは大変に窮屈な人生だったに違いない。

『でも僕はある日、ミリタリーと出会ったんだ。それから勉強なんかそつちのけでミリタリーに夢中になったよ。そしてやがて……ある日に詩乃に声を掛けたんだ』

「……そうだったのか……」

『……君になら話してもいいかな……どうやって詩乃と出会ったのか……』

「……俺にならって……？」

恭二は和人にどうやって自分と詩乃が出会ったかを打ち明けようとしていた。当時、誠自分勝手な気の持ちようで詩乃に近付き、彼女の事件に対する気持ちも考えないで接触した理由を、和人に全て打ち明けようとしていた。恭二は少しだけ深呼吸をすると自分自身を落ち着かせ、恐る恐る口を開き、ゆっくりと真実を和人に向かって語り出した。

『和人、僕ね……詩乃が人を殺したこと、もつと前から知ってたんだ……』

「……確かにそんな様子だったよな、あの時……」

和人が言っているのは先日の出来事のことだった。和人の部屋で木綿季、恭二、詩乃の四人が集まったときに、詩乃が自分の過去の過去の事を和人達に暴露した時のことだ。あの時恭二は詩乃を一度止めたのだ。過去のトラウマを外部に吐き出そうとしている詩乃を止めようとしていた。それはつまり恭二が詩乃の過去のことを知っているということの意味していた。

『うん。……あのね、あのね和人……僕さ、

詩乃が人を殺していることを知った上で彼女に接触したんだ』

「な、なんだって……？」

『……前に言っただろ？ 僕はドス黒いやつだった。僕は詩乃が銃で人を殺したことに興味を持って彼女に近付いた。全部自分で調べたんだよ、そして人を銃で殺した感触ってどんなものだったのかと聞こうとしたんだ』

「……恭二……」

『……軽蔑してくれて構わない、僕はそれだけの罪を犯したんだ……。詩乃の、彼女の気持ちも知らないで……。彼女がどれだけ苦しんでいるかも知らないで……！』

「……………」

『……………』

和人は黙りこくってしまった、恭二からの告白に言葉を失っていた。そして和人は恭二が自分に何故このことを打ち明けたのかということを考えていた。今回恭二がぶちまけたことは人として最低の事だ、それは十分に理解していた。しかしそれでも尚和人にそのことを打ち明けたということは、心のどこかで和人を信頼しているからに他ならなかった。嫌われてしまうと思っても、和人には全部打ち明けてもいい、そう思っていたからだだった。

『これでわかったら……僕は最低な人間なんだ。本当なら詩乃の隣に立つことなんて許されないんだ……』

「……………」

電話の向こう側で恭二は泣いていた。自分を責めているからだけではない、怖かった。折角出来た友達である和人に嫌われるのが怖かったのだ。息を荒げ、声が震え、スマホを持つ片手にも力が入り過ぎてしまっていた。しかし、そんなことで和人は軽蔑などするわけがなかった。むしろ嬉しかった、自分から過去のことを打ち明けてくれたことが嬉しかった。恭二が自分のことを信頼してくれているから

こそ、このことを打ち明けたことに気付いていたからだ。

「恭二、俺はそうは思わない」

『……………え?』

「俺、ずっと恭二を見てて違和感を感じていたんだよ。シノンを見る目が……………好きな人を見る目だけじゃないってね」

『……………』

「そういうことだったんだな……………」

『……………うん、それから僕は僕なりに……………過去の罪を清算するためには彼女の支えになることを何でもやった。トラウマを克服してもらったために銃の知識や歴史を教えたり、模型店とかガンショップにも一緒に足を運んだよ』

「……………ああ……………」

『それから詩乃のトラウマは……………結果だけ言うと少しだけ克服出来てたみたいだった。以前出ていてような拒絶反応だとかパニック障害は起きなくなっていたんだ。僕はほつとしたよ、これで少しは彼女の力になれたのかなってね……………』

「……………それは恭二の頑張りのおかげだろ? 逆に恭二が力を貸さなかったら、シノンはトラウマを抱えたままだったかもしれないんだからな」

『……………そう……………なのかな……………』

和人と話を続けているうちに恭二の涙は引っ込んでいた。次第に呼吸も落ち着いてきており、冷静に和人と話が出来るようになっていた。声のトーンもだんだん明るくなってきており、和人と話が出来たことよって恭二も少しずつ心の引っ掛かりがとれたようだった。

「なあ恭二、このことはシノンには……………?」

『……………話してないよ。恐らく話したら僕らの関係は終わる。でも……………僕はそれでも構わないと思ってる』

「おい……………それは……………」

『いいんだよ、それが罪を犯した僕に対する……償いになるのなら……』
「……………」

重苦しい会話を交わしていた二人の間には、しばしの間無言の時間が流れていて、非常に気まずい空気となっていた。お互い言葉を交わさないままスマホを持っていると、和人の部屋の外から階段を登る音が聞こえてきた。恐らく木綿季だろう、翠と話を終えた彼女が部屋に入ろうと近付いてくる足音が少しずつ大きくなってきた。和人はこの件の事は恭二との間だけに留めるようにし、本人が詩乃に打ち明けるまで口外しないことを心に決めた。

「悪い恭二、木綿季が部屋に来ようとしてる、すまないが今日はここままで……」

『あ……うん、ごめんね。色々聞いてもらって……ありがとう』

「いいんだよ。あと……君が過去にどんなことしたとしても、俺らの関係は変わらないよ、少なくとも……俺はそう思ってる」

『……和人……』

恭二は本当にいい友達を持ったと心にかけていた。今までいじめにあい、高校も中退して気の合う友達なんてもう二度と出来ないと思っていた。でも色々な出来事が重なって再び和人という友人に恵まれた。そして自分の過去の過ちを聞いても俺たちの関係は変わらないと言ってくれた。恭二はこんな自分がここまで恵まれていいのだろうかと思いつつ始めた。……しかし、やっぱりこういうのは悪くないなど感じていた。これが……友達、友情なのか……と。

『ありがとう和人、本当にありがとう……』

「構いやしないさ、今度また遊ぼうぜ。現実世界でも仮想世界でも……な」

『……うん、また今度……是非』

「んじやあ切るよ、またな……恭二」

『ああ……またね、和人』

和人は恭二と別れの挨拶を済ませると、スマホ画面に表示されている通話終了のアイコンをタップし、電源ボタンを短く推してスマホをスリープ状態にして傍らに置いた。部屋の外から聞こえてくる足音は段々大きくなり、部屋の扉の前まで来たであろうタイミングでピタッと止まった。すると今度は「コンコン」と扉をノックする音が聞こえてきた。和人が「いぞー」と返事を返すとドアノブが捻られ、扉を開けた木綿季の姿が現れた。

「戻ったよ、和人」

「ああ、おかえり。……怒られたか？」

木綿季は扉を閉めるとゆっくりと歩を進めて、和人が腰かけているベッドのすぐ横に同じように腰を落ち着けた。その様子からは怒られたのかどうかを判断するには少しばかり難しい雰囲気が漂っていた。切ないような、嬉しいような、そんな表情が見て取れた。

「んと、怒られはしたんだけど……抱き締めてもらっちゃった」

「……そうか……」

「あったかかったな……お母さん……」

「……よかったな……」

「……うん……」

木綿季は漸く肩の荷がおりたのか、だらしなく和人と同じ姿勢でベッドに体を横たわらせていた。じーつと白い天井を見つめ「ふう……」と大きく息を吐き出していた。退院してからの木綿季の毎日は良くも悪くも一日一日が濃く、充実していた。やっぱり仮想世界とは違う、いろいろ大変なこともあるけどこれが現実世界なんだ。「生きてる」って感じが全然違う。木綿季は改めて、この現実世界で生活し

ていくことの大変さと、楽しさを同時に感じ取っていた。

二人のいる自室は非常に静かだった。家の外を走っている車の走行音や犬の鳴き声、鳥の鳴き声が窓からかすかに聞こえてくるぐらいだった。お互い疲れていることもあり、この時ばかりは中々に会話が弾む様子もなかった。二人はやがて目を閉じて疲れた体を休めていた。しかし互いの手は握られており、互いの温もりだけはしっかりと感じ取っていた。

「あのね、和人……」

「……何だ？」

「お母さんがね、ボクのこと……大好きだって……」

「……俺も大好きだぞ、木綿季のこと」

「……うん♪」

「……ふふっ」

「ボクね、今日一日で感じたことがあるんだ」

木綿季はうつすらと閉じていた目を開けて、天井を見つめながら左手を空に向かって真つすぐ伸ばし、何もない空間を掴もうと掌を開けたり閉めたりといった動作を続けていた。和人はそんな木綿季を半分瞼を開け、右腕を額に当てながら木綿季は一体何をしているんだろうと思うながら、じつと見つめていた。しばらく見守っていると手の動作をやめた木綿季が今度は胸に手を当てて目を閉じて、胸に思っていたことを静かに語り出した。

「ボク……本当に色々な人から愛されてるんだなって……やっと実感してきたんだ……」

「……ああ、そうだな」

「和人だけじゃない、明日奈もお母さんも直葉も……倉橋先生もボクのこと愛してくれてる。SAOやALOの皆も、ボクにたくさんのお愛をくれてたんだね……」

「……それはな、皆も木綿季に色々なものをもらってるからだよ」

「え……ボクが……？」

木綿季は首だけ和人の方に向けると、自分が皆に何をしてあげていたのかということを考えていた。実のところ、何をしたわけではない。病気を治してもらったり受け入れ先を用意してもらったりと、むしろもらってばかりじゃないか。ALOでやったライブの影響で救われた命があったとはいえ、元はと言えば自分の病気を治すため、そして支えてくれた和人の気持ちに応えるためにやったに過ぎない。与えられてばかりで自分からは何もあげられていないじゃないか、そんなボクが一体皆に何をあげたんだろう……？

「ボク、何もあげてないよ……むしろしてもらってばかりだよ……」

「そんなことない、お前は気付いてないだろうが普段から皆お前からたくさんもらってるんだぞ？」

「……えっと、和人が何を言ってるかわからないよ……」

「あのな、今までどれだけ皆がお前の明るい前向きな行動に助けられてきたと思う？」

「え……？」

「重たい病気を抱えながらも、真っすぐに前だけ見て走り続けたお前のひたむきな姿勢に、皆心を動かされてたんだ。……俺もその一人だよ」

「……かずと……」

「そんな木綿季が、皆大好きなんだ。……無論、一番好きなのは俺だけだよ……」

「ぼっ……ばか……、和人ってばもう……」

いつもながら自分への気持ちを直球ド真ん中で投げ込んでくる和人のまっすぐな気持ちの表れに、木綿季はどきまぎしてしまっていた。いつも何の前触れもなくいきなり来るからだだった。不意打ちにも近い和人からの気持ちは正直嬉しいが、もうちょっとタイミングとつかうか場の空気を読んで発言してほしいものだと思う木綿季であっ

た。

「ボクだって……和人のこと一番好きなんだから……」

「……ありがとな、木綿季」

「……えへ……♪」

和人と木綿季が二人の世界に入り浸っていると時計の針が14時半を回ろうとしていた。流石に家族五人全員分の晚餐の用意を翠と直葉だけに任せっぱなしにするわけにもいかず、二人は時計で時間を確認するとゆつくりと体を起こして、大きく伸びをすると仕込みの手伝いをするためにキッチン目掛けて足を運ぼうとしていた。

「……さ、ここでサボっているわけにもいかない……。手伝いに行こうぜ、木綿季」

「あ……、うん！ 行こっ♪」

和人が先にベッドから体を離すと、木綿季も後に続くようにしてとどとどと和人を追いかけていった。階段を足踏み揃えて降り、後から遅れてキッチンにやって来た和人達に直葉は「おそーい！」と不満げな表情を漏らして不機嫌になっていたが、木綿季も積極的に「ボク直葉のお手伝いするー！」と手伝いに参加する意思を示すと「一緒にやろうよ！」とすぐに不機嫌になっていた。やはり女の子同士だと気が合うところがあるのだろう、野菜を切ったり鳥つくねを作るためのひき肉と一緒に混ぜ混ぜしたりと、姉妹らしく仲良く晩御飯の仕込みを進めていった。

「ひき肉……すごい量だねー！」

「うん、これもお父さんの大好物なの。……まあ、あたしも好きだけどね〜」

「つくねはボクも好きだよー！」

「あははは！ ……それじゃあ木綿季、気合いれてねろう！」

「うん！ よーし……やるぞー！」

木綿季と直葉はそれぞれ別の銀色のボールに入れられたひき肉を一生懸命にねりこんでいた。左手でボールを押さえ、利き手の右手で搥んだりかき回したり持ち上げて叩きつけたり、粘土遊びのように楽しそうに力を込めてひたすらにねりこんだ。かき回すたびに味付けに入れられた生姜醤油とみりん、つなぎの小麦粉の香りが漂い、既に木綿季達の食欲をそそっていた。

翠は三人の子供たちへの指示を休まず飛ばしていた。和人は使う食器をテーブルに並べたり、しゃぶしゃぶ用の肉を皿に盛り付けたりと自分で出来る範囲の手伝えることを積極的にやっこなしていた。直葉は木綿季にひき肉を任せると包丁で先入れする白菜や水菜、葱や大根といった野菜を切り、それらを出し汁が入れられた鍋にどんどん入れていった。豆腐やはんぺんなども、食べいいサイズに切り分けると、それもどんどん投下していった。桐ヶ谷のキッチンには美味しい香りが充満していった。

仕込み作業を手伝いながら、木綿季はかつて横浜の実家の庭で両親と藍子との四人で、楽しくバーベキューをしていた時のことを思い出していた。あの時も材料を串に刺したりして簡単な手伝いをしていった。あの頃の楽しさと同じだ、こうして家族揃って同じ目的のために色々やっていくことが実に楽しい、家が変わってもそれだけは変わらない。

全員がいそいそと黙々と作業をこなしている中で、木綿季は実に楽しそうにこの時間を楽しんでいた。作業の一つ一つが楽しい、ちよつと失敗することもあるけどそれも含めてすっごく楽しい、こういう時間がもつとこの先増えないかなと思っていた。今は簡単な作業しか出来ないけど、ゆくゆくはお母さんにきちんと料理を教えてもらいたいな、そして皆に食べてもらいたいな。特に……和人に食べてもらいたいな……、喜んでくれるかな……？

「楽しそうだな、木綿季？」

テーブルにカセットコンロを設置していた和人が楽しそうにひき肉をねり込んでいる木綿季に笑顔で声を掛けた。木綿季は和人にキラキラした眩しい笑顔で「うん！ すっごく楽しいよ！」と返事を返した。そのやり取りを近くで見ている翠や直葉にも思わず笑顔が溢れていた。木綿季が家族として迎え入れられて以来、桐ヶ谷家は以前よりも笑顔が飛び交う機会が増えていた。木綿季の明るさと純粋さが桐ヶ谷をよりいい方向へと導いていたのだ。

木綿季が夢中でひき肉をねり込んでいると、既に仕込みはほとんど終わりに近づいており、テーブルには食器や食べる直前に入れる野菜やお肉が並べられて、彩り豊かで見ているだけで楽しい光景となっていた。木綿季が手掛けているひき肉もいい具合に仕上がってきており、翠が横からボールに手をつ込み粘り具合を確認すると「うん、いい感じだわ」といい仕事をした木綿季を賞賛していた。褒められた木綿季は照れ臭そうに、そして嬉しそうに「えへへ♪」と笑いながら人差し指で鼻の頭をこすっていた。

しかし利き手である右手の指でこすったために、指にひつついていたひき肉が少しだけ、木綿季の鼻の頭の先つちよにくっついていた。その面白おかしい木綿季の顔を見て、和人ら三人の間に笑い声が飛び交っていた。何で笑われているかわからない木綿季だったが、ご機嫌だったこともあり皆につられるように当人も笑っていた。そして濡れタオルを持ってきた和人に顔を拭いてもらうと、更に笑顔になっていった。

「さあ木綿季、一緒にこうやってつくね団子にしていきましょう」
「あ……う、うん！」

翠がお手本とばかりに手慣れた様子で両手で直径3センチほどの大ききのおつくね団子を作ってみせると、木綿季は「ほえく」と声を漏らしながら関心していた。右手でひき肉をすくい上げ、翠の見様見真似でつくねの形を作っていた。幼い頃にお婆ちゃんと一緒にお団

子を作っていたこともあり、見事な円を描いた綺麗な形をしたつくね団子になっていた。

「木綿季いい感じよ、すつごく上手だわ」

「えへへ、昔お婆ちゃん和菓子作ってたから……こうゆうのは得意なんだから♪」

「あらそうなの、それじゃあつくねは木綿季に全部お願いしようかしら？」

「う……うん！ ボク、頑張る！」

「ええ、お願いね？ あの人も喜ぶと思うわ」

「ホント!? よーし、それじゃあもつと頑張る！」

それから木綿季はひたすらに夢中で鶏つくね団子をこしらえていった。あまりにも夢中になりすぎて何個かいびつな形のつくねが出来てしまっていたが、本人は楽しそうに次から次へとつくねを作っていた。自分の手掛けたつくねをお父さんに食べてもらえる、そう思うだけで心がうきうきしてきた。

早くお父さん帰ってこないかな、ボクが頑張って手伝ったこのキラキラしたお料理を食べてもらいたいな。そりゃボクが中心になって作ったわけじゃないけど、ボクだって頑張って手伝ったんだもん。この鳥つくね団子だって頑張ってねりねりして作ったんだもん！ 気持ちこもってるんだもん！ お父さん食べてくれるかな……食べさせてくれたら嬉しいな……。

第59話く桐ヶ谷家 後編く

西暦2026年11月1日 日曜日 午後18:05 埼玉県川越市 桐ヶ谷邸

「いい木綿季？ 焦らずね？ ゆっくりでいいから怪我だけはしないようにそうつとよ……？」

「わ、わかった……お母さん！」

木綿季と和人が14時半頃から合流して手伝っていた晚餐の仕込みはもうほとんど終了していた。テーブルの上には野菜や豆腐、はんぺんが入れられた鍋が弱火のカセットコンロに乗せられ、ぐつぐつと音を立てながら沸騰していた。その横にゆうに七、八人分はあろうかというしゃぶしゃぶ用の豚肉がキレイな赤色に輝いており、その横には木綿季が一生懸命ねりこみ、心のこもった鶏つくね団子の元が大皿に入れられていた。

つくねは一つ一つが小さいものから大きいものまで統一性がない大きさをしていた。中には微妙に楕円を描いたものや、微妙にひしやげたような形を作ってしまったものまであった。しかしそれは木綿季が一つ一つに真心を込めて作っていたからであった。形こそ店等で出せるようなものではないが、それ以上に峰嵩を喜ばせた、美味しいと言ってもらいたいという「心」がこもっていたのだ。木綿季は今夜は何より峰嵩にこれを食べてもらいたかった。

五人分の取り皿と茶碗、箸が並べられ、峰嵩が座るであろう細長いテーブルの端には、酒の友になるであろう塩ゆでしたエメラルド色の枝豆の山が笹に盛り付けられていた。先ほどまで茹でていたためか、まだ枝豆全体から湯気が枝豆独特の食欲をそそる香りと共に立ち昇っていた。その枝豆の横にはビールの瓶が一升とビアガーデン等で見える生ジョッキ、そして日本酒の入ったとつくりとおちよこが置かれていた。現時点で既に峰嵩を迎え入れられる状態は整っているよ

うだった。

「気をつけろよ……木綿季？」

「だ……大丈夫、これでも剣の扱いには慣れてるんだから……！」
「……それ剣じゃなくて包丁なんだけどな……」

木綿季は晩餐の最後の仕込み、マグロの赤身の刺身を作ろうとしていた。凍ってたマグロの解凍が終わり、ほどよい柔らかさになったところで翠が木綿季に「切ってみる？」と提案したのだ。包丁を握ったことがない木綿季は最初は驚いていたが、初めて包丁を握れる機会に嬉しくなり「うん！ やりたい！」とやる気満々で翠からの提案を飲んだのであった。

しかし初めて握るだけあって、赤味を抑えている左手も、包丁を握る右手にも変に力が入り過ぎてしまい、腕全体がふるると震えてしまっていた。その姿ははたから見ても非常に危なっかしい手つきに見えてしまい、一歩間違わなくても指をうっかり切ってしまうそうだった。怪我でもされてはかなわないと見かねた翠が背後からゆっくり木綿季に近付き、自分の腕を木綿季の腕に添わせて、木綿季の手に自分の手を重ねた。

「わっ、お母さん……？」

「一緒に切りましょうか？ いい？ 最初からいきなり切るのではなくて、左手の第一関節で切るものを押さえるの。力を入れ過ぎないよ
うにね……」

「う……うんッ」

「そうしたら反対の右手で横から包丁の側面を、左手の第一関節に当てる」

「こう……かな」

「そうそう、ここまですればもう準備完了よ。あとはゆっくり手前に引くようにして……こうッ」

「わわっ！」

合図とともに木綿季の手に重ねられた翠の手が手前に引かれると、包丁は吸い込まれるようにマグロの赤身にすつと切れ目を作りながらまな板に「ストン」という音を立てて接触した。するとまな板の上には立派な形をしたマグロの刺身が一つ、出来上がっていた。木綿季は翠の手を借りたとはいえ、初めて自分の手で包丁を扱えたことに感動を覚えていた。目をキラキラとさせて切り落とされたマグロの赤身を感じるように見つめていた。

「うん、出来たじゃない木綿季！ いい感じよ？」

「えへへ……でもお母さんの手を借りたからだよ！」

翠と木綿季の間には笑顔が交わされていた。翠は娘に自分の料理を少しずつ覚えてもらっていく嬉しさ、木綿季は母に教えてもらっている嬉しさを感じていた。双方とも今まで経験したことのない嬉しさだった。木綿季は実の母親からは料理を教えるもらう前に他界されてしまっていたし、翠も以前まで仕事でよく家を留守にしており、気が付けば和人や直葉も自分たちで料理が出来るようになっていた。なので木綿季に教えられることが嬉しかったのだ。

「今の感覚を忘れないでね？ それじゃあ……次は一人でやってみましょう、ゆっくり……ゆっくりね？」

「うん！ やってみる！」

一人で包丁を託された木綿季は気合を入れながらも一度深呼吸をして心を冷静にし、真剣な表情でまな板の上にあるマグロの赤身と包丁を見つめていた。そして先ほど翠に手を貸してもらった時の感覚を思い出しながらあくまでも慎重に、そして力が入り過ぎないように手を動かしていった。そのただならぬ雰囲気放ってマグロと格闘しようとしている木綿季の姿を、和人たちは固唾をのんで見守っていた。その見守っている様はまるで、運動会の100メートル走で自分

の子供がスタートする直前の様な緊張感に包まれていた。

木綿季はまず翠に言われた通りに左手の第一関節にほどほどに力を込め、しっかりと曲げてマグロを掴み、右手の包丁をスライドさせて側面を左手に当てた。そして軽く呼吸をするとゆつくりと包丁をスツと手前に引いていった。引いた包丁はスムーズに刺身に切れ込みを入れていき、やがてまな板に当たるとその動きを止めた。厚さは先ほどよりも少しだけ薄い気がするがマグロの刺身の二切れ目が切り終えられていた。

「わあ……！」

「おお……」

自分だけの力で刺身を切ることに成功した木綿季はたまらず笑顔をこぼしていた。動きは少しぎこちなかったかもしれないが紛れもなく木綿季一人だけの力で包丁を扱えたのだ。その姿に和人は感心し、直葉は木綿季と同じように笑顔で喜び、翠はにっこり微笑んで木綿季に「やったわね」と称賛の言葉を送っていた。木綿季はその言葉を聞くとますます嬉しくなりうっかり右手に包丁を持ったまま肘を曲げてびよんぴよんと飛び跳ねて喜んでいて、非常に危険極まりない。

「やった！ 出来た出来たー！」

「お、おい木綿季！ 嬉しいのはいいが包丁持ったままはしゃぐなー！」

「え……？ あ……、ごめん……なさい……」

包丁を持っているのを忘れたまま飛び跳ねてしまったことを注意された木綿季は、自分が何をしたかということに気付くと途端にしおらしくなってしまう、口をとがらせて首を垂れてしまった。翠は一瞬神経がヒヤリとしたが何事もなかったこともあり、ほっと胸を撫でおろしていた。

「木綿季、包丁は便利だけどすっごく危ないものなの。怪我をしたからってゲームみたいにすぐ治るわけじゃないの、むしろ治らないぐらいの大怪我を負う危険性もあるのよ？　だから、くれぐれも気を付けて使って頂戴ね……？」

「は、はい……ごめんなさいお母さん……、気を付けます……」

「うん、よろしい。……そしたら私がここで見てあげること全部やってみなさい」

「りよ……了解！」

自分の両頬をパァンという派手な音を立てて平手打ちをして気合を入れなおし「よし！」と気持ちを改めて再び両手に赤身と包丁を握りなおし、赤味に包丁を入れていった。始めこそ動きがぎこちないままだったが、少しずつ回数を重ねていくうちに段々と動きがそれらしくなっていく、翠ほどの包丁さばきとまではいかないがかなり要領よく刺身を作っていた。

「これなら最後までやれそうね。木綿季、その調子で頑張つてね」

「……うん！」

「直葉、悪いのだけれどお風呂を沸かして頂戴、和人はあの人にいつ頃こつちに着くか連絡をいれてくれないかしら？」

翠が直葉たちに指示を飛ばすと二人とも「了解！」と返事を返し、晚餐前の最後の仕事へと赴いていった。これで木綿季が刺身を切り終えれば、峰嵩を迎え入れる準備はすべて完了となる。あとは肝心の峰嵩が無事帰宅するのを待つばかりなのであった。

翠は食卓の椅子に腰かけながら木綿季の包丁さばきを見守っていた。木綿季は真顔で包丁、赤身、自分の手にじゅんぐりに目線を移しながら次々にマグロの刺身を作っていた。ストン……ストン……と包丁とまな板が接触する独特の心地いい音がキッチンとダイニングに響いていた。やがて塊だったマグロの赤身は木綿季の包丁でお手頃サイズに切り落とされ、全て刺身へと変わっていた。

「やった……全部切れた……!」

「お疲れ様、木綿季」

木綿季は先ほど言われた注意の通りに今度はしつかりと包丁をまな板の上に置き、翠に向かって満足のいく結果が残せたよと言わんばかりのほっこりとした笑顔を見せていた。その木綿季の笑顔を見た翠も同じように笑顔で返事を返すと、木綿季に歩み寄り、前のめりに身をかがめて娘の頭にポンと右手を乗せて「よく頑張ったわ、木綿季」と言いながら優しく撫で始めた。

翠から初めて撫でてもらった木綿季は視線を落とすつつも嬉しくなり、顔を赤らめながら碧の手の感触を楽しんでいた。やがて木綿季は翠に身を寄せて彼女の背中に手をまわし、母親の胸に自分の顔を埋めて甘えていた。先ほどまで刺身を切っていたので両手とも濡れてしまっていたが、翠は気にせず、拒否することもなく優しく受け入れ、左手で木綿季の背中をポンポンツと優しく叩いていた。

「……お母さん、ママと同じにおいがする、優しいにおい……」

「ママ……、紺野さんのご両親……?」

「……うん」

「木綿季のご両親って……どんな人だったの?」

「んかね、すっごく優しくかったよ? でも……家族全員がHIVに感染してるって判明したときはね、一度一家心中しようとしてたんだ……」

「……え?」

一家心中というワードを聞いた瞬間に翠の顔が強張った。だが無理もない、治る確率が天文学的にまで低いHIVに家族全員が感染してしまったとなってはまず未来はない。そもそも木綿季だけでも助かったということが奇跡に近いものだ。和人が計画を練りに練り、計算して完治の方向までレールを敷いたとしてもだ。それぐらいにH

IVは重たく、厄介なものなのだ。

「でもね、ボクも含めて……全員ギリシタンだったからさ、自殺するよりも家族全員で病氣と闘う道を選んだの。周りの人達は……そんなボクら家族に嫌がらせとかしてきた」

「……………」

「やがて、パパとママはボクたち姉妹を残して先に死んじやった。それから姉ちゃんも必死に病氣と闘ったんだけど、二年前にボクの傍からいなくなっちゃった」

「……………木綿季ッ」

倉橋からある程度紺野一家のあらましは聞かされてはいたが、いざその当事者の一人である木綿季本人からその凄惨たる過去を聞かされると、改めて言葉に詰まる思いがした。自分の考えていた以上に紺野家の……いや木綿季の闇は深かった。翠はなんて声をかけてあげたらいいかわからなかった。母親としては、ここで優しく声をかけてあげ、元氣づけてあげなければならぬところだ。しかし翠にはそれが出来なかった。

何故ならどことなく、木綿季から見えない「壁」のようなものがあるのを感じていたからだだった。確かに木綿季は桐ヶ谷家の人間のことは心から信頼してくれている。翠のことをお母さんと呼び、本当の家族のように接してくれている。……いや、既に本当の家族そのものだった。しかし、どことなく少し、あくまでほんの少しだが……僅かによそよそしいような感じがしていた。心のどこかに「何か」が引っかかっているような、そんな印象が感じられた。

「でもね、ボクは今幸せなんだ。和人がいて、直葉がいて、お母さんやお父さんもいてくれて、毎日がすつごくすつごく幸せなんだ……」

「……………ゆう……………き……………」

翠は力いっぱい木綿季を抱き締めていた。今すぐ抱き締めなければ

ばこの目の前の少女が壊れてしまう気が、この世界から消えていってしまう気がしたからだ。木綿季は先程より深く、翠の温かい胸に自分の顔を埋めて母親からの愛情を受け止めていた。本当に心から満足そうな、幸せそうな表情を浮かべていた。

「ありがと……おかあさん、ボク……おかあさんから愛してもらって……本当に幸せ……」

「私もね、木綿季がこの家に来てくれてから……すつごく毎日が楽しいの。あなたは間違いなく私たちの家族よ、木綿季……」
「……ウン、ありがと……」

翠の木綿季への愛は本物だ。血は繋がっていないなくても本当の親子のように愛を注いでいる。それは紛れもない事実だ。木綿季も翠からの想いは嘘偽りのないものだとわかっている。しかし木綿季自身も心の中で何かが引つかかっているのは薄々感じていた。……いや、わかっていた。この自分の心の中で引つかかっている「何か」それは……。

（ボク、多分……パパやママ、姉ちゃんのことをまだ引きずってる……のかな。そりやあちゃんとしたお別れをしたわけじゃないしお墓参りだって出来てない。でもここのお家の人達はボクのことを心から愛してくれてる、本当の家族として接してくれてる。それは分かっている、わかっているんだよ。でも……でも……！）

——それじゃあ何で、こんなに心がズキズキ痛むのさ——

翠と木綿季が抱き合っていたその時、家の固定電話で峰嵩に連絡をし終えたであろう和人が玄関から近付いてくる足音が聞こえてきた。その音が耳に入った木綿季と翠は慌てるように互いの体を離し、必死に流した涙を拭い何事もなかったかのように振舞った。木綿季は先ほど切った刺身を皿に盛り付け、翠はパックなどのゴミを片付けよう

としていた。二人がそれぞれ作業に戻った瞬間に、いいのか悪いのかわからないタイミングで和人がダイニングへとやってきた。

「お待たせ、父さんもうIC抜けたってさ、あと15分ぐらいでこっちに着くんだと」

「そ、そう……、ならなんとか間に合ったって感じかしらね」

「う、うん。ねえねえ、お刺身全部切り終えたよ、見て！ 和人！」

「お、おお……？」

先ほどのまでの引つ掛かりを心の奥底に仕舞い込み、木綿季は切り終えたばかりのマグロの刺身の乗った皿をこれ見よがしに和人の顔の目の前まで持っていった。和人は一枚一枚刺身をまじまじと見つめると「厚さがバラバラだな……」と周りに聞こえるか聞こえないか程度の小声で悪態を吐いていたが、木綿季の耳にしっかりと入ってしまった。口をとがらせてムスツとしてしまっていた。

「ぶー……、でもボク頑張ったもん……」

「うふふ、そうね……木綿季頑張ったものね」

「まあ俺はわさびつけまくるからあんまし厚さは関係ないけどな……」

「……むしろそれならわさびだけ食べてなよ……」

「……それもいいな……！」

和人の生粋の辛い物ジャンキーっぷりに開いた口がふさがらない木綿季と翠であった。何とも言えない苦笑いを浮かべ、こめかみをピクピクと震わせ、呆れを通り越して唾然としていた。本当に辛いものなら何でもいいのか、この男は……と思っていた。誕生日プレゼントにあらゆるスパイスでも送りつけければ狂喜乱舞するのではないだろうか？

「まあ……和人の味覚の話はともかく、木綿季もお疲れ様。あとは私

がやっておくから、あの人が帰ってくるまでゆっくりしていいわよ？」

「あ……うん、じゃあそうさせてもらおうね」

「なら俺らの部屋で休むか」

「うん、いこつ」

翠は二人に暫くゆっくりしていいと促すと、晚餐の準備で出たゴミやもう使わないまな板やボウルなどの調理器具の後片付けを始めた。ゴミは白いビニール袋にまとめてゴミ箱に放り込み、調理器具はしっかりと洗剤でこすり洗いをしていた。

晚餐の後の食器も含めるとかなりの量になるので、今のうちに片付けられるものは済ませておこうという算段だった。木綿季の自分たちへの違和感を感じていながらも、目の前の仕事はしっかりとこなす、大人としての役割はしっかりと果たす翠であった。

和人と木綿季は颯爽と階段を登ると、二階に備え付けられているトイレの洗面所で手洗いを済ませ、和人の部屋へと落ち着いていた。ずっと立ち仕事をしてきた木綿季と和人はすっかり疲れてしまい、部屋に入るなり一目散にベッドに仰向けにダイブしていた。ベッドは和人たちが飛び込んだはずみでバインバインと弾み、その弾みで二人の身体が上下に揺らされていた。揺れが段々収まってくると二人は大きく息を吸い込み、また大きく吐き出していた。

「ふう……ひとまず大仕事は終わったな、あとは食べて風呂入って寝るだけだ」

「え、和人にはお父さんの晩酌の相手があるんじゃないの？」

「う……そうだった……。変な話題で絡まれなければいいんだけどな……」

「あはは！ それも和人の役目なんじゃないの？ 多分男同士じゃないと話せないようなこととかあるんじゃないかな」

「……それもあるとは思うけどな、なんだったら木綿季が相手してくれよ」

「えっ、ボ……ボク!？」

和人はいつもは自分がやってる峰嵩の晩酌と言う名の愚痴の付き合いを、木綿季にやってくれと提案を持ち出した。和人自身があんまり父親の愚痴を聞きたくないというのもあるが、電話でしか峰嵩と話をすることがない今の木綿季にはコミュニケーションを取る絶好の機会だと踏んだのだ。

それにきつと峰嵩の方も可愛い三人目の子供である木綿季と話をしたいに違いない。晩酌の話を持ち掛けられた木綿季は物思いにふけたかのように胸に手を当てて仰向けの姿勢のまま、じつと部屋の天井を見つめていた。

「……………」

「なんだ、嫌……なのか？」

「……そうじゃないんだ、ボクだってお父さんといっぱい話したいよ」

「……んじゃあどうしたんだよ」

「……………」

木綿季はゆっくりと目を閉じ右腕を脛の上に乗せ、しばらく考え込んだ。この心のひっかかりの正体、それは以前の家族である両親や藍子……紺野家への未練であった。桐ヶ谷家という温かい家庭に迎え入れられ、再び幸せを手にできた木綿季であったが、以前の家族のことを忘れたわけではない。それどころかちゃんとしたお別れをしていない、言うなればけじめをつけていないということなのだ。

「……ねえ和人、聞いてくれる……?」

「……言ってみな、聞いてあげるよ」

「ありがと……」

和人は寝ている体の上半身を起こし、両手を自分の背後に立て、首

だけ木綿季の方向を向いて彼女が話してくれるのを待った。木綿季はしばらく無言で考え込み、心の整理がついたのか腕を顔からどけて顔をゆつくりと開き、静かに語り掛けるように口を開いて話し出した。

「和人、ボクね……今悩んでることがあるの」

「悩んでること……？」

「……ウン。あのね……ボクさ、多分なんだけどまだ前の家族……パパやママ、姉ちゃんのことと心にひっかかっていることがあるみたいなんだ……」

「……」

「あ……でもね、和人や直葉、お母さんのことはすつごく大好きだよ？」

「こんなボクを迎え入れてくれたことにすつごく感謝してるし、皆のこと本当の家族だと思ってる。でも……」

「でも……？」

和人が優しく声を返すと、木綿季の瞳に涙が浮かび始めていた。やがて木綿季の瞳の許容量を越え、溢れ出ると頬を伝って重力に引っ張られ二人の寝ているベッドを濡らした。それが何の涙なのか、何故自分が泣いているのかは、木綿季にはわからなかった。

「何だろうね、何で涙が出るのかボクでもわからないの。和人たちに優しくしてもらって嬉しいから泣いているのか、姉ちゃんたちがいなくなっちゃって寂しくて泣いているのか、もう……わかんないの」

「……木綿季……」

「……明日の養子縁組のことともそうなの……」

木綿季は溢れ出る涙を上着の袖で拭うと、ベッドから上体を起こし、両腕を膝の上に重ねてしばらく黙り込んだ後、少しの間を置いて再びゆつくりと口を開きだした。今自分が想っていること、感じていることを、和人に語り明かした。

「ボクね、わからないんだ。明日の養子縁組で “紺野” と “桐ヶ谷” どちらの姓を名乗ったらいいのか……」

「ちよつと前まではね、和人たちと同じ “桐ヶ谷” を名乗ろうと決めてたの。でも……さつきお母さんに抱き締めてもらったときに、ママのこと思い出しちゃって……」

「木綿季の……本当のお母さんのことか……」

「……ウン、お母さん……ママとおんなじにおいがしたの。優しいにおいが……、そしたら途端に……前のお家で暮らしていた時のことが忘れられなくなってきて……」

引つ込みかけてた木綿季の涙は語っているうちに再び瞳から零れ落ちていた。言われてみれば確かにそうだ。新しい家族が出来たらとっておいそれと以前の家族との関係を忘れられるはずがない。年月の問題だけではないが、今の明日奈や和人たちよりもずっと長く、一番近くで木綿季を支えてきた大切な家族だ。むしろそれはちやんとしたお別れを出来ない分後悔や未練の方が大きいだろう。たとえば木綿季本人にその機会が与えられてなかったとしてもだ。

「ボクね、どうしたらいいかわからなくなっちゃった。この家に本当にボクがいていいのか、このまま生きていていいのかとか……」

「なっ……木綿季、お前……」

かつてないほどの弱気な態度を見せた木綿季の姿に、和人は居ても立っても居られなくなり、たまらず木綿季の両肩をがしつと掴み、そのまま勢いよく自分の胸へと寄せて力強く抱き締めた。和人は木綿季の言い放ったことに怒りを感じていた。この家においていいか？

「いいに決まっている。生きていていいのか？ いいに決まっている！ そのために俺は今まで頑張ったんだ、このいたいけな女の子を守るために、がむしやらに突っ走ってきたんだ。その今まで積み重ねて

きた努力を、当の本人自ら否定されているような気がして許せなかった。

「馬鹿野郎……いいに決まってるだろ！　ここはお前の家だ、お前は俺の家族だ！　だから……いていいんだ！　俺たちと一緒に……生きていていいんだ！」

「……かずと……」

「だからもうそんなこと言わないでくれ……！　お前がいなくなっちゃったら俺は……俺は……ッ！」

和人の眼にも涙が浮かび上がっていた。木綿季を抱き締めている腕はふるふると震えてしまい、先の木綿季の発言に動揺を隠せないでいた。木綿季の闘いはHIVが治りリハビリをこなして退院して終わりだと思っていた。しかし、木綿季が普通に生きてくたためには乗り越えなくてはいけない壁がまだまだたくさんあったのだ。姓のことも、以前の家族のことも、これからどうやって生きていくかということも……。

「……ごめん、ごめんね……かずと……」

「今度そんなこと言ったら、許さないからな……」

「うん、ごめんね……、ありがとう……」

実の両親、藍子、明日奈、翠、倉橋等、木綿季はたくさんの人達から愛をもらっていた。しかし、やはり和人からの愛が一番嬉しかった。抱き締めてきた和人の身体は温かかった、安心出来たし一番「誰か」を近くに感じる事が出来た。この家においていいかと思っただ木綿季であったが、やはり和人がいてくれないと何も出来ないということとを改めて感じていた。

しかし、だからといって心にひっかかるものがあつたのも事実だ。それが取れない限りは、恐らく気持ちよくこの家で暮らすことなど出来ないだろう。そう、やはり何らかの形ではじめをつける必要がある

あった。以前の家族である「紺野家」とのけじめを。でなければ養子縁組届を出して正式に桐ヶ谷家の一員になったとして、本当の意味での家族として触れ合っていけないだろう。

「なあ、木綿季はどうしたい?」

「え……?」

「これから木綿季がどうしたいか、言ってみな……」

「あ、え……、えっと……」

和人が優しく問いかけると、木綿季は今の自分がやりたいこと、やっておきたいことを考えた。このモヤモヤを消し去る為にはどうしたらいいか、これから何をすべきかというのを考えていた。暫くの間無言でじつくりと考えていた。二人の部屋は静まり返り、時計の針が「チツチツ」と秒針を進める音だけしか聞こえなかった。木綿季は暫く黙り込んだ後、心の整理がついたのか、今自分が考えたことを和人に打ち明かした。

「あのね和人、養子縁組の件、もうちょっとだけ待ってほしいんだ……」

「……待ってほしい?」

「やっぱりボク、姉ちゃんたちのことが……ほんのちよつとだけ心で引っかかっているみたいなんだ。だから今になってどっちの姓を名乗るか、悩んじゃってるんだと思うの」

「……そう……なのか……」

「ごめんね、こんな突然に……」

「いや、無理もないさ。姓が変わるってのはそんなに軽く済ませていような問題じゃない、悩むのは当然だ……」

「そこで……さ、ちよつと相談なんだけど……いいかな?」

「今更畏まるなよ、俺に出来ることだったなら何だつてやってやるぞ」

木綿季は和人が恋人で、家族で良かったと心から思っていた。こん

なボクのためにここまでしてくれて、これっぽっちも迷惑だなんて思っていない。今回の件だって単なるボクのがままだ、だけど和人は快く聞いてくれる。本当に嬉しい、さつきはあんな弱音を吐いちやっただけど、やっぱりボクは和人達と、桐ヶ谷家の皆と一緒にいたい。それなら……つけるべきけじめはしつかりとつけないといけない、そのためには……。

「ありがとう和人、えっと……実はね……」

木綿季は自分の顔を和人の顔に近付け、口を和人の耳元まで持っていき、ささやくように小声で話して聞かせた。この部屋には二人しかないので誰かに聞かれてしまうといったことはないが、抱き締められてたことと、顔が近くにあったことから、つつい耳の近くでささやいてしまった。

和人は木綿季からの相談を聞き届けると、安心させるように木綿季の左肩を右手でポンと叩き、笑顔で木綿季からの相談に前向きな姿勢を取った。木綿季は和人の表情から、肯定的な態度を取ってくれたんだと安心していた。そして、やっぱりボクは和人のことが何よりも大好きなんだな、ということも感じていた。

「ごめんね、迷惑かけちゃって……」

「気にするなよ、お前のためなら……俺は何でもやってやるから」

「……嬉しいな、本当にありがとう和人、大好きだよ……」

「俺も木綿季が……大好きだ……」

「……ね、キスして、和人……」

「……………」

「ンンツ……!」

和人は下から覗き込んできた木綿季に口づけを求められると、左手はそのまま彼女の背中に当てたままにし、右手を後頭部にあて、目を瞑って自分の方へと抱き寄せ、半ば強引に一気に木綿季の唇を奪っていった。木綿季は甘い声を出しながらも全てを和人に委ね、強引な彼にされるがままになっていた。口付けは十数秒続き、ほどなく時間が経過すると和人は木綿季から唇を離していた。

和人に唇を奪われた木綿季は顔を赤らめて放心してしまっていた。自分から口づけを求めてきたにもかかわらず、前よりも強引な和人の態度にいつもよりも心臓がドキドキしてしまっていた。まだ唇に和人の体温が残っている木綿季はそつと手をあて、口付けの余韻に浸っていた。

「……木綿季？」

「……へ？」

「大丈夫か？」

「あ……う、うん。大丈夫……ありがとう和人……」

「……温かかったな、木綿季」

「和人も……ちよつと強引だったけど、ちゃんと優しくかった」

一週間ぶりに互いの唇を重ねた二人には、恥ずかしいながらもほっこりとした笑顔が浮かんでいた。和人からの愛情をいっぱい受け取った木綿季には先ほどのもやもやは少しだけなくなっていたようだった。現実世界も仮想世界も合わせてこの退院してからの一週間は、非常に濃い毎日であった。病院の中と外での違いがこんなにも差があるとは思わなかった木綿季は、少し疲れていただけなのかもしれない。

「えへへ……♪」

「母さんや父さんたちに言わないとな。二人とも明日にも養子縁組届を提出するつもりだったから、きちんと事情を説明しないと」

「うん、そうだね……。あと倉橋先生にも連絡取らないと……」

「それは母さんたちに話してからでもいいだろ。大丈夫だ、待つてくれるよ」

「……うん、ごめんね、何か……」

「いいよ、気にするなつて」

和人はばつが悪そうにしている木綿季の頭を右手でさつと優しく撫でていた。木綿季は目を閉じ和人の掌を受け入れていた。そして暫く木綿季が和人の手の優しさを感じていると、窓の外から車のエンジンの音が聞こえてきた。その音は段々と大きくなつてきており、和人達のいる部屋のすぐ下の方まで近づいてきた。その音は、和人がよく知る車のエンジン音であった。そう、父親である峰嵩が普段。プライベートから出張の時まで乗り回している桐ヶ谷家のマイカーの音だった。

和人と木綿季は音の正体を確かめるために部屋の窓に身を寄せて、自宅敷地内の玄関先へと視線をやった。そこには和人のよく知る六人から最大八人ほどまで乗り込める白のワンボックスカーが駐車しようとしてバックしてきている光景が目に入った。木綿季は玄関先で前後に行ったり来たりしているワンボックスカーをきよとんとした目で見つめていた。

「ねえ和人、あれつてもしかして……」

「ああ、帰つてきたな、酔つ払いが……」

「よ、酔つ払いつて……まだお酒飲んでないでしょ」

「ははは、それもそうだ。よし出迎えに行くぞ」

和人はそう言うで一足先にベッドから足を降ろし、峰嵩を迎えるためにそそくさと部屋を出ようとした。その姿を見て慌てた木綿季は「お、置いてかないでよー!」と言葉を漏らしながら我先に一階に行くこととして和人を追いかけていった。

一階に降りてみると和人たちと同じように車のエンジン音に気付いたのか、直葉と翠も同じように玄関に足を運んでいる様子が見て伺

えた。どうやら考えていることは同じようだ。和人は翠たちとアイコンタクトを済ませるといつ峰嵩が玄関の扉を開けてもいいように横一列になるようにして並び、峰嵩の到着を待った。家の玄関の前には、扉越しに後ろ向きに停車している車のブレーキランプの光が、桐ヶ谷邸の入り口周囲を赤く染めている様子が見えていた。

「き……緊張してきた……！」

「大丈夫だよ、父さんは見た目はアレだけどとても気さくな人だから」「そうよ、あの人……今の職に就く前は嘶家やつてた時期もあつて、とつても面白い人なのよ」

「誰だったっけ、確か……三遊亭なんとかって人」

「五代目三遊亭圓樂師匠だよ、だから父さんに酒飲ませたくないんだよな……喋りまくるから……」

「ほえ……お父さんって落語家だったんだ」

「前座止まりだったんだけどね、あの頃はあの人も夢を追いかけたたのよ」

翠がああ頃が懐かしいわと言わんばかりの表情で佇んでいると、玄関先に停まった車のエンジン音が鳴りやみ、それと同時にブレーキランプとフロント部分のロウビームの灯りも消えていった。そして運転席のドアを開ける音がし、すぐにボタンと閉める音があたりに響き渡った。やがて扉の外には人影が浮かび上がり、ゆっくりと確実に和人たちの待つ玄関へとザツザツという足音と共に近づいてきた。

やがてその人影は扉の取っ手に手を伸ばしガラガラという音を立てながらスライドさせて開いた。するとそこには地面から190センチほどの高身長に白髪が混じった短髪のヘアスタイル、コワモテながらもどこか優しさが漂う顔、しつかりとしたガタイをしつつもすらっとした体に紺色のビジネススーツと明るいブラウンのトレンチコートに身を包み、左手にビジネスバッグを持った四十代前半ぐらいの男性が姿を現した。

そう、この男性こそが桐ヶ谷家の大黒柱であり、翠の夫であり、和

人と直葉、そして木綿季の父親である桐ヶ谷峰嵩その人であった。年相応の堅物さを感じさせつつも、どこことなくフランクな空気が漂い、仕事面では部下からも上司からも好まれそうな、家では愉快的父親として家族全員から愛されていそうな雰囲気を感じ取れた。

「ただいま……」

「おかえりなさい、あなた。長い間ご苦労様でした……」

まずは妻である翠が数ヶ月ぶりに自宅へと帰ってきた夫の長期間の労をねぎらった。峰嵩は上着を脱いで鞆と一緒に翠に手渡すと玄関のあがり框に背中を向けて腰を下ろし、使い込まれた黒い革靴を脱いで下駄箱に仕舞うと、近くに立てられてるスリッパラックからグレーのスリッパを取り出して足を通した。

「おかえり、父さん」

「おかえりなさい、お父さん！」

翠に続いて長兄である和人、次姉の直葉が父親の帰宅を歓迎した。久方ぶりに見る父親はとても大きく感じた。この父親が桐ヶ谷家を支えてきたのだ。家にいる時間こそ多いとは言えないが、毎日毎日家族の為に必死に働き、汗を流して収入を得ているのだ。和人たちもそんな峰嵩の苦労がわかっているのだから、家族サービスが少ないとしても、決して文句は言わなかった。むしろ自分たちの為に毎日ありがとうと、お礼を言いたいぐらいだった。

「ただいま、和人、直葉」

峰嵩は静かな口調で自分を出迎えてくれた息子と娘にただいまの挨拶をすると父親らしい温かい笑顔で受け入れた。そのやり取りを数歩離れたところから少し戸惑うように木綿季が見つめていた。その視線に気付いた峰嵩はゆつくりと木綿季に歩み寄り、ただいまの挨拶

撈をするために彼女の身長に合わせるように前のめりになり、目線の高さを木綿季に合わせた。木綿季は少し戸惑いながらも父親と挨拶を交わすために両手をお腹の位置で重ね合わせて口を開き始めた。

「お、おかえりなさい！ おとう……さん」

「うん、ただいま、木綿季」

自分の想像以上に背丈も肩幅も大きかった峰嵩の姿に動揺の気持ちを隠せない木綿季であったが、峰嵩の笑顔を見るとそれまで抱いていた緊張感が少しずつ和らぎ、自然と笑顔が零れていた。よかった、和人の言っていた通りだ、ちよつと怖くておっかないかもって思ったけどすつごく優しそうなお父さんだ。

「直接は初めまして……だね。私が和人達の父親の峰嵩です、今日からよろしく……木綿季」

峰嵩はそう言いながら木綿季を怖がらせないように先ほど以上に精一杯につこりと笑い、右手を差し伸べて彼女に握手を求めた。峰嵩は手も大きく、木綿季の手をすっぽりと覆ってしまうほどで、木綿季は両手で峰嵩の手を握っていた。彼の掌や手の甲にはシワや肌荒れが見受けられ、年相応の中年男性らしい手といった感じだった。

だが木綿季はそんなことはどうでもよかった、この目の前の父親の大きな手を見ると不思議と安心出来た。この手が今まで和人や直葉を守ってきたんだと思うとももの凄く暖かく、頼りになるんだといった印象を感じられた。それはこのボクに対しても……変わらず続けていってくれるのだろうか。

「は……はい！ よろしくお願いします！ お父さん！」

「ははは、電話でも言ったけどもつと気さくに話しかけてくれて大丈夫だよ。まあ……こんな顔だからよく怖がられるけどね」

「そ、そんな、そんなことない……だよ！ お父さんすつごく優しくして

いい人だもんツ……ですツ」

「……クスツ」

木綿季が敬語なのかどうかよくわからない言葉で峰嵩をフオロースすると、おかしい言葉遣いに一行に笑い声が交わされた。木綿季もぎこちない自分の日本語が恥ずかしかったが峰嵩が楽しそうに笑っている姿を見ると、恥ずかしさより嬉しさの方が勝り、木綿季からも笑い声がこぼれまわっていた。桐ヶ谷家は全員集合早々に楽しい雰囲気となっていた。

「さて……あなた、お食事にしますか？ それともお風呂にしますか？」

「そうだな……風呂に入りたいところだが折角皆揃ってるんだ。今日は御飯をいただくかな」

「わかりました」

翠は峰嵩に返事を返すと彼の仕事用の鞆とトレンチコートを仕舞うために寝室へと足を運んだ。峰嵩は久しぶりに父親が帰ってきてご機嫌になっている直葉と早速仲良くなった木綿季に両腕を引っ張られながらダイニングへと連行されていた。本当なら寝室で私服に着替えてから食卓につきたかったのだが二人の娘がそれを許さなかった。和人はそんな三人を見つめ「やれやれ……」と言葉を漏らしながら後を追っていった。

娘二人にダイニングへと連行された峰嵩は帰宅して息つく暇もなく食卓の椅子へと座らされると、次から次へと何がなんやらと頭をぽりぽりとかき、困った様子で木綿季たちの動向を見守っていた。木綿季と直葉はそれぞれ刺身ととりつくね団子の元を両手に抱えて、峰嵩の目の前に自分が手掛けた献立をこれ見よがしに並べてみせた。

「お、マグロの刺身に鶏つくねか……嬉しいねえ」

「両方ともボクが作ったんだよ！ 初めてだったけどどううまく出来たんだ！」

「ちよ、ちよつと！ つくねはあたしも手伝ったじゃない！」
「でもボクの方がたくさんやったもーん！」

自分の方が貢献している、お父さんが喜ぶためのことをやってのけていると主張する木綿季と直葉のやりとりには、峰嵩は思わず「あははは」と笑い声を響かせていた。和人ととのやり取りにこのような光景はなかった。なんだか新鮮な気持ちが出て、とても楽しく感じられた。この先の桐ヶ谷家の毎日は今まで以上に楽しい日々になりそうだなどとも思っていた。

「いやいや、ありがとう二人とも。そこまで気持ちを込めてくれたんならきつと美味しいに決まっているさ」

「え……えへへ……♪」

「や……野菜はあたしが切ったよ！」

マグロを切ったのは木綿季かもしれないが、この色とりどりの野菜に包丁を入れたのはあくまでも自分と、木綿季に負けないよう手柄を主張する直葉であった。料理は自分の方が何歩も先を進んでいる身として、今の木綿季にはちよつと負けたくないという子供らしい気持ちが見れていた。

本当に峰嵩のことが大好きなのだろう、普通は家を長い間開けてしまっていると親子の間柄は段々と薄まっていつてしまうものだ。しかし桐ヶ谷家は違っていた、離れていても父と子の絆は揺るがなかった。それはきつと、和人と直葉がSAOの世界に囚われたという影響も少なからずあるだろう。あの事件を経て、現実世界で生きていけることの、普通の毎日を過ごさせていけることのありがたさを身をもって知ったからだ。

現に翠はひたすらに二人の帰還を待ち続けた。何かの間違いで死んでしまっていたかもしれない二人の子供の帰りをずっと信じて待っていた。峰嵩も気が気でない状態で会社に勤めていたことだろう、そしてやがて二人は現実世界へと帰ってきた。二年間の空白

は確かにあったが、その空白があったからこそ、今こうして昔以上に親子の絆を深められたのだ。

「そうか……、木綿季も直葉も私のために頑張ってくれたんだな。ありがとう」

峰嵩からの温かいお礼の言葉を受け取ると、木綿季はもちろん直葉にも笑顔があふれていた。そして三人が仲睦まじい父と娘のやりとりをしていると、後から遅れてやってきた和人と、寝室に峰嵩のカバンと上着を置いた翠がダイニングへと足を運び、食卓に腰を落ち着けた。

長い食卓には一番奥の端に本日の主役である父親峰嵩、そこから時計回りに母親翠、その隣に次姉の直葉。反対に回って末妹の木綿季、そしてその隣に長兄和人の順番で並んでいた。翠は一足先に木綿季が作ったつくねの元を鍋に放り込み、他の家族に飲み物を配り始めた。

和人ら未成年組と翠は烏龍茶やカルピス等のソフトドリンク、峰嵩は一杯目に強い日本酒をいただこうとしていた。峰嵩がおちよこを人差しと親指だけで持つと、慣れた手つきで翠がとっくりから透明で透き通った日本酒をちよろちよろと注ぎ始め、おちよこの口から5ミリほどの位置まで注がれたところで注ぐのをやめた。酒を注いでもらった峰嵩は「ありがとう」と一言だけ感謝の言葉を送り、子供たちが自分のグラスに飲み物を注ぐのを待っていた。

「ようし、全員そろったか？」

和人が椅子から立ち上がり、全員に飲み物がいきわたったことを確認すると、左手を口元に当てて「ゴホン」とわざとらしく咳ばらいをし、右手にグラスを持ち、左手を背後に回して乾杯の音頭を取ろうとしていた。酒を飲まない組は和人と翠が烏龍茶、直葉と木綿季がカルピスをグラスに入れて和人からの言葉を待っていた。

「それでは、父さんの長い長い出張の終わりへと、木綿季が新しい家族の一員になったことを祝しまして……」

一足先に和人が音頭のセリフと共にグラスを掲げると、それに釣られるように峰嵩ら残りの四人も合わせて飲み物の入った器を同じように掲げた。次の和人からの合図を待ったために、桐ヶ谷家のダイニングは一瞬だけ静まり返った。和人は全員が器を掲げていることを確認すると大きく息を吸い込み、喉と肺に力を込めて精一杯の乾杯の合図を送った。

「乾杯ッ！」

「かんぱあーいッ！」

「かんぱーい！」

「かんぱい！」

「乾杯！」

和人が乾杯の合図を送ると、残りの四人が一斉にそれに合わせ互いの器をコツンコツンという音を立てながら次から次へと乾杯を交わしていった。和人らグラス同士は勢いよく、峰嵩の持つ小さなおちよこには手加減して器を当てていった。中でも木綿季は楽しそうに皆と乾杯を交わしていった。家族が全員集合したことと、この楽しく温かい場に自分もいられることを嬉しく感じていた。このひと時だけは、先ほど感じていた心のひっかかりは気にならなくなった。

「ねね、お父さん！ お刺身食べてみて！」

「お……、それじゃあいただこうかな」

峰嵩は自分の傍に置かれているマグロの赤身を箸で掴み、あらかじめ翠が鮫肌おろしですっておいたわさびを乗つけて醤油を絡めてそのまま口へと運んだ。すると口へ入れた途端に鼻を貫くようなつー

んとした辛さに襲われ、目を瞑り涙を浮かべて辛さに耐えていた。この鮫肌おろしですりおろしたわさびは、普通のおろし金ですったわさびとは辛さも舌ざわりも全然違うものになっている。

ふつうのおろし金より摩擦面が細かくなっている鮫肌おろしはわさびをより細かく丁寧にすりおろせるのだ。その小さくすられたわさびから感じる辛さと奥深さは他では味わえないものとなる。わさびも醤油に混ぜ合わせるのではなく、身に乘せたまま口へ運ぶと、より刺身とわさびの相性は最高となる。一度お試しあれ。

「くぅ〜……美味しい！ これは日本酒が進むよ、木綿季」

「ほ……ホント!? えへへ……やった♪」

海の幸と最高の相性を持つ日本酒をご機嫌で口に運ぶ峰嵩から素直に褒められた木綿季は心の底から嬉しくなっていた。わさびの手助けもあっただろうが、木綿季が初めて包丁を入れた献立を、峰嵩は美味そうに食べ、日本酒も一杯、また一杯とどんどん進めていった。娘からの初めての贈り物に大変にご満悦といった様子だった。

「私たちもいただきましょう」

翠はそう言うのと菜箸で豚肉を掴み、次から次へと鍋に投入していった。高温の鍋の中に入れられた豚肉は真っ赤な色からピンクへと変色していき、あつという間に真っ白になっていった。次々に火が通った豚肉を子供たちがつつき、自分の好みのタレが入った取り皿に入れて翠と直葉は葱ポン酢、木綿季と和人、そして峰嵩はゴマダレに肉を漬けこんでいった。程よく煮えた豚肉にあっさり風味の葱とポン酢、そして濃厚な味わいのゴマダレが絡み、肉汁と共に小皿に滴り落ちていた。

肉の素材独特の風味とタレが絡み合った濃厚な香りが、湯気と共に桐ヶ谷家の天井に立ち上っていた。最高級の黒豚、それだけで食欲をそそのるのには充分だというのに、それをタレに漬けると更に美味さの

世界が広がる。しゃぶしゃぶを編み出した人は天才と言えるだろう。和人は自分の小皿のタレに肉を絡め、ゆつくりと口へ運んで黒豚のしゃぶしゃぶを味わっていった。口に入れた瞬間に熱々の豚肉から肉の旨味、タレの旨味がジューツと広がり、絶妙に重なり合い、何とも言えないハーモニーを奏でていた。

「ん〜〜……、美味しいー！」

「本当、すつごく美味しいよお兄ちゃん！」

「そりゃ最高級の黒豚だからな、美味しいに決まっている」

「ほう……大分奮発したんだな、母さん？」

「うふふ、今日は特別な日ですもの……♪」

「……ふふ、そうだな……」

峰嵩が今日飲んだ酒は普段とはまた違って格別の美味さだった。久しぶりに帰宅し、木綿季という新しい家族を迎え、その娘が長い勤めの労をねぎらってくれた。美味くないはずがない。この桐ヶ谷家という家庭に新しい風を吹かせてくれるかもしれない木綿季の家族入りが嬉しかった。今までになかった新しい「楽しさ」をもたらしてくれるに違いない。

「あー和人！ だめだよ！ それお父さんに食べてもらおうと狙ったのに！」

「な、何を言う！ 俺の近くにあつたんだからこれは俺のもんだぞ！」

「だめー！ お父さんのだよ！ 返してー！」

「やなこつたっ！」

程よく煮えたい頃合いのつくねを、和人と木綿季が醜く取り合っていた。どうやらこの鍋の中で一番大きく、食べごたえのあるつくねを狙っていたようだった。それをたまたま自分の傍で煮えてたのをいいことに和人がすつと自分の取り皿に入れてしまったのだ。木綿季はそれに偉くご立腹といった様子だった。

その兄妹らしい微笑ましいやり取りを峰嵩は日本酒をひっかけながらにつこりと見守っていた。ほらやっぱり、こうやって楽しい風を吹かせてくれる、きつとこれからだって楽しくなる。こいつは……これから先はあまり出張には行きたくなくなってきたな、なんとか支社勤務にならないかと思っていた峰嵩であった。

「ああ！ それボクが狙ってたお肉！」

「ふふふ、悪いな木綿季君、しゃぶしゃぶは戦争なのだよ」

「か……返してよー！」

「いやだつての！」

その夜の桐ヶ谷邸は、今までのどの時よりも騒がしく、楽しい晩餐となった。毎日がこうなるとは限らないが、楽しい思い出は一日一日、こうやって積み重なっていくのだろう。そしてそれを気持ちよく過ごしていかれるようにするためにも、木綿季は過去との決着をつける必要があった。

しかしそれは今この瞬間だけは忘れても構わないだろう、折角家族五人全員が揃ったのだから、楽しい時間の中にいるのだから……。

第60話く本当の家族 前編く

西暦2026年11月1日 日曜日 午後20:45 埼玉県川越市 桐ヶ谷邸

夕刻から続いていた桐ヶ谷家の楽しい晚餐は慌ただしくも非常に楽しい時間となった。隣同士で座っている和人と木綿季による鍋の具や刺身等、目玉となる食べ物の醜い争奪戦が繰り広げられたりしていたが、今宵の家族五人による晚餐は大いに盛り上がり、大変に充実していた。

木綿季は途中から和人と席を代わると、峰嵩と楽しく父と子の会話にいそしんでいた。今まで病気と必死に闘っていたことや和人に助けてもらったこと、友達や仲間を支えられて今がとつても充実していること等、実に楽しそうに会話のキャッチボールを交わしていた。とても初対面とは思えない自然な親子のような微笑まじきがあつた。

木綿季は自分のことを楽しく話し、峰嵩もビールを片手に上機嫌で木綿季の話を聞いていた。天真爛漫、純粹無垢で元気いっぱいいな木綿季との話は実に楽しく飽きない。エメラルド色をした枝豆をつまむ左手も休むことを知らず、次から次へと口へ運んでは右手のビールを胃に流し込んでいた。こうなると元嘔家というだけあって、喉からどんどん声が出てくるというものだ。活発で明るい性格の木綿季もあり実に相性が良いと言える。

「わはは！ そうか、そいつは良かった！」

「うん！ それでねそれでね……！」

ふと気が付くとダイニングにいるのは木綿季と峰嵩、そして洗い物の後片付けをしている翠だけとなっていた。洗剤をスポンジにつけ、食器をゴシゴシと洗い傍らにカチャンという音を立てて次々に重ねていった。和人は木綿季の邪魔をしては悪いと思ったのか部屋に先に退散し、直葉もお風呂タイムへとしやれこんでいた。

「あなた、楽しいのもお酒も結構ですけどそこまでしたらどうですか？ 明日皆でお役所にいくのでしょうか？」

「お？ む、むう。そうだな……、うーむ、もっと話してたいが……そうだったよな……」

「あ……もうこんな時間なんだ」

翠にそろそろいい加減にしたらと諭された二人が時間を確認すると、時計は夜中の21時前を指していた。現在の時間を見た二人はまだまだ話していたい、親子としてのやり取りを続けていたいと満足いかない様子を見せていたがそうもいかない。本来の予定の上では木綿季の養子縁組届を提出しに市役所に行くことになっているし、木綿季としても明日の予定変更のことを峰嵩と翠に、そして倉橋に伝えなくてはいけない。

明日という日のためにスケジュールを組み、時間を工面してくれた人たちには大変申し訳ないが、今の自分の心の内を明かさなくてはいけない、伝えなくてはいけない。紺野と桐ヶ谷どちらの姓を名乗るか悩んでいること、以前の家族である紺野家への心残りがあること、全て話さなくてはいけない。

「お食事も済んだのですから、お風呂でも行ったらどうですか？」
「そうだな……ゆっくりつかりたいところだが結構飲んじまったし、湯船はやめてシャワーだけにしとくか……」

「そうしてください、明日はちゃんとしなくちゃあいけないんですからね？」

「ははは、わかってるよ、母さん」

峰嵩はそう言うのとビールの注がれたグラスの中身を一気に飲み干し、テーブルの上に置き、両手について「よっこいしょ」と年齢相応のセリフを言いながらゆっくりと立ち上がり、背もたれに掛けてあつたスーツの上着を掴んでダイニングを後にしようとした。

「あ……あの、お父さん、お母さん、ちよつと……いい……ですか？」

峰嵩がダイニングから立ち去ろうとした所で、木綿季が二人に複雑そうな顔を見せながら恐る恐る声を掛けた。木綿季の声掛けに対し、翠は洗い物をしていた手の動きを止め、峰嵩は上半身だけ振り返り、彼女の話に耳を傾けた。

「なあに？　木綿季」

翠は洗い物をして濡れていた手先を手拭いで拭くと、木綿季と向かい合う形で食卓の椅子に腰を下ろした。峰嵩も大事な話があるんだなという木綿季の気持ちを汲むと、翠の隣に同じように腰を落ち着けた。

桐ヶ谷夫妻と木綿季の位置関係はこれからお見合いでもするかのような並びとなっていた。木綿季は自分の真正面に父と母が陣取っている光景に少々緊張感を覚えていたが、これから大事な話をするために、一度気持ちを落ち着けようと大きく息を吸い、また大きく吐き、意を決して心に決めていたことを話し出した。

「あ、あの……ごめんなさい！」

ごめんなさいと謝罪をしながら勢いよく頭を下げた木綿季の様子に、翠と峰嵩は目を丸くしてお互いに視線を合わせて言葉を失っていた。この娘は何をいきなり謝ってきているのだろう、謝らなければいけないようなことをしたのだろうか？

心当たりはない、あると言えば今日のお昼に迷子になって心配をかけたぐらいだがそのことはもう済んでる。それを除いても退院して桐ヶ谷家で暮らすようになってからはずっといい子にしてきたはずだ。

「どうして謝るの？」

「えつと……それは、ボクがわがままな子だから……です」

「わ、わがままって……、どういうことなんだい？」

「そうよ、木綿季はこの家に来てからずっといい子にしてたじゃない、それがわがままなんて……」

やはり二人とも突然の木綿季の謝罪に解せない様子だった。それもそのはず、彼女は家のことで手伝えるものは全部手伝っており、空いた時間はほとんど勉強に費やす等、生活態度面では非常にいい子だったからだ。たまに羽目を外して遊び過ぎてしまったりまだ少し世間に疎いところがあるが、この家に来てから……いや、小さい頃からずっといい子にしてきたのだ。

しかし木綿季が今回謝ったのはそんなことではない、養子縁組のことで。桐ヶ谷夫妻や直葉は元より、証人を名乗り出てくれた木綿季の主治医の倉橋と、リハビリと食事を担当してくれた香里も明日の養子縁組届に顔を出してくれることになっていた。届の提出を延期するということは、明日の為にスケジュールを調整してくれた人たちの都合を無下にすることになる。木綿季はそのことに負い目を感じていたのだ。

「えつと、あの……、あのね……？」

「言いづらいことなのかい？」

「……………」

言えない、病気が治る前からいろいろと自分にしてきて、支えて来てくれた人たちの気持ちを裏切るようなこと、言えるわけがない。言えるわけがないが、自分の気持ちを誤魔化すようなことも出来ずに、木綿季は葛藤を抱えていた。

下を向いて俯き、両手の指先同士をいじくりまわしてばつが悪そうにたたずんでいた。そんな木綿季の様子の変に今日初めて顔を合わせたばかりの峰嵩は気付かなかったが、退院前からずっと木綿季を

見ていた翠は気付いていた。

「木綿季、もしかして養子縁組のことで、悩んでるんじゃないの？」

「えっ……どうして……？」

「そう驚かなくても、顔に書いてあるわよ？」

「えっ!？」

翠がテーブルに肘をつきながら優しく呟くと、木綿季は自分の顔のあちこちを両手で触るような仕草をして慌てふためいていた。勿論実際に書かれているわけはなく、別に変なものがかくっついているわけでもない。その木綿季の慌てている様子を見て翠はクスツと笑みをこぼしていた。

「さしづめ、どちらの姓にするかで悩んでるんじゃないかしら？」

「……そうなのかい？ 木綿季」

「……えと、……はい……」

伊達に二人の子供を育ててきてわけではない翠は、木綿季の悩んでいることを難なく見破っていた。木綿季との付き合いこそ半年そこそこだが、それでもわずかな顔色や仕草から悩んでいることを見破るのはそう難しいことではなかった。大人さながらといったところだろうか。

翠に全てを見透かされていた木綿季は観念したのか意を決したのか、今自分が悩んでいることを包み隠さず翠たちに打ち明けた。姓のこと、以前の家族へのひっかかりのこと、これからの生き方のこと等全て……。

「……以上、です……」

「なるほどね……」

「ふうむ……」

「……………」

木綿季から全てを聞き出した翠たちは顔に手を当てて何やら考えているようだった。木綿季は相変わらず、ぼつが悪そうに椅子に座って縮こまっていた。どうしよう、怒られるかな……困らせるようなこと言っちゃったし怒られるかもしれない。ボクって悪い子なのかな……。

翠と峰嵩はしばらく考え込んだ後、互いに視線を交わすと「フフツ」と大人の笑みを見せ、優しく木綿季に語り掛けた。

「大丈夫よ木綿季、あなたはあなたのやりたいようになさい」

「…………え…………？」

「言葉通りの意味だよ、何も焦る必要はないんだ。じっくり考えて、悩んで……それで納得したらその時に決断してくればいい」

「お、お父さん……」

「この人の言う通りよ、大丈夫。どっちの姓を選んだって、木綿季は私達の子よ。それだけは変わらないわ」

「おかあ……………さん……………」

二人から優しい言葉をかけてもらった木綿季の眼には涙が浮かんでいた。自分のわがままで振り回しているようなものなのに、嫌な顔一つせずに好きにしていると、温かい気持ちに心がいっぱいになっていた。良くしすぎてもらって申し訳ないと思いつつも、こんな心優しい人たちに迎え入れてもらって本当によかったと思っていた。

「ツ…………、ありがとう、お父さん、お母さん…………ツ」

「ああ…………ほら、泣かないでくれ」

「…………ツ、うん…………うん…………ツ」

峰嵩は上着の胸ポケットからいつも携帯している紺色のハンカチ

を取り出して、木綿季の涙をさっと拭った。暖かい、父親らしい微笑みを浮かべながら……。

「そうよ？　木綿季はとっても可愛いんだから、泣くより笑ってたほうが素敵よ？」

「……ッ……ッ」

二人は揃って木綿季に優しく声を掛け続けたが、優しくされればされるほど、涙は余計に流れ出てくるばかりであった。一向に泣き止まない木綿季の様子に困り果てた峰嵩たちであったが、ふと思いついた。だことがあったのか、峰嵩は自分の掌をポンと叩いた。

「よし、それなら私が面白い噺をしてやろう！　これは私が初めて高座に上がらせてもらった時にやった噺でな……」

「長いからダメです」

翠は間髪入れずに峰嵩の話をつつと斬り捨てていた。それもそのはず、噺家が高座に上がる時間は噺の内容にもよるが短い噺で15〜20分、長いと30〜1時間も費やすのだ。今回峰嵩がやろうとしたものもオチをつけるまで30分ほど使う「宿屋の仇討」と呼ばれる古典落語の噺だった。

「む、むう……。あ、それならビールでも飲んでみるか？　楽しい気持ちになれるぞ！　ちよつとぐらいなら……」

「あなたっ！　木綿季は未成年ですよっ！」

何とか木綿季に笑顔になってもらおうとあれこれしてる中、未成年の木綿季に酒を飲まそうとするいけない旦那の行動に目を光らせた翠が厳しく声を荒げ、鋭くギロリと睨みつけていた。勿論峰嵩は本気で飲まそうとしてるわけではない、涙を止めるための口実に過ぎない。だが、さすがに言ってることが洒落にならないと思ったのか、厳

しく翠に制止させられたのであった。

「わ、わかってるさ……、冗談が通じない奴だなお前は……」

「あなたが馬鹿なことを言うからです！」

「……クスッ」

夫婦漫才とも言えるようなかましい二人のやりとりがおかしく見えたのか、先ほどまで涙が出続けてどうしようもなくなっていた木綿季の表情は明るく、笑顔になっていた。涙の跡が残っていて赤くなっていたが、クスクスと笑い声が漏れていた。

「……やつと笑ってくれたね」

「木綿季はやつぱり笑ったほうが可愛いわ……」

二人のおかげで漸く涙が引っ込んだ木綿季は、両腕の袖で目の周りをゴシゴシとこすって拭うと、精一杯の笑顔を見せて翠たちに感謝の気持ちを改めて伝えようとした。ボクのがままを聞いてくれてありがとう、可愛がってくれてありがとう、そして……こんなに暖かい家庭に迎え入れてくれてありがとう……と。

「本当にありがとう、お父さん、お母さん」

「気にしないの、私たちは家族なんだから……」

「そうだぞ、これからもよろしく頼むな、木綿季」

「う……うん！」

三人の親子の間に笑顔が交わされ、養子縁組の先延ばしの話はとりあえずまとまり、残るは倉橋に連絡を入れるだけとなった。

峰嵩は今度こそスーツを翻してダイニングを後にし、シャワーを浴びるために寝室に着替えを取りに行った。翠は両腕の袖を捲り上げて、洗い物を再開した。木綿季は「ボクもお手伝いする」と流しに立っただが、翠は「今日はもう休んでいいわよ」と一人で残った家事を

引き受けた。

お世話になつて身としては出来るだけ役に立ちたかつた木綿季であつたが、頑なに翠が気持ちを譲らないのと、明日の予定のこともあり、心残りがありながらも口を尖らせながら渋々ダイニングを後にした。

ダイニングを出て階段に足をつこうとした所で、一階の奥から真つ赤なパジャマを身に纏い、バスタオルで髪の毛をゴシゴシとこすりながらこちらにやってくる直葉の姿が目に入った。今しがた丁度風呂から上がってきたようだった。

「あ、直葉……お風呂あがつたんだ」

「あ、うん、一番風呂良かったよー!」

直葉は自分で沸かした風呂を自分が一番早く堪能出来たことで、すっかりご機嫌になっていた。体からは石鹸やシャンプーの香り、そしてほんのりまだ湯気が立ち上っており、かなりいい湯加減でバスタムを満喫出来た様子が伺えた。

「木綿季も入れば? 今いい感じの湯加減だよ!」

「あ、次はお父さんが入るんだって。だからボクはその次かな?」

「あ、そうなんだ」

木綿季と話をしながら直葉はバスタオルで髪の毛を力強くババつと両手で一気に水分を拭き取っていった。腰まで伸びた長い木綿季の髪と違い、首元までの短めのヘアスタイルのおかげもあり、難なく濡れた髪を拭き取れていた。拭い終わつた直葉は「ふう」と声を漏らしながら自分の部屋に行くために階段へと足を運んだ。

「あ、直葉……ちょっとだけいいかな……?」

「ん、なあにー?」

「あのね、明日のことで聞いてほしいことがあるんだけど……」

「明日？ 明日って養子縁組のこと……かな？」
「う、うん。そのことでちよつと話が……」

明日の養子縁組の為に、わざわざ学校を休んでくれた直葉に申し訳ない気持ちが出てきたのか、微妙に歯切れが悪い口調で木綿季は直葉に話しかけていた。この場で話を続けるのもなんだと思った直葉は、落ち着いて話をする為に自分の部屋に行こうと提案を持ち出した。

「それならあたしの部屋にいこつ、ここじゃ話しづらいじゃない？」

「あ、うん、ごめんね……」

「んーん、あたしはだいじょぶだよ。ほら、いこ？」

「う、うん」

直葉は一旦キッチンに足を運び冷蔵庫からいつも飲んでるあ・ろ・はすの500mlボトルを二本取り出し、木綿季と一緒にとてとてと階段を登り、そのまま一直線に自分の部屋へと入っていった。

同日 午後20:55 桐ヶ谷邸 直葉の部屋。

「適当にかけてねー」

「あ、うん。お言葉に甘えるね」

直葉がそう言うと、木綿季は彼女のベッドに腰かけ、部屋の中の間違ったところにある大量のぬいぐるみに目をやっていた。ヒヨコ、ペンギン、ブタさんなど、様々な種類の可愛らしいぬいぐるみが、直葉の部屋の女の子らしさを醸し出していた。実に可愛らしいのだが、やはり天井に貼られた「リーファ」の特大POPだけはこの中でも異色を放っており、その点だけは首をかしげるところであった。

「やっぱり目立つ……よね、あはは……」

「んーボクは別に気にならないけどなー、ボクもこういうの作ってみようかな?」

「あはは、それもいいかもね!」

「それにしても……ぬいぐるみまた増えてない?」

木綿季が部屋を見渡すと、この前詩乃と一緒に邪魔したときと比べて、ぬいぐるみの数が二倍近くに増えていた。ゲームセンターの景品なのか、それとも店で買ったのかは定かではないが大小さまざまなサイズのぬいぐるみが所狭しと並ばされていた。さしづめ、ぬいぐるみ大家族といったところか。

「ちよくちよくクレイジーゲームとかで遊んでたの、んで気が付いたらこんなことになっちゃってさ……あははは……」

「へえー……そうなんだ……」

二人一緒に一番大きなブタさんのぬいぐるみを見つめていたが、直葉はそんな世間話をしにきたわけではないとハツとなり、木綿季に持ってきた飲み物を手渡し、木綿季の隣に腰かけて自分に話しかかったことについて聞こうとした。

「それで、聞いてほしいことってなに?」

「あ、うんとね……」

ベッドに腰かけながら、木綿季は先ほど翠たちに話した時と同じ内容を直葉に話して聞かせていた。直葉はペットボトルの飲み口に、ずっと口をつけたまま黙って話を聞いていた。そしてしばらく考え込んだ後、ボトルに蓋をして、今自分が思っていることをゆっくりと語り出した。

「なるほどねえ……、うーん、あたしは木綿季の好きにすればいいと思

うけどなあ」

「え……う？」

「あたしはお兄ちゃんや木綿季と違って、お父さんもお母さんもいるから二人の悲しみを全部は理解出来ない。でもね……前の家族をどれだけ大切にしてたかってのはわかる気がするんだ」

「……………」

「あたしたちのことも大切に想ってくれてる、だから木綿季は悩んでるんでしょ？」

「……………うん……………」

翠や峰嵩と同じように、自分に温かい言葉を掛けてくれる直葉の気持ちに、木綿季はまた胸がいっぱいになっていた。少しさばさばとしてはいるが、直葉は直葉なりに妹である木綿季のことを心配していたのだ。

直葉はボトルを傍らに置くと隣で座っている木綿季に寄り、優しく包み込むようにして抱き締めた。まだお風呂からあがったばかりの火照った体温が、木綿季の身体にも伝わっていった。抱き締められた木綿季は直葉の抱擁を目閉じてそのまま受け入れた。

「すぐ……………は……………」

「大丈夫、お父さんもお母さんもお兄ちゃんも、明日奈さんもみんな木綿季の味方だから。もつともつと、頼ってもいいんだよ？」

「……………うんッ……………うんッ」

両親のような気の利いた言葉は見つからないが、直葉は直葉なりに木綿季を元気づけようとしていた。姉として、家族として、木綿季を傍で見守る一人の人間として、彼女を支えようとしていた。木綿季も直葉からの愛を体全体で受け止め、心が再び温かくなっていくのを感じ取っていた。

「一緒にがんばろ？ あたしも応援するからさ……」

「うん……、ありがと……直葉……」

「……まったく、世話の焼ける妹ですなあ……」

「ごめんね……お姉ちゃん……」

直葉は自分のことを「お姉ちゃん」と呼ばれたことに顔を赤らめながらも、木綿季の頭に掌を当てて、優しく撫でまわし、自分の妹を元気づけていた。生まれた場所も年月も生い立ちも違う二人であったが、今この場で互いに感じている温もりだけは、家族の温かさそのものであった。

「それじゃあ、ボク部屋に戻るね。……聞いてくれてありがとう」

「んーん、また悩んでることがあつたら言つてね？ お兄ちゃんに話せないようなこととか聞けると思うし」

「うん、ほんとにありがとう……直葉」

「平気だよ、明日……頑張つてね？」

「……うん、それじゃあ……」

木綿季はベッドからゆっくり立ち上がり、直葉の部屋のドアノブに手を掛けた。部屋から出る前に直葉と笑顔で互いにアイコンタクトを交わしてから部屋を出た。廊下を通じて和人がいる自分たちの部屋の前に足を運びいつものようにノックをし、和人の「いいぞー」の返事とともにドアノブを捻って中に入った。

先に部屋にいた和人はPCに向かい調べ物をしているようだった。口にチューブ型のアイスを咥えながら、何やら真剣な表情でディスプレイとにらめっこをしていた。木綿季は和人が何をしているのかが気になり、彼の背後から画面をのぞき込むようにして顔を覗かせ、和人の首を両手で挟み込み、体重を預けていた。

「なあにしてるの？ 和人」

「ん？ ああ……、今ルートを調べてるんだよ。バイクで行くんだから道中の休憩ポイントとか、有料道路を通るのかとか……な」

「ふーん……」

「それで、父さんたちとは話したのか？」

「うん、さつき直葉にも話してきたよ。みんな頑張ってる……ボクのこと応援してくれた」

「……そうか、よかったな」

「うん……」

木綿季は和人と返事を交わすと体を離し、ベッドへと足を運び、脚をパタパタとさせながら和人の調べ物を見守っていた。部屋には和人がキーボードをカタカタと打ち込む音と、マウスをカチカチとクリックする音だけが響いていた。数分たった後、和人はキリがいいところまできたのか「ふう」という声を漏らし、椅子の背もたれに体重を預けていた。

「終わったの？ 調べ物」

「ああ、一通り終わったよ。それよか木綿季、先生に連絡はしたのか？」

「あ、ううん、まだしてない……」

「ならすぐに連絡入れよう、ちよつと待っててな」

和人はキーボードの近くに置いてある自分のスマホを手に取り、さささつと左手で操作すると通話アプリを起動させ、倉橋の番号を指定して電話を掛けた。スピーカーからはプルルルという音が聞こえ、3回ほどコールが鳴ったところでガチャという音とともに、男性の声ではなく、女性の声が聞こえた。

『はいもしもし、こちらは倉橋の携帯です！』

「…………へ？」

『…………あれ、おつかしいな…………もしもーし？』

「聞こえてますよ、何してるんですか香里さん…………」

倉橋が出るはずの携帯電話からは、倉橋ではなく、木綿季のリハビリを担当した香里であった。何故本人ではなく香里さんが電話に出たのは疑問ではあるが、和人はまず電話をかけた目的を伝えようと通話を続けた。本当なら今すぐプツンと切ってしまいたいところだが。

「えっと、先生はいないんですか？」

『え？ いるよ？ ちよつとまってねー！』

「…………は、はあ…………」

相も変わらずフリーダムな行動っぷりに呆れて溜め息しか出ない和人であった。そもそも本人を差し置いて勝手に人の携帯に出るのもどうかと思う、相手が知り合いだったからよかつたものの、これが仕事の電話だったら大事だ。和人はやがて不手際で仕事をクビにならないことを祈りながら、倉橋に電話が渡るのを待った。

『…………もしもし、和人君ですか？ すみませんお騒がせして…………』

「い、いえ…………別に大丈夫ですけど、それにしても何で香里さんがいるんですか」

『ああそのことですか、明日そちらに行くことへなってるでしょう？』

なので今晚はうちに泊めてあげてるんですよ』

『でもご飯は私が作った方が上手ですけどねー！』

「…………えと、本題に移っていいですか？」

『あ、はい。彼女のご事は気にしないでください。で、和人君。用って何ですか？』

「はい、それは木綿季の口から説明させます。…………おい木綿季、先生だ」

「あ、う…………、うん！」

和人は耳元からスマホを離すとそれをそのまま木綿季に手渡した。途中でスピーカーから『ちよつとー！ 私を無視しないでよー！』と香里の叫びが聞こえたような気がしたが、気にすることなく木綿季は自分の耳にスマホを当てた。

「も、もしもし……倉橋先生、ですか……？」

『木綿季君……、久しぶりですね……』

「は、はい！ ていつても一週間ぶりぐらいですよ？ ……でも先生とまた話せて嬉しいですよ……！」

『それは私ですよ、生活の方は……どうですか？』

「……おかげ様で毎日がすつごく楽しいですよ！ でも最近食べ過ぎだつて皆に言われちゃつて……！」

『あははは、それは結構です。体の調子もよさそうで安心しましたよ』

一週間ぶりに聞いた倉橋の声は温かかった。入院中ずっと聞いていた声だったが、退院して病院を離れてからはその声が聞くことが出来ず、少しだけ寂しかった木綿季だが、電話越しとは言え彼の声を聞くことが出来て、心に安心感を覚えていた。実の家族を除けば、彼が一番木綿季と付き合いが長かっただけに、患者と先生というよりも、父と子のような関係になっていたのだ。

「倉橋先生、ありがとうございます……。先生のおかげで今のボクは生きていられます。それだけじゃない、ずっとずっとボクを傍で診てくれて……」

『……私は自分の仕事をしただけですよ、それに……君が助かったのは和人君を始め、君の仲間が協力してくれたからです。それに比べたら私の技術なんて……』

「そ、そんなことないです！ 先生が……、お父さんがいたからボクは……」

『ゆ、木綿季君……』

退院した日は上手く話せなかったが、木綿季はここぞとばかりに倉橋に感謝の気持ちを伝え続けた。自分以外の家族の面倒をずっと見続けてくれたこと、メデイキュボイドを薦めてくれたこと、移植手術のためにドナーを必死に探してくれたこと、手術を成功させてくれたこと、そして……自分をずっと傍で支えてきてくれたことへの感謝の気持ちを伝えた。

倉橋への気持ちは、正直いつてこの場で言葉にして伝えるには全然足りなかったが、一言一言木綿季の口から伝わるたびに、倉橋は胸がいつぱいになり、目じりを濡らしていた。木綿季の病気が治り、日常生活を送れるようになることは、倉橋の長年の願いでもあったからだ。そしてそれが念願叶い、当人からも感謝の気持ちを伝えてくれた、元患者としてではなく、倉橋を慕う一人の娘としてだ。

一しきり倉橋に想いをぶつけた木綿季は満足そうな笑みを浮かべていた。本来なら病院にいる間に伝えたかったが別にいい、今こうしてちゃんと気持ちを伝えられたのだから。

「木綿季、水を差すようで悪いけどそろそろ本題を話さないと……」

「あ、ごめん……そうだった……」

『どうかしましたか？ 木綿季君』

「あ、いえ！ 何でもないです、それより先生……明日のことなんですけど……」

『明日……桐ヶ谷さん達との養子縁組、の件ですね……？』

「は、はい。その……ちよつと延期してもらえないかなって思ってます……」

『ず、随分急ですね……、一体どうしたんです？』

「は、はい……じ、実は……」

木綿季は倉橋にも、桐ヶ谷家の人間全員に話したことと同じ内容を事細かに説明した。以前の家族である紺野家のことを引きずっていること、どちらの姓を名乗るか悩んでいること、そしてその迷いを

吹っ切るために、けじめをつけるために、横浜にある実家へと一度帰ることを決めたこと。

『……あの家に一度帰るのですね……』

「……はい、そこで何か感じるものがあるかもしれないって思ってます……」

『そうですか……、わかりました。それならばことが終わったらで構いませんので、その後一度病院の方まで来てもらえますか？』

「え、病院って……ボクが入院してた……？」

『ええ、本当は明日そちらに出向いたときに伝えようと思ったんですが、こちらに来てもらえるのであればその方が都合がよくて』

「わ、わかりました。時間はいつになるかわからないですけど……必ず行きます」

『はい、そうしてくれれば藍子君たちも喜びます』

「姉ちゃんたち……？」

『詳しくは明日直接お話しします、それでは……和人君にもよろしく伝えてください』

「え、あ……は、はい！　ありがとうございます、倉橋先生……！」
『いいえ、それではまた明日……』

最後の最後に意味深なセリフを残した倉橋の言葉がひっかかりつつも、これで養子縁組に関わる全ての人に通達を終えた木綿季はほつと息を吐き、胸を撫でおろしていた。結果は誰一人、木綿季の都合に嫌な顔をせずに彼女の気持ちを汲んでくれていた。

そう、木綿季は自分の心の中のモヤモヤを消すために、以前の家族である紺野家と暮らした家がある、神奈川県横浜市保土ヶ谷区月見台に行こうとしていたのだ。過ごした期間こそ一年ほどであったが、家族四人で楽しく過ごした思い出のある実家に直接足を運び、気持ちの整理をつけようということだった。

はたしてそれが良いことなのか悪いことなのかは木綿季本人にもわからなかった。上手くいけばしっかりけじめをつけ、新たな心持ち

で気持ちよく第二の人生を歩めるかもしれない。しかし一歩間違えれば以前の家族のことが忘れられずに、心に深い傷を負ってしまうかもしれない。正直いってこれは賭けに等しかった、しかしだからといってこのまま悩みを放置するわけにもいかない。何よりも木綿季がそうしたくなかったのだ。

翠も峰高も、直葉も倉橋も、そして恋人の和人も、そんな木綿季の気持ちがあわかっていたからこそ、嫌な顔一つせず木綿季からの提案を飲んだのだ。そして木綿季なら、きつとこの過去との蟠りを乗り越えられると信じていたからだだった。

ぶつからなければ伝わらないことだってある。木綿季がずっと言い続けてきた言葉だ。そう、木綿季はぶつかろうとしていた。自分の家族と、そして……自分自身の心と。どんな結果になろうともそれを受け入れる覚悟も出来ていた。あとは……ただやるだけだ。

木綿季は倉橋との通話を終わるとスマホをそのまま和人に返した。和人はその際、木綿季の手がわずかに震えていることに気がついた。過去と向かい合うのが怖いのか、心に傷を負うのが怖いのかはわからない。ただ、木綿季が何かに怯えているのだけは確かだった。

和人はスマホをデスクに置き、震えている木綿季の手をがっちり両手で握りしめ、安心させようとした。手を握られた木綿季はハッとなり、目の前の和人から真剣な眼差しを向けられていることに気がついた。大丈夫だ、俺がいる、お前を守ってやると、まるで眼だけで語りかけているような安心感があった。

「かず……と……」

「……怖いかな？ 過去と向き合うのが……」

「……………」

和人に問いかけられると木綿季は視線を落とし、俯いてしまっていた。木綿季は答えなかったが、その態度から怖がっているというのは明らかだった。和人は椅子から立ち上がり、彼女を安心させるために優しく両手で包み込み、そつと抱き締めた。

抱き締めた木綿季の体はやはり震えており、自分の家族と向き合うのが……いや、正確には過去と向き合うことで、今の生活が変わってしまうことを恐れていた。桐ヶ谷家との距離が、今の幸せがなくなってしまうのではないかと恐れていたのだ。

「大丈夫だ……」

「……え？」

「木綿季なら大丈夫だ、お前は強い、ご両親やお姉さんと違ってちゃんと向き合える」

「……」

「心細いなら俺が傍にいる、怖くて立てなくなったら俺が支えてやる。踏み込む勇気がないなら俺が背中を押してやる」

「……かずと……」

「安心しろ、俺がずっと傍にいる。どんな結果になったって、例え周りが蔑んだとしても、俺だけはお前の味方でいてやるから……」

「……かずと……かずとお……ッ」

木綿季は本日何度目かわからない涙を流していた。退院して新しいことに触れるたび、周りの人たちから愛情を受け取るたびに、たまらず胸がいっぱいになっていた。しかしこれこそが木綿季の本来の姿なのかもしれない。

本来は剣を握らなければか弱い女の子、おしゃれをして美味しいもの食べて、家族にも囲まれて幸せな人生を送るはずだった。病気に冒されたことよって全てが狂わされてしまっただけなのだ。

だからこそ現実に帰還し、日常に復帰した今のこの生活が何よりも楽しかった。自分を偽って強がりを見せていた以前の自分ではなく、全てを全力で楽しみ、無邪気に心の底から笑っている今の姿が、本当の木綿季そのものだったのだ。もう独りで頑張る必要はない、周りの人を頼って生きていけば良いのだ。

「明日、頑張ろうな……」

「うん、ありがとう……和人」

「大丈夫だ、気にするな……」

「……うん」

木綿季は最愛の人の体温を感じながら、感謝の気持ちを伝えていた。和人は木綿季が安心し、落ち着くまで彼女を抱き締め続けた。その夜はそれから特に何事もなく時間が過ぎていき、二人は風呂を済ませ、ベッドに横たわり深い眠りについていた。朝から慌ただしかった濃い一日が、漸く幕を閉じていた。

翌朝 西暦2026年11月2日 月曜日 午前9:45 桐ヶ谷邸 玄関前

昨夜の晚餐から一夜明け、桐ヶ谷家は平日の朝を迎えていた。この日の天候は関東全域に渡って快晴で、当分雨は降らないだろうという予報が出ていた。和人達の済む川越も、木綿季の実家がある横浜も本日は太陽が眩しい爽やかな秋空となっていた。雨に打たれる心配はなさそうだ。

「それじゃあ……行ってくるよ」

「ええ、木綿季も気をつけてね」

「気持ちを持って、しっかりな」

「はい、お父さん、お母さん」

「木綿季、気をつけてね？」

「うん、ありがと、直葉」

桐ヶ谷邸の玄関前には翠、峰嵩、直葉らが和人達を見送るために集まっていた。今回の二人の目的地は横浜市保土ヶ谷区の月見台。以前足を運んだ病院がある市内東部の金沢区よりは近いが、なんやかん

やで一都一県を駆け抜けることになるので、少し余裕を持って出ることにしたのであった。和人も木綿季も、まさかこんなにも早く横浜にとんぼ返りすることになるとは思わなかっただろう。それも定期検査ではなく、一身上の都合でだ。

和人は昨日のうちに必要な荷物をまとめたカバンをシートに仕舞い、メットを二つ取り出し一つを自分でかぶり、もう一つを木綿季に手渡した。先に木綿季を後部座席に座らせて、後から自分も一週間ぶりに世話になる祖父の形見である相棒に跨り、タンク部分にポンポンと手をあて「久しぶりに頼むぞ」といい働きに期待をかけた。

キーを挿し込み、90度ほど捻るとブルルンというエンジン音が辺りに鳴り響いた。ガソリン残量も充分、今日も相変わらぬ可もなく不可もなく走れ回れるぞとバイクが訴えてるかのようであった。

「よし、じゃあ行ってくる。帰りは何時になるかはわからないけど連絡はいれるよ」

「行ってきます、お父さん、お母さん、直葉……」

和人は行ってきますの挨拶を済ますとメットのアイシールドを下ろし、バイクのサイドスタンドを蹴り、アクセルを入れて発進して桐ヶ谷邸を後にした。木綿季は後部座席で和人の体に密着し、両手がかっちりとしがみ付いていた。桐ヶ谷邸の門柱の外に出たところで、直葉がそれを追うように敷地外に走り出て、どんだん家から離れていく二人に手を振っていた。

「おにいちゃあーん！ ゆうきいー！ いってらっしやあーいー！」

直葉の声が届いたのか和人は後方からでも確認出来るよう、左手で親指をグツと立て、サインで直葉に返事を返した。直葉はそんな二人を、胸に手をあてて見えなくなるまでじっと見守っていた。あの二人だけで大丈夫か、あたし達もついていったほうがよかったですのではないかと。

「お母さん、木綿季……大丈夫かな……？」

「……大丈夫よ、信じましょう……」

直葉の心配をよそに、翠はあの二人なら大丈夫と促しながら、和人たちが走り去っていった方角を見つめていた。距離が離れていくと共に、バイクのエンジン音もだんだんと小さくなっていき、やがては全く聞こえなくなっていた。

「大丈夫さ、木綿季なら……」

「お父さん……」

峰嵩も門柱の外に出ると直葉の頭に掌をポンと当て、上着の胸ポケットから煙草を一本取り出してライターで火を点け、一服し始めた。口に啞えて息を一気に吸い込むと、ジリジリという音を立てながら火が煙草に燃え広がり、先端から灰になっていった。峰嵩は吸い込んだ煙草を一気に煙と共に外に吐き出し、空を見上げていた。

「私は一晩しかあの子と一緒にいなかったが……それでもいくつかわかったことがある。あの娘は……木綿季は強い、壮絶な過去を持つてゝることもそうだが、何よりも人より「覚悟」が違う。だから大丈夫だよ」

「か、覚悟って……」

「それにな、私達がそろそろついていっても、当人がやりにくくなるだけだよ。今はあのバカ息子に任せるとしよう……」

「……お兄ちゃん……、木綿季……」

直葉は和人たちが走り去っていった方角を見つめながら、胸に手を当てて祈っていた。神様お願いします、お兄ちゃんに、木綿季に何もありませんように、またこれからも一緒に笑顔でいられるよう、二人を守ってください……。

同日 同時刻 埼玉県川越市 国道16号線

和人と木綿季を乗せたバイクは桐ヶ谷邸を出発し、木綿季の地元の月見台に近い相鉄線星川駅を目指していた。川越から月見台へはここから60キロほどの距離にある。円滑に進めば一般道と有料道路を経由して一時間半ほどで到着する計算だ。

しかし病み上がりの木綿季を二輪の後部座席に乗せていることもあり、途中途中で休憩を挟んでいくため、それ以上にかかるだろう。何しろ退院してまだ一週間しか経っていないのだから、普通の人より気を遣わなければならない。

「木綿季、これから高速に入るからな、休憩したかったらすぐに言ってくれ」

「う……うん！」

「それじゃ、しっかりと捕まっていってくれよ！」

和人たちは一般道から関越自動車道に入り、ちよくちよく道中のサーブスエリアで小まめに休憩を挟みながら星川駅を目指していた。少しずつ、だが確実に木綿季の地元へと近づいていった。二人乗りでの高速道路での走行は初だったこともあり、和人も速度を出しつつも、慎重な運転を心がけながらバイクを走らせていた。

15分ほど関越自動車道を南下していき、練馬ICから高速を降りて一般道に入り、東京23区うちの練馬区、杉並区、世田谷区を通り過ぎ、玉川ICから有料道路である第三京浜道路に入り、川幅日本一を誇る多摩川の上を経過して神奈川県へと入っていった。

速度を上げ一気に多摩川を通り抜け、川崎市を縦断し、ひたすら南

へ南へをバイクを走らせた。やがて20分ほど南下していき、気が付くと二人は既に横浜市へと足を踏み入れていた。保土ヶ谷ICで一般道へ降り、横浜新道を経由して徐々に徐々に木綿季の地元へと近づいていった。

しばらくの間安全運転で一般道を走り続け、保土ヶ谷交差点の赤信号につかまったところで、木綿季がこの辺りの風景に見覚えがあるのか、何やら周囲をきよろきよるとせわしなく見回していた。

「この辺り……見覚えある……」

「本当か？」

「うん、パパとママと通ったことあるよ」

「そうなのか、と言うことはもうかなり近づいてきてるな」

「うん、ここの近くにホームセンターがあるの。そこで本棚を作る材料を買いに行ったことがあるんだ」

「へえ……木綿季のパパさん、日曜大工が出来るのか」

「うん！ お家の庭で一緒に作っただ！ 楽しかったなあ……」

「日曜大工か……楽しそうじゃないか」

「……うん、本当に……楽しかった……」

生前の父との思い出を語った瞬間、木綿季は黙りこくってしまった。ヘルメット越しでもわかる、昔の思い出をただ懐かしんでいるだけではない、改めて自分の家族が全員いなくなってしまったんだと、今になって実感が湧いてきたのだ。和人は木綿季のことが気になつて声をかけてやりたかったが今は運転中だ、もう間もなく赤信号が青に変わろうとしている。目的地はもう近い、バイクを降りてからでも遅くはないだろう……。

「出すぞ、しっかり捕まってるよ」

「……うん」

交差点の信号が青に変わったところで、和人は再びバイクを走らせ

た。八王子街道の近くを流れる帷子川にかかっている橋を通過し、相鉄線の踏切を越え、更に一般道を10分ほど走り続けると、和人たち
は漸く目的地である星川駅付近へと辿り着いていた。時刻は午後1
2：10、概ね計算通りの走行時間での到着となった。

和人は車道の路肩にハザードを点灯させながらバイクを一時停車
させ、メットのアイシールドを上げ、立体交差が特徴の綺麗な星川駅
を見上げていた。木綿季が生まれる前の2007年から始まり、12
年の歳月を費やして2019年に終わった工事で完成した長い長い
立体交差だった。

「前に……明日奈に連れて来てもらった駅だよ」

「ここが……そうなのか」

「うん、また直接ここに来れるなんて……」

「……とりあえず、近くの駐輪場にバイク停めちまうな」

「あ、うん」

和人は現在位置から一番近い駐輪場にバイクを止め、木綿季の家に
行く前にどこか飯屋で何か腹ごしらえでもしようと思案を持ち掛け
た。木綿季はそれに了承し、現在位置から一番近いアクトナルドで昼
食をとろうということの話がまとまった。一週間前に退院して川越
に帰ってきた時と同じく、気軽に食べられるジャンクフードを選択し
たというわけだ。

同日 午後12：20 神奈川県横浜市保土ヶ谷区 アクトナルド
ハンバーガー星川駅前店

「んじゃ先に頼んでくるから、席に座っててくれ。……何が食べたい
？」

「ん、和人にまかせる」

「……………あいよ」

木綿季は和人に注文をまかせると、一足先に窓際の席へと腰を落ち着けていた。店内はお昼時にもかかわらず平日だということもあり、さほど混雑はしていなかった。木綿季が座っている窓側の席は星川駅の立体交差と、あちこちに山や高台がある星川町と月見台の街並みを見渡せるいい位置となっていた。

太陽が眩しい快晴の秋空と、澄んだ空気のおかげも相まって非常にきれいな光景に見えていた。以前に明日奈にプローブ越しに連れてきてもらった時に見た夕刻の光景とは、また違った景色だった。

「……………」

来てしまった、とうとうここまで来てしまった。もう後戻りはできない。正直言って怖い、明日奈と一緒に来た時とは状況が違い過ぎる。あの時は死ぬ前に自分の家をもう一度目に焼き付けておきたかったから、連れて来てもらったんだ。最後の最後の思い出にしたかったから、だけど今は……………今は違う。死んだ家族と向き合うために、過去とのけじめをつけるためにここにきた。楽しかった思い出に浸るために来たんじゃない。

怖い、怖い、あのお家に行くのが怖くてたまらない。楽しかったはずの思い出が、今度は逆にボクの心を抉ることになるのかもしれない。どうしてこんなことになってしまったんだろう、ボクはただ普通に暮らしていたかっただけなのに。何にも悪いことしていないのに、何がいけなかったの？ 何でボクらだけがあんな目にあわなければならなかったの……………？ 何で？ 何で何で何で……………!?

「……………きゃ、……………きー！」

「……………」

「木綿季！」

「あ……………」

「木綿季！　大丈夫か!？」

和人が上の空で様子がおかしい木綿季に気が付くと、慌てて席に駆け寄りテーブルにお盆を置き、木綿季の肩に両手を当てて前後に揺さぶり、必死に声を掛けていた。木綿季も和人に揺さぶられたことで我に返り、自分が上の空になってしまったことを自覚していた。

「あれ……、かずと……」

「しつかりしろ！　大丈夫か!？」

「う、うん……だいじょうぶ。ごめんね、ちよつと考え事してた……」

「……それならいいんだが……、お願いだからあまり心配かけないでくれ……」

「あ、うん……ごめん、和人……」

木綿季が我に帰ると、和人はほつと胸を撫でおろし、彼女と向かい合う形で椅子に腰を落ち着けた。テーブルの上には、既にお盆に乗つけられたテリヤキバーガーセットが二人分置かれていた。普段は食欲旺盛な木綿季であったが、今日はハンバーガーに手をつけず、頭を垂れて縮こまってしまっていた。

「なあ木綿季、食べないのか？」

「……知らない、ちよつと今は……食欲ないから……」

「お、おい……本当に大丈夫か？」

「……大丈夫だよ」

「……………」

一方で和人も食事に手をつけず、テーブルに肘をついて木綿季を見つめていた。食べることが大好きな木綿季が好物のハンバーガーに、手をつけられないほどの事態に直面してるのだろうと考えていた。覚悟を持ってここまで来たとしても、ためらわれることがあるのだろう。

「……やっぱり、怖いか？」

「え……？」

「お姉さんたちと向き合うのが、怖いか？」

「……わかんない」

「……そうか」

「……」

和人が声を掛けても、木綿季は無言を貫いていた。和人の顔を見るわけでも、置かれた食事に手を出すわけでもなく、ただひたすらに下を向いてうなだれていた。その様子を黙って見守っていた和人だったが、あまりにも見かねたのか小さく溜め息を吐いた後、思い切つて木綿季に問いただし始めた。

「逃げるのか……？」

「えっ……？」

「怖いからって、つらいからって逃げるのか？ ご両親と……お姉さんと向き合うんじゃないか？」

「あ……う……ボ、ボクは……」

「お前らしくないぞ……、何にでもぶつかるのがお前じゃなかったのかよー！」

「……ボク……は……」

和人は弱気な木綿季に喝を入れるべく、声を荒げて諭しだした。かつてALOで自分が腐つてたときに木綿季がしてくれたように、今度には和人が木綿季に思いの丈をぶつけていた。こんなものいつもの木綿季じゃない、何事にも全力でぶつかるのが木綿季じゃないか、ならこれから起こることから目を背けるな、そう訴えていた。

「帰りたいなら帰ったって構わないぞ。お前がそう望むなら、今からでも引き返そう」

「い、嫌だ……嫌だよ……、ここまで来て今更引き返せない……」
「なら、どうする？」

「……ボク、あのお家に行きたい、いや、行かなきゃだめなの……」

木綿季の心の迷いをあと少しで吹っ切れさせられそうと感じた和人は、彼女の決心を固めさせるべく、敢えて厳しい言葉を並べ続けた。優しい和人にとっては、その行動は少し胸を痛めるような言葉であった。しかしその甲斐もあつてか、木綿季の決意は固まったようだった。

嫌だ、ここまで来て帰るなんて絶対に嫌だ。来る前に決めたじゃないか、けじめをつけるって。パパやママ、姉ちゃんと向き合うつて、そう決めたじゃないか。今更引き返すなんてこと、出来るわけがない。やるんだ、これはボクにしか出来ないことだ、逃げるな、逃げるな！やるんだ！全力で姉ちゃん達に……いや、「ボク自身」にぶつからん……！

「逃げるなんて嫌だ……折角ここまで来たのに、逃げるなんて……絶対に嫌だ！」

「……」

「お願い和人、ボクを連れて行ってほしいの……、あのお家まで……！」

木綿季はテーブルに手をつきながら和人に真剣な眼差しを送り、自分の家まで連れていってくれと訴えていた。和人も最初は本人がっらいのなら今からでも引き返そうかとも考えていたが、それで本当に木綿季のためになるかと思うと、そうではない気がした。少々きつい言い方になってしまったかもしれないが、和人は出来る範囲で木綿季の背中を押したのだった。

「お願い和人、ボクをあそこまで……連れて行って……」

「……わかつてる、大丈夫だ」

「え……？」

「木綿季はこれぐらいで逃げるようなやつじゃない、わかってるよ。少しキツイ言い方になっちゃってごめんな……」

「え、あ……そんな……ち、違うの、ボクがちよつと弱気になってただけだから……、ボクの方こそごめんなさい……」

「……いいんだよ。……でも無理はするなよ？ ……ホラ、飯……食べちゃおうぜ」

「う……うん」

和人はそう言うと木綿季のお盆に乗っているテリヤキバーガーを左手で掴み、木綿季の目の前まで持っていき、早く食べないと冷めちゃうぞと言わんばかりにチラつかせていた。木綿季は先程までの暗い表情から一変キョトンとした顔でテリヤキバーガーを見つめていた。

「早く食べないと冷めるぞ、いらないうら俺が食っちゃうが」

「え……だ、ダメだよー！ ボクのハンバーガーだもん！」

木綿季はそう言いながら、目の前のテリヤキバーガーを和人から両手でムンズと強引に奪い取ると、顔をムスツとさせながら包み紙を剥がし始めた。和人はそんなムキになった木綿季を、微笑ましく見つめていた。

「いただきます」

「もう……、いただきますー！」

弱気な自分を振り切り、改めて胸の内に覚悟を決めた木綿季は声のトーンを上げ、気分を変えるべく漸く昼食に手をつけていた。包み紙を剥がしたハンバーガーに大きな口でかぶりついていた。和人もそれに知られるように自分のハンバーガーを口に運んでいた。

「ん、美味しい♪」

「そっか、よかったな」

「うん！　ねね、これってお家で作れないのかな？」

「え、これとか？　う、うーん……どうなんだろう……」

「これがいつでもお家で食べられるなら楽しいと思うんだよねー♪」

「パティは挽き肉から作ればいいし、レタスやバンズ、マヨネーズはスーパーで手に入る。となると問題は……このテリヤキソースだな」

「何が入ってるんだらうねー？」

「……わからない……」

和人は右手で握っているテリヤキバーガーをじっと見つめていた。テリヤキバーガーは中心に薄めのパティ、その上に黒に近いブラウンのテリヤキソースとほんのり黄色いマヨネーズがかけられたレタス、それをバンズで挟んだシンプルな構造となっていた。和人自身もこんなにまじまじとハンバーガーを観察したことなどなかっただろう。

「ねえ和人、作れないかな？」

「うーん、ソースの秘密がわかれば作れないこともないと思うけど……」

「ホント!?　それじゃあ今度作ってよ！　ボクお家で食べたい！」

「……仕方ないな、ただしお前も手伝えよ？」

「わかってるよー！　えへへ、やったねー♪」

木綿季は先ほどまでの暗い姿からは打って変わって、すっかり明るい表情になっていた。心に改めて決意を固めたのか、和人が声をかけてくれたおかげなのか、はたまたただ単に無理して強がっているだけなのかはわからない。

だが、木綿季の意思は変わらなかった。今更逃げたって何も変わらない。ぶつかるんだ、支えてくれた友達や仲間の気持ちを裏切らないために、暖かい家庭に迎え入れてくれた桐ヶ谷家の人達のために、ずっと傍にいてくれた和人ために。

そして何より「ボク自身」のために……！

第61話く本当の家族 中編く

西暦2026年11月2日 月曜日 午後 12:35 神奈川
県横浜市保土ヶ谷区 星川町

和人と木綿季ら二人は和人の地元川越からバイクで2時間かけ、60km離れたここ木綿季の地元、横浜市保土ヶ谷区まで足を運んでいた。移動の疲れと昼食を取る為に、星川駅前のファストフード店へ足を運び、ジャンクフードに口をつけていた。

「ふう……ぐ」馳走様！」

「ぐ馳走様」

和人達の座っているテーブルの上に置かれたお盆には、空の包み紙とポテトカートン、そして飲みかけのコーラが入った紙コップが置かれていた。もうあらかた食事は済み、飲み物を残すだけとなっていた。店内は和人達が入ってきた時と比べて、昼食を取るために入店してきた客でごった返し始めてきていた。中でも特に親子連れが多く、それほど広くもない店内は既に満席寸前となっていた。

「木綿季、ぼちぼち出よう。別に急いではないけど……席を空けた方がよさそうだ」

「あ……うん、そうだね。行く、和人」

後から来た客の為に席を立った二人は残ったコーラを一気に飲み干し、紙ごみをまとめてダストボックスに運び、捨てるものは捨て、トレイは指定の場所へちゃんと片付け、そそくさとアクドナルドを後にした。和人たちが店を出て数歩歩いた後に振り返ると、あつという間に店内は客で満席となっていた。先日のソフトクリームもそうだが、この二人はかなりめぐり合わせ良く外食を済ませられていると思う。

混雑に遭遇したことがまるでなかった。

「美味しかったねー！」

「ん、まあ……な。食べ慣れてる味だけだな」

「ボクにとつてはご馳走だよ！ また来ようよ！」

「うーん、まあ木綿季が気にいったのならちよくちよく来ようか」

「わーい！ また来ようよ！」

チエーン店なのだからどこでも食べれるだろうと思つた和人であつたが、敢えてつつこむのはやめておいた。野暮なこと言つて木綿季に機嫌を損ねられても困りものだし、お腹いっぱいになつてご機嫌になつてる所に水を差すのもあれだ。家に着くまでこのままご機嫌でいてもらおう。

「よし、それじゃあここからはボクが案内するよ！」

「そうだな、それじゃあお願いするよ、木綿季」

「うん！ お願いされました！」

木綿季はそう言いながら楽しそうに右手で敬礼のポーズをとつていた。川越が和人の地元ならここ横浜の保土ヶ谷区、星川と月見台は木綿季のホームグラウンドだ。暮らしていた期間は一年ほどだったが自分の庭も同然だった。どこに何の店があるか、美味しい店はあそこにあるというのも熟知していた。……四年前までの話だが。

木綿季は和人を先導しようと、うきうき楽しそうに星川の街を歩いていた。横浜市の中央にある保土ヶ谷区には小さな山や丘が数多くあり、木綿季の地元の月見台、星川町もその例外ではなかった。

住宅街が坂を昇つた上にあるのも珍しいことでもなく、木綿季の家も例外なく丘の上に佇んでいる。良く言えば運動不足解消向け、悪く言つてしまえば普段から生活していくには非常に面倒な地域となつていた。

「……のどかで緑が多くていいところじゃないか」

「うん、横浜っていつてもどこもかしこもみなとみらいみたいな都会ってわけじゃないからねー」

「……こういう雰囲気、俺は好きだな」

「ほんとう？ えへへ、そう言ってもらえると嬉しいな……♪」

和人と木綿季は星川駅からみて南西の方角へ歩を進めていた。少し駅を離れると、築20年ほどは経過しているであろう長屋の様な建物や、古い飯屋等の小さい家屋が何件もズラーつと軒をつらぬいていた。建物の壁のビビヤ、看板や灯りの金属部分の錆びなどが、昔からここに建っていたという年季を感じさせていた。この辺りの道幅もそれほど広くなく、歩道も路側帯にガードレールが置かれているだけという心細いものとなっていた。

車道も満足にも広いとはいえず、バスやトラックがすれ違うのに苦労しそうな道幅だった。その割には駅が近い所為か交通量が多く、昇りも下りも一般車両や公共の車で混雑していた。おそらくビジネスマンや買い物客の車なのだろう。和人たちはそんな細い道の端っこを、辺りをきよろきよろと見回しながら歩いていった。

「あ……！」

「ん、どうした……？」

和人を先導していた木綿季だったが、何かを見つけたのかととてと一足先に早歩きで少し先にある小さな建物に向かつて歩いていった。歩道が大変に狭く、交通量も多いので少し心配そうに和人は見守っていた。木綿季が見つけたのはどうやら飯屋のようで、飛び出ている看板には「肉」と書かれていた。

「和人！……このお店美味しいんだよー！」

「何だ……、焼肉屋……か？」

「うんうん、昔ね、家族で食べに来たことがあるの、ホルモンがすつこ

く美味しいんだ！ まだやってたんだね……」
「へえ、ホルモンか……」

奥に細長いやや年季の入った建物からは、肉の灼けたいい匂いが漂っていた。白い壁にブラウンの屋根とスライド式の扉、そして入口の前には「焼肉 弥勒」と書かれた長いのれんが風に揺られてなびいていた。どうやらもう営業しているようだった。2013年に創業し、現在も地元民に愛され続けている焼き肉屋だ。木綿季の言った通り、数豊富なホルモン類の品揃えが魅力的であり、安価で安全で美味いをモットーにした店屋だと言う。今度お腹がすいたときに食べに来てみたいものだ。

「そんなに美味しいなら……是非食べてみたいな」

「うん、絶対来よう！ 味はボクが保証するよ！」

「ああ……そうしよう、木綿季のお墨付きなら俺も安心だ」

「えへへー♪」

いつか一緒に食べるにこようと約束を取り付けた木綿季は先ほどよりも嬉しそうにしていた。家族とのけじめをつけるのにいささか緊張しすぎていたようだったが、かつて自分が暮らしていた街並みを見て歩きたびに、懐かしさも感じてきたようだ。木綿季はますますご機嫌になり、引き続き和人を先導していた。

焼き肉屋を通り過ぎた二人は十字路を右に曲がりさらに狭い道へと歩を進めていった。車道も路側帯もさらに幅が狭くなり、文字通り一歩間違えれば車両と接触してしまいそうな勢いだった。実際に原付が和人の十数センチ横を通り過ぎていて、冷や汗をかいたほどだった。

「あ、あぶねえなあいつ……左に寄り過ぎだろう……！」

「大丈夫だよ、ほら、その脇道にすぐ入るから」

木綿季の先導通りに交差点を曲がり、10メートルほど歩くと中央線が無いやや狭い脇道に差し掛かった。その先には長い長い上り坂が和人たちを待ち受けていた。奥に行けば行くほど高低差が激しくなっており、場所によっては崖の上に建っているんじゃないかと言いたくなるような家屋も視界に映っていた。

「嘘だろ……ここを上るのかよ……」

「この坂あがったとこにボクのお家があるんだ」

「……今からバイク持ってきてちやダメか？」

「……うーん、別にいいけど途中からすっごい急坂になってカーブもぐねぐねしてるところがあるんだよ。だから慣れないとバイクは危ないと思う……」

「うへえ……マジかよ……」

バイクで楽をしようとする選択肢を消された和人はあからさまに肩を落としてがっくりと項垂れてしまっていた。木綿季は流石にこの坂を何回も上り下りしている身として、余裕の表情を浮かべていた。ついこの前までリハビリをしていたとは思えない様子だった。

「ほらほら、突っ立ってないで先に行こうよ」

「……仕方ないか……、はあ……」

元気な木綿季とは裏腹に、和人は上着のポケットに手を突っ込み、渋々足を動かし始めていた。最初は緩やかな傾斜であったが、40メートルほど進んだあたりから、傾斜が徐々にきつくなりはじめ、さらに10メートルほど進んだ箇所からとんでもない急坂になり、おまけにS字カーブのおまけつきだった。確かにこれでは慣れてないと二輪で通るのは危険だというのもうなずけた。

木綿季はやはり慣れているのかさほど息を切らさずに両手を前後に振りながら、うんせっほいせっつと元氣よく坂を上っていた。一方で和人は足取り重く、歩く速度が段々と落ちてきてしまい、木綿季から

おいてけぼりを喰らう羽目になっていた。息も絶え絶えになり、汗も噴き出て、腿のあたりが悲鳴を上げていた。とても剣道実力者だとは思えない姿だった。

「ぜえ……ぜえ……、木綿季……ちよつと、ま……待ってくれ……」
「うんー？」

木綿季が和人の声掛けで振り向くと、そこには肩で息をしながら、膝に手を着いてしまっている彼の姿があった。木綿季の家までまだ上り坂は続くのだが、三分の一ほど歩いた時点で和人はもう限界といった様子だった。いつもは何かと和人の案内で色んなところにいつていた木綿季であったが、今回ばかりは地元民である彼女にアドバンテージがあつたようだ。

「ちよつと和人……大丈夫？」
「……ぜえ……ぜえ……」
「……もう、しょうがないなあ……」

木綿季は5メートル程下で息があがっている和人に駆け寄ると前かがみで和人の顔を覗き込むようにして声を掛けた。和人は汗が噴き出した額を右手で拭うとやつれたような顔で木綿季を見つめていた。

「お、お前……こんな坂を毎日上り下りしていたのか……」
「うーん、こつちの坂じゃないけど学校行くときは毎日上り下りしてたよ？ だから慣れ……かな？」
「お前……本当に病み上がりか……？」
「和人が体力なさすぎなんだよー！ ボクより強いのにさー」
「……腕前と……体力は比例しないものなんだ……」
「……そこえげばるとこじゃないでしょ？ ほら、引っ張ってあげるから頑張って」

木綿季はそう言いながら和人の左手を右手で掴み、強引に引つ張る上げるようにして坂を一緒に上っていった。和人はまだ息が整っていないかったが、木綿季に腕を引つ張られると、それに導かれるかのように足取りは重いまま先に進んでいった。完全にいつもと逆の立場だった。

その後も急坂は続き、幾度もくねくねしたカーブを曲がり、二人は木綿季の家を目指して歩を進め続けた。頑張つて坂を上り続けると急坂が終わったのか、少しずつ傾斜がゆるくなつていった。和人も木綿季に引つ張つてもらつていたこともあり、先ほどよりは体力の消耗が抑えられている様子だった。一方で木綿季は呼吸一つ乱さずに坂を上り続けていた。

「もうこれで坂道は終わりだよ」

「よ、漸くか……、もう……足がガクガクだ……」

急坂ゾーンを抜けると、そこには坂の下とは違って新築の家が目立ち、一軒一軒がごちゃつとしておらず、綺麗な住宅街で、まるで坂の下と上で違う街に来ているかのようだった。緩やかな坂を歩いていくと前方右手に広めの公園が視界に映っていた。結構上の方まで歩いてきたのだろうか？ 坂の下にいたときと比べて随分と風が強くなってきたようだ。真冬に来ればきつと凍えてしまうことだろう。

「つ……疲れた……」

「情けないなあ、明日奈は息一つ切らしてなかったよー？」

「……何者だよ、あいつ……」

「まあ……明日奈の超人っぷりはともかくとしてさ、ボクのお家……もうすぐだよ」

「……どこだよ？」

「あの公園の向かいに……あるんだ……」

「……そうか、本当にあとちよつとだな」

木綿季はかつて暮らしていた自分の家の、十数メートル手前の位置にまで近づいていた。途中まで和人のお守をしながらだったためあまり意識していなかったが、いよいよよだと思おうと改めて自分が緊張していることに気がついた。そして一旦意識しだすと、心臓の鼓動がどンドン早くなっているのも感じていた。心臓がドクンドクンと脈打つたびに、呼吸が荒くなり、額からも汗が噴き出していた。

和人は自分の呼吸を整えながら、すぐ傍で胸の辺りを抑えている木綿季の異変に気が付いていた。彼女の呼吸がどうして荒くなっているのかもわかっていた。だから、握っていた手を再度握り返した。木綿季が一人で遠くにいつてしまわないように、お前には俺がいると安心してもらおうように、優しく包み込むようにして握り続けた。

「行こう木綿季、大丈夫だ……俺がついてる」

「……………うん……………」

木綿季は自分を落ち着けるために大きく息を吸い、また大きく吐き、ゆっくり目を閉じて瞑想するかのようになんげで佇んでいた。そして十数秒ほど目を閉じ続け、覚悟を決めたのか目をパツチリと開け「よし」と気合を入れなおし、和人の手を握りながら一步一步、歩み進んでいった。和人も今度は置いていかれないように、木綿季の歩行速度に合わせて足を動かしていった。

一歩、また一歩、脚を前に動かすたびに目の前の景色が自分に迫ってくる。左手に見える一軒家を二軒通り過ぎると右手に楕円上の形をした広い「明神台公園」が広がっていた。そしてその方向と逆に視界を移すと、赤い屋根に白い壁の家屋が佇んでいた。左側に見える庭らしき場所には土埃で汚れたイスとテーブルが置かれており、枯れた芝生と朽ちた植木が生えていた。玄関周辺は雑草が生い茂ってしまい、長年誰も足を踏み入れていないということ物語っていた。

その建物の一番外側にある門柱には「紺野」と書かれた表札がつけられており、ここが紛れもなく木綿季の家だということを表している。

た。四年間留守にしていたが、木綿季は再び故郷に帰ってこられたのだ。今は誰も住んでいないが、数少ない木綿季の居場所の一つだった。

「わあ……」

「ここが、木綿季の家、なんだな……」

「うん……、また直接来られるとは思ってなかったよ……」

「……………」

木綿季はかつて自分が暮らしていた家を見上げ、隅々までまじまじと見つめていた。何度も出入りした玄関のドア、どろんこになるまで姉と走り回ったり、バーベキューをしたり、父と本棚と一緒に作った思い出のある庭等、次々に視線を移していった。四年ぶりに訪れた自分の家は、懐かしいようでいて、それとなく尊い存在のように感じた。

「……………中に入るか？」

「え……、あ……う、うん……」

和人は木綿季から預かっている家の鍵を鞆から取り出すと、彼女にそれを手渡した。セキュリティ技術が進んだこの時代に、紺野邸はカードキーではなく、普通の金属で出来たアナログな鍵を使用していた。和人から鍵を受け取った木綿季はそれを握り締め、一步一步足の前に動かし、四年ぶりに自分の家の敷居を跨いだ。入院する前より身長が伸びたせいかな、その目に映る光景は昔より少し違って見えていた。

倒れている植木鉢を通り過ぎ、石で出来た玄関前に足を踏み入れ、黒い扉の前で立ち止まり、ゆっくりと握っている鍵を鍵穴に差し込み、時計回りに90度捻った。幸い扉は四年間ほったらかしにされていたにも関わらず「カチャ」という音を立てて正常にロックが外され

た。二つ取り付けられた鍵穴のもう一つの方にも差し込んで、同じようにロックを外した。あとはこのプッシュアップル錠タイプのドアレバーを手前に引けば、屋内へと入れる状態となっていた。

「……………」

この扉の先には何が待っているのだろうか？ 楽しかった思い出？ つかった記憶？ 懐かしさ？ それとも違う何か？ 考えても考えても想像がつかなかった。ただ一つ言えることは、もう一度この家の中に入って、木綿季自身が体と心で、全てを感じ取らなくてはならないということだった。

木綿季はドアレバーに手を掛け、ギュツと握りしめた。しかし手が震えて中々手前に引くことが出来なかった。ドアを開けることが出来ずに困っていると、和人が背後から近づき、木綿季の肩越しに腕を伸ばし、彼女の手に自分の手を重ねてた。それに気付いた木綿季はすぐ近くにある和人の顔を見つめた。そこには自分の大好きな男の子が「大丈夫だ」と自信に満ちた表情で見つめ返していた。

和人と視線を交わした木綿季はまだ少し心に不安を抱えながらも、二人で一緒にドアレバーを力強く手前に引いた。扉はギイツという音を立てながらゆっくりと開かれ、その拍子に四年分溜まった塵や埃が少しだけ舞い上がった。

和人と木綿季は舞った埃を手ではらいながら玄関にあがり、紺野邸の一階内部を見回していた。白い壁紙に床はフローリング、奥には二階へあがる階段が見え、左手にはリビングへと続く通路があり、リビングには明るい木目調のテーブルに、同じ柄の椅子が四つ備え付けられていた。その奥にはキッチンがあり、窓からは外からも見えた庭が視界に映っていた。どこも埃などで汚れてしまっただけではいたが、劣化などはしておらず、ちゃんと掃除すればまだまだ使えそうな印象を受けた。

「ただいま、なのかな……………」

「そうだろうな……」

和人は靴から携帯スリッパを二人分取り出し、一つを木綿季に手渡し、一つを自分の足元に置き、靴を脱いで先に玄関から上がり框に足をつけていた。先にあがった和人は木綿季がスリッパに足を通すのを待ち、履き終えた彼女に手を差し伸べ、引っ張り上げた。木綿季は小さい声で「ありがとう」とだけ言い、一階のリビングへと足を運んでいた。

「……………ッ」

「ここは……………リビングか」

「……………うん、ここで毎日、ママの手料理を食べてた。クリスマスパーティーもお誕生パーティーもここでやったんだ」

「そうなのか……………、楽しかったんだろうな……………」

「……………そうだね、すっごく楽しかった……………」

木綿季はかつて自分の母親が作った料理が並べられていたテーブルの上を見つめていた。母親の愛情がこもった手料理はいつもここで食べていた。時に共に笑い、時にお行儀が悪いと怒られ、時に誕生日をお祝いしてもらい、逆にお祝いしたり……………、短い間だったがとてもたくさんの思い出が詰まっていた。木綿季は自分がいつも座っていた窓際の席に近付き、テーブルにそっと手を当てた。掌には少しだけ埃がこびりついてしまっていた。

（木綿季、お誕生日おめでとう！）

（わあ……………、パパ、ママ、姉ちゃん！　ありがとう！）

（さあ、ロウソクの火を消そうか……………）

（うん！　ボク、一気に消してみせるからね！）

（あははは！　頑張れ、木綿季！）

「……………」

「木綿季……………」

「……………ママが料理してる姿をね、ここで座りながら毎日楽しみに見てたんだ。今日は何が出来るんだろう、どんなものが食べられるんだろう、ってね……………」

「……………」

（ママ、今日は何作ってるの？）

（さあ……………何かしらね？）

（えっとね、ビーフシチュー！）

（うふふ、当たり前！ においでわかっちゃったかしら？）

（やったー！ いっぱい食べるぞー！）

（でも、食べ過ぎないようにね？）

（分かってるよー！）

「ママの料理……………美味しかったな……………」

「……………」

木綿季はテーブルから離れ、庭が見える窓際へと歩いていった。開きかけのカーテンをゆっくりと開き、窓の外を見てみると、ところどころ枯れた芝生に朽ちた植木、汚れた白いテーブルと倒れた椅子が目に入った。木綿季はその光景を寂しそうに、切なそうに見つめていた。

「この家で暮らしたのは、ほんの一年たらずだったんだけどね。でも、あの頃の一日一日はすごくよく覚えてる……………」

「……………」

「あの庭でいつも姉ちゃんと走り回って遊んでいた。バーベキューしたり、パパと本棚作ったりもしたよ」

「……………そう……………か……………」

（パパ、これはどうするの？）
（それはね、ここの部分にはめてくれないか？）
（えつと……こう、かな……？）
（そうそう、木綿季は器用だね）
（えへへ、ボクだってこれぐらいは出来るよー！）
（あははは、そうかそうか！）

「……パパ……」
「……………」

和人は木綿季と同じようにリビングの窓から庭を見下ろしていた。確かに朽ち果ててしまっただけだが、それなりに広く、子供なら十分に動き回って遊べるだけの広さがあった。木綿季は幼い頃、父親と一緒に日曜大工をやっていた。幼いながらも父親の役に立とうと、一生懸命に手伝いをしていた。

学校から帰ると毎日庭で姉の藍子とどろんこになるまで遊んでいた、AIDSを発症するまで、毎日毎日夢中で、日が暮れるまで……。

（木綿季！ 待ちなさい！）
（こつちだよー！ 姉ちゃん！）
（ちよこまかと……そりゃ！）
（わわっ！）
（さあ捕まえた！）
（ううー！ 放してよー！）
（遊ぶのはこれまで！ まだ宿題やってないでしょ？）
（はあーい……）
（終わったらまた一緒に遊ぼう？）

(う…………うん！)

「……………」

「二階は何があるんだ？」

「…………二階はパパとママの寝室と、ボクと姉ちゃんの…………お部屋があるんだ」

二人はリビングを出て左手にある、二階へと続く階段のある方を見つめていた。紺野邸は全体的に細長く、無駄に広い桐ヶ谷邸と違って比較的シンプルな間取りとなっていた。しかし高台の上に建てられていることもあってか、星川町と月見台の街並みを見降ろせる光景は目を見張るものがあった。

「…………行くか？」

「……………」

和人に声を掛けられた木綿季は廊下まで足を運ぶと、二階へと通じる階段の前で立ち止まり、じつと二階のある方を見つめていた。階段の上にも埃が積もっており、やはり誰もここを行き来していないということを物語っていた。物音一つせず、ただただ静けさと屋外からの小さな雑音だけが、紺野家の屋内に響いていた。木綿季はしばらく階段を見つめた後、両手を胸に重ねて物思いにふけていた。

この二階には木綿季の両親の寝室と、姉である藍子と共同で使っていた子供部屋がある。木綿季を誰よりも近くでずっと見守り続けてくれた、たった一人の姉と過ごした部屋が。誰よりも大好きだった姉ちゃんとの思い出の部屋が…………。

和人は玄関から上がったときと同じように一足先に足を階段に踏み入れ、木綿季の手を引っ張って二階へ上がろうと彼女に手を差し伸べたが、木綿季は床を見つめて項垂れてしまっていた。楽しい思い出が詰まった家だったが、生活感がなく、もぬけの殻だということを目

の当たりにすると、自分以外の家族はもうどこにもいないんだなということも、肌で感じ取ってしまった。

「……………木綿季？」

「……………和人、もう大丈夫。帰ろう」

「えっ……………」

「もう充分だよ……………帰ろ？」

「いや……………でもまだ全部見てないんじゃないか？ お姉さんとの部屋とか……………」

「いいの、もう充分だから、満足だから……………帰ろう？」

「……………」

まだ家の中全てを見ていないというのに、木綿季は階段を背にして玄関に向かい、そそくさと歩いて紺野邸を後にしようとしていた。和人は木綿季の突然の行動に呆気にとられ、目を丸くしてきよんととしてしまっていた。本当に木綿季は満足なのか？ たったこれだけを見て回って、心に決心がついたというのか？ 全部感じ取れたというのか？ 過去と……………家族とちゃんと向き合えたのか？

「お、おい……………木綿季！」

「……………」

スリッパを脱いで靴を履こうとしている木綿季に慌てて和人が駆け寄り、肩に手をやり制止させると、木綿季は無言でその場に立ったまま動かなくなってしまう。和人の手からは、木綿季の身体が小刻みにふるふる震えているのが感じられた。一見懐かしい思い出に浸って、心静かに家族と向き合っていたかと思えたが、家族がもういないということを感じ、決して表に表さないよう心の中で我慢をしていたのだった。

「大丈夫……………だから……………」

「木綿季……」

「だい……じよ……ぶ……だか……ら……」

「……木綿季……?」

木綿季の目からは、かつてないほどの大粒の涙が滴り落ちていた。流れても流れてもその勢いは止まらず、どんどん次から次へと溢れ出ていた。彼女はやはり無理をしていたのだ、温かい家庭に迎え入れてもらったとはいえ、肉親を全て失った悲しみはそう簡単に消えはしなかった。病気が治り、仮想世界から現実世界に無事帰還し日常に溶け込めば溶け込むほど、尚更その悲しみは強みを増していくばかりであった。

「ゆ、木綿季……」

「あ……あ……」

和人はかつて見たことがないぐらい悲しい顔を見せた木綿季に駆け寄り、たまらず両手を彼女の背中に回し抱き締めていた。木綿季が背負っていた悲しみは家族を亡くしたことだけではない、生まれたときからHIVウイルスに蝕まれ、凄惨な想いをしながらいじめられた幼少時代を過ごしていた。

やがてAIDSを発症し、親離れするよりも早く無菌室に隔離され、メデイキュボイドの狭く暗い部屋の中で三年もの長い間、たった一人で孤独な時間を過ごし続けていた。その小さい背中に積み重なり続けた悲しみが、今どつと一気に重みを増してのしかかってきたのだ。

「あ……あああ、あああああ……、うあああああああ!!」

「木綿季……」

「あああああ……あ……ああ……ッ」

木綿季は和人に抱かれると、和人の胸倉を掴み、耳をつんぎくように泣き叫び、大粒の涙を滝のように流し続けた。流れ続ける涙は木綿季の頬を伝い、和人の衣服を濡らし続けた。和人は木綿季の悲しみを受け止めるかのように、優しく木綿季を抱き留め続けた。

「パパ……ママ……、ねえ……ちゃん……、あ……ああ……」
「……………」

「何で……？ 何で死んじゃったの……？ 何で……？ 何で……？」

「ゆう……き……」

「何でボクだけ置いて逝っちゃったの……、何で……」
「……………」

「やだよ……独りはやだよ……ボクを独りにしないでよ……」

普段中々弱音を吐かない木綿季であったが、今まで積み重なってきた分全てを吐き出すかのように、涙と共に表に出していた。和人はそんな木綿季の涙や言葉全てを受け止め、震える彼女を抱き締め続けた。苦しみ悲しみを分かち合い、共に将来の糧とするために、木綿季の全てを受け止めていた。

「木綿季……頑張った、よく頑張った……。あの暗い部屋でたった独りで三年間も……本当によく頑張った……」

「えぐっ……ひぐっ……」

「でもな、もう頑張らなくてもいいんだ、16年間も頑張りが続けたんだから……。もうゆっくりしていいんだよ……」

「かず……と……かずと……」

「俺が傍にいる、ずっとお前の傍にいる。何があってもお前から離れない、絶対に寂しい思いはさせない……」

「かずと……かずと……、う……あ……あ……」

それから木綿季は16年間心の中に溜め込んだものを、すべて吐き出し、泣き続けた。泣いても泣いても涙は止まらずに溢れ続けた。一生分の涙をここで出し尽すかのように、ただただ和人の胸を借りて泣き続けた。後にも先にも、ここまで木綿季が涙を流すのはもうここだけだろう……。

「…………ツ…………ツ」

「木綿季…………」

木綿季はあれからひたすら悲しみと一緒に涙を流し続けた。十数分間泣き続け、和人の衣服をぐしょぐしょに濡らしていた。和人は木綿季が落ち着くまで抱き続け、彼女が泣き止むのを待っていた。やがて抱き留めていると、次第に木綿季の涙は引っ込み始め、顔を真っ赤に染めながらも呼吸も落ち着いてきていた。

和人は木綿季の背中に回していた右手をゆっくり彼女の頭へと運び、優しく丁寧に掌で撫で、ぽんぽんと叩いていた。和人の胸に顔を埋もれさせていた木綿季は閉じていた瞼を開けると、ゆっくりと和人から体を離し、自分の目を上着の袖でゴシゴシと擦って涙を拭った。目と頬っぺたは泣きじゃくった影響ですっかり真っ赤になってしまっていた。

「ごめんね和人…………、もう大丈夫…………」

「…………無理してないか？」

「うん、大丈夫。泣いたら…………少しすっきりしたから…………」

「…………そうか…………」

「ありがと…………かずと…………」

「…………気にするな」

木綿季はひとしきり泣いてすっきりすると、和人の手を握り、玄関

とは反対の方向の階段へと向かって歩き始めた。ようやく本当の意味で心の整理がついたのだろう。まだ全部とまではいかないがこれまでの人生の悲しみを吐き出し、少しだけ家族の死を乗り越えられたようだった。二階へと続く階段に足を踏み出し、一步、また一步と、一段一段階段を上っていった。和人も手を引かれながらそんな彼女の後に続いて階段を上がっていった。

階段を上がると目の前には廊下と、部屋の扉が二つ視界に映っていた。手前の部屋は木綿季の両親が使っていた寝室、奥の部屋は藍子と共同で使っていた子供部屋。木綿季はまず手前の寝室のドアに手を掛けて、中の様子を覗いてみた。この部屋には数えるほどしか入ったことはないが、思い出深い場所だった。両親が寝ている深夜にこっそり忍び込み、間に挟まるようにして寝たこと、四人仲良く川の字になって愉快地寝たこと、楽しい思い出があったのだ。

「……あはは、すっかり埃だらけだね……ここも」

「……そうだな、流石にマットとかは劣化しちやつてるみたいだな……」

寝室の奥にあるかつて両親が使っていたダブルベッドは、時の経過ですっかり繊維がボロボロになり、朽ち果てていた。掃除でどうこうなるものでもなく、使うにはマットや掛布団を全て買い直さなければならぬほどだった。他に目立った家具はなくここもやはりあちらこちらが塵や埃ですっかり汚れていた。

「昔……かくれんぼでここのベッドに隠れたことがあってさ、シーツとか滅茶苦茶にして……ママに怒られたことがあるんだ」

「あはは、確かに木綿季の小さい体じゃ隠れやすいかもだな」

「む……昔の話だよー！ 今は成長期だから身長伸びてるもん！」

四年前の身長が、今とそんなに変わってないだろうと思った和人であったが、下手なことと言って機嫌を損ねられても面倒なので、またも

や敢えてコメントを控えていた。木綿季はそんな和人の表情を見て、何か腹に一物持っているなど踏んでおり、どうせ野暮なことでも考えられているのだろうと見抜いていた。木綿季の前で和人は隠し事は出来ないのだ。

両親の寝室を後にした二人は残された最後の部屋、木綿季と姉の藍子が使っていた子供部屋へと足を運んだ。ドアの真ん中には、紺野姉妹の手作りだと思われる「あいことゆうきのおへや」と書かれた可愛らしいプレートが吊り下げられていた。そのプレートを見て、木綿季は思わず笑みをこぼしていた。もう過去との思い出で悲しい想いはしていないようだった。

「開けるね」

「……ああ」

木綿季は自分の部屋のドアレバーに手を掛けるとゆっくりと反時計回りに捻り、手前に引いた。部屋の中はフローリングの床の上にロボロになった藍色と紫色を基調としたカーペットが敷かれており、その上に姉妹が使っていたと思われる、淡い木目調の勉強机が二つ隣り合わせに並んで置かれていた。机の上には何もなく、勿論引き出しの中も空っぽになっていた。昔使っていた筆記用具やノートの一冊や二冊でもあると思ったが、全てもぬけの殻となっていた。

「死ぬ前にパパとママがね、家の中の整理を全部やってっただ。捨てるものは捨てちゃって、大事な物は全部倉橋先生に預けていったの。この家の権利書とか、通帳とか……」

「そうだったのか、だから思ったより片付いてたんだな」

「……うん」

木綿季はかつて自分が使っていた勉強机の上に手を当て姉との懐かしい思い出にふけていた。一緒に勉強したこと、二人そろってごろんとだらしなくカーペットに横になってダラダラしていたこと。

両親に内緒で誕生日パーティの計画を企てていたこと等、さまざまに思い出が脳裏をよぎっていた。試しに横になってみたかったが、敷いてあるカーペットがボロボロになっていたのでそれは叶わなかった。

「懐かしいな……、姉ちゃんとはいつも一緒だったんだ。勉強してる時も、遊んでいるときも、入院してる時も、仮想世界でも……ずっとずっと一緒だった。」

「……木綿季は、姉さんのことが大好きなんだな……」

「うん、一番好きだった。パパとママより、誰よりもボクのことを気にかけてくれてて、いつも面倒見てくれてた」

「……そうか、俺も会ってみたかったな……木綿季の姉さんに……」

「会って……どうするつもりなのさ」

藍子に会ってみたいと一言漏らした和人の顔を、木綿季なジト目でじいーつと見つめていた。そんな彼女からの視線に気付いた和人はただならぬ雰囲気を木綿季から感じ取っていた。そして少しだけ怒っているかのような印象も感じられた。

「べ、別にどうもしないって！ ただ……会って話をしてみたかったなってそう思っただけだよ！ 別に他意はないって！」

「……むう、それなら別にいいんだけど……」

「……お前、もしかしてヤキモチ妬いてるのか？」

「べ、別に！ そんなんじゃないもん……」

先ほどまで悲しく泣いていた時とは打って変わって、今度は感情豊かに実の姉に対してヤキモチを焼いていた木綿季であった。ボクの和人に手を出すなら、例え姉ちゃんでも承知しないよとすごみそうな勢いであった。

ほどなくして木綿季たちは部屋の窓を開け、ベランダに出ていた。そこからの景色は絶景であり、星川と月見台の街並みが一望できる素晴らしい眺めとなっていた。横浜のシンボルでもあるランドマーク

タワーも遠くにしっかりとその姿を確認出来ていた。和人たちはしばらくベランダに佇み、一緒に遠くの風景を眺めていた。高台の上に建っているせいか風が強く、少々寒かったがさほど気にはならなかった。

「このお家ね、ボクがもし死んじゃった場合、権利が叔母さんに移る予定だったんだ」

「……叔母さんに……？」

「うん、叔母さんはここをコンビニにするか売っちゃいたかったんだって」

「……随分勝手な叔母だな、自分の家でもなくせに……」

「前に明日奈と一緒に来た時もね、似たような話をしたんだ」

「……明日奈と？」

「……うん、ここがゆくゆくは取り壊されちゃうことを話したんだ。そしたら明日奈なんて答えたと思う？」

「え？ さ……さあ……」

木綿季はベランダの柵に両腕を寄せ、さらにその上に自分の顔を乗せて外の風景を眺めながら、嬉しそうに、そして切なそうに語り続けた。

「明日奈がね、16になったら好きな人と結婚すればいいって言ったんだ。そしたらその人がずつとこのお家を守ってくれる、ってね……」

「も、物凄いこと考えるな……アイツ……」

「ホントだよね、ボクも驚いちゃったよ！ ジュンといい雰囲気じゃないーとか言い出してさ」

「……そうか」

「でもボクは、だめだめあんなお子様じゃー！ っていつてフっちゃった♪」

「あははは！ 付き合う前からフラれちゃったんだな、ジュンは」

密かにジユンから寄せられてた想いに気付くことも無く、本人がいないところで木綿季はジユンをフツてしまっていた。しかしそんなジユンも、叶わぬ恋と知っていながらも、木綿季のことを応援していたのだ。和人にまかせれば木綿季を幸せにしてくれる、そう信じて木綿季を和人に託したのだ。互いに男同士の誓いを立ててまで……。

「ねえ、和人……」

「……何だ？」

「も、もしもね……、もしもボクが……け、結婚してって言ったら……か、和人は……受け入れてくれる……？」

「……………」

木綿季からの突然のプロポーズにも近い質問に対し、和人はすぐに返事を返さずに空を見上げて考え込んでいた。時に目を瞑り、時にランドマークタワーに視線を移し、時に木綿季本人を見つめていた。大胆な質問を投げかけた木綿季は先ほど泣いていた時とは別の意味で顔を真っ赤に染めていた。しかし和人は一向に木綿季からの質問に答えるような仕草は見せなかった。

「……やっぱり、答えられないよね……」

「……………」

「ご、ごめんね？ 変なこと言って困らせちゃって……」

「……………」

「も、もう戻ろうか、倉橋先生にも連絡して病院に行かないと……」

木綿季が先ほどのやり取りの恥ずかしさと気まづさを誤魔化すかのように、そそくさと来た家の中に戻ろうと足を動かそうとした瞬間、和人が途端にむんずと木綿季の手首をがっちりと捕まえた。急に腕を掴まれた木綿季は和人の方を振り返り、目を丸くして驚いていた。

「な……、何？ かずと……」

「……木綿季、聞いてくれ」

「え……？ あ、う、う……ん……」

木綿季が和人の方に体を向かせると、和人は木綿季の両肩を両手で掴み、彼女をまっすぐと見つめ、真剣な表情でゆっくりと語り始めた。至近距離で見つめられている木綿季はまた顔を真っ赤にし、心臓の鼓動が激しく早くなつていくのを感じていた。

「俺な、今の学校を卒業したら大学に進学して、将来……こっちで職を探そうと思ってるんだ」

「……え？」

「それでな、そ、そのな、……い、一緒に……」

「……一緒に？」

和人は一瞬木綿季から目を逸らし、大きく深呼吸をし、心の準備を済ませ、勇気を振り絞って新たに決意したことを彼女に伝えた。今世の一大決心ともいえる、和人の気持ち……。

「一緒に、この家に住もう」

「……え……？」

「そ、それで……大学を卒業して、就職先が決まったら、その時に……お前に大切なこと伝える……」

「……ッ」

木綿季にはその先の大切なことの意味が何となくわかっていた。わかっただけに、敢えてそれを今この場でほじくり出す様なことはしなかった。和人が決心してくれたことに水を差したくないし、差すようなものでもなかった。

そして何より嬉しかった。ここで暮らすようになれば、思い出の詰

まったこの家がまた息を吹き返すことが出来る。楽しい思い出をまた作っていける。大好きなこの場所で、大好きな人と、たくさんの思い出を作っていける。

「……ッ……ッ」

「えっ!? あ……す、すまん! 泣かせるようなこと言っちゃまって……」

「……違う……違うの……」

「……へ?」

自分の一言で木綿季をまた悲しませてしまったと勘違いした和人は、慌てて木綿季の涙を持っていたハンカチで拭い、謝り続けた。しかし木綿季は首をフルフルと横に振り、それは違うと否定の態度を示して見せた。木綿季は自分の手で涙を拭いながら泣いていたわけを説明し始めた。

「嬉しかったの、和人の気持ちが……、嬉しくてたまらなくて……」

「……そ、そうだったのか……、よかった……」

「うん、ありがとう和人、ボク……すっごく嬉しい、本当に幸せ……」

「……俺も……木綿季がいてくれるだけで、幸せだよ……」

和人は木綿季と新たな約束を交わしていた。実質、互いを一生の伴侶として認めたようなものだったが、敢えて答えを明確にはしなかった。まだ互いに未成年であることと、この他にもやらなくてはならないことが山ほどある。互いの気持ちを伝えるのは、それからでも遅くはないだろう。何しろ、今の木綿季には時間はたっぷりあるのだから……。

それから20分ほど景色を眺めるとやがて木綿季は満足したのか、和人にそろそろ出ようと促し、紺野邸を後にすることにした。今日ここに来たことにより木綿季の迷いが吹っ切れたかどうかはわからないが、これからの人生を生きるための心の整理を、ある程度は出来た

様子だった。少なくとも、木綿季の心に傷を残すと言う最悪のシナリオだけは避けられたようだった。

ベランダから部屋に入り、窓のロックを閉め、部屋を出て階段を下って一階に降り、スリッパから靴に履き替えて玄関から外に出て、しっかりとドアの鍵も閉め、思いついた自分の家を後にした。敷地の外に出て、向かいの明神台公園の入り口の柵に腰かけ、最後にもう一度だけ、紺野邸の全貌を見上げていた。

「……………」

「……………もういいのか？ 木綿季……………」

「……………うん、今度こそ本当に満足だよ。少し気持ちの整理もついたら、大丈夫」

「……………それなら構わないが……………」

和人も木綿季の隣に腰かけ、一緒に紺野邸を見上げていた。紺野邸の真後ろには丁度太陽が重なっており、後光が差し込んでいるかのような神々しい光景に見えていた。まるでこの家はまだ輝ける、活躍できると和人たちに語り掛けているようだった。

「……………戻るか」

「……………そだね、戻ろっか」

和人たちはそう言うと、柵から腰を上げバイクが置いてある星川駅目指し、来た道に戻るべく歩を進めていった。木綿季は来た道に戻りながら後ろを振り返り、いつかまた住むことになる真っ白な自分の家を笑顔で見つめていた。

この時の木綿季には、ここに来る途中までの暗い雰囲気はまるで感じられなかった。木綿季は和人にここまで連れて来てくれたことと、これからの未来を見据えて返事をくれたことに心から感謝の気持ちを抱いていた。

和人と木綿季は後方から浮ついた視線を感じながらも、しっかりと手を繋ぎ、月見台を後にした。ここにやって来たことで、木綿季の今

後は大きく変わっていくことだろう。姓のこともそうだし、生き方そのものにも影響されていくことだろう。それがどのような形になるかはわからない。しかし、大好きな人と一緒に共に前に進んでいくということだけはこれからも変わらないだろう……。

木綿季は強く生きるために、新たな一步を踏み出していた。

第62話く本当の家族 後編く

西暦2026年11月2日 月曜日 午後 14:35 神奈川県
横浜市保土ヶ谷区 星川駅前

「……はい、それじゃあ今からそっちに行きますので……よろしくお願います」

『わかりました、お待ちしてますね』

「はい、ではまた後で……」

和人はスマホで倉橋に連絡を取っていた。木綿季と一緒に過去とのけじめをつけるために、気持ちの整理をつけるために、彼女の実家へと足を運んだのだった。家族が亡くなり、悲しみに暮れていた木綿季であったが、和人が傍で支えてくれたことにより、どうにかその壁を乗り越えられたようだった。まだ心残りが無いわけではないが、和人と新たな約束事を交わしたこともあり、自分の未来に光が差し込んでいることを感じていた。

「よし、先生に連絡はついたぞ、今から出よう」

「うん、先生に会うの……楽しみだなあ……」

「こっからだど道混んでなければ30分ぐらいで着くな、流石にうちよりは近いか……」

「そりゃあ市内なんだから当たり前だよ……」

「あははは、そりゃそうか！」

なんてことのない冗談の混じえた会話を交わしつつ、和人たちは慣れた動作でバイクに跨っていた。木綿季はちゃっかり和人から渡される前にシートから自分のメットを取り出し、バイクの後部座席にも一人で座れるようになっていた。一足先にシートに座りながら木綿季が笑顔を見せると、和人も嬉しそうにニコッと笑顔を返した。

ここ横浜市保土ヶ谷区から、木綿季の入院していた病院のある金沢区までは距離にして20km、有料道路を経由して走行時間30分ほどで到着する計算だ。和人はタンクをぼんぼんと叩き、また頼むぞと想いを注入し、バイクを病院に向かって走らせていった。二人を乗せたバイクはブルルンという音を立てて星川駅を後にした。

星川駅を出た二人は、まず有料道路である横浜新道に向かい、北東へと進路をとっていた。病院へは横浜新道、横浜横須賀道路という二つの有料道路を経由して向かうのが最短ルートだ。市内での移動ということもあり、休憩なしで一気に目的地まで走りぬくつもりだ。

しばらくして横浜新道に入ると、次は南へ南へとバイクを走らせた。保土ヶ谷区内で一番大きい県立の公共球技施設「保土ヶ谷公園」の真横を通り、東海道本線の線路の上を通り、南東へと向かっていった。道中で市営地下鉄ブルーラインの真上を通り、更にJR根岸線の真下を通過し、南下を続けていった。

そして星川駅を発ってから20分ほどが経過し、和人たちは横浜市内の南区、港南区、磯子区を通過し、病院のある金沢区へと入っていた。京急本線の真上を通り過ぎ、横浜横須賀道路の終点である並木ICで一般道に降りると、幸浦二丁目の丁字路を南に曲がり、私鉄横浜シーサイドラインの路線のすぐ横を走りながら、目的地を目指した。ここまですれば横浜港北総合病院は目と鼻の先だ。

一般道に入り、走る速度が落ちてくると話をする余裕も出てきたのか、二人は何故倉橋が自分たちを呼び出したのかということをお話していた。

「うーん、先生はボクたちに何の用なんだろう……」

「さあ……それはわからないけど……血液検査でもするんじゃないか？ 通院予定日よりかなり早いけど」

「でもそれなら検査しますーって電話で言ってくれたと思うんだけど」

なあ……」

「うぬう……それもそうか……」

会話を交わしつつも、走行中の身である事を忘れぬように和人は周りの交通状況を気にしながらハンドルの握り、木綿季は和人の体に回している手の力を緩めないように注意していた。

「あ、そういえば先生……来てくれれば姉ちゃんが喜ぶだとか言ってたな……」

「お姉さん……藍子さんか、うーん妙だな……それなら尚更検査の線は薄まっていくな……」

「何だろうね……」

「実は藍子さんが莫大な遺産を残していた！ とかか？」

「何でそうなるのさ、ボクも姉ちゃんも働いたことなんてないってばっ」

「じよ、冗談だつて、ほら……病院が見えてきたぞ」

「あ……」

和人がそう促すと、左手前方に見慣れた白い建物が見えてきた。木綿季にとってはAIDSを発症する前に何度も見ており、和人はお見舞いに来るたびに何度も目に見ていた。前までは命を長らえるため、病気を治すために足を運んでいたが、今回はそのどちらでもない。倉橋が二人に用があるとのことまでここまで足を運んだ。しかし肝心の当人が用事の内容まで詳しく話そうとはしなかったのだ。

知らない中ではないのだから思い切つて教えてくれればいいのにと思っていた和人達であった。それとも直接顔を見なければ話せないような内容なのだろうか、だとすると一体何だろう、もしかすると木綿季の身体にまた何か異変が!?

……いや、ないだろう、これまでの厳しい血液検査を何回何十回と繰り返してきたが、完治の診断を下されてからはただの一度としてHIVウイルスが検出されたことはなかった。たとえ外部から再び

ウイルスや細菌が侵入し、身体が侵されたとしても、復活した免疫細胞と木綿季の血管を流れるHIV耐性を持った血液がそれを絶対に許さない。

つまり木綿季の身体のことではないことがうかがえる、万一そうだととしても倉橋がのんびりこちらからの電話を待っているはずがない、絶対に病院から何かしらの連絡がくるはずなのだ。だとすると、木綿季個人への私的な用事か、木綿季の身の回りに関する大事なことのどちらかという可能性が高い。あくまで可能性の話だが。

西暦2026年11月2日 月曜日 午後 15:05 神奈川県
横浜市金沢区 横浜港北総合病院

和人は病院敷地内へと二輪を入れると、慣れた手つきでいつもの駐輪場へバイクを走らせ、スタンドを立ててエンジンを切り、メットを脱いだ。木綿季も独りでピョンとシートから飛び降り、両手でメットを外すと、首をフルフルと左右に振り「ふう」と息を漏らしながら黒のロングの髪を左右になびかせていた。

「こういう気持ちで病院に来るのは初めてか？」

「そうだねえ、今まではAIDSを発症しないために薬をもらいに来てたから、今こうやって病気が治って訪れるのは……初めてかな……」

「そうだよな、本当に良かったよ……」

「……うん、これも和人のおかげだよ」

「……俺は自分のやりたいことをやっただけだよ……」

「あ、久しぶりに聞いたよ？ そのセリフ！」

「そ、そうか？」

「うん！ ボクがメデイキュボイドの中にいたときは耳にタコが出来るぐらい聞いたもん！」

そんなに回数を数えられるほど言った覚えはないけどなど思った和人であったが、本人が自覚していないだけで結構キザで齒の浮つくようなセリフを常日頃から口にしていた。その度に周りのいる人たちを恥ずかしがらせていることに気づいていないだけだった。

二人は何のこのことのない会話を交わしながら、駐輪場を出て病院の正面入口へと向かっていった。金沢区も本日は快晴で気持ちのいい秋空となっていた。軽い足取りで病院の自動ドアをくぐると、綺麗なエントランスが広がっていた。

平日のお昼過ぎともあってさほど混雑はしておらず、中には看護師や医療スタッフ、自主リハビリをしている患者や白衣を着ている先生方の姿があった。入口右手側には木綿季がALOでやったときに映し出された100インチはある巨大モニターが置かれていた。普段はニュース番組が中継され、奇数月になると大相撲中継が映し出されているらしい。中年やお年寄りの患者に大人気だそうだ。

「こんにちは」

「こんにちはー！」

和人と木綿季は受付に顔を出し、事務仕事をしているお姉さん方に声を掛けた。ファイルを棚に仕舞っているお姉さんが和人たちへ気付くと本来の仕事をするために向きを180度変えてこちらに近づき、慣れた様子で受付の仕事へと移っていった。

「はい、ご面会で……あら、桐ヶ谷君に紺野さん！」

「お久しぶりです」

「また来ました！ お姉さん！」

「お元気そうで良かったです、生活の方はどうですか？」

「はい、毎日がすっごくすっごく楽しいんです！」

木綿季が笑顔で返事を返すと、受付のお姉さんの顔にも笑顔が浮か

んでいた。患者さんが笑顔で退院するときも嬉しいが、こうやって病院を訪れてくれると、また格別嬉しいものがある。木綿季のように元気な子供が訪ねて来てくれると尚更だ。

「本当に良かったです……それで、今日はどのようなご用件で？」

「ええ、今日は倉橋先生に呼ばれて来たんですよ。何の用かは教えてくれなくて……」

「病院に来てくれてって言われたんだよねー」

「あら、そうだったんですか……。でも生憎今日先生はお休みをしまして……。患者さんも他の先生に引き継いで長期休暇を取られてるんですよ」

「え……。そうなんですか？」

和人は聞いていた話が違っていると首をかしげていた。てっきり病院にいらっしゃると思ってた倉橋は不在だという。病院にいないのだとするとどこにいるのだろうか、自宅かどこかだろうか？ 居場所に皆目見当もつかない和人たちは困り果てていた。

「あ、そうだ……。栄養士の高橋香里さんはいらっしやらないんですか？」

「あ……はい、高橋も休暇を取っております、今週一杯病院にはおりませんで……」

「ええ……参ったな……」

「どうしよう和人、電話してみる？」

受付のお姉さんも含め、三人が困り果てていると、病院の自動ドアが開き、男性と女性が一人ずつ院内へと入ってきた。その二人は受付に近付きながら和人たちに少し慌てた様子で声を掛けてきた。その二人の人物は和人のよく知った顔だった。

「すみませんお二人ともつ、集合場所を伝え忘れてしまっていました」

「ご、ごめんねー！ 待たせちゃったかな……！」

「く、倉橋先生に香里さん！」

「倉橋先生！」

珍しく息を切らしながら現れたのは木綿季の元主治医の倉橋と、リハビリと食事を担当してくれた栄養士であり、作業療法士でもある高橋香里だった。二人ともオフだということもあり、いつもの白衣ではなく私服で姿を現していた。

倉橋はいつもの髪型にいつもの眼鏡。水色のワイシャツに黒のネクタイ。黒に近い紺色のズボンにグレーのトレンチコートと、普段の仕事着の色が変わっただけの様なコーデイネートだった。

香里は背中まで伸びたウェーブのかかった茶髪に赤と茶色のチェックのマフラー、クリーム色のセーターに薄ブラウンのパンツ。上着は薄ピンクのステンカラーコートで決めていた。二人のコーデイネートセンスを見比べてみると、倉橋がいかにファッションに興味がないのか一目瞭然であった。

「倉橋せんせーい！」

木綿季は倉橋の姿を見つけるなり病院の中だということにもかかわらず駆け足で倉橋に走り寄り、彼の胸倉に飛び込んでいた。倉橋は木綿季のあまりの勢いに大きくぐらついたが、成人済みの男性なだけあって、危なっかしくもしっかき木綿季を受け止めていた。その微笑ましいやり取りを、和人と香里は笑顔で見守っていた。

「おお、げ、元気ですね……木綿季君」

「はい！ ボクはいつでも元気ですよー！」

「それは何よりです。ご実家の方には……もう行ってきたんですか？」

「あ、はい……和人と一緒に行ってきました」
「ということとは……もう決めたんですか？」

倉橋の言う決めたことというのは、勿論養子縁組の苗字のことだ。どちらの姓を名乗るか決心するために実家に足を運んだのだが、木綿季は倉橋に聞かれると困ったような表情を浮かべていた。確かに家族との死とはある程度向かい合えたが、どちらの姓を名乗るかとなるとまた別であり、未だ迷いを抱えていたのだ。

木綿季の迷いを吹っ切る為には、まだ彼女の背中を押すための「何か」が一つ足りないようであった。悩める木綿季の表情を見るなり、倉橋は何か考えがあるのか優しい笑顔を見せながら、木綿季に語り掛けた。

「そうですね、今はとりあえずそのことは一先ず置いておきまして、本題に入りましょうか」

「そうだ……倉橋先生何なんです？ 俺らに用って……」

「はい、実は木綿季君にとって、とても大切な用事なのです」

「え、ボク……ですか？」

倉橋が大切な用事と口走った瞬間に、木綿季の顔に少しだけ緊張が走った。今まで倉橋から大事な話を持ち込まれたときは、必ずといっていいほど自分の余命に関することばかりだったからだ。病気が治った今でも、木綿季はついつい条件反射で少しだけ身構えてしまっていた。

「ちよつとお手間を取らせるのですが、君たちに来てほしいところがあります。いや、少なくとも木綿季君、君は来なくてはならない……」

「え……？」

「……何処へ行くんですか？ 先生」

「外に、車を用意してあります。私が運転しますので乗ってください」

倉橋はそう言うと一足先にエントランスの出口に向かって足を動かし、自分の車へと歩いていった。その後を香里、和人、木綿季の順番に追いかけていった。木綿季は院内を出る前に一度振り返り、受付のお姉さん方に両手で大きく手を振ってバイバイの挨拶をした。するとお姉さんも笑顔を見せながら片手で木綿季に向かってバイバイと挨拶を返していた。

和人たちが外に出ると、目の前には白いボディのワンボックスカーが彼らを待ち構えていた。倉橋は既に運転席に座り、エンジンを掛けて和人たちが乗り込むのを待つており、香里もさも自然に助手席に乗り込んでいた。和人は何が始まるんだと頭をポリポリとかきながら後部座席のドアを開け、木綿季を先に車に乗り込ませた。二人は解せない様子を見せながら、は終始頭のとっぺんに？マークを浮かべ続けていた。

和人と木綿季は後部座席で車に揺られながら、窓の外の風景を眺めていた。やがて見ているだけでは退屈なのか、木綿季は窓を開けて外の風を車内に入れた。少し肌寒かったが、場所が海に近いせいかわずだけ潮の香りがした。そういえばここは横浜市内では有名な水族館がある地域じゃないか、思い出した。今度和人に連れてきてもらいたいな、水族館に連れてつてくれるって仮想世界で約束したし。落ち着いたら遊びに来たいな……。

西暦2026年11月2日 月曜日 午後 15:20 神奈川県
横浜市内某所

暫く和人たちを乗せたワンボックスは、シーサイドラインの高架下を添うように、南西へと走り続けた。横須賀街道をひたすら進んでい

くと、京急本線の踏切を通り過ぎ、県道23号線を西に進んでいった。少しずつ内陸に移動し、磯の香がしなくなると、今度は更に県道205号線を南へ向かって車を走らせていった。

しばし南進を続けると、JR京急逗子線の線路に沿うように南西に進路をとり、さらに走行を続けていく。しばらく進むと、先ほど通った横浜横須賀道路の高架下をくぐり、六浦バイパスをさらに南進していった。すると突然今までと街の雰囲気ガラリと変わり、一気に田舎の風景へと変わっていった。

地方によくある狭く短いトンネルに差し掛かった。そのトンネルの手前には「六浦霊園」と書かれた看板が立っていた。そう、倉橋達は霊園へと車を走らせていたのだ。霊園、すなわち墓地を管理している場所である。案内看板の文字を目にした瞬間に、木綿季は倉橋たちが何のために自分たちをここまで連れてきたかわかってしまった。トンネルを抜けると、道中に墓石らしきものがちらちらと見え隠れし、ここが霊園だということをも物語っていた。

「着きました……」

「ここは……霊園、だよな……?」

「お墓……」

倉橋は霊園敷地内の100台ほど停めれる駐車スペースに、慣れた手つきで後ろ向きで車を駐車し、サイドブレーキを掛けてギアをパークキングに合わせ、ハンドルの横のツマミを手前に回してエンジンを切った。車は途端に静かになり、倉橋達は前部座席のドアを開けて表に出た。和人達も置いていかれないように後部座席のドアレバーに手をかけ、少し駆け足気味にドアを開けて車から降りた。

車から降りて周りを見渡すと、先ほどまで海沿いにいたとは思えないほど、森と木々に囲まれていた。既にそこからは宗教宗派問わず、様々な形をした墓石がずらりと並んでいる光景も目に飛び込んできた。ここ、六浦霊園はキリスト教や仏教といった宗教宗派関係なく、寺と違いどんな人でも受け入れている霊園だ。

「それでは、私は受付で手続きをしてきますね」
「え？ あ……は、はいっ」

倉橋はそう言うと、霊園の中で唯一の建物がある受付へと足を運んでいった。お墓参りに必要な桶や柄杓、花なども中で拵えてくるのだろう。木綿季たちは倉橋の背中をただじーっと見つめており、香里はそんな二人の肩に手をぽんとあて、二人の間に顔を覗かせていた。

「香里さん……」

「二人とも、何でここに連れてこられたか……もうわかっちゃったよね……？」

「……ええ、まあ……」

「……」

木綿季は香里に声を掛けられると、そこから見えるキリスト教の墓が建っている場所に目をやっていた。恐らくその視線の先のどこかに、木綿季の予感しているものがあるのだろう。辺りは風が吹き始めしており、霊園にある森や、あちらこちらに生えている木々の葉っぱをゆらしていた。風に煽られた葉っぱは互いにこすれあい、自然音を奏でていた。

「香里さん、ここに……パパやママ、姉ちゃんたちが……眠ってるんですね……っ」

「……ええ、そうよ……」

「……木綿季の……家族が……」

木綿季の予感は当たっていた。そして、何故自分の家族が親の実家ではなく、この霊園に眠っているかもわかっていった。元々紺野家は木綿季の父親の田舎に墓を持っている、しかし木綿季の父方の祖父母夫婦が亡くなると、叔母夫婦をはじめとした親類の者たちが、断固うち

の血族の墓には入れないと一点張りを決め込んだのだ。当人たちがつらい思いをして死して尚、血が繋がっているのにもかかわらず差別を決め込んでいたのだ。

本来、親類からお骨を拒否された場合、通常は火葬時に焼き切つて完全に灰にしてしまうか、通常火葬後、総合埋葬所に引き取られることになっている。倉橋は親類の心ない選択に大変激怒し、自分がお骨を引き取ると言い出し、ここ六浦霊園に紺野家の墓を作りお骨を収めていたのだ。勿論お墓の作成費、維持費などの費用は倉橋が実費でまかなっていた。倉橋にとって紺野家とは、それほど特別な家族だったのだ。

「ボク全然知らなかった……、倉橋先生、姉ちゃんたちが死んじやつた後のコトは何一つ話してくれなかったから……」

「……そうだったんだな」

「先生は……木綿季ちゃんたちのことを誰よりも考えてらしたのよ。本当の家族のように接して……」

「……先生……」

木綿季は改めて、倉橋が入っていた建物を見つめていた。自分たちへ思っていた以上の想いを持ってくれてた倉橋に、感謝以上の気持ちを抱いていた。先生のことを家族だと思つたのは自分だけじゃなかった。パパやママ、姉ちゃんも、先生と家族だったんだと……。それからしばらくして倉橋が右手に白い花、左手に清めの水が入つた手桶と柄杓を持ち、建物の自動ドアから姿を現した。その姿を確認すると、木綿季は倉橋の元に小走りで駆け付け、倉橋を出迎えた。

「先生……」

「……香里君から聞きましたか？」

「……はい……」

「そうですね……」

「あの、倉橋先生……ありがとうございます」

木綿季は倉橋に駆け寄るなり、深々と感謝の気持ちを込めて頭を下げていた。ボクらの面倒をここまで親身になってみてくれて、医師と患者としての間柄を越える気持ちを込めてくれて、本当にありがとう。倉橋はそんな木綿季の姿を見ると、ニコツと爽やかで暖かな笑顔を見せていた。

「そんなに畏まらなくてもいいですよ、もう貴方たちは……私にとつて家族そのものなんですから……、これぐらいのことはさせてください」

「……先生……」

「……ほら、藍子君たちの元へ行きましょう、こちらです」

倉橋は和人と香里にも声を掛けると、紺野家の人達が眠っている墓前へと案内した。木綿季の家族が眠っているのは、先ほど木綿季が見つけていたキリスト教宗派の墓石が集まっているエリアの、一番奥の方に建っていた。芝生の上に敷かれた石畳の上を歩きながら、色んなキリスト教信者が眠っている墓の前を通り過ぎ、木綿季たちは紺野家の人達が眠っている墓前まで足を運んでいた。

「……です」

「…………」

「木綿季のお姉さんたちが……眠っているのか……」

紺野家の墓は畳四畳ほどのスペースの中に建っており、どこにでもある白と灰色をしたごく普通の墓石の形となっていた。出来たばかりなのかどこも汚れてなければ雑草も生えておらず、土台の部分も大変にキレイなままだった。墓石の中央上部に白い十字架のマークが彫られおり、それでキリスト教信者の墓だということが伺える。その下には「紺野家之墓」と文字が彫られており、墓石の裏側には木綿季の両親と、姉の藍子の没した年月日が彫られていた。紛れもなく、木

綿季の家族はここに眠っていた。

「木綿季君、和人君」

「あ、は……はい！」

木綿季と和人は倉橋にハンドサインで促されると、柄杓を手渡され、清めの水を掛けるように指示をされた。倉橋が墓前に手桶を置くと、そこから木綿季が水を救い上げ、慣れない手つきで墓石に水を掛けていった。木綿季が三回ほど水を掛けると、それに続き和人、倉橋、香里の順に水を掛け墓を清めていき、一通りかけ終わると今度は受付で購入してきた白いカーネーションの花を、花立てに深く差し込んで、それにも水をかけて全ての水を使い切った。そしてキリスト教の墓参りの作法に従い、線香も上げずに胸に両手を当てて、礼拝するようになりに神にお祈りした。

本来キリスト教の墓参りは故人に対してお祈りを捧げたり一礼をしたり、お線香を上げたりもしない。偶像礼拝と呼ばれる大きな罪に当たる行為となるからだ。日本の仏教の様に、死んだら仏になるという考えが存在しないのだ。しかし、木綿季は敢えてそれを承知で亡くなった家族に対して祈りを捧げていた。それがどのような行為かどうかはキリシタンである木綿季自身がよくわかっている。

だが、家族の死に目にもあうことが出来なかった木綿季は、せめてこの場だけでも、自分の想いが姉ちゃんたちに届きますようにと、敢えて教えに背いて祈りを捧げていた。ごめんなさい神様、でも今回だけ、今回だけ罪を犯してしまうことをお許しください。無力で何も出来なかったボクに、今出来ることをさせてくださいと、神に謝罪をしながら祈り続けていた。

「……………」

「……………」

一行は一分ほど祈りを捧げると胸から手を降ろし、目を開けて墓石

を見つめていた。水で濡れた墓石が、日光を反射してキラキラと光り輝いていた。まるで木綿季たちがここに来てくれたことに喜びを表しているかのようだった。木綿季が切なそうに墓石を見つめていると、倉橋が木綿季に歩み寄り、深く頭を下げて慰めの言葉を掛けていた。遺族に対し慰めの言葉を掛けるのも、キリスト教の墓参りに作法にそったやりかたである。

「木綿季君、君の家族を助けてあげられなかった私が言ってしまうのも気が引けるのですが……、君はどうか……強く生きてください」

「……倉橋先生……」

「ご両親も藍子君も、君の幸せをいつも第一に考えていました。長く生きられないかもしれないが、それでも幸せに生きてほしいと、そう毎日祈っていました」

「……」

「そう思って旅立っていった彼女たちの想いを、無駄にしないでください。少なくとも木綿季君、君には幸せになる権利が……いえ、義務があります」

「え……、ぎ、義務……ですか？」

倉橋はそう言うとうつの上着の懐から、少し厚めの明るい藍色の封筒を取り出して、木綿季にそれを手渡した。木綿季はそれを両手で受け取るとまじまじといろんな角度でその封筒をみつめていた。そして封筒の裏側の下の部分に書かれた差出人の名前を見ると、木綿季の表情が一変した。

「え……、う……うそ……、な……何で……？」

「木綿季？ どうしたんだ……？」

「……」

木綿季は目を見開き、手を震わせて手渡された封筒を見つめていた。和人が木綿季の横から顔を覗かせると、同じように和人の顔に緊

張感が走った。二人が驚くのも無理はなかった、何故なら木綿季宛ての手紙の差出人の名は、木綿季の実の姉である「紺野藍子」から宛てられたものであったからだ。二人が言葉を失っている、倉橋が傍まで歩み寄り、事の事情を詳しく説明した。

「その手紙は……生前に藍子君本人から君に渡すよう、私に託されたものなのですよ……」

「……姉ちゃん……が？」

「ええ、ご両親が亡くなり、自分ももうすぐだと死期を悟った藍子君は、実の妹である木綿季君だけが心残りでした」

「……」

「藍子君は、メデイキュボイドで終末期医療を続けている君の病気が将来、僅かにでも治る可能性があるのらと思ひ、私にこの手紙を託したのです」

「僅かな……可能性……」

生前、藍子は死ぬ寸前まで妹の木綿季の幸せをずっと祈っていた。私達は先に逝ってしまうけど、メデイキュボイドを使用している木綿季になら僅かにでも可能性が残されている。このまま終末期医療を重ねて延命していくうちに、奇跡的に病気を治す技術が生まれるかもしれない。そしてもしも病気が治って木綿季が元気になることが来た時の為に、最後にこの手紙を残したのだ。

「もしも木綿季君の病気が治り、普段通りの生活を送っていても尚、迷いや悩みを抱えているようだったら渡してほしいと、藍子君から託されました。内容は……私も知りません」

「……開けて……みます……」

木綿季は封筒の封を丁寧に指先で解いていき、中に入っている四つに折りたたまれた手紙を取り出すと、それを広げて書かれている文に上から目を通していった。字はボールペンで女の子らしく、綺麗で丁

寧な書体で書かれており、誠実に生きた藍子の人生そのものを表現しているかのようだった。木綿季は見慣れている筆跡で書かれた自分へと宛てられた文章を、様々な思いを胸に抱きながらゆつくりと口に出して読んでいった。

「……木綿季へ……」

“木綿季へ、あなたがこれを読んでいるということは、私は病気に負けてしまい、死んでしまったのでしよう。そして、きっと木綿季は病気に打ち勝って「今」をしつかり生きているんだよね。まずはおめでよう、治って良かったね、木綿季。”

毎日の生活は楽しいですか？ 無菌室の外はどんな世界が広がっていますか？ 倉橋先生とはうまくやっていますか？ 木綿季はそそっかしいところがあるから、お姉ちゃんは少しだけ心配です。あんまり周りの人達に迷惑をかけないようにね？

それはそうと、この手紙を木綿季に託したのには理由があります。私の単なる思い過ぎでしたら気にしないでください、だけでもしそうですね。今から言うことをよく聞いてください。

今、木綿季がどのような生活を送っているのかは、私にはわかりません。施設に引き取られているのか、倉橋先生のところでお世話になっているのか、はたまたそれらとは違うところで暮らしているのか。ただ、いずれにせよこれから毎日を生きてくのにあたって、一つだけ木綿季にお願いがあります。お姉ちゃんからの木綿季への最後のお願いです。

未来を見て、強く生きてください。私たちのことを忘れろとは言いません。ただ、私たちのことを想うばかりに、木綿季の足かせになつてしまうことを、木綿季自身が立ち止まってしまうことを、私たちは望んでいません。なので、どうか未来に向かって歩いて行ってほしいのです。

ずっと傍にいてあげられなくてごめんなさい。でもどうか強く生きてほしい、強く生きて、木綿季の幸せを見つけてください。お姉ちゃんたちは天国から木綿季を見守っています。倉橋先生たちに、よろしくお願いね。それじゃあ元気で……。

大好きな木綿季へ、紺野 藍子”

「ねえ……ちゃ……ん……」

手紙には木綿季に強く生きてほしいという想いが込められた文章が書き綴られていた。キリスト教の教えに従うことではなく、あくまでも木綿季自身の意思で前に向かって歩いて行ってほしいという、姉のとしての最後の想いが込められていた。

藍子は見透かしていたのだ、自分ら家族と倉橋先生としか交流がない木綿季が、一人で生き残つてこの先普通に暮らしていけるのかどうかと。迷いや悩みを抱えて生きていくのではないかと。自分らのことを引きずってしまったのではないかと。

この手紙は木綿季の心を動かすには十分な力を持っていた。養子縁組の姓の悩みを消すために月見台の家に足を運び、家族の死と向き合いながらも、未だほんのわずかだけ未練を残し、あと少しだけ背中を押されることが必要な木綿季とつて、姉から宛てられた手紙の力は充分すぎるほどだった。

「ねえちゃん……ねえちゃん……」

木綿季は再び、両目から大粒の涙を溢れさせていた。瞼から溢れ出した涙が頬を伝い滴り落ちて、手紙と封筒を濡らしてしまっていた。姉からの最後のメッセージに様々な想いが頭の中をよぎり、手紙を持つ両手に力が入ってしまった、手紙の端っこの部分を封筒ごとくしゃくしゃにしてしまっていた。

だがこの時、手紙と封筒を力強く握った際に、木綿季は封筒から違和感を感じ取っていた。この手紙の他にまだ封筒の中に何かが入っ

ているようだった。木綿季は右手で両目の涙を拭うと、左手で握っている封筒に右手を突っ込み、中で何かを掴むとそれを外に取り出した。

「それは……？」

「これ……もしかして、姉ちゃんの……？」

木綿季が封筒から取り出したものは、藍子が生前ずっとつけていた白いリボンの様な形をしたシュシュであった。シルクのように透き通っており、可愛らしいフリルがついた女の子らしいデザインだった。藍子が手紙と共に、木綿季に最後に残した形見であった。

「間違いありません、それは藍子君がつけていたものですね……」

「……お姉さんのものなのか……」

「……………」

木綿季はシュシュを掌の上に置き、じつとそれをみつめていた。そのシュシュは、木綿季にこの先強く生きろと、私が見守っているから大丈夫と、まるで木綿季に語り掛けているようだった。そんな気がした木綿季は、姉の形見をぎゅつと握り締め、胸にぐつと当て、かすかに残った姉の温もりを感じ取っていた。

「ありがとう……、ありがとう姉ちゃん……」

木綿季は再び、藍子が眠っている墓石を見つめていた。生まれたときからずっと一緒にいた藍子に、心から感謝の気持ちを込めていた。ボクは強く生きなきゃいけない、もつともつと強くなって、この世界で生きていけないといけない。死んじゃったパパやママ、姉ちゃんの分まで強く生きていけないといけない、そうじゃないと……姉ちゃんたちに笑われちゃうし、何よりボクらしくないや。

「木綿季……」

「木綿季君……」

「木綿季ちゃん……」

三人に声をかけられた木綿季はゆつくりと目を開け、声のした方へと顔を向きなおした。涙は流れ続けていたが、その表情は実に晴れ晴れとしたものだった。顔を真っ赤に染めながらも、実に木綿季らしい可愛い笑顔を見せていた。それを見た和人は一瞬だけ驚いたが、嬉し泣きからの笑顔なのだなど気持ちを察すると、木綿季に歩み寄り彼女に優しく声を掛けた。

「木綿季、もう大丈夫……なんだな」

「……うん、姉ちゃんがね、いっぱい元気をくれたからもう大丈夫。それに……」

「それに？」

木綿季は手紙を和人に一方的に手渡すと、藍子の形見であるシュシュを、自分の長いロングの髪の毛の先端から10センチほどの位置にくくりつけ、ヘアアレンジを加えていた。風でばらばらになびいていた髪の毛が一つにまとめられ、木綿季の特徴であるロングヘアと、藍子の髪型のポニーテールの両方が合わさったようなヘアスタイルとなっていた。

「ボクには姉ちゃんがついてくれてるから、いつも見守ってくれてるから、大丈夫！」

「……そうか、良かったな……」

「……うん！」

木綿季は自分の髪の毛にくくりつけたシュシュをじっと眺めてい

た。これをつけているだけで藍子がすぐ傍で、いつまでも守ってくれているような気がした。今までどことなく感じていた寂しさも、不思議と感じなくなっていた。木綿季は今度こそ、自分の家族と向き合えたのだ。

「倉橋先生、ありがとうございます。ここまで連れて来てくれて、それに……姉ちゃんたちのお墓も用意してくれて……」

「……いえ、いいんですよ。和人君の言葉を借りるなら、私がやりたくてやったのですから……」

「……先生のくせに格好いいじゃないですか」

「む、失礼なことを言いますね、君は……」

香里が口をとがらせてそんなの先生らしくないと言わんばかりに冗談をかますと、倉橋は少しだけ不機嫌になり、眉をひそめていた。その二人のやり取りを見て木綿季も「ホントですね!」と言葉を並べて笑い声を響かせていた。この笑顔こそが、藍子がずっと見ていきたかった、木綿季の顔だった。

一しきり気持ちの整理と、お墓参りを済ませた木綿季たちは、桶などの借りていた道具を霊園に返却し、墓参りを終えると倉橋の運転で再び病院へと戻っていった。色々あったが、木綿季は今まで生きていた中で、非常にすつきりとした心持ちで人生を歩いていけそうだと感じていた。

一行は来た道を20分かけて戻り、再び横浜港北総合病院へと辿り着いていた。入り口前のロータリーに車を止め、バイクでここまできた和人と木綿季を車から降ろし、別れの挨拶を交わしていた。

「それでは私たちは失礼しますね、また明日、よろしく願います」
「こちらこそ、よろしく願います。今日は本当にありがとうございます」

いました」

「木綿季君も、今日は夜更かししちゃだめですよ？」

「明日はお寝坊厳禁だからね？　木綿季ちゃん」

「わ、わかってますよ！　今日は早く寝るから大丈夫です！」

「あはは！　それなら大丈夫かな！」

「ふふっ、そうですね、ではよろしくお願いします。また明日」

「はい、また……明日！」

倉橋は最後に右手でさよならの仕草をすると、サイドブレーキを解除し、ギアをドライブに入れ、アクセルを少しずつ踏んで車を走らせて敷地外に出ていき、木綿季たちからどんどん離れていった。木綿季は倉橋達の乗っている車が見えなくなるまで手を振り続けていた。完全に車が視界から消えると手の動作を止めて、その場に佇んでいた。

「……さて、俺らも帰ろうぜ」

「……そうだね……帰ろ、和人」

和人と木綿季は倉橋たちを見送ると互いの手を繋ぎながらバイクを停めてある駐輪場まで足を運び、慣れた手つきで荷物を仕舞ってメットをかぶり、シートに跨ってエンジンを起動させて、60km離れた川越へと進路を取り、アクセルを蒸してバイクを走らせていった。

帰路についている間、二人は終始無言であった。今日一日で起こったことを頭の中でもう一度思い返していた。中でも木綿季が感じたことは、到底短い時間で整理できるものではなかっただろう。長年ずっと一緒に過ごしてきた家族をいつぺんに失うことは並大抵の悲しきではない。

しかし、そんな木綿季の悲しさを拭い去ったのも、木綿季の家族だった。実の姉が残した最後のメッセージにより、木綿季は本当の意味で救われたのだ。心身ともに壁を乗り越えて、新たにスタートを切

れる状態となっていた。あとは、木綿季本人次第であった。

西暦2026年11月2日 月曜日 午後 18:10 埼玉県川
越市 桐ヶ谷邸

和人と木綿季は途中一度休憩を挟み、片道二時間半を掛けて埼玉県川越市の自宅へと戻ってきた。たった一日で往復合わせて180kmもの距離を走り抜けてきた。木綿季の退院前に何回も繰り返していたことはいえ、二輪での長距離移動はやはり体力的にかなり負担がかかる行為だった。見慣れた街並みを通り過ぎ、自宅敷地内へ二輪を止め、いつものようにエンジンを切って後始末をし、よれよれの足取りで家の扉に手を掛けた。

「た、ただいまあ……」

「ただいまー……」

二人の声が桐ヶ谷邸の玄関に響き渡ると、その声に反応したのか二階から階段を降りて直葉が軽快な足取りで玄関に姿を現した。その直葉に続くように、晩御飯の支度をしていた翠が手拭いで手を拭きながら、新聞を読んでいた峰嵩も新聞を片手にリビングから姿を現し、無事に帰ってきた和人たちを迎え入れていた。

「お帰り、お兄ちゃん、木綿季」

「お帰りなさい、二人とも」

「お帰り、無事に帰ってきてくれてよかった」

「ただいま、流石に慣れたとはいえ一都二県を往復するのは疲れたよ……」

「ボ、ボクもだよ……、バイクって捕まってるだけでも物凄い体力使うんだねー……」

木綿季と和人はへトへトになりながら、上がり框に腰を下ろして履いていた靴を脱いでいた。長距離移動もさながら、この短時間で木綿季に閑して色々なことがありすぎた。そのおかげで心身共に疲れ切っている和人たちは、とりあえずはベッドに横になりたいという気分だった。

「和人、もうすぐ晩御飯出来るけど……すぐに食べる？」

「あ……いや、ちよつと俺も木綿季も疲れちやつてるから、少し休んでからいたたくよ……」

「あら……そうなの、わかったわ。それじゃあゆつくりおやすみなさい」

「お兄ちゃんも木綿季も、顔に疲れてるって書いてあるよ？」

「うん、でも……姉ちゃんたちとはしっかり向き合えたよ」

木綿季はそう言いながら、姉の形見の髪留めのシユシユをくくり付けたロングの髪をなびかせてみせた。いつものようで少し違う木綿季の髪型に翠たちは少しだけ驚いていた。黒いロングの木綿季の髪に、真っ白なシユシユは大変に色合い良く映えていた。

「木綿季、それは……？」

「……これはね、姉ちゃんの形見なんだ」

「お姉さん……、藍子さん？」

「……うん、立ち止まってないで前に進みなさいって、これと一緒に手紙を残してくれたの」

「……そうだったんだ」

「おかげで迷いはなくなつたよ。姉ちゃんが背中を押してくれたから、もうボクは迷わない。もつと強く生きていこうと思うの」

姉の形見を見つめる木綿季の表情は真剣そのものだった。一切迷いはなく、まるでALOの絶剣のユウキとしてそこに立ち振る舞って

いるかのようだった。家族から託された想いの分まで精一杯生きる
と、胸に固く誓いを立てていた。

「そうか、それなら明日は……役所に？」

「うん……、突然今日の予定を狂わせちゃってごめんなさい、お願い出
来ますか……？」

「私は構わないわよ、お父さんも今週はお仕事お休みだし、直葉も大丈
夫よね？」

「うん、午前中だけなら大丈夫だよ！」

「OK、決まりだな。先生もまた明日こっちに来るって言うてくれた
し、明日提出しようぜ」

「うん……！」

木綿季の養子縁組届は、明日の三日に改めて川越市役所に提出しに
行くことで話がまとまった。準備はすべて整い、漸くことが動き出そ
うとしていた。過去のけじめもつけることができ、木綿季の決意も
しつかりと固まっていた。あとはもう、当日を待つばかりであった。
この時は翠も峰高も直葉も、木綿季がどちらの姓を名乗るか敢えて聞
こうとはしなかった。

それから和人たちは一休みしてから晩御飯を食べ、風呂も済ませ、
あとは寝るだけという状態になっていた。しかし変に緊張している
せいか、部屋を暗くしてベッドに入っても、中々寝付くことが出
来なかった。和人にとっては木綿季が妹になり、木綿季にとっては和
人が兄になるのだ。以前に告白した時にはこんなことになるうとは
思いもよらなかつただろう。

「和人、起きてる？」

「……起きてるぞ」

「……そっか」

「眠れないのか？」

「……うん、何かね？ 緊張しちゃって……」

「……俺もだ」

「……そうなんだ」

短い会話を交わすと、二人はまた無言になっていた。いくら寝よう寝ようと思つて目を閉じても、全く眠気はやってこなかった。ただひたすらに夜の静寂が二人のいる部屋を包んでいた。

二人は手を繋ぎながら布団をかぶり、一緒に部屋の天井を眺めていた。ここまで緊張したのはいつぶりだろうか？ ライブでH I Vキヤリアだということを告白した時？ 骨髄移植手術を決行したとき？ それからの木綿季の容態を聞いたとき？ それぐらいに二人は気が張りつめているのを感じていた。

「眠くなるまで……何か話すか？」

「……うん、そうだね」

二人は意見を一致させると、互いに向き合う形になり、眠気がやってくるまで語り合うことにした。体勢を変えたことによつて二人の顔の距離が近くなり、互いの体温が伝わってきていた。

「……いよいよ明日、なんだな」

「……うん」

「木綿季は、俺の妹になるんだな……」

「ふふつ、何か変だよね。恋人なのに兄妹なんてさ……」

「そうだよな……、なんだか不思議だ」

「和人がお兄ちゃんか……、なんだか考えられないや」

「それはお互い様だろ？」

「えへへ、まあね♪」

和人は布団の中で、木綿季を抱き寄せた。少々窮屈だったが、今夜の木綿季は今までの時よりも愛おしく、尊い存在のように見えてしまい、思わず抱き締めずにはいられなかった。

「……あつたかい」

「木綿季も温かい、ちゃんと生きてるんだな……」

「……うん、ボク、生きてる……」

「……なあ、俺たちの関係って……変わらないよな？」

「勿論だよ。兄妹だけど血は繋がってないんだし。ボクたちが恋人同士ってのは絶対変わらないよ……」

「……そうか、そうだよな……」

「……うん♪」

木綿季はそう言うと、大好きな和人の胸板に額をこすり宛て、顔を埋めこんでいた。和人の身体に両手を回し、小さい体で精一杯包み込むようにして和人を感じていた。

「ね、寝れるまでこうさせて……？」

「いいぞ、全く……相変わらず甘えん坊だな」

「甘えん坊でもいいもん、ボクは……和人がいてくれれば、それだけで幸せだから……」

「……ありがとな」

「ねえ和人、ずっと一緒にいてね？　ボク、和人がいなくなっちゃったら……多分生きていけない……」

「何言ってるんだ、当り前だろう？　俺はずっと木綿季の傍にいる、何回も言ってるだろ？」

「……うん、でも和人ってほつといたら勝手にどこか行っちゃいそうな感じがするんだもん……」

「……う、それは今までの行いからも否定出来ないっていうか……」

「ほら――」

「あはは、悪い悪い」

それからも二人は他愛のない会話を繰り返した。この先何をしていこうか、将来の夢は何か、どうやって学校生活を送っていこうかな

ど、明るい未来の話に花を咲かせていた。1時間ほど話し込み、時刻は現在夜中の23時になろうとしていた。養子縁組届を提出する川越市役所の業務開始時間は朝の午前8:30から夕方17:15までとなっている。

慌てる必要はないが期末試験を控え、大事な時期を抱えている直葉もいるため、なるべく早い時間にいつて届け出をしてあげた方がよさそう。夢中になって話していた和人たちにも漸く眠気がやってきたようだった。大きなあくびをし、瞼をゴシゴシと擦り、目を閉じれば今すぐにも夢の世界へ旅立ってそうだった。

「ふわあ……いい感じに眠くなってきたな」

「うん……、寝よつか……」

「そうだな……そうしよう」

「……おやすみ、かずと……」

「おやすみ、木綿季……」

この日、桐ヶ谷家の人間は各々様々な想いを胸に床についていた。明日書類を一枚提出し、受理されれば木綿季は正式な桐ヶ谷家の一員となる。峰嵩と翠は木綿季の親に、直葉は姉に、そして和人は兄になる。元々は三人家族だった家庭に和人、そして木綿季と次々に養子が舞い込んでくるこの家族は、他所よりも複雑な事情を抱えた家庭と言えるだろう。

しかし、その家族の絆だけはかけがえないものだった。大事なのは血のつながりではない。お互いを感じあう心だ。これからもこの五人の家族は互いを信じあい、心を通じ合わせ、苦楽を共にして生きていく。困ったときは助け合い、嬉しいときは喜び合い、そんな家族になっっていくだろう。

やがて時刻は深夜の0時を過ぎ、日付が変わっていた。各々様々な思いを胸に抱きながら、静かに眠りについていった。

そして、夜が明けた――。

翌朝 西暦2026年11月3日 火曜日 午前 8:35 埼玉
玉県川越市 川越市役所 市民課

「おーい木綿季、こっちだぞ」

「あ、ま、待ってよ……！」

上着のズボンに手を突っ込みながら歩いている和人を、木綿季はぎこちない足取りで追いかけていた。家族全員でこの市役所に足を運んだはずなのに、木綿季だけが緊張してしまっており、翠たちに少し出遅れてしまっていたのだ。心臓をドキドキさせながら和人たちを追いかけた木綿季が辿り着いたのは、川越市役所内にある市民課の窓口であった。そこには既に翠、峰嵩、直葉と、今回証人を名乗り出してくれた倉橋と香里の姿があった。

川越市役所は1972年に本庁舎が完成した古い建物だ。全体的に白を基調とした昭和らしい建物となっていた。壁や天井、床も煤けており、場所によってはヒビが入り込んでいて、建物の年季を感じさせるほどだった。大きな地震が来たら耐えられないのではないだろうか？ 市民課の窓口から見える内部には、役員たちが朝から忙しそうに書類の整理等の公務をこなしていた。その他にも生活福祉課、障がい者福祉課、福祉推進課に勤める役員たちが、それほど広くない市庁舎内で忙しそうに動き回っていた。

「初めまして、倉橋先生。和人達の父親をやっております、桐ヶ谷峰嵩と申します。本日はわざわざごんなどころまでお越しいただき、ありがとうございます」

「こちらこそ初めまして……、木綿季君の主治医の倉橋です。こちらは彼女の栄養士でもあり、作業療法士でもある高橋香里君です」

「……初めまして」

「初めまして、本当に……までよく来てくださいました」

倉橋と峰嵩、そして香里は挨拶を交わすと、固い握手を交わしていた。木綿季ただ一人の為に、ここ川越まで足を運んでくれたのだ。独りぼっちだった木綿季が、再び手に入れた家族という温かいものを、より輝かせようと前に進むのを応援するために、その瞬間を目に焼き付けるためにやってきてくれたのだ。

「倉橋先生、ありがとうございます」

「いえ、長年君を診てきた身としては……、今回の件について見届ける義務がありますから……」

「気難しいこと言っちゃってー、正直に言えばいいじゃないですかー。娘の新たな門出を祝いたってー」

「か、香里君……」

「あらあら、先生ったら、そうなんですか?」

「う……ううむ……、は、はい……」

畏まったように話していた倉橋であったが、香里に横やりを入れられると、珍しく慌てふためき、右手で頭を抱えていた。そんな滅多に見られない倉橋の姿を見た一行はくすくすと笑い、そのお陰で緊張していた木綿季にも笑みが浮かんでいた。木綿季に負けず劣らず明るい性格をしている香里のおかげで場の空気が柔らかいものへとなっていた。

「さてと、あまり役所内で騒ぎ立てるわけにもいかないし、早いとこ済ませてしまおうか……」

「そうですね……」

峰嵩がそう言うのと翠は予め用意しておいた川越市民用の養子縁組届の書類を鞆から取り出し、記入漏れがないかどうかチェックを施した。既に木綿季を除く桐ヶ谷家の人間が書き込む項目は既に埋まっております、残るは木綿季本人の記入欄と、証人である倉橋と香里の記入

欄だけであった。倉橋達は先に翠から書類を預かると、そこから一番近い用紙記入台まで足を運び、備え付けのボールペンで自分の氏名、生年月日、現住所、本籍を書き記し、持ってきた認め印を朱肉につけ、しっかりと判子を押した。これで証人覧の書き込みは完了となる。

「ぎ、木綿季……」

「う、うん……い」

和人が次は木綿季の番だと促すと、木綿季も用紙記入台まで歩み寄り、倉橋からペンを受け取り、自分の書かなければならない項目を見つめ、確認しながら一つ一つ空白を埋めていった。自分の氏名や生年月日の他に、実の両親の氏名、紺野家の本籍などなど、自分に関係する所全てに書き記していった。

3分ほどの時間をかけて一つ一つ注意深く確認しながらペンを動かしていくと、残る項目はいよいよ、これから木綿季が名乗る姓を決める箇所だけとなっていた。一昨日までの木綿季ならここで迷いを抱えていただろうが、今は違う。実の姉から勇気をもらい、背中を押してくれたこともあり、どちらの姓を名乗るかはもう心に固く決めていたのだ。

最後に残った項目を書き込んでいる木綿季を、和人たちは数歩離れたところから見守っていた。一生付き合うことになる姓、それを決めるために書類にペンを走らせている姿に、今度は和人たちが緊張の渦に包まれていた。木綿季は書き間違いないよう慎重に筆を進めていた、一文字一文字確実に書いていき、全て書き終わると最後に自身で間違いがないか、再び隅々までチェックした。

やがて間違いがないことを確認すると「よし……」と小声で呟き、向きを180度変えて、桐ヶ谷家の大黒柱である峰嵩に両手で差し出した。峰嵩は差し出された書類を同じく両手で受け取ると、木綿季の入籍する戸籍の箇所視線をやっていた。その峰嵩の顔の横から翠、直葉、和人が覗き込むようにして峰嵩と同じところを見ていた。

「ゆ、木綿季……」

「木綿季……！」

「……本当に、いいんだね？」

「……嬉しいわ……」

「えへへ、よろしくお願いします……！」

木綿季が入籍する戸籍に書き込んだ名前、そこには「桐ヶ谷 木綿季」と書き記されていた。和人たちは木綿季が自分達と同じ姓を名乗ってくれることに嬉しくなり、直葉は涙まで流して喜んでいった。木綿季はそんな予想以上の桐ヶ谷家の歓迎ムードに照れくさくなり、顔を赤らめてほっぺを人差し指でぽりぽりとかいていた。

峰嵩と翠はその場にいる全員とアイコンタクトを交わし、全員の心の準備が整ったところで、夫婦足並みを揃えて市民課の窓口まで足を運び、近くにいる役員に「すみません」と声を掛けた。役員は還暦を越えているような年配の人で、もうすぐ定年退職を向かえそうな風貌をしていた。

役員は峰嵩から書類を手渡されると、項目の一つ一つを入念にチェックしていき、どこにも間違いがないことを確認すると、卓上に置いてある役所印を朱肉につけ、ポンとじつくり書類に判子をぐりぐりと押し当てた。役員が判子を離すとそこにはしつかりと、木綿季の養子縁組が認められた証が記されており、無事に木綿季の養子縁組は受理された。

木綿季はこの瞬間、晴れて「紺野 木綿季」改め「桐ヶ谷 木綿季」となり、正式に桐ヶ谷家の一員となった。受理されるやいなや、木綿季は満面の笑顔を浮かべ、家族に迎えられたことを喜んでいった。和人達も、木綿季が新たな門出を迎えられたことを、心から祝福していた。

「わあ……」

「……やったな、木綿季」

「今日から正式な家族だよ！ 木綿季！」

「……今晚は、お赤飯でも炊こうかしら……」

「改めてよろしく頼むよ、木綿季」

「おめでどう、木綿季君……」

「木綿季ちゃん、おめでどう！」

「うん……うん、お父さん……お母さん、和人に直葉。それに……倉橋先生と香里さんも、ありがとうございます……、本当にありがとうございます……」

木綿季は自分の養子縁組に力を貸してくれた人たち全員に感謝の言葉を送っていた。身内を全て亡くし、絶望の淵に叩き落とされていた木綿季だったが、今ここに再び温かい家族を手に入れることが出来た。どんなものにも代えられない、かけがえのない一生の宝物を手にすることが出来たのだ。

木綿季はあまりの嬉しさに、連日また嬉し涙を流していた。顔を赤らめ、頬を濡らし、拭っても拭っても止まらない涙を、木綿季は笑顔を見せながら両手で拭っていた。やがて彼女が少しずつ落ち着いてくると、和人は一歩木綿季の前に出て右手を伸ばして、優しく声を掛けた。

「木綿季」

「……?」

外伝く幻の銃弾編く
第63話く男の子く

西暦2026年 11月15日 日曜日 午前11:50 東京都
墨田区 東京スカイツリー 天望回廊フロア

「わわわ！ 和人見てみて！ すごいよー！ すっごくいい眺めだよー！」

「わ、わかったから落ち着けて……」

いつもの服装に身を包んでまるで小学生のようにはしゃいでいる木綿季を、こちらもいつもの真つ黒な服を身に纏った和人が笑いを浮かべながら落ち着かせようとしていた。

あれから木綿季が桐ヶ谷家の正式な養子になって、二週間ほどが経過しようとしていた。姓も「紺野」から「桐ヶ谷」へと変わり、翠と峰嵩の娘、和人と直葉の妹としての間柄となっていた。

正式な家族になってからというもの、木綿季はより一層嬉しそうに毎日を過ごしていた。紺野家での今までの絆を断ち切るのではなく「卒業」という形で乗り越え、胸の中に大切な思い出としてしまっておくことで、過去を乗り越えられたのだ。

そんな木綿季が和人とやってきているのは、2012年に完成、開設された日本一の高さを誇る建築物「東京スカイツリー」だ。

昭和33年に完成した東京タワーの333メートルに対し、スカイツリーは634メートルもの高さを誇っている。和人たちはそんな眺めの素晴らしい地上445メートルの高さにある「天望回廊フロア」に足を運んでいた。

「和人も早くこっち来てみなよー！」

「はいはい、今行くよ」

木綿季はすっかり上機嫌だ。というのも昨日の14日の土曜日、悩みの種の一つだった明日奈からの試験を無事に終わらせることが出来たからだった。

三年以上も勉強が止まっていた木綿季にとって、入学後の学業についていけるかどうかが不安だったが、試験出題者の明日奈が「このペースで行けば大丈夫だよ!」と太鼓判を押してくれたのだ。

元々勉強が得意な木綿季は周りの先生方が優秀なこともあり、めきめき学んで受験で言うところの偏差値を上げていった。このペースで行けば帰還者学校に入学した後も、問題なく授業についていけるとだろう。

というわけで、この日は木綿季にとって久々に羽根を伸ばせる日だったのだ。それと同時に二人きりの本格的な初デートでもあった。

「おお、これは絶景だな……」

「でしよでしょ? あつちに富士山も見えるよ!」

「本当だな、この光景はちよつとやそつとじゃお目にかかれないな……」

「えへへ♪」

この日は日曜日ということもあり、和人たちの他にも親子連れ、夫婦、カップル、学生等の観光客で大変に賑わっていた。二人が歩いているのは天望回廊と呼ばれる、何十枚何百枚もある板ガラスでスカイツリーを覆うように設置された屋内バルコニーのようなフロアだ。

落下防止のために二重に柵が施され、ガラスにもしつかりとした黒いフレーム加工処理がされている。場所によっては床がガラス張りになっており、何も無い真下の空間が丸見えの肝がヒヤつとしてしまいうようなエリアもある。

高所恐怖症の人からしたら悪い意味でたまらない施設だが、和人たちの様にALOで空を飛んでいる人からしたら、最高に楽しめるスポットだろう。現実では人は空を飛べないのだから。

「ALOで空を飛ぶのも気持ちいいけど、現実でこうやって高いところにくるのも楽しいね！」

「ああ、そうだな。でもいくら背中に力を込めても翅なんて出ないからな？」

「わ、わかってるよー！」

「ははは、それにしてもいい天気でよかったな」

「全くだねー！ 曇ってたらこの景色も見渡せなかっただろうしね！」

「やっぱり俺たち、運がいいよな」

「だね♪」

和人たちは天望回廊をぐるつと回るように歩いて行った。遠くに日本一の高さを誇る富士山、開設100年以上の歴史がある東京駅、毎年夏になると夜空を彩る綺麗な花火が打ち上げられる隅田川、そしてその近くには一月、五月、九月になると大いに大相撲で盛り上がる両国国技館。戦後の日本の象徴、昭和のシンボル東京タワーや、日本初のドーム型球場の東京ドームなど、東京の観光名所が一望出来るスポットとなっていた。

和人達がぐるつと反時計回りに回廊を回ると、一般の客が入る事のできる最上階の地上450メートルのフロアへとたどり着いていた。真っ白い壁がこの空高いポイントの景観によくマッチしている。

ここから少しだけ歩くと「ソラカラポイント」と呼ばれるスポットがある。ここが真正正銘、立ち入り可能な日本国内の人工の建築物で一番の高さにあるエリアだ。

「悪い木綿季、ちよつと俺手洗いにいつてきていいか？」

「え？ あ、うん、いいよー！」

「サンキュ、じゃあちよつと行ってくるな、大人しくしてくれよ？」

「わーかってるよー！ 子供じゃないんだからー！」

「疑わしいな……、まあいつてくるよ」

「うん！　いつてらっしやーい！」

木綿季は右手を元気よくぶんぶん振りながら男子トイレに足を運ぶ和人を見送りと、大人しくしていると言われていたのにも関わらず、その地点から移動し始めていた。両手を広げて周りの人によつからないようにととてと歩き、ソラカラポイントへと向かっていった。

「うわあ……すごい！」

木綿季は南西の東京の空を見渡していた。夕暮れどきになると、夕日の光がビルで反射し、都会さながらの綺麗な夕焼け模様を映し出す光景をお目にかかれるスポットだ。夜は夜で、ライトアップされた東京の街並みを見下ろすことができる。日本三大夜景と呼ばれる神戸、札幌、長崎にも負けないぐらいの綺麗な夜景となるのだ。

「今度は夕方とか、夜に来てみたいな……あ、そうだ！」

何かを思い立ったのか、木綿季はそう言いながらズボンのポケットから何かを取り出した。木綿季の小さな手のひらに収まるほどの大ききさをしたスマートフォンだ。養子縁組が終わったあとに翠に買ってもらったものだ。ALOのユウキのイメージカラー通り、パープルカラーのスマホとなっていた。

木綿季はご機嫌そうに左手でカメラアプリを起動してソラカラポイントから見える絶景を写真に収めると、LINEアプリを起動して親友の明日奈に、画像つきでメッセージを送っていた。

「明日奈！　見て見てすごいよ！　和人とスカイツリーに来てるんだ！」

木綿季が送信したメッセージはすぐに既読状態となり、明日奈から

迅速にメッセージが返信されてきた。どうやら彼女は家にいるようだった。

「こんにちは木綿季！　すごい景色だね！　ひよつとしてキリト君とデートかな〜？」

「う、うん。そう……なるのかな？」

（た、多分デート、なんだよね？　これは……）

「昨日の試験の結果も良かったし、いいことづくめだね！」

「えへへ、ありがと！　明日奈！」

「どういたしまして！　一緒に学校に行けるの楽しみにしてるね！」

順応が早い木綿季はタップ、スワイプ、フリック等、スマホ操作に必要な動作を一通り既に習得していた。元々機械には弱くないこともあり、現代の若者らしく流れるように左手の指を動かしていった。

「うん！　ボクもとっても楽しみ！　あ、和人戻ってきたから行くね！」

「うふふ、それじゃあデート、楽しんできてね！」

「うん！　またねー！」

会話の終わりに可愛らしいバイバイのスタンプをお互いに送信しあうと、二人はLINEでのやりとりを終えた。そうこうしている間に、用足しを終えた和人が丁度良くトイレから戻り、木綿季と合流を果たした。

「おかえり！　和人！」

「ああ、ただいま。……何してたんだ？」

「ちよつと明日奈とLINEでお話してたんだ！　ここの景色も見せてあげたんだよー！」

「ははは、もうすっかり使いこなしてるな、スマホ」

「うん！」

スマホのディスプレイをこれ見よがしに楽しそうに見せてくる木綿季の無邪気さに、和人は笑みをこぼしていた。まるで新しい玩具を買い与えられた幼稚園児のように、スマホに大満足していた。

「ん、そろそろお昼になりそうだな」

「あ、ほんとだね、ここでご飯食べるの？」

「いや、お昼はちよつとここから移動してから食べようと思うんだ。ある人からは非来てくれって誘われててな」

「……ある人？」

「木綿季も知ってる人だ」

自分も知っていると知られて頭に？マークを浮かべながら首を傾げた木綿季は、一体誰なんだろうと考えを巡らせていた。食べ物を扱っている知り合いといえば、ダイシー・カフェを営んでいるエグルぐらいしか心当たりはない。

しかしダイシー・カフェが目的地なら和人が濁すようなことは言わないだろう。恐らく今まで一回も足を踏み入れたことがない場所に連れて行くのだと思うが。木綿季はいくら考えても他に思い当たるふしがなかったので、黙って和人についていくことにしたのだ。た。

「ねえねえ和人、一体どこへ行くの？」

「着いてからのお楽しみだ」

「……ぶー、教えてくれたっていいじゃん！」

「まあまあ、歩きと電車で30分ぐらいで着くところだから、ちよつと付き合ってくれよ。それに、元々午後に行く予定だった場所だしな」

「……そもそも和人、東京に遊びに行くってこと以外、何も教えてくれないよ……」

「あははは、まあその方がわくわくするだろ？」

「むー、それはそうだけどさー」
「ほら、早く来ないと置いてくぞ」

和人がぶつくさ言っている木綿季をよそに、背を向けてそそくさと先に行こうとすると「あ、待ってよー！」と慌てながら木綿季も後を追いかけていった。エレベーターを天望回廊から展望デッキへと降り、そこからさらに別のエレベーターを使い、下層フロアへと一気に降りていった。

一階フロアへと降りると、木綿季の視界に真っ先にお土産屋が写っていた。特に何を買うわけでもないのに「ねえ和人！ ちよつと見ていこうよ！」と木綿季がねだるので、和人は「見るだけだぞ……？」と渋々承諾してしまい、そのまま売り場へと寄り道する羽目になってしまった。

スカイツリーにちなんだお茶菓子やグッズ等がずらりと並んでいる光景を、木綿季は実に楽しそうに見回していた。饅頭、カステラ、マカロン、チョコレート等、スカイツリーの形にちなんだお菓子が、観光客を誘惑していた。もちろん木綿季も例外ではなかった。

「ねえ和人、お母さんたちにお土産、買ってこようよ！」

「……仕方ないな、荷物にならない程度にな？」

「わーい！ おつみやげおみやげー♪」

「……全く、楽しそうだな……」

終始ご機嫌で東京観光を楽しんでいる木綿季の姿を、和人は微笑ましそうに見守っていた。木綿季とこようやって、なんてことのない普通の日常を過ごさせていけることが、幸せでたまらなかった。たまにこようやってわがままを言われることもあるが、別にかまわない。

むしろどんどんわがままを言って、迷惑かけてほしい、俺はそんな木綿季が好きだ。元気な木綿季も、怒った木綿季も、わがままな木綿季もみんな好きだ。俺は彼女と一緒にいられるのなら、一緒に毎日を生きていけるのなら……他に何もいらぬ。

(木綿季が幸せなら、俺も幸せだ。木綿季のためなら……俺は何だって……)

和人が木綿季の行動を目で追っていると、楽しみに店を見回していた彼女が突如足を止め、とあるグッズ売り場をジッと見つめていた。和人はそれに気づくと、木綿季の見つめている視線の先を目で追っていった。遠目ではよくわからないが携帯のストラップが置いてあるコーナーのようだ。

和人は物欲しそうな目でストラップコーナーを見つめている木綿季に近づくと、背後からひよこっつと顔を覗かせた。するとその様子に驚いた木綿季は一瞬たじろくも、すぐに視線の先をストラップ売り場へと戻していった。

「……欲しいのか？」

「え？ ……え、えつと……、……う、うん」

「……どれがいい？」

「え、いいの……？」

「だって……欲しいって顔に書いてあるぞ？」

「あ……、えつと……」

木綿季が欲しがっていたのは、3センチほどの長さのスカイツリー
の形をしたストラップだった。全体を金と銀のフレームで覆われ、窓
ガラスにあたる部分がガラス細工で加工されており、赤、青、緑、紫、
白、黒等、様々なカラーバリエーションのストラップが並んでいた。

丁度二人のシンボルカラーのストラップが並んでいたこともあり、
和人は黒と紫のストラップを手に取り、真つ直ぐにレジカウンターへ
と足を運んだ。順番待ちをしている間、木綿季は嬉しさ半分、申し訳
なき半分で和人が会計を終えるのを待っていた。

別に木綿季も翠からお小遣いをもらってはいはいるのだが、折角母親
からもらったお金だ、大切に、慎重に使いたい。だからこそグッズ売

り場の前で立ち止まっていたのだ。家族へのお土産は喜んで買うが、自分が欲しいものとなると少しだけ躊躇してしまっていたのだ。

少しだけ後方で待っていると、和人が先ほどの会計を済ませて木綿季の元へと戻ってきた。小さい可愛らしい紙袋に包まれたストラップを差し出されると、木綿季はそれを嬉しそうに、そしてちよつと申し訳なさそうに受け取った。

「わあ……いいの？」

「……なんだ、嬉しくないのか？」

「え……、ううん！ そんなことないよ！ すつごく嬉しい！ ……でも、なんかボクだけしてもらってばかりで、ちよつと申し訳ないなって……」

「……なんだ、そんなことか」

和人は木綿季からの回答を聞き出すと、左手を彼女の頭にぽんと乗せて、優しく撫で始めた。木綿季も久しぶりの和人の掌の感触に、嬉しそうに身をゆだねていた。

「木綿季、何度も言ってるけど我慢する必要なんかないんだからな？

お前は今までずつと我慢してきた、やりたいことをずつと我慢してきたんだ」

「え……？」

「だから……少しぐらいのわがままぐらい、みんな許してくれるさ」

「で、でも……ボクだって、今はお金あるし……」

「いーから、受け取れ」

いい意味で、でもでもだつてを繰り返す木綿季に、和人は無理やり紙袋を握らせると、再び頭をくしゃくしゃとなでじゃくつた。木綿季は木綿季でちよつとだけ腑に落ちなかつたが、なんだかんだで欲しかったものを、大好きな和人から贈られて思わず笑みをこぼしていた。

「……ありがとう、和人……」

「……どういたしまして」

「嬉しいな……えへへ♪」

「ここだと他のお客さんの邪魔になっちゃうから、スマホにつけるなら移動してからにするか」

「うん、そうだね……♪」

その後、川越にいる家族へのお土産を何個か購入すると、二人はスカイツリーを後にし、お昼ご飯兼、午後の用事がある日本一の電気街である「秋葉原」を目指し足を運んでいった。

スカイツリーのすぐ近くにある都営地下鉄浅草線、各駅停車西馬込方面の列車へと乗り込み、まずは浅草橋駅を目指した。そう、今日の二人はバイクで来ておらず、徒歩とバスと電車でここまで来ていたのだ。

いつもいそいそとバイクで移動してたこともあり、今回ばかりはのんびり楽しもうということで、木綿季が提案したのであった。確かにバイクで移動した方が小回りは聞くと、行きたい場所にピンポイントですぐに行くことができる。

しかし徒歩での旅も、これはこれで味があつていいものだ。車やバイクを使わないからこそ見えてくるものもあるし、何よりゆったりとできるのが大きかった。移動中も会話しながら風景を楽しめるし、本当にそこを「旅している」という気分になれるのだ。木綿季自身も電車に乗るのが久しぶりということもあり、今回の東京観光を心から楽しんでいた。

和人達は5分ほど地下鉄に揺られ、浅草橋駅で降車すると、すぐさま中央・総武線、各駅三鷹方面行きの列車に乗り込み目的地である秋葉原へと向かった。

浅草線は地下鉄だったので外の風景を見ることが出来なかったが、地上を走るこの中央・総武線に乗り込むと、木綿季はまるで子供のように外の風景を眺め続けていた。通り過ぎるビル、飲み屋の看板等、都会さながらの風景を楽しんでいた。

3分ほど経過すると、同じ東京都内でも雰囲気は少しずつ変わってきた。広告も飲食店や大手企業のものから、アニメやゲーム、電化製品のものが目立ち始め、中にはビルの一階から屋上までも長さの広告もあり、同じビル街でも異色を放ち始めていた。

そう、ここが日本一の電気街であり、アニメとゲームの聖地でもある「秋葉原」だ。アニメ好き、ゲーム好きにとって、是非一度は足を運んでみたい場所である。和人はここでお昼ご飯を食べようというのだ、そしてそれとはまた別に用事があるという。一体なんなのだろうか。

同日午後12:20 東京都千代田区外神田 秋葉原

「うわあ、ここが秋葉原……！ ボク初めてきたよ！」

「だろうなあ、普通の人はここに用なんかないからな」

「ボク知ってるよ！ オタクがいっぱいいるところなんでしょ？」

「……まあ間違っちゃいないがな、オタクっていえば俺もPCオタだしゲームオタでもあるけどな」

「そういえば和人の部屋ってパソコンがいくつもあったよね？ モニターもたくさんあったし」

「俺がPCに詳しくなったのは……母さんの影響がでかいかな、あの人PC雑誌の編集者だからさ、多分その所為だ」

「そうなんだ、んじやあ和人にとってここは宝の山なんじやない？」

「ああ……、右も左も俺にとっては天国のような所だぞ、ここは……！」

アニメにはあまり興味はないが、根っからのゲーマー、そしてPCオタである和人にとって、ここ秋葉原は文字通り宝の山であった。こ

ここに来た目的も、新しく発売されたPCパーツを買うためであった。すぐにも行きつけのPCショップでパーツを買いたいところだったが、ここに来る途中から木綿季が空腹を訴え続けているので、先に腹ごしらえを済ませてからにしようということ、和人は知り合っているという飲食店へと歩を進めていった。

秋葉原駅北口から西へと進路を取り、歩きでゆっくりと昼食をとるための店へと向かった。駅の目の前には秋葉原のシンボルでもある複合型オフィスビルである「UDX」がそびえ立っていた。レストランはもちろんカンファレンス、イベント、シアター、クリニック等等、あらゆる機能を有している施設となっている。

そんなUDXを右手の視界に捉えながら、和人たちは西へと進んでいった。木綿季は初めての秋葉原の街並みが非常に珍しいのか「おっ」というセリフを逐一漏らしつつ、辺りをキョロキョロしながら和人のあとに続いていった。

「すごいねー！ アニメとかの広告がいっぱいだよ！ あ……ALOの広告もあるよ！ おっきー！」

「……ここはそういう街だからな、見てるだけでも飽きないだろう？」

「ホントだね！ 横浜でも川越でも見れない光景だよー！」

「日本広しといえども、こんな雰囲気はここだけだろうな」

和人が歩いている秋葉原の街中は、休日だということもあり、観光客や買い物客、イベント目的で来た人たちでごった返しており、大変な賑わいを見せていた。視界に映るほとんどの通行人が、両手に買い物袋に大きいリュックに丸めたポスターが差し込まれていた。こういう光景を見ると、やはりここは秋葉原なのだということを知らされる。

二人は中央の大通りの歩道を歩き、中央線の高架下の道へ差し掛かると、そのまま道なりに進んでいった。裏通りのな道にも関わらず、この通りにもびっしりと中古PCショップ、弁当屋、ドラッグストア、飲み屋、個人経営の電気屋等、様々なお店が軒を貫いていた。

「すごいね……こんな裏路地にもお店がたつくさん……」

「本当になんでもあるからな、秋葉原で手に入らないものはないぞ」

「ほえー……アニメとかだけかと思ってた」

「おいおい、元々秋葉は電気街で有名になった街だぞ？」

「へえーそうなんだ？」

今でこそアニメとゲームの聖地と呼ばれている秋葉原だが、そもそも昭和45年にマイコンやジャンクを取り扱う店が登場し、ステレオ音楽機器がブームとなり音楽レコードを取り扱う専門店が増加したのをきっかけに、電気街としての秋葉原の歴史が始まったのだ。

そして昭和54年、秋葉原電気街振興会が設立、更に翌年の昭和55年には京都に本社を置く大手ゲーム企業が開発したカセット式のゲームハードが爆発的な人気を呼び、ゲームソフトを扱う店舗が増加、それと同時にCD専門ショップなんかも増えていった。それに伴って家電製品を扱う店同士の競争も激化の傾向にあった。

それは現在も続いており、アニメやゲームだけでなく、家電製品やPC等の顧客の取り合いは、今も尚継続中なのである。しかしそれらを踏まえての、秋葉原だといふべきだろう。今や秋葉原は、日本が世界に誇る文化の塊のような街となったのだ。

「……よし、ぼちぼち見えてくるぞ、今日の昼食はあそこで食べるんだ」

「えーつとあそこって……」

「さ、入ろう」

現在から20分程前、秋葉原市街地内 ゲームセンターCLUB

S I G A 秋葉原駅前店

「ぐあ……ま、またダメだ……」

「も、もういいわよ……確かにそれは欲しかったけど、そこまでしてくれなくても……」

「い、いやダメだよ……、ここまで来たらもう引き返せない!」

「……はあ、男って強情なんだから……」

秋葉原の目玉ゲームセンター CLUB SIGA 秋葉原駅前店の一階フロアにある、とあるクレーンゲームに躍起になっている少年の姿があつた。グレーのキャスケット帽をかぶり、黄色いパーカーに黒のジーンズに身を包んだ優男風の少年、新川恭二であつた。彼が必死になって取ろうとしているのは、なんとも可愛らしいデフォルメの形をしたネコのぬいぐるみであつた。

そんな恭二を傍らから半分呆れた表情で、一人の少女が見守っていた。茶髪がかつた黒い髪ショートヘアに、左右のおさげに白いリボンをくくりつけたヘアスタイル。ダークブラウンのマフラーに、明るいブラウンの短い丈のトレンチコートに身に纏った少女、朝田詩乃だ。かれこれこの状況になってから、既に30分が経過していたのだ。

クレーンゲームと必死に格闘している恭二をよそに、詩乃はこの状況に飽きてしまったのか、あくびをしながら他のゲーム機筐体に寄りかかりながら、ココアの入ったアルミ缶を片手に彼を見守り続けた。この時点で彼がクレーンゲームに投資した金額は、既に五千円になろうとしていた。一回二百円のクレーンゲームに五千円を投入しているのです、既に25回分のお金を溶かしている計算になる。

「恭二君、もういいから……、多分そのアームはそれ以上支えられないように設計されてるのよ、いくら頑張っても取れないわよ……」

「……………」

「……全く、男ってやつは……」

呆れてる詩乃を尻目に、恭二の視線はクレーンのアームと、ぬいぐる

るみを捉えていた。取り出し口へつながる穴へは距離にして約15センチ、定位置からここまでの五千円をはたいて地道にこつこつ運び続けてきたのだ。ここで取るのを諦めてしまうと、ここまで投資した五千円が無駄になってしまう。

恭二が引き下がれないのはそれだけではなかった。ちよつとぐらい、好きな女の子の前で男の意地を見せてやりたいという下心もあった。デート場所にさんざダメ出しをされ、一緒に遊んでいるALOでもお世話になりっぱなしだ。ならば、ちよつとぐらい見栄を張ったつていいじゃないかと、今こうしてクレーンゲームと格闘をしているのだった。

元々はゲームセンターの前を通りかかった際に、詩乃が景品のネコを「あ、あのネコ可愛い……」と呟いたのが事の始まりであった。恭二もさほど苦勞せずに取りれるものだと思つたのだろう、初期投資で結構いい距離まで持っていけたこともあり、数回でクリア出来ると踏んでいたのである。

しかし現実はどうだろう、クレーンゲームにありがちな話で、こういう景品は取れそうで取れないというのがよくあることなのだ。しかもお店側がその気になってしまえば、お客がいくら頑張っても取れないように設定出来てしまう。クレーンゲームは貯金箱とはよく言つたものだ。

(まあでも、そんな不器用な恭二君が……私は好きなんだけどね……)

形はどうあれ、自分のためにここまでしてくれる恭二のことを、詩乃は嫌いではなかった。確かにお互い告白はしていないが、両思いのようなものなのである。中学の頃からの付き合いもあり、最早互いに切つても切れない関係にあった。恭二自身もかつて詩乃に対して抱えていた複雑な感情も、今ではそれほど感じなくなつていたようである。

「恭二君、流石にこれ以上お金使つたら……生活費にも影響でちゃう

よ！ もうやめようよ！」

「……仕方ないな、不本意だけどこれでラストにしよう……」

「……カッコつけちゃって……」

「頼むぞ……！」

恭二は今までの全てを込めるかのように、百円硬貨を二枚、クレイニングゲームに投入し、最後の勝負へと挑んでいった。泣いても笑っても、これがラストチャンスである。

彼のより真剣な表情を、今度ばかりは詩乃は真剣に見守っていた。なんだかんだでここまで自分の為に行動してくれていた彼の行く末を、最後まで見守ろうとしていた。……たかがクレイニングゲームなのに、である。

「……だつー！」

「……いい位置ね」

横方向へのアーム操作が終わると、次は奥方向へのアーム操作へと移行する。クレイニングゲームの筐体のスピーカーからはのほほんとしたBGMが流れているが、恭二の表情は真剣そのものであった。額に汗が浮かび、眉間にしわがよってしまっていた。

再度アームとぬいぐるみとの距離を目で見て確認し、恐る恐る、慎重に奥操作のボタンに指を置き、力を入れて押し、アームを奥方向へと動かしていった。アームがレールをつたいながら、だんだんと目的のぬいぐるみへと近づいていった。

恭二が狙っている位置まで残り15センチ、12センチ、10センチと、じりじりと距離を詰めていった。少しずつ距離が近づくにつれて、恭二と詩乃の心臓の鼓動が早くなっていた。これが正真正銘最後のチャンスだからである。

「へ……へつくし!!」

「ちよ……恭二君!」

「え？ ……あ、し、しまった……！」

なんとということだ、恭二たちが遊んでいる筐体が入口に近いためか、外から冷たい風が入り込み、汗をかいている恭二の体の体温を一時的に冷やしてしまって、くしゃみを誘発してしまった。当然、くしゃみをした所為でボタンから指が離れてしまい、アームの移動が中断されてしまった。

「ちよ……ちよつと待つて！ 待つてくれええ！」

「はあ……今回もダメね。さ、諦めて出ましょ、恭二君」

「……うん……」

詩乃が足元に置いてある荷物を手に取り、踵を返してゲームセンサーを後にしようとした、その時である。ふと見たクレーンゲーム中の様子がおかしいことに気がついた。

「え……、あれ!？」

「ん、どうしたんだい、詩乃」

「きよ、恭二君！ あ……あれ！」

「え……、つて……ええっ!？」

視線を戻した二人は目を丸くして驚いていた。なんと位置調整に失敗したと思っていたアームは、なんともいえない絶妙な掴み具合でぬいぐるみの耳と首の部分を挟み込むようにして、弱々しいながらもしっかりと支えていたのである。

アームに捕まっているネコのぬいぐるみは落ちそうで落さないまま、一番上まで上昇し、ゆつくりと取り出し口へと繋がっている穴へと移動を開始した。その光景を、恭二と詩乃は「お、落ちるな！」と何回も叫びながら見守って……というより睨みつけていた。

穴へとじりじりと近づくとにつれ、少しずつではあるがぬいぐるみを支えているアームにも、ちよつとずつ限界がきはじめていた。ちよつ

とずつ、ちよつとずつだがアームからぬいぐるみを外れそうになつていったのである。

「あ、ああ……あと少しなのに……、頼む！ もうちよつと！」
「もう少し……もう少しよ！」

その時だった、ついに限界がきたアームは、無情にもぬいぐるみを手放してしまった。穴まであと3センチもない位置で、ぬいぐるみはするりとアームからずり落ち、自由落下運動に任せて地球の重力に引つ張られていった。

しかし、その時に奇跡は起きた。首から真つ逆さまに落ちたぬいぐるみは一回落下すると、既に下にあつた別のぬいぐるみに弾かれ、反動でそのままスポンと穴に吸い込まれるように取り出し口に落ちていったのだ。

二人はあまりの一瞬の出来事に、目の前で何が起きたんだという感覚に陥っていた。そうまるでバスケの試合で、試合終了1秒前にかむしやらに投げたボールが相手のゴールにすっぽりと収まり、逆転勝ちをしたような、そんな感覚を覚えていた。

「あ、あははは……と、取れちゃった……」
「あ、あんなのありなの……？」

恭二が苦笑いを浮かべながらぬいぐるみを手にとると、詩乃はそれよりも複雑そうな表情で恭二とぬいぐるみを見つめていた。その後ろに居たギャラリーもあまりにもトリッキーな景品の取り方に感銘を受けたのか、細々と拍手をしている人の姿も見受けられた。

「はい、詩乃、これ」

「え？ ……あ、うん……」

「まあ……取れてよかったよ、あはは……」

「あははじゃないわよ全くもう、あんなにお金使っちゃって……、でも

ありがとう……」

詩乃はドライな口ぶりからは裏腹に、猫のぬいぐるみを受け取ると、嬉しそうに両手でそれを抱え、笑顔を恭二に送っていた。なんだかんだで、彼からのプレゼントが嬉しかったのである。そこまでの苦労を考えると尚更嬉しいものがあつた。

「……どういたしまして」

「うふふ、なんか初めて恭二君からプレゼントらしいプレゼント、もらった気がするわよ?」

「え、そ、そう……だっけ?」

「そうよ……、今までモデルガンや戦車とかのプラモばかりだったじゃない。……まあ、そのおかげで私はPTSDを少しは克服出来ただけど……」

「うう、ごめんなさい……」

女心がわかってないんだからと言葉を並べられた恭二は肩を落としてしまっていた。彼は彼なりに詩乃のことを思つての行動だったのだが、イマイチそうじゃない感じがしていたのだ。詩乃でなかったら確実にフラれていたであろう。

「でも……そんなあなたのことが、私は……」

「……ん? 何か言ったかい?」

「んーん、別に、何でもないわ」

「は、はあ……」

「それより恭二君、お腹空かない?」

「あ、えつと……言われてみれば少しだけ」

「ならこれからどこか食べにいかない? こちら辺で知り合いが働いている店があるのよ、割引券もあるし、折角だからそこで食べましょ!」

総額五千と二百円をつぎ込んだぬいぐるみを抱きしめながら、詩乃がお昼を食べに行こうというのと、恭二は快くそれに承諾した。いろいろな意味で激しい戦いを繰り広げていた彼の胃袋もすっかり空腹となっていたのだ。

詩乃は半ば無理矢理に恭二の手を引っ張り、ゲームセンターを後にすると、進路を飲食店に取り、ご機嫌で歩を進めていった。恭二は急に引っ張られるも、すぐに体制を整えて詩乃のあとについていった。

「ありがとね、恭二君。私……これ、ずっと大事にするね……」

「え？ あ、えつと……うん、そうしてくれたら僕も嬉しい……かな、あはは……」

「うふふ……♪」

恭二と詩乃は互いに笑顔を交わすと、手を握り直して、同じ早さで歩を進めていった。季節は冬に近づきつつも、二人の心だけは、温かいままだった。

第64話く女の子く

西暦2026年 11月15日 (日) 午後12:30

東京都千代田区外神田 秋葉原 メイド喫茶『メイドドリーミング』

「おかえりなさいませ！ ご主人様！」

「……………え？」

和人と木綿季はお昼ご飯を食べるため、今や秋葉原の風物詩ともなり、この街のいたるところに店を構えているメイド喫茶に足を運んでいた。

椅子やテーブル、壁紙などは普通の飲食店と変わりがないが、メニュー表や灯り、そして何より接客する従業員が全員メイド服を身にまとっている店が、やはり一般の飲食店とは違う空気を漂わせている。

お客の入店時にも「いらっしやいませ」ではなく「おかえりなさいませ」と言いながら歓迎するのも、メイド喫茶ならではの挨拶だ。

和人は過去一度だけ、このメイド喫茶に訪れている。木綿季も話してこういうお店が存在するということは知っている。しかし、予想していなかった目の前の光景に、思わず驚きの声を上げてしまったのだ。

「やつほー！ キリト君！ 木綿季ちゃん！」

「よう、久しぶりだな」

クリーム色のふわふわとしたロングヘアに、可愛らしいピンクのりボンがついた真っ白なヘッドドレス。手首にはフリル付きの白いレースリング。

ブラウンのワンピースに大きなピンクのりボンとフリルがついた、真っ白いエプロンドレスのメイド服を着て姿を現したのは、今年行ったユウキのチャリティーライブに協力してくれた、セブンの実の姉でもある枳殻虹架ことレインであった。

「本当にきてくれたんだ、嬉しいなー！」

「れ、レインってここで働いてたんだ……！」

木綿季は右手にお盆を持ちながらニコニコ笑顔で接客している虹架の姿に驚いていた。彼女がメイド喫茶で働いているということは予め聞かされてはいたが、いざ実際に目にするるとやはりびっくりするものがあつたのだ。

虹架は自分の髪の毛をふわりとなびかせながら早足で和人たちに近寄ると「二名様ごあんなーい♪」と店内に声を響き渡らせて、二人の背中を押しながら半ば強引に席まで案内した。

相変わらずの若干の強引さに苦笑いを浮かべつつも、流されるまま和人は入口から一番遠い席に腰を落ち着けていた。

一方で木綿季は何がなんだか、といった様子だったが始めて訪れるメイド喫茶に心を躍らせていた。

虹架以外にもショートヘアやポニーテールなど色々なヘアスタイル、色々なカラーリングのメイド服に身をまとって仕事をしている光景は、それはそれは木綿季にとっては見えていて楽しくなるものだった。

「みんな可愛いねー！」

「もちろん！ 当店自慢のメイドたちですから！」

虹架の働いている店はお昼ご飯時であつてそこそこのお客さんで賑わっており、女の子目的できたお客や、秋葉原観光目的で立ち寄つたと思われる外国人の姿もあつた。

どこのメイド店員も普通の接客とは違い、言ってしまうえば「萌え」というものを連想させる仕草をとるところどころに挟んでいる。多分、これもそういう指導を受けてきたのだろう。

こういったのも、メイド喫茶ならではだ。

「あはは、レインも元気そうで何よりだよ」

「うん、お陰様でね♪」

七色・アルジャービンことセブンの姉妹コンサートツアーに忙しい虹架ことレインであったが、歌の仕事がない時はこうしてメイドの仕事に精を出している。

多忙な日々を送る彼女であったが、メイド業と歌活動、どちらも虹架にとっては捨てられないものであったのだ。

確かに毎日が忙しくて、疲れているのも事実だ。しかしそれ以上に充実している。大好きな夢を二つも叶えることができ、むしろ幸せを感じているぐらいだ。

これも自分と七色を助けてくれたキリトのおかげ、彼と出会わなければ七色と再開出来なかっただろうし、アイドルになるという自分の夢も叶わなかっただろう。

「キリト君にはすっごく感謝してるんだ、君のおかげで七色とも再開出来たし、やりたい仕事を二つも続けられてるんだからね♪」

「お、俺はただほっとけなかっただけで……」

いちいちあざとく、可愛いらしい仕草をする虹架の態度に、恋人が居るといふのにもかかわらず、和人は頬を赤らめて視線を逸らしていた。

そんな和人の態度にちよつとだけヤキモチを妬いた木綿季は、少しだけ不満そうにぷくーつと顔を膨らませて彼の顔に視線を送りつけていた。

「かずとー、ボクお腹すいたー!」

空腹も相まって虫の居所が悪くなり始めた木綿季は、両手両足を子供っぽくばたばたとさせて和人に訴えていた。

その様子を虹架はクスクスと笑みを浮かべながら、お盆から水の入ったグラスを一つずつ丁寧テーブルに並べ、注文を取るべく小さいバインダーとボールペンを傍らのポケットから取り出した。

「ふふふ、木綿季ちゃんもそう言ってるし、ご注文をお伺いします♪」「わーい! 何にしようかなー!」

和人と木綿季はテーブルの中央のメニューファイルスタンドからメニューを手に取り、パラパラとページをめくりながら自分の食べたものを探していた。

普通のレストランとは一風変わった、メイド喫茶ならではの楽しい料理のラインナップに、木綿季は目を輝かせている。

オリジナル文字を書いてもらえる定番のオムライス。特性シナモンが入ったフレンチトースト。当店オーナー自慢の豆を使ったオリジナル珈琲。

じっくりコトコト煮込んだ超本格派ミートソーススパゲティなど、ここでしか食べられないようなメニューから、手の込んだ食べ物まで様々だ。

「おかえりなさいませ、ご主人様ー!」

「ん……お客さんか」

注文待ちしている虹架が新たなお客の来店に挨拶を響かせた。なんとなく和人も虹架と同じ方向に視線を送ってみると、そこには驚くべき光景が飛び込んできた。

「こんにちはレイン。言われたとおりに来てあげたわよ?」

「お、お邪魔しまあす……?」

「あーっ!」

新たな二人組のお客の来店に、和人はおろか木綿季も椅子から立ち上がって驚きの声を上げていた。

その声のポリウムに、一時的に周りのお客からの視線が集まると「しまった」と思ったのか、木綿季は思わず自分の口に手を当てて視線をあちらこちらにやっていた。

「ゆ、木綿季……周りのお客さんに迷惑だろ」

「ご、ごめんなさい……、で……でも何でー?」

「それはこっちのセリフよ、何でキリトたちがここにいるのよ?」

「や、やあ……久しぶり、和人に木綿季ちゃん」

店の入口のドアを開けて入店してきたのは、先程までゲームセンターのクレイゲームに大量投資していた恭二と、その相方の詩乃であった。

というのも、詩乃たちも虹架に是非今度お店に遊びに来てねと割引券を渡されていたのだ。

割引だのサービスだの言ってはいるが、結局は売上に貢献してねと

いう、営業でもあった。商売に熱心な虹架のたくましさに、和人たちは揃いも揃って脱帽であった。

やがて思わぬところで再会を果たした和人たちは、折角みんないるのだからと同じテーブルで食事を取ることにした。

二人用のテーブルから四人用のテーブルへと席を移し、持っていた鞆などの荷物を椅子の傍らに置き、ゆつくりと椅子に腰を落ち着けていた。

「ふう……」

「えっと、彼女が詩乃のお友達なのかい？」

「ええ、この娘がそうよ」

詩乃に自分のことを紹介されると、虹架はすかさず営業スマイル&上半身を斜めに傾かせ、ウイंकをしながらあざとい仕草で恭二を誘惑していた。

虹架本人にその気はないのだろうか、この仕草だけで何人のお客のハートが奪われたことか。

歌も上手く、容姿も完璧、人当たりもよく、家族の面倒みもいい。これでアイドルだというのだから、たまったものではない。

「あ、え、えっと……詩乃と同じ学校だった、新川恭二です！ よ、よろしく……」

「恭二君、顔が赤いわよ……」

不機嫌そうな視線を送りながら、水の入ったグラスに口をつけた詩乃に言われると、恭二は冷や汗をかきながらたじろいてしまい、慌てた様子で「ち、違うんだ」と弁解をしていた。

傍から見るともうすっかり恋人関係の二人に見えるが、未だにこの二人は互いに想いを伝えていない。

告白する一歩手前まではいったのだが、あと一歩というところで勇気が足らずに話がそれてしまっていたり、素っ頓狂なことを言ってしまったりと、奇妙な形のすれ違いが生まれていたのだ。

しかし、今はそれでもいいのかもしれない。互いに好きだという気持ちは変わっていないし、詩乃も恭二の気持ちに、恭二も詩乃の気持ちに薄々と気付いている。

自分が相手にどんな目で見られているか、どのような視線を送られているか、わかつてはいるのだ。

ただ、互いにちよつと素直になれないだけで、二人共お互いを大切に思っている。この問題は、やがて時間の流れが解決してくれることだろう。

そう、どんなに時間がかかったとしても……。

「え!? えつと……あ、あはは……」

「おやおやく? シノンちゃんつてばヤキモチかな?」

「ちよつ……、な、何でそうなるのよ!」

「だってシノンちゃん、顔怖いもんー!」

虹架にそう言われると、詩乃は慌てて自分の鞆から手鏡を取り出して、自分の表情を確認していた。

ちよつと引きつってはいるかもしれないが、特別怒っているわけではないはずだ。確かに普段から自分は気難しい表情をしている自覚はある。

だからといって、常日頃からそんな露骨に不機嫌なオーラを表に出してはいないはずだ。

「あはは! 嘘だよシノンちゃん! シノンちゃんも弄り甲斐があるね、あははは!」

まんまといっぱい食わされた詩乃は、顔を真っ赤にして虹架を睨みつけていた。明日奈といい和人といい、そしてこの目の前の虹架といい、何でこうも自分をこんなにからかつてくるのだろう。

すつかり丸め込まれてしまった詩乃は俯いて、顔をむすつと赤くしたままテーブルのメニュー表を手を取っていた。

「ちゆ、注文よ! レイン!」

「はいはい♪」

眉間にしわを寄せた詩乃が完全にこの場の流れを作ってしまった。しかしいろいろな人の接客の経験がある虹架は、これぐらいで自

分のペースを乱さない。

商売上、この店にはいろんな人が来る。怒りっぽい人、おどおどした人、ただ単に寂しくてメイドさんとお話したい人、そして困ったことにお触りをしてくる人など様々だ。

そんな人たちからすれば、今回の詩乃のこの態度も可愛いものだ。友達同士ということも相まって、詩乃は虹架の格好のおもちやになっ
てしまっている。

しかしそれも、傍らに恭二という男の子がいる所為もあるだろう。

「えつと、シノンちゃんたちは以上で？」

「ええ、お願いするわ」

それほど多く食べない詩乃が注文したのはこの店自慢のミートソーススパゲティにレモンティー。恭二はふんわり卵のオムライスとメロンソーダを注文した。

「キリト君たちはー？」

「俺は……このオリジナルカレーライスとコーラにしようかな」

「はいはい♪ ありがとうございまーす♪」

注文が来るたびに、レインは嬉しそうに手元の注文表にボールペンでメニューを書き加えていった。

その笑顔には友達に見せる笑顔とは別に「売上に貢献してくれてありがとう」「私の給料のためにありがとう」といつているようにも見えてしまう。

「木綿季は？」

「え、えつと……」

和人ら三人はすぱつとメニューを決めることが出来たのだが、木綿季だけは未だにどれを食べようか頭を抱えている。

メニュー表に乗っている料理の写真はどれも見ているだけで楽しく、そして美味しそうに見えてしまっていて、それが木綿季を悩ませていたのだ。

どれもこれも美味しそうだし楽しそう、一体ボクはどれを注文したらいいんだろう、ボクのお腹は今一体何腹なんだ？

と、どこかのグルメドラマで聞いたことがあるようなことを思い浮

かべつつも、木綿季はメニュー表を真剣な眼差しで見つめながら迷い続けていた。

「うー、どれ頼もうか悩んじゃうよー……」

「なら食べたいもの片っ端から頼めばいいんじゃないか？」

「えっ」

和人の言う食べたいものを片っ端からというのは、文字通り片っ端からという意味だ。普通の人より多く食べる和人だが、その恋人である木綿季もそれはそれはものすごい量を食べる。

普段の食事でも和人からおかずを拝借したり、三時のおやつもしつかり食べて、晩ご飯をたらふく食べてもまだ満足していない、といった様子だ。

いくら育ち盛りで新陳代謝がいいといっても、この小さい体にどうやってそんな大量の食べ物収まるというのだろうか。

それとも、三年間に渡り現実世界で食べられなかった分を体が、胃袋が、食欲が求めているのだとでもいうのだろうか？ 全く不思議なことである。

「お前のことだ、一品二品ぐらいじゃ満足しないだろ？」

「えっと、それはそうだけども、いいの……？」

「俺は構わないよ。むしろ、腹いっぱい食べてくれよ」

先程スカイツリーでプレゼントをもらったばかりだというのに、今度はお腹いっぱいになるまで食べていいという。

木綿季は若干いたたまれなくなりつつも、自分の心の奥底から溢れ出てくる食欲に勝つことができずに、和人のお言葉に甘えることにし、虹架に次々と自分の食べたいものの注文を述べていった。

「え、えっと……、い、以上で……よろしいですか？」

注文を受ければ受けるほど嬉しいお店側の人間である虹架も、その膨大な量の注文に若干顔を引きつらせていた。

「ああ、頼むよレイン」

「ま、まああたしが作るわけじゃないからいいんだけど……、しよ、少々お待ちくださいー！」

先程まで作っていた営業スマイルも曇っていくほどの焦りの様子

を見せた虹架が、慌てた様子で厨房に注文を伝えに小走りで向かっていった。

その様子を後ろから見ている木綿季は、注文を終えて少しだけ気持ちの余裕が出来たのか、いつも見せている笑顔を周りに振りまいていた。

「楽しみだなー♪」

「ちよ、ちよっとキリト、あんなに注文して大丈夫なの!？」

呑気に水の入ったグラスに口をつけている和人に、詩乃は心配そうに声をかけている。すると和人は「大丈夫大丈夫、木綿季なら全部食べられるから」と余裕綽々といった立ち振る舞いだ。

しかし何だろうか、和人はそれ以外にも何か非常に重要なことを忘れていたような気がしてならなかった。

はて、それは一体なんだったか……？

「大丈夫だよ、木綿季なら食べられる」

「い、いや私が言いたいのはそうじゃなくて……」

「……？」

詩乃が訴えているのは、木綿季が出された料理を残してしまうのではないかと、そういうことではなかった。

先程、相方が目の前で大金を溶かしている様を見ていたこともあり、和人の懐の心配をしていたのだ。

「お、お金のことだよ和人……、木綿季ちゃんすつごく注文しまくってたけど、料金表ちゃんと見てた……？」

「……へ？」

詩乃と恭二に諭された和人は、焦りの表情を浮かべながら慌てて手元のメニュー表に目をやっていた。

恐らく普通の飲食店と同じ感覚で注文をしたのだろうが、ここはメイド喫茶だ。そこいらにあるレストランやカフェと比べても、一品あたりのメニューの値段が二倍も三倍も高い。

メインメニューは平均1500円、サイドメニューは590円、ドリンクが390円とかなり割高だ。木綿季以外はメインメニューとドリンクを一品ずつなので、そこまで値が貼ることはない。

しかし、木綿季の方がそうもいかなかった。

木綿季が注文したのは、特製カレーライス、コトコト煮込んだビーフシチュー、ハートの形のハンバーグステーキ、スパゲティナポリタン、デミグラスソールのオムライス。

大盛り焼きそば、フライの盛り合わせ。デザートにオリジナルジャンボパフェ、特製シナモンのフレンチトースト。

そして飲み物はこだわりカフェラテとココア、アイスティーにレモンティーと大盤振る舞いだ。

単純計算で木綿季の注文だけで一万円を軽く超えてしまう浪費となってしまうっている。

しかし奥にある厨房では、すでに調理が始められてしまっていた。今更取り消すこともできないし、何より男が一度口にしたことを撤回するなど、出来るはずがない。

それに恋人の前で大口を叩いたのだ、引き返せるわけがなかった。

「……あは、あはは……」

「アンタ……、バカでしょ……」

「え、えっと……和人、ゴチになるね……?」

「……で、デジャヴだ……」

和人は今年の一月、木綿季と仮想世界で一緒に食事したときのことを思い出していた。

あの時の確かそうだ、ユウキがやたらと割高なレストラン風のカフェで注文しまくった結果、74000ユルドものお金を一晩の食事で溶かしたのだ。

その反省点を、今回全く活かせていなかったのだ。

「き、キリト、少しなら私が出そうか……?」

「い、いや大丈夫だよ……、これは俺たち家族の問題だからさ、あは、あははは……」

「だ、だって……和人がいつぱい頼んでいって言ったから……」

度が過ぎた注文をしてしまった木綿季も、若干の反省の色を見せていたが、そもそも許可を出したのは和人。木綿季の食欲のことで、メイド喫茶のメニューの割高具合を懸念していなかった彼に落ち度が

あるといえよう。

元々木綿季の食欲を知っていた詩乃と恭二も、木綿季の注文料に驚きを隠せないでいた。

「き、キリト君ごめんね、ちよつといいかな?」

「ん、どうしたレイン?」

厨房の奥から、レインが少しだけ慌てた様子でお盆を片手に和人たちのテーブルに歩み寄ってきた。

気が付くと店内は休日の昼ということもあり、お客さんでごった返している。

「ちよつとお客さんが増えてきたのと、木綿季ちゃんの注文がすごいこともあって、調理が遅れちゃってるんだ……」

「あらら、そうなのか」

「そりやそうよ……」

詩乃が呆れた様子で頭を抱えていた。

当然だ、飲食店の書き入れ時でもある日曜のこの時間、ましてや観光客で溢れかえるこの秋葉原の名物であるメイド喫茶だ。

当然お客さんは溢れかえるし、先の木綿季の膨大な量の注文もあり店内は大変に、主に厨房の方が慌ただしくなっていた。

「だから料理が運ばれてくるのがちよつと遅れちゃうんだけど、いいかな?」

「んー、なら仕方ないな。木綿季もいいか?」

「ボクもヘーキだよ! って元はといえばボクの注文だろうし……」

「ごめんねー、ご協力感謝します!」

虹架は和人たちに事の状態を説明すると、テーブルを離れて同じように店内で料理が運ばれてくるのを待っている、他のお客に丁寧に説明して回っていた。

あくまでも相手はお客、接客業であることに変わりはないので心身丁寧な態度を心がけながらわかりやすいように説明をする。

幸いにもこの混雑状況に文句を言うような輩はいなかったようで、全てのお客に説明を終えた虹架は一時的にやる事がなくなったのか、再び和人達の座っているテーブルに向かって歩み寄ってきた。

「お疲れ様、レイン」

「大変だねー、接客って……」

和人と木綿季が必死に仕事をこなしている虹架に労いの言葉をかけると、片手に水の入ったピッチャーを持ち、和人たちのグラスに一つ一つ丁寧に注いでいった。

少しずつ傾けたピッチャーから水が滴り落ち、コポポポという心地よい水の音と共にグラスに水が注がれていく。

このお客のグラスに水を注ぐときも、入念な教育が施されている。失礼のない角度、失礼のない注ぎ方、言葉遣い等々、接客対応一つとっても最大限のサービスが求められる。

「それでもないよう？ やっててすっごく楽しいもん。いろんなお客さんも見れるし。あたしは天職だと思ってるよ♪」

「あはは、そうだな。確かに歌ってるときのレインと同じように、すっごく楽しそうだもんね」

「えっへへー、まあね♪」

好きなことを生業として続けていくというのは考えているよりも難しいことだ。趣味は自分の好きな時に出来るが、それを仕事としてとなると、そうもいかない。

どうしてもそれをやり続けていかないといけなくなる。

そうすると話は変わってきてしまう。趣味とはたまにやるから趣味なのだ。仕事にして、常に付き合うようになると見方が変わってしまい、逆に嫌いになってしまうことも珍しくない。

好きなことを仕事にするという夢を叶えることも難しいが、それを持続させていくということは、もつともつと難しいのだ。

しかしレインは歌とメイド、二つの仕事を嫌な顔をすることなくこなしている。長年憧れていたということもあつたが、彼女もまた木綿季と同じように、自分のやりたいことに全力でぶつかっているだけなのだろう。

そして、大変だけどそれが本当に心の底から楽しいと思えているからこそ、苦にならずに続けていられるのだろう。

「あ、そうだー！」

「……ん？」

レインは突如として、何かを思い出したかのように肘で抱え、両手をパアンと目の前で鳴らすと木綿季と詩乃の体をまじまじと見つめ始めた。

肩から胸、脇腹から腰にかけてまでじっくり舐め回すように見ると、虹架はまたもや顔をにやつかせ、そのいやらしい視線を木綿季と詩乃に送っていた。

「え、えつと……何？ レイン」

「おつさんくさいわよ、アンタ……」

ひとしきり二人の体を見回した虹架は、自身の顎に親指と人差し指を当てて、真剣な表情で何かを考え込んでいた。

そしてその表情はまたニマアつと歪み、いけないことを考えている、といった顔になっていった。

「ねえ木綿季ちゃん、シノンちゃん。メイド服、着てみない？」

「えっ!？」

「め、メイド服……!？」

「うん、うちのお店ね、女の子限定で有料でメイド服試着なんてのもやってるの」

虹架はそう言いながら、テーブルの中央に置かれているメニュー表をひよいと手に取り、ページの一番最後に書かれているメイド服試着サービスの欄を広げて見せて回った。

そのページにはさまざまな種類のメイド服とその料金が書かれていた。女性客限定で30分間300円でメイド服を着られるサービスだ。

メイド服は赤、水色、黄色などお好みで選べる様々な豊富なカラーバリエーション。

種類も数多くあり、スカートの丈が短いパティシエメイド服。メイド服といえばこれ、スタンダードな形のロングスカートランチエスタードメイド服。

一際目立つフリルとゴスロリチックなチェック柄が特徴のギンガムチェックsジャンテイルメイド服など、全てのメイド好きのニーズ

に応えられそうなラインナップが取り揃っていた。

「普通なら有料なんだけど、木綿季ちゃんがたくさん注文してくれたから、今回は無料で貸し出すよ！」

「え、えっと……それをボクたちが着るの……？」

「わ、私はいやよ!!」

木綿季と頬を赤く染め上げながらメイド服の一覧を見つめている。詩乃は詩乃で絶対にそんなものは着ないと、断固拒否の姿勢を崩さなかった。

メイド服を着るのにあまり肯定的でない木綿季たちに「二人共可愛いのにー」と虹架は残念そうな表情を見せていた。

「でも、メイド服なんて着る機会なかなかないよ？」

「うう、確かにそうだけど……は、恥ずかしいでしょう……」

「でも、キリト君たちはメイド服、期待してるみたいだよ？」

虹架が木綿季たちに、男の子達の顔を見てごらんよと促すと、和人は木綿季を、恭二は詩乃の顔を照れくさそうに、そしてちよつと期待に胸をふくらませていそうな表情で見つめていた。

やっぱりなんだかんだ言って、和人も恭二も男の子なのだ。二人は木綿季と詩乃に見つめ返されると、それを誤魔化すかのように手元のグラスを手に取り、ゴクゴクと音を立てて水を飲み始めた。

「……………」

その後少しの間だけ、無言の時間が流れていた。店の中に設置されたスピーカーから流れるファンシーな音楽と、他のお客さんの話し声、厨房から聞こえる調理の音だけが響き渡っている。

やがて、木綿季は何か思い立ったのか、両手を膝の上に当てて、もじもじと照れくさそうにしながら和人とあることを聞いてみた。

「か、和人は……ボクのメイド姿、見たい……の？」

「えっ……………」

木綿季の照れくささがうつつたのか、和人も彼女に聞かれた途端にしどろもどろになり、どう答えを返したらいいのかと考えていた。

まあ率直に言ってしまうと、和人も恭二も「見たい」のだ。自分の好きな女の子のメイド姿だ。見たくないはずがない、それが男という

ものだ。

「きよ、恭二君も……？」

木綿季と詩乃から聞かれると、和人と恭二は恥ずかしそうに無言で首を縦に降っていた。

折角無料なのだから、もつたいたいのだから、こうして好意でサービスを提供してくれるのだから、むしろこつちも応えないといけないだろう。

といったこと正論などは全くなく、二人共ただ単純に下心から来る肯定の返事だった。

「えつと……和人が見たいなら、ボクは……いいよ？」

先程よりもさらに顔を赤くして、木綿季が恥ずかしそうに俯いていた。好きな人のためとは言え、普段とは全く違う服装に着替えるというのは、かなり度胸がいる行為だ。それもメイド服はただでさえ注目を集める。

「シノンちゃんはー？」

木綿季は着るみたいだけどあなたはどうするの？　と言わんばかりに最後の砦を築きあげている詩乃に虹架が詰め寄っていた。

詩乃は頑なにここにいる誰とも視線を合わせようとせず、ひたすらに俯いて視線を泳がせている。私だけは絶対に着ない、誰がなんと言おうと着てなるものですかと、体全体で態度で表していた。

「ここまでできたら着るしかないよー♪」

虹架は詩乃の最後の牙城を崩すべく、こんなに可愛いのが着れるんだよ、みんなにちやほやされるんだよーと、詩乃に対してメイド服の魅力をこれみよがしに話して聞かせていた。

すでにこのテーブルは、もう着るしかないといった空気に包まれていた。和人は木綿季のメイド姿を見たがっているし、木綿季も彼が喜ぶのならと前向きだ。

恭二もなんだかんだで詩乃の晴れ姿が見たいし、虹架もしつこく着よう着ようの一点張りであった。ここまで言い寄られては、一回決めたら中々意見を買えない詩乃も、折れざるを得ない。

別に着て何かを失うわけでもなし、渋々詩乃もメイド服を着ること

に賛同したのだった。

「わかったわよ、着ればいいんでしょ……」

「やったっ♪ さすがシノンちゃん♪」

「し、詩乃……」

「べ、別に進んで着るわけじゃないんだから！ そそのかさされて……仕方なく着てあげるんだからね！」

詩乃はそう言い残し、不服ながらも木綿季と一緒に席から立ち上がり、虹架に案内されそのまま店のバックヤードへと姿を消していった。

女の子三人がテーブルからいなくなったことにおり、ここには和人と恭二、二人だけが残る形となった。

和人にとつても恭二にとつても、互いに数少ない同年代の男子の友達だ。色々と積もる話はあるだろう。

「ず、随分騒がしい子だったね……」

「あれでもALLOでは腕が立つプレイヤーなんだよ。腕前は俺と互角……ぐらいかな」

「え、本当に……？」

「ああ、しかも彼女はあの七色博士の実の姉だからな」

「え……ええええ!!」

和人の周りは一体どうなってるんだ、何でそんなに有名人とつながりがあるんだと、恭二は席を立ち上がり、眉をひそめて驚いていた。

木綿季だけではあきたらず、幅広くいろんなところで女の子をたぶらかして、この天然たらしめ、と言葉にしたかったが、そつと心の中に仕舞っておいた。

その代わりにと言わんばかりに、恭二は軽蔑の眼差しとも言える視線を和人に向けていた。

「……………」

「な、なんだよ……」

「いや、世の中不公平だなあって思ってた……」

「何言ってるんだよ、恭二にも詩乃がいるじゃないか」

俺には木綿季がいるように、恭二にも詩乃がいてくれる。そう言葉

を投げかけられた恭二は、グラスに手を取り、水を一気に飲み干すと自分の今の詩乃との関係を和人に語りだした。

「えっとね、詩乃とは……あれから進展はないんだ」

「え……？」

「まだ互いに想いを伝えていない。ちゃんとした告白も出来てないんだ」

「う、嘘だろ……？」

これだけ親しくしているのに、こうしてデートまでしているというのに、二人はあくまでもまだ付き合っていないという。その事実が和人には信じられなかった。

しかし、告白というものは互いに気持ちがあわかっていても、言葉にするのは難しいのだ。「好き」と二文字、たった二文字。この短い二文字を伝えるには大変な勇気がいる。

もしも断られたら、自分の思い違いだったらといった恐怖心の気持ちもあるため、中々その一歩は踏み込めないものなのだ。

「なあ恭二、君の気持ちもわかるよ。罪の意識があるばかりに……そっから先にいけないっての」

「……うん」

「でもさ、人を好きになるのって、そんなの関係ないと俺は思うけどな……」

「……え？」

和人もグラスを手に取り、グツと水を一気に飲み干し、引き続き恭二の背中を押すべく、力強く安心させるように言葉を投げかけ続けた。

「肝心なのは、恭二がシノンが好きってことだろ？」

「そ、そうなのかな……」

「そうだよ、だから……今度言ってみろよ」

「……そうだね、言うべき時が来たら、言うよ」

「ああ、吉報を待ってるぜ」

和人が不敵な笑みを見せる中、恭二はそれに彼らしい爽やかな笑みで返す。彼が詩乃に想いを伝える、その一歩を踏み込む日は、いつに

なるのかはわからない。

しかし、いつか必ず来るだろう。和人の言うとおり、彼が詩乃のことを好きだという気持ちに、嘘偽りはないのだから。

和人と恭二がテーブルに残されてから15分ほど経過すると、虹架が大変にご機嫌な様子でバックヤードから姿を現し、それに続いて奥から見慣れない格好をした二人の女の子の姿が見えた。

一人は紫に近い腰まで伸びたロングの髪の毛にピンと縦に伸びたヘッドドレスを被り、黒いワンピースにフリルのついた白いロングエプロン。

正統派メイドと呼ぶのに相応しいロングスカートランチエスターメイド衣装を身にまとった木綿季が、照れくさそうにもじもじと指先をいじくりながら姿を現した。

その木綿季に少し遅れて、胸の部分を大きく分け、膝の上までの丈のワンピース。ふりふりの白い可愛らしいエプロン。

そしてなにより注目してしまうのが、腰周りに着けられた焦げ茶色のコルセットだ。これが詩乃のスタイルの良さを強調していた。

「あ、あんまりじろじろ見ないでよ……!」

「えへへ、和人……似合ってるかな……?」

「どう? あたしのチョイスは! 二人共可愛いでしょー!」

普段着を脱ぎ、まるで別世界の人間のようなメイド服に身を包んだ二人の晴れ姿に、和人と恭二はすっかり釘付けになってしまっている。

和人はこれまで以上に、木綿季の家族で、恋人でよかったと心の底から感じていた。

恭二は恭二でこの時見た詩乃の姿を、一生忘れることはあるまい、と心の中で神に感謝の気持ちを送っていた。

何度も言うが、やはり二人は男の子である。

「木綿季……その、すっごく可愛い……」

「え、えへへ……、あ、ありがと……！」

和人は顔を赤らめながら、素直で彼らしい率直な感想を木綿季に送っていた。その言葉が嬉しくなった木綿季は照れくさいながらも満更ではない表情を浮かべていた。

「し、詩乃……」

褒められてご機嫌な木綿季とは裏腹に、詩乃は少しだけ不機嫌な様子でそこに佇んでいた。

乗り気じゃない上に、こんな恥ずかしい格好をさせられて、周りからの視線を集めてしまっている。

彼女にとってこれ以上の恥じらいはないであろう。

「な、何も言ってくれないの？ 恭二君……」

「え、えつと……、に、似合ってるよ？ 可愛いと思う……」

「……もつと気の利いた言葉があるでしょう？ ……でも、ありがと」

口では悪態を吐きつつも、心の中では恭二の口から可愛いと言ってもらった事実が嬉しい詩乃であった。

別に頼まれたから着ただけだ、私は決して乗り気ではない。でも恭二君が喜んでるのなら別にいい。などとツンデレのテンプレのような態度を取っていた詩乃だったが、その満更でもない気持ちは、和人の無粋な次の行動で覆された。

—カシャッ—

突如として、この場にいる全員の耳に、何やらシャッターを切るようなサウンドエフェクトが響き渡っていた。

音の出処は最初はわからなかったが、ほどなくしてすぐにその音の正体は判明した。

「……アンタ、何してんの？」

「え？ い、いやあ……明日奈たちに見せてやろうかなーって……あははは……」

シャッター音の元凶は和人であった。あろうことか恥ずかしい格好をした詩乃の写真を、明日奈や里香といったALOの仲間たちに送信しようとしていたのだ。

和人は撮影したのがばれると、それすぐに保存し、自分の背後にス

マホを隠し、何事もなかったかのように振舞っていた。

が、しかしそれをやすやすと見逃すほど詩乃は甘くはない。表情も不機嫌というよりは、穏やかじゃなくなっており、獲物を摸るスナイパーのような鋭い眼へと変わっていった。

「恭二君、そいつ、取り押さえておいて……」

「わ、わかりましたっ」

今の詩乃に逆らったら命が危ない、そう本能的に感じ取った恭二は豊富なミリタリー知識を活かした近接格闘術である「CQC」を和人に披露していた。

和人も恭二がこんな強攻策に出てくるとは思っていなかったようで、油断していた所為もあり、あっさりと不覚を取ってしまった。

「きよ、恭二、は……放せ！ 放すんだ！」

「……ごめんね和人、僕は詩乃には逆らえないんだ」

今の僕には詩乃を止めることはできない、そう悟った恭二は、哀れむような視線を和人に向け、彼の身動きを完全に封じていた。

無理に動こうとすれば痛みが発する。つまち恭二はそうしなければならぬほどの危機感を、詩乃から感じ取って行動に移していたのだ。

「覚悟しなさい？ キリト……」

「ねえねえシン♪ 何するの何するの？」

詩乃の両手には、メイドが頭によくつけているヘッドドレスと、可愛らしいリボン、そしてキュートな猫耳バンドが握られている。

その手に握られたアイテムを、木綿季が詩乃の傍らから実に楽しそうに目を輝かせて見つめている。木綿季もこういうのは大好きなのだ。

「このバカの頭にくっつけてやるのよ、手伝ってくれないかしら？」

木綿季

「ふふふ、ごめんね和人……♪」

木綿季は詩乃の手から手始めに猫耳を受け取ると、にっこり笑顔を振りまきながら、ゆっくりと和人へと近づいていった。

その笑顔は、今まで見た木綿季のどの笑顔よりも眩しく、そしてあ

る種恐怖を植え付けるような戦慄を感じさせるような不気味さがあつた。

いつもは木綿季が寄り添ってくるのは大歓迎な和人であつたが、今回ばかりは断固としてよつて来て欲しくはなかつた。南無阿弥陀仏。「や、やめろシノン、木綿季、恭二！ お、おいレイン！ 見てないで止めてくれ！」

すっかり周りが敵だらけとなつてしまつた和人は、最後に藁をも掴む思いで虹架に助け舟を求めると、一部始終を見ていた虹架はにっこりと和人に微笑み返していた。

「れ、レイン……」

「ごめんねキリト君♪ こんな面白そうなこと、止められるわけがないよ♪」

「なつ、れ……レイイイイン!?!」

詩乃の怒りを買つてしまつた和人に、慈悲は全くなかつた。

もちろん写真はしっかりと削除され、その代わりに虹架、木綿季のスマホで和人のあらゆる姿を、たくさん撮影されてしまつたということは言うまでもない。

以降、和人は二度と詩乃をからかうまいと、固く心に決意したのであつた。

第65話く新川恭二く

西暦2026年 11月15日 (日) 午後13:20

東京都千代田区外神田 JR秋葉原駅前

「トホホ……」

「フン、自業自得よ」

週末の観光客や買い物客で賑わっている電気街、秋葉原の駅前の入口で、和人が大きく肩を落として落ち込んでいた。

周囲の道行く人々が和気あいあいとしている中、ただひとりだけ暗い雰囲気を漂わせている。

メイド喫茶で詩乃と木綿季、そして虹架にされた仕打ちがさうとうメンタルに大きなダメージを与えていたようだ。

あの後のことと言えば、よく言えば愉快、悪く言えば凄惨たるものだった。

虹架が次から次へと、客へ貸し出すためのメイドグッズをバックヤードから持ち出し、片っ端から和人に装着させていったのだ。

和人も最初は見苦しく抵抗を続けていたが四対一で勝てるはずがなく、早々に抵抗を諦め、なすがままにされ続けていたのだ。

散々写メも撮られまくり、本人曰く心に大きくダメージを負ってしまったのだとか。

「でも和人、こう言っちゃなんだけど可愛かったよ？」

「言うな、むしろ黒歴史だ……」

「いいザマよ、ねえ恭二くん？」

「……え、あ、ああ……えっと、ノーコメントで……」

「……覚えとけよ、恭二……」

事の発端は自分だというのに、何故か和人は恨めしい視線を恭二に向けていた。女性陣にはどうあがいてもかかないっこないと悟ったのか、数少ない男友達である恭二に矛先を変え、毒を吐き続けていた。

「あ、あはは……」

和人からの恨めしい視線を感じながら恭二は「何で僕なんだよ」と心に思いながらも、頭をぽりぽりかきながら苦笑いを浮かべている。少し和人への対応が困っている恭二であったが、今こうしてやっている何の変哲もない友達同士でよくあるやりとりを、こういったことも悪くない、むしろ心地よいと感じている。

以前までやっていたGGOでは和気あいあいどころか、殺伐としていた。スコードロン同士での殺し合い、アイテムの奪い合い。ステ振り、募るイライラ。

かつて通っていた学校も学校で、楽しいことなどまるでなかった。陰口を叩かれ、物を隠され、殴られ、いじめられ続けて、いいことなど何もない。

しかし、今はどうだ？ 自分のまわりにはこれだけ僕と温かく接してくれる友達がこんなにもいてくれる。

詩乃は僕を慕ってくれてるし、和人は意気の合う数少ない男の子の友達だ。その恋人の木綿季ちゃんも、快く元気に僕と接してくれている。

多分あれだろう、今この時感じている感覚こそが「幸せ」というやつなんだろう。父さんからも、兄貴からも、このような気持ちを感じることなどなかった。

ならば、今のこの関係をいつまでも大事にしていきたい。この一生の大切な人たちと、ずっとずっと笑い合っていきたい。それとも贅沢かな、こんなことを感じるのは。

「恭二君、どうしたの？」

上の空気に遠くを眺めながら物思いにふけている恭二に、詩乃が気になって声をかけると「ううん、何でもないよ」と恭二が爽やかな笑顔で返していた。

何を考えていたのか少し気になる詩乃であったが、恭二が楽しそうに笑っているので、別にいいかと思っていた。

詩乃も薄々感じてきているようだ。恭二自身が以前よりも明るく笑えることが出来るようになったことに。

アインクラッド第76層からデス・ゲームに巻き込まれ、ふさぎ込

んでいた自分の心が、少しずつ晴れやかになっていったあの時と同じように、恭二が明るくなっていくのが嬉しく思っていた。

それから四人は一時間ほど行動を共にし、秋葉原の街を散策していった。

レコードやカセットテープなどの骨董品や、かつて莫大な人気を誇ったアーティストのデビューマキシシングルやアルバムを扱っている中古レコードショップ。

蓄音機、FMラジオ、アンプなどの昭和の時代に大活躍した電化製品の修理、買取、販売を受け持っている個人経営の電器店。

かつてテレビが白黒時代から放映していたアニメから、つい最近のアニメまでのグッズを扱っているアニメグッズショップ。

黄色、白、赤の三色のコンポジットケーブルをテレビに直接つないで遊ぶタイプのレトロゲームハードを取り扱っているゲームショップなど、秋葉原ならではの店を転々としていた。

そして道中、目的のPCショップにもたどり着くことができ、和人も昼食の出費で財布のHPを大きくえぐられながらも、なんとか帰りの電車賃を維持しつつ、当初の目的であるPCパーツを購入することができ、ほっと胸をなでおろしていた。

「ギリギリだ……、財布が」

「ご、ごめんね、和人……」

「い、いや大丈夫だ。気にするな、木綿季」

口では大丈夫と言いつつも、微妙に顔が引きつってしまっている。まだ和人の貯金に蓄えはあるが、このペースで出費がかさみ続けると、すぐになくなってしまいうだろう。

木綿季の大食いをどうにかするか、何かバイトをして蓄えを増やさないといけない。

学生ながらにして、早々に財政危機を抱えてしまってる和人は、今後の木綿季との生活が不安になってきていたが、すぐに考えるのをや

めた。

いま対策を講じたところですぐにどうこうなるものでないし、それを考えるのは家に帰ってからでも遅くはないだろうと、もやもやを抱えている今の自分を強引に納得させていた。

「あ、あそこだよ」

恭二が声を発し、指さした方向を見てみると、そこにはショウウインドウにロボットやモデルガンが展示されているのが確認できた。

いわゆる模型店というやつだ。子供でも簡単に作ることが出来るプラモデルや、パーツがやたらと多い玄人向けのガレージキット。

そしてミリタリー好きにもたまらない片手に収まるサイズの拳銃から、両手をしっかり使って握るタイプのライフルタイプの銃まで、様々ま種類のモデルガンも扱っている。恭二がこの日一番に来たがっていた場所だ。

「恭二君も好きねえ……」

「えへへ、伊達に元GGOPレイヤーじゃないからね」

「へえー、ボク模型店なんて始めてだよー♪」

「俺もだ」

和人と木綿季がショウウインドウの模型やモデルガンに目をやっている。「こつちだよ」と恭二が手招きしながら店の中へ誘導している。

二人がそれに気付くとあとを追うように模型店の中へと足を運んでいった。

「おお、たくさんあるなあ」

「すごいー！」

二人が模型店の中に入ると、右手にプラモデルやガレージキットを扱う模型コーナー、左手にモデルガンやサバイバルゲーム用のグッズを売っている、ミリタリーコーナーが広がっていた。

店内も狭くなく、しかしそれほど広くもないが、ゴチャゴチャしているといったわけではなく、巧みに店内のあらゆるスペースを、無駄なく使いきり設置された棚に様々な商品が陳列されている。

客足はそれほど多いというわけではなく、マニアックな店というこ

ともあつてか、混雑はしていなかった。

模型コーナーもミリタリーコーナーも、二十代から三十代の男性客が目立ち、それぞれが懐かしさ溢れる模型、油と埃臭いモデルガンを物色している。

模型コーナーには、昭和四十年代から昭和末期まで活躍していたよ
うな、コテコテのデザインをした重厚感溢れるスーパーロボットの
「超合金シリーズ」と言われる、値段が五桁も六桁もするプレミアがあ
つていられている模型が目に入った。

ボディのデイトールにも拘りが見られ、表面のツヤやスーパーロ
ボット特有の重厚感を見事に再現している。

そしてその隣の棚には昔の大人から、現代の子供まで人気を保ち続
けている宇宙を舞台とした、リアルロボットのお手頃な値段のプラモ
デルが何種類、何十種類と陳列されている。

地球を悪から守る正義のロボットがスーパーロボットならば、ここ
らは人間同士の戦争がテーマになった作品のロボットが多い。

相手の基地を攻め落としたり、作戦に沿ったコンセプトの機体が多
く、ロボットというよりは兵器らしさを感じさせるものがほとんど
だ。

「へえ……父さんが好きそうなのがたくさんあるな」

「ボク、一度こういうの組み立ててみたかったんだよね♪」

「へえ、意外だな？」

「こういうの見てるとワクワクしてきちゃって♪」

そう言いながら木綿季は先程の超合金シリーズの「ダツカンロボ」
の箱を手にとった。

三機の戦闘機が一体のロボットに合体し、地底から攻めてきたドラ
ゴン軍団と戦う、昭和のスーパーロボットの代表格の一つである作品
だ。戦闘機の合体する順番で陸海空それぞれ得意とする地形がある
のも特徴の一つだ。

「おれはこっちの方が好きだな」

「どれどれー？」

和人が手に取ったのはロボットではなく、SLの模型だった。しか

しただのSLではなく、銀河の星と星の間を旅するSF作品「宇宙鉄道555」に登場する全五両編成のSLの模型だ。

いい年をした大人向けに作られていることもあり、列車の車両の内装も拘っており、大きさもそれなりにある。全部まともに組み立てると、全長1メートルを超えそうだ。

値段も勿論宇宙級で今の和人が気軽に手を出せる価格ではなかった。値段の書かれている白いラベルに目を通すと、途端に和人の顔が引きつっていった。

「ま、また今度だな……」

「あはは、そうだね」

和人と木綿季が様々な模型を見ている一方で、正反対のミリタリーコーナーでは、恭二が詩乃と一緒にモデルガンを物色していた。

箱に包まれているものから、白い網のフックに引っかかって展示されているものまで陳列方法は様々で、この手のものが好きな人にとってはたまらない空間であろう。

「いいなあこれ、ほしいなあ……」

「でも高いわよ、私たちじゃとても買えないわよ……」

恭二が目を奪われているのは彼がGGOや昔やっていたFPSゲームで愛用していたアサルトライフルの「FA-MAS」である。

1978年から現代まで、フランス軍で長年愛用され続けてきたアサルトライフルだ。

携帯性を重視しし、他のライフルと比べても軽く扱えるため、銃剣を装着して近接戦闘も行える死角がない兵器になっている。

AGI特化ビルドである彼の、中距離で素早く動きながらアサルトライフルを撃ちまくり、近づかれたら銃剣で迎撃するといったスタイルは、このFA-MASあって確立されていたのだ。

そして今彼が手にしているこのFA-MAS、普通のモデルガンと違い、重量と質感を限りなく本物のFA-MASに近づけ、再現性を高めた商品となっている。

当然値段も高く、学生がほしいと出せる価格ではない。

恭二は右手でFA-MASのグリップを握り、人差し指をトリガー

にかけ、反対側の左手を銃身のハンドガードに当て、GGOでいつもやっていた体制を作った。

右目の視線をリアサイト越しの先に移し、完全に銃と一体化しようとしていた。

「……とと」

一体化しようとしていたが、それは叶わなかった。重さも忠実に再現していたFAMASの重量は、3.7キログラムにもなる。普段勉強漬けでそこまでスタミナがない恭二には、銃撃するための体制を維持するための持続力がなかった。

普段使わない筋肉を使った恭二は大きく息を吐きながら、親父臭く肩のあたりに手を当て「やれやれ」と声を漏らしていた。たった三十秒ほど筋肉を使っただけで、もうすっかり息の根を上げてしまっている。

勉強だけでなく、運動ももう少しやったほうが良いのではないかと、詩乃が心に思いながら適当なモデルガンを手を取っていた。

「少し運動したら？ 恭二君……」

「たはは……、最近はサバゲーもしなくなっちゃったからね……」

「朝のランニングとかなら付き合うわよ？ どうせ私達、家近いんだし」

「そ、そうだね、その時が来たらお願いしようかな」

微妙に歯切れが悪い答えを返してきた恭二の態度から、詩乃はこりや当分運動する機会はないなと悟り始めていた。

仮想世界ではあんなに機敏に動くのに、現実世界ではモデルガン一つ構えるのにも一苦労だ。

半分その男らしくないところに呆れ、もう半分は恭二君らしいやとちよつとだけ安堵の気持ちも抱いていた。

ちよつとだけ弱気なぐらいが彼らしくていい、むしろその分私がしっかりしていけばいいだけの話だ。

詩乃はクスツと笑みをこぼしながら違う種類のモデルガンコーナーへと足を運んでいた。恭二もFAMASを元の場所に戻し、ちよつとだけ名残惜しそうにしながら詩乃のあとを追いかけた。

名残惜しくしても、F A—M A S が買えないという事実には変わりないというのに、である。

アサルトライフルコーナーから移動した二人はひとしきり大きい両手銃コーナーへと足を運んでいた。リボルバーやコルトといったハンドガンと違い、どっしりとした重量感溢れるデザインの銃が目立つ。

狙撃銃スナイパーライフルや遠距離爆撃兵器ロケットランチャーなど、本当にサバイバルゲームで使うのかと言われるようなものまで様々だ。

自分のスタイルの関係上、使う機会がないであろう武器の数々に、恭二も物珍しそうな視線を送っていた。

中には自分の身の丈ほどの長さはあるかというスナイパーライフルまである。

「もし詩乃がG G O に来てたらさ、やっぱりスナイパーライフルだったりするのかな」

「そうかもしれないわね。私は弓使いだし、長距離から相手を一方的に狙い撃てる武器がしつくりくるわ」

「あはは、なら……このあたり物色してみる？」

「そうしましょうか、買うかどうかは別として」

詩乃はそう言いながら、一番手元にあったスナイパーライフルを手に取り、ミリタリー映画などでよく見る狙撃手の見よう見まねで構えてみせた。

右手でトリガーを握り、左手で銃身を支え、左目でスコープを覗き込み、遠くにいる標的を狙い撃つかの如く、スナイパーライフルを構える。

「あってるのかしら？ これで……」

「えっと、あってるんじゃないかな……？」

「でもなんかしつくりこないわね……」

「ははは、弓じゃなくて銃だもの」

「……それもそうね」

そう言うと、詩乃は両手で抱えていたスナイパーライフルを棚に戻

し、他の銃に目をやっていた。

もし私がサバイバルゲームをやっていたら、恐らく狙撃手として、恭二君の援護に回っているのでしょうねと思いつながら、もしかして将来手に取ることになるかもしれない相棒を探していた。

プラスチック製のモデルガンなのでそこまで重量はなく、両手を使えば女の子でも扱えるようなものばかりだったが、それでも詩乃にしっくりくるような狙撃銃は中々見当たらなかった。

「まあ、そんな簡単に見つから……」

長く、重量があるものから、比較的短く、軽めのものまで種類様々なスナイパーライフルが陳列されている棚の端っこに、一際彼女の心を揺さぶるような狙撃銃が置かれていた。

ウルティマラティオシリーズ・PGM ヘカートII。全長138センチ、銃口12.7ミリ口径、装弾数7発、有効射程距離およそ2キロメートル。1994年、フランス軍によって開発され、こちらも現代にいたるまで運用されている現役狙撃兵器だ。

元々は敵兵を狙撃するものではなく、長距離での破壊射撃、嫌がらせ射撃、カウンター狙撃などの運用方法を想定されて開発されたものだ。敵戦車や資材運搬ジープなどを破壊するために用いられている。

そんなヘカートIIのモデルガンを、詩乃は穴のあくほど見つめていた。十八歳未満は購入が禁止されているものだったが、持つだけなら問題はないため、詩乃はそのまま両手で抱え、先程と同じように構えてみせた。

恭二はその様を無言で傍らから見守っていた。

なんだか、詩乃がヘカートを構えている光景は不思議と様になっていた。まるで、詩乃と一緒にいるのが当たり前のような、そのような印象を受けた。

スコープを覗き込んでいる光景は、まるで周りの空気を凍てつかせ、彼女の冷静さを具現化させているような錯覚を覚える。

その詩乃の放つスナイパー独特の、張り詰めた空気、獲物を狙い撃

つための集中力。ただならぬ緊張感を、恭二だけでなく他の買い物客や店員も肌でピリピリと感じ取っていた。

「……いいわ、これ」

「なんか……すっごく似合ってるよ、詩乃」

じつくりとヘカートの感触を体全体で堪能した詩乃は、そつと元あった陳列棚の位置に、同じように陳列し直した。

幼少期の時に起きた郵便局での事件以来、銃火器を見るとPTSDの症状が出てしまっていた詩乃であったが、恭二の必死の協力もあり、今ではご覧のとおりに見ても触っても平気なぐらいにまでなっている。

「これも恭二君のおかげよ、ありがとう……」

「え……い、いや……別に僕はそんな、あ、あはは……」

表では大したこととしてないと謙遜している恭二であったが、トラウマの克服というものはそう簡単に出来ることではない。心の奥底を深くえぐるような過去というものは、脳裏に焼き付いて離れない。

とあるきっかけですぐに思い出し、手が震え、気分が悪くなり、呼吸困難に陥り、何も出来なくなる。

擦り傷、切り傷といった外傷は跡が少し残っても時間が経てば確実に治る。しかし、心の傷というものは、時間の経過だけで簡単に治るものではない。

トラウマのきっかけとなってしまった出来事や物に対して、正面から向き合えるぐらいの心が必要になる。

勿論詩乃も例外ではない。

しかし恭二が銃のこと、ミリタリーのことを心身丁寧に説明し、魅力を優しく少しずつ語り、教えていくことで、ちよつとずつではあるが、銃火器と向き合えることができるようになったのである。

「何かお礼をしないとね……」

「え、べ、別にいいよ……」

「クレイニングゲームのお礼の意味もあるのよ。何がいいかしら？」

詩乃が首に巻いてるマフラーを翻しながら、ほししいものがあつたらなんでもいってと、手を伸ばしながら言葉をかけた。

恭二も最初は遠慮していたが、折角詩乃が好意で言ってくれているのだから、断るのは失礼。

ならばここは快くその好意を受けるといのが礼儀というものだ。第一、断ったところで詩乃は無理矢理にでも何かを買ってしまうことだろう。

「えっと、それじゃあ……ね、どうしようかな」

「あまり高いものはだめよ？」

「わ、わかってるって」

とは言ったものの、特別何か買おうと思つてこの店に来たわけではない恭二は、何を選ぶのか考えていなかった。

欲しいものがあるといえはあるが、どれもこれも大人用で十八歳未満は購入が禁止されているものばかりだ。

この時点でかなり選択肢が狭まつてしまっている。折角ミリタリーコーナーに足を運んだのだ。出来れば銃を買って帰りたい。

しかし彼は拘りに拘りぬくミリタリー好きだ。安い値段のモデルガンで満足しようという妥協の心は持ち合わせていないし、そんな真似をしたらプレゼントしようとしてくれる詩乃にも失礼だ。

つまりそれなりに高すぎず安すぎず、尚且つ思い出に残るものが好ましい。モデルガンではなく、ミリタリーに関するもので、だ。

(そ、そんな洒落たもの、ミリタリーにないぞ!?)

当然の答えだ。軍事関係物を趣味にしたミリタリーに、ティーンズやセレブが喜びそうなイメージの、きらきらとして思い出に残るような洒落たものがあるはずがない。

むしろ宝石やアクセサリーと違い、血と土と油や埃、炎の匂いしかないだろう。それがミリタリーというものだ。

「ねえ、何かないの？ ほしいモノ」

「え、えっと……」

詩乃にずいずいとせまられると、恭二は冷や汗をかきながらも欲しいモノがないかと店内を物色し続けた。

銃がダメなら、そのほかのミリタリーグッズでそれっぽいものをチョイスするしかない。

どうする、何かいいものはないか。サバゲーで使うウェアか？ グローブか？ それともバックパック？

いやいやいや、そんなものどこにお洒落だとかロマンチックなものがあるというのだ。

じゃ、じゃあステッカーはどうだろう、あれなら少しはお洒落とかにならないだろうか？

いやだめだ、デザインがそもそも毒蛇だとか髑髏だとかで、おどろおどろしいものばかりだ。

——あ、あれ？ というより、何で僕は僕の欲しいものに、こんなに頭を悩ませているんだ？

子供の頃からミリタリーと学問漬けな恭二には、女心だとかこういう買い物のセンスだとかいうのは到底わからないものだった。

そのあともしばらく頭を抱えながら店内を見て回ったが、普通の人や女の子と比べても見えている角度が違う為か、ろくにいいものが見つかるといふことはなかった。

「……何もないの？ 恭二君……」

「……えっと、ごめん……何も思い浮かばない……」

「はあ……困ったものね……」

頭に手を当てて苦笑いを浮かべてその場を取り繕うとしている恭二の姿に、詩乃は呆れたのか溜め息を吐き出していた。

こうなったら私が選ぶしかないかなと、重い腰を上げるように、今度は女の子の視点として、今いるミリタリーコーナーの売り場を見て回ってみた。

恭二君は確かに勉強は出来るかもしれない。でも人が何をすればよるこんでもらえるかというところのツボがまるでわかっていない。社会勉強というわけではないが、こういうときはこういうものを選ぶんだよということを、実際に選んでみせて勉強していてももらう。

すると詩乃はミリタリーコーナーの隅っこにある、アクセサリー売

り場にまつすぐ足を運んでいった。

実はここ、先程一度恭二も通りかかったところなのだが、戦争にお洒落なんて必要ない。生きるか死ぬか決まるまで戦い続ける、それが軍人というものだ、と、頑固な上官のように、中年男性のように、華麗にこのコーナーをスルー気味に通り抜けてしまったというわけだ。

色々とずれている恭二を尻目に、詩乃は何かプレゼントできそうなものはないかと棚を物色し始めた。

別にそこまで洒落たものじゃなくてもいい。身につけて恭二君にぴつたりと似合うものをあげられるのであれば、それで構わない。

そう思いながら商品棚と、アクセサリーの類のものがぶら下げられている網棚に目をやり、一つ一つ、ビニール製のパッケージ袋に包まれた商品を手に取っていく。

(ミリタリーバッジか……、この中ではお洒落な方だと思うけど、恭二君にはちよつと似合わないかな)

顎に指を当て、首を斜めにしながら考えていた詩乃は、商品をフツクに戻し、その左隣にあるグッズに目をやった。

銀色のステンレス製のボールチェーンにくくりつけられ、同じステンレスで出来た銀色の金属の板のようなもの。

その板には何やら英字とアラビア数字で文字が刻されており、種類によつて様々な色と違う文字が刻印されたものがある。

そう、軍人が戦死したとき、個人の特定と識別が不可能なほどに死体が損壊していたとき、その識別を可能にするためにぶらさげている「ドックタグ」だ。

詩乃は数あるドックタグの中から、縦6センチ、幅3センチ、厚さ3ミリほどの、何も刻印されていない無地のカーキ色をしたものを手に取り、恭二の方を振り向いて「これなんかどうかしら」と提示してみた。

恭二は詩乃からドックタグを手渡されると、顔の目の前でぶら下げて、まじまじとそれを見つめていた。

「ドックタグ……か」

「そうよ、悪くないんじゃない?」

「あはは、確かに僕らしいっちゃ僕らしい……かな？」

「それじゃあ決まりね、ちよつと待ってて」

詩乃はそう言うのと、恭二から再びドックタグを受け取り、そのまま店の奥にあるレジカウンターへと足を運んだ。

カウンターで待機していた店員は詩乃から商品であるドックタグを受け取ると、バーコードをスキャンするとともに「文字や数字が刻印出来ませんがいかがなさいますか？」と質問してきた。

詩乃はそう聞かれるのがわかっていたかのように「お願いします」と応え、店員から紙のようなものを受け取り、それに何やら立てつけられているボールペンで書き込んでいった。

数歩離れたところからその様子を見つめている恭二も、大体察しがつきつつも、何しているんだらうと首をかしげている。

やがて会計を先に済ませた詩乃はドックタグと紙を店員に手渡し、レシートと整理券を受け取り、そのまますぐ近くにあるサービスカウンターへと足を運んでいった。

それから五分ほど時間が経過し、先程詩乃が買ったドックタグを店員がカウンターの奥から持ってきて、整理券と交換する形で詩乃に手渡した。

ドックタグに刻印された文字を確認すると、出来栄えに満足したのか詩乃は笑顔になり、軽く店員に会釈をすると、先程から同じ場所で一歩も動いていない恭二のもとへと戻ってきた。

「おまたせ、恭二君」

「ううん、それにしても時間かかっただね？」

「ええ、ちよつとね。……はい、これ」

詩乃にドックタグを差し出されると、恭二は「う、うん」と返事を返しながらそれを両手で受け取った。

そして先程までは無地で真っ平らだったドックタグの、表面に刻印されている文字をまじまじと見つめていた。

上から下まで五行分刻印出来るそのドックタグには上からこう刻されていた。

To Spiegel.

「え、えっと……こ、これは……」

「何よ、気に入らないっての？」

「い、いや……そんなことないよ」

慣れない自分へのプレゼントと、ドックタグに刻された内容に恭二はどぎまぎしてしまっていた。

ALOのときもそうだったが、どうも人からものをもらうという行為に未だに慣れない。

嬉しくないということはないのだが、照れくさいというか、背中がムズ痒いというか、歯が浮つくというか、そのような感覚を覚えてしまうのだ。

「なら、もつと喜びなさいよ……」

「う、うん。そ……その、ありがとう……」

「どういたしまして」

五千円もはたいてゲットしてくれたぬいぐるみに比べたら、決して値段は届かないかもしれないが、詩乃が詩乃なりに考えてプレゼントしたものだ。恭二も嬉しくないわけではない。

表情もだんだんと自然な笑顔になり、素直に彼女からのプレゼントが嬉しいといった様子だ。その笑顔をみて、思わず詩乃にも笑みがこぼれていた。

「ねえ、つけてみせてよ」

「う、うん……」

恭二はそのまま詩乃の言葉に従うように、自身の首に先程受け取ったドックタグのボールチェーンのロックを外し、喉元から首全体を囲うようにし、うなじの位置でチェーンを止めると、それを首元からぶらさげ「どうかな……」と詩乃に感想を求めた。

「……うん、いいんじゃないかしら、似合ってるわ」

「そ、そうかな……、ありがとう……」

「うふふ、これから出かけるときは、それつけてきてね？」

詩乃がご機嫌で両手を背中の中位置で組みながら新たに要望を出す

と、恭二は少しだけ照れくさそうにして「な、なるべくつけてくるよ」と微妙に濁した答えを返した。

「なるべく、つてのがちよつとひつかかるけど……まあいいわ」

「あはは……。あ、そういうえば知ってる？ ドックタグって戦死者の死体の損壊が激しくて、識別が難しいときに判別に使われるんだ」

「知ってるわよ、でも今の時代戦争なんて起きないし、ファッションアイテムとしても意味合いの方が強いんじゃないかしら？」

「……それもそうだね。今更戦争なんて起きるはずもないか」

ドックタグの本来の使用意図を知っている恭二は少しだけひつかりを感じていた。別に詩乃にそういう意図があるとは微塵にも思っていない。

むしろ彼女からのプレゼントだ、物凄く嬉しい。ただ、ただなんとなく、嫌な予感がしたのだ。

このドックタグをつけることによって、詩乃が自分の元を離れていってしまうのではなく、自分の方から詩乃の元を離れていってしまうのではないかと。

根拠は何もない、ただ悪寒がしたただけだ。頭の片隅で、ドックタグの本来の使用意図を思い出しただけにすぎない。

別にこれから自分の周りで実際に戦いがおこるわけじゃない。あととしたら仮想世界、ALOでの話だろう。種族間のPVPが主のゲームだから、きつとそつちのことを気にしてたんだろう。

「ははは、考え過ぎかな……」

「どうしたの？ 恭二君」

上の空で考え事をしていた恭二に詩乃が声をかけると、恭二は視線を彼女のいる方に戻し「なんでもないよ」と平静を装って返事を返した。

「さてと、そろそろ和人たちと合流しようか」

「あ、そうね。あつちはあつちで何か買っているのかしらね」

「ははは、どうだろうね。彼……お金もうなさそうだったし」

「わかんないわよ？ あの子、今までずっと我慢してたから、また何かねだってるかもしれないわ」

「あはは、そうかもね」

そうさ、きつと杞憂だ。考え過ぎなだけだ。この時間を大切にしよう。

詩乃や和人、木綿季ちゃんがいるこの時間を、いつまでも大切に……。

第66話くどったんばったん大騒ぎく

西暦2026年 11月15日(日) 午後21:45 アルヴ
ヘイムオンライン 新生アインクラッド第40層迷宮区フロア

「ユウキ！ スイッチだ！」

「了解！ キリト！」

キリトのスイッチの掛け声とともに、ユウキが攻守を入れ替える。入れ替わったユウキは黒紫色に光り輝く自慢の愛剣「マクアフィテル」を片手に握り締め、颯爽と前方に駆け出し、キリトと入れ替わり、グリフィンのような姿をしたモンスターに斬撃を浴びせていく。

二人が今足を踏み入れているのは新生アインクラッド第40層の迷宮区だ。その内部はまるで古代マヤ遺跡を思わせるような造りとなっている。

壁や床、はたまた天井も緑がかった灰色の石レンガで造られていて、ところどころヒビが入っていたり、朽ち果ててボロボロになっていたり、苔がびっしり生えていたり、現実世界にある世界遺産の遺跡そのものようだ。

「せやあぁっ！」

ユウキの気合の入った雄叫びとともに、マクアフィテルが白く光り輝く。通常の斬撃を縦、横と二回放った後、四連撃ソードスキル「ホリゾンタル・スクウェア」を発動させて、グリフィンにダメージを与えていく。

ユウキの剣を体に浴びたグリフィンは、赤いダメージエフェクトを表面に浮かび上がらせながらも、耳をつんざくような鳴き声を上げ、自身のHPバーをレッドゾーンに突入させ、自分を痛めつけたインプの女の子に、怒りをぶつけるかのように襲いかかる。

『KISHA A A A』

ソードスキルの硬直で動けなくなっているユウキに、グリフィンが雄叫びを上げながら、白い大きな翼をはためかせ、前足の爪を光らせ、

切り裂こうと突進気味に距離を詰めてくる。

しかし、動けないはずのユウキは体をゆらりと横にずらしながら、反対側の左手でモーションを起こしナツクル系ソードスキル「ビートアツパー」を発動させ、上体を前のめりにかがませ、グリフィンの攻撃をいなし、尚且つ腹部に重たい一撃をお見舞いさせた。

飛びかかりながら大きくダメージを負ったグリフィンは、勢いをそのままにユウキを通り過ぎ、後方で待機しているキリトのいる方向に、きりもみ回転をしながら吹っ飛んでいった。

「はああああっ！」

キリトはこちら側にグリフィンが吹っ飛んでくることを、予め予測していたかのごとく、すでに飛んでくる軌道上に腕をまっすぐ伸ばし、自分の剣の切っ先を置いていた。

聖剣エクスカリバー、黄金色に輝くその刀身にグリフィンが当たると、まるでケーキにナイフを入れたかのように、グリフィンの身体がキレイに真っ二つに斬り裂かれていった。

斬り裂かれたグリフィンの身体は、そのまま空中で放物線を描きながらHPを全損させて、青白く光り輝きながら爆散していった。

中ボスクラスのこのグリフィンを倒した今現在、すでにこの迷宮区に足を踏み入れてから一時間半が経過しており、踏破割合は全体の九割ほど完了した具合だ。

「ナイス連携だ、ユウキ！」

「へへへ、キリトもね♪」

キリトとユウキは手にしていた武器を鞘に収めると、お互いに距離を詰め、パチインといういい音を迷宮区内に響かせながらハイタッチを交わした。

そして目の前の視界にはグリフィンを倒したことで手に入った経験値、ユルド、ドロップアイテムのリザルトウィンドウが表示されている。

二人はその表示を確認すると、それを左手でタップしてメニューを閉じ、後方から来る仲間が自分たちを追いかけてくるのを待っていた。

「おっそいなーテツチたち……」

「……というよりだ、俺たちが先行しすぎなんじゃないか？ リズやクラインに大目玉くらうぞ？」

「そんなこと言われても……、スリーピング・ナイトが揃うの久々だから、ついつい嬉しくなっちゃって……」

「まあ、気持ちはわかるけどな」

キリトたちが会話を交わしていると、何やら十数名ほどの足音が、遠くから鳴り響いてくるのがわかった。

遺跡の形状をしたこの迷宮区内には、その音が隅々まで響き渡り、耳を済まさなくてもよく聞こえている。

やがてその足音はだんだんと大きくなり、キリトたちのいる位置から十数メートル手前というところで走る音はやんだ。

そこにはスリーピング・ナイトを含む、総勢十四名のプレイヤーがズラリと並んでこちらに歩を進めてきていた。

「おいキリの字！ 俺様たちを置いてどんどん先にいつちまうんじゃねーよ！」

「全くよ本当に！ アンタたちが一番早いんだからちよつとは他のメンバーにも気を使いなさいよ！」

江戸時代の日本でよく見られる赤い着流しのような装備を身にまとったサラマンダー、クラインがキリトに詰め寄ると、そのあとから追撃をするかのように、丸い形状をした盾と、銀色に光り輝くメイスを手に持ったレプラコーン、リズベットが先行していたキリトたちにクレームを出していた。

「ははは、すまんすまん」

「全くよう……折角みんなで攻略を楽しんでるんだから、お前らだけ先に進んじまったら意味ねーだろうがよう」

「ご、ごめんねクラインさん。みんなが揃うの久しぶりだったから、嬉しくてついはいしやぎすぎちゃった……」

詰め寄られたキリトにフォローを入れるかのように、ユウキが間に入りクラインとリズをなだめていた。

キリトの独断先行はいつものことだったが、ユウキにそう言われる

と、何故か言い返す気にならず、クラインは出過ぎた行動を許してしまっていた。

「ユウキちゃんはOK、キリの字が悪い」

「何でだよ！ 不公平だろ!？」

キリトが男女不平等だろとクラインに訴えると、二人の間で取っ組み合いが始まった。

互いに両手をつかみ合い、手四つの形で力比べをし、何だかよくわからない譲れないもののために、意地の張り合いをしている。

「ふふふ、剣術ではお前さんになわなないかもしれないけどよ、こうやって組んじまえば俺様に分があるんだぜ？」

互いに力比べをしていると、瞬時の判断でクラインが身をかがめ、キリトの懐に体を潜り込ませた。

そしてキリトの衣服の腰のベルトをがっちり両手で掴み、何やら技をかけようとしている様子を伺わせる。

「お、お前またプロレスの技かつ、同じ手が俺に二度通用するとても……」

「ふふふ、あめーぞキリの字よう！」

クラインは、以前現実世界で和人にプロレス技をお見舞いした時のように、寝技や組み技に繰り出すのかと思いきや、ベルトを掴んだ両手に力を込め、自身の重心を低くし、掴んでいる手を振りほどこうとしているキリトの力を利用し、思い切り手前に引っ張った。

「……………え？ おわっ!？」

急に引っ張られたキリトはたちまちバランスを崩し、クラインに引っ張られるままその方向に投げ飛ばされた。

宙を舞いながら、キリトは一瞬何が起こったんだと背中に氷柱を突っ込まれたような表情を見せて、そのままドサツという音とともに仰向けに地面に寝転がっていた。

「しよーぶありいー!」

キリトが体を地面につけると同時に、リズベットが右手に握っているメイスの鎚の部分を、クラインの立っている方向に向けていた。

まるで大相撲の取り組みで、勝った力士に行司が軍配を差し向ける

かのように。

「ただいまの決まり手は上手投げ、上手投げでクラインさんの勝ちー！」

ユウキが楽しそうに決まり手を周囲に声で伝えると、クラインが本物の力士になったかのように、その場でそんきよの姿勢をとり、右手でてがたな手刀を切る所作を見せた。

キリトはキリトでなにがなんやらといった表情で、事の成り行きを倒れながら見守っていた。

「どんなもんだいキリの字よう！　がっはっはっは！」

「お前、どこで覚えたんだよそれ……」

「ああ、今大相撲九州場所がテレビでやっててよ、その見よう見まねだ」

「……相変わらず影響されやすい男だな……」

「うるせいやい！　とにかく今回は俺様の勝ちだかな！」

「はいはい、まいったよクライン関……」

クラインが勝ち誇っていると、後方からまたゾロゾロと残りのメンバーが歩きながら近づいてくる。

残りのスリーピング・ナイツのギルドメンバー六人、アスナ、ジユン、シウネー、ノリ、テツチ、タルケン。

そしてどこのギルドにも属していないリーファ、シリカ、シノン、シュピーゲル、フィリア、ストレアがそろそろと現れた。

「す、すごいですね、ク、クラインさん……」

「ははは、全く、リーダーの友達にはいろんな人がいるんだな」

オドオドしながら話すのが特徴の、メガネをかけたレプラコーンの青年タルケんと、筋骨隆々なエギルに負けないぐらいの巨漢のノーム、テツチがパーティの賑やかさに感想を述べていた。

そう、この日は新加入したキリトとアスナも含め、スリーピング・ナイツのギルドメンバーが全員そろい踏みなのだった。

ミドルレンジが得意な槍使いのタルケン、ギルド内で一番硬く、タックの役割を担うテツチもようやくログインすることができ、大変な賑わいを見せていた。

そしてこの日、少しずつ攻略が進んでいった第40層の迷宮区
の最上層を一気に踏破してしまおうと、ギルドリーダーであるユウキ
が、見切り発車にも近い提案を出したのだ。

いつぞやのイベントバトルの時もそうだったが、この一見無謀とも
言える提案に反対する者は誰ひとりいなかった。

ユウキの性格はみんな熟知しているし、このメンバーでなら苦戦せ
ずに最上層の最奥までたどり着けられる自信もある。

反対するはずがない。

更にはジユンの「折角だからみんなも誘おうぜ！」の一言により、ク
ラインを初めSAOサバイバーの面々にも招集の声がかかったのだ。

少数精鋭強豪ギルドであるスリーピング・ナイトと、全員超のつく
ほどの実力者集団である元SAOサバイバー。こんな連中が集まっ
ているのだから、攻略が成功しないはずがない。

むしろ、攻略がおまけで皆でワイワイ楽しむ方が真の目的といつて
も過言ではなかった。

SAOサバイバーのおかげもあり、元病人の集まりだったスリーピ
ング・ナイトにも、新たに他のプレイヤーとの交流という文化が加
わった。

何もかもが刺激的だった。クラインのような破天荒な人もいれば、
シリカのように心優しい子もいる。

沈着冷静なシノン、天然お姉さんのストレア。他にも各々強烈な
キャラクターをもった面々が揃っているこの環境は、スリーピング・
ナイトに新しい風を吹き込むには十分すぎた。

「打ち上げのとき以来じゃないですか？ こんなに人が集まるのは」
「そうですね……、あの時、みなさんには大変にお世話になりました
……」

つい一昨日、無事に今学期の期末試験を終わらせたリーファが、金
髪のポニーテールを揺らしながら口にする、清楚という言葉が一番
似合う、おっとりしたシウネーが一年前のイベントバトルの時のこと
を思い出していた。

自分たちをボス部屋に活かせるために、身を挺してシヤムロックの

メンバーを足止めしてくれたこと。

全員がスリーピング・ナイトに協力してくれたこと。そのおかげでイベントボス撃破に成功したこと。

スリーピング・ナイトの面々にとって、ここにいるメンバー全員、感謝してもしきれないぐらいだった。

一応、表向きでは打ち上げという形で感謝の気持ち伝えはしたが、正直一回こっきりの食事会だけでは納得いっていなかった。

しかし、損得ではなく「義」によって動いたSAOサバイバーの面々は、そんなことちつとも気にしてはいなかった。

みんなキリトの、アスナの大切な人たちだからこそ、協力に買っただけだ。

「お気になさらないください、シウネーさん。俺様たちは、義によって助太刀に入ったままでです。損得勘定なんかこれっぽっちも考えませんよ」

斜め四十五度の角度で、自信の顎に手を当て、内心「決まった」と思いながらキザなセリフを並べているクラインに、リズベットを初め周囲のメンバーは呆れたといった表情を向けていた。

シウネーもシウネーで、詰め寄ってきたクラインの対応にどうしたらいいかわからず、すっかり困り果てており、周りのメンバーに助けてと言わんばかりに視線を送っている。

「アホなことやってないで、さっさと先に進むわよ！」

クラインの頭に、バコツというきつい音とともにチョップでの一撃をお見舞いしたりズベットが、先を急ごうとはやし立てる。

当たり所がよかったのか悪かったのか、シバかれた箇所を痛そうに抑えながら「何しやがる！」と痛みを訴えていたクラインであったが、その悔しさが周囲に汲み取られることはなかった。

その騒がしいやりとりに、スリーピング・ナイトを初め、周囲に笑い声が交差されていた。誰も誰も、一人一人が今回の攻略を楽しんでいる。モンスターと戦うだけがゲームじゃない。

こういった仲間同士でのなんてことのないやり取り、ちよつとしたふざけあい、冗談の言い合い。

それら含めての遊びなのだ。もしもここがかつてのSAOだったとしたら、こんなことをしている余裕はないだろうが、そうじゃない。ALLOはデスゲームじゃない、あの頃とは違う。これこそが、本当にゲームを「楽しむ」といったことなんだ。

「ねえシノン?」

「何かしら? シュピーゲル」

男アバターにもかかわらず、中性的な外見をしているシュピーゲルがシノンに声をかける。肩の下あたりまで伸びていた長ったるかつた髪の毛は、ヘアバンドを使ってまとめられ、リーファと同じようなポニーテールのヘアスタイルになっていた。

「…………いや、やっぱりなんでもない」

「な、なによ…………気になるじゃない」

言葉を濁したシュピーゲルの態度に、ケツトシー独特の猫耳をピクツと動かしながら、シノンが若干煮え切らない様子を見せている。

「気になるじゃない」と言いつつも、シノン自身も彼が何を言いたいのか気付いていた。そしてシュピーゲルが、新川恭二が以前と比べて明るく、少しずつ活発な男の子になってきていることにも。

今日だって自分のためにクレーンゲームでぬいぐるみをゲットしてくれたし、最近では以前と比べて何かと気を使ってくれている。

いや、前からも気を使っていた。しかしそのベクトルが違うとでもいうのだろうか。イマイチ的を射らないその態度に、ヤキモキしていたこともあった。

でもここ最近はどうだろう、お洒落なお店にも連れて行ってくれるようにもなった。口調も以前よりも柔らかくなった。少しずつではあるが、恭二は女心が、詩乃の気持ちが変わってきたのだ。

「えへへ、ほら…………行く? キリトたちに置いていかれちゃう」

シュピーゲルが指をさし、その方向にシノンが目線をやると、迷宮区内の奥の方でユウキが「レッツゴー!」と元気よく先導している様子が見て取れた。

そのあとを続くようにキリト、アスナが続き、そのあとをスリーピング・ナイツ、そしてSAOサバイバーが列をなして進んでいった。

一人一人が歩くたびに、革製のブーツが地面を踏む音、金属製の鎧のパーツ同士がこすれる音が不規則に鳴り響き、ダンジョン内の隅々まで響き渡る。

正に冒険者の大行列といった光景だ。

「パパ、この最上層はもうほとんど踏破しています。あとはボス部屋まで進んでいくだけですよ！」

お人形ほどの大きさのナビゲーションピクシーであるユイが、アスナの懐からひよいと顔を出し、きらきら煌くエフェクトを舞い上げながら、颯爽と飛び出してきた。

彼女の言うことをそのまま受け取るとするならば、もうこの階層に目立ったエネミーモンスターはおらず、このままボス部屋があるエリアまで進めば、マッピングは完了、ということだ。

「本当なの？ ユイちゃん」

「ハイママ♪ パパやユウキさん、ママたちの活躍で、第40層最上層のエネミーの駆逐はほぼ完了です！」

「よし、なら誰が先に扉までたどり着けるか競争だよ！」

ボス部屋前まであと少し。この情報を知ったユウキは我先にと一目散にダンジョン奥へと軽快に駆け出していった。

「あ、こらまでユウキ！ズルいぞ！」

「へへーんだ、こういうのは早い者勝ちだもんねー♪」

フライング気味に駆け出したユウキに負けじとそのあとをキリトが追いかけていくと、それに感化されたかのように、ジユンをはじめとしたスリーピング・ナイツのメンバーが一斉に走り出した。

重鎧と身にまとったジユンとテツチのガツシャンガツシャンという金属音がやかましく響き渡る。

「俺様たちも急ぐぞー！」

心はまだ若者でありたいクライインも触発されたのか、大股開きでおっさんくさい走り方でキリトたちの後を追う。

リズベツトとシリカも置いていかれまいと必死に地面を蹴った。そこにひと呼吸遅れてストレアも慌てて追いかける。

「あ、こらー！アタシをおいていくなー！」

「……あら？　フィリア、あなたは急がないの？」

大体のメンバーがボス部屋前まで走り出した一方で、シノンには急ごうとしないフィリアに視線を移していた。

それに気付いたシユピーゲルも一体何なんだ？　と言いたげに、シノンと同じ方向へと視線をやる。

その先にはただ一人最後尾でこの迷宮区内に隠されているお宝を手に入れようと奮闘している、スプリガンの少女フィリアの姿があった。ダンジョン内の隅から隅までその鋭い眼を光らせている。

「ふふふ、急ぐもなにも、こういうところにお宝が眠っているものなんだよ？」

「あ、呆れた……、置いていかれちゃうわよ？　本格的に……」

シノンが指をさすと、先陣組はどんどん奥へと小さくなっていく様子が見て取れる。

しかしそれでもおかまいなしに、トレジャーハンターの血が騒ぐせいか、フィリアはアイテム探知魔法「サーチャー」のバフ効果が無効にならないように常時唱えつつ、スプリガンにしか見えない宝箱を探していた。

「大丈夫大丈夫、ちゃんと追いかけるから！　あ、あそこに宝箱みつけ♪」

「……まったくしようがないわね……、先にいきましょ、シユピーゲル」

「え、い、いいのシノン？　彼女ほったらかしで……」

「いいのいいの、適当なアイテムの一つや二つ見つけたら追っかけてくるわよ」

シノンがそう言い残してずいずいと先を急ぐと、シユピーゲルはフィリアのことが気がなりつつも、そそくさとシノンの後を追いかけていった。

そしてただひとり、マイペースローペースで迷宮区内の探索を続けているフィリアだけが、ポツンとレイドの最後尾に取り残されていた。

「私から言わせればもったいなさすぎるわよ、こういうところにももの

すごいお宝が隠されてることが多いってのに……」

サーチャーのバフ効果によって隠された宝箱が見えるようになり、フィリアの視界には、彼女にしか見えない茶色の、いかにも宝箱らしい宝箱が写っていた。

宝箱には当然ロックがかけられていたが、トレジャーハントを得意とするフィリアにとって、こんなロックを解除するのは朝飯前。

「ふんふーん♪」と随分な上機嫌で鼻歌を交えながら、慣れた手つきで鍵開けのスキルを発動させると「ガチャ」という何かのロックが外される音が聞こえてきた。

「そんなに慌てていっても、あまりいいことはないってね♪ キーて、お宝ちゃんごたいめーん♪」

お宝を独り占め出来ることに喜びを感じつつ、フィリアはなんの警戒もなしに宝箱に手をかけた。

しかしこの時、フィリアはトレジャーハンターにとって、最も大事なことを、鉄則を忘れてしまっていた。

宝箱に仕掛けられてるトラップは何も鍵だけではない。

下層へ落ちる落とし穴。矢が飛んできたり爆発したりするダメーシトラップ。

強いモンスターが召喚されたり、毒ガスが吹き出る状態異常トラップなど様々なパターンで用意されている。

もちろんフィリアもこれらのことは十分に熟知している。SAO時代から長い間レアアイテムを探し求め続け、当然トラップのことも頭の中に入っている。

いや、入っているはずだった。

油断、この二文字のために、フィリアは不覚を取ってしまった。いつもならば二重三重に仕掛けられている可能性を考慮して、トラップを見破り、解除していることだろう。

しかし今回に限って、久しぶりの大人数パーティで浮かれていたこと、みんなに置いていかれて少しばかり焦っていたこと。

そして何より、トラップ解除を面倒臭がったこと。これが何より致命的だった。結果、フィリアは見事に宝箱のトラップに引っかかって

しまったのだ。

油断、慢心とでも言えばいいのか。

そして、悪いことは重なるというのはよく言ったもので、よりにもよってファイリアが引き当てたトラップは、ALOに存在するトラップの中でも最悪と呼ばれている「ミミック召喚」というものであった。

「ちよ、ちよつとまって……嘘でしょ……っ」

目の前の現実が受け入れられずに、ファイリアはただただ禍々しく変形している宝箱に戦慄していた。

木材で出来た部分はバキバキという破壊音を響かせながら砕けていき、中から黒いモヤのようなものが広がってきた。

やがてそのモヤは段々と獣のような、悪魔のような、はたまた害虫のような禍々しい形状を生成していき、やがてその形が出来上がると、目の前に佇んでいるファイリアに向かって威嚇の態勢を取っていた。

The ^死Death ^擬Mimic ^態の固有名を持ち、石レンガで出来た迷宮区の通路のほとんどを埋め尽くすほどの巨大さを誇ったミミックは、ズリズリと自分にまわりついていてる宝箱の破片を引きずりながら、ファイリアに向かって進撃を開始した。

「や……やめてえええ！ こつちこないでえええッ！」

奇声にも近い悲鳴をまき散らしながら、ファイリアは一目散に仲間が走っていったほうへと必死で地面を蹴り、全力で逃げていった。

ミミックのHPバーはたったの一本しかない。これだけ見れば大したことないと思いがちだが、実はそうもいかない。

このミミックの攻撃パターンは、ただ両前足の爪のようなものを振りかざしてくるだけの単調なモノとなっている。

しかし問題はそこではない、問題はこの攻撃に即死効果の状態異常が付与されていることにある。

ちよつとでも攻撃がかすってしまうものなら、たちまち即死効果でリメインライト化という、質が悪すぎる仕様になっているのだ。

ゆえに、ファイリアは早々に戦意を喪失し、仲間たちがいる迷宮区の奥へと逃げ込んでいったというわけだった。

「じよ、冗談じゃないよ！ ミミックなんて私一人じゃ倒せないってー！」

ズリュズリュという音をたてながら巨体をにじり寄せてくるミックの見た目は、もはやミックというよりはスライムのような形状になっている。

大きいからといって動きが遅いとかそういうわけでもなく、むしろその巨大尚且つ軟体にも近い特徴のおかげで、来る道中障害物などを破壊しながらも、速度を落とすことなくフィリアを追跡することが出来ていた。

フィリアはスプリガンが得意とする、ハイド魔法の存在を忘れるほど冷静さを失い、ひたすらにキリトたちが進んでいった方向へと、ただただ走り続けた。

同日同時刻 新生アインクラッド第40層 ボス部屋前

「よし、マッピング完了だ」

左手でフロア内のマップを表示させているキリトが、第40層迷宮区の全てのエリアを踏破したことを知らせた。

このままボス部屋に突入し、一気にボス討伐というのも提案として挙げられていたが、今日のとりあえずの目標はボス部屋までの到達だったということもあり、ひとまずは目標達成ということにしており、また後日みんなで討伐しようということではままとまっていた。

「みんな、お疲れ様ー♪」

一番最初に扉の前まで到達したユウキが他のメンバーに労いの言葉をかけると、一時間半以上もの間、迷宮区の攻略につきつきりだった面々に疲労の様子が見て取れた。

その中でも一際疲れている様子を見せているのが、この中で一番の年長者でもあるクラインであった。

首と肩をポキポキとならし、腰に手を当てながら「ああく………」と

息を吐き、なんともおつきさんくさい仕草を繰り返していた。二十九なので十分おつきさんなのだが。

「なんとか消灯時間までに間に合ったあ……」

「本当ですね……、間に合ってよかったです」

「今回は先生にどやされずにすみそうだな……」

ジュンとシウネーたち、入院組が消灯時間の22時までに目的を達成できたことに、ひとまず安堵の息を漏らしていた。

前回プレイしたハロウィンイベント、三人はその時大きく消灯時間をオーバーしてまでALOをプレイしてしまったことで、先生や看護師たちに大目玉を食らってしまっていたのだ。

そして今度消灯時間を過ぎるようなものなら、退院するその日までアミユスフィアを没収しますとまで言われてしまう始末だ。

なので、冒険を楽しんでいる傍らで、実は内心なんとか消灯時間までに合わせたい、間に合うかなといった焦りの気持ちもあったに違いない。

「よつと……」

ジュンたちが安堵の息を漏らしている中、ユウキがアイテムポーチから青く透き通った回廊結晶を取り出し、今いるこの最上層の地点を場所登録し、また再びアイテムポーチに結晶を仕舞った。

これにより、いつでも何人でも好きなタイミングでここに戻って来れるというわけだ。

「目標達成だな、もう遅いし、今日はここまでにしよう」

今日の目標達成をこの場にいるメンバーに伝えると、キリトは大きなのびをした後、その場にあぐらをかいてくつろぎ始めた。

「そうしよつか♪ みんなありがとね、おかげでここまでこれたよー」

ユウキが明るく無邪気な笑顔を振りまきながら、今日手伝ってくれたメンバーに感謝の言葉を伝えると、その場にいる全員が片手の親指を立て、サムズアップする形でユウキに返事を返す。

それはすなわち、今日ここまで一緒に冒険したことが、楽しいと感じたからこそその返事だった。

その光景をみたユウキは「えへへ♪」と上機嫌になり、改めてボク

は最高の仲間たちに囲まれているなど、幸せを感じていた。

「んじやあ、次の週末同じ時間に、またアルンの転移門広場で待ち合わせってことで、いいかな?」

「おうよ、平日は厳しいけど週末なら俺様もばっちり参加出来っからよ!」

「やつぱりお仕事忙しいんですか? クラインさん?」

片手にALLOで一番性能のいいロッド「世界樹の枝」を握り、全員に回復魔法をかけ終わったアスナが、ここ最近のクラインの多忙さに質問を投げかける。

「そうなんだよ、年末が近いせいか、クライアントが結構無理難題を言いやがってよう。現場の人間の気持ちも考えやがれってんだ」

「でもそれでお金もらってるんでしょ? なら頑張りなさいよね、社・会・人♪」

腕を組んで自分の働いている会社への不満を漏らしているクラインの肩に、リズベットが肘をグリグリ当てこすりながら野次を投げかけた。

「うるせえやい! 畜生……俺様も学生に戻りたいぜ……」

「でもメリットもあるだろ? 空いた時間は自分のために使えるし、働いているからお金もあるし」

「そりゃあ……蓄えはあるけどよう」

クラインも同じようにあぐらをかいて地面に腰を下ろすと、わりかしMMOではタブーとされている、リアル事情の話しが持ち出された。

クラインとしては別に周りにバレて困ることでもないし、むしろ自分の愚痴だとか聞いてもらったり、理解してもらったりしてくれた方が助かるので、他の面々と比べてもわりかし情報をオープンにしているのである。

「蓄えか……、僕もちよつとバイトしないときついかもしれないな……」

今日、秋葉原で現実のお金を散々散財してしまったシュピーゲルが、困った表情をしながら眉をひそめている。

父親からの仕送りだけで生活している彼にとって、突発的な出費は死活問題となる。

クレーンゲームの景品を取るためだけに五千円というのはあまりにもでかい出費だ。このままでは生活費に打撃が来てしまう。

そして彼の場合、親にVRMMOを遊んでいることは内緒にしている。家賃、電気ガス水道代などの光熱費、食費、テキスト代、そして毎月の接続料やプロバイダ料金。

働いていない彼にとっては、結構大きい出費の連続だ。

「俺もだ、誰かさんのおかげでな」

キリトがぶつくさいいながら、その視線をユウキに向けると、ユウキは彼から目をそらし、かつすかすの口笛を吹きながら「なんのことかなー？」とでも言いたげな雰囲気をかもしだしていた。

彼の出費の一番の原因であるのにもかかわらず、だ。

「またヤツの世話になるか……ちよつと癪だけど」

「ヤツって……菊っ、クリスハイトのこと？」

「ああ、いずれにせよ、このペースだと今月中に懐がすつからかんなっちゃうからな」

キリトのいう「ヤツ」というのはクリスハイト、菊岡誠二郎のことである。以前からも仮想世界についての調査や取材などを受け、様々な情報提供や協力を要請されている。

キリトは彼からの依頼をこなし、バイト代と称して報酬を受け取っていたというわけである。その依頼をまた受けようというのだ。

「あ、ねえキリト、その依頼って僕にもやらせてもらえるのかな？」

「え？ あ、ああ……多分俺から話を通せば大丈夫だと思うけど……」
アイテムポーチから取り出した、水入り瓶に口をつけているキリトに、シユピーゲルがそのバイトを自分にもやらせてもらえないかと提案を持ち出した。

昼間はゲームセンターで強がってはいたが、やはり彼も無理をしていたのである。

「何よ、やっぱり無理してたんじゃない……」

「う、えつとその……あ、あはは……」

自分の心情を見透かしているシノンから苦言を受け取ると、シユピーゲルは何とも言えない微妙な苦笑いを浮かべて、その場を取り繕うとしていた。

しかし彼からしてみても願ってもない話だ。スーパーだとかコンビニだとかの接客業は苦手だし、かといって事務作業とかもあまり得意と言える方ではない。

でも今回の仮想世界の調査や情報提供ということなら自分でも出来るかもしれない。むしろやってみたい、経験してみたいという思いが強かった。

それでお金が貰えるならなおさらいいじゃないか、とも。

「わかったよ、俺からクリスハイトにかけあってみる」

「うん、ありがとう、キリト！」

お互いの拳と拳とぶつけ合うと、二人の間に少年らしい爽やかな笑顔が交わされていた。

互いに同年代の男子の友達が少なく、貴重な間柄だということもあり、ここ最近何かとこの二人の意気はぴったりだ。

そして宴もたけなわながら、来週末に40層のボスを討伐しようということで、この場は一旦解散する流れとなった。

ジユン、シウネー、ノリ、テツチ、タルケンの入院組は消灯時間が迫っていることもあり、怒られないためにも急がないといけな。

「それじゃ、街への回廊結晶使うぞ」

キリトがアイテムポーチから回廊結晶を取り出し、高らかに掲げながら「コリドー・オーブン」と口ずさむ。

すると「パキン」という音を立てて結晶は砕け散り、入れ替わりにキリトの目の前の空間が円の形に歪み始めた。

歪んだ空間は僅かに白く発光しており、何やら神秘的な雰囲気を感じさせる。SAO時代は貴重であった回廊結晶、転移結晶といったアイテムも、ALOでは手に入りやすくなってるのだ。

「あれ？… ちょっとまってみんなー！」

「ん？ どうしたストレア？」

薄紫の髪に、目のやり場に困る大胆な服装に身を包んだノームの女

の子であるストレアが帰ろうとする皆を止めにかかる。

声をかけられたメンバーは「一体なんだろう？」と首をかしげ、発
信源であるストレアに視線を集中させている。

「ねえ、フィリアはどこいつちやったのかなー？」

「え、フィリア……？」

「そ、そういえば来てないですね……」

シリカが頭に相棒であるピナを乗っけながら、首をかしげると、後
のメンバーも次々とフィリアのことを気にかけて始めた。

つい今しがたまで一緒についてきていたはずだ。一体どこに行つ
たのだろうか、周りに視線をキョロキョロさせながら、フィリアが近
くにいないかと確認する。

「フィ、フィリアちゃんならなんかお宝を探すとかで……」

「サーチ魔法使ってお宝探しながらここまで来るって話よ、まったく
呆れるわよね」

「……くすっ、フィリアさんらしいです♪」

シノンとシュピーゲルがフィリアの行方について話し出すと、心配
していた面々に安堵の表情が戻ってきた。

いかにもトレジャーハンターである彼女らしい、心配して損した、
そんな言葉があちらこちらからこだましている。

しかしそんな中、M H C Pであるユイだけが、何やらただならぬも
のがこちらに近付いていることを探知していた。

「パパ！ 警戒してください！ モンスターが近づいてきます、迎撃
の準備を！」

ユイが先ほど通ってきた通路を指差し、この場にいる全員に警戒を
促すと、メンバー全員が武器を構え、後方から来るであろうモン
スターに対して迎撃の態勢を取っていた。

どんなモンスターが来ても大丈夫だ、ここにいるメンバーなら楽勝
で倒せるはずだ。なんせここにはV R M M Oプレイヤーのプロ
フェッショナルといっても過言ではないメンバーが肩を並べている
のだから。

誰もがそう思った。フロアボスやフィールドボスならわからない

が、たかが強くても中ボスクラスのモンスターに遅れを取るはずがない。いつでもかかってこい、そんな心境で身構えていた。

しかし、そんな強気な気持ちは、少しずつ近づいてくる物々しい騒音とともに、物の見事に打ち砕かれることになった。

全員が視線をやった後方の遙か奥からは、スプリガンの少女が一人、そしてその少女を追いかけている禍々しい見た目をした巨大なモンスターが一匹、物凄い速さで「ズドドド」という騒音をまき散らしながら迫ってきていた。

スプリガンの少女は言わずもがな、フィリアである。そしてそれを追走している巨大モンスターの正体は、先ほど彼女がまんまと引つかかって出現させてしまったミミックだ。

「う、嘘でしょ……バカじゃないのアイツ！ 何てものを連れてきてるのよ！」

全種族中、一番視力に長けたケットシー族であるシノンが、弓と矢を構えながら、額から汗を垂らして、いち早くその正体に気付いていた。

「あのバカ！ 何でよりもよってミミックに追いかけてるのよ！ トレジャーハンターが聞いて飽きれるわよ！」

「なっ!?!」
「み、ミミック!?!」

「ミミック」というワードを聞いた瞬間、全員が全員その場に凍りついた。どこのフロア階層ボスよりも強いのではないかと噂されるほどの質の悪さをもつミミックの凶悪っぷりを、よく理解しているからこそその反応であった。

攻撃判定をもらうだけで一撃死してしまうのだから、質の悪いモンスターというよりは、天災に近いと言ったほうがいいだろう。

「みんなあああ！ た、助けてえええ！」

ここまで全力疾走してきたフィリアが、ボス部屋手前で集まっているキリト達に救助要請を出す。

しかし、全員武器を構えて勇猛果敢に立ち向かっていくどころか、武器をしまつて踵を返し、目の前のコリドーに飛び込もうとしている

た。

「み、みんな早く逃げろ！ この人数でも分が悪すぎる！」

「フイ、フィリアの……バカー！」

「わ、私だって好きで連れてきたわけじゃないわよー！」

「は、早くコリドーに飛び込んで！ 追いつかれちゃうー！」

ミミックという、ありがたくないモンスターの子プライズ出現に、キリトラメンバーはまるで大災害から避難するかのようにコリドーに慌てて飛び込んでいった。

初めに消灯時間が迫っているスリーピング・ナイトのメンバー。

そして次にSAOサバイバー、そして最後尾のフィリアを、コリドーの出入り口付近で待っていたユウキとキリトが腕を伸ばし、強引に引つ張り転移まで間に合ったところで、コリドーは消滅した。

当初の目的である、迷宮区のマッピング&ボス部屋までの到達は達成出来たものの、このミミックは時間経過で自然消滅しない設定にされており、討伐されるまでの間、かなり長い期間ボス部屋の前をうろついている始末となった。

何も知らないプレイヤーがボス部屋までたどり着き、いるとは思わないミミックの襲撃にあい、たちまち全滅といった被害が後を絶たなかったそうだ。

後々にミミックを討伐するためのパーティが結成され、どうにかこのミミックは討伐されたのだが、ドロップアイテムも、落とすユルドも美味しくなく、結果はプレイヤーのお金と熟練度、装備耐久度とメタルを奪っていくという、散々な結果だったという。

これに懲りてフィリアは、当分トレジャーハント業を休業することを選んだ。アルヴ Heim オンラインは、今日もどったんばったん大騒ぎな、ある意味平和な日々が続いていた。

第67話〈依頼〉

西暦2026年 11月16日(月) 午後14:00 東京都中

中央区銀座 資生堂パーラー

「……………」

ゴウンゴウンという音を響かせながら、エレベーターが上階へと動いている。エレベーターの中には男の子の二人、女の子が一人、搭乗している。

普段は羽振りのいいセレブしか立ち寄らないような、高級感あふれる雰囲気は漂うこのビル、資生堂パーラーの中に、あまりその雰囲気に似つかわしくない普通の少年少女が立ち寄っている。

「ね、ねえ和人、本当にここで場所あつてるの…………？」

「ああ、ヤツが指定した場所はここだよ。以前にコンタクトとった時もこの場所だった」

「な、ならいいんだけど…………」

普段自分が立ち寄っている場所とはまるで違う雰囲気、木綿季はすっかりたじろいでしまっていた。

地元のスーパードともコンビニとも、レストランとも喫茶店とも違う、ちよつとだけ張り詰めた空気。

どちらかというところ、近所の小金もちのおばさん連中が、旦那の小遣いを減らして懐が潤った分、そのお金で贅沢をしにくる場所のような、そんな空気を感じ取っている。

こんなすごく高そうな場所にボクらがきていいのか、もう少し大人になってからくるべきだったんじゃないのかと、額に汗をかいて不安を抱いていた。

「き、緊張してるの？ 木綿季ちゃん…………」

いつも身にまとっている黄色いパーカーのポケットに手をつっこみながら、恭二が木綿季に尋ねた。

彼も彼で、見てくれはごく普通のどこにでもいるような少年だ。手持ちの小遣い程度でこんなところにこれるような身振りでもなかつ

た。

「う、うん……ちよつとね……」

「大丈夫だ、この代金はヤツ持ちなんだから。遠慮なく注文しまくれればいいさ、いつもみたいにな？」

これから出会うことになる男の顔が、この建物を出る頃には青ざめているだろうと想像している和人が、不敵に顔を歪めて悪い笑顔を見せている。

「和人、顔がすつごく悪役みたいになつてるよ……?」

「……む、そんな顔してたか……」

「あ、あはは……」

この三人が、何故このようなお金持ち御用達のお店に足を運んでいくかと言うと、先の件。

例の総務省・仮想科に属しているクリスハイトこと、菊岡誠二郎からの依頼を受けるためであった。

木綿季の闘病もあり、ここ一年は和人も菊岡とはとんと音沙汰がなかったのだが、出費に出費が重なり続け、貯金がそこを尽きるのが秒読み開始となつてきたため致し方なく、彼からの依頼を受けることにしたので。

しかし、出来ることなら会いたくない。

(どうもイマイチ信用出来ないんだよな、アイツは……)

左手を上着のポケットにつっこみ、頭をぼりぼりと右手でかきながら、和人は浮かない表情を浮かべていた。

彼らがこれから会うことになる菊岡誠二郎なる人物は、言つてしまえば「胡散臭い」の一言である。

事の発端は、SAOから目覚めて間もない和人に、彼が真つ先に接触してきたことから始まる。

アインクラッドの中で出会った仲間たちのリアルの情報を得る代わりに、SAOのこと、ホロウエリアのことを洗いざらい情報提供する。こういった取引を持ち出されていたためだ。

和人でなくても、やっと死の恐怖から開放され、これから現実世界で平和に暮らせると思つた矢先に、こんな人がずけずけと接触してき

たら、まず間違いないく胡散臭い、信用出来ないと思うに違いない。

しかし、和人はそれをしてまで仲間たちの情報が欲しかった。直接会って、本当の意味でのSAOクリアを祝い合いたかった。

ただ、情報を聞き出す菊岡の様子が、逐一ふわふわしていたり、公務員にしてはどことなくチャラチャラしていたりといった独特の雰囲気を出していた所為もあり、胡散臭さに拍車をかけ、疑いの眼を向けていたと言うわけだ。

「まあ、今日は話を聞くだけでもいいさ。依頼を受けるかどうかは、俺たち次第だからな」

「は、はあ……」

「か、和人……機嫌悪そうだね……」

三人がやりとりを交わしていると、上昇していたエレベーターの動きが止まった。

目的の階層に到着すると、丈夫そうな鉄製の扉が左右に開き、高級感あふれる淡い色合いをした、マホガニー製の木材で出来たフロントカウンターが、目の前に飛び込んできた。

まるで超高級ホテルのフロントのような見てくれをしている。それだけでこの立ち寄った店がどれだけ高いお店だということを伺わせる。

「いらっしゃいませ」

店内に足を踏み入れると、タキシード姿の男性店員が和人たちを出迎えた。丁寧に頭を下げた店員は空いているお席へどうぞと礼儀正しく、店の奥へと案内した。

それに従うように歩を進めていくと、銀座の街にふさわしい高級感あふれる内装が目に入ってくる。

室内灯はシンプルながらも、フロアの雰囲気壊さない程度の明るさを保った丸型の灯り。

床にはいかにもと言っているくらい素材で出来た高級カーペット。

その上にはやはりマホガニー製のテーブルとイスが並べられており、白く透き通るようなテーブルクロスが敷かれ、その上に造花では

ない本物の花が花瓶に添えられている。

この花だけで、子供の月の小遣いなど消し飛んでしまいそうな印象をちらつかせる。

腰を落ち着かせている客層も、旦那の稼ぎがいいのか、はたまた自分自身がそこまで稼げているのか、中年女性客の姿が目立ち、誰もが誰もケーキにフォークをつつき、コーヒーや紅茶を嗜んでいる。

和人が店内のすみずみまで視界を動かしていくと、やがてこのセレブ感あふれる高級喫茶店の雰囲気似つかわしくない、四角いメガネをかけ、黒いビジネススーツに身を包んだ、サラリーマン風の男が何やら手を大きく上にあげてぶんぶんとふっている。

その男の視線は、真っ直ぐに和人を見つめていた。

そう、この男こそが和人が今日会おうとしていた人物である「菊岡誠二郎」その人であった。

無邪気とも言える明るく満面の笑みで、子供みたいに手を降っている姿だけで、この喫茶店の雰囲気をぶち壊してしまっている。

「おーい！ キリトくん！ こっちこっちー！」

店内に響き渡るぐらいの大声で菊岡が声を上げると、周りの客の視線が一斉に彼へと集まった。

こんな高貴な場所で何をしてるんだ、周りに迷惑だろう……と、ティータイムを邪魔された誰もが目で訴えている。

「あ、あのバカ……」

これにはさしもの和人も開いた口がふさがらず、何をやっているんだアイツはと呆れた表情で見つめていた。

そんな和人の背後から木綿季と恭二が顔をひよこつとのぞかせて、なんだなんだと店内を見回している。

和人は「はあ……」と大きく溜め息を吐き出すと、重い足取りで菊岡が座っている、店内中央の四人用の四角テーブルへと渋々歩いて行った。

ただでさえこの男とは関わりたくなかったのに、こんな恥ずかしい

真似をされて、今この瞬間は他人同士でありたい。そんな心境だった。

常にニコニコしている菊岡が腰を落ち着けているテーブルに、和人たちも同じように腰掛けている。

菊岡の正面に和人、その右手に木綿季。その木綿季の向かいに恭二といった位置関係だ。

和人は席につくなり、頬に手のひらを当ててテーブルに肘を立てて、ムスツと不機嫌オーラを全身から発信していた。

「キリト君以外は……はじめまして、かな？」

「あ、は、はい！ ボクは紺野……じゃない、桐ヶ谷木綿季です。よろしくお願ひします！」

「し、新川恭二です。今日はお忙しい中、ありがとうございます」

菊岡が柔らかい口調で声をかけると、木綿季と恭二が礼儀正しく会釈をし、丁寧な挨拶を返した。

和人だけはそっけない態度をとってはいるが、仮にも相手は目上の相手、社会に出て働いている身だ。最低限の礼儀は尽くさなければならぬ。

それも相手は公務員、少しだけだが木綿季と恭二は方に力が入ってしまった。

「ご丁寧ありがとうございます、木綿季ちゃんに新川君。僕は菊岡誠二郎。総務省の仮想科というところで働いている、しがない公務員だよ。よろしくね」

テーブルに肘をたてながら、リラックスマードで菊岡が自分の身分を明かし、傍らに置かれた赤紫色のメニュー表を手に取り、三人に見えるように見開いた。

「……この払いは僕が持つからさ、なんでも好きに頼んでくれて構わないよ」

「……ほう、随分と気前がいいじゃないか、菊岡さん」

差し出されたメニュー表を、和人が右手で受け取りながら皮肉の意味も込めて菊岡に嫌味を言い放つ。とてもこれから仕事をもらおうとする立場の人間の態度ではないが、菊岡は笑って受け流していた。普段とは異質な棘のある和人の雰囲気、木綿季と恭二も額に嫌な汗を垂らしながら、緊張の思惑で様子を伺っている。

きつと二人も、いくらなんでも失礼や過ぎないかと思っているに違いない。実際に二人は苦しい苦笑いを浮かべながら、ことの成り行きを見守っている。

「そうかな？ まあそうだとしたら、君に久しぶりに会えたから……かな？」

「……俺に？」

「ああそうさ、言わなかったかな？ 僕は君のことが好きなんだ」

「なっ……」

菊岡がとんでもないことを言い放つと、和人ははじめ木綿季と恭二も言葉を喉につまらせ、自分たちはやばい男を相手に、仕事を受け持とうとしてるのではないかという危機感に苛まれた。

目が点になり、こめかみの当たりをピクピクと引き攣らせ、言葉にならない言葉を言い続け、彼らがついている席は、なんともいえないおかしいな気まずさにつつまれてしまっていた。

「き、菊岡さん！」

「ん……なんだい？ 木綿季ちゃん」

木綿季が声を荒らげ、菊岡が惚けた顔で返事を返すと、途端に木綿季が和人の腕に自分の腕を絡みつかせ、自分たちはこういう関係なんだとこれみよがしに見せつける。

菊岡がそつちの気がある人間だと思ったのか、和人を引き渡すまいと必死だ。

「和人は……ボクのなんだから！」

「……ふふ、わかってるよ。僕はあくまで友人として好きだってだけさ。何も君からキリト君を奪おうだなんてこれっぽっちも考えてないよ」

「……むう、そうですか……」

如何わしい趣味をもつ大人がいてもおかしくないこの世の中で、菊岡もひよつとしたらそうなのではないかと疑いを持った木綿季だったが、本人からの一応の弁解を得て、とりあえずの警戒は解いたようだ。

「しかし、キリト君の方から声を掛けてくれて、僕は嬉しいよ。実はこちらでも色々複雑な状況でね、そろそろ僕の方から話を持ちかけようと思ってたんだ」

「……菊岡さんの方から？」

「ああ、何せ君たちから聞きたいことはまだたくさんあるからね」

「き、聞きたいことって……？ もうクラウド・ブレイン計画のこととかも洗いざらい話したろ？ セブンからも話はいつてるはずだし」

もう仮想世界に関係することで、自分が知っていることは全て話して聞かせたはずだと、和人は腑に落ちない様子で菊岡に訪ねた。

すると菊岡は、自身のメガネのブリッジ部分を中指でくんと上に押し上げ、レンズ部分を光らせながら、意味ありげに、静かに口ずさんだ。

「……メデイキュボイド」

「……」

菊岡が口にした瞬間、和人と木綿季が凍りついた。

これまでに起きた仮想世界での事件や出来事、そしてこれからのことを可能性も含めて話し、論議し尽くし、もう話し合うことはないだろうと思いきや、今度はメデイキュボイドだ。

和人には大体察しがついていた。恐らくはメデイキュボイドの臨床試験を三年間も継続した木綿季の体験談を聞き出そうというのだろうと。

たちまち和人は眉間にシワを寄せて、菊岡を睨みつけていた。

「総務省に送られてきたデータだけでは、まだ少し足りないんだ。実際に使って見せてくれた木綿季ちゃんに、直接話を聞かせて欲しいと思ってる……」

「菊岡さん……アンタ！」

和人がガタツという音を立てて、椅子から立ち上がり、菊岡をより

鋭く睨みつける。

そもそもにして、仕事を受けようと名乗り出た和人と恭二はともかく、木綿季に同伴を求めた時点で疑ってかかるべきだった。

かつて身体に重たい病気を抱え、心に深い傷を負った木綿季のプライバシーにかかわることを聞き出そうとしている菊岡が、和人はやっぱり信用出来なかった。

自分のことはいい、だが木綿季にまで手を出すのならこの話はおしまいだ。何も話すことは無い。

木綿季に手を出すのなら、例え世話になった菊岡さんでも容赦はない。和人の顔がそう物語っていた。

「すまないが話は終わりだ。帰るぞ……木綿季、恭二」

「え……、か、和人？」

席を立った和人は、不機嫌を通り越して怒りにも似た感情を振りまきながら、椅子を定位置に戻し、店の出口まで戻ろうとした。

正に一触即発、触らぬ神に祟りなしといった雰囲気を漂わせている。

「ちよ、ちよっと待ってくれよキリト君！」

「待たない、今回の話は無しだ。他を当たってくれ」

「何も何も、今回の件は君たちにししか頼めないんだよ！」

和人たちの物々しいやりとりにより、またもや辺りの客からの視線が集まりだした。

優雅で静かな空間を過ごせるはずのこの喫茶店が何やら穏やかではなくなってきた。その様子を不安に思ったのか、店のスタッフも何人か遠くで様子を伺っている。

「……和人、お話だけでも聞こう？ ボクは大丈夫だから……」

帰ろうとする和人の黒い服の袖を、小さい手で掴んで静止させると、和人は首だけ振り返り、真っ直ぐに木綿季を見つめた。

「……木綿季が……そう言うなら……ッ」

恋人の木綿季になだめられると、和人は荒くなった呼吸を少しずつ落ち着かせ、握りこぶしに込めた力も弱め、怒りを無理やり抑えながらも一度席についた。

しかし、菊岡へ向けた怒りの視線だけはそのままであった。

「……君の気に触ることを言ってしまったのなら謝罪するよ、すまなかった、キリト君」

「すまなかったって……、おい菊岡さん、アンタ自分が何を言ってるのかわかって言ってるのか？」

菊岡の謝罪の言葉は、和人をなだめるところか、火に油を注いでしまっていた。

前からデリカシーや、他人に遠慮がない性格の男だと思っただけが、ここまで酷いとは思ってもよらなかった。

和人は、声を荒げないよう気持ちを無理やり落ち着かせて、自分が何故ここまで起こっているかを話して聞かせた。

「菊岡さん、アンタ……木綿季がどんな思いでメ^あデイキ^のユ^中ボイドにいたと思ってるんだ？」

「……………」

「現実から切り離されて、外に出ることを禁じられて、ずっと暗い暗い空間の中で、いつ死ぬかもわからない恐怖と、ずっとずっと独りで闘ってたんだ！」

「……和人……」

菊岡は、ただただ無表情のまま、静かに和人の話に耳を傾け続けていた。

何故ここまで落ち着いているのか、大人の余裕があるからなのか、はたまたこういう性格だからなのか、違う理由なのかはさだかではないが、とにかく落ち着いて話を聞き続けた。

「それでも木綿季は、必死に前へ歩き続けた！　あの暗い部屋で、ひたすら独りで頑張ったんだ！」

「……………」

「それを……よくもアンタ軽い気持ちで聞かせてくれだなんて言えなもんだな……」

和人の両手は、怒りのあまりに小刻みにふるふる震えていた。呼吸もまた荒くなり、菊岡の態度しだいではすぐにでも彼に殴りかかっていきそうな勢いだった。

そんな和人を見かねてか、木綿季は自分の手をそつと和人の手に包み込むようにして当て、彼の顔をじつと見つめ「ボクは大丈夫だよ」と目で訴え続けた。

「……ゆ、木綿季……」

「かずと……」

木綿季の手の温もりが伝わってきたのか、段々と和人は怒りが収まり、呼吸も気持ちの高ぶりも落ち着いてきた。

心拍数があがって体温が上昇したためか、額から汗が吹き出している。木綿季はそんな和人の汗を手元に置かれていたウオツシユペーパーで優しく拭き取った。

「……ごめんな木綿季、ありがとう……」

「ううん、ボクは大丈夫、大丈夫だから……」

大切な人のために、ここまで怒ることが出来る。和人はそこまで木綿季のことを想っている。

そんな和人が羨ましい。

大切なもののためなら、自分はどんなつてもかまわない、そう思うための硬い意識があることが、僕には羨ましいと、恭二は真つ直ぐに和人を見つめていた。

僕にあんな度胸があるだろうか？

もしも仮に詩乃が誰かに襲われでもして、助けられるのが自分だけだったとしよう。

その時、僕に立ち向かうだけの勇気があるのだろうか？

……ないな、あつたとしたら……僕はそもそも高校を中退していないし、父さんともちゃんと話し合っていたはずだ。

結局、僕は臆病者なんだ。他人の目を気にして、ご機嫌を伺って、敷かれたレールの上を辿るしかない。

そんな生き方しか、許されないんだ。

「……二人共すまないね、別にこれに関しては僕からは無理強いはしないよ。個人のプライバシーが関わってくるし、第一関係者の許可を得ないことには決行できないからね」

「……か、関係者……ですか？」

「そう、キリト君やリーファちゃんたち家族の許可はもとより、主治医の倉橋さんの許可も取らないといけないんだ」

「……なんだよ、今更掌返しかな？」

「そうじゃないさ、メデイキュボイドはまだ公には非公開。これぐらい慎重にことを運ばないといけない事案なんだ」

その割には、随分と軽口を叩いてくれるじゃないかと内心思った和人であったが、ここはぐっと堪える。

これ以上激昂しても、木綿季を不安がらせるだけだし、周りの客にも迷惑がかかる。何より話が前に進まない。

ここは気持ちを落ち着かせて、引き続き菊岡からの話を聞くとしよう。

「……わかった、そういうことにしておくよ……」

「こちらとしても、出来れば聞かせてもらいたってだけなんだ、本当にすまなかった」

気持ちが落ち着いて、冷静に考えるだけの余裕が出来てくると、和人は先の自分の態度に少しだけ後悔をしていた。

もし、あそこで木綿季が止めなかったらどうなっていただろうか？

神田の時みために、殴りかかっていたかもしれない。馬鹿な、そんなことしたらどうなる？ 木綿季を悲しませちまうだけだ。

熱くなるな、冷静になれ……。これじゃSAOにいた時と変わらな
いじゃないか。もっと気持ちに余裕を持つんだ。

「……もうこの件に関しては何も言わないよ、菊岡さん……」

「……ありがとう、それじゃあメデイキュボイドの件については、一旦保留にさせてもらうよ」

菊岡はそう言いながら足元に置いた黒いビジネスバッグから、業務用だと思われるタブレットを取り出して、何やら操作を始めた。

菊岡が木綿季を呼び出した件については、一旦これにておしまいとなった。

仮に木綿季が話してもいいとなっても、両親の翠、峰嵩、兄妹である和人と直葉、更には主治医の倉橋全員から許可を貰わなければなら
ない。

いろんな複雑な事情が絡み合ったメデイキュボイドに関することだからこそ、政府も菊岡も、和人たちも慎重になっているのだ。

「さて、それでは本題に入らせてもらってもいいかい？」

「ああ、構わない」

「……お願いします」

「それじゃあ、まずはこれを見てもらいたんだけど……」

タブレットの操作を終えた菊岡が、必要な資料を見せるためのペー
ジを表示させると、端末の向きを百八十度変え、和人たちに見えるよ
うに卓上に置いた。

その端末を、一番取りやすい位置にいた和人が、恭二にも見えるよ
うにして角度を調整して手にとった。

そうすると、必然的に木綿季から見えにくい角度になってしまつて
いるため、木綿季はイスを少しだけ和人のいる方に寄せて、タブレッ
トの画面を覗き込んだ。

「死銃事件……って、聞いたことないかな、君たちは」

「で、ですがん……？」

まるで耳にしたことのないワードに、木綿季は頭に？マークを浮か
べて首をかしげている。

デスガン、日本語直訳で死の銃。先日和人が興味本位でインター
ネットで調べた、あの死銃だ。

VRMMO、ガンゲイル・オンライン、通称GGOのゲーム内で、
死銃デスガンなるプレイヤーに銃で撃たれると、撃たれたプレイヤーそのもの
が現実世界で死んでしまうという、今VRMMO界限で話題沸騰中の
ウワサだ。

その、都市伝説にも近い、事件性がまるで伺えないこの騒動の話を、
菊岡が持ち出してきた。国家公務員である菊岡がだ。

「俺は……知ってる。先日……たまたまインターネットで目につい
て、個人的に調べてた」

「……なら話は早いかな。単刀直入に言うと、この死銃事件デスガンの真相を、君たちに調べてきてもらいたい」

「……………は？」

菊岡の突拍子もない話に、またもや和人は凍りついた。

なんだって？ かの死銃デスガンさんの事件の真相を？ 探偵でも警察でもない俺たちが調べて解決してこいだ？

何を言っているんだこの陰気メガネは、ついに気でも狂ったかと、軽蔑の眼差しを送り続けていた。

「だから、キリト君たちにこの事件のことを調べて欲しいんだ」

「……………どうしてそうなるんだ？」

「……………似てると思わないかい？ 三年前の、SAO事件と……………」

「……………何が言いたい？ 菊岡さん」

和人の顔が穏やかではなくなっていった。

先ほどまで見せていた怒りの表情ではない、目の前に迫る危機から自分や周りを守るための、戦う人としての表情をみせていた。

菊岡の言いたいことは、つまりこうだ。

死銃デスガンに撃たれたユーザーが亡くなっている可能性が強く、もしかすると今回の件は、先のSAO事件と何らかの関連性があるのではないか。

そこで、SAOをクリアしたキリトこと和人に今回の件について、事件のおこったゲーム「ガンゲイル・オンライン」にダイブして調べてきてほしいと、こういうわけだ。

「……………本気で言っているのか？ 菊岡さん」

「……………僕は仕事に関しては、冗談は言わないよ。少なくとも、GGOにダイブしているプレイヤーが不自然な死を遂げているんだ。きな臭いと思うのが普通じゃないのかい？」

「……………」

また、ゲーム内で人が実際に死んでいる。外部的要因で死んだのか、本人の健康管理で死んだのか、はたまた……………本当にゲーム内での死が、現実にも反映されたのかは定かではない。

しかし、自分の愛しているこの仮想世界で、かつて自らが体験した

デスゲームが再び行われているとしたら、このまま黙っているわけにはいかない。

黙っているわけにはいかない……、が……。

「……………」

「な、何？ 和人……？」

「え、あ……いや、なんでもない……」

「……………」

今の俺に……出来るだろうか、もう一度、死のリスクがあるゲームにダイブすることなんて。

やっと死に物狂いであるデスゲームから解放されて、普通の暮らしを取り戻し、守るべきものをまた手に入れられたのに。

それらを失ってしまうかもしれない覚悟が、今の俺に出来るのだろうか……。

「……………」

「……和人？」

「……ゆ、木綿季……」

……ダメだ、今の俺には……守りたい者がいる。ずっと傍にいてほしい、ずっと一緒に居たい存在がいる。

片時も離れて欲しくなくて、一緒に笑って、一緒に泣いて、一緒に苦楽をともに乗り越えていきたい者がいる。

今の俺には、もう一度死に立ち向かっていく勇氣は……ない。
「……………」

気が付くと、和人の手は震えてしまっていた。怒りからくる震えではない。死への恐怖、そして、大切な者と離れ離れになってしまうかもしれないという恐怖に襲われていた。

もう俺は、アインクラッドにいた黒の剣士キリトじゃない。

VRMMOが好きなただの学生、桐ヶ谷……和人だ。

「和人……大丈夫？」

先ほどとは打って変わって、冷や汗をかき、青ざめた顔になっている和人の手を、木綿季は優しく握り締めた。

心配そうな表情を浮かべ、真っ直ぐに和人の顔を見つめ、彼が安心

するまで手を握り続ける。

「……あ、ああ……」

「……ふむう」

ただごとではない和人の様子に、菊岡も険しい表情を浮かべている。

菊岡はVRMMOで一番の実力を持つ和人なら、GGOの世界にダイブしても、なんら勞せず^{デスガン}に死銃と接触し、情報を得ることが出来るかもしれないと踏んでいたのだ。

しかし、冷静に考えてみれば、彼らは正義のヒーローでも、物語に出てくる伝説の勇者でもない。普通の一般人、子供なのだ。

本来ならば、こういった危険性が伴う事案ならば、従来通り菊岡ら大人が対応すべき一件なのだ。子供の手を借りようとしている時点でどうかしている。

「厳しそう、かな……?」

「……ごめん菊岡さん、ちよつと今回の件は……考えさせて欲しい……」

「……そう、だね……」

和人の様子を見れば、今回の件について荷が重いのは明らかだった。今の彼は、ただ木綿季と楽しく毎日を生きていきたいだけなのだ。

わざわざ危険を犯してまで、首を突っ込む必要はもうない。

「それじゃあ、キリト君はともかくとして、そっちの彼はどうかかな？」

さつきからずつと考え込んでいるようだけど……」

菊岡が掌の方向を恭二の方へ向けると、下を俯いてテーブルの上を見つめ、右手の指を顎の先端に当て、腕を組んで何やら考え込んでいる様子だった。

「新川君？」

「……」

「お、おい恭二?」

「えっ、……あ、えつと……何?」

二人から声をかけられて、ようやく我に帰った恭二が、きよとんと

した表情を浮かべながら二人を見つめ返す。

和人と菊岡は、今までの話をちゃんと聞いていたのかと、若干呆れた様子で彼を見つめていた。

菊岡は一度溜め息を吐き出すと、メガネの位置を直して腕を組み、改めて今回の依頼を受けるかどうかについて、恭二に語りかけた。

「それで、君はどうなんだろう？ 聞いた話では、新川君は元GGOPプレイヤーだつて聞いたけど、何か耳に挟んだこととかないかい？」

「……いえ、何も」

「そうか……残念だね」

「……すみません」

元GGOPプレイヤーの恭二なら、和人よりも効率よく、情報を集められると踏んでいた菊岡は、またもや大きく肩を落としていた。

正直言つて、菊岡は今回の事件については、この二人の協力が得られれば、そう時間をかけずに解決できるだろうと目星をつけていたのだ。

死銃デスガンのターゲットとなつているプレイヤー全員に共通してること
が、一つある。

それは、全員が全員プレイヤースキルが高く、上位プレイヤーに食い込んでいるユーザーか、GGOP内最大のイベント『バレット・オブ・バレット』通称B・O・Bで上位に入賞しているということである。

碎けて言ってしまうと、強いGGOPプレイヤーばかりが狙われているということだ。先の件での被害者であるゼクシードは第二回B・O・B覇者、二件目の被害者薄塩たらこも、名を馳せた実力派プレイヤーだ。

結論から言えばGGOP内で有名になり、強いプレイヤーだと死銃デスガンに認識されれば、自らがターゲットとなり、死銃と接触するチャンスが出来る。

VRMMOで屈指の実力を持つ和人と、元GGOPプレイヤーである恭二がコンビを組めば、死銃デスガンも早々に注目するだろうというのが、菊岡の算段だった。

最高の実力と最高の知識、これらが合わされば、早くにも事件の真

相にたどり着くことができるだろう。

だがしかし、そんな菊岡のアテは外れてしまった。

「僕もちよつと、考えさせてもらっていいですか……?」

「構わないよ。返答はなるべく早いほうがいいけど、こればかりは君たちの意思を尊重しないといけないからね」

恭二も依頼を保留したことにより、メデイキュボイドの件、デスガン死銃事
件の件ともに、全て依頼は保留となった。

菊岡としては、是非とも受けてもらいたいところだったが、流石に
相手はまだ未成年で一般人だ。

無理強いするわけにもいかないし、危険に巻き込むわけにもいかな
い。非常に残念ではあるが、無難な判断だと言えるだろう。

「それじゃあ仕事の話はここまでとして、ここからは……楽しいお茶
会といこうか、キリト君♪」

「……え?」

先ほどの真剣な顔つきから、急にふわつとチャラチャラし表情へと
代わった菊岡は、笑顔を振りまきながら近くの店員に向かい豪快に手
を振り、こつちの注文をお願いと合図を送っていた。

本当に掴みどころがわからない男だ。よく言えばオンオフの切り
替えが、メリハリが出来ていると言える。

悪く言えば何を考えているのかわからず、そういうところが他人の
不信感を煽ってしまう、といったところだろうか。

「最初に言っただろ? ここの払いは僕が持つって、今日は他に公務
もないし、ここでたくさん食べて帰って行って構わないよ♪」

突然の菊岡の態度の変化に、一行は戸惑いを見せていたが、話を聞
いていくうちに、自分たちの意思を尊重してくれていることだけは確
かなものがあるため、少しだけ腑に落ちないがこのまま彼を信用する
ことにしたのだった。

「だとき、木綿季」

「え……、えつと菊岡さん、ここのメニュー……ものすごく高いけど、
本当にご馳走になっていいの?」

「いいからいいから、素直にご馳走になれ、木綿季」

「キリト君の言うとおりでだよ、遠慮なく限界まで食べてっけてくれ、木綿季ちゃん」

人間とは不思議なもので、一度遠慮すると中々それ以上踏み込むことが出来ない事の方が多い。

しかし、これ以上断つて無下にするのも失礼と感じたとき、その言葉に甘えなくてはいけないときもある。

木綿季にとって、今がまさにその時なのだが、菊岡は知る由もなかった。

木綿季は常人の女の子と比べてはるかに上回る量の食べ物を食べることを。いやそれどころではない、成人男性も真つ青になるぐらいに胃に食べ物を突っ込むことが出来る、その驚異の内蔵の持ち主だということ。

「……そういうことだ、遠慮するな、木綿季」

「……え、えへへ……そ、それじゃあ……」

木綿季は和人からメニュー表を受け取ると、この店自慢のケーキやパフェといったスイーツのリストに目を輝かせていた。

高級セレブ御用達のお店とだけあって、メニューの値段もセレブ級だ。

コーヒ一杯注文するだけで、市販のお菓子が何個買えるだろうか。それぐらいの値段の張ったメニューを踏破するかのごとく、まずは気になった飲み物を注文する。

次はこの店の主役でもあるケーキに目を移す。ショートケーキ、チーズケーキ、モンブラン、ショコラケーキなど、定番から通の好みのもので種類は様々だ。

木綿季はとりあえず、目に付いたスイーツ気になったものを全部迷わず注文した。そう、全部である。

このあたりから、菊岡の様子がおかしくなっていた。しかし、ここまではまあたまにいます、スイーツには目がないたくさん食べる女の子もいる、ぐらいの認識だった。

だが、その考えは文字通り甘い考えで、羽振りがいい菊岡でもなかなか手痛い出費となるぐらいの怒涛の注文をしていく木綿季の食

欲に、段々と顔が青ざめていった。

「おかわりくださいー！」

「……ま、まだ食べるの……かい？」

「ぶ……くくくっ」

あからさまに引きつった顔つきになっていく菊岡の表情を見て、今までのうつぶんをはらすかのように、和人が笑いをこらえている。

どうだ、俺の恋人の食欲は。

そもそもにしてアンタの依頼を聞きにくる羽目になったのも、この食欲が元凶だ。

文字通りたつぷり味わってくれ、この大出費を。

それから言わずもがな、木綿季の食欲はものすごく、高級喫茶には異様な光景の皿のタワーが積み重なるほどのスイーツのおかわりが続いた。

おかしい、いつからここはケーキバイキング、ないしは回転寿司になったんだと、錯覚まで覚えてしまいそうなこの異常事態に、店側も困惑している始末だ。

飲み物の平均値段が千円、スイーツ系が千三百円もするこのサロン・ド・カフェ。そしてそのテーブルに積み重なっている皿の山は、菊岡が大出費を抱えてしまうことを避けられないことを意味していた。

「ゴチになるな？ 菊岡さん♪」

「……あ、ああはは、か、かまわない……よ……」

和人はこの日の出来事を、ここ最近起きた中で一番すつきりした一日に感じたという。

食欲に従うまま、笑顔でケーキを口にほおぼり続けながら、楽しくスイーツタイムを満喫している木綿季を、心からの笑顔で眺めることが出来たのは初めてだった。

ああ、いくらでも食べてくれと言わなければ、遠慮なんかしないでくれと言わなければ、菊岡がここまで顔を青ざめることもなかったろ

うに。

同日 午後15:10 東京都中央区 銀座八丁目 資生堂ビル前

「はあー、食べた食べたー♪」

満面の笑みで、お腹を右手でぽんぽんと叩きながら、木綿季が満足そうに資生堂ビルから姿を現した。

季節は十一月半ば、日もこの時間あたりから傾き始め、夜になるのが段々と早くなっていく。

道行く人々も分厚いコートに身を包む人もいれば、軽めのジャケットを着込む若者の姿も見受けられる。

そんな冬の服装の人々が行き交う中に、和人らを含めた四人が佇んでいる。本日の結果だけを言ってしまうはず、菊岡、及び総務省からの依頼は現在のところ保留になったこと。

答えは急ぎすぎずとも、出来るだけ早くにやるかやらないかの明確な答えが欲しいということというところで話が一旦まとまった。

そして一つ付け加えるとするならば、菊岡の財布が大ピンチ、ということだ。

「そ、それじゃあ……僕は一度総務省に戻るよ。返答はメールでもメッセージでも、ALOでも構わないから……」

常日頃からマイペースで仕事をこなしている菊岡の表情が、どこかぎこちなく、引きつっている。

このお茶会だけで三万円以上懐を溶かしてしまっていることと、目の前で小柄な少女が、あれだけのスーツを胃袋に詰め込んだというとんでもない真実を目の当たりにしたおかげで、軽く放心状態にもなっている。

「ああ、出来るだけ早く返答はするよ」

「菊岡さん、ご馳走様でした！」

「……御馳走様でした」

別れの挨拶を済ませると、菊岡は「いい返事を待っているよ」と活がない声量で呟くと、自分の車が停めてある有料駐車場へと足を運び、姿を消していった。

その後ろ姿は何故かどこことなく、いつもより小さく、そして寂しうに見えた。

今、三人が立っているここは中央区銀座。東京のど真ん中といっても間違いではない場所だ。

伝統芸である歌舞伎が見れる歌舞伎座。多目的イベントも行いうことが出来る東京国際フォーラム。独特なセンスでの公演が大変人気な東京宝塚劇場など、観光名所も多数ある。

それらを和人が楽しめるようになるには、まだこれから何年も先のことになるであろうが。

仕事や観光目的で周囲を行き交う人々がいる中、和人は大きく伸びをして、肩をくいくいとやると、二人に視線を移し、帰宅を促す。

「さてと、俺たちも帰ろうぜ……」

「そうだね、今回のことを受けるかどうか、よく考えないと……」
「……………」

今日の用事は全て終わったはずなのに、恭二だけは浮かない顔をしてあさつての方向を見つめている。思えば今日の会話にも、ほとんど入ってこなかった。

一体彼は何を考えているのか、その様子がおかしいことに気づいたのか、和人が気になり声をかける。

「恭二……………」

「……和人……」

考えていたことがまとまったのか、それとも声をかけられたからなのか、恭二はゆっくりと和人たちの方を向き、複雑そうな表情を見せていた。

「……和人」

今までのどの恭二とも違う彼の表情に、和人も心配そうな表情になる。悲しそうであり、切なそうであり、はたまた……どこか怒りを見

せているようでもあった。

「……何だ？ 恭二？」

和人から返事が返ってくる、恭二は顔つきを変えて、真つ直ぐに和人の目を見つめ、ゆっくりと口を開いた。

和人は息を飲み、彼の口から何やらとんでもない事実が語られるのではないかと、緊張感に満ちた顔つきで、彼が語るのを待った。

「もしも、僕が死銃デスガンだったとしたら、君は信じるかい？」

「……な、何だつて……？」

第68話く死銃く

西暦2026年 11月16日(月) 午後15:15 東京都中

中央区銀座 資生堂パーラー前

和人は目の前の親友の口から飛び出た言葉が信じられなかった。

GGOPレイヤーの変死事件に関わっているとされている死銃デスガンの正体が、この恭二だということを、本人の口から聞かされたことは、あまりにも衝撃的過ぎた。

死銃デスガンのしたことが、本当にプレイヤーを死に至らしめているかどうかは定かではないが、もしもそれが本当だった場合、和人の目の前にいる少年は「人殺し」ということになってしまう。

かつて自分もインクラッドで自衛のため、仲間の命を救うためにプレイヤーに手をかけ、殺してしまったことはあった。

それと同じことを、別のゲームで親友だと思っていた少年がしている。和人は理解が追いつかず、混乱しすぎて、頭の中がぐちゃぐちゃになってしまっていた。

「…………ごめん恭二…………、ちよつと君が何を言っているのか理解出来ない…………」

「……………」

和人の精一杯の反応に、恭二は無言で視線を送り続ける。

木綿季は二人から数歩離れたところで銀座の街並みを見て楽しんでいたため、この二人の会話は聞こえていなかった。

観光客や仕事中の人間でゴった返している銀座の交差点の歩道の一角で、少年が向かい合ったまま、ただただ無言を貫きながら佇んでいる。

車の走行音、人々の足音、横断歩道の青信号を知らせるチャイム、風の音などの雑音が聞こえる中、ひたすらに二人は呆然と立ち尽くしていた。

「……………」

「……………」

恭二が突如目を細めてくすつと笑い出す。

さつきまで真顔でじつと和人を見つめていたかと思いきや、急に不敵とも言える笑みをみせ、くすくすと笑いだした。

いつも見せている優しい笑顔とも、一緒にゲームを楽しんでいるときに見せてくれる笑顔とも違っていた。

少しだけ、少しだけ、不気味な笑みに見えたような気がした。そしてひとしきりくすくすと笑うと、にこやかな表情で和人に視線を向け、口を開いた。

「冗談だよ、和人つてば本気にしすぎだつて」

「……は、……はあッ!？」

周囲を歩く通行人の耳にも聞こえるような声量で、和人が声を裏返ししながら奇声を上げる。

その奇声に木綿季を含めた周囲の人が反応し、二人の少年にじつと視線が集まった。

すると和人はぼつが悪くなったように「しまった」と小さく声を出し、周りからの視線が気になりつつも、このやり場のない気持ちの行方を探していた。

「あはは、ごめんよ和人」

「……全く、そうゆう冗談はやめてくれよな……」

奇声をあげた和人の反応が面白かったのか、思いのほか物の見事に引っかかったのが楽しかったのか、恭二は絶えずくすくすと笑い声をこぼしている。

そんな二人のやり取りがきになったのか、木綿季がとてと歩を進め「和人どうしたのー?」と首をかしげながら声をかける。

「あはは、何でもないよ木綿季ちゃん。ただ……和人が面白くつてね」
「後で覚えてろよ……お前……」

和人はジト目で恭二を見つめつつ、少しだけ恨めしそうな視線を彼に送っていた。

真顔で何やら真剣に考え事をしていたかと思いきや、自分こそが死銃デスガンだと、驚愕の真実に緊張を走らせた。

そう思ったのも束の間、くすくすと笑いながらそれは冗談だと言

う。無駄に騒がされたような思いである。冗談にしても笑えない事案だ。

「今日の所は帰ろう、よく考えないといけないしね……」

「そ、そうだな……」

恭二は二人に帰ろうと促すと、二人を先導するかのようには銀座の駅めがけてそそくさを足を動かし始めた。

いつも誰かに付き添って動く恭二が、先導して歩いている。この時点で和人は奇妙な違和感を彼から感じ取っていた。

明らかに彼は何かを隠している。

先の彼の発言をそのまま鵜呑みにする訳じゃあないが、恭二の様子がいつもと少しだけ違うこともあり、和人は今の彼とどう接していいかわからなかった。

(……いや、よそう。もう……人を疑うのは……嫌だ)

和人と恭二は足並みを揃えて最寄りの駅、丸ノ内線の銀座駅に向かって進み始めた。

歩く速度は同じであつたが、どことなく二人の間はぎこちなく、会話らしい会話が交わされなかった。

木綿季も親友同士であるはずのこの二人に何があつたのかと、おろししながら二人の数歩後ろをとことことついていった。

数分歩き、銀座駅で丸ノ内線各駅池袋行きに乗り込み、電車に数分間揺られる。

木綿季は座席に腰を下ろし、無言でつり革に手をかけている和人と恭二を見上げている。

やがて途中駅の大手町駅に着くと、恭二は先に電車から降りようとドア付近まで近付き、降りる準備を始める。

銀座駅から大手町駅まではわずかに二駅の距離であつたが、その間も和人と恭二の間に会話はなく、終始無言であつた。

「それじゃあ、僕はここだから……」

「あ、ああ……」

恭二は電車から駅ホームへと足を踏み出し、振り返ると和人と木綿季に向かい「またね」と聞こえるか聞こえないくらいかの声で呟くと、

背を向けて歩き出した。

ホームに丸ノ内線のメロディが鳴り響き、もうすぐにも扉が閉まり、列車が発車しそうになっている。

そうこうしてる間にも、恭二の後ろ姿はどんどん小さくなっていく。いけない、このままではいけない。

そう思った和人はいてもたってもいられず、このまま消えてしまいそうな恭二に、周りの乗客への迷惑などお構い無しに声をかけた。

「恭二ッ！」

声をかけられた瞬間、恭二は歩く動作をやめ、首から上だけを僅かに後ろに向け、和人の次にいう言葉を待った。

列車が発進寸前ということもあり、乗り遅れるまいと次々に客が駆け込み乗車をしてくる。

その内の何人かのカバンや肘やらが、恭二の腕や和人の腕に当たった。

しかし、和人は気にせず恭二に声をかけ続けた。

「俺は……君のこと、本当に友達だと思ってる。だから……悩みとかがあつたら、気にせず話してくれ！」

「……………」

この言葉は、今の恭二にとってはあまりにも重たい言葉だった。

おそらく和人は、恭二が隠し事をしてることを見抜いている。それでも和人は詮索するどころか、信じて相談してくれと、声をかけてくれている。

その事実が、恭二にとってはありがたかったが、それと同時に大変に重たい一言でもあった。

「……………ありがとう、和人……………」

「……………」

恭二がありがとうと呟くと、駅構内のアナウンスが流れると同時に、電車の扉が閉まってしまった。

電車はゆっくりと走り出し、やがて少しずつ速度を上げていった。

遠くにいつてしまう恭二の背中を、和人は真っ直ぐに見つめていた。

やがて見えなくなる位置までくると、和人は肩を落とし、座席に座っている木綿季の方へと体を向けた。

「……………」

「和人……………」

右手を上着のポケットに突っ込み、左手でつり革を掴みながら、和人は窓の外の風景を眺めながら、先の恭二の態度について考えていた。正直、あんな恭二は初めてだ。

いつも詩乃や遼太郎のテンションに振り回されながらも、楽しく一緒に遊んでいた時や、詩乃のことについて相談を受けていた時と比べて、明らかに変だった。

真剣な雰囲気は感じ取れたのだが、それとは別に何か掴めないものを隠しているというか、それでいて俺たちに知って欲しいような、そんな感じがしてならないのだ。

もしそうならどうする？

決まっている、俺は彼の力になりたい。

恭二は俺がSAOで人を殺したと知っても、軽蔑せずに俺を受け入れてくれた。

そんな彼をどうして疑うことが出来ようか。

むしろ悩みがあるなら話してほしい、こんな俺をもっと頼ってほしい。

出会ってまだ少ししか経ってないが、俺は彼のことを本当に友達だと思ってる。俺に出来ることがあるのなら、全力で力になってやりたい。

「……………なあ、木綿季？」

「……………なあに？ 和人」

和人が木綿季に向かい、声をかけると指先をいじくりながら時間を潰していた彼女が顔を上げ、和人と真っ直ぐに視線を合わせた。

「帰ったら、話があるんだ。聞いてもらっていいか……………」

「……………もしかして、恭二のこと、かな……………」

「ああ……………」

「……………うん、わかった」

木綿季も道中の恭二の違和感に、少しだけだが気付いていた。

洞察力が鋭い彼女には、彼が何か悩みを抱えている、助けを求めているように見えていたのだ。

だから、そんな彼を心配して、和人も眉をひそめている。そう悟っていた。

和人が木綿季に「サンキュな」と微笑みながらお礼を言うと、木綿季も同じように笑顔を振りまきながら「どういたしまして」と返事を返した。

サラリーマンや学校帰りの学生に囲まれた車内で、ひたすら二人は電車に揺られながら、地元川越を目指していった。

同日 午後18:05 東京都文京区湯島 恭二のアパート

「……すっかり暗くなっちゃったな……」

恭二はあの後和人たちと別れてから、駅前のいつも詩乃と寄っている喫茶店で、二時間ばかり勉強をしてから、家路についていた。

十一月も半ばに入るとこの時間にはもうすっかりあたりは真っ暗になる。

都心なので明かりは至る所にあるが、裏路地などに入り込むと古い街灯では辺りを照らしきれない場所もある。

変な輩が多いこの物騒な世の中で、狭い道、灯が届きにくい場所は特に注意して行動しなければならぬ。

戸締りをしっかりとすることもそうだし、女の子の一人歩きなどもつての外だ。

暗くなる前に帰宅するか、誰か信頼出来る人と一緒に行動するのが望ましいだろう。

「……詩乃、ちゃんと帰れてるかな……」

『変質者に注意！』と書かれた立て看板の文字を見るなり、急に恭二は詩乃のことが心配になり、ズボンのポケットからスマホを取り出

し、アドレス帳から詩乃の番号を指定して、通話をかけた。

耳にあてがったスピーカーからはプルルルと呼び出し音が聞こえ、四回ほどループした所でガチャツという音とともに女の子の声が聞こえてきた。

『……………もしもし、恭二くん……………?』

聞きなれた声、詩乃の声だ。

その声色からは急に電話してきてどうしたの? 何か急ぎの用でもあるのかしら? といった意図が感じられる話し方だった。

「あ……………、ご、ごめんねいきなり」

『構わないわよ、こっちも今勉強が終わったところだし、少し息抜きしようと思ってたの』

「詩乃も勉強してたんだ」

『ええ、試験は終わったけど……………復習もしっかりしなきゃでしょ?』

大学受験も控えてる事だし、やれることはやっておかなきゃ』

「……………ふふ、そうだね」

よかった、どうやら詩乃はもう自宅にいるようだ。その事実を知ると恭二は途端にほっと胸をなでおろした。

先月、木綿季が小学校の元同級生に襲撃された事件のことを聞かされていたこともあり、不安になっていたが、どうやら考えすぎのようだった。

『ねえ恭二くん、今から暇かしら?』

「え……………今からかい?」

『ええ、鍋の材料を買ってきたのよ。最近特に冷えるし、恭二くんさえよければ一緒について思ったのだけれど……………』

そう言われて、恭二は今の時刻を確認する。

今の時刻は午後六時過ぎ。今から詩乃の家にお邪魔して晩御飯を一緒に食べ、それからしばらくくつちやべって遅くなったとしても、八時頃迄には帰宅できるだろう。

夜中の勉強も十分に出来るはずだと、恭二は頭の中でこれからのことをリスケして、詩乃からのお誘いを承諾したのだった。

「はは、なら折角だし、お邪魔しようかな……………?」

「ふふ、よかった。それじゃあ待つてるからね？」

「ああ、すぐにいくよ」

すぐにいくと言い伝えると、恭二は通話終了のアイコンをタップし、電源ボタンを押してスマホをスリープ状態にすると、自宅の目の前にまで来ていたにも関わらず、百八十度方向を変えて、すぐ近くにある詩乃の住んでるアパートへと向かって歩き出した。

正直なところ、喫茶店に立ち寄ったのはいいが、そんなに大して勉強が進んだ訳では無い。

日中に和人に言い放ったことが気にかかり、どうも勉強に身が入らなかった。

何故あんなことを言ってしまったのか、自分でもよくわからない。和人なら自分を信じてくれると思ったのか、それとも僕のことを本当の意味で救ってくれると思ったからなのか。

「……………」

夜になり、すっかり暗くなってしまった夜空を恭二は見上げていた。

ほんのり雲が出始め、更にそれがあたりを暗くさせている。

遠くにはどこかの飼い犬の遠吠えが聞こえ、バイクや原付が、狭い道を結構なスピードで走ってるエンジン音も聞こえてくる。

「ぼーっとしてても仕方ない、詩乃の家に行こう……。詩乃と話せば、少しは気分転換が出来るかもしれない……」

同日 午後18:15 東京都文京区湯島 詩乃のアパート前

ここには何度も足を運んでいる。初めて入れてもらったのは詩乃が初めてモデルガンを購入し、一緒に組み立てた時だ。

あの頃の詩乃はまだ拳銃の形をしたものを見たり触ったりすると、体が震え気分が悪くなり、何も出来なかった。

しかし、何も銃火器は人の命を奪うだけではない。凶悪な脅威から

大切なものを守ることで出て来る。

あの郵便局の事件の時だって、彼女は自分の母さんを守ろうと必死だっただけだ。

結果、確かに犯人を殺してしまったかもしれない。だけど、詩乃がやらなきや、もつと他に人が死んでいた可能性だってある。

むしろ、詩乃が命を奪われていた恐れさえあった。

結果論に過ぎないが、詩乃のあの行動は正しかったと言わざるを得ない。

しかしその代償が、心に深い傷を残すことだったとするならば、運命というのはあまりにも残酷すぎる。

「……多分、詩乃はまだ、心に傷をのこしている。どうやったらそれを取り除いてあげられるだろう……」

恭二は考えた。今の詩乃は確かに銃火器は触ったりすることが出来る。

しかし、何かのキツカケである事件のことを思い出すことがあってしまったらどうだろうか。

聞いた話によると、詩乃がトドメの弾を発射した時の犯人の顔は、この世のものとは思えない恐ろしい顔をしていたという。

今でもたまに、夢に出てくる時があるのだとか。

だから僕は、彼女に銃火器のことを教えた時、その犯人が使っていたとされる黒星ハイシンだけは意図して避けていた。

あれを目にした瞬間、彼女がまたPTSDになりかねない可能性があったからだ。

「……偽善もいとこだな……」

そう言いながら、恭二は詩乃の自宅のチャイムのボタンを人差し指で押し込んだ。

本当に彼女のことを考えてるのだとしたら、何故あんな不純な動機で詩乃に近づいた？

何故彼女に本当のことを言わない？

そして、何故自分が人殺し、死銃デスガンだということを明かさない？

結局、自分の身が一番可愛いからじゃないか。本当に周りのことを考えていたのなら、菊岡がいたあの場所で、全て洗いざらいぶちまけていえば良かっただけの話。

それが出来ないってことはつまり、臆病者で自分が一番大事なクズ野郎ってことだ。

結局、人間は簡単に変われることなんて出来やしない。和人たちと出会えて、少しはこんな自分を変えることが出来るかもしれないと思っただけ、なんてことない。

蓋を開けてみたら、本質はそのまま。臆病者で意気地無しで、他の人の視線を気にして尻込みして、敷かれたレールの上を行くしかない、あやつり人形、それが僕、新川恭二だ。

「……何をぼーっと突っ立ってるのよ？」
「……へ？」

何者かに声をかけられ、恭二はハツと我に返った。結構な時間、詩乃の家の玄関前で考え事をしていたようだ。

我に返った恭二は自分に話しかけてきた声の主である、朝田詩乃の顔を見ると「あはは……」と苦笑いを浮かべながら誤魔化していた。

「まったく……、こんな寒いのにブーツとしてたら風邪引いちやうわよ？ 早く中に入りなさいな」

「あ……、うん、ごめん。お邪魔するね」

詩乃が半開きになっているドアを、恭二が入れるぐらいのスペースにまで開き、彼を招き入れた。

恭二は玄関をくぐると「お邪魔します」と一言呟いて靴を脱ぎ、上がり框に足を下ろし、リビングへと進んだ。

詩乃の家は一人暮らし用の1LDKのアパートだ。床はフローリングで壁は白く、どこにでもあるようなごく普通の作りのアパートとなっている。

玄関入ってすぐ右手には洗濯機とユニットバスルーム。左手には小さめの台所と冷蔵庫が置かれており、いかにも一人暮らし用と言った感じだ。

奥にある部屋には入って右手に詩乃がいつも寝る時に使っているベッドと勉強机が置かれており、その上にはアミユスフィアが。

左手には着替えがしまっているハンガーラックにシエルフ。一番奥には縦鏡に本が沢山仕舞われている本棚が置かれている。

どこも綺麗に片付いており、詩乃がしっかりした性格だということを物語っている。いつも散らかっていて汚い部屋で暮らしている恭二は見習わなきゃなと思っていた。

「適当にかけてちょうだい」

「う、うん」

詩乃にそう促されると、恭二はいつもやってる通り、部屋の真ん中に置かれた小さなテーブルの近くに腰を下ろし、ベッドを背もたれ代わりにしてくつろぎ始めた。

テーブルの上にはガスコンロと、シルバーカラーのやたらとでかいラジカセが置かれている。かなりの重量感がある。

仮にもしこれで人を殴ったとしたら、絶対に意識があたり側へとすっ飛んでいってしまうことだろう。

「よし、おまたせね」

そう言うと、詩乃が小さめの土鍋を、緑色のミトンがはめられた手に持ちながら、台所から姿を現した。

鍋はぐつぐつと煮えており、美味しそうな匂いととも湯気が上へ上へと立ちのぼっている。

何の鍋か気になっていた恭二だったが詩乃がガスコンロへとそれを移すと、その正体が判明した。

「すごいね、すき焼きだなんて」

「安売りしてたから、ついつい材料買いすぎちゃったのよ。こうやって消費しないとダメになっちゃうでしょ？」

続いて取り皿を持ってきた詩乃が「それどけてもらっていいかしら」と声をかけると、恭二が小さなテーブルに置かれたでかいラジカセを床にどけ、空いたスペースに詩乃が取り皿、そしてまだ投入して

いない材料が乗せられた平皿を持ち出してきた。

「こ、こんなに食べられるかな……」

「食べなきやダメよ、恭二くんただえさえ体力ないんだし、お肉たくさん食べて、もつとタンパク質を取らないと」

「あ、あはは……」

鍋の中には牛肉、白滝、ニラ、人参、玉ねぎが入れられており、砂糖と醤油とみりんで味付けされた汁とともにぐつぐつと煮え立っている。

素材の元々の香りと、この甘辛いすき焼きのタレの匂いが、食欲を掻き立てる。

ひとしきりの仕込みを終えると、恭二は詩乃と一緒に手をあわせ、お行儀よく頭を下げて「いただきます」と口を開き、自分の取り皿に具をつついていった。

「はふっ……」

恭二はまず、先程言われた通り、タンパク質を取るために牛肉をつまみ、口へと運んだ。

熱々の牛肉からはすき焼きのタレが滴り落ちており、これを見るだけでどんどんお腹がすいてきそうだ。

「どうかしら？」

「……ん、うん、美味しいよ」

「そう、よかったわ」

自分自身あまり料理は得意な方ではないが、それなりに勉強して作り上げた鍋を美味しいと言ってもらうと、詩乃の顔は自然と笑顔になつていった。

初めて振舞った野菜炒めは、鼻屑目に言ってもあまり美味しいとは言い難いものであった。

野菜は半分生だし、味付けも薄いんだか濃いのだかわからない按配。

そんな苦い思いをした事もあり、今では人並みに料理を作れるまでに至っている。

そしてこうやって、美味しいと言って笑顔で食べてくれる人もい

る。

過去にあんなつらい事件に巻き込まれた詩乃であったが、今は、自分はずごく充実している。

支えてくれる仲間がたくさんいるし、こうして一番心配してくれる人もいる。

これ以上何を求めるといふのだろうか。

そりゃ、あの事件がキツカケでいじめにもあつたし、今もたまにあるの男の顔を思い出すことがあるのも事実だ。

でも、それ以上に今の自分は環境に、人に恵まれている。

自分を人殺しと知っていてもなお、普通に接してくれる友達がいる。

そんな今の生活がととても幸せだ。幸せすぎて、槍でも降ってくるんじゃないかと思うぐらい幸せなんだ。

「……詩乃？」

白滝を飲み込んだ恭二が、終始笑顔でニコニコしている詩乃の様子に気がなり、思わず声をかける。

声をかけられた詩乃は笑顔を絶やさずに「うふふ、何でもないわよ」と返事を返すと、恭二は頭に？マークを浮かべながら、引き続きすき焼き鍋をつついていた。

「……ふう、（馳走さま）」

「お粗末様」

あれから三十分経過し、平皿に盛られていた肉や野菜などの材料はすっかり空っぽになり、ほとんど二人の胃の中へと収められていた。

寒い夜に熱々の鍋は最高の晚餐のひとつとなった。

食事を終え、一息ついていると、詩乃は冷蔵庫からお茶を取り出し、小さなグラスに注ぎ、恭二に差し出した。

恭二はグラスを受け取ると「ありがとう」と一言添え、熱を帯びた体を冷ますかのように、今度はよく冷えたお茶を胃に流し込んだ。

(美味かったな……詩乃の作ったすき焼き……)

安い材料で作った割には、今回のすき焼きは悪くない味だった。素材の味がちゃんと出ていたし、詩乃ブレンドのすき焼きの割り下もいい味付けだった。

本当に詩乃は腕を上げたようだ。その証拠に恭二の顔には「満足した」と書かれてもおかしくないような、ほっこりとした表情となっている。

「恭二くん、今夜はまだいるの？」

詩乃がグラスに口をつけながら尋ねると、恭二が手に持っているグラスを指でいじくりながら返事を返す。

「そう……だね、勉強もあるから、遅くても八時頃までには出ようかなって思ってるよ」

「……そう」

やっぱり恭二は帰ってしまう、その事を知ると詩乃は少しだけ溜め息を吐き出すと、表情を落とした。

しかし無理強いは出来ない。大検の資格を取ろうとしている彼にとって、勉強は生命線。本来ならば寝る間も惜しんで勉強を進めなければならぬ。

ちやつかりALOで一緒に遊んではいるが、そもそも遊ぶなどとてもないと言われてもおかしくないほど、彼は実際追い詰められている。

「ごめんね、本当はもっと詩乃とお話したいんだけど」

「ううん、いいの。ただ……ちよつと今日の恭二くん、変だったから気になって……」

「……変？」

グラスをいじっていた指の動作を止め、恭二が反応を示すと、詩乃は自分のグラスをテーブルに置き、恭二の目を真っ直ぐに見ながら、続きを語り出した。

「ええ、なんか変に落ち着いていないというか、ちよつとだけよそよそしいというか……」

「……」

詩乃が首を傾げながら視線を部屋の隅にやり、恭二の様子を指摘した。

すると恭二は黙りこくってしまい、あからさまに動揺し、項垂れてしまっていた。

これでは「私は隠し事をしています」と公言しているようなものだ。

「ねえ、何か悩みとか……あるんじゃないの？」

詩乃が柔らかい口調で声をかける。SAOやALOにいた時のような強ばった話し方ではなく、小動物を相手に優しく接するときのような、そんな話し方だった。

「……………」

どうするべきなんだ、詩乃には全てを話すべきか。

この僕こそが、今世間を震撼させている人殺し、死銃デスガンだということ

を。

そしてその事件を解決するよう依頼を受けたことを。

全てを詩乃にぶちまけてしまえばいいだろうか？ 全部吐き出して楽になつてしまえばいいか？

「ねえ、恭二くん？」

……だ、ダメだ、出来ない。言えない、言えっこない。第一、言つたところで信じてもらえるかどうかなんてわからない。

そもそもにして、僕に全てを暴露する勇気が、度胸があるわけがない。

僕が強くいられるのは、仮想世界あそびだけだった。でも、それすらも奪われた。

ゼクシードに、あの男に全てを狂わされた。

だから、GGOを捨て……いや、GGOから逃げて、ALOにやってきたんだ。

新しいゲームは……悪くなかった。

仲間がいたし、新しい友達もたくさんできた。みんないい人だ。高校を中退した僕とも分け隔てなく触れ合ってくれる。

でも、あの世界でしか僕は強くなれなかった。いや、強くあろうとした。

何のために？ 気分転換？ ストレス発散？

いや、そんなシンプルなものじゃない。

GGOにいる間は、僕は最強のランガンのストライカーとして君臨していた……はずだった。

現実の弱い自分から目を背けて、偽りの自分の姿を自分と思い込もうとしていた。

その結果はどうだった？ なんてことは無かった。

『バランス調整』なんてふざけたアップデートのせいで、僕は居場所を奪われた。

フレンドも一人もいなくなった。もう、何もかもがどうでもよくなった。

そんな何もかもから逃げることしか出来なかった自分が詩乃に真実を教えられるか？

無理だ、出来っこない。そもそも今回の事件の発端だって、元はと言えば……。

「……くん！ 恭二くん！」

「……はっ」

「だ、大丈夫……？ 顔色悪いわよ……？」

詩乃にそのことを言われると、恭二は彼女の部屋に立てかけられている鏡をのぞき込み、自分の顔色を確認する。

(……酷い顔だな……)

とても表に出せる顔じゃない。

青ざめていて覇気がない。髪の毛もガサツいていてツヤがない。目の下にもクマができており、不規則な生活を送っていることを物語っている。

「ねえ、本当に大丈夫？ 具合が悪いなら、私のベッド貸してあげるから……少し横になった方が……」

「……大丈夫だよ……」

詩乃は彼の体の具合を心配し、すぐ横にしゃがみこみ、肩を手で支えて様子を伺った。

当人は大丈夫だよと言っではいるが、誰が見ても大丈夫だと言える

顔つきではない。

詩乃の言う通り、少し横になって体を休めた方が良さそうだ。しかしそれでも恭二は頑なに、世話になるのを拒否し続けた。

「だ、大丈夫って……全然そんな風に見えないわよ。そんなに顔色悪くして……、ただでさえ不規則な生活してるんだから、休めるときに休まないと、本当にぶっ倒れちゃうわよ？」

「だ、大丈夫だから……本当に」

……詩乃の言う通り、気分は最悪だ、日頃の無茶がたたったかもしれない。

でも今まで平気だった。だから続けた。

昼夜逆転してるときもあったが、今までちゃんと続けてこれた。

でも何故だろう、今は……最高に気分が悪い。汗が止まらないし胸も苦しい。

呼吸も荒くなってきた。頭もクラクラ目眩がするし、それに……なんだかとてもイラついてきた……。

「恭二くんてばー！」

変なところで頑固な恭二を是が非でも休ませようと、詩乃は恭二の脇腹に手を潜り込ませ、やや強引にベッドに寝かせようと体を動かそうとした。

しかし、タイミングが悪かった。

日頃からの疲れがたまり、精神的動揺をしてしまったている今の彼にとって、それは火に油を注ぐ行為となった。

「だまれよッ!! 大丈夫だって言ってるだろッ!!」

……ああ、やってしまった。

「……きよ、恭二……くん?」

日頃大人しくて人当たりがいい恭二が、声を荒げ、よりにもよって自分が好意を寄せている詩乃に対して怒鳴り散らしてしまった。

詩乃は初めて見る恭二の態度に愕然とし、一体彼はどうしたんだろうと、目を丸くして立ち尽くしている。

詩乃の表情を見た恭二は、ハッと我に帰り、今自分がしてしまったことを自覚した。

何をやっているんだ僕は、自分のことでイラついて、勝手に気分を悪くして、気を使ってくれた詩乃に対して乱暴な口をきいてしまった。

最低じゃないか……何をしてるんだ、僕は……。

「……ごめん、ちよつと今日は帰るよ……」

「……………」

恭二は体を震わせながらもゆっくりと立ち上がると勉強道具一式が入った、白い布製のバッグを手に取り、重たい足取りでリビングを後にし、玄関へと向かった。

詩乃はただただ、呆然と彼の背中を見つめている。あんなに感情を表に剥き出しにした恭二を見るのは初めてだ。

いつも優しく、わがままを聞いてくれて、いつも隣で私を笑顔にしてくれた彼が、何があったのか穏やかではなくなっていた。

詩乃は黙って彼が帰宅するのを見つめながらも、ただごとではない、彼の身に何かあったんだと確信した。

温厚な彼を変えてしまうほどの出来事が、ここ最近起きたのだ、と。

「……怒鳴ったりしてごめん……」

恭二は玄関のドアノブに手をかけながら、首から上だけ詩乃の方へ向け、一言だけ謝ると、ガチャンとドアを開けて、そのまま出ていってしまった。

同日 午後19:18 東京都文京区湯島 恭二のアパート前

「……はあ……」

詩乃の家を飛び出した恭二は、これまでの人生で一番深く、大きい溜め息を吐き出しながら、自宅の玄関前へと辿り着いていた。

白いバッグからカードキーを取り出し、ドアノブについている電子

カードリーダータイプの錠前の溝にスラッシュユさせ、ロックを解除した。

「……最低だ、僕は……」

ご飯までご馳走になって、気も使わせて、散々心配かけて、後始末もしないで一方的に怒鳴り散らしてそのまま出てきてしまった。

男として……というより、人として最低だ。

いくら自分のこれまでの生い立ちと、置かれた環境が過酷だからといって、彼女にあたることないだろう。

詩乃だつてとてつもない過去を背負って生きてきてるんだ。それを一番わかつてたのは誰だ？ 自分じゃないか。

なら……もつと男らしくなれよ、胸を晴れる人生を歩けるような、でかい男になれ。

「……なんてね、思うだけなら誰でも出来るよ……」

恭二は自己嫌悪に浸りながら、自分の部屋へと繋がっているドアノブへと手をかけた。

……が、彼はこの時、とても重要なことを思い出していた。

さつきここに帰ってきた時、なんて思った？

物騒な世の中になってきたから、戸締りや一人歩きがどうか……つて、危機感を覚えてたはずだ。

そこまで意識しておきながら、どうして自分の家の戸締りを忘れた……？

第一、ロック解錠の電子音声がかえっていなかったじゃないか。

……い、いや、今は過ぎたことをどうこう言っても始まらない。

中の様子を確かめなくては……、いや、念のため警察を呼んでおいた方がいいか？

「……ちよつと待てよ、確かに出かける前、僕は鍵をしつかりロックしたはずだ……」

ここで、恭二は冷静に思い返した。この世に同じセキュリティを解錠出来るカードの存在を。

まず、このロックを外すことが出来るのは恭二が持っているいつものカードキー。

そして、残るはこのアパートの大家さんが所持してるマスターキー、この二つだ。

「大家さんが僕に無断で開けるはずがない……、必ず連絡が来るはずだ」

だとすると残る可能性は、電子ロックを解錠出来るプログラムを走らせることが出来る、ハッキングだ。

しかし、そこまでして盗みに入るような価値が僕の部屋にあるとは思えない。せいぜいアミュスファイアとパソコンぐらいだ……。

……ん、アミュスファイア……、パソコン？

「……いいや……いる。このロックを外すことの出来る、もう一人の人物……」

彼の自宅のロックを解錠することが出来る人物に心当たりがあるのか、恭二はドアノブに手をかけ、ゆつくりと捻り、鉄製の扉を手前に引いた。

引かれたドアはキィ……と、金属のドア独特の音を響かせながら、ゆつくり開かれた。

「……………」

部屋の明かりは消えている。まだよく見えないが、物を盗られたりだとか、荒らされた形跡もなさそうだ。

しかし、違和感がある。不気味で、背中がぞわぞわとするような、寒気にも似た不気味さが、恭二の部屋から漂っていた。

その違和感の正体は恭二のベッドの方向から感じられる。この暗闇に完全に溶け込み、むしろこの闇こそが正常で、世界からは隔離されている場所で過ごしているような、そんな感覚さえ覚えさせる。

恭二が感じる違和感は、意思をゆつくりと恭二に向け、ねつとりとした口調で語りかける。

「随分と、遅かったな。我が、弟よ」

「……………何しに来たんだよ……………、兄貴」

第69話〈新川兄弟〉

西暦2026年 11月16日(月) 午後20:00 東京都文京区湯島 恭二自宅アパート

「……………」

自宅の鍵を開けた犯人は目の前にいた。

恭二の実の兄、赤眼のザザこと新川昌一その人だ。恭二は一人暮らしを始めてから、カードキーのスペアを家族にだけ手渡していたのだ。

何故昌一が恭二の家にいるかはわからないが、とにかく一人になりたい恭二にとって、最もいてほしくない人物だった。

今のメンタル的にも、人間関係上としてもだ。

「……………出ていってくれないかな、兄貴」

淡々と、不機嫌そうに恭二が口を開く。その言葉に感情はなく、マシンの発する電子音声のように機械的な言葉であった。

「しばらく、見ないうちに、随分と、つれなく、なつたな……………」

昌一は言葉を不自然な位置で区切りながら喋っている。

SAO時代、殺人ギルドファイ・コフィン笑う棺桶の幹部であり、現在は学校にもいかず仕事もせずに、ただただ毎日を好き勝手に過ごしている彼の言葉は、ひたすらに不気味の一言だ。

どういう意図で話しているのか、それともこれが彼の素の喋り方なのかはわからない。

わからないが、恭二が何も疑問に思っていないところを見ると。この話し方は昔からのだろう。

「兄貴、僕は今一人になりたいんだ。悪いけど出ていってくれないか」昌一の放つ不気味な雰囲気は臆することなく、恭二は感情を殺して出ていってくれと声をかけ続ける。

本当は実の兄であるのにも関わらず、今すぐに殴りたい気持ちだ。それぐらい今は虫の居所が悪い。

しかし昌一はそんな彼の心の趣きなど知ったこっちゃなく、彼の冷

蔵庫から勝手に拝借したであろう缶ジュースに口をつけ、ゴクゴクと音を立てながら喉を通していった。

「……まあ、さて。今日は、お前に、用があつて、来た」

「僕にはない！ いいから出ていけよ！ さもないと……！」

感情が高ぶり、恭二は再び激昂し、昌一に対して罵声を浴びせていた。

呼吸は荒くなり、心臓の鼓動は早くなり、冷静でなくなっている。まるで彼の目の前にいるこの兄の存在そのものが、忌々しいものであるかのように、負の感情をあたりに撒き散らす。

仲の悪い兄弟なぞ星の数ほどいるが、恭二はある種、恨みにも近い感情を昌一にぶつけている。

そう、恭二の実の兄、新川昌一こそが、彼の人生を狂わせた張本人であつたからだ。

弟恭二と違い、生まれつき体が弱い昌一は、幼い頃から病気になりがちだった。

直接命に関わるようなものではなかったが、小さい病気を度々患っていた。

医者である彼らの父親は、そんな昌一を早々に後取りから見限り、その期待の矛先を恭二へと向けた。

それからというものの、父親からの期待は全てプレッシャーへと代わり、恭二の身に重くのしかかった。

来る日も来る日も勉強勉強。塾に家庭教師の勉強三昧。自由などほんの少ししかなかった。

一方で兄の昌一は、その期待から外れたためか、自由奔放に暮らし、何不自由ない毎日を過ごしていた。

恭二にとつては、それが羨ましくて仕方なかった。僕もあんな風に……とまではいかないけど、もう少し普通に遊びたい。

学校の友達と馬鹿騒ぎしたり、帰りにゲーセンよつたり、色恋話に花を咲かせたり、普通の青春がしたかった。

「……………」

でも、仕方ないと思った。兄貴は体が弱い。運動も苦手で、遊べな

いのは僕と同じだった。

そう自分に言い聞かせ、無理やり納得して、これまで生きてきた。そう、生き続けてきた。

しかしとある日、兄貴が例のSAO事件に巻き込まれた。

頭にナーヴギアを被り、身動き一つとれなくなった兄貴を見たのは、自分の父親が経営する病院の一室だった。

別に、そんなことはもうどうでもよかった。兄貴がどうなろうと、このままHPがゼロになって死んでしまっても、僕には関係ない。

勝手にやってくれ、そんな感じだった。

それから、父は完全に兄貴を見放し、より一層僕に期待をかけてきた。

それから必死に勉強し、なんとか中学時代に好成績を維持出来るようになる、ようやく自由の時間が増えた。

以前から興味を持っていたミリタリーに費やせる時間も作る事が出来た。

結果さえ残せば、父は認めてくれた。

そしてとある日、詩乃と会うことが出来た。

キツカケは僕の不純で自分勝手な思いからだったけど、僕に分け隔てなく接してくれる数少ない友達だ。

高校に入っついでいじめにあつて、退学してからも、詩乃だけは僕の味方でいてくれた。

その頃からかな、彼女に特別な感情を持つようになったのは。

……そして兄貴がSAOに囚われてから二年余り経ち、SAOはクリアされ、生き残ったプレイヤーはあのゲームから解放された。

その中に、僕の兄貴もいた。

母は泣いて喜んでたけど、僕と父はそこまで思っていなかった。

むしろこのまま一生寝ていればいいのに、とまで思うようになってしまった。

自覚はなかったけど、僕は兄貴のことを羨ましいと思いつつ、心のどこかで妬ましいとも思っていたようだった。

でも、その妬ましいと思う感情が、軽蔑、憎みといったものに変わっ

たのは、それからだった。

兄貴はアインクラッドで自分のやったこと、PK……即ち、人殺し行為を、まるで武勇伝のように語り出した。

実に楽しそうに、誇らしげに、快感を得ているかのように、楽しげに淡々と語り続けた。

(……………)

その瞬間、僕の中で何かが壊れた。

あの世界でアバターを倒すということは、現実世界のプレイヤーを殺すということだ。

何故それを誇らしげに語っているのだ？ この男は。

仮にも人の命を救う医者の子息だろう？ 何故そんなに嬉しそうなんだよ。人の命を奪うことの、何がそんなに楽しいんだよ。

僕はその人の命を救う医者になるために、必死に勉強してきたって
いうのに……………！

許せなかった、この新川昌一という男が。

こんなクズが自分と血が繋がっていると意識するだけで吐き気がする。

誰のせいで僕がここまで頑張ってると思ってるんだ。僕だつて……………僕だつてもっと自由に暮らしたかった……………それなのに……………！

「さもないと、なんだ？」

手に持っている缶ジュースの中身を全て飲み干すと、グシャッという音を立てて空き缶を握りつぶし、ゆっくりと顔を恭二の方へ向け、声をかける。

「兄貴のことを殺してしまえようだよ」

殺意にも近い感情を剥き出しにし、声帯を震わせながら恭二が言葉を口にする。

拳はわなわなと震え、何かのキツカケですぐにでも兄に殴りかかり
そうな勢いだ。

「ほう、随分と、偉くなったな」

「御託はもういい！ さっさと出ていけよ！」

ついに感情の臨界点を超えた恭二が、手に持っていた自分のバッグ

を傍らに乱暴に投げ捨てると、勢いそのままに昌一の襟元を掴みにかか

る。昌一は恭二に掴まされると、体重が軽いためか腰を浮かされ、完全に無防備な体勢になっている。

荒くなつた恭二の息が、顔が近いためか昌一の顔に当たっていた。体勢から見れば、昌一の方が圧倒的に不利だ。体も細く、本気で殴れば骨の一本や二本簡単に折れてしまいそうならいかに貧弱な体つきだ。

誰がどう見ても身体も体力も上回る恭二の方が勝つ、そう思うだろう。

しかし、この圧倒的不利な状態であるのにも関わらず、昌一はそのニヤけた顔を歪ませ続けていた。

「フフフ……」

「何がおかしいんだよ……」

「まあ、落ち着け、何も俺は、喧嘩をしに、きたわけじゃあない」
「……………」

イライラが募る恭二だったが、目の前のこの男が病弱がちで、自己より弱い存在だということを思い出すと、自然と手の力を緩め、投げやり気味に彼の襟元から手を離れた。

解放された昌一はベッドに腰を下ろし、襟元を元に直すと上着をパンパンと手で払い、恭二を見つめ続けた。

「……………何の用なんだよ……………」

「ふふふ、なあに、簡単な、話だ」

昌一はそう言うと、再び不気味な笑を見せながら、まるで死神のように恭二に語りかけた。

そのあまりにも不気味なありように、恭二は自分の方が体格的に有利であるのにも関わらず、若干ながらも戦慄を覚えていた。

「もう一度、手伝え、恭二」

「……………断る」

「……………何？」

「断る、と言ったんだよ、兄貴」

「……………ほう」

わざわざ家にまで足を運んできたのに、本当につれない弟だとも言いたげに、昌一は恭二を見つめている。

兄貴が何を言おうと聞く耳を持たない。むしろもうこの男と関わりたいくない。そんな雰囲気だ。恭二からは感じられた。

「人殺しの手伝いなんて、もう御免だ。こう言ってるんだよ、兄貴」

「……………」

「兄貴……………いや、死銃デスガンって呼んだ方がいいかな？」

「……………」

自らを死銃デスガンと謳っていた恭二が、自分の目の前にいる実の兄に向かい、同じように死銃デスガンとその名を呼んだ。

そう、恭二の兄である昌一、彼もまた死銃デスガンなのである。

事の発端は、彼らがGGOの上位プレイヤーから陥落したことから始まった。

大幅なアップデートでバランス調整がなされた今現在のGGOは、STR&VIT型が最強のスタイルとなっている。

プレイヤースキルが求められるGGOにおいて、ステータスの型が勝敗に繋がるということはないのだが、それでも有利不利というものは出てくる。

彼らのようなAGI型ビルドが最強を誇っていたのは、以前のバランスでの話だ。

しかし、そう促していたプレイヤーが一人、いたのだ。

ステータスをAGIに極振りし、中距離火器をぶっぱなしまくるのが、かつての最強スタイル。

第二回BOBのチャンピオンである、ゼクシードが広めていた話だ。

しかし、アップデートが入るとゼクシードは綺麗に掌を返し、ちやつかりSTR&VIT型に転向していたのだ。

チャンピオンである彼の話を信じて、AGIにステ振りをしていたプレイヤーは落胆し、ゲームを引退したり、彼に騙されたと恨みを持つものまで現れ始めた。

とまあ、これまでの話しならMMOでは良く聞く話である。出る杭は打たれるとはよく言ったもので、圧倒的な戦果をあげるスタイルは修正が入るようになる。

ゲームのバランスを保つためや、多くのプレイヤーがそのスタイル一辺倒になることで発生するマンネリ化を防ぎ、コンテンツの終焉を避けるためだ。

ただ、GGOが他のMMOと違う点と言えば『クレジット』と呼ばれるゲーム内通貨を、現実のお金に換金出来る『ペイバックシステム』を採用していることにある。

この話だけ聞くと何やらきな臭くなってくるが、元々GGOを運営している『ザスカー』なる企業は海外に本社を置いている。

日本にもサーバーがあり、恭二たちのようにプレイしている人間もいる。

しかし、法の網をくぐるとはよく言ったもので、海外に本社があるザスカーを日本の法律で縛ることが難しいというのが現状だ。

そこで法律的にはグレーながらも、ゼクシードたちのようにGGO内で手に入れた通貨を現実の円に換金し、生活を続けられる人がいる、というわけだった。

つまりGGOプレイヤー、それもガチ勢と呼ばれているプレイヤーのほとんどは、GGOのペイバック機能を使い、生活をしている人も少なくない。

ここにいる新川昌一も、その中の一人だ。

やり込みながらも半分趣味としてやっていた恭二はいざ知らず、昌一はかなりの情熱をこのGGOに注ぎ込んでいた。

勝つため、勝ち続けるために経験値をため、ステータスを振り、酷な作業プレイを毎日こなし、アバターを鍛え続けた。

だが、それはある日簡単に壊された。

全てを奪われた気がした。ゼクシードあの男の口車に乗っていないければ、こんなことにはならなかったのかもしれない。

しかしもう遅い、振ってしまったステータスはもう元になんか戻らないし、新しいアカウントを作って一からやり直すのも馬鹿馬鹿し

い。

収入もなくなる、昌一はゼクシードに全てを奪われたのだ。彼のよ
うに、ゼクシードを心の底から恨んでいるプレイヤーも少なくはな
い。

「分かってるのなら、話は早い。次のターゲットが、決まった。手伝
え、恭二」

「……嫌だね」

「……随分と、偉くなったな」

「少なくとも、兄貴よりはマシなつもりだよ。これでも毎日勉強頑
張ってるんだ」

「……………フッフ」

頑なに拒否の姿勢を崩さない弟の態度に、何故か昌一は不敵な笑み
を崩さなかった。

本当に不気味なこと極まりない。

S A Oでプレイヤーをキルして、彼は変わってしまった。いや、そ
れならまだいい。

現実で人を殺してしまったことで、彼はもう人間ではなくなってい
た。

今世間を震撼させている死銃事件^{デスガン}。その事件の直接の黒幕が何を
隠そう、この新川昌一なのだ。

自分たちを陥れたゼクシードに一泡吹かせてやろう、そういった気
持ちで彼は恭二に話を持ちかけた。

恭二も最初は軽いイタズラでもするのかなと思います、遊び半分で兄に協
力した。

恭二の役割はこうだ。

昌一のアカウントで彼のアバターである『Sterben^{ステルベン}』でログ
イン。

G G Oの街グロッケンにある酒場に置いてある、仮想モニターに映
されていたM M Oストリームに出演している『ゼクシードのアバ

ター』を銃で撃つこと。

ただこれだけである。

計画の遂行と組み立ては昌一が全て行い、恭二は少し手伝っただけだ。

そして、仮想世界で恭二が銃撃をするタイミングに合わせ、現実世界で昌一が、ゼクシードの現実の体に無針注射器でサクシニルコリンと呼ばれる筋弛緩剤を体内に注入。

すると数分後に筋肉が硬直し、肺と心臓は停止。そして死に至る、というわけである。

普通ならバレそうなものだが、無針注射器を使用したことと、昨今にVRMMOをプレイしている人の変死事故が相次いでいたため、今回の被害者もその件だと簡単に処理されてしまい、身体の詳しい解剖も行われず、足がつかなかったというわけだ。

こんなにも都合よく準備を済ませられ、綿密に計画を実行出来たのも、大病院の院長の息子である昌一だからこそ出来たことだ。

彼ならば病院に顔が良くし院内をふらついても怪しまれることは無い。ちよつと見学したいとでも言えば良い。

そして必要な備品を盗み出し、今回の犯行に用いた、というわけだ。

「……僕はもうごめんだよ、人殺しの手伝いなんて」
「……………」

恭二はそう言いながら、勉強机の椅子に腰を落ち着けると、先程まで抱いていた昌一への怒りがどこかへと消えていた。

もう、怒りを通り越して呆れ返っていた。

何故、そこまでしてトップにこだわる？ 兄貴がやっていることはただの犯罪だ。

ここまできたら、もうPKとかの話ではない。

僕はもうこれ以上関わりたくない、さっさと出ていってくれ、そんな心境だった。

昌一は肘を自分の股に当て、顎を掌で支えながら、弟の態度は変わらないと察すると、漸く諦めたのか大きく息を吸い、また大きく吐くとゆつくりとベッドから立ち上がり、玄関に向かつて歩き出した。

その様子を「ようやく帰るのか」と恭二が黙って見つめている。今日はもう勉強する気分でもない。このまま寝て体を休めよう、そう思っていた。

しかし、兄の次に放った一言で、恭二はそれどころではなくなった。

「アサダ……」

その言葉を聞いた瞬間、恭二の体が凍りついた。聞き間違いだろうか、兄貴は今なんて言ったんだ？

アサダ……、ま、まさか……兄貴は詩乃のことを知ってるのか!?

「アサダ、シノとか、言ったか？ 随分と、仲がいいようだな」

「……何のことだかわからないな……」

恭二は震える体を必死で抑えながら、自分には交友関係などないと訴えていた。

しかし、嘘をつくのが下手なのか、動揺しているのか、視線が泳ぎまくり、誰がどう見ても挙動不審で怪しいように見えてしまっている。

「アサダ、シノに、キリガヤ、カズト。最近よく、つるんで、いるようだな？」

「……何が言いたい……ッ」

恭二は三度自分の体温が上昇していくのを感じていた。しかし背筋は氷柱でも突っ込まれたかのような寒気を覚え、変に体が緊張のせいか固くなっていくのを感じる。

一体兄貴は何が言いたいんだと、先程までいなくなってほしかった兄のその先の言葉が、気になって仕方がなかった。

「……珍しいと、思った。内気なお前に、トモダチ、なんてな、ククク……」

顔の角度を上げ、非常に下衆な顔つきを見せながら、昌一が恭二に言葉を投げかける。

その笑みで、恭二は察してしまった。兄貴が、昌一が何を考えてい

るのかを。

今思えば、兄貴は自分の家のカードキーのスペアを持っている。それどころか、病院から盗み出した緊急時解錠用のマスターキーまで所持している。

つまり、彼は電子ロックを採用している日本中の家屋に侵入することが出来てしまう。

そして、僕の気づかないうち、そう、例えばフルダイブしている最中に忍び込み、僕のスマホを盗み見て情報を得ることも可能なはずだ。

パスワードも安易なものにしていたし、兄貴に中身を抜かれているかもしれない……！

アドレス帳のデータ、LINEでのやりとり、はたまたBluetooth機能を使った相手方の位置情報などなど。

「……フッフ」

この不敵な笑みで、兄貴が何をしようとしているかがわかってしまった。

兄貴は、詩乃や和人たちを人質にして、僕を脅そうとしているんだ。黙って従えば彼女らに何もしない。だが、従わなければ、自宅に侵入し、病院から盗み出した薬品を注射し、殺すというのだ。

「……まあ、無理にとは、言わない。お前も、忙しい、ことだろう」
勿論この推理は憶測だ。電子ロックの履歴などを解析すれば白黒はつきりするだろうが、あの狡猾な兄貴が根回しをしていないなんて思えない。

十中八九、兄貴は情報を盗み出している。そして、もし僕が兄貴に従わなかった場合……。

(し、詩乃……、和人……)

これまで以上に寒気がした。自分の大切な人たちが、自分の所為で命を奪われるかもしれないと考えるだけで、身の毛もよだつ思いがした。

詩乃はようやく、あの呪縛から解放されようとしている。和人だって、木綿季ちゃんの病気を治して、やっと平穏な生活を手にした。

それを……僕の身内が……壊そうとしている……。

彼は後悔していた。何故あの時に、全てを洗いざらいぶちまけなかったのかと。

和人に、菊岡に事件のことを暴露してしまえば、早々に兄貴は逮捕され、こんなことにはならなかったはずだ。僕の責任だ、僕の……僕の！

ど、どうすればいい？ 今……僕はどうしたらいい!?

警察に通報して保護してもらおうか？ い、いやそんなことしたらバレルに決まっている。下手な動きを見せれば全てお終いだ。

兄貴は見せしめに詩乃を殺して、当然和人も手にかけるだろう。そして、口封じのために僕をも殺すかもしれない。

兄貴はもう、狂っている。SAOでプレイヤーを殺して、現実世界でも人を殺めて、もう人の心を失っている。

今更死体が予定より二、三人増えたところで何とも思わない。

今は……とにかく時間を稼がないといけない。

僕に残された時間はもうほとんどない、次のターゲットには申し訳ないが、犠牲になつてもらおう。

絶対に……絶対に詩乃と和人には手を出させない。僕に人の温もりを与えてくれたあの二人に、絶対に手を出させはしない……！

「ま、待ってくれ、兄貴！」

「……………」

少し慌てた口調で恭二が声をかけると、昌一はゆっくりと首から上だけをぐにやつと動かし、恭二のいる方へと向けた。

その顔は、予めこうなることがわかっていたかのような、相変わらぬの不気味な笑みを見せたままであった。

「……僕は何をすればいいんだ」

「……フッフ、お前は、頭が良くて、助かる」

「……………」

「さあ、話し合いを、始めようか。兄弟で、水入らず、でな。ククク……………」

昌一は体の気を百八十度回転させ、先程までいたベッドに再び腰掛

けると、ニタニタ笑いながら、これからのことを話した。

その話を聞かされる度に、恭二は拳に力を込め、やり場のない怒りを感じていた。

(詩乃……和人、僕は……)

同日 同時刻 埼玉県川越市 桐ヶ谷邸 和人の部屋

その頃一方、川越の自宅へと帰り、晩御飯を済ませた和人と木綿季は、部屋のベッドに腰を落ち着けていた。

いつもはたくさん食べる木綿季であったが、この夜だけはいつもよりも量を控えめにし、夕食を終えた。

和人とちゃんと話し合うため、満腹を避けようとしての選択だった。

「ねえ和人、恭二のことで話したいことって……何？」

「……そうだな、えっと、まず何から話すか……」

和人はそう言うのと、ベッドから腰を上げてPCチェアへと腰を落ち着けた。ベッドのふかふかとした感触よりも、このやや固めの方が頭が働くしよく物事を考えるのに集中出来る。

和人は腕を組みながら、昼時から夕方までの恭二の発言や挙動、そして自分たちへの態度について考えていた。

「……………」

まず、結論として、彼は死銃^{デスガン}である可能性が高い。

根拠としては、わざわざあのタイミングでこの話を持ち出したこと。そして菊岡と話し合っている時に終始無言であったこと。

そして何より、自分たちへの態度があからさまに違っていたことだ。

本当に彼が死銃^{デスガン}でないとするならば、あんな話は持ちかけないだろうし、今回の事件に関与していないのだとするならば、もっと堂々としていたはずだ。

彼は俺と同じで嘘がつくのが下手な方だ。誰がどう見ても動揺していたし、そして、何故かはわからないが、あの時の恭二の顔から「僕を助けてくれ」と訴えているようにも感じられた。

何故そのように感じられたかはわからないが、普通じゃないことが彼の身に降り掛かっている。そんな予感がした。

「……木綿季、俺の思ったこと感じたことを話すな？　だけど、これは憶測の域を出ない。それを前提として聞いてくれ」

「え？　あ……う、うん」

「まず結果だけ言うのだな、恭二は……恐らく死銃だ」

「……え、そ、それ……本当なの……!？」

和人から語られたことに、木綿季は驚きの表情を隠せなかった。あんなに優しい恭二が人殺し、死銃デスガンなんて、信じられるわけがない。

もちろん、和人も信じたくはない。しかし、和人はあくまで冷静に分析した結果を淡々と木綿季に話して聞かせ続けた。

「……そう、なんだ……」

「ああ、しかし……やはりこれは俺の憶測の域を出ない。何故かって……証拠がないんだから……」

「証拠……」

菊岡からの依頼を保留にしていたのにもかかわらず、結局は死銃デスガン事件を解決するために首を突っ込んでいる。

しかし、和人も自分に関係のないことならば、こうして頭を悩ませていたりしなかつたらう。

恭二が関与している。この可能性だけで、彼が動く理由としては充分すぎた。何もなければそれでいいし、何かあったのなら、彼の力になりたいと、そう考えているのだ。

「でもさ、実際どうするの？」

「そこなんだよな……、とりあえず菊岡さんに連絡は入れるとして、そっからどうするか……」

「うーん……」

二人が首をかしげて頭を悩ませていると、突如として、和人のスマートフォンにメッセージが入った。

軽快な着信サウンドとバイブレーションで揺れているスマホを手に取り、画面を確認してみると、送り主の名前が判明した。

「シノン……？ 何の用だ？」

「え、シノン？」

画面真ん中辺りに表示されている通知を指でタップし、メッセージを開くと、文脈はともシンプルでこれだけ書かれていた。

「突然ごめんなさい、今からALOで会えないかしら？ 恭二くん
のことで相談したいことがあるんだけど……」

「なっ……恭二？」

和人はそのメッセージから感じるものがあつた。日中の恭二の様子のおかしさ、死銃事件^{デスガン}、そして詩乃からのこのタイミングでのメッセージ。

直感だが、和人はこれらは一本の線でつながっている。そんな予感がしていた。

和人は詩乃からのお願いを承諾し「わかった、すぐにいく、木綿季も一緒に連れていくな」と返信し、木綿季に仮想世界に行くことを促した。

「木綿季、ALOに行くぞ。何でかはわからないけど……妙な胸騒ぎがする……」

「え？ あ……う、うん。いいけど……突然だなあ」

「ごめんな、ちよつと付き合ってくれ」

「大丈夫だよ、和人が行くところなら、ボク……どこへだつてついていくよっ。」

「……サンキュな、木綿季」

「えへへ……♪」

同日 午後20:15 ALO 新生アインクラッド第22層 キリトのホーム

「そこにかけてくれ、今飲み物でも出すから」

「あ、えっと大丈夫よ、お構いなく」

「いいからいいから、キリトのいれるココアはすごく美味しいんだよ」
♪

古ぼけた木材で出来たキリトのホームの、真っ赤なソファに、インプ族の女の子ユウキと、ケットシー族の女の子、シノンが腰掛けている。

ログハウスタイプのキリトのホームは、ほんのり天井の灯が薄暗く、暖炉の火で照らされていて、非常に落ち着きがあり、モダンティストで心地いい空間となっている。

ユウキにとってはもう馴染みのあるもう一つの家であるが、シノンにとってはあまりなれない空間であった。

ユウキの勉強を見るために、現実世界の桐ヶ谷邸にお邪魔したときも、初めはどうにも少し落ち着かなかった。

ユウキの砕けた性格のおかげで、緊張はほぐれていったが、やはり慣れないものはなかなか慣れない。

「どうぞ、飲んでくれ」

「……ありがとう、いただくわ」

シノンは出されたブラウンのココアの入った白いティーカップを手に取り、口へとつけた。

ほんのり苦く、それでいてミルクの優しい甘さが感じられた。

暖かいものを飲んだためか、二人の優しさに触れたためか「美味しい……」と言葉を漏らすと、シノンの顔には安心の表情が浮かんでいた。

「それで……話って何だ？」

「えっと、その件なんだけど……」

本題を振られると、シノンはあからさまに肩を落としてしまった。ケットシー族特有の猫耳と尻尾も垂れ下がってしまい、明らかに落ち

込んでしまっていた。

仮想世界において、感情を隠すことが出来ない。つまりシノンには何か悩めることがあるということだ。

シノンは指先をいじくりながら、今さつき自分の家で何があったのかを、キリトとユウキに話し出した。

「はえー……、シノンも喧嘩するんだ……」

「そりやするわよ……私だって人間だもの……」

「……………」

果たして喧嘩か？ たまたま彼の虫の居所が悪く、そこにしつこく彼女が言いよったから招いたことなのか？

俺の見立てでは、シユピーゲル……恭二は、何か悩みがあるなら相談してくるタイプだ。

隠し事は出来ないだろうし、嘘についてもすぐにバレる。

その恭二が、詩乃や自分に対しても口を割ることが出来ない「闇」を抱えているのだとすると、こうしてはいられない。

「彼……恭二くん、多分何か悩みを抱えてるんだと思うの。私には聞き出せなかったけど……、私、彼の力になりたいの……」

「……ねえキリト、やっぱりこれって……」

「ああ、多分……昼のことと関係してる、と俺は思う」

「昼の……こと？　もしかして、クリスハイトに会いに行っただっていう……？」

キリトはその問に対し、無言で首を縦に降ると、今日起こったことを包み隠さず話した。

例の死銃事件デスガンのことも踏まえ、もしかしたら彼が死銃デスガンなのではないかということも含めて、全て話した。

あくまでも、これはキリトの憶測でしかない。

しかし、これまでの恭二の動向、そして和人や詩乃に対しての態度の変化から察するに、彼が死銃デスガンである可能性は非常に高い。

もしくは、何らかの形で今回の事件に大きく関わっていると踏んだのである。

「……………」

「とりあえず、俺が感じたことは以上だ」

「様子がおかしかったもんね、恭二……」

シノンにはキリトの口から出た言葉が信じられなかった。あの死銃^{デスガン}の正体が彼だなんて、信じたくはなかった。

でも、そうだとするならば、さっきの出来事もどこか辻褃が合う感じがした。

しかし、彼は本当に死銃^{デスガン}なのだろうか、同時に疑問の念も抱いていた。

あんなに優しく、現実世界じゃ蟻も殺せないような彼が、人を殺せるだろうか？

それとも、かつてのSAOのように、アミユスファイアで人を殺すことが出来るとでも言うのだろうか？

「……ん、SAO……？」

「……どうした？ シノン」

シノンは思い出していた。シュピーゲルに、恭二に実の兄がいることを。

そしてその彼が、自分たちと同じSAOでデスゲームに身を投じていたことを。

殺人ギルド^{ラフィン・コフィン}笑う棺桶の幹部、赤眼のザザであることを。

そのことを考えた瞬間に、シノンの中にとある仮説が生まれた。恭二が死銃^{デスガン}ではないかもしれない可能性だ。

もしも仮に彼が人殺し、死銃^{デスガン}だしよう。

実際にどうやって被害者の心臓を止めたのかはわからないが、本当に殺したとして、彼は冷静でいられるのだろうか？

少なくとも自分は違った。

あの男の顔が今でもたまたまに夢に出てくる。ある程度は克服出来たといっても、まだ心に引つかかるものがある。

人の命を奪うということは、それほどまでに重たく、心と体にのし

かかってくるものなのだ。

それからするならば、今夜の恭二の様子は腑に落ちない点があった。

人を殺したにしては、ちよつと様子がおかしい。何かに怯えているわけでもなく、かといつて興奮しているわけでもなかった。

まるで何かに不快感やイライラを感じているといった様子だった。もし、この仮説が正しいとするならば、彼とは別に、殺人の実行犯、ないしは共犯者がいることになる。恭二くんは致し方なくそれに従っただけなのではないか、と、シノンはこう推理したのだ。

そして真犯人は、もしかしたら、赤眼のザザなのではないか、と。

もしも、もしもこれが本当だとするならば、恭二くんも最終的に、殺されてしまうかもしれない。

恭二くんとお兄さんは決断していい仲とは言えないような間柄だという。

ならば、利用するだけ利用して、用済みになったら消される可能性の方が高い。

何しろ彼の兄は笑う棺桶ラフィン・コフィンの元幹部、赤眼のザザだ。実の家族だろうが殺すことになんの躊躇もないはずだ。

実際、ザザは命乞いをするプレイヤーに対しても一切の情けを見せず、無残にも手をかけて殺したことがある。

あのギルドの関係者にまともな精神のやつがいるはずがない。その幹部ともなれば、尚更だ。

シノンは、彼が今どれほどの脅威に晒されているかというのを、今改めて実感していた。

彼を助けなくては、彼がいたから私は私でいられたのだ。彼がいなくなってしまうたら、私は……私は……！

「し、シノン……？」

気がつくくと、シノンの目からは涙が滴り落ちていた。

彼ともう会えない。そう考えただけで、体が震え、寒気がしてきた。

いやだ、そんなのいやだ。私はまだ彼に何もお返しが出来ていない。

それに自分の想いも伝えられていない。何がなんでも助けなくてはいけない。

憶測の域を出ないシノンの推理だったが、それが確信に近いものを感じると、必死に自分の涙を拭い、キリトの手を取って彼に助けを求めた。

キリトは急に手を握られて驚いていたが、彼女の必死な表情を見ると、ただごとではないことがわかってしまったのだと、その悲しそうな表情から察して感じ取っていた。

「お願いキリト……彼を……、恭二くんを……助けて……」

「し、シノン……？」

第70話く捜査開始く

西暦2026年 11月17日(火) 午前08:39 埼玉県川越市 桐ヶ谷邸 和人と木綿季の部屋

『……キリト君、その話は……本当なのかい?』

「ああ、今ある全ての情報を整理し、組み立てた結論がこれだ。ただ……確固たる証拠がない以上、推測の域を出ないけど……」

『……なるほどね、興味深いな……』

和人は自身のPCデスクに腰を落ち着けながら、スマートフォンで通話をしている。相手は先日依頼の件で話をしたばかりの菊岡誠二郎。

一度は保留と言う形で、十分に考えてから答えを聞くということになってはいたのだが、恭二の今現在の立場を考え、翌朝すぐに事件解決に協力を打って出る姿勢を見せたというわけだ。

今の所、容疑者最有力候補は赤眼のザザこと新川昌一だ。恭二も何らかの理由で手を貸してしまっているのだろう。昌一が捕まれば、内容によっては恭二も警察にしょっぱかれるかもしれない。

だがしかし、問題はそこではない。

あの赤眼のザザの内情を知っていて、尚且つ協力的な態度ではない、ということに問題がある。

かつてのSAOで、笑う棺桶ラフィン・コフィンに所属していながらも、PK、即ち人の命を奪うことに抵抗を感じるメンバーも現れ始めた。

良心の呵責があるメンバーは、当然ギルドから抜きたいと幹部のザザ、ジョニー・ブラック、ないしはギルドマスターのPOHに直訴する。

しかし、笑う棺桶ラフィン・コフィンは殺人を犯す犯罪者プレイヤーの集まり。現実世界で言うところのギャングやマフィアに該当する集団だ。

無傷でホイホイと簡単に脱退できるはずがない。気の遠くなるような膨大な額の金、もしくはほとんどないレアアイテムを献上する。

それが出来なければ残るしかない。しかし、それでもまだ抜きたいと豪語する輩も現れ始める。

そのようなプレイヤーがどうなってしまったかは、言うまでもないだろう。

マスターであるP O Hはギルドメンバー全員をかき集めて、注目が集まる中で堂々と目の前で、その脱退希望者を処刑して見せた。

つまり、見せしめというわけだ。

P O Hを崇拜しているザザも、その精神を受け継いでいる。だからこそタチが悪い。

デスゲームから解放され、漸く命の危機に脅かされることのない世界に戻れたというのに、すっかり身も心も人殺しになってしまったザザは、もう現実と仮想世界の区別が出来なくなっていた。

そこで、院長の長男という立場を、そして弟の恭二をも利用して、今回の犯行に及んだのだ。

作戦は見事に成功。ターゲットをすんなり殺害することに成功し、更には警察の目をも欺くことが出来た。

この調子で次も標的を仕留めていこう、そう思った矢先だった。

僕はもう兄貴に手を貸さない。

恭二がこの死銃事件デスガンの末路を知ったのは、計画遂行日の翌週のネットニュースでのことだった。

直接のプレイヤーネームなどは書かれてはいなかったが、GG O内で自分が撃ったプレイヤーがログインしていなかったこと、そしてGG Oプレイヤーが一人現実世界で死亡しているという事実を目にした瞬間、自分が手を貸したあの一件だと確信した。

自分が殺人に加担してしまった。人殺しの手伝いをしてしまった。その事実は、彼を追い込むには十分過ぎた。しばらく勉強に身が入らなかつたし、かといって遊ぶ気にもなれなかつた。

そして、恭二は実の兄を拒絶した。本物の人殺しに成り果ててしまった彼を、自分の世界から断絶したのだ。

だが、昌一から見ればきつとそれは裏切りに近い行為に等しい。ラフィン・コフィン笑う棺桶の掟に従うとするならば、彼も見せしめに殺すべきなの

だろう。

しかし昌一はそうしなかった。

実の弟だというちよつとした情と、ここが仮想世界ではなく現実世界だということ。そしてまだ彼に利用価値があったからだ。

「どうだろうか菊岡さん、最近の恭二の様子のおかしさと、俺とシノンの推理から導き出した答えなんだけど……」

『……………』

和人が全てを菊岡に伝え、彼からの最終的な反応を待つ。本来ならば昨日のように直接顔を合わせて話をするのが好ましいのだろう。

今回の目的は、黒幕であろう新川昌一を逮捕して、恭二の身の安全を確保すること。

恭二にとつてそうだったように、和人にとつても、彼は歳の近い同性の友達だ。

周りに話せないようなことでも、互いになら思い切つて話せることもあるような仲だ。

見捨てるわけにはいかない、何故なら……彼は友達、仲間なのだから……。

『僕の結論を述べさせてもらつていいかな？ キリト君』

しばらくの間が置かれた後、スピーカー越しに落ち着いた口調で菊岡の声が聞こえる。

その声を聞くと和人は「ああ」と返事を返し、引き続き彼の導き出した結論に耳を傾ける。

『まず、君たちの考えだけど……、かなりいい線を行つてると思う。僕も恭二君のことはずっと引つかかっていたんだ。あのカフェでもずっと無言だったからね』

「しかも、アンタが死銃デスガンの話を持ち出した直後あたりから……」

『やっぱり、君も同じ違和感を感じていたか……』

菊岡からの回答を聞くと、一先ずは和人の心にほつと安心という思いが抱かれた。

普段ふわふわとしてはいるが、こう見えても菊岡は国家公務員。味方についてもらつてこれ以上頼りになる大人も、そうそういないだろう。

う。

『しかし……キリト君、一つだけ致命的な点がある』

「ち、致命的だつて……？」

『……ああ、恐らくは君たちもわかつてはいると思うけど、証拠がないよね？』

「……そ、それは……ッ」

証拠がない。誰かを告発する上で、絶対になくしてはならないことだ。人を罪に陥れるということは、それだけの責任が伴う。絵空事や推論だけでは逮捕できないのだ。

それが、日本の司法の限界ということもあるが。しかし裏を返せば、確固たる証拠さえ見つかつてしまえば、昌一を逮捕することが出来る。

今回の殺人をどうやって実行したかはまだわからないが、人を殺めているのだ。何も見つかっていないのではなく、見落としがあったのではないかという結論にも、二人は辿り着こうとしていた。

『キリト君、それでも君は……恭二君のお兄さんが、赤眼のザザが今回の事件の真犯人だと考えているんだね？』

「……ああ、そうとしか考えられないからな」

『……なるほどね』

菊岡は電話の向こうで何やら考え込んでいる様子だ。今置かれているこの状況下で、どうやれば最善の動きが出来るかというのを、模索しているようだ。

再び長い沈黙が流れ、和人の部屋のベッドに腰掛けている木綿季が、穏やかではない表情でスマホを片手に握っている彼を、心配そうに見つめている。

「和人……」

「……………」

和人は木綿季からの視線に気付くと、ニコツと優しい笑顔で返事を返す。

木綿季は何も心配しないでいい、俺が解決するからと、目で彼女に訴えていた。

『よし……キリト君、いいかな?』

「……ああ、いいぜ」

『僕個人としては、君たちの路線はかなり濃いものだと考えている。しかし証拠がない以上、やはり警察は動かせない』

「……クソツ、肝心なところで……ッ」

肝心なところで大人は役にな立たない。そう続きを呟こうとしたところで、菊岡が和人の独り言に割って入るかのように、話の続きを語り出す。

『そう急くのは早いよキリト君。確かに警察は動かすことは出来ないが、僕直属の人間なら、動かすことが出来る』

「なっ……そ、それじゃあ菊岡さん……!」

『ああ、君たちの情報を元に、この事件を追っていく。ありがとうキリト君、僕達としてもいきなり大きな前身だ』

「……いや、お礼を言うのはこっちの方だよ菊岡さん。でも多分、あまりのんびりもしてられないと思う』

『わかってるさ、彼の命が危ない、だろ? 迅速な解決が求められるね。しかも、犯人に悟られないように……』

昌一を逮捕してしまえば事件は解決。これだけ聞けば物凄く簡単な一件に聞こえるかもしれないが、犯人に気付かれることなく証拠を集め、告発するための足場を固めていくというのは大変に困難を極めるものだ。

刑事ドラマのように都合よく証人が現れたり、意外な場所で偶然にも証拠を見つけてしまう、なんてことは基本的に有り得ない。

毎日の地道な聞き込み、遺留品の捜査、解析など、ひたすらにコツコツを進めていくことこそが、事件解決への一番の近道なのだ。

こうしてる間にも、犯人は新たに犯行を重ねているかもしれないが、こういう時だからこそ、焦ってはいけない。

「なあ菊岡さん、アンタんとこに……いつもグラサンつけたおっかない人が護衛についているだろ? その人らを恭二の護衛に回すことは出来ないのか?」

『……彼らか、ちよつと難しいかな……、彼らは優秀なSPだけど、あ

あゾロゾロ動かれたら、あまりにも不自然だろう』

「そ、そうだな……それなら、一人だけ尾行につけるとか、つていうのはどうだ？」

『……なるほどね、流石キリト君だ、いつも君の柔らかい発想には脱帽だよ』

「心にも思っていないこと言うのはよせよ。それで……それからどうするんだ？」

和人ら子供の手だけでは解決しそうにはなかったこの事件だが、菊岡ら大人の力を借りることによって、解決への糸口が見つかりそうなくらいにまで話しが進展を見せていた。

普通に考えて、子供だけで解決しようというのがそもそも間違いだ。マンガやアニメのような子供名探偵なんてのは絵空事に過ぎない。

大人が、警察が、そして国が解決すべき案件なのだ。

『君が言った通り、今日から恭二君に尾行をつけさせる。保護が可能なら、そのままこちらの監視下の元、保護をするよ』

「下手に話しかけたら、ザザに勘づかれるかもしれないぞ？ まさか奴にも尾行をつけたりするんじゃないだろうな？」

『ああ、つけるつもりだけど……』

その問からの答えを聞くと、和人は小声で「マジかよ……」と呟き、右の掌で顔を覆い、大きく溜息を吐き出した。

ザザは用心深い人間だ。奴が黒幕だとして、自分の弟をも利用し、証拠を残さず殺人を執行していることから、そのことは容易に想像出来る。

尾行にもすぐに気づく可能性が高い。もし気付かれた場合、彼はすぐに第三者に自分たちの事がバレたと感づくことだろう。

もしそうなればどうなるか？ 当然疑いの矛先が弟である恭二に向けられるだろう。

用心深い彼のことだから、最悪その場で恭二を消すかもしれない。なので今回の事件、容疑者については慎重に慎重にことを運ばなければならぬ。

和人は呆れた表情をしながら電話越しにそのことを菊岡に伝え、今回の最も重要なことを改めて話して聞かせる。

『なるほどね、キリト君の言いたいことは分かったよ。けど安心してほしい。彼らはプロだ、そうそう簡単にへまなんかしないさ、信用してくれていい』

「……ほ、本当なんだろうな……」

『勿論だとも。それに、尾行が上手く行けば尻尾を掴むことが出来るかもしれない。事件解決に一気に近づくことが出来るんだ』

「……わかった……、菊岡さんがそこまで言うのなら、信じることにするよ……」

『ああ、すまないねキリト君。なあに、恭二君にも護衛はつけるんだ。それに昌一が怪しい行動を見せたらすぐに取り押さえる。安心してくれていい』

「は……はあ……」

正直、不安だ。彼の言っていること一つ一つが、急に不安でしからなくなってきた。

何故だかわからないが、これからのことが心配でしようがない。

『それじゃあ、僕は早速動くことにするよ。キリト君……貴重な情報提供、感謝するよ』

「あ、ああ……、頼んだぞ菊岡さん、本当に……」

和人からの声を聞き届けると、菊岡は『任せてくれ』と、頼もしいんだかそうじゃないんだか判断が難しい一言だけ最後に残し、通話を切った。

「……………」

「ん、電話……終わったの？ 和人……？」

「ああ……とりあえずは……な」

和人の頭には「不安」の文字でいっぱいだった。しかし、とりあえずは菊岡という大きな味方を得られたことには、安心しているのも事実だ。

これで少しは話しが前へ進んでいってくれる。

「お疲れ様、和人」

「ああ、ありがとう、木綿季」

スマートフォンを片手に持っている和人に、木綿季が労いの言葉を、ニコツと微笑みながら優しくかける。

すると和人は、そんな彼女の笑顔が愛おしくなったのか、椅子から腰を上げて木綿季に歩み寄り、抱きしめるとそのまま勢いそのままにベッドに押し倒した。

突然押し倒された木綿季は驚きつつも、特に何も抵抗せずに、顔を赤らめながらも彼を受け入れた。

「和人……」

「ごめん木綿季、ちよつとこのままにさせてくれ……」

「……うん、いいよ。ずっとずっと、頑張ってたもんね、和人……」

そう言いながら、木綿季は和人の背中と後頭部に手を回し、自分の胸へと押し当てた。

和人は少々苦しそうにしていたが、心からの安心感に包まれていた。

木綿季の心臓の鼓動の音が、ドクンドクンという音が聞こえてくる。健康的な血液が彼女の全身を循環している証拠だ。

和人が木綿季を抱き締めるように、木綿季も彼をぎゅつと力強く抱き続けた。

今の自分の居場所を作ってくれた愛する男の子が安心出来るように、精一杯抱き締め続けた。

「……木綿季、温かい……」

「和人も……、とっても温かいや……」

この温かさ、いつまでも守っていききたい。木綿季は、彼女は和人とつとて陽だまりだ。

木綿季が笑ってくれるからこそ、彼も安心して毎日をご過ごすことが出来ていた。

「和人……」

まるで母親に甘える子供のように、和人は木綿季を求めている。そ

んな彼の気持ちも汲み取ったのか、木綿季は右手で彼の頭をそつと優しく、温かく撫で始めた。

何回も何回も、彼が安心出来るように、これまでの恩返しに少しでもなるのならと、ひたすらに手を動かし続けた。

「木綿季……んん……ッ」

「よしよし……、和人も随分甘えん坊だね……」

「……俺だって、誰かに甘えなくなる時くらい……あるさ……」

「……ふふ、和人可愛い……♪」

「な……ッそ、そんなんじゃないっての……ッ」

「あはは、照れてる照れてる♪」

長いこと、人に甘えるということを忘れていた和人は、木綿季の温もりを肌で感じ、周りにこんなにも自分を支えてくれる人がいるんだなど、改めてありがたいと胸に抱いていた。

そしてこの温かさを、恭二も感じるべきだとも、思っていた。

今回の事件、何もなくても多分大人達が解決してくれそうだな。

赤眼のザザの正体は新川昌一。彼の住所などの個人情報も現在総務省が所持している、旧S A Oの顧客情報からすぐに割り出せるだろう。

そして恭二には護衛がつく。多分このまま行けば事件は解決する、それは間違いない。

しかし何だろう、このまま何もしないで吉報を待つのか？ このまま菊岡さんに全部まかせていいのだろうか？

昨日、俺は恭二に何て言った？ シノンから何て言われた？

（俺は……君のこと、本当に友達だと思ってる！）

（お願いキリト……彼を……、恭二君を助けて……ッ）

「……………」

「……和人？」

そうだ、俺は彼に言ったじゃないか。友達だと思ってるって、それ

に……シノンにも、彼を助けるって約束した。

だのに、肝心な所は他人任せか？ そうじゃあないだろ！ 本当に大事な友達なら、大切な人たちなら、自分の手で助けてみせろよッ！
かつて木綿季の為に走り回ったみたいに、もう一度走ってみせろ！
桐ヶ谷和人ッ！

「……………ッ」

「ねえ、和人……、和人の考えてること、当ててみせよっか…………？」

「……………なんだ？」

そう言うと、和人はすつと木綿季の胸から顔を離し、彼女からの話に耳を傾ける。

木綿季の顔は、和人の考えてることなんてお見通しだよと言わんばかりの、優しい顔をしていた。

「恭二を……助けたいんだよね？」

「……………ああ」

「シノンとの約束、守りたいんだよね？」

「……………ああッ」

「……………なら行って、和人…………」

「え……………え、でも…………」

全てを見透かされてた和人は、驚きの表情を隠せなかった。直接の会話の内容を聞かれたわけでもないのに、何が今起こっているのか、木綿季には大体冊子がついているようだった。末恐ろしい娘である。
「……………和人と出会って、今までどれだけ一緒にいたと思ってるの？
ボクが病気と闘ってる時も、治った時も、退院した時も、そして……
今もずっと一緒なんだよ？」
「……………」

「和人の考えてることなんて、お見通しだよ。だって、ボクの……………一番好きな人だもん」

「ゆ、木綿季……………ッ」

この二人は、恋人、義兄妹という言葉だけでは書き表せないような、硬い硬い絆で結ばれている。

不治の病と言われていたAIDSと真っ向から闘い、あまりにも濃

すぎる毎日を過ごしてきたことにより、ここまで硬い絆が築かれていたのだ。

これまでの壮絶な人生を歩んできたこともあり、片時も離れることが嫌だった二人だったが、ここにきて初めて木綿季の方から、和人の背中を押した。

「ボクは大丈夫だから、多分今回のことも……和人にしか出来ないことなんだと思うんだ」

「お、俺にしか……？」

「そうだよ、ボクの病気を治してくれたみたいに、多分恭二とシノンを助けられるのは、和人しかないと思うの」

「……………」

人間、常にずっと一緒にいるということは無理だ。それぞれ用事や学業、仕事などもある。必ず離れなくてはいけない時はあるものだ。

しかし、この二人はあまりにも一緒にい過ぎたため『依存』にも近い関係にまでなっていた。

だからこそ、これまで以上に強い自分になるため、木綿季は自分から言い出したのだ。

いつまでも彼に守られっぱなしではダメだ。もっともっと、ボク自身も強くならないと……と、心に強く誓っていた。

木綿季は真っ直ぐに、和人の瞳を見つめていた。曇らない眼差しで、自分の心と同じくらい真っ直ぐな視線を彼に向けている。

心に迷いを抱えていた和人であったが、彼女からの言葉と、真剣な眼差しを受け取ると、決心がついたのか吹っ切れたのか、やれやれと言った溜め息を吐き出すとともに、奇妙な笑顔を見せていた。

「……わかったよ。ありがとう、木綿季」

「えへへ、どういたしまして♪」

木綿季の曇りのない笑顔を見ると、和人は上体をスツと起こし、頭の中でこれから自分がすべき事を整理し始めた。

まず今置かれている状況を一度整理してみよう。

今回の事件を解決するためには、黒幕である新川昌一を逮捕すること、恭二を奴の手から救い出すこと。

現在、菊岡管下の元漸く本格的な対策が講じられようとしていること。

そして、恭二には護衛が、昌一には尾行が一人ずつ付くということ。(ここまでは大丈夫だ。そしてこれからどうするか……)

一番に優先させなくてはいけないのは、これ以上犠牲者を出させないことだ。

恭二は勿論、GGOプレイヤーも殺させてはならないし、これ以上仮想世界絡みで好き勝手させてはいけない。

ならばどうすればいいか、言うだけなら簡単だが、犯行を止めるというのは簡単ではない。警察をも欺いたザザを追い詰められるのだろうか？

……いや、そんなことは問題ではない。しくじれば全てがおじやんになる。やり抜かなくてはいけない、俺の手で……友達を、恭二を救わなくては……！

「……とは言ったものの……、どうするかなあ」

「和人……どうしたの？」

「……ん、ああ……、今後の動きを考えていたんだけど、いざ動こうって思っても、どうやって動いていったらいいのかなんて……」

「ふーん……和人でもわからないことがあるんだ」

「あのな……、俺は理系とメカトロニクスを専攻してるだけであって、全ての分野が得意ってわけじゃあないんだぞ……」

「へえー……そうなんだあ。和人ってすっごく頭良くて万能って印象あったから、ちよつと意外」

和人にもそんな一面があると知った木綿季は、ちよつとだけ嬉しそうにベッドから足をはみ出させ、パタパタとさせてニカツと笑っている。

理系より文系の方が得意な木綿季は、メカトロニクスとかのことはよくはわからないが、自分の得意な分野でなら、和人を抜かせるかとも思っていた。いつまでも和人にいい顔させないんだからねとも。

「……ん、得意な分野……？」

「ど、どうした……木綿季？」

「あ、えっと……そうだね……、んと」

木綿季は、今ふと思いついたことを一旦頭の中で整理整頓してから、和人に言っただけで聞かせようとした。

ひよつとしたら僅かにでも和人の助けになるのならと、何かのヒントにでもなればいいなと思いつきながら口を開く。

「あのね、和人はボクの病気を治してくれる方法、どうやって思いついたの？」

「え……、そ、それは……テレビ以外でどんなことをすれば、ドナーを集められるかなって考えたんだよ」

「ふんふん、それでそれで？」

食い入るように次から次へと疑問をぶつけてくる木綿季の態度に若干のやりにくさを感じながらも、和人は彼女からの疑問に答えていく。

「それで、セブンみたいにALLOでチャリティーライブをやれば、注目を集められるかなって思ったんだ」

「へえー……そうだったんだ♪」

「あ、ああ……そうだ。最初は賭けにも近い策だと思ったけど、無事に成功してよかったよ」

「そっかそっか……、んー……それならさあ」

そう呟きながら、木綿季はピョンとベッドから体を起こし、隣で腰掛けている和人の顔に、自身の顔をぐいぐいと近づけさせて、自分の考えを述べた。

和人も少しだけたじたじしてしまっていたが、恥ずかしさを抑えながら彼女からの返答を待つ。

「もう一度……セブンの力を借りてみたらどうかかな？」

「え……セブンの？」

「うん！ 今回の事件の被害者って、ジージーおー？ っていうVR MMOのプレイヤーさんなんだよね？」

「あ、ああ……そうみたいだけど……」

「なら、セブンなら何か詳しいこと知ってるんじゃないかな？ 茅場晶彦って人を除けば、セブンが今、一番仮想世界に詳しいでしょ？」

「い、言われてみれば確かにそうだな……、確かに今セブンは様々なVRMMOの開発に手を貸している。恐らくGGOのことも、何か知ってるかもしれない」

「それにそれに、ユイちゃんやストレアの力も借りられたら、もっと詳しく調べられるんじゃないかな？」

明るく可愛らしい口調と仕草で話しかけている木綿季であったが、言っていることは彼の助けに大きく貢献出来そうな内容であった。

色々と後から見返りを求められそうだが、木綿季の助言をありがたく受け取り、和人はデスクに置いてあるスマートフォンを手に取り、七色の番号を選択して、彼女に連絡を試みた。

普段アイドル活動とVR技術開発で忙しい彼女が今回協力してもらえるかどうかはわからない。

前回の木綿季のチャリティーの件も半分無理言ってお願ひしたようなもんだ。今回もお願いを聞いてもらえたらラッキー、といった程度の気持ちで彼女のスマホにかかっているであろうコール音を耳に続ける。

10回ほどコール音が響いた時に、ガチャっというサウンドが聞こえ、幼い女の子の眠たそうな声が聞こえてきた。

『…………ふあ、おはよお…………キリトくん…………』

「ああ、おはようセブン、すまない…………寝てたのか…………」

『うん…………、昨日で秋の全国ツアーが終わったから…………、寝たのも遅くて…………』

話してる相手をも夢の世界へと誘ってしまったし、もう七色の声は、彼女が普段どれだけハードな毎日を過ごしているか、というのを物語っていた。

「それで…………？ 朝から私に電話をしなければならぬ案件って、一体何なのかしら…………？」

眠そうな声から一転、ちよつとだけ不機嫌なオーラを醸し出しながら、七色は和人に電話の目的を尋ねた。

気のせいかもしれないが、返答次第ではただじゃあおかないわよ、と言っているようにも聞こえてしまう。

「あ、朝からすまんセブン。ちよつとお願いしたいことがあるんだけど……大丈夫かな」

『……私に連絡をよこしたってことは、デートのお誘い?』

「なっ……、で、デートオ!?」

「……………ッ」

デートというワードを聞いた瞬間、今度は木綿季の顔が穏やかではなくなっていた。

ニコニコ笑ってはいるが、目が笑ってはおらず、負のオーラを全開にしながら、異常なまでのプレッシャーを和人に向かって放つている。

あれだけ大切な話をしたばかりだというのに、何を呑気なことを言ってるの?

それに浮気は許さないよ? したらわかってるよね? と、何も言わなくても態度でわかるよう、木綿季は和人にプレッシャーをかけた。

「ち、違う! デートの話じゃない! って木綿季違うぞ! 濡れ衣

だ! 落ち着いてくれ!」

「ならさっさと本題に入る!」

「は……はひい!?!」

それから和人は、これまでの事のあらましと、これから動くためにも七色の協力が欲しいこと、そしてユイやストレアにも手を貸してほしいことを、包み隠さず全て話して聞かせた。

和人から話を聞いた七色は、先ほどの菊岡と同じようにしばらく考え込み、じっくり思考を巡らせて結論を導き出し、和人に返答を返す。

『なるほどね、大体キリト君の言いたい事はわかったわ』

「そ、それじゃあ……」

『ええ、私にも協力させてくれないかしら? 本当は今日くらいゆつくり休みたかったところだけど……』

「あ……う、そ、その……すまない……」

『別に構わないわよ！ キリト君たちといる時間は私も楽しいから！
それじゃあ……どうすればいいのかしら？』

「あ、えつと……、ALOで会えないかな。ユイとストレアも呼んでほしい」

『ええ、わかったわ。ユウキちゃんもくるのかしら？』

「ああ、連れてくよ」

和人がちらつと木綿季のいる方を見ると、木綿季はわかっていたかのように、サムズアップして親指を立てながら、片手にアミュスフィアを抱えていた。

『OKよ、それじゃあ……キリト君のホームに行けばいいのかしら？』

「ああ、構わないよ」

「ボクもいくからねー！」

木綿季の元気いっぱいの声が聞こえたのか、スピーカーの向こうから「くすくす」と笑い声が小さく聞こえた。

木綿季も七色との再会が心底嬉しいようだ。それもそのはず、木綿季にとって七色は命の恩人の一人であり、退院後の平穏な生活を送れるよう手回しをしてくれた人でもあったからだ。

本当は現実世界で顔を合わせて直接お礼を言いたいところだったが、なかなかそうもいかない。

七色に会えると思った木綿季は、今起こっている事件があるのにも関わらず、少しだけ浮ついた気持ちになっていた。

和人よりも先にアミュスフィアを装着し、ゆつくりベッドに体を寝かせる和人に「早く早く！」と急かしている。

「わ、わかったから少しは落ち着け木綿季、遊びに行く訳じゃあないんだぞ？ まあ気持ちはわかるけどな」

「ボクだってわかってるよ。でも久しぶりに会えるんだよ？ 嬉しいものは嬉しいもの」

「……まあ、そうだよな。セブンがいたからこそ、俺は木綿季を助けることが出来たわけだから……」

「ちゃんとお礼、言わなきゃね」

「……ああ、勿論だ」

和人もベッドに体を仰向けに寝かせると、いつものように体をリラクセスさせ、木綿季の右手を左手で握り、アミユスフィアを装着し、ゆっくりと目を閉じる。

そして、今まで何十回何百回と繰り返し言い続けてきたあの言葉を口ずさむ。

「リンク・スタート」

「リンク・スタート！」

第71話く名探偵セブンく

西暦2026年 11月17日(火) 午前09:55 ALO 新
生アインクラッド第22層 キリトのホーム

「キリト君プリヴィエート♪ お邪魔するわね」

「ああ、そこのソファにでもくつろいで待っていてくれ」

もはや作戦会議や打ち上げ等ですっかりお馴染みとなっている、ここ22層のキリトの古ぼけたログハウスは、今日も今日とて久々のお客さんを招き入れていた。

世界的に有名なVRアイドル兼、そしてそのVR技術の第一任者でもある七色・アルシャービン博士ことセブンが、久方ぶりに彼のホームへと足を運んでいた。

常日頃からアイドル活動や、研究開発で多忙な毎日を送っている彼女は、本日は貴重なオフの日である。

本来ならばその疲れを一日休んでゆつくりと癒したい所に、このキリトから朝っぱらから電話をよこされて今現在ここにいる、というわけである。

「久しいな、キリト」

「スメラギ……お前も来てくれたのか」

セブンがログハウスの中ほどまで進むと、その後に入口からウンディーネ属の高身長男性プレイヤーが姿を現した。

ギルド・シヤムロックの幹部であり、仮想世界、現実世界共にセブンのマネージャー兼助手でもある、住良木陽太ことスメラギだ。

七色のスケジュールに合わせて生活を送っている彼にとっても、今日はオフの日のはずなのだが、セブンからの連絡を受け、駆けつけてくれたという訳である。

「ああ、セブンから来て欲しいと頼まれてな」

「へえ……そうだったのか、サンキュなスメラギ」

「……ふ、礼には及ばん。それより、早いところ本題に入った方がいいのではないか？ 時間がないと聞いているぞ？」

セブンがソファに腰を下ろすと、その隣にスメラギも同じように腰を下ろす。

その向かいにユウキが、隣にキリトがゆっくりと座り込む。

セブンが来るということは、スメラギが付いてくるのはある程度想像できたことだが、頭のキレる彼が今回同伴してくれたことについては、正直キリトにとっては非常にありがたいことだ。

常日頃から七色博士の助手としてのサポート、そしてアイドルセブンのマネージャーとしてスケジュールを管理してる彼の頭脳は、大いに役に立つに違いない。

キリトはスメラギから時間があまり残されていないことを指摘されると「あ、ああ」と呟きながら、左手でメニューを操作する。

昨夜シノンと話し合い、辿り着いた結論をまとめ直した資料をホロデータ化したものを、紙片アイテムとしてオブジェクト化させ、セブンとスメラギそれぞれ二人に配る。

「二人は……死銃事件って……聞いたことあるか？」

「……何？」

「死銃……、忌々しい名前ね……」

この反応を見る限り、二人は既に死銃事件のことを耳にしているようだ。

それもそのはず、今や死銃騒動はVRMMOをプレイしてる人の間で、既に知らない人はいないくらいに有名になってしまっていたのだ。

セブンやスメラギといったVR技術の最前線で仕事をしている人間ともなれば、嫌でもその噂は耳に入ってくる。

かつてのデスゲーム、SAOと同じようにVRMMOプレイヤーが謎の死を遂げている。

この事実がセブンにとって、大変に憤りを感じる事案であった。茅場晶彦の残した世界の種子のお陰で息を吹き返し、再び活性化しつつ

あるVRMMOで、また人が死んでいる。

セブンもまた、キリトと同じようにこの事件に対して眉をひそめている人物の一人であったのだ。

「全く腹が立つわよね、好き勝手にしてくれちゃって……ッ」

「……知ってるんだな、二人共……」

キリトからの問いかけに、セブんとスメラギはほぼ同時に首を縦に振った。

その表情も真剣そのものであり、今回の事件を解決させたいという意味も感じ取れる。

「今やVR関係者でその事件を知らない人はいないわ。全く……、クラウド・ブレイン計画が可愛く見えてくるわよ」

「実は……俺もセブンも、この死銃事件デスガンについては頭を抱えていてな……」

「……なるほど、そうだったのか……、そうとなれば話は早い」

「実はね、ボクとキリトは……この事件を追ってるんだ。クリスハイトからの依頼デスガンでね」

何故キリト達が死銃事件デスガンのことを調べてるか疑問だったセブンであったが、クリスハイト、菊岡誠二郎の名前を聞いた瞬間、なるほどなどといった表情が変わっていった。

今回の事件、実際に人が死んでる以上、個人が興味本位で首を突っ込んでいい案件ではない。

SAO事件、クラウド・ブレイン計画を解決に導いたキリトであったとしてもだ。

しかし、そこで総務省の人間である菊岡からの依頼となれば話は変わってくる。

むしろ菊岡は何故VR技術の一任者であるセブンではなく、一般人のキリトに解決を依頼したのだろうか？

初めからセブンにも同じように依頼すれば、もっと被害者を減らせたかもしれないし、事件も早期に解決出来たかもしれない。

「ははあ……彼、私を避けてるわね……」

「……クリスハイトが？」

「ええ、彼は私にたくさんの借りがあるんですもの、これ以上借りを増やしたくないんじゃないかしら？」

「……なるほどな、アイツらしいよ」

「……世間話はそれくらいしておくんだな。キリト、改めて今回俺たちを呼んだ理由を説明しろ」

スメラギが話の流れをぶった斬ると、キリトは「あ、ああ……」と少しだけどもりながら手渡した資料と同じものを、自分とユウキの分もオブジェクト化し、概要から読み上げて説明を始めた。

昨晚シノンと話し合い、様々な角度から推理し、審議し尽くし、それを菊岡に話して聞かせた内容と同じものだ。

表向きは今回の死亡者は心不全となつてはいるが、キリトはここに不自然さを感じていたのだ。

昨今から飲まず食わずでVRMMOをプレイしている人は多い。その中でも変死を遂げているプレイヤーがいることも確かな事実だ。

これはVRMMOが発達する前、PCやスマートフォンでプレイ出来るオンラインゲームでも取り上げられていた問題であった。

食事も水分補給も、手洗いにも行かずにゲームにのめり込んでしまうその姿勢は大いに社会問題として取り上げられていた。

それも栄養失調、脱水症状、睡眠不足など直接体の健康に害する問題ばかり。

五感をシャットアウトし、意識を仮想世界に委ねるVRMMOにもなると、更にそのリスクは高まる。

仮想世界にいる間は、基本的に現実世界の肉体は無防備になる。どれだけ汗をかいていようが、どれだけお腹が空いていようが、仮想世界にいる限り、わからない。

三日三晩、下手するとそれ以上にプレイにのめり込み、現実の体など二の次になってしまう。

それが変死の原因ではあったのだが、いずれの死亡者も、決定的な栄養失調等からくる餓死などがほとんどだ。

今回の死銃事件デスガンの様に、過去に連続して心不全で亡くなっていると聞いたことはただの一度も無い。

故にキリトはそこに違和感を感じていたのだ。そして恭二からの、自分は死銃だデスガンとほのめかすような発言があったことから、その違和感デスガンは疑念、やがては確信に変わっていった。

死銃騒動は単なる偶然の事故の連続ではない。

人の手の入った、もつと事件性が高いもの、つまりは何らかの外部的要因でプレイヤーの心臓を止める方法がある、ということだ。

「……なるほどね……」

「今のところ、わかっているのはここまでだ」

「……ふむ……」

「二人共、何か質問はあるか？」

キリトから一通り今回の事件のあらましを聞いたセブんとスメラギは、各々が頭の中で情報を整理し、自分の推論を立てているようだった。

今回のキーポイントとなるのは「どうやって被害者を殺害したか」、「何故そのターゲットが狙われたか」

そしてキリト達が推理する通り「本当に真犯人は新川昌一なのか」ということである。

「……一つ、いいか？」

「何だ？ スメラギ」

スメラギはある程度考えがまとまったのか、手元の資料に視線を送りながら、キリトに質問を投げかけた。

「貴様らの推理から、この新川昌一なる人物が限りなくクロに近いということとはわかった。だが……」

「だが……何だ？」

スメラギは言葉を少し濁らせると資料を手前のテーブルに置き、再度思考を巡らせて、自分の中で生まれた疑問をキリトにぶつけた。

「どうやって捕まえるのだ？」

「え……」

スメラギの言うことは最もである。先刻菊岡からも言われた通り、告発にまでいたるだけの決定的な証拠がない限りは、新川昌一を逮捕することが出来ないのだ。

悔しいことに、彼は現場に証拠らしい証拠を残していない。警察もよくある変死事件として処理してしまった為、ろくな捜査も行われていないのだ。

その状況下で確実なクロとして捕まえるには、まだ決定的な証拠が足りない。

「まともな捜査も行われておらず、証拠もないのだろうか？ 現場も既に片付けられてしまっている。八方塞がりなのではないか？」

「……ああ、お前の言う通りだよ。……そこで何かいい手はないかどうか、セブンの知恵を借りたかったんだけど……」

キリトがそう言いながらセブンの座っている方向を見ると、それに釣られてスメラギとユウキも彼女に視線を向ける。

その先にはここにいる誰よりも真剣な顔付きで思考を巡らせているセブンの姿があった。

いつもステージの上で見せているような明るく可愛らしい顔とは打って変わって、軍の司令官のような、所轄の捜査官のような目つきで、今回の騒動のあらゆる可能性を、そして犯人を逮捕するにはどうすればいいかを、考える。

「……………」

セブンが考えている間は、終始その場は無言の時間が続いた。誰もが固唾を飲んで、セブンの邪魔になるまいと言葉を発しようとはしなかった。

古ぼけたログハウスに備え付けられた暖炉にくべられた、薪がパチパチと燃え上がっている音だけがこの狭い空間にこだましている。

「……………」

静かな時が流れて始めて十五分ほど経過した頃だろうか、考え始めてからこれまで全く微動だにしなかったセブンが、ここにきて漸く顔を上げた。

一度深呼吸をし、自分で考え、まとめあげた結論をゆっくりと話し

て伝える。その言葉に、全員心静かに耳を傾けた。

「スメラギ君の言う通り、確かに現状で逮捕するための証拠を揃えるのは難しいわね……」

「……………」

「痕跡が残っていないみたいだし、何より警察があつさりと事故として処理してしまったのが痛すぎるわ」

「……………やっぱり、か……………」

あの頭脳明晰なセブンでさえお手上げな状態なのかと、彼女の言葉を聞いた途端に、キリトは大きく肩を落として溜め息を吐き出した。

やはりこの事件は迷宮入りなのか、自分は恭二を助けることが出来ないのか、そう諦めの気持ちさえ抱いてしまう。

俺が無理やり犯人を取り押さえるか？

ダメだ、そんなことをしたら火に油を注ぐ行為になる。奴が捕まるどころか俺が傷害罪で捕まる。そして勘のいいやつは疑いの目を恭二へと向けて、彼を消すだろう……………。

(……………畜生、どうしたらいいんだ……………どうしたら……………ッ)

キリトの両手の拳から、ギリギリと音が鳴っている。自分にはどうすることも出来ない現実には憤慨している。

一人の親友も救うことが出来ないのかと、万能ではない司法に、そして己の無力さに怒りさえ感じる。そんな時だった。

「ねえスメラギ君、この前観た刑事ドラマ……………すごく面白かったわよね？」

「……………は、……………はあ？」

「……………ムム？」

緊張感ではち切れんばかりのこの狭い空間に、突如としてセブンがゆるい話題を持ち出した。

おいおい何を言ってるんだ。今話し合っているのはドラマとかのフィクションではなくて、現実に行き起きている事件の話のはずだろう？

何を呑気なことを言っているんだ。やはり天才と何とかは紙一重という言葉は本当なんだなど、決して言ってはならないことを、キリトは心の中に仕舞っておきながら、呆れた表情で彼女を見つめてい

た。

「あの犯人ちゃんと捕まっただけで、主人公の刑事はどうやって真犯人を追い詰めていたかしら？」

「……そ、それは確か……」

何やら雲行きおかしい。

おかしいが……、キリトはいい意味で胸騒ぎがしてるのを感じていた。何の変哲もない、ただのドラマの感想と語らい。ある種のネタバレとも言えるがそんなことはどうでもいい。

自分はドラマなんて観ないしそもそもテレビはニュースくらいしか目を通さない。

しかし……しかし、今はセブンの言おうとしてることが気になって気になって仕方が無い。

まるでその小さな口から、地獄から這い上がるための一本のロープが、希望の光が差し込んでくる気がしてならなかったからだ。

死んだ魚のような目をしていたキリトの瞳は、再びキラキラと輝き始め、まるでクリスマスプレゼントを楽しみにしている子供のような眼差しをしていた。

「泳がせていたわよね、犯人を。そして犯行の決定的な瞬間を取り押さえて、あとはそのまま現行犯逮捕、だったわよね？」

「あ、ああ……、あまり真剣に観ていなかったからよく覚えてないが、確かそのような内容だったと記憶している」

「ええ、そうよ。これまでの被害者と犯行に結びつきそうな共通点を探して、網を張って待ち構え、泳がせた」

「……せ、セブンまさか……ッ」

キリトがソファから立ち上がり、テーブル越しに身を乗り出した。彼にはセブンの言いたいことが何となくわかってきた様子だ。

期待に胸をふくらませながら、セブンの言葉に耳を傾け続ける。その反応に、彼女も「フフツ」と意味ありげな笑みを見せながら、続きを口にする。

「これまでに亡くなったと思われる……、ゼクシード、薄塩たらこなる人たちには、いずれもGGO上位プレイヤー、だという共通点がある

わ

「あ、ああ……」

「そして、変死を遂げた人たちはいずれも東京から電車でそう遠くない圏内で、一人暮らしをしているわね」

「……ああ」

全員の表情が強ばり始めた。皆何となく、セブンの言いたいことがわかってきた様子だ。

「……続けるわよ？　それで、これからもその二つの共通点を持ったプレイヤーが狙われる可能性が、極めて高いと見るわ」

「……なるほど、セブンの言いたいことがわかってきたぞ……」

「ハイハイー！　ボクもわかったよー！」

一際元気な声を上げながら、ソファから勢いよく立ち上がり、右手をめいっぱい天井に伸ばして、ユウキか自分が回答したいと主張している。

セブンはくすくすと笑いながら、回答権を彼女に譲ると、ユウキがニカツと笑いながら元気よくハキハキと答えていく。

「つまりー、GGOの上位にいて、一人暮らしをしているプレイヤーを絞り出して、そこを犯人が狙おうとしてる所を捕まえればいい、ってことだよな？」

「……ふふ、〴〵明察よ、ユウキちゃん♪」

ここまでセブンが明かせばユウキでなくとも察しがつくだろうという意見はさておき、要はまとめるところこういうことだ。

新川昌一の狙いはGGOプレイヤーに現実世界と仮想世界両方から退場してもらうこと。

理由は恐らく自分がGGOのトッププレイヤーとして君臨し続ける為だと思われるということ。

手段はわからないが上位プレイヤーの個人情報盗み出し、何らかの手段で自宅へ侵入、痕跡を残さず死に至らしめている、ということ。

確かに今のところ証拠は残っていないかもしれないが、次に狙われているプレイヤーを予め予測し、捜査網を敷いていたらどうだろうか？

奴は必ず網に引っかかる、セブンはそう読んだのである。

しかし、まだ重要な問題が残っているのも確かだ。そこにすかさず、キリトが疑問を投げかける。

「……なあセブン、二つほど気になる点があるんだけどいいか？」

「ん……何かしら？」

「どうやって……、どうやって犯人は被害者の自宅を割り出したんだ？」

「……………」

「それに……自宅内への侵入方法もそうだ。窓ガラスを割ったり、扉を無理やりこじ開けた形跡も無かったらしい」

「……そうみたいね」

キリトの言うことも最もであった。近年も個人情報漏洩が問題になり続けている。

しかしそれに伴ってセキュリティも日に日に強固なものになっていっているのだ。

更にGGOを運営しているザスカ―本社は海外の企業。日本にもサーバーと支社はあるが一切の連絡先もサポートセンターも見当たらない始末。

アミウスファイアのプロテクトが硬いこともあり、個人情報の漏洩はまず有り得ないことだ。

「……個人情報に関しては……詳しく調査してみないとわからないわ、でも……………」

「……………」

「被害者の自宅に侵入する方法なら、ちよつと心当たりあるかも……」

「なっ……………」

「ほ、本当なの!？」

「ええ……………」

セブンの口から次々と出るとんでもない発言に、集まったメンバーは驚きの表情を隠せなかった。

流石は天才と言われた七色・アルシャービン博士だ。常人では思いつかないような考え、発想を次から次へと思いつく。

物事を瞬時に、時にじっくり、様々な角度と可能性から答えを導き出し、さらにそれを検証する。それが彼女の頭脳なのである。

「無理やり侵入した形跡がないのなら、多分堂々と入ったんでしょう？」

「なっ、ど……堂々と!？」

「そうよ? もしくはセキュリティが壊れてた可能性もあるけど、手元のデータにはそんなこと書かれてないし。多分正常に機能していたんでしょね」

「……だ、だとしたら、合鍵となるカードキーを持っていたつてののか？」

「……それも有り得ないわ。一人暮らしの男性が、付き合ってる彼女とか、家族とかの他に合鍵なんて渡さないでしょ?」

「そ、それもそうか……、彼女とか恋人とかは……多分いなさそうだったし、家族もアリバイはあるって聞いてる」

強引な侵入は有り得ない、機器の故障でもない。恋人、家族の線も無し。だとすると、やはり犯人は正々堂々、セキュリティのロックを解除して被害者宅へと侵入したのだろう。

だがしかし、どうやって? 仮に被害者が鍵を盗まれたとしたら、すぐにでも盗難届を提出し、迅速に鍵屋に依頼して錠前と機器を交換してもらおうだろう。

と言うことは、犯人はそれ以外の手段でセキュリティロックを自由自在に錠錠出来るということになる。

しかし、何やらセブンはこれに心当たりがあるようだ。

「キリト君、デジタルな錠前を錠解する方法が、正規のカードキーと管理者用マスターキーを使う以外にもう一つ、存在するとしたらどうする?」

「……は……? な、何だよそれ……」

途端、キリトの顔がどんとと青ざめていった。

「……あるのよ、一つだけね……」

淡々と話し続けるセブンの言葉を聞いたキリトは、段々と顔色が悪くなっていた。

殺人犯が家のドアを自由に解錠出来る？ とんでもない、由々しき事態だ。

殺人を犯さないにしても、空き巣等の盗みを楽に働くことが出来てしまう。それが事実なら、一刻も早く犯人を捕まえなくてはならない。

「でもね、普通の人なら絶対に入手不可能なのよ。その手の専門の所で働いてる人でないとね」

「……そ、それは何なんだ……？」

キリトだけではなく、スメラギとユウキのアバターにも冷や汗が流れ始めていた。

全員、犯人がとんでもないリーサルウェポンを所持していることに戦慄している。武者震いではなく、鳥肌が立つような感覚だ。

「大きく分けて、三つの組織がその権限を所持しているわ」

「三つの組織……？」

「まず一つは警察よ。キリト君の周りに事件に関わってる人で、警察関係の知り合いはいない？」

そう尋ねられると、キリトは今まで出会ったことのある人物で、警察関係者がいないかどうかを思い出そうとしていた。

しかし、神田を逮捕したときの刑事さんくらいしか心当たりはない。

それも調書をとるために話をしただけであって、特別彼と仲が良いと、プライベートで付き合いがあるといったわけでもない。

「……いや、いないな……」

「そう……それじゃあ、消防関係者は？」

「それも……心当たりはない」

これに関してもキリトは心当たりはなかった。警察は現場に踏み込む時や強制捜査、所謂ガサ入れをする時に使用する時がある。

消防関係者は災害現場のセキュリティが生きている場合、同じようにロックを解錠、逃げ遅れた人を救助したり、火災が発生しているなら消火作業にうつる。

どちらの組織も、カードキーのセキュリティを緊急に解錠出来る権

限を持っている。

そして三つ目の組織、その組織は……。

「じゃあキリト君、医療関係者の知り合いはいるかしら？」

瞬間、キリトが凍りつく。

その反応は、誰が見てもあからさまな態度であった。知っている、キリトは知っている。

将来医者を目指して勉強し、大病院の院長を実の父に持つ親友に、容疑者候補である実の兄がいることを知っている。

「……………ッ」

「……………はあ、どうやら決まりね、やはり彼はクロよ」

「119番通報した本人が、何からの理由で救急隊員への受け答えが出来ない場合、鍵のかかった部屋に入る時に使う為の緊急時解錠用マスターキーのことだな？ セブンよ」

なんとという事だ。やっぱりシノンの推理は正しかった。やはりこれまで見えていた点は、しっかりと線で結びつくものだったのだ。

ザザが、新川昌一が真犯人だということはわかっていたが、知らない真実を次々に目の当たりにして、和人は頭の理解が追いついていなかった。

「恭二のお父さんは……病院の院長さんだから、その……昌一って人も、もしかしてカードを持ち出せるんじゃない？……？」

ユウキが震える声でセブンに尋ねると「恐らくね……」と落ち着いた口調で答えを返す。

「……………何で、こんなこと……………」

「……………そこまでGGOってVRMMOに執着してるってことじゃあないかしら？ ゲームのやり過ぎは身を滅ぼすっていう典型ね……………」

再び、全員黙りこくってしまった。

自分の立場と家族さえ利用し、殺人を犯してまで、一つのゲームのトップに君臨し続けるための昌一のあまりの執着心に、言葉を失って

いた。

キリトにとつても、ユウキにとつても、そしてセブンにとつても、仮想世界は特別な場所だ。

しかし……決して取り憑かれてはいなかった。現実との区別はハッキリとついていた。

だが、新川昌一はあまりにも仮想世界の住人になり切ろうとしていく。いや、既になってしまっていると言ってもいいだろう。

メデイキュボイドの中で三年間仮想世界での生活を余儀なくされたユウキとは、また全然違った意味で、仮想世界に囚われてしまっていたのだ。

「……………」

誰も言葉を発しようとはしなかった。またもや暖炉の炎が不規則に燃え盛る音だけしか聞こえなくなっていた。

そんな中、一際大きく「パチン」という薪が燃える音が鳴り響くと同時に、キリトがブツブツと呟き始めた。

「……わかった、ぞ……」

キリトがぼそつと囁くやいなや、三人の視線が彼に集中する。今「わかった」と言ったのか？ 何がわかったというのだろうか。

「……キ、キリト君？」

「殺害方法が……わかったかもしれない」

「え……!？」

「本当なのか？ キリトよ」

驚くセブンを他所に、冷静に聞いてきたスメラギに対し、キリトは「ああ、多分な」と答え、腕を組みながら淡々と語り出す。

これまでの審理、事実、新しい情報を元にロジックを組み立てていき『答え』に繋げる。

「……被害者の死因は……心不全だったよな？」

「え、ええ……そうね」

「……それがどうかしたのか？」

キリトは一度目を閉じ、大きく深呼吸をすると、目つきを変えて、やや下を俯きながら自身の推論を三人に聞かせていく。

「……不自然だと思わないか？ 何で被害者両方とも、心不全で死んでるんだ？」

「……あ……」

「い、言われてみれば……確かにそうよね……」

「餓死でもない、脱水症状でもない、それ以外の臓器不全でもない」

「……とすると、外部から心臓を止めた、とでも言うつもりか？」

スメラギがそう言葉を発すると同時に、キリトは彼を真っ直ぐに見つめる。まるで、それが真実であるかのように。それが導き出された答えであるかのように。

「ああ、恐らくは……何らかの薬品を使ったんじゃないかって、俺は推測してる」

「薬品……だと？」

「そうだ、多分……劇薬か何かを盗み出したんだろう。院長の息子なら病院に顔が効くし、見学したいとでも言えば、院内を見せてもらえるだろう？」

「そ、そうね……」

「その中に、恐らく心臓や、もしくは身体機能を停止させる薬品があったんじゃないか……？」

「……そ、そういえばボク聞いたことある……」

ユウキがそう呟くと、今度はキリトから彼女に視線が集まった。一人一人が話を進めていく中、ログハウス内はとてつもない緊張感で包まれていた。

そしてユウキが、細々とした声で、ゆっくりと口を開いていった。「キリトやアスナと出会うよりもずっと前……まだボクが病氣と闘ってたときね？ 暇潰しに倉橋先生とお話してたんだ……」

「お話……？」

「う、うん、手術のお話。全身麻酔をする時に使うお薬があつて、痛みをなくすのとは別で、体を動かなくするためのお薬なんだって……、確か……さ、さくし……なんとかって……」

「サクシニルコリン、筋弛緩剤きんしかんざいの一種だな」

「……さ、サクシサクニ……？」

「サクシニルコリンだ。貴様も病氣と闘った彼女を家族に持つ身なら、少し医療のことを勉強しろ、キリトよ」

両手で腕組みをし、目を閉じてキザったらしくソファに腰掛けているスメラギを見ると、キリトは「ムムム……」と不満そうな声を漏らしながら複雑な視線を彼に向けていた。

未だに憶測の域を出ないが、被害者を死に至らしめた原因はわかった。

しかし……そうなるともた別の問題が出てくる。今度はどうやってそれを注入したかということだ。

注射器で劇薬を体内に注入したとして、それなら絶対に注射針の痕跡が残るはずなのだ。何故かと言うと犯人は注射器の扱いに関しては素人だからだ。

熟練した医師や看護師ならまだしも、跡が残らず綺麗に注射するには、かなりの経験とコツがいる。

ましてや殺人を犯すために、殺意を持って注射をしたはずだ。残らない方がおかしい。となると、犯人はどうやって薬品を注入したというのだろうか？

「……しかし薬品は注入された、それが事実だとすると……」
「……ボク、それ知ってる……」

ここにいるメンバーの中で、患者側とはいえ一番医療に携わってきたユウキが呟くと、またもや彼女にその視線が集中する。

若干のやりにくさを感じつつも、ユウキは先程と同じように、口を開いていく。

「無針注射器って……、痛みも跡も残らずに、お薬を注射出来るの。メデイキュボイドを使う前に……よく倉橋先生がやってくれた」

HIVと闘うため、感染症から身を守るために、ユウキは現実世界で様々な薬の投与を続けてきた。

時に大量の薬を飲み、また時には注射で薬品を注入し、必死にAIDSの発症を抑え続けていたのだ。

当時としては、ユウキの記憶から「注射器^{イコール} Ⅱ 怖くて痛い」という

偏見を拭いさった革命的な出来事だったという。

「腕とかに何回も注射したけど、跡は一度も残らなかったよ」

「……なるほどな、サンキユなユウキ、お陰で全てが繋がった」

過去の記憶を思い出してまで、キリトたちに有用な情報を提供してくれたユウキの頭を、キリトは優しい表情でそつと撫でた。

ユウキはそんな彼の掌を心地よさそうに受け入れて、満足そうな笑みを浮かべている。

一瞬で緊張した空気から、ほんのり甘い空間へと変わってしまったログハウス内であったが、セブンの「うおっほん!？」というわざとらしい咳払いで一蹴されてしまった。

ついいつものやり取りを人前でやってしまっていたキリトとユウキは、少しだけ恥ずかしそうにもじもじと顔を赤らめている。

アイドル業をやっているのに、世界中にファンが、クラスタがいるというのに、何だか女として負けた気がする。

そんなちよつとした敗北感を抱きつつも、セブンは脱線した話を元に戻すべく、これからのことを話し出した。

「二人共いい？ これからのことを話すわよ？」

「は……はい」

「お、お願いします……」

一体誰に頼まれてここにいるんだと、色々突っ込みたかったセブンであったが、ここはぐつとこらえる。

今はアイドルセブンとしてではなく、頭脳明晰な七色・アルシャービン博士としてここにいるのだから。

「いい？ 私はこれからあの人に頼んでザスカーの日本支社に問い合わせをもらうわ」

「あ、あの人……？」

「菊岡さんのことじゃないかな、キリト……」

「そして、更に被害者宅のセキュリティロックのログを調べてもらう。そのログに病院のマスターキーのIDが載ってたらクロよ。少なくとも重要参考人として署まで来てもらうことくらいは出来るはず」

「緊急通報履歴の照会比较、そして注射器と薬品が見つかれば更に決

定的だ。より細かな捜査も再開されるだろう」

「……は、はあ……」

たったものの数十分でここまでの真実に辿り着いたセブンに、キリトは尊敬の眼差しを送っていた。

同じVR技術を勉強している身として、彼女には近しいものを感じていたが、やはり世界的に活躍する頭脳を持つているだけあって、自分とは格が違うということを感じ知らされていた。

自分もまだまだ未熟、もつと勉強して色々なものを見ていかななくてはと、決意を新たにしていた。

「裏は私たちが取るから、キリト君は弟さんの所に行つてあげて」

「……お、俺がか……？」

セブンは左手でメニューを捜査しながら、早速今日ここで得た情報をもとに、物凄い早さでホロキーボードをブラインドタッチで打ち込み、新たに資料を作成しているようだ。

しかし作業をしながらも、ちらちらとキリトの方に視線をうつしながら、彼に友達の元へ行つてあげるように促す。

「……友達なんですよ？ 彼……」

「あ、ああ……、大切な……親友だッ」

「なら、行つてあげなさい、キリト君」

「……ああー！」

そうセブンに諭されると、キリトは左手でメニューを操作し、ログアウトメニューを表示させた。

そしてユウキもそれに続くよう、同じ動作でメニューを表示させる。

「今日のことは……後はスマホで連絡し合おう」

「ええ、わかったわ。くれぐれも気をつけてね？ キリト君」

「大丈夫だよ、恭二には護衛も付いているからな」

「……それならいいんだけど……」

「心配するな」と訴えるかのようにニカッと笑顔を見せたキリトは、ユウキと共に現実世界へと帰還していった。

眩い光と共に消えていった彼らを見送ったセブンは、引き続きホロ

キーボードを操作して、資料作成を進めていく。

「スメラギ君、悪いけど……さっき言ったこと、あの人に伝えてもらっていいかしら。七色・アルシャービン博士として、協力を要請するつて」

「……了解した」

セブンからの指示を受けると、スメラギも迅速に左手を動かし、現実世界での仕事を果たすべく、光に包まれながらログアウトしていった。

「……………」

かつて自分は、このアルヴ Heim・オンラインで、とりかえしのつかないほどの過ちを犯してしまった。

でもキリト君が、アスナちゃんが、ユウキちゃんが、そしてお姉ちゃんが私に全力でぶつかってきてくれたから、私は本当の私に戻ることが出来た。

クラウド・ブレイン計画……、今思い返してみると、なんておぞましいことを考えてしまったんだと思う。

仮想世界は私利私欲のために利用するものではない。全力で楽しむための素敵な世界というだけなのだ。

過去に過ちを犯した自分にこんなことを言う資格はないのかもしれない。だけど敢えて、敢えてこのセリフを口にすることにしよう。

「……もうこれ以上、仮想世界を好き勝手になんかさせないんだから……………」

第72話く死闘、死銃対死銃く

私は人を殺した。この手で、人を殺した。大切なものを守るため、引き金を引いた。

ちよつとだけ怖かったけど、勇気を振り絞った。

いや違う、勇気とかどうとかじゃない。なりふり構っていられたなかっただけだ。そうしないと母さんを守ることが出来なかった。

なんとか、守ることが出来た。脅威は消え去った。でも、それは一件落着とは程遠い結末だった。

母さんの見る目が、私を見る目がその日から変わってしまった。

この世のものとは思えないような、恐ろしいものを見たような目で、私を見ていた。

私は血まみれだった。私が殺したあの男の流れ出た紅い血で、真紅に染まっていた。

自分が何をしてしまったか理解した時、私の意識は途切れた。

西暦2026年 11月17日(火) 午後12:13 東京都文京区湯島 詩乃のアパート

「……………ッ」

複雑な表情をしながら、朝田詩乃は目を覚ました。

今日は平日、学生は勉学の為学校に、社会人は働きに会社に行かなくてはならない日だ。

高校生である詩乃も、当然学校にいてしかるべきなのだが今のこのお昼時に、彼女は自宅のベッドで目を覚ました。

「また……………あの夢……………ッ」

折角忘れかけてたのに、あの男の顔を、忌々しい記憶をまた思い出してしまった。

母さんを守るためとはいえ、私は一人の人間の命を奪った。

ああするしかなかった。あの状況で何か出来るのは私しかないな
かった。私がやらなかったら、誰が母さんを守ったというの？

誰も守ってくれないなら、私がやるしかない。

例えそれがどんな結果になろうとも、私がやるしかなかった。

今生きてるこの瞬間に抱いてるこの胸の苦しきも、その代償なのだ
から。

「……………」

まるで覇気が見られない詩乃は、ゆっくりと上体をベッドから起こ
し、枕元に置いておいた自分のスマートフォンに手を伸ばし、現在の
時刻を確認する。

「…………大遅刻…………ね」

正午を過ぎた時刻表示に、詩乃はやれやれといった顔つきで目線を
送っていた。

そして傍らへとスマホを置き、下半身に力を入れてゆっくりと立ち
上がる。

徐に自分の勉強机の引き出しを開けて、中に仕舞ってあるモデルガ
ンに手をかけた。恭二と一緒に組み立てたモデルガン。

女の子の詩乃でも、グリップ部分にすっぽりと掌が収まるサイズ
だ。

手に持つだけでなく、あの時と同じよう、両手で持ち、構えてみせ
る。

「…………大丈夫みたいね…………」

あんな酷い夢を見た後でも、銃の形をしたものは触れるようだ。こ
れも彼の協力のたまもの…………なのだろう。

彼がいたから、今の私は私でいられる。

朝田詩乃として、シノンとして生きていられる。

「…………恭二…………くん…………」

私は彼が好きだ。いつも傍にいてくれて、優しく微笑んでくれる。

私が素っ気ない態度をとった時でも、ドライな反応をした時も、思
いつきり機嫌を損ねた時でも、いつも愛想よくニコニコ笑ってくれて

いた。

……そういえば、彼はどうして人殺しの私にずっとこんなに優しくしてくれているのだろうか？

思い返してみれば、私が自分の犯した罪を自分から明かしたのも彼が初めてだ。

どうして彼に話したかはわからない。でも不思議と彼になら話してもいいかなって思った。

だから話したんだ。

秘密を明かしても、彼は私への態度を変えなかった。むしろより一層優しくしてくれた。

それが哀れみや同情といった感情から来ているものなのかはわからない。

そうなのかもしれないし、そうじゃないかもしれない。

でも、私は彼という時間が心地いい、そして安心出来る。彼は私に安心をもたらしてくれる。

仮に、仮に恭二君にどんな秘密があつたとしても、私は彼を受け入れる。

だって、彼は私を受け入れてくれたから。こんな犯罪者の私を、優しく受け入れてくれたから……。

「……今日は学校、休もうかな……」

今朝見てしまった夢のせいで、学校なんかどうでもよくなった。どうせ一日くらい休んだところでそこまで成績に影響が出る訳じゃない。

埋め合わせは効くし、こんな気分で授業に出ても、内容が頭に入っていないだろう。

それに、彼の……彼のことが気になってしょうがない。

「……恭二君……ッ」

昨晚何回、何十回と彼の携帯に電話をかけた。しかし、彼は一向に電話には出なかった。

ただ単に気まずくて話せないだけなのか、はたまたそれとは、別の要因で電話に出ることが出来ないからなのか。

「……………」

「そうだ、腐つてる場合じゃない。私にも何か出来ることがあるはずだ。」

「こんな私を支えてくれたのは他でもない、恭二君じゃないか。」

「それなら今が、彼に恩返しをする時だ。今が……その時だ。」

「……………ん、あら……………？」

「ポロロンというサウンドとバイブレーションと共に、詩乃のスマホのディスプレイに新しい通知が表示されていた。」

「どうやらLINEメッセージの通知欄のようだ。」

「キリトから……………、何の用かしら……………」

「詩乃が通知をタップし、メッセージに目を通すと、そこには驚くべき内容が書かれていた。」

「彼らしく、長つたるくもわかりやすい文言で、緑色のウィンドウに白い文字がズラーツと並んでいる。」

「……………え、こ、これは……………」

「シノン、全部わかった。今世間を震撼させている、この死銃事件のことが、何もかもがわかった」

「……………何ですって……………？」

「まず、新川昌一は今回の真犯人と見て間違いない。今日、セブンから知恵を借りて、菊岡さんに裏を取ってもらったんだ。ヤツが自分の病院から盗み出したと思われるマスターキーのIDログが、被害者宅のセキュリティに記録されていたんだ」

「……………ッ」

「そして病院側に問い合せた結果、保管されてるはずの特注の注射器と、劇薬がなくなってる事がわかった。恐らくはこれも昌一が盗み出したんだと思う」

「注射器……………劇薬……………？」

「この死銃事件は、アミューズファイアに細工をしたとか、神の力だとかそんなもんじゃない。ちゃんと仕組みが……………トリックがあったんだ」

「トリック……………？」

「次から次へと目に入ってくる新しい情報に、詩乃は正直困惑の表情」

を隠せなかった。

確かに昌一が真犯人で恭二が脅されているという仮説を立てたのは彼女だ。

しかし、こうも次々に考えていたことが的中すると、逆に気味の悪いものがある。

冷や汗を垂らしながら、起きたばかりで顔も歯も磨いていないことを忘れて、詩乃は和人からのメッセージをスクロールし続けた。

「……………」

「仕組みはバカバカしいくらいに単純だ。まず恭二がGGOに昌一のアカウント、死銃デスガンのアカウントでログインする。昌一はその間、マスターキーを使用してターゲットの自宅に侵入。そして時間とタイミングを合わせ、仮想世界と現実世界、同時にトリガーを引く。これだけだ」

「……………何よこれ、こんな……………、こんなことが……………？」

「何も知らない人間が傍から見たら、死銃デスガンの力で殺されたと思うだろう。でもフタを開けてみたらなんてことない。そう見せかけていただけだったんだ」

「……………」

「そして決定的だったのは、被害者候補として挙げられていたGGOプレイヤーの家で張つてた網に、ヤツがまんまと引つかかったことだ。ターゲットの自宅に侵入しようとしていたヤツは張り込みしていた私服警官に見つかり、職務質問され、逃走を試みた」

「……………」

「しかし一般人が警官を振り切れるはずもなく、身体検査で出てきた注射器とマスターキーが仇となり、窃盗罪、及び不法侵入未遂で現行犯逮捕されたよ」

「逮捕……………された？」

犯人が逮捕された？　こんなにもあつさりど？

さつき……………つい今さつき彼の助けになると誓ったばかりなのに。

私は……………何をした？　何もしてないじゃないか。結局私は何も出来ない、無力でちっぽけな存在ってことなの……………？

「……私は……」

いや、何を残念がつてるんだ。事件は解決したんだ、彼も助かったんだ。なら……それで良かったじゃないか。

もうあの人殺しの言う事を聞く必要なんてない。ビクビクしながら暮らす必要も無い。

また彼と一緒に笑うことが出来る、色んなところに出掛けることも出来る。

彼は奥手な所があるから、私がしつかりしないと、うん。

「……私が、しつかりしないと……」

釈然としないまま、詩乃はモヤモヤを心の奥底に無理やり仕舞い込んで、詩乃は洗面所へと足を運ぶ。

物凄い夢を見た時、人は朝から脱力感に見舞われ、その日一日は、別にどうでもいいかなという感覚に陥る。

今の詩乃も、正にその状態なのだが、彼女には一つだけやらなくてはならないことがあった。

今から学校にいくわけでもない、買い出しにいくわけでもない。もつともつと大切な用事だ。

「ン……ッ」

顔に石鹸をつけ、ゴシゴシと手で擦る。覇気のなくなった顔に気合を入れるかの如く、一生懸命洗っていく。

切り替えるために、自分の腐った部分を洗い流すかのように、泡立った顔に水をかける。

一通り流し終え、脇に下げてあるタオルで顔を拭う。毎日毎日やっていることだ。

しかし今日はどうも、サツパリしない。

「……酷い顔ね……」

鏡越しで見ると、覇気の無さが目に見えてわかる。目の下にはクマがあるし、疲労感が滲み出ている。さらにはダボダボの白いワイシャツが、だらしなさに拍車をかけている。

試しに笑顔を作ってみたが、とても素敵と言えるものじゃあない。どことなく引き攣っている。

自分は何をやっているんだという気持ちに苛まれながら、詩乃は洗面所に背を向けて再び部屋へと戻る。

さて、これからどうしたものか。和人のメッセー^{デスガン}ジの意味をそのまま受け取るとするならば、死銃事件は解決したようだ。

私の心配をよそに、赤眼のザザは無事に御用。

これ以上人が死ぬこともない、仮想世界で変な噂が立つこともない。また安心して毎日を過ごせる。楽しい時間の中にいられる。

「……………ッ」

そう思っていたはずだった。

しかし何故かはわからないが、この心の中のモヤモヤがすつと晴れない。

全てが丸く収まったって言うのなら、何でこんなにスッキリしないのだろうか？

いやそうじゃない、きつと私は……………何もやれなかった自分自身にやきもきしているだけだ。

自分の無力さに納得いつていないだけなんだ。

そうだ、きつとそうに違いない。きつとそうだ、そうに……………違いないんだ。

「……………そうだ、彼に……………会いに行かないと……………」

私の問題なんてどうでもいい。彼が……………彼のことが気になる。

会いたい、彼に会いたい。恭二君に……………、恭二君に会いたい……………ッ。

「恭二……………くん……………ッ」

彼のことを考えると、胸が締め付けられる思いがする。体の調子が……………気分が悪いこともあるが、何だか良くない胸騒ぎがする。

もう大丈夫なはずなのに、全部終わったはずなのに、不吉な感じがする。

「……………会わなきゃ……………ッ」

重い体を無理やり動かして、外出するために支度をする。いつものならば学生服に身を包んでいる時間帯だ。

別に学校をサボタージュするのはこれが初めてではないが……、自分の意思でサボるのは初めてかもしれない。

別に、そんなことは今はどうでもいい。

私は……ただ彼に会いたいだけ。ここから十分ばかり歩くだけ、あつてその顔を見て安心したいだけだ。

恭二くん……、恭二くん、恭二くん……ッ！

(今からそっち行くね、恭二くん)

詩乃は私服に着替えると、財布と携帯だけを持って家を出た。彼に会うために、また以前と同じように一緒に笑うために。

そして何より、今度こそ彼に、この気持ちを伝える為に……。

同日同時刻 東京都文京区湯島 東京メトロ湯島駅前

「……最近どうも何かと東京に用があるな……」

「えへへ、そうだね」

自身の後頭部をポリポリとかきながら、和人は湯島駅の入口の外へ出た。

本当は和人一人で来るはずだったが、死銃デスガンが捕まったという事実を聞き、恭二の様子を見るだけならと、木綿季も付いてきたのである。

平日のこのお昼時、文京区の駅前には通学する学生の姿はなく、外回りのサラリーマンや駅前の店へ買い物客がよく目立つ。

しかし東京二十三区の一つの駅前とだけあって、川越駅前とは人口密度が全然違う。

和人たちの目の前を通り過ぎる人だけを見ても、二倍三倍、もしくはそれ以上に人が行き交っている。

「さてと、恭二の家は確か……シノンの家の近くだったよな」

「事情聴取を取るために任意同行を求められるかもって言ってたから、その前にお話できたらいいね」

「ああ、そうだな」

死銃は逮捕され、騒がれていたこの一件はとりあえず幕を閉じる。

今回、ヤツに殺害された被害者は公には二人となっているが、明るみになっていないだけで、他にももしかしたら殺されているかもしれない。

余罪の追求、事件の裏側、それらを全て聞き出すために、取り調べはすぐに始められるだろう。

その際には、今回の事件の関係者として恭二やその家族も、署まで同行を求められることになる。

当然、情報提供をした俺やセブン、菊岡さんも話をするために行くことになる。

かなり長い拘束時間になるだろうが……、致し方ない。そんな事よりも、恭二の無事をまず喜ばなくてはいけない。

「恭二……大丈夫、じゃあないよな……」

青空を見上げながら、スマホのナビに従い、和人はボソツと呟いた。木綿季もトコトコと足踏みよく、彼の後について行っている。

「んー、仲が良くなかったって言ってたけど、それでも家族が逮捕されるってのは、結構くるんじゃないかな……」

「……やっぱり、そうだよな……、親父さんもこれから大変だろうな……」

これから、新川家は大変な大騒ぎに見舞われるだろう。

自身が運営している病院で、実の息子が備品を盗み出した。しかもそれは嚴重に管理されている劇薬だ。

更にそれらを用いて人を殺めてしまっている。会見や辞職だけでは済まない。下手したら病院そのものがなくなるかもしれない。

そうしたら恭二はどうなるんだろうか？ 普通の生活を続けていられるのだろうか？

それから医者を目指すのだろうか？ それとも違う道を探すのだろうか？

……考えても仕方が無いことだ。何せ俺は恭二じゃない。彼の人生のことは彼にしかわからないから。

これから先の道を彼がどう歩いていこうとも、それは彼が決めることだ。俺はそれを見守ることしか出来ない。

「……だけど、背中を押すことくらいは出来るよ……な？」

「ん……、そうだね。ボクたちが……恭二の力になってあげられれば……いいよね」

「……そうだな、そうだよな……」

右手にスマホを、左手で木綿季の手を握りながら、和人は一緒に恭二の自宅へと向かう。

恐らく彼は何も知らない、知らされていない。

実の兄が逮捕され、事情聴取や病院にガサ入れが入るであろうことも。

だから、俺が全て話してあげなくては。

もしかしたら、彼も知っているかもしれない。だとしても、誰かが彼のそばにいてあげなくちゃ。傍にいて、安心させてあげなくては。

「……………」

「和人何してるの？ 行こっ」

「……え？ あ……、ああ……そうだな」

「くすつ、変な和人……♪」

色々思うところはあるが、それは恭二に会ってからでも遅くはない。

そう思いながら足を数歩動かした、その時だった。

「……………ん？ メッセージだ、……菊岡さん？」

ナビに従って歩を進めると、見慣れた名前からメッセージが届いている。

和人がすぐにタップして内容を確認してみると、のんびりしていた和人の表情が、穏やかではなくなっていた。

「どうしたの？ 和人？」

木綿季に声をかけられるも、和人は慌ててどこかへ通話をかけようとしていた。

彼をここまで急がせるようなことが、そのメッセージには書かれていたようだ。

歩いてきた足の動きを止め、スピーカーから聞こえる呼び出し音に耳を傾ける。

早く出ろ、早く出ると早く気持ちを抱き、相手方に通信が届くのを待つ。

幸いにも、向こうからメッセージを送ってきたこともあり、ワンコールで相手方は通話に応答してくれた。

「も……もしもし、菊岡さんか!？」

『キリト君かい!? まずい事になった……』

「おい菊岡さん、これ……一体どうしたことなんだよ!？」

『済まないキリト君……、これは想定外だった……』

「想定外って……、そ、そんなことよりも、俺はこれからどうしたらいい!？」

和人は完全に焦っていた。嫌な汗が吹き出し、呼吸が荒くなっているのを感じていた。

目の前の現実が信じられない。馬鹿な、こんな、こんなことがあつてたまるか。こんなこと信じられるかと、事実を受け入れられないでいた。

『君は今どこにいるんだい?』

「文京区の湯島駅前だよ、今から恭二の家に行くところだったんだ!」
『……近いな……、キリト君、彼の自宅にこちらから直ちに警官を向かわせる』

「警察を……?」

『ああ! 先に突入するなんてバカな真似はよしてくれよ? 決して無茶はせずに、警官の到着を待ってくれ!』

「なっ……間に合わなかったらどうするんだよ!」

「間に合わせる! だからそれまで決してそこを動かないでくれ!」

「ご……護衛はどうしたんだよ! 一人つけていたはずだろ!？」

「す……すまない、死銃デスガンを逮捕したときに連絡を回し、もう大丈夫だと判断して、今は護衛の任を解いてしまったんだ……」

「な……なんだって……」

「だがもう警察は動いている! だから決して早まらないでくれよ」

！」

「……くッ、わ、わかったよ……ッ」

必要な話だけ済ませると、和人は迅速に通話を終了させ、ナビアプリに従って恭二の自宅へと急ぎ、足を動かした。

馬鹿な真似はよせだと？ 早まるなだと？ ふざけるな、今から警察に通報して到着を待っていたらそれこそ手遅れだ。

それに何より警察は目立ちすぎる。用心深い奴がそれに気付かないはずがない。

「急ぐぞ、木綿季！」

「え……？ わっ！」

左手で木綿季を引っ張りながら、人混みを避けながら彼の住んでいるアパートを目指す。

事件は解決したはずなのに、^{デスガン}死銃は逮捕されたはずなのに、何故彼はここまで焦りの表情を見せているのか。

全ては全員の認識の違いから起こってしまったことだ。

和人も詩乃も、木綿季も菊岡も、全員が全員、大きな思い違いをしていたのだ。

都内からの電車圏内だけとはいえ、^{デスガン}死銃は何故短期間で広範囲にわたり、GGOプレイヤーを殺害することが出来たのだろうか？

恭二という協力者がいたとはいえ、そうやすやすと上手くいくはずがない。

GGO最大のイベント、^{バレット・オブ・バレット}B o Bのような大きな大会では、より多くのプレイヤーが同じフィールドに集まる。

強豪プレイヤーも湯水のように集まる。当然プレイヤーは皆が皆違うところに住んでいる。関東に住居を置いていないプレイヤーも多い。

そんな中、全員を^{デスガン}死銃がアバター撃ち殺し、それに合わせて現実世界でもプレイヤー本人を殺すなんてことは、流石に限界がある。

綿密に計画を立て、首尾よく行ったとしても、同日に殺害出来るのはせいぜい一人か二人といった所だろう。

その弱点を考えれば、発送を逆転させれば、もっと効果的に動くに

はどうすればいいか？ その答えは実に簡単なことだ。

死銃は、もう一人いたのだ。

やむを得ず協力している恭二、今回の黒幕である昌一、そしてその他にももう一人、第三の死銃なる人物がいる。

つい先刻逮捕された死銃というのは、この第三の死銃だったのだ。

昌一と同じくSAOサバイバーで、同じギルド笑う棺桶に所属していた幹部の一人、ジョニー・ブラックこと金本淳。

この人物こそが、昌一とエリアを分かち、ターゲットを殺害していた第三の死銃、というわけなのであった。

この事実を昌一が知ってしまったら、一体どうなるか？

疑り深く、用心深い昌一は内通者、つまりは裏切り者がいると考えるだろう。

つまりは、その疑いの目は弟である恭二に向かう。兄弟仲は良くな、友達を見えない人質に取り、脅迫まがいのことまでして無理矢理協力させている。

いつ謀反が起きても不思議ではない状況下に置かれた恭二を疑うのは、極自然と言える。

湯島駅から恭二のアパートまでは走って首尾よく行っても凡そ十五分。死銃が逮捕されたのは今から約一時間前。

用心深い奴にとっては、異変に気付かれてもおかしくないほど時間が経過している。

事は一刻を争う。一秒でも早く、警察よりも早く彼の元へと辿り着かなくては。

少年は少女の手を引き、最悪の事態を避けるために、走り続けた。

「はア……はア……ッ」

「はッ……、はッ……」

呼吸を乱しながら、汗をかきながら、二人は走り続ける。早く行かなくては、彼が危ない。

そんな気持ちだけを抱いて、和人は目的地に向かい、地面を蹴り続けた。

その度に二人の衣服が風になびき、木綿季の長い黒い髪の毛が大きく揺れる。

「か……和人、まって……ッ」

和人の手をパツと離し、木綿季は項垂れて激しく息を乱し、ガツクリと項垂れてしまっている。

地元横浜の、急な坂を平然と登る持続力があっても、激しい運動を継続してやるだけのスタミナが、彼女にはまだなかったのだ。

心臓の鼓動が早くなっている。肺も締め付けられているみたいに苦しい。

昔クラスで一番運動出来たボクが、たった五分間走り続けただけで、こんなにも音をあげてしまっている。

やっぱり今のボクは退院出来たというだけで、基礎体力はこれっぽっちしかないんだ。

もつと……もつと運動していかないと、これから先苦勞しちやいそうだな……。

直葉に、今度本格的に剣道教えてもらおうかな……。

「ゆ、木綿季!？」

下を向いて肩で息をしている木綿季に、和人が心配そうに近寄り、かがみ込んで彼女を気遣う。

「だ、大丈夫……、ちよつと疲れただけだから……ッ」

木綿季も大したことないと、逆に和人を気遣い、心配させまいとニコツと微笑む。

しかし、木綿季の性格をよく知ってる和人は、それが強がりだということがわかっていた。

（し、しまった……、木綿季の身体のこと、すっかり忘れてた……）

三年間寝たきりだった木綿季の体は、日常生活を送る程度ならば問題ないくらいの体力はある。

しかし、激しい運動を継続させるには、まだまだ無理があったのだ。半年間リハビリをこなしただけでは、その域までには至らない。もっと本格的なトレーニングを重ねていかななくては、とてもじゃないが昔通りとまではいかないだろう。

「……………ごめんね和人、足……………引つ張つちやって……………」

「いや……………俺の方こそ悪かった……………、お前の身体のこと、全然考えてなくて、突っ走つちやまって……………ッ」

「大丈夫……………だよ……………ッ」

こんな状態の木綿季をまたおいそれと連れ回すわけにはいかない。かと言って、今は急がなければならぬ理由がある。どうすればいい、一体どうすれば……………。

「和人、先に行つて……………？　急がないといけない理由があるんでしょ……………？」

「え……………」

「ボクなら大丈夫だから、その公園でちよつと休んだら……………和人の後に続くから……………」

「で、でもお前を置いてなんて行かれるかよ！」

木綿季の気遣いに、和人がそんなこと出来ないと心配そうな表情を見せると、木綿季はまたニコツと笑顔を見せ、彼の手をそつと片手で握り締めた。

「大丈夫だよ、本当にちよつと疲れちゃっただけだから。それに……………スマホもあるんだし、後からでも辿り着けるよ？」

「……………で、でも……………」

「行つて和人、じゃないとボク、和人のこと嫌いになるよ？」

「え……………っ」

優柔不断な和人の態度に、木綿季は眉をひそめて厳しい剣幕ではやし立てた。

今はボクのことよりも、恭二の方を考えて。今、和人の助けを一番必要としているのはボクじゃない。恭二なんだよと、目で和人に訴える。

曲がったことが大嫌いで、真つ直ぐぶつかりにくる木綿季の性格

を、和人は知っている。

こうなってしまうとテコでも動かないことも、よく知っている。

「……和人！」

行つて和人、行つて……恭二を助けてきて。それが出来るのは、君
しかいない。和人しかいないんだ！

行つて、行つて和人！ 行け……、行け！ 和人ツ！！

「……………すまないッ、すまない木綿季ッ！ ありがとう……ッ！」

心の引つかりを無理矢理引き剥がし、和人は木綿季を置き、一人
先に走り出す。

腕を前後に振り、懸命にアスファルトを蹴り、ひたすら前へ前へと
進んでいく。

急げ、急げ、急がないと手遅れになる。もっと早く走れないのか、脚
がぶち折れてもいい。

もっと早く！ もっと早くッ！ 一秒でも早く恭二のところに、走
れ、走れッ、走れッ！！

(間に合ってくれ……、恭二ッ!!)

同日 午後12:25 東京都文京区湯島 新川恭二のアパート

都内のあちらこちらに点在する、どこにでもあるような少し古ぼけ
た小さなアパート。

その中の一室が新川恭二の自宅となっている。

廊下にはエアコンの室外機と、ちよつと塗装が剥がれた洗濯機が置
かれている。いずれもこのアパートの備え付けのものだ。

そんなアパートの恭二の部屋に、十代後半の男子が一人、成人男性
が一人いる。一人は椅子に腰掛け、ベッドに横たわっているもう一人
の男に視線を送っている。

椅子に腰を下ろしている男は新川恭二、この部屋の家主である。そ
してベッドで横になり、アミユスフィアを被っている男は、彼の実の

兄、新川昌一だ。

そのアミュスファイアにはガンゲイル・オンライン、通称GGOのカートリッジが差し込まれており、彼はそれをプレイしているようだ。

それからしばらくして、ゲームを終了し、ログアウトしたのか、昌一はむくりと上体を起こし、瞼をあげ、両手でアミュスファイアを自身の頭から取り外し、無言のまま佇んでいた。

「……………」

「……………」

兄貴の様子がいつもと違う、と感じた恭二を尻目に、昌一は無言のまま、ズボンのポケットに手を入れ、自分のスマートフォンを取り出した。

その動作一つ一つが、何やら不気味に見えて仕方がない。細身の体が、尚更その不気味さに拍車をかけている。

「……………」

昌一はスマホの画面を見ながら、解せない表情を浮かべている。

考えていたことと違うことが起こったのか、ちよつとした疑問が浮かんだのか、違和感を感じているような顔つきだ。

それもそのはず、今回のターゲットの殺害計画は、昌一がGGOでターゲットのアバターを銃撃し、金本淳が現実世界でプレイヤーを殺害するという流れになっていたのだ。

通常、死銃デスガンに撃たれたアバターはフィールドならば銃撃のダメージを受け、市街地エリアのようなPK保護圏内なら、バリアに阻まれる。

その後、現実世界で体内にサクシニルコリンを注射されたプレイヤーは心臓が停止し、アバターは苦しむような仕草を見せる。

そして脳から信号を発信することが不可能になり、回線切断に見舞われ、撃たれたプレイヤーは仮想世界、現実世界両方から永久退場となくなってしまふのだ。

しかし今回は違った。フィールドで奇襲したアバターは死銃デスガンに撃たれたにも関わらず、ピンピンしていた。

それどころか自慢の獲物を取り出され、反撃を許してしまい、返り

討ちにされてしまったのだ。

想定外のことが起きたことで焦りを生じさせ、状況の判断が遅れた死銃は、あつさり^{デスガン}と殺すはずだったターゲットに逆に殺されてしまったのだ。

そして貴重な装備をばらまいてしまい、市街地エリアへとリスポーン。

何故こんなことになったのかと考えながら、ログアウトし、現在に至る。

「……………」

昌一はスマホの画面を見ながら、位置情報アプリで何やら確認をしている。そしてアプリを終了させると、今度は誰かへと電話をかけた。

耳にあてがったスピーカーからは、何も聞こえない。相棒の番号にかけても、何も反応がない。

だがしばらく待つと漸く『ガチャ』というサウンドが聞こえた。そしてそこから先、聞こえてくるであろう男の声の反応を待つ。

「……………」

『おかけになった電話番号は、電波の届かない場所にいるか、電源が入っていないため、かかりません』

機械的とも言える音声ガイダンスが聞こえる。いくら待っても、その音声は何回も何回もループし、彼の耳に響き渡った。

おかしい、ヤツはどうしたんだ？ 計画をしくじったというのだろうか。

いや、それは有り得ない。人の出入りが少ないアパートだということとは調査済みだし、現場近くの周辺も滅多に人は通らない。

しかし、しくじったからと言って、ヤツから何の連絡もなしというのは有り得るだろうか？

これまでに計画に支障が出そうな時は、犯行の三十分前までに予め通達は来ていたはずだ。

それがないということは、連絡することが出来ない状況におかれてしまったということか？

それとも今までに遭遇しなかったトラブルに見舞われたというのか？

だとしたらそれはなんだ？ 何故ヤツの携帯は繋がらない？ 何故ヤツの位置情報が、殺害現場で途切れている？

何故だ？ 何故なんだ？ 何故――

「……………」

様々な思考を巡らせ、彼は一つの答えに辿り着いた。繋がらない電話、プツリと不自然に途切れている位置情報。

そしてターゲットはログアウトせずに、生きている。殺害に絶好なこの状況下で、彼がしくじるとは考えにくい。

となると、外部的要因、つまりは自分たち以外の介入があつたに違いない。

つまり、計画がバレた。

今まで決して証拠を残さずに積み重ねてきた。となると、この犯行が外部に漏れる可能性といえば、もう一つしかない。

「……………」

「……………何だよ、兄貴……………」

内通者、裏切り者だ。それしか考えられない。

昌一は視線をスマホから恭二にうつすと、じつと彼を見つめていた。

お前が、お前が教えたのか、この計画を。死銃計画デスガンの全てを。

俺が考え、組み立て、育てたこのプロジェクトを。弟のお前が、クソみたいになちっぽけでつまらない男のお前が、この俺の邪魔をしたというのか。

「……………ッ」

昌一はスマホをポケットに仕舞うと、ベッドから腰を上げて、ゆっくりと恭二の座っているデスクのある方へとにじり寄っていった。

「な……………何……………ッ」

一瞬、恭二の意識が飛びかける。腹に覚えのない痛みと衝撃を感じ、あまりの圧迫感に呼吸が出来ない。

何が起こったのかを認識するのに、さほど時間はかからなかった。

昌一が、恭二の腹部を思いつきり殴りつけたのである。どこからか取り出したのか、その殴った手にはご丁寧にメリケンサックがはめられている。

金属をグリグリと押し当てられる痛みにも、恭二は悶えていた。呼吸もままならず、痛みとともに口から苦しそうな声が漏れている。

「ア……ッ、ガ……ッ」

「この、裏切り、者が」

「う……ら、ぎり……も、の……？」

身に覚えのない疑惑の念に、恭二は困惑していた。何故兄貴は僕を殴ったんだ、何故僕は殴られたんだ。

それに裏切り者って何なんだ。僕は兄貴の言われた通りにしてきた。僕の大切なものを傷つけさせないために、唇を噛みながら従ってきた。

だのに、何で僕はこんなことになっているんだ……？

「ガハッ！」

恭二の腹部にメリケンサックを押し当てていた昌一は、空いているもう片方の手に体重を乗せ、今度は恭二の顔目掛けて拳を放った。

椅子に座っていた恭二はまともにそれをくらってしまい、積み重ねていた本棚や組み立てていないモデルガンのパッケージを派手に巻き込んで、椅子から床に転げ落ちてしまった。

「あ……ぐ……」

「お前の、ような、クズがッ」

転げ落ちて横たわっている恭二の身体に、今度は足蹴りを浴びせていく。

鈍い音が部屋に響く度に、恭二の痛さに悶える悲鳴も、部屋中にこだましていた。

腕、脇、脚、腹、胸、様々な部位を手加減なしで何回も、何十回も蹴り飛ばす。

「がッ……、うグッ……」

「俺の、足を、引っ張った、裏切り、者がッ」

「……ば、僕は何も……して、いない……ッ」

「……ほう、よく、言うな、この、クズが」

身に覚えがないと弁明する恭二の態度に逆上したのか、昌一は蹴るのをやめ、今度はその脚を、横たわる彼の側頭部に当て、全体重を乗せて圧力をかけ始めた。

ギリギリと、恭二の頭に圧迫感が襲いかかる。体重の軽い昌一とはいえ、成人男性の足で踏まれてしまつては、ダメージはかなり大きい。

「あ……ッ！ う……あ、あ……ッ!!」

「いい、鳴き声だ、もっと、わめけ」

かつてSAOでプレイヤーを殺害した時も、こんな感じでいたぶつていたのか。実の弟であるのにも関わらず、昌一は恭二への攻撃の手を緩めるようなことはしなかった。

身内だからというのはもう関係ない。お前は俺の目の上のたんこぶだ。

これ以上兄である俺の邪魔をするのなら、このまま死んでしまえと、弟をいたぶり続ける。

しかし、元々体が弱かったことと、日頃ろくな運動をしていないことがたたったせいとか、昌一は段々とスタミナがなくなり、息をあげ始めていた。

だが、攻撃の手を引つ込めた頃には、もう恭二は虫の息も同然なほどに弱っており、立ち上がるのさえ困難な状態となっていた。

不意打ちで腹を殴られ、顔を殴られ、その後も無抵抗のまま執拗に全身を蹴られ、おまけに頭を圧迫されている。

身に覚えのない仕打ちに混乱しつつも、恭二はどうしてこんなことになったのかを考えていた。

兄貴はどうして突然に冷静さを失ったんだ？ それに僕が裏切り者ってどういうことなんだ？

「はア……はア……ッ」

呼吸を乱している昌一をよそに、どうしてこうなったかという理由を恭二は考える。

（裏切り者って言ってたよな……、ということとは、あの人が捕まったのか？ 理由は定かではないが、恐らく尻尾を掴まれたつていうのか

?)

兄が狂った理由は大体すぐに察しがついていたようだ。そしてその狂った兄が、これから自分に対して何をしようとしているかも、予想がついていた。

多分、兄貴はアレを取り出す気だ。そして、僕のことを殺す気なんだろう……。

「……裏切り者は、殺す……ッ、それが、例え、弟、でもだ……ッ」
「ぐッ……」

激しく息を乱しながら、昌一は自分の父親が経営している病院から盗み出した劇薬、サクシニルコリンが入れられた無針注射器を、懐からスツと取り出した。

安全装置を解除し、恭二を馬乗りの体制で動きを封じ、トリガーに手をかけてその針先を恭二の胸へと当てがう。

恭二は目をうつすらと開けながら、自身の胸部を見つめている。

「……死ぬのが、怖いかな？」

不気味な声で、昌一が恭二に尋ねる。別に怖いと答えたからと言って、彼は見逃すような奴じゃない。意味の無い質問だ。

「……別に、こうなるかもしれないってことは、想像がついてたからね」

「……どういう、意味かな？」

「こんな計画、遅かれ早かれ公に晒されるって言ってるんだよ。兄貴はもう……昔の兄貴じゃないッ」

「……」

「兄貴は……いや、お前は……ただの人殺しだッ」

「威勢が、随分と、よくなつたな？」

「……クッ……」

圧倒的不利な体勢であるのにも関わらず、恭二は昌一に悪態を吐き続けた。それが彼の逆鱗に触れて、注射器のトリガーを引かれることになるかもしれないのに。

「それも、黒の剣士の、影響、なのか？」

「……ッ、か、彼は……関係ないだろッ」

「……ククク、はたして、そうなのかな？」

そういうと昌一は、自身のポケットからスマートフォンを取り出すと、とある画像データをタップし、それを恭二の目の前にチラつかせた。

「……そ、それ……は……ッ」

それを見せられた瞬間、恭二の顔が青ざめる。

彼が見たのは、以前に和人とメッセージをやりとりしていた時のスクリーンショットの画像だったのだ。

恐らく通話記録も盗聴されて、データ化されていることだろう。

つまりは、恐ろしいことにここ最近の彼の動向は、昌一に全て筒抜けだったというわけだ。

勉強しているときも、仮想世界で遊んでいる時も、友達と出掛けている時も、全てこの男に把握されていたのだ。

「まあ、そう、落ち込むな。お前を、殺したら、奴らも、殺す。あの世で、一緒に、なれるぞ、ククク……」

「な……、なん……だ……だ……？」

もう、新川昌一は人間ではない。人の心を完全に失っている。

あまりにも仮想世界というものに囚われすぎて、善悪の区別、現実の区別がつかなくなってしまうている。

「それが、俺に対する、裏切りの、代償だ。当然、だろう？」

「……キサ、マ……ッ」

目の前の男は自分を殺した後は、和人や詩乃を手にかけるという。

そのことを耳にした瞬間、彼は腸が煮えくり返る思いがした。身内の僕はまだしも、大切な友人にまで手を出そうとしている。

許せない、この男が、新川昌一という男が。何よりも許せない。この卑怯な男が、この世の何よりも、決して許すことが出来ないッ。

「悔しい、か？ 何も出来ずに、死ぬのが、悔しい、か？」

「……う、グ……ッ」

抵抗しようにも、恭二は体を動かすことが出来なかった。散々体を痛めつけられた上に、サクシニルコリンの入った注射器の針先を当てがられては、抵抗のしようがない。

ちよつとでもその素振りを見せれば、昌一は何の躊躇もなく、その引き金を引くことだろう。

「お前を、殺すのは、簡単だ。しかし、お前には、死すらも、生ぬるい」
「……だからって、彼らに手を出すつてのかッ、……そんなこと、許されるはずがないッ」

「……許す？ 関係ない。それは、俺が、決めることだ」
「……………ッ」

もう、この男は何を言っても無駄だ。この男の言う通り、僕は昔から無力で、何の力も持つちやいなかった。

医者を目指して勉強してると言つたつて、親からそう言われていたからだ。敷かれたレールの上を走っていたに過ぎないんだ。

僕は所詮、その程度の器の男なんだ。和人みたいに誰かを助けるために命懸けで戦つたり、木綿季ちゃんみたく自分の信念に対して正直に生きることもなければ、詩乃みたいに自分の罪を背負つていく度胸もない。

今だつてほら、兄貴に対して何の抵抗も出来ないだろ？ これが答えさ。

僕は何も出来ない、成し遂げられない。誰も守れない、守ることが出来ない。

何も背負えない、逃げることしか出来ない。

もういいよ、殺すなら殺せよ。僕も自分の人生に……疲れたよ……。

「殺すなら、さつさと殺せ……」

「おや？ 命乞いも、しないのか？」

「……………うるさいよ、いいから殺せよ……」

そう言い残すと、恭二はゆっくりと瞼を閉じた。若干十七歳のこの男の子が、何もかもを悟つたように、目の前の死を受け入れようとしている。

その姿を見るなり、昌一は口元を不気味に歪ませ、右手に持っている無針注射器を握る手に、再度力を込めようと、握り直す。

「死ね、恭二」

その言葉を聞き、恭二は無意識に歯を食いしばり、拳と眼輪筋に力を込めた。

「いよいよ、僕の人生が終わる。今までさんざんつまらないことばかりだったな。」

「あ、でも最近はどうじゃなかったかかもしれない……。詩乃と出会えて、和人や木綿季ちゃんと出会えて。」

「数える程しか遊んでなかったけど、あの時間だけは、心の底から楽しかったって断言出来る。」

「出来ればもう一度、みんなと一緒に遊びたかった……。な、僕も普通の男の子として、みんなと……。遊びたかったな……。」

「ごめんね詩乃、さよなら……。」

その時だった。突如として、彼の家ドアが、ガチャツという音とともに不意に開かれた。

鍵をかけ忘れていたかどうかはわからないが、何者かが表から開けたようだった。

不意に、それを確認するために昌一も恭二も首を玄関の方へと無意識に向ける。

するとそこには、今恭二がここに現れて欲しくない一番の人物が、目の前で何が行われているかわからずに、呆然と立ち尽くしていた。

「……恭二……くん……?」

「なっ……し、詩……乃?」

「最悪だ、最悪のタイミングだ。よりも寄って人殺しが家にいる時に限って、君が現れてしまった。」

「まずい、どうする? このままじゃ詩乃が襲われる。兄貴は絶対に目撃者を作らない。こうなってしまう以上、すぐに彼女に手をかけるだろう。」

「……見られて、しまった、な……。」

「そう呟くと、昌一は馬乗りになっていた恭二から離れ、真正面から詩乃と対峙する形で彼女と向き合った。」

「その手には、未だしっかりと無針注射器が握られている。」

「あ……あなた、恭二君に何して……ッ」

「何でも、ない、ただの、兄弟喧嘩、だ……、ククク……」

「きよ、兄弟喧嘩って……、そ、それじゃあ……あなたが恭二君の……!?!」

「そうだ、俺は、こいつの、兄弟だ」

聞かれた問いに答えながら、昌一は詩乃に少しずつ、にじり寄っていった。

その姿は、仕草も手伝って大変に不気味であり、右手に注射器を握っていることも相まって、詩乃を恐怖させるには十分すぎるものだった。

「し……詩乃！ 逃げてッ!!」

「あ……あ……ッ」

詩乃は、目の前のこの男に完全に萎縮してしまっていた。

ゆらりゆらりと少しずつ近づいてくるその様子に恐怖さえ覚える。やがて詩乃は腰が抜けて、ぺたん床に座り込んでしまった。

目の前の男が不気味で恐ろしいというのもそうであったが、詩乃にとっては、昌一の顔が、あの男とダブって見えてしまっていたのだ。

「な……ん、で……ッ」

「し……詩乃ッ!!」

何で？ 何であの男がここにいるの？ だってあの男は、私がこの手で……、確かにこの手で殺してしまったはず……。

で、でもこの男の狂ったような表情、あまりにも似すぎている……ッ、い、いや……死にたくない、死にたく……ないッ!

「目撃者は、消す」

一歩、また一歩と、昌一は詩乃を殺すためにその足を動かしていく。恭二はその様を、ただただ見ているだけしか出来なかった。

目の前で自分の好きな娘が、命の危機に面しているというのに、体が全くいうことを聞かない。

「逃げて……し、の……ッ」

昌一は、詩乃の所まで残り二メートルというところまで迫っていた。

一気に距離を詰めてすぐに殺すのではなく、わざとゆっくり動き、

恐怖感を煽っていく。

「い……、いや……」

(だ……だめだ、詩乃は、動けない……ッ)
状況的に考えて、詩乃を助けることが出来るのは僕だけだ。

で、でも体が動かない……、全身が軋むように痛い、骨が……折れてるのかもしれない。

上体を起こすだけで精一杯だ、こんな状態で……何も出来るわけがない……。

「そこで、見ている、この娘が、死ぬところを」

「……し……の……ッ」

また、逃げるのか？ また、言い訳をして、逃げるのか？

本当は出来るのに、やらないだけなんじゃないのか？

これまでの人生も、全部目を背けて来たから、そうなったんじゃないか？

その方が楽だから、逃げてたんじゃあないのか？

「……グッ……」

もう、逃げるのはやめにしろよ。一生に一回くらい、立ちはだかる壁にぶつかってみせろよ。

男なら……、自分の好きな娘くらい、自分の手で……守って見せろよ！

「……僕……は……ッ」

彼女を守るのは僕しかいないんだ。立て、立ち向かえ！ 今が、今がその時なんだ！

「……………」

今が——その時だ——

「う……うあああああッ!!」

部屋中、いや……家の外にまで彼の雄叫びが響き渡った。

瞬間、恭二は全身を走る痛みに耐えながら、無理矢理体を起こし、昌

一の背後から彼を止めようと飛びついた。

昌一は予期していなかった弟の反撃に、一瞬判断が遅れ、彼に羽交い締めされる形でもがいている。

「きよ……恭二イイツ!!」

五体満足の昌一、全身ボロボロで満身創痍の恭二。誰がどう見ても有利不利は分かりきっていた。

しかし、恭二はそれでも兄を、昌一を放そうとはしなかった。

恭二の身体は、右の上腕と、左足の太ももの骨にヒビが入っており、肋骨が二本完全に折れている状態だ。

今まで感じたことのない痛みに耐えながら、恭二は詩乃を逃がすために、実の兄に立ち向かっている。

「逃げる詩乃ッ!!」

「きよ……恭二……くんッ」

「今のうちに……早く逃げるッ!!」

「で……でも、恭二くんが……ッ!」

「僕のことはいい! だから、早く……早く逃げるッ!!」

「……あ……あ、で、でも……」

恭二が必死に叫んでも、詩乃は目の前の光景に動揺し、完全に『逃げる』という選択肢が消えてしまっていた。

しかし時間というものは待つてくれない。一秒、また一秒と経つていくだけでも、恭二の身体は限界に近付いていく。

もう、あと一分も昌一を足止めしておくことは出来ないだろう。

このままでは埒が明かない。そう判断した恭二は、一向に逃げようとしないう詩乃に向かって、もう一度、肋骨の痛みを耐えながら、腹から声を出して叫ぶ。

「グッ……、逃げるって言ってるだろッ!! 早く行けよッ!!」

「……ッ!!」

すっかり腰が抜けて立ち上がれない詩乃だったが、恭二の必死の叫びでハッと我に帰り、四つん這いになりながらも、必死で玄関の外に出ようとした。

惨めでもいい、無様でもいい、今は逃げて、生き延びるのだ。彼の、

彼の気持ちを無駄にしてはならない。

(そうだ……それでいい、逃げてくれ……詩乃……)

「恭二ィツ、お前は……お前はアツ!!」

背後で行われている死闘から、藁をも掴む思いで逃げるように、詩乃はアパートの廊下に出た。

コンクリート製の床を這いずりながら、鉄で出来た少し錆のある手すりにしがみつき、何とか下半身に力を入れて、立ち上がる。

後はこのまま階段を下り、走って逃げればいい。人通りの多いところに出れば、死銃は追ってこれないだろう。

しかしそんな中でも、詩乃は恭二のことが気がかりで、再度彼が争っている部屋の方向を、開かれた扉越しに視線を送る。

その時だった。とうとう恭二の身体に限界が訪れた。

打撲、骨折、もしかしたら内蔵にまでダメージがいつているかもしれない彼の身体は、これ以上昌一を制止させておくことが困難になっていた。

「がっ……はッ!」

「この、クズがッ、やはり、お前から……、死ねッ!」

力が緩んでしまった恭二を肘打ちで払い除けると、昌一は彼の首元を左手で締め付けながら、部屋の壁に叩きつけ、右手に握られた無針注射器の先端を、彼の心臓のある位置に、強く押し当てた。

「……………ッ」

すると、何かの液体が外に噴出されるような音が鳴り、途端恭二の上着の部分が、その液体で濡らされているのがわかった。

その正体は筋弛緩剤、サクシニルコリンの劇薬だった。

「……………」

「……………ッ」

信じられない光景を目の当たりにしている。注射器に打たれた恭二は、まるで抵抗する力が無くなってしまったのか、がっくりと項垂れてしまっている。

昌一が恭二から手を離すと、彼は壁からずり落ち、尻餅をつく形で床に崩れ落ちた。その目からは、完全に光が失われている。

「きよ……キョウジイイイツ!!」

恐ろしい光景を目の当たりにした詩乃が悲痛の叫びをあげると、昌一は左手を自身の顔に当て、不敵な声を発しながら、ゲラゲラと笑いだした。

その顔はもう人間らしさは微塵もなく、完全な悪魔の形相をしている。

あの時、強盗目的で郵便局を襲ったあの男なぞ比較にならない。人を殺すことが快感だという、悪魔の笑い顔だった。

「何で……？ 何でこんなことするのよ……ッ」

「……何でか、だと？」

「アナタ……彼の、恭二君のお兄さんなんでしょ……？ どうしてこんな酷いことが出来るのよッ！ アナタの家族なんでしようッ!？」

先程まで恐怖していた詩乃が、涙を交えながら昌一に必死の想いを伝える。

その感情には、どこか怒りのようなものも含まれていた。

「……関係、ない」

「……え……？」

「関係ないと、言った。俺の邪魔を、するなら、例え、弟でも、容赦は、しない」

「あ……アナタは……ッ」

もう、この男には何を言っても無駄だ。赤眼のザザ、新川昌一。

この男が手にかけてた被害者は、S A O時代から遡ると、数え切れない。

アインクラッドでのレッドプレイヤーとして活動してきた彼の人格は、もう更生のしようがないほど、歪み、真っ黒になってしまっていた。

実の弟を手にかけてたことで、とうとう引き返すことの出来ない地点にまで、彼は来てしまったのだ。

「後は、お前だけ、だな」

そう詩乃に呟くと、昌一は懐のポケットから、小さな木箱を手に取り、小瓶のようなものを取り出した。

小瓶のラベルには『塩化スキサメトニウム注射液 サキシシ』と書かれている。この薬品こそが、筋弛緩剤サクシニルコリンそのものだ。

昌一は無針注射器の外蓋を外すと、小瓶から筋弛緩剤を中に注ぎ込んだ。注射器の中が薬品で満たされると小瓶を投げ捨て、注射器の蓋を閉めて、再び部屋の外にいる詩乃ににじり寄る。

GGOに例えるならば、自分の装備している獲物の弾を装填する、リロードと言ったところか。

(逃げ……なきやッ、逃げなきや……ッ！)

一瞬、呆気にとられていた詩乃だったが、恭二の想いを無駄にしないためにも、ガクガクになっている脚に必死に力を込めて、アパートの敷地外へと走り出した。

手すりを頼りにしながら、恐怖心を必死に押さえ込み、外へと続く階段を目指す。こんな状態で降れるかはわからないが、必死で逃げ続ける。

しかし、現実是非常だった。

身体が弱いとはいえ、昌一は男性。女の子の上、腰が抜けてしまっている詩乃に追いつくのは、そう難しいことではなかった。

昌一は必死で逃げている詩乃の左手を乱暴に掴み、自分の方へと強引に引つ張った。

「きゃあっ!?」という悲鳴と共に、引つ張られた詩乃は前のめりに昌一の足元に膝から崩れ落ちる。

「……っッ、うう……っ」

脚の痛みに悶えながら、顔を恐る恐る上げてみると、目の前には人殺しの顔が見えた。

男は彼女を見下げながら、ニタリと笑い、注射器をチラつかせている。

絶体絶命。

もう、逃げ場がない。階段もまだ遠い。

目の前に階段があれば、そこから転げ落ちて、外にいる人に助けを求めることも出来たかもしれない。

しかし、それもままならない。これだけ物音を立てて争えば、お隣さんや一階に住んでる人が駆けつけてもおかしくはないが、そうならない所を見ると、住んでいないか出掛けているのだろうか。

もう、ダメだ。男が注射器を私に向けようとしている。恭二くんに打ったものと同じものを、私に打とうとしている。

まだ、彼に私の想いを伝えていないのに、ちゃんと『好きだ』って伝えられていないのに、こんなことで死んじゃうなんて……。

恭二くん……折角助けてもらった命なのに、無駄にしちゃつてゴメンね……。

大好きだったよ……、今まで……ありがとう……。

生きるのを諦め、目の前の死を受け入れようとしたその刹那、詩乃にかけられていた圧力が『ごきやつ』という衝撃音とともに突然なくなった。

目を瞑っていた詩乃は、一体何が起きたの？ と恐る恐る瞼を上にする。

そこには、自分だけでなく、仲間のピンチを何回も救ってきた、頼れる黒いヒーローの姿があった。

「逃げるシノンッ!!」

……え？ キリ……ト……？

第73話く本当の気持ちく

西暦2026年 11月17日(火) 午後12:28 東京都文京区湯島 新川恭二のアパート

「逃げるシノンッ!!」

「キ……キリト!?!」

詩乃が目の中の光景を理解するには、少しばかり時間がかかった。

新川昌一に注射器で薬品を撃ち込まれる寸前、何故か彼女を拘束していた力はなくなり、はるか前方に吹っ飛ばされている。

菊岡から緊急事態の連絡を受けた和人が、恭二を救わんがために彼の家へと馳せ参じたのだ。

彼の家が近付くにつれ、何やら争っているような音が聞こえた。

もう既に事が始まってしまっていたかと、慌てて階段を登った。

そして目の前には見たことのない男に詩乃が襲われている光景が飛び込んできた。

条件反射だった、詩乃を助けるために、出会い頭に男の顔面に膝蹴りをお見舞いした。

男を派手に吹き飛ばすと、和人は昌一を拘束しようと続いて距離を詰める。

祖父から剣道と一緒に護身術の何たるかを学んでいた彼と、貧弱な体付きでろくに運動もしていない昌一では、とても勝負にならない。

「ウグツ、く……黒の、剣士……ッ」

「お前が……新川昌一……、赤眼のザザだな?」

口の中を切ったのか、微量の出血をしている昌一がムクリと起き上がり、自身の前方に転がっている無針注射器に手を伸ばす。

パツと見、それはとても注射器には見えない。しかし前もって無針注射器の情報を得ていた和人は、それを見るや否やすぐに注射器だと

見破り、昌一の手握られる前に脚で蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされた注射器は「カラカラ」と音を立てて床を転がり、一番奥の部屋の前へと遠ざかってしまった。

「ガッ……キ、キサマ……ッ」

顔に膝を受け、派手に吹っ飛ばされた昌一は、既にかかなりのダメージを負っていた。

顔面、それも眉間の辺りに思いっきり膝を受けた為か、軽い脳震盪まで引き起こしている。

「年貢の納め時だ、赤眼のザザ。じきに警察もやって来る、お前達の計画も全て暴いた。もうお終いだ！」

「……また、お前に、してやられた、というわけか」

「俺だけじゃない、皆が協力してくれたから、お前の悪行を暴くことが出来たんだ」

「……グウ……ッ」

目の前に仁王立ちする形で和人が立ちはだかっている。後ろは鉄柵と壁で行き止まり、そして警察もここに向かっている。

昌一は完全に袋の鼠となっていた。

かつてのSAOでは、腕の立つエストック使いとして、GGOでは優れたスナイパーとして活躍していた彼も、現実世界ではただの人だ。

だが、和人に手も足も出ない現実を突きつけられていると言うのに、昌一はただただ不敵に笑い続けている。

自暴自棄になったのか、それとも気でも狂ったのか、今まで見たことのない奇怪な声を響かせ、ゲラゲラと笑い始めた。

「もう諦めろ、お前は終わりだ」

「……ククク……ハハハ……ッ」

昌一は和人に何を言われても、狂ったようにひたすら笑い続けた。何がそんなにおかしいのか、追い詰められてどうしようもなくなっただけで笑っているのかはわからないが、気味が悪いその姿を見て、和人は思わず息を飲んだ。

「ハハハハッ、ハハハハハ……ハッ」

「……………ッ」

そして、その一瞬の隙を待っていたのか、懐からギリリと光るものを手に取り、和人に向かい、腕を伸ばしてそれを向けた。

「……………死ねッ、黒の……………、剣士ッ！」

光るものの正体は、刃渡り六センチほどの折りたたみナイフであった。

追い詰められた狐はジャツカルより凶暴だと、どこかでそんな噂を聞いたようなことがあるが、それでも昌一はその狐にすらなれなかった。

不意をついたとはいえ、あまりにもスロー過ぎる攻撃の手。ましてや和人は武術経験者だ。

仮想世界の赤眼のザザとしての攻撃ならまだしも、現実世界の新川昌一としての刺突攻撃など、和人にとっては赤子の手をひねるようなものだ。

すぐに昌一の不意打ちに反応した和人は、ボクシングのスウエーのように体を逸らし、昌一の襲撃をいなすと、その手首を掴み、捻りあげた。

「あ……………ガッ……………」

握力全開で昌一の手首を締め付けると、和人はすかさず自身の方向へと一気に相手を引っ張り、相手の懐に潜り込み、もう片方の手も使い、そのまま勢いを利用し、思いつきり投げ飛ばす。

「せやああああッ!!」

瞬間、昌一は和人の放った背負い投げの遠心力の影響を受けると、綺麗な放物線を描いて三メートルほど宙を舞い『ズシン』という凄まじい衝撃音とともに、強く床に叩きつけられた。

一瞬にして天地が逆転した昌一は、何が起こったかわからなかったが、床に叩きつけられたのと同時に、自分が投げられたのだと理解した。

詩乃はその一部始終を近くで見ているが、あまりにも一瞬の出来事ゆえに、目の前で何が起こったのか理解が出来なかった。

しかし、彼が自分の危機を救ってくれたのだということだけは、認

識することが出来た。

「オグツ!? あ……ガッ……」

よほど激しく背中を打ち付けたのか、昌一は呼吸が出来ないほどの痛みに悶えている。

先程の膝蹴りによる脳震盪の影響もあつてか、あつさりとした彼の意識は途切れてしまった。

「……………」

「…………しばらく、そこで寝ている……」

昌一は仰向けの姿勢で、半分瞼を開き白目を向いてアパートの廊下でのびていた。時折身体がピクピク痙攣を起こしていることが、彼がまだ生きているということを表している。

「…………ふう、大丈夫か……シノン?」

間一髪で彼女の危機を救ったヒーローが、自分の服をパンパンと手で払うと、床にぺたんとして座り込んでいる詩乃に歩み寄り、彼女に手を差し伸べる。

「…………へ? あ……、あ、ありが……と」

自分がここにやってきて、十分も経過してないうちに起こった出来事に放心していた詩乃だったが、昌一という脅威が去ったのと、誰よりも頼れる黒ずくめの少年が駆けつけてくれたこともあり、心から安堵し、ほっと胸をなでおろしていた。

「本当に危ないところだったな。……あ、ところで……恭二のヤツは…………?」

和人の手を借りて、立ち上がりながら彼のことを聞かれると、詩乃は目を丸くし、青ざめながら、先程まで彼が格闘していた部屋へと視線を移す。

「恭二……くん、恭二くんツ!!」

まだ足元がおぼつかないが、詩乃は必死に彼のいる部屋へと足を運ぶ。

途中、玄関の上がり框につまずきそうになるも、なんとか体勢を整え、自分を逃がすために命懸けで戦ってくれた男の子の元へと急ぐ。

「…………恭二……くん……?」

「……………」

詩乃の声には、全く反応しない。

彼は椅子から転げ落ちる際に巻き込んだ本の群れと、積み重なっていた未開封のモデルガンの箱に挟まれる形で、壁に背を預けてガツクリと項垂れている。

「恭二……くん？　しっかりしてよ……ねえ、恭二くんつてばツ！」
「……………」

彼の肩を掴み、前後に揺さぶる。

しかし、髪の毛と服が揺れるだけで、彼は目を覚まそうとはしなかった。

近くには彼の私物以外に、サクシニルコリンの入っていた小瓶が転がっている。

これは本来、手術中に患者の肉体が動かないようにするための薬だ。

しかし使い方を誤り、間違った方法で投与してしまうと、筋肉は硬直してしまい、肺と心臓も停止してしまう恐ろしい薬品となっている。

彼のように、心臓付近にダイレクトに注射されてしまった場合どうなるかは、もう言うまでもないだろう。

「…………お、おい……シノン、これは……冗談だよな……？」

数秒遅れて、和人も彼の部屋に入る。そこには和人にとっても認めたくない、凄惨な光景が目に見え込んできた。

お互いにちよつとした冗談を言い合えるような、本音で語り合えるような、数少ない同姓同年代の親友が、無言で項垂れている。

和人も信じたくはなかったが、恭二の着ている衣服の心臓付近の部分が、何らかの液体で濡れている状況を目視すると、何があつたかということを理解するのに、そう時間はかからなかった。

空っぽの劇薬の小瓶、濡れた衣服にそれを着ている恭二。彼は打たれたのだ、新川昌一にサクシニルコリンの入った注射を。

「嘘……だよな？　おい……恭二……？」
「……………」

和人からの声かけにも、彼は反応を示さなかった。サクシニルコリンを注射されると、その効果は三分足らずで現れる。

詩乃が部屋から逃げ、和人が駆けつけて昌一を気絶させるまで、少なくとも五分は経過してしまっている。

薬の効果が現れていてもおかしくない。

「いや……いやよ……恭二くん……、恭二くんツ!!」

「恭二ッ！ おい恭二！ 目を覚ませよッ！」

二人で一緒に声を掛け続けても、恭二は全くの反応を見せなかった。

恐れていた最悪の結果になってしまったと、和人は右の拳をわなわなと震わせている。

「畜生……、畜生ッ!!」

やり場の無い怒りと悲しみをぶつけるかのように、和人は部屋の壁を思いつきり拳で殴りつける。

隣に人がいる可能性や、手の痛みなど知ったことではない。そんな痛みよりも、もっと大切なものを失ってしまったという悲壮感の方が、大きかった。

「……恭二……くん……ッ」

あれから無言の時間だけが経過し、十分ばかりが経過していた。ここに向かっているはずの警察はまだ来ていない。

玄関のドアを開きっぱなしにしている為か、冷たい秋風が部屋に入り込んでくる。

和人はただただ、玄関近くに直立不動で佇み、詩乃はひたすら涙を流し続け、最愛の男の子の顔を見つめていた。

彼の顔は、一言で言い表すならば、非常に穏やかであった。

大きな仕事を成し遂げた、自分のやりたいことをやり抜いた、そん

な達成感を得たような表情をしているようにも見える。

「私……君に何も恩返しが出来てない……ッ、人殺しの私を受け入れてくれて、ずっと隣で支えてくれて、私のワガママにもずっとずっと付き合ってくれて……ッ」

「……シノン……」

「それに君に……私のホントの気持ち、まだ伝えられてない……ッ」

そう言いながら、詩乃は彼の手に、自分の手を重ねた。

寒い秋風に晒され続けていた彼の体も、凍てついたように冷たく、そして劇薬の効果で全身の筋肉がガチガチに固まって……はいなかつた。

「……え……、あれ……？」

目の周りを涙で真っ赤にしている詩乃が、不可解な違和感に苛まれた。

その違和感の正体を確かめるため、彼の身体を触ってみる。

まずは腕、試しに手首を曲げてみたが、彼の関節部分は正常に曲がった。

「え……？ う……、う……そ？」

「……？ どうしたんだ……シノン？」

今度はもしやと思い、脈をとってみる。右手首の橈骨動脈と呼ばれる太い血管がある部分に指を当てる。

すると、微弱ながらも血が流れ動いていることが、指先の感触で確認出来た。つまり、彼の心臓が動いているのである。

「へ……、な、どうして……？」

疑り深い詩乃は、もしかしてという気持ちを確信に変えるため、自分の耳を彼の顔に近付ける。

お願い恭二くん、死なないでと、願いを込めながら、神経を集中させ、耳を澄ませる。

「……………」

「……ッ、……ッ」

「きよ……恭二……くん……ッ」

「し……シノン、ま……、まさか……？」

僅かに、ほんの僅か、小声で囁くほどのレベルではあるが、彼の口から呼吸音が、しつかりと聞こえた。

彼は——生きている——新川恭二は——生きている——

彼が死んでいないと知るやいなや、詩乃は再び大粒の涙を流し始めた。

劇薬を打たれた恭二がどうして生きてるかはわからないが、彼の声をまた聞くために、必死で彼に声を掛け続ける。

「恭二くん！ 恭二くん起きて！ お願い……目を覚ましてッ！」

「お……おい恭二ッ！ 起きろッ！」

何度も、声を掛ける。

両肩を掴み、前後に揺さぶりながらも、懸命に声を掛け続ける。

何度も何度も、声を掛け続ける。

お願い、目を開けて、声を聞かせて、また笑顔を見せて、優しい貴方の姿を、もう一度見させて！

「お願い……、また私と一緒に笑ってよ……、恭二くんッ!!」

詩乃の叫び、ただ、彼と一緒にいたいという心からの叫び。彼を暗闇の世界から呼び戻すために、必死に叫び続ける。

その時——奇跡が起こった——

「……………う、…………ッ」

「…………ッ、きよ……恭二……くん？」

「……………あ、れ…………ッ？」

「恭二……………、恭二ッ！」

心臓付近にサクシニルコリンを打たれたというのに、彼は目を覚ました。

寒風に晒されていたため、身体は冷えきってしまったが、関節も筋肉もちやんと柔らかく、正常に機能している。

再び覚醒した彼は、今自分がどんな状況に置かれているか理解出来ていないようだった。

目の前に涙を流している詩乃が、ほんのり目尻に涙が浮いている和人がいる。

あれ、何で和人がここにいるんだ？ それに……どうして僕は生きてるんだ？

僕は確かに、兄貴にあの注射を打たれたはずなのに。現にほら、こうして着ている服だって薬で濡れている。

打たれた感覚は確かにないが、それはあれが無針注射器だったからであつて、痛みも何も感じないだけだ。

目が虚ろになつて焦点が定まっていないのか、彼の意識を確かめるために、詩乃と和人が声を掛ける。

「お、おい恭二、俺が……俺たちのことがわかるか？」

「へ……？ え、えと……、詩乃と、和人……？」

「ゆ……指は何本に見える？」

恭二から見て、左に詩乃、右に和人が居座る形で、ずいずい迫ってきている。

ちよつとだけその勢いに萎縮してしまっていた恭二だったが、たじろきながらも、詩乃に突きつけられた指の数を数える。

「え、えつと……二本……？」

「……ツ、恭二……く……ん……ツ」

恭二が生きている。生きて私と話が出来る。その事実だけで十分だ、

彼が無事だということを知った詩乃は、涙を流しながら溢れ出る気持ちを抑えられず、彼に抱きついた。

起きたばかりでイマイチ場の状況が把握出来ない恭二は、終始頭に？マークを浮かべていたが、周りを見る限り皆無事のようなので、とりあえずはまあ、いいかと息を漏らしていた。

「恭二……、そういえば……君、打たれたんだよな？ 注射……」

「え……？ あ、そ、そう言えば……」

「そ……そうよ、どうして恭二くん……無事だったの？」

恭二が無事だと知って一番喜んでいた詩乃だったが、ふと疑問に思い、彼の胸元に目線をやる。

彼の濡れた上着、これは間違いなく注射器で打たれた痕跡にほかならない。

だとしたらどうして彼は何ともないのだろうか。その疑問を解決するために、詩乃は彼の上着の裾の部分を掴み、上へと捲り上げる。

「ちよ……し、詩乃!？」

「……いいから、じつとしてー!」

女の子である詩乃に、服を捲られ、決して自慢出来るような肉付きではない体を見られてしまっている。

何だかいけないことをされているような、そんな気がしてならない。

あらぬ想像をしまいながらも、恭二はこの成り行きを、赤面しながら見守っている。

「……へ？ な、何だ……それ？」

「……これ……は……」

恭二の左胸、心の臓がある位置に、何やら金属で出来たプレートのようなものがある。

首からポールチェーンの鎖で繋がれて、ペンダントのようにぶら下げられていたそれは、外側が何やら濡れている。

「こ、これ……もしかして……、ド、ドックタグ……?」

「みたい……だな、ひよつとして注射はこの上に……?」

「……そう、みたいね……」

なんとということだろうか、偶然か必然か、幸運が重なったのか、昌一の打った薬品は、このドックタグの上に注射されていたのだ。

しかしペンダントの様にぶら下げているこのドックタグは、本来ならば体の軸を中心に真ん中に位置しているのが普通だ。

しかし今回、恭二は昌一と激しい格闘戦を行った。身体中ボロボロになり、衣服を乱れさせながらも、必死で戦った。

その結果衣服が乱れた際に、服の内側にあつたドックタグも一緒に乱れ、丁度ピンポイントに心臓を守るかのようになり、昌一が狙った位置にドックタグがズレていたというわけだ。

つまり、彼の命は、詩乃が救ったということになる。

「……あはは、全く……脅かしてくれるね……」

「そ……それはこっちの台詞よ！……しッ、死んじやうかと、思ったんだからね……ッ」

事の重大さに対して、随分とのほほんとしている恭二の態度に憤慨したのか、詩乃は眉を潜めて機嫌を悪くし、恭二の襟元を両手で掴み、思いつき揺さぶった。

しかし肋骨を二本骨折している恭二にとって、その攻撃はあまりにも効果的すぎたのか、痛みに悶えて悲痛な声を漏らした。

「いッ……い、痛いよ詩乃ッ、や……やめてくれッ」

「……へ？ あ……あ、ご……ごめん……なさい」

「派手に痛めつけられたみたいだな……、後に警察が来るけど、救急車も呼んでおいた方が良さそうだな……」

「あはは……、お願い出来るかな……和人」

「ああ、俺が救急に電話しておくよ」

そう言い残すと、和人は「よっころしよ」と親父臭い声をもらしながら腰を上げ、恭二の部屋から表に出て、しつかり扉を閉めたあと、スマホで通報を始める。

和人が外に出たことによって、部屋には恭二と詩乃の二人きりという状況になった。

あんなことがあつた後のためか、お互いになんて言ったらいいかわからないようだ。

恭二にいたっては、喧嘩したまま彼女の家から出てきてしまつてる。色々と気まずい様子だ。

「……えっと、詩乃……け、怪我はない？」

「え？……あ、う……うん、平気よ。その……君が助けてくれたから

……」

「……ごめん」

「……へ？」

「僕……君に酷いことを言ってしまった。だから……ごめん」

まずは、恭二の方から先日の暴言のことを謝罪する。

暴言といっても、怒鳴っただけなのでそこまで言うようなあれではないのだが、滅多に人前で怒らない彼からしたら、それも暴言に入るのだろう。

「そ、そんな……、べ、別に気にしてないわよ！」

「……でも今回のことだって、僕の身内がしでかした事だし……、君にたくさん迷惑をかけてしまった……」

「……でも、恭二くんは……私を守ろうとしてくれた……」

どうあがいてもマイナスの方向にしか物事を考えない恭二に、詩乃は必死にフオローを入れ続ける。

これはこれである意味バランスが取れているのだが、将来的なことを考えたら、彼はもう少しだけ、前向きに、積極的になってもいいのかもしれない。

「……でも、結局全部解決したのは和人だ。僕は時間稼ぎくらいしか出来なかつたみたいだし……」

「そんなことないよ？ さっきの恭二くん……すつごくカッコよかつた」

「え、そ、そう……？」

「……うん」

「あ……あはは、そっか……はは」

僕は僕にやれることをしただけ、それが結果的に君を助けることになったに過ぎない。

それに、どんなに理由を取り繕っても、僕を含めて新川家が君に迷惑をかけた事実が揺らがらない。

命の危機にまで晒してしまったわけだし、僕はこれ以上、君のそばにいるわけにはいかない。

もう、隠すのはよそう。彼女に……全てぶちまけよう。

全部話して、楽になって、キレイサツパリ忘れてしまおう……。

「……………」

「……恭二……くん？」

目を瞑り、物思いにふけっている恭二に、詩乃は再び心配そうな視線を向ける。

あんなことがあったばかりか、何かの間違いで彼がどこかへ行ってしまうような気がしてならなかった。

かつての和人も、木綿季にそのような気持ちを抱いていた時があった。

「なあ、詩乃……聞いてくれる？」

「……………え？ え、ええ……………」

落ち着いて話をするために、今一度、大きく息を吸い、そして大きく吐く。

その際、肋骨に痛みが走ったが今は気にしない。そんな痛みよりも、これから起こる現実の方がよほど痛くてつらいだろうから。

「僕は、君が人を殺したと知った上で、君に近付いたんだ」

「……………え？」

「……君と出会ったあの図書館、偶然の出会いなんかじゃなかった。僕は君のことを調べて、その上で君に接触したんだ」

「……………何を……言ってるの？」

「……………ッ」

既にもう罪悪感で胸が張り裂けそうだ。彼女の掘り返されたくない過去を、最も深い闇を、辞めておけばいいのにまた抉ろうとしている。

よりもよって、彼女と一番長くいたこの僕が。でも、逃げちゃいけない、もう嫌なことからは目を逸らさない。

真っ直ぐ向き合う、その上でぶつかり、背負って生きていく。

「僕はね、イヤツなんかじゃないんだ。君に接触したのも、君が人を殺したからなんだ」

「……………」

もう、彼女になんと言われても、軽蔑されても構わない。これが僕の、新川恭二の背負っていくべき業、拭いようのない罪なのだから。「あの強盗犯を殺した時の、本物の銃で人を撃った時の感触はどうだったとか、そんな下衆なことを聞こうとしていたんだ」

「……………」

「でも、深く傷付いていた君の心情を目の当たりにした時、僕は罪悪感で包まれた。だから、罪滅ぼしのために、自分が納得いきたいがために、君の傍に居続けたんだよ」

「恭二……くん……」

「ミリタリーのことを教えたのも、君のワガママに付き合い続けたのも、全て僕の都合のためだ。単なる自己満足の為だったんだ」

「淡々と話を続ける恭二を、詩乃は真っ直ぐに見つめていた。心静かに、ひたすらに彼の話の話を傾けていた。」

「だ……だから、僕は君という資格なんてないんだ。僕みたいなドス黒い心の持ち主が、君というわけにはいかないんだ……ッ」

これで、全部よかったんだよな。初めからわかりきっていたことだ。

今この瞬間から、僕と詩乃の関係は終わった。

これからは、元クラスメイトの朝田詩乃と新川恭二として生きていくんだ。この先僕らは決して会うことはない、会っちゃあいけない。

街で偶然出くわしても知らないふりだ。声をかけてはいけない、喋ってはいけない。

もう……関係を持っちゃあ……いけないんだ。

「……………」

「……恭二くん……」

わかっている、わかっているさ。もう彼女と関わっちゃあいけないって。

感情を殺せ、自分だけを見ろ、もう関わるな。

「だから詩乃……、僕は、僕らはもう……ここ……で——」

詩……乃……？

「……ンツ……！」

「………ツ」

勉強が出来て頭もいい恭二でも、詩乃の不意打ちの接吻に理解が追いつかなかった。

こんな酷い男なのに、醜い男なのに、何故こんなにも君は僕を——
？

「………ハツ」

「………はツ」

互いに、近い位置に顔があっても、視線を合わせようとはしなかった。恥ずかしいからなのか、気まずいからなのか。

心臓の鼓動が激しくなっていくのを感じる。体温も上がってきている。

しかし決して体調が悪いだとか、そういう訳では無い。もっと違う、胸がときめく理由からだった。

「し、詩乃……何を……ツ」

「……これが、私の答えよ……」

「……し、詩乃……？」

私は決めた。どんなことがあっても、彼の隣に居続ける。確かに、今の話に驚いたのは事実だ。

でも、そうだとしても、彼が自分を納得させるために行つたことだとしても、私の力になって、支え続けてくれたのは、紛れもない事実。

彼がいたから、今の私でいられた。こんなにも早く日常に戻り、毎日を過ごせているのも、彼がいたからだ。

そんな彼をどうして煙たがらなければならぬの？ 私に接触してきた理由なんてどうでもいい。

彼が勇気を振り絞って打ち明けてくれたなら、私も……私も彼に、本当の気持ちを伝える、伝えてみせる。

「私、あなたのことが……好き」

言えた……、やっと、やっと言うことが出来た。

先にキスしちやつて、順番がちよつと逆になつてしまったかもしれないけど、やっと彼に本当の気持ち、伝えることが出来た……。

「あなたが、私にどういう理由で接触したかなんて、関係ないの！
だって恭二くんは、恭二くんは……私にとって、ヒーローだから……ッ」

「……し、詩乃……」

恭二の心は揺れ動いていた。このまま彼女の好意に甘えて、自分自身をも甘やかしていいのかと。

過去の過ちから目を背けていいのかと、頭の中で色々なものがぐちゃぐちゃになり、処理しきれなくなっていた。

そんな彼の考えていることを見透かしていたのか、詩乃は少しだけ呆れた顔になり、小さく溜め息を漏らすと、ずいずいっと、彼の顔に自分の顔を近付けた。

彼は少し、奥手な所がある。なら、少しくらい自分の方から強引にいかないと、彼は動かない。

恭二のことをよく理解している詩乃は、恭二が首を縦に振る答えを言わざるを得ないように、どンドン攻め入っていく。

「恭二くんの……答えを、聞かせて……？」

「……う、あ……ぼ、僕……は……」

「……僕は？」

「あ……、えつと、僕は……、いや、僕も……」

「僕も……なに？」

かつてない程に、心臓の鼓動が激しくなっている。血の流れも過去最高潮だ。全身の血管という血管がフル稼働しているのを感じる。

だ、だめだ、こんな風に迫られたら……もう、断ることなんて出来ないじゃないか……ッ。

「……僕も、詩乃のことが……す、好きだ……」

不思議と、胸が締め付けられるような感じはしなかった。決して持つてはいけない感情を持つてしまい、罪の重さに耐えきれないと思つていたけど、そんなことはなかった。

むしろ高揚感、胸の高鳴りが止まらない。

「……やっと、聞けた……あなたの気持ち」

詩乃は彼からの答えを聞き届けると、にっこりと微笑んだ。

長い間ヤキモキしていた感情の決着を、互いにつけることが出来てスッキリしているのか、ほっとしているのかはわからない。

だが、詩乃はこれまで生きてきた中で、最高に素敵な笑顔を彼に見せていた。

「僕は……、勝手に自分を責めていたのかな……」

「……そうかもしれないわね。でも、例えそうだとしても、恭二くんはもう……罪を清算してると思うわよ……?」

「え……、ど、どうしてだい?」

「……だって、私をこんなに笑顔にしてくれたんですもの♪」
「うッ……」

心からの彼女の笑顔がこんな間近で見ることが出来る。そんな美味い位置を獲得してしまった恭二は、とつさに視線を逸らし、顔を赤らめていた。

どんなことから目も背けないと誓った彼も、この恥ずかしさからは逃げたくなくなってしまったようだ。

「なあに? 照れてるの……恭二くん?」

「べ……別に……ッ」

「ふふ、可愛いわよ、……恭二くん♪」

「ま、またALLOみたいに、僕をからかうのかい!?!」

「そんなんじゃないわよ、うふふふ」

この二人は恋人としては、まだまだ互いに色々と足りないのかもしれない。

しかし、奥手な彼と積極的な彼女。これはこれでバランスが保たれ

ているのかもしれない。

ちよつとぎこちないが、それこそが彼等らしいと言えるだろう。

なんと言つても、本当の意味で、この二人は笑い合うことが出来るようになったのだから。

次回、幻の銃弾編、最終回『リアル・バレット』

第74話くリアル・バレットく

西暦2026年11月21日（土）午前11:17 東京都文京区
湯島 東都文京病院

「よう、恭二、生きてるか？」

「やつほー恭二！ お見舞いに来たよー！」

マイペースで病室の扉をスライドさせながら、明るく挨拶をする二人の姿があった。

ここは都内文京区のとある病院。ここの一室に、先日の死闘による名誉の負傷の治療にあたっている、とある男の子が入院している。

男の子はお見舞いに来てくれた友人二人の顔を見る也、笑顔で迎え入れた。

「やあ、こんにちは。和人、木綿季ちゃん」

「こんにちは。キリト、木綿季」

「おう、やつぱりシノンも来てたんだな」

「あはは、熱々ですなあ……」

入室して早々に、先に部屋にいる二人に野次を飛ばしたのは木綿季だ。

詩乃と恭二が正式にお付き合いを始めたという噂は瞬く間に広まっていた。

こういった色恋話に目がない明日奈や里香、珪子はもちろんの事、昨今よく交流がある木綿季も筆頭に立って、彼女を弄っている。

「あ、あはは……参ったねこりゃ」

病院のイメージ通り、白い壁に白い天井、白い床に設置された白いベッドに、新川恭二が窮屈そうな格好で横になっている。

少し古い建物のせいか、よくみると壁や天井に塗装の剥がれや黒いシミなどが見える。

恭二は右腕と左脚がギプスと包帯でぐるぐる巻きに固定されており、一番重症な肋骨の部分には、コルセットのような形の胸部固定サ

ポーターが装着されている。

骨折とは言っても、手術が必要なほどの怪我でもなかったらしく、ひたすら安静にしていれば自然治癒してしまうという。

医師から診断結果を聞いた時は「べ、勉強が遅れる……」と嘆いていたそうだが、一緒に話を聞いていた詩乃に「そんなの後でやればいいでしょう！」の一言により物の見事に一蹴されてしまった。

入院四日目の現在、まだ絶対安静を強いられているため、可能な時間には詩乃と一緒に面倒を見てくれてるのだ。

「も、もう！ からかわないでよー！」

詩乃がリングの切り身の乗った小皿を片手に、顔を赤らめていきり立つと、木綿季も苦笑いで「ごめんごめん」とその場を取り繕う。

部屋の隅に立ってかけてあるパイプ椅子に手を伸ばし、ベッドの横に腰掛けている詩乃の隣にそれらを並べ、すつと同じように腰を落ち着ける。

「ほら、これお見舞いの品、食べてくれ」

そう言いながら、和人は手に持っている紙袋の包を恭二のベッドの脇にある、小さなシエルフに置いてもらうよう、詩乃に手渡した。

「うわ、いいのかい……？　ありがとう、いただくね」

「ああ、食ってくれ。美味いぞ、地元川越の芋のお菓子だからな」

「味はボクが保証するよー！」

木綿季はそう言いながら、自分の胸を自信満々に『トント』と音を立てて叩き、自分たちの住んでる所の名産の味を自慢し始めた。

実はここに来るまでに、和人はこのお菓子を二箱買ってきていたのだが、途中休憩したときに木綿季が我慢出来ずに、一箱ペロりと平らげてしまっていたのだ。

義理の妹の圧倒的な食欲を前に、長兄である和人は相変わらず頭を悩ませている。

あれから事が一段落し、菊岡から報奨を受け取ったおかげで懐は潤ってはいいるが、この調子で浪費をされていっては、いずれ蓄えはまた尽きる。

そうなってしまう前に、この底なしの胃袋をどうにかしなくては。

「あはは、木綿季ちゃんが保証してくれるなら、間違いはないかな?」
「でしよー! いっぱい食べてね♪」

「……いっぱい食べたいのは恭二じゃなくて、お前だろ?」

和人がズバリ凶星を突くと、今度は木綿季が顔を赤くして、縮こまってしまった。

今日もしつかりと茶碗三杯の白飯を食べ、ここにくる途中お菓子を一箱平らげて。

更にはお昼にはちゃんとランチも、三時にはおやつもいただき、夜も楽しいディナーをいただく予定になっている。

三年間食事を取っていなかったツケを回収している、と言えば聞こえはいいかもしれないが、ただ単に食い意地が張っているだけなのである。

「あはは、それで……どうだ? 怪我の具合は」

「あ、うん、今のところ順調だけど、絶対安静だつてさ。右腕と左太股にビビ。肋骨が二本完全に折れてるつてさ」

「治るまで……三週間から四週間くらいかかるみたいよ?」

脚は掛け布団に隠れていて見えないが、右腕のギプス、そしてやや大袈裟に巻かれているサポーターを見ると、どれだけ昌一に痛めつけられたかというのが、文字通り痛いほどわかる。

「派手にやりやがったな……ザザのヤツ……」

「あはは、かなり手酷くやられたよ」

「恭二のお兄さんなんでしょ? 血が繋がってるのに、よくこんな酷いこと出来るよね……」

「……私のことも、本気で殺そうとしてきたわ……」

ザザの話をした途端に、ここにいる全員が暗い空気になってしまった。

中でも血の繋がった兄弟である恭二には、皆に迷惑をかけたと、余計に重く受け取っているようである。

「その……ごめん二人共、僕の身内が……酷いことをしてしまつて……」

身体が五体満足の身であれば、今すぐにも土下座して謝罪した

い。しかし体を固定されてしまっている恭二にはそれが出来なかった。

なのでゆっくり目を閉じて、少しだけ首を傾げる形で、彼は誠意を見せようとした。

「俺は大丈夫だよ。元々恭二の力になりたくて、今回の件に首を突っ込んだんだからな？」

「……私もよ。でもキリト？ アンタはもつと自分の身をいたわりなさい？」

「……へ、お、俺？」

詩乃が少しばかりキツめの口調で声を掛けると、全員の視線が彼に集まった。

「そうよ、今更かもしれないけど、アンタは昔から無茶すぎよ。そういうこと続けて、あまり木綿季に心配かけちゃダメよ？」

「あ、ああ……わかった、努力はするよ、あはは……」

後頭部をポリポリとかきながら苦笑いを浮かべる和人を見て、周りの人間は「本当に分かってるのか？」と疑いの眼を送っている。

いつ、誰も知らないところでトラブルに巻き込まれていたり、厄介事に首を突っ込んでいくというのが、もはや常習的に行われている和人は、少し誰かがストッパーになってあげた方がよさそうだ。

「木綿季、あなたがしつかり見ててあげないとダメよ？」

「うん、和人……もう危ないことはこれっきりにしてね？」

「あ……う、うん、約束するよ」

「……和人にもしものことがあったら、ボク……泣いちやうからね……ッ」

木綿季が不安そうに和人の手を取ると、彼はもう片方の手で彼女の頭を優しく撫で回した。

すると木綿季は目を閉じ、心地良さそうに和人の掌の感触を楽しんでいる。

やはり、絶剣だ絶歌だなんだかんだ言われても、中身は十六歳の女の子。家族の愛がまだまだ欲しいお年頃なのだ。

「か、和人……ふ、二人が見てるよ……？」

「別にいいだろ、減るもんじゃないし……」

付き合うとは、恋人とはこういうものだと、これみよがしに自分たちの仲の良さを、つい今週に付き合い始めた詩乃と恭二に見せつける。

「……アンタたち、帰ってもいいのよ……?」

詩乃が若干声のトーンを低めにして、ニコニコ微笑みながら和人たちに語りかけると、すぐに二人は姿勢を戻し、苦笑いを浮かべながらその場を誤魔化そうとしている。

「あはは、相変わらずで安心したよ。そういえば……事件はあれからどうなったんだい?」

「あ……ああ、そうだな、何から話したもんか……」

和人が昌一を気絶させたあの後、それから十分ほど経過して漸く警察と菊岡、そして木綿季が現場に到着した。

和人と詩乃、恭二から何が起こったのかを聞き、昌一はすぐに傷害、暴行、殺人未遂の現行犯で逮捕された。

大怪我を負っていた恭二は救急車で最寄りの病院まで緊急搬送。

事件の詳しい話は和人と詩乃から聞き出し、恭二の容態が安定すると、より詳しい事件の背景を知ることが出来た。

既に拘留されていたジョニー・ブラツクこと金本淳も、目を覚ました新川昌一も初めは黙秘を続けていたが、恭二の証言を元に問いただされると、計画の実行犯だということをあっさり認めたとはい。

しかし、逐一供述の内容が引つかかるものだったり、現実とゲームの区別がついていなかったりと、かなり取り調べは長引いたようだ。最初と途中で手を貸していた恭二も逮捕されるものと思われたが、やったことが仮想世界でアバターを動かしただけということもあり、罪には問われないという。

しかし、肉親が殺人を犯しているかもしれないのに、黙っていたことに関しては刑事さんにこっぴどく叱られてしまったそうだ。

こちらに関しては現時点では恭二を罰則する法律が無いため、罪に問われないのだから。

しかし、もしかしたら自分も殺されていたかもしれないため、やむ

を得なかつたとも言えるだろう。

そして逮捕された金本と昌一は、余罪の追求をされ、それらの供述を元に再捜査を行い、更に数件死銃騒動デスガンによって殺人を犯していることがわかった。

窃盗、住居侵入、暴行、傷害、殺人未遂、殺人と次々に罪を重ねた結果、かなりの重い罪に問われることは逃れられないだろうということが、菊岡の口から伝えられた。

そして、息子が自分の病院の備品を使い殺人を犯したことについて、恭二たちの父親は緊急記者会見を開き、遺族、関係者に深く謝罪したいと、頭を下げた。

もちろんそれだけで許される案件ではない。賠償金や風評被害もあり、彼らの病院は立て直すまでにかかなりの時間を労するだろうと言われている。

「親父さん……大変そうだな……」

「あ、うん……まあね。でも……これを機会にすっかり話すことが出来たよ」

「へ……、そうなの？」

「うん、かなり忙しいみたいで、電話越しでだったけどね。考える時間をくれていったら、好きにしろって……さ」

「……そうなんだ」

今回の一件で、恭二の父親は色々考えさせられたようである。長男のあの有様を目の当たりにし、自分の育て方は間違っていたのかと。

自分のエゴを息子達に押し付けていたのではないかと。

そしてそれらを踏まえて恭二と初めて向き合った結果、息子の気持ちを汲み取り、将来のことを考える猶予をあげたという。

荒れに荒れていた新川家であったが、今回の事件をキツカケに、家族らしい家族へと変わっていきそうだ。

父親の方は、職務と責任問題に追われているようだが、これもお灸を据えられたと思えば、丁度よかったのかもしれない。

「あ……詩乃、悪いんだけど……、飲み物のおかわり、頼めるかな……？」

「ん、はいはい……またスポドリでいいのかしら？」

「うん、お願いするよ」

「でも飲みすぎじゃあないかしら？　またトイレが近くなるわよ？」

「あはは、そうしたら看護師さんを呼ぶから平気だよ」

「そう？　それじゃあちよつと買ってくるわね」

持つてるリンゴの皿をシェルフの上に置くと、詩乃は財布を手に取り、売店で頼まれたものを買うために、恭二の病室を後にする。

詩乃が扉を開けて、廊下に出て扉を閉めるのを見送ると、恭二は顔つきを変えて二人に語りかける。

「……二人ともごめん、ちよつと……いいかな」

「な、なんだ……恭二？」

普段から心優しく、ニコニコ笑顔が絶えない恭二が、珍しく真剣な表情を見せた。

何か大事な話があるのか、和人と木綿季は話を聞くために、姿勢を正して恭二の話に耳を傾ける。

「詩乃を助けるために、協力してほしい」

「し、シノン……？」

「助ける……？」

恭二からの声かけに、ステレオで素っ頓狂な反応を示す桐ヶ谷兄妹。

どういう意味で恭二がそんなことを言い出したのかが、イマイチわかっていないようだった。

「えつと、その、どういうことなんだ？」

「……彼女は、まだ……あの時の亡霊に囚われている」

「あ、あの時って……」

「……ま、まさか前に話してた、郵便局の事件のこと、かな……？」

木綿季にそのことを聞かれると、恭二は首を縦に振り、肯定の返事を返した。

恭二が言いたいことはつまりこういうことだ。

今の詩乃はトラウマを克服しているように見えて、まだ完全に克服出来ていない。

恭二のおかげで、銃や兵器などの知識や歴史を学び、興味を持つようになり、ある程度は克服出来ているのは確か。

しかし、未だに黒星を意図して避けていたり、夢で魘される話を聞いたことから、まだ心の闇が払われていないと踏んだのである。

そこで、恭二は考えた。

どうやればその闇を払うことが出来るか。どうやれば詩乃に顔を上げて表を歩いてもらえるようになるか。

「本当は僕が直接調べないといけないことなんだけど、この有様だからね……。そこで、詩乃を本当の意味で救うために、二人の力を借りたいんだ」

恭二は、真剣な眼差しで二人を見つめ続けた。自分たちをここまで助けてもらっておいて、更に虫がいいことだとは重々承知している。

しかし、それでも和人たちの協力がほしいと、見つめ続ける。

「俺は構わないよ。どうせ来年度になるまで暇だしな。それに……困ってる友人をほっとけるほど薄情じゃないさ。勉強に追われている木綿季はわからないけどな」

「ぼ……ボクだって平気だもん！ これでも一生懸命勉強して、明日奈に凄いつて言われてるくらいなんだからー！」

「あはは……、ありがとう二人とも」

「礼には及ばないよ。それで……俺達は一体何をすればいいんだ？」

「あ……んとね……」

そして一月後 西暦2026年12月16日（水）午後17:05
東京都台東区御徒町 ダイシー・カフェ前

「へえ……ここがそうなんだ」

「ええそうよ、恭二くんは……初めてだったわね？」

相も変わらず黄緑色のパーカーのポケットに手をつ突っ込みながら、淡い色をした木目調の外観のダイシー・カフェを、恭二がマジマジと見つめている。

例の死銃事件^{デスガン}解決から一ヶ月が経過していた。

恭二の体もすつかり良くなり、腕も脚も、そして肋骨も元通りになり、今では走り回ることも出来るまでに回復していた。

あれから詩乃は、平日は学校が終わってから、休日はほぼ一日中病院におり、ほとんど付きつきりで恭二の面倒を見ていた。

後半になると、もうすつかり以前の和人みたく、病院の先生や医療スタッフに顔を覚えられてしまい、院内一のアツアツカップルなんて言いふらされてしまう始末であった。

なんと言っただって、本来ならば面会の手続きを踏まなければならぬのに、詩乃の場合顔パスで受付を通過してしまうくらいなのだ。

その話をされた和人は「以前の俺みたいだな」と、新たに詩乃をからかうのに絶好なソースを手に入れて、何やらニヤニヤしていたという。

そんな彼らが今、馴染みの店『ダイシー・カフェ』に足を運んでいる。SAO時代からの戦友エギルことギルバートが経営しているカフェ&バーの小洒落たお店だ。

何故彼らがここにいるかという点、事件解決と恭二の退院を軽く祝おうということで、ここダイシー・カフェが選ばれたのである。

店主のギルバートからすれば、何かとある度に店を貸切にしないといけないため、ちよつとだけ参ってしまったているのだが、他でもない和人からの頼みであるため、断りきれずに、何度も何度も貸切を許してしまっているのである。

その分、仮想世界で精神的に色々返済してもらっているようではあるが。

「よう二人とも、今ついたのか」

「やあ、和人」

「久しぶりね、キリト」

キイツという音とともにダイシー・カフェの扉が開かれると、店の

入口から相変わらずの全身真っ黒コーディネートの和人が姿を現した。

たまには他の服でも着てみたらどうだと腹に思っている詩乃であったが、想像してみても、壊滅的にまで似合わなそうだったので、すぐに考えるのをやめた。

「とりあえず……入ってくれよ。今日は貸切にしてあるからさ」

「貸切って……、別にアンタの店じゃないでしょうに……」

「まあまあ、細かいことは抜きにしてくれたまえよ」

SAOメンバー随一のツツコミ担当の鋭い指摘を受けると、和人はその場を濁し、店の扉を大きく開いたままにして、二人を招き入れた。詩乃は慣れた足取りで、恭二は初めてということもあり、店の外に置かれた立て看板やポスター、そして入口から見える内装を物珍しそうに見ている。

「あ、シノンさーん！ いらっしやーい！」

「こんばんは、しののんー！」

「よう、よく来たな」

まず彼女らを出迎えてくれたのは、SAO時代から付き合い合いの長い明日奈、直葉、そしてこの店のマスターのギルバートだ。

明日奈と直葉は学校帰りなのか、制服に身を包み、ギルバートはマスターらしく、白のワイシャツに黒のズボンという、いかにもな格好でいる。

本当は他のメンバーにも声を掛けてあったのだが、今日、集まれたメンバーがこの二人だけだったのである。

普段暇していると見せかけて、なんだかんだで個人個人は忙しいようであった。

「話はキリト君から聞いたよ？ 大変だったんだってね……」

「ま、まあ……色々……ね」

入口から見て、店の一番左奥の丸いテーブルの椅子に、明日奈と直葉が腰掛けている。

明日奈に手招きをされると、それに従うように、詩乃と恭二はそのテーブルに同じように腰を落ち着ける。

テーブルの上には食べかけのテイラミスと、飲みかけのレモンティーの入ったカップが二人分置かれている。どうやら明日奈と直葉の分のような。

「それで……そちらがしののんの彼氏なの？」

「えっ……、えっと……その、ま……まあ……」

テーブルに着くやいなや、いきなり明日奈が詩乃をぶった斬る。しかし、詩乃は以前のように顔を真っ赤にして反論をしようとはしない。

いや、顔を真っ赤にしている所は同じなのだが、今回はその間に対して、すんなりと首を縦に振ったのだった。

「あはは……、僕まで恥ずかしくなってくるな……」

「えっと、シユピーゲルさん……でしたよね？ リアルでは初めまして、アスナこと結城明日奈です。しののんとはSAO時代からのお友達で……」

「あ、えっと、僕は……新川恭二です。詩乃とは中学からのクラスメイトで、その、仲良くしてもらって……」

(こういうの、『甘酸っぱい』って言うのかなあ……。お兄ちゃんといい、シノンさんといい、羨ましいなあ)

紅茶のカップを口につけながら恋人がいる組を羨ましそうに、直葉は見つめていた。

いつかあたしにも春が来るのかしら、来るとしたらそれはいつなんだろうと、自分で自分に問いかけてみる。

しかし、いくら考えても答えはわからなかった。

「それにしても、恭二くんの退院祝いだったのに、随分と人が少ないわね……」

「ああ……、みんな忙しいみたいだからな」

「それに……木綿季は？ キリトと一緒にじゃないのかしら？」

今は常に二人でワンセットの和人と木綿季、その片割れがないことに疑問を抱いた詩乃が、店内を見回して彼女を探す。

しかし、どこにもその姿は見られなかった。

「恭二……、来たばかりだけど……始めていいか？」

「……うん、頼めるかな」

和人と恭二がアイコンタクトを取り、互いに呼吸を合わせると、和人がダイシー・カフェのカウンターの左奥にある扉の方に足を進めた。

「ねえ詩乃、君は……あの時のこと、どう思ってる……？」

「あの時の……って？」

唐突な彼からの質問に対し、詩乃は少しだけ首を傾げる。その際に両サイドから伸びているお下げ髪が少しだけ左右に揺れた。

おかしい、どうもおかしい。ここにきてからと言うもの、恭二くんもキリトもどこか空々しい。

木綿季がいらないのも変だし、集まったメンバーが直葉と明日奈だけっていうのもどうなの？ と、詩乃はちよつとだけ感じる居心地の悪さにやきもきしている。

「……別に、どうも思っていないわよ。私がやらなきゃ、母さんが殺された。だから……私がやるしかなかった。……ただそれだけよ」

「……本当にそうかい？」

今更蒸し返す必要のないことを話題にされた詩乃は、少しだけ虫の居所が悪くなっていた。

恭二くんは、キリトは、いや、ここにいる人達は恐らく何かを隠している。

私にだけ内緒で、何かをやっている。そう感じ取っていた。

「……何が、言いたいなのよ……」

「君はまだ、心のどこかであの事件のことを引きずっている。違うかな」

「なッ……そ、そんなこと……ッ」

そんなことない。そう言いたいのに、喉からその声が出てこない。

本当にあの時はああするしかなかったんだ。母さんを守るのは私しかいなかった。

他に誰も助けってくれたりなんかしなかった、だから、だから私がやるしかなかったッ。

私だって、殺したくなんかなかったッ、誰が好き好んで人殺しなん

かしたりするもんかッ。

でも私はやってしまった。引鉄を引いてしまった。人一人の命を奪ってしまった。

なら、私が背負っていくしかないんだ。私一人で、罪を背負っていくしかッ！

「詩乃、確かに君は……人の命を奪ってしまったかもしれない。それは変えられない事実だ」

「……………ッ」

「でも、それだけじゃないんだ、詩乃」

「……………それだけじゃない……………？」

一体なんのことを言ってるのかわからない詩乃は、ただただその場に固まってしまっていた。

この場にいる人達が、何のためにここに私を呼んだか、その理由がわからなかった。

「しののん、私たちね？ キリト君からしののんの過去、全部聞いたの……………」

「……………でしようね、何となく……………わかってたわよ……………」

S A Oメンバーは皆、詩乃にとっても心を許すことの出来る大切な友人達だ。

誰もが誰も、詩乃の過去にどんなことがあったとして、それを蔑んだりするようなことはしない。

相手の命を奪わなければいけない状況、それを誰もがわかっているから。

そして何よりも、その事で長年ずっと苦しんできた詩乃を、どうして軽蔑することが出来ようか。

「詩乃、君は……………今までずっとそのことで自分を責め、苦しんできた……………」

「それが悪い事だとは言わない。だけど、君はただ闇雲に命を奪ったわけじゃあないんだ」

「そりゃあ……………母さんを助けるためだったから……………」

「それも間違っていない、だけど、君は他に知るべきことがあるんだ。」

知って……その人たちの言うことに、耳を傾けなければならないんだ」

「……な、何を……」

これ以上、あの事件の何を聞けばいいの？ 人殺しだのなんだのつて、今まで散々罵られてきた。

世間からの目も冷たくて、ずっと蔑まされてきた。

また、何かを言われなければならないの？ せつかく心の奥底に仕舞って蓋をしておいたのに、何でわざわざほじくり返そうとするの……？

「……木綿季、いいぞ」

和人が店内奥の扉をノックしながら声をかけると『ガチャ』という音とともにドアノブが捻られ、扉がゆっくりと手前に開かれていった。

そして何が始まるんだとじつとその方向を見つめっていると、まず初めに木綿季が姿を現した。

「木綿季……？」

奥から出てきた木綿季が、ジュークボックスの手前で立ち止まり、こちらですとハンドサインを送る。

その後が続くように、三十代半ばくらいの女性と、四、五歳くらいの女の子が続いて奥から姿を現した。

「……??」

見知らぬ親子、当然詩乃も出会ったことは無いようで、終始頭の上に？マークを浮かべている。

女性は肩まで伸びたセミロングの黒髪に、カジュアルな服装。女の子の方は通っている幼稚園のものだろうか、白と黒の通園服に身を包み、肩からは黄色い幼稚園カバンを下げている。

親子は詩乃の座っているテーブルの前までゆっくり足を運ぶと、その前で立ち止まり、礼儀正しく詩乃に向かって一礼をした。

母親らしき女性が先に頭を下げると、それに気付いた女の子も、釣られて一緒に頭を下げる。

一体何が起こってるんだ、この人たちは誰なんだと、あらゆる疑問

が詩乃の頭の中を駆け巡る。

詩乃が困り果てていると、母親の女性が、ゆつくりと口を開いていった。

「初めまして、朝田……詩乃さん、ですね？」

「……は、はい……」

「私は……大沢祥恵と申します。この子は娘の瑞恵、五歳です」

祥恵と名乗った女性が、瑞恵という女の子の頭に手をぼんと当てると、女の子の方がニコツと微笑む。

「私、この娘が生まれる前、六年前までは……地方の郵便局で働いておりました」

『郵便局』というワードに、詩乃は目を丸くして凍りついた。

基本的に、詩乃が巻き込まれたあの郵便局での事件の真実は、警察関係者、事件当事者、詩乃のクラスメイト、そしてここにいるメンバーしか知らないことだ。

そして、詩乃は目の前の女性の面影が、どこかで見覚えがある、と思いはじめた。

(わたし……この人を……知ってる……?)

「ごめんなさい……、ごめんなさい詩乃さん。私……、もつと……もつと早く、あなたにお会いしなければならなかった……」

「そ、それじゃあ……あ、あなたは……、まさか……あの時の……?」

「……はい、あの強盗事件に巻き込まれた時、現場にいた局員です……」

そう、彼女大沢祥恵は、今から六年前、例の強盗事件が発生した郵便局で働いていた、郵便局員なのであった。

隣で一緒に働いていた局員が犯人にピストルで撃たれ、次は彼女か、詩乃の母親かと思われた時。

咄嗟に当時十一歳の少女の詩乃が、犯人に飛びかかり、周りの人の命を救った。

そう、彼女は何も犯人を闇雲にただ殺しただけではない。

それによって、そこに居合わせた人達全員の命を救ったのだ。

ここにいる大沢祥恵なる女性も、そのうちの一人、というわけだっ

た。

「あの時、私……お腹の中にこの子がいたんです。ですから……詩乃さん、あなたは私だけでなく、この子の命も救ってくれたんです」

……救った？ 私が……命を？ 人を殺した私が……救った……？

「ありがとう詩乃さん、本当に……本当にありがとう……ッ」

感謝の言葉を、やっと本人に伝えることが出来た祥恵は、途端涙をポロポロと流し始めた。

その反応に、詩乃がどう対応したらいいかわからずに、どうしようとおろおろしていると、女の子、瑞恵の方が、小さな足をちよこちよここと動かし、詩乃の目の前にやってきて、立ち止まった。

そしてニコツと詩乃に笑顔を見せると、幼稚園カバンのチャックを開けて、ガサゴソと中から何かを取り出した。

「……………」

画用紙のようなものがカバンから取り出されると、瑞恵はそれを両手で持ち直し、そのまま真っ直ぐ一生懸命に腕を伸ばして、詩乃に差し出した。

詩乃は解せぬ顔を浮かべたままそれを受け取る。そこには、瑞恵が自分のクレヨンで描いた、真心のこもった絵と『しのおねえさんへ』と子供らしい字が書かれていた。

「しのおねえさん、ママとみずえを、たすけてくれて、ありがとう！」

この絵、この言葉、そしてこの笑顔は、詩乃が六年間ずっとずっと背負い続けてきた罪の意識を洗い流すのに、十分すぎるほどだった。一切の曇りのない眩しすぎる瑞恵の気持ちは、しっかりと詩乃の心に届いていた。

詩乃は泣くことしか出来なかった。その涙の理由は様々だ。

必要以上に罪の意識に囚われすぎていたこと、この親子のように、詩乃に感謝の気持ちを抱いている人がいること。

それらを一度に知ったことで、嬉しさ、哀しさ、その他色々なものがごちゃごちゃになった涙を流していた。

しかし今確実に言えることは、この涙の一番大きな理由は、嬉し涙だということだろう。

次から次へと溢れ出る涙は留まることを知らず、目から溢れ出て頬を伝い、重力に引っぱられて落ち、手元にある画用紙を濡らした。

「えへっ」

泣いている詩乃の手を、瑞恵は温かく両手で掴む。詩乃は一瞬驚くも、瑞恵の純粹な笑顔に応えるように、自分も精一杯最高の笑顔を見せ、瑞恵に感謝の気持ちを抱く。

「ありがとう……、瑞恵ちゃん……」
「えへへ♪」

瑞恵は終始笑顔のまま、詩乃と触れ合い続けた。そして話をしているうちに、彼女の涙はひっこんでいき、まるで本当の姉妹のような微笑ましいやりとりに見える。

「詩乃さん……よろしければ、お聞かせいただけませんか？ あなたが……あの後、どのような人生を歩んできたかを……」

「わ、私の……？」

「……はい、もう……あなただけに背負わせるわけにはいきません。私達も……ちゃんと向き合います」

娘をなでていた時とは打って変わって、覚悟のある顔つきへと変わった祥恵は、じつと真っ直ぐに詩乃を見つめる。

あの時に命を救ってもらったからというだけではない。

一人のいたいけな少女に全て背負わせてしまった業を、自分も知るため。少しでも彼女の重荷を分かち合うため。

「……わかり、ました……」

その覚悟を汲み、詩乃も今一度、自分の過去と向き合い直す。

祥恵はそんな彼女の話の真正面から逃げずに、耳を傾け続けた。

同日 午後17:45 東京都台東区御徒町 ダイシー・カフェ前

あれから、詩乃は祥恵、瑞恵とたくさん話をした。ずっと今まで、人を殺めた事への罪の意識。

銃火器へのトラウマ、毎夜毎夜苦しめられている悪夢。

これまでの全ての体験を話した。その話から、祥恵は目を背けることなく、真剣な姿勢で聞き続けた。

それが自分と娘の命を救ってくれた恩人への礼儀、けじめだとわかっていたからだ。

やがてひとしきりの話が済むと、祥恵は詩乃と連絡先を交換し合った。何かあればいつでも相談に乗るからということ、詩乃も喜んで自分の連絡先を教えた。

そして時刻もいい時間に差し掛かり、娘も連れていくこともあるので、大沢親子はそのままダイシー・カフェを後にした。

瑞恵は別れ際でも終始笑顔で詩乃のことをニコニコ見つめていた。

「それじゃあ……バイバイ、瑞恵ちゃん」

「うん！ ばいばい、しのおねえさん！」

「あの……今度は是非、うちに遊びにいらしてくださいね」

「あ……はい！ 是非行かせてもらいますッ」

別れの挨拶を済ませると、大沢親子は仲良く手を繋ぎながら、建物の向こう側へと姿を消していった。

これから家に帰ると、晩御飯の支度などがあるのだろう。もしあの時、詩乃が勇気を振り絞らなかつたら、その一家団欒の時間も永遠に失われていたのかもしれない。

「……はぁッ……」

「……大丈夫？ 詩乃？」

「……うん、なんか……肩の荷が軽くなった……気がする」

「そっか……よかった」

今日の計画を立てた主犯である恭二が、親子が去っていった方向を見つめながら、詩乃に問いかける。

彼女の口から出てきた声は、心なしか今まで聞いた声で、一番嬉しそうなの、生き生きとしているような声色だった。

「ねえ、恭二くん？」

「……なんだい？」

「今回のこと、恭二くんが……やってくれたんでしょ？」

「……いや、僕は……考えたただだよ。直接調べたりしてくれたのは、和人たちだ」

お気に入りのキャスケット帽に手を掛けながら、自分は貢献者じゃないと謙虚な姿勢を見せる恭二に、詩乃は「素直じゃないんだから」と思いながら、襟元のマフラーの位置を直す。

「私ね、ずっと……、あの時のことを受け入れることが出来なかったの」

「…………詩乃？」

「自分のやったことを認めたくなくて、全部幻にしてしまったかった」
「……詩乃は人殺しなんかじゃない。多くの命を救ってくれた、英雄なんだ」

「や、やめてよそんな言い草……、英雄だなんて……恥ずかしいじゃない……」

「でも、君が買ってくれたこいつのおかげで、僕も命を救われた」

そう言いながら、恭二は自分の首からぶら下げているドックタグを取り出し、詩乃に見えるように手に取った。

「詩乃は僕の恩人でも……あるんだよ」

少しだけ凹んでいるドックタグ。詩乃が恭二にプレゼントした、思いの詰まったドックタグ。

このドックタグは恭二にとってお守りでもあり、一生離さない宝物でもあった。

詩乃も瑞恵からもらった絵をじっと見つめる。画用紙からは、ほんのりとクレヨン独特の匂いがする。この絵も彼女にとっては、一生の

宝物になることだろう。

「なら、恭二くんも私の恩人ね」

「え……何で？」

「私をまた……笑えるようにしてくれたもの」

「……そ、それは……」

「自分を卑下しないで、恭二くんの悪いところよ？」

何かを言おうとする恭二の唇を、詩乃はすかさず人差し指をあてて蓋をした。

口を塞がれた恭二は、顔を赤らめながらその指先をじつと見つめている。

このようなやりとりはこれから先、何回も何十回も繰り返されるのだろう。

彼の弱気な性格を治すことが出来るのは、もう彼女しかないのだから。

「何恥ずかしかつてるのよ、私たちもう恋人同士なのよ？」

「え……えと、いや……それでも恥ずかしいものは恥ずかしいっていうか……あ、あはは……」

「……全くもう、これじゃあ先が思いやられるわよ……」

友人から恋人の関係に間柄を深めたからといって、そう易々と恭二の奥手な性格が直るわけではない。

人の性格は自分一人では簡単には変えられない。ならば、誰かがそれを手助けしてやればいい。

詩乃のぐいぐいいく姿勢なら、恭二もきつと前へと成長することが出来るだろう。

「じゃあさ……、奥手な君でも絶対に断れないお願い、してもいいかしら？」

「……お、御手柔らかかにね、あはは……」

恭二からの声を聞くと、詩乃は彼を真っ直ぐ見つめ、自身の胸に手を当てて、目を閉じて大きく深呼吸をし、再び目を開けて彼をじつと見つめる。

そして文字通り、彼に一生のお願いを、聞いてみる。

「……あなたが、私を一生……守って」

「……うん、喜んで……」

私は……あの事件をこれまでずっと、忌々しい出来事だと思ってきた。

全部幻にして消してしまいたかった。でも現実はそのじゃない。私があの時撃った弾は幻ファンタム・バレットの銃弾なんかじゃない。

本物の弾、現実リアル・バレットの銃弾なんだ。

でも、今ならあの時の行動を、ちよつとだけ誇れる気がする。

私は、あの犯人を殺すために撃つたんじやない。たくさんの尊い命を救うために、あの弾を撃つたんだ。

だから、幻なんかにしちやいけない。その現実を受け止めて、乗り越えていかないと。

でもきつと大丈夫。今の私には……大切な人が、ずっとずっと隣にいてくれるから……！

ソードアート・オンライン マザーズ・ロザリオ ボクの生きる意味外伝 幻の銃弾編 ㄱ完ㄱ

短編く小さな春編く

第75話く春のはじまりく

『出会い』それは常日頃から行われている。

毎朝学校へ行く途中に、通行人とすれ違うのも出会い。コンビニやスーパーで、店員さんと話すのも出会い。

また、毎朝友達と学校で顔を合わせるのも、はたまた仮想世界で知った顔と遊ぶのも『出会い』だ。

この物語は、互いに接することがほとんどなかった男の子と女の子の、甘酸っぱくも微笑ましく、季節外れに訪れた小さな春の物語……。

西暦2026年12月17日(木) 午後12:35 東京都立川市

柏町 綾野邸

「へくしッー」

和人や明日奈達が通うSAO帰還者学校がある西東京市から、さらに西にあるここ、東京都立川市のごく普通の一軒家、その二階にある自室で、とある女の子が寒気に体を震わせている。

「うう、まだだるいです……」

身長140センチほどの小柄な女の子はベッドの布団に身を包み、体調不良を独り言で訴えている。

彼女の名はシリカこと、綾野珪子。

平日の今日、本来ならば彼女は学校に行っている時間帯だ。

冬休みも近付いてきており、クリスマスに大晦日にお正月と、この時期は何かとわくわくしてくるものだ。

気分も高まり、遊ぶ予定を立てていくのにも気合が入るいうもの。しかし一方で、浮かれすぎて慢心、油断といった心もどこかしら出てくる。

食事を適当にすましたり、不規則な生活リズムになってしまったり、プライベートとは言え、自室でだらしない格好でいたり。

この布団にうずくまっている珪子も決してその例外ではなく、慢心さがたたり体調を崩し風邪をひいてしまい、やむを得ず学校を休んでいてしまっている、というわけだった。

「お母さんも留守だし……、退屈だなあ……」

ピンクのカーテンがつけられている窓の外の風景を見ながら、寝る以外にすることがないと、珪子はボヤいている。

風邪といっても体温は37度6分と微熱気味の塩梅と動けはするが、だからといって予断を許さない状態だ。

今のうちにしっかりと休んで治しておかないと、もっと酷くなってしまふケースもある。

「ピナ……」

白い壁、女の子らしいカラフルな色合いの可愛らしい家具やデスクに囲まれた部屋中を見渡しても、飼い猫のピナはどこにもいない。

普段家にいる時は大抵珪子と一緒にいるのだが、風邪がうつってしまったは大変と、彼女の母親が一階のリビングへと避難させたのだ。

故に、彼女は今一人ぼっち、そして午前中にも散々寝ていた為眠気も無く、今度は退屈という強敵と戦っていたというわけである。

「……眠れない……」

いくら寝ようと思って目を閉じても、一向に眠気はやってこない。

しかも退屈で退屈で死んでしまいそうだ。

体調を崩してさえないなければ、今頃は学校でお昼休みの時間。談笑したり、冬休みの遊ぶプランの相談をしたりと、楽しいことがいくらかでもある。

「ん……通知……」

突如、ベッドの枕元に置いてある珪子のスマートフォンがピロリロと鳴り響き、誰かからの通知が来たことを教えた。

珪子が慣れた手つきでスマホを手に取り、ディスプレイに目をやると、誰かからLINEでメッセージが送られてきているようだった。

「リズさんから……」

「やつほーシリカ！ 体調はどう？ やつぱりアンタが学校来てくれないと休み時間物足りなくて仕方ないわよ！ 早く治しちやいなさいよー！」

メッセージはどうやら、アインクラッドでもALOでも交流が最も深かった、リズベットこと篠崎里香からのものようだった。

「ふふっ、リズさん……心配してくれてるんですね」

先程までつまらなそうにしていた瑠子の顔に、ほんのり笑顔が浮かんだ。

里香からのメッセージが余程嬉しかったようだ。すると瑠子はパッと現代の若者らしく、素早いフリック操作ですぐさまメッセージを返信する。

このささやかな時間は、ずっとベッドの上でじつと安静にしていた瑠子にとっては、非常に嬉しい時間となったようだ。

次から次へと話題が尽きずに、どんどんメッセージのやり取りを続けていく。

女の子同士、ガールズトークに花を咲かせて、瑠子は実に楽しそうだ。

「んじゃあ、そろそろ休み時間終わりだから、またね。後でそっちに明日奈と一緒に邪魔するからー！」

「……リズさん、来てくれるんだ……♪」

一人っ子の瑠子にとって、年上の里香は気の合う女の子友達というよりも、面倒見のいいお姉さん、といった感じだ。

体の心配をしてくれただけでなく、この後お見舞いに来てくれるという。これには瑠子も嬉しくてたまらない。

「なんか甘いものでも買っていくわよ。あ、そうそう、いくら退屈だからって、フルダイブなんかしちやあダメだからね？ それじゃあまた夕方に行くから待ってなさいよー！」

フルダイブ、その文字を見た瞬間に瑠子はきよんとした表情を浮かべた。

よく、風邪をひいて寝てしまっているのに、携帯やゲーム機で、こっそり親に内緒で遊んでしまったこと、そんな経験はあつたりしないだ

ろうか？

誰もが一度はやったことがあるであろう、親の目を盗んでゲームをする行為。

里香も余計なことを言わなければよかったものを、その余計な一言が、珪子に小悪魔的な発想を生ませることになってしまった。

「そうだ……ALOなら、誰かいるかも……」

その発想は思い浮かばなかったと、里香に心の中で感謝をし、珪子はスマホを傍らに置くと、今度はタンスの上に、可愛らしいぬいぐるみと一緒に置かれているアミュスフィアに手を伸ばす。

両手でそれを掴むと、珪子は再びニツコリと微笑む。

現実世界がダメなら仮想世界があるじゃないかと、パンがないならお菓子を食べればいいじゃない的な、安易な発想を浮かべながらアミュスフィアを頭に被る。

「ちよつとくらいなら大丈夫だよね？ 本当に危なくなったら、確かアミュスフィアが自動ログアウトさせてくれたはずだし……」

S A O 事件で世間を震撼させた『ナーヴギア』と違い、次世代フルダイブマシンであるアミュスフィアは、装着者の脳波の異常や、心拍数などを検知することが出来る。

もし使用者に何らかの肉体的異常が見られた場合、強制的にログアウト、現実世界へ帰還させる機能が備わっているのだ。

徹底的な安全面での使用を追求したこのアミュスフィア。

脳への負担のことも考慮し、電子パルスの出力もナーヴギアやメデイキュボイドと比べても格段に抑えられた設計となっている。

故にそれらのマシンを使っていた者達からすると、個人差はあるが視界のクリアさが若干落ちていたり、ちよつと動きにくいと感じる時もあるようだ。

珪子はもしも何かあっても、アミュスフィアがちゃんと管理してくれるから大丈夫と、タカをくくっていたのだ。

「ちよつとだけ、ちよつとだけだから……」

内心いけないことだとは思いつつも、珪子はフルダイブの準備を進める。

ソケットにLANケーブルを差し込み、ベッドに寝直して、少しでもダルい体をリラククスさせる。

目を閉じて大きく深呼吸をし、気持ちを落ち着かせて、今の自分の意識を仮想世界へと委ねていく。

「……よし、リンク……スタートッ」

同日午後12:45 アルヴ Heim・オンライン 空都ライン 転
移門広場前

今からおよそ一年前、このALOに大幅なアップデートが施された。

《浮遊大陸スヴァルトアルヴ Heim》

文字通り、このALOのワールドの上空に浮かぶ大陸であり、穏やかな気候の平原の島や、灼熱の暑さの砂漠の島、凍てつく寒さの氷の島など、様々な種類の大陸が存在する。

いつもは世界樹の街アルンに腰を落ち着かせているシリカからSAOサバイバーが、何故ここにいるかというと、今週の頭に実装された『試練の洞窟』という敵が無尽蔵に強くなっていくというタイプのダンジョンにチャレンジしていた為であった。

アルンの街が地上のホームだとするならば、ここ空都ラインはスヴァルトアルヴ Heimのホームと言えるだろう。

綺麗な噴水に充実した商業施設、ダイシー・カフェ空都ライン支店もあり、何かと居心地がいい拠点となっている。

そんなラインの転移門広場前に、可愛らしい猫耳と、長い尻尾の生えたケツトシー族の女の子が立っている。

どうやらアミューズファイアのシステムに弾かれることなく、ちゃんとフルダイブ出来ているようであった。

「ふう……ログイン出来た……ッ」

すっかりALOにログイン出来たことを確認すると、今度は左手をスライドさせてメニューを表示し、フレンドリストを開いて他に誰か知り合いがないかどうか確認する。

が、こんな流石に平日の真昼間からVRMMOで遊んでいるようなユーザーはそうそうおらず、彼女のフレンドリストはオフライン表記ばかりが目についていた。

「はあ……そりやそうですよ、こんな時間から遊んでる人なんて、そういませんよね……」

シリカが大きく肩を落とし、溜め息を吐き出すと、彼女がログインした為か青白い光とともに、テイマーモンスターであるフェザーリドラのピナが、どこからともなく現れた。

「キュルン♪」

水色の触り心地良さそうな毛皮に、大きく分かれた長い二つの尻尾。

まさにドラゴンの子供という言葉に相応しい可愛いく愛嬌のあるピナは、早速自分が大好きなご主人の胸に飛び込んでいった。

「ピナー！」

シリカはいつもやっているように、SAO時代から一番長くいた大切な友達を優しく受け入れる。

背中に手を回し、ポンポンと優しく叩きながらも片方の手で頭をそっと撫でる。

思わずピナも気持ちよさそうな鳴き声をあげて、精一杯シリカに甘える。

「キュルルン♪」

「えへへ、ピナに会えて嬉しいよ♪ 今日は何しようか」

「キュルン？」

ピナはシリカに甘え終わると、今度は首を傾げながら頭に？マークを浮かべ、シリカを見つめている。

まるで、シリカがこの時間に仮想世界にいたことがおかしいと知っているかのような反応だった。

「べ、別にサボったわけじゃないよ？」

「キュルルウ……？」

まるでシリカの話している内容がわかっているかのような反応を見せるピナ。

そこまで複雑なプログラムが組み込まれているわけではないのもかわらず、ピナのAIは実に柔軟な対応を、特に御主人であるシリカからの声掛けに対しては絶対に応じるようになってる。

またシリカがピンチのときには命令なしに体を張って守るような行動に出たりと、アルゴリズムから外れた行為も目立つ。

何故ピナがこのような行動を取るのかは、MHC Pであるユイにもストレアにもわからないという。全く不思議な生き物である。

「ほ、ホントだよ？ ちよつと風邪で休んじやっただけだから！」

「……なら、こんなことしてないでちゃんと寝てろよ……」

「ひゃわあ!？」

使い魔と会話をしているシリカの背後から、突如プレイヤーが声を掛けてきた。

いきなり声をかけられたシリカは両手を大振りにして驚いて、そのままバランスを崩して盛大に転んでしまう。

「お、おいおい大丈夫か？」

「う……あいたた……」

シリカはどうやら派手に尻餅をついてしまったようで、痛そうに自分のお尻を手で抑えている。

ペインアブソーバーが機能しているので、痛みが走ることはないのだが、しっかりと衝撃は感じていたようで、そのおかげで痛いと思っただようだ。

「ほら……」

プレイヤーは自分の所為で転ばせてしまったシリカに、すつと手を差し伸べる。

シリカは左手でお尻を抑えながら、右手差し伸べられた手を掴み、下半身に力を入れてすつと立ち上がった。

「えつと、ありがとうございます……つて、あれ……アナタは……」

向こうはシリカを知っているようだが、彼女の方は彼のことを知らない……というか、覚えていないようだ。

こんにち今日まで何度か顔を合わせている間柄だというのに。

「お、オレのこと覚えてないのか……、この前皆で冒険したし、飯だつて食つたら?」

「あつ、思い出しました! 確かユウキさんのギルド、スリーピング・ナイトの!」

「ああ、ジュンだよ。タルケンならともかく、オレを忘れてたなんてちよつとショックだぞ……」

真つ赤な髪の毛に真つ赤な瞳、そして全身に纏っている真つ赤な重鎧。サラマンダー族の少年プレイヤー、ジュン。

シリカに声をかけたのは彼だったのだ。

「ご、ごめんなさい!」

「べ、別に謝らなくてもいいけどさ、これからはちゃんと覚えておいてくれよ?」

「あ……は、はい!」

学校を休んでいるのにこんなことをしているためか、知り合いに見つかってしまい、誰かにバラされてしまわないかとビクビクしているせいか、シリカはちよつとだけぎこちなくなってしまうている。

使い魔のピナも、そんな固くなつてる彼女の頭にふわつと乗り、羽をたたんでリラックスし始めた。

この位置は、昔からピナのお気に入りポイントなのだ。

ジュンは近くにあるベンチに腰を下ろし、手に持っている茶色い紙袋からローストチキンのような物を取り出すと、口に運んでガツガツと食べ始めた。

「それで……学校はどうしたんだよ?」

「あ、えつと……その、風邪をひいてしまいました……」

「……」
「そ、それで午前中寝たら熱も下がってきて、寝れなくなつてしまつて……」

「うん」

「それで退屈になってしまって、ALOなら誰かいるかなー……なんて……」

「……………」

ジュンは呆れて何も言えなかった。

退屈だからログインした？ バカを言うでない、そもそも病気は退屈でも寝て治すものだ。

自分はそんなこと飽きるほど体験してきた。ベッドの上がどれだけ退屈か、身をもって知っている。

たかが一日も退屈に耐えられないようじゃまだまだ甘い。長年の入院生活を強いられている身として、何か言わなくては。

そう思ったジュンはチキンを一本一気に胃に放り込むと、残りをストレージに仕舞ってシリカのいる方に向き直す。

「なあシリカ、体の具合が悪いのなら、ちゃんと寝ないと」

「は……はい……」

「……オレもさ、今も病院生活送ってるから気持ちちはわかるよ？ 寝ること以外何も出来ないことのしんどさや苦痛さ」

「はい……」

「でも、オレはずっと耐えてきた。先生に許可をもらってはフルダイブしてたけど、基本的には薬飲んで寝るのが、毎日のサイクルだったんだ」

ジュンが諭す度に、シリカの猫耳と尻尾が垂れ下がっていつている。

誰かとお話だけでもと思ってフルダイブした結果、自分と同じくらいの年齢だと思われる男の子からお説教を喰らっている。

いけないことをしている自覚があったのか、シリカはシュンとしてしまい、縮こまってしまっていた。

「あ……」

いけない、ちよつと言いきすぎたかもしれない。確かに自分は間違っていることは言っていない。

だけど相手は年頃の女の子、もうちよつと言葉を選ぶか、言い方というものがあつたかもしれない。

「えつと……ごめん、ちょっと言いすぎた……」

「あ……いえ、大丈夫です……」

どうみても大丈夫ではない。

体調を崩して学校に行けず、家でも一人ぼっちで退屈で、寝るに寝れずにちよつとALLOにログインしたらこの始末。

自分が悪いと思っけていても、やはり言われるとくるのである。

「……………」

「……………」

気まずい。非常に気まずい。

女の子にこんな顔をされてしまつては、男としてはどうしたらわからない。

何か、何か声を掛けなくては。彼女の元気が出てくるような、素敵な話題を。

「シリカの通つてる学校つてさ、SAOサバイバーが集まつてるんだっけ」

「え……は、はい、そうですね……」

「てことは、アスナさんやキリトさんも一緒なんだ？」

「は、はい。でもキリトさんは休学してますけどね」

「そうか……でもいいなあ、オレも学校行きたいな……」

「……………ジュンさん？」

「オレさ、ずっと病気で病院暮らしが長かつたからさ。今は病室で勉強してるけど、やっぱり学校で勉強したいな……」

今年で十五歳になつたジュンは、今年の秋まで、病気に苦しめられていた。

病名は『悪性リンパ腫』

AIDSや白血病と同じで、難病とされている病気である。白血病と同じく血液のガンと呼ばれている。

発症原因が一切解明されておらず、進行も早く発見が遅れると血管を経由し、たちまち全身に転移してしまい、手遅れとなる。

ジュンは三年前、十二歳の時にこれを発症し、抗がん剤や放射線治療、化学療法など、何種類もの治療法を施してきた。

しかし、どの治療法も彼に効果的だとは言えなかった。悪性リンパ腫の厄介なところに『耐性を持ちやすい』というのがあ

る。抗がん剤はもとより、化学療法を用いての薬の投与も、続けていくにつれて段々と効果が出なくなってくる。

既存の薬品では、リンパ腫の進行を抑えられなくなっていたのだ。ユウキやシウネーと同じように、骨髄移植による手術も視野に入っていたが、ジユンのHLAに合うドナーがなかなか見つからず、悪性リンパ腫の進行も止められずに八方塞がりになっていた。

そして告げられる余命。

しかし彼は諦めなかった。自分と同じくらいの難病と闘ってるユウキやシウネーだって生きようと頑張ってる。

女の子があんなにも頑張ってるのに、男のオレが音をあげてどうするんだ。

生きてやる、絶対に生きてやる。

それから彼は毎日在必死に生きた。

諦めてたまるか、絶対に諦めてたまるか。まだやりたいことがたくさんある。

こんな所で死んでたまるか、死んでなるものか!!

そんな彼に、奇跡が起こった。

抗がん剤もダメ、放射線治療もダメ、既存の化学療法も骨髄移植もダメ。もう、手はないかと思った時、思わぬ光明が差し込んできた。

悪性リンパ腫に対する新薬の被験者となること。

通常、新薬が出来上がるまでは国の承認が必要になる。薬の成分の有効性、副作用などの安全性など、何回、何十回、何百回と繰り返し。そしてそれを何年も時間をかけて、開発を続けていく。

一つの薬が出来上がるまで、平均しておよそ最短で九年、長いと十七年もの歳月を費やす。

そして国に認可される薬は、およそ三万件に一件ほどと言われている。

人の体にいい意味でも悪い意味でも様々な効果をもたらす薬を、私

たち人間が普通に投与出来るようになるまで、気の遠くなるような期間がいろいろだ。

しかし、この開発途中の新薬の『被験者』ともなれば、完成を待たずして、薬を投与することが出来る

しかし、開発途中の薬というものは大変にハイリスクなものだ。

どのような効果が現れるか未知数、副作用等の危険性も相まって、非常に分の悪すぎるギャンブルだと言える。

だが、ジューンは迷わず被検体になることを選択した。何もしなかったら、このまま死ぬ。

それなら、一万分の一でも僅かに可能性が残っているのなら、その賭けに乗ってみようじゃないか。

そして今年の三月、新薬の投与が始まり、ジューンにとって最後の治療が始められた。

泣いても笑っても、これがしくじればもうお終いだ。

治療を始める前は余命三ヶ月と言われていた。

しかし、投与を始めて半月ほど経ってから、彼の身体に変化が現れ始めた。

彼の身体の血液の中を流れるリンパ球にあったガン細胞反応が、少しずつ減少していったのだ。

言い方は悪いが彼のおかげで実験は成功、新薬の開発に大きく貢献することが出来た。

時期が経つにつれてガン細胞の反応も減っていき、薬の投与が始められて三ヶ月後、無事に完全寛解となり、今は日常に復帰するためにリハビリの毎日だ。

しかし、再発の危険性もゼロではないため、定期的な薬の投与と、再検査は必至となる。

それでも彼にとつてこれ以上嬉しいことはないだろう。

また表を走れる。好きなことが出来る。諦めないでよかった、最後まで諦めないで、本当によかった。

「オレの学力で入れる学校っていったら、私立しかないだろうし、また両親に迷惑をかけちゃうかな……」

だが、彼にとつてまた困難な壁が立ちはだかった。既に義務教育期間を終えている彼の進学先だ。

彼の学力ともなると、学費の高い私立高校しか選択肢はない。

しかし、実家はあまり裕福ではない上、今まで散々両親に迷惑をかけてしまった。

自分が私立校に通うとなると、更に家計を圧迫してしまうし、ちゃんと授業についていけるかどうかかわかったもんじゃない。

しかしだからと言って病み上がりの彼にバイトをして学費を稼いだり、すぐに就職先を探すという話も酷というものだ。治っても崖っぷちという事実は変わらないのであった。

「ジュンさん……」

シリカは、改めてスリーピング・ナイトのメンバーの現実というものを思い知った。

生きるのに必死だったのは自分たちSAOサバイバーだけではなく、

彼らスリーピング・ナイトもまた、毎日を死ぬか生きるかの瀬戸際だったのだ。

生還を果たしても、SAOサバイバーと同じようにペナルティを抱えたまま生きている。

しかし、彼はまだ知らない。シリカが現実世界で通っている帰還者学校が、来年度から新たな体制を敷こうとしていることを。

SAOサバイバーだけでなく、病気や事故で勉強が大幅に遅れてしまっている子供を支援するための準備を進めていることを。

「大丈夫ですよジュンさん、学校……いけますよー!」

「……え? で、でもオレの実家……ずっとオレの治療費とか払い続けてたから、私立の学校に通わせてもらうだけの余裕も……ないんだよ」

「大丈夫です、絶対にいけますから!」

シリカを元気づけようと思ったのに、逆に自分が彼女に元気づけられている。

そもそも、自分は何故彼女に声を掛けたんだろう、注意するため?

お説教するため？

それにオレが学校に通えるってどういうことなんだ？ もう、なんかよくわからなくなってきた。

「……そ、そう……なんだ？」

「ハイ！ だから元気だしましょうよ！」

シリカがジユンの手を握り、自信に満ちた眼差しで見つめ続ける。急に異性に手を握れ、じっと見つめられたジユンは、顔を赤らめてしまい、フツと彼女から目を逸らした。

「どうかしましたか？ ジユンさん？」

「なな、何でもないよ……ッ」

「……??」

ジユンの反応がなんなのかわからずにシリカが首を傾げると、彼女の頭に乗っているピナも「キュルン？」と鳴きながら同じように首を傾げた。

「……ありがとうシリカ、何か……元気つけてもらっちゃったね」

「……ふふ♪ ねえジユンさん、今……お暇ですか？」

「え、あ、えーつと……夕方のリハビリの時間までは大丈夫……だけど」

「なら、私と一緒にクエスト、行きませんか？」

おかしい、彼女は自分の話を聞いていたのだろうか。

遠まわしにログアウトしてさっさと風邪を治せと伝えたつもりだったんだけど、学校の話をしたことで、すっかり頭から離れていてしまったようだ。

しかし、彼にはこれ以上彼女を論すつもりはないようだ。

確かに彼女は体調を崩しているかもしれないが、本当にヤバかったらアミュスフィアが強制ログアウトさせるはずだし、現実の肉体はベッドで横になってるはずだ。

恐らく考えてるほどの心配事は起こらないだろう。

「……うん、わかった。いいよ」

「ほ……ホントですか!？」

「本当だよ。ただし……マジにやばくなったらすぐにログアウトする

こと、約束出来る?」

そう言うと、ジューンは左手でメニューを操作し、早速クエストに挑むための支度を始めようとしていた。

思い立ったら即行動、それが彼の信条なのである。

「は……ハイ! よろしくお願いしますね、ジューンさん!」

ちよつと誰かとお喋りするだけと思つてた昼間のスヴァルトアールヴヘイムは、まさかまさかのコンビでのクエスト出発までと相成つた。

本当はいけないことなのだが、思わぬ結果になつたシリカは物凄く嬉しそうにぴよんぴよんと飛び跳ねている。

「あ……でも、一つだけいいかな……?」

「ふえ……? な、何でしょう?」

ストレージからいつも自分が愛用している大剣をオブジェクト化し、装備して背中に収めると、ジューンは一緒にクエストにいくため、条件を提示した。

「……さん付けをやめて、普通に呼んでほしいな……」

「え? あ……えつと、なんて呼べば……」

「普通でいいよ、普通で」

現在、ALOメンバーの中でジューン、それに次いでユウキ、次にシリカの順番で年齢が若い。

自分より目上のキリトやクライン等に敬語を使うのはわかるのだが、年下のユウキやジューンにも使うとなると、ちよつと変なのである。

「じゃ、じゃあ……ジューン……くん、でいいですか?」

「……敬語も禁止」

「え!? で、でもこれはずっとこの話し方できてたから、今更変えられないっていうか……」

「……はあ、ま、まあ……いつか……」

目上のクラインに対してもタメ口で話しているジューンからすれば、年上のシリカから敬語で話されるのは、非常に背中がムズムズする行為だろう。

現実世界でならともかく、ここは仮想世界。ここであらう、もう少し

しフランクに接してきてほしいと、彼は思っていた。

「そ、それじゃあ、行きましょう！ ジュンくん！」

「あ、ああ……、よろしくな、シリカ」

「ハイ！ よろしくお願ひします！」

(……変な娘だな……)

クリスマスが近くなり、本格的に外が冷え込んできているこの真冬。

そんな真冬の季節にちよつとだけ、あくまでちよつとだけだが……、何やら春の予感がしてきたような、そんな気がしてならない。

この甘酸っぱい物語は、まだまだ始まったばかり。この二人の行く先は一体どこになるのだろうか……？

第76話く小さい大冒険く

西暦2026年12月17日(木) 午後13:00 アルヴヘイム
オンライン スヴァルトアールヴヘイム 浮島草原ヴォーグリンデ
上空

スヴァルトアールヴヘイムが実装されて、一番初めに開放されていた浮島エリア、ヴォーグリンデ。

その名の通り、見渡す限りの美しい大草原と大空が広がり、あちらこちらには大きいものから小さいものまで島がプカプカと浮かんでいる。

これを見ているだけでも十分に楽しめるスヴァルトアールヴヘイムだが、ここには地上エリアとは違うクエストや、空を飛ぶモンスターが多めに配置されているなど、明確な差別化が図られている。

中でも、旧アインクラッドで実装されていた装備が手に入るという報告が上げられていることから、ドロップ目的でクエストやダンジョン攻略に走るプレイヤーも少なくなき、実装からかなり経過した今でも色褪せることなく、人気を博している。

「ふふーん、気持ちいいですー！」

「キュルルーン！」

そんなヴォーグリンデの大空で、気持ちよさそうにケットシーの女の子が空中遊泳を楽しんでいる。

現実世界ではリアルタイムで風邪をひいてダウンしているはずのシリカである。その傍らには使い魔であるピナも楽しそうに羽ばたいている。

「……あの子確か、風邪ひいてるんだよね……？」

楽しそうに舞っているシリカの数メートル後方から、今度はサラマNDER族の少年が彼女の後を追うように飛行している。

ユウキが束ねるギルド、スリーピング・ナイトのメンバーの一人、ジユンだ。

「おーいシリカー！ もういい加減クエストやりにいこうぜー！」
両手を後頭部に回し、両足を大股開きにしてジュンがシリカに声を掛ける。

かれこれ十五分間、シリカはただひたすらに大空を舞い続けていたのだ。

特に敵と戦うわけでもなく、クエスト地を目指しているわけでもなく、ただただ飛び続けているという。

「あ……はいー！」

現実世界では風邪で体が火照っている所為もあつてか、大空を舞う中での向かい風が余程気持ちよかったのか、シリカはすっかり上機嫌になっていた。

「全くもう……、クエストに行くんだろ？」

ふわりとホバリングをしながらこちらに向かつてくるシリカに対して呆れた言葉を投げかけると、彼女は「えへへ、そうでしたね」と言葉を返しながら、ジュンの隣に居座る。

ジュンの目の前にはクエスト欄が表示されており、今回受けたクエストの詳細が書き記されていた。

内容はモンスター討伐クエスト。

ここヴォーグリンデの南東の位置にある、草原エリアに沸く狼型モンスターを三十四匹討伐する内容だ。

フィールドエネミーとしてではなく、クエストエネミーとしてポップするため、通常の沸きモンスターと比べても強い個体が多く、舐めてかかると痛い目にあう。

そして二十九体目を討伐し終わると、群れの親玉が出現、これを倒すことでクエストはクリア、目的達成となる。

別にこれといってすごいレアドロップが出るとか、経験値や熟練度をたくさんもらえるという訳ではなく、手頃でサクツとこなせるだろう、との見立てで今回のクエストを受けたのだ。

ジュンとしては、フィールドボスクラスの弩級のモンスターと戦闘をしたかったようだが、何せ初めてコンビを組む相棒だ。

まずはそつと間近で実力がどの程度なのか、というのも自分の目で

見ておきたかった。

しかし、第一線で戦っていなかったとはいえ、シリカは元SAOサバイバー。キリトやアスナ程の戦闘力はないが、VRMMOのプレイヤーとしては並外れた実力を持っている。

反応速度、状況判断力、身体能力と、どれをとっても一般のVRMMOプレイヤーと比べても比較にならない。

試金石にかけるような目で彼女の立ち振る舞いを見ていたジュンにとっては、それはそれはいい意味で期待を裏切られる結果となりそうだった。

「あ、あれじゃないですか？ ジュンくん！」

「あ、ああ……そうみたいだな？」

ALOに存在する妖精の種族の中で、とびきりずば抜けて視力に長けたケットシーであるシリカが、草原の方に向かい指をさす。

そう言われるとジュンは、よく目を凝らしてシリカの言った方角に視線をやると、何やら通常の狼とは一風変わった見た目をしたモンスターが数匹、群れをなして縄張りを主張しているのを確認する。

その見た目は、現実世界の凛々しい狼とは程遠い見てくれで、全身を灰色の毛皮で覆われて、その背中からは鶏のトサカのような、氷柱のような棘が一直線に生えている。

牙も剥き出しになっており、目は真っ赤で、とてもプレイヤーと友好関係を結べそうには見えなかった。

「……可愛くないです、あの子たち……」

「そりゃあ……敵だからな……」

ここまで来る道中、もしも討伐対象がとても可愛い見た目をしていたらどうしよう、自分に手を下すことが出来るのだろうかと懸念していたシリカであったが、あの禍々しい見た目をしている狼を前にすると、それまで抱いていた心配事が一瞬で拭い去られ、腰に備えてあるダガーに手が伸びる。

ジュンも背中から両手剣を引っこ抜き、臨戦態勢を見せる。今日の獲物は前方五十メートル程の位置にいる。

目付きを鋭いものに変えると、ジュンは飛行速度を上げて一気に加

速し、狼との距離を縮めていった。

両手剣は攻撃力が高いのが売りだが、反対に動きが遅いという弱点がある。ソードスキルの硬直も大きく、全体的に隙が大きい武器だ。

しかし、それをふまえてもその破壊力には目を見張るものがあり、時には一撃で相手を仕留めることも可能である。

「行くよシリカ！」

「は……はい！」

ジュンが声を掛けると、シリカもギアを上げて真っ直ぐに狼の群れに突っ込んでいく。

すると狼の視認範囲に入ったのか、モンスターがアクティブ状態になり、二人を敵と認識し、威嚇のポーズを取り始めた。

『UGAAAAAA』

おぞましい唸り声をあげながら、群れの中の一匹が、降下してきたジュン目掛けて牙と前足の爪を鋭く光らせて襲いかかる。

しかし、ジュンはひるまない。その目は真っ直ぐに狼を、いや、狼の軌道と間合いを見ており、それに合わせて両手に握る剣の角度を変えらる。

一瞬の出来事だった。

ただ、すれ違っただけで、狼の体は頭から真っ二つに斬り裂かれていたのである。

斬り裂かれた狼は細い断末魔をあげながら、二つに別れた体を光り輝かせ、爆散していった。

「す……す……す……い、です……」

全身ずっしりとした真っ赤な重鎧を身に纏い、そして自身の身の丈はあろうかという長剣を

軽々と扱っている。

普通、ここまで重量が重なるとスピーディな動きは到底できるものではない。

だがジューンは装備全体の総重量がかなりのものであるのにも関わらず、キリトやユウキ程ではないが、素早い身のこなしを見せている。とてもタンククラスのプレイヤーが見せるような身のこなしではない。

だからといって移動速度が上がるようなバフアイテムを装備しているわけとかでもない。

あくまでもこれは彼のVRMMOのプレイ経験からくる、直感と感覚からきているものだ。

「次、くるぞー！」

「え……？ あ、は……はい！」

一匹目を葬ったやいなや、すぐに次々へと狼が二人目掛けて襲い掛かってくる。

狼の群れは視界に写っているだけでも十匹は確認出来る。こちらは熟練のプレイヤーが二人いるとはいえ、数では圧倒的に不利だ。

しかし、ジューンは怯むことなく再び剣を構えて群れに向かって地面を蹴る。

そんな彼の正面には、横一列に三匹、狼がグループを作り襲いかかろうと群がってきている。

「はあぁッー！」

すると、ジューンは気合いの入った雄叫びと共に、腰を深く落とし、剣を右に構えてモーションを起こし、自分の周りの敵を薙ぎ払う範囲系両手剣ソードスキル『サイクロン』を発動させた。

彼の持つ剣の刃が白く光り輝き、地面に対して水平に、三百六十度剣が薙ぎ払われる。

刀身からは金色に輝く鋭利な衝撃波が放たれ、ジューンの周りを取り囲む狼が次々にその餌食になっていく。

このソードスキルだけで、四、五匹は倒しただろうか。最初にポツプツしていた数の半分ほどを片付けたようだ。

しかし、すぐさま次々に新しい群れがポップし、彼らを敵と視認して襲いかかろうとしてくる。

ソードスキルを使ったジューンは硬直で動けなくなっており、無防備

になっていた。

両手で剣を握っているため、キリトやユウキがやってみせているようなスキル・コネクトも使えないため、この時ばかりは隙を晒すはめになってしまっている。

「ちよつと甘く見たか……!」

「まだですよ!」

狼がジユンに飛びかかろうとした刹那、突如として間に割って入る者の姿があった。今日組んだコンビ相手、シリカだ。

シリカは彼を庇うように着地すると、すぐさまダガーを握っている手を後方に構え、モーシヨンを起こすと素早い身のこなしで、右、左へとジグザグにステップを踏みながら、前方の狼を斬り刻んでいた。

しかし流石にジユンの両手剣ほどの火力は出ないため、狼に致命傷を与えるまでとは程遠かった。

ダガーがダメージを稼ぐためには、何よりも手数がある。その為の身軽さ、その為の硬直の少なさがウリとなっているのだ。

だが、シリカはたった一撃、斬撃を入れただけで攻撃の手をやめてしまった。まだ狼のHPはグリーンゾーンを維持しているというのに。

「ジユンくん! 今です!」

「あ……、ああ!」

シリカに斬られて反撃を試みようとしていた狼郡であったが、それは叶わなかった。

何故ならば、彼女のソードスキルを受けた狼は全て、状態異常：麻痺毒となっていたからだ。

この時、シリカが放ったソードスキルは『パライズ・バイト』という、一定確率で相手を麻痺毒状態に陥れる効果のあるものだった。

そう、手数を稼がなくても、こうしてアタックチャンスを得ることは十分に出来るのだ。

他の武器ほどリーチはなく、攻撃力も低いですが、それをカバーするための強みが、ダガーにはあったのだ。いや、ダガーの手数があるから

こそ、その強みが発揮されたといってもいいだろう。

ジユンはシリカが作ってくれたチャンスが無駄にしないために、ソードスキルの硬直が解けるや否や、麻痺毒で動けない狼を、今度は通常攻撃で次々に屠っていく。

いつもは自分の防御力を活かしたゴリ押し戦法でことを運んでいたジユンであったが、ここにきてパートナーの大切さを思い知る。

スリーピング・ナイツは一人一人が一騎当千の実力者揃い。気が付けば誰かが敵を倒している。自分のその一人だ。

本能のまま、感覚のまま、経験のまま武器を振るい体を動かしている。

そしてHPがある程度減ればシウネーが回復してくれる。シンプルながらもゴリ押し気味の戦法で、これまでも戦ってこれた。

しかし、スヴァルトアールヴ Heim 実装時に、スリーピング・ナイツを手伝ってくれたキリトやアスナと触れ合ったおかげで、新たな風が吹いた。

他愛のないやりとりもそうだが、戦闘でのイロハもそうだった。各々の強みを活かした連携、作戦など、これまでにない体験だった。

今回のことだってそうだ、いつものゴリ押しではなく、ジユンはジユンで、シリカはシリカでそれぞれ得意な一手がある。

それらは組み合わせるだけで、可能性がぐんと広がっていく。たかが二人だけだと甘く見ることなかれ、連携次第では、新生アインクラッドの迷宮区を突破できることもあるのだから。

『SHAGGAAA』

ジユンの斬撃を浴びた狼は次々にHPを全損させ、青白く光り、ポリゴン片となって爆散していく。

欠員を即補充するかの如く、次々に新しい狼がポップしては、彼らに襲いかかる。

しかしそれを見越してか、シリカは既に次の手を考えていた。

「ピナー！ バブルブレスー！」

「キュアッ！」

シリカの指示と共に、ピナが可愛らしい鳴き声を響かせながら、状

態異常：睡眠の効果がある泡状のブレスを狼の群れに放つ。

泡は勢いよく発射され、真っ直ぐに狼群目掛けて飛翔していった。そして狼の目の前で弾けると、真っ赤な目が光る凶暴な顔が、とろんとしただらしない顔つきになっていき、やがてはすっかりと眠りかけてしまった。

たちまち、彼らがいる狩場は風の音と獣のいびきしか聞こえなくなっていた。個体差はあるが、静かに寝息を立てているやつもいれば、グゴゴとやかましいやつまでいる。

「さ、ジュンくん、やつつけちゃいましょう！」

ノリノリで、勢いよく狼群へと突撃していくシリカを尻目に、ジュンはすっかり関心しきっていた。

彼女と同じケットシー族であるアルゴやシノン、はたまたケットシー領主であるアリシャ・ルーよりも自在に使い魔を操り、匠に戦場を駆け回るその姿は、脱帽の一言でしかなかった。

「あ、ああ……しかしすごいよシリカ！ こんな戦い方があったなんて……」

「えへへ、私だっていつもお荷物ってわけじゃありませんからね！」

互いにアイコンタクトを取り、笑顔を交差させると二人は真っ直ぐに残った狼群を仕留めるべく、地面を蹴った。

無抵抗な相手を一方的に攻撃するのは少しだけ気が引けたが、これも作戦、悪く思わないでくれと、プログラムで動いている狼を次々に斬り捨てていく。

そして、二十九匹目にあたる狼が爆散したのを確認すると、一旦敵の沸きがストップした。

「……ふう、雑魚はこれで全部……かな」

周囲の様子を伺いながら、ジュンが手持ちの両手剣の刀身を自身の肩に乗せる。クエストの手順的に、この後はこの群れの親玉がポップすることになっている。

しかし、いくら待ってもそれがポップする様子は見受けられない。

キリトと違って索敵スキルを上げてない二人は、あくまでも目で周

罠を警戒し、最後のターゲットを探している。

するとシリカの真横で羽ばたいているピナが、突然真上に向かってキュルンキュルンと鳴きだした。

「……ピナ？」

ピナの様子がいつもと違うことに気付き、シリカも気になってその方向を見上げる。

何だと思い、ジュンも同じ方向に目をやる。

するとその刹那、彼らが立っているエリアが影で覆われた。

「シリカ！ 危ない！」

「わ……きやあ?！」

考えるよりも早く、ジュンの身体が反応していた。右手を剣から離し、空いた手でシリカを抱き抱えたとそのまま思い切り地面を蹴つて、全力で前方へとステップした。

その場から一気に十メートルは跳んだかといったところで、背後から『ズシン』という物凄い音が鳴り響く。

飛んだ勢いそのままに、ジュンはシリカを抱き抱えたまま、思い切り土煙を舞上げながら地面を転がっていった。

「つつ……、シリカ、大丈夫……?！」

先に起き上がったジュンが、彼女の身体を心配する。幸い二人ともそれほどダメージは受けていないようだ。

ジュンは剣を杖にしてすっと起き上がり、上空から何が降ってきたのかを見て確認する。

「な……、なんだよこいつは……」

ヒヤリとした汗が、一滴ジュンの頬から滴り落ちた。そう、彼の目の前には常軌を逸した程の大きさを誇った、狼型の巨大モンスターが佇んでいたからだ。

先程まで狩っていた雑魚モンスター比べても遥かに大きく、頭から尻尾まで全長十メートルはあろうかというくらいの大きさだ。

「シリカ立てる? 一旦距離を置いて……」

ジュンが声を掛けるも、シリカの反応はない。

おかしいと思っただけ彼女の顔を覗き込んでみると、何やら先程とは様

子が違うようだった。

「シリカ……？」

「え……？ あ、ご、ごめんなさい」

二階声を掛けられて、漸くシリカが反応を見せる。その顔はどこか赤らんでいて、少しだけ目の焦点が合っていないような印象を受けた。

シリカはジュンの肩を借りてゆっくり立ち上がり、自身の服をパッと手で払い、目の前の敵を確認する。

「お、大きいです……」

「こいつが親玉だよ、気合入れていくぞ！」

これまでの雑魚とは強さもタフさも違う。再度気合を入れ直して自分の獲物をターゲットに向け、構え直す。

その際に、剣の刀身が光を反射し、ギラリと光る。既にあちらさんは臨戦態勢だ。

歯をむき出しにして、恐ろしい唸り声をあげながら、こちらを激しく威嚇している。

「こんなでかい狼なんて、ALOにいたか……？」

「……キリトさんが言っていました。ALOの管理に使われているカーディナル・システムには、無限にクエストを作り続ける機能があるとか……」

シリカの言う通り、ALOの運営エンジンにはSAOと同様、カーディナル・システムが採用されている。

と言うよりも、元々ALOはSAOサーバーのコピーであるため、ほとんど類似する点が多いのだ。

そのおかげもあってか、新生アインクラッドやソードスキルの実装にさほどトラブルらしいトラブルは見られなかった。

これも、カーディナル・システムという全ての事象に対して柔軟に対応、適応していくといったシステムの特徴が活かされているためだ。

そして、このカーディナルの特性の一つに『クエストを無限に生成する』といったものがある。

元来、MMOのクエストというものは運営スタッフが発案し、バランス調整して実装するのがほとんどだ。

しかし、SAOやALOは、それらの全てをカーディナルに一任している。

コスト削減や、ユーザーを飽きさせないためなど様々な憶測が飛び交うが、このお陰でプレイヤーは毎日違う内容のクエストに挑み、このALOの世界を満喫出来ているというわけだ。

今回、ジュンたちが受けているクエストも今までリストになく、今日新しく生成されたばかりのクエストだった。

もちろん、それに合わせてエネミーモンスターも新しく生成されていくのも珍しいことではない。

むしろ、旧SAOサーバーのデータをコピーしているあたり、これからまだまだ初見のモンスターの出現は見受けられることだろう。

「……なるほどね、よくわからないけど、毎日違った冒険が出来るってことなんだね」

「はい、そういうことです！」

シリカも彼と同じように、利き手に持っているダガーの柄を握り直し、臨戦態勢をとる。

それと同時に狼も二人目掛けて前足の爪を光らせて、飛びかかった。

その攻撃を見てからシリカ達は左右それぞれにステップし、はじめの攻撃を避ける。

二人が先程までいた場所の地面が『ズゴツ』という音とともに土煙が舞い上がり、袈裟懸け上に大きく抉られていた。その跡が、このモンスターの攻撃力の高さを物語っている。

「い、一発でももらったらヤバそうだぞ……」

「わ、私……あんなのに耐えられるんでしょうか……」

初撃を外した親分狼は、首から先をぎよっと動かし、紅く不気味に煌めく瞳をこちらに向ける。

正に血に飢えた獣といったイメージがピッタリのモンスターだ。

「当たらなければいいんだよ！ 怯むなよ、シリカ！」

「は、はい！ 頑張ります！」

同日 午後13:30 スヴァルトアールヴ Heim 浮島草原
ヴォークリンデ 南東の草原

「……さて、どうするかね……」

「うう、この狼さん……強いです……」

巨大狼との戦闘はあれから二十分ほど続いていた。敵は巨大ながらも、四足動物さながらの素早さでふたりを翻弄しながら立ち回っていた。

攻撃方法は全身を横回転させるスピン攻撃、一気に距離を詰めての飛びかかり攻撃、両前足を振りかぶつての爪攻撃など、隙が多いものばかりだったのだが、ジュンたちは思うようにダメージを与えることが出来ず、攻めあぐねていた。

三本あるうちの敵のHPバーが二本になった途端に、巨大狼の毛皮が硬質化し、外側からの攻撃では、中々決定的なダメージとまで至らなかったのだ。

ジュンの両手剣による火力も、硬質化した毛皮の前では、いくら武器を奮っても弾かれるばかりなのであった。

更にはシリカやピナによる状態異常攻撃も通らずに、八方塞がりとなってしまうた。

「オレの剣も弾かれるなんて、固すぎるよ……」

「でも、絶対に倒せます！ 必ずどこかに弱点があるはずですよ！」

「そ、そうは言ってもさ……」

必ずどこかに弱点がある、そう言われてボスの全身をくまなく観察する。

全身の外側を覆う尖った毛皮には、まるで研ぎ澄まされた黒曜石の剣のように鋭く硬く、何者の攻撃を受け付けない鎧であると同時に、相手を仕留めるための武器であるかのような印象を受ける。

しかし、よくよく観察を続けていると、数ヶ所だけ、毛皮に覆われていない部分があるのが確認出来た。

「頭と、腹だけは……無防備っぽく見えるね？」

「そ、そうみたいですけど……、これじゃあ中々内側になんか入れませんよ……」

「……そこだよな、さてと、どうしようか……」

こいつに今まで通りのゴリ押しは通用しない。異常なまでの硬さと攻撃力の高さ、そして野生動物さながらの素早さ。

正面からやりあうにはかなり面倒な相手だ。どうにかして、相手の隙を晒させるような作戦を展開しなくては勝ち目は薄い。

奴の気を引いて、その間に弱点を攻撃して一気に攻める。シンプルだがこの陽動作戦が効果的そうだ。

だが問題は誰がその役を買ってでるか、ということだ。ステータスや種族から、誰が適役かというと、素早い身のこなしが出来るケツトシー族のシリカだ。

更には使い魔のピナもいるため、細かい箇所へのフォローも任せられるだろう。

だがしかし、ジュンはここに少し抵抗を感じていた。

男の子である自分が女の子を囮にしているのだろうか？

否、出来るはずがない。そんなカッコ悪いこと、許されるはずがない。

神が許しても、この自分の男としてのプライドが、断じて許さない。許せるはずがない。

ならばどうするか？ 考えるまでもない。自分が囮になって、シリカに攻撃してもらう。よし、それでいこう。

「シリカ、いい？ ちょっと聞いてもらえるかな？」

「は……はい、何でしょうか？」

巨大狼への警戒を続けながらも、ジュンは今頭の中で考えた作戦を口頭でシリカに説明する。

作戦はこうだ。

まず、ジュンが挑発スキル『バトル・シャウト』で狼の注意を引く。

それと同時にシリカがA G I上昇のバフ魔法『クイック』でサポート。上昇したスピードを活かし、敵の弱点を晒させるために上空に飛翔。ジュンをターゲットイングしている狼は、当然彼を狙うためにその首を上に向ける。

そこへすかさずシリカが懐に飛び込み、ダメージを狙う。状態異常も引き起こさざれば設けもん、といった具合だ。

「え……でも、私の方が素早く動けますし、私が囮役になった方がいいんじゃない？……？」

当然浮かぶ疑問。自分の長所は自分が一番理解している。しかし、ジュンは首を縦には振らなかった。

「オレに、女の子を囮に使えって言うの？」

「……え？」

「オレにはそんなこと、カッコ悪くて出来ないよ」

「え……で、でも……」

「……」

シリカからの返答を待たずして、ジュンは左手を前方に構えて、魔法詠唱の準備を始める。

目の前にスペルワードが浮かび上がり、これの通りに唱えれば、魔法が発動する。

「オレはさ、確かに現実世界じゃ何も出来ない弱虫だよ？ でもさ、仮想世界の中でくらい、強い自分でありたいんだ」

「……そんなことないですよ……」

「ましてや、女の子の前でカッコ悪い真似なんて出来ない。悪いけど、オレにも譲れないものがあるんだ」

そう言い放つと、ジュンは目を閉じて、挑発魔法の詠唱を始めた。一つずつワードを唱えていくと、目の前に浮かび上がった字体が光り輝いていく。

その様子をシリカは心配そうな表情を浮かべながら、見つめていた。この状況は、以前にも似たような経験があった。

そう、旧アインクラッドで、初めてキリトと出会った時だ。あの時、モンスターにやられそうになっていた所を、間一髪キリトに救われ

た。

そして死んでしまったピナを蘇生するために、第五十層の思い出の丘まで同行してもらい、蘇生アイテムを手に入れられた。

しかし、それで終わりではなかった。オレンジギルドに後をつけられ、再び窮地に追いやられた。

その窮地を救ってくれたのも、他でもないキリトだった。彼のおかげで犯罪者プレイヤーは全員監獄行きとなり、無事にピナも生き返ることが出来た。

後々、第七十六層に到達した後は必死にレベリングに精を出し、第一線で戦えるようになるまでになった。

もう、守られっぱなしは嫌なのだ。私だって戦える。足を引っ張ったりなんかしない。

そして、決してもう犠牲は出させない。

「……ッ」

ジュンとアイコンタクトを交わしたシリカは彼の意図を汲み、作戦通りに魔法の詠唱を開始した。

同じようにスペルワードが浮かび上がり、一つ一つ唱えていくと同時に字体が光る。

「はあっ!!」

先に詠唱を終えたジュンの頭上が、太陽かと思うくらいに眩い光を周囲に放った。この光には攻撃判定が設定されており、モンスターのヘイト値を一気に集める特性がある。

それと同時に、巨大狼の目線がジュンに真っ直ぐ向けられ、鋭い眼光を飛ばしていた。

「シリカ……頼んだよー!」

狼が飛びかかるよりも前に、ジュンは思い切り地面を蹴り、翅を広げて高く飛び上がる。

当然、狼はジュンを狙うために首から上を動かして彼を凝視する。

すると全身を覆う灰色の硬い毛皮とは裏腹に、顎から喉元、そして首から腹部にあたる部分までは真っ白な毛皮に覆われているのが確認できた。

恐らく、ここが奴の弱点、肉質が柔らかく設定されている所なのだろう。

「任せてください、ジュンくん！」

詠唱が終わったシリカは、目を見開き、腰を落として下半身に力を込める。瞬時に前方へとステップを重ね、敵との距離を縮める。

バフ魔法のおかげで身軽になったジュンは、狼を翻弄するように飛行を続ける。

そして、タゲがシリカに向かないように、詠唱時間の短い火球魔法『ファイアーボール』を小まめに放ちながら、ヘイト値を調整していく。

「シリカツ！ いけえッ！」

「はあああッ!!」

ジュンの雄叫びと同時に、シリカも激しい叫び声をあげた。突進しながらもモーシオンを起こし、ソードスキルを発動させる。

彼女の握っているダガーが光り輝くと同時に、切っ先が狼の首元から腹部に渡って斬り刻まれていく。

八連撃ダガーソードスキル『アクセル・レイド』、今シリカが使える中で最高のダガー系ソードスキルだ。

硬化化した毛皮の防御力が途方もないくらい高かったためか、内側の守りはそれほどもなく、シリカのソードスキルで二本目のHPバーは一気に減少し、最後の一本を残すまでになった。

「よ……よし、いざシリカ！ ようしオレも……！」

シリカがソードスキルを決めると、狼が禍々しい悲鳴を辺りに轟かせた。

それと同時にジュンが一気に下降し、両手剣を構え直し、ソードスキルでトドメを刺そうと狙いを定める。

しかしジュンはこの時、忘れてしまっていた。ボス級のモンスターの残りHPバーが変化した時、パターンが変わる可能性があることを。

ボス戦で一番注意しなくてはいけない瞬間が、今この時だということ。

「ジユンくんまだダメ！ 一旦離れてまた様子を見てから——」

SAOで命懸けの戦いを強いられていたシリカは、ボス戦の鉄則というものをよく理解していた。

決して闇雲に攻め入らない、パターンをよく見極めてから、こちらの攻撃に移るものだと。

総攻撃を仕掛けるのは相手のHPがレッドに突入して、一気に勝負を決める時だけだ。

かつて、その鉄則を破って、目の前で爆散したプレイヤーを見たこともある。キリトさんたちはこんな世界で戦っているんだと、非情な現実を突きつけられたこともあった。

だからこそ、教えて貰った知識は、身についた経験は嘘をつかない。それはALOになっても変わらない。

命を張る必要はなくなったわけだが、染み付いた癖は抜けることはなく、自然とSAOの時と同様の対処方法を守っていた。

確かにスリーピング・ナイツのメンバーのプレイヤースキルはかなり高い。

しかし、それはあくまでもVRMMOプレイヤーとしてのスキルに過ぎない。

だからゴリ押しなんて無茶が出来るし、敵にやられてもさほど気にはしていなかった。

また次頑張ればいい、次はきつと成功する。その程度にしか考えていなかった。

しかし、SAOサバイバーの面々は違った。全員無意識ではあるが、出来るだけ仲間がやられないようにして立ち回っていた。

その中でも特に仲間の死に気を使っているのがキリトだった。絶対に仲間を死なせないというそのポリシーはALOでも変わらない。

だからこそ、あのときユウキを必死に守り通したのだ。シリカも目の前でピナやプレイヤーが死んでしまったこともあり、ゲーム内での命だからといって軽く見てはいなかった。

もちろんALOはSAOではないので、実際に死ぬ訳では無いので、そこまで神経質になる必要はないのだが、シリカからサバイバーに

とってはそういう問題ではなかったようだ。

『UGAAAAAA』

おぞましい雄叫びを響かせて、狼が形状を変えていく。HPバーが一本になったことによって、パターンが変わったようだ。

そして、この雄叫びには攻撃判定があつたようで、狼の頭めがけて下降してきたジュンは、これをまともに食らつてしまい、自身のHPを半分ほど失いながら、後方に勢いよく吹っ飛ばされてしまった。

「ジュンくんッ!!」

吹き飛ばされたジュンは持っていた武器ごと地面に投げ出され、土煙を舞いあげながら地面を転がっていった。

シリカは翅を広げ、吹き飛ばされた彼を追いかける。

女の子の前でカツコ悪い真似なんて出来ないといった、ちよつとした下心が、今回のことを招いてしまった。

「ジュンくんしっかりー!」

仰向けにぐったり倒れている彼の元へ辿り着くと、シリカは背中に手を回して彼を抱き起こし、介抱する。

上体を支えてもらっているジュンは起き上がると「いつつ……」と言葉を漏らしながら、右手で頭を抑えている。

彼の視界は、何やらもやがかかっているかのようによやけており、アバターも上手く動かすことが出来ないようだった。

どうやら先程の狼の咆哮は、ダメージの他に特殊効果が乗る攻撃だったようだ。

「状態異常……気絶か……、くそ、やられたぜ……」

「す、気絶……」

気絶、動きを止められる状態異常の中では終焉の呪いの次に厄介なデバフとなっている。

熱毒や麻痺毒、ステータス低下などはアイテムでの治療が可能なのだが、今回の気絶に至っては回復手段がなく、装備で耐性をつけるか、持続時間を減らすくらいしか、対策がないのだ。

一回あたりの持続時間がやや長めだということもあり、最前線での状態異常にかかってしまうと、かなり危険に身を晒してしまうこと

になる。

「ご、ごめんよシリカ、ちよつと油断しちゃった……」

「……………ッ」

彼を支えながら、シリカは先程までいた方向に目をやる。狼は先の見えた目からまた大きく変化しており、硬質化していた毛皮が、さらに鋭さを増し、長い形状へと変わっていった。

ただし、頭から喉元、首から腹部の変化は見受けられなく、弱点がここだということは、変わっていないようだった。

しかし、そこは今問題ではない。

動けない彼を庇ったまま戦えるだろうか？ 自分の武器はダガー、そしてA G I型のサポートビルド。

とてもじゃないがパーティの壁を担う、タンクの役割は出来そうもない。

出来ることと云ったら、素早さを活かした陽動作戦だ。彼がデバフから回復するまでの間、ヘイトを買ってひたすらに逃げ回る。

ケツトシー族であるシリカなら可能なことだが、それは永遠には続かない。

A L OにはS P、すなわちスタミナという概念があり、このパラメーターは行動によって値が減っていく。

高速移動、ガード、強めの通常攻撃、ステップ等など、スタミナを使う行動は多い。

しかし、回復速度もまた早いいため、普段小まめに使う程度なら問題はないのだが、特定の行動を続けて、一気に消費してしまうと、逆にピンチとなる。

全てのスタミナを使い果たしてしまうと、S Pは最大値まで高速回復するのだが、それまでの間『疲労状態』となってしまう、これまた大きな隙を晒すはめになってしまう。

(でも……私が、私がやるしかないんだ……ッ)

自分が動かなければ彼はやられてしまう。せつかく二人で挑んだクエストだ、絶対に成功させたい。

楽しい思い出の一つにしたい。初めてのペアでのクエストが失敗

なんてことは、絶対に嫌だ。

何より、目の前で誰かがやられる所なんて、もう絶対に見たくない。

「……ジュンくんは、少し休んでください。私が時間を稼ぎます!」

「え……、む、無茶だよ!」

「無茶でもなんでも、そうしないとやられてしまいます! 私は、ジュンくんがやられる所、見たくないです……ッ」

そう言うと、シリカはそつと彼を寝かせて立ち上がり、狼の方へと向き直し、右手に武器を構えて臨戦態勢をとった。

狼は咆哮アクシオンを終えると、すぐさまシリカを視認し、こちらに向かい進撃を開始した。

「ピナ! ジュンくんをお願いします!」

「キュルン!」

「……し、シリカ……」

ああ、自分が情けない。ちよつといい所を見せようと思った結果が、このザマだ。

敵のパターンが変わることなんて、これまで何回も経験したことじゃないか。それを忘れてしまうなんて、どれだけ慢心していたのだろう。

ジュンは悔しさを胸に、拳に力を入れ、眉間にシワを寄せた。

「ジュンくんは……私が守ります!」

もう、あの時の自分じゃない。

キリトさんや、アスナさんがいなくても、自分は戦える。誰かを守るだけの存在になれる。

いや、ならなきやいけない。例えばここがSAOじゃなくても、自分の大切なものは守らないといけない。

あれ……、大切なもの……?

大切なものって、一体……なに……?

「し……シリカッ!」

「え……? あ……ッ」

一瞬、僅かに一瞬、別のことを考えてしまったシリカの目の前にまで、狼が迫っていた。

最終形態になった狼の素早さは、想像以上のものだった。

追い詰められた狐はジャツカルより凶暴、しかし、そのジャツカルが追い詰められると、さらに凶暴となり、襲い掛かる。

「……ううッ！」

今から回避は間に合わない。狼は既に前足を振り上げ、鋭い爪で攻撃を繰り出そうとしている。

さらには避けた所で、今度は自分の真後ろにいるジユンが直撃をもらってしまふ。

そんなことは絶対にしたくない。彼を、彼を守らないといけない。そう思ったシリカは決して刀身が長くないダガーを目の前に掲げ、防御の体勢をとった。

両手武器である斧やハンマー、両手剣ならいざ知らず、この小さなダガーでの防御行動は自殺行為に等しい。

ダメーじ軽減も僅かなものにしかならず、攻撃の直撃をもらうも当然。下手をすると持っている武器が砕けてしまふかもしれない、非常にハイリスクな行動だ。

でも、だからといって、逃げたりはしない。あの時のことを思い出せ、ピナが自分を庇って死んでしまった時のことを。

もう、あんなことはごめんだ。自分だって誰かを守る。いや、守らなきゃいけない！

(怖い……怖いけど、私が守らないと……ッ！)

振り上げられた前足が、シリカ目掛けて振り下ろされる。赤黒く、禍々しい色をした爪が不気味に光りながら、シリカへと向けられる。

「……ッ」

瀕死を覚悟した。武器を失くしてしまうかもしれないと思った。全身に力を込めながら、くるであろう衝撃に対して備える。

しかし、いくら時間が経過しても、それらしい感覚は襲ってこなかった。

『ズゴオン』という物凄い衝撃音が鳴り響いていた。それは敵が自

分を攻撃した際の音だと思った。

しかし、それはそうではなかった。恐る恐る目を開けると、目の前には土煙とともに倒れている狼、そして、どこかで見覚えのあるケツトシー族のプレイヤーが立っていた。

「ヤア、シリカ。久しぶりだな♪」

「あ、あなたは……アルゴさん!?!」

第77話く男の意地く

西暦2026年12月17日(木) 午後13:45 アルヴヘイム
オンライン スヴァルトアールヴヘイム 浮島草原ヴォーグリンデ

「あ……アルゴさん！」

激しい衝撃音、そして土煙と共に突如戦場に現れたプレイヤーは、シリカのよく知る人物、同じケットシー族のアルゴであった。

巨大狼に何が起こったのかはもう言うまでもない。

アルゴの得意とする武器、ナツクルによる一撃が、見事狼の脳天に決まっていたのだ。

ALLOによる打撃武器であるハンマーやナツクルは、相手の頭の部位に当たると、状態異常：気絶スタンを誘発させることが出来る。

アルゴの渾身の一撃により、ナツクルは狼のドタマにクリーンヒット。

まるでテレビで放送している特撮ヒーローかのように、シリカ達のピンチを救ったのだ。

「のんびり話してる余裕はないゾ、今のうちにソイツを回復してやるんだ！」

彼女とは一年ぶりの再会だ。しかしその感動に浸っている余裕はなさそうだ。

時間が経てば狼も状態異常から立ち直る。そうならば再び苦戦を強いられるのは必至。

そうなる前に態勢を立て直し、決着をつけなくては。

「あ……はい！」

アルゴから指示を受けると、シリカはすぐさまジュンに駆け寄り、彼の背中に手を回し、介抱する。

そしてピナに状態異常回復スキル『キュアブレス』の指示を送る。するとピナの口から水色キラキラ光る霧状のブレスが吐き出さ

れ、ジュンの体の周りを優しく包み込む。

すると先程までに彼にまとわりついていた状態異常のアイコンとエフェクトが、キレイさっぱり消えてなくなった。

それと同時にジュンの視界もクリアになり、アバターを動かす力も戻ってきた。

剣を杖にして立ち上がると、口元を左手で拭い、視線をシリカ、ピナ、アルゴの順に向ける。

「あ、ありがとう……」

窮地を救ってくれたアルゴに、そして状態異常を治療してくれたシリカとピナに感謝の気持ちを伝える。

二人は簡単な笑顔で返事を返すと、視線を再び視線を狼に向ける。

「ホラー！ ぼさつとしてる余裕はないゾ！ ジュン坊！」

「ジュ、ジュン坊って……」

体制を整えたのも束の間、アルゴが櫂を飛ばす。

狼はあくまでも一時的に気絶スタンに陥ったというだけであって、倒した訳ではない。

そして、状態異常の持続時間はモンスターによってバラツキがある。

元々効果がない敵や、ほんの数秒しか効かない場合もある。

新たにカーディナル・システムから生み出されたこの狼の状態異常持続時間が、どれほどのものかはわからないが、仕留めるチャンスは今しかないと言ってもいいだろう。

「急げ！ もう目覚めるゾ！」

アルゴが叫ぶと、狼は体を震わせながらムクリと起き上がった。

そして自分を傷付けた目の前の妖精達に、鋭い眼光を差し向ける。

「ちえ、思ったよりも早かったナ……」

状態異常が解除されると、狼は敵意を剥き出しにしながら、唸り声を上げる。

眉間にしわを寄せ、恨みと憎しみを込めて、今にも再び襲いかかってきそうな迫力だ。

「……とは言ったものの、ここからどうしましょうか……」

ダガーを構えて臨戦態勢を整えながら、シリカが相談を持ちかける。

未だ膠着状態が続いていることに変わりはない。

アルゴが新たに戦力として加わったとしても、シリカと同様サポート型ビルドである彼女では、決定力は得られないだろう。

ここはやはり、何とかして両手剣使いであるジュンの高火力による一撃をお見舞したいところだ。

「流石にオレっちの腕っ節じゃあアイツを仕留めるのは難しいナ……」

STRよりAGIにステ振りをしているアルゴでは、狼にこれ以上まとまったダメージを与えるのは困難を極めそうだった。

先程の一撃はあくまでも不意を突いたからこそ出来た芸当だ。

既に敵として認識されてしまっている今では、あの様なチャンスは訪れることはないだろう。

『G A A A A A A A!!』

空気が震えるほどの雄叫びか、三度ヴオーグリンデみたびに響き渡る。

あちらさんは、どうやらあまり考える猶予を与えてはくれなさそうだ。

「来るゾー！」

アルゴがジュンとシリカに警戒を促すと、狼は自慢の牙と爪を光らせて、三人に襲い掛かる。

アルゴは左に、シリカは右に、ジュンは後方に地面を蹴ってステツプし、いきり立つ狼の爪攻撃を回避する。

『G A O O O O!!』

繰り返された右足による攻撃は『ゴスン』という大きな音とともに地面を抉った。

それと同時に、今度は左足からの攻撃が、狼から見て正面にいるジュン目掛けて振るわれる。

「なっ……」

「さ、さっきとパターンが違います!？」

先程までは地面に爪を立てる時、僅かに隙を晒していた狼であった

が、今度の攻撃はその隙すらも見せなかった。

よくよく見てみると、狼のHPバーは最後の一本のレッドゾーンまで突入している。

この為に、また攻撃パターンが変化したというわけだ。

攻撃頻度は激しさを増し、狼自身の動きの機敏さもより上がっていた。

もはやここまで早いと、ただのAGI型特化ビルドというだけでは、太刀打ち出来そうにないアクティブさだ。

キリトやユウキといった、並外れた反応速度と戦闘経験を積んだプレイヤーでなければ対峙できないだろう。

ステップの動作の最中であるジュンに、狼の爪が襲い掛かる。

このままの回避は不可能と判断したジュンは、咄嗟に右手に握っている両手剣を構え、防御の姿勢を取る。

「ぐうッ!」

「ジュン君ッ!」

狼の左爪による攻撃は『ガキイン』という激しい金属音を轟かせ、ジュンの両手剣に防がれていた。

辛うじて防御に成功したジュンは、右手で剣の柄を握り、左手を刀身に当て、片膝立ちの状態で狼の攻撃に耐えていた。

重鎧を身にまとい、重い両手剣を振り回すパワー型ビルドであるジュンは、こうした坦克の役割も兼任出来る。

しかし本職の坦克ではないため、盾を使っていないせいもあってか、そのHPはゴリゴリと削られていった。

「ジュン君、今加勢します!」

シリカがこのままにしておけないと、ダガーを握りしめて一歩、脚を踏み出す。

「シリカ! 来ないで!」

「え……!?!」

あろうことか、ジュンはシリカの助太刀を拒否した。彼のHPはまだ十分に回復しきっていない。

外側からであっても、ピナのヒールブレス等で援護も出来るのだ

が、ジyunはそれすらも拒否してしまつたのだ。

「ど、どうしてですか！ このままじゃやられちゃいます！」

「そうだゾ！ 変な意地張つてないで、全員で連携して戦うんだ！」

二人の心配をよそに、頑なにジyunは態度を改めようとはしなかつた。

今の彼を突き動かしているものは、なんてことのないものだ。

男の意地。

ただそれだけだ。

男は決して、引いてはいけないことがある。譲つてはならないものがある。

ただの強情っ張りだとか、頑固だとか、そういう風を感じ取られることもあるだろう。

しかし、それでも男には一歩も引けない、妥協してはならない場面があるのだ。

ジyunにとっては、今のこの状況がそれなのだ。

自分の慢心が原因でパートナーに負担を掛けてしまい、カッコ悪い所を晒したばかりか、危機一髪な所を助けてもらった。

男としてこれ以上情けないことは無い。

「イヤだ……オレ一人でやる！」

「じ、ジyunくん……」

「……………」

必死で狼の攻撃を防いでいるジyunをシリカは心配そうに、アルゴは呆れた顔で見つめていた。

しかし、二人は決してその気持ちを無下にするようなことはしない。

何となく、彼の気持ちが、男の子のプライドというものがわかつていたからだ。

傍から見たら、それはとてもちっぽけで下らないものなのかもしれない。

しかし、そんなちっぽけなものが、時には絶対に譲れないものになる。

「……シリカ、ここはアイツに任せるゾ」

「あ、アルゴさん……」

腕を頭の後ろで組ませながら、アルゴは淡々と話を続ける。

「ジュン坊は今、プライドと戦ってるのサ」

「ぶ、プライド……ですか？」

「……アア、ちっぽけでつまらないプライド……サ」

口では悪態を吐きながらも、どこか微笑ましく、アルゴは語り続ける。

かつてSAOで、大切な人のためにがむしやらにモンスターを倒し続けたとある黒い剣士のことを、間近で見えてきたことがあったからだ。

「……少し似てるナ、アイツに……」

そんな彼女には、今のジュンの姿がかつて自分がSAOで見っていた彼と、どことなく重なって見えていたのだ。

だからジュンの気持ちを、アルゴはなんとなく察していた。

「でも、本気でヤバくなったら、オレっちたちも動くからナ？」

「……は、はい……」

(頑張れヨ……、男の子)

折角助けに来たのに、このままでは本末転倒ではないかという、アルゴ達の気持ちを理解しつつ、ジュンは狼と対峙していた。

狼の力は強く、パワー型ビルドであるジュンも、徐々に徐々にだが押されていっていた。

少しずつ、少しずつ、ジュンの身体は狼の爪と地面に挟まれそうなくらいにまで追い詰められていった。

「ジュ、ジュンくんッー」

「ぐ……っ」

持っている剣ごと押しつぶそうと、狼はさらに前足に力を込める。ズンツ、ズンツと周囲に音を轟かせながら、ジュンにかかる圧力を増していく。

どうみても劣勢。このままではジュンがやられてしまうのも時間の問題だろう。

しかし、難しい性格をしているジューンは、頑なに助けを拒んでいた。一見、ただのワガママに見えるこの無謀な戦いであったが、ジューンは諦めようとはしなかった。

退けない戦いだからというわけではない。何か彼には秘策が、勝つための活路があるかのように、目の光を絶やさなかった。

「……ジューンくん……」

気が付くと、圧倒的不利の戦いを強いられていたはずのジューンの表情は、不敵な笑みへと変わっていた。

敗北を察して笑っているのか、それとも何か勝機を見出したのかはわからない。

しかし、彼はその口元を歪ませて『勝った』とでも言いたげに微笑んでいる。

「……やっと、やっとだよ……」

「GARRRR……」

「やっと……お前の動きを止めることが出来たよ……ッ」

そう言い放つとジューンは目を閉じ、ぶつぶつと何かを呟き始めた。

声量が小さく、遠くからは何を言っているのかわからないが、彼の前方にスペルワードが浮かび上がっているのを見ると、何やら魔法の詠唱をしていることがわかる。

「エック・フレイギユア・スリール・ゲイル・ムスピーリ……ッ」

詠唱が完了しスペルワードが完成すると、何も無かった空間に光が集まり始める。

それは周囲の光源を吸収しているかのように少しずつ大きくなり、火球の形を作っていた。

炎属性中級魔法『フレイム・ブラスト』

通常ならば、放物線を描いてターゲットに真っ直ぐ飛翔していくはずの火球魔法だ。

しかし今回は標的が超至近距離にいたこともあり、いきなりジューンの目の前で『ドゴオン』という激しい轟音を響かせながら爆散していった。

『GOAAAAA!!』

爆散した炎魔法は激しい爆炎と火柱を舞い上げ、ヴォーグリンデの草原フィールドを槐えんじゆ色に染め上げた。

炎妖精種族のサラマンダーであるジュンの放った魔法は、それほど強力だったのだ。

水妖精種族であるウンデイーネのアスナやシウネーが、回復魔法や氷魔法を得意とするように、炎魔法はジュンの十八番、というわけだった。

「ぐあッー」

しかしあまりの爆風故に、狼の近くにいたジュンも勢いよく後方へと吹き飛ばされる。

三回ほどアバターを地面に打ち付け、転がりながらも必死に受け身を取り、全身を埃まみれにし、不格好ながらもなんとか態勢を立て直す。

爆発による風はシリカたちの立っている位置にも到達しており、彼女らの装備や髪の毛、周囲の草木の葉っぱなどを揺らしていた。

「こ、これが中級魔法の威力なのか？ 上級魔法くらいの威力はあるゾ！」

「す、すごいです……」

爆風から顔を腕で庇っているシリカが、ジュンの魔法熟練度の高さに感心している。

やがて煙が風に煽られて辺りに散っていくと、爆発の中心地の全貌が明らかとなった。

『GA……GAGA……』

「ぎ、ぎまあ見ろ……、へへ……」

ジュンの視線の先には顔が焼けただけ、自慢の甲殻を大きく抉られた狼の姿があった。

あれだけ攻撃をお見舞いしても傷一つつかなかった狼の外殻を、破壊することに成功したのである。

「……部位破壊だナ、ジュン坊のヤツ、狼の弱点を突いたんだ」

アルゴの言った通り、この狼の弱点は炎属性となっている。しかし、ジュンはそれを知っていて魔法を放った訳ではない。

あの状態のまま攻撃に移れる手段が、魔法しかなかったから、あの

行動を取ったにすぎない。

そして、野生動物は火に弱いのが定石という、安易な発想も手伝い、それらが重なり、今回の戦果へと繋がったのだ。

「ジュン坊！ 早くトドメを刺すんだー！」

「わ……わかつてるー！」

アルゴに急かされると、ジュンは自分の傍らに落ちている両手剣を拾い上げ、しっかりと握り直す。

疲労困憊の身体を引きずり、自分らを散々痛めつけてくれた標的に狙いを絞る。

向こうも満身創痍、部位破壊のおかげもあり、上手く立ち上がれないようだ。トドメを刺すのなら今を置いてほかにない。

一歩ずつ足を動かし、少しずつ距離を詰めていく。狼のHPは残り数ドットという所まで追い詰めている。

ソードスキルを使わなくとも、通常攻撃の一振りで屠ることが出来るだろう。

やがてジュンは、自分の背丈と同じくらいの高さを誇る狼の顔の目の前までたどり着いていた。

早くしないとまた狼が立ち上がってしまう。

またパターンが変わる可能性も否定出来ない。そうなる前に決着をつけなくては。

ジュンは両手剣を右手だけで握り、片手直剣の要領で背中の方から、自分の目の前の地面に叩きつけるようにして、思い切り乱暴に振り下ろした。

剣の切っ先は『ズドツ』という鈍い音を発しながら狼の眉間へと吸い込まれていく。

それと同時に狼のHPが残りのゲージを失い、全損させ、巨大な狼の身体が青白い光を放ち始め、辺りを照らしながら砕け散り、ポリゴン片となって爆散していった。

「や、やった……」

シリカが小さく声を漏らしながら、舞い落ちるポリゴン片を見つめている。

無数に散らばったポリゴン片はキラキラと煌めきながら、四方八方に散っていき、やがてほとんど小さくなり、見えなくなっていくた。

《Quest Clear!!》

ジュンとシリカの目の前にオーケストラ調のファンファーレが流れるとともに、クエストクリアが知らされる。

そのロゴが消えとりザルト画面が表示され、今回のクエストの報酬のアイテムとユルドが支払われる。

しかし、シリカもジュンもその喜びや達成感よりも疲労感の方が勝っており、それらに対しては大きな反応を見せることはなかった。

そんな彼らの心情を察してか、アルゴはゆっくり歩み寄り、二人に労いの言葉をかける。

「お疲れ様ナ、二人とも。新クエストクリアーダ」

「あ、ありがとうございます……」

「オレっちの助太刀があったとはいえ、たった二人でクリアしちまうなんてナ」

おそらく、今回シリカたちが受注したクエストは、もつと大人数で挑むこと前提のクエストだったのだろう。

ALLOのパーティ上限人数が八人に拡張されてから、必然的にモンスターの強さ、クエストの難易度が調整されていたのだ。

無論、それは運営スタッフが直接やった事ではなく、カーディナルが現状のシステムに合わせて調整を施したのだ。

これまでのような少数精鋭でクエストをこなしていたプレイヤーも、今までとは違った連携や作戦を考えてから挑まなければ、今回のシリカ達のように苦戦を強いられてしまうだろう。

「……はア、はア……」

ボロボロになっているジュンがガシャンと音を立てながら、地面に膝をついた。

緊張の糸が切れたのか、疲れがどっと一気に押し寄せてきたのか、大きく息を乱している。

「ジュン君……」

そんな彼を支えようと、シリカが慌ててそばまで駆け寄る。背中に

手を回し、楽な姿勢になるように手を貸す。

少し落ち着き、体をリラックスさせると、ようやく周りを見る余裕が出来てきたのか、シリカとアルゴに視線を移す。

「シリカ、アルゴさん、ありがとう……。二人がいなかったらやられてた……」

「な、何言ってるんですか！ わ、私たちはパートナーじゃないですか！」

「クア♪」

パートナーというワードを口にしながら、ほんの少し顔を赤らめ、シリカは必死に彼のフォローに入る。

ピナもそんな心持ちがわかるのか、可愛らしい鳴き声を響かせながら首を縦に振っている。

「そうだな、この貸しは高くつくゾ？ なんてったって、このアルゴおねーさんの手を借りたんだからナ♪」

鼠のアルゴの異名を持つ彼女がマントを翻しながら不敵な笑みを見せると、思わずシリカは「あ、あはは……」と苦笑いを見せる。

また何か見返りを求められるんだなと思ってしまうのだ。

S A O時代から彼女の情報網は凄まじいの一言だ。それはシリカもよく知っている。

だからこそ、貴重な情報にはそれなりの見返りを要求される。

今回のように、アルゴ自らが直接戦闘に参加するということは、かなりの報酬を要求されるに違いないだろう。

「まあ……でも、今回はタダにしといてやるヨ。新しいクエストの情報もゲット出来たし、何より……」

「……？」

「思わぬレアな情報もゲット出来たことだしナ、フフフ」

「え……？」

アルゴが両腕を後頭部で組みながら、今度はニヤニヤとした視線を二人に向けている。

その浮わついた視線が何なのかわからないシリカだったが、自分が今何をしているか改めて自覚すると、その視線の正体によく気付

いたようだ。

レアな情報。それは言うまでもなく、シリカが異性のプレイヤーと二人きりでいたという事実のことだ。

何かと色恋沙汰や浮わついた話が大好きな年頃のプレイヤーが多いこのALO。

アルゴがそんなネタを放つたらかしにするはずがない。

勿論、シリカもジュンもそんな関係ではない。ユウキ経由で知り合った、気の合ったプレイヤー、というだけにすぎない。

しかし、年頃の異性のプレイヤー同士が二人きりで楽しく遊んでいる、といった状況を目の当たりにしてしまつては、アルゴでなくてもそう思ってしまうことだろう。

「どうやらお邪魔みたいだしナ、おねーさんは退散するでしょうカ♪」
「え……、や、ちよつとアルゴさん!？」

顔を真っ赤にしながら、必死に弁明しようとするシリカの事などつゆ知らず。

アルゴは仕事を全て片付けたサラリーマンのような満足感を得ながら、翅を広げ、シリカ達に背を向けた。

「どうなったか、あとでおねーさんに教えろよナー!」
「や……、ち、違って……、あ、アルゴさあーんツ!」

小悪魔的な笑みを振りまきながら、アルゴはすぐさまそこから飛び去っていつてしまった。

まるでシリカの今日の行動を全て見透かしてきたかのような、彼女の秘密を探るためだけに現れたような印象を受ける。

そもそも、何故彼女は一年も姿を見せなかったのだろうか？

クラウド・ブレイン騒動が収まってからというもの、キリトやアスナ、ユウキらといったプレイヤーは引き続きALOにダイブを続けていた。

そう、ただ一人アルゴだけが、全く姿を見せなかったのである。

SAOメンバーの中で一番謎の多い彼女が、また一つ不可解な謎を重ねたというわけだ。

「おねーさんもやつと時間によゆうが出来たからナ、またこれから

ちよくちよく遊ぼうナー！」

そう言い残し、アルゴは手を振りながら別れの挨拶をし、翅を大きく羽ばたかせみるみるうちに小さくなっていき、ヴォーグリンデを後にした。

風のように舞い降り、そしてまた風のように去っていく。きっとあの俊敏さこそが、彼女が情報屋と言わしめる所以なのだろう。

そのどんどん小さくなっていく姿を、シリカはほかーんとしながら見続けていた。

「うう、アルゴさんってば……」

危機を救ってもらったと思えば、今度はからかわれ、そしてあつという間に去って行ってしまった。まるで嵐のようだ。

しかし、恥ずかしかったが、悪い気はしなかった。

大変な思いをしたが、何やかんやでクエストは楽しかったし、アルゴと一年ぶりの再開もできた。

またこれからのALOライフが楽しくなっていくことだろう。

すっかり自分が風邪をひいていることを忘れているシリカは、この短時間で起きたことを思い返ししながら、視線をジュンに向ける。

「あれ……ジュンくん？」

「……すう、すう……」

「……くすっ」

シリカがアルゴからジュンに目をやると、その視線の先には十代の少年らしい、彼の可愛らしい寝顔があった。

よほどくたびれたのか、どうやら疲れ切って眠ってしまったようだ。

凜々しくも、どこか幼さを残すその顔は、どこか母性本能をくすぐる、なんとも言えない愛らしさがあった。

装備はボロボロ、アバターの身体も土埃で汚れてしまっている。

シリカはそんな彼に、より心地よく休んでもらうために上体をゆっくり寝かせ、自らの太ももの位置にその後頭部を乗せた。

そして、彼の顔をまじまじと見つめる。

「……ジュンくん、可愛い顔してます……」

そう呟くと、シリカはジュンの頭をそつと優しく撫でた。

彼の真紅の髪の毛はまるで女の子の髪の毛のようにサラサラだった。

風が吹くと、シリカの髪の毛や衣服、ピナの毛並みが揺れるとともに、彼の髪の毛も風に揺られてフアサツとなびく。

「……ジュンくん、頑張りましたね。かつこよかったですよ……♪」

「……くう、くう……」

そんな彼の、ちよつと意地っ張りで小生意気さがある顔を、シリカはいつまでも見つめていた。

キリトとは違うタイプの、ちよつとサバサバしてぶつきらぼうだが、人に譲れない男の子らしい一面を見せる、今日だけのパートナーの顔を。

そう、いつまでも、いつまでも……。

第78話 く気になる彼

西暦2026年12月17日(木) 午後16:05 アルヴヘイム
オンライン スヴァルトアールヴヘイム 浮島平原ヴォークリンデ

「くう……」

激闘の末に眠りこけてしまったジュンは、シリカの膝を借りて夢の世界へと誘われていた。

終始目の前の戦闘に、仲間への気配りに集中力を向けていたのもあり、疲労困憊満身創痍だ。

文字通り傷だらけの少年は、本日ペアを組んだ女の子の膝の上で、その可愛らしい寝顔を晒している。

「……ジュンくん……」

シリカが優しく撫でるたびに、彼の幼さが残る顔が揺らされる。キリトと同じように、可愛らしさと凛々しさがある中性的な顔つきだ。

現実世界の彼も同じような顔つきなのだろうか？ その顔を見つめていたシリカは、かつて旧アインクラッドで初めてキリトと出会った時のことを思い出していた。

モンスターに追い詰められて、死ぬ一歩手前まで追い詰められた危機的状況を、間一髪で救ってもらった。

その後彼の優しさに惚れて、気がついたら異性として意識してしまっていた。

しかし、当時の彼にはアスナが、そして今はユウキが隣にいる。寂しいことだが、シリカに入り込む余地など全くなかった。あの時もっとアプローチしておけばとか、せめて自分の好意を伝えておけばとか、そういう次元の話ではなかったのだ。

ジュンの寝顔を見ていると、どうしてもあの時のことを思い出してしまう。

初めて男の子に恋をした、あの仮想世界のことを……。

「ん……、んん……」

「あ……」

じつと彼の顔を見つめながら撫でくりまわしていると、ジユンは長い間瞑っていた瞼をゆっくりと開いていた。

視界がまだぼやけてる中、目尻を擦りながら少しずつ視界を定めていく。

ぼんやりとしていた目の前の景色が、段々とハッキリしてきた。

目を覚ました彼の目の前には、逆さに映ったケツトシー族の女の子の、優しい顔が見えていた。

「あ……れ、オレ寝ちゃったのか……」

寝ぼけまなこのジユンの顔を見るシリカに、ニコツと笑顔が浮かぶ。

まるで年下の弟の面倒を見るお姉さんのような優しさを持つ笑顔だ。

「はい、とっても気持ちよさそうに眠ってましたよ」

「そう……なんだ、ごめん……」

「大丈夫ですよ、ジユンくん一番頑張りましたから……!」

終始笑顔で受け答えるシリカに、ジユンもすっかり心を許しているようだ。

彼からしてみたら、女の子と接するなんてことは、スリーピング・ナイトのメンバー以外にほとんどなかった。

悪酔いしてよく絡んでくるノリはサバサバ系お姉さん、終始落ち着いてのんびりしてるシウネーはおっとり系お姉さんのような立場なので、恋愛対象としては違う。

唯一恋心を持っていたユウキは、今はキリトの隣にいる。彼の初恋は、始まる前から終わってしまったっていたのだ。

「起きれますか？ ジユンくん」

「ん……うん、って……え、え!」

やっと意識がすっかりしてきたのも束の間、ここにきて漸く彼は今自分がどのような体勢にあるかというのを理解した。

女の子の太ももに後頭部を預け、その状態のまま暫くの間ずっと眠りこけていたのだ。

状況を飲み込むと、彼は慌てて上体を起こし、忙しそうに立ち上がる。まるで居てはいけない場所から逃げ出すかのよう。

しかし、少しだけどこか名残惜しさを残すように。

「ご、ごめんッ」

顔を赤らめながら、それを右腕で隠すようにして小つ恥ずかしさを誤魔化そうとするジュン。そんな彼をシリカはずっと笑顔で見守り続けている。

恥ずかしがってる顔を彼女に見られたくないのか、鼻から下を腕で隠し、横目でチラチラとシリカに何度も視線を移す。

「いえ、大丈夫ですよ！」

そんな彼の反応が楽しいのか、シリカは絶えずニコニコ嬉しそうだ。

彼のことを知れたから楽しかったのか、それとも風邪で暇で暇で仕方ない時に予想外のサプライズに出会えたから嬉しかったのか。

しかし、今この状況を一番心の底から楽しんでいるのは、彼より彼女の方のようだ。

「街、戻ろうか……、オレそろそろリハビリの時間だから」

「あ……は、はい。そうしましょうか！」

もう少しだけこの状況を楽しんでいたかったシリカは、少しだけ名残惜しそうな顔をしながら、自身も腰を地面から上げた。

女の子座りの体勢から立ち上がると、足回りをパパッと手の平で払い、身だしなみを整える。

そして彼にまた視線を戻し、ゆっくりと手を伸ばす。

「帰りましょう、ラインに！」

「う……うん」

おかしな顔を見られたかもしれないと思いつつも、ジュンは素直にシリカの手を取る。しかし、視線はまだ明後日の方向を向いたままだ。

そんな彼の心情など露知らず、シリカは左手でメニューを開き、ストレージから転移結晶を取り出しオブジェクト化し、それを握りしめて天に掲げる。

透き通った水色の転移結晶は、夕陽を浴びて複雑で綺麗な色合いを見せている。

シリカが「転移、ラインー」と叫ぶと転移結晶と共に、シリカとジュンのアバターも青白い光を放ちながら、ヴォーグリンデから姿を消していった。

同日 同時刻 アルヴ Heim オンライン 空都ライン 転移門広場

平日の夕刻時、この時間差し掛かると、プレイヤーは少しずつ増えてくる。

社会人はまだ働いているが、学生のプレイヤーは講義が終わり、部活が無ければ既に帰路につき、不真面目なプレイヤーは宿題や課題に手をつけず、アミユスフィアへと手を伸ばし、そのまま仮想世界へとやってくる。

そんな人が多いためか、今人気ナンバーワンのVRMMOこと、ALOの世界にもかなりのプレイヤーが見受けられる。おそらくほとんどが学生なのだろう。

特に、この空都ラインは風通りもよく、景観も人気があり、先日実装されたダンジョンの拠点的な位置も担ってる為、他の街より人口が多くなっている。

そんなラインの街中に、サラマンダーの男の子とケットシーの女の子が、光に包まれながら姿を表した。

「……はい、帰ってきましたよー!」

「う、うん……」

見慣れた光景のはずなのに、何故か今は落ち着いていられない。

出どころのわからない心の落ち着きなさを探りながら、ジュンは相

変わらず明後日の方向を向いている。

「そ、それじゃあ……オレ、落ちるね？」

「あ……は、はい！」

リハビリの邪魔をしてはいけない、そう思ったシリカの方から先に手を離すと、ジュンは少しだけ寂しそうな表情を見せた。

離された手の先を、名残惜しそうにじっと見つめてる。

「……どうしました？ ジュンくん」

「え？ ……あ、いや……」

今度は真反対の方向を向いてしまい、完全にシリカに背を向ける形となった。

思春期真っ只中の彼にとって、女の子と二人きりという今のこのシチュエーションは、あまりにもダイレクト過ぎたようだ。

「な、なんでもないから、大丈夫だから……」

「……そ、そうですか？」

頭にクエスチョンマークを浮かべながら、どこか解せない様子を見せているシリカ。

左右のツインテールを揺らしながら、首を斜めに傾ける。彼の様子のおかしさの原因が、自分であることに気付かないまま。

「そ、それじゃあ……またね、シリカ」

「はい！ また……一緒に遊んでくれますか？」

「……うん」

期待の眼で見つめてくるシリカからの問いに、また言葉を詰まらせたジュンであったが、顔を赤らめながらもボソツと、よく耳を澄ませないと聞こえないような声量で、肯定の返事を返した。

「やった！ 約束ですよ！」

「う、うん」

この上ない満面の笑みを振りまくシリカ。それほどまた彼と遊ぶのが楽しみなのだろう。

風邪をひいてることなどすっかり忘れて、しっかりと仮想世界を満喫している。

このことがバレてしまつては、家族はもとより、アスナやリスベツ

トからも大いに叱りを受けることだろう。

「バイバイ、シリカ……」

「はい、また会いましょう！」

そうシリカが言葉を送ると、ジyunは左手のメニューを操作して口グアウトを選択し、自身のアバターを光らせ、仮想世界から去っていった。

意識は現実世界の彼の肉体へと戻り、これからもリハビリをこなして社会復帰への道のりを歩むのだろう。

「……………」

彼がさっきまでいた場所を、シリカはじつと見つめている。頭にピナを乗せながら、少しだけ寂しさを覚えていた。

「そっか……スリーピング・ナイトの人たちって……」

重病人患者で構成されていたギルド、スリーピング・ナイト。

文字通りギルドメンバーは一人一人が重い病気を患っており、中には余命を宣告され、更には亡くなってしまった者もいる。

クロービス、メリダ、そしてユウキの姉であり、初代ギルドマスターのラン。

既に三人のメンバーが帰らぬ人となってしまうていた。

しかし、とある事がきっかけで、その宿命に歯止めがかかった。

二代目ギルドマスター、ユウキの患っていた病気、AIDSの完治を境に、残りのメンバーの容態にも変化が見受けられた。

死に向かって着々と歩みを進めていたメンバーは、日が進むにつれて、悪くなるどころか回復傾向に向かっていったのだ。

中でも余命を宣告されていたシウネー、ジyunの完治には、誰もが驚き、心から祝福したという。

まるでクロービスが、メリダが、そしてランが、こっちに来るのはまだまだ早いと、残りのメンバー全員に語りかけてるかのようだった。

メンバーの現在の様子はというと、ユウキはリハビリを終えて退院し、既に社会復帰済み。

ジyunを始め、シウネー、ノリ、タルケン、テッチの五人も治療は

終わっており、あとはリハビリを残すのみとなっていたのだ。

命さえあれば、どこからでも這い上がれる。せつかく拾ったこの命、大切に大切にして、あの三人の分まで一生懸命に生きる。

リハビリだろうがなんだろうが、どんなことでも耐えて耐えて、生き抜く。

メンバー誰もが、そう心に固く誓いを立て、今を必死に生きているのだ。

「……私に出来ることって、何かないかな……」

改めてスリーピング・ナイツのメンバーの立場を思い出したシリカは、自分でも何か力になれないかと思い始めた。

自分は医者でも療法士でもない。だから直接的な彼らの助けになることは出来ない。

でも、今回仮想世界を通してやり取りが出来たように、他にも何かやれることがあるかもしれない。

何が出来るかはわからないけど、それをこれから考えよう。考えて、出来ることから力になろう、シリカはそう決意を抱いた。

「ジュンくん……か」

たった数時間一緒にいただけだが、思った以上にシリカは彼のことを意識してしまっていた。

彼のことを考えると、かつてのキリトの時のように心がドキドキする。

ただ単に、彼の力になってあげたいと思うようになっただけだというのに。

「……ふふ、また会えるといいなあ……」

高鳴る気持ちをそっと仕舞っておきながら、シリカも左手を操作して、メニューからログアウトを選択し、現実世界へと帰還していった。本来ならばご法度の病欠中のゲーム。そんないけないことをすることすらも忘れるくらい、今日は楽しいことがあった。

しかし、シリカを待ち構えていたのは楽しいことだけではなかった。

「ん……帰ってきました……」

意識を仮想世界から現実世界へと戻した珪子は、うつすらとその瞼を開いた。

心なしか、先程よりも体のだるさがとれたような気がする。

頭に装着していたアミクスファイアを取り外し傍らへと置くと、状態を起こしながら思い切りぐーんと伸びをする。

「ふあ……今日は楽しかったですね……」

「へえ、それは結構なことじゃない？」

自分しかいないはずの部屋の中で、自分以外の声が出た。

珪子は何かかと思ひ、その声のした方向へと視線を移す。泥棒か？

それとも母親か？

しかし、そこにいたのはそのどちらでもなく、ある意味珪子にとっておぞましい光景であった。

「御機嫌よう、シリカちゃん」

「いいご身分ねえ、体調悪いのにフルダイブだなんて……」

珪子の部屋にいる二人の人物。言わずもがな、リズベットこと篠崎里香と、アスナこと結城明日奈であった。

「ふえ!? あ……アスナさんに、リズさん!？」

何故彼女らが、珪子の部屋にいるのと言うまでもない。

昼の約束通りお見舞いの為に綾野邸を訪れたまではないものの、玄関のチャイムを鳴らしても家の誰からも反応が来ない。

LINEでメッセージを飛ばしても未読にすらならず、電話をかけても音沙汰がない。

しかし、珪子の部屋のエアコンの室外機が動いていることからして、中に彼女がいることは明白。

すると、彼女の身体に何かあったのではと、明日奈と里香は焦り、玄関の扉が開いていたのをいいことに、珪子の部屋まで真っ直ぐ駆けつ

けたのだ。

しかし、慌てて彼女の部屋のドアを開けてみると、そこに飛び込んできたのは彼女がアミューズファイアを装着してフルダイブしている姿であった。

心配しなくてよかったというよりも、呆れたという気持ちと、やり場のない憤りを感じていた二人であった。

いつでもLANケーブルを引っこ抜いて強制的にログアウトさせることは出来たが、敢えて自主的に帰還するのを待って、少し思い知らせてやろうと、今回のことを画策したのだ。

この後、珪子が二人に萎れるほどこつてり絞られ、説教を食らったのは言うまでもない。

その時見た明日奈と里香の形相は、今まで見てきた中でも一番恐ろしい顔をしていたという。

「シーリーカー……？　ちよーつと、そこに正座なさい？」

「私とリズから、すこーし、お話があるから……ね？」

顔は笑っているが、目が全く笑っていない。

謎の悪寒を背筋に感じながらも、珪子はベッドの上で後退りをし、彼女らから後退しようとしていたが、後ろが部屋の壁であった為、それは叶わなかった。

「ぐ、ぐ、ぐ、ぐめんなさあーいッ!!」

もう二度と、この二人を怒らせてはいけない。そう教訓を経て、シリカは新しい誓いを心に立てた。

「……………」

やせ細った少年が、白いシーツのベッドに仰向けになっている状態で目を覚ました。

意識が覚醒した少年は、むくりと上体を起こし、自身の頭に装着しているマシンを外す。

マシンを両手で掴み、頭から外すと首を左右に二、三度振る。彼の赤黒い髪の毛が遠心力に引っ張られ、揺れた。

傍らの明るい木目調のシェルフにそのマシンを置くと、少年は窓の外を見た。

冬場が近付いているからか、陽は沈みかけて、夕闇を彩っている。窓を少し開けていたためか、外から少し冷たい風が吹き込んできた。

それに吹かれたのか少し身震いをしながら、少年は身体に力を入れて掛け布団を捲り、ベッドに隣接してる窓まで身を寄せる。

前のめりに窓のサッシに手を伸ばし、カラカラという音を立てながら、そのまま窓を閉め切った。

これ以上病室を換気する必要はないだろう。それに開けていても寒いだけだと、部屋を密室にする。

寒い空気は遮断され、少年もほっと一息いれた。

すると、病室の扉の方向から、『コンコン』と扉を叩く音が聞こえてきた。

「はい、どうぞ」

少年がそう声をかけると、『カラカラ』という音とともに扉が開かれ、白衣を着た四十年代ほどの中年の医師と、二十代後半だと思われる白いナース服に身を包んだ若い看護師が、彼の前に姿を表した。

「こんばんは、先生」

「はい、こんばんは。調子はどうですか？」

姿勢を前かがみにして、視線の高さを少年に合わせて、彼の容態を尋ねる。

すぐ背後にいる看護師はカルテの挟まったカーキ色のバインダーを右手に、そのやり取りを見守っている。

「はい、問題ないと思います。まだちよつと力が入り切りませんが、少しだけなら何とか歩けます」

「そうですか、それはよかったです……」

中年の男性らしい不器用ながらも暖かそうな笑顔を見せると、医師は看護師からカルテを受け取った。

そこには少年の身体のデータ全てが記されているのだろう。

隅々まで目を通しながら、再び彼に声をかける。

「血圧も、心拍数も安定しています。本当に目覚しい回復です。本当に……よくここまで立ち直ってくれました……」

「先生のおかげです。先生があの時、あの話を持ち出してくれたから、今のオレがいるんです」

「……あれは賭けに等しかった。実験台になるようなことを強要してらるようで、私も心苦しかった……」

「……そんなことないですよ。オレは実際こうして、生きてます」

少年をモルモットにしてしまったのではないかと頭を抱えている医師に、少年はフォローを入れた。

先生のおかげで生きていられる。先生がいたからここまで回復できた。あと少し、リハビリを終えればまた外の世界に歩める。

あと少しだ、あと少し。あと……少し。

「そう言ってもらえると、私も少し気持ちが悪くなります……」

「……それより先生、オレ……そろそろリハビリ行きたいんですけど……」

いよいよこれは自分の想定外の長話に発展しそうだなと判断した少年は、そうなる前に釘を刺してしまおうと本来の目的を伝える。

釘を刺された医師はハツとなると、「これは失礼しました」と頭をかいて、その後の事を看護師に一任した。

時間は無限ではない。今この一分一秒ですら無駄にはしたくない。自分の友人もそう言っていた。なら早く動き始めなければいけない。

看護師は指示を受けると、病室の傍らに置いてある歩行器に手を伸ばし、少年の目の前に丁寧に置いた。

「ありがとうございます」

一礼すると少年は歩行器に手を伸ばし、ゆつくりとベッドから体を起こす。

そして、意図的に脚に負荷を掛け続け、少しずつ鍛えていく。

「それじゃあ、行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい」

先生に挨拶を済ませると、少年はリハビリテーションルームへと、歩を進ませていった。

いち早く日常へと戻るため。自分の人生を取り戻すため、今日も必死に力を入れて、前へと歩いていった。

すれ違う他の医師や看護師、入院患者とすれ違う度に軽い会釈で挨拶を交わしながら、目的地へと足を運ぶ。

彼の目標、それは復学すること。

長年病気に体を蝕まれ、余命を宣告され、目の前が真っ暗になり、全てを諦めそうになったこともあった。

しかし、彼は助かった。

新薬の実験も兼ねた治療が、彼の命を救ったのだ。

病気が治れば、道は開ける。

それから彼は必死に日常へと、社会へと戻るために自分を鍛え続けた。

苦手な勉強も頑張っている。体もここまで動くようになった。

今は十二月。まだわからないが何処かの学校を受験できるかもしれない。

公立でなくても、私立なら可能性が残されている。

その為に勉強も運動も頑張る。家計には打撃を与えてしまうかもしれないが、卒業したら働いて精一杯返していく。

そして、今度は自分が家計を支えていく立場となるんだ。

若干十六歳にして、既に将来への人生設計を立てている彼の志は大変に立派だ。

彼も、かつて剥奪された『普通』を取り戻そうと、もがいているのだ。

「オレは……やってやる、夢の実現の為に、絶対にやってやる……！」
額に汗をかきながら、少年は今日も前へと進んでいく。家庭のため、将来のため、そして、自分自身の夢を叶えるため。

どんなに高い壁だって、よじ登ってやる。よじ登るのが無理なら、ぶつ壊してでも突き進んでやる。

そう心に想いをのせて、少年は歩き続ける。

今日も歩き続ける。

こんな所で終わるつもりはない。

自分には夢がある。

絶対に叶えてやる。

少年は歩き続けた。がむしゃらに頑張り続けた。今の彼にはそれしか出来ないかもしれない。

だが、それでいい。彼はまだ若い。可能性は無限に広がっている。その可能性が残っている限り、彼は頑張り続けるのだ。

「失礼します……」

少年がりハビリテーションルームに辿り着くと、先に中でリハビリをしている他の患者に声をかける。患者同士でも、コミュニケーションは大切だ。

部屋の中には二十代の若い患者から、還暦を超えているような年配の患者の姿まで見受けられる。

みんな、各々が日常へと戻るために必死に頑張っているのだ。そして、その中に少年の姿ももちろんあった。

「今日も頑張るのね？ 少しは休んだら？」

「いえ、少しでも早く退院したいので、もつと頑張らないといけないんです」

「だけど、無理は禁物だよ？」

彼の無茶が知れ渡っているのか、若いお姉さんと、年配のお婆ちゃんとの患者が、心配そうに声をかけた。

「大丈夫です、若いんで」

いいからリハビリに集中させてくれと言わんばかりに、キレッキレな返答を突き刺す。

その返答を聞くと、お婆ちゃんは今日のメニューが終了したのか、そそくさと部屋を後にして自分の病室へと向かっていった。

しかし、若さゆえか彼は自分が何を言ったのかあまり理解出来ていないようだ。

そんな模様を、お姉さんが呆れ気味にため息をついている。

「あまり年配の人に、ああゆうこと言っちゃダメだよ？」

「え、そ、そうなんですか？」

見透かされていたのか、少年はお姉さんに諭され、顔をきよとんとさせた。ここにきてようやく自分が不味いことを言ってしまったと認識したようだ。

「歳をとると、やっぱり若いってのは羨ましくなるものなんだよ？」

「は、はあ……」

首をかしげながらも、なんとなく言いたいことはわかる。力のない返事を返すと、少年はお姉さんの言葉に耳を傾け続けた。

「歳をとるとね、やっぱり体の衰えはどうしても気になってくるの。体を壊すと回復まで時間がかかるし、リハビリも思うようにいかないのよ？」

「は、はい……」

「だから、年配の人は大切にしてあげようね？」

「わ、わかりました……」

若いからゆえ、日々学ぶことは多い。親の教えや学校の授業だけではない。

日常の些細なことからも、勉強になることはたくさんある。

身近な人からの何気ない会話ですら、社会勉強の一つとも言える。

今はまだそんなに実感がないだろうが、この経験は必ず学んだ者の助けとなっていくだろう。

自分の言う通りに従った少年の態度に、お姉さんは笑顔を見せる。その笑みには「年上のいうことには従うものだぞ」と訴えかけてるようにも見えていた。

「うむ、素直でいい子だね。ジュンくんは」

「そんなこと、ないですよ」

少年はそう返すと、再びリハビリに身を投じていった。日常を、普通を取り戻すため。

しかし、人生とは中々自分の思い通りにことが運ぶとは限らない。彼もまた、これから壮絶な人生を歩むこととなるのだった。

しかし、とある少女との出会いが、彼の運命を大きく変えることになる。

そしてその未来は、そう遠くない出来事になるであろう。

第79話く彼の力にく

西暦2026年12月18日(金) 午後12:01 東京都西東京

市田無 帰還者学校 校舎

「んんー……やっとお昼かあ」

ピンクのベストを羽織り、肩まで伸びてる赤みを帯びた茶髪の女子生徒、篠崎里香が自分の椅子の背もたれに背中を預け、大きく伸びをしなから昼休みの始まりを感じている。

ここは、かつて世間を震撼させたSAO事件に巻き込まれた子供たちが通う学校、『帰還者学校』である。

茅場晶彦が作り上げた仮想世界に囚われた被害者は、大人は無論、当時の子供たちにまで登る。

その年齢層の殆どが中学、高校と、物事を学ぶのにとっても大切な時期を迎えたまま、あの世界に囚われてしまった。

そこで国が設けたのが、そういった理由で勉学が大幅に遅れている子供を対象とした特別措置だ。

SAOから帰還し、この学校に通学可能な全ての子供たちを集め、卒業すれば高校卒業資格を得られるという好待遇っぷりだ。

キリトこと桐ヶ谷和人、アスナこと結城明日奈も、ここ帰還者学校の生徒なのだ。

「お腹すいたね、ご飯食べに行きましょ、リズ、シリカちゃん」

「ええ。授業で頭使ったから、すっかりペコペコよ」

午前の授業で使ったタブレットを学生鞆に仕舞うと、里香と明日奈はこの学校の食堂、学食へと赴こうとしている。

いつ、どこの時代でも学食というものはお金の少ない学生にとってありがたい存在のようだ。

メニューは種類豊富、そして出てくるまでが早く、更には値段も安く財布にも優しい。

おまけにB級グルメを彷彿とさせるような親しみのある味付けが学生たちには大変に人気のようなようだった。

「ほらシリカ、いくわよ」

「行こう、シリカちゃん！」

同じクラスメイトである珪子に二人が声を掛ける。SAOやALOのアバターと同じく、左右に可愛らしい茶髪のツインテール。それを結っているキュートなりボン。

それがとても似合う背の小さな女の子は声を掛けられても上の空気味で、どこか明後日の方向を虚ろな瞳で見つめていた。

「……………」

「…………シリカちゃん？」

それが少し気になり、明日奈が彼女に近付き声を掛けてみる。いつもウキウキで学食に向かう珪子が、今日に限って出遅れ気味。

この前風邪をひいたこともあり、まだ体が万全ではないのかもしれないと、少し気を使う。

「…………へ？」

「ちよ、ちよつとアンタ…………大丈夫なの？」

やはり、どこか上の空だ。明らかにいつもと様子が違う友人の反応に、里香も心配になり側に駆け寄る。

席に腰掛けている珪子の机の正面に並ぶ形で、明日奈は彼女の目線の高さに合わせ、少し腰を曲げ、里香は両手を付いて顔を覗き込んでいる。

彼女らのいる教室は、他の生徒も学食、ないしは別のところに昼食を取りに行ったのか、少しずつガヤ声が消えていき、静かになっていった。

「まさか、まだ風邪が治ってないんじゃない？」

そう言いながら、明日奈が珪子と自分の額に自身の掌を当てて、感覚で体温を測ってみる。

数秒間、当て続け「うーん…………」という声を漏らすと、自分と変わらず平熱だということがわかった。

彼女は風邪ではない。ぶり返しでもなさそうだ。そうだとしたら、この上の空の原因はなんなのだろう？

「い、いえ…………そうじゃあないんですけど…………」

風邪ではないと否定しつつも、その顔はどこか赤らんでいるように見えてしまった。

やはり、風邪じゃないほかの病気にかかってしまっているのではないかと、少し不安をよぎらせる明日奈と里香。

俯いている瑠子を心配そうに見つめていると、やがて彼女の方から頭こぶを上げ、明日奈と里香に向かい困った表情を見せる。

「あ、あの……明日奈さん、リズさん、ちよつと……相談したいことが……」

少しもじもじしながら、二人に目で訴える。その複雑そうな困った表情を目の当たりにすると、何故彼女がそこまで上の空になっていたか、明日奈と里香は直感でわかってしまった。

女の子というのはこういう時、やたらと察しがいいというか、その手の話に敏感というか。それもこの年頃になると感知する能力がフルに働いてしまうのだ。

「……それなら学食じゃなくて、購買で何か買って屋上とかに行く？」

「そうね、そうするとしますかあ」

「は、はい……」

同日午後12:20 東京都西東京市田無 帰還者学校 校舎屋上

「今日もいいお天気だね」

「本当に、気持ちいいくらいの冬空だね……」

帰還者学校から見渡せる景色は見事な眺めであった。昨今は屋上に出ることが禁止されている学校がほとんどの中、帰還者学校は立ち入りが許されている。

ベンチ、自販機も設置されており、休み時間を満喫出来るように配慮がなされている。

広さもそれなりにあり、本日もあちらこちらに昼休みを楽しんでい

る生徒が見受けられる。

地べたに直接腰を下ろす男子生徒、ベンチに姿勢よく腰掛けて、談笑に花を咲かせている女子生徒。フェンスによっかかりながらスマホをいじくっている今風の生徒まで様々だ。

「ここにしましょう」

丁度三人分、屋上の隅っこにスペースが空いているベンチを見つけた明日奈がここにしようと二人を先導する。

その片手には、母親である京子に用意してもらった手作りサンドイッチの入った小型のバスケットが握られている。

仕事に忙しい京子もあの和解の一件があつてから私生活面、教育面も少し見直し出来るだけ自分の子供には自分で作った物を、という考えを持つようになったのだ。

いつもはお金を持たせるか、使用人の佐田に作らせていたが、ココ最近京子の手作りばかりだ。

明日奈もそれが大層嬉しいらしく、以前よりもお昼の時間が楽しみになって仕方がないとか。

「そうね、丁度空いてるし……」

購買で買った野菜サンドとカフェオレの入ったビニール袋を片手に、里香はベンチの左側に腰を下ろす。

すると流れるように明日奈がその真反対に座り、意図的に瑛子を真ん中に座らせようと企んでいた。

こうすることで、瑛子からの話を両端で聞きやすくしている。

おまけに彼女を挟み込む形で座ることにより、全部話すまでここから逃がさない、といった意思も同時に感じられた。

里香がベンチの真ん中のスペースを掌でポンポンと軽く叩くと、その合図に従うように瑛子もそこに腰を下ろす。

「それで、相談って一体なんなの？」

単刀直入に、いきなり里香がぶつた斬る。少し昼食を進めてからでも良いものを、ハッキリとした性格の彼女らしい行動だった。

「え、えと……じ、実は……」

自分の購入したクリームパンを取り出そうと、ビニール袋に手を

突っ込んだ所で質問を投げられた瑛子が、手の位置をそのままに固まりながら、一生懸命答えようとする。

……が、いざ直前になって恥ずかしくなってきたのか、中々そこから先のセリフが喉から出てこない。

顔の赤らみが先程よりも増して、視線が定まっていけない。肩は浮いてしまっていて、頭を下げて項垂れてしまっている。

そんな様子を見て、二人の直感は確信に変わっていった。

これは間違いない。絶対にあれだ。あれしか考えられない。

そうアイコンタクトを交わしあつた明日奈と里香は、互いに視線を合わせ同時に頷き、瑛子の背中を優しくぽんと叩いた。

「大丈夫、大丈夫よ、シリカ」

「……へ？」

彼女を安心させるために、今度は優しく声をかける。

「うんうん、何も言わなくても……わかるよ？」

「……え、え……」

何も話していないのに、この二人には筒抜け、というか何もかも見透かされている。

自分がわかりやすい反応をしてしまったこともあるが、付き合いが長いために、全てバレバレのようだ。

「好きな人が、出来たんだよね……？」

「——ッ」

これ以上ないわかりやすい反応で固まってしまった瑛子を見て、内心二人は「やつぱり」と思い、目の前の小さな女の子の心中を察していた。

顔を更に真っ赤にさせてしまった瑛子はどう切り返したらいいかわからず、ただただ慌てふためいていた。

恋する乙女というものは大層強いものだが、同時にこうなってしまうと、存外に思うように行動出来なかったりする。

「え、えっと……そ、その……は、はい……」

眼輪筋に力を込めて目を瞑りながら、恥ずかしいという気持ちを押しさえ込み、瑛子も精一杯の解答を口にする。

「へえー……アンタにキリトアイツ以外に好きな人が出来るなんてねえ……」

「やっぱり……ね。今朝から様子が少しおかしかったもんね？ おはようって言った時も少し反応が遅かったし……」

「う、うう……」

前回の風邪の件といい、今回の相談のことといい、この二人には全く頭が上がらない珪子であった。折角買ってきたパンにも牛乳にも手をつけられず、ただただ赤くなって縮こまるばかりだ。

「それで……誰なの？ ここまできて内緒なんて野暮つたいのはナシよ？」

野菜サンドを口に頬張りながら、白馬の王子様は一体誰なのかと、更に追い打ちをかける。

このお年頃の女の子というものは、他人の恋愛話に大層目がない。浮ついた話がちよつとでもあろうものならば、どこからでも駆けつけて確かめようとする。

そして、大概は自分に対しての好意に関しては疎かたりするのだ。

「私たちが知ってる人？」

栗色のロングヘアを揺らしながら、首を斜めにした明日奈がお目当ての殿方を問いただす。

自分たちの周りで異性と言えれば限られてくる。

その中からなのだろうか、それとも自分たちと交流がない人に、ほの字になつてしまったのか。

「お、お二人とも……知ってる人です……」

聞こえるか聞こえないかくらい細々とした声で、珪子が精一杯の答えを吐き出す。

一つずつ答えを聞き出すことに「ほうほう」と興味津々な反応を示しながら、二人は次の回答を求めようとする。

「でも、あたし達の身内で男どもって限られてくるわよね？」

「そうだよね。キリトくんも恭二さんも付き合ってるし、エギルさんは既婚だし……」

「え、ええつと……」

恥ずかしい、恥ずかしくてたまらない。自分が惚れた男の子の名前を言うだけだというのに、その名前が中々喉から出てこない。

勇気を振り絞るといふものはこんなにも難しい事だったのかと、珪子は自分自身の気持ちと闘っていた。

しかし、話を持ち込んだのは自分だ。ここまできて有耶無耶にするなんてことは許されないし、折角二人が相談に乗ってくれているんだ。ちゃんと最後まで話さなくては。

「ゆ、ユウキさんのところの……」

「……スリーピング・ナイトの……?」

「そ、その……」

「……その……?」

さあ、言おう。惚れた彼の名前を。隣で支えていきたいと思った、赤色が似合う情熱的な燃える心を持った、真っ直ぐな彼のことを。

「……ジュンくん、です……」

彼の名前を告げると、珪子はまたもや顔を真っ赤に染めて屋上の地面の方を向いてしまった。

実際の告白の時もこんな風にぎこちなくなってしまうのだろうか？

彼女の想い人の名を聞いた明日奈と里香は、最初こそ目を丸くして驚いた様子を見せていたが、少しの間目を閉じて考え込んでいた。

「ジュンって、あの赤いサラマンダーの子よね?」

「うん、スリーピング・ナイトで最年少のメンバーだったかな……?」

母親手作りのサンドイッチを齧りながら、明日奈は小さくなっている珪子に視線を向ける。

ジュンとシリカ、二人が仲良く街中を歩いている場面を想像させてみると、どことなくしっくりくるものを感じた。

恋バナに敏感な乙女の都合のいい解釈も手伝って、これはありなのではないか、いけるのではないかと、野次馬根性に近い胸の内まで湧いてくる。

「へえ……シリカも隅に置けないじゃないの?」

「…………う、うう、別にそういうんじゃない……」

こうなってしまったら、里香は黙ってはいられない。何かと一緒に行動することが多い親友瑛子の春の気配に、興味を示さずにはいられない。

瑛子の背中に大きく腕を回し、自身の顔を近づけて、憎いやつだ、こいつめと、野次を飛ばしながら彼女をからかう。

しかし、当の本人は真剣そのものだ。それに今回、ジユンの一件は彼の身体のこと相まって、瑛子は大いに真剣だ。

むしろ、今回明日奈達に相談を持ちかけたのは、彼を好きになったことよりも、どうしたら彼を支えていけるのか、といった事に助言を貰いたく、こうして集まってもらったのだ。

「私……ジユンくんが好きです。一生懸命で情熱的で真っ直ぐで、自分の信念を曲げないところとか……」

「…………うんうん」

「でも、結構不器用な面もあったり、可愛い顔で笑顔を見せてくれたりもするんです。そういう所が……す、好きで……」

まだまだ言葉にしたいが、話していくうちにだんだん恥ずかしくなってきたのか、頭から湯気でも吹き出しそうな勢いで顔を真っ赤にさせていってしまう。

秋真っ盛りなのに熱中症で倒れてしまいそうなくらいの体温の上昇具合だ。

「なるほどね、シリカらしいわ」

「それで……私達に相談ってことは、やっぱり告白のこととか……？」
「…………え、えっと、それもそうなんですけど、実は……もっと大事なことで……」

途端、瑛子の顔つきが変わった。

今回、彼女はただただジユンの男らしいところ、かつこいいところに惚れた、というだけではない。

どうにかして彼の助けになりたい、力になって支えてあげたい。そういう覚悟の面も持って、彼のそばにいたいと感じたのだ。

単刀直入に言ってしまうと、瑛子は現実世界の彼を隣で支えてたい

のだ。

ネットゲームの話にリアルの話を持ち込むのは基本的にタブー。しかし、今回の話はそんなマナーやネチケツトの範疇を超えてしまうような感情の高ぶりが生まれてしまった。

かつて、明日奈や和人が木綿季の心持ちを知りたくて、横浜の病院まで駆けつけた時と状況は全く一緒なのであった。

ここまで垣根を越えてしまうと、もうネット上だけでの付き合いというのは、もう古いと感じる時代になってしまったのかもしれない。

「明日奈さん、スリーピング・ナイツの人達って、病気……なんですよね？」

「えっと、そう……だね。正確には元病気の人達で結成されたギルド、が正しいかな」

「木綿季もそうだったのよね、AIDSを患って……」
「でも今は皆完治して、社会復帰と復学に向けて頑張ってるの」

一つ目のサンドイッチをお腹に収めた明日奈が、二つ目を取り出しながら、スリーピング・ナイツの内情を説明する。

あまり細かく話過ぎず、それでいてしつかり事情が伝わるように組み立てて、珪子に聞かせていく。

話を聞く限り、全員が全員社会復帰は叶いそうだった。家族や親類のツテで仕事先や入学先の工面をしてもらえそうだという。

しかし、ジュンだけはそう簡単に、とはいかないようだった。厳しい家計で私立への入学は現実的ではない。また、長期間の入院

生活で中学の勉強もおざなりになっていて、公立校を受験するには学力も足りないと、八方塞がりの状況だ。

このままでは中学の学習歴がないのに、最終学歴が中卒という、現代社会には絶望的な学歴を背負うことになってしまう。

何も社会で活躍するのに学歴がすべて、というわけではないが、ある程度その人の資質を見い出す基準とするためにも、出来るだけ学歴はあった方が良い。

そこでこんなこともあるのかと、といったタイミングで現れたのが、珪子たちが通う帰還者学校の新制度だ。

SAO事件の被害者だけでなく、病気や事故で勉強が遅れてしまった子供たちを支援するための制度。

実際に木綿季は、この制度を利用しての来年度からの入学が決定している。

少子高齢化が進むこの現代で、少しでも子供たちの未来を守ろうと、学校側の粋な計らいだ。

「あの、私……ジュンくんを支えてあげたくて……」

「ジュンを……？」

「は、はい。ネット上での関係をリアルに持ち込むのはマナー違反なのはわかってるんです。でも……」

「……でも？」

「私は……ジュンくんの、彼の力になりたくて……」

「……………」

手元のバスケットにサンドイッチを戻し、明日奈は黙って考えていた。

珪子は、かつての自分と同じなのだ。

木綿季に会いたくて、木綿季の本当の心が知りたくて、わざわざ病院を特定してまで彼女に会いにいった、あの時の自分と全く同じなのだ、と……。

珪子の想いは本物だ。この純粋な想いを、親友の真剣な気持ちを無下にするほど、明日奈も里香も薄情ではない。

最初こそ面白おかしくからかってはいたが、珪子の想いが生半可な覚悟ではないと知ると、今度はその気持ちに全力で応える。

「私もわかるよ、シリカちゃんの気持ち……」

「……明日奈さん……」

優しく、優しく珪子の手を握る。私はあなたの味方だと、手の温かさを通して安心を伝える。

「私もね？」 木綿季の本当の気持ちが知りたくて、キリトくんの手伝ってもらって、木綿季の病院までかけつけたの」

「……はい」

「拒絶されるかも、って思ったけど、あの時は考えることよりも身体が

勝手に動いちやっただ」

「まあ、明日奈も誰かさんに似て真っ直ぐな性格してるからねえ……」

「も、もう……リズってば……!」

今は真剣な話をしているのだから、変な茶々を入れないでと、明日奈が目で訴える。

すると里香は妙な笑を見せながら、「ごめんごめん」と片手で謝る仕草を見せた。

そんなやりとりに、珪子も思わず苦笑いを浮かべる。少し気持ちが楽になったのか、買ってきたアイスココアにストローをつけるくらいのゆとりは出てきたようだ。

「そこで、相談なんですけど……」

「……………」

「ど、どうやったら……ジュンくんの力になれるんでしょうか……」

「……そりゃあ……」

口に含まれている野菜サンドをお腹に流し込むと、一息ついた後に、里香が続いて思ったことを告げる。

「やっぱり一番はすぐ隣で直接支えてあげることよ」

「……え、と、隣で……?」

「私もそう思うな。初めは迷惑がられるかもしれないけど、シリカちゃんの想いをぶつけるのが、一番だと思うよ?」

「わ、私の……想いを……」

「うん、シリカちゃんのジュンへの想いを……」

この助言は、かつて木綿季から直接明日奈へと伝えられた、最後の選択肢だ。

ぶつからなければ伝わらないことだつてある。

木綿季を通して明日奈へ、和人へ、そして……珪子へ。

重みを帯びたこの言葉は、かつてとてつもない難病と闘い、そして勝利を収めた少女から、また小さな少女へと伝わっていく。

「ぶつからなければ伝わらないことだつてあるよ、シリカちゃん」

「…………ぶつからなければ……」

どうしてだろう、その言葉を聞いた瞬間に、何故か胸の奥が熱く

なっていくのを感じた。

何故だかはわからないが、その言葉には言葉以上の力がある。そんな風を感じられたのだ。

「ね、シリカちゃん。会いにいこっか?」

「え……?」

突然の明日奈の発見に、瑠子は目を丸くしていた。

彼女の言う「会いに行く」というのはALLOの話ではなく、文字通り現実世界の入院している病院へ。

かつて明日奈がやったことと同じことをやろうと、そういうことだ。

「あ、会いにつて……ど、どういう……」

「ジュンの入院している病院に、シリカちゃんが直接、会いに行くの……!」

「……え……えええーツ!?!」

校舎の屋上全域に響き渡るくらいの音量で瑠子が叫び声をあげると、必然的に昼休みを満喫している他の生徒の視線という視線が集まった。

その視線に気付いた瑠子がハツとなり、少しだけ申し訳なさそうに縮こまる。

しまった、思わず声を上げてしまったと、あちらこちらに気まずそうな目線を向けた。

「こ、声がでかいわよシリカ……」

「ご、ごごごめんなさい! ……で、でも病院に行くつて……わ、私、入院先とか何も知らないですよ……?」

先程の大声の影響でざわついてる屋上の片隅で、若干小声でこそこそ話を進める。

話に集中し過ぎて、なかなか昼食に手をつけられていないが、それに構うことなく言葉を交わす。

「その辺は大丈夫だよ。多分……木綿季が知ってると思うから」

「え……木綿季さんが……?」

「うん、スリーピング・ナイトって私とキリトくんを除いて、元々バー

チャル・ホスピスってソフトで出会った友達なんだって」

「ば、ばーちやる・ほすぴす?」

「そう、そこで知り合って友達になってから、色んな仮想世界を旅してきたそうだよ?」

「そ、そうなんですか……」

バーチャル・ホスピスとは、読んで字のごとく、仮想世界の病院のことである。

入院生活というものは、長くても短くても不安が積もる。

同院、同室に同年代、もしくは境遇が似ている患者がいれば、互いの胸の内を打ち明けあったり、悩みや将来の相談をしたりして、支え合うことが出来る。

しかし、中にはそうはいかないケースも珍しくはない。五体を満足に動かせなかったり、他の患者と上手くやっていけない人だっている。

そこで活躍したのが、木綿季たちが使っていた「セリーン・ガーデン」と呼ばれるバーチャル・ホスピスだ。

彼女らはこのソフトを通して知り合い、スリーピング・ナイツを結成し、今日まで生きてきたのだ。

残念ながら、木綿季の姉の藍子、ギルドメンバーのクロービス、メリダは亡くなってしまったが、彼女らの築いた絆は、今になってもなおここに生き続けている。

セリーン・ガーデンがあったからこそ、スリーピング・ナイツがあり、そして今の彼女ら彼らがいるのだ。

「だから多分、木綿季なら知ってると思う。よかったら今夜……聞いてみようか?」

「なるほどねえ、いい案じゃない」

「お……お願いします! あ、あの、もしよかったら私も一緒に……」
瑠子が明日奈に食い気味に寄っていった最中、突然屋上に設置されているスピーカーから昼休みの終わりを告げるチャイムか鳴り響いた。

リズムよく、学校ならではの「キンコンカンコン」というお馴染み

のサウンドは、屋上だけでなく、構内全域に響き渡っていく。

「ありや、時間切れか。まだ食べ終わってないんだけど……」

「私も……次の授業の準備しないと、だね」

「あ……ぶ、ごめんなさい、お二人共……」

自分のせいで二人の昼食を妨げてしまったと、慌てて謝罪に入る瑛子を尻目に「気にしない気にしない」と里香も明日奈も笑顔でフオローを入れる。

昼食は後からでも食べることは出来る。

しかし、大事な相談は今しかできない。悩みを抱えたまま引きずっても、手遅れになってしまうことだってある。

「気にすることないわよ。ほーら、次の授業遅れちゃうわよ?」

「は、はい。い、今いきます!」

「木綿季には私から連絡入れておくから、今日の夜にでも私のホームで……どうかな?」

「あ……は、はい! よろしくお願いします!」

ほとんど手をつけていない昼食の片付けを進めながら、三人は午後の授業へと身を進めていく。

学生の本分は勉強。しかし、ジユンはその土俵にすら立てていない。

そんな彼の支えになりたいと、小さな女の子は仲間の助けを借りて、少しずつ前に進んでいく。

気になっていたあの子は、既に想い人になっていた。

これからどうなるかはわからない。彼に会えないかもしれないし、会ってもどうにかならないかもしれない。

しかし、それでも今はがむしやらに前に進んでみるしかない。

進んで進んで、ひたすら進んで、そして、ぶつかってみるしかない。

それが、今の彼女に唯一出来ること。

その道を信じて突き進むこと。

それが、今一番大事なことなのだ。

小さな少年の力になるべく、小さな少女は今、歩き始めた。

第80話く恋愛相談?く

西暦2026年12月18日(金) 午後19:12 ALO内 新生アインクラッド 第22層キリトのホーム

「やつほー! いらっしやいみんなー!」

「まあ、ゆつくりしていつてくれ」

このホームの持ち主である全身黒づくめの装備に身を包んだスプリガンの少年キリトと、その恋人である元気ハツラツなインプの少女ユウキが、我が家を尋ねてきてくれた友人達を招き入れる。

「うん、お邪魔するね? キリトくん、ユウキ」

「ほらほら、シリカ……早くこつち来なさいよ?」

「あ……は、はいっ」

透き通るように綺麗なアクアブルーのロングヘアをなびかせながら、ウンディーネの少女アスナが招かれたキリトたちのホームに足を踏み入れる。

その後にレプラコーンのリズベットが続き、入口から一番遠い位置でたじたじになっているケットシーであるシリカに、早くこつちにくるようにと催促を促していた。

別に今すぐ好きな彼に出会おうというわけでもなく、ただ単に相談をもちかけるだけなのだが、彼女は今朝からこんな調子だ。

「今ココアでもいれるから、適当にくつろいでくれな」

「あ、出たわね? ここの名物のココア」

「め、名物って……いつからそうなったんだよ」

一番初めにソファに腰を下ろしたリズベットがからかうと、キリトが苦笑いを浮かべながらキッチンに立ち、人数分のココアを入れるためにメニューをいじくる。

別に本人からしてもココアが名物というわけではなく、ここに遊び

に来るとかなりの確率で最初にココアでお迎えされることから、仲間内でいつの間にかそう呼ばれるようになったようだ。

「だってキリトくん、遊びに来ると必ずそれ振る舞うじゃない？」

「あ、ボクの時もそうだったよね？」

「……だって、みんな好きだろ？ ココア」

苦味やクセのあるコーヒー等を出すより、甘くて万人受けがいいココアを振舞った方が外れが少なく、彼自身もそれなりに好きだということもあり、ここでは頻繁にココアが差し出される。

確かに、ココアを振る舞われて嫌な顔をする人間は少ないだろう。人数分のココアをリビング中央のテーブルに並べ終え、キリトも他のみんなと同じようにソファに腰を落ちつける。

入口側から見て手前側のソファには左からアスナ、シリカ、リズベット。

奥側にはユウキ、キリトの順で並んでいる。

ココアが淹れられたカップからは、ほのかな甘みを含んだ香りが湯気と共に立ち上っている。

「さて……と。ところで……相談したいことってなんなんだい？」

右手にカップを持ち、ココアを口につけながらキリトが話をもちかける。

するとアスナとリズベットの視線がシリカに向けられた。それに釣られるようにユウキ、そしてキリトの視線も彼女の方に向けられる。

この様子から、この相談事の核はシリカなのだなど、キリトもユウキもなんとなく悟っていた。

「あ、えっと……ですわね……」

周りからの視線に気付いたシリカは、自分の今の正直な気持ちを打ち明けようとしたが、なかなか表に出せないようであった。

アスナとリズベットは知っているが、やはり事実を知らない人に打ち明けるといふものは大変に勇気がいるものだ。

好意を寄せる彼がないというのにこの始末なのだから、本人に気持ちを伝える時は一体どうなってしまうのだろうか？

「ほら、シリカちゃん？」

「別に今告白するわけじゃないんだから、早く話しちゃいなさいよ！」
「へ、告白？」

やってしまった。シリカ当人が内容を打ち明けるよりも前に、リズベットが話の軸の、それも一番核心に近い部分をバラしてしまった。

思いもよらぬワードを耳にしたユウキたちは目を丸くして、二、三度瞬きを繰り返す。

そんな彼女たちなどつゆ知らず、シリカは顔を真っ赤にしながら横にいるリズベットをポカポカと両手で可愛らしく叩いていた。

「り……リズさーん！」

「あたつ、あたたつ。ちよ、ちよつと何するのよシリカ」

「ど、どうして先に言ってしまうんですかー！」

「え、あれ？ あたし変なこと言った……？」

「い……言いましたよー！」

やってしまったものは、言ってしまったものはしょうがないじゃないかとかとあまり反省するそぶりを見せないリズベットに対し、シリカはポカポカと手の動きを辞めようとはしなかった。

今のシリカは感情が高ぶりすぎている。ジユンへの想いが強いのか、自分の気持ちに正直過ぎるのか。

しかしこのままでは話がなかなか先に進まない。見兼ねたアスナが「仕方ないなあ」と一言漏らすと、話の主導権を一時的に握り、どうして自分らがここに来たのかをユウキたちに身振り手振りで話して聞かせる。

アスナの説明は至極わかりやすく丁寧で、誰でも理解出来るよう綺麗に整理整頓されている形で話して聞かされていた。

隣でその様子を目の当たりにしていたシリカは自分の気持ち晒されてしまったためか、先ほどよりも顔が真っ赤になってしまい、ソファの真ん中で縮こまってしまっていた。

話の内容が進む度に、キリトは足を組みながら「ほうほう」と頷きながら。

ユウキは目をキラキラ輝かせながら前のめりに興味津々といった

様子で、シリカの恋バナに食ってかかるように耳を傾けていた。

やはり、女の子というのは自分以外の色恋話に目がないようだ。

「へえー……シリカ、ジュンのこと好きになっちゃったんだ!」

「う、うう……」

ど真ん中ストレートを豪速球で投げつけるような性格をしてるユウキから、改めて事実をハッキリと言われたシリカは、アバターの頭から湯気が立ち上ってしまうくらい顔を真っ赤にしてしまっている。

もはやこのままでは火山が噴火するかのごとく、色々なものがシリカから噴き出てしまいそうだ。

「そっかあ……ジュン、女の子から好かれるようになったのかあ……」
今ここにいるメンバーの中で、一番ジュンと付き合いの長いユウキは色々と思うことがあるようだ。

やんちゃでぶつきらぼうで、小生意気でうるさくてイタズラっ子で。

そんなメンバー最年少のあのジュンが女の子から、しかも彼より年上のシリカから好意を寄せられている。

ギルドマスターのユウキとしては、何やら感慨深いものがあるようだ。

ユウキにとって、ジュンは弟みたいな存在だ。いつもそれとなく近くにいて、ちよつと鬱陶しく思う時もあったりした。

しかし、どこかそんな彼が放っておけなかった。いきすぎないようやりすぎないよう、さりげなく見守っていたりもしていたのだ。

そんな世話のやける弟分が、大人の階段を登ろうとしているのだ。色々と感じることがあるのも不思議ではないだろう。

「シリカ、頑張ってるね? ボク……応援するから!」

「あ、ありがとう……ごいませ……」

「……ところでユウキ? そのジュンのことなんだけど……」

「ん? なあに、アスナ?」

半分ほど飲み干したココアが入ってるカップを両手で包むように持ちながら、アスナが静かに声を掛ける。

ちよつと様子が違うアスナの様子に、ユウキも首を傾けてきよとん

とその動向を伺う。

「えつとね……実は……」

「ま、待っててくださいい！」

体を前のめりにして身を乗り出し、アスナの話に割り込む形でシリカが声を上げる。

話の進行を他人に任せっぱなしで申し訳ないと思ったのか、やはり自分自身でやらないと意味が無いと感じたのか。

このままでは良くないと感じたシリカは、自分自身で想いのうちを話そうとしていた。

「私に……話させてください……」

「……シリカちゃん……」

覚悟を決め、キリツとした表情のシリカを見ると、誰もそれを止めようとはしなかった。

昔からどんな困難な目にあおうとも、気持ちだけは負けないようにと、前に進みながら生きてきた。

気持ちだけならユウキさんにだって、誰にだって負けないつもりと、シリカは学校でアスナから聞かされた言葉を思い出しながら、ユウキに語りかける。

「ユウキさん……ジュンくんの入院先って、わかりますか……？」

「え、ジュンの？」

「えつとそれは、ジュンの現実^{リアル}ってこと……だよな？」

「は、はい……」

なんとなく質問の意図を汲み取ったユウキは、少しだけ考えた。

確かにスリーピング・ナイツのメンバーは結成前に、セリーン・ガーデンで出会った時、互いに本名と病名、年齢。そして入院している病院を自己紹介の時に打ち明けている。

この時はまさかメンバー全員でVRMMOで遊ぶことになるとは思わなかったからだ。互いに短命の運命^{さだめ}であることもあって、ネットのタブーも気にしていなかった。

流石にゲーム上ではキャラネームで呼び合っていたいたようだが。

「……確かに、スリーピング・ナイツのメンバーはみんな本名も入院先

も知ってるけど……」

「ほ、本当ですか!？」

その答えを聞くと、シリカは更に前のめりになり、ユウキとの距離が更に近くなる。

もう少しで鼻と鼻がくつつく距離にまで行ってしまいそうだ。

「う、うん。だけど……教えていいのかなあ……」

シリカの恋路は応援したい。

しかしここで身内の中だけで共有していた情報を、しかも個人情報にあたるものを教えてしまっているのだろうか、ユウキは後頭部をポリポリ右手でかきながら頭を悩ませる。

「でも、俺とアスナだって……お前の入院先に駆けつけたら？」

「でもそれって、キリトが自分で調べたからでしょ？ ボクが教えたわけじゃないし……」

「た、確かにそうだけど……」

「だ、だめ……ですか……?」

耳としっぽを垂れ下げ、露骨にしゅんとなったシリカが、残念そうな顔でユウキを見つめる。

しかし、こればかりは仕方の無いことだ。他人の個人情報を勝手に第三者に開示するわけにはいかない。

如何に親しい人同士、仲のいい者同士であったとしてもだ。

「ごめんね……シリカ、流星に教えられないよ。現実の情報は……」
「……そ、そうですよね……」

木綿季が首を横に振ると、更にシリカの耳としっぽは垂れ下がり、完全に重力に引っ張られてしまった。

彼女の左右に座っているアスナとリズベツトも、流星にこればかりは仕方ないのかもしれないと、複雑な表情を浮かべている。

こうなってしまうと、ジュン本人から直接聞き出すしなくなってしまうのだが、果たして彼は教えてくれるだろうか？

彼は意外にも頑固な面もある。そして思春期だということもあり、なかなか教えてはくれないだろう。

それが現実の情報だとすると尚更だ。

「残念……だね、シリカちゃん……」

優しく慰めるように、アスナがシリカの背中をポンポンとそつと叩く。

生半可じゃない覚悟を持って望んだだけに、その残念さは計り知れなかった。

私じややっぱり彼の力になれないのか、またもや自分の恋路は叶わぬものになってしまふのかと、わかりやすいくらいに肩を落としてしまっていた。

「い、いえ……良いんです。無茶を言ってるのはわかってましたから……」

「ごめんね、シリカ……」

同日 午後20:03 ALO内 新生アインクラッド 第22層
キリトのホーム

「じゃあ、私たち……落ちますね？」

一通りの用事を済ませ、一時間ばかりちよつとした談笑を済ませたシリカたちはソファから腰を上げた。

「そうだね……シリカちゃんは病み上がりだし、早めに休んだ方がいいかもだね」

「は、はい……」

談笑中も、どことなくシリカからは元気が感じられなかった。

所々笑顔を振りまいてはいたのだが、どことなく空回りしているような感じがしていたのだ。

やはり、期待していたことが叶わなくなったというのが大きいよう

だ。

「それじゃあ……バイバイ、かな……？」

正しいことを言ったとはいえ、どことなく後ろめたさやちよつとした罪悪感を感じてしまっているユウキも、どことなくギクシヤクした態度しか取れない。

自分自身も、似たような境遇で駆け付けてくれた友人達に命を救われた身として、さらに後ろめたさに拍車がかかる。

果たして自分に断る権利が本当にあったのだろうか？

自分がまだ入院してたとき、キリトやアスナが来てくれた時、どう思った？

……嬉しかった。そう思ったはずだ。

ジュンはどうなのだろうか？ 余計なお世話と受け取って怒るのだろうか。

それとも恥ずかしがって素っ気ない態度を取ってしまうのだろうか？

いや、どう転んでも少なくとも嫌がったりすることはないはずだ。入院生活は基本的に孤独。退院するその時までずっと孤独との戦いだ。

たまのお見舞い、看護師や医師の検診以外は全て孤独なのだ。

それらは長い入院生活を送ったユウキ自身が嫌というほど分かっている。

ユウキだけじゃあない。ジュンもシウネーも、スリーピング・ナイツのメンバーは全員理解している。

「……シリカ……」

でも、今更どんな顔をしてやっぱり教えるよ、なんてことが言えるだろうか。

シリカが直接お見舞いに行けばサプライズになるかもしれないし、誰も損することはいはずだ。

……後でジュンに怒られるかもしれないが。

「……ユウキ？」

考え込んでるユウキに、キリトがそつと声を掛ける。ずっとシリカ

を見つめながら複雑な表情を浮かべている彼女を見て、少しだけ心配になったようだ。

「ねえキリト、ちょっと……いいい？」

「……ん？」

何やらヒソヒソと、ユウキはキリトに耳打ちをしている。

本人からしたらアスナたちにバレないように喋っているつもりなのだろうが、その怪しげな行動は誰から見てもバレバレな様子であった。

ユウキが話を進める度に、逐一キリトの表情が驚きから困り顔、真剣な顔、悩める顔と次々に変化していく。

その様子を離れたところから見ている三人娘は、一体二人は何をやっているのだろうと、冷ややかな視線で見守っていた。

「……よし、ねえシリカ、アスナ、リズ！」

話が終わったかと思うと、今度は忙しそうに元気で明るいいつものユウキの表情を見せ、ハキハキとした声で三人に声をかける。

「なあに？ ユウキ」

声を掛けられたアスナが、三人を代表してその声に応える。

ちよつとだけ首をかしげ、水色のロングヘアを揺らしながら、彼女の話の続きを待つ。

「明日と明後日……予定ある？」

「え……土日、つてこと？」

「うん、土日！」

「わ、私は特に用事はないけど……習い事も今はほとんどやってないし……」

私は大丈夫、そう伝えながらアスナがシリカとリズベットのいる方へ視線を移すと、二人も互いに視線を合わせ、身振り手振りで私たちも大丈夫とアスナにサインを送る。

「リズたちも……大丈夫そう？」

「あたしは特に予定は無いわよ？」

「わ、私も……平気です」

偶然か必然かはわからないが、この場にいる全員週末は特に予定が

入っていないようだ。

それを知ったユウキはまた表情を明るくさせて両手を自身の目の前でパンツと鳴らし「ようーし！」と元気いっぱい声を上げた。

「それならさ、明日みんなで名古屋に行こうよ！」

「……え？」

「な……」

「名古屋……っ!？」

ユウキからの突然のぶっ飛んだ提案に、シリカ、アスナ、リズベットの順番に驚きの声を上げる。

何故いきなり名古屋なんだ。いやそれより何故急に明日いくんだ。

今日の話の流れからいってもいきなり明日皆で旅行に行こうという提案は不自然だ。

「ボクがプローブで外の世界を見せてもらった時、アスナたちが京都に連れて行ってくれたの覚えてる……?」

「え、ええ……」

「あの時は……確かユウキが旅館の晩御飯食べたってごねてたのよね？」

リズベツトお得意のからかい文句に、ユウキが少しだけ顔を赤らめる。言われてみれば確かにそんなことも言ったかもしれない。

しかし、今はそれは頭の片隅に置いておき、話の本筋を打ち明ける。

「ボク、また皆でどこか旅行に出かけてみたかったんだ！ 友達同士だけで気兼ねなく！」

「京都の時みたいに？」

アスナから逆に聞かれると「うん！」と曇りのないキラキラとした表情でユウキが返事を返すと、リズベツトもやれやれといった様子で首を傾げる。

「仕方ないわねえ……いきなり過ぎるけど、別にいいわ。ね？ シリカ？」

「あ……あ、はい！ わ、私も問題ない……と思いますー！」

「ようーし！ それじゃあ急いで準備しないと！」

即興だが話がまとまると、ユウキにより一層気合が入る。退院して

からの初めての旅行。

なんとしても成功させたい、全力で楽しみたいといった気迫がひしひしと感じられる。

「どうせなら……しののんとかリーファちゃんも誘ってみたらどうかな？」

「あ、それいい！」

「そうだな……スグと母さんには俺から話しておくよ」

土壇場で予定をキャンセルするドタキャンとは違い、土壇場でプランを立ち上げてしまうドタプラをかましてしまった。

そもそも旅行は何週間も前から入念に準備を重ね、下調べを済ませてから行くもの。

翌日の、それも遠隔の地となると今から足も用意しなくてはならない。

果たして今から準備が間に合うのだろうか。しかし決めてしまったものら仕方がない。なんとか翌朝の出発までに準備を全て済ませなくてはいけない。

「そうと決まったら、早く準備しなくちゃ……ね？」

「ええ、名古屋なら……多分新幹線使うんでしょ？ 予約空いてるのかしら……？」

「そこら辺は俺がなんとか探すよ。どこを見て回るかは……ユウキに調べてもらう」

「うん！ まかせて！」

現在時刻は夜の八時を回ったところ。

今から新幹線と泊まる旅館を予約して、なおかつ泊まりの準備と観光する場所の下調べを全て済ませておかなくてはならない。

正直言って、こんな直前も直前すぎるタイミングで旅行を計画するなど正気の沙汰ではない。

でも、不思議と断れはしなかった。

ちよつと思っていたこととは違う結果になってしまったが、この週末は楽しいことになりそうだ。

気分が沈んでしまっていたシリカも、突然の旅行計画に慌ただしい

様子を見せていた。

それほど寝耳に水だったのだろう。

「そ、それじゃあ落ちますね！ 早く準備しないと……」

「本当よ、予約取れたら迅速に教えなさいよー？」

「ああ、それはまかせてくれ」

忙しそうにメニューを操作し、ログアウトメニューを表示させ、せわしなく三人は仮想世界から現実世界へと帰還していった。

これから両親に明日のことを話したり、荷物をまとめたりと急がなくてはならないのだろう。

ユウキの提案たった一つのために、慌ただしいことになってしまっていた。

「……………」

「……………これで、よかったのかな、キリト……」

「さあな。でも……多分、大丈夫さ……」

「うーん、やっぱり怒られるかなあ……」

ホロウインドウで名古屋の観光名所や施設を調べているユウキが、何やら複雑な表情を浮かべている。

その傍らで、キリトは新幹線の空席情報がないかどうかを確かめる。

「それは……どうかな。でもやってみないと……な？」

「う、うん……」

「それに、ぶつかってみないと……わからないだろ？」

「……うん、そうだね……そうだよね！」

自分の囁い文句をキリトに言われると、ユウキは自身の両頬を掌で「バチーン」という音を立てて叩き、気合を入れ直す。

「俺も手伝うから、頑張ろうな……？」

「う、うん……」

この日の夜は、夜中過ぎまでホロキーボードを叩く音と、暖炉の薪が燃え盛る音だけがログハウスに鳴り響いていた。

ユウキにとって、現実世界に帰還してから、退院してからの初めての長距離旅行。

本当はもつと腰を据えてゆっくり準備して、もつと日数を確保して、じっくりと楽しみたかった。

世間はもうすぐ冬休み。それを待ってからでも良くはなかったのだろうか？

しかし、ユウキには今週末、どうしても行かなくてはいけなくなった理由が…先程出来てしまったのだ。

是が非でも、名古屋に行かなくてはならない、その理由が……。

第81話くいざ、名古屋へ

西暦2026年12月19日（土）午前6：48

神奈川県小田原市寿町近辺 JR新幹線のぞみ203号 下り新
大阪駅行き車両内部 自由席

「いったただつきまあーす！」

駅弁を元気いっぱい笑顔で嬉しそうに頬張る木綿季の声が車内に響き渡る。

彼女が美味しそうに頬張っているのは東海道新幹線の駅弁で一番人気の特製幕の内御膳弁当、1340円だ。

御飯は「深川めし」、「飛騨牛うま煮ご飯」、「梅ちりめんご飯」の三種類。

おかず類は煮物の濃口醤油を使った関東風、薄口醤油を使った関西風。

トンカツに名古屋の八丁味噌。エビフライ、湯葉煮、黒豆甘露煮、鮭西京焼など。

東海道新幹線が通過する関東・東海・関西、それぞれの地域の特色を取り入れたさまざまな食材を楽しめる大変豪華なお弁当となっている。

「ん……美味しいー！」

何処の名産かわからないが、値段と色とりどりの内容に心を惹かれてしまった木綿季だが、想像を裏切ることない味の数々に、大変にご機嫌だ。

左側座席の一番窓側の位置で、外の風景を楽しみながら駅弁に舌鼓を打つ。

「お前……駅でクレープ食ったのにまだ食べるのか……」

「あんなんじゃ全然足りないよー！」

「あ、あはは……」

自身の頬をぽりぽりとかきながら、妹の圧倒的食欲に若干顔を引き

攀らせている直葉の姿がそこにあった。

昨夜急遽決まった名古屋一泊二日の旅の参加者は和人と木綿季を始め、明日奈、珪子、里香、そして直葉の合計六名だ。

詩乃にも声が掛けられたのだが、バイトがあるのと、恭二との約束があつたため、なくなく断つたという。

座席は左側から木綿季、和人、珪子。右側座席に直葉、明日奈、里香の順番に座っている。

幸運なことに、なんとか近場の人数分の座席を確保出来たようだ。

「しかし……朝早かつたせいかな俺は眠いぞ……」

満足のいく睡眠を取れなかったためか、周りにも感染しそうな眠気をふるまいながら、和人が大きな欠伸を上げる。

朝慣れしてる直葉や、常日頃から元気の塊である木綿季を除き、他の面々も何名か眠たそうな表情をしている。

「ええー、寝ないですよー？ 和人ー？」

「お、お前な……誰の所為だと思ってるんだよ……」

「えつ、あー……んと、それはー……」

困つたところを突かれると、エビフライをむぐむぐと口の中で噛みながら視線を泳がせる。

そのやりとりを苦笑いを浮かべながら珪子や直葉が見つめる。

「それにしても、あたし新幹線なんて何年ぶりかしら？」

「私も……かな？ 結城の本家に行く時はいつも飛行機だから……新幹線は久しぶり」

「ほおー……流石、お嬢様は違いますなあ」

「も、もう……リズつたら、そんなんじゃないって！」

相も変わらず、里香は他人をからかっている。いつもならば仮想現実問わずその矛先は珪子に向けられていたのだが、たまたま隣に座つてたこともあり、今回はそれが明日奈に向けられていた。

「あはは、ごめんごめんって」

「でも、人数分の席と宿の予約が取れるなんて、運が良かったですよ
ね」

「本当にな……まさか俺も取れるなんて思わなかったよ」

「しかも、全員の都合があつて、親から許可もちゃんとおりるんのですものね」

今回の突拍子もない電撃旅行、一番の懸念は明日奈と木綿季であつた。

明日奈は母親があこの元スパルタママだということもあり、流石に今回はダメだしされると思ったのだが、意外にも許可が出たのだ。

やはり、しつかり和解できたことがよかつた彼女の中で大きかつたようだ。

木綿季も木綿季で、退院後初めての遠征とあうこともあり、彼女の身体の状態が懸念されてたのだ。

大丈夫だとは思うがもしも旅行中に彼女の容態に何かがあつたらと、そういう考えが頭を巡つたのだ。

しかしこちらも明日奈同様、許可はあつさりおりた。

むしろお土産を期待しながら主治医の倉橋は、「何の問題もないでしょう、楽しんできて下さいね」と背中を押してくれたという。ありがたい話だ。

「名古屋って味噌が名物なんだよね!? 楽しみだなあー!」

「お、お前は……食べることしか頭にないのか?」

「あはは、まあまあキリトくん? でも味噌は私もちよつと楽しみだよ?」

「だけど、食べ物以外にも見るところはあるんだろ? ほら、名古屋城とか……」

「……………」

本日の観光ルートを組み立てた木綿季に和人が質問を投げつけると、途端に彼女は固まってしまった。

弁当を口に運ぶ手の動きもピタツと止まり、額から汗が流れ落ちている。

何かまずい事でもあつたのだろうか?

「お、おい……………木綿季、お前まさか……………」

「……………あ、あははー……………」

「……………ま、まさかとは思うが、全部グルメの旅とか言うんじやあないだ

ろうな……?」

和人が追撃をかけると、今度は窓の外へ視線を向けて、完全にその場を誤魔化そうとしている。

彼女は嘘を見抜くのが得意だが、逆に自分自身が嘘をつくのは苦手のようなのだ。

「ちよつと、トラベルノート見せてみる」

「あ……あー… だ、ダメー! 返してよー!」

彼女のバッグのファスナーを開け、やや強引に中から薄紫色の大学ノートを取り出すと、和人はページをパラパラとめくり、書かれている内容に目を通す。

確かに名古屋の名物は味噌だ。八丁味噌と言えば耳にしたことがある人もいるだろう。

米麴や麦麴を使わず、大豆100%の豆麴を使って作られた味噌の中で、愛知県岡崎市で生産されている味噌のことを、八丁味噌と呼んでいるのだ。

そんな豆味噌を用いた料理屋が至る所に点在してるのも名古屋の特徴だ。

味噌うどん、味噌おでん、味噌カツ、どて煮等等など、赤味噌の濃厚な味が楽しめる名古屋を代表する食べ物が有名だろう。

そして、木綿季のトラベルノートにはそんな味噌料理が楽しめるルートがびっしり埋め込まれており、中にはいろいろな食べられる店までチェックされている。

そして名古屋城や熱田神宮、大須観音等の代表的な観光スポットが書かれていなかったのだ。

このままではただの名古屋食レポ旅行になってしまう。

そんなお粗末な旅行プランを目の当たりにした和人は、左目の眼輪筋をぴくぴくと震わせて顔を引き攣らせ、視界に入るノートに言葉を失っていた。

「なんだ……これは……」

「え、えつとー……えへへ……」

「えへへ、じゃない!」

「わ、わーん！ ごめんって和人ー！」

かつてALOでやったように、木綿季の両頬を思いつき指先でつまみ、外側に引つ張る。

ここは現実世界なのでペインアブソーバーなど勿論ない。

しつかり顔の両端に痛みを感じた木綿季は悲痛な叫びを車内に響かせながら、段々と赤くなつていく頬の痛みに耐えていた。

「ゆ、ゆるひしてよー、かうおとーー！」

「ちよつとちよつと、周りのお客さんに迷惑になるわよ？」

流石に見かねた明日奈が慌てて賑やかな二人に声を掛ける。

そう、車内にいるのは彼らだけではない。他の一般のお客さんも搭乗しているのだ。

周りには彼らと同じような観光目的の乗客だけでなく、出張等の仕事で乗り込んでる人たちも少なからずいる。騒ぎなど言語道断だ。

「あ、す、すまん……つい……」

「仲がいいのはいいこと、だけどね？」

「あ、あうー……」

兄妹そろつて反省の色を見せながら、座席で縮こまる。流石にはつちやけすぎてしまったと、周りからの視線を気にするが、幸いそれほどまでに騒ぎにはなっていないようだ。

「はあ……仕方ない、俺が練り直すよ……」

「あう……お味噌料理……」

「ちちゃんと飯処も押さえておくから安心しろ」

「……ほんとー？」

ブラックホール級の胃袋を持つ木綿季はともかく、他の面々、特に女の子勢は飯屋ばかりに連れていかれてはたまったものではないだろう。

結局、今回の旅行は脚からプラン、ルートまで、和人が全て一任することとなつてしまった。

こんなことなら初めから自分が組んでおけばよかった、木綿季に任せるんじゃないかと、後悔の念を感じながらスマホで名古屋の観光スポットを調べ始める。

「……前途多難……だな」

「ど、どんまいだよ……お兄ちゃん……」

同日 午前8：11 愛知県名古屋市中村区 名古屋駅前

「な……や……だあーっ!」

早朝六時半に新幹線にのり、約一時間半列車に揺られながら、一行は遠路はるばる名古屋の地に着いた。

名古屋駅の駅舎から出るなり、旅の疲れなど微塵も感じさせない木綿季が一番に飛び出し、元気いっぱいの声を上げながら名古屋の青空を見上げる。

横浜とも東京とも、川越とも違うビル街の景観に心を踊らせている。初めての地、それも大好きな仲間たちとの旅行だ。心が踊らないわけがない。

そんな両手を大空に伸ばしながらハイテンションになっている木綿季に続き、残り五人の名古屋観光組もぞろぞろと列をなす。

「木綿季さん……すごくうきうきしてますね」

「……そうだね、木綿季にとっては……現実世界に帰還して初めての旅行だし……」

「……ああ、そうだな。あいつに負けないように楽しまないとな?」

「は……はい!」

どうにも昨晚のジュンの一件が頭に引っかかっている瑛子も、木綿季の楽しそうな様子に触発されたようだ。

今は皆との楽しい旅行の真っ最中。今楽しまなくていつ楽しむの

かと、自分自身の心に喝を入れ、気持ちを改める。

元気よく前方を進む木綿季に続くように、「木綿季さーん、待ってくださーい!」と、珪子もその後を追いかける。

「シリカ……ちよつと吹っ切れたのかしら?」

「……………」

「そう、なのかな……?」

和人達から十メートルほど前方で元気にはしゃぎ合う二人の様子を、明日奈たちが少しだけ心配そうに見つめる。

もしかして珪子は空元気なだけではないのか、無理やりテンションを上げているだけなのではないか、と。

「……スグ、明日奈、リズ、すまない……ちよつといいか?」

「ん、なあに? お兄ちゃん?」

突如、和人が神妙そうな表情で、三人に問いかける。これから楽しい名古屋観光をしようとするには似つかわしくない表情だ。

そんな不自然さを感じ取ったのか、明日奈はこの旅行がただの旅行ではないということ、何となく悟っているようだった。

「……少しだけ、少しだけでいいんだ。後で木綿季とシリカを二人きりにさせてほしい」

「え? シリカちゃんと木綿季を?」

「何よそれ……どういうこと?」

当然の疑問が返ってくる。何故あの二人を? と誰もが頭の上に疑問符を浮かべている。

昨晩の突然の旅行プランといい、今回の和人の態度といい。この旅行には何か裏がある。

木綿季も和人も、自分たちに内緒にしていることがある。そう感じとっていた。

「今は……ちよつと言えない。明日……明らかにするから、お願い出来ないだろうか……?」

得体の知れないお願いごとに、明日奈も直葉も里香も、複雑そうな表情を見せ合い、アイコンタクトで「どうしよう」と語り合う。

色々思うことはあるが、遠路はるばる来た名古屋だ。彼らが何を考

えているかはわからないが、まずこの旅行を楽しみたいというのがある。

気にはなるがそつと頭の片隅に仕舞っておき、黙って和人のお願いを三人は飲むことにした。

「くすつ、わかったわ。またキリトくんのことだから、ちゃんと考えがあるんでしょ？」

「アンタが人に頼み事をするときつて決まって誰かのためなんでしょ？」

「え、えつと……そ、それは……」

まるで何もかも見透かしたかのような明日奈と里香の反応に、一瞬たじたじになって言葉に詰まる和人。

長年一緒に暮らしてる直葉も、くすくすとその様子を見守る。お兄ちゃんは考えなしに行動するような人じゃない。

ならば、黙って見て見ぬふりをしてあげようと、後でお土産の一つでも奢ってもらおうと腹に一枚いやらしい欲を抱え、兄の背中をポンと叩く。

「大丈夫だよお兄ちゃん、みーんなわかってるって」

「え、わ、わかってるって……」

「いいからいいから、ほら……シリカちゃんたち先に行っちゃおうよ。」自分の想像していたものとは違う反応が返ってきたことで、少しだけ調子が崩された和人が目を丸くして三人の動向を目で追う。

察しがよく、理解してもらえるのはありがたいが、こうもあっさりど飲み込んでもらうと、どうも腑に落ちない点がある。

やがてそんなことを考えていると、和人だけが取り残されそうになっており、それに気付いた直葉が「お兄ちゃん？ 本格的に置いていくよー？」、と遠目から声を掛ける。

「あ、ああ……い、今行くよー！」

黒色のショルダーバッグと、黒のキャリーバッグを引っ張りながら、我先にと道を行こうとしている五人に追いつこうと、和人も地面を蹴る。

大丈夫、普通の旅行としても楽しめるはず。肝心なのはあの二人に

少しだけ時間を確保してあげること。

それさえ出来れば丸く収まり、明日も帰りの時間まで名古屋を満喫出来るはずだ。

何しろ、折角来たのだ。自分だって満喫したい。

そう心に決意を抱きながら、いそいそと脚に力を込める。

「かーずとー！ はーやーくー！」

「わかってるって！ 今行くから！」

同日 午後15:02 愛知県名古屋市西区幅下 京屋旅館 柏の間

「お……ネットで見たりやつより随分広いな？」

「ホントだねー！ 今日ここに泊まるんだー！」

和の旅館、その言葉がストレートにイメージ通りにピッタリな部屋の入り口の障子の隙間から、和人と木綿季がひよっこり顔を覗かせている。

彼らが今日寝泊まりするのは名古屋駅から近く、アクセスもいい和風旅館、「京屋旅館」だ。

フロントからエントランス、廊下、手洗い、浴室、そして客室まで和で統一されており、これぞ古くからの日本の旅館、と言った感じだ。

朝八時から名古屋のあちらこちらを見て回った木綿季たちの疲れを癒すには、十分な景観と作りだ。

荷物やバッグを部屋の隅に置くと、木綿季は早速部屋の中央に置かれている茶色のテーブルに供えられている茶菓子に手を伸ばした。

「お、おいおい……がつつき過ぎじゃあないか？」

「そんなことないもーん、食べないと損だもーん！」

「あはは、でも晩御飯はあたしも楽しみだよ！」

この日、八時半に名古屋に到着した一行は、まず駅上の展望デッキで名古屋街の絶景を堪能し、かつて三種の神器と言われた草薙の剣が祀られている、西暦113年頃からの古い歴史を持つ熱田神宮へと足を運んだ。

そして、名古屋にきて絶対外すことの出来ないこの街を代表するシンボル、名古屋城もちろん立ち寄った。

普通にしてれば絶対に立ち寄らないであろう天守閣を、下から見上げるその出で立ちは、圧巻の一言。

太平洋戦争の時に一部が焼失してしまっただが、残ってた箇所も含めて修復し、当時と変わらない形を今も残している。

文系が得意で国語や歴史が大好きな木綿季も、実際の名古屋城を目にして大興奮だったようだ。

ビル街のど真ん中に江戸以前から存在している和風の城が建っているだけでも、どこことなく異世界に迷い込んだような感覚を覚えるのに、実際に中に入り、直接肌で歴史を感じると、なんだか実際に江戸時代にタイムスリップしたかのように思える。

展望デッキ、熱田神宮、名古屋城を堪能し、一行は近場にある味噌料理店へと足を運んだ。

名古屋といえばやっぱり味噌料理。

そのイメージに違わぬ老舗の味噌料理屋で、地元本場の味噌尽くし料理の面々に舌鼓を打つ。

その後、大須商店街でちよつとした買い物を済ませると、そのまま旅館へとたどり着いたわけだ。

和人らが借りた部屋は三人部屋を二部屋。和人、直葉、木綿季らの桐ヶ谷三兄妹組と、明日奈、里香、瑠子の帰還者学校生徒組に分かれて借りていた。

今回のメンバーで唯一の男子である和人をどう分けるか、というところで様々な意見が上がったが、無難に家族は家族で、という形で話がまとまった。

常日頃からひとつ屋根の下で生活している三人なだけに、間違いは起こらないだろう。多分きつと。

「ふう……ようやく一息、といった所かな」

木綿季が置いた荷物の横に、和人も自分の荷物を置く。さらにその横に直葉が続いて並ぶように旅行カバンを置いた。

時刻は午後三時と、一行はかなり早い時間にチエックインしたようだ。

夕食まではまだ時間があるし、その気になればまだ数箇所、名古屋の街を見て回れそうである。

「そういえば、……遊技場があったね？」

「うんうん、卓球台もあったよ！ 後でみんなでやろうよ！」

「ええ……お、俺……疲れてるんだが……」

実におっさん臭く、温泉旅館に来たのだから大人しく休みたいと意見を述べる我が家の長兄に、妹たちは姉妹揃ってぶーぶーとクレームを飛ばす。

「和人もやろうよー」

「嫌だつての……ろくに寝てないんだから少しは休ませてくれよ……」

あまり質のいい睡眠を取っていないのと、名古屋のあちらこちらを見て回って溜まりに溜まった疲れを癒すため、和人は座椅子に置かれている座布団を枕替わりに後頭部にあて、そのまま畳の上にゴロンと横になってしまった。

ああこれはだめだ、こうなったらテコでも動かないやと、木綿季も直葉も呆れた視線を兄に向けていた。

「仕方ないなあ……それじゃあ、明日奈さんの部屋に遊びに行つてこようつと」

「あ……待つて直葉ー、ボクも行くー！」

普段から剣道の稽古で体を鍛え、毎日健全な生活を送っている直葉は軽快なステップで玄関口へと向かう。

その後につき、とてとてと可愛らしい歩き方で木綿季も直葉を追い

かける。

直葉が扉を開き廊下に出て、木綿季が靴に足を通したところで、彼女のスマホがピピピと着信音を鳴らす。

一体誰からだろうと、片方の足を靴に通し終わった所でスマホのディスプレイに目を向ける。

メッセージの主はすぐ後ろの部屋で横たわっている和人からであった。

【何でもいいけど、本来の目的を忘れるなよ？ 自由時間の今がチャンスだぞ?】

「……うっ」

横に倒れていつつも、しっかりの今回の旅の芯を抑えている和人からの警告のメッセージだった。

いけない、忘れてた。など口が裂けても言えない。つつい名古屋の楽しいヒトトキに我を忘れてしまっていたなどと言えるわけがない。

一先ず、返信には「大丈夫だよ」とだけ添えて送信する。彼が警告してくれなければ恐らくはこのまま再び遊びに出ていた事だろう。

明日奈たちの部屋は木綿季たちの部屋の隣部屋だ。扉の前には既にノックをしている直葉の姿があった。

やがてその扉はガチャつと開かれ、中からは里香が顔を覗かせた。

「やっほー！ ってあれ、キリトはいないの?」

「和人なら寝てるよー?」

「なんか、疲れちゃったみたいです」

「あ、あはは……ま、まあ仕方ないか……」

ここで立ち話もなんだと、里香は直葉と木綿季を部屋に招き入れ、中央のテーブルに集まる形で座布団に腰を下ろす。

部屋の作りも和人たちの部屋と同じで、違うところといえば壁にかけるられている絵や、置かれている花瓶や花が異なる、と言ったところか。

窓の外も名古屋の街並みが見渡せる素晴らしい景色となっており、それだけでも旅の疲れが癒されるようだ。

そして、年長者である明日奈が備え付けのポットでお茶を入れ、大須商店街で購入したお茶菓子をテーブルの上に広げる。

これからちよつとした女子会が始まりそうな勢いだ。

隣が静岡県ということもあり、お茶っ葉もいいものが手に入りやすいようで、湯のみに入れられた緑茶からはいい香りが湯気と共に立ち上っている。

「ふふ、キリトくんには悪いけど……女の子だけでお茶しましょ」

「わあ、ありがとう明日奈ー！」

「いただきまあーす！」

温泉街のお茶菓子の定番の温泉まんじゅうを口に頬張り、次にお茶を流し込む。

互いに引き寄せられるくらいに相性が抜群のこの組み合わせに、たまらず「ああ……」とため息混じりに声を漏らす。

日本人に生まれてよかった、日本人でよかったと、女子一行は幸せそうな表情を浮かべていた。

「あれ……シリカちゃん、食べないの？」

「……え？」

「ちよ、ちよつと……大丈夫？ 体調悪いの？」

五人の中でただ一人、まんじゅうにもお茶にも手をつけず、ボーツと空を見つめて時間の経過だけを感じてる珪子に、里香が心配そうに声を掛ける。

「あ……だ、大丈夫です。私もちよつと疲れちゃったみたいで……」

名古屋駅に着いた時はあんなに元気そうにしてたのにと、明日奈も直葉も不安そうに彼女を見つめる。

「そ、そう……？ 無理しない方がいいよ？ なんなら先にお布団敷くけど……」

「え？ あ、大丈夫です！ 少し休めば良くなりますから！」

慌てて否定してもとてもそうとは思えない。しかし、本人がそのまま言うのだから大丈夫なのだろうと、無理やり納得し、一行は晩御飯の時間まで何をしようかという話題に移っていった。

「それならいいけど……結構歩いて回ったから、無理しないで休みた

「かつたら休んでね？」

「は、はい！ あ、ありがとうございます」

明日奈にそう声をかけられると、慌てながら思い出したかのようにいれてもらったお茶に手を出し始める。

「それで……晩御飯まで何して時間潰す？ まだ三時間近くあるけど……」

「それなんですけど、あたしさつき遊技場見つけたんですよ！」

「へえ……面白そうじゃない！ こういう所のゲームって、昔ながらのレトロゲームとかがあるんでしょ？」

「UFOキャッチャーとかも見かけましたよ？ あたし、ちよつとぬいぐるみ取りたいかも……」

自宅のマイルームに既に大量のぬいぐるみが置いてあるというのに、まだ増やそうという直葉に、木綿季は「あはは……」と苦笑いを浮かべていた。

このままでは本格的にぬいぐるみだらけになり、足の踏み場がなくなってしまうかもしれない。

「それじゃあ、ちよつと遊技場とやらに行ってみるとしますか！」

「そうしましょうか。……シリカちゃんは どうする？」

「わ、私ですか……？」

全員に見つめられたシリカが、湯呑みを両手に持ちながら考える。

どうしよう、お誘いは嬉しいけれど今はそんな気分じゃあない。

せつかく皆で遊びに来ているというのに、なんだかちよつと気が進まない。

疲れてることもあるし、今は横になつていようと、隣部屋にいる人と同じような答えにたどり着いていた。

「ご、ごめんなさい……私、ちよつと部屋で休んでます……」

「あら……残念」

「仕方ないよ、ゆっくり休んでね……シリカちゃん？」

「は、はい……」

座椅子の背もたれに背中を預け、全身の力を抜いて身体を休める瑠子を尻目に、明日奈たちは次々に席を立ち、遊技場へと向かう。

声を掛けられた瑛子は半分うたた寝をしていたようで、木綿季の声掛けが耳に入ると、その眠たそうな瞼をゆつくりと開け、視界に入る彼女に視線を向ける。

「……はれ、木綿季……さん？　出かけたんじやなかったんですか……？」

「んと、シリカが心配で……戻ってきちゃった」

「そ、そんな……私に気を使わなくていいんですよ……？」

「……そうも行かないよ、だって……シリカ、昨日の夜から元気なかったもん……」

やはり、件のトリガーは昨晚の出来事だったようだ。かなりの期待を胸に抱いていたこともあり、落胆の気持ちが大きかったようだ。

木綿季自身もあそこで断ってしまったことを大分引きずっているようで、なんとなく後ろめたい気持ち瑛子に対してあったのだ。

そして、ここまで落ち込んでる様子を見て、彼女がジュンのことを本気で好きだということを痛感する。

かつて、和人が自分に対して本気の想いを告白してくれた時のように、瑛子も彼に対して心の底から本気なのだ。

「……ねえシリカ、ジュンのこと……好き、なんだよね？」

「……はい……」

「本当に、好き……なんだよね」

「……はい、私……ジュンくんのこと、支えてあげたいんです……」

「……そうか、そうだよね……。じゃなきゃ、あんなこと言わないもんね……」

「…………」

好きな人のことでここまで本気で悩み、頭を抱えて考えている。

かつての和人も、自分の病気を治すためにこんなに考えてくれたいたのだろうか。

好きな人のために全てを捨てる覚悟。かつての和人にはそれがあった。

目の前の瑛子はどうだろうか？　いや、疑問に思うまでもない。

彼女は本気だ。本当にジュンのためなら何でもやってあげたい、彼

のために尽くしたい。

そういつた覚悟が感じられる。

木綿季は、やはりそんな生半可な覚悟ではない彼女の想いを無下にしようとは思えなかった。

彼女の想いを再確認すると、ぎゅつとその両手を優しく包み込み、自身の温もりを感じさせる。

「木綿季、さん……？」

「シリカ、ごめんね……ちよつと付き合っただけと欲しいところがあるんだ」

「へ……わ、私に……？」

「うん、どうしても来て欲しい。いや……シリカは来なくちゃいけないの」

自分が来なくてはいけない場所、それは一体どこだろうと考えをめぐらせる。

しかし、昨晚から色んなことが起こりすぎて、話の状況の整理が追いついていない。

「わ、私が行かなきゃいけない所って……」

「ここからすぐのところだから……お願い、付き合えるかな……」

先程部屋で休むと公言したばかりだったおかげか、瑠子は中々腰をあげようとは思わなかった。

しかし目の前の、何事にも全力でぶつかっていく真つ直ぐな性格をしたこの少女の熱い視線を感じると、不思議とその言葉に従おうかなとも思えてきた。

この行動には意味がある。だからこそ、彼女は自分に声をかけてくれたのだ。

ここで腐っているよりは、この純粋な性格をした彼女を信じて、その行動に従って見よう。そう思った。

「わかり……ました」

「……ありがとう、シリカ……」

「い、いえ……」

話がまとまると、瑠子は木綿季の肩を借りてゆつくりと座椅子から立ち上がる。

ずっと座ってたため、若干足が痺れてよろけてしまったが、木綿季がそれをしっかりと支える。

かつて、リハビリをしていた自分を支えてくれた和人と同じように。

これから瑛子の、彼女の運命は大きく変わる。これまで奇妙で数奇な出会いと別れを繰り返してきた彼女の運命の歯車が、大きく変わろうとしている。

その歯車の行方がどうなるか、吉と出るか凶と出るかは誰にも、瑛子自身にもわからない。

しかし、今は木綿季の言葉を信じて前に進んでみるしかない。

彼女自身も、これから自分に対して起こるものがなんなのか、無意識に感じ取っていた。

そして、自分自身がこの先、何をすべきなのか……。

第82話く小さな二人の出会い

西暦2026年12月19日（土） 午後16:00

愛知県名古屋市昭和区鶴舞町 名古屋大学医学部付属病院

「……着いたよ、シリカ」

「え、つ……着いたって……」

愛知県の名古屋市西区幅下から徒歩で約一時間。木綿季たちは市内でも特に大きい規模の医療施設、「名古屋大学医学部付属病院」に足を運んでいた。

この病院は彼女らの宿泊している京屋旅館からはアクセス方法が微妙な距離で、電車とバスを使っても到着時間がほぼ変わらない。

なので、どうせ時間が変わらないのなら節約も兼ねて自らの足で行こうと、木綿季が提案したのだ。

いくつものビル街、商店街、住宅地等を渡り歩きながら、名古屋の街中を通り過ぎ、ここへと辿り着いた。

「木綿季さん、ここにっつて……」

「……見て分かるとおおり、病院……だよ」

「は、はい……」

木綿季は真剣な眼差しで目の前の病棟を見つめる。彼女の入院していた横浜港北総合病院と同じか、それ以上の規模の病院のようだ。

「この病院……ね？ 癌の治療に特化してる病院なんだ」

「が、ガン……ですか」
癌。

誰もが絶対に耳にしてるであろう病氣。

子供から大人まで発症し、発見が遅ければ助かる確率はゼロに近く、世界中の人々が恐れている難病だ。

発症する確率は誰にでもあり、予防法はあるにはあるが、完全に予防しきれぬ術はない。

癌発症のメカニズムは非常にわかりやすい。何かのきっかけで細

胞に傷などがつくると、その細胞が異常細胞となることがある。

その細胞がそのまま増殖してしまうと、癌化してしまう、というもののだ。

そして、その癌細胞は血管に侵入し、全身へと転移、広がっていく。人間の病気には色々なものがあるが、この癌こそが、病気で亡くなった場合の原因の頂点に君臨しているという。

発見が早ければ早期治療で何事も無く治せるが、もし遅れてしまった場合は、全身に細胞が行き渡ってしまい、手遅れとなる。

そんな癌の治療に力を入れている、この名古屋大学医学部付属病院に、木綿季は用があるという。

そして、ここには珪子も来なくてはならない理由がある。

「木綿季、さん……」

「……ついてきて、シリカ」

「えっ……あ、は、はい！」

木綿季は少ない口数で、珪子の手を引き

病院の敷地内へと歩を進める。

この病棟を目にした時、珪子はどうして木綿季が自分をここまで連れてきたか。

いや、今回の突発的な名古屋旅行の真の目的を理解してしまった。

そうでなければ、今回の旅の理由に説明がつかない。ひよつとしたら彼女自身が純粹に旅を楽しみたかった、という理由も僅かにあったかもしれない。

しかし木綿季の真の目的は、今この目の前にある病院へ足を運ぶことだった。

ここにきて、とある人物に会うために。いや、正確には……彼女を彼に会わせるために。

「……木綿季さん……」

「……こっち、シリカ」

植木と木々が生い茂っている入口前のロータリーを抜け、完全な左右対称の造りとなっている病棟を正面に捉え、木綿季たちは自動ドアへと近づく。

センサーが反応し、彼女らを迎え入れると横浜港北総合病院よりも広く、開放感のあるエントランスが視界に入る。

主な面会時間を過ぎていたためか、受付周りには数人の看護師と面会人の姿しか見えない。

ほどほどに人の話し声と、足音が聞こえる中、木綿季は瑛子に近くの本椅子に座って待つように伝え、一人受付へと向かう。

「ここで待ってて？ ボクが受付済ませてくるから……」

「は、はい……」

いつもは面会される立場にいた木綿季が、今回は面会する側にいる。

彼女にとっては、これも初めてのことだ。

しかし、いずれ来ることだと分かっていた。自分の病気が治った時から、治してもらった時から理解していた。

これから、そういう立場になることを、悟っていた。

だから自分は今ここにいるのだ。

「お待たせシリカ」

ロビーで面会の受付を完了させた木綿季が、クリップがついたタイプの面会許可証を右手に持ちながら、瑛子の元へと戻ってくる。

瑛子はそれを両手で受け取ると木綿季を見上げ「あ、ありがとうございます」と小声で囁き、それを胸ポケットに挟んだ。

「303号室だって、行く？」

「は、はいっ」

これから起こることへの緊張のせいか、慣れない土地の建物に足を踏み入れているためか、どことなくぎこちない様子になってしまっている。

ゆっくり立ち上がるつもりが、一昔のSF映画に出てくるロボットが、バッテリー切れ寸前のギクシャクとした動きをしてるかのようになり、カクカクな動作で腰を上げる。

額からは汗が吹きでて、彼女の頬を伝って重力に引っ張られて、床へと落ちる。真冬だと言うのに体温が上昇しているのを感じた。

別に体調が悪いという訳では無い。仮に悪いとしても、ここはおあ

つらえ向きに病院だ。すぐに診てもらえるだろう。

「もう……ほら、こつちだよ。」

仕方ないなと思いつながら、木綿季は瑠子の手を引く。彼女をこのままにしておいては、まともに歩くことすら困難になりそうだ。

それに、他の患者にでもぶつかつたりして怪我でもさせたらそれこそ大変だ。

長年病院暮らしを経験してたこともあり、院内での立ち回り方はよくわかつている。

向かい側からくる患者や、薬や書類を所持している看護師、医師の邪魔にならないよう出来るだけ廊下の端を歩く。

もちろん、曲がり角は出会い頭にぶつからないように一旦足を止める。

そして安全を確認しながら再び歩き始める。

ロビーから五十メートルほど進んだところで階段に差し掛かり、それに足を掛けて上階へと登る。

病院の階段というものは実に静かだ。足音がコツンコツンとよく響き渡る。

手すりを掴みながら三階フロアへと進入する。左右を見渡すと病室が並んでいるのが確認出来た。

左側が数字が若く、右側に行くに従い病室の数字は大きくなっていく。

ちなみに、縁起をかついでいるので基本的に病院には4号室は存在しない。

「あつちだね」

木綿季が場所を確認し、その方向へと進む。瑠子も彼女に引っ張られながら、その後についていく。

病室の扉の脇に取り付けられている号室の数字とネームプレートを一確認しながら、二人は奥へと進んでいった。

そして、数メートル進んだところで、二人の足音がピタツと鳴り止んだ。

とある病室の扉の前で立ち止まり、その視線をネームプレートへと

移す。

「……間違いない、ここだね」

「……………ッ」

二人が真つ直ぐ見つめる先のネームプレートには、一人だけ患者の名前が書かれていた。

木綿季は、その名前を知っている。この病室に誰がいるかを知っている。

しかし、珪子は知らない。いや、知らなかつた。

この病院も、この病室に誰が世話になっているかというのを。

ついさつきまでは知らなかつた。いや、知らなかつたフリをしていただけなのかもしれない。

しかし、ネームプレートに書かれた名前を見て、彼女の中の「もしかして」という気持ちは、確信に変わっていった。

ここに、彼がいる。

自分の会いたかつた、彼がいる。

会つて、気持ちを伝えたかつた、彼がいるのだ。

「ゆ、木綿季さん……」

「ボクはここにいるから……頑張つて、シリカ……?」

「え……」

自分の役目はここまで、後は君の番だよと、扉のすぐ横にある白い壁に背中を預けながら、ほんのり微笑み、木綿季が珪子に促す。

「多分ね、あの子に初めに会うのは、ボクより……シリカ、君であるべきなんだと思う」

「え……わ、私が……ですか?」

「本当はボクが会つてみたいけど、今は……そうであるべきではないと思うから」

「……木綿季さん……」

彼女からそう言われると、珪子は改めて正面に映る扉をじつと見つめる。

右手を自身の胸の位置まで持っていき、ギユツと握つた。

「ここに誰がいるかは、もうわかるよね……」

「……はい……」

ここまで来たのだ。もう多くを語る必要は無い。何も言わなくていいのだ。

後は行動で示せば良い。難しいことは考えるな、自分の気持ちに素直に従え。今はただ……それだけでいいのだから。

「ここだと話し声……聞こえちゃうかもだね。ボク……ちよつとその辺歩いてくる」

「え……えっ!? ゆ、木綿季さん!？」

「邪魔する訳にも……いかないからさっ」

「じゃ、邪魔って……っ」

そう言うと、木綿季はくるりと瑛子のいる方向とは反対を向き、ゆつくりと歩き始める。

あの子に会うのは、彼女が会った後でも構わない。そう心に思いながら、その背中が段々と小さくなり、その足音も少しずつ聞こえなくなっていくた。

(頑張れ……シリカ。ボクに出来るのはここまでだよ)

同日 午後16:18

愛知県名古屋市昭和区鶴舞町 名古屋大学医学部付属病院 30
3号室前

(あ、あ、あ……開けられないっ)

木綿季が病室前から立ち去ってから実に約十五分程が経過していた。

だと言うのに、瑛子は先程から扉の前から一向に中に入ろうとしな

かった。

いや、入れなかった。

この扉の向こう側には、心の底から会いたかったあの人がいる。会って、隣で支えたかった、想いを伝えたかったあの子がいる。

こんなに気持ちが高ぶっているのに、いや、高ぶっているからこそ、この扉に手をかけることが出来なかった。

意気地がないと思う。勇気がないと思う。あれだけ会いたいと豪語しておいて、いざ本番となったら足が全く動かない。

心底情けないと思う。この扉を、板切れ一枚横にスライドさせるだけで、あの子に会えるというのに。手が震えて動かない。

(……………どうしよう……………)

途中途中、看護師や入院患者が通り過ぎ際に、ずっと立ち尽くしたまま動かない瑛子に向かって不思議そうな視線を向けている。

彼女は一体何なんだろう、面会者かな？ 何故棒立ちなのだろうと、疑問を思いながら。

しかし、ここで立っているだけでは埒が明かない。待っているだけで事が解決するだろうか？ 否、しない。

高鳴る心臓の鼓動を抑え、呼吸を整え、気持ちを落ち着かせ、心静かに踏み入れば良いだけのこと。

悩むな、考えるな。自分の気持ちに従え。信念を貫け、想いを伝えろ。勇気を振り絞れ。

自分自身の心に暗示をかけながら、瑛子は扉の取手に手を掛ける。しかし、ここでスライドさせるのに、また一つ勇気がいる。

ほんの少し、あとほんの少しだけ、肩と腕、そして手首に力を込めるだけなのに。その力が出てこない。

あれだけ心を強く持とうと誓って歩を進めたのに、またここで見えない何かが立ちちはだかった。

「……………君、何してるの？」

「ひえっ！」

突然の声掛けに肩を縮こませ、背中を少しだけくの字に曲げて身体をびくつかせる。

慌てて体の角度を声のした方に向けると、そこには銀色のパイプで組み立てられた歩行器に体重を預けて立っている、細い体つきの少年の姿があった。

若干ボサボサだが和人と似たようなヘアスタイル。しかしその髪の毛はどこか少し赤みがかかっている。そして、彼女を見つめるその瞳も、どこか燃える紅のような色味。

薄緑の患者着に身を包んだ身長百六十センチほどの少年は、挙動不審な珪子に対し、少し不信感を抱きながら疑いの眼差しを向ける。

「ここで、何してるの?」

「え、えっと……そ、その……」

「オレに、何か用でもあるの?」

「あ、あの……」

予想以上だ。予想以上によく似ている。

SAOでのアバターが、現実世界での自分自身と同じであるように、目の前の男の子は仮想世界と一緒に遊んだあのサラマンダーの少年にそっくりだったのだ。

あの世界と同じく、凛々しくも可愛らしい顔立ち、ほぼ変わらぬ身長。そして、何より聞き覚えのある声と燃えるような真っ赤な瞳。

見間違えるはずがない、いや、姿は少し違うかもしれないが、間違いなく目の前のこの少年は……。

「あの……えと……」

「……用がないなら、そこをどいてもらえるかな……?」 部屋に戻りたいんだ」

淡々と、サバサバした性格の彼からの受け答えに、珪子は完全に飲まれていた。

彼は彼女がシリカだということに気付いているのだろうか?

いくらケットシーのアバターが現実世界の珪子そっくりでも、そうと知らない人間にはわかるはずがない。

当の彼自身も、どこかで見たことがあるような顔だな。何か既視感を感じるぞと、その様な捉え方であった。

「……ごめんなさいっ」

つい条件反射で謝った瑛子は、慌てて道を彼に譲る。一体何なんだ？ と疑問に思いながらも、少年は自分の部屋へ戻るために歩行器を頼りに足を動かす。

五歩ほど歩くと、自室の扉に手をかけてゆっくりと左にスライドさせる。

すると開かれたスペースから、中の内装を少しだけ見ることが出来た。

整頓されたベッド回りに、少年の私物だろうか？ 中学生が使っているような鞆や、スポーツバッグが丁寧に置かれている。

備え付けのシェルフには小型の電気スタンドが置かれており、その隣には彼女がよく使っているマシンの形も確認できた。

(あ、あれは……アミュスファイア……！)

確信は確固たるものへと変わった。早く、早く声をかけないと、彼は扉の向こう側へと行ってしまう。

今話しかけないと、もうチャンスは二度と現れない。そんな気がする。

もう彼と二度と会う機会が失われてしまう。そんな恐怖感にも似た感覚を覚えていた。

「あ……あのー！」

必死に喉から声を絞り出し、彼に問掛ける。

こんな所で終われない、終わっちゃいけない。

ここまでできて、諦める訳にはいかない。声を掛ける、勇気を振り絞れ！

「……………何？」

「は、初めまして。あの……私、綾野瑛子って言います……」

「……………え？」

突然の自己紹介に、赤髪の少年は首を傾げる。当然だろう。いきなり見知らぬ女の子から声を掛けられたら、こうなる。

病室の向こう側で固まってしまっている少年の目をまっすぐ見つめながら、瑛子は必死に声を掛け続ける。自分の想いとともに。

「突然ごめんなさい、えっと……ジュンくん、ですよね……？」

「……そ、そうだけど……き、君は……」

「やつと……やつと会えました、ジュンくん……」

確認が取れた途端に、彼女の頬を雫が流れ落ちる。ほつとしたのか、願いがかなって満足したのか。とにかく嬉し涙を流し続けた。

彼からしてみたら、いきなり目の前で泣かれて、どうしたらいいのだろうかという気持ちでいっぱいだ。

自分に現実世界で女の子の友達はいない。普通だった小学校でも、男の友達とばかり付き合ってた。

しかし、この目の前の女の子は一体誰なんだろう。この自分に会いに来たというではないか。それも、こんなに涙まで流して。

自分はなにかまずいことをしてしまったのだろうか。知らず知らずのうちに、女の子を泣かせてしまうようなことをしでかしたのだろうか。

記憶の中から思い当たるであろう節を辿る。微かな記憶を絞り出す。

しかし、片隅まで探ってみても、そのような覚えはない。

「えつと……ごめん、オレ……君とどこかで……っ」

「あ……あ、ご、ごめんなさいっ」

色々と端折りすぎて、伝えたいことがまったく伝わっていない。まずは自分の心を落ち着かせ、頭の中を整理して、冷静にならなくては。珪子は大きく口を開け、肺に力を込めて、深呼吸をする。新鮮な空気を吸い込み、一気に吐き出して心身ともにリラックスさせる。

ゆっくり瞼を開けると全身に入っていた無駄な力が抜けていった。

今なら、今なら冷静に彼に話しかけられる。

「現実世界では初めまして……ですネ」

「……ど、どういうこと？」

「私です、シリカです……ジュンくん」

「え……し、しり……っ」

彼の脳内に、次から次へと知らない情報が飛び込んでくる。今日の前にいるこの少女は、ついこの前仮想世界と一緒に遊んだ、あのケツトシーの女の子だという。

いや、それはよしとしよう。しかし、何故その彼女がここにいるのだろう。

何故自分の入院先を知っているのだろう。わからないことだらけだ。

「……本当に、シリカ……なの？」

「は、はい……ジュンくんに会ってみたくて、その……来ちゃいました……」

よくよく聞いてみれば、どことなく仮想世界のアバターに似ている気がする。声も、確かに聞き覚えがある。

そして自分の呼び方、丁寧語を用いての話し方、紛れもなく彼女は、あのシリカなのだろう。

「え、えつと……とりあえず、ここで立ち話もあれだし、一先ずこっちに入る？」

「あ……は、はいっ」

ドギマギしつつも、珪子は彼のお招きに預かり、病室へと足を踏み入れる。

ここが、彼が長年闘病生活を続けていた病室。生きるか死ぬかの瀬戸際をさまよい続けた病室だ。

壁は白く、あちらこちらに少しヒビが入っている。シミも少し入っていて、年季を感じられる。

「よいしょ……さ、かけてよ」

「あ、はい……ありがとうございます」

ベッドに腰掛けながら、慣れた手つきでパイプ椅子をセットする。

真っ白な布地のベッドはどこどころしわくちゃで、長年彼と付き合ってきたのだろうな、というのを物語っていた。

部屋の外からではよく見えなかったが、窓際には花瓶にお花が添えられている。花は誰もが見た事があるであろう、オレンジツツジの花だ。

花言葉は「向上心」、「情熱」。まさに、燃えるような心を持つ彼にぴったりだろう。

「それじゃあ……改めて、オレの名前は……じゅん准、たかざかじゅん高坂准。よろしくね、シリカ」

「あ……は、はい！ し、シリカこと……綾野珪子、です……！」
「けいこ……それが、シリカの名前なんだ？」

憧れの彼に自分の下の名前を呼んでもらった。それだけなのに、心臓がドキドキし始めた。

かつてのキリトへの憧れとは全くベクトルが違う。純粹に、そう純粹に彼を異性として意識してしまっている。

「は、はい！ ジュンくんは……本名がキャラネームなんですか？」

「そ、そうだよ？ だって……キャラ作った時はネチケツトとか、タブーだとかあまり知らなかったし……今更直す気もなかったっていうか……」

「……くすつ、そうだったんですね」

「まあ……それはリーダー……ユウキもそうなんだけどな……」

「あははっ、それを言ったらアスナさんもですよ」

不思議と、自然に会話が出来た。話しかけるまでは物凄い緊張で、心臓が口からとび出てしまいそうだったが、蓋を開けてみたらなんてことは無い。

いつも通り、仮想世界と同じように、なんてことの無い会話が出来てる。普通に笑って、普通にからかいあって、驚いたりして。

それがきつと居心地がいいということなのだろう。彼のそばは居心地がいい。ほつと安心できる。そんな気持ちになれるのだ。

「そうだったんだ？ って……そんなこと言っちゃっていいの？」

「え？ あ……ええつと……た、多分大丈夫……ですよ？」

苦笑いを浮かべ、頬を人差し指でぽりぽりかきながら、その場を取り繕うとする。

彼女もまた、和人や木綿季と同じように、リアルとゲームの情報をごっちゃにしがちな面があったのだ。

「まあ、オレは気にしないけど……でもさ、どうしてオレの入院先がわかったの？」

「それについては……木綿季さんに教えてもらいました」

「……リーダーかあ……全く。確かにいつか見舞いにくるみたいなのと言ってたけどさあ……」

「えつと……ごめんなさいジュンくん、迷惑……でしたか？」

アポ無しで急にお仕掛けてしまって、心の準備が出来てない状態で、迷惑を掛けていないだろうかと、心配を抱えながら気まずそうに視線を泳がす。

「あ、いや……そうじゃないんだ。会いに来てくれて嬉しいよ？ でも……気になることが山ほどあって……」

「ああ……そ、そうですね……」

女の子からのお見舞いは初めてなせいか、准もどことなく緊張しているようだ。

先日のALOのこともあり、彼もどことなく珪子のことを意識している節がある。

明日奈のような端麗さ、里香や木綿季のような前向きな明るさとはまた違う、珪子らしい可愛さが彼女にはある。

年齢でいえば思春期真っ盛りの彼にとって、年も身長も近い彼女の存在は、それはそれは大いに気になることだろう。

「どうして、君が来てくれたのかとかさ。わざわざオレなんかに会いに……」

「そ、それは……」

わかりやすいくらいに赤くなり、頭こぶを垂れてしまい、左右の人差し指をいじいじといじくり合う。

先程まで自然に話せていたのに、色のつく話になると途端に奥手になってしまう。

「まあ、いつか」

「……あ、あのジュンくん……身体は、大丈夫なんですか……？」

「……ん？ 病気のこと？」

「は……はい……」

答えづらいことだっただろうか、聞いては行けないことだったろうか。

しかし、以前木綿季経由でスリーピング・ナイトのメンバーの病状は回復傾向にあるという事は聞いている。

でも、本人の口から聞くのが一番安心できるし、納得ができるとい

うものだ。

「病気は……治ったよ。悪性リンパ腫って言うてさ……難病だったんだ」

「あ、あくせい……りんぱ……」

「治る見込みはゼロ、って言われてただけだね……最後の最後にチャンスがあつてさ」

今までの闘病生活、その断片を語りながら、准はシエルフの上に置いてある参考書と筆記用具を手に取り、自身の膝上に乗つける。

「もちろん、この副作用があるかもしれないし、病気だつて再発するかもしれない……」

「……ひよつとして、新薬ですか……」

瑠子にそう聞かれると、准はそつと首を縦に振り、参考書を開き付箋の貼つてあるページに目を通し始める。

「うん。実験も兼ねて、だったから……一か八かの賭けみたいなものだったんだけどね」

「……でも、勝ったんですよ……」

視線を窓の外に移し、遠くに見える青空と雲の動きを目で追う。以前の憂鬱な気持ちの時は違い、可能性に満ちた目で追う。

「うん……オレは勝った。そして……そのおかげで今、生きていられるんだ……」

生きていられることの幸福、そして普通でいられることが奇跡の連続だということが、今になってわかる。

病気にも事故にも合わず、不幸な事件にも巻き込まれず平和に過ごせていけることが、どれだけの幸運の上にあるかということが、今更になつて身に染みる。

「……ジュン……くん」

「……なに？ シリカ」

「私と、友達に……なつて、くれませんか……？」

「え……？」

「わ、私……ジュンくんのこと、もつと知りたいです。もつとお互いのこと知つて……仲良く、なりたい……です」

「……し、シリカ……」

今日は色々忙しい日だなと、准は心に思っていた。

いつも通り病院食を食べて、いつもの様にリハビリをこなして、毎日繰り返しする勉強に身を投じる一日が、今日も変わらずくるものだと思っていた。

しかし、今日は目の前の女の子が思わぬ訪問をしてきた。

嬉しい、正直嬉しい。わざわざ遠く……かどうかはわからないが、こんな所までお見舞いに来てくれたのだ。

どうしてここまでしてくれるかはわからないけど、彼女のそんな健気な気持ちを無下に来れるほど、准は淡白な男ではなかった。

「そう、だね……現実世界でも、よろしくお願い出来るかな……？」

「……は、はい！ 喜んで……！」

「シリカが迷惑じゃなければ、だけど……」

「そ、そ、そんなことないですよ！ むしろ……う、嬉しいですよ！」

告白した訳ではない。大した進歩でもないかもしれない。でも、今伝えたこの気持ちは本物だ。嘘偽りの気持ちではない。

彼の純粹で真っ直ぐで、情熱的で燃えるような男気は、彼女を拒むことは決してしなかった。

「あはは。それじゃあ……よろしく、シリカ」

「は……はい！ よろしくお願いします！ ジュンくん！」

進展が少しだけでもあって嬉しかったのか、瑠子は思わず感情の昂りを抑えられずに、准の左手を自身の両手で包むようにてがっしりと握りしめていた。

するといきなり接近された准は、急に至近距離でスキンシップをされたせいもあり、仮想世界のアバターのように顔を赤らめ、目線を泳がせてしまった。

「えへへ……」

「そ、それじゃあ……さ、シリカ？」

「？ なんですか？」

右手をそつと離し、膝上に置いてある参考書を手に取り、ベッドテーブルにそれらを筆記用具と一緒に置くと、彼女に視線を向ける。

「……勉強、教えてくれる？ オレ……中学の内容全然わかんなくてさ……」

「……くすつ、いいですよ」

「あ……今、笑ったでしょ」

「えつ、そ……そ、そんなことないですよ!?!」

少しだけ頬をふくらませてムスツとした表情の准を見て、心の中で可愛いと思ってしまった珪子が、慌てて笑ってしまったことを否定する。

そして、SAOから帰還したばかりのころ、苦勞して猛勉強をした経験が役に立てばと、珪子はパイプ椅子から腰を上げて、彼の寝ているベッドの脇に位置を移す。

「それで……どこがわからないんですか？」

「えつと、ここ……なんだけど……」

「なるほど、これですか！ これはですねえ……」

想いを寄せ合うこの二人は、まだ恋人同士とは言える間柄ではないと思う。

今やってるやり取りも、クラスメイト同士、もしくは姉弟間で行われているようなものだ。

でも、これも小さいながらも確かな一歩には違いない。今は互いに出ることを少しずつやっていけばそれでいい。

何せ、二人の出会いはずっと今、始まったばかりなのだから。

第83話 く小さな想い

西暦2026年12月19日（土） 午後17:13

愛知県名古屋市長和区鶴舞町 名古屋大学医学部付属病院

「ここでその数字を代入すれば、もう解けたも同然です！」

「え……と、これかな……」

太陽が沈み、冬空が夕闇に染まる頃、名古屋のとある病院の一室で、男の子と女の子が勉学に精を出している。

内容は中学の数学だ。小学校からの勉学が遅れてる彼にとって、マッソマンで教えてくれる先生の存在は大変に貴重だ。

可愛らしい容姿のツインテールの髪型をした女の子は、実に楽しそうに丁寧に問題の解き方を教えている。

「そうですね、正解です！ もうかなりこれで進んできると思いますよ！」

「つ、疲れたあ……やっとここまで終わったよ……」

「お疲れ様です、ジユン君」

苦手な数学の当面のノルマを達成した准が、ほっと息を撫で下ろす。

病院の先生や看護師に、見てもらってはいたが、基本的に病院の職員は多忙であり、一人の患者につきつきり、というわけにもいかなかった。

故に准は、ほとんど自力で小学校高学年から中学の勉強に励んでいた。

右も左も分からないままの勉学ほど、前に進まないものは無い。

むしろここまでほぼ独学で解き進んできたこと自体が凄いことだろう。

「今日はここまでっ」

「ふふ、どうでした？ 私の教え方……わかりやすかったですでしょうか……」

テキストとノートを閉じ、その上に筆記用具をまとめて置き、深い

息を吐き出すと、彼はその問いに答える。

「うん。すごく分かりやすかったよ。一人でやってる時より何倍も進めたもの」

「えへへ、それはよかったです」

そう言われて、珪子に笑顔が浮かぶ。遠路はるばる関東から東海にきたかいがあったというもの。当初の目的とは違ったが、思いもよらぬ形で彼女は今回の遠征を楽しんでいた。

「シリカは……さ」

「……はい？」

「学校、楽しい……？」

日が傾いた窓の外の景色に目線をやりながら、ふと質問をなげかける。

学校が楽しいか、それは人それぞれだろうが、そもそもその学校にいけない彼からすれば、ほとんど未知の世界である。

かつて自分が通っていた学校の記憶など、もう色あせてしまっていた。

覚えているのは運動会と学芸会、そして病気を宣告され、教室を去った最後の日くらいだ。

学び舎とは程遠い生活を長年過ごしてきたせいか、学校とはどんなところなのか、どんな場所であったのか。

そのような疑問ばかりが浮かぶ毎日。

彼にとってそんな気持ちはやがて学校に対して憧れ、戻りたい場所に変わっていった。

出来ることなら、また机に座り、黒板に向かって教えを乞いたい。教諭に指名され、問題を解きたい。友人と他愛のない会話に花を咲かせたい。

自由となった放課後、この後どうする？ などと無駄話をしながら青春を過ごしたい。

そんな憧れになっていたのだ。

「学校……楽しいですよ。出来なかったことがたくさん出来ますし、色んなことを学べます」

「出来なかった……こと」

「はい、勉強は確かに大変です。でも、大変だからこそ、毎日が楽しくて、充実してて……」

「……そう、なんだ……」

目の前の少女が羨ましかった。

自分はいつまでこんなところにいるんだろう。いつになったら出られるんだろう。

そんなことを考える毎日だ。

確かに病気は治った。身体も元に戻りつつある。でもその後はどうする？

こんな低レベルな学力で受験が上手くいくだろうか。公立は厳しいだろうし、だからといって私立校に通えるわけもない。

ただでさえ入院費用で家に負担をかけているというのに、私立だなんてとんでもない。

「オレも……行きたい……」

「……ジュン君？」

涙が出てきた。普通の人が普通に出来ることが、自分には出来ない。

ちよつと躓いただけで、当たり前前のが出来なくなってしまった。

諦めた訳では無い。しかし、どうしても世間との差を、劣等感を感じざるを得ない。

誰が悪い訳でもない。親が悪いでも、医者が悪いということでもない。

しかし強いて言うならば、運が悪かったのだ。

そんな自分の運の悪さを、今まで何回呪っただろうか。

「オレも行きたい……みんなと、一緒のことしたいよ……」

「わわっ、ジュン君……っ」

彼女に見えないように涙を流しながら、俯いてしまった准に、シリカが心配そうに身を寄せる。

肩に手を当てて、震える彼を安心させようと支える。

「ジュン君……」

彼女の手の温もりが肩から伝わってくる。優しい温かさだ。

そんな温かさに縋るように、准は珪子に身体を少し預ける。

珪子もそんな彼をしつかり支える。彼が安心するまで、涙が引つ込むまで、身体の震えが止まるまで。

「もう、やだよ……外、出たいよ……色んなこと、やってみたいよ……ッ」

「……………」

「うう、何で……何で……ッ」

震える彼の身体を、珪子はなだめるようにぼんぼんと優しく掌で叩く。

傍から見れば、そのやり取りは歳の近い姉妹のようにも見えた。

長年弟の病気を理解し、常に一番近いところで支えてきた姉のような、そんな雰囲気を感じられた。

「ジュン君」

手に少し力を込めて、彼の身体を起こす。

すると彼の顔の様子が顕になった。目も頬も真っ赤になり、涙の跡が見受けられた。

普段は強気なアタツカーを務め、陽気に振舞ってはいても、彼はただの男の子。

大人に頼っていかなければ生きていけない年齢だ。

「……………」

そんな弱々しい姿の彼を、珪子は抱きしめた。自分の身体の熱を全部伝えるように、包み込むように、彼かどこかへと行ってしまわないように、強く強く、抱きしめた。

「しり、か……ッ」

「大丈夫です、ジュン君……」

「……………」

彼女がどうして自分を抱擁しているのか理解出来なかった。今のこの状況も把握出来ないでいた。

しかし、確かな温かさが伝わったことだけは感覚で理解するこ

とが出来た。

「大丈夫……ですよ……」

「……しりか……」

「ジュン君、大丈夫です……」

ひたすら安心するように声を掛け続ける。瑛子の包み込むような優しさに、准も身を委ねていた。

その温かさと優しさを感じ取ると、自然と彼も瑛子の背中に手を回していた。

縋るように、求めるように、いなくなつて欲しくなさそうに、必死に抱きとめた。

「なんで……なんでなの……?」

「……」

「なんでキミは、オレにそこまでしてくれるの……?」

「……」

その言葉を聞くと、また腕に力が入った。

彼を助けた。ずっと一緒にいたい。力になりたい。それしか考えられなかった。理屈ではない。

好きになつてしまった彼を、惚れてしまった彼をのことを、本当の意味で助けてみせたい。

現実世界で彼と触れ合つて、その気持ちはより確固たるものへと変わつていった。

好きだからという言葉だけで済ませてしまつてはいけない、使命感のようなものも感じた。

「友達もいなくて、病弱で頭も悪くて、なんにも取り柄がないのに……」

「……」

「どうして、しりかは……オレにそこまで……」

決まつてる。

そんなの決まつてる

言うまでもない。

この気持ちに嘘偽りなどない。
さあ、伝えよう。

この気持ちを。

真っ直ぐな気持ちを、真っ直ぐな彼に。

「ジユン君のことが、好きだからです……」

「……………え……………」

やつと言うことが出来た。

仲間内ですら恥ずかしくて言えなかった気持ちを、ようやく伝えることが出来た。

言いたかったことを伝えると、珪子はより一層、彼の身体を抱きしめた。

その細い身体が、壊れてしまいそうなくらいに力を込めて。

建物の一室で二人きり。異性に抱きしめられ、准の頭の中は色んな気持ちがあふれ、処理しきれないでいた。

だからこそ、本能的に想いが珪子を求めていた。誰かからの想いが彼も欲しかったのだ。

「私、ジユン君のことが……好きです」

もう一度、改めて伝える。

するとその気持ちで胸がいっぱいになったのか、また彼の頬を涙が伝った。

心の奥底から温かいものが、溢れ出そうなのが感じられた。

「オレ、の……………こと……………」

「はい、一緒にクエストをやった時から、ずっと……………好きでした……………」

「……………」
どうしてだろうと、思った。こんな魅力のない自分に好意を寄せてくれるなど。

一人じゃ何もできず、迷惑をかけるばかりの自分のことを、どうしてと思った。

好き？ 自分のことが好き？

嬉しい、嬉しいに決まってる。友達ですら長年いなかった自分に、そんなこと言ってくれるなんて。

でも、自分にその気持ちに応えるだけの資格がない。確実に足枷になる。

そんな自分なんかと付き合っちゃいけない。何も生み出すことも、与えることもせず、周りを困らせているだけの自分に、そんな資格など……。

「ジュン君の気持ちを、聞かせてください……」

「……………ッ」

言いたい、自分も君のことが好きだと。二人きりで遊んだあの時から、君の優しさに惚れてしまったと。

でも、言えない。言っではいけない。

彼女には無限の未来が、可能性がある。そんな輝かしい可能性を、自分という重しで潰してはいけない。

断ろう、傷つかない程度に。何重にもオブラートに包んで、身を退いてもらおう。

「……………」

「……………ジュン、くん……………」

澄んだ瞳で、瑠子が真っ直ぐに彼を見つめる。互いに顔が近く、呼吸が当たってしまったくらいに近い。

准の身体は冷たかったが、彼女の温かさが伝わったのか、少しずつ温もりを取り戻していった。

「……………ありがとう、シリカ……………」

「……………」

「シリカの気持ち、凄く嬉しい。友達すらないオレに、そんな素敵な言葉を贈ってもらって……………」

「……………ジュン君……………」

「……………でもごめん、オレ……………君の気持ちには応えられない」

「……………」

その言葉を伝えた途端、瑠子の身体が凍りつく。

「……………ごめんね、君のことが嫌いとか、そういうんじゃないんだ……………」

「……はい……」

「本当に凄く嬉しいよ、空っぽだった俺の心が、ぽかぽかになるくらい満たしてくれて……」

「……………」

「でもごめん、無理なんだ……」

「……………どうして、ですか……………」

か細い声量で、彼に問いかける。先程気持ちを伝えた時よりも、随分声が弱々しいようにも思えた。

「君に、迷惑をかけるからだよ……」

「わ、私に……………ですか？」

「……………うん、ご覧の通り……………オレは病み上がりで体力もないし、勉強が遅れてるから頭も良くない」

「……………」

「それに、進学のアテもなくてさ、退院しても……………いきなり路頭に迷っちゃうんだよ」

「……………ジュン君……………」

オレも好きだと言えたら、どんなに楽だろう。自分の気持ちに嘘をつけて、彼女に足枷をかけられたらどんなに肩の荷が降りるだろう。

しかし、出来ない。やれるはずがない。

自分も男だ、プライドか、何ものにも譲ることの出来ない意地がある。

我ながらワガママだと、融通か効かないとは思う。心底ウンザリする。

でも、仕方の無いことなんだ。

ここは、そのワガママを通さないといけないところなんだ。

そう、仕方が……………ないんだ……………。

「確実に……………君に迷惑をかけるよ。オレは……………これ以上誰かの足枷になんてなりたくはないんだ」

「……………わ、私はそんなこと……………」

知ってる。優しい君のことだ。そんなこと思っていない。そういうはずだ。

でもダメなんだ。そこに甘えてはいけないんだ。確かに今の生活から抜け出したい、外へ羽ばたきたい。

自由を手に入れてみたい。でも……でも、それだけはダメなんだ。ダメな……ハズなんだ……。

「本当にありがとう、シリカの気持ちは……伝わったよ。でも……」
「……でも？」

「だからこそ、尚更君に迷惑はかけられない……」

「だ、だけど……」

「……」

彼に断られて少なからず動揺を隠せない珪子が食い下がろうとする。

何故なら、なんとなくその返事が彼の本心ではないと感覚で理解してたからだ。

彼の言ってるところは強がりだ。本当は誰よりも助けて欲しい、救いの手を差し伸べて欲しいと思ってるはずだ。

抱きしめた時に理解した。彼の身体の震えが、声の心細さがそれを物語っていた。

「わ、私……ジュン君の力になりたいんです！ 私に出来ることなら……なんでも……」

「……」

しかし、ここに来て引けないのは彼女も一緒だ。珪子も准のことを本気で考えている。

ありがた迷惑だと思われるかもしれないが、なんとかして彼の力になりたい。

その彼への想いで、身体に力を込めることが出来た。

想いの力で声を出し、彼に気持ちを伝え続ける。

「学校にだって行けます！ 色んなことが出来るんです！」
「……」

「わ、私は……ジュン君と一緒に、色んなことしてみたいです！」
「……」

「勉強したり、遊んだり、笑ったり泣いたり……」

「……………ッ」

罪悪感で胸が張り裂けそうだ。こんなにも必死に自分のことを考えてくれてる彼女の気持ちを裏切るのが、後ろめたすぎてたまらない。

心臓がズキズキ痛む。もう病気は治ったというのに、全身が痛むようだ。

でも、終わらせないといけない。

「負担になるなんて思ってません！ ジュン君の力になれるなら、私は……………」

「……………もう、いいから……………」

冷えきったようなトーンで、言葉を発する。張りのない彼からの声掛けに、瑠子は一瞬言葉を詰まらせ、たじろいた。

「え……………」

「ありがとう、もう……………いいよ」

「も、もういいって……………え、えっと……………」

「……………」

背筋が凍るような想いがした。彼の低いトーンの声に、恐怖すら感じた。

明後日を見るような眼力の無さに、動揺を隠せずにした。

「……………私じゃ、ダメ……………なんですか……………」

ダメじゃない。オレは君に助けて欲しい。もう一度抱きしめて欲しい。

心を強く保てるような声をかけて欲しい。こっちまで明るくなくなってしまうような照れくさい笑顔を見せて欲しい。

でも、やっぱりダメなんだ。

君のこと、嫌いなんかじゃない。

その気持ちも嬉しい、すごく嬉しかった。だけどダメだ。

何故ならオレは……………あいつのことが……………。

「……オレは、あいつのことが……」
「え……う？」

あいつ？ あいつって誰だ？

……ああ、そうか……そうだったのか。

オレ、まだあいつのこと、好きだったんだ。

だから、この子の気持ちに答えられなかったんだ。

「……………」

「じゅ、ジュン君……大丈夫ですか？ 顔色……悪いですよ……？」

「……………って……………」

「……え？」

「帰って……………」

「……………」

やってしまった。ああ……やってしまった。

折角わざわざ会いに来てくれたのに。自分のことを想って一大決心してくれたかもしれないのに。

「帰って……ちよっと、気分が優れないんだ……………」

「……………はい……………」

病み上がりである彼の言うことならば従う他にない。

いきなりアポ無しで尋ねてきた瑛子は、申し訳なきと無理やり彼に迫ってしまったことの罪悪感を抱え、席を立った。

「いきなり押しかけてきてしまって、ごめんなさい……………」

「……………」

「あ、あの、またお見舞いに来て……いいですか？」

また来れるかどうかはわからないが、僅かな希望に縋るかのよう
に、ベッドで俯く彼に声をかける。

しかし、彼から帰ってきたのは無言の返事だった。

「……………ごめんなさい……………ッ」

「……………」

バツが悪いように、逃げるように瑛子は彼の病室を後にする。

慌てて扉の取っ手に手をかけて、大変な後ろめたさを感じながら開き、音が響かないようにゆっくりと閉める。

この板切れ一枚の壁が、とてつもなく固く、分厚いようなものに感じられた。

恐らく、この扉を開けることは今後二度と出来ないのだろうという、絶望に押しつぶされそうになりながら、珪子は声を殺して涙を流し続けた。

「……………」

絶対に助けると決めたのに、力になると決めたのに、どんなこともすると決めたのに。

彼は遠くへ行ってしまった。

いや、もしかしたら自分の方から遠ざけてしまったのかもしれない。

そもそも、自分なんか誰かの力になるだなんておこがましかったのかもしれない。

こんなにも自分が無力だなんて思わなかった。

「……………シリカ、どうしたの……………」

「……………」

准の病室の扉の前で膝から崩れ落ちている珪子に、散歩から帰ってきた木綿季が声を掛けた。

そんな彼女を心配し、木綿季はそっと駆け寄り、その小さい肩に手を添える。

「ジュンと……………会えなかったの？」

「……………」

違う、と首を横に振って否定の意を伝える。

「……………大丈夫？ 立てる……………」

「……………」

何も考えたくなかった。

何もしたくなかった。

全部、自分の思い上がりだった。

自分なら力になれると勘違いしてた。

でもそれは違った。

自分はフラれたんだ。彼の気持ちはその人に向いていたからだ。だから、最初からどうしようもなかったんだ。

「……し、シリカ……」

「……………」

何故なら、彼が好きなのは、目の前のこの人だからだ。

第84話く葛藤く

西暦2026年12月21日(月) 午後12:17

東京都西東京市田無 帰還者学校学食

「……シリカ、来ないわね……」

「うん……そうだね……」

名古屋旅行から関東へと帰ってきた一行、登校組はいつも通り勉学に精を出すため、学び舎へと足を運んでいる。

時刻は丁度お昼時。この日は明日奈の母親も忙しくて昼食を作るゆとりがなかったためか、親友の里香と一緒に学食へと赴いていた。

格安で美味しい色々な学食メニューに舌鼓を打ち、昼休みを満喫している生徒が多い中、里香と明日奈の二人だけは浮かない表情を浮かべ続けている。

「風邪、やっぱりよくなかったのかしら……」

「病み上がりなのに無理させちゃったのかな……」

「でも、具合が悪そうには見えなかったのよね……」

「うん……」

あの後、泣き崩れた瑛子を木綿季は必死に支えながら病院を後にした。

何故彼女が泣いているか最初は理解出来なかったが、その理由は後々分かってしまった。

単純に准に会えなかったという事実だけならば、今日は残念だったねで済む問題だからである。

しかし、この彼女の尋常ではない悲しみ方、絶望に押しつぶされそうな様相から、普通ではないことがあの病室で起こったことが伺える。

そして、何が起こってしまったのかも、おおよその想像がついてしまっていた。

しかし、敢えて木綿季は何も聞かず、時の流れるままに瑛子をそっ

としておいた。

今、自分が首を突っ込むべきではないと感じていたからだ。

「……LINEも未読だし、ALOにもログインしないし、電話も出ないし……」

「そういえばシリカちゃん、チェックインした後、木綿季とどこか出掛けてたけど……」

「え？ あ、ああ……そういえばなんか部屋で寝てるなんて言ってたけど、あいつ出掛けてたの？」

「そうみたい。木綿季にシリカちゃんの具合聞いたら、ちよつと外を散歩してくるって……」

「……何それ、ちよつと変じゃない……？」

「うーん……」

何故、あの二人だけで出掛けたのだろう。調子の良くない圭子連れ出してまで、大切な用があったのだろうか。

そもそもにして、今回の名古屋旅行も若干ゴリ押しめいた面があった。

今日の明日で名古屋に、それも日が変わる直前にだ。それに旅行当日、和人から木綿季たちの行動に目を瞑ってほしいと言付けがあった。

恐らくはそのことと繋がりがあろうだろう。

「ねえ、リズ？」

「ん、なあに？」

「……名古屋、楽しかったよね？」

「え？ 楽しかったわよ？ 当たり前でしょ？」

「そう、だよね……」

かつて自分も木綿季に会いに、横浜へと足を運んだことがあった。当日に和人に、おそらくはここにいるだろうと住所の書かれた紙を渡され、その情報だけを頼りに向かった。

そんな過去がある明日奈は、少しだけ今回の旅行の裏が、なんとなく読めてきた。

「……？ 変な明日奈ね」

「んーん、なんでもないのでっ」
それならば、尚更今木綿季と瑛子を問いただすことはない。彼女らの目的も、おそらくは自分と同じかもしれないのだから。

同日 午後13：20 東京都立川市柏町 綾野邸

「……………」
自宅の二階、自室のベッドで横たわっている少女が一人。死んだ魚のような目で天井をひたすら眺め続け、時計の針の進む音だけを聞いている。

やっと辿り着いた遠方の地、名古屋にて愛しの彼に会えたと言うのに、彼は彼女を拒否した。いや、拒絶と言ってもいいだろう。

彼への想いが強かったが故に、その精神的ショックは計り知れないものとなっていた。

「……………」

瑛子は学校を休んでいた。

もうしばらくすればすぐに冬休みがやってくると言うのに、彼女は家から出ようとはしなかった。

そんな気分ではない、それどころではない。今、自分が何をしたらいいのかすらわからない。

むしろ、このまま消えてしまいたいと、自分で自分を追い詰めてしまっている。

それほど彼からの拒絶がショックだったのか、今朝は朝ごはんにも手を付けていないし始末。

両親も何かあったのかと心配になり、閉じこもる彼女の部屋の扉の

前で必死に声を掛けたのだが、瑠子は聞く耳を持たなかった。

ピロロン――

ポップなサウンドが聞こえたのは、彼女のスマートフォンからだ。

今朝から、いや昨夜から明日奈や里香、木綿季からメッセージや着信が何件も来ている。

しかし、彼女はそれらを開こうとはしなかった。木綿季からのメッセージは特に。

「……ジュン君は木綿季さんのことが……」

彼は木綿季に、未だ捨てきれぬ好意を寄せている。互いに余命を宣告され、叶わぬ恋と割り切っていたため告白もしていない。

むしろ、悟りあっていた。自分たちは恋をしてはいけない。

どうせした所で、志半ばで朽ち果て、どちらかを悲しませるだけ。それがわかっていた。

しかし、運命の歯車は、思わぬ方向に狂い始めた。

先立ったクロービス、メリダ、そしてランがこっちに来るなど言わんばかりに、スリーピング・ナイツのメンバーの病状悪化に歯止めがかかった。

中でも目覚しいほどの回復を見せたのが、ユウキとシウネー、そしてジュンだ。

治るのを諦めていたわけではないが、それでもいざ治ってしまうと、それからどうしたらいいのかと思ってしまうもの。

致し方ない、それまで自分は死ぬと思っていたからだ。

快方に向かっているさなか、改めてこの気持ちを伝えようと思った矢先。

もう彼女は違う人に振り向いていた。

やり場のないやるせなさをずっと胸に抱えていた。病魔と戦い続けてこられたのも、彼女の健気さと元氣の影響を受けたからだ。

そんな長年積み重なってきた想いが、簡単に断ち切れるわけがない。

彼は今、そんな葛藤と闘っていたのだ。

「……私じゃ、力に……なれない……」

改めて自分はなんて無力なのだろうと、自己嫌悪に浸ってしまった
瑠子は、再び悔しさの涙で枕を濡らした。

「ジュンくん……ジュンくん……ッ」

彼への未練は、かつてアインクラッドで失恋したキリトの時よりも
大きかった。

准を隣で一生支えてみせると心に強く誓ったことが相反してしま
い、そのショックは相当なものになっていた。

彼への想いは変わらない。今からでも力になりたいと思っている。

しかし、彼は彼女を拒絶した。

A L Oのフレンド欄もオフラインのまま。どうせなら連絡先やL
I N Eのアカウントを聞いておくべきだった。

いや、そうだとしても彼女からのコンタクトに応えたかどうかは疑
問だ。

「ジュン……くん……」

泣き疲れた彼女は、眠りにつこうとしていた。もう、寝て全てを忘
れてしまいたい。全部無かったことにしてしまいたい。

そんなことを考えながら目をゆっくりと閉じる、何も考えないよう
にし、ベッドに身を委ねる。

彼にまた会いたい、その気持ちを捨てられないまま――。

同日 午後16:17

愛知県名古屋市昭和区鶴舞町 名古屋大学医学部付属病院 リハ
ビリテーシヨンルーム

「……………」

スポーツドリンクを片手に、備え付けのベンチに腰掛けて一人の少年が、他の患者さんのリハビリ模様を眺めている。

いつもはしっかりとご飯を食べ、勉強を進め、体を鍛えるために精を出していたリハビリも一生懸命に臨んでた准だったが、この日は何一つ朝から手を出していなかった。

ここにきたのもリハビリのためではなく、病室から抜け出せば少しはモヤモヤした気持ちが晴れるだろうと思つてのことだ。

しかし、事態はそんなに単純ではない。

わざわざ自分のために来てくれた瑛子の好意を裏切ってしまったこと。自分のエゴを押し付けて、傷付けてしまったこと。

そして、未だに木綿季への想いを捨て切れない自分自身の女々しさに、情けなさを感じていたのだ。

(嫌われたよな……)

実際、彼も瑛子には好意を寄せている。

こんなにも自分に近付いてくれた友達、それも女の子なんていなかったし、それ以上に自分のことを考え、想つてくれている。

それなのに、彼女の気持ちを拒んでしまった。

ならば、あそこで彼女を受け入れるべきだったのか。

そこに対してもモヤモヤを抱えてしまっている。

紺野木綿季、現在は桐ヶ谷木綿季。

キリトこと桐ヶ谷和人の恋人で、血の繋がりはないものの、実の家族である。

彼は、彼女の命を救った。一緒に生きていきたいという気持ちだけで、行動を起こした。

結果、その気持ちは成就した。

器が違う。病魔に振り回されているだけの自分とは、器が違いすぎる。

彼は頭もいい、実力もある。何もかもが自分とは差があり過ぎた。

そんな彼に、自分なんかがかかなうわけがない。彼女を取られるのも当然だ。

だって、自分はその土俵にすら立とうとしなかったのだから。横綱に挑もうとする序ノ口力士がいるだろうか、いや、いない。それと一緒に一緒だ。

キリトさんには勝てない、それはわかっている。しかし、それならば何故、この胸のモヤモヤは取れないのだろう。

大体、あの時に言ったじゃないか。彼女のことを幸せにしてください。

そこで未練なぞ断ち切るべきだったのだ。

それを何を今更、いつまでも引きずって、いじいじして、来てくれた彼女を傷付けてまで意地を張って……。

「どうしたの？ 少年」

「……え」

突如、俯いて頭を抱えている准に声をかける者がいた。

声が聞こえた方に顔を向けると、そこには少し前、彼にお年寄りのことで注意を促したお姉さんの姿があった。

「あ、ど、どうも……」

「頭なんか抱えちゃって、悩み事かな？」

「……べ、別にそんなんじゃない？」

「……ふーん……」

嘘をつくのが苦手な准は、お姉さんからの問答にたじたじだ。

目線を合わせようとしない彼の隣に、さも当然のように腰を下ろす。

そして大きいため息を履いたかと思えば「話してごらん」と、全てを見透かしているかのように白状を促す。

「……」

「大丈夫、言いふらしたりなんかしないって。それにお姉さんにしかわからないことだったりするかもしれないじゃない？」

「……」

何故だろう、何故かこの人には逆らえない。逆らったところで、後で何かされてしまいそうな気がする。

なにかって、それはわからないが。

「……あ、あの」

「なあに？」

「その……お姉さんは、人を好きになったこと、ありますか……？」

「……いきなりだねえ……」

話してごらんと言っただのはあなたじゃないかと言いつつになつたが、ここはぐつと堪える。

するとお姉さんはすつと立ち上がり、近場の自販機で缶コーヒーを購入し、それを片手に持ちながら准の隣へと戻る。

本当ならお酒でもひっかけながら話したいところなのだろう。

しかし、ここは病院だ。なので大人の味であるコーヒーをチョイスしたに違いない。

「んー、あるよ？ それも……何回もね」

「……そう、なんですか……」

「一応、告白されたこともあつたよ？」

「へ、へえ……」

それとなく探るように聞いている准だが、質問の内容から、今自分が何のことで悩んでいるかを暴露していることに気付いていなかった。

たつた一度の質問で察したお姉さんは、缶コーヒーを口につけながら、「うーん……」と声を漏らしながら、どう答えようか考えをまとめているようだ。

「……」

「好きな人、出来たの？」

「……え、えつと……」

「……ふーん……」

「……」

「言いつらいこと？」

「……そ、それは……」

短くない沈黙の時間が流れる。

今、自分が置かれた状況をしっかりと説明するのは少し難しい。

色々なことが複雑に絡まりすぎている。

何から話したらいいのか、何を伝えたらいいのか、彼にはわからなかった。

「じゃあさ、一つだけ教えて？」

「ひ、一つだけ……？」

「……その子のこと、どう思ってるの？」

「そ……それ、は……」

「……………」

言うまでもない、好きだ。

でも、今更どの面下げてそんなこと言えようか。第一、未だにあいつへの想いを捨てきれずにいるのに、彼女の隣に立つ資格なんかあるはずがない。

でも、でも。

あの時感じた、感じてしまった。

彼女が病室から去った後、全てを失ってしまったような感覚を。

心が抉られたような想いを、生きる活力を奪われるような気持ちを。

「オレ、オレ……ッ」

涙が溢れ出す。後悔の涙が。

罪悪感と自己嫌悪感の塊に押し潰されそうになる。何故あんなことを言ってしまったのか。なんで下手な意地を、下らない見栄を張ってしまったのか。

結果、彼女を傷付け、裏切った。

何が男の意地だ、女の子を泣かせるなんて、最低だ。

「あの子の気持ち……うら、ぎって……ッ」

「……………」

「傷付けて……変な意地……張っちゃって……ッ」

「……………」

准は流し続けた、後悔の涙を。

自分が本当にするべきだったことを、今、思い知った。

いなくなつてわかる、人の大切さというものを、今知ったのだ。

命の重さをよく知ってるはずの自分が、知ったような口を聞いてし

まった。

手に握っている空き缶を握りつぶしながら、全身を後悔に震わせている。

「じゃあさ、することは一つじゃない？」

「……………」

中に入ってるコーヒーを全て飲みほし、ぷはっと息づくとき、それをダストボックスに捨てようと、ベンチを立ち上がる。

空き缶を手でくるくる回しながら、口を開く。

「まず、謝んな。男らしく。その子への気持ちの本物なら」

「……………」

「んでもって、どこか心の引っかかることがあるなら、けじめつけな」

「……………」

前回の柔らかい物腰とは違って、かなりサバサバした口調で、お姉さんはアドバイスを促した。

恐らく、これが彼女の素なのだろう。短いアドバイスだったが、難しいことを考えるのが苦手な准にとっては、それだけで十分な回答だった。

「悩むのも結構、考えるのも結構。だけどね……………」

「……………」

「行動しなきゃ、始まんないんだよ。いつまでもうじうじしてんじやないよ」

「……………ッ」

「……………なーんてね、じゃあまたね、少年」

それだけ言い残すと、空き缶をダストボックスに投げ捨て、お姉さんはリハビリテーションルームを退室していった。

若干気だるそうな態度をしていることから、身体の調子はいいのだろう。

「……………」

今、自分は何をするべきなんだろう。

リハビリ？ 勉強？ いや、違う。

違うけど違う。大事なのはそこじゃない。

本当にすべきこと、しなくてはいけないこと。今やらないと一生後悔することになること。

なんだ、そんなことか。だったら考えるまでもないじゃないか。難しく考える必要なんてない、思い立ったことをやればいいだけじゃないか。

あはは、そんな簡単なことに気付けないなんて……オレって、本当にバカだ……。

本当に、ほんとうに……ばかだ……。

「……………」

少年は立ち上がった。前へ進むために。

もう、迷わないために。

自分の気持ちに素直になるために。

未練を断ち切るために。

本当に必要なものを離さないために。

「オレはシリカが……好きだ……ッ」

同日 午後16:31 愛知県名古屋市昭和区鶴舞町 名古屋大学
医学部付属病院 准の病室

「——ッ」

リハビリテーションルームからこの病室まで、歩行器を使いなが

ら逸る気持ちを抑えれず、やや早歩き気味で必死に歩いてきた。

本当は走りたい気持ちを抑えながら、怪我をしてしまうかもしれないのに、我先にとやってきた。

彼女に会うために、会って謝るために、そして本当の気持ちを伝えるために。

「はぁ……はぁッ」

呼吸が乱れる中、扉を開き中へと入る。

自室のベッドの傍らのシェルフに置いてあるアミスファイアに視線をやる。

今、彼女にコンタクトを取る手段はALOでしかない。

藁をも掴む思いでベッドまで辿り着き、歩行器をぶつきらぼうに傍らに追いやり、アミスファイアを手取る。

部屋の壁に背を向け、両手でアミスファイアを掴みながら、少しずつ呼吸を落ち着ける。

身体に異常が見受けられると、アミスファイアがダイブを弾いてしまふからだ。

「……よし」

二十秒ほど間を置き、十分に呼吸と精神状態が落ち着いたところで、アミスファイアを被る。

LANは正常、バッテリーも充分。

「リンク・ス——」

しかし、彼は物凄く重要なことを忘れてしまっていた。

ついこの前拒絶したばかりの彼女が、ログインしているだろうか。

自分なら、とてもそんな気分にはならないはずだ。深く傷つき、塞ぎ込み、もしかしたら学校へも行かずに部屋にとじこもるかもしれない。

「……し、しまった……どうすれば……」

焦るあまりに肝心なことを見落としていた。

こんなことなら、LINEのアカウントくらい交換しておくんだっ
た。

そうすれば気軽にメッセージのやり取りが出来るし、そこから電話

番号だって分かったかもしれない。

「……ん、電話、番号……？」

電話番号ならわかるかもしれない。連絡先を聞いてはいないが、もしかしたら、もしかしたら可能性がある。

そこから辿っていった方が確率が高い。

「くっ……」

身体を無理やり起こして、再び歩行器に手を伸ばす。先程ぶつきらぼうに追いやったせい、部屋の隅っこに置かれてしまっている。

壁に手を這わせながら、転ばないように脚に力を込めて、ゆっくり確実に歩を進める。

落ち着け、落ち着くん。怪我をしたら元も子もない。二度と彼女に会えなくなるかもしれない。

「……ッ」

普通に動けないことを今日ほど恨んだことはなかった。こんなことならもつと必死になってリハビリをしておくんだ。

悔しさを胸にしまい込みながらどうにか歩行器まで辿り着くと、准は部屋の扉を開け、廊下に出るとゆっくりエレベーターを目指して歩いていった。

「はあ、はあ……」

彼がめざしているのは一階にあるフロントだ。彼の予想が正しければ、目的のものはそこにある。

処分されることなく、適切に処理をされてれば、必ず残っているはずだ。

その希望に縋るかのように、必死に歩行器で自分の体重を支えながら、目的地へと急ぐ。

「はあ……はア……」

まだ十分に身体能力は戻ってはいない。建物の中を出歩くだけで精一杯だ。

よくよく考えたら、ナースコールなりで看護師を呼んで、車椅子を出してもらった方がよかったかもしれない。

だが、今はそんなことどうでもいい。とにかく、とにかく彼女に連絡を取りたい。

「あ、あのっ」

「はい、何でしょう」

「さ、303号室の高坂です。ち、ちょっと調べてもらいたいことがあるんですけど……ッ」

「わ、わかりました。でもその前にそこに座りましょう、ほら……」
受付の看護師に肩を借りて、ゆっくりと近くのベンチへと連れられる。

スタミナはほとんど使い果たしており、肩で息をしながら、立っているのがやつとな状態だ。

そんな彼をそのままにしておけないと、看護師は優しくゆっくりとベンチまで連れ添う。

「それで、ご要件は……？」

「はあ、はあ……あの、一昨日オレのお見舞いに来た、あの子の……」
「あの子……？」

しまった、シリカと伝えて探し出せるはずがない。当然彼女はリアルネームで記録簿に名前を残してはるはずだ。

彼女の本名は何だったか。自己紹介したはずなのに……好きな人の名前すら覚えてないのか、なんて情けない。

「そ、そうだ……あの、303号室にお見舞いに来てくれた人の記録簿ってわかりますか、一昨日のやつ……」

「き、記録簿ですか？」

「は、はい。どうしても連絡を取りたい人がいて……」

「……少し、待ってくださいね」

「……あ、ありがとうございます……」

准の目論見はこうだ。

彼の入院している病院は面会に来た際に、記録簿に名前などを書くことになっている。

一昔のものはアナログで、紙にボールペンで記録していたが、この病院はタッチペンとタブレットでデータ管理をしているのだ。

書き込む項目は四箇所、訪問先と患者の本名。訪問者の本名と、緊急連絡先だ。

この緊急連絡先の項目に、瑛子の電話番号が記載されてると読んだのである。

個人情報厳しく管理されてる中、教えて貰えるかどうかはわからないが、もうここに頼る他ないのである。

「お待たせしました」

「――」

看護師の声掛けに素早く反応をすると、その方向に目線をやる。

看護師の片手にはタブレットが握られており、データはどうやらそこに保存されているようだ。

「303号室へのご面会の方はお二人、いらしてますね。お友達……ですか？」

「ふ、二人ですか……？」

「ええ、お二人です。それ以外のデータですと御家族の方しかいらしておりませんね」

「み、見せてもらえますか……」

「……本当はダメですけど、特別ですよ？」

本来ならば個人情報の開示は患者であっても厳禁、言語道断である。

准の焦っているような様相、必死な態度を見て、看護師も察したようだ。

たまたま友達の連絡先を聞き忘れていた、程度に思われたようで、存外にあっさり教えてもらうことが出来た。

「あ、ありがとうございますっ」

看護師からタブレットを受け取ると、訪問者の項目に目をやる。

自分への訪問者は二人、いるようだ。一人は言うまでもない。しかし、気になっていたのはもう一人の方だ。

(き、桐ヶ谷……木綿季、あ、あいつやっぱり来てたのかよ……)

何となく来院していた気がしたが、まさか本当に来ていたとは思わなかった准は、半分呆れ、半分嬉しく思っていた。

どうせなら会ってみたいものだったが。

(ということとは、こっちのが……シリカ?)

綾野珪子と書かれた欄をタップする。するとそこには彼女の緊急連絡先、即ち携帯の電話番号が記されていた。

「け、けいこ……あやの、けいこ……」

そこに書かれた名前、そして電話番号を穴のあくほど見つめる。これが彼女の本名。もう二度と忘れるものかと、頭に焼き付ける。

電話番号も素早く自身のスマートフォンでメモを残し、絶対に忘れないようにする。

「……ありがとうございます、看護師さん……」

「もう、よろしいんですか?」

「は、はい……大丈夫です」

「わかりました、また何かあったら仰ってくださいね」

優しい笑顔で受け答えをすると、看護師は准からタブレットを受け取り、ゆつくりとした足取りでフロントへと戻っていった。

ベンチに座っていたおかげでスタミナもある程度回復出来た准は、次の目的地へと急ぐ。

(病院の中じゃスマホは使えない……公衆電話を探さない……)

様々な医療機器を電波から守る為、原則的に院内は携帯電話の使用は禁止されている。

准も、基本的に自室以外では機内モードで持ち歩いているほどだ。

ここから部屋に戻って通話をするよりも、ここで公衆電話を探した

方が早い。

「……………ッ」

もはや絶滅寸前とまで言われてる公衆電話だが、病院などの大きい施設でなら何ヶ所か置いてある。

どうしても連絡を取らないといけない時、携帯電話が使えない人のためと、設置されてることがあるのだ。

携帯電話がなかった時代は、家族と連絡を取り合うために、駅前の公衆電話の前に行列が出来ていた程だ。これも時代の流れなのだろう。

「あつた、あれだ…………」

スタンダードな台に乗っている、上から下まで緑一色の公衆電話を視界に捉えると、准はゆっくりその方へと進む。

使用は硬貨のみで、百円、五十円、十円しか使えない。

少し前はテレホンカードなるものも使えたが、今ではその投入口も無くなってしまった。

逸る気持ちを抑えながら公衆電話に辿り着くと、小銭入れから百円を何枚か取り出す。

コイン投入口に一枚入れ、受話器を左手で取り、右手で電話番号を入力する。

(シリカ……………ッ)

コール音が受話器から聞こえてくる。

何度も何度も、その音が鳴り響く。しかし、どれだけ待っても、電話の相手は出てくれない。

しかし、彼は諦めない。受話器を置き、コインが返金されると、またそれを取り出し、再び投入。

またもや手入力で番号を入れて、コールする。

それを何度も、何度も何度も繰り返し返す。

彼女が出てくれるまで、あの元気が出てくる声を聞くまで、諦めずに何度もかけ続ける。

(シリカ……………シリカ……………ッ)

同日同時刻 東京都立川市柏町 綾野邸

「……………」

あれから少しばかりの時間が経ち、瑠子は眠りから覚めていた。何も考えずに天井を眺め、時間が経過するのだけを待っている。

時折着信やメッセージ、メールなど様々な形でスマートフォンが揺れる。

最初は逐一内容を通覧で確認していたが、途中からどうでもよくなり、全てスルーしてしまっていた。

「……………」

また、スマートフォンがぶるぶると震えている。揺れが長いことから着信のようだ。

相手は誰だろうか、明日奈か、里香か、はたまた木綿季か。

(朝からすごい鳴ってる…………でも、今はそんな気分じゃない…………)

いつも通りに背を向け、スルーしようとする。着信は何回か来ているが、一度スルーすればしばらくはかかってこない。

そのあと、何十分かスパンを挟んで、メールやメッセージ、そして着信と、今日はずっとその調子だ。

しかし、今回は違った。

着信だけが、止まることなく継続して瑠子の部屋に鳴り響いていたのである。

すぐに収まるだろうと、瑠子も最初は今まで通りスルーを決め込んでいたが、様子が違うことにしばらくして気がついた。

「……リズさん、かな、しつこいな……」

音の正体を確かめるべくモゾモゾと身体を動かして、スマートフォンのディスプレイを見る。

そこに映っていた正体は、明日奈でも里香でも、ましてや木綿季でもなかった。

「え……な、なに、公衆電話……」

初めて見る光景だ。いつもは家族か帰還者学校の仲間からしかかかってこない。

その他にかかってきたとしても迷惑電話か、イタズラ電話のパターンだ。

しかし、今回はそのどれでもない。番号が全く表示されない公衆電話からの着信だった。

「……これって……」

どう対応したらいいかわからない珪子は、とりあえず身体を起し、画面をまじまじと見る。

一体、この電話の正体は誰なのだろうか。イタズラにしては随分回りくどい。

探し出す方が難しいと言われてる公衆電話からわざわざ自分の電話にかけてくるなんて、とんな人なのだろう。

「……………」

おそろおそろ、受話器のアイコンをタップする。すると雑音とともに、向こうの音声が届いてきた。

『……………』

「……………ッ」

出たはいいが、何も聞こえない。

案の定、イタズラ電話なのだろうか。しばらく様子を伺っていた珪子だったが、段々と気味が悪くなり耳からスマートフォンを離し、通話を辞めようとした時だった。

『も、もしもし……シリカッ』

「……………え……………」

第85話くけじめく

西暦2026年12月21日(月) 午後16:31

東京都立川市柏町 綾野邸

「え……」

『……シリカ……だよね……?』

突如自分の携帯にかかったきた一本の電話。それも相手は公衆電話だ。

怪しさと若干の恐怖心から出るのを躊躇ってた瑠子だが、恐る恐る応対してみると、何やらスピーカーからはとても暖かい気持ちにさせてくれる声が聞こえてきた。

『……もしかして、ジュン……くん、ですか……?』

『……よ、よかった……通じた、番号合ってた……』

記録簿に記載されていた番号が間違い電話ではないのと、無事に彼女とコンタクトを取れた准が、電話の向こう側で安堵の息を漏らす。雲を掴むような手がかりだったが、なんとか細い糸を紡ぐことに成功したのだ。

『ど、どうして……ジュンくんが……?』

『え、えっと……一昨日お見舞いに来てくれた時の面会者記録簿を見せてもらったんだ。そこから……』

『そ、そうだったんですか……』

今一番会いたかった彼からのまさかの電撃着信に驚きを隠せない瑠子は、あまりの突然のことに実感がわかないでいた。

まさか瑠子も彼本人から直接連絡が来るとは思わなかつのからだ。何から話そう、何を伝えよう。

話したいことがたくさんある。伝えたいことも山ほどある。

お互いに頭の中で一度伝えたいことを整理する。気持ちを落ち着け、支離滅裂にならないように整頓し、大きく息を吸ってゆつくりと口を開く。

「あ、あのっ」

『あ、あのっ』

一字一句、違うことなく全く同じタイミングで声を掛けた。

少しだけ気ままずくなってしまい、黙ってしまおう。気ままずいが、だからといってこのまま沈黙を続ける訳にも行かない。

「ジユ、ジユンくんから……どうぞ?」

『あ、いや……シリカから、言つて……?』

「へっ!? わ、私から……ですか?」

受話器の向こうからでもわかってしまうくらいたじたじになってしまいいながら、少し小っ恥ずかしそうにしながらお言葉に甘え、伝えたいことを口にする。

「……また話せて嬉しいです。もう二度と……話せないと思ってましたから……」

『……ごめん、本当にごめん。オレ……君の気持ちも考えないで、傷付けて……』

「そ、そんな……あ、謝らないでくださいっ」

『で、でも……シリカは好意で言ってくれたのに、それを無下にしてしまったのはオレの方だし……』

「い、いえ、私もちよつと押し付けがましかったかなって、思つてて……」

互いに自分が悪かったと謙虚さを通り越して物凄く下手に出る。

准は自分が変に意地を貼りすぎたことを、珪子は少し強引すぎたかもしれないことを反省し、頭を下げた。

そこに、以前のような険悪なムードはまるで感じられない。彼の気持ちが素直になれたおかげか、非常に柔らかい雰囲気となつて、会話は弾んでいった。

『……シリカ、あのね……君に伝えたいことが……あるんだ』

「……はい」

再び心臓の鼓動が早くなつていくのがわかる。こんなに緊張する

のは、抗がん剤治療を始める前か、新薬投与を試す時以来だったろうか。

あの時とは違う感覚で、筋肉が張り詰めていく。

『……明日の夕方……学校が終わってからでいい。リーダーが決闘を申し込んだあの孤島に来て貰える……?』

「え……えつと、一本木の生えてる、あの小島ですか?」

『うん、そう。17時に、そこで待ってるから……』

「17時に……」

『む、無理……かな』

「いいえ、そんなことないです! 必ず……必ず行きます!」

一瞬、頭の中で予定は無いかと思い返し、何も無いことを確認すると、即座に瑛子は肯定の返事を返した。

いや、例え他に用事があったとしても、彼女はキャンセルし、彼の用事を優先させるであろう。

学校行事が終わるのはいつも15時過ぎ。校舎のある西東京市から立川市に帰るのに一時間もかからないだろう。

『……ありがとう。本当は今すぐにでも会いたい。でも……今じゃダメなんだ』

「い、今じゃ……だめ?」

『うん、ごめんね。でもこれが……オレの最後のワガママだから……』

「い、いえ、そんなことないです! こうしてまたお話出来るだけでも、とっても嬉しいです!」

『し、シリカ……』

准は改めて自分が幸せ者だということを感じた。こんなにも自分のことを想ってくれる人がいたなんて、と。

もっと早く素直に、自分の気持ちに正直になっただけだと、悔しさともどかしさを感じていた。

『あ、そうだ。オレの番号……教えとくね?』

「あ、は……はい!」

『病院だからあんまり気軽に通話は出来ないけど……メッセージなら、いつでも大丈夫だから……』

それでも、嬉しいものは嬉しい。今までALOでお互い都合の合う時だけしか会えなかったのが、これで気軽に連絡し合えるのだから。メモした番号をまじまじと見つめ、嬉しそうに笑顔をこぼす。

塞ぎ込んだ気分が一転、それはそれは晴れやかなものへと変わっていった。

「ありがとうございます、えへへ……登録しておきますね？」

『う、うん、こちらこそ……ありがとうございます』

「い、いえ！ わ、私はそんな……」

照れくさいのか嬉しくて舞い上がってるのか、彼の声掛けの一つ一つが嬉しくてかなわない珪子であった。

明日までお預けではあるが、彼とまた会える。出来ることならまた名古屋まで足を運びたいところだが、場所が場所なだけに簡単にはいかない。

『それじゃあ……また明日、ALOで……』

「は、はい！ 絶対に……絶対にいきます！」

『……うん、明日っ』

彼のその声を聞き終えると、耳からスマートフォンを離し、通話終了のアイコンをタップする。

ものの数分で事態は大きく動き始めた。

彼にとつてはもちろん、珪子にとつても運命を大きく動かすようなターニングポイントになるであろう。

「……はふっ」

ずっと手に握っていて温かくなっているスマートフォンを両手で握りしめながら、天井を見つめてそつと息を吐く。

ため息ではない。安心感の籠ったほつとした息だ。

まだ現実味がない。まるで夢を見ているようだ。誰があのようなことを予想出来ただろうか。

彼女にとつては寝耳に水な出来事だったが、ここ最近のモヤモヤはおかげで全て吹っ飛んでいた。

あとは明日、今まで通り学校へ行き、学務をこなし、無事に帰宅して約束を守るだけ。

「…………ジュンくん、ありがとう…………」

同日 午後16:48
愛知県名古屋市昭和区鶴舞町 名古屋大学医学部付属病院 30
3号室

「…………うん、急でごめん。時間は取らせないから…………それじゃ」
誰かと通話を終えた准が、スマートフォンを片手に画面をタップする。

彼の入院しているここ303号室は、重要な精密機械が置いてある中央棟とは離れており、一部では携帯電話の使用が許可されてる。もちろん、彼の病室も同じだ。

「……………」
ここ数日、新しいことが次から次へと立て続けに起こり、目まぐるしい日々の連続だ。
いつも通りにALOで遊び、病院食を食べ、独学で勉強し、リハビリで身体を鍛える。

そんな変わらない毎日が続くのかと思っていた。将来への不安は拭えないが、何も考えずに今やれることをやるしかない、そう思っていた。

だが、運命というのはわからないものだ。
たった一人の女の子との出会いが、これからの自分の人生を大きく

変えようとしているのかもしれないのだから。

「シリカ……か……」

不思議な女の子だ。

優しくて元気いっぱい、人当たりがいい。

気配りもできて、何より一緒にいて安心出来る。

そんな子から好意を寄せられている。

正直、嬉しい。

こんな自分にあんな素敵なお友達がアプローチしてきてくれたのだから。

むしろ自分では釣り合いが取れないのではないかと思っ
ているくらいだ。

いつからだろう、彼女に惹かれたのは。

多分、二人きりで遊んだあの時からだ。

キュートな見た目からは想像出来ないような強さと大胆さ、そして
計算高い戦い方。

SAOサイバーだつてことは聞いていた。

だからあの仮想世界での身のこなしなんだと納得した。

そして、命懸けの世界を生き延びたからこそ、普通の生活の大切さ
を、命の尊さを理解していたんだ。

そんな彼女が大丈夫と、ずっとずっと元気づけてくれていた。

だから……彼女の手を握れば、きっと未来への道が開ける筈だ。

彼女を信じる。それが、今自分の出来ることで、するべきことだ。

「だから……待ってて、シリカ……」

西暦2026年 12月22日 (火) 午後15:54

東京都立川市幸町 西武拝島線 玉川上水駅

「……………」

一人の女子高生が列車から降りるや否や、周りの乗客の目もくれず、一目散に改札口へと急いでいる。

左手には学校鞆、右手には定期入れを握りしめながら、他のお客さんにぶつからないよう小走りで、改札を抜ける。

定期をタッチし、駅舎を出ると南へ走る。

多摩モノレールの高架下の歩道を、息が切れるほどの速さで走り抜ける。

体育の授業でもこんなに無我夢中で走ったことなどなかった。

学校で、昨日はどうしたの、心配してたんだよ等声をかけられたが、軽く笑ってお茶を濁した。

授業の遅れは内容を教えて貰い復習したし、体調も問題ないことも改めて伝えた。

学校生活面でのアフターケアはバッチリだ。

あと今日残されたことは、彼との約束事だけだ。

学生、営業マン、子連れの主婦、様々な人々の間を縫うように進む。危ないとはわかっていても気持ちを抑えずにはいられない。

自宅のある隣町まで数百メートル。持久マラソンの距離と比べたらなんてことない。

「約束の時間まで……一時間っ。間に合う……間に合うッ」

何度も曲がり角を通り、人との接触を避けながら、ようやく自分の知ってる色の屋根が見えてきた。

門扉を開け、ぶつきらぼうに閉めて、鍵を取りだし、扉を開ける。

靴をだらしなく脱ぎ捨て、自室がある階段を上がる。

その際、飼い猫のピナが「にゃーお」とご主人様の帰宅を迎える。

「ただいまっ、ピナっ」

忘れててごめんねと言わんばかりに通りすがりのピナにただいまをする。

それを尻目に駆け上がり、自室の扉を乱暴に開ける。整頓された部屋の片隅に学校鞆を放り投げ、シエルフの上に置かれているアミュスファイアへと手を伸ばす。

私服に着替える時間も勿体ない。

多少制服にシワが出来てしまうかもしれないが、致し方ない。その時はその時だ。

「はあ……はあ、ふう……」

少しずつ呼吸を整える。逸る気持ちを押さえつける。呼吸が落ちていくと、ゆつくりと仰向けにベッドで横になり、頭部に装着する。

後は、あの言葉を口にするだけだ。

「……リンク……スタート!」

そのワードをアミュスファイアが認識すると、たちまち瑋子の意識は現実世界から仮想世界へと委ねられる。

行くべき場所はあの場所。

かつて病気を克服した少女が華麗に剣舞を披露していた、あの小島だ。

(ジュンくん、今行きます……)

同日 午後16:13 アルヴ Heim オンライン 新生アインクラッド 第24層 転移門広場

実に四日ぶりの仮想世界の街並みは、丁度夕暮れに染まっていた。空都ラインから転移してきたケットシー族の女の子は翅を広げて目的の場所へと急ぐ。

約束の時間にはまだ早い。しかし、早めに到着して困ることは無いはずだ。

何より身体が疼く。いてもたってもいられない。一刻も早く、あの場所へと辿り着きたい。

今、彼女の頭はそんな気持ちでいっぱいだった。

「見えましたッ」

かつて、「絶剣」という二つ名で呼ばれた女の子が、絶剣たる所以を生み出した場所。

現在ではちよつとしたパワースポットだとか、恋愛スポットだとか、プレイヤー間でまことしやかに囁かれてる噂が、あるとかないか。

地表二メートル程の高さで翅を仕舞い、華麗に大地に脚をつけると、シリカは小島の方角に目をやる。

途中にある栈橋を進み、その先にいるはずの少年を探す。

「……ジュンくん、まだ来てないのかな……」

探せど探せど、彼の姿はどこにも見当たらない。大樹の枝に止まっているのかと真上を見渡してみるが、そのアテも外れたようだ。

「やっぱり……早く来すぎてしまったんですね……」

「そんなことないよ」

聞き覚えのある声。聞きたかったあの声。

その声の主を探すため、あちらこちら見て回る。だが見えてる範囲には彼の姿はない。

慌てて困っていると、大樹の木陰からゆっくりと重鎧独特の金属音が鳴り響く。

その方へと目をやると、ずっと会いたかった燃えるような情熱を持つ、真っ赤な彼の姿があった。

「ジュン……くん……」

「こんにちは、シリカ」

彼の姿を見た瞬間、思考よりも身体が先に動いた。スポーツ選手が条件反射で身体を動かしてしまうのと同じように、勝手に彼の方へと脚が向かっていた。

そんな真つ直ぐ向かってくる彼女を、ジyunは優しく迎え入れた。赤いアバターを揺らし、シリカは必死に彼に抱きついていていた。

「ジyunくん……ジyunくん、ジyunくん……ッ」

「シリカ……ごめん、本当にごめんね……」

もう二度と、あんな目には合わせない。もう二度と、悲しませなにかしない。

そしてもう二度と、彼女を傷付けない。

細くてすぐ壊れてしまいそうな彼女のアバターを、そつと抱き返す。

仮想の身体だが、互いの温もりが伝わってくるような気がした。

温かさが、優しさが、柔らかさが、感覚を通して伝わってくる。

「会いたかった……会いたかったです、ずつと……ッ」

「……オレもだよ、シリカ……」

言いたいことが山ほどある。伝えたい想いが、どうしても直接伝えたい想いが、ある。

互いの温もりを十分伝え合った二人は抱擁を解くと、少し身体を離す。

シリカとジyunの目には、大粒の涙が浮かんでいた。

現実世界と違い、この世界は感情の赴くままアバターが反応する。

悲しい時、嬉しい時、悔しい時、涙を我慢しようと思っても出来ないのだ。

「オレ、君に伝えないといけないことがあるんだ。それを……是非、聞いてもらいたい」

「はい……はいッ」

感情が爆発してしまっているシリカは、絶えず目尻から雫が滴り落ちてきている。

気持ちも昂りすぎてしまい、思うようにアバターをコントロール出

来ていない。

「オレ……ずっと胸に引つかかっていることがあったんだ」

「は、はい……」

「でもそれは……つい最近のものじゃない、もっとなんと前から感じてたことだったんだ」

「ずっと……前から、ですか……?」

「……うん、今日はそのモヤモヤに……決着をつけないといけない」

「……え?」

彼がそう言い終わると小島の入り口、即ち棧橋の方にプレイヤーの気配が感じられた。

気配は二人分。その正体は二人がよく知る人物、スプリガンの少年と、インプの少女であった。

二人は棧橋を渡り、ゆつくりと小島に近付くと無表情のまま、シリカとジュンに視線を向ける。

「え……どうして……?」

「……オレが声を掛けたんだよ。この時間にここに来てくれって」

「じゅ、ジュンくんが……で、でもどうして……」

今の状況が理解出来ない。何故シリトとユウキがこの場所にいるのか。

これからジュンから大切な話があるんじゃないのか。どうして二人が関係しているんだ。

そして、どうして彼が呼んだのだ。

「剣を取ってください、キリトさん」

「……そういう約束だったもんな……」

「え……な、何をして……」

「……シリカ、こっち」

ユウキはサバサバしたような態度で大樹の根元へと、シリカの手を引く。

これからここで何が起るのか、それがまるで全て知っているかのように。

そして、どうしてこうなっているのか、その理由も悟っているよう

な様相だ。

「ゆ、ユウキさん……」

「シリカ、目を背けちゃダメだよ」

「……え？」

「……これから起こる全てのことから、目を背けないで」

「……」

何が何だかわからない。でも、これからあの二人が剣を交えようとしていることだけは、ただならぬ雰囲気から察することが出来た。

二人の表情は、決して穏やかと呼べるようなものではなく、物々しい空気を発していた。

正に一触即発、そんなピリピリした雰囲気すら見て取れる。

決闘デュエルの申請をし、それが受け入れられると、二人は淡々と闘うための準備を進めていった。その合間に、カウントが数字を刻んでいく。モードは制限時間無し、完全決着だ。

「キリトさん、これは今からリーダーを、あなたからどうこうするか、そういうんじゃない」

「……ああ」

「これは……完全にオレのワガママに付き合わせてるだけです。まず……それを謝っておきます」

「俺は別に構わない」

「でも……こうでもしないと、オレの胸のモヤモヤは取れないんです……」

「……そうか……」

「ジュンの、最後のワガママ。」

不器用で真っ直ぐで、どこか抜けてる少年のワガママ。

そんな名前の通り、純粋な心を持つ少年の最後のワガママ。

「こい、ジュンッ！」

「……でやあああッ!!」

「せやああッ!!」

カウントがゼロになった瞬間、二刀と大剣、二つの刃のぶつかる金属音が小島周辺に響き渡る。

何度も、何度も何度もぶつかり合い、火花が散る。その火花が彼らの真剣な瞳の輝きを照らしていた。

「ジュンくん……キリトさん……」

「……………」

心配そうに見つめるシリカの両肩に、ユウキがそつと手を添える。

そして切なそうに、悟ったように、二人の闘いを見守り続ける。

「シリカは、どっちを応援するの？」

「えっ……………」

「……ねえ、どっちを応援するの？」

「わ、私は……………」

ユウキからの問いかけでシリカにも、なんとなくどうしてこうなったのか理解出来てきたようだ。

昨日言っていた最後のワガママ、それは――

ユウキと結ばれたキリトと闘い、彼の彼女に対する想いの強さを、剣を通して確かめることであつたのだ。

彼の強さは理解してるつもりだ。しかしそれだけでは気持ちに踏ん切りがつかない。

難しいことを考えるのが苦手な彼は、彼と直接闘うことで、肌でその想いを感じ取ろうとしていたのだ。

そうすれば、もうキツパリユウキのことは諦められる。頭ではなく心で理解し、自分の失恋に決着をつけることが出来る。そう悟つただ。

「ボクはキリトを応援する。だってボク……キリトが好きだもん」

「……………」

「……シリカはどうなのさ」

「……………ッ」

そんなの決まってる、言うまでもない。

目の前の彼は、ALO最強と言われているスプリガンの少年に怯むことなく立ち向かっている。

病気だけでなく、何事にも立ち向かうための勇気を持っている。

「遅いッ！」

「……ッ！」

左手に握られた黒剣・ユナイティウオークスで、投球のアンダーピッチングのように下方方向から繰り出された斬撃は、ジユンの纏っている重鎧に亀裂を作り、刃先がインナーまで達し、彼のHPを大きく削り取る。

「うあ……ッ」

ALO最速と謳われたユウキの斬撃をいなし、圧倒的手数とトップスピードから繰り出される非常に重みのあるキリトの斬撃を見切るのには、ジユンでも難しい芸当だった。

スリーピング・ナイツは各々がダイブ経験が非常に長く、常人のプレイヤーと並べても比較にならないような実力をもつ集団だ。

あの弱気なタルケンでさえ、戦闘になると頼もしい姿を見せるほど。

その中でもトップクラスの實力を持つのが、ユウキ、ジユン、ノリだ。

特にユウキとジユンは感覚の導くまま剣を振るってたこともあり、肩を並べるほど強かった。その二人も、初代リーダーであるランの前では赤ん坊同然だったと言うが。

しかしそんな強さを無慈悲にも、キリトは「やり込み」という、ただの経験だけではカバー出来ない壁で立ち塞がる。

プレイ歴が長ければいいものではない。知識、レベル、スキル、そのゲームが好きだからこそ続けられる「やり込み」、そしてゲームに対する「想い」が、彼の強さの秘密なのだ。

「ジユンくん……ッ」

言うまでもなく、ジユンは本気だ。本気でキリトに闘いを挑んでいる。

しかし状況は劣勢。キリトの手数と攻撃の重さに押され、大剣使いとしては異例の剣撃の早さを持つジユンでも、モーションが長いことが仇となり、キリトと絶望的に相性が悪かった。

スーパードアーマー機能があるソードスキルを発動しようにも、そのモーションを取ることすら許されない状況だ。

「ジュン、負けちゃうよ？ いいの？」

「あ……あ……」

残り体力はイエローに突入し、まもなくレッドに到達しそうな勢いだ。

膠着状態にすらならない、ほぼ一方的な状態だ。

「うぐ……くそ……ッ」

「まだだッ！」

手練同士の決闘デュエルとなると、迂闊なソードスキルの発動は敗北を意味する。

発生フレイム、全体動作フレイム、硬直差、全てを把握し、有利フレイムを理解しているからだ。

下手に発動させようものなら、全ていなされ、硬直後にソードスキル返しを喰らい、敗北は必至となる。

故に、ジュンは攻めあぐねているのだ。

仮にキリトがソードスキルを発動させたとしても、彼には「スキル・コネクト」がある。

この存在が、ジュンにソードスキルを使わせないための何よりの牽制となっていたのだ。

「……キリト！ 頑張れッ！」

「……………」

愛しのユウキからの応援を受けると、体力がレッドゾーンに突入しそうなジュンに決着を付けるべく、ソードスキルのモーションを取る。

彼の剣が青白く光り輝き、ソードスキル発動の合図を見せる。水平に構えられた刀身、放とうとしているソードスキルは「ホリゾンタル・スクウエア」だ。

モーションを完成させると、その剣先がジュンへと向けられる。

「……………」

かなわない、とてもかなわない。

勝てないとは思っていたが、ここまで圧倒的な実力差だとは思わなかった。

体力は半分も減らせてない。本気で挑めば、一矢報いることくらいは出来ると思っていた。

しかし、それすら許して貰えなかった。

彼は強すぎる。自分なんかじゃ到底勝てるわけがない。

ソードスキルが迫ってくる。この斬撃を浴びれば決着だ。自分の変な見栄っぱりも、カッコ悪い形で終わってしまう。

あの子の前で、ちよつとくらいカッコイイ所見せれるかな、なんて思ったのが間違いだった。

変な意地を張ってしまった。最高にカッコ悪いや……。

「負けないでください！ ジュンくんッ!!」

「ッ!!」

斬られる刹那、彼の目に映ったのは、必死で自分に声を届けるシリカの姿であった。

喉から声を必死にしばりだし、彼に届くよう力を込めて叫び上げた。

「ジュンくん！ 勝って……勝ってくださいッ！」

——不思議だった。

諦めて、負けを受け入れようとしていたのに、あの子の声を聞いた瞬間、急に何がなんでも負けたくなってきた。

でも、今からこの剣撃をいなせるだろうか。

いや、いなせるかどうかは問題じゃない、やるしかないんだ。

自分の意地は……こんなもんじゃ曲がらないッ。

「ぐ……うおおあッ！」

大剣を持つ手に再び力が湧いた。

柄を即座に握り直し、目の前のソードスキルをいなすために、意地で対抗する。

(なッ——)

その時、有り得ないものをキリトは目撃する。

外側に弾かれ、どう見ても剣による防御が間に合わない体勢で、

ジュンは大剣をシステム上不可能なほど早い速度で戻したのだ。

ホリゾンタル・スクウェアの一撃目をギリギリブロックすると、今

度は左手も柄に添え、大剣ソードスキル「サイクロン」を発動させる。自分の周囲三百六十度全ての方向を薙ぎ払うようにカバーする、範囲系ソードスキルだ。

ザコ敵に群がられた時に最も効果を発揮する技となっている。

この三百六十度という角度の特性を利用し、同じように相手の周りを四角を描くように周りながら斬撃を浴びせるホリゾンタル・スクウェアを相殺しようと言うのだ。

（この早さとモーシヨン……システム上有り得ない。まさか……彼も……ッ）

キリト自身が経験のあることだった。

あまりにも強い想いの力は、システムの力を大きく凌駕する。

かつての自分がヒースクリフこと茅場晶彦に対して見せた現象だ。

キリトは、それが今自分の目の前で起こっていることを即座に理解した。

その時のジュンの動きは、まるで自分がスローモーシヨンで動いているのに、彼だけは正常な速度で動いているように見えたという。

「ずあああッ！」

強引という言い方も上等に見えてしまうほど、ジュンの起こした行動はデタラメなものだった。

有り得ない体勢、有り得ないモーシヨン、有り得ない物理演算と位置関係。

傍から見ればチートツールを使ったと疑われそうな事象が、そこでは起きていた。

「ぬグウッ！」

片手直剣と大剣、まともにかち合えば当然大剣に軍配が上がる。

ソードスキル同士の激突ともあれば、尚更体力の削り値に答えが出る。

事実、ジュンよりもキリトの方が大きく体力を削られており、大剣の重い斬撃を受ければリメインライト化してしまいそうなほどの、デンジャーゾーンへと追い詰められていた。

「が……ああアアッ！」

「であアアアッ！」

ホリゾンタル・スクウェアの三撃目までは、ジユンの強引なソードスキルで相殺されていた。

あと一撃、あと一撃をいなす。

その時に勝算がある。例えばスキルコネクトを使われようとも、それをやり遂げれば、そのまま勝てる。

「ぜアアアッ！」

「ぐ、ウウウッ！」

四撃目がかち合った刹那、事態は起こった。

キリトが長年愛用していた片手直剣、ユナイティ・ウオークスの刀身が、響くような金属音と共に、砕け散っていた。

「な——ッ」

彼が旧アインクラッド時代にやっていたシステム外スキル、「アーム・ブラスト」。

それをジユンは強引に成し遂げた、というわけだ。

修復不可能なほどのダメージを負ったのか、ユナイティ・ウオークスは白く光り輝き、ポリゴン片となって仮想世界の空に消えていった。

「キリトッ！」

「しまっ……」

それを勝機と見たか、ジユンはサイクロンのモーションをそのまま利用した斬撃を浴びせようと、ソードスキルの最中にも関わらず強引にキリトに詰め寄った。

この斬撃が届けば、ソードスキルの硬直が発生する前に決着がつく。

「い……けええええッ!!」

「ジユンくんッ!!」

——次回、小さな春編 最終回「リトル・スプリングス」

第86話くリトル・スプリングス

西暦2026年 12月22日 (火) 午後16:25

アルヴヘイムオンライン 新生アインクラッド 第24層 大樹のある小島

相手の獲物は砕いた。もう片方の剣でスキル・コネクトを使われようが関係ない。

そこでソードスキルを発動するより、自分の剣先が到達する方が確実に早い。

あの子の気持ちに伝えるため、自分の未練を断ち切るため、迷いを吹っ切るため。

この一撃に全てを賭ける。

「オレは——ッ」

「——ッ」

「オレは……リー^ユダー^ウが好きだった！」

「……ッ」

「セリーン・ガーデンであった時から、ずっとずっと……ッ！」

「……」

「ずっと……憧れてたッ!!」

全ての迷いと未練、そして惚れたあの子の想いを、全てこの剣に込める。

この一撃で、自分は前へ進んでみせる。

あの子と、前へ、歩いていく——ッ。

「だああアアアッ!!」

「——グッ！」

「ジュンくんッ！」

「キリトッ!!」

誰もがジュンの勝利を確信した。

シリカも、ユウキも、そしてジュン自身も勝利は揺るぎないものだ
と思っていた。

キリトの反撃は間に合わない。そう確固たる自信があった。

「なッ——」

動くはずのない、キリトの左手。

ソードスキルの硬直でスキル・コネクトを使える右手はともかく、
左手は絶対に動かせないはずなのだ。

その左手が何故かモーションをおこしている。

その手は拳を作り、白く光り輝くと、真っ直ぐにジュンの腹部へと
向けられる。

「オゴ——ッ」

ナツクル系ソードスキル「スマツシユ・ナツクル」。全ソードスキル
の中でも屈指の発生の早いナツクル技の中で、最速の発生フレイムを
誇るソードスキルである。

キリトの左手は、何故かこれを発動させていた。

「あ……あッ」

大剣の切っ先よりも早く、全STRを乗せた左の拳はジュンの重鎧
の亀裂を砕き、みぞおちの部分へと吸い込まれていた。

「ジュンくん——ッ！」

スマツシユ・ナツクルの直撃を受けたジュンの体力は、一気にレッ
ドゾーンから減少し、やがては全てを失い、全損した。

システムメツセージで「WINNER Kirito」の表示とと
もに、対戦結果が表示された。

「オレの、ま、け……です。やっぱつえーや、キリト……さん、は……」

愛用している大剣を地面にガシャンという音とともに落とすと、
清々しい顔を浮かべながら、ジュンのアバターは半透明になり、燃え
上がる魂の形をしたリメインライトとなって、消滅した。

キリトの残り体力はレッドゾーン。ジュンの剣が届いていれば、間
違いなく勝敗は逆転していたことだろう。

動かないはずのキリトの左手が動いた理由。それは……そもそも
彼の左手の硬直が消え去ったからだ。

ソードスキルの硬直はシステム上、絶対に発生するものだ。しかし、運営も把握していないシステム外スキルが二つ存在する。一つはキリトだけでなく、ユウキも会得しているスキル・コネクト。そしてもう一つは、アーム・ブラストによって武器を砕かれ、完全フリーになった手から繰り出す「ブラスト・キャンセル」だ。装備してる武器を砕かれる、それは即ち撃ち合いによる相殺負けを意味する。

相殺負けをすると、相手の武器の重量、STRのステータス値によって硬直が発生する。

それは武器を砕かれても継続するはずなのだが……実は武器を破壊されてから2フレームだけ、動ける時間が設けられてるのだ。

その与えられた2フレームの僅かな刹那、キリトは即座に左手を動かし、モーシヨンを取り、ソードスキルを発動させたというわけだ。

これも、彼のやり込みがなせる技であった。

「……はア、はア……」

疲労の色がみてとれるキリトは、危機を脱してくれた自分の左手を見つめる。

実戦で試すのは初めてだったが、なんとか上手くいってくれた。

右手に握っていたエクスカリバーを鞘に戻し、額の汗を腕で拭う。

「——ジュンくんツ!!」

悲痛な叫びを轟かせながら、彼のリメインライトへと駆け寄る。

男のプライドを賭けて戦った、自分だけのヒーローの元へと必死に急ぐ。

「……ジュンくん……っ」

深紅に燃え上がるリメインライトを優しく包み込む。

試合に負けはしたが、彼は己の全てを賭けて闘った。自分のためでもあるが、何より彼女のために闘ったのだ。

精一杯やれることはやり尽くした。一片の悔いもないことだろう。

「シリカ……彼のこと、頼めるかい……?」

「……は、はい……」

かつてアインクラッドでの初恋の男の子が、今、自分が惚れてる男の子と剣を交えた。

心境的には物凄く複雑だ。

「あのね、シリカ？ 落ち着いたらでいいから……後で、ボクたちのホームに来てくれる……？」

「え……ほ、ホームにですか……？」

「ああ、ジユンのことも踏まえて、これからのことを話し合おうと思うんだ」

「……わ、わかりました……」

それだけ言い残すとキリトとユウキは翅を広げ、地面を蹴り転移門を指し、飛び去っていった。

A.L.Oで最強を誇るコンビが、肩を並べている。シリカは改めて、自分が物凄い人達と友人なんだなと痛感する。

「ジユンくん……ッ」

蘇生アイテム、「世界樹の朝露」をストレージからオブジェクト化し、その雫をジユンのリメインライトに注ぐ。

優しい光とともにリメインライトを包み込むと、炎の形が変わっていき、光り輝きながらジユンのアバターの形を型どっていく。

「ジユンくん、ジユンくんッ！」

「……………」

蘇生されたジユンがゆっくり目を開けると、上半身を支えてくれるケットシーの女の子の姿が見えた。

「……シリカ……」

「ジユン……くん……っ」

大粒の涙を流しながら、自分だけのヒーローを抱き締める。

彼の装備は先程の決闘でボロボロだ。背中デューエルの傷は剣士の恥、どこかでそのような言葉を聞いた気がするが、彼の背中にはどこにもそんな傷はない。

全てキリトの斬撃を真正面から受け止めたのだ。このボロボロの鎧こそが、彼の功績といっても過言ではないだろう。

全てに立ち向かった証、彼が勇気を振り絞った証だ。

「……ゴメンねシリカ、負けちゃった……」

「そんな……気にしないでください……」

「……カッコ悪いところ、見せちゃったね、あはは……」

「そんなことないです！ ジュンくん……とつてもカッコよかったです……！」

「ほ、ホントに……？」

シリカの目から滴り落ちた涙が、ジュンの頬へと吸い込まれる。

その落ちたところを指先で拭う。

「オレ……またシリカを悲しませちゃった……？」

「ち、違うんですっ、こ、これは……」

「……………」

「ジュン……く、ンツ!?!」

身体が勝手に動いた。

本能が彼女を求めてしまった。

「——ッ」

「ん、ンンツ——!」

自分を覗き込む泣き顔のシリカの後頭部に手を添えると、ジュンはそっと自分の方へと抱き寄せ、その可愛らしい唇に、自分の唇を重ねた。

半ば強引だったが、シリカは拒むことなくそのまま彼を受け入れた。

最初こそ驚いたものの、彼女も目を閉じ、彼との接吻を感じ続ける。

熱い、でも優しい。いつまでも続けていたい。お互いを一番感じる事が出来る。

二人の熱い時間は、一分ほど続いた。

「——っ」

「あ……」

お互いに、顔は真っ赤だ。ほんのちよっぴりの気まずさがあったが、恥ずかしさがそれを打ち消していた。

時折見せる彼の大胆さが、物の見事にシリカを狙い撃ったのだ。

「私のファーストキス、奪われちゃいました……」

「そう、だったんだ……」

自分の初めてを奪われたシリカは、顔を赤らめながらも「えへへ」と彼女らしい可愛い笑みを浮かべていた。

そんな彼女のキュートな微笑みを独り占めしてるジュンは、さらに顔を真っ赤にさせて、少しだけ目を逸らす。

しかし、その度に視界の先にシリカが入り込んでくるため、完全にいたちごっこになっていた。

しかし何度もそんなやり取りをしていたせいも、だんだんとおかしな気持ちになってきて、気が付けば二人ともあははと、面白おかしく笑い合っていた。

「……シリカ、好きだ……」

「私も、ジュンくんが大好きです……っ」

夕陽が遥か地平線に沈み、夕闇に空が染められた小島で、二人は再び、その唇を重ねた。

同日 午後17:13 アルヴ Heim オンライン
新生アインクラッド 第2層湖畔エリア キリトのログハウス

「……ユウキ、ココア入ったぞ」

「あ、うん。ありがと、キリト」

仲間内で勝手にここの名物にされている、キリト特製ココアの入ったカップを受け取る。

誰が淹れても味に大差はないのだが、このハウスでキリトが淹れると、また違った味わいになっている気がする。あくまで気だが。

「……はふ、美味し……」

「そりやあどうも」

季節は冬。寒いこの時期に温かいココアはありがたい。季節がないALOではあまり関係ないかもしれないが、それでも嬉しいものは嬉しい。

自分のカップを持つと、キリトはユウキの隣に腰かける。付け合せにアスナに作ってもらったクッキーもあり、ちよつとしたおやつタイムだ。

「……ユウキはさ」

「ん、なあに？」

「ジユンの気持ち、気付いてたのか……？」

「……うん、多分、昔から……ずっと」

「………そうか」

なんとも言えない気持ちになる。

ユウキに好意を寄せていた人は自分しかいないと思っていた。

しかしいた、それもはるか昔から。

悲しいすれ違いが生んだこととはいえ、キリトはユウキを取り巻く人間関係に妙なモヤモヤ感を抱いていた。

「……もしかして、妬いてる？」

「別に……」

「妬いてるんだ？」

「……そんなことないっての」

妙なところで扱いが難しくなるキリトの態度に、くすくすとユウキは笑みを浮かべる。

アホ毛をびよこんとさせながら彼の顔を覗き込むと、若干頬をムスツとさせながら肘をついている彼の表情を見ることが出来た。

「素直じゃないんだからー」

「……………うるさいぞ」

正直、ユウキにとってヤキモチを妬いてももらえるのは嬉しかった。それだけ自分のことを好きでいてくれていてくれるということだし、しっかり異性として見てくれてるといふことだからだ。

そんな珍しい態度のキリトの肩に自分の首を預け、彼の空いてる手をギュッと握る。

「……………大丈夫だよ。ボク、キリトのことしか見てないから……………」

「……………ユウキ……………」

「むしろ、キリトがいてくれなきゃ、ボク……………嫌だ……………」

そう言っつて、ユウキはキリトに身を寄せる。こんな甘いくる彼女も随分久しぶりだ。

拗ねていた自分が少しだけ恥ずかしくなったキリトは、そんな彼女の好意に甘えるとする。

「安心しろって、俺はどこにもいかないから……………」

「……………うん」

目を閉じ、キリトの体温を感じ取る。一番大好きな温かさ。

一番頼りにしてる温かさ。安心させてくれる温かさ。

この温かさがあれば、自分はどこまでも頑張れる。

「……………ユウキ」

「……………キリト」

互いの顔が近い。呼吸もしっかり感じられる。仮想世界のアバターでも、十分にわかる。

ユウキはゆっくり目を閉じ、待ち受ける。

彼女の背中に手を回し、ゆっくりとこちらに寄せて、顔を更に近付ける。

ゆっくり、ゆっくり……………今まで何回もしてきたように、今度も……………。

——コンコン。

「……………!?!」

「ツ!!」

瞬間、入り口の方から物音が響く。

キリトもユウキを肩を一瞬揺らし、音のした方へと視線をやる。

二人とも完全にそっちの世界に入っていたこともあり、必要以上に反応し、驚いてしまったようだ。

「キリトさん、ユウキさん、こんにちは……シリカです」

「あ、あ……ああ、シリカか。ちよつと待ってくれ、今開ける……」

「……ちえ……」

折角いい所だったのにと、今度はユウキが頬をふくれさせる。

家だとよく、何故か狙ってるだろうと思つたタイミングで、姉の直葉に邪魔をされるからだ。

だから二人きりになりやすいALOのホームでは、そういうことを心置き無く出来ると、そう思っていただけに実に悔しそうである。

ソファから立ち上がり、ゆつくりと扉の方へ向かう。かけていた鍵を外し、ドアノブを時計回りにひねる。

ガチャツという音とともに扉が開かれると、そこには先程まで小島で対面していた二人の姿があつた。

「やあ、ようこそいらつしやい、二人とも」

「は、はいっ、お邪魔しますっ」

「ど、どうも……」

先程まで本気でぶつかり合つてたということもあり、ジュンたちには少しだけ気まずさがあるようだ。

特に直接剣を交えたジュンは、初めてお邪魔するということもあり、シリカに比べてかなりカチンコチンのようだ。

「ふふ、そんなに固くならないでくれ。さあ、入ってくれ」

「あ、え、は……はいっ」

キリトは特に、この複雑な人間関係を設けたジュンに対して気遣いをするようだ。

昨日の敵は今日の友、という訳では無いが、直接剣を交えた仲だ。

まるで夕日の浜辺で拳で殴り合いの喧嘩をしたライバル同士のように、押せ押せで背中を押す。

「やつほー、シリカ、ジュンー!」

既に中でくつろいでるユウキも一応歓迎ムードだ。本当のところ、あと三分ほど遅れてきてくれたほうがありがたかったが仕方ない。うちに来てくれと伝えたのは他の誰でもない、ユウキ本人だからだ。

ソファとセットになつてテーブルの上には、既にシリカとジュンの分のココアが淹れられている。

アスナのクツキーも相まって甘いものに目がないシリカも、食い意地が張つてるジュンも、それを見て緊張が少し和らぐ。

「まあ、遠慮しないでくつろいでくれよ?」

「は、はいっ」

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて……」

何かと作戦会議や雑談などで、常日頃から溜まり場になつているキリトのホーム。

奇妙な居心地の良さというか、自分の家ではないのにどこか懐かしさを感じる。

皆そんな雰囲気が入ってるのか、ちよくちよく集まってはわいわいしている模様だ。

「二人は、もう……いいのかい? って、聞くのは野暮だったかな」

「あ、い、いえ、そんなことはっ」

「お陰様で……吹っ切れました」

「ふふ、そうなんだね?」

そこからは、他愛のない雑談が続いた。

一度緊張の糸がほぐれると、次から次へと話題が尽きなかった。

シリカとジュンが正式にお付き合いを始めたことや、お互いの将来の夢。

意外なことに、ジュンの将来の夢はキャンプインストラクターだという。

ユウキでも知らなかった事実だ。

普通の勉強をしている傍ら、キャンプ特集の雑誌を読んだり、中古で買ってもらった参考書に目を通したりと、彼なりに努力をしているようだった。

「それにしてもさ、ボク……ジュンにシリカがついててくれて、安心したよ」

「……え？」

「ジュンってば昔から危なっかしいところがあつたからさ、シリカが見ていてくれるなら、任せて平気かなって」

「そうなんですか？」

「ひ、人のこと言えた口かよ！ リーダーだつてよくランさんから怒られてただろ!？」

「む、昔のことでしょ!? い、今じゃボク落ち着いてるもん！」

ここにいるメンバーの中で最年長のキリトが、子供じみたやり取りを微笑ましく見守ってる。

内心ユウキの落ち着きがあるという発言に「そんなことないだろ」と心の中でツツコミをかける。

あくまで心の中で留めておく。表に出すと後々面倒なことになりかねないからだ。

「ま、まあまあお二人共、落ち着いてください！」

あまりに見かねたのか、シリカが仲裁に入る。彼女も何気にこのメンバーの中ではユウキよりも年齢が上だ。

見た目は幼くてもしつかりとした考えを持って行動出来る子なのである。

まだ言いたいことはあるようだったがシリカになだめられると、漸く二人はお互いの牙を引っ込める。

こんな言い合いを勃発させるあたり、まだまだ二人は子供のようだ。

「そうか……ジュンにもしつかりとした夢があるんだな？」

「は、はい。インストラクターになれなくても、アウトドア専門のショップを経営したりして、キャンプ関係の仕事をしたいなって……」

「素敵じゃないですか……ジュンくん」

「へへ、あ、ありがと」

「ボクもそう思う！ キャンプとか絶対楽しいもん！」

「あはは、そうだな。でもそれだとやっぱり復学して、しっかりと勉強しないといけないな」

「そ、そう……ですね」

「復学」というワードが話題に出た途端、ジュンは俯いてしまう。今、彼が一番頭を抱えている問題、それが復学先だ。

彼の家庭は元々裕福とは言えない上に、長年の入院費用もかさんでしまっている。

公立の学校ならともかく、私立校に入学などとても無理だ。

しかし、逆に言えばなんとかして入学まで漕ぎつけければ、あとは本人の頑張り次第で無限の可能性が広がっていく。

「……でもオレ、退院したら就職しようと思つてて……」

「し、就職!？」

「は、はい。中卒……というか、中学の学務もまともに出来てないオレが就ける仕事があるかはわからないですけど……」

「あ、いや。そ、そうじゃなくてだな……」

「ジュ、ジュン、シリカからあのこと聞いてないの!？」

「……へ、あのこと……?」

一体なんのこと? と言いたげに首を傾げてきよんとしているジュン。

みんなが何を指しているのか皆目見当もつかない。自分だけなんだか話に置いてけぼりを食らってしまったている。

視界をシリカに向けると、参ったなあと言わんばかりに困り顔で頭を人差し指でポリポリかいている彼女の姿があった。

「えつと……ずっと話そう話そうって思つてはいたんですけど……」

「なかなか機会がなかったのかい?」

「えつと……そう、ですね。そうかも……」

「あ、あの……すみません、一体何の話なんです……?」

「……そうだな、それなら俺から説明しよう」

そう言うと、キリトは何やら左手でメニューを操作し、ホロキーボードをカタカタ打ち込むと、とある画像と、何かの記事が書かれているページを表示させる。

そして、そのページを学校や企業のプレゼンテーションのように拡大すると、ジュンたちに見えやすいように目の前に移動させた。

「……キリトさん、これは？」

「長ったるい記事だから、重要なところだけ掻い摘んで説明するな？」

「は、はいっ」

この手のプレゼンテーションはキリトにとっては得意分野だ。

普段からメカトロなどの工学を専攻し、選択教科の講義で披露しているだけあって、実にわかりやすく丁寧に、誰が聞いても分かり良いように解説してくれる。

「俺やシリカ、アスナが元SAOサバイバーで、帰還者学校に通ってることは聞いてるよな？」

「は、はい、シリカから聞いてます」

「OK、元々この学校はSAO事件の被害者の子供たちの支援のために設けられた施設なんだ」

「校則も厳しくなくて、とても過ごしやすいところなんです！」

「まあ俺は今休学中なんだけどな。それで……この学校が、来年度から新しい取り組みを始めようとしてるんだ」

「あ、新しい取り組み……？」

そう、ここから話すことが最も重要だ。

この新しい取り組みのおかげで、ユウキも来年度から復学することが可能になったのだから。

いや、ユウキだけではない。様々な事情を抱えて進学が困難な子供たち、全ての味方になるかもしれない新しい制度、それは――。

「SAO被害者だけじゃなく……例えば事故や病気で学問から離れざるを得ない子供たちのために、俺たちと同じように支援することを決定したのさ」

「……え、し、支援って……」

「そう、支援だ」

キリトが何を伝えたいか、少しずつ理解してきたジュンは、心のざわつきを感じずにはいられなかった。

一番思い悩んでいた苦悩が、抱えていた問題が解決してしまうかも

しれないからだ。

そして、シリカが何故大丈夫と言い続けてくれていたか、その理由も同時にわかってきた。

「つまりね？　ボクやジュンみたいな子が、入試無用で入学出来る、つてことなんだ」

「……お、オレでも……？」

「はいっ、一緒に通えるんですよ！」

「……………」

渡りに船というのは、まさにこの事なのだろう。病気が治り、大切な人も出来て、おまけに憧れていた学校にも行くことが出来る。

こんなにも虫のいい話があった方がいいのだろうか。また都合のいい夢でも見てるんじゃないだろうか。

今までが辛いことの連続だったこともあり、なんだかイマイチ現実味を感じられない。

「……ジュンくん？　どうしました？」

「ラグってるのか？　名古屋からだし……」

しばらく無言の時間が流れる。

病院からのログインだということもあり、何らかの通信トラブルでも起きたのではないかと、心配そうに三人はジュンを見つめる。

「オレ……学校行けるの……？」

一粒の涙を零しながら、声を震わせて三人に問いかける。

「どうやらラグでも通信トラブルでもないようだ。」

「……うん、そうだよ？」

「みんなと一緒に……？」

「……ああ」

「本当に……？」

「……はい！　本当ですよ……！」

本当なのかと皆に問いかけても、全て肯定的な返事が返ってくる。安心させるための嘘ではない。全部本当のことだ。

なかなか実感がわかなかったジュンでも、ここまで温かい返事を貰い、ようやく自分の憧れてたことが出来るんだと、嬉し涙を流す。

「あ……あつ、あああ……ッ」

幼さを残す男の子の泣き声が、ログハウスに響く。時折感情が昂りすぎて息が詰まり、声にならない声を上げている。

そんな彼の心象を察してか、隣に座っているシリカも気を遣い、背中に手を回してぽんぽんと叩き、安心させる。

「一緒に頑張りましょ、ジュンくん……」

シリカからの声掛けに、力を込めて頷く。

生きてて良かった。諦めないで良かった。希望を捨てないで良かった。

彼の心は今、感謝の気持ちでいっぱいだ。

散々運命のいたずらに振り回されてきたが、ここにきてようやく、第二の人生を歩むことが出来るのだ。

シリカに続いてユウキ、そしてキリトもジュンに駆け寄り、彼の新たな門出を祝福する。

特にユウキは、彼には弟のような感情を持っているだけに、シリカと同じくらい嬉しかったようだ。

人は一人では絶対に生きていけない。手と手を取り合って、支え合っていかなければ、生きていけないのだ。

そう、彼らのように誰かが手を差し伸べれば、お互いが笑顔になれる結末が待っているはずだ。

温かくて、安心できる未来が、きっと、きっと――。

西暦2026年12月23日(水) 午後15:23

愛知県名古屋市昭和区鶴舞町

名古屋大学医学部附属病院 303号室

「こんにちは！ ジュンくん！」

とても明るくて元気のいい声が、病室に響き渡る。瑛子はまたもや名古屋に足を運んでいた。

実は今日、彼女の通う帰還者学校は終業式を迎え、二学期最後の通学日だったのだ。

故に、学校行事は午前中で終了。お昼からフリーとなった瑛子は帰宅後、新幹線のチケットを買い、彼の元へと馳せ参じたのだ。

「わあ、いらっしやいシリカ。本当に来てくれたんだ？」

「えへへ、当たり前じゃないですか！」

つい昨日恋人同士となったばかりで、早速現実世界の彼に会いに来た。

行動力もさることながら、彼への想いがそれほど強いということだ。

彼女が持ち歩いてる鞆には二泊分の着替えが入っている。

そう、明日はクリスマスイヴ。瑛子は早速大好きな彼と聖夜を過ごすそうと、一夜にして計画を練っていたのだ。

「ありがとう、学校は今日まで？」

「そうですよー。あとこれ……先生から貰ってきました」

そう言いながら瑛子はカバンからクリアファイルを取り出す。

プリント三十枚分の厚さを持ったファイルを受け取ると、准は「わざわざありがとう」とお礼を述べ、渡された資料に目を通す。

「(両親にはこれからですか?)」

「うん、まだ帰還者学校の話してないんだ。でも多分、いい返事をもらえると思う」

「それは良かったです。でも試験的な取り組みみたいなので、なるべく願書は早めに出した方がいいですよ？」

「あ、そ、そうだね。ゆくゆくはシリカのこともちろんと話さないといけないし……」

「わ、私のこと……っ」

そう意識した途端、わかりやすいくらいに珪子を顔を赤くし、俯いてしまう。

彼のご両親にご挨拶。どんな顔をして挨拶をすれば良いのだろう。

素直にお付き合いをさせていただいてます、だろうか？ それとも仲良くさせてもらってます、とベターな感じであるべきだろうか。

「し、シリカ？」

「ひゃいっ！ あ、ご、ごめんなさいっ」

恋愛ごとに敏感なお年頃の彼女は、ついついそういう話を深く考えがちだ。

まだ二人の関係は始まって一日しか経過していないというのに、珪子の中では話がかかなり未来の方に飛躍しすぎてしまっている。

「えへへ、大丈夫です。なんともないですよ？」

「そう？ それならいいけど……」

珪子が彼に渡したのは帰還者学校の新規入学希望者向けの資料だ。

今回の生徒募集は試験的な取り組みだということもあり、所属役員が在校生、もしくはその家族からの紹介のみとなっている。

定員は二クラス分、すなわち六十名となっている。紹介限定とはいえ、わずか六十名分しかないため、珪子の言った通り願書を提出するには早めの方が望ましい。

ちなみに、木綿季は和人の紹介で既に学校に提出済みだ。

「あとは住む場所だな……実家は遠いし、寮とかあるのかな」

「寮はありますか？ 日本全国から生徒が集まっていますから」

「あ、そうなんだ？ でも……オレに自活出来るかな……」

「集団生活ですから……ある程度はみんなでカバーし合うと思うんですけど。ちよつと不安ですよね……」

「う、うん……その頃には身体も戻ってると思うけど、大丈夫かなあ

……」

「……………」

資料の一枚一枚次々に目を通す准。彼はタブレット等のデジタル媒体より、こういった紙などのアナログな方が好みのようだ。

パラパラとめくっては、必要な情報はないかと隅から隅まで目を通す。

「……ジュンくん、あのつ、て……提案があるんですけど……いいですか？」

「ん、なにー？」

「あ、あの……ですね……」

声をかけるやいなや、急にもじもじと顔を赤らめ始める瑛子。

今日の彼女はどこか変だ。いや、恋人の目の前なのだからこういった気持ちになるのは致し方ないのかもしれないが、それを踏まえても少し変なのだ。

「……………」

「よ、よかつたら……その……」

「うん」

一度、大きく息を吸い、そしてまた大きく吐く。それと同時に心の準備もする。

これも、昨日から考えていたことだ。親に相談はしてある。

あとは彼に伝えるだけ。

「……うちから、一緒に通いませんか……？」

「……え、え……？」

「で、ですから……私の家、立川市って所で、帰還者学校のある西東京市から近いんです」

「え……あ、う、うん」

「だ、だから……うちから通うようにすれば、色々と便利かなって……」

「あ、う……えっと……」

自分が何を言ってるのかは重々承知している。大胆を通り越して問題をふっかけているのではないか？とも思っている。

彼氏彼女の関係を通り越して、下手したらすぐにでも家族になってしまうかもしれない。

時折とんでもない考えを思いつく瑠子であったが、今回のことに関しては至極、予想の斜め上の、更に斜め上をいく解答だった。

「お、オレがシリカの家で、一緒に暮らすって……こと？」

「……………そ、そういうことに……………」

「ひ、一つ屋根の下で…………？」

「は、はい……………」

「あ……………」

当然、こんな話を聞かされてしまったのは、准じゃなくても赤くなってしまう。

とどのつまり、瑠子は彼に同棲生活といってもいい話を持ち込んでいることになる。

よく、海外留学でホームステイ等の話を聞くことはあるが、いきなりそれを国内でやってしまおうという話だ。

「……………」

今、准の頭の中がフル回転している。

倫理的に問題は無いのか、世間体は平気なのか、そもそも彼女のご両親がなんと言うか。自分の両親も許可を出すのかどうか等、次から次へと思考が巡る。

実際、親戚の親御さんに子供を預けたりしながら通学させるといするのは聞かない話でもない。

共働きで家を留守にすることが多かったり、出張で海外に行ってる間、面倒をお願いすることも無きにしも非ず。

実家からの通学が難しい彼にとっては、正に今回の提案は結構美味しい話だ。

家賃、光熱費はかからず、通学先も近い。瑠子の実家は駅近ということもあり、遊びに出かけるのにも都合がいいと、至れり尽くせりだ。これ以上魅力的な話もないだろう。

「た、多分…………オレの親は大丈夫だと思う。昔から挑戦したいことはなんでもやらせてくれたし。でも……………」

「で、でも……？」

「……ほ、本当に……いいの？」

「も、も、もちろんです！」

「あ……う、うう……」

頬をポリポリとかきながら、実に困った表情を浮かべ、同時に自分の髪の毛をもみくちやにしてこれまでとは別の悩みに頭を抱えている。

いきなり返事をよこせといっても無理な問題なだけに、なかなか二つ返事でOKとは言いがたい。

しかし実のところ、彼も圭子と一緒に生活はしてみたかった。

何故なら彼の知っている圭子は、未だ仮想世界のシリカとしての彼女しか知らないからだ。

これを機会に彼女の知らないところをもっと知れるかもしれないと思うと、彼女からの提案に甘えたい面もあったのだ。

「……じゃ、じゃあ……よろしく、お願い……します……」

「は、はい……喜んで……っ」

季節は真冬、それも年末。まだまだこれからどんどん寒なる時期だ。

しかし、新しい門出を迎える若いこの二人には、これから小さな小さな春が一足先に始まろうとしていた。

甘酸っぱくも照れくさくて、そしてほんのり温かい、小さな小さな春が……。

ソードアート・オンライン マザーズ・ロザリオ ボクの生きる意
味短編 小さな春 —完—

第三章く復学編く

第87話く大掃除!?!く

西暦2026年12月18日(土) 午前9:18 埼玉県川越市宮

下町 桐ヶ谷邸

「うわ、これは本当に色んな物があるな……」

「ホントだー！ なんかすごいー！」

時は師走、今年も終わりを迎えようとする暮れの季節だ。

この時期はどここの家庭も大掃除という名の年内最後の大仕事に駆られている。

この桐ヶ谷邸もご多分にもれず、週末土曜日ということもあり、一家総出で家庭内の大片付けを決行しているというわけだった。

「お、お父さん……随分溜め込んだねえ……」

「と、言うよりはだ。多方面に手を出しすぎたツケが回ってきてる感じはするけどな」

和人、直葉、木綿季の桐ヶ谷三兄妹が見つめている先は、家屋の二階部分にある倉庫だ。

ここには主に、一家の大黒柱である峰嵩の私物が仕舞われている。その内容は様々で、スポーツ用品、書籍、骨董品、仕事で使ったのか私用で使ったのかよくわからない書面など、様々な物が保管されていた。

一見しっかりと整理整頓されてるようには見えるが、実際はここに仕舞った峰嵩本人にもどのようなように片付けたかおぼろげであり、普段の掃除も埃を取るくらいしかしていなかった。

更にはその簡単な掃除も翠、和人、直葉が順番にやっていただけなので、詳しい所は家族の誰も把握していないといった状況だ。

「倉庫って言うてもこれ、お父さんのモノばかりだよな？」

「そうみたいだ、一応必要かどうか後で聞くけど、とりあえず一度外に引っ張り出して見てもらわないとな」

「っていうかさ、ウチでよくわかってない場所ってここの倉庫くらい

なものだよね……?」

一体この物の山となってる倉庫のどこから手を出していいかわからない三人が、物静かな倉庫のあちこちを見つめる。

掃除というものは闇雲に始めても早く終わらない。何をどうするかある程度段取りを組み立てないと余計に散らかり、訳が分からなくなつて長引いてしまうのだ。

「とりあえず、書類だとかそういうのは本人に任せるとして、まずは趣味関連の物から何とかしていこうぜ」

「そうしますかあー」

「よーし、やるぞー!」

退院してから二ヶ月目、最初の一大イベントである大掃除に木綿季は気合十分だ。

両手に白の軍手をはめ、埃が舞つてもいいようにマスクもしつかりと装着し、手近にある重たくないものから作業を開始する。

「木綿季とスグは細々としたものを頼むな。重たそうなのは俺が片付けていくから」

「うん、わかったよ」

和人はゴルフバッグや古いチェスト等の重量物、木綿季や直葉は模様やラジカセ等の趣味系の物に手をかける。

倉庫内の何も無いスペースに邪魔にならないよう、ある程度カテゴリーを定めて仮置きしていく。

そんな中で、明らかに古過ぎて使えなくなったものや、完全に壊れてしまっているもの、劣化してしまつてるものを、更に分別していく。

恐らく捨てることになると思うが、価値があるかもしれないので最終的には峰嵩に確認を取つてからの処分となる予定だ。

「え、なにコレ? 写真集……?」

「昔のアイドルのかなー? 髪型に時代を感じるねー?」

「すごいカールがかかつてるね? 昭和のアイドルって感じがする!」

父親の昔の趣味の名残を見つけると、それを材料に花を咲かせる。作業は一時的に手が止まつてしまふが、こういった思いもよらぬも

のを掘り出し、それについて話が盛り上がるのも、大掃除の醍醐味だ。「おーい、あまり無駄話ばかりしていると日が暮れるぞー?」

「わ、わかってるってー」

黙々と大きいものを片付けてる長兄から注意を促されると書籍系のアイテムをカテゴリー別に分けていく。

写真集、ビジネス本、一昔の月刊経済誌、アウトドア本等、正に峰嵩が何を読んで生きてきたかというのが見て取れる。

「あれ? コレなんだろう?」

ふと、木綿季が本の影に隠れていた金属缶の様なものを見つけ、手に取った。

見た目はずんぐりしていて、平べったいペットボトルのようなもの、といえば伝わるだろうか。

頂上部分には若者が被るようなつば付きの帽子のような形の蓋がしてある。

手に取った感じ、重さはほとんど感じない。中に何か入っていたのだろうか?」

「ゆーきななにそれ? ジュースの缶?」

「なんだろう? でも多分何も入ってないと思うよ? すごく軽いし」

木綿季が直葉にそれを手渡す。直葉も初めて見るアイテムに首を斜めに傾げながら頭の上にハテナマークを浮かべている。

そして、先程から気になっていた蓋の様なものを摘み、上に引っ張ってみる。

すると、いとも簡単にそれは剥がされた。ペットボトルと違い、気をつけていないとすぐに無くしてしまいそうに小さい蓋だ。

「あ、とれたー」

「……あれ? これもしかしてガス缶?」

蓋が外れると、その中にはカセットコンロ等で使うミニガスボンベのような口が目に入った。

しかしこんなずんぐりした形状ではとてもカセットコンロには差し込めそうにない。

どうやって使うんだろう、と姉妹二人が首を傾げていると、また油

を売ってるなどため息を漏らしながら、和人が二人の様相を覗き込んできた。

「おいおい、二人とも……時間なくなるっていうのに……」

「ねえお兄ちゃん、これなんだかわかるー?」

徐に手に取ったそれを和人の前に差し出す。また文句を言われるよりも前に新たな話題を振って誤魔化してしまおう、といった企みも含めてその疑問に答えてもらおうと兄に期待の眼差しを向ける。

和人も和人で色々言いたいことはあったが、言い返したところで大掃除が前進する訳でもないので、渋々と妹たちからの疑問に応える。

早く片付けて午後はゆっくりしたいのに、という気持ちをグツと堪え、直葉からそれを渡されるとガス缶のようなものを見つめた。

「ああ……これか、これはOD缶だよ」

「おー、でいー、かん?」

「ああ、ようはガス缶だよ。ほら、カセットコンロに差し込むようなアレヤ」

どうやら木綿季たちの推察は正しかったようだ。これがガス缶であることも、コンロに取り付けて使用することも。

「でもこれ、どうやってもカタチが合わないと思うんだけど……」

「うんうん、こんなにまるまるとしてたらはまらないよね?」

「そりゃあ、この前の鍋で使ったようなコンロには使えないさ。これはアウトドア用の缶だからな」

「アウトドア用?」

普通のガス缶とどう違うのだろうと、姉妹揃って肩を並べながら引き続き和人からの答えに期待を寄せる。

「ああ、シングルバーナーって道具に装着させて使うんだよ。多分一通りのアイテムは揃ってると思うけど……」

「これで、お料理出来るの?」

「バーナーがあればな? 父さんが残してれば……」

「探そう! 和人!」

「……………」

また始まったと、半ば呆れた感情の視線を木綿季に向ける。

新しいことに興味を持つのは大いに結構なのだが、時と場合を考えて欲しいと、どう答えたらいいんだと頭をポリポリと人差し指で掻きながら大きく溜め息を吐く。

「あのな、今大掃除してるんだぞ……そんなこと」

「あたしも見てみたい！ 多分そつちかなー？」

兄の忠告など馬耳東風のように、今真つ先にやらなくてはいけない大掃除をほっぽりだし、まるでお宝探しをするように和人の片付けていた辺りを搜索し始める。

この瞬間、和人は午後にゆっくりしようとしていた計画が頓挫してしまうことを察していた。

「ま、待て待て！ ……そこは俺が綺麗に小分けしておいたんだぞ！」

額に流したくない汗を流しながら、妹たちの奇行に釘を刺そうとする。

この場の流れにむぎむぎ流されるわけにはいかない。なんとか彼女たちを諫めて、大掃除を進めなくては。

「でもー、気になっちゃうんだもんー」

「うんうん、お父さんの倉庫、色んなものが出てくるからさー」

「はあ……わかったわかった。じゃあこうしよう。その手の道具を見つけたら俺が外に出しておくから……」

「ホント？」

木綿季はともかく、直葉までこんなに食いつくとは思わなんだと、先行きの怪しい大掃除を前進させるべく妥協案を提示する。

ただでさえ時間のかかる大掃除をこんな訳の分からないゴタゴタで停滞させる訳にはいかない。

「ああ、全部部屋の外に出しておくよ。だから……頼むからちゃんと大掃除してくれ」

「ん、わかったー」

「仕方ないなあ……」

かつてこの二人がこんなに扱いづらいことがあっただろうか。何だかんだでいつも兄の言うことを聞いてくれてた次姉直葉。

生きることと真つ直ぐで、純粹無垢な性格な末妹木綿季。

しかし、二人は年頃の女の子でもある。高校生ともなれば今まで以上に色んな新しいものに触れ、刺激を受ける年代だ。

特に天真爛漫な木綿季は他の子以上に興味を持ってしまうことだろう。

「頼むぞ、本当に……マジに日が暮れちゃうからな……」

「はぁーい、じゃあやろつか、ゆーき」

「うん！ がんばるっぞー！」

既に興味が掃除よりも目の前で発掘したお宝の方に向いてしまった妹達を尻目に、和人はなんとかこの大仕事が少しでも想定より遅れないでくれと祈りながら、両手を動かしていった。

ただてさえモノが多い父親の倉庫。木綿季の部屋になるはずだった部屋。

大まかに片付けてしまえばなんてことは無いのだが、何しろ峰嵩の私物が多すぎたのだ。

何がそれらしき物を発見する度に目を輝かせ、手の動きを止めてしまふ妹たちを窘めながら、早く終わらせようと廃棄物と保持しておく物を分けていく。

そんな長兄の苦勞が報われたのは、当初彼が予定していた終了時刻の正午を大きく上回る、午後一三時を超える頃であった。

同日 午後13:07 埼玉県川越市宮下町 桐ヶ谷邸

「お疲れ様、かずと！」

元気いっぱいの木綿季に労いの言葉をかけられると、ガクツと大きく肩を落としながら恨めしそうにそちらを見返す和人の姿があった。誰のせいでこんなにお疲れ様な結果になったと思っっているんだ。

結局全体の八割を片付けたのは自分だぞと、恨めしそうにほとんど仕事をしなかった妹たち二人へ念の込められた視線を送る。

ある意味呪いの視線と言っても良さそうだ。

「……二人のおかげで無事に終わったよ、ありがとう」

「えへへー、どんなもんでしょー！」

しかし、決して不満は表に出さない。

出したところでこの二人の暴走は止まらないだろうし、そもそも思春期の興味はそう簡単に阻止出来るものではないからだ。

それに、もう彼には文句を言いたいと思ってもそれだけの体力も気力も残されていなかった。

さっさとこの大掃除で出てきた大量のゴミを処理してスッキリしたい、ただそれだけを彼の脳裏を過ぎっていたのだ。

「ゴミ出しは後でいいか……ちよつと疲れた」

庭の縁側に腰を下ろし大きくため息を吐き出すと、既にバキバキになってしまった身体を休ませる。

そして傍らに視線をやると、山積みになってるゴミとは別に、別のものがまた山を作り上げていた。

そう、大小様々な大きさに分かれたキャンプギアだ。

「よくもまあ、すぐやらなくなるのにこんなにも買い集めたもんだよ……」

「どう使ったらいいんだろ……?」

「何が何だかわかんないよー」

「まあそうだろうなあ、ほとんど組み立ててから使うものばかりだし。パツと見てこれがアレなんだってわかるようなものは無いさ」

和人の言う通り、目の前に積み上げられたギアの山のほとんどが、布やポリエステル製の袋に入れられているものばかりで、とても初見ではキャンプで使うものとはわからない。

試しに中から取り出してみるものの、骨組みとまた布が姿を現し

て、説明書無しではどうやって使用するのかも不明だ。

「この板キレみたいなのがテールになるのは多分わかるんだけど、この骨組みとか一体なんなのか分からないよー」

「あはは、そうだな……じゃあまずは一つずつ説明していくよ」

そう言いながら和人が骨組みのようなものを手に取ると、慣れた手さばきですらすらとそれを組み立てていく。

学校で使うパイプ椅子のような形になり、そこに付属の布を装着させる。

するとそこには、見事なブラックカラーのアウトドアチェアが出来上がっていた。

しかし、その組み立てている様を見ていても、一体何がどうなって椅子を形どっていったのか二人には理解が出来なかった。

構造自体はごくごくシンプルなものなのだが、やはりアウトドア初心者には簡単に理解し難いものなのだろう。

「えっ!? ちょ、お兄ちゃん今どうやったの!?!」

「すごいすごいー! 椅子になっちゃったー!」

最近兄へのリスペクトが減ってきたと感じている中、素直に褒められるとやはり悪い気はしない和人が、『どうだ』と自慢げに鼻を高くする。

目をきらきらさせている木綿季に「座ってみるか?」と促すと、当然彼女は嬉しそうに返事を返し、一見華奢だが作りはしっかりしているロングチェアにゆっくりと腰を下ろす。

するとどうだろう。粗末な座り心地だと思っていたその感触は想像を大きく裏切り、腰を落ち着けた瞬間に優しく受け入れ、快適な時間へと誘ってくれた。

「わあ……これ、すごいいいよ……」

外での解放感があることもそうだが、思いつきり足を伸ばすことが出来て、後頭部までしっかりと背もたれがカバーし、程よい角度を保っていることもあり、今まで感じたことの無いような快適感を木綿季は味わっていた。

例えるならそう、健康ランドに置かれている有料のマッサージチェ

アのような快適感と言えば伝わるだろうか。

「わあ、ゆーきいいなあー！ お兄ちゃんあたしにもー！」

「じ、自分で組み立ててみるって、簡単だから……」

「えー、出来るかなあ……」

「簡単だよ、骨組みを展開させたらはめ込んで、そこに布被せるだけなんだから」

「うー、わかった……やってみるよー」

「ほら木綿季も、いつまでもサボってないで他の道具やるぞ」

「えー……もうちよつとボクここにいるうー……」

完全にアウトドアチェアの魔力に取り憑かれてしまった木綿季は、最早テコでも動かないように椅子に固定されてしまっていた。

かつての家族が存命だった頃、横浜の実家の庭でバーベキューをやった時には経験しなかった新しい快感を、木綿季は存分に満喫していたのだ。

「手伝わなかったら飯抜きだぞ」

その悪魔のようなお告げを耳にすると、だらけ切ってた表情は途端に凜とし、瞬時にその場から立ち上がり、キリツとした目つきで和人の方向を見る。

「さあ和人、ボクに出来ることは!？」

「……お前なあ……」

絵に書いたような現金な態度に大きなため息を吐き出すと、呆れながらもひとつひとつ丁寧ギアを説明する。

現在桐ヶ谷家にあるキャンプギアは次の通りだ。

4、5人用のファミリートント。ヘキサゴンタープ。炭火グリル。折りたたみ式焚き火台。

シングルバーナー。アウトドアテーブル。ロングチェアが四つ。ランタンが二つ。

「……これだけ、か。ほとんど使っていないやつばかりじゃないか……」
「グリルとかちよつとだけ煤で汚れてるだけだね？ 一回しか使っていないんじゃない？」

「このランタンキレー！ お部屋に飾りたいー！」

現状、とりあえず一通りバーベキューが出来そうなギアは揃っていた。

しかし寝るためのシュラフがなかったり、テントの下に敷くグラウンドシートが欠けてたり、火を消すための道具がなかったりと。

イマイチ詰めが甘いラインナップに和人はどことない違和感を感じ取っていた。

「なんか揃ってるようにみえて、中途半端だな……」

「そーなの？ 一通りのことは出来そうな気がするけど……」

多趣味の欠点はそのような所にある。

形から入るばかりにそれっぽい道具を揃えたまではないものの、いかんせんよくわからないまま実践するので、考えていたより上手いはず結局鳴かず飛ばずな結果になり。途中で断念してそれらを投げってしまうのだ。

「これだけ買い揃えて放置って勿体ないよー……」

「いやまったくだ、金の無駄遣いもいい所だよ……」

目の前に広げられたギアは中古品、いや新古品と言われても差し支えないようなコンディションをキープしている。

流石にグリルや焚き火台は炭や薪の燃えカスや煤汚れがこびりついているのでキレイとまでは言い難いが、それでも過去に使ったものとしてはいい状態を保っていた。

「だったらさー、今日使ってみようよー！」

「……え？」

ランタンを両手で抱えながら、木綿季が無邪気な顔で見つめる。

それと同時に何かを企んでいるような顔、そして期待に満ち溢れた顔。

そこから溢れ出るわくわくしたオーラを、木綿季は隠しきれていなかった。

「ボク、バーベキューしたい！」

「わあ、それいい！ あたしもやりたいー！」

「え……ええ!？」

木綿季の突拍子もない提案に、すぐさま直葉が乗っかる。この時点

で既に体勢は二対一。

多数決で和人に勝ち目はまったく無かった。

だがしかし、和人も面倒くさいと思っただけはいつつ、久しぶりにバーベキューをやるのもやぶさかではないと思っただけ。

炭火で焼かれた肉にかぶりついてみたいし、海の幸を豪快に並べてみたかった。

そんな天使の警告と悪魔の誘惑が交錯する天秤に揺られながら、和人は腕を組んで目を瞑り『うーん』と声を漏らしながら葛藤を続けていた。

「ねえ、かずとー、おーねーがーいー!」

「あたしもやーりーたーいー!」

左右から肩を捕まれ、右へ左へとゆさゆさ揺らされながら、和人は頭の中で今から準備した場合の時間の逆算、足りないギアや食材の買い出し。仕込みに掛かる時間等を大まかに計算する。

そう、アウトドアは準備が物凄く大変なのだ。

道具や具材の用意は勿論、終わった後の片付け、ゴミ出し、洗い物等。やる事は一気に増えてしまう。

和人はそれら全てを把握してるからこそ、今から準備する事に抵抗を感じているのだ。

「……そんなにやってみたいか?」

「うん! ボクやりたい!」

「あたしもあたしも!」

家族から、特に木綿季からやってみたいと言われて、彼の迷いはなくなつた。

木綿季が楽しいと思っただけで貰えるようなことを一つでもやっただけたい。

ここ最近、木綿季があまりにも日常に、家族として過ごしていく日々に溶け込みすぎて、それが普通になってたこともあり、彼女の命を助けると決めたあの時の気持ちを少し忘れかけていた。

それだけ平日頃の何の変哲もない毎日を彼女が何事もなく過ごせていることの証でもあるのだが。

「わかった、やろう」

「ホントー!？」

「やったー! バーベキューだー!」

手を取り合い、ぴよんぴよんと飛び跳ねて喜んでいる桐ヶ谷姉妹。部活も無くて休日は暇を持て余している直葉にとっても、大変に嬉しいイベントだ。

それに、久しぶりのパーティだ。来週にはクリスマスが控えているが、それとはまた別。

そう、これは大掃除を頑張った自分たちへのご褒美、ご褒美なのだと言いつけさせる。

「それじゃあ今から色々準備するけど、その代わり昼飯はナシだぞ？」

「それだけ時間かかるんだからな」

「え……えええー!!」

労働後のお昼ご飯を楽しみにしていた木綿季の悲痛な叫び声が庭にこだまする。

玩具を取り上げられた子供のような、おあじけを食らった犬のような絶望感に満ちた表情をこぼしていた。

「夕方から始めるんだ。今から準備するとなるとお昼を食べてる暇なんて全然ないぞ」

「う、ううー……」

「そうむくれるなって。その代わり豪勢にしてやるから」

「ホントにー? むうー……約束だよー?」

豪華な夕食のためなら仕方ないと、ほっぺをぷくーつと膨らませながら渋々納得いく木綿季を尻目に、和人は段取りを組み立て始めている。

現時点で足りない消耗品、ギア、食材等の準備。そして火を扱うので両親への伝達等、やることはたくさんある。

現在、翠は師走の仕事の追い込みで泊まり込み。峰嵩は通常出勤だが残業三昧と、満足に家に帰って来れるような状況ではない。

従って、先程までやっていった大掃除もほとんど和人主体で事が進んでいたのだ。

まずは多忙な両親への連絡を試みる。

「スグ、ちよつと母さんたちに連絡しておいてくれ、今夜庭でバーベキューするからって」

「うん、わかったー」

準備には時間もそうだが、人手も必要だ。今から夕方までの限られた時間でこなすとなると、当然二人の協力は不可欠。

出来ることは分担して、迅速に、効率よく進めていきたい。

「よし……木綿季、財布とケータイ持ってこい。今から買い出し行くぞ」

「え？ あ、う、うん！」

「結構大荷物になるぞ、大丈夫か？」

「だいじょーぶ！ ボクもう体力バッチリだもん！」

「そいつは心強いな」

自信に満ち溢れた木綿季の顔を見れば、自然と和人の顔にも自然な笑顔が浮かぶ。

とてもHIVに苦しめられてたとは思えないほど、五体満足に動き回っている。

今ではすっかり兄の和人よりもスタミナは上だ。よく食べよく動き、よく眠る。

これだけで人はどんどん強い身体を作れるのだ。

「スグー！ もうそろそろ出るぞー！」

財布とスマホ、車の鍵を準備して直葉に声を掛ける。どうやら固定電話から発信しているようだ。

妹に声を掛ければ、和人は家の車であるワンボックスカーの後部に立ち、ロックを解除し、ハッチバックを開けた。

中の座席は三列シートで、一番後ろは荷台になっている。

キャンプ関連の荷物はとにかくスペースを圧迫しがちだ。特にタープやテント等を含めると、その荷物量は膨大になる。

日帰りのデイキャンプにしたとしても、椅子やテーブル。夏場ならクーラーボックス等も用意しなければならぬ為、荷台スペースが広いに越したことはない。

和人がレバーを引くと、後部座席が畳まれる。その畳んだシートを左右にまた畳む。

するとどうだろう、荷台スペースが一気に広くなり、それこそ何でも積み込めるような圧倒的空間が確保出来てしまった。

これだけあればどんなものでも楽しそうに積載出来ることだろう。

「お待たせー！」

直葉が到着すると同時に和人が車に乗り込む。木綿季はスライドドアのレバーを引き、二列目へと乗車する。

それに続くように直葉は左側の助手席へと乗り込んだ。

全員が乗り込み、シートベルトをしっかりとっていることを確認すると、和人はパワーボタンを押し込み、エンジンを作動させる。

独特のエンジン音を響かせながら車が目を覚ますと、今日も好調に走れると訴えてるかのようにも見える。

ハンドルの高さを合わせ、ルームミラーの角度を調整。左右のドアミラーの向きも合わせる。

フットブレーキを踏みながら、サイドブレーキを解除しギアをDに変えて、ブレーキから足を離す。

すると車はゆっくりと前進し、桐ヶ谷邸の私有地内から公道へと近付いていく。

「お兄ちゃん、車は免許取ったばかりなんでしょ？ 安全運転でいこうね？」

「ああ、勿論だ。バイクとは全然違うからな」

「しゅっぱあーっ！」

そう、何を隠そう和人は、ちやつかり自動四輪の免許を取得していたのだ。

木綿季を家族に迎え入れ、峰嵩も家に帰ってきたこともあり、これから先家族でどこかへ出掛けることもあるかもしれない。

その時、運転の負担が父親だけに集中するのはまずい。長男としてカバー出来るところははしなくてはと思い立ち、追加で四輪の教習を受けに行ったのだ。

ちなみに和人は既に二輪の免許を取得している為、筆記試験は無

く。

実技による試験を突破するだけで免許が交付される。

費用も遥かに安く済み、取得するまでの期間も短くなるので、この様な速さで手に入れることが出来たのだ。

「まず不足しているギアを買いに行くぞ。ふじみ野市だからちよつと遠くだ」

「はぁーいー!」

「ちよつとしたお出かけだー!」

同日 午後13:50 埼玉県ふじみ野市東久保 ワイルドマンふじみ野店

和人達の暮らしている埼玉県川越市から南東に位置する隣の市、埼玉県ふじみ野市。

国道254号線の幹線道路沿いに位置するアウトドア専門店、ワイルドマン。三人はそこに足を運ばせていた。

ふじみ野市と言えば長宮最中、焼きかりんとう、バームクーヘン。ふじみ野市の代表銘菓である福岡太鼓と呼ばれるサブレがある。

更に「ふじみ野」と呼ばれる名前に違わず、富士山を見ることの出来るビュースポットもあちらこちらに点在している。

しかし、今回は富士山を見るためにふじみ野に来た訳では無い。

和人の家から一番近い大型アウトドア専門店がここ、ワイルドマンなのだ。

「わあ、ここなんだ! おっきー!」

「すごい、あたし初めて来たよー!」

「川越にはあまり大きな専門店はないからな……」

土曜日ということもあり、駐車場は他の買い物客の車でいっぱいだ。

ゆっくり徐行しながら駐車スペースを探す。すると奥の方に二台分空いてる場所を発見した。

桐ヶ谷家の車は決してコンパクトとは言えない車体なので二台分空いているのは心からありがたいと感じることだろう。

余裕を持って駐車出来るのだから。

「お兄ちゃん……気をつけてね？」

「ま、まかせておけ」

バイク乗りに取って、後退というのはなかなか慣れない行動だ。

何故ならば二輪のギアにR、とどのつまりバックギアが存在しないからだ。

小回りが利く二輪を乗り回している和人にとって四輪の、それもワゴンボックスカーを後退で駐車させるという行為はなかなかハードルが高いものであった。

「二台分空いててよかったねー……」

「う、うん。ボクもそう思った……」

このワゴンボックスカーにはセンサーもカメラも搭載されており、障害物が近付くと音でも警告してくれる。

これでもかと接触事故を起こさせない為の機能が充実しているにも関わらず、和人は後退駐車に苦戦してしまっていた。

ここが特別狭い駐車場だから、という訳では無い。ただ単純に、彼の経験不足なのであろう。

「……ふう、着いたぞ」

「お、お疲れ様。お兄ちゃん」

「すつごいたくさん前後に往復しちやつてたねー」

「さ、最初はこんなもんだっての」

シートベルトをゆるめ、ギアとサイドブレーキを戻すと、エンジンを停止させる。

運転していた時間は僅か三十分。それも高速道路ではなく下道の

み。

それらを走ってきた道のりよりも、ここでの駐車に費やした時間と精神力の方が遥かに大きかった。

「さてと、実は俺もちよつと楽しみなんだよな。本格的なアウトドア専門店」

「すつごいワクワクするよね！ ボク一度来てみたかったんだー！」

「あたしもあたしもー！」

キャンプや登山といった非日常的イベント。普段の日本社会で過ごす学生や社会人にとって、アウトドアは触れようと思わなければまず機会は訪れない。

故に、ほとんどの人にとっては未知の世界。ワクワクしないはずが無い。

「うわあーっ!!」

期待を裏切らない光景。

木綿季が真っ先に自動ドアをくぐると、そこにはこれぞアウトドア専門店といったレイアウトが三人を出迎えてくれた。

正面にはこれみよがしな超豪華テントスペース。ひとつ十何万もするようなセレブなギアから、テーマを統一させた一式。

初心者も手軽に始めることの出来るお手頃価格のギアなど、価格帯は様々だ。

入口から見えるほんの一部の光景だけで、木綿季はすっかり心を奪われていた。

「これはすごいな……ちよつと心踊っちゃまう」

「すごいよ和人ー！ 色んなのがあるよー！」

木綿季は迷わず、目の前のファミリーテントの内部に入り込んでいた。

販促を前提に展示されてるので、勿論グラウンドシート、シュラフ、室内ランタンなど。

それ相応のギアがそれぞれ「是非買って下さいね」と言葉を発するかのように鎮座している。

このテント内にあるギア達だけで、軽く二十万は越えてしまうだろ

う。

当然、和人たち学生がおいそれと出せる金額ではない。

「凄いなあ、剣道部の合宿もこーゆーのでやればもつと楽しそうなのにー」

「……学校にファミリータント何個も用意させる気か？」

当然、そんなこととしてしまえば予算オーバー。部活動どころか学校の年間予算にも大打撃を与えてしまうことだろう。

「あ、あははー……じ、冗談だよ？」

「でも一度でいいからこんなすごいテントでキャンプしてみたいよねえー！」

「……確かに。ちよつとこれは憧れるな。家のテントもでかかったけど」

これには流石のインドア派の和人も、このアウトドア専門店の独特の購買欲に心を揺さぶられているようだ。

不思議とアウトドアショップというものは、商品を手に取り、店員の話の聞いたり、自分がそのギアを現地で使つてるところを想像したりしていくうちに、購買意欲がどんどん高まっていつてしまうのだ。

例えそれがどんなに高額な物だったとしても、次また来た時に買おう。今は無理でもいつか絶対買おう、と思つてしまうものなのだ。

それが恐るべき、キャンプギアの魔力でもある。

しかしそんな魔力も、社会人ほどお金を持っていない和人たちにはそこまで響かなかつたようで、あまりにも現実味がない値段帯のギアも触つてみたりはするものの「凄いな」とは言つてはいるものの、流石にお買い上げとまではいかなかつたようだ。

「さてと……俺も見ていたけれど、目的の物を買うぞ？」

「あ、うん。よいしょ……」

一つ二万円もする贅沢なハイチエアから立ち上がると、とてとてと木綿季が和人の傍に寄る。

直葉も一点五万円するコットの寝心地に心を奪われていたが、和人の一言でハッと我に返る。

そう、ここへは現時点で不足している必要なギアと、炭や着火剤、薪

等の消耗品を買いに来たのだ。

決してセレブリティな気分を味わいに来たわけではない。

「あ、二人とも待ってえーっ」

和人達が買いに来たアイテムは次の通り。

まず、薪や炭の燃え残りを処分する為の火消し壺。

炭や薪は水をかけて消火してしまうと、温度差から爆ぜる危険性がある。

それに、次にそれらを再利用しようとなると、なまじ水で消火してしまったばかりに湿気ってしまい、点火しにくくなってしまふのだ。そこで、この火消し壺が大活躍する。

この、寸胴の様な形をした高さ二十五センチほどの金属のギアの中に、まだ燃えている炭や薪を入れる。

そしてすかさず蓋を閉め、酸素の供給を完全に断ってしまうのだ。

火は酸素が無ければ燃えることは出来ない。

密封することで酸素濃度がゼロになり、火が勝手に消えてしまふといった仕組みになっている。

しかし、火は消えても熱は籠ったままになっているので、持ち運ぶ時は焚き火用の耐火軍手を使うなどして火傷に注意しよう。

次に炭と薪。これはアウトドア専門店だけでなくホームセンター、場合によっては地元のローカルスーパーでも扱っている店もある。

しかし、仕入れ量も質も違うので近くにアウトドアショップがあるのならそちらで購入するようになりたい。

「火消し壺が一番安いヤツでいいだろ。あとは……あ、OD缶もいるな」

「家で見つけたヤツ、所々古ぼけてて歪んでたもんね……」

「使った瞬間爆発とかボクイヤだよ!」

次々に目的の物を見つけてはカートに入れていく。アウトドア専門店のカートは大きさがしっかりしている。

大きいものが売られてるのも珍しくないなので、カートもその大きさに対応している。

また、薪や炭等の重たい商品もあるので、カートは必至と言えよう。

「お兄ちゃん、これで全部？」

「火消し壺、着火剤、炭、薪、OD缶……よし、これで全部だな」

「はぁーい」

目的の物が入れられてるのを確認すると、三人はカートを押しながらレジカウンスターへと向かう。

その最中にも、何か面白いものはないかと陳列棚に目線をやる。

普段なかなか来ないだけに、余すところまで堪能したいという気持ちの表れだ。

そのような中木綿季の視線が、とある棚に並べられていた物に釘付けになっていった。

「……ん？ 木綿季？」

自分たちに着いてこない木綿季に気が付いた和人が後方に取り残された彼女に首を向ける。

もしかしてまた何か見つけたな、とカートの向きを百八十度変え、来た道に戻る。

木綿季に近付いていくにつれ、彼女が何に夢中になっているかもわかってきた。

取っ手が着いた金属板のようなもの。

そう、これはホットサンドメーカー。

キャンプをやらない人でも名前くらいは聞いた事があるだろう。

自宅の台所でも気軽に使うことの出来る、あのホットサンドメーカーだ。

二枚でひと組になっているこのギアは、中にパンや肉を入れ、サンドして火にかける事で手軽に蒸し焼きにすることが出来る、簡単に美味しいキャンプご飯が作れるということ注目を集めているのだ。

それを手に取って、興味津々にパカパカ開いてはまじまじと見つめ続ける。

高いテントや、豪華なランタンを見た時よりもその瞳はキラキラに輝いていた。

「木綿季……それ、欲しいのか？」

「えっ？ あ、えーつと……う、うん。バイト代あるし買おうかなって

悩んでて……」

「ほえー、なにこれなにこれー?」

そのギアへの興味は直葉にも芽生えていた。木綿季と同じようにパカパカさせて遊んでみたり、パッケージの説明を読んでみたりと、実に見ていて微笑ましいやり取りを繰り返す。

「すごい、これでスイーツも作れるんだって!」

「ホントだねー! ワッフルとかシナモントーストとかも焼けるんだー!」

「……………」

すると、和人は何も言わず、木綿季たちが手にしているホットサンドメーカーと同一の物のパッケージを手に取り、そのままカートへと運び込んだ。

そして、何事も無かったかのように再びレジへと歩き出した。

「え……………か、和人?」

「ん? どうした? 早く会計済ませちまおうぜ」

あまりにも自然に買おうとしたので、思わず言葉を詰まらせてしまう。それは直葉も一緒だったようで本当にいいの? と頭に疑問符を浮かべている。

「い、いいの……………」

「いやあ、俺もこれ丁度欲しかったんだよな」

「……………」

勿論、それが嘘だと言うことはお見通しだ。

値段が高くなかったということもあるが、自分の大切な人があんなに目の前で欲しそうな顔をしていたら、買ってあげたくなると言うもの。

嘘だとわかっていても、何も言わない。そんな野暮ったいことはない。

でも、この嬉しいとい気持ちに嘘はない。

自然と笑みがこぼれる。心の底から嬉しくなる。

そうだ、桐ヶ谷和人という人物はこういう人だ。

ぶつきらぼうに見えて、とても優しく頼りになる人。

一番信頼出来る人。そんな大切な人の好意に、ちよつと自分は甘え過ぎていたのかもしれないと、木綿季はちよつとだけ反省したのであった。

「……ありがとう、かずと」

「俺が欲しかったただけで言つたら？」

「う、うん……」

「でもしよつちゆう使うわけじゃないからさ、これは俺たち三人の、兄妹のもつてことにしてさ、みんなで使つてこうぜ」

バレていても本音を探られたくない和人が、それっぽいルールを設ける。

中々素直になれず、嘘をつくのが下手な男だ。

「お兄ちゃん、素直になればいいのにー」

「う、うるさいぞスグ……そ、それよりだ」

「……それより？」

まんまと見透かされていた事実から目を逸らす。今の顔色を見られまいと反対方向を向いた彼の表情は、ほんのり赤らんでおり、らしくないことをしたと後悔と小つ恥ずかしさが浮かび上がっていた。

「今夜のバーベキュー、楽しもうな？」

ポンと木綿季の肩に手を当てて、優しいトーンで語りかける。

その様子を見た木綿季も、なんだいつもの優しくて大好きな和人だと、気持ちの昂りを感じずにはいられず、こちらは満面の笑みがこぼれる。

「……うんっ！」

「よかったね、ゆーき！」

「えへへ、ありがとう……」

値段はそこまで高いというわけではない。それ自体がなにか限定品とか特別な品物というわけでもない。ごく普通のアイテムだ。

でもそれは、彼女にとつては一足早い、大切な人からのクリスマスプレゼントになっていた。

聖夜の贈り物としてはあまりパツとしないものかもしれないが、彼女の一生の宝物の一つになることは間違いないだろう。

この日、ワイルドマンふじみ野店を一番嬉しそうに退店した買い物客は、この三人組だったという。

第88話く庭先でえんやこらく

西暦2026年12月18日(土) 午後15:40 埼玉県川越市

宮下町 桐ヶ谷邸キッチン

決して広いとは言えないキッチンに、食材の仕込みをしている和人の姿があった。

黒のトレーナーの長袖部分を腕まくりし、利き手の右手には刃渡り五センチ程のアウトドアナ이프が握られている。

木目調のカツティングボードの上には、先程の買い出しで仕入れてきたであろう、牛肩ロースの赤身の肉が存在感を放っている。

厚みは十五ミリ程はあるだろうか。ポリウム満点で如何にも食べ応えに期待が持てそうなどっしりとした面構えだ。

そのまま焼いても間違いない美味であろう赤身肉に、和人は規則正しくナナメに切り目を入れている。

切り目の感覚は一センチ刻みで入っており、それも切り分けるためにナイフを入れているわけではない。

そう、所謂隠し包丁というものだ。

「かざとー、どうしてお肉に切れ目入れてるのー?」

「ん? ああこれか。これは隠し包丁ってやつだよ」

「隠し包丁?」

目の前で披露しているのだから全然隠れてないだろうという疑問はともかくとして。

切れ目を最後まで入れずに、途中で切るのを辞める隠し包丁に、疑問を投げかける。

昼ごはん抜きでバーベキューに挑もうとしてる木綿季は、それはそれはお腹がペコペコだ。

故に、美味しそうな食材を目の前にして、早くこれらを食べたいのいつまでも火の上に持っていかない行動にクエスチョンマークを浮かべている。

「ああ、これをやるとやらないのでは仕上がりに大きく差が出るんだ

よ」

「へえー？ そうなんだ？」

「炭火で焼くなら尚更だ。美味しいぞ、炭火で焼いた肉は」

「そんなに違うの？ お兄ちゃん」

「全然違うぞ。もはや別物と見てもいいくらいだ」

食物を加熱する時には何パターンかある。一般家庭等でのガスコ
ン口の火でフライパン越しに熱を加えるやり方。

そのガスの火で直接炙るロースターでの加熱。

そして、今回やろうとしてる炭火を用いての遠赤外線での加熱だ。

「ホントー？ なんだかあんまり実感が湧かないなー」

「なんて言うんだらう、上手く言えないけどさ。解放感のある屋外で
炭火でこんがり焼いた肉とかつて、普段食べてるご飯とかより格段に
美味しく感じるんだよ」

この和人が訴えようとしている美味しさの秘密にも、きちんとした
メカニズムが存在する。

基本的にまず、ガスと炭火とでは熱の加わり方には決定的な違いが
ある。

しっかり育った炭から発せられる熱は、遠赤外線の量がガスよりも
二倍近くあり、食材の中までしっかりと火が通りやすくなっている。

また、グルタミン酸などの旨み成分の量も炭火で焼き上げた方が増
加傾向にある。

更には焼いている肉から落ちた脂やタレが炭に付着し、それが煙と
なって食材が燻されることで、より食材の味わいに深みが増す。

和人はこの事を身振り手振りで伝えようとしたのだが、感覚的な話
になってしまっていて、イマイチ妹達を納得させられそうにないでい
た。

しかし、そんなウンチクを聞かされるよりもお腹の空き具合が限界
に近い。

中でも木綿季は超のつくほどにご不満そうで、ほっぺたを膨らませ
小さい口をとんがらせて、食材を弄っている兄に注文をつけ続ける。

「かずとー、もうボクお腹ペコペコだよー……」

「我慢するんだ。俺だって腹減ってるのに自制を保ちながら仕込みを続けてるんだぞ？」

「……ぶっ」

食材の仕込み以外にも、キャンプギアの設営や焚き火の準備等、やらなくてはいけないことはまだまだ沢山ある。

しかし昼食を抜いている木綿季にとっては、この時間は拷問に近い。

特に今晚食べる予定のキャンプメニューは彼女が買い出しの際に、「食いたい！」と主張していた物ばかり。

それだけにいつまで経っても見ているだけ、という時間はあまりにも残酷に違うない。

「あっ！」

ここで、ちよつとした悪戯心が木綿季の思考の片隅に浮かんでしまった。

和人が仕込みをしている傍ら、お肉や野菜類に混じって、買うとちよつと高めの贅沢ソーセージが置かれてるのが見えてしまった。

既にパッケージから中身は出されていて、アルミ皿の上に八本、乗せられている。

「えへへ、もーらい！」

「あつ、こら木綿季！」

「へっへーん！」

和人の目を盗んでつまみ食いを成功させた木綿季は、成人男性の親指よりも太く、コンビニのフランクフルト程の大きさがあるソーセージに素早く手を伸ばすと、そのまま自身の口へと持っていく。

加熱されていないため、まだ少し冷たかったがオリジナルスパイスがブレンドされたソーセージは火が通っていないなくとも、口いっぱい肉の旨味が広がっていった。

一口で半分サイズを口の中に収めた木綿季は怒られる前にバーベキュー会場となる庭へと足早に立ち去っていく。

彼女のつまみ食いのおかげで八本あったソーセージは七本になってしまった。

「全くあいつときたら……」

「あ、あはは……」

「仕方ない。スグ……手伝つてくれるか？」

「うんつ、勿論だよ。お兄ちゃん！」

食に関しては何んでもなく貪欲な木綿季の欲望に呆れつつも、半ば諦めの気持ちも抱えつつ、和人は食材の仕込みを続けていく。

今夜食べようと彼らが準備した献立は以下の通りだ。

本場ドイツの贅沢ソーセージ。鹿児島産さくら牛の肩ロース肉。牛バラブロック肉と野菜の串焼き。国産黒豚のスペアリブ。

イカ、エビ、タコ、牡蠣、マッシュルーム、タマネギの入ったアヒージョ。

浜焼き用の赤エビ、ホタテ、ハマグリ。

コンソメスープに、メの焼きそば。デザートに川越産のサツマイモだ。

一人で処理しようものなら食べ過ぎの範囲だが、桐ヶ谷家は五人家族。

後ほど仕事から帰路に着く峰嵩と翠の分を考えると、丁度食べ切れるだろうという計算で和人は買ってきたのだ。

「でも、こういう準備も楽しいよね。バーベキューつて」

「ああ、わかる。まあその分片付けが死ぬほど面倒なんだけど……」
準備や献立に拘れば拘るほど、それに比例して後始末が大変になる。

特に、使い終わった食器や焚き火台。炭火グリルの清掃と片付けは大変に億劫な工程だ。

中でもグリルに関しては脂と煤の汚れがとんでもない難敵で、とても台所洗剤程度ではその頑固な汚れを落とすことが出来ない。

準備も大変なら後片付けも大変なのが、アウトドアというものなのだ。

他愛のない兄妹の会話を弾ませながら、和人と直葉は黙々と料理の仕込みを進めていく。

和人は隠し包丁の入った肩ロースをジップロックに入れ、更にその

中にシヤリアピンソースとおろしニンニクをたっぷり投入。

しつかりチャックを閉じて封をし、仕上げとばかりにそれを揉みこんでいく。

用意した肩ロースは三枚。これをあと二枚同じ作業をしなくてはならない。

直葉は串焼きにする為の牛バラブロックを手頃サイズにカットし、塩コショウを擦り込ませ、予め切り分けられていたパプリカとタマネギと一緒に、長さ二十センチほどの鉄串に通していく。

一通り串に食材を通し終わると、次はアヒージョの準備に取り掛かる。

買ってきた海鮮をパックからだし、こちらも塩コショウで揉みこんでいく。

真つ赤で辛そうな鷹の爪をみじん切りにし、軽く上からまぶすようにして彩りをつける。

次に精がつく生ニンニクを二粒程取り出し、こちらは超がつくほど細かく切り刻んでいく。

この鷹の爪と刻まれた生ニンニクが、アヒージョの味の決め手になるのだ。

「はふう、こんなもんかな？ お兄ちゃん」

「どれどれ……？ おお、いい感じじゃないか」

自分よりも手際がいい妹の仕上がりに具合に太鼓判を押す。

流石両親が忙しくしてる間は台所を任されていただけのことである腕前だ。

兄に褒められた直葉は照れくさそうに、そして少しだけ誇らしげに胸を張る。

「よし。じゃあ仕込みが終わったものから庭に運び出しておいでもらえるか？」

「うん！ まっかせてー！」

直葉もこれから行われるバーベキューが楽しみなのか、ウツキウキでニッコリはにかみながら食材の乗ったアルミ皿を両手に持ち、庭先へと足を運ぶ。

その足音が遠くなっていく頃、和人は最後の仕込みに取り掛かる。焼きそば用の具材の切り分けだ。

「こいつが旨いんだよなあ……」

和人の目線の先には、とあるごく当地焼きそばのパッケージが置かれている。

静岡県は富士宮市が誇るごく当地B級グルメ。その名も「富士宮やきそば」だ。

何を隠そうこの富士宮やきそばは、あのB-1グランプリの第一回、第二回大会で一位を獲得するほどの人気グルメなのだ。

普通の焼きそばと違うところと言えば、使われている麺が一般的な焼きそばと比べて平たく製造されている点。

そして、豚肉の代わりに肉かすが具材として使用されているのも珍しいポイントだ。

更には最後の仕上げとして、青海苔ではなく鰯の削り粉が振りかけられている所が特徴だろう。

目玉焼きが乗せられている秋田県のご当地焼きそばである、横手やきそばと並んで日本の二大ご当地焼きそばと謳っても過言ではないだろう。

「具材はシンプルに肉かすとキャベツだけ。これに限るな」

本来なら人参やネギ、薄切りの豚バラ肉が使われているのが普通だがそこは拘る男和人。

具材は少なめにした方がこの焼きそばの旨味が味わえると踏んでいるのである。

「さてと、随分時間がかかっちゃったがこれでおしまいな。さて、あっちは大丈夫かな……」

最後の仕込みを終わらせた和人が庭先のある方に壁越しに視線をやる。

後は肩ロースの漬け込むを待つだけのはずなのだが、何故か心做しか不安が拭えない。

先程のつまみ食いの件もあり、木綿季が何かまたやらかすのではないかと、ポリポリと後頭部を掻きながら微妙な表情を作る。

同日 午後16:05 埼玉県川越市宮下町 桐ヶ谷邸庭先

冬至を目前に控えた暮れのこの季節。時刻も十六時に差し掛かるとほぼ日没となり、辺りはすっかり夕闇に包まれようとしていく。

寒さも本格化しており、庭に生えている木々の葉っぱが全て枯れ落ちていることから、正に冬本番がやってきている事が伺える。

現在川越市の気温は五度。冬着を身にまとい、身体を動かしていればさほど気にする程でもない。

しかし、特に運動をする訳でもなく、その場に立ち尽くしているだけとなると話は変わってくる。

新陳代謝は進まず、時折吹いてくる冬の冷えた空気を運んでくる風に身体は凍てつかされ、瞬く間にその冷え込みに全身を震わせてしまうことになる。

「さ、さむいーっ!」

「もう、部屋着のままお外に出るからだよ?」

つまみ食いをした手前、うっかり上着を着ないまま庭に出てきてしまった木綿季が、険しい表情で寒さを訴えている。

普段から活発で元気いっぱいな彼女も、流石に紺色のジーパンと、紫色のトレーナー一枚ではこの寒さに耐えられなかったようだ。

「もう、木綿季だけずるいよー」

「だ、だって……お腹すいちゃったんだもん」

「はいはい。わかったから上着取ってきた方がいーよ? 風邪ひいちゃうし」

「う、うん。そーするー……」

姉に窘められた木綿季が、鼻をズビズビさせながら家屋へと引き返す。

縁側で靴を脱ぐと、渡り廊下を経由してそのまま二階にある和人の共同部屋へ、自分の上着を取りに階段を上っていった。

ここの所の木綿季の体調は絶好調。毎日が楽しいの連続で、心身ともに大変に充実しているといても過言ではない。

そんな明るくてかましい妹とのやり取り。

今までの生活には無かった新しい桐ヶ谷家の一面。

時折元氣すぎてやかましい時もあるが、そんなやり取りも今じゃ楽しく感じる。

何より、家族で一番年下だった自分がお姉ちゃんになったのだ。

姉として、しっかりと頼りになる存在でありたい。

故人である木綿季の血の繋がった紺野藍子とは接し方がまた違っていることだろう。

しかし、直葉は直葉で自分のやり方で木綿季を支えていくと、母である翠が養子縁組の話を持ち出した時から決意を固めていた。

それが、例えどんなに手を焼く妹の世話に追われるようなことになっても、だ。

そんな事を考え、ほのかに微笑みを浮かべながら先程仕込んだ食材をアウトドアテーブルに並べていく。

学校の勉強机を四つ合わせたほどの大きさのテーブルの上に、彩り豊かなバーベキューの食材が異彩を放っている。

中でも直葉が気になっているのは、極上黒豚のスペアリブだ。

フォークであらゆる部位に穴を開け、バーベキューソース、ごま油、ハチミツ、一味唐辛子、おろしニンニクを混ぜ合わせたタレに漬け込まれた物だ。

ジップロック越しでもその香りがプンプンしてくるほど強烈で、食欲をそそる。

あと一時間もすれば、程よく中までタレが染み渡ることだろう。

この贅沢なスペアリブを炭火で炙り、両手で端っこを持ち、かぶりつく姿を想像してみる。

想像しなくても十分旨い。そしてそれを考えれば考えるほど余計にお腹が空いてしまうのか、ハッと我に返った直葉はフルフルと首を

左右に振り、まだ我慢我慢と自分に言い聞かせて並び付けを続ける。テーブルの傍にはアウトドアチェアが四つ、テーブルを挟み込むように四方に並べられている。

すぐ側には有名キャンプギアメーカー「クールマン」の炭火グリルが置かれている。

四足型のグリルになっており、炭が入る土台部分が引き出し型となっている。

残灰の処理や、炭を追加する時に大変便利なデザインとなっている。

その隣のスペースに衛星放送の電波を受信するためのパラボラアンテナのような形状をした、耐火性バツグンの焚き火台が鎮座している。

直径は八十センチ程はある巨大な焚き火台で、薪を燃えやすくする為に必要なバトニングの作業が不必要になるくらいに火力と燃焼効率がいい。

着火剤と薪を放り込めば何もしくとも忽ち炎は燃え上がり、キャンプファイヤー並の炎が立ちのぼるというわけだ。

その焚き火台の隣には昼時にワイルドマンで購入した薪が三束、並べられている。

これだけの量の薪も、この焚き火台にかかればあつという間に使い切ってしまうという。

「うん、大体準備出来たかな？」

下準備をあらかじめ終えた直葉が出来上がったバーベキュースペースを見渡す。

ちよつとレイアウトに不慣れな点もあったが、まあこんなものだろうと自分自身を納得させる。

炎が燃え上がる焚き火台の周囲には出来るだけ何も置かず、万が一の火事にならないようにも気を配る。

空気が乾燥し、火災が発生しやすいこの冬季。火の用心に越したことはない。

「おにいちゃん！ こっちはもう大丈夫だよー！」

直葉が準備完了の旨を伝えると、遠い声で「オーケー」と台所の奥から聞こえてきた。

それと同時に、家族専用のLINEグループにもメッセージを送る。

準備は終わったよ、何時に帰ってくるのと、慣れた手つきでスマホのフリック操作を進め、峰嵩と翠に意を伝える。

丁度メッセージを送り終わった頃に、モコモコの上着を羽織った木綿季と、両手に仕込んだ肩ロースの入ったジップロックを持った和人が、屋内から姿を現した。

「くあ、流石に外は冷えるな……俺も後で上着持ってきてよう」

「わあー！ すごくいいー！ 食べ物がいっぱいいー！」

寒さに震えてた時との様相の違いに目を輝かせ、とてとてと木綿季がテーブルの側へと歩みを進める。

実に何年ぶりかわからない本格的なバーベキュー。最後にやったのは横浜の実家で、生前の家族が全員そろい踏みだった頃だ。

懐かしいな、楽しかったなど、胸に思い出を抱きながらも、またあの時と同じくらい楽しいことが出来るんだと、ワクワクした気持ちも抱いていた。

「もう完全に日没しちゃうな。スグ、ランタンつけてくれないか？」

「え？ あ、うん。いいよー」

そう兄からお願いされた直葉が、テーブルの隅っこに置かれたランタンに手を伸ばす。

見た目はよくあるオーソドックスなガスランプの形をしている。

しかし技術が進んでいる今、このランタンは完全な充電式となっている。

それでいて、出来る限り実際の炎のような灯りを再現しようと企業努力が垣間見える逸品となっていた。

「点けたよー！ すごく明るいねー！」

基本的に街灯がないキャンプ場で使用することを前提とされているのか、物にも寄るがランタンはかなりの明度を持っている物が多い。

二階の倉庫部屋に眠っていたこのランタンもその性能に変わらず眩

い光を放ち、桐ヶ谷邸を明るく照らしていた。

「ちよつと明るすぎるな……スグ、そこに生えてる木の枝に吊るしてもらつていいか?」

「えつと、この枝かな?」

「あつ、ボクがやるー!」

やってみたかったのかなんなのか、嬉々として光源を設置する作業をしたがつてる木綿季に、直葉が手持ちのランプを渡す。

もうすぐバーベキューが始まるんだと完全に気分が浮ついている気持ちを出来るだけ抑えつつ、目の前に植えられている樹木から生えている枝に手を伸ばす。

「……………」

「…………あれ?」

「何やってんだ、木綿季……?」

おかしい、何かがおかしい。何も特段難しいことをしようとしているわけではない。

目の前にある枝切れの先つちよにこのランタンの輪つかを通すだけなのに、その単純な作業に木綿季は難航していた。

何度やろうとしても、幾度となく頑張っても、全く結果が着いてこなかった。

だが、その原因は考えるまでもなかった。

そう、木綿季の身長では枝まで手が届かなかったのだ。

「…………とどかない」

「ぶつ…………」

「…………くすつ」

どれだけ背伸びをしても、思いつきり力を込めても、必死に腕を伸ばしても、その先端が枝まで届くことは無かった。

その余りにも一生懸命に頑張る妹の姿に、和人も直葉も笑いを堪えられないでいた。

木綿季が必死になればなるほどその様子がおかしいのか、やがて二

人はお腹を抑えながら、大声で庭先に笑い声を響かせていた。

「あつはっはっはー！」

「あははは！ ゆーきとどいてないよー！」

木綿季が一番小さいのは、何も年齢だけではなかった。

そう、家族の中で身長も一番小さかったのであった。

成長期をリアルタイムで迎えている彼女とあっては、大きくなるのはむしろこれからなんだと、異議を申し立てたいところであった。

だがしかし、申し立てる暇も与えてくれないほど間髪入れずに二人の兄妹が笑い続けているので、弁明をする余地が全く無かった。

途端、恥ずかしさと悔しさと顔が真っ赤になり、ほっぺたをぷくーつと膨らませ「そんなに笑わなくてもいいじゃんかー！」と、まるで少年漫画のように悔しがる表情を見せながら、必死の形相で抗議をする。

笑い声をこだまさせている二人も、まさか背伸びしても届かないとは思わなかったのか、はたまたその行為がツボにハマってしまったのか、呼吸が若干苦しくなるほど笑い続けていた。

「はあ、はあ……。まったく、面白すぎるだろ……。木綿季。くくく……」

「ごめんね、あたしも笑うつもりはなかったんだけど……。ぷぷつ」

「ううーっ！ 和人と直葉のいじわるーっ！」

どこかの異世界転生作品に登場した女神のような悔し顔を見せている木綿季に、とりあえずの謝意を見せ、少しずつ呼吸を落ち着かせていく。

あれだけお腹がよじれるほど笑った二人も、時間の経過でやっと息を整えることが出来た。目尻には笑った所以か少量の涙が浮かんでいる。

「むすっ」

当然、不機嫌になる木綿季。

二人が自分のことをバカにした意味で笑ったわけではないことは理解してはいるが、それでも若干ムツとしてしまうものがあった。

ALLOのアバターでも、彼女は背が高い方では無い。キリトやアス

ナと比べても。どちらかという小さい部類に入る。

シリカよりもやつと高いくらい的身長差なのだ。

ちなみにスリーピング・ナイツの中でも、最も身長が低い。最年少のジユンのアバターよりも低いのだ。

その事も相まってか、今では己の身長の高さに若干のコンプレックスさえ抱えている。

「悪い悪い、笑ったのは謝るよ。すまなかった、木綿季」

「ぶー……」

「あたしもごめんね？ でもゆーきがすつごく可愛かったから……ついでね？」

「ボクは一生懸命やろうとしてただけだもんー」

両手をバンザイの様に上空へ振りかざし、実際の年齢よりも子供っぽさを見せる仕草をしながら、自分の意を訴える。

そのムキになった反応ですら、二人は楽しんでいた。

すっかり笑い疲れた身体に力を込め縁側から腰を上げると、和人が木綿季に近づく。

これ以上不機嫌になられても困るので、彼女の頭に手を乗せて優しく撫でじゃくる。

「ああ、ホントに悪かったよ。だから機嫌直してくれ、木綿季」

「……むうー」

「ほらほら、むくれちゃうと折角美味しいバーベキューも味がしなくなっちゃうよ？」

大好きな和人の手のひらの温もりを頭越しに感じると、誤魔化されている気もしなくもないが、少しずつ気持ちが落ち着いていくのを感じた。

確かに背が低くて笑われたのは悔しかったが、いつまでもそのことを根に持つほど天邪鬼でもない。

「ボクだって、すぐにおつきくなるもんっ」

その表情からは悔しさというよりも、いつか見返してやるといった気持ちが見て取れた。

実際に、木綿季はよく食べよく動きよく眠る。

身体の成長は遺伝にもよるが健康的な生活を継続していけば、正しい身体を作ることは出来るだろう。

それが身長に直結するかどうかはまた別の話ではあるが。

「あ、でも……」

ふと、和人が何かを思い出したかのように天を仰ぐ。

その兄の様子に、直葉も木綿季も頭の上にクエスチョンマークを浮かべる。

少しの間が空いた後、ちよつとだけ含みのある表情を見せながら和人が視線を木綿季に戻す。

「お前さ、さつきソーセージつまみ食いたよな？」

「……あ」

忘れた、とは言わせない。家族全員で食べる予定の物を先走って一人ズルをして味わったことを。

そしてその後怒られまいと、足早に視界から消えようとしたことを。

そのことを指摘されると、木綿季はたちまちバツが悪そうにあたふたとし始めた。

なんとか身振り手振りで弁明しようとするが、全く言い訳すら浮かび上がってこず、視線は泳ぎ、冬なのに変な汗は浮かび上がり、声が喉から出てこなかった。

「だから、今回の件もおあいこつてことでチャラな？」

「えーっ！ そんなあー！」

「やかましい！ ご飯抜きにされなかつただけありがたく思いなさい！」

既にお昼ご飯が抜かれている、と指摘をしたところであつたが先の件の手前、そのことを訴えられる立場ではなかった。

これ以上激しいことをすれば余計にお腹が空いてしまう。

微妙に納得がいかない所ではあるが、これ以上ぶー垂れても埒が明かないので、木綿季は渋々和人の要求を飲むことにした。

「うー、ごめんなさい……」

「わかればよろしい」

傍から見れば兄妹なのか恋人なのかわからない二人のやり取りを、直葉は微笑ましそうに見つめていた。

ただ一つ言えるのは、これからもこの様な慌ただしくも飽きないやり取りが、この先桐ヶ谷家で行われていくであろうということだ。

木綿季を家族に迎えたあの時から、桐ヶ谷家には全く新しい風が吹き、これまでと違った暖かいものに包まれていた。

「ほらほら二人とも、準備終わらせちゃお？ お父さんとお母さん、五時過ぎくらいに帰ってくるって」

自分のスマホを手のひらに収めた直葉が、両親からのLINEの返信を二人に伝える。

「どうやら峰嵩も翠も今日は早めに上がることが出来るようだ。」

三人のやり取りが行われてる間に時計の針は十六時半を刺そうとしていた。

アウトドアは考えているよりも時間がかかるというもの。

この様子では準備を急がなくては間に合わなそうだと、誰もが顔色を浮かべていた。

「おっと、のんびりしている暇はなさそうだ。木綿季、スグ、急ぐぞ」

「えっ？ あ、う……うん！」

「あたし、食器類持つてくるねー」

残り三十分余りで全ての支度を終えようと、三人はそれぞれ最後の準備へと取り掛かる。

木綿季に取っては家族に迎えられてからの初めてのバーベキュー。

突発的ではあったものの、初めての青空ご飯だ。

自分を嫌な顔ひとつせず暖かく出迎えてくれた大好きな家族との、楽しい時間だ。

ちよつとしたトラブルこそありはしたが、そんなつまらない事など忘れて、楽しめるに違いない。

何故なら、彼女はいつもいつでも、何事にも全力だからだ。

第89話 く焚き火に照らされてく

西暦2026年12月18日(土) 午後17:10 埼玉県川越市

宮下町 桐ヶ谷邸庭先

「ふう、間に合ったな」

冬だと言うのに、和人の額から汗が流れている。一通りの食材、食器類などのカトラリー、ゴミ捨て用のダストボックス。

炭や灰を捨てるための火消し壺や焚き火用トング等。

まだまだ細かく必要な道具も用意されていなかったもので、それらを片っ端から準備していたのだ。

時刻は十七時を過ぎ。僅かに残っていた夕陽の残り香もすっかり無くなってしまい、完全な夜となってしまうていた。

しかし、ここは街中なので田舎の山中やキャンプ場と違ってしっかりと街灯が設置されているため、通行に不便がない程度の明るさがしっかりとキープされている。

「もしかしてランタンいらなかったんじゃないか……？」

ひとつは樹木の枝に、もうひとつはテーブルの上に配置されたランタンの存在意義に疑問を唱える。

こういう娯楽は雰囲気が一番大事なこともあるので、一概に周りが明るいからと言って蔑ろにする必要も無い。

特にアウトドアなどの非日常を味わう趣味となると、尚更それっぽい雰囲気を出すのに拘りが大切なこともある。

「えー？ でもこういうのがあった方がいい雰囲気になるよー？」

ランタンの柔らかかな灯りに満足している木綿季が言葉を遮る。

樹木の枝にぶら下げた方は白熱球並のかなりの光源を放っていたが、一方でテーブルに設置されたランタンは赤みがあり、暖かで柔らかな優しい光を放っていたのだ。

見ていると安心するようなランタンの光に、木綿季は心做しかほっこりとした気分でした。

「多分あつちのランタンは虫除け用で買ったんじゃないか？」

「え、虫除け？」

「ああ、虫つて光に集まる習性があるだろ？ 電柱の街灯とかによく集まってるの、見たことないか？」

「……あー、確かにあるね」

「うんうん、夏場とかは特にね！」

今は冬場なのでさほど気にはならないが。夏場の地方というのは虫との戦いでもある。

特に夕方から夜にかけては家屋の電灯や街中の灯り、はたまた自販機から漏れる光にも反応し、蛾などの虫が群がる光景が浮かび上がる。

恐らくその模様を見ることすら不快に思う人もいる事だろう。

キャンプ場も勿論その例外では無い。

それどころか整備されてるとはいえ、基本的に大自然のど真ん中に施設があるキャンプ場は、虫たちの格好の住処と言えよう。

キャンパーも当然のように虫除けスプレーや蚊取り線香、はたまたオニヤンマを模した虫除けグッズ等を用いて害虫対策はしてはいるが、どれも似たり寄ったりで効果があるのも疎らだ。

そこで逆の発想だ。どうせ虫がよってくるのなら、集めてしまおうと。

発光明度が高すぎるランタンを、自分たちのスペースから少しだけ離れたところに設置し、そちらの方に虫の気をそらすというもの。

これが意外にも効果てきめんで、こぞつて虫たちはそちらの光源に集まっっていくという。

そして、自分たちのスペースにはLEDライトのような虫が集まりにくい灯りを設置することで、夜間も問題なくアウトドアを楽しめるというわけだ。

「まあ、今はさほど気にする程でもないだろ。真冬なんだし」

「あはは、そーかもね」

食材よし、小道具よし、消耗品よし。

各方面での準備が整うと、あとは両親の帰りを待つだけとなった。

焚き火台には既に着火剤と、直径十センチ程の薪がセットアップされており、炭火グリルにも同じように着火剤が敷き詰められ、その上に真っ黒な備長炭がゴロゴロと転がっている。

「お母さんたち、まだかなあ」

「あの後タクシー拾ったってメッセージがあつたよ？ だからそろそろじゃないかなあ」

「早く来てくれないと俺たち風邪引いちゃうぞ……」

和人がスマホのお天気アプリで天候情報を確認する。

すると現在の川越市の気温は先程よりも落ち込み、四度を指していた。

すぐにでも先に焚き火を始めたところではあつたが、大人が不在の今は火の取り扱いをするべきでは無い。

万全の対策を講じてはいるものの、それでも万が一という可能性がある。

特に、焚き火は火力がガスコンロと比べて段違いで、中に水分が残った薪が突然爆ぜて火の粉を舞わせることもある。

それによつて周囲の草木に飛び火、引火して火災に発展。なんて恐ろしい事案も考えられる。

「……お、帰ってきたんじゃないか？」

遠くから車の走行音とエンジン音が聞こえてくる。桐ヶ谷邸のファミリーカーは目の前にあるのでそれではない。

その音の持ち主であろう車の音は段々と大きくはつきり聞こえるようになり、やがて自分たちの家の前で停止した。

その車の中に、人影が三人分確認できる。

運転席に一人、後部座席に二人。女性と男性客のようだ。

「あっー」

その光景を確認すると、木綿季の表情がぱあつと明るくなる。ローチェアから腰を上げるとぴよんと元気よく立ち上がり、支払いをしているタクシーの前まで駆けていく。

タクシーのフロントに設置されてる支払い中の赤いランプが点灯している。

そのランプがやがて降車中に切り替わると、後部座席のドアが「ガチャツ」という音を立てて開かれた。

いつもは電車と徒歩で通勤帰宅している二人も、今日は足並みを揃えて仲良く帰路に着いていたようだ。

「ありがとうございます！」

一足先にタクシーを降りた女性客が、ここまで安全に連れてきてくれたドライバーに軽く会釈して感謝の言葉を送る。

その後が続いてガタイのいい男性客も同じようにタクシーを降りた。

「おかえりなさいーい！ お母さん、お父さん！」

二人の姿をしっかりと視界に捉えると、木綿季が嬉しそうに駆け寄る。三人兄妹の両親である峰嵩と翠が帰宅したのだ。

「ただいま、木綿季。和人、直葉」

「ふう、今帰ったよ」

それぞれ仕事帰りという事もあり、びつちり決めたビジネススーツに身を包み、その上にはメンズのコートと、レディースコートが纏わられてる。

峰嵩はクリーム色で、サラリーマンというよりは所轄の刑事といった印象を思わせる。

翠は黒みがかかったグレーの淡い色合いの物を着用しており、出来るキャリアウーマンのような雰囲気醸し出していた。

「おかえりなさいーい！」

「おかえり、父さん、母さん」

一日家族のためと労働に精を出していた両親に労いの言葉をかける。

木綿季は積極的にカバンを持ち、それに続くように和人と直葉も歩み寄る。

いつも見慣れている我が家の庭先に、普段は見ないキャンプギアがずらりと並べられている光景を目にし、今夜は楽しくなりそうだと、頬の筋肉が緩くなる。

「すごいわね、全部三人で準備したのね？」

「ほとんど私が一回使ったつきりで腐らせていたものだな、ははっ」
翠は関心の表情で、峰嵩は自分の私物を再利用されていることに微妙な表情を浮かべながらバーベキュースペースへの感想を述べた。

しかしそもそも、この様なことになったのは買って溜め込んで中々使おうとしない峰嵩のズボラな面が招いたことだ。

その片付けや後始末でさえ、自分の子供たちにやらせてしまっているのだから、何かを言える立場ではなかった。

「それも、ほとんど一回こっきりで使うのやめちまっただろ？ 勿体ないよ、父さん」

「か、返す言葉もないよ」

全くもって息子の言う通りである。

自身の小遣いの範囲で買ったものとはいえ、たった一度の使用でそれつきりにしてしまうのは、正直なところお金の無駄と言う他ならない。

それも妻である翠の真横でそのような事を聞かれてしまったのは、お小遣いの査定にも影響が出てしまいそうだ。

現に翠の表情はニコニコしているものの、若干引きつっているように見えなくもない。

「なんでもいいけど早くはじめよーよー！ ボクお腹ペコペコだよー！」

「あたしもだよー！ それに寒くてこのままじゃ風邪ひいちゃうー！」

「っと、それもそうだ。父さん、火を使うから立ち会ってくれよ」

「ん、では着替えてくるよ」

一旦木綿季に持ってもらったカバンをもう一度受け取ると、峰嵩と翠はゆっくりと我が家へと入っていく。

師走の時期になると仕事も忙しくなってきたしまい、中々定時で帰るとするのは難しくなる。

しかし、今日のように特別な日もなれば気合の入りようが違う。

急遽リスケし、休憩時間を削り業務をこなし、上司からの無茶ぶりが来ないように祈りつつ黙々と仕事を進める。

残業するのが当たり前となってしまうこの日本社会に置い

て、意地でも定時で上がるといふ鋼の意思で、全てをやりきったこの二人は立派だと言えよう。

同日 午後17:25 埼玉県川越市宮下町 桐ヶ谷邸庭先

「おまたせ」

先程まで見せていた仕事着から私服へと着替え、すっかり仕事モードからリラックスマードへと切り替わった夫婦が姿を見せる。

峰嵩はグレーのくたびれたセーターにカーキ色のパンツ。

翠は和人と同じような全身黒一色で、上はトレーナー、下はレディースパンツに身を包む。

しかし、二人とも心做しか上も下も衣服がくたびれている印象を受ける。

「ようし、それじゃ始めよう。まずは焚き火をつけないとな」

「わあっ、やっとなんだねー！ ボク楽しみ！」

「あたしもあたしも！」

耐火性機能を持ったオレンジ色の焚き火用グローブを両手に装着し、和人が焚き火台の前に屈み込む。

パラボラアンテナのような形をした焚き火台の底には、板チョコの形状をした固形タイプの着火剤が三つほど敷かれており。

その上にホームセンターなどでよく見る薪が六本ほど、支え合うような形で積み上げられている。

「あ……ねね、和人。ボクやってみたい！」

前回、詩乃たちと一緒にやった落ち葉焚きの時は見ていただけだった木綿季が、今回は自分の手で焚き火をやってみたいと手が上がった。

淡々と作業を進めようとしていた和人であったが、こんなに楽しそ

うなことを木綿季が見逃すはずがない。

実際、焚き火の炎を見るのは楽しいものだ。

不規則にメラメラと燃え上がり、同じ燃え方は絶対にしない。

パチパチと心地いい音を響かせながら、淡々と黒く炭化しながら燃え盛っていく。

世の中のキャンパーには焚き火をしたいがためにアウトドアをやっている人もいるくらいだ。

すっかり暗くなった今の時間となつては、更にやりがいを感じるのとだろう。

「俺は構わないぞ？ 木綿季がやりたいなら。いいかな、父さん」

この中で火の取り扱いをした事があるのは和人、峰嵩、翠の三人だけだ。

故に、火の恐ろしさは十分に理解している。

火を取り扱う際の注意点は何も火災だけではない。

バーナーから出るガスの炎、加熱された鍋類からの熱、時折焚き火から焼け落ちる炭の欠片など。

燃え広がりだけではなく、それらからの火傷にも十分留意しなくてはいけない。

それらの注意点も踏まえて、和人は保護者である峰嵩に許可を求め、視線を送る。

「十分注意しながらなら、私は構わないよ」

眼鏡がかけられたコワモテの表情で精一杯の笑顔を作り、娘がチャレンジする為の背中を押す。

若いうちは何でも経験。たくさん体験してきたことが自分が大きくなつた時の糧となる。

それが、普段学校や会社でやり得ない非日常の体験なら尚のことだ。

峰嵩から許可を貰うと、途端に木綿季の顔が明るくなる。目をキラキラさせて、顔の筋肉が緩み、つつい嬉しそうにバンザイのポーズまで取っている。

「ホントに!? やったー!」

心底嬉しそうな木綿季の反応を見て、周りにも笑顔がこぼれる。許可を貰った木綿季は早速嬉々として焚き火台の傍に駆け寄り、今度は和人にどうすればいいの？ と視線を送る。

「よし、じゃあ教えていくからな？ よーく聞いとくんだぞ？」
「ウンっ！ わかった！」

まだ火を点けてもいないのに自身たつぷりな面構えで少し食い気味で和人の方を見る。

焚き火台のすぐ側に置いてあるトーチバーナーと焚き火用グローブに手を伸ばし、木綿季の目の前に差し出す。

木綿季がそれを受け取ると、これで火を点けるの？ と頭上にクエスチョンマークを浮かべながら次の指示を待つ。

「これがトーチバーナーだ。使い方は簡単だけど、火が勢いよく出るから注意するんだぞ？」

「う、うんっ」

「この手前についてるハンドルを時計回りに回すとガスが出る。そしてその状態でこのトリガーを引くと小さい火花が散って、火になって出続けるんだ」

「ほあー、凄くカンタンなんだね？」

「簡単だからこそ怖いんだぞ？ 俺なんか使い終わったこいつに腕が当たって軽く火傷したことあったんだからな」

「ええー……それは怖いなあ」

「それだ、その怖いつて思う気持ちが大それたんだ」

そう、ここは現実世界。仮想世界と違って怪我をすれば痛いし火傷をすれば跡が残る。

HPが減ったり状態異常になるだけ、とはいかないのだ。

だからこそ、気を付けなければならない。

アウトドアは自然を相手にするアクティビティでもある。

故に、巨大な力を持つ自然へのリスクを忘れてしまったら、多大な代償を払うことにもなりかねない。

取り返しのつく範囲ならまだいいが、そうでない場合は、最悪命の危険に脅かされることも珍しくない。

なので、自然への恐怖と尊敬の意だけは絶対に失ってはならない。
アウトドアに携わる上で忘れてはいけない心構えだ。

「今、木綿季は火に対して怖いつて思ったよな？」

「え？ あ、うん。ヤケドしたら嫌だなとか、火事になっちゃったら怖
いなんて……」

「その気持ち、絶対忘れないようにな？ 火もそうだけど、自然そのも
のに対する意識ってのは大事なんだ」

その警告を耳にすると、少しだけ不安になる。実際に薪に火をつけ
るのはものの数秒の作業に過ぎない。

確かに簡単ではあるが、簡単だからこそ、おざなりにしてはいけな
い。

一歩間違えば大事故になるからこそ、和人は念には念を押して、し
つこいくらいに木綿季に自然の怖さを言いつて聞かせていく。

聴き始めた時こそ不安の顔色を隠せなかった木綿季であったが、話
を聞いていくうちに彼の真剣さも同時に受け取り、ふぎけ半分をやつ
てはいけないんだと、身を引き締まらせる。

「……とまあ、色々小難しいことくつちやべったけど。要は注意して
楽しもうな、ったことだよ」

「う、うん。ようし……やってみる！」

「ああ、ファイトだ。木綿季」

少しだけ緊張した趣きで焚き火台と対面すると、まずは焚き火用グ
ローブを手にはめる。

これなら万が一手首から先が熱源に触れるようなことがあっても、
ある程度は熱さから守ってくれる。

次に和人に言われた通りにバーナーのハンドルを右回りに捻る。

すると小さく「シュー……」というガスが外に流出している音が聞
こえた。

次にゆっくりとその口を着火剤と薪がくべられている箇所へと位
置を合わせ、人差し指でトリガーを引く。

カチツという音が聞こえたかと思えば、今度は瞬く間にポオツ、と
いう勢いのある音と共に青色とオレンジ色が混ざりあつた炎が吹き

出された。

「わわっ！ ひ、火が出たよ和人！」

「絶対に手を離すなよ？ 火を消すにはさっきのハンドルを逆回しするしかないからな」

この状態で地面に落下させようものなら大惨事になりかねない。少しだけバーナーを握る利き手に力が込められる。

バーナーの先端からは長さ十センチ程の青い炎が放出されている。青いということはそれほど高温だということを示している。

人肌に当たってしまったえば皮膚の火傷だけでは済まされない。

「ゆっくりでいい。そのまま着火剤に火の先端を当てるんだ」

「ち、着火剤に……」

「でも点火すると結構大きく燃え広がるから、火が移ったと思ったら素早く手を引つ込めるんだぞ」

「が、頑張る！」

的確なアドバイスを聞き入れながら、言われた通りに右手を動かしていく。

着火剤が炎にあてがわれると、ジリジリ……と物が焦げるような音が聞こえる。

そして着火剤の名は伊達ではなく、当てたかと思えば一瞬で炎が燃え広がっていく。

「わわっ、もう点いちゃった！」

「いいぞ木綿季、もうバーナーを消すんだ」

使い終わったなら手早く消す。炎を取り扱う時の鉄則だ。和人に言われると木綿季はちよつとだけ焦る様子を見せながら、今度はハンドルを反時計回りに捻る。

すると先程まで轟いていた燃烧音はどんどん小さくなり、それに比例してバーナーの青い炎も消えていった。

「その状態でもまだ熱いからな。誤って触らないようにしろよ？」

「う、うん！」

トーチバーナーを焚き火台から離れたところに置くと、今度は和人が長さ五十センチ程ある焚き火用のトングを差し出してきた。

グローブがあるとはいえ、そのまま手で直接薪等をいじくるわけにはいかないのです、このトングを用いて薪の位置の微調整を行う。

「着火剤の炎が上手く薪に当たり続けるように位置をズラしてやるんだ。燃えてない着火剤があったらそれにも燃え移らせる」

「えつと、炎を当てて……」

真剣な表情で焚き火を育てていく木綿季の様子を、家族一丸となつて見守っている。

ひとつ、またひとつと全ての着火剤に火が燃え移ると、暗かった桐ヶ谷邸の庭全体が炎のオレンジ色で染められていった。

時折、パチンツと火が弾けるような音が響き、その度に木綿季がびっくりして上半身をビクつかせる。

「結構いい薪だな。しっかりと乾燥してるものを売ってくれてる」

「ほえ？ そーなの？」

「全部がそうじゃないんだけど、中には内部にまだ水分が残ってるものもあるんだよ」

「ええー!? そ、それってちゃんと燃えるの？」

「うーん……燃えるつちや燃えるんだが、絶えず水分が蒸発してる音が鳴り続けて雰囲気壊れる」

「そうなんだあ……でもこれはそんな音聞こえないね？」

三つ投下された着火剤は既にほとんどが消し炭になっており、その炎はしっかりとくべられた薪に燃え移っていた。

パチパチと音を立てて、今度は薪自身が周囲の酸素を取り込んで燃焼を続ける。

「水分が残つてると突然爆ぜたりするからな。そうなると燃えカスが弾けて危ないんだ」

「ええー、それは怖いな……」

「でもあの店で買ったやつは大丈夫そうだ。これがホムセンとかになると質の悪い薪を売ってたりするんだよ」

過去に苦い経験があったのか、和人が微妙な表情を浮かべながら後頭部をポリポリと爪で搔く。

通常、樹木が伐採されてから薪となって人の手に売られるようにな

るまでは、一つの工程が不可欠となる。

それが薪の乾燥だ。

一般的にホームセンター等で売られている薪のサイズにカットしてから、ざつと最短で三ヶ月、最長で半年もの年月を要する。

日光がよく当たるところ、風通りが良いところ等で、ひたすら長い間乾燥させ続けなければ、アウトドアで使用することは出来ないのだ。

しかし、それを店頭で見極めるのは難しく。こればかりは運否天賦に身を任せるしかない。

熟練のキャンパーは持った時の重さや、叩いた時の音の響き方で見極めてる人もいるとか。

「つてことは、この薪は当たりなのかな？」

「ああ、そうゆうことになるな」

トングを上手く使い、薪の一本一本、そして全体にくまなく熱が伝わるように微調整を続ける。

細めのものから太めのものまで、焚き火台にくべられてる凡そ全ての薪に火がしっかりと移っているようだ。

「それにしても、お兄ちゃんってインドアなのに結構こーゆーの詳しいよねー？」

「……むむ、そいつは聞き捨てならないぞスグ」

「だってー、あんまりお兄ちゃんが焚き火とかってイメージわかないんだもん」

「あ、それはボクもそう思う！」

普段ゲームばかりしてる印象が強いのか、どうしてもこの兄がアウトドアと結びつくイメージが湧いてこない妹たちの態度に若干の不満を抱える。

前回の焼き芋の時にも同じようなことを言われたような気がするが、ここまでアウトドアに対して知識と心構えを持っているというのにこんな言われ方はないだろうと。

そんな偏見に異議を唱えようとしたが、和人はそうしなかった。

これ以上いじられるのも面倒くさいし、そこまでムキになるほど自

分は子供では無い。

そう思うのならそう思ってもらって構わない。自分は行動でそのイメージを払拭していくと、今日のバーベキューにより一層気合をいれて望むことにする。

「……ん、木綿季。そろそろいいんじゃないか？」

「え？ もうこれいいの？」

「ああ、結構火が安定してきた。あとはこの火を絶やさないように薪を適宜くべ足してやれば大丈夫だ」

「つてことは、焚き火完成なの？」

「バッチリだ。初めてなのにすっかり出来たじゃないか」

目の前で炎がメラメラと勢いよく燃え上がっている。不規則に、ムラがあり、時折大きく燃え盛る。

その明るさは家の蛍光灯や、白熱球、またLEDとも違った優しさがあつた。

木が燃える音も相まって、見ていて飽きない。

一昔に、焚き火が燃えている様子をひたすら写し続けるといったライブ配信なるものが存在していたが、こういった趣なら需要があるのも頷けると。

木綿季はすっかり焚き火の魅力に取り憑かれていた。

「なんか、いいね……」

「ああ。落ち着くだろ」

燃えている薪をじっくり見守っていると、少しずつではあるが外側から黒く炭化していき、段々と細くなっていくのがわかる。

太さ十センチほどあつた薪も、焚き火台の燃焼効率がいいのも相まって、その太さは三分の二程までになつていた。

「あつたかい……」

「……ああ、そうだな」

間近で焚き火を見つめ続ける。

二人が焚き火に魅入られていると、それに続くように直葉も。

そして翠と峰嵩も、焚き火台に集まってくる。

誰もが無言で、ひたすら無言で焚き火を見つめている。

各々何を想いながら焚き火を見つめているのだろうか？

家内の安全か、仕事の安定か。はたまた新しいことへの挑戦か。

これからの時代の変化はどのようなのか。自分の将来はどのようなのか。ただひたすら燃え続ける焚き火を見ているだけだと言うのに、五人は別々に心の中で考えを巡らせながら、目の前の暖かさに身を委ねていた。

しばらく時間が経つと、最初にくべた薪が半分ほど燃え尽きていた。

それに伴い火力も自然と落ちていく。はっと気付いた木綿季はテーブルの足元に転がってる薪の束から三本ほど抜き取り、再び焚き火台へと燃料を投下する。

一度勢いづいた火はそう簡単に消えることはなく、炭化した薪の欠片も熱源となり燃え続けているため、最初にくべた時よりも遥かに早く引火していった。

新たな燃料を得た焚き火台は火の勢いが更に増して、ゴォゴォとより大きい炎を形成していく。

それはもはや暖かいというよりは、熱いと言った方が正しいだろう。

それでも木綿季は出来るだけ近くで焚き火を見つめていた。

普段こういったことに触れる機会がないためか、物珍しさからかはわからないが。

今日の前で燃え盛る、心まで伝わるほどの暖かい光景に身を委ねていた。

ここにいる全員が完全に焚き火に魅了されている。見ようと思えば永遠に見ていられる。

時折舞う火の粉を目で追ったり、パチパチと心地よい音を感じるために、敢えて目を閉じて耳で楽しんだり。

師走の忙しい毎日に追われてる事もあり、この見守っている時間は、ただただ癒しの時間となっていた。

しかし、その癒しの時間はとある出来事で中断させられてしまうことになる。

グウウ……

突如、静寂な空間を引き裂くかのように豪快な音が鳴り響いた。その音の元凶たるは、誰もが心当たりがあった。ただ一人を除いて、全員が一斉にその音の発生源に視線を移す。するとそこには、自分のやらかしてしまったことに顔を赤らめている、女の子の姿があった。

言わずもがな、木綿季である。

顔が赤くなっているのは、何も焚き火に当たっていたからではない。

癒しの雰囲気をぶち壊してしまった恥ずかしさから、首から上を真っ赤にしてしまっているのである。

「……くすっ」

「う、ううー……」

その姿を見て、どつと一斉に笑い声がこだまする。考えてみればつまみ食いしたことを除けば、お昼の時間から何も口にしていないのだ。

空腹じゃない方が不思議なほど。

かつて、川越のデパートで鳴り響かせた時よりも強烈で豪快、そして強大な響きであった。

「……バーベキュー、始めるか」

「あはは、そーしよ。ゆーきもこの調子だし」

「ボク、お腹空いてるの忘れてたよー……」

「わはは、若いっていいな。それではグリルの炭は私が育てるとしよう」

「では、私は飲み物を持ってきますね」

翠はそう言うと、くすくすと笑い声をもらしながら家族分の飲み物を取りに、家屋へと足を運んでいった。

峰嵩は焚き火台から程よい細さになった薪を二本ほど引っこ抜くと、それを炭火グリルに移し熱源とすることでグリルの着火剤に火を

点ける。

瞬く間に着火剤に火が移ると、焚き火台と同じように炎が上がり、今度は備長炭に熱を加え続ける。

こちらは薪と違って燃え広がる訳では無いので、見た目は至極地味なものとなっている。

しかし、その炭を育てるという工程も非常に重要な役割だ。

すっかり育った炭は表面が真っ白になり、長い間熱を発し続ける。

その熱こそが、遠赤外線だ。

右手でトングを持ち、備長炭の位置を微調整しながら、今度は左手で持った団扇で酸素を送り込む。

炎は酸素を取り込むことでより強く燃え盛る。

逆に言えば、酸素を送り込まなくては瞬く間に炎は弱くなる。

なのでしっかりと炭を育てるためにも、一生懸命仰いで酸素を送り続ける。

「あと少し待っていてくれ、木綿季。もうすぐ炭が育つから」

「ホントにー?」

焚き火の次は炭火の方に興味を持つ木綿季。

義父と義娘の関係ではあるが、はたから見ればその関係は本当の親子のやり取りと変わり無かった。

炭から熱が伝わっているせいか、額には汗が浮かび上がっている。

熱いは熱いが大切な娘の思い出を作るために、父親として人肌脱ぐ。

これくらいで笑顔になってくれるのなら安いもんだと、一家の大黒柱としてどつしりと威厳を見せる。

「……よし、こっちも大丈夫。しっかり炭が育ったよ」

「ホント!? もうお肉とか乗っつけれるの?」

「ああ、すっかり待たせてしまったね」

「やったー! よーうし、食べるぞー!」

待ってましたと言わんばかりに今日一、木綿季が張り切っている。

テーブルの上に乗っかっている食材は今日、彼女が食べたいとリクエストしたものばかり。

より一層食べることに気合が入るといふものだ。

真冬にバーベキューは中々やるものではないかもしれないが、今の時だけは、家族団欒。

素敵なひと時になることは間違いなかった。

さあ、過ごそう。世界一素敵な時間を……。

先行公開 オーディナル・スケール編
OS第1話〜次世代ガジェット〜

西暦2027年 4月23日（金）午後15:30 東京都西東京市 レストランワグナリア西東京駅前店

学校の授業が終わり、街のあちらこちらが下校生徒で賑わうこの時間帯には、各所様々なところで学生が放課後を満喫している。

喫茶店で他愛のない話に花を咲かせる者、ゲームセンターに寄り道して遊んで帰る者、本屋に立ち寄り、参考書や勉強になるような資料を読んでいる者等様々だ。

ここ西東京市の駅前も例外ではなく、いたるところに学校が終わって、制服に身を包んでいる生徒や、仕事が早く終わったのか早々に家路に着いている社会人の姿が見受けられている。

本日は華の金曜日、そして駅前ということもあり、人という人で大変に賑わっていた。しかし、その和気藹々とした賑わいっぷりは、ただ単に週末だからというわけではない様子だった。

通行人が皆、顔に白い奇妙なモノを装着しているのだ。まるでイベント会場の係員が装着している、インカムののような形をしたマシンを、好奇心旺盛な年頃の学生が一部を除いてほぼ全員装着している。いや学生だけではない。道行く人という人、それこそ中年のサラリーマンはおろか、主婦、年配のお爺さんお婆さん、そしてその孫と思われる子供まで、その白くて奇妙な形をしたインカムを装着していたのだ。

―次世代ウェアラブルマルチデバイス・オーグマー―

五感を全て仮想世界に委ねるフルダイブ機器『アミュスファイア』とはまた一風変わったマシーナリーとなっているこのオーグマー。

発売開始するなりたちまち爆発的人気を呼び、今や社会現象どころか持つていて当たり前というまでに、急激に現代社会に浸透していったのだ。

このオーグマーにはアミューズファイアとは決定的に違うポイントがある。

ナーヴギアやアミューズファイア、メイキキュボイドといったフルダイブ機器が、仮想世界を舞台とする一方で、オーグマーは実際の世界、現実世界を舞台としているのだ。

—AR機能—

オーグマーの最大の特徴とも言えるコンテンツだ。精巧なグラフィック技術で作られた仮想世界とは違い、ARは現実の世界に、まるでそれがそこに本当にあるかのようにもうひとつの現実を作り出すのだ。

以前からAR技術そのものはあったが、このオーグマーが作り出すARの精巧さは他に類を見ない完成度を誇っている。

SAOやALOのように、目の前の何もない空間にメニュー欄が表示され、天気予報や交通情報、またニュースやインターネットはもちろん、テレビ番組やゲームまで楽しめる超万能ツールとなっている。

そのあまりの便利さと革命的な機能により、もはや世間でオーグマーは発売して早々になくってはならない、インフラ的な要素へと発展を成し遂げていた。

そしてここに、独特の紺色のブレザー学生服に身を包み、オーグマーを装着している女子生徒が四人。

そしてそれを解せない表情で見つめている男子生徒が二人、駅前のレストランの窓際にある席で放課後を満喫していた。

彼らがいるレストランの店内はそこそこのお客がおり、親子連れや学生、営業途中だと思われるビジネスマンなどで賑わっている。

「……………」

男子生徒二人など露知らず、女子生徒四人は真剣な顔つきで卓上に

表示されたARのゲームに夢中になっていた。

顔だけのキャラクターを操り、食べ物を取得しながら迷路のようなステージを進み、ゴールを目指すドット絵調のレトロゲームをプレイしているようだ。

女子生徒四人は、各々が右手の人差し指を巧みに操作して、自分の操るキャラクターをお城の形をしたゴールに向かわせていた。迷路の道中にいる敵だと思われる、コミカルな形をしたキャラクターを上手く避けながら、上下左右に経路をたどっていく。

ある者は敵をおびき寄せて囿になり、ある者はその隙をついてゴールを目指し、ある者は食べ物を出るだけ取得して得点を稼ぐ。

各々がしつかりと役割を果たす連携プレイをこなしてみせていた。事前に作戦でも立てていたのか、それとも阿吽の呼吸というやつなのだろうか。

「やったー！ クリアだよー！」

長い黒色のロングの髪の毛の少女、桐ヶ谷木綿季が操作している青色のキャラクターがゴールの城にたどり着くと、フィールドにいた敵キャラクターが消滅し、ゴールフラッグが掲げられ、派手なエフェクトと共にステージクリアが知らされる。

「やったね木綿季！ ナイスアシストリズ！ シリカちゃん！」

「これで100ポイントゲットですよ！」

巧みな連携プレイでゴールを果たした四人の女子生徒は、ゲームをクリアしたことに喜び合っていた。

このように今、日本のあちこちで「ARゲーム」というものが大流行している。ゲームだけに限らず、飲食店や小売業、自動販売機などの無人サービスにもARが活かされているのだ。

ゲームをクリアすれば「ポイント」を稼ぐことが出来る。このポイントは貯めることによって様々な企業からサービスを受けられる、お得なものとなっている。

飲食店の企業からは無料クーポン、ファッションやアパレルなどといった企業からは割引券などなど、サービス形式は様々だ。

「あ、ケーキ無料サービスだって！ ラッキー♪」

「……………」

赤みがかった茶髪のショートヘアの女の子、篠崎里香がケーキがタダで食べられることに喜んでいいる。そのニヤついた里香に便乗するように、すぐ隣に座っている茶髪のツインテールの女の子、綾野珪子が左右の髪を揺らしながら喜びのハイタッチを交わしていた。

その向かいの席には栗色の長いロングのヘアスタイルの女の子、結城明日奈が微笑ましく見つめ、その隣の席には彼女の親友でもある木綿季が「ケーキ、いつくるのかなー♪」とうきうきしながら手をパタパタとさせて、キッチンホールの方に視線を送っていた。

「君たち、ちよつとゲームしすぎじゃないか…………？」

「本当だぜ、ここにくる道中にもさんざゲームしながら来てたのに……………」

一方で窓際に座っている二人の男子生徒が、溜め息を混じらせながら冷ややかな視線を女性陣に送っていた。一人はお馴染み、木綿季の恋人で義理の兄でもある桐ヶ谷和人。

その向かいに、珪子と同じぐらいの身長に、赤みがかった黒髪で和人と似たようなヘアスタイル。木綿季や和人と同じクラスで珪子の恋人でもある高坂准こうさかじゆんが、コーラが入ったグラスのストローに口をつけていた。

女子がゲームを楽しんでいる一方で、男子は退屈そうにその光景を見つめていた。

「キ、キリトさんとジュン君にそんなこと言われるなんて……………」

このメンバーの中で一番のゲームジャンキーな和人と、同じぐらい仮想世界へのダイブ経験が長い准の口から「ゲームしすぎ」というまさかの発言が飛び出したことに、珪子を含む女子生徒は驚きの表情を隠せなかった。

「あなただけには言われたくない、視線がそう訴えかけてるようにも見えた。」

「だって……………色んなところでポイントがもらえるのよ？ やらなきや損でしょ？」

「本当は……………キリト君やジュン君もやりたかったんじゃないの？」

時代の最先端に行くオーグマーを最大限楽しんでいる里香と明日奈が、これみよがしに「あなたもオーグマー使いなさいよ」と自慢げに話しかけていた。

別に和人と准もオーグマーを持っていないわけではない。装着していないだけで今も学校鞆の中に入っているのだ。

しかしARというものにイマイチ理解が進まないのか、仮想世界への思い入れが強いのか、自ら進んでオーグマーを使いこなそうといった気概は見られなかった。

「あーだめだめ明日奈、この二人はARよりVRの方がいいんだってさ。ボクはARも面白いと思うんだけどなー」

この中で一番、というより全世界で一番仮想世界へのダイブ期間が長い木綿季が、右手を水平に振りながら微笑を浮かべている。

目の前に仮想世界と同じような光景が広がり、かつアミューズファイアでフルダイブするときのような五感をカットオフするリスクを背負うことなく、現実世界で様々なコンテンツを楽しめるオーグマーは、木綿季にとってはまさに夢のマシンだった。

しかし彼女も仮想世界に飽きたというわけではない。ただ単に長年憧れていた現実世界でやるが増えたことに、何よりも喜びを感じていたのだけなのだ。

だが一方で恋人の和人がイマイチオーグマーに乗り気ではないことに、引っ掛かりがあるもの事実だ。

折角高いお金を払うことなく、帰還者学校で無料配布されたのだから、和人も楽しめばいいのにと、そう思っていた。

「でもまあ、確かに便利よねー。どこでもテレビは見られるし、スマホよりナビが使いやすいし、天気予報は助かるし……」

「それにそれに、ユイちゃんやストレアともいつでも会えるからねー」
里香と木綿季がオーグマーの利便性を語っていると、明日奈の肩にユイが、和人の肩にはストレアが、お人形サイズのナビゲーションピクシーの姿でどこからともなく現れた。

仮想世界でAIとしてしか存在出来ないユイとストレアであったが、拡張現実を実現したオーグマーの機能により、立体映像ではある

がこうして現実世界に足を踏み入れることができていたのだ。

『えへへー、まさかキリトたちと現実世界でも一緒にいられるなんてねー!』

『夢のようです!』

ごく普通のレストランに、妖精の姿をした小さいお人形サイズの女の子が二人漂っている。はたから見たら異様なこの光景も、オーグマーが爆発的に浸透したこの拡張現実社会では、ごくごく普通の光景になっていた。

以前のようにセブンのところにお世話になりっぱなしといったこともなく、今やユイとストレアは誰かのスマホかアミューズファイア、ないしオーグマーがあれば、どこでも存在できるようになっていたのだ。

未だに和人と一緒に部屋で過ごしている木綿季は、たまにストレアが遊びに来た時に「二人きりの時間を邪魔されるー」と不機嫌になることもあったが、基本的には現実世界でストレアたちとやりとり出来ることを嬉しく思っていた。

「それはそうと……実は結構気に入ってるでしょ？ リズ」

「そ、そんなことないわよ! でもほら、帰還者学校の生徒全員に無料配布なんてされたら、少しぐらいは使ってあげなきゃなーって……」

「買うと高いもんねー、オーグマー」

「か、買ってしまおうと……しばらくいろんなものを我慢しなければいけなくなりますからね……!」

和人たちはいざ知らず、木綿季ら女の子組はここ最近オーグマーの話で持ちきりだ。新鮮ということもあったが、手軽にどこでも、好きなコンテンツが出来ることに、大変満足している。

「でもこれ、本当に便利だよねー」

「このちっちゃいマシンに、こんだけのものがつまってるなんてね……」

オーグマーの機能はゲームだけではなく、自身の一日の摂取カロリーの自動計算といった健康管理や、周辺店舗の混雑状況の把握、自動販売機の在庫状況、交通状況等々、日常生活において知っておくと便利な情報がすぐにわかるようになっていく。

上手く応用すれば、忙しい一日でもつまずくことなく快適に過ごすことも可能だ。バッテリーの持ちもナーヴギア並ということもあり、もうすでに生活に欠かせないものとなっていたのだ。

「おまたせしました、こちらクリアポータスセットとなっております」
四人がゲームをクリアして五分も経っていないというのに、お盆に四人分のケーキを乗せたウエイトレスが、颯爽とケーキをテーブルに運んできた。

ウエイトレスは一つ一つ、四人の前に丁寧とした所作でケーキをおいていくと「ごゆつくりどうぞ」と一言だけ残して、迅速に持ち場に戻っていった。

卓上に置かれたケーキは一つ一つ全て種類が違っており、四人それぞれが自分の好きな、食べたいであろうケーキを見つめていた。

珪子は可愛い装飾が施されたいちごの丸いショートケーキ、里香はブルーベリーとハーブミントがのったレアチーズケーキ。明日奈はクリームといちごが乗ったティラミス、木綿季は先端に黄色くて小さな栗が乗ったモンブランケーキだ。

スイーツが好きで好きでたまらない女の子一行は目の前のスイーツに目を輝かせている。食べることが大好きな木綿季もさながら、珪子も首を横に振りながらご機嫌な様子だ。

中でも甘いものに目がない里香は真っ先に目の前のレアチーズケーキにフォークを入れていた。

「すごいねー、これってAIが好みまで把握してるんでしょ？」

「でいーぷらーにんぐ……って言うんですっけ？」

「機械のくせに気が利くじゃない。まあ……誰かさんならこうはいかないものね？」

木綿季と珪子がオグマーの凄さに関心する一方で、里香だけは皮肉の意味を込めた言葉を和人に向かって送っていた。

そんな里香の意図に気がついたのか、和人はお返しとばかりにこれ以上食べると太るぞと言わんばかりに、反撃を試みた。

「そのAIは食べた物のデータも取ってるらしいぞ……」

「え……？」

「……ん？」

常日頃から運動している木綿季はいざしらず、ろくに運動もせず
スイーツに目がない里香が頭に？マークを浮かべながら、AIから送
られてきたメツセージに目をやった。

先程までご機嫌でチーズケーキを口に頬張っていたが、そのメツ
セージを見るなり、だんだんと真顔になり、そして次第に不機嫌極ま
りない表情へと変化していった。

里香の視界には、彼女の一日の平均消費カロリー、基礎代謝カロ
リー、摂取カロリーの計算式が表示されていた。

一日の平均基礎代謝カロリーが、現在23.6kcal。合計代謝
カロリーが1200kcalに対し、放課後のこの時点での里香の摂
取カロリーは、すでに1000kcalを超えてしまっている。

このレアチーズケーキのカロリーは321kcalなので、摂取し
ていいカロリー量を上回る計算になってしまう。女の子にとっては
由々しき事態だ。

特に、スイーツ大好きな里香にとっては致命的なまでの死活問題と
なっていた。甘い幸せをとるか、苦しい現実と向き合うか、その究極
の二択を迫られていたのである。

同日 午後16:05 東京都立川市泉町 ショッピングパークら
らぽーと立川高飛

「ふん……い！ ふん……い！ ふん……い！」

和人たち六人は買い物客や下校生徒で溢れる立川のショッピング
モール、ららぽーと立川高飛に足を運んでいた。

和人たちの通う帰還者学校がある東京都西東京市の田無駅から、西
武新宿線を使って玉川上水駅で下車し、多摩モノレールに乗り換え、
高飛駅まで乗り継ぎ、そこから徒歩数分の場所にこのショッピング
モールは存在する。

2015年に開業し、敷地面積92,500㎡、店舗面積60,000㎡、テナント店舗数240、駐車場3,055台と、大型のショッピングモールにしては小規模なものの、ここ立川市の地元住民から支持を得ているショッピングモールだ。

そしてそのショッピングモールの三階、レディースやメンズなどの、ファッション関係の店が軒を貫いているこのエリアに、超のつくほど不機嫌になっている少女が、力強く一歩一歩足を踏みこみながら歩いていった。

言うまでもなく里香である。デリカシーの欠片もない先ほどの和人の発言にえらくご立腹、といった様子だ。そのあとを珪子がなだめるように慌てて追いかけていた。

「リ、リズさーん！ どうしたんですかー！」

小走り気味に先陣を切って進んでいく里香を追いかける珪子の後ろに、和人、木綿季、明日奈、准の四人が複雑な表情を浮かべながらゆったりと歩いていた。

「……もう、和人があんなこと言うからだよね？」

「キリト君は昔からデリカシーがないからねー」

和人のことをよく知っている木綿季と明日奈が呆れた顔で和人に野次を飛ばしている。和人は和人で頭をポリポリとかきながら「あんなに怒らなくても……」と困った表情を浮かべていた。

「お、女心って、複雑なんだな……」

かつてここまで機嫌を悪くした女子を見たことがなかった准が、苦笑いを浮かべながらさういわずい先を行く里香を遠目に見つめていた。

「ジュン君も、シリカちゃんのことしつかり見ててあげないとだめよ？」

「え!? いや……、え、えつと……」

明日奈が少しだけ前かがみになって准の顔を覗き込むと、途端に准は顔を赤くしてしまっていた。というのも、准と珪子が冬から付き合い始めて、二人は恋人らしいことは出来ていないのだ。

学食で一緒に食事したり、登下校したりといったことはあっても、どこかに一緒にお出かけしたり、デートにいったりとしたことは、ま

だ経験がなかったのだ。

そんな恋に初々しい准の反応を、かつて和人と交際経験があった明日奈は、まるで弟を見守る姉のような触れ合い方で接していた。

「ねえ、デートの予定とかはないの？」

「え、えっと。デートかどうかはわからないですけど、オーディナル・スケールのクエストと一緒にやろうって約束はしてます」

そう言いながら准は肩から下げている自分の学校鞆から、オーグマーを取り出して、自身の左耳に装着した。すると目の前には現在の時刻、今いるエリアの天候、リアルタイムで最新の情報が寄せられるトピックスが表示されてきた。

「そうなんだ……。それじゃあ格好いいところみせなくっちゃね？」

「う……。うん！」

今年の春にリハビリを終え、退院したばかりの自分の体がこの現実世界でどこまで動いてくれるかはわからない。

だけど自分は男の子だ、折角一緒にやるんだから、ALOみたく格好いいところみせてやりたい。そんなちよつとした下心を持ちつつ、准は男の子の顔になっていった。

そんな微笑ましい准を、傍らから暖かく見守っている兄貴分の和人が、腕組をしながら頷いていた。

「青春してるなあ……。うんうん」

「和人、ちよつとおじさん臭いよ……。？」

「ん、そうか……。？」

のんびり歩いている和人達をよそに、里香と珪子はどんどん先に歩いて階段を降りて一階フロアにたどり着いていた。

小走りには妙に早く進んでいく里香に、走っていた珪子が追いつくと「キリトさんも悪意があつて言ったわけじゃないんですから」と必死に里香をなだめていた。

珪子の必死の声かけもあり、そこまで怒っているわけではなかった

里香は「しようがないわね……」と一言だけ漏らすと、気持ちを切り替え、機嫌を直していた。

「ちよつとムキになってただけよ、大丈夫。もう怒ってないから」

「ほ、本当ですか……？」

「あたしだってもう子供じゃないんだから、あんなこといつまでも引きずらないわよ」

微笑を浮かべながら瑠子の肩をぽんぽんと叩くと、瑠子は少し安心したのか笑みをこぼしていた。

それからは歩くペースも女の子らしくゆつくりと、歩幅も短くして、ゆつたりと歩をすすめながら後方から和人たちが追いつくのを待っていた。

「それにしてもユナのファーストライブに、帰還者学校の生徒全員が無料招待されるなんて思いませんでしたね……」

「社会科見学の一環、らしいわね？ ライブが何の授業になるんだか……」

「本当ですよ、なんだか変わってますよね。私達の学校って」

—ユナ—

オーグマーのイメージキャラクターとして、オーグマー発売と共に一躍人気になった、史上初のARアイドルの名前である。

独特のファッションセンスの衣装に身を包み、清く透き通ったようなキレイな歌声が、たちまちアイドルファンの心を鷲掴みにしている。

ARアイドルということで、プログラムで組まれたAIだと公式から公言されているが、歌声や仕草があまりにも自然すぎて、本当は生身の人間が直接演じているのではないか？ というウワサが流れるほど、彼女の立ち振る舞いはリアリティに溢れている。

間近でユイやストレアといった高知能AIを見てきた和人たちにとっても、それはそれはまるでそこに実際に生きているかのように感じるほどだ。

そんなユナが来週4月29日の祝日に、新国立競技場でファーストライブを開催するという。和人たちが通う帰還者学校の生徒は、全員このライブに無料招待されているとのことだ。

これに一番飛んで跳ねて喜んでいたのは、他でもない瑛子本人だった。彼女は否定しているが、彼女はユナの大ファンなのだ。楽曲は全てDL購入済み、今日もここ立川まで足を運んだのも、パッケージ版の新曲のCDを買うためだったのだ。

「ユナの大ファンでよかったじゃない、アンタ」

「そ、そこまでじゃないですって！」

あくまでも本人は否定を続けているが、鞆にユナのパートナーロボットの「アイン」のストラップをぶらさげ、さらに鞆の中にファンブックを常備しているは、まるで説得力が感じられない。

しかしあくまで自分はそこまでどっぷりハマっていないと豪語する瑛子の態度に、里香は何か思い浮かんだのか、不敵な笑みを見せながらとあるアプリケーションを起動させていた。

「この前カラオケでもって木綿季たちと熱唱してたじゃない？」

里香が右手で何やらメニューを操作すると、瑛子の周辺に突如としてライブなどでもよく見られる小型のスポットライトが表示された。もちろんこれも実際に出現したわけではなく、ARである。

ユナのデビュー曲の前奏とともに瑛子の周囲が暗くなり、スポットライトの光は彼女を取り囲むように、赤、青、黄色、白など様々な色の光を放ち始め、たちまちショッピンモール内は完全に瑛子の臨時ソロライブ会場と化していた。

普通、こんな人通りの多い場所で大音量で、それも派手なエフェクトなぞばらまいたら大迷惑なことこの上ないが、この現代社会は違う。あらゆる人がARとオーグマーに理解を持っているのもあり、容認している。むしろ何が始まるんだ？と期待に胸をふくらませている人もいる始末だ。

「ちよ、ちよつとりズさん……！」

「ほらほら、みんなにも聞かせてあげなさいよ！」

爽やかながらも勢いがあり、ノリのいい前奏が流れ続けている中、

瑠子は恥ずかしさと歌いたさの両方と闘っていた。

こんな大勢の人たちの前で歌うなんて恥ずかしい、でも歌ってみたい、いやでも恥ずかしい、それでも歌いたい！

そんな葛藤を抱えながらも瑠子の左手は、自身の右肩から下げている学校鞆に差し込まれた、オーグマーのタッチペンを掴もうと着々とその距離を縮めていった。

最後まで葛藤していた瑠子であったが、心の奥底から溢れ出てくる歌唱欲に勝つことができずに、曲の歌いだしが始まるタイミングで、気が付くと左手にタッチペンを握り締めてしまっていた。

瑠子が歌いだすとタッチペンは黒いマイクへと形を変え、たちまち周囲にギャラリーががやがやと集まり始め、中には拍手や合いの手を合わせてくれる人まで現れた。

今この瞬間だけはこのショッピングモールは瑠子、いや、アインクラッドのアイドル的存在、竜使いのシリカちゃんの独壇場となっていた。

「シリカー！ 輝いてるわよー！」

里香がニヤニヤしながら野次を飛ばしていると、後方から里香たちのあとを追いかけてきた和人たちが姿を見せていた。

和人は目の前の異様な光景を目にするなり「何だこれは……」と小さな声で呟いていた。

「わわわ、シリカが歌ってるよー！」

「あはは、ノリノリね、シリカちゃん！」

和人はポケットに手をつ突っ込みながら数メートル離れた場所で一心不乱に歌う瑠子を見守っていた。一方で木綿季と明日奈は瑠子を見るなり楽しそうに彼女に合いの手を送っていた。

最後にメンバーに追いついた准も、恋人が文字通り輝いている光景を目にするとたちまち笑顔になり、拍手を送りながら、両手を顔の周囲に当て応援の言葉を投げかけていた。

「シリカー、頑張れー！」

准からの声援に気が付くと、瑠子はさらに腹と喉に力を込めて、ユナの楽曲を歌い続けていた。

気が付くと周囲のボルテージは最高潮に達し、タッチペンをサイリウムに見立てて前後に振るギャラリーまで現れ始めた。このシヨツピングモールにいるお客全員の視線という視線が、珪子のソロライブに注目を集めていた。

「うう……ボクもう我慢できない!」

「お、おい木綿季!」

学校鞆を傍らに置き、懐からタッチペンを取り出しながら木綿季は珪子のもとへと走り出していた。

仮想世界ではあるが、かつて大勢の観客の前でチャリティーライブを成功させた実績をもつ木綿季も、かつての胸の高鳴りを思い出していた。

タンツという音を立てて床を蹴り、一気に珪子のもとへとたどり着いた木綿季は珪子と仲良く肩を組んで、楽曲の最後のサビと一緒に歌い上げていた。

木綿季の晴れ舞台と知ると、恋人の和人は黙っちゃいなかった。すぐさま鞆からオーグマーを取り出し、自分の左耳に装着すると、さまざま電源をいれて起動し、木綿季の勇姿をその目に焼き付けようとしていた。まったく現金なやつである。

明日奈と里香は首と足先でリズムを取り、二人の歌に耳を傾けていた。ストレアとユイも再びどこからともなく現れ、手をパチパチと叩いてリズムをとりながら、木綿季と珪子のライブを楽しんでいる。

VR技術の第一人者で、世界的に有名なVRアイドルである、七色アルシャービンことセブンからの直接の歌の指導を受けたことのある木綿季は、常人とはあまりにもかけ離れている歌唱力を披露していた。

木綿季が歌に加わり、珪子とのデュオになると周囲のギャラリーは更に大いに盛り上がりを見せていた。このままではもはや警備員がやってきてもおかしくないぐらいの騒ぎになってしまっている。

最後のサビが終わり、後奏が流れ、やがて楽曲の終りとともにAR演出が解除されると、周りを取り囲んでいたギャラリーからは拍手喝

采と称賛の嵐が二人に送られた。

こんなキュートな女子高生が二人仲良く、今話題沸騰中のユナの曲を高い歌唱力で歌い上げているのだ。盛り上がらないはずがなかった。

腹から声を出し、精一杯満足のいくところまで歌った二人はご機嫌の表情で和人たちのもとへと戻っていった。周囲からの拍手はまだ鳴り止まず、中には写真や動画まで撮影している者まで見え始めた。

「和人！ どうだった？」

「ああ、とつても上手で可愛かったぞ。さすが木綿季だ」

「やったー！」

恋人から素直な感想をもらえると、木綿季は手を上げ飛び跳ねて喜んでいた。大勢の前で歌うのは実に一年ぶり以上であるが、やっぱり歌い抜くと気持ちいい点は変わらなかった。

「シリカも、すつごく上手だったよ」

「えへへ、ありがとうございます、ジユン君♪」

こちらはこちらで、木綿季たちとは別のベクトルで甘々な空気を醸し出していた。両方とも背が小さく、子供っぽく見えるからか、初々しくも甘酸っぱいような、そんな関係の二人に見えていた。

同日 午後16:30 タワーディスクららぽくと立川高飛店

「えへへ……♪」

「よかつたな、無事に買えて」

小さめの緑色のビニール袋の中に入ったCDを見ながら、瑛子がご機嫌そうに首を左右に振っていた。この日発売のユナの新曲のマキシシングルを無事にゲット出来たのである。

「それにしてもDL版だって買ってるんでしょ？ アンタ。よくパツ

「ケージ版まで買ったわね……」

既に曲そのものは手に入れてるんだからわざわざパッケージの方も買わなくていいじゃないと、里香が呆れた表情で瑛子に話しかけていた。

「な、何言ってるんですか！ パッケージ版は……これはこれで大事にとっておくものなんです！」

「とかなんとか言っちゃって、ちやっかり特典貰ってたじゃない」「うう……」

シリカの左手には、買ったばかりのマキシシングルとともに、この店でしか手に入らないオリジナルポストカードが握られていた。CD自体が欲しかったこともあったが、瑛子の真の目的はこのポストカードだったのだ。

そんな下心をままと見透かしていた里香は、ニヤニヤしながら瑛子をからかい続けていた。返す言葉もない瑛子は、困った表情を浮かべながら准に助けを求めべく、彼の顔をまっすぐと見つめていた。「うう、リズさんってば……アインクラッドにいたときから、ずっと私のことこんな扱いです……」

「ははは、仲が良くていいことだと思っぜ？ オレは」

准が瑛子に歩み寄りながら、彼女の頭にポンと優しく掌を乗せると、瑛子も嬉しそうに彼の手を受け入れていた。

それですっかりご機嫌になったのか、瑛子は先程まで里香に言われていた嫌味のことなどどうでもよくなっていた。

「えへへ……♪」

「あ、アインクラッドって言えば……あの例のウワサって本当なのかな」

「例のウワサ……？」

明日奈が人差し指を顎に当て、ショッピングモールの天井を見上げながら、何かを思い出したかのように呟いた。今彼女たちが夢中になって遊んでいる、人気ARゲームの中で流れているウワサのことだ。

「オーディナル・スケールに、旧アインクラッドのフロア階層ボスが出

現するっていう……」

「ああ、あれね……、謎のイベントバトル」

「へえ……そんなのがあるんだ。ボクSAOにはちよこつとしかいなかったから、戦ってみたいなー!」

「オレもオレも!」

―オーディナル・スケール―

通称OS、今日本中を震撼させている、最先端ARゲームのタイトルだ。ソードアート・オンラインやアルヴ Heim・オンラインがVRMMOならば、オーディナル・スケールはARMMOといったところだ。

現実の世界を舞台にモンスターが現れ、これを討伐することによって、オーグマーのポイントを大幅にもらえるシステムとなっている。

ポイントを稼ぐと「プレイヤーランキング」が上がり、通常のオーグマーのサービスとは別に、企業から更なる恩恵を受けられるものとなっている。

何よりVRMMOとの最大の相違は、現実の世界、つまりは仮想世界のアバターではなく、生身の肉体を動かしてモンスターと戦うところにある。

生身なのでプレイヤー本人の運動神経がモノを言うし、服装も動きやすいものを選び、自身のコンディションも最高にしておかなくてはならない。

オーディナル・スケールを起動すると、目に見える情景は現実のものとはかけ離れた中世風のものに様変わりし、実際にある障害物や建物も、姿を変えてオブジェクトとして存在することになる。

モンスターは立体映像だが、建物や障害物は実際にそこにあるので、誤ってぶつかったりしたら本当に怪我をしてしまう。そこだけは注意しなくてはならない。

最初は交通事故や、プレイヤー同士での接触事故なども懸念されたが、周知に周知を重ねたプレイヤーマナーの徹底、公的機関の全面協

力による交通整備、人員誘導、区画整理などにより、安全性の確率を
実現している。

オーディナル・スケールはまさに、次世代MMOとしての屋台骨を
背負う、今もつとも注目されているゲームとなっているのだ。

「旧アインクラッドってところが、なんか引つかかるよな……」

「そういえばそうよね……、ALOの新生アインクラッドに対抗して、
敢えて旧SAOのものを採用してるのかしらね？」

「どっちにしろ、出現場所の情報がギリギリまで隠されてる所為も
あって、脚がないと参加自体が難しいの……」

「……………」

五人がオーディナル・スケールの話題に花を咲かせている最中に、
和人がこっそり抜き足差し足でその場から立ち去ろうとしていた。

その動きにいち早く気付いた木綿季が、和人の制服の首元の襟部分
をむんずと驚掴みにし、彼に向かって満面の笑みを浮かべて見つめて
いた。

「ねえ明日奈、脚があればいいんだよね？」

「え、ええ……そうだけど……」

「だってさ、和人♪」

「……………あ、あはは……」

木綿季の考えていることがわかってしまった和人は、顔を引きつら
せて諦めムードを漂わせていた。

ただでさえオーディナル・スケールには乗り気じゃないというの
に、そのボスマンスターが出るであろう場所に送り届けるアツシー君
の役割を担って欲しいというのだから。

俺はそんなことのために自動四輪の免許を取ったんじゃない、家族
全員で旅行に行けたらいいなと思って取得したのだ。

断じてこの面子の運び屋となるべく教習所に通ったわけじゃない
と、心の中で思っていた。

「和人〜♪」

「キリト〜♪」

「キリトさん♪」

「キリト君♪」

「キリトさん！」

もはや拒否権というものを剥奪された和人は全てを諦め、この五人の意思に従うしかなくなっていた。

「……わかったよ、父さんに頼んで車貸してもらおうよ……」

「わーいやったー！」

「さすがキリト君！」

「伊達に黒の剣士名乗ってないわねー！」

「かっこいいです！ キリトさん！」

「さすが、キリトの兄貴だぜ！」

和人が協力してくれることになった瞬間に、急にごまをすりだした五人の態度に、本人は頭を抱えていた。

個人的には面白いガジェットツールという認識はあるのだが、やっぱりなんだかんだ言ってフルダイブの方がいい、彼はそう思っていたのだ。

しかし彼らは知らない。このオーディナル・スケールというARM MOが、かつてデス・ゲームと呼ばれたソードアート・オンラインと同じように、ただのゲームではないということ……。

OS第2話くオーディナル・スケールく

西暦2027年 4月23日(金) 午後20:50 東京都千代

田区外神田 秋葉原UDX前

JR中央・総武線の秋葉原駅から歩いてすぐ、アニメとゲームの聖地とも言える秋葉原の看板建物の「UDX」の広場に、多くの人が詰めかけていた。

夜遅くまで、いやむしろ夜中から深夜にかけてイベントや、限定品の深夜販売を行っていることが珍しくないこの秋葉原で、とあるゲームのイベントが執り行われようとしていた。

しかし、イベントに参加するという割には、集まっている人という人は、ほぼ全員軽装で何かを買いに來たり、記念品にあやかろうといった様子は感じさせなかった。

それもその筈、今夜ここで行われようとしているイベントは、ゲームソフトや限定グッズの深夜販売や、夜間路上コンサートでもなく、とあるゲームのイベントが行われるからだ。

「和人く機嫌直しなつてく……」

「……別に……」

「……もう、子供なんだから……」

あたりがすっかり暗くなったUDX広場にあるベンチに、ご機嫌ナメで腰掛けている全身に黒い服装を身に纏った和人を、木綿季が必死でなだめていた。

ここに集まっているのは和人と木綿季の他に、同じ学校に通う明日奈、里香、珪子、准の六人だ。このメンバーがここに集まっていたのは他でもない。

今、世間を震撼させている新世代MMORPG「オーディナル・スケール」のイベントがここで行われるというのだ。

東京23区内を中心に、かつて和人たちがクリアしたデス・ゲーム「ソードアート・オンライン」のフロアボスが出現するという。

少し前まで噂程度のものだと思われていたが、火のないところに煙は立たぬという言葉通り、それは確かな情報であった。

旧アインクラッドの第一層のボス「イルファング・ザ・コボルト・ロード」がイベントボスとして出現したのを封切りに、日が変わるごとに次々とフロアボスが出現しているというのだ。

そして今日、ここ秋葉原のUDX広場にも、今夜21時からボスが出現するという情報が、公式からアナウンスされたのだ。

しかしその情報が解禁されたのが、イベントが始まる30分前とあまりにも直前すぎるということもあり、ユーザーは中々参加できないでいた。

そこで白羽の矢が立ったのが、新年度を迎える前に自動四輪の免許を取った和人であった。

家の車がワンボックスカーで結構な人数で移動出来るということもあり、今回のイベントにうってつけじゃないかということ、脚として使わされてしまっていた、というわけだ。

故に、彼は今とつてもとつてもご機嫌ナナメなのだ。

「もう……キリト君つてば、折角のイベントなんだから楽しめばいいのに……」

「な、なんかごめんね……明日奈」

姿勢悪く、太ももに肘を立て、顎を掌の上に乗せながらムスツとしている和人に対して、明日奈が少し残念そうに話しかけていた。

普段から木綿季といろんなところに出かけている和人だが、今回はかりは気が進まなかった。

ARというコンテンツは嫌いではないが、イマイチ正面たつて好きと言えるわけでもない。

何故かという、自身が昔から憧れていたVR世界というものを、遠まわしに否定されているような気がしていたからだ。

自分が将来VR関連の仕事をしたいと思っていることもあり、自ら進んでこのコンテンツを利用しようとは思わなかった。

まるで今時の流行を認めないで自分の道を突き進んでいくような、頭の固い頑固親父のような考えを持っている和人であった。

「SAOのボスか、オレは始めてだな……」

「あ……そつか、ジュン君はSAOにいませんでしたもんね」

「うん、だから……ちよっと楽しみだ」

ここにいる准を除いて、他のメンバーはSAOにダイブした経験がある面々だ。最前線で闘っていた和人と明日奈はもちろん、76層に到達したあとは珪子と里香も積極的に戦場に足を運び、攻略組として活躍していた。

木綿季だけはアインクラッド全層攻略後にSAOの世界に迷い込んだのだが、それも含めてその世界を知っているメンバーが揃っている。

准だけSAOがどういう世界だったかというのを知らないの、ここにいるメンバーの中で一番今回のイベントに期待を胸に踊らせていたのだ。

「出現するボスは低い層から順番に出てくるんですけどっけ？」

「そうみたいだよ？ 今日イベントで丁度十日目だから、恐らく第10層のボスが出てくるんじゃないかな？」

「ってことはこの中でパターンを知ってるのはキリトとアスナだけってことになるわね？」

「そうゆうことだね、頼りにしてるよ？ 和人！」

「……はいはい」

時刻は午後20:55を指している。ボスが出現する時間まで残り五分。いよいよもうすぐイベントが始まるということもあり、先程よりも左耳にオーグマーをつけた人の数が増え始めていた。

おそらく、この中のほとんどの使用者がオーディナル・スケールのプレイヤーなのだろう。

全身をなるたけ軽装で済ませているものもいれば、イベントがどんなものかを観るために広場の外で待機している者もいる。

仕事帰りのサラリーマンや塾帰りの中高生がちらほら見かけられる。

しかしそんな人をかき分けながら、どこか見知った顔が六人、全員全く同じ服装でまっすぐ和人達のもとへと歩いてきている集団がい

た。その集団の先頭を歩いている男は、和人達がよく知っている人物であった。

仮想世界と変わらず暑苦しい真っ赤な逆毛のヘアスタイルに、黒色のヘアバンド。グレーの生地には炎のイラストと漢字で「風林火山」と書かれたパーカー。

そう、SAO時代からの友人クラインこと壺井遼太郎と、彼が束ねるギルド「風林火山」のギルドメンバーの面々だ。

「ようキリの字、時間ギリギリだな！」

「こんばんは、クラインさん！」

一歩前に出て和人たちに挨拶をした遼太郎に、木綿季が元気よくピョンツと飛び出して、礼儀正しく挨拶を返した。

「よう、木綿季ちゃんたちも来てたんだな」

「はい！ ボクたちだけじゃなくて明日奈たちも来てるんですよ！」

和人の運転で！」

「ははは、さしづめアツシー君にでも使われたか？ キリの字よう」

「……………うるせーよ……………」

遼太郎が和人をからかうと、他の面々の間に笑い声が交わされた。ここに出てたるメンバー、実に十二人。その気になればALOの新生アインクラッドでフロアボスに挑めるぐらいの戦力が揃っている。

いや、その気にならなくても倒せるだろう。何せ、明日奈と木綿季、そして准はワンパーティーで、そして和人と木綿季はペアでボスを倒した実績があるのだから。

「ようし……………私も頑張るぞ……………！」

プレイしているゲームの初めてのイベントというものは、非常にワクワクするものだ。普段とは違う空気を感ずるし、これから何かすごいことが始まるといった高揚感に包まれる。

珪子にとっては後半になるまで旧アインクラッドのボス攻略に参加していなかったこともあり、今回のボスイベントに胸を躍らせていたのだ。

「シリカ、危なくなったらオレが守ってやるからな」

「は、ハイ！ でも、ジュン君だけに無茶はさせないですから♪」

「……ああ、そしたら背中はまかせるからな？」

「ハイ！ えへへ……♪」

珪子が楽しみにしているのはボスと戦えるからだけではないようだ。今回のこのイベント参加が、恋人である准との初のお出かけでもあったからだ。

今までデートらしいデートをしたことがなかったので、今回はいいところ見せてやると、准も意気込んでいる。

初デートがモンスターと戦うというもの、なんだかとても奇妙なものだとは思うが、本人たちが楽しそうにしているのだから、よしとしよう。

しかし、その仲睦まじいこの二人を快く思っていない人物も、ここにいる。

「ジユン坊も彼女持ち、しかもよりによつてシリカちゃんかよ……くそう」

年齢Ⅱ彼女居ない歴の遼太郎が恨めしそうに珪子と准に視線を送っていた。会社でもゲームでも面倒見がよく、人当たりが良い彼に、一向に恋人ができないのが不思議である。

大切な人が出来れば、一生をかけて守りぬく器量と度胸はあるというのだ。やはり、和人が近くにいることが要因だろうが、本人は決して諦めてはいない様子だ。

「ぜったいに今年中に彼女作つたるからなー！」

「アンタじゃ無理よー！」

「う、うるせえやい！」

何が何でも彼女を作ると意気込んでいる遼太郎であつたが、息をつくまもなく里香に否定されてしまっていた。

その後しばらくメンバーが楽しく談笑をしていると、刻々とイベントの開始時間が迫ってきた。

現在、時刻は20:57に差し掛かり、あたりにいる人々もスマホや腕時計、ないしオーグマーで現在の時間をせわしなさそうに確認を繰り返していた。

「そろそろ……だね」

「そうだな、……よつと」

イベント開始時間が目の前に迫っていることもあり、ベンチに座りっぱなしだった和人が漸く重たい腰を上げた。

ここまで車の運転をしてきたこともあり、エコノミー症候群が心配されるところだが、恐らく問題はないだろう。

何しろ、このイベントでめいっぱい体を動かす……、いや動かされるハメになるのだから。

「なあキリの字、俺様たちとレイドを組めよ」

「レイド……？」

「おうよ。俺様たち風林火山のメンバーが六人、そちらさんも六人。SAOやALOのボス戦の感覚で動けると思うぜ？　俺様たちならな」

「ああ、それいい案じゃない！」

風林火山のメンバーは遼太郎を含む四人がアタッカー、二人が敵の攻撃を受け止めるタンクで構成されている。

一方で和人ら学生組はというと、六人中六人全員がアタッカーというアンバランスすぎる構成であった。

同じアタッカーでも和人、木綿季、明日奈の三人はスピード重視、里香は盾持ちということもあり、バランス型のアタッカー。

珪子はアタッカーというよりも援護に回るサポート型なのだが、オーディナル・スケールでは相棒であるピナがいないため、致し方なくアタッカーに回っている。

そしてスリーピング・ナイツでは両手剣でバリバリのフォワードを担当している准は、スピードというよりも防御も出来るタンク寄りのアタッカーとなる。

まさに、攻めることしか考えてない「力こそパワー」を体現したかのようなパーティ構成だ。ここに詩乃などのガンナーでもいいれば、また戦いのバリエーションは増えていくのだろうか。

そんな脳筋構成のパーティに、バランスの整った風林火山が加わるというのだ。全員SAOを生き残った実力者だということもあり、これ以上頼もしいメンバーもいないだろう。

「まあ、悪くはないな……」

「だろ？ なら決まりだな。六人パーティ同士の十二人でレイドを組んで、ボスを倒したろうぜ！」

遼太郎が右手で握り拳を作り、高々と空に掲げて気合の入った音頭を取ると、和人を除いた残り十人のメンバーが次々に手を掲げ、気合を入れていった。

そして時刻はイベント開始の一分前の20:59に差し掛かり、いよいよイベントが始まろうとしていた。

UDX広場にいるプレイヤーが、次々にオーディナル・スケールを起動し、私服から仮想世界のアバターのような見た目へと姿を変えていった。中には人間ではない見た目をしたプレイヤーの姿も見受けられる。

「ほら……和人！」

「あ、ああ……」

和人は肩から下げている黒い鞆から自分のオーグマーを取り出すと、そそくさと自身の左耳に装着し、電源を入れた。

そしてタッチペンも取り出し、すっぽ抜け防止用のストラップを右手首に巻きつけ、しっかりと握り締める。

他のメンバーも同じように、オーグマーとタッチペンの装着を完了させると、次々にボスイベントに備えていった。

そしてフルダイブするときとは別の、オーディナル・スケールをプレイするためワードを気合のこもった声で発した。

「オーディナル・スケール、起動！」

「オーディナル・スケール、起動！」

和人と木綿季がオーディナル・スケールを起動させると、たちまち二人の体が白い光に包まれ、先程まで私服だった姿が、SFの世界にあるような近未来的な服装へと変わっていった。

和人は普段の彼からは想像できないような白と水色を基調としたSFに出てくるような上着に、下は真っ黒なズボンに、右手には片手

剣が握られている。

木綿季は彼女らしく、紫と黒を基調とし白のパイピングが入った上着。下は紫のミニスカートに黒のニーソックスといった姿をし、利き手には細剣のようなすらつと細めの片手剣が装備されていた。

明日奈はまるで血盟騎士団時代を思わせるような、真紅と白を基調とした服を身にまとい、下は和人と同じ色のぴっちりとしたストッキングを履き、腰にはレイピアのような細剣が収められていた。

珪子や准、里香もALOでのアバターと同じイメージカラーを基調とした服装を身にまとい、それぞれが自分の得意分野とする武器を右手に握り締めてた。

珪子は短剣、里香はメイス、准は両手剣を握り、あと数十秒のうちに出現するボスに備え、身構えている。

遼太郎ら風林火山のメンバーは全員が全員和風の侍のような格好をし、着流しとも言える服装に変わっていった。

「……………」

全員が緊張の渦の中にいた。そしてやがて時刻はイベント開始時刻の21時に差し掛かり、UDXのビルに備え付けられた巨大ディスプレイに、現在の時刻が21時だということが知らされる。

するとビルが並び立つ現代の秋葉原の街がたちまち、欧州の観光名所を思わせる中世風の町並みへとエフェクトとともに姿を変えていった。

アスファルトだった道路は大理石で出来た明るいタイル状の地面へと変わり、電柱や電灯も油を使うランプへと変化した。

ガードレールも豪邸にあるようなおしゃれな柵へと見た目が変わり、とても先程までここが秋葉原だとは思えないような景観へと変わっていった。

これがARMMO、オーディナル・スケールだ。

「……………すごいな」

「でしょ?」

オーディナル・スケールを始めて起動する和人は目の前の景観の変化に大変驚いていた。仮想世界や観光名所で見れないような光

景を、東京のど真ん中で目の当たりにしてるのだ。驚くのもうなずける。

いつもプレイしているVRMMOと違うといえば、アバター、つまり体がいつもよりも重たい、といったところだろうか。

「な、何かくるよ……!」

木綿季が全員に注意を促すと、彼女の視線の先の地面にサークルのようなものが現れた。

そしてそれを取り囲むように炎が燃え上がる。炎は大きく燃え上がっていき、やがて空まで伸びる火柱へと姿を変えると、ぼつと一瞬で消えてしまった。

そして消えた火柱の中から、真つ赤な炎のイメージにたがわぬ赤い布に、鎧武者を思わせるような真つ黒な甲冑を着た落ち武者のような巨大なモンスターが現れた。

頭には侍の兜が被さっており、三日月型を思わせる鍬形が街灯の光を反射している。志半ばで戦場^{いくさば}で命を落とした設定なのか、甲冑には籠手がついておらず、肘から先がむき出しになっている。

そのむき出しになっている左手には白いまだら模様のような刺青が入れられており、ただならぬ雰囲気^{ふくみ}を醸し出していた。反対の右手にはこのボスの身長ほどもある、長い長い太刀が握られている。

更に素顔は般若の仮面のようなもので隠されており、赤く不気味にきらめく目と、口から時折見せる蛇のような長い舌がプレイヤーに戦慄を与えていた。

「お、お侍さん……?」

「キリト君、あれは……」

「……旧インククラッド第10層ボスモンスター “カガチ・ザ・サムライ・ロード” ……!」

落ち武者のような出で立ちのボスモンスターは、現れるなりすぐに周囲に居るプレイヤーたちを、その長い舌で不気味な鳴き声とともに威嚇をしていた。今すぐにも襲いかかってきそうな迫力だ。

「本当にSAOのボスにそっくり……」

「……オーディナル・スケールじゃソードスキルが使えないから、立ち

回りと連携が大事になってくるぞ……」

現実世界を舞台にしているオーディナル・スケールでは、当然システムアシストが乗ったソードスキルは使えない。

自身の生身の体を直接動かし、モーシヨンだけで戦わねばならないのだ。当然ALOではないので魔法の類も使用不可能となっている。

「……お？」

「あー キリトさんあれ……いー」

瑠子が指さした方向を全員が見ると、プロペラが四つ付いたドローンが飛行している。

ドローンはボスモンスターの背後にある進入不可エリアでホバリングをすると、下方に向かって紫色の光を照らし始めた。

するとそこには、今話題沸騰真つ最中のARアイドルである「ユナ」がふわりと舞い降りるようにして、華麗に姿を現した。

銀色に輝くキレイなロングヘアに、左右に三つ編みのおさげ。七三分けされた前髪には右側に三つ編みがほどこされた独特のヘアスタイル。

時代を一つも二つも先取りしたような未来的な、黒いと赤を基調としたワンピースのようなアイドル衣装に身を包んだユナのサプライズ演出に、瑠子や遼太郎を含むユナのファンは喜びを隠せなかった。

「ゆ、ユナ……いー」

「ユナちゃんー！」

「へえ……あの娘が……」

ユナはステージに現れるなり腰のベルトにつけているマイクに手を伸ばし、パートナーロボのアインとともにこの場に集まっているプレイヤー全員にイベントのスタートを伝えた。

『みんな準備はいい？ さあ……戦闘開始だよ！ ミュージックスタート！』

ユナがパチンという音とともに指をならすと、この日発売した新曲の前奏とともに、UDXのディスプレイにあたる部分に時間表示のウインドウが浮かび上がっていた。

「10:00」と表示されている数字は、ユナの合図とともにカウン

トが始まり、数字が減少していった。

「どうやらこれはイベントの制限時間らしい、この時間内にボスモンスターを倒せというものだ。」

カウントが始まると、ボスモンスターが動き始め、同時にユナのパートナーロボのアインがプレイヤーたちに向かって緑色の光を浴びせ始めた。

この光は攻撃力と防御力があがるバフ効果があるもので、ユナが出現したステージのみ適用される、特別なものだった。

すなわち、言い換えれば「このボスはそれだけ強いということの意味しているということだ。」

「よっしゃー！ ユナが歌い始めた！ ボーナス付きのスペシャルステージだ！」

和人たちの横に、物騒な遠距離武器であるRPGを構えたトラの姿をしたプレイヤーが意気揚々としていた。

オーディナル・スケールにある武器は剣や斧だけではない。このトラが持っているRPGのようにライフルや弓などといった遠距離武器も存在する。

ただし、ダメージ計算は接近戦の方に多く設定されており、遠くからちまちま撃っているだけではとても倒せない。

遠くに行くほどリスクは減るがリターンがない、近くに行けばリスクは大きいがりターンも得られる。といったところだ。

しかしこの男がもっているRPGなどのように遠距離でもダメージを与えられる武器もある。

その場合、重すぎて動きに制限がかけられたり、再装填に時間がかかったりと、色々と問題はある。しかし、一発当たればでかいリターンを得られるのも確かだ。

「来るわよー！」

里香がメイスと盾を構えると、カガチ・ザ・サムライ・ロードがゆつたりと走り初め、徐々にその足の速さを上げてプレイヤーめがけ、襲いかかってきた。

一步踏み込むたびにズシン、ズシンと重たい足音があたりに響き渡

る。一風変わったボスモンスターの登場に、エンジョイ目的で集まったプレイヤーが物珍しそうに近づいていた。

サムライ・ロードは巨体であるにもかかわらずフットワークが軽く、また歩幅が非常に広いので数歩遠くにいると思ってもあつという間に近くまで寄られてしまう。

サムライ・ロードが近くににいるプレイヤーを視認すると、まっすぐに駆け寄り、右手に握った長刀を振りかぶり、地面ごと砕くように振りかぶり、ズシンという音と共に早速一人のプレイヤーを斬り捨てた。

そのあとも勇猛果敢に立ち向かってくるプレイヤーを、サムライ・ロードは次々と、激しい土煙を上げながらひと振りで葬り去っていく。

斬られたプレイヤーはHPがゼロになるなり《HUNTER DO WN》の表示とともにイベントから脱落していった。

デス・ゲームであるSAOと違う点といえば、プレイヤーが爆散せず、装備が解除されるだけといったところか。

「早速二、三人やられたな」

「迂闊に近づくからだよ」

対ボス戦のなんたるかのセオリーを理解している和人たちALO組が迂闊に近づいたプレイヤーたちに辛口なコメントを送っていた。

サムライ・ロードだけに限らず、ボスモンスターというものは攻撃力も高く、このように一発もらうだけでやられてしまうことも、決して珍しくはない。

今回のように、ボス戦というものはまずモンスターの動きを観察し、パターンを見極めるところから始まる。

いくらリアルに、生き物のように動いているといっても、プログラムで管理されたシステムであることに変わりはないからだ。

必ず思考ルーチンにパターンというものは存在する。プレイヤーとの距離、攻撃する順番、HPの減り具合などで変化するが、ある程度動きを把握すれば、ノーダメージで倒すことも可能だ。

「攻撃パターンがSAOの時と同じなら、楽に戦えるかもな」

「なら、まず私たちが切り込んだほうがいいんじゃない？ キリト君」

「……そうだな」

「あ、ずるい！ ボクもいくよー！」

明日奈が一足先に駆け出すと、それを追いかけるように木綿季も地面を蹴り、そのあとを和人が続き、サムライ・ロード目掛けて走り出していった。

ボスモンスターの攻撃力の高さに萎縮した前衛のプレイヤーたちが戦線を下げていると、入れ替わるように明日奈たちが武器を構え、勇敢に切り込んでいった。

自分に近づいてくる明日奈たちにターゲットを移行したサムライ・ロードは、早速長刀を振りかぶり縦一線に振り下ろし、ズガンというものすごい音とともに土煙を舞い上げた。

しかしパターンが頭の中に入っている明日奈は難なくその攻撃をかわし、ボスが装備している鎧の胴にあたる部分に、すれ違いざまに斬撃を入れていった。

斬撃が入った場所には切り口のような赤いダメージエフェクトが残り、ボスにダメージが入っていることを表していた。

ボスに始めてダメージを与えられたことを確認したプレイヤーたちは、常人とはかけ離れた立ち回りをしている明日奈の動きに釘付けになっており、すっかりギャラリと化している人の姿もあった。

「木綿季！ スイッチ！」

「了解だよー！」

木綿季は最初に切り込んだ明日奈と位置を入れ替えると、素早くボスとの距離を詰め、懐に飛び込んで二回斬撃をお見舞いし、素早くバックステップを踏んでサムライ・ロードから距離をおいた。

当然、ボスのターゲットが木綿季に移り、サムライ・ロードは長い舌を出して威嚇しながら、今度は水平に長刀を薙ぎ払うかのように振りかざしてきた。

木綿季はそれを見てから身を屈めて回避し、そのまま地面を蹴って前方に跳び、細剣ソードスキル「リニア」のようなモーションでボスの足の付け根に斬撃をお見舞いした。

とても元病人とは思えないほど軽快な動きをしている木綿季だが、彼女は元々ここまで動けるほど運動が得意なのだ。

AIDSを発症し、長いこと寝たきりの生活を続けていたが、懸命にリハビリを重ね、日常に復帰してからも運動は続けている。

退院したばかりの頃は日常生活程度の動きしか出来ていなかったが、直葉に剣道を教えてもらうと、たちまち元々もっているセンスが花開き、抜群の運動神経を発揮しだしたのだ。

女の子なので力では勝てないが、今では普段あまり体を動かさない和人よりも、軽快に動けるようになってきている。

「はー……すごいリーダー……」

「ほ、本当に元病人なんでしょうか……」

サムライ・ロードの攻撃を次々に見てから交わしていく木綿季を、遠く離れた場所から准と珪子が見守っていた。

その姿はALOでよく見る光景とそっくりであり、現実世界でも「絶剣」を名乗るのに相応しい立ち振る舞いだった。

しかしここは仮想世界ではなく現実世界、アバターではなく現実の体を動かしているのです、当然体に疲労がたまってくる。故に、木綿季の動きはだんだんと鈍くなってしまっていた。

「和人！ スイッチお願い！」

「……あいよ！」

スタミナの限界を感じた木綿季は、手早く後方にステップすると、待機していた和人と攻守を入れ替えた。和人はALOでやっていたように、足に力を込めて地面を蹴り、サムライ・ロード目掛けて切り込もうとした。

「……れっ!？」

「えっ!？」

「ちよ……キリト君!？」

誰もが目を疑いたくなるような光景が飛び込んできた。あろうことか和人は目の前にある道の段差に足をつまづかせ、派手に土煙を上げながら転倒してしまっただのだ。

和人は不幸にも、サムライ・ロードを下から見上げることが出来る

距離まで吹っ飛んでいってしまった。仮想世界にはない痛みに悶えながらゆっくり瞼を開けると、サムライ・ロードと見つめ合う形で視線が合った。

「ど、どうも……」

挨拶などしても返してくれるはずがない。その代わりとばかりにサムライ・ロードは長刀による斬撃を迷いなく和人目掛けて振り下ろした。

ガスンという激しい音とともに地面がえぐられたが、間一髪和人は攻撃を避け、一旦後方に避難することにした。

当然、ターゲットを和人に移したサムライ・ロードもそれを追いかけようと地面を蹴り、一目散に走り出した。

「のわっ!？」

「……何やってんだ……アイツ」

周囲に醜態を晒してしまった和人に、後方で遼太郎が呆れた視線を送っていた。

仮想世界では向かうところ敵なしのキリトこと和人が、現実世界では上手く動くことが出来ずに、無様にサムライ・ロードに追い掛け回されている。

「か、体が重い……!」

「ただの運動不足だよ! だからボクと一緒に剣道やればよかったんだよ!」

「そ、そんなこと言われても……」

「剣道だけに、一本取られたね、キリト君……!」

半分冗談を交えつつも、木綿季と明日奈も和人と一緒に後方に戦線を下げていた。スピードアタッカーだけで構成されたこの三人は、一旦攻撃のリズムが狂うと中々体制を立て直すことが難しい。

そこでタンクの役割を果たすことができる准や風林火山のメンバーと入れ替わろうというのだ。

「す、スイッチ!」

「あいよ!」

和人の必死のスイッチの掛け声に、後方で待機していた准と風林火

山のタンクが、和人目掛けて振り下ろしたボスの斬撃を、ガキインという激しい金属音とともに、盾と両手剣で防いでいた。

その攻撃の隙を突いて、里香、珪子がかさず流れるように攻撃を加え、遼太郎を含む残りの風林火山のメンバーもそれに続いて次々に攻撃を浴びせていった。

「ようし、このまま反対側に行くぞ！ 走れ！」

遼太郎が合図をすると、木綿季らアタツカーがそれに続き、それをカバーするように最後尾でタンクのメンバーが駆け出していく。

このように役割が違うプレイヤーが一人も二人もいるだけで、戦いはぐっと楽になるのだ。

アタツカーだけでも倒せないことはないが、一度戦線が崩壊したときの立て直しが非常に難しく、そのまま全滅してしまうことも考えられる。

「いいぞ、この調子だ！」

「ほえー、タンクってやっぱり頼りになるね……」

遼太郎の的確な指示で、対サムライ・ロード戦は順調に進んでいった。完全にALO組の独壇場となったこの戦場だが、この戦況を遠くで見守っているプレイヤーの姿があった。

「……………」

青いタイツのような服を身にまとい、服のあちこちに青く光ったラインが引かれている。

和人らALOプレイヤーとはまた違った意味で異色を放っているこの男性プレイヤーは、含みのありそうな不気味な視線をこの戦場に向けていた。

「……………いいぞ、十人か……………」

男はオーグマーを操作し、何やらこの戦場をスキャンニングしている様子だ。そしてその視線は戦場から和人たちへと移されていた。

一人一人プレイヤーを確認し、自然と和人らを見つめるその顔は真顔から笑みへと変わっていった。

この男は何故戦わないのか、何故冷ややかな視線でこの戦場を見つめているのか。

和人たちはまだ知らない。自分たちがゆくゆくはこの男の掌の上で踊らされる日がくることを、いやもうすでに踊らされていることを……。

番外編く二人のグルメく
第1話く埼玉県行田市下忍の自販機フードく

西暦2026年12月17日(木) 午後13:20 埼玉県行田市
下忍国道254号線しもおし

「かずとー、まだ着かないのー?」

「あと少しだから、もうちょつと我慢してくれ」

「……ぶー、ボクもうお腹ペコペコだよー!」

空腹を訴えながらぶーたれてる木綿季を後部座席に座らせながら、和人は地元埼玉県の国道でバイクを走らせていた。

ここは、彼らの家がある川越市から更に北にある行田市ぎょうだだ。

左右どちらにも田んぼや畑が広がる国道254号線を北北西に進み、途中の県道76号線に入り、北に進路をとってひたすら進んでいく。

何故和人がここにいるかという、木綿季との約束を果たすためだ。

まだ病気が治る前、メデイキュボイドの中に意識を委ねていた時、無菌室の前で約束を交わしたのだ。

自分の地元には珍しいフードがある。現代の日本でも残っているのは数少ない、自動販売機から出てくる食べ物があるという。それをご馳走するという約束を守るためだ。

通称自販機フードと呼ばれ、昭和五十年頃は全国的に、あちらこちらのドライブインやサービスエリアで数多く見掛けられたものなのだが。

今のこの現代では、化石と呼ばれてしまってもおかしくないほどのレトロでノスタルジックなコンテンツとなってしまうている。

関東近郊でも、残されてるのは群馬県、茨城県、千葉県、神奈川県、

そして和人たち在地元の埼玉県のごく一部の地域にしか存在していない、

マシンの経年劣化、部品の不足、経営者の高齢化、採算の取れない利益など、様々な理由で大多数のフード自販機が全国から姿を消している。

しかし、そんな中で尚、一部のファンや物珍しきで立ち寄る客がいることも確かであり、物好きな技術者が半分趣味で自ら部品を作り、メンテナンス面でも支えてたりと、残っている地域では残っているのだ。

そこまでして、このフードは美味しいのかと聞かれると、実はまあそうでもなかったりする。

良くも悪くも昭和の味。長旅のドライバーやライダーが立ち寄り、ほつとひと息、ほんのひと休憩するためのチープな味わい。

コンビニともスーパーのフードコートで売っているような食べ物とも違った味。

それが自販機フードだ。

しかし、何故かまた繰り返し食べてみたくなる味でもある。長距離を移動し、ただこれらを食べるためだけに訪れる人もいるほどだ。

中には、北海道や四国にある日本で一台しかない自販機フードを食べる為だけに立ち寄る人も、いるとかいないとか。

かく言う和人も、幼い頃に両親に釣られてドライバーインに立ち寄り、珍しい自販機フードを口にしたことがあった。

その時の味は忘れようにも忘れらなかった。妙に記憶に残り続けるほどの奇妙な味わい。そしてどこか不思議と懐かしさを感じさせるものもあった。

恐らくリピーター客がいるのは、どこかそんな魅力があるからなのだろう。

和人も数年ぶりに足を運んでいるように、いつかまた来て食べたいなる味なのだ。

「……よし、見えてきたぞ。あそこだ、木綿季」

「ホントに!?!」

和人が目的地に近いということを知ると、木綿季は首から上を動かし、彼の背中からのぞき込むようにして前方を確かめる。

国道17号線の左手に、やたらと白くてでかい看板に、これまたデカデカと黒い文字で店の名前が書かれている。

「鉄拳……タロー……？」

大きな、実に大きな看板を目のあたりにして、思わず店の名前を呟く木綿季。

小学校の運動会でよく見る応援旗の何倍もあるであろう巨大な看板の存在感に圧倒されていた。

「ああ、あそこで食べられるんだ。俺も来るのはガキの頃以来だよ」

「そうなんだあ……ボク、楽しみ！」

バイクを左に幅寄せし、ふんだんに広い駐車場のバイク用の駐車スペースに愛車を停める。

エンジンを切ってシートから降りると、目の前には昭和のレトロ感が漂う、年季の入った建物が待ち構えていた。

何度も何度もペンキなどの補修工事を行ってきたのだろう。至る所に塗りムラや、金属部分の錆がちらほら見受けられる。

それだけ長年愛され続け、支えられてきたのだろう。

「なんか、雰囲気はボクの地元の建物とかに似てるかも」

「ああ、ちよっとわかる気がするな。懐かしさっていうか……」

建物に近付くと赤や青色の電灯が光り輝いており、本当にここは現代なのか？　と思わせるような感覚に陥る。

まるでここの一角だけ、昭和の世界なのではないか？　と錯覚してしまいそうだ。

木綿季も初めて見るものばかりのようで、鉄拳タローの全貌を隅々まで、まじまじと見つめている。

そして、そのタイムトリップ感は入り口をくぐると更に加速して、同じ現代の日本なのか？　と思わせるような内装となっていた。

壁面、床、天井は真っ黒。灯りは街灯と同じように赤と青。そして、何より目を奪われるのは店の壁側に列をなして並んでいる種類豊富な自動販売機の面々だ。

飲み物は言わずもがな、カップラーメンなどのインスタント商品を扱っているマシンもあれば、今や絶滅寸前のそば、うどん、そしてさらにその中でも希少なハンバーガー、ホットサンドイッチの自販機まで見受けられる。

昭和五十年、西暦に直すと1970年代。そんな昔から稼働していたレトロマシンが、五十数年経った今でも元気にこうして稼働している。

本来ならば驚くべき光景だ。店側のメンテナンスも行き届いており、外装はもちろん細部までしつかりと劣化することなく、ピカピカに光っている。

「うわあ……な、なんか……すごいところだね？」

「ふふ、そうだろう？　不思議なところだよな」

店の中ほどもまで進んでいった木綿季が感想を漏らすと、和人もそのあとを追いかける。

店内には数人のお客がおり、タバコを吸ったり食事をしたりと、各々がこのドライブインを満喫している。

地元の客なのだろうか、それともこの国道を利用しているドライバーなのだろうか。その姿はとてもごく自然にこの鉄拳タローに溶け込んでいた。

「えっと、和人が前に言ってた自販機って、あの自販機？」

「ああ、そうだぞ。埼玉には二箇所あって、ここ行田市と、上尾市あげおにも一箇所あるんだ」

「へえー……そうなんだあ」

とてとてと足取りよく自販機に近付くと、木綿季はまた物珍しそうな目でマシンを見つめる。

自分が入院していた病院のメデイキュボイドより大きくて重厚感がある自販機を、隅から隅まで観察している。

やはり、この店の中だけは昭和の世界だ。自分の空腹をも忘れた木綿季は、初めて見るマシンの数々に圧倒されながら、それでいて楽しそうに一つ一つ見て回る。

鉄拳タローで現役稼働しているフード自販機は、そば・うどん、ラー

メン、ハンバーガー・チーズバーガー、トースト、インスタントヌードルの五種類となっている。

使い方は私達が知っている自販機と同じで必要な硬貨を投入し、食べたいもののボタンを押すだけ。

それだけなのだが、ジュース類の自販機と違うところは、押した瞬間にマシンの中で調理が始まるところだろう。

その調理方法もそれぞれ異なるのは勿論、大変に面白い構造となっている。

「……お、見てみる木綿季。丁度蕎麦が補充されるみたいだぞ?」

「え……本当に?」

和人がそう言うと、店のバックヤードから大きなお盆を持った三代ほどと思われる女性スタッフが姿を現した。

その両手にはプラスチック製の丼に盛られた天ぷらそばが、十杯以上並べられていた。

スタッフは蕎麦の自販機のもとまで足を動かすと、近くに設置されているテーブルに一旦お盆を置き、腰のベルトからぶら下げてるキーホルダーから一つの鍵を取り出し、自販機に差し込んで九十度捻る。

すると、カシヤンという音とともに自販機のロックが解除され、前面の部分が大きくドアのように手前側に開いた。

「うわあ……すごい、中ってこんな風になってるんだあ」

初めて見る自販機の裏側に木綿季は興味津々だ。それも滅多に見ることがないフード自販機の裏側だ。興味を示さないわけがない。

「お嬢さん、この自販機が珍しい?」

「へ……? あ、は、はい!」

自販機に商品を補充する様子を見守っていた木綿季に、スタッフが声を掛ける。

タクシーやトラックのドライバー、工事現場の作業員。そして旅行者の中年男性が主な客層の鉄拳タローのお客に、木綿季のような若い、それも十代の女の子が訪れているのが、あちらさんも珍しいようだ。

「これ、もしかして……手作り、なんですか?」

こつそり丼をのぞき込んだ木綿季が、疑問を投げかける。てつきりインスタント的なものかと思っていたら、どうやらそうではないようだ。

麺は乾燥物ではなく、生麺。その上に乗せられた具や薬味も、つい今しがたキッチンで仕込んできたかのような新鮮さを醸し出している。

「ええ、その通りよ。二、三時間おきくらいに調理して、その度にこうやって補充しているの」

「ほえー……ボク、てつきりインスタントかと思つてました」

素直な感想を口にした木綿季に、スタッフがくすつと微笑む。その手つきは非常に慣れており、洗練されていて、動きに全く無駄がない。

丼が収まる形をした回転式のソケットに、次々に新しい蕎麦をセットしていく。

「わざわざこんなこじんまりとした所に来てくれるんですもの。少しでも美味しく食べていってほしいから」

「それで、手作りなんですね？」

そう聞かれると、スタッフはニツコリと微笑み、全ての丼をセットし終わると自販機の扉を閉めて「ごゆっくりどうぞ」と言い残し、再びバックヤードの奥へと姿を消していった。

商品が補充され、息を吹き返した自販機がゴウンゴウンと駆動音を鳴り響かせながら、いつでも買ってくれと言っているような気がする。

「……食べるか？」

「あ……うん！」

ここの食べ物が愛され続けている理由がなんとなくわかった木綿季は、自分が腹ぺこだったことを思い出し、和人と一緒に自販機の前まで近付く。

そして自分の財布から硬貨を取り出し、コイン投入口に入れていく。

この自販機には天ぷらそば、天ぷらうどんが取り扱われており、値段もお手頃双方三百円となっている。

手間暇かけて作られているものが、たったそれだけで食べられてしまふのだ。

「ボクはおそぼー!」

嬉しそうに木綿季がボタンを押すと、「調理中」のランプが赤く点灯し、そのすぐ横にある数字ランプが、調理が終わるまでの時間をカウントし始める。

「あれ? 何これ? デジタルじゃないんだね?」

「ああ、これか。これはニキシー管っていう放電管の一種だよ」

「にきしーかん?」

「今でこそいろんな映像媒体は液晶のようなデジタルだけど、昔みたいなアナログ世代はこういう装置を用いてたんだ」

「テレビもそうなの?」

「んー、似たようなものかな。ブラウン管も真空管の一種だし」

「へえー……和人って物知りなんだねー?」

「父さんの受け売りだよ。あの昭和生まれだからさ」

オレンジ色に発光しているニキシー管のカウントが、少しずつ数値を小さくしていく。

蕎麦の調理に必要なカウントは三十秒。その一秒一秒が長く感じるが、ニキシー管を初めて見る木綿季はその数字の変化が楽しいのか、じーつといつまでも見つめていた。

やがて調理が終わると、自販機の奥から「チーン」と、レンジのようなサウンドが聞こえ、手前についている取り出し口に、マシンの奥から押し出されるようにして、丼ごと蕎麦が差し出された。

「わっ、出てきた!」

ようやくご飯にありつけると、木綿季は嬉しそうに取り出し口に手を伸ばす。しかし、丼の外側が薄いのか、出来たてだからなのか、思いのほかそれが熱く、なかなか取り出せないでいた。

「あ、あちち……」

「あはは、中で湯切りをしているからな。丼の外側にも湯がまだ残ってるんだよ」

「ほえ、そうなの?」

「ああ、生麺をほぐすために熱湯を注いで、丼ごと回転させて湯切りをするんだ」

「ぐるぐる回すの?」

「そう、それを二回やって、最後に濃いめのだし汁を注いで、こうやって出てくるんだ」

「なるほどー、だから外側まで熱々なんだねー?」

仕組みに納得した木綿季が苦戦しながらも、なんとか丼を取り出すことに成功し、一番近くにあるテーブルに運ぶ。

丼からは湯気が上がり、そばつゆの香りがなんとも言えない。具はかまぼこ、刻みネギ、天かす、そして贅沢にも海老の天ぷらが二つも入っており、とても三百円とは思えないほどのボリュームだった。

「うわあ! 見て見て和人! すごく美味しそう!」

「そうだろう? 先に食べてていいぞ」

「わーい!」

和人が天ぷらうどんの調理を待っている間、木綿季は我慢が出来ずに、一足先に頂くことにした。

備え付けの割り箸に手を伸ばし、少しだけ七味唐辛子をふりかけて、ほぐされた蕎麦を箸で摘む。

蕎麦の表面を濃厚なだし汁が滴り落ち、てかてかと光を反射させている。丼が安っぽい作りなので質素に見えるが、中身は本物の手作り蕎麦だ。

「いただきますー!」

まず一口、蕎麦を頬張る。ズズズつと音を立てながら口にすすっていく。

適当なところでぷちんと噛み切り、何度も何度も噛む。その度に蕎麦本来の素材の味と、だし汁、そして薬味と唐辛子の味が絡み合い、絶妙なハーモニーを奏でる。

「わあ……美味しい……!」

とても自販機とは思えないほどのクオリティに驚きを隠せない木綿季が、思わず素直な感想を口に出す。

何度も言うが、この蕎麦はたった三百円なのである。その値段でこ

こまでの味を楽しめるのだから、お得を通り越してお店側が大丈夫なのかと心配してしまいそうな程だ。

「美味いだらう？」

木綿季が感動してる間に、和人も天ぷらうどんを手に持ちながら、彼女の隣に腰を落ち着ける。

「うん！ 予想以上に美味しくてびっくりしたよ！ インスタントより全然美味しい！」

「ふふ、なんせ手作りだからな」

「そっかあ、嬉しいなあ！」

一口で自販機フードのファンになってしまった木綿季は次々に蕎麦をすすっていった。

その隣で、和人も同じようにうどんをすすする。

うどんも麺の弾力が絶妙で、歯でぷちんと噛みちぎったときの感触がなんとも言えない。

しまいには具の主役である海老天だ。衣はしっかり揚がっており、こちらも先程揚げたばかりの手作り天ぷらだ。

「あむっ……」

歯を立てると、サクツといい音とともに、衣が歯を受け入れる。身はプリプリ、そしてホクホク。

そこにだし汁をすすると、互いの味を引き立て合い、更に口の中でお蕎麦ワールドが広がっていく。

「美味しい……すごく美味しいよ！」

「そうか、よかったな」

「うん！」

出足は好調で、普段から大食漢の木綿季は次々に蕎麦を吸引していき、だし汁も全て飲み干し、早々に第一段目を全て胃に収めてしまった。

もちろん、これだけで彼女が満足するわけがなく、既に次のターゲットはどれにしようかなと、自販機の面々に視線を向ける。

自販機対木綿季の戦いの火蓋が、ここに切って落とされた。

「次はどうしよっかなあ……」

両手を後ろに回して、次の獲物を見定める。その目に止まったのは、トーストの自販機だ。

「えつとなになに？ ハムチーズトーストと、コンビーフサンド？」
自販機本体からも、いかにもなジャンクフード感がひしひしと感じられるようなメニユーだ。

ハムチーズはともかく、コンビーフはサンドイッチとなるとコンビニやスーパーなどではまず目にしない。この名前だけで木綿季は心惹かれてしまうものを感じていた。

迷わず財布から硬貨を取り出し、手早くコインを投入する。どちらを先に食べようか悩むが、順当にまず左側のハムチーズトーストを選択する。

ボタンをカチツと押すと、蕎麦の自販機と同じように、調理のカウントが始まる。

「あ、これもニキシー管だ！」
覚えたばかりのワードを嬉しそうに口ずさみながら、木綿季は再び商品が出てくるまでのあ楽しみタイムを堪能していた。

「につきしー、につきしー♪」

よほどその響きが気に入ったのか、独特の鼻歌まで歌い始めている。お腹が先程よりも満たされていることもあり、今は待ってるこの時間も楽しくてしょうがない。

そんな様子を遠目で見守っている和人も、微笑ましく思っていた。こちらさんはまだうどんを食してる途中のようだ。

「木綿季、そのトースト、出てくる時物凄い熱いから気をつけろよー？」

「え？ あ……う、うんー！」

和人がそういうと、丁度調理が終わったのか、またもやチーンという音が鳴り響き、取り出し口にドサツという音を立ててトーストが置かれてるのが見えた。

先程の自販機と比べると、えらくぶっきらぼうな商品の差し出し方だ。

トーストは特性の銀色のアルミの包みにくるまれており、しっかり

と中まで熱されているようだ。

「わっ、あちやちやつ」

アルミに触れた途端に指先から熱さが伝わってくる。とても触り続けるのは困難だ。

どうしようかと思いい悩んでいた木綿季だが、ふと見た先に、トングが置いてあるのが目に入った。

「あ、これで取ってください、ってことなんだ？」

なるほど、っと心の中で納得した木綿季は、早速トングを使ってトーストを取り出し、先程のテーブルまで持ち運ぶ。

元の位置に戻すと、今度は飲み物の自販機に足を運び、カフェオレを購入した。

サンドイッチと言えばコーヒー牛乳かこれだろうと、にまにましながら席に戻る。

「これ、こうかな？」

しっかりと包まれたアルミを丁寧に剥がすと、トーストの全貌が明らかになる。

パンの表面はこんがり焼きあがっており、かといって焦げている訳では無い。

中の具までしっかりと熱も加えられており、ちゃんとトーストになっっているのだ。

「へ、レンジであつたためたんじやないの？」

「そいつはな、オーブンで熱を加えられてるんだよ。だからこんがり焼かれてるんだ」

うどんを完食した和人が、隣に座りながら仕組みを教える。

アルミの外側、それも両端からじわりじわりと直接熱を伝えることで、家庭にあるトースターのように表面をこんがり、サクツとした仕上がりになると言うわけだ。

もちろん、具のハムチーズもコンビーフも、手作りだ。

「そうなんだあ……それじゃあ、いただきませすー」

仕組みはともかく、早く目の前の美味そうなトーストにかぶりつきたくて仕方の無い木綿季は、大きく口を開けて豪快にトーストに歯を

立てる。

想像通り、サクツと香ばしい香りとともにいい歯ごたえを感じさせ、それと同時にハムとチーズの濃厚な風味と味わいが口いっぱい広がる。

ちなみにこのトースト、具にちゃんと塩コシヨウが振られており、ハムも結構な分厚さ、チーズもたっぷりと使われている。このポリュームでたった二百五十円だというのだから、頭が上がらない。

「お……美味しいー！」

「ふふ、癖になるだろ？」

美味しい、ただひたすらに美味しい。高級品でも値の張るような豪華な食事という訳では無い。

しかし、今はこんなチップで庶民的な味の食事が美味しくてたまらない。

いや、むしろこれだ。こういう味を求めていたんだとばかりに、木綿季は次つぎにトーストを腹に収めていく。

「……ふふ」

そんな嬉しそうに食事を楽しんでいる木綿季の様子に、和人も連れてきてよかったと、満足気な表情を浮かべている。

そして、あつという間にトーストを平らげてしまった木綿季は、当然まだ満足するはずがなく、またもや次の獲物を探そうと視線を自販機に向ける。

いつもならば和人の財布がピンチになる所だが、今は木綿季もお金を持っているので、今回は彼女の自腹だ。

しかし、和人の奢りだったとしても、こここのメニューの安さならば大した打撃にはならないだろう。それだけここのフードは安いのだ。安くて、大衆的で庶民的で、多くの人に喜んでもらえる味。

そして尚且つ、この鉄拳タローは二十四時間営業だというのだから、更に頭が上がらない。

和人たちが寝静まっている間にも、どこかのドライバーの助けとなつている。そんな温かい場所でもあったのだ。

今でこそ希少なドライブイン、いつまでもいつまでも大切にしてい

きたいものだ。

「えへへ……チャーシューメン、買ってきちやった」

「い、いつの間に……」

和人が少しだけ物思いに浸っていると、抜け目ない木綿季が次のターゲットを両手に持つていたのが目に飛び込んできた。

調理方法は蕎麦やうどんと同じで、湯切りをした後、出汁の入ったスープが注がれる。

チャーシュー等の具は湯切りの時に、丼の外に飛び出さないように、麺のしたに仕込まれている。

熱々のスープと麺を掻き分けると、丼の底から分厚いチャーシューとメンマ、ナルト、刻みネギが姿を現す。

言うまでもないが、これも店側の手作りだ。

「スープがすでにいい香りなんだよねー！」

醤油ベースのだし汁が、湯気とともにいい香りを放っている。昔ながらの中華そば、東京ラーメンといった感じだ。

下町のほっそりとした路地で営業している懐かしラーメン屋のラーメンのような、そんな出来栄えだった。

「相変わらず、よく食べるな？」

「えへへ、まあねえー！ いただきまーす！」

勢いよく、豪快に麺を啜っていく。その姿はどこかラーメンマニアの女子高生を彷彿とさせるかのように、男らしく見えた。

やはり、ラーメンはこんな具合に行儀悪く啜りながら食べるのが乙というものだ。

「うわっ、チャーシューすっごい分厚い！」

そこいらのラーメン屋よりも分厚く切り分けられているチャーシューに、目を丸くして驚いている。

厚さ八ミリほどはあるだろうか？ 随分気前がよく、文字通り大盤振る舞いだ。

もちろんこのチャーシューも手作りで、味付けも切り分けも、店の人が直接やっている。

何から何まで手作り。それがこの鉄拳タローの自販機フードの何

よりの魅力なのだ。

「ふふ、もうすっかりここが気に入ったようだな？」

「うん！　どれもすごく美味しくて、毎日食べに来てみたいくらいだよー！」

「あはは、そうか」

幸せそうに、実に幸せそうに箸を進める木綿季の底抜けの明るさに、和人も幸せを感じていた。

木綿季の幸せは自分の幸せ。今まで満足に出来なかった外の世界の遊び。少しでも彼女に感じてもらいたい。

そしてめいっぱい楽しんで、笑顔でいてもらいたい。

「木綿季が楽しそうで、俺も嬉しいぞ」

「えへへ、ありがとう和人……♪」

チャーシューを口に頬張りながら、木綿季の視線にあるものが止まった。夢中でラーメンを啜っていて気付かなかったのか。

よく見ると、和人が何かを手に取り、それを食べている。

「和人、それ……ハンバーガー？」

「いや、チーズバーガーだぞ。そこの自販機の」

和人の手に握られているのは、日本国内でもほんの数台しか残っていない自販機でしか売られているチーズバーガーだ。

作りこそ、バンズの間からピクルス、とろけるチーズ、ポークパティ。そして味付けは塩コショウとケチャップと、ありきたりなものだ。

バンズも調理方法がレンジ式だったのか、表面がしわくちやで、とてもハンバーガーチェーン店等で販売されてるものと比べると見てくれは悪い。

しかしなんだろうか、それらとは別の奇妙な魅力が、そのチーズバーガーからは感じられた。

チープ、何よりもチープ。その言葉が一番似合うであろうチーズバーガー。

しかし、そんなチープな自販機フードの魅力に取り憑かれてしまった木綿季は、今この瞬間、そのチーズバーガーが何よりも魅力的に感

じられてしまっていた。

「ど、どこで売ってるの!?!」

「え、ど、どこってあそこの隅っこの自販機だけど……」

「ぼ、ボク買ってくる!」

夢中になっていたチャーシューメンをほったらかしにしてまで買
いに行きたくなる魅力が、そのチーズバーガーにはあった。

単純に木綿季がハンバーガーが好きだということも手伝い、光の速
さで彼女を自販機の元に駆り出させてしまった。

「全く、本当に食い意地が張ったやつだ……」

仕方ないやつだな、と思いながら、和人は手持ちのバーガーに口を
つける。

三年分の空腹を埋めるにはまだまだ気の遠くなるような時間がか
かるようだ。

しかし、それでも木綿季は年頃の女の子。体重等に気を使ってやら
ないと、後々大変なことになってしまいそうさ。

でも、それと同時に日頃から活発に動き回る子でもある。

こう見えて、なんだかんだ言いつつもエネルギーのバランスは取れ
ているようだ。

「和人ー、おまたせー!」

「おう、随分時間かかったな……って、なつ、木綿季!」

木綿季のいる方に視線を移すと、そこには和人が目を丸くして驚く
ような光景が飛び込んできた。

あろうことか、木綿季は両手に持ちきれないほどのチーズバーガー
の山を抱えていた。

外側に見えている分だけでも、少なくとも十個以上は確認出来る。

常人ならすぐに飽きるか、胃がパンパンになってしまい、とても全
部平らげるようなことは不可能だろう。

「えへへ……いっぱい買っちゃった」

「……道理で時間がかかったわけだ……」

「ほらほら、熱々なうちに食べちゃおうよ!」

「……ん? って、俺も食べるのかよ!?!」

「一緒に食べた方が美味しいもんー！」

お前の胃袋と俺の胃袋の容量を一緒にしないでくれと、頭を抱えている和人であった。

帰りの運転に支障が出ない程度にチーズバーガーの山から少しだけ何個か手に取ると、包み箱を剥がして二個目のチーズバーガーに口をつけた。

「……やっぱり、美味しい」

「でしよー！ いっぱい食べるぞー！」

同日 午後14:15 埼玉県行田市下忍^{しもおし} オートレストラン鉄拳
タロー

「ふー、お腹いっぱい！」

「ほ、本当によく食ったな……お前……」

「えへへー、満腹だよー♪」

天ぷらそば、ハムチーズトースト、チャーシューメン、そして総勢二十五個のチーズバーガーを胃に収めた木綿季が、満足そうにお腹をポンポンと叩いて大きく息を吐いている。

座っている椅子の背もたれに思いつきり背中を預け、両手をめいっぱい伸ばして、完全にリラックスモードだ。

ちなみに、今現在で彼女は腹八分目だから未恐ろしい。

「んー……」

満足した木綿季は、店内のあちらこちらに視線を移す。

自販機コーナーの更に奥まった所に、見慣れないマシンがたくさん置かれているのが飛び込んできた。

「ねえ和人、あれ……なあに？」

「ん？ あれ……？」

木綿季が指さした方に目をやると、その先には一昔、いや二昔ほど熱狂的に人気を呼んだ、旧式のアーケードゲームの筐体機が、ずらりと列をなして並んでいた。

平成初期から長年愛されたシューティングゲームや、横スクロール系のアクションゲーム。ちよつとえつちな麻雀ゲーム。そしてアーケードゲームの代表格、対戦格闘ゲームまで様々な筐体が並んでいる。

「ああ、俺の父さんの若い頃に稼働してたゲームだよ。ボタンとレバーで操作するんだ」

「お父さんの？　ってことはボクも和人も生まれてない時代？」

「そうなるな、でも俺はプレイしたことあるぞ」

「へえー！　 そうなんだー！」

そんな古い型の筐体が珍しいのか、木綿季は早速席を立ち、ゲームコーナーへと足を運んでいった。

どれもこれも、「画素数が荒いドット絵と呼ばれるもので、決して画面は美麗とは呼べなかった。

しかし、その代わりにアニメーションがすごく滑らかだったり、逆に荒っぽいからこそ、迫力ある演出が見れたり、昔ながらの魅力がそこにはあった。

「……やってみるか？」

「え……？」

興味ありげにデモプレイ画面を見つめる木綿季の隣に立った和人が、折角だから遊ばないかと彼女をプレイに誘う。

「で、でも、難しそうだよ……？　ボクに出来るかなあ」

「なあに、慣れればどうってことないさ」

物は試し、やってみなきやわからないと、和人はそそくさと目の前にあるワンプレイ五十円の横スクロールガンアクションゲームの筐体に、コインを二人分投入した。

すると画面が切り替わりタイトルが表示され、すぐにゲームを始められる状態となった。

「ほら木綿季、こっちだ」

「あ……う、うん！」

幅広い椅子の左側に腰掛けている和人の隣に並ぶように、木綿季も腰を落ち着ける。

和人がスタートボタンを押すと、キャラクター選択画面に移り変わる。

どのキャラクターにどんな特性があるかよくわからない木綿季は、適当にカーソルの近くにある女の子のキャラクターを選択、和人は筋肉質な男キャラクターを選択した。

すると早々にステージがスタートし、早速二人目掛けて敵キャラが押し寄せてきた。

昔のアーケードゲームというものは、特にプレイ中に説明はなく、デモプレイか筐体に備え付けられている説明カードでゲーム解説を行っている。

このゲームをプレイしたことがある和人はともかく、木綿季は何が始まったのと顔に出しながらレバーとボタンを叩いていた。

「レバーでキャラの移動と銃の方向を合わせて、Aボタンで銃撃、Bボタンでグレネードだ。操作はそれだけだから……撃ちまくれ、木綿季！」

「え？ え？ あ……う、うん！ よくわからないけど頑張る！」

普段遊んでいるVRゲームとは勝手が全然違いすぎる。コントローラーやレバーを操作してのゲームなんてほとんど経験したことがない。

しかし、それでも木綿季は手探りで、このゲームを楽しんでいた。慣れないうちは何度もやられてゲームオーバーになり、その度に五十円を投入し、復活。そしてまたやられてを繰り返していた。

しかしなんだろう、そうしてまで最後までやりたい奇妙な魅力が、このゲームにはあった。

やがて操作に慣れたのか、なかなかやられなくなった木綿季も、こういうレトロゲームの魅力に気づいていったようだ。

「あ！ そのアイテム狙ってたのにー！」

「ははは、早い者勝ちだ、木綿季くん！」

「ずるーい！ さつきから和人全部アイテム取ってるでしょー！」

「悔しかったら俺より先に取ってみなさい！」

「このー……まけないぞー！」

現代からタイムスリップしたような、このドライブイン。食事も娯楽も、技術が進化した現代から見たら遥かに古臭いと思われるかもしれない。

でも、どこかまたいつか、来たくなるような魅力がこのオートレストランにはある。

奇妙な懐かしさが、居心地の良さが、確かにここにはある。

たまにはスマホやマウスを傍らにおいて、こういった世界に飛び込んでみるのも、悪くないのかもしれない。

きつと、新しくも懐かしい想いに身を委ねることが、出来るはずだ。

この日の鉄拳タローには、若い男女の楽しそうな声が、夕方近くまでずっとこだましていたという。